

ソードアートオンライン —泥中の蓮—

緑竜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2022年11月、世間の耳目を集め、それは世に送り出された。

——ソードアートオンライン、通称SAO。VRMMOの筆頭として期待されたそれは、サービス開始からわずか半日と絶たずに、ログアウト不可、HP全損Ⅱ死というデスゲームに変貌を遂げる。

これは、そんな世界で生き抜く、一人の青年の——歪んだ物語。

※こんなタイトルですが、アクセルワールドネタはありません。

旧タイトル：ソードアートオンライン——地上の林檎——

感想はログインしなくてもかけますので、指摘など遠慮なくお願いします。

2015 / 12 / 27

以前友人に「意識してないかもしれないけどタイトルがAWネタみたい」のようなことを言われまして。ちようどどこかしくりきてない感じもあつたので、タイトル変えました。意味合いがちよつと遠回しですが。

2017 / 7 / 26

しばらくこのままでしたが、やっぱりしくりこないので戻します。旧タイトルもタイトル名に含みますので、少し長くはなりますがご了承ください。

追記

書き忘れていましたが、旧タイトル分を取りました。

2018 / 3 / 2

2018 / 3 / 1に、月一ペースで2019 / 1 / 10分まで、if編49話迄の予約投稿が完了しました。こちらの事情で、更新が前後するかもしれませんが、少なくとも月一ペースでは更新が自動的になされます。何卒お付きあいお願い致します。

2018 / 8 / 30

設定集の反転を修正。ご迷惑をおかけしました。

目次

設定集	ネタバレ防止加工済	1
S A O、序章		
0. プロローグ		11
1. ホルンカ		24
2. 武器と情報		42
3. 第一層フロアボス攻略会議		61
4. 第一層フロアボス戦		86
5. 戦いの後		100
6. 静かな大晦日		108
7. 第十五層フィールドボス戦		
8. 第十五層フロアボス戦		119
9. 厳しい戦い、生きる理由		147
10. 共同戦線―第二十五層迷宮区		164
略		
11. 紹介、情報、新技		184
12. 不穏と出会い―第二十五層フロアボス攻略会議		204
13. 序の口―第二十五層フロアボス		218
略戦、1		
14. 変化―第二十五層フロアボス		231
略戦、2		
15. 喪失―第二十五層フロアボス		

20. 5. 暗雲	324	戦	495
S A O、中章	311	3 1. 決戦—ラフィン・コフィン討滅	479
て		3 0. 決戦前夜	463
2 0. 幕間、デュエル大会、後編。そして	297	2 9. 直下	446
1 9. 幕間、デュエル大会、前編	281	2 8. 急転	433
1 8. 幕間、戦いの準備	270	2 7. 再会	415
S A O、幕間		2 6. 謎	391
攻略戦後		2 5. 暗示	381
1 7. 幕引き—第二十五層フロアボス	257	n	
略戦、4		2 4. Laughing Coffin	367
1 6. 終幕—第二十五層フロアボス攻略	244	2 3. 蓮の蕾	344
略戦、3		2 2. 狩り	332
		2 1. 初殺しと逡巡	

戦	4 1.	4 0.	3 9.	3 8.	3 7.	3 6.	550	3 5.	3 4.	3 3.	3 2.	S A O、終章
—	激闘—第7 5層フロアボス攻略	Y u i	教会の子供たち	表の剣士、裏の弓兵	邂逅	凶兆		新たな力、再会、対面。	目的のために	新たな相棒と	決裂	
646		625	609	600	585	569			538	516	512	

S A O & A L O 編	802	e p i l o g u e	5 0.	4 9.	4 8.	4 7.	4 6.	4 5.	4 4.	4 3.	A L O 編	4 2.
あとがきの何か		: 現実にて。	終焉	世界の真相	乙女の秘め事	世界の裏側で	影	再	仮想世界で	蓮を探して		そして
			788	774	764	754	736	721	702	685		662

	S A O、i f 編	816	
	3 2. 理	821	
	3 3. 会議	828	
	3 4. 相棒たち	838	
	3 5. 変化	849	
	3 6. 再会と邂逅	864	
	3 7. 重なる呼吸 第67層迷宮区攻	876	
略			
	3 8. 変わらぬもの、見守るもの 第	889	
	67層フロアボス攻略会議		
	3 9. 呼吸、重ねて 第67層フロア	899	
ボス攻略戦、前編			
5 0. 影踏み		1065	
4 9. 表と裏		1053	
1034			
4 8. 変わる関係、変わらない関係		1023	
4 7. 周囲		1009	
4 6. 唯一性(ユニーク)		989	
4 5. 変わらない距離		972	
4 4. 不穏な気配		961	
4 3. 変化		950	
4 2. 一時の日常		929	
4 1. 会議		913	
戦、後編			
4 0. 相棒 第67層フロアボス攻略			

epilogue. 変化した現実	61.	60.	59.	58.	57.	ALLO、if編	56.	55.	54.	53.	52.	51.
	蓮の上に架かる虹	世界樹攻略	片羽	再び、仮想世界へ	虹を求めて		消える境界線	決闘	骸骨の死神	凶報	事態解決	はじまりの街にて
	1215	1203	1181	1165	1151		1143	1129	1120	1108	1089	1076

キャリバー編	GGO編	56.	55.	54.	53.	52.		51.	GGO編	if編	1226
	あとがきのなか	赤眼	状況開始	下ごしらえ	依頼	銃の世界		新しい日常		あとがきのなか。	
	1330	1323	1308	1294	1282	1271	1252	1240	prologue		1236

57.	聖剣はいずこへ	1333
58.	哀れ牛二匹	1350
59.	聖剣	1360
マザーズロザリオ編		
60.	絶剣	1375
61.	スリーピンググナイツ	1386
62.	状況開始前夜	1401
63.	臆病者へ天誅を	1417
64.	戦いの後で。	1435
65.	彼女らの真実	1446
66.	覚悟	1459
67.	真実を知る。	1470
68.	決戦前	1483

69.	師弟対決	1494
70.	黒の剣士	1511
71.	弟子の戦い	1525
72.	真剣勝負の後で	1538
73.	楽しい時間は	1551
74.	えてして、すぐ終わってしまう もので。	1565
epilogue. 藍の花散る桜の下		
で		1581
マザーズロザリオ編	あとがきの何	
か		1585
アリシゼーション編		
76.	天才少女との出会い	1590

77.	結び目	—
78.	霧を払え	—
79.	照らし出されたもの	—
80.	調停者と異分子	—
81.	剣術学院	—
82.	弟子の成長	—
83.	調停者として	—
84.	真実	—
85.	狼煙	—
86.	戦う理由	—
87.	強さの証明	—
88.	道理と道化	—

173517271715170316941684167316591643162716191600

設定集 ネタバレ防止加工済

要望のあつた設定集です。

※一部裏設定を含めます。

※ネタバレ等があるところは隠していきます。そこは反転にしますので、見る方は自己責任でお願いします。

※必要に応じて追加していく予定です。

ロータス スペル：l o t u s 本名：天川あまかわ蓮れん

S A O クリア時レベル：9 0 ステータスバランス：S T R | A G I に近いバランス

型

スキル構成

曲刀

索敵

投剣

体術

隠密

武器防衛

刀

短剣

小太刀

高速武器換装

射撃

アイテム作成

小太刀：普通の刀より少し小ぶりの刀。短剣を使い込むことによって発生。短剣よりリーチも一撃も大きいですが、短剣の長さであった取り回しの良さは無くなっている。かなり早い段階から発見されていたが、短剣の一番の利点をわざわざ潰した武器だったので、中途半端、役立たずの烙印を押された。

これはその形状から、曲刀、短剣、刀、小太刀のすべてのソードスキルを発動することが可能なことが判明。だが、そんなに武器スキルを習得する人間はいなかった。が、ロータスに関してはその数少ない例外に該当した。故に彼は、その多数のソードスキルを使い分ける、PVPにおいて相手を読ませない破格の戦闘力を有することになった。

また、小太刀のみ、刀と同時装備して、両手どものソードスキルを発動させることが可能。

射撃：早い話が弓。普通の矢は無敵。それ以外の特殊な矢は作成した分だけ。矢はアイテム作成または武器作成で作成可能。

以下、軽いネタバレがあるため反転

発現条件は、「全プレイヤーのなかで、最高の投擲能力を持つこと」。ヒースクリフ曰く、「ジョーカー足り得る存在」。PK及びPKKを行う過程で投擲系統のスキルを多く使っていた彼にこのスキルが与えられた。

反転ここまで

高速武器換装：事前に設定した武器・防具のセットに素早く変えることの出来るスキル。変える方法は、音声とメニューのショートカットの2つ。早い話がモンハンのマイセットを素早く呼び出せるようなもの。発生条件は派生武器スキル（刀、両手剣、小太刀など）を二種類以上習得すること。故にユニークスキルではない。が、上記の通り、そもそもそんなに武器スキルを習得する物好きはいないため、実質ユニークスキル。

本作主人公。大学生。最初期から攻略組に参加しているプレイヤーの1人。戦闘スタイルは、片手に刀、もう片方はフリーか小太刀。体術なども織り混ぜた、非常に多種

のソードスキルを使いこなすアタッカー。

また、武器特性上、いち早く剣技連携スキルコネクトを習得している。

以下盛大にネタバレにつき反転。

学生時代いじめにあっていた。家は完全な亭主閑白でいじめなんぞ自分で解決しろを地でいく家庭環境で、相談しても無意味。挙げ句の果てにいじめの側に嵌められて教師、父親からの信用も失墜させられ、学校にも家庭にも居場所を無くした。結果、家族も含め、能力面で信用することはあっても、基本的に誰も信頼しない。無論、友好関係も滅多に築かない。その上、会話の必要の無いゲームにどっぷり浸かることになる。

彼の目的は、SAOにおいて救える人間を救うこと。つまり、1人でも生き残らせること。攻略組に入ったのも、ゲームを早期攻略して、一刻も早くプレイヤーを解放するため。

PK集団（後のラフコフ）の事実を知ると、彼らに潜り込み、内側から彼らの壊滅を企む。その過程で、かつて自分を陥れた相手の存在を知ると、その相手に対して復讐をする。着実に組織内で古参として信頼を得た後、討滅戦において本格的にラフコフを裏切り、ジョニーブラックとザザの捕縛に貢献する。その後は攻略組に戻らず、レッドの残党刈りをしつつ、潜入時に用いたクリーンな内通者、クラデイルの殺害を目論む。彼がKOBに所属し続けていることを確認すると、最前線に潜り続けて機会を伺っている。

た。

その過程で、ユニークスキル「射撃」で援護することで、74層フロアボス撃破に貢献する。が、これは扉の外から射続けるという方法だったため、75層フロアボス部屋ではカーディナルがボス戦開始とともに扉をロックする対策をたてた。それにより、75層フロアボス攻略には直接参加する。キリト同様、ヒースクリフの正体を、PvPの経験で得た心理戦の応用で看破するが、タイマンデュエルは辞退する。が、最後の一撃をかまそうとしたヒースクリフの剣を射撃スキルにて援護することで、クリアに貢献する。この際、デュエルを行わなかった代わりの貸しとして、MHCPO2を譲り受けた。

ALO編では、須郷の手によって記憶を封印され、オベイロンの従者であるホロウとして、攻略に勤しむプレイヤーをPKして回っていた。が、レインの捕縛を命令されたことをきっかけとして、封印されていた記憶が蘇り、最終局面において須郷の実験の被験者になっていたSAO未帰還者のログアウトを行った。

家族の理解を得られず、現実世界で居場所を失っていたところに、仮想課の役人からの依頼で、SAO帰還者の学校の教師として、レインたちの担任になる。馴れない教職の仕事に、再任用の先生方の助言も受けつつ、四苦八苦している模様。

また、自分を助けようと奔走したレインに対しては、不器用ながらも距離を縮めようと努力している模様。

・・・仮想課の役人、一体何岡なんだ・・・(棒

反転ここまで。以下作者コメント。

序盤の感想でも書きましたが、案外情に篤いけど目的のためならどんな手段でも構わない冷酷性を併せ持ったキャラクターです。ユーリに似た感じになったのは、そういうキャラクターということと合う人物ということでした。序盤の感想の返信でわざわざあんな妙な書き方をしたのは、そういうほうが伝わりやすいかなー、って思ったから、というだけです。ま、個人的な彼の印象でもあるんですがね。

レイン スペル：rain 本名：枳殻からたち 虹架にじか

SAOクリア時レベル：103

スキル構成はぶつちやけあんまり考えてません。

ステータスバランス：AGI—STR型、ただしAGIのほうが大分高めのスปีード型

本作ヒロイン。ロスト・ソングより。年齢はアスナ、リズと同一年(キリトの一つ歳上)。序盤でロータスに助けてもらったことがきっかけで、彼とはよくペアを組む。戦闘スタイルは、初期ロータス譲りの片手用直剣とフリーの片手による、体術を混ぜるアタッカー。

以下ネタバレにつき反転。

ロータスがラフコフに潜ってから少し経った頃、彼の目的を察して攻略組を一時離脱、異常なレベリングを実施する。結果的に彼の隣に立つことは75層フロアボス攻略まで無かったが、彼を再び表舞台に戻そうと努力していた。

半分なりゆきではあるが、ユイ関連の出来事に関わる。

A L O編では主人公。ロータスこと蓮がA L Oに囚われていることを聞き、A L Oにログイン。その過程で、ホロウがロータスであることを看破し、彼との一騎討ちに勝利。帰還後は彼と友好な関係を築いている。

反転ここまで。以下作者コメント。

正直この子が結構引つ掻き回してくれました。でもそれが結果的にブレイクポイントになって新しい物語が生まれたりして、結構その辺複雑な心境だったキャラの筆頭。ちなみに、没になった設定で、LSで見せていた逆手の納刀というのが主人公から移った癖、というのがありました。かなり序盤のムービーなので忘れてる人も多いかもしれませんが、ありません。ですが、書いていくうちにこの二人が師弟というより相棒になって行き、その設定は自然消滅的に没になりました。正直、レベルはやりすぎ感がありましたが、鬼のレベリングをしたキリト君のレベルが90オーバーだったので、さらにそこから追加して100オーバーにしてみました。まあ、彼のレベリングしていた時期を考えると、

彼女はかなり後のレベリングだったので、効率アップしていたということでは一つ。

エリーゼ スペル：elise 本名：たちばな橘 えり永璃

彼女に関してはスキルもレベルも特に考えてませんでした。

元々は彼の復讐のために雇われた女傭兵。物語途中から、レインたちと関わっていくことになる。つかみどころのない飄々とした女性。カスタマイズで瞳の色がインディゴ（藍色）に近い色になっている。

以下ネタバレに（ry

リアルでは、孤立している蓮に対して歩み寄ろうとしていた唯一の後輩。だが、当の本人が全く誰も信頼していなかったため、彼との距離は縮まらなかった。ロータスのたくらみを察知して、鬼のレベリングをしていたレインに接触。同じく彼を表舞台に戻そうと動く。第一層の教会孤児院にしばしば出向いており、その時にユイの一件に遭遇する。そのあとは、かつての通り傭兵として活動していた。

リアルでは凄腕のハッカー。画面の見過ぎで視力を悪くしたのか、眼鏡をかけている。マジレスすると、軽い度に入ったブルーライトカット眼鏡。

ALO編では、彼が復帰していないことを知ると、彼の搬送先の病院のアクセスログ

などをハッキング、ついでに彼が茅場から報酬としてもらい受けた、MHCP02、ストレアを強奪、所持権を移す。その後、仮想課の役人から情報を聞き出し、虹架に接触。ALLOにてともに冒険を繰り広げる。

情報の聞き出し方は、相手が官僚であることを利用したスキャンダルばらしによるっ
ていう裏設定があつたりする。そんな官僚、一体菊何なんだ・・・（棒

反転ここまで。以下作者コメント。

引つ掻き回したってレベルじゃないよ本当にこの子は。本当に何度も言うけど一瞬だけ登場のモブキャラにする予定なのになんでこうなつたんだよ本当に。俺が聞きた
いレベルで追加設定もろもろが出まくつた子です。本当にもはや原型とどめないレベ
ル。

セルム

SAOに登場したNPC。ストレア（後述）をかくまっていた。

エルフと人間が交わって生まれたハーフエルフという存在。その出自から疎まれ、世
界の片隅でひっそりと世捨て人として暮らしていた。という設定。

プログラムのバグから自我を持っているため、かなりNPCっぽくない。という裏設
定。

以下作者コメント。

主人公側のサポートキャラクター（キリトで言うユイちゃん）のような存在としてストレアを考案したけど、果たしてその流れをどうするよ。ということ編み出した子です。自我うんぬんの設定はPSUシリーズのツノを生やされたあの人関連から、人物像自体は風の谷のナウシカ（原作）から拾ってきました。本当に穏やかな世捨て人。個人的にもっと出番を増やしたかったキャラクター。

ストレア

ゲームより引用した、MHCP02。つまり、ユイちゃんの妹に当たる。ユイちゃんが黒白夫婦を重点的に監視していたように、彼女はロータスを重点的に監視していた。そのため、バグを蓄積させて、未使用アカウントを乗っ取って浮浪者のようになっていたところをセルムに発見され、彼に匿われていた。

ALO編ではレインたちをサポート。最終的な世界樹攻略の時は、前衛の一助となった。

以下作者コメント。

主人公側のサポートキャラクターとして編入させたはいいものの全く活躍させてあげられなかった不憫な子。これは本当に風呂敷広げすぎました。力不足ですね、はい。

今後、活躍の場を与えていこうかと考えてます。

SAO、序章

0. プロローグ

2022年11月6日、昼前。少し早い昼食を済ませた俺は、バタバタとしていた。両親からしたら、「なんでお前はそんなにバタバタしてるんだ」、などと言いつつ、俺にとつては大事なことだった。何せ、今日はソードアートオンライン、通称SAOのサービス開始日だからだ。そんなときに寝坊するのは・・・まあ、ある意味俺らしいというか、呆れた話である。

今まであまたのゲームを買ってプレイしてきたが、これまでで一番ワクワクしている。自分も、本来狩猟や純粋なRPGが好きなのだが、こういうMMORPGはほとんどやってこなかった。しいて言えば、ずいぶんと前に動物——空を飛べるものも含んで——を乗って様々な土地を走っていきけるというものがあつたが、やはりそこまでやり込めずにはすぐやめてしまった。だが、これは違った。誰もが夢見たであろう、画面越しのキャラクターに自分になりきることができるというのは、食指を動かすには十分だった。

ハードとソフトを買った直後にキャリブレーションを済ませ、あとはサービス開始と

同時にログインするだけ……だったのだが、俺が今日起きたのは12時ジャスト。素早く着替えて食事をとって、そして今に至るといわけである。

一応念のため書置きを横に置く。ゲームなどには疎い両親のことだ、万が一ログインしている最中に無理矢理落とすために外そうものならいったいどうなることか……想像したくもない。いろいろと考えて文面を書き終えてペンを置くと、すでにサービス開始まで5分を切っていた。携帯の電源を切る。どうせダイブ中は操作することなど、土台不可能なのだ。

ナーヴギアの電源を入れて被る。あまり人が入らない場所だが、念のため邪魔にならない場所に寝転ぶ。

ソフトの挿入を確認し、WiFiの接続を確認する。電源が刺さっているかを確認してから、時計を確認する。現時刻は12:58。案外時間がかかったなと思いつながら、俺はその辺の床に、邪魔にならないように横になった。この手のやつは座っただけでもある程度大丈夫だが、案外ナーヴギアは重たい。仮想空間フルダイブから戻ったら首が滅茶苦茶痛かった、などという事態はできるだけ避けたかった。

やがて時間が来る。体内時計には昔から自信があった。だが念のため、残り20秒を切ってから目を閉じる。はやる心を押さえてカウントを終えると、その言葉をつぶやいた。

「リンク・スタート」

——それが、自分を長い間囚われさせる、魔の言葉であるとも知らずに。

ダイブした直後に俺が見たのは、大きな広間だった。駅前のロータリーのような近代的なつくりではなく、まるで中世ヨーロッパにでもタイムスリップしたかのような趣のある街だった。

「すっげえな、こりゃ」

正直に言えば想像以上の一言に尽きる。これほどまでとは思ってもいなかった。一応書置きには夜には戻ると書いたものの、これでは下手したら一日くらいはダイブしっぱなしになっていそうだ。

何はともあれまずは武器だろう。初期装備すらもアイテムストレージにないというザル度合いだが、裏を返せば様々な武器を扱えるということでもある。そう思い、とりあえず街を散策することにした。

今の自分は、事前で作ったアバターになっている。背も少々高めに設定したからか、視線が慣れない。が、こんなのは時間が解決するだろう。それに、この手のアバターは大量に見かける。アバターの自由度が高いゲームだと顔面偏差値が異常な高さになる

のは、ある意味必然といえよう。

「んー……」

ちなみに、今俺は絶賛悩み中である。シンプルなロングソードである片手用直剣は扱いやすさに定評があるが、それではつまらなさそう。短剣は取り回しがいいが、いかんせん至近距離での戦いには慣れていない。どちらかといえば柔道より剣道のほうが得意なのだ。槍はタンクが装備するイメージだし、何より狩猟ゲームでも槍系はほとんど使わないから論外。となると……

「これかなー……」

そう言つてディスプレイしてある曲刀……所謂シミターを手取る。リーチでは片手用直剣にわずかに劣り、刃も片側にしかついていない。

「でもこつちも捨てがたいよなー……」

そう言いつつも片手で今度は棍棒を手取る。刃をいちいち意識しなくていい代わりに、ただ単純に重い。まあそれが取り柄でもあるのだが。

暫く悩んだ末に、NPCにふと問いかけた。

「すみません、これって試し振りつてできますか？」

「おうできるよ。店中にスペースあるから使つてくれや」

気前のいいNPCに感謝しながら入っていく。確かに、店の奥にはちゃんとそのよう

なスペースが用意されていた。

「・・・用意周到なことだ」

眩きながら、まず曲刀を手に取る。踏み込みながら基本的な振り方をして、感触を確かめる。直後に棍棒を取り、何度か振る。すぐに心は決まった。初期金額から勘案しても、かなりリーズナブルなお値段であることも確認し、試し振りスペースから出るや否や言った。

「おっちゃん、こいつくれ」

「おう毎度！ 氣イ付けてな！」

「ありがと」

そう言うのと、改めて相棒となった曲刀を鞘にしまう。どうやら店売りのアイテムは鞘もセットになっているようだ。それからいくつか店を回って回復薬を入手すると、俺は意気揚々と町の門をくぐった。

「さてと、んじやま早速狩りに行きますか！」

記念すべき初狩ということで、俺は本当に楽しんでいた。

それから数時間後、俺は順調に戦っていた。最初こそ少々感覚がつかめなかったが、

慣れてくると簡単だった。

このゲームには、所謂魔法の類は一切存在しない。その代りに存在するのはソードスキルといわれるものだ。特定の体勢をプレイヤー側が意図して作ってやることで、それをシステムが認識、結果、誰でも簡単に強い攻撃が放てるという仕組みだ。それに、ソードスキルには様々なバフやデバフ付与効果があるとも聞いている。

「なる。こいつは確かに楽だな」

もつとも、俺の選んだ武器、曲刀だと「リーバー」という、突進系の技しか使えないようだが、何も無いよりはよっぽどマシだ。

「ま、でも楽だな、これ」

このあたりに湧くのは「フレンジーボア」という青色の猪だ。猪系の相手のセオリー通り、突進を躲して後ろから攻撃で大抵は対処が可能。実際、これまでだつてそれ一辺倒で簡単に対処できた。が、これにはちよつとした面白いギミックもあった。というのも、脊椎動物というのは絶対に脳が存在する。そこを潰してしまえば簡単に倒せる。つまりだ、相手から真つ直ぐこちらに向かつてくるのなら、わざわざよけて攻撃するより、その場で待ち構えて頭を一突きするとか、飛んで上から頭を裂くとか、はたまたその得物を投げるとかというのも有効なわけだ。実際どれでも有効で、クリティカル扱いになってその猪は例外なく死んでいった。哀れ猪。

「さてと、マップを見てみますか」

如何せんこの第一層は広いと、マップを見て改めて思う。確かパッケージのイラストでは、この“浮遊城アインクラッド”は円錐形になっているようだから、事実上ここが一番広い層ということになるのだろう。が、これは広い。

「えっと、ここから一番近いのは……こっちか」

大体の方向を覚えて、俺は歩き出した。

暫く歩き、道中で出てきたモンスターを片っ端からぶっ倒しながら、俺は地図にあった村にたどり着いた。

「あ、そういうえば」

本当にふと思いで出して、俺は剣を一回鞘から抜いた。軽く指でタップしてウィンドウを表示させ、その数値を見て顔をしかめる。

「うっわー、やっぱ耐久値結構やばいなー」

耐久値、というのは、ざっくり説明すると“物の寿命”である。これがゼロになった瞬間、食物だろうと武器だろうと、ポリゴンのかけらとなつて利用不可となつてしまう。それが結構危ないということは、最悪この剣はなくなつていたということだ。

「よかつた気付いて。さてと、んじやま武器屋を探しますか」

一言呟いて武器屋を探す。案外すぐそこにあつた武器屋には、流石に初期の街とは違い品ぞろえがよかつた。それに、これまでさんざんモンスターをぶつ倒してきただけあり、コル——この世界での通貨だが——もそれなりにたまっている。何本か買うくらいは造作もなかつた。

「さーと、行くか」

一言呟いて一步を踏み出した瞬間に、鐘の音が鳴り響いた。リンゴーン、リンゴーンと響くその音に、言いようのない不穏な予感を覚えた。瞬間、自身を光が包む。それが収まつたとき、俺は広場にいた。

(ここつて、ログインしたときの・・・)

よく空を見ると、幾何学模様のような空になつた空に何か書いてある。さらに注視すると、それが“Warning” “System Announcement”と書いてある。運営から何か通知があるのかとただぼんやりと考えた。

そうこうしていると、空から何か液体が垂れてくる。明らかに粘性がありそうな赤いそれは、空中に巨大なローブのアバターを形作つた。何人かが引き攣つた悲鳴をあげたが、まあ無理ないだろう。当の俺は「わー悪趣味(棒)」という、超がつくほど味気ない反応だったが。だがそれはやがてひそひそとした話し声に変わった。

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。私は茅場晶彦、今やこの世界をコントロー

できる唯一の人間だ」

未だにざわつきが収まらない広場に——より正確にはそこにいるプレイヤーに向け、そのアバターは話しかけた。

私の世界、なんていった瞬間にそうかなと思ったが、まさか開発者直々にとは。こりや驚いた。

「プレイヤー諸君は、もうすでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合などではない。繰り返し。これは不具合などではなく、ソードアートオンライン本来の仕様である」

「……え、俺気付いてなかったんですけど。というか、今こいつはナントイッタ？ ログアウト不可が仕様だと？ 欠陥ってレベルじゃねえぞ、おい。」

「諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない」

要するに、出たかったらクリアしろと。単純明快で結構。ってあれ、待てよ、ナーヴギアが外れたらどうなる？

「また、外部の人間によるナーヴギアの取り外し、あるいは破壊や停止が行われた場合、諸君らの脳はナーヴギアが発する高出力マイクロウェーブによって破壊される。」

正確には10分間の外部電源切断、2時間のネットワーク回路切断、ナーヴギア本体

のロック解除、または分解、破壊のいずれかによって脳破壊シークエンスが実行される。

現時点で、警告を無視して現実世界の人間がナーヴギアの強制除装を試みた結果、すでに、213名のプレイヤーがアインクラッドおよび現実世界から永久退場している」

用意周到だなクソツタレが。てか213人つて、マジかよ。

「だが安心して欲しい。この事に関しては各種メディアおよび政府に通達済みだ。以降、これによる退場はないと言っただろ」

安心できる訳ねーだろコラ。今更何言っても無駄だけど。

「また、ソードアートオンラインはただのゲームではない。もうひとつの現実だ。

そのため、ゲームクリアされるまで、ありとあらゆる蘇生手段は用いられない。HPがゼロになった瞬間、アバターは永久に消滅し、諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される」

・・・もはや驚く気にもならない。つまり、こっちで死ねばあっちでも死ぬっつーことか。

「ここがもう一つの現実であることをここに証明しよう。今、君たちにプレゼントを贈った。アイテムストレージを確認してくれたまえ」

あちらこちらで鈴を振ったような音がする。その音の一つを出しながら、アイテムストレージを確認した。確かに、見覚えのないアイテムが一つ混じっている。アイテム名

は「手鏡」。とりあえず出現させると、そこにあったのは何の変哲もないただの手鏡だった。と思つたら、自分の体が光に包まれる。またどつかに飛ばされるのかと思つてみると、景色は変わっていないかった。だがどこかおかしい。

少々周りを見渡してすぐに気づいた。まず、女性が極端に少なくなっている。そして、美男美女ばかりだったのがありふれた顔も多くみられるようになっていた。ということ、

「やっぱりな」

鏡に映るのは、先ほどまでの切れ長い目のイケメンではなく、現実世界での自分の顔だった。先ほどのアバターと似通っているところといえ、目が少し切れ長なことくらいか。細めの釣り目に怒り眉、少々鼻が高く、少し厚めな唇という、平凡なただの青年の顔だった。改めて顔を上げると目線も若干落ちて——いや、戻っている。つまり、アバターを現実世界の体に置き換えたということか。キャリブレーションとヘルメックト型というところがまさかこんな意味合いを持つているとは考えもしなかった。

「おそらく諸君は、なぜ私はこんなことをしたのか、と考えているのだろう。何故ナーヴギアの開発者たる茅場晶彦は、このようなことをしたのかと。その目的はすでに達成されている。

この状況を作り出し、鑑賞する。そのためだけに、私はSAOというものを作った。

そして、その目的はすでに達成せしめられた。

——以上でソードアートオンライン、正式サービスチュートリアルを終了する。健闘してくれたまえ」

そう言うと、そのローブは虚空へと消えていった。空の幾何学模様もなくなっていく。と同時に、怒号がその場を覆い尽くした。それもそうだろう、普通のゲームだと思っていたら、何の予告もなくデスゲームと化したのだから。

だが、そんなことを俺はどこか他人事のように思っていた。こういったことが起こった瞬間、大抵の人間は安全なところに閉じこもるか、集団を組むことで安全性を高めるはず。だがもとより俺は集団に溶け込めるような性格ではない。なら、この先取るべき行動は——

そこまで考えた瞬間に俺は走り出していた。広間からフィールドに出て、そのまま先ほどまでいた町まで走る。

(どっかで聞いたな、この手のゲームはリソースの奪い合いだって。だったら、おそらく始まりの街周辺のMobはさっさと狩り尽くされる。なら、この状況ですべきは一刻も早く違う街にとりあえずの拠点を置いてレベリングをすること)

基本的にレベリングなどはしない主義だが仕方ない。今回の場合は死んだら終わりなのだ。死なないために一番簡単なのはレベルを上げることだろう。と思っていると、

目の前に狼が湧く。ホツプする 走っている勢いそのまま抜刀して即座に軽く跳躍しながらリーバーを発動させる。そのまま刃は相手の右目を通って横腹を裂き切り抜けた。慣性に従って動く体を、技後硬直が解けるや否やさらに走り出した。今はとにかく一歩でも前へ。置いてきた人間のことなど、今は考えられなかった。

1. ホルンカ

日没の前に何とか次の村にたどり着いた俺は、そこで奇妙なプレイヤーに出会った。

「ほらほら持つてけ持つてケ。アルゴ印の攻略本、たつたの5000コルだヨ」

待った、攻略本？ ってか、俺結構休まず全力で走ってきたほうなんだけど、それをやすやすと上回るってことはあのプレイヤー何者、と考えたところですぐに思い当たった。

（あ、そっか、SAOにはCBTがあつたんだっけ）

CBT、つまりはクロードβテスト。サービス開始前にバグチェックやバランス調整、サーバー負荷などのデータ採取を目的としたβテストの中でも、人数などを制限したものだ。確かSAOでは公募制だったはずだ。

まあ、そんなことはともかく。おそらくCBTの経験を生かして近道とか効率的なレベリングとかをしたのだろう。要するに、おそらくその攻略本を生み出したアルゴなる人物はほぼ間違いなくβテスターなわけだ。そう思いながら、情報は大切だと遠慮なくもらうこととする。

「オ？ おにーさん、早いナ」

「そうなのか？俺は合理的な手段を取ったまでだが」

「それを迷いなく選べるプレイヤーは一握りだと思うゾ」

「ま、褒め言葉と受け取っとくよ。それより、ここに書いてある情報ってCBTの情報か？」

「まあナ。現実性が保証できるものもあるけどそうじゃない情報も多い。だから基本は無料」

「つてことは、確実な情報は有料、結果として500つてわけか」

「そーいうコト。おにーさん、頭の回転早いナ。名前はなんていうんだ？」

「ロータスだ。俺は頭の回転がいいとは思わないけどな」

「にやハハハ、ますます気に入ったヨ。ちなみにオレっちがアルゴだよ」

「そうか、よろしくな」

「そう言いつつ500コルを手渡す。」

「ほい、毎度」

「これに書いてあるなら払わないけど、この辺でおすすめのカエストつてあるか？」

「んー、ここだとやっぱアニブレだナ」

「アニブレ？」

「おっと、これ以上はお代をいただくヨ」

「いくらだ？」

「アニブレのクエストなら・・・そうだな、300もあれば十分だな」

「OK、そんなだけなら安いもんだ。ほい」

即決で決めて、メニューを操作して300コルをきつかり取り出す。すると、相手は意外そうな顔をした。

「そんなに簡単に信用していいの力？」

「俺、昔っから人を見る目はあるつもりなんだよ。で、あんたからはなんていうか、悪意で情報をばらまいているとは思えない。これも、このちっさな本つて言っても価値は500どころじゃやねえだろ？つまりはそういうことだ。

で、アニブレ？にまつわる情報をくれ」

「そう急くなつて。アニブレっていうのはアニールブレードの略で、ここらだとそれなりに使える片手剣のことだヨ。あそこの家、見える力？」

「道具屋の看板がある家から、向かって右の家か？」

「そうダ。とにかく、そこを訪ねてお茶をごちそうになる。それからしばらく待つと奥から咳が聞こえるから、それがフラグ。あとはあっちにある森に潜って、リトルネペンの胚珠を渡せばクリアダ」

「さらに100出す。リトルネペントについて教えてくれ」

「追加料金は要らないゾ。もともと教えるつもりだったからナ。リトルネペントは植物系で、^{ハイライティング}隠蔽は効果がナイ。あと、通常と実付きと花付きがあつて、花付きからしか胚珠は落ちナイ。実付きの身を割るとリトルネペントがわらわら湧いて出て来るから注意ナ」

「ソロで囲まれた場合は？」

「AGIに物言わせて逃げるのが一番だナ。無理に戦うのはおすすめでできないナ」

「そつか。アニブレは売れば金になるのか？」

「それなりにナ。エンドまで強化しようつて考えるやつは少なくないから、予備としても持つておくプレイヤーの一人や二人、いても何ら不思議じゃない」

「おっけ、サンキュナ」

「今後ともごひいきニ」

「そうさせてもらうよ。とりあえずフレ登録いいか？」

「むしろこつちからお願ひしたいネ。正式サービスでのお得意様第一号だ」

「ほう、そりやありがたいな」

「そう言いつつフレンド登録を終わらせると、俺はその場を離れた。

「んじやーなー、お互い気を付けようぜー」

「そつちもナー」

お互いにそう言いながらその場を離れた。とりあえず、武器にはある程度余裕がある。なら防具を固めようと防具屋を目指した。

言われた通り町はずれの森で狩る。リトルネペントというのはなんだか——というかそれなり以上にグロテスクなモンスターだった。最初こそてこずったこともあったが、根元——と言つていいのかは疑問だが——の部分がHPを削りやすいと気付いたらあとは楽だった。

移動しながら何頭目かのリトルネペントを倒したところで、遠くから人の声があった。もしかしたら自分より手練れのプレイヤーかもしれない。そう思いながら、そちらの方に向かった。

その声があったと思われる地点に来た瞬間、先ほどまでの様子見精神は吹き飛んでいた。流石に目の前でプレイヤーがモンスターの大群に襲われているのを、はいそうですかとスルーできるほど俺は薄情ではない。一瞬で抜剣し、リトルネペント数体一気に散らす。本来、他人の獲物を横から倒すのはマナー違反なのだが、緊急時だから仕方ない。

「動くなー」

一言強い口調で押さえる。どうやら腰が抜けているようだが、念のためだ。振り返り様に腰からスローイングピックを抜いて投げる。もしかしたらと投剣スキルをとって

おいて、そしてホルンカでもピックを多めに購入しておいて正解だった。十分な行動遅延^{ディレイ}を与えたことを確認する暇も惜しく、さらに接近してきたリトルネペントを右下から斜めに切り上げる。何やらシステムメッセージが出てきたが今は無視だ。そのまま横にいたリトルネペントを倒し、残っていた数体も一気呵成に攻めて終わらせる。後ろから多分15体くらいのリトルネペントがわらわらと湧いて出て来る。

(・・・上等！)

自信の口元が緩むのが分かる。俺の悪い癖だが、こういう時には役に立つ。ぼんやりとそんなことを考えながら、もう一度相手に突っ込んでいった。

やがて一通り暴れると、周りから敵はいなくなっていた。が、こちらもかなり限界だった。切らした息を整える間もなくポジションをあおり、注意深く周囲を見渡してから、助けたプレイヤーのほうを向く。

「さつきはきついこと言ってますみません。大丈夫ですか？」

せめて優しく声をかけながら手を伸ばす。よく見るとこのプレイヤー、なかなかどうして愛らしい見た目をしている。・・・というか、なんだろこの髪の色。染めているのか？銀髪に少し茶髪・・・じゃないな、金髪が混じったような柔らかかみのある色は、——

——いったいどういう配合をしたのだろうかこれ。そんなことを考えていると、そのプレイヤーは手を握り返してゆつくりと立ち上がった

た。手小さいなー。俺が大きいだけか。

「ありがとう、ございます。えっと、——」

「ロータスです。とにかく間に合ってよかった」

「レインっていいます。それと、私のほうが年下だと思うので敬語はなしでいいですよ」

「あ、それで・・・コホン。そっか、ならそうする。けど、そっちも敬語なしで頼むな、堅苦しいの苦手だから。見たところ年代だし。で、どうしてあんなことに？」

「この辺で狩りをしてたら、突然さっきの植物みたいなやつが群れを成して襲ってきて・・・」

それを聞いたとたんに、俺は顔が険しくなるのがはつきりと分かった。群れを成して襲ってくる、というのは自然に発生するとは思えない。それに、戦っていて分かったのだが、こいつらは足がそこまで早いわけではない。全力で走り続ければ容易に振り切れる。アルゴによる情報と照らし合わせると、おそらく——

「なら余計間に合ってよかった。PKされてからじゃ遅かった」

「え・・・？」

「聞いたことがあるんだよ。わざと大量にモンスターを引き連れて、そのタゲを近くのプレイヤーに擦り付けるっていう行為があるって。トレインって言って、一般的には非マナー行為。それを利用したMPK、そいつにあっただらうよ」

おおかた、実をわざと叩き割つてからレインにそのタゲを擦り付けたのだろう。その犯人が目の前になかったことに半ば以上本気で感謝した。——もしいたら問答無用でぶつた斬るだろう。

淡々と話す俺に、レインは驚きに目を見開く。

「そんな……！この世界で殺すつてことは、現実世界でも殺すつてことなんだよ？」
「だけど、ここで殺したからつて現実世界で裁くのは難しい。何せゲームの中なんだからな。ところで、そつちつて胚珠は手に入れたの？手に入つてないのなら手伝うけど」
「胚珠？」

俺の質問に首を傾げるレイン。一瞬目を奪われたが、すぐに気を取り直して説明しにかかると。

「その前に一つ確認。おたく、メインアームは？」
「これ」

近くに落ちていた自分の剣を拾い上げて見せる。

「耐久値大丈夫か、それ」

「え？」

「俺も半分知つただけけど、どうやら鞘とかなしに地べたに直接放置して暫くすると耐久値の減少が発生するらしい。念のため確認しときな」

「分かった。・・・大丈夫、あと6割くらい残ってる」

「そっか、ならよかった。それと、さっき言ってた胚珠についてだけ——」

一通りアルゴから得た情報を話すと、レインは完全に食いついていた。

「分かりました。私もやります」

「OK、いい返事だ。とりあえず、この辺のリトルネメント根絶やしにしますか。一応確

認だけど、もう大丈夫？ 戦える？」

「もう流石に」

「結構。パーティ登録しときたいけど、このクエ、ソロ専だからな・・・。じゃ、行くか」

そう言つて歩き出す。定期的に後ろを確認することは忘れないようにして、俺は歩き出した。振り返った先にあるレインの顔に、怯えだとか恐怖の類は一切なかった。もし先ほどの光景がフラッシュバックしても、俺も先ほどの戦闘でレベルアップして今レベル5だ。守りながら戦うことくらいはできるだろう。そう高を括っていた。

それからというものの、あたりのリトルネメントを二人で乱獲し、胚珠を二個取ったところで、俺は隣にいる少女に声をかけた。その間に、俺が一つ、レインは二つレベルが上がっていた。

「さて、これでクエの達成条件は満たしたわけだが・・・どうする？」

「どうする、つていうと？」

「出会ったばかりから考えるとレベルが上がってる。もう少しここでレベリングしてやれば、実をたたき割っても返り討ちにできるくらいのレベルになるはずだ。そうすれば、今後も戦いが楽になる。どうする？」

「いや、そこまで手伝ってもらえればありがたいけど・・・」

「なら決まりだ。もう少し付き合おう。俺は情報を買った口だからよくわからんけど、何回も受けられるのなら、何本も持つておくに越したことはないし」

そう言うと、抜剣したままの自身の得物を片手でくるくると回す。そのまま周りを見渡すと、近くで物音がした。そちらを見てみると、

「うわぁ・・・」

思わず声が出ていた。レインに至っては声すらない様子だ。

その敵は、一言で表すなら“でかいリトルネペント”と言ったところか。だがただのリトルネペントでも十分に気持ち悪い。それが大きくなったとあればお察しだ。

そこまで考えた瞬間に手が勝手に動いていた。レインに向けパーテイ申請を行う。

「レイン、システムメツセージは？」

「来たけど、これって承認して大丈夫なの？」

「承認しろ、時間がない。あいつをぶっ倒すぞ」

「ええ!？」

会話をしながらカーソルを飛ばす。『Big Nepenthes』・・・でかいネペント。うん、そのままだな。ボスの定冠詞はついてないし、HPバーは一本だけ。二人でかかれれば十二分に消し飛ばせそうだな。

「見たところ警戒すべきはその図体と、あとは、リトルネペントよりさらに多い四本の、蔓みたいなやつが生えてるくらいか。慎重に行けば問題なさそうだな。なにより、あの頭を見てみる」

そう言われて、レインも頭を注視する。そこには、いくつかの花と実がついていた。

「実を割らないようにすれば大丈夫だ。花がいくつかついてるってことは胚珠もいくつが取れる可能性がある。なにより、経験値もたくさんもらえそうだしな」

「実を割っちゃつたら・・・?」

「逃げる。敏捷に物言わせれば、今の俺らのレベルなら十二分なはずだ。だけど、あんたが嫌ならやめる。どうする?」

「・・・その顔見たら嫌とは言えないよ、まったく」

「決まりだ」

返答をする前から、自身が獯猛に笑っていることには気づいている。昔からそうだな。強敵、難関相手だと委縮するどころか奮い立つ。今回はそれが悪い方向に行かなければ

いいが。返答と同時に、ふたりともが飛び出した。どうせ隠密など持っていないのだ、隠れていても仕方がない。——かなり後になってから、この手の敵には隠密が効果を発揮しないということを知ったのだから、結果オーライというべきなのかもしれないが。

「うらあー！」

吠えながら横に曲刀を一閃。それにうめきながら、相手は頭を軽く後ろに反らせた。

「そら、よー！」

溶解液のモーシヨンを見て、即座に俺は左横に得物を持つてきた。システムが認識したことを確認した直後に一気に抜き放つ。システム外スキル「ブースト」——という呼称は後で知ったのだが——で加速された横一閃「真空破斬」が相手の下部に当たり、行動遅延が発生した。

「レイナー！」

俺の叫びに呼応して、はさみうちの構図から繰り出された片手剣のソードスキル「ホリゾンタル」が丁度俺が斬った反対側に炸裂する。二発ともクリティカル扱いになったのだらう、それだけでHPバーがやすやすと黄色に変化した。やっぱりこいつ、そこまですぐ強くないな。

「気を付けろー！」

声をかけながら、俺も相手の動きに注意する。ボスは突然暴れだすと、あろうことかその二本の蔓を鞭にして自身でその実を割った。

「んなあ!？」

「え!？」

二人そろって素っ頓狂な声を上げる。さすがにこの展開は予想していなかった。まあ確かによく考えてみれば、自分で実をたたき割ればプレイヤーを簡単に排除することができる。まあ、少し冷静に考えてみれば当然なのだが。

「くそっ」

忌々しく吐き捨てながら、俺は片手剣系汎用ソードスキル「虎牙破斬」で一気にデカネペントをぶった斬る。あえて振り下ろしを両手で行ったことが功を奏したのか、二段目の振り下ろしはビッグネペントを文字通り両断した。が、そのHPを消し飛ばすことはなく、ポストモーション技後硬直の間に行われたレインの猛攻でようやくそのHPを消し飛ばした。

「で、どうするの、これから」

あれを倒したことにより、俺はさらに二つもレベルが上がっていた。レインのほうもレベルが上がったことは確認した。ということは、レインのレベルは計算上最低で4なのだが、俺が二つ上がったということはおそらくレインも二つ、ないしは三つ上がったはず。となると、推定レベルは6ぐらいか。さらに、俺たちはここのリトルネペント

がRDBに載るのではという勢いで狩っていた。ざっと見た感じ、数は50、いや下手したら60を下らないが・・・

「行けるかもな」

俺はもとより店売りの武器を使っていて、念のため予備として数本持っている。そのストックはまだ余裕があつたし、このペースなら後々で一本二本売る必要があるかと思うほどだ。武器の心配はない。問題はレインだ。

「行くぞレイン、武器の貯蔵は十分か？」

「大丈夫、いけるよ。それと、それには思い上がったな雑種が、とでも返せばいい？」

この年代にこのネタは厳しかったかと思っていたら、食いついてきたということに少々意外感を覚えた。その感覚から頭を素早く切り替え、軽く鼻で笑い飛ばす。

「そのくらい余裕があるんなら大丈夫だ。行くぞ！」

そう言つて突つ込んでいく。下の細くなった部分を手に持った曲刀で両断していく。レベルが先ほど8になったことによる恩恵なのだろう、リトルネペントは容易く一撃で沈んだ。だがHPが減るスピードを見るに、結構ぎりぎりだ。時々向こうに行きそうになるリトルネペントを、剣とは別の手に持った複数のピックでこちらにタゲを移させている。そんなこんな戦いをしていくと、いつの間にか周りのリトルネペントはいなくなっていた。たまたま位置が近かつたこともあり、確認し終わると二人そろつて背中合わせ

でへたり込んでしまった。

「さすがに、きちい……」

「まったく、誰よ、あんなの倒そうって言ったの……」

「俺だな、悪い。てか、お互い無事で何よりだ」

「本当にそれだよ……」

少しして、ようやく上がった息も戻ってから街に戻り、さっさとクエストを終わらせた頃には、もう日が昇っていた。ということは、一晩中狩りをしていたということになる。

「悪いな、振り回しちゃって」

「いえ、私もだいぶ楽だった。レベルもだいぶ上がったし」

「そう、か。ま、今日はゆつくり寝なよ。俺は、まあ、どこでも寝られる口だし、男だし。でも君は女の子なんだから。ところで、君はどうするの？」

「攻略していききたいとは思ってるよ。ゲーマーなら当たり前でしょ。でもその前にひと眠りしたいかな」

「そっか。ならここでお別れだな。俺はもう少し先に進むから」

「そうなんだ……無理しないでね。あ、フレンド登録しとこうよ」

「そだな」

そう言ってお互いにウインドウを操作する。フレンド一覧に *rain* の名前を確認してから、俺は軽く手を上げた。

「んじやな、また会う機会があれば」

「はいー」

そう言われた笑顔に、不覚ながらも少し見とれてしまったのは秘密だ。

結局アニブレはさっさと売り払ってしまった。だがその代金でポーションは今持つことのできる限界所時数まで購入できたし、ずっと装備していた曲刀の耐久値も回復させることができた。数本あるとはいっても、一本あるかないかはここ一番で影響するかもしれない。そして、街を歩きながら攻略本をざっと読み、一つの項目だけはじっくりと読んだ。

曰く、ここからふたつ先の村近くで受けることのできる「年寄りと大猪」というクエストの報酬は曲刀で、この曲刀は限界まで強化すればこの先数層にわたってメインアイテムとして活躍できる性能とのこと。正直なところ、今のままでは火力不足が否めなかった俺にとつて、これは朗報以外の何物でもなかった。

改めてマップを開く。これまでの経験からすると、次の村まで約3km、その次まではざっくりで6、7kmくらいといったところか。どちらにせよ、一晚中狩りをしてい

た影響か、頭の回転が鈍くなってきていることくらいは気づいていた。

(とりあえずは次の村まで行つて、そこでひと眠りしてから次の村で武器調達。そこかその先でもう一休みして、んでもつてそこからノンストップだな)

迷宮区に一番近い村——トールバーナというらしいが——はここから数えて4つ先だ。2つの村を休息なしで駆け抜けることになるが、まあ仕方ない。もとよりここも何もなければスルーする予定だったのだ。そもそも、成行き上とはいえ俺がここまでレベリングしていることが異様だし。ポ○モンの四天王戦とか相手より平均レベル5か7くらい低い状態で初回クリアとかざらだったし。それはともかくとして、
「行くか」

気合を入れる目的も兼ねて立ち上がった——途端に、意識が遠のいていく感覚がした。まるで強制的に意識を落とされたような感覚。視界には“Disconnect ion”の文字。その文字を見ながら、ぼんやりと最初の茅場の言葉を思い出した。

『正確には、10分以上の外部電源からの切断、2時間以上のネットワーク回路切断、ナーヴギアのロック解除、または破壊や停止の試み。これらの行為がなされた場合に、諸君らの脳は破壊される』

てことは、最短で10分、最大で2時間が俺の命のリミット、つてわけか。ただの、どこにでもいる人間だったはずなんだがなあ……。大学、は……。単位も危なかったし、

留年するくらいなら中退させて言われてたし。そもそも、こんなすれすれだったら就職先なさそうだし。ま、でもこんなことになっちゃったら、どちらにせよお先真つ暗か。でもよ、俺だってまだやりたいこととか、たくさんあるんだよ。だったら、こんなところで――

「くたばっていられるか……!」

再び戻った視界は、無様に地面に臥した状態だった。どうやら接続先を有線ではなく無線にして、保険としてポケットWi-Fiの設定も入れておいたのが功を奏したのだろう。これだけ時間があれば、ある程度その手の知識に明るい親父の指示も仰げたはずだしな。しかし、――救急車の中とか病院の中ってWi-Fiは果たして大丈夫なのか? 確かにどっかで電波の影響を受けにくくなったって見た気はするけどさ。ま、そんなの今はどうでもいい。とにかく今は、

「行くか」

一歩でも先に進む。そんなでもってこの世界から抜ける。それだけだ。

2. 武器と情報

そこから二つ先の村に着いたのは意外にも二日後だった。メダイ——この前の村だが——についてからはすぐに宿屋で休んで、結果的に半日近く潰すことになってしまったので、実質一日半で攻略してしまったことになる。確かにあそこでリトルネペントをさんざん乱獲したから、レベルには事欠かないだろうが、こんなに早く攻略できるとは思ってもみなかった。

「ま、とにかく、件のクエを探すのでしょうか」

攻略本の情報が正しければ、クエの発生場所は村外れの小屋とのことだから、とりあえずそこを探すこととした。この手の基本は・・・

「聞き込み、しかないよなあ・・・」

もともと人と会話するのが得意ではない俺にとってはなかなか苦行だ。が、仕方あるまい。

憂鬱な気分を開始したクエ探しだったが、意外なほどあっさりが見つかった。というのも、村外れの小屋にいる老人の家はどこか”と聞くと、NPCは揃って同じ場所を

教えてくれたのだ。加えて、何人かのNPCは「偏屈爺」とか「変人」とか言っていたところを見ると、この村においては結構有名な設定なのだろうか。至極どうでもいいが。

「ま、とにかく、今は前に進むか」

教えられた場所へと向かう。一応方向感覚にはがあるほうだ。

その感覚を頼りに進むと、確かに小屋があつた。だが、これは小屋というより、

「……あばら家？」

結構割と本気でこれ本当に住んでいるのかよと突っ込みたくなるような、ぼろぼろのまさに「あばら家」だった。

「ま、ともかく入ってみるか」

伊達に情報収集していたわけではない。その情報から、大方クエストキーは想像がついている。

「おお、なんじゃ。若いのがわしみたいな老いぼれに」

(偏屈爺って雰囲気じゃないよな、物腰柔らかいし)「不躰ながら、少々お力を貸していただきたくて参りました。俺のために武器を作ってはくありませんか、おじいさん」

その言葉を発した瞬間に、老人の頭の上にクエスチョンマークが表示された。クエストが起動したのだ。

(うし、ここまでは想定どおり)

「しかし、わしに劍を作らせたいのならば、それ相応の素材、腕前を見せてもらうことになる。それでもかまわんかの、若いの」

「問題ありません。どのような素材が必要なのですか？」

「その前に問おう。おぬしはどのような武器が欲しいのじゃ？」

「曲刀です。ちようどこんな感じの」

そう言つて、腰に差しした自身の得物を前に掲げた。それを見て、老人はそのあごひげに手を添えた。

「そうさな……。村はずれの大猪、その又シの牙なんかがいかもしれんのう」

「分かりました。村はずれの大猪の牙、ですね？」

「そうじゃ。又シの体はほかのそれに比べて大きく、白い。見れば一発でわかるじやろう」

「分かりました。では、行つてきます」

「くれぐれも気を付けよ。彼の者の突進を食らえばひとたまりもないだろうからの。くれぐれも、体は大事にすることじゃ」

「ありがとうございます」

そう言いながら小屋を出る。白くてでかい大猪……。それつてどこの乙〇主だと思ひ

ながらも村を出発した。村はずれ、というのがどこを指すのかはちゃんと攻略本に概略が書かれていたので問題ない。そう思いながら、俺はまた歩き出した。

「そら、よー」

もう何頭目かの猪をポリゴンのかけらに変えながら歩く。平地であるというのはある意味楽なものだ。始まりの街あたりにいたフレンジーボアより体力も多ければ、どうやら攻撃力も高いようだが、突進しかしてこないのならばまったく脅威ではない。不安要素を挙げるのならば、こちらの武器の耐久値が心もなくなってきたことくらいか。だが、こちらはまだストックは残っている。そのストックも、今装備しているものを除けば一本しかないわけだが。

「こりゃ、新しい武器の耐久値によっては新調の必要があるかもなあ」

そんなことをつぶやいていると、また再びモンスターがポップする。そちらに目をやると、明らかに大型のモンスターがポップしていた。

「・・・まあ、確かに、こつちも白くてデカイ猪だけどさあ・・・」

その体毛は白いが、全体的に見ると茶色の体毛も見える猪。その体は先ほどまで戦っていた「ワイルドボア」よりさらに一回りか二回り大きい。そして、その鼻の両端には、反り返った、大きく、見るからに丈夫そうな一對の牙。・・・と、ここまで言えば

察しのいい人は気づくかもしれないが、早い話がド○ファンゴだ。

「ま、でも無駄に知能があるよりこの手の相手のほうが楽か……」

カーソルを飛ばすと、出てきた名前は The Giant Wild Boar
 “。そしてそのHPバーは二本。

「げ」

おそらく、あの雑魚猪を一定以上狩ると出現するタイプだろうが、どこからどう見てもソロで挑むタイプの相手ではない。が、ここまで行ったらもう後にも引けない。

「……仕方ねえ、か」

咄くと、得物を水平に構えて走る。相手もこちらに気付いたのだろう、何回かその場で足を動かすと、そのまま突進してきた。くるりとその場で躲すことで事なきことを得る、が。

「確か本家だと……!」

左回りで振り返ると、やはり大猪は大きな円を描いて、もう一度こっちに向かつてくるようだ。落ち着いて動きを見切り横に躲し、その後ろを追いかける。丁度牙をこちらに向けて振った瞬間に、俺は大きく跳躍して、そのまま得物を振り下ろした。丁度眉間———とっていいのかわからないが———に、ほぼ垂直に振り下ろされた剣はクリティカル判定だったようで、ジャイアントワイルドボアのHPが目に見えて減る。今

は何とか相手に跨っている状態なので、相手も振り落とそうと暴れまわる。が、そうは問屋が卸さないと剣をがちりと握り、足を閉じて踏ん張った。さらに力を込めて深くまで得物を突き立てると、今度はわざと振り落とされた。吹っ飛ばされた直後に受け身を取る。高校の授業で柔道をやっていったことがこんなことに役立つとは思ってもみなかった。即座にウインドウを開いて、アイテムストレージからもう一本剣を取り出す。出て来るか出てこないかくらい Тайミング で横に転んだ。立ち上がって剣を改めて握りなおすと、剣を正眼に置き、半身で構える。脳天に突き刺した剣はかなり深く突き立てたからだろう、痛そうに大猪ももぐが、まったく外れる気配はない。そして、動くたびに少しずつ向こうのHPは減っていった。もつとも、こちらとしてはそれが狙いだったわけなのだ。

突き立てた剣は、そのままではダメージはない。が、動かすことで、武器の攻撃力と相手の防御力に応じたダメージが入る仕組みになっているのだ。つまり、ああして敵がもぐくたびに、突き立てられた剣は中で動き、ダメージが入ることとなる。しかもクリティカルで。——我ながらよく咄嗟にここまで考えられたものである。

「ま、それでもそんなダメージは微々たるもんだから、攻撃は必須だけど」

そんなことをつぶやいていると、相手が突進を仕掛けてきた。それに対し、横に躲して腹を横一閃。突進している最中にもHPが削られているのを確認して、わずかながら

口元が緩む。追撃しようとその後ろを追う。追いついたところで攻撃を敷かせようと思つた矢先に、こちらに向かつてその牙を振りかざしてきた。もつとも、その程度は予想済みだったので簡単に回避してリーバーを命中させる。そのまま後ろを取ると、技後硬直ポストモーションが終わるや否や振り返る。と、HPバーがちようど一本消えた。このペースだと結構楽ができそうだと、思いながら改めて剣を構える。再び突進してくる相手に対し、今度は左手に持つた二本のピックを目に投げる。狙い違わず真つ直ぐに目に刺さつたそれに、相手は突進を中断して盛大に暴れた。ピックはすぐにとれたものの、暴れたことによりHPはさらに減つて危険域レッドゾーン一步手前で止まる。その間に一気に潜り込み、ほんの少し前に習得した曲刀二連撃ソードスキル「双牙斬」を繰り返す。空中で技後硬直を終えると、その着地した先はたまたま、本当にたまたまだつたのだが、眉間に突き刺さつた剣の上だった。そのまま重力に任せて剣を蹴り、両手で剣を握つたうえで、大上段から目いっぱい力の力で一気に振るいながら一回転して斬り、さらにゆつくりと一回転して着地。瞬間に、後ろで夥しいポリゴンが弾ける音がした。まさかと思いつつ振り返ると、そこに大猪の姿はなく、最後の最後までその命を削り尽くすのに尽力した自身のもう一つの得物とドロップアイテムが落ちていた。そして、その上空には少々大き目の“Congratulations”の文字。どうやら、こつちが想定していた以上に脳天の剣のダメージが大きかつたようだ。

「ええ・・・」

確かに最後は漫画か何かのようにきれいに決まったが、それ以外を考えれば、*“あつけない”*の一言に尽きる戦闘だった。もともと、こんな最初からハードモードのクエストを要求されても難しいが。

軽く血振りをして得物をしまう。アインクラッドで得物に血が付くということはありえないが、気分の問題だ。そして、その場に転がっているもう一つの得物を手に取って、プロパティを確認する。と、

「うっひゃー」

思わず変な声が出た。耐久値、残り5。つまり、あと一秒でも戦闘が長引いて居ようものなら、間違いなくこの剣は消えていたということである。というか、耐久値残り一桁なんてかえってレアな状態なのではなからうか。どちらにせよ、この剣はここでお別れだ。内心でお礼を言って、その地面に突き刺した。そして、もう一つのドロップアイテムを確認する。アイテム名は*“大猪の大牙”*か。ってちよつと待て、

「ストレージ格納不可!？」

思わず大きな声が出る。ストレージに入れられないってことは、手で持って行けつてか!?! つくづくこれソロ向けのクエストじゃねえ!?! そもそも、もう少し上に上がってから受けるべきクエだよなこれ!?!

とにかく、一対でドロップした大牙を両肩に担ぐ。ってこれ、両方とも結構ずつしり来るな。A G I のダウン補正はかからないと思うけど、気分的にきつい。雑魚猪が出てきたらひたすら逃げるしか手がねえな、などと考えながら、俺は爺さんの小屋へ向かった。

なんとかエンカウントを避けながら小屋にたどり着いた時には、もう辺りは夕暮れだった。視界が狭い猪だったから良かったものの、もしこれが馬みたいな視野の広い動物だったら詰んでいるだろうという場面がいくつかあった。どちらにせよ、日が暮ればエンカウントする可能性が高くなるので、間に合つて良かったと割と本気で思った。

「爺さん、持ってきましたよ、牙」

戸をノックしながら小屋の中に声をかける。すると、中から戸が開いて爺さんが出てきた。

「おお、これが」

目を見開いて牙を受け取った爺さんは、そのまま歩いて奥に入つて——行きかけて、こちらに声をかけた。

「二本とも剣にしてよいのか？」

「はい。よろしくお願いします」

「うむ、任された。さぞかし疲れたじやろう。その辺で寝て待つておれ、若いの」

そう言つて改めて奥に入つていった。確かにあの大猪相手はくたびれた。ゆっくり寝て待つとしよう。そう思つて、そこにあつた椅子に腰かけてそのまま眠つてしまつた。

「ほれ、起きろ、若いの」

爺さんから声をかけられる。目を開けて外に目を向けると、仄かに地上戦が明るくなつていた。ちよつと寝すぎたか。つて、そんなのはどうでもいい。

「劍はどこに?」

「これじゃ。お前さんの目は節穴か、馬鹿者」

．．．我ながら、目の前の人間が持つているのに気付かないとは。不覚。あれだな、帽子被りながら帽子何処だとかいうあの類いだな。

「ほれ、鞆に入れておいたでの。大切に使うことじゃ」

「はい、ありがとうございます」

プロパティを見るのは後だ。そのまま小屋を出ようとすると、爺さんが声をかけてきた。

「おお、そうじゃ。聞くところによると、この層を守る守護獣は、曲刀によく似た、細く

長い片刃の剣を使うと言う。気を付けることじゃ」

「分かりました。頭にいれておきます」

そういうと、その場を離れた。もうすでに、手に入れた剣、ポーンカトラスは既に装備されている。今の俺は、早くこの剣を振りたい思いで一杯だった。

後に、この忠告をもつとちゃんと覚えておくのだったと、本当に後悔するとも知らずに。

そうとも知らずに、俺はポーンカトラスで狩りをしていた。どうやらあの牙を削つて、その上から金属を覆わせてつくられたと思いきその剣は、なかなか以上の性能と耐久値を持っていた。耐久値の消耗が早いとか、そう言ったこともない。こうして戦っていても、今までの武器とは一線を画すことがよくわかる。これまで戦ってきたモンスタ―も速攻で倒すことができた。重さもあまりなく、あの苦労に似合う報酬だ。

そんなこんなで、次の村にはすぐにつくことができた。武器は先の村まで装備していたものに戻っていた。あれほどのものだと少々もつたいたい気もしたからだ。それに、あの大猪は腐つても中ボス扱いだったのだろう、経験値をたんまりと落としていった。こちらでもレベルが上がっているわけである。

村にたどり着いてから、例によって武器屋で新たな装備を物色し、予備用も含めて三

本購入。そして、ちよくちよく使っていたポーションを補充すると、アルゴの攻略本を買う。新たなそれを手に取って、歩きながらページをパラパラめくっていく。と、面白そうなクエストがあった。

（「逆襲の牝牛」。農場を手助けするだけの簡単なお仕事。途中に出現する牝牛の攻撃力はそこまで高いわけでもなく、レベリングにおすすめ。ただし、時間がかかるので注意。追記、クエスト報酬のクリームはなかなか美味。——へえ）

ただでさえも娯楽が制限されているのだ。食の娯楽くらいは復活させてもいいだろう。そう思いながら、そのクエストの受注に向かった。

クエスト内容を端的にまとめてしまうと、「牧場の牝牛——もつと言ってしまえば乳牛が、何らかの影響で暴走して人を襲うようになってしまった。こうなってしまうのは殺してしまっても構わないからどうかどうにかしてほしい」ということだった。ま、それなら仕方ないか。と、思いながら牧場内に入った俺を待ち構えていたのは、異常に目をぎらつかせた乳牛だった。

これだけ聞けばそこまで怖くはなさそうと考える人もいるだろう。だが想像してみてもほしい。まだら模様の、見たところほとんど普通の乳牛が、こちらを食らい殺さんとばかりに睨んできているのだ。しかも闘牛かと思うように息が荒い。それがざつと数えて・・・10頭から20頭ほどいる。奥には難を逃れたであろう乳牛が遠巻きにこち

らを見ている。シユールな恐怖である。

「あーもう、仕方ねえかな」

ウインドウを操作して、ボンカトラスを装備する。そして、音をはつきりと立てながら抜剣する。生憎と突進してくるだけの能無しは先ほどまで飽きるほど相手にしてきたのだ。しかもうち一頭は中ボスというおまけつきで。この程度は楽勝の部類だろう。

数歩歩いたところで一気にダツシユする。それに呼応するように向こうも走り出した。が、

「バーカ」

嘲笑いながら跳躍、正面から突進してきた牛の背に手を当てながらロンダートの要領で飛び越す。そのまま体制を整えて、後ろにいた乳牛の上に跨った。すかさず片手で短いながらも存在する角を掴む。——角切やってないのかこの牛は、とどうでもいいことを考えながら、がっちりと暫くつかんでいると、そのまま相手の群れへ突っ込んでいった。体勢を変えて、タイミングを見計らって跳躍。あの牛にはかわいそうだが、困らなくてももうしかあるまい。俺の予想した通り、あの牛はそのまま一頭に突っ込んでいき、そのままお互い動かなくなった——ところで、他の狂った乳牛たちがその二頭の体に食らいついた。この手の動物で共食いというのはあまり聞かない話ではあるも

の、これで狂った意味が分かった。おそらく、この共食いが原因なのだろう。だが、今はそんなことどうでもいい。

傍観に徹していると、やがて二頭はその体をポリゴン片の集合へと変えた。直後に、抜き放ちざまに真空破斬を放つ。足元を狙ったそれは、狙い違わずに数頭の脚を刈った。それに、数頭の牛が群がって食らいつくす。その光景を無機質に眺めながら、俺は冷静に考えていた。

「やっぱり、こいつら・・・」

大元の原因はともかくとして、おそらくこいつらは共食いしかない。ならば、一頭でもいいから動きを止めてしまえば、あとは相手が食らい殺す。ということは、ソードスキルは必要ない。こちらが必要なのは、相手の行動を誘導することだ。

「ま、それなら簡単だわな」

そう言いつつ剣を構えなおす。その顔はいくらか吹っ切れたように明るくなっていた。

それから数時間後。

「つたく、どんだけ出てくんだったこいつら・・・」

武器をポーンカトラスから店売りのブレードに切り替えて、ひたすら足を刈って牛に

食い殺させるということを繰り返していた俺は、次から次へと際限なく出現する敵に辟易としていた。ちらと後ろを見ると、どうやら牛舎のほうから次々と狂った乳牛が突進してきているようだ。

「なーんでこいつらはこんなに出て来るかなあ・・・」

時間がかかるとはこういうことかと割と本気でアルゴを恨んだ。おそらくあの情報屋はここまで掴んだ上で書いていた可能性がある。つくづく人が悪い。

「ま、でも楽に攻略できることは確かだよなあ」

なにせあくせくして殺す必要はない。足を刈りさえすれば、あとは相手のほうが勝手に殺してくれる。こちらが手を貸してもいいが、そうすると時間がかかる。普通のゲームならば、ある程度リスクを冒してでも相手に攻撃を仕掛ける。だが、死にかけるリスクと両天秤ならば、どちらを取るのかは火を見るよりも明らかだ。

「でも流石に飽きるな、こんだけ単調だと」

一歩間違えば死ぬという局面でも、俺は戦うことに一種の快楽を覚えたらしい。とことんゲーマーだなと我ながら思った。

「だけどあんまり時間をかけてもいられないよなあ・・・」

一刻でも早く攻略をする。それが、俺にとつて目下一番の目標であり、行動原理だ。

「しゃーない、か」

これだけの量を相手にすれば、耐久値は大きく減るだろう。下手すれば耐久値全損、などということがあり得るかもしれない。だが、こちらが今装備しているものを含めて、ブレードは三本ある。それだけあれば十分だ。

「んじや、行くか」

喝入れのためにも声を出して、片手で抜剣して、右に剣を向けて水平に構える。そのまま群れに向かいながら、俺は自分の頬が自然と緩むのを感じていた。

それから少しして。

「つたく、ようやく終わった」

あの狂った乳牛どもの始末を何とか終え、ポーシヨンを一気飲みしながら受注した場所である詰所に向かう。耐久値は何とか半分を少し切ったくらいで止まっていた。そもそも、最悪一本無くなるということを考えていたことを思えば、まったく余裕だった。詰所に入ると、夫婦の上のクエスチオンマークは消えていなかった。

「とりあえず、妙なことになった乳牛はどうにかしました。殺すしかなかったですけど・・・」

「それでいいわ。そう言ったのは私たちなのだから、あなたが気に病む必要はないわ。でも、別の問題が発生しちゃったの」

「別の問題、と言いますと?」

「牛が逃げちやつたんだ。どうやら、普通の牛が狂った牛に怯えちやつたみたいだね」

「これって、要するに捕まえてこいってイベントか。わあ面倒くさい。しかも牛つて結構逃げ足早いらしいじゃん。」

「どのあたりに逃げたのかとか、見当ってつきますか?」

「逃げた方向からすると、西の草原地帯かな。あそこは草も生えてるし」

「分かりました。最後まで付き合いますよ」

「本当かい!?!いや、それはなんとというか、ありがたいのだが・・・」

「問題ないですよ。乗り掛かった舟つてやつです。で、牛が逃げたのは西方の草原地帯、でしたね」

「ああ。僕たちもあとから追いかける」

「そう言うのと、詰所を飛び出した。こういうのはさっさと終わらせるに越したことはない。」

やがて、牛の群れを見つけた。のんびりとしているその光景だけ見れば平和そのものだ。が、その遠く先に、何頭か猪がいることを索敵スキルが教えた。

「なるほどね、防衛戦つてわけか」

「こうなったら仕方ない。ポーンカトラスを取り出して抜剣する。そのまま一気に

ダッシュすることはせずに、そこで静かに待った。

それから少しあと。俺のレベルとこれまで戦ってきた経験、そしてポーンカトラスの強さも相まって、さっさとぶっ倒した頃にNPCの夫婦が馬車に乗ってやってきた。

「ああ、やつぱりここにいた。つて、剣を抜いて、どうかしたの？」

「いや、猪が襲ってきたので。ぶっ倒しただけです」

「そっか、ありがとう。乗ってください、送っていきますよ」

「お願いします」

この手のやつは楽をしてさっさと移動するか、レベリングも兼ねて徒歩で移動するかというものだ。正直に言って楽をしたかった俺は、お言葉に甘えることとした。牛？しらん。後ろからついてくるんじゃない？

戻ってクエスト達成を確認すると、もうすでに夕方になってきていた。が、移動中は眠ることができたから、眠気などはほとんどない。もともと俺は比較的どこでも眠ることのできるクチだ。揺れる馬車の上など、俺にとってはゆりかご同然だ。気づくと、俺はNPCに起こされて、詰所の前にいた。

「さてと、仮眠もできましたし、とつとつ次の街に行くか」

た。次の街、トールバーナまでに夜明け前までに向かう。目下最大の目標はそれだけだっ

3. 第一層フロアボス攻略会議

それから一月ほどした頃、俺は迷宮区にこもっていた。到着して拠点確保と補給を終えた俺は、そのまま宿屋で休息した。いくら仮眠をとったといっても夜のうちに移動を済ませたのだ。疲れもたまっていた。目が覚めてからは迷宮区に潜って雑魚を倒しながらレベリングをした。以降は宿屋と迷宮区を往復する生活だ。

この迷宮区は全二十階の構成となっている。俺は今の最前線たる十九層で狩りをしてきた。周囲のルインコボルド・トルーパーを一通り倒したところで、剣を鞘に納めて一息入れる。そこまで来て、ここに来てからずっとあった違和感を考えた。

レベリングをあまりせずに、できるだけ途中の村でのタイムロスも少なくしながらここまで来た。この迷宮区に入ったのも、かなり早い段階だっただろうと自負している。が、最近になって迷宮区全体でのモンスターのポップ率の落ち込みがおかしい。というのも、少なすぎるのである。確かに、プレイヤーも増えた。迷宮区内で行き会って、軽い挨拶と情報交換を少しする頻度も多くなった。が、体の負担を覚悟でばらばらな時間帯に入っても、ほとんどポップ率が低い状態で安定しているというのは、俺も不審に思っていた。普通、この手のダンジョンは少し過剰なくらいにポップしているはずなの

だが、そこまで多くないというあたりが異常を物語っている。

考えていると、視線の先にまたもやトルーパーが湧いた。狩るために剣に手をかけながら歩く。と、先客がいたことに気付いて、素早く隠れる。その戦いを見て、こちらの背筋が寒くなった。

ここらに出て来るコボルド・トルーパーは手斧を持ったMobだ。この攻撃を三回連続で空振ると大きな隙ができる。その隙を狙って倒すのが、こいつの基本だ。これはアルゴの攻略本にも書いてある情報だ。そこまではわかる。が、回避が危うすぎる。おそらく、本人としては「躲すことができればそれでいい」という思考回路なのだろうが、傍から見ればあまりに危うすぎて見ていられない。ソロではバッドステータスを食らったらすぐ危険コースだ。ただでさえも命がかかったこのくそつたれなゲームで、そんな危険を冒す奴はなかなかない。少し余裕を持った回避をするか、無難に防ぐのが一般的だ。が、まるであいつは卓越した武人が紙一重で相手の技を見切る様な距離で攻撃を躲していたのだ。少なくとも、俺はあんな紙一重の戦いを繰り広げようとは到底思えなかった。

加えて、その後に繰り出された技のキレはすさまじいものだった。あまりの速度に、ソードスキルが発する燐光が尾を引いてかすかに見えた程度だった。その速度があるのなら、もう少し距離をとっても十分だろう。それに、最後の攻撃は、ソードスキルを

使わずとも普通に斬るなり突くなりすれば削りきれただけの量だった。技のキレ、見切りの正確さは凄まじく正確なのに、最後の攻撃はどこからどう見てもオーバークルだし、そもそも見切りがあそこまで正確ならもう少し余裕の持った回避をすればいい。とてもちぐはぐな戦い方だった。フーデットケープで顔は見えないが、その目はさぞかし鋭利なのだろうと、ぼんやりと思った。

「さっきのはオーバークルすぎるよ」

どうやら俺が観察しながら考察している間に、さらに誰かやってきていたらしい。そいつ——遠目なので確信は持てないが、おそらく少年——は、その細剣^{フェンサー}使いに向けて声をかけた。ゆつくりと近づくと、どうやら先ほどの言葉について少年が説明しているらしいということが分かった。ひとしきり説明を聞いたフェンサーは、平坦に言った。

「過剰で、何か、問題があるの?」

それは、この体格にしては異常に高い声だった。明らかに女性、ないしは少女だ。それと分かるほどに息も上がっているし、声も弱弱い。さすがにこのまま放つていけるほど、俺は冷徹ではなかった。足音をそれとなくはつきりと立てながら歩み寄ると、俺はなおも口を開こうとする少年を手で制した。

「俺も、さっきのあんたの戦いを見ていたよ。確かに、オーバークルだからってシステム

上問題はない。メリットも同等にないけどな。だけど、あんたのあの戦い方、もう少し改善しないと、帰る分のスタミナが持たないぜ？」

「それなら、問題はないわ。私、帰らないから」

「はあ。」

思わず間の抜けた声が出た。それは隣の少年も同様だったようで、驚きの声がシンク口する。

「いやいや、帰らないって、睡眠は？」

軽く動転して訳の分からない言葉を発する俺に向かって、少女は事もなげに言う。

「安全地帯に、モンスターは入ってこないもの。そこで睡眠はとれる」

「でも、ポーションの補給とか、装備の整備とか、そういうのは？」

「攻撃をもらわなければ、薬は要らない。剣は同じ奴を5本買ってきた」

その言葉に、俺は思わず隣の少年と顔を見合わせた。少年はまるでU M Aを見たような顔になっていた。俺の顔も似たり寄ったりだろう。確かにどんな攻撃も、あたらないければどうということはない。が、それを行うってどうということだよ。無茶苦茶にもほどがある。

「どれくらい続けてるんだ？」

恐る恐る少年が聞く。ゆっくりと壁伝いに立ち上がりながら、少女は弱弱しく答え

る。

「三日、か、四日くらい。もういいかしら？あつちにまた怪物がポップしてるから、行くわ」

片手にぶら下げているのはレイピアだ。片手剣の中では軽い部類に入る。だが、少女はそれをとても重たそうに持っていた。

「死ぬぞ、あんた」

老婆心などではなく、かなり本音で俺は忠告する。本人の勝手だとは言え、目の前で死なれたらさすがに気分が悪い。

「どうせ、みんな死ぬのよ。たった一ヶ月で、二千人が死んだわ。でもまだ最初のフロアすら突破できていない。土台クリアなんて無理なのよ。なら、どこでどんな風に死ぬ、と・・・早いか、遅いか・・・だけの・・・違い・・・」

そこまでいったところで、その細剣使いの体が揺らいで、そのまま崩れた。とっさに反応した俺が彼女の体を受け止める。少年が剣を拾って、少女の鞘に入れる。

「・・・どうするよ」

仰向けに受け止めたことにより、その顔は露になっていた。年は、見たところ高校生か、中学生かといったところか。幼いところがかすかに残っているが、十分に美人だ。黙っていれば、男の二人三人は簡単に引つ掛けるだろう。こんなたいけでかわいい女

の子があそこまで自分を追い詰めるとは、人は見かけによらない。

「とりあえず、迷宮区の外に連れて行くぞ。安全地帯までだと、また勝手に死に行きかねない」

「だな。見たところ、そつちのほうが背が高いみたいだから、運搬頼めるか？」

「OK。だが、ハラスメントコード使われたらどうする？」

「それについては大丈夫だ。寝袋がある」

「・・・なる。その手があったか」

確かに寝袋越しに運ぶなら大丈夫そうだ。問題は担ぐ俺は戦闘ができないことだが、そこは二人ペアの利点を生かすこととしよう。

「Mobとの戦闘は任せていいか？」

「もとよりそのつもりだ」

「そりゃ頼もしい」

会話をしながら、少女を寝袋に詰めて、背中に背負った。

迷宮区を出て少ししたところで、交代で休息をとることにした。お互い疲労していたが、俺を守るために警戒をしていた少年に最初を譲ることにした。少年が寝てから暫くしてから、後ろから微かなうめき声が聞こえた。それははつきりと聞いてから、後ろに

向けて声を出す。

「目が覚めたか。悪いな、こんな状態で」

そう言いつつ、少年の肩を軽く叩いて起こす。少女が自分でもぞもぞと出てきたことを確認してから、少年が寝袋をしまった。

「どうして、連れ出したの？」

「マップデータがもつたいなくてさ。どんな形とはいえ、三日四日ぶっ続けで潜ってたのなら、マップデータもかなり蓄積されてたはずだろ？」

「俺のほうはちよつと違うな。あのまま放置したら間違いない殺された。し、よしんば迷宮区の安全地帯内に放り込んで、目の前で死なれたらさすがに寝覚めが悪い。ま、ある種エゴだと考えてくれ」

「・・・余計なことを」

「ああ、あんたにとつてはそうだろうよ。だから言ったろ、エゴだつて」

「そう」

少女はウィンドウを表示させると、少し操作して羊皮紙をオブジェクト化して放り投げた。

「これでああなたの目的は達したはずでしょ。なら、私は行くわ」

「そつか。そこまで死にたいのなら、もう止めない」

もう俺は呆れて止める気にもならなかった。だが、ふらつきながらも去ろうとする背中を、隣の少年が呼び止めた。

「なああんた、そんなに攻略してるんだったら、会議に参加したらどうだ？」

「会議？」

「今日の夕方、街で第一層僕攻略会議が開かれるらしい」

「あー、あつたなそんなの。それぞれで帰るより集団で帰ったほうが安全だし、あんたは疲労困憊だ。街に帰るっていうんなら、俺は少々無理矢理でもついていかせてもらおう。無論、変なことをしたら即刻コードで牢獄送りも構わないっていう条件付きだな」

「好きにすれば」

そっけなく言つて少女は歩き出す。その方向を見て、軽いため息をついて俺は別の方向に数歩歩いてから「こっちだ」と言った。

「まったく、道わかんねえんなら言いやがれ。案内ぐらいするっての」

「そう。なら、私はあなたの後ろをついていくことにするわ」

「……どうやら、とことんまで、意図的に一緒にいるということにはしたくないらしい。」

「分かった、じゃあそのセンで行こう」

そう言うと、俺らは歩き出した。

その日の夕方、俺は攻略会議に出席していた。ざっと見渡したところ、全体の人数はざっくりで45人くらいか。そこまで多くもないが、少なくもない。どちらにせよ、俺は必要だからこうしているが、そうでないのなら、人海戦術など一番ナンセンスだと考える人種だ。

「はいーじや、5分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます！全体的にもう少し前・・・そこ、もう3歩こっちに来ようか！」

言われてしゅしゅ前に出る。おやつ代わりに、安い黒パンにクリームを塗って齧る。黒パン単体だとボソボソと粗くて、そこまでうまいとは言えないのだが、クリームを塗るだけであら不思議、ちよつとしたおやつになってしまうのだから驚きだ。ちなみに、このクリームは件の牝牛クエの報酬だったりする。確かに、これがこうなるのならやっておいて正解だったと割と本気で思った。

「今日は呼びかけに応じてくれてありがとう！知ってる人もいると思うけど、俺はディアベル、職業は気持ち的に騎士ナイトやってます！」

その瞬間に最前列近くの一団がどつと沸いた。何だこのイケメン死すべし。てかなんでこんなイケメンがコアゲーマーなんだよおいこら。まあ、そんなのは置いといて・・・なかなかのカリスマだな、あいつ。あれだな、生徒会とかやってたクチだろ

うな。常に人の先頭に立って引っ張っていくタイプ。これなら、初戦でいきなり空中分解なんていう無様をさらすことはなさそうだな。

「さて、こうしてみんなに集まってもらったのはもう言わずもなただけど、今日、俺のパーティが最上階へ続く階段を発見した。つまり、もうすぐこの層のボス部屋にたどり着くつてことだ。俺たちはこの層を攻略して、このゲームはいつか絶対攻略できるものであると示さなければいけない。それは、トッププレイヤーの義務だ！そうだろ、みんな！」

そう言った瞬間に、再び喝采が沸き起こる。なかなか言って言ったけど訂正。結構凄いわ、あいつ。しかしまあ、義務、ね……。大きく出たな。それがプレッシャーにならなければいいのだが。

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

その場に濁声が響く。決して大きな声量ではなかったが、それははつきりと全員の耳に届いた。

人の波をかき分けて前に出たのは、サブテン頭のプレイヤーだった。

「これだけは言わしてもらわんと、仲間ごっこはできへんな」

「その前に、意見をやるのなら、まず名乗ってもらえるかな」

「そいつはすまんかったな。わいはキバオウってもんや」

心なしか、謝罪の言葉にも棘がある。何か嫌な予感がした。こういう時の虫の知らせってやつは案外当たったりすることもあるからなあ……。

「ここに、5人か10人、詫びい入れなあかんやつがいるはずや!」

「それは、誰にだい?」

「決まつとるやろ。死んでいった二千人に、や! 奴らがなんもかんも独占したせいで、この一か月で二千人も死んだ! せやろが!」

うわあ面倒。内心のその本音をうまく包み隠しながら、俺は無表情を保った。微妙かに、隣に座る少年の気配が硬くなる。それにも気づかぬふりをした。やがて、ディアベルが厳しい表情で確認をする。

「キバオウさん、あなたの言う『奴ら』ってというのは、βテストーのことかな?」

「以外に誰がおるんや。」

奴らはこのクソゲーが始まったその日に、ダツシュで始まりの街から消えよつた。始まりの街にいる、九千人以上のビギナーたちを見捨てて、や! その上、ボロいクエストやらウマイ狩場やら独り占めして、ジブンらだけポンポン強なってその後もずーつと知らんぷりや。こん中にもおるはずやで、その手の、うまい汁だけ吸おうつちゅー小賢しいβ上りが! そいつらに稼いだアイテム、コル、すべてこの作戦のために吐き出して貰もらて、土下座して詫び入れたらんと、同じメンバーとして、命は預けられんし、預かれん

！」

その言葉を聞いた後に、俺は立ち上がった。あのリーダーなら、

「君も、何か意見があるのかな？」

やっぱりな。気づくと思った。ま、気付かなければそのまま消えるだけなんだけど。

「いや、こんな調子なら会議なんて出席する意味ないから、さっさと迷宮に潜ったほうがいいかなって思っただけだ」

あまりにもあけすけな物言いに、周囲が軽く引くのが気配で分かった。

「差支えなければ、そう考えた理由を教えてくださいませんか？」

「生存率も勝率も下げるような考えを、あたかも当たり前のように振りかざす馬鹿がいるのなら、このゲームの難易度なんざ勝手に跳ね上がるってもんだろ。だったら、ここらのMob狩り尽くしてレベルをガン上げた少数精鋭で殴りこんだほうがよっぽど効率的だ」

「な、なんやと！さてはジブン、β上りやな！アイテムやら吐き出したくないっちゅー欲の皮張ったクソ野郎が！」

「ちげーよ。それにな、俺がもしβ上りでも俺はアイテムもコルも差し出ささない。そうだな・・・あんなの言葉の中間をとって、7人ここにβ上りがあると仮定しようか。少しでも情報がある7人を含んだ45人前後と、まったく情報のない40人弱、おそらく

37、8人。どっちの勝率が高いかなんて、火を見るより明らかでもんだらうが」

暫く、俺はキバオウを真正面から睨む。やがて、その空気を裂いて拳手するプレイヤーがいた。それを見て、ディアベルは俺らに向けて声を発した。

「まあまあ、その辺にして。その君も、他に意見があるみたいだから、それを聞いてからでも遅くないんじゃないかな」

「・・・別にそこまで本気で言ったわけじゃなかったがな」

ぼそりとつぶやきながらゆっくりと腰を下ろす。それを見てから、ディアベルは拳手をしていたプレイヤーに目配せした。そのプレイヤーがすつと立ち上がる。・・・ついでかいなこのおっさん。スキンヘッドに褐色の肌がよく似合ってる。背丈は、190くらいあるって言われても領けるな、ありや。

「俺の名前はエギルだ。あんたは賠償をしろと言うが、金やアイテムならともかく、情報はあったと思うぞ」

そう言つて小さな本を取り出す。それは俺も見覚えがあった。

「この本、あんたにも見覚えがあるだろう。今までの村で無料配布されてたからな」

「・・・む、無料配布、だと?」

「・・・私も貰った」

「タダで?」

囁き返すと、こくりと頷く。え、俺あれ金出して買ったんだけど。気配から察するに、少年もそうだったのだろう。

「貰たで。それが何や」

「これは俺が次の村に着けば必ずあった。情報が早すぎると思わないか？つまり、この情報を提供したのは確実にβテスターってことだ。情報は確実にあったんだ。それより、今後の方針がこの会議で決まると、オレは思っていたんだがな」

「キバオウさん、あんたの言いたいことも分かる。けど、あの青年君も言った通り、テスターを排除して勝率が下がってしまったら元も子もない。ここは収めてくれないか？ほかの人も、どうしてもテスターと戦いたくないというのなら、抜けてもらってもいいよ。こういうのは、チームワークが大事だからね」

最後にディアベルがそう締めくくったことで、βテスター断罪の雰囲気はほぼ完全になくなった。：本当になんでこの手のイケメンがコアゲーマーなんだよおいコラ。こういうのは見た目残念でもある意味お約束だろうに。

そんなこんなで、大した議論はできなかつたが、士気を高める効果はあったらしい。というのは、それから迷宮区に暫く籠った時に分かったことだ。翌日の午後、俺はフロア最奥にある巨大な二枚扉——ボス部屋を見つけた。あとから、そろそろと複数の

音が聞こえる。振り返ると、ディアベルたちのパーティがそこにいた。

「悪いな、俺なんかが最初で」

「いや、別に謝る必要なんてないよ。で、どうする?」

「ボスのツラでも拝むか?それなら、こっちも一枚かませてもらいたいけど」

そう言うと、ディアベルは少し悩んだように思えた。が、すぐに明るい顔に戻った。

「そうだね。これだけ人数がいるんだ。深追いせずに早々に撤退する方針でいこう」

「了解。んじゃ、行くか」

そう言つて、俺は片方の扉に手をかける。もう片方の扉に手をかけたディアベルと合図をしてその扉を開く。中は、最初は暗かったがだんだん明るくなってきた。

「・・・ボスは」

「奥にいる」

心なしか少し怯え気味のディアベルに対して、俺は落ち着いている。奥のほうに鎮座するのは、犬顔の亜人種。ボスの名前は、*Illfang The Kobold Lord*。

「イルファンングザコボルドロード、ね。邪悪な牙持つ亜人の王、つてところか」

「冷静だな!」

ディアベルのパーティメンバーの誰か——おそらく俺と同じ曲刀使いのやつ——

「が言うが、それを俺はあつさりとスルーして、あらかじめ自分以外不可視モードで展開してあつたウインドウを操作してから、ポーンカトラスを音高く抜剣した。」

「さてと、・・・お手並み拝見と行きますか」

その口元が綻んでいたのは自分でも気が付いていたが、もはやこれは俺の性だとあきらめることにした。そのまま突っ込んでいく俺の前には取り巻きと思える小さい亜人の姿。名前は「Ru in Kobold Senti nel」、ルインコボルドセンチネル。俺も英語そこまで得意じゃないけど、没落した亜人の歩哨、つてとこかな。得物は長柄。あの独特の刃先は斧槍ハルバートかな。てことは、

「懐に飛び込んじまえばこっちのもんだな」

言いつつ一気に飛び出す。胸の前で剣先を左に向ける形でダッシュをかけ、敵の少し手前で左足を前に出して半身になる。左足で思いつきりブレーキをかけて静止し、体をねじって腕をさらに引く。ソードスキルが起動したことを確認すると、そこから突きを繰り出す。そのまま喉元の一点を剣が貫いた。

重装備ということを見ると、ウィークポイントはおそらく首筋のわずかな一点のみ。ということとは、曲刀のソードスキルで有効打を決められるソードスキルは、今のところは、今繰り出した「轟破ノ太刀」くらいだ。だが、俺はそれをブースト込みで食らわせられる自信があつた。というのも、ここの層の雑魚コボルドどもは、俺は尽く首を

飛ばすことで狩ってきたのだ。そうすることで何度も攻撃せずに済むし、何より効率が良いかった。一発で首筋に当たるといいうのは十二分な集中力を必要としたが、慣れてくれば結構簡単だった。

俺の予想に違わず、ボンカトラスをその首にねじ込まれたセンチネルは、そのHPのほとんどを消し飛ばした。突き刺した剣をそのまま引き抜いてもう一回剣で斬ると、瞬間にその体を爆散させる。と、直後に飛んできたボスの攻撃を紙一重で躲した。

「大丈夫かい!？」

「大丈夫だ! そろそろ撤退する!」

入り口からの声に叫び返すと、俺はそのまま背を向けて逃げて出した。後ろから来るボスの攻撃を避けながら、というのは神経を削る作業だったが、このくらいは問題ないレベルだった。

俺がボス部屋を脱出したと同時にディアベルのパーティメンバーが扉を閉じた。それを見て、剣を収めながら思わず言ってしまった。

「おたくらも少しは突っ込みめばよかったのに」

「君が突っ込み過ぎなんだよ。ところで、あの重装備のコボルド、どこかに弱点でもあるのかい? 一撃で屠ってしまったようだけど」

「いくら重装備っていつても、関節部とかは隙間を作っていたり、比較的柔い素材できて

ることが多いんだよ。そうじゃないと身動きが取れないからな。で、正面から真っ直ぐに狙えて、しかもなおかつその手の部位っていうと、あんまりない。と、ここまで考えたところで、首が弱点だろうとあたりを付けたらビンゴだった。狙うのならレイピアとか槍だろうな。もしくは、防御力を超える攻撃力で鎧の上から粉碎するとか」

「首筋をピンポイントで突く・・・難しそうだね」

「だな。雑魚は思い切ってランサーやフェンサーとあの得物のパリイ担当のやつで組ませて殲滅したほうが効率はよくなるかもしれない」

そこまで言ったところで、ディアベルは少し考えた。大方、あの場にいた人間、自分のパーティ、それらから役割分担をある程度今のうちにシミュレーションしているのだろうか。

「・・・分かった。忌憚のない意見をありがとう。名前は？」

「ロータスだ。またよろしくな、ディアベル」

そう言っただけでその場をすたすたと去った。もともと多人数で長いこといるのは苦痛に感じる人種なのだ。それに、さっきの攻撃力から勘案すると、今の状態だと少し不安が残る。そのための準備も必要だ。俺は俺で考える必要がある。そう思いながら、俺はその日の迷宮区を後にした。

準備が終わって、昨日の広場に行くと、ある程度人がもう集まっていた。俺が来たことを確認すると、ディアベルは声を張った。

「さて、みんな知っているとと思うけど、今日の午後、ボス部屋を発見した。そして、街に戻った時に、例の攻略本の最新版が出版された。この攻略本によると、ボスの名前はイルファングザコボルドロード。取り巻きにルインコボルドセンチネルがいる。この情報はβテストのものだという明記されているけど、最初に行った軽い偵察の情報と、この情報は一致するところがあることも、また事実だ」

その言葉に全体がざわつく。ボス部屋にたどり着くだけならまだしも、よもや軽くはいえ偵察を行うというのはあまり考えていなかったようだ。

「みんな、今はこの情報に感謝しよう。なにせ、一番死亡率が高いのが偵察戦だからね。それを省けるっていうのは滅茶苦茶ありがたい」

その言葉に、ほんのわずかに残っていた反βテスターという雰囲気もかなり薄まった。それはいいことだったのだが。

「じゃあ、パーティーを組んでくれ。ボスにはレイドで挑むから、できれば7人くらいのパーティーでお願い」

・・・なんと。歴代ゲームは殆どソロプレイ、学校だろうが部活だろうが上辺だけの付き合いしかしない万年ボッチにパーティーを組めと。どうするよおい。とかと考えな

がら周りを見ると、見覚えのある人影が。

(ん、あのフリーデットケープ……)

それに、その近くにはあの少年。おそらく、いやほぼ間違いないな。

そのまま近づいて行くと、やはり間違いないあの時の剣士とフェンサーだった。

「よ。おたくら、もしやペア？」

声をかけると、相手もこっちの正体に気付いたらしく、幾分か顔つきが柔らかくなった。

「ああ。人数少ないから、よかつたらパーティに入ってくれると助かるんだが……」

「むしろこっちからお願いたいくらいだよ」

そう言いつつウィンドウを操作。目だけを動かして、左上にネームが表示されたことを確認すると、改めて視線を前に戻した。

「ロータスだ。改めてよろしく」

「キリトだ。こちらこそよろしく」

そんな会話をしていると、遠くから息せき切って走ってきた小さな人影があることに気付いた。しかも、どこことなく見覚えがある。その人影は、息を整えずにこちらに来ると、恐る恐るといった様子で声をかけてきた。

「あの、攻略会議って、終わっちゃいました？」

「大丈夫、今レイド組むとこだから。ギリギリセーフってとこだぞ、レイン」

「えっ・・・!? って、あなたは、ロータスさん、でしたっけ?」

「敬語はなしでいいって」

笑いながら言うのと、レインの顔も柔らかくなった。

「知り合いか?」

「まあね。この子はレイン。前、アニブレの件でちよつと、ね」

キリトの問いかけに、軽くはぐらかしながら答える。まあ、嘘はついていないのだが。

「そつちのレベルって今いくつなんだ?」

「11、もうすぐ12」

「そつか。なあキリト、こいつも加えていいか?」

「そうだな。人手は多いに越したことはないし」

短い確認を終えると、レインに向かって言う。

「なあレイン、ボス攻略のパーティ、俺らに入ってくれないか? 丁度人手が足りなくてな」

「むしろこつちからお願ひしたいよ。ほかのところには、なんとなく入り辛いし」

「一応顔見知りだしな、俺ら」

そう言うのと、お互いウィンドウを操作する。左上に改めてrainの名前が加わった

ことを確認して、レインが自己紹介を終える。が、終始フェンサーが無言だったのは、個人的にはどこか不安だった。——また張りつめすぎていなければいいのだが。一段落ついたところで、ディアベルがこちらに来た。

「君たちはF隊になる。センチネルの相手をお願いしたいんだけど、いいかな」

「ああ、分かった。雑魚の相手は任せておいてくれ」

「そうだね。一人で雑魚を屠った人もいるしね」

そう言いつつこちらを見やるディアベル。それに周囲が疑問の雰囲気醸す。軽くため息を吐いて、俺はそれに答えた。

「あんたらに迷惑をかけるような真似はしないから安心しろ」

「はは、頼もしいね」

一つ笑みを漏らすと、ディアベルは自分たちのパーティの下へと戻っていく。

「なあ、さっきの話、どういうことだ？」

「ああ、そのな……」

あーもう、恨むぜディアベル。この空気どうしてくれんだよ。収めるけど。

「ここだけの話、ボス部屋最初に見つけたの、俺なんだわ」

「え、てことは、軽い偵察戦をやったのって」

「俺と、ワンテンポ遅れてきたディアベルのパーティメンバーの一部。で、その時に雑魚

コボルドを一発で屠った、ってわけ」

「じゃあ、どこが弱点なのかもわかるんだ？」

「ああ。喉元が弱点だ。細かい作戦は道中で軽くやるとして、大まかな作戦会議と行くか」

その言葉から、あつさりとその空気は収まった。おおよかったよかった。

いったん解散になってから、俺は軽くアイテム整理をしていた。ボスが一体どんなアイテムを落とすのかはわからない。それに、いざというときにポジションがない、というの間抜けな話だ。

「ヨ。やっぱり見込んだ通り、結構骨のある奴だな」

声をかけられて顔を上げると、そこには鼠色のフードを被り、頬に髭のペイントをしたプレイヤーがいた。

「久しぶりだな、アルゴ。そっちも元気そうなことで」

「まあ。オレっちとしても、あの攻略本で一人でも死者が減るのなら本望ってモンだよ」

「あつそ」

確認を終えて、装備をオブジェクト化する。腰に確かな重みが加わったことを確認す

ると、感覚の確認のために一回静かに抜剣する。と、アルゴの目つきが変わった。

「なあ、それって、もしかしなくてもポーンカトラスか？」

「ああ、そうだが」

冷静に応えると、アルゴの目に少くない驚愕の色が浮かんだ。

「あれって今の状態じゃ相当な難易度に相当するはずだけど、クリアしたってことか？」

「そうじゃなきゃいま手元にないだろう」

口調もおそらく素の口調であろうそれになっている。どうやらよっほどか驚かせたらしい。

「で、相当な難易度、ってどのくらいなんだ？」

「レベルにして2、3層上だナ。βの時もそのくらいでクリアされたし」

「ふうん・・・」

てことは、ここから数層くらいはこいつで行ける、ってことか。ラッキーだったな。

「どうやってクリアしたんだ？」

「脳天に剣ぶっ刺して、あとは斬りまくってたら終わった」

我ながらなんとぎっくりとした説明。だが、それだけでこの情報屋には伝わったらしい。あんぐりと口を広げた。

「キー坊もなかなかだけど、こつちもこつちで規格外だナ・・・」

「そうか？でもま、結構運が絡んだところがあつたから、攻略本に載せるのはお薦めしな
いぜ」

そう言いつつ立ち上がる。もうそろそろ時間だ。

「そろそろ時間だ。行くぜ」

「ああ。ボス戦頑張れヨ」

その言葉に軽く手を挙げて返答としながら、俺は待ち合わせ場所に向かった。

4. 第一層フロアボス戦

迷宮区の道すがら、アスナがほつりともらした。

「ねえ、あなたたちは他の、エムエムオーゲーム？つてやったことあるの？」

あー、やつぱりこいつニュービーか。てかそもそもゲームとは今まで縁がなかった人種か。

「俺はこれが二作目かな。でも、前やってたやつは総プレイ時間50時間にも満たないだろうし、ま、ほぼ実質これが初めて」

「私はこれが初めて」

「俺は何作かやったことあるな」

上から俺、レイン、キリト。あの時の解説と言い、やつぱりこいつ根っからのゲーマーだな。

「そう。じゃあ、他のゲームだと、こういうときつて会話をしたりするの？」

「そんなことはないかな。キーボードやマウスは操作のほうに使うてるから、基本的にチャットはしない、というより物理的にできない。ボイスチャットがあるのなら話は別だけど」

「そう。これからはどうなるのかしら？」

「さあな。でも案外普通になっちまうんじゃないかねえか？」

俺の言葉に、フェンサーが反応する。首の後ろで腕を組みながら、さりげなくネームを確認する。えっと、Asuna、か。アスナ、でいいだろうな。・・・まさかと思うが本名じゃなからうな。

「どういふことかしら」

「外食に行くとか、ダンジョンに潜るとか。そう言った感覚に近いものになるんだろうな、ってこと。早い話が慣れるんだよ。攻略するってことに」

「私はそうは思わないけど」

「少なくとも俺はほぼ確信してるぜ？このペースだ、攻略に年単位の時間がかかるのは確実だろうよ。だったら、慣れないほうが不自然ってもんだ」

「そうだな。ある種日常の一部になってるかもな」

キリトがそう締めくくると、微かな笑い声が聞こえた。体勢を変えずにそちらを見ると、微かにフリーデットケープが揺れている。

「おかしなことを言うのね。こんな非日常が日常になるなんて」

「そうかな」

少しだけでも柔らかくなった雰囲気の中で、俺は切り出した。

「さて、改めて確認するぞ。基本的に俺とレイン、そっちふたりに行動。片手剣二人が相手の斧ハルクト槍をカチあげて、残りの二人が一気に特攻。HPを削るなり飛ばす。ダメージを受けた場合はアタッカー二人を優先してPOTローテ。これで大丈夫だな」

「ああ、それで大丈夫だ」

「ええ」

「うん。でも、カチあげるってよくわからないんだけど・・・」

「なあに簡単だ。振り下ろされた得物に対して剣を振り上げてぶち当てるってことだ」

「それ、ちよつと不安」

「大丈夫、簡単だ・・・多分」

「ちよつと待つてなんか聞こえた」

「そんなどこかコミカルな雰囲気にな水を注すように、外から声をかけてきた人間がいた。」

「おい」

その声のほうを見ると、そこにはどうやってたらそんな髪形になるんだろうというような男・・・キバオウがいた。

「ええか、ジブンは大人し雑魚コボルドの相手しとれよ。ボスはこつちが相手するか
らな」

なんか棘があるってレベルじゃねえなこりゃ。明らかに悪意しかねえぞ、これ。

「分かってる。それが俺たちの役目だからな」

キリトのその返答に一つ鼻を鳴らすと、そのままキバオウは自分たちの隊に帰っていった。

「・・・何あれ」

「さあ?」

当の本人もこの調子だ。ただ単に因縁つけただけならいいんだが・・・一応気に留めておくか。

それに、心なしかキリトの顔が少し暗い気がする。

「ところでキリト、なんかあったのか?少し表情が暗いようだが」

「・・・まあ、ロータスになら教えていいか。俺の剣を買い取りたいって交渉を何度か持ちかけられててな」

「お値段は?」

「約40k。相場から考えれば、それだけ出せば同じくらいのパフォーマンスにはなるはず、なんだけど・・・」

40kっていうと、4万か。確かにそれは気になるわな。と、そんなことを考えていると、横からモンスターが突撃してきた。無造作に横一闪。それだけで、そのモン

ターはポリゴンとなった。

「あれこれ考えるのは後だ。今は目の前のことに集中しろ」

「・・・ああ」

その顔が少し明るくなっていたことに、俺は一つ笑んだ。

特に何事もなくボス部屋前にたどり着いた俺たちに、ディアベルはこつちを向いて声を張った。

「ここまで来たら言うことは一つだ。勝とうぜー」

それに応じて鬨の声上がる。ノリいいなお前ら、と例によって冷めたことを思いながら、俺は扉を開かれる様を無機質に見ていた。

扉が開き切り、レイド全体が中に入る。光量が増え、ボスが大きく跳躍して目の前に来てから一つ大きく吠えた。同時に取り巻きが三匹ポップする。それを確認して、ディアベルはその剣を抜剣しながら宣言した。

「突撃ー」

その声を待っていたとばかりに、レイド全体が突撃した。雑魚の一头に向けてレインが走る。振り下ろされる相手の得物に、一発でレインの剣があたり、相手の斧槍が跳ね

上がる。さらなるレインの追撃で完全に相手の反撃が封じられたところで、俺が前に出る。打ち合わせ通り、横に避けたレインの横から狙いすました一撃を首元にお見舞いする。それにより相手が爆散したことを確認して、俺は二体目に相対した。

「スイッチ！ ゆっくりでいいからな、レイン。貫わないことに重点を置いて、落ち着いていけ」

「それ、君の言えること？ いつでも大丈夫だよ」

返答を聞かぬや否や、俺は相手に真空破斬を当てる。硬直の間にレインが飛び込み、その喉元にスラントをぶち当てた。HPが一気に削れる。その時に、背後から会話が聞こえた。

「当てが外れたやろ。ええ気味や」

「なんだって？」

これは、キリトとキバオウ？ なんか気になるな。

「とぼけても無駄やで。ちゃんとして聞かされとんのか。お前がどんなあくどい方法でL Aを乱獲してたかってな！」

「ロータス！ スイッチ行くよ！」

背後から絶句する気配。直後に飛んだレインの声で現実を引き戻される。だが、俺も少なからず驚いていた。あの時の言葉から察するに、キバオウも本サービスから始めた

ニュービーのはず。ならばなぜ。そんな疑問を覚えながら、俺はレインとスイツチした。淀みない動作で轟破ノ太刀を喉に突き立てる。その動きの間にも考えた。そもそもが、なぜキバオウが、キリトがβテストということを知っていたのか。これは簡単に予想がつく。情報を買ったか、何らかの目的で提供されたか。買ったところでそうしたメリットはない。だが、提供されたとあれば話は別だ。提供した側にも何らかの目的があると考えるのが自然だ。そう考えながら剣を引き抜いて、左手で刀剣を投げつける。それもクリティカルで決まり、相手が爆散する。手の甲を前に向けて投げる。バツクシュート”はその当てづらさもあつて硬直が短い。すぐに次のセンチネルに向かうと思つたところで、ボス攻撃隊から「ラスト一本！」の声がある。同時に、最後のセンチネルが三体ポップした。

ボスが直後に武器を放り投げる。そして、腰に差した剣に手をかける。そこで、俺はどこか引つかかった。

(ん、どうしてだ?)

「ロータス！」

考えることで沈みかけた思考がレインの声で浮上する。相手の斧槍を紙一重のところで躲して、その首にポーンカトラスを突き立てる。そのまま引き抜きながら蹴飛ばす。瞬間に、ディアベルがボスの前に入る。その時にちらりと此方を見た気がした。そ

のままソードスキルを発動する構えに入る。抜き放った剣を見て、俺の脳裏に一つの言葉がよぎった。

『聞くところによると、この層の守護獣は、曲刀によく似た、細く長い片刃の剣を使うと言う』

そこで、気付いた。曲刀によく似たということは、曲刀ではないということと同義だということとは簡単に想像がつく。そして、あの攻略本に書いてあったのは、タルワール湾刀、つまりは曲刀。これらが示す情報はただ一つ。

「悪いレイン、ちよつと任せた!」

制止するレインの声を振り切つて走る。その間に、ボスはその体をギリギリまでねじっていた。間に合えと心の中で願いながら足に力を籠める。

「駄目だ、全力で後ろに飛べー!」

後ろからキリトの声が聞こえる。その声に、俺の足は一瞬だが止まった。それが功を奏して、ボスの全範囲攻撃をもらうことはなかった。が、曲刀という先入観から囲んでいたボス攻撃隊のほぼ全員の頭上に黄色のエフェクト。お約束ともいえるバッドステータスの一つである、気絶やスタンの類だろう。そして、ボスはそのうちの一人、先陣を切つてボスに突っ込んでいった青髪の騎士に狙いを定めて、その剣を輝かせた。地面すれすれから繰り出される下段のソードスキル。それに、俺は無意識のうちに強く地

面を蹴って大きく一步を踏み出してた。あえて体を一回転させ右足で踏み込み一瞬だけ溜めを作る。システムが起動すると、そこから一気にブーストをかけて、曲刀系ソードスキル「ドライブツイスター」を繰り出した。全力かつ最速で繰り出されたそれは、ギリギリながらもボスの切っ先の方向を変え、ディアベルのすぐ横を通り過ぎさせた。こつちが硬直で動けない中、短い硬直を終えた後に出された振り下ろしと突きは、カイトシールドできれいにパリイされていた。周りを見ると、陣形もリセットされている。

「まったく無茶をするね、君は」

「自分の利己心目当てにわざわざわざわざ戦力削ろうとする人間に言われたかないね」

普通の声量のディアベルに対して、彼にしか聞こえない声量で答える。その瞬間にディアベルの表情が暗くなった。その後、ボスが距離を取って左腰に剣を持っていく。それを見て、俺は剣を持った右手を八相より少し高いくらいの位置に持っていき、双牙斬の初段で相殺する。それにお互いがノックバックをする。その時に、ディアベルにしか聞こえない程度の声量で言った。

「話はあとで聞く。おそらくはあんたがβテスターだつてことや、キバオウになにを吹き込んだのかとか、その辺も含めて、な。だが今はボスを討伐することが先決だ。今は戸惑ってる場合じゃない。

「ディアベル、刀スキルの詳細はわかるか？」

「刀？……ちらっと聞いたことはあるけど、実際に相対したことはないから、わからない」

「了解。なら、慎重にいきましょう」

と、言っているそばから、キンという金属音。ボスのほうを向くと、キリトが敵の攻撃をパリイしていた。それを見て、元の音量に戻して言う。

「おそらく範囲攻撃は囲まなきゃ来ない。全範囲の、しかもあの感じだと高確率スタン攻撃を乱射されたら勝負にならないからな。とにかく、あいつらが時間を稼いでいる間にPOTと攻撃の見極めを頼む」

「あんたはどうするんだよ」

「俺も傷は浅いし、もともと俺の隊はあつちだからな。加勢してくる」

そう言ってキリトたちの下に向かおうと数歩踏み出したところで、並走してくる人間がいた。

「センチネルは全滅させたよ。まったくもう、ヒヤヒヤさせないでよ」

「悪い。んじやま、あいつらの援護に回るぞ」

「了解！」

そう言って、俺たちはボス攻略を再開した。

キリトの見事なパリイにより、ダメージは順調に入っていった。が、十何回目でそれも途切れた。

「しまっ……」

上から来るところが、ぐつと起動を変えて下から襲い来る。咄嗟にソードスキルを停止させるが、それにより硬直をくらう。

キリトが吹っ飛ばされる。それを受けてアスナも吹っ飛ばされた。咄嗟に次の攻撃をパリイするために二人の前に出る。地面すれすれから切り上げるあれを食らったら、おそらくあの三連撃でお陀仏だ。ミスは許されない。虎牙破斬で反らす準備をしつつ、集中力を研ぎ澄ませる。すると、

「ぬおおりやあー!」

方向と見まがうばかりの声と共に、別のソードスキルがボスに炸裂する。確かこれは、両手斧のソードスキル「ワールウインド」。

「あんたらは暫く下がってろ。アタッカーにタンクやられちや立場ないからな」

「悪い、任せた」

「サンキュ、助かる」

こちらに振り返りながら、その技を放った巨漢は言った。確か、エギルだったか。キリトの言葉をキーにして、俺たちは一旦下がった。

下がってからも、キリトはその経験を生かして相手の攻撃を指示し続けた。その指示はどれも的確で、防御するタンクもその指示に従って完璧な防御を繰り返した。それに、あの限界戦闘が効果を発揮したのか、この場に至ってもアスナの技のキレは落ちなかった。やがて、邪魔そうにアスナがフーデットケープを掴んで放り投げる。露わになったその美貌に、男どもが見とれる気配がした。俺は一度見ているのでそんなことはない。

「おら、ぼさつとすんな！」

「次、右下からの切り上げ！」

俺の喝とキリトの指示で隊が元の動きを取り戻す。このままいけばいける。そう思った矢先に、タンク隊のうちの一人が武器を落としてしまった。とっさに拾いにかかると、だが、場所が悪かった。

「早く離脱しろ！」

その場所が背後だと悟ったキリトがすぐに大声を出す。が、その声むなしく、ボスがそれを囲まれた状態と認識して、また例の全方向ソードスキルを繰り返し出した。ボスが垂直に飛ぶ。その瞬間に、キリトが飛び出した。

「届けえー！ー！」

その気合がシステムにも伝わったのか、キリトのソニックリープはソードスキルを発

動する前のボスに命中。ボスが仰向けに落ちると、その手足をばたつかせた。それを見て、キリトがもう一つ指示を飛ばす。

「全員、フルアタック全力攻撃！ 囲んでいい！」

その声に、今までの鬱憤を晴らすように全員が囲んで総攻撃を仕掛ける。だが、その甲斐もあと一歩及ばず、ギリギリHPが残るくらいになってしまった。

「レイン、ロータス、アスナ！ 最後の攻撃、一緒に頼む！」

「はい！」 「おうよ！」 「了解！」

最後のキリトの指示に俺たちが追従する。

「せい……やあ！」

「い……やあつ！」

まずはアスナとレインがそれぞれニアと瞬迅剣で牽制する。

「うっ……るあ！」

「はあつ！」

それに続いて俺とキリトが、それぞれ疾風ノ太刀と縦斬を浴びせる。が、HPは本当にドットだけ残った。それにお互い獰猛な笑みを漏らすと、キリトの刃が上に返る。

「う……おおおおおおお!!」

片手用直剣二連撃ソードスキル、バーチカル・アーク。その最後の一撃が、ボスのH

Pを刈り取った。ワンテンポ遅れて、ボスがその巨大な体を爆散させた。一瞬の静寂。その後、部屋は割れんばかりの歓声に包まれた。

5. 戦いの後

一つ息をついて、剣をゆっくりと鞘に納めた。ゆっくりと目を閉じて顔を上に向けた。

「ありがたいな、三人とも」

そんなことをしていると、キリトがこつちに来て話しかけてきた。それに俺も微笑みを返す。

「いいってことよ」

「パーティーでしょ、私たち」

「そうだよ、キリト君」

「呼び捨てでもいいよ、レイン」

「あ、そう？でもなんか、キリトって呼ぶよりキリト君のほうが呼びやすいからそつちで呼ぶね」

「ええ・・・」

それに俺が笑ったところで、近寄ってくるもう一つの影。そちらを向くと、褐色の肌をした巨漢がこつちに来た。エギルだ。

「Congratulation. 見事だよ、少年。間違いなく今回のMVPだ」
「言いすぎだよ」

皆、ボス戦が終わったことで、一息つけるといふこともあつて、リラックスしていた。それぞれが勝利の余韻をかみしめていた。

だが、お祝いムードは長くは続かなかつた。

「なんでだよ!」

一気に視線が集まる。その視線を受けた張本人は、怯むことなど知らないといった風情でさらに言葉が続けた。

「なんでディアベルさんを見殺しにしようとしたんだ!」

「見殺し?」

「だってそうだろう! あんたはボスの使ってくる技を知つてた! あの調子なら、おそらくそのすべてを! そのうえで、あんたはこつちのことなんて知らない風にするまつた! これを見殺しにしようとしたと言わずしてなんとというんだ!」

それに、場の雰囲気騒然となつた。ちらちらとこつちを、より正確にはキリトを見る視線も一気に増えた。

(嫌な雰囲気だな)

その状況下で、考えうる最悪の状況を頭の中でシミュレートする。その方向に行かな

いことを祈りながら、その線が濃厚でありそうだというのも分かってしまった。

「きつとこいつ、βテスターだったんだ！だから、ボスのスキルとその軌道をすべて知ってたんだ！」

ボス攻略中の言葉は、おそらく俺とディアベルしか覚えていないし、覚えていたとしても、全体から考えればごく一部に過ぎない。そして、この言葉が憶測を呼んだ。そこからさらに、憶測が憶測を呼ぶ。そして、俺の想定していた最悪の一つに踏み込む眩きを、俺ははつきりと聞いた。

「待てよ。あの攻略本、βテスターが書いたものなんじゃないか？」

「てことは、βテスターが俺たちをはめるために？」

「それが正しいのなら、あの情報屋とこいつがグルってことか？」

止まらない。最悪だ。このままでは反βテスターの風潮は免れられない。

「ふざけた……」「あなたたち……」「お前ら……」

俺とアスナとエギルが揃って反論しようとする。誰が先に言うかアイコンタクトを取った瞬間に、後ろから嘲るような笑い声が聞こえた。

「キリト……?」

俺が疑問符を出しながら振り返ると、嗤った当の本人は、とてつもなくふてぶてしい表情で言い放った。

「元βテスター……？俺をあいつらと一緒にするな。SAOのCBT倍率は凄まじいものだった。その中にコアゲーマーが果たしてどれくらいいたと思う？平均の状態を比べれば、今のあんたたちのほうがよっぽどかマシだ」

「な、なんやと!？」

その言葉にキバオウが噛みつく。だが、俺はキリトの言葉の本質が見えた。だから、これがおそらくキリトの想定通りだということも分かってしまった。

ちらりとディアベルを見やる。彼はうつつむいて唇を噛みしめていた。俺と同じで、この言葉の意図が読めたのだろう。そして、今自分がとるべき行動も。

「俺は常に攻略の最前線にいた。LAも数えきれないくらい取った。ボスのスキルを知っていたのは、βテストの時に、上層で刀を使うMobと散々やり合ったからだ。ほかにもいろいろ知ってるぜ。情報屋なんか、それこそアルゴが知らないような情報もな」

「な……」

俺はレイドに背を向けた。おそらく、今の俺の表情は凄まじいことになっているだろう。

「そ、そんなのはやチートや!反則や!」

「経験の有効活用と言ってほしいな」

最後の言葉が火をつけた。キリトへの罵倒が容赦なく浴びせられる。やがてその響きは混ざり合い、「ビーター」という響きが生まれた。

「『ビーター』……、いい響きだな、それ」

そういうと、キリトはウインドウを操作する。すると、キリトの装備はひざ丈のロングコートになった。おそらくボスのLADドロップだろう。

「そうだ。俺はビーターだ。ほかのβテスターなんかと一緒にしないでくれ。」

これから俺は二層の転移門を有効化しアクトイベントに行く。ついてきてもいいが、その時は初見のMobに殺されるくらいの覚悟は背負って来い」

そう言つて、キリトは背を向けて、次の層への螺旋階段を昇っていった。その姿が完全に見えなくなる前に、アスナが追いかけてようとする。それを、エギルとキバオウが呼び止めた。

「なあ」「ちよつといいか」

それに対して、エギルが一步引く形で呼び止めた。

「あいつに伝えてくれへんか。『今回は助けてもろたけど、ジブンのやり方は認められん。わいはわいで、クリアを目指す』と」

「俺からも伝言頼む。『次のボス戦もよろしくな』って伝えといてくれ」

「分かった。確かに伝えるわ」

そういうと、アスナはその敏捷度で螺旋階段を駆け上っていった。その姿が半分以上見えなくなったところで、俺は向き直りながら言った。

「ディアベル。覚えてるよな」

「・・・ああ」

その言葉に、ディアベルは沈痛な表情のまま頷いた。

「さて、と。言うまでもないが、逃げるなよ？逃げたら、物理的に叩きのめす」

「逃げないよ。というより、逃げられないよ」

「そうか。ならいい。」

お互い疲れてるだろうから、単刀直入に聞くぞ。あんたもβテストだな」

俺のその確認の問いかけに、周りがざわめく。だが、俺はディアベルしか見ていなかった。

「沈黙は肯定と受け取るぞ」

「・・・いったいどこでそう思ったのかな」

「最初に疑問に思ったのは、ここに来るまでにキバオウが俺らに対して無駄なことを言ってきたことだ。それも刺々しく、な。俺らとしては、なんでキバオウがそんなに嘯みついてくるのか、その理由の説明がつかなかった。それに、キリトがβテスト時代、L Aポーナスを取りまくってたってことを知ってた、ということも不自然だ。キバオウに

とつて、そんな情報を知つても特にメリットはないからな。だけど、必要のために提供されたのなら話は別だ。例えば、キリトのメインアームを買い取るため、とかな。

それに、ラスト一本になって突っ込んだ時、あんたこつちを見て得意げに笑つたら？
そこで嫌かけてみたらビンゴ、つてわけだ」

「ということは、あの時の僕はきれいに乗せられた、つてわけか……。

うん、認めるよ。僕もβテスターだ」

その言葉に、ざわつきは大きくなつた。

「じゃあ二つ目の質問。どうして黙つてた？」

「それは、言うに言い出せなくて……。βテスターつてことで嫌われたりしたら、つて思うと、どうしてもね……。」

「その辺は俺には理解できないんだが……。ま、パーティープレイに慣れた人間の思考つてやつなんだろうな……。」

じゃ、もう一つ。キバオウにキリトのことを教えた理由は？」

「……L Aボーナスを取るのに、キリト君が邪魔だったからだ。彼のやることは完璧だから、彼がいてはL Aはまず不可能だ」

「だからあいつが鍛えたメインアームを買い取ることで、少しでもあいつの戦力を削ろうとした」

「だって仕方ないじゃないか！」

今まで淡々と答えていたディアベルが、突然感情を吐き出すように大声をあげた。

「ゲーマーとして、L Aを取りたいと思うのは当然だろう!? だけど、あのL Aゲッターがいたらそんなことは無理なんだ! だったら、それを排除しようとするのは、そんなにいけないことなのかよ!？」

それは、恐らく今までずっと我慢し続けてきた、青い騎士の本音だった。周囲が一気に静かになる。そのすべてを吐き出すような独白を聞いて、俺は一つため息を吐きながら苦笑した。

「いいのかわいのかなんて関係ない。俺は真実を知りたいだけだ。欲望? んなの上等だ。俺だって、目的のために本当に合理的なら、どんなあくどい手も使うつもりだしな」
「そこまで言うと、くるりと背を向けた。」

「ちよお待てや、ジブンこそ逃げるんかいな!」

キバオウの声に、俺は足を止めた。だが、キバオウのほうを向くことはない。

「逃げるつもりはない。俺が聞きたいことはもう聞いた。俺はおたくらのパーティメンバーってわけでもない、ただのソロプレイヤーだ。ボス攻略のために手を組んだだけの、な。あとはあんたたちの話だ」

そういうと、俺は二人が昇っていった螺旋階段を上っていった。

6. 静かな大晦日

ゲーム開始から二か月弱。最前線は五層まで到達していた。ここまで来るまでにいろいろあったが、何とかボス攻略での死人は今までゼロを保っている。それは、ディアベルのカリスマがもたらす前線指揮の確さと、キリトの活躍によるものだろう。キリト自身が宣言した「ビーター」という呼称は殆ど使われることはなく、今では、第一層のフロアボスL Aアタックボーナズドロップの黒いコートを強化、再利用して使っているため、その恰好から「黒ずくめ」とか「ブラッキー（先生）」とか呼ばれている。

「はあっ！」

目の前の敵をぶっ倒して、ゆっくりと剣を左右に振って鞘にしまう。周りにプレイヤーはいない。それもそうだ。今日は12月31日。大抵のプレイヤーはホームに戻ってゆっくりと過ごしていた。攻略も今日は中止するというのが不文律となっていた。実際、第一層の一件以降呑み仲間となったディアベルに晩酌に誘われたが、俺は断って、こうして狩りに興じている。運営が年の変わり目などという時にイベントを発生させないわけではない、というのも事実なもので、俺はこうしてフィールドに繰り出しているわけだ。

「しっかしまあ、本当にいい剣だ」

少し前にモンスターからドロップした曲刀のほうがプロパティとしては高いのだが、いまだに俺はボーンカトラスを使っていた。武器の特性上、インゴットに変換することは難しいらしいのだが、それを補って余りあるその使いやすさと性能があつたし、何より長く握っていたことで俺の手になじんでいた。強化試行回数は4とかなり少ないが、元からステータスが高いのでそこまで気にしていない。ちなみに、この剣は丈夫さに3、鋭さに1を振るといって極端な装備だ。もう一本は対照的に丈夫さ1に鋭さ3となっているので、うまい具合に使い分けができています。

「さてと、・・・ん？」

何か物音がした方向を見ると、そこには小さく、耳の長い動物——兎がいた。それに対して、俺は疑問を覚える。ここらは俺が狩場に行っているフィールドだ。ポップするモンスターもある程度記憶している。だが、こんなところに兎型の敵がポップした記憶はない。もともと俺が遭遇していないだけかもしれないが・・・

「行ってみるか」

落ち着いて考えてみれば、もう明日からうさぎ年だ。ということとは、何らかのニューイヤーパーティメントなのかもしれない。そう思ってそちらに行くと、兎は俺の先をピョンピョンと跳ねていった。やがて兎たちは穴を潜り抜けて、向こう側へ行ってしまった。

その穴は、ちようど横になれば通れそうなくらいの大きさになっていた。周りに人や敵がないことを確認すると、俺は剣をストレージにしまつて、匍匐前進の要領で穴をくぐつた。

穴を抜けると、そこには大量の兎がいた。よく見ると、兎だけではなく、小さなリスのようなものや、小鳥もいた。周りの空気は澄んでいて、若葉独特の明るい緑に囲まれていた。さすがの俺もこの光景には言葉を失つた。もともと動物がそこまで得意な質ではなかつたが、こうもたくさん動物がいるとは思つてもみなかつた。それに、この霧囲気は、穴をくぐつて来る前のそれとは一線を画していた。

「こりゃ、結構あたりかもな」

一瞬フリーズした思考回路を再起動させながら、しゃがんで集まつた兎の一匹に手を伸ばす。逃げるかもしれないと思つたが、手が触れても逃げずにこちらを見上げるだけだつた。兎がどこを撫でれば喜ぶのかはわからないが、とりあえず体を優しく撫でることにした。その一匹だけではなく、他の動物たちとも触れ合う。動物を撫でることなどリアルではなかつたが、どれも毛はふわふわと心地よく、こういうことを好む人間の心理が理解できた。

「珍しいね、お客人なんて」

その一匹に限らず、暫く感触を楽しんでいると、傍から声が出た。どうやら自分が

思っていた以上に夢中になっていたらしい。そちらのほうを向くと、NPCを表す黄色のカラーカーソルが見えた。

「勝手に邪魔してすみません」

「何、気にすることはないさ」

そう言つて、その青年は近くの岩に腰を掛けた。その瞬間に、何匹かの兎が彼の傍にはねていった。

「人がここを訪ねこともあるけどね。大抵の人は、この子たちを攻撃していくんだよ」

「あー・・・」

まあ確かに、この兎たちはモンスターだ。プレイヤーなら、モンスターを狩りにかかるといふのは半分以上に本能的なものもあるだろう。

「大丈夫、その人たちを殺してなんてないよ。ちよつと驚かせて、お引き取り願うだけ。

さてと、こちらこそ不躰で申し訳ないんだけど、僕もちよつと困つていてね。頼みを引き受けてもらえないかな？」

「あ、はい。俺にできることなら」

そういうと、目の前の青年は柔らかなく微笑んだ。

「ありがとう。僕はセルム」

「ロータスです」

「ロータス。あつてる?」

「はい、そうです」

おそらく、NPCのネーム確認ルーチンなのだろう。英単語と同じ名前にしておくとか、こういう時に楽だ。

「よかった、合つてて。もつと楽にしているよ。君なら信頼できそうだからね」

それはいつたいたいという根拠があるんだ、と俺は内心で突っ込んだが、顔に出すことはなかった。

「あ、ああ。分かった。

それで、頼みつて?」

「ああ、うん。

この動物たちを助けてあげたいんだ。いつもと同じなら、多分あと5分も経たないうちに、また招かれざるお客人が来る。それも、——」

「ここの動物たちを狩りに来る人間たちが、か」

「うん。人間といつても、普通の人間じゃなくて、所謂エルフと呼ばれるものだけだね」

エルフ、か。魔法を使って来たら厄介だな。

「で、俺にしてもらいたいことつて、もしかして、そいつらを殺すことか?」

あえて濁さずにはつきりと言った。あとからアルゴにも聞いたが、NPCとの会話と

いうものは、基本的に回りくどい伝え方をせずにストレートに言ったほうがいい。だが、今回はもう少しオブジェクトに包むべきだったのか、セルムの顔が曇った。

「・・・そうだね。僕ができるのなら、そうしたいのだけど・・・。僕は、どうにも生き物を殺すという事に抵抗があつてね。まあ、だからこそこんな空間を作ることができたともいえるんだけど」

「確かに、外とは一線を画してるよな、ここ」

見たことのないような風景で、どこか幻想的だった。見たことのないような形の植木、キノコのようなものまである。おそらく、キノコの仲間、つまりは菌類なのだろう。

「どのくらい？ 見せしめに何人か殺すだけか、皆殺しか」

「できるだけたくさん。ここは大丈夫。この子たちがきれいにしてくれる」

そこまで言ったところで、表情が一気に鋭くなった。それに応じて、俺も気を引き締める。

「敵の量がどのくらいか見当は付くか？」

「多くはない。今回も、ね。5人くらい、かな」

それだけならこちらのほうがいいか。そう思いながら、俺は鋭さのほうに振ったポーンカトラスをオブジェクト化させる。ゆっくりと腰の剣に手を当て、いつでも抜剣できるようにする。

(どこから来る……)

「こっちだよ」

セルムが一方口を指さす。そちらに向かつて警戒心と、わずかながら殺気を——うまくいつているかはわからないが——放つ。どこからか、ガチョウのような鳥のような動物が俺を隠す。それにより、俺は冷静に気配を殺した。

やがてその方向から出てきたのは、色が白い、耳のとがった人型Mob。それを、俺は近くにあつた鏡のような何かで見た。確かこいつらは、少し上の層で出て来る「フォレストエルブン・ハロウドナイト」だ。少し上なのに知っているのは、このMobが3層で発生するキャンペーンクエストで登場するからだ。カラーカーソルは、……深紅に近い赤つてとこか。深紅のカラーカーソルの敵×5はなかなかハードモードだぞおい。

「毎度のことと言い飽きたけど、入ってくるのならせめてもつと穩便に事を運んでほしいな」

「貴様と私の立場でそれは不可能な話だろう。——さて、今日の獲物を差し出せ、セルム。そうであれば最小限で済ませてやる」

「その姿勢だから僕は嫌なんだけどな。そもそも、食料なんて他にもあると思うけど」

セルムが会話をしている間に、音もなくピックを抜く。抜いていないほうの手で軽く

鳥の背中を叩くと、鳥が静かに一声啼いた。それを聞くと、セルムは後ろに回してあった手で——あえてやっていたのかもれないが——サムアツプをして見せた。

「わざわざあくせくして狩らずとも、ここに楽に手に入れられる食料があるのなら、そちらを利用するほうが建設的だというものだろう。それに、狩りをする分では少々足りなくてな」

「それは数を増やしたり、贅沢を尽くしすぎた君たちの自業自得だ。それを僕に押し付けないでほしいよ」

「生意気を」

エルフが自分の獲物をセルムに突きつける。そのタイミングを見計らって、俺はあらかじめ大体図ってあった距離を狙ってピックを放り投げた。ソードスキルなしのそれは山なりの軌跡を描いて見事に首筋に命中した。それを確認せずに、音高く抜剣しながらうち一人の首を刎ねた。振り返って、ポリゴンが一人分散っているさまを見ながら、俺は剣先を真つ直ぐエルフたちに向けた。

「今のやり取りだけ聞くと、俺もセルムに賛成だな」

「仲間か。生意気な……!」

その言葉と共に、相手が一齐に抜剣する。それを見て、やはり俺は口元が緩むのを感じていた。

そして、ざっくり30分後。

「ば、馬鹿な・・・」

何とか最後の一人を倒し、パチンと音を立てて剣を納める。振り返ると、そこにはどこか申し訳なきような顔をしたセルムがいた。

「ごめんね。本来、僕がやるべきことなだけど・・・」

「問題ねえよ。・・・また、ここに来てもいいか？」

「うん。君みたいな人なら大歓迎だよ。でも、僕はこの上の層にも同じようなところがあるってことを知ってる。そっちでも、君が来てくれれば、僕は現れるよ」

現れるって、なんだそりゃ。

「セルム、君は一体・・・？」

「人とエルフが交わって生まれた、ハーフェルフとも呼ぶべき存在。でも、そういう存在はどちらからも迫害されるからね。こうして、動物や植物たちとのんびり暮らしているってわけさ」

「・・・そつか。いい人生だな。こういうのも」

「人は僕のような人を、変わり者って呼ぶけどね」

「違うない。それに、俺も変わり者だしな」

そういうと、お互いに笑いあった。

「さて、助けてくれたんだ。ささやかでもお礼をしなくちゃね」

そう言つて周りを少し見渡す。すると、動物たちがざわざわと動いて、ある一つの衣服を持ってきた。

「これは、動物たちが拾つてきたコートなんだ。だけど、前に一度だけ僕が着たとき、まったく似合わないと言われてしまつてね。君なら、似合いそうだから」

そう言われて、俺はコートを受け取つた。そのままゆつくりと袖を通す。鮮血を浴びたようなその暗い赤色のコートは、思いのほか俺に似合つていた。

「・・・やっぱいい目をしてるな、セルム。センスがいい」

「気に入つてもらえたみたいで何よりだよ。さあ、動物たちに送らせよう」

そういうと、俺の傍には、先ほど俺を隠した鳥のような動物が寄つてきた。セルムの言われるまま跨ると、なんだか妙な感覚がした。

「その子は頭がいいからね。そんなに強くしがみつかなかなくても大丈夫。むしろ強くしがみつくと痛がるから」

「分かつた。またな、セルム」

「うん、また」

そこまで言うのと、鳥は俺を乗せて走り出した。しがみつくなければ必要がない程度の速度は、

今の俺では決して出すことのできない速度だった。そのまま揺られながら、俺はセルムのことを考えていた。

NPCはNPCだ。あくまで、機械が作り出したAIに過ぎない。だが、不思議と俺は、またいつかセルムに会いたいと思っていた。イベントとかそういうのを抜きにして、だ。不思議な雰囲気を持つていて、デアアベルとは別のカリスマがあった。だからこそ、あいつの周りの世界は穏やかなのだろう。

「またいつか、か」

相変わらず周囲には誰もいない。が、これまでにない、新鮮で楽しい年越しになったと思った。自然に零れた笑みは、よく見せる獰猛なそれとは対極に位置する、柔らかなものだった。

7. 第十五層フィールドボス戦

新年が明けてから3か月経った、2025年3月。最前線は15層にまで到達していた。攻略ペースもどんどん上がり、今では一週間ちよつとで一層攻略、ということも珍しくなくなってきた。だが、やることはほとんど変わらない。連日、迷宮を目指して、到着したら潜って、レベリングをしながら攻略する。基本的にソロで動いている俺は、レベルの上がり方も他に比べて若干早く、適正レベルを若干以上大目に上回っていた。

そして、フィールドの雑魚と戯れつつ道を切り開き、俺は迷宮区に到着した。はいものもの。

「やっぱ、か」

迷宮区の前に居座る大きな影。この層は全体的に湿地帯で、出て来るモンスターはそれに関連したものも多かった。そして、今回目の前にいるのは、それは大きな牛だった。高さだけ考えても、人の背丈は軽く超える。少なくとも、俺よりはデカい。攻略組でもかなり背が高いエギルより大きいだろう。何より、その存在感が大きい。

カーソルだけ飛ばすと、"The Boss of Buffalo"の文字。大き

さや存在感からして、ただの雑魚ではないと思っていたが、やはり中ボスカ。しかしなにより、この位置にいたのでは先に進むことは不可能だ。だが、HPバー3本を一人で削りきれれると思うほど、俺は馬鹿でもない。少し前にクエストボスからドロップした今の得物「ブルードラゴン+5」は確かに優秀な武器だ。だが、あれを倒すと心もとない。スペア用の店売り武器のストックは一応あるが、それらをすべてつぎ込んでも無理だろう。最悪、第二層で習得したエクストラスキル「体術」を使って削りきるということもできるが、体術で与えられるダメージなど微々たるものだ。不可能ではないかもしれないが、倒しきる前にこちらの集中力が尽きて殺されるのがオチだ。だが、適当なところで切り上げて撤退に持ち込むのならば話は別だ。アルゴあたりに叩き売ってしまえばちよつとした小遣い程度にはなるだろう。

「そうと決まれば、行きますか!」

自分への喝も込めて口に出すと、そのまま武器を手にボスに向けて走る。相手もこっちに気付いて吠える。その声の大きさも、雑魚とは一線を画す。だが、それで怯む理由などない。むしろ、俺の心のうちでは面白くなりそうだとほくそ笑んでいた。

バツファローは俺の姿を見ると突進してきた。何とか回避ができたが、想像より予備動作が短い。こりゃ結構初見殺しだな。俺は、この性分だから、強敵との戦いは慣れているから、反応もできた。けど、鈍足のタンクとかはきついだろうな。何せあの巨

体の突進だ、一撃もさぞ重たいだろう。がっちりガードしてもかなりのダメージをもらうのは必至だ。横に回ったうえで、横から曲刀系体術複合ソードスキル“牙狼撃”を叩き——こもうとして、すぐにバックステップで回避した。相手がその巨体で横にタツクルを食らわせにかかったのだ。射程が短いながらも、予備動作は少ないわ、密着しているせいで読みにくいわ、そのうえこの巨体だから軽々押しつぶされそうだと、厄介極まりない攻撃だった。

「こんなのありかこらー！」

思わずぼやきながら、右足前の半身になった状態から左手で体術単発重攻撃技“剛直拳”を放つ。ややアツパーカット気味に放つこの技は、射程も短く単発だが、防御力のある程度無視してダメージを与える上に、盾などの防御の上から叩けばまずその防御を崩す突破力と高い行動遅延^{ディレイ}発生力から、発動可能以来愛用している技の一つだ。

俺の予想に違わず、その大きな体を僅かながらものけ反らせた水牛から距離を取る。殴った左手の感触からすると、防御力もそれなり以上のようだ。全く厄介なことだ。もう一度側面から攻撃を仕掛けようとしたら、今度はその頭にある大きく立派な角を振り上げてきた。この間合いでは回避することは不可能と瞬時に断じ、咄嗟に後ろに飛んでダメージを軽減する。が、腹に入った、突き刺されたような感覚の大きさは俺の想像を上回っていた。

「こりや直撃貫うとそれなり、かな」

HPの減少量から一瞬で判断する。直後に戦闘を再開する。向こうのHPバーは、先ほどの剛直拳では数ドットしか削れていない。せめてウィークポイントの一つ二つくらい見つけないと、ここでの戦闘は無意味になってしまう。そう思いながら、敵の動きをじっくりと観察する。相手が頭を下げ、足を何回か掻く。それを見て、相手から見えない位置でピックを二本抜いた。予想通り突進してきた相手に対して、バックシユートで両方とも投擲する。ピックは両方とも俺の狙い通り両目に突き刺さった。その時のHPゲージの減りは、先ほどとは段違いだった。

「ま、お約束だよな」

目つぶしが有効というのはある意味お約束として、そこならある程度HPも減るだろうという俺の推測はビンゴだったわけだ。だが、相手はそれを受けて突進を注視し、その場で暴れだした。試しにその辺にあった小石を放り投げてみると、巨体に当たった瞬間にあっさりと砕かれてしまった。想像はしていたが、これでは近づけない。随分前のボス戦でチャクラムが使われたが、それくらいしか安定した攻撃手段がないだろう。

あまり情報は得られなかったが、最初の偵察戦としては上出来だろう。そう思いつつ、俺は踵を返してそこから離脱した。

その次の日、フィールドボス攻略のために、ボス攻略レイドがボスオブバッファローの討伐のため出発した。今回は、アスナとキリトはまとめてエギルのパーティーに、俺はディアベルのパーティーに、レインは聖竜連合——ディアベルのギルドだが——の一人であるリンド——最初のフロアボスの時のディアベルのパーティーメンバーの一人である曲刀使いだが——のパーティーに放り込まれていた。レイン以外はおおむねいつも通りといったところだ。レインに関しては、ボス攻略のたびにあちこちから声がかかるため、第一層以降レイドリーダーを務めるディアベルがその時の戦力バランスを鑑みて配置していた。

「にしても、単身でフィールドボス偵察戦なんて、相変わらず無茶をするね、ロータスは」「うるせえ。そういう性分なんだよ、こちとら」

「とことん好戦的っていうか、悪辣っていうか……」

呆れたようなディアベルの声もどこ吹く風と俺は受け流す。過去に俺は、少し下の層で出て来る人型Mobに対してレベリングをしていた。普通のモンスターと違い、得物を自由自在に振るってくる人型Mobは集中力を使う代わりに経験値も多い。だが、基本的にレベリングというものは一頭の質よりも数を狩ることを重視する。だが、俺はそれを無視して、質のいい人型Mobの攻撃をかくぐつてはその首を刎ねるという方針

を取っていた。人型である以上、首が飛べば問答無用でHP全損だからだ。そんな折、ディアベルたちのパーティに遭遇して、彼らをとんでも驚かせた。というのも、普通あの手のMobは普通に斬ってHPを削り飛ばすのがセオリーだ。そこをひたすら首チョンパで倒し続けるという俺のスタイルは特異過ぎたらしい。それに、今までのボス戦で、俺はとことん死闘というものを愉しんでいた。それが分かっているからこそ、ディアベルも呆れしか出てこないのだろう。

「それによ、今までも大体そうだったろ？」

「・・・言われてみればそうだけどき・・・、そのまま死地にも行きそうで怖いよ」

「死闘の末で負けて死ぬのなら、それもそれで本望って思ってるからなあ・・・」

俺のその言葉に、ディアベルはもう一つため息をついた。

「とにかく、今はわざわざ死に行くような戦い方をしないでよ？」

「へいへい」

こんなやり取りもいつも通りだ。

そして、その場に着く。見た目がただのかい牛だからか、ボスレイドの面々はまったく言ってもいいほど怯えはなかった。

「行くぞ。突撃！」

ディアベルの号令でレイドが突撃する。俺も真つ先に突入した。突進を最前列のタンクががちり受け止める。さすがはタンク、俺なんかとは比べ物にならない硬さ。その隙に、俺は横からリーバーでその腹を長めに搔つ捌く。短めの硬直が抜けるや否や、踏み込んで左手でアッパーを繰り出し、もう一回踏み込んでそのまま裏拳で振り下ろす。体術二連撃技あせと。罽だ。剛直拳に比べて突破力は劣るが、ダウンのさせやすさと剛直拳より高い威力、そして長い硬直を与えることから、隙だらけならばこちらのほうが優秀だったりする。剛直拳と同時に使用可能になって以来、場面によつてこの二つを使い分けている。少々長めの硬直に入ったところで、微かな横への体重移動に気付く。これはおそらく、横へのタツクル。それを悟つた直後に、後ろから光の帯が横腹に突き刺さる。これは確か、片手剣系突進ソードスキル「ソニックリープ」だったか。

「まったく、無理無茶無謀は禁止つて何回言えばいいの?」

「たぶん、何回言われても治らないぜ?」

「まったくもう……」

その技を放つたのはレインだった。どうやら、こいつも考える前に体が動く質らしい。俺がその最たるものだから、人の事は言えないが。

「俺はいつたんだがる。頼んだぜ!」

「了解!」

俺と入れ替わりでレインが前に出る。闘牛士さながらに牛を誘導してはその突進を受け止めるタンクの横から、一気にアタッカーが攻めていく。特に労せず、HPバー二本が消し飛んだ。だが、問題は、

「ここからだな」

「ああ」

俺もディアベルも、おそらくこの場にいる全員が分かっている。HPバーが最後の一本になってからが勝負なのだ。ここからひっくり返されかけた例は、今までのあまたのボス戦で数知れない。

牛がひとときわ大きく吠える。その次の突進を受け止めんとタンク隊が楯を構える。その通りに突っ込んでくるあたりは、まあ、モンスターだから仕方ないというところはある。が、問題は、

「ぐうっ……!?!」「なんだこいつ……!」「重い……!」

そのタンク隊が、そろってその重さにうめいたことだった。今まではそんなことはなかった。が、今は突進の勢いを完全に殺すどころか、数人がかりのタンク隊がまとめて押し返されている。

「おいおいまじかよ」

「うおおりやああ!」

「い……やああっ!!」

絶句する俺をよそに、アスナの代名詞たる神速のリニアと、エギルの豪快な斧系共通二連撃ソードスキル「翔月双閃」がわずかな時間差で炸裂し、何とか止まる。その瞬間に、俺は一気に走りながら口走っていた。

「今だ、全員フルアタック！HPを削り飛ばせ！」

言いつつ、自分も疾風ノ太刀で切り裂く。それなりに使い込んだことで、これも威力が増大していた。俺と、一步遅れたディアベルの号令で一気にあタッカーが突っ込む。だが、わずかながらも牛が頭を下げるのを見た瞬間、削りきれぬだろうという俺の甘い考えは吹き飛んだ。このままでは間に合わない。そう判断する前に、体が動いていた。

「うるあー！」

縦に回転しながら、かかと落としを繰り返す。それを複数回繰り返す、曲刀体術複合ソードスキル「爪竜連牙蹴」が突き刺さり、ボスのHPを散らした。直後に、ボスがその巨体をポリゴン片に変えた。その場に歓声が響く。結果的に今回のLAは俺になったわけなのだが……LADロップはなんだろうなつと、本当に軽い気持ちで戦利品を確認した俺だったが、そのアイテムを見た瞬間に思わず凍り付きかけた。

「……どうしたの？」

「いや……何でもない」

何でも無い風を取り繕って喜びの輪に混ざる。が、内心は決して穏やかなものではないのだ。

第十五層フィールドボスのドロップ品の中に、「斬破刀」などというアイテムがあれば、心中穏やかではなくなるといふものだ。

斬破刀。つまりは刀。イルファングザコボルドロードが使った、あれとほぼ同質の物だろう。それが、今俺の手の中にある。その事実が、俺の心を穏やかならざるものにしていった。

8. 第十五層フロアボス戦

それから少しして、俺は人気がない時間を見計らって迷宮に潜っていた。その手に握られているのは、昨日のボスドロップである斬破刀。ソードスキルこそ発動できないが、装備することだけはできた。

「重たいな・・・」

俺のスタイルは片手に持った剣と体術を合わせて攻撃していくというものだ。この斬破刀は、片手で振れないことはないだろうが、少なくとも今のステータスでは土台無理だ。両手で持つても、それなり以上の重量が存在感を主張してくる。片手で振るとなるとそれ相応のSTR値が要求されるだろう。実際、装備フィギュアを見ると、これは両手剣扱いだった。いったいどういう条件でスキルが解放されるのかはわからないが、その手の情報には今まで以上にアンテナを張っておくべきだろう。そう思いつつ、クイツクチェンジを使つてブルードラゴンに装備を戻す。さっきの今では、手になじんだこの剣がまるで羽のように思えた。

「実際の重量は変わっていなくても、俺のほうで慣れがあるつてことか」

これを利用すれば、一時的に剣戟のスピードを上げることができるかもしれない。

が、ソードスキルを一時的に封印してもやる必要のあることではない。確かに斬破刀のプロパティは高い。が、DPSという観点で見れば、今のところはブルードラゴンどころか予備の店売り剣にも劣る。リターンに対するリスクがあまりにも大きすぎて現実的ではない、というのが俺の下した判断だった。

「さて、と。攻略を再開しますか」

「そういつつ、俺は適当に歩いて行つた。

「えっと、ここがこうなつて、さっき俺はこう行つたから、こつちか」

マップデータを頼りに進む。道中の雑魚は軽く蹴散らす。しばらく進むと、俺の目に大きな二枚扉が映つた。

「意外と早かつたな」

少し気になつて数えてみると、あのフィールドボス戦からは5日しか経っていない。5日で迷宮を駆け抜ける、というのはなかなか以上にいいペースだ。とにかく、

「行つてみますか！」

「そういつつ、両開きの扉を押して開く。中に入ると、足元が微かに冷たかつた。下を見ると、水位は決して高くないが、水が張っている。これでは、隠蔽スキルなどあつてないようなものだ。もっとも、ボス戦で隠蔽スキルを使う馬鹿などそうそうはいない

が。

部屋が徐々に明るくなる。その奥に鎮座するボスの姿を見ようと、そちらをじつと見つめる。やがて、現れたシルエットは、平たく長い体と大きな顎を持つモンスターだった。平たく言えば、

「でかいワニだな」

呟きつつ、抜剣。これなら偵察は比較的楽そうだ。そう思いながら、俺はそのワニ、*The Alligator of smash jaw* に向かって突撃した。こちらに気付いて吠える。とりあえずのあいさつ代わりとしてピックを放り投げる。吠えたことで大きく開いた口の中に突き刺さったそれは、相手のHPをわずかながら削った。だが、普通は主戦力たり得ないピックで目減りするほどのダメージが与えられるということは、

「なるほど、口の中は相当脆いと」

もつとも、口の中を攻撃できる機会などほとんどないだろうが。そのまま素早く後ろに回る。それに気づいて、相手もこちら側へ転がってきた。さすがに、目算でも10m、いや20m以上あっても全く不思議ではないこの巨体が横に転がってこられたらどうしようもない。確か、現実世界の最大のワニは6mちよつとだったはずだから、大きさとしてその数倍に当たる。なるほど、スマッシュ——砕くとはよく言ったものだ。

だが、

「当たらなければどうということはない！」

某赤い人の名言を言いながら、大きく後ろに下がって躲す。そのまま背中に戻り込む。と、今度はその太い丸太のような尻尾を叩き付けてきた。何とか躲すことができたものの、数m離れているにも関わらず地面を叩いたことによる振動がこちらまではつきりと伝わってきた。ということとは、

「タンクじゃなけりや下手すりゃ一撃死だな」

火力は凄まじい。が、どれもこれも火力だけだ。素早さや予備動作の読み辛さはない。ならば、ある意味どのボス戦よりも楽な戦いになりそうだ。

「んじゃま、情報を取れるだけかつさらいますかね」

そういういながら、俺は改めてブルードラゴンを構えた。右足前の半身で、右腕はぶらりと下げる。剣先は地面と平行に、左腕は畳んで、脇の少し下に拳を持つてくる。俺のいつもの構えであり、一息が締まる構えでもあった。

「仕切り直した、化け物。かかってきやがれ！」

俺のその声に呼応するように、相手が吠える。そのまま、俺は再び突撃していった。そのまま戦いながら、相手のHPゲージの減りを見て考える。

「これって、もしかしくなくても・・・」

単身撃破などということもできるのではなからうか。というのも、案外相手のHPの減り方が早いのである。得物をここですべて捨てる位の気概があれば可能かもしれない。が、

「そんなことをする必要もない、か」

俺のステータスポイントの振り方は、大体STR：AGI：VIT：DEX \parallel 1：2：1：1なおかつSTR>VIT \geq DEXといったところだ。といつても、そこまでAGI特化というわけでもないが。何が言いたいかというと、この鈍足怪力ワニ相手なら、俺なら振り切れることは十分に可能ということだ。それでも、俺がそうしない理由は、この戦いをまだ楽しめているからだ。だが、

「これ以上やって本チャンの時にやる気失せてもなあ」

メインドイツシユは後に取っておくべきだろう。そう考えた俺は、鍛えたAGIに物を言わせてボス部屋を離脱した。

迷宮区から最寄りの街に戻ると、俺は真つ先に広場に向かった。帰り道の途中にメルを送ったから、AGI特化型のあいつならもうついてはいるはずだ。実際、俺が広場に着いた時には、そいつはもうそこにいた。

「ヨ。元氣そうで何よりだ」

「お互いな」

待ち合わせをした人物——アルゴといつも通り挨拶代わりにグータッチをしてから、俺はさっさと本題に入った。もともと、迂遠なことは嫌いな質だ。

「さてと、情報はフロアボスについてだ。さっき偵察戦をしてきたばっかなんだ」「分かつた。その情報はまだ入ってないしナ」

その言葉に内心ほっとする。これで先を越されていたら、さっきの俺の苦労は何だったんだ、ということになる。

一通り情報を話すと、アルゴはにんまりと笑った。

「それだけ情報を集めたのなら、そうだな、30kつてどこかナ」

「それでいいよ。てか、情報の売値は言い値でいいって前言わなかったか？」

「これはオレっちのルールだヨ。騙し取るようなまねはしないといけないといけなからナ」

「そうか」

俺には理解できないが、それが彼女の信条だというのなら仕方ない。

「それともう一つ。刀スキルの習得方法って出回ってるか？」

「うんニヤ。少なくともオレっちは知らないゾ。どうしてそんなことを聞くんだ？」

「ちよつと前にドロップしたんだよ、刀と思われるやつが。もつとも、要求STRが高く

て、装備しても到底実用的じゃないけど」

「そもそも刀スキルがない以上装備したところでソードスキル発動できないしナ」

「ま、そーいうことだ。とりあえず、情報が入ったら教えてくれ」

「なんとなくハスボーが最初の提供者になる様な気がオレっちはしてるけどな」

「なんだそれ」

アルゴの言葉に思わず笑みがこぼれる。ちなみにハスボーというのは俺のことだ。ロータス↓蓮↓ハスボー、ということらしい。ハスブレロになることは・・・たぶんないと思う。ルンパツパはもつとない。・・・何を言っているんだ俺は。

「ま、とりあえず今んとこは以上。つつーわけで、またな」

「ああ。今後ともご贔屓にしてくれナ」

その別れもいつも通りだった。

その次の日、短いボス攻略会議の後に、俺たちは迷宮区のボス部屋に向かっていた。

「今回は一緒だね」

「そうだな。前一緒だったのは・・・どこだっけか」

「確か、十層の攻略戦だったはずだよ。あの時も、ディアベルさんのパーティーメンバーから欠員が出たから、つて」

「あー、そうだったけ。ま、今回は俺らにとつちや全部一撃必殺みたいなもんだ。貰うなよ」

「・・・やっぱり単身で挑んだんだ」

呆れが多分にもつた半目でこちらを見るレインに、俺はふいと顔を逸らした。

「あー・・・それは、だな・・・。あのな、強敵との戦いつて燃えるじゃん？遭遇したら戦いたくなるじゃん？」

「それで死んじやつたら元も子もないんだよ？」

「いやだってさ——」

「だって何も無いから。まったくもう、相変わらず突つ走つてばつかなんだから」

「いやさ、これは性分ていうか、癖ていうか——」

「意識すれば治るレベルでしょ。欲望に従つて死なれたらこつちも迷惑なんだから」

「・・・はい、すみませんでした」

「分かればいいよ。次私の目の前で、ボス部屋に単身で突つ込んでいこうものなら無理矢理引つ張り出すからね」

「・・・りよ、了解、です」

俺の反論はあつさりとレインに破られ、結果的に平謝りすることになった。明らかに年上の俺が叱られているという絵面がおかしかったのか、横でディアベルが笑う。

「ぐうの音も出ないというのはこういうことを言うんだろうね」

「ほっとけ」

「でも、今回はレインが正しいよ」

「分かっているっての。そもそも、俺が間違ってたって分かったから謝ったんだ。今更掘り返すな」

どこかふてくされたような俺の答えに、もう一度ディアベルが肩を揺らす。

「まったく、そんな様子の君は珍しいよ。でも、いつも通りならそれでいいけどね」

「ああ。フロアボス戦だからな。・・・死ぬなよ」

「互いに、ね」

軽く拳を打ち合わせて、ディアベルは隊列の先頭に戻っていった。

そしてボス戦。

「えーっと、いつも言ってるけど、ここまで来たら言うことは一つだ。誰も死なせずに勝とうぜ！」

それに対する鬨の声も、俺の冷めた目もいつも通りだった。そして、扉を開ける。その先には、俺にとっては再戦となる、巨大なワニが鎮座していた。その規格外の大きさに息を呑む気配がいくつか。

「突撃！」

その声がいかに俺が最初の一步を踏み込むのが早いかといったタイミングで一気に突撃する。もともとAGIにちよつと多めに振つてあることもあり、集団の先頭を一気に突き進む。正面にいた俺に対して一気に食らおうとしたその噛みつきをやすやすと回避すると、そのまま横に回る。そして、大人が何人か手を繋いで輪を作つてようやく抱えることができようかという太い足に自分の足をかけて跳躍。その勢いのまま準備の剣を突き立て、その柄をしっかりと両手で握り、全身の力を振り絞つてさらに上へ。すると、労せずとその背中に乗った。そして、クイックチェンジで手元に戻ったブルードラゴンを、そのまま背中に何回か突き立てる。ボスもこちらを落とそうと暴れまわることが、そんなことお構いなしにしがみつく。やがて暴れるのが少し収まったことを確認すると、ブルードラゴンを引き抜く。またひとしきり暴れだしたところで、今度こそ俺は飛び降りた。相手のHPバーを見ると、すでに一本目が削れていた。

「まったく、君の発想というのはいったいどうなっているんだい？」

「変人だつて言葉はもう聞き飽きたよ」

一旦引いてディアベルたちと合流、ポジションを一気飲みする。と、横からディアベルに呆れたように言われた。おそらく、こんな考え方をするから変人と言われるのだからが……まあ、それは性だから仕方がないと、もうすでにかなりあきらめていた。

「まあ、今回はそれで助かったけど」

「ああ。余裕があれば口に麻縄でも括ってやろうかとおもったんだがな」

「それだとすぐちぎられやしないかい？」

「どつかで聞いた話なんだが、ワニつてのは口を閉じる力は強いけど開く力はそうでもないんだと。だからたぶんちぎれない。どちらにせよ、背中に乗るだけで結構集中力いるから、普通はできない。死ぬかもしれないっていう状況の中で、神経もすり減らす。最悪一人二人死人が出るかな」

「そうならないために僕たちがいる。そうだろう？」

「そう、だな」

そう言っていると、ボスが再び吠える。HPバーを見ると、二本目が消失して色も黄色になっていった。そういう自身のHPバーは右端に近かった。まだ全快ではないが、HPバーの下のバフアイコンを見るに、このペースなら問題はないだろう。

「潮時じゃねえか？」

「そうだね。——C隊、スイッチ準備！A隊は合図とともにC隊と交代！」

「了解！」

直後に返事が返ってくる。俺も剣を構えなおす。

「スイッチ！」

前から声が聞こえた。瞬間に、足に力を込めて一気に跳躍。同時に、一気に加速して直前で一回転し、斬り上げる。ここまでその使いやすさから使い込んだドライブツイスターは、ボスの巨体をもデイレイさせた。続いてきた無数のソードスキルが一気にボスを切り刻む。それにより、ボスがのけ反りながらそのHPバーを赤くした。

「ラスト一本！気張れ！」

「おう！」「了解！」「うす！」「っしやあ！」

俺の喝にいろいろなところから返答が返ってくる。その直後に、ボスがその頭を下げ、大口を開けた。

「危ない、下がれ！」

ディアベルの号令が飛ぶ。が、その瞬間は大抵ポストモーション技後硬直で動けない。

「くそが」

一つ毒づくくと、技後硬直から抜けた体を一気に加速させる。わざわざあんな大口を開けて何も無いということは、

「うるらあ！」

左手で渾身の力を込めた剛直拳をさらに上に打ち上げる。それはボスの顎を半ば無理矢理閉じさせる。少し後に爆炎が横から吹き出す。俺はほぼ正面から拳を叩き込んだから食らわなかったが、あれを正面から食らったらそれなりに痛そう——いや、黒

こげになりそうだ。

「ブレスが来るかもしれない。正面にはなるべく立つな！」

今まではただ体当たりや噛みつきという、シンプルながらも強力な攻撃を繰り返してきたが、ここからはやはり特殊攻撃を混ぜてきた。俺もディアベルも、HPゲージが赤くなったら何かあるというのは今までの経験則としてわかっていたので、注意喚起を忘れなかった。俺も、万が一を考えてすぐに対応できる状態にしておいた。だからこそ、あの局面で剛直拳をぶつ放すことができた。

「大丈夫か!？」

「何とか!」

「こつちも大丈夫だ!」

「おかげさまで全く問題ない!」

ディアベルの確認に戻ってくる声にもまだまだ覇気がある。それを聞いて、俺は下から垂直に一閃。微々たるダメージしか入れられなかったが、ヘイトを引くには十分だ。案の定、ボスが俺に狙いを定め、体を水平に振じる。

「・・・!?!危ない、下がれ!」

その変化を目ざとくディアベルが見つつけ、号令を出す。が、俺はあまりにも近すぎた。この後に飛んでくるのは、あの尻尾による薙ぎ払いだろう。が、これでは回避はできな

い。ならば、

「躲すまで」

一言呟くと、両足に満身の力を籠める。ボスの足が微かに動くと同時に、俺は跳躍し、そのまま真上にリーバーを放った。そのままシステムアシストに従い、俺の体は一気に加速する。その加速も相まって、俺の体の真下を尻尾が通り過ぎた。尻尾の巻き上げる風圧を背中に感じながら、何とか受け身を取ろうとする、が

「ぐぎやっ」

さすがに技後硬直から抜けた直後では不可能だった。微かな鈍痛とも取れる感覚と、ほんの少しHPが減ったSEを聞きながら、俺は変な声を上げつつ地面と激突する。ゆっくりと立ち上がると、横からただならぬ雰囲気突き刺さった。壊れかけのブリキの人形のように恐る恐るそちらを向くと、

「ロータスクーン?」

般若がいた。いや、般若を背後に伴ったレインなのだが、これは明らかに彼女レベルの美少女が纏つちやいけないレベルの奴だろう。でもまあ、原因はなんとなくわかる。というかいやでもわかる。こういう場面では、

「・・・テヘツ☆」

「テヘじゃないよバカーーーーー!!!」

笑ってごまかす、とはいかなかったようだ。

ボス部屋全体に響く声でレインが雄叫びを上げる。いやいや、君も女の子なんだからちよつとは自重しなさい、と内心でツツコミを入れる。それを引き起こしたのは誰かって？ 知らんなあ。

「・・・とりあえず、夫婦漫才は別のところでしてくれないか」

「誰が夫婦か誰が！

・・・とにかく、今はボス戦が先だ。いくぞ、レイン」

「はいはい」

ディアベルのため息交じりの言葉に噛みつきつつ、レインとコンビ宣言をする。それに答えたレインと俺が再び突撃をした。お互いスピード系の剣士で、ある程度以上に癖なども理解している。だからこそ、俺たちはうまくヘイトを管理しつつ、順調にダメージを与えていった。頃合いになったところで、キリトがアスナと合流し斬り込んできた。が、ちょうどソードスキルを立ち上げた瞬間に、ボスが大口を開く。その口からわずかではあるが火の粉が漏れていることに気付いた俺は、全身に鳥肌が立つのはつきりと感じた。もつとも、アバターに鳥肌が立つのかはわからないが。

「キリト君!!」

レインとアスナが同時に叫ぶ、アスナはステータス値のほとんどをAGIに振って

るのか、現時点でもそれなり以上の素早さを誇るのと、彼女が得意とするソードスキル“リニア”の硬直が短いこともあり、何とか離脱することができた。が、キリトは違う。何とか方向を変えて離脱しようと試みているようだが、どう考えても命中は免れない。

自身のHPバー周辺をちらりとみる。そこには、剛直拳がクーリング中であるアイコンがあった。その下のゲージを見るに、間違いなくさっきの手は使えない。同じかち上げでも、虎牙破斬やドライブツイスターでは切断系だからうまくいく可能性は低い。

そこで、俺の脳裏に一つの考えが閃く。直後にボスのHPバーを見る。そして、今自分が発動可能なソードスキルを脳裏に浮かべる。その上で、一瞬で思考した。瞬間に、俺は動いていた。一気にボスまでの間合いを詰めると、右上から袈裟懸けに斬り、そのまま進みながら真つ直ぐ突いて、左拳を振り上げる。最後に剣を振り上げながら飛び上がった。双牙斬と曲刀系体術複合ソードスキル“穿衝破”を使い込むことで使用可能となる、双牙斬の初段から穿衝破を出して最後の切り上げを見舞う、“斬影烈昂刺”がさく裂し、それによってボスのHPバーが消し飛んだ。ブレスを放つ寸前の体勢から断末魔を上げると、ボスはそのままポリゴンのかけらとなって爆散した。

直後に歓声が沸き起こる。思わず俺は崩れ落ちていた。天を仰ぐ俺の目に、大きな“
C o n g r a t u l a t i o n ! ! ”の文字が映る。

正直に言って、最後のあれは賭けにも近いものだった。一撃の重さを重視するキリトとは違い、俺は一撃が軽くなってもそれを有り余る手数で補うタイプだ。だから、キリトならば削りきれても、俺に削りきることができると言えば、わからないとしか言いようがなかった。念のため、今のところ最大火力である斬影烈昂刺をぶちかましたのだが、それは正解だったようだ。

ふと視線を前に移す。"You got the last attack!" という文字。

「あ、そっか。俺がL Aか」

こっちのL Aドロップは："Bloody Coat"、か。血まみれのコートつて、なんでこんな怖い名前なんだよ。とにかく、名前から察するにコートらしい。さっそく装備してみると、その色は今まで装備していた色に近い、赤色に黒を少し加えたような——まさに返り血を吸ったような色だった。

「よく似合ってるよ、ロータス君」

「そうか。そう言われるとうれしい」

フロアボスL Aドロップだけあって、プロパティも高い。これならば、暫く戦力となってくれるだろう。セルムには悪いが、あのコートは暫くしまっておくことになるな。・・・血まみれのコートが似合うって少々複雑だけど。

「さてと、有効化、^{アクティブ}行きますか」

「あ、私もついてく！」

そんな光景も、いつも以上にいつも通りなのだった。

ちなみに、有効化して速攻で適当な宿屋を取るや否や、俺はレインに小一時間膝詰め
で説教を食らうことになるのだが、それはまた別のお話し。

9. 厳しい戦い、生きる理由

ゲーム開始から早半年余り。自分たちが想像している以上にあつという間に過ぎ去った年月の間に、アインクラッド最前線は25層の地点に到達していた。全体の四分の一までの到達が半年ということは、単純計算で100層攻略に2年かかる計算だ。納得のポリウムだろう。これがもし普通のMORPGならば、とてつもないやり込み度を持った、世紀の大ヒットゲームとなったに違いない。まあ、そんなのは置いておいて。

「ふう・・・」

剣をしまったまま、フィールドを歩く。あれからSTRも上げて、何とか刀を片手で振ることができるようになっていた。

あれから暫くして、ようやく刀スキルを習得することに成功していた。その頃には、最前線は20層を突破していた。だが、スキルを習得しても俺のスタイルに合わなかった。前にも言ったが、刀は両手剣で、俺は片手で剣を握って体術を織り交ぜていくスタイルだ。そのためには片手で両手剣を持つという矛盾したことをする必要がある。ちなみに、今の俺のスキル構成は 曲刀・投剣・索敵・体術・隠蔽・刀 といった具合だ。

さらに言えば、投剣と体術はもうすでに800の太台に乗っていたりする。曲刀が750くらいだつていうのになぜ。というか熟練度の伸びが700くらいからガクンと落ちた気がするのは気のせいではないだろう。おのれ茅場許さん。

そんなことを考えていると、近い位置にモンスターがポップする。顔をそちらに向けてると、そこにはここらではそこそこ強い部類に入る蛇型Mobがいた。蛇型といっても、大きさはモンスターらしく、到底普通とは言えない大きさだが。

「ま、それでもこいつはそこそこいい素材落とす時があるんだよなあ」

そうなのだ。こいつ、確率で革系防具強化時に一定確率で防御力上昇バフを付けるという汎用性と実用性が高いアイテムをドロップするときがあるのだ。もつとも、一定確率なので使用しても何も起こらなかった、ということもしばしばだが。

眩きながら、腰にある「鬼斬破」を抜き放つ。こいつは斬破刀をインゴットに変換し、さらに強化素材もろもろ含めて作成した俺の剣だ。作成者曰く、「このレベルはそう簡単にはできるもんじゃないから、大切に使いなさいよ」とのこと。確かに、俺好みの軽く鋭利な刀だが、それはあくまで両手剣にしては軽いというだけで、曲刀と比べればやはり重い。それでも何とか片手で振ることはできる。その状態で体術を織り交ぜながら戦闘をするスタイルもなんとかできる。最初は武器に振り回されるだけだったが、刀の重心を感じて振る感覚を覚えてからは片手で振りまわすことができるように

なっていた。もつとも、集中力をかなり食うが。

「さて、やりますか!」

そういいつつ、俺は鬼斬破を構えて走り出した。

その日の夜に、俺は迷宮区に潜った。は、いいものの、

「はあ、はあ、はあ……」

荒い息を整えながら、ずるずると安全地帯にへたり込む。正直なところ、かなり疲れ
ていた。

率直に今の俺の感情を表現すると、「なんだこれは」だ。ここに来て難易度がいきな
り上がりやがったぞ。フィールドの雑魚レベルだとちよつと強いな、くらいだったの
が、迷宮区だとはつきりそれと分かるレベルまで強化されている。これ相応のフロアボ
スが設定されているとしたら、それは——

「死人が出るかもしれないな」

何とか息を整えつぶやく。ここまでのフロアボスによる死者数は一貫してゼロを
保っているが、今回でようやく出るかもしれない。出さないために自分たちがいるわけ
なのだが、そのあたりは努力しかないだろう。

「そろそろ切り上げるか」

迷宮区は殆どマツピングできていない。が、ここは無理をすれば死ぬ。それは俺の本能的なもので分かった。今までの俺なら無理してでも次の安全地帯までマツピングをしてしまうのだが、今回はそう思わなかった。それに、あんまり無茶をすると、今度レインにあつた時に何されるか分かつたものではない。毎回のように説教を食らつたり何か奢らされたりクエスト付き合わされたりと、結構振り回されている。が、最近になつてようやくわかった。

「あいつといると、不思議と落ち着くんだよなあ・・・」

明らかに年下の、最初はフィールドで助けただけの少女。しかも第一声は「動くな！」なのに、なぜか俺に懐いて、共闘したことも数知れず。本当に不思議な少女だ。とにかく、目下最大の目標は、

「帰る。そんで寝る」

いつぞやのアスナの真似をして、数日間迷宮に潜りっぱなしということも一度やつてみたが、よくこんな生活を年端もいかない少女が3、4日も続けられたと感心したものだ。それほどまでに、迷宮での寝泊りというのは神経を削る。2日くらいならまだ大丈夫だが、いったん宿屋まで帰ってしつかり休んだほうが、かえって疲れが取れて効率上がる、と俺は踏んだ。それゆえの判断だった。

ゆつくりと立ち上がる。幸いなことに、頭はまだ冴えている。帰る途中で疲れ果てて

死亡、などということはないだろう。

街に帰ると、俺は露店として店を出す鍛冶屋を訪ねた。

「おーいリズベス、居るか？」

「だから、リズベツトだつて言つてんでしようが。いい加減覚えなさいよ」

「綴りそのまま読んだらリズベスなんだからいいじゃねえか。細かいな」

奥から、茶色の髪にそばかすが散つた童顔の少女が出て来る。アスナに聞いたところ、彼女とほぼ同年代だというのが、あの二人が隣に立っていたら、まず間違ひなく俺はリズを年下だと思つたに違ひない。

「細かくないわよ。で、今日は何？ 鬼斬破の耐久値がもうやばくなつた？」

「違う違う。今日は投剣の定期購入。いいの、ある？」

「そうねえ……。あんたは確かピック派で、念のためタガーもいくつか持ちたいってクチだつたわよね」

「そーそー。よく覚えてんな」

「これくらい覚えられなくちゃ務まらないわよ。ちよつと待つてなさい、適当に見繕うから」

そういつつ、店番の少女は俺に背を向けて投剣につかう小刀を手にしながら考えだ

した。

彼女はリズベット。といつても、名前の綴りが“Lizbeth”のため、俺は初対面で「・・・リズベス？」と呼んでしまい、以降、俺はからかいの意味も込めてリズベスと呼んでいる。アスナと同年代、つまり俺より少し年下なのにため口なのは俺がそうしてくれと頼んだからである。ちなみに、鬼斬破を鍛えたのは他ならぬ彼女で、腕はアスナも俺も信頼を置いている。

「そうね、これなら20本までは売れるし、タガーはこれが10本までなら売れるわ。今んとこ、うちの最高品」

「プロパティ見るぞ」

「どうぞ。てか、それすらもさせないほど狭量に見える？」

「念のためつてやつだ、察しろ」

気兼ねなくこうしてコミュニケーションを取りながら武器を選べるというのも選んだ決め手の一つだったりする。さて、肝心のプロパティは・・・っと、ピックのほうは20、タガーが25か。今使ってるのが10と15だから、十二分だな。残りストックは35と7つてとこだから、

「OK、流石はリズだ。ピックを15、タガーを10くれ」

「分かったわ。合計で22500コルね」

確かに今使っているピックは店売りのものだが、それにしても合計25買って22500コルというのは安上がりだ。

「ほいよ」

「はい、確かに」

「また来るから、そんな時はよろしく」

「武器折るんじゃないわよ」

背中から聞こえる声にひらひらと手を振ってリズの店を後にする。ストレージに投剣類をしまいながら、俺は今日の夕飯のことを考えていた。

少し仮眠を取った俺は、再び夜のフィールドに繰り出していった。最初は本当に「生きる」ということに必死だったが、今となっては半分生活の一環のようなものになってしまった。こんな非日常が日常になってしまいうまでに半年というあたり、人間の適応能力の高さが分かる。そのまま進んで、迷宮区に入る。今は刀ではなく、曲刀を使っていた。刀より一撃の重さこそ劣るが、刀にはない片手で振っても落ちない鋭さと、何より俺の体が馴染んだことによるアドバンテージはそうそう簡単にはひっくり返らない。なので、俺は状況によって使い分けることにしていた。なんだかんだで、昼間の狩りは何度か経験があったからこそ、刀で行ってもそこまで不安はなかった。が、それはあくまで

昼間の話で、夜はまだ慣れていない。だからこそその曲刀だった。

そんなことを考えていると、横からモンスターが飛びかかってきた。索敵スキルのチエツクを怠っていたというのは慢心以外の何物でもないが、

「疾ッ」

短い掛け声とともに振り抜かれた剣は、一発でその狼型モンスターの口を横に裂いていた。無造作ながらも一発で急所に入った一撃は、相手のHPを大きく減らした。改めて剣を構えなおす。左手はどういう対応でもできるように腰の近くに、右手は所謂正眼の位置に置いた。狼が遠吠えをする。と、周りを囲うようにモンスターがポップした。どうやら取り巻きを呼ぶタイプだったらしい。名前に定冠詞がない所を見るとボスではないが、

(雑魚相手でもこの量はきついかな)

瞬時にそう判断すると、剣を左手に持ち替える。右手でメニューウィンドウを開くと、クイックチェンジのModを使って左手の武器を交換した。一瞬だけ左手を離して右手をタップ、そしてもう一度握る。その瞬間に、俺の左手には鬼斬破が握られていた。右足を前に出して、ぐっと体を振じる。それにより初動を感知したシステムにより刀が光る。直後に、狼が同時に飛びかかってきた。俺の左手が一瞬で閃き、振じられた体が元に戻る反動で刀が水平に一回転する。刀系範囲ソードスキル「つむじくるま旋車」がさく裂し、

狼たちがもれなくスタンする。それを見て、俺は刀で一体ずつ慎重に刀で殺した。

「ふう、焦ったー」

さすがに今の場面は冷や汗ものだった。今回はもれなくスタンできたからよかったものの、まかり間違って数頭スタンし損ねていたら、まず間違いなく喉を食らいつくされていただろう。そうなつてはこつちもただではすむまい。だが、そのような瞬間が何度も訪れるからこそ、このような死闘は麻薬なのだ。ソロを貫き通しているのも、そういう理由だ。そう考えれば、俺は立派な麻薬中毒者、ということになるが。

とにかく、そろそろ迷宮区だ。ここまで来ればもうほとんど問題は無いが、油断だけは注意しなくてはならない。そう思いつつ、装備を曲刀に切り替える。そのまま俺は歩いて行った。

相変わらず薄暗い迷宮で、俺はマツピングをしていた。方向感覚には自信があるほうだが、いかんせんこの迷宮区は広い。体力的に疲れるということがなくとも、精神的な疲労は着実に体を蝕む。確かに俺は戦うこと大好きな戦闘^{バトルジャンキー}狂だが、全力で戦って死ぬのならともかく、疲れ果てて殺されるなんてまっぴらだ。

そんなことを考えつつ、順調に迷宮区をマツピングしていく。これはレベリングも兼ねているのだから、最短距離を見つけることなど二の次でいい。実際、ここまでも見つけられていない宝箱を見つけては開いて、中に入った結晶系アイテムを片っ端から頂戴

している。もつとも、すでに先を越されたものも少しあったが、それはまあ、目をつむるとして。

そんなことを考えていると、目の前にモンスターがポップした。人くらいの大きさの虎が二本足で直立して得物を持ったような敵の名前は、*Tiger Knight*。虎の騎士、まんまだな。得物は片手直剣、もう片方の手には一般的なカイトシールド。とりあえず、

「失せろ、虎猫」

意味がないと分かっているながらも、冷徹に言い、まったく笑みを浮かべずに水平に曲刀を抜剣する。どうせ今装備しているのは店売りの安物だ、少々手荒く扱ったところでどうということはない。そう考えつつ、目の前の敵に向かって行った。どうせこの手の雑魚は楽しめない。なら、さっさと倒すだけだ。

雑魚を倒しながらしばらく歩くと、四隅に今までと違う色の松明のある区画にたどり着いた。安全地帯だ。前回一休みしたところの次のため、マツピングは順調にできているということの証左でもあった。が、

「はあ……」

ため息をつきながら、ゆっくりと壁際に腰を下ろす。ここの戦闘はやはり精神的に堪

える。というのも、どいつもこいつも火力が高い上にそれなり以上に剣戟も鋭い。息つく暇ない戦闘は俺にとつては福音だが、冷や汗をかいたことも少なくない。最悪、通路でぼったり出くわした、なんてときは壁を使って三次元戦闘で圧倒したくらいだ。今までも思いついてはいたが実際にやったのはこの層が初めてだ。それはつまり、実行に移さざるを得なくなったというのと、そこまで精神的にも追い込まれたということの証左だ。

座つたまま、補給の水と軽食を食るように食う。仮眠の時間を少しでも取っておかないことには、この先でうっかり死にかねない。せめて、目を閉じてゆつくりと休むくらいは必要だろう。そう思いつつ、一通り食べ終わると俺は目を閉じて体の力を抜いた。

それから少しすると、別のプレイヤーが安全地帯までたどり着いたのが、足音で分かった。目を閉じてこそいるが、眠つてはいない。ここは圏外なのだから、PKも十分にあり得る。実際、寝ているところをPKに遭い、命を落としたというプレイヤーもいる。俺は幸か不幸か、その手のプレイヤーには遭遇していないが、警戒するに越したことはない。だが、俺は近づいてきた足音のリズムと重さで、相手に大体のあたりを付けていた。

悟られないように薄く目を開ける。視界に映ったのは、俺の想定していた通りの人物

だった。やはりこちらが眠っていると思っただろう。そのままこちらに向けて手を伸ばしてきたところで、俺はそのままの体勢で口を開いた。

「何してんだ、レイン」

「うわあっ!?!」

突然俺が喋ったことに相当肝をつぶしたのか、レインは素つ頓狂な声を上げながら飛びのく。だが、それだけしか喋らずに静かにしていると、レインはこちらをしげしげと見て、やはり目が開いていなさそうだということを——この時点で再び目は閉じたのだが——確認すると、ぼそりと一言呟く。

「・・・寝言?」

「んなはつきりした寝言があるか」

はつきりとツツコミを入れつつ片目を開く。目の前には相当泡を食ったと見える少女の顔。その顔を見て、思わず俺は笑ってしまった。

「なに?なんかおかしい?」

それに対して、軽く頬を紅潮させながらレインが言い返す。それを受けて、ようやく俺は笑いを納めて言った。

「いやなに、想像以上に驚いた顔だったものでな。よしよしうまくいったしめしめ、みたいな」

「何それえー！」

そういうと、今度こそはつきりと顔を赤くする。それを見て、俺は笑みを安堵のそれに変換した。

「・・・今度は何？」

表情の機微を鋭く悟ったレインがもう顔を隠そうともせずに関いかけて来る。それに対して、俺は素直に思ったことを口にした。

「そんだけ元気があるんなら安心だな、って思っただけだ」

「あ、うん、まあ、ね」

こうして喋ったり、助け助けられ、その時の貸し借りで奢ったり奢られたりという仲だから、お互いのレベルは把握できる。そして、レインのレベルはほぼ常に俺より少し低い。その彼女がここまでするには、少なからず集中力を削るはずだ。

「ま、それでも、そっちもそれなりに疲れてるだろ？休息の時の見張りくらいはするけど」

「え、でもそれはさすがに申し訳ないっていうか、なんていうか・・・」

「今更遠慮なんかいらん。それに、一応お前も女だしな。目の前でレイプされたりとか、あまつさえ殺されたりとかしたら、流石の俺も寝覚めが悪い」

あまりにも俺の言い方があけすけだったからか、レインが少し顔を伏せる。

「ま、それに、ゆっくり休めたほうがいいだろ？」

「・・・分かった。じゃあ、お願いしようかな」

「おう、任せられた」

そういうと、レインは俺の横に腰を下ろした。ストレージから軽食と飲料を取り出して口に運んでいく。

「そつちにとつてどうだ、この迷宮区」

本当に何の気なしに俺は隣の少女に問いかけた。口の中の物をちゃんと咀嚼してから、レインはゆっくりと答えた。

「一言で言っちゃうと、厳しい、かな。雑魚も今までにないくらいしつかりと攻撃してくるし、その攻撃が鋭い。重さはないけど、その分早いから、連撃をもらっちゃうと重たいのを一発貫つたのと同じくらいだし」

「やっぱそつちにとつても、か。そつちのレベルは、大体40前つてとこか？」

「うん、まあ、そんなとこ。そつちは？」

「ちよつと前に42だ。でもここらがいっぱいいっぱいかな。マージンは十二分のはずなんだが、余裕がない」

「そりゃ、ここはマージン云々以前に、プレイヤースキルを試されるよ。アスナさんみたいな高AGI型はこういうところでも簡単に回避できるだろうけど」

「アスナほどの手練れであればおそらくAGIが少々低かろうと問題ないと思うぜ。あいつは、見切りがすさまじくうまい。リアルで武術習ってたって言われても不思議じゃねえな」

「・・・?どういこうと?」

これは俺が常々思っていることだ。アスナは確かにAGIが高いステータスをしている。俺も確かにAGI高めステータスだが、アスナのAGIはその遙か上をいく。もつとも、これは俺が刀を片手で十二分に振るえるようにSTRも上げたことにも起因するところはあるのだが、それはこの際置いておく。何が言いたいかというと、もし俺とアスナが同じステータスで同じ相手と戦ったとして、回避に徹したら間違いなくアスナのほうがより正確に回避ができるという点だ。

いまいち要領を得ないという様子のレインに、俺は「あくまで推論だが」と前置いて切り出した。

「アスナは———どうやっているのかはともかくとして———相手の攻撃を読んだり、見切ったりすることがうまいんだよ。それは、おそらく本人の頭の回転の速さと、武器特性、使ってくるソードスキル、その辺の豊富な知識に裏付けられたものだろうがな。それらをフル活用した際に何が起こるかと言えば、初見じゃない攻撃はよっほど躲せられるってことだ。いや、もしかしたら初見でもある程度なら躲せるかもしれないな」

「うわあ・・・そりや凄いな」

「まあな。おそらくそんな真似ができるのは、攻略組でもキリトとあいつだけだろうよ。キリトの反応速度はもはや異常の域に達してるからな」

「それは確かにそうだね。P v Pのデュエルでも負けたことほとんどないって聞くし」「まあそうだよな。俺だつて勝てる自信ない」

その言葉に、ふたりして笑う。そこで、ふつとレインが軽く目を瞬しほたいた。

「眠いんなら寝ていいぞ。会話させたのは俺なんだし」

「あ。うん・・・。じゃ、お言葉に甘えさせてもらうね」

そういうと、レインは壁に頭をもたれかけて目を閉じた。すぐにその腹部が一定のリズムでゆっくり上下する。レインは普段胸式呼吸に近いようなので、完全に寝たということだろう。伊達にコンビを組んでいるわけではない。呼吸法など、教えてマスターさせるのは簡単だが、今はそこまでではない。もつとも、この層でここまで厳しいのなら、今のうちに教えていたほうがいいのかもしいれない。現実世界での体とは違うから貧血というものは起きないかもしれないが、万が一ということもある。それに、これは実体験に基づくものなのだが、腹式呼吸のほうが運動する点において肉体的に楽なのだ。詳しいことはわからないが、腹式呼吸のほうが多く息を吸えるということなので、おそらく酸素供給量とかそういう話なのだろう。

(・・・って、いったい何考えてんだ、俺)

考えながらも周囲の観察は止めない。もともと俺の役目はこいつの護衛だ。決してその、おそらく高校生だと思われる年頃にしては整った体型とか無防備な寝顔に見れないようにとか、そんなことを考えていたわけではない、と信じた自分がいる。普段は動きやすさ重視で選んでいるのか、比較的ゆとりのあるサイズで服を選んでるように思える。首のあたりも、動いて邪魔にならないようなデザインを選んでるように。少なくとも、俺は彼女がターゲットを着ているところを見たことがない。肌寒いことは今まで何度もあったにも関わらず、だ。

(一般的に言って、そういう服って着やせするっていうよなー・・・)

ということとは・・・とあまりにも下心全開の思考に陥っていると、肩に微かな重みがかかった。そちらを見てみると、レインが頭を俺の肩に乗せてきていた。

「まったくこの娘は・・・」

正直に言って、俺は彼女に対して恋愛感情など抱いていない。あるのは相棒として、攻略の意を共にする同志としての思いだけだ。もともと、俺も男である以上性欲もあるのだが、最近是不思議とそういう感情は湧いてこなかった。

とにかく、俺のやることに変わりはない。そう思いながら、俺はそのまま周りを見ていることにした。

10. 共同戦線―第二十五層迷宮区攻略―

その体勢のまましばらくしていると、隣で軽く唸りながらゆっくりとレインが目を覚ました。微かな声にそちらを向くと、寝ぼけ眼でぼんやりと周りを見渡し、直後に見る間に顔を赤くした。

「い、いめんー」

「いいって。ゆっくり休めたのならそれでいい」

なかなかかわいいい反応が見られたし、という言葉は内心に留めておく。

実際、ゆっくり休めるかどうか、というのは、効率に大きく響く。休息の充実具合はそのまま、集中力に直結するからだ。十分な休息をとったうえでの行動かそうでないかで、DPS、被弾率、判断能力に影響が出るといえるのは、過去にデータを取ったことによる結果が示している。それはそのまま、生存率にも直結すること、そこから体感していた。だからこそ、手間を承知の上で俺もわざわざ街に戻っているのだ。効率を重視するのなら、なぜパーティーを組まないのか、というのは、俺の性格に起因するから、まあ仕方がないが。

「ところでよ、そつちじゃソロか？」

「え？ああ、うん、そうだけど」

「ならパーティ組まないか？さすがにここをソロで切り抜けるきつさは、お互い身に染みてるだろ」

「そう、だね。わかった、いいよ」

その言葉を受けて、俺はレインにパーティ申請を飛ばす。少しして左上に再びrainの字を見て、俺は改めて自分の得物を確認した。できれば、刀スキルはさらしたくない。それに、体力的に余裕のある前半だったから使えたのであって、少なからず消耗している今の状況で慣れない得物を振り回すのは自殺行為だ。幸か不幸か、今使っているのは曲刀だから、わざわざ装備を変更する必要はない。

「そっちはどうだ、行けるか？」

「うん、おかげさまで大丈夫」

「OK、じゃ、行くか」

そういうと、俺たちは立ち上がった。

それからの攻略効率は飛躍的に向上した。それは、データを取るまでもなく体感することができた。二人いるから手数が増えるというのもあるのだが、何より戦闘に欠ける集中力が段違いだ。常に四方八方に警戒する必要のあるソロとは違い、二人掛かりで周

囲を警戒すればいいコンビでは、効率も違えば集中の仕方も違う。それに、これが初めてならいざ知らず、ふたりともここまで何度もパーティを組んで戦っている。お互いの癖もよくわかっていた。俺はかなり——干支は違うが——猪だし、レインはかなり堅実に見えて意外と度胸があるというか、捨て身の戦略も普通にとる。だが、お互いに死なれては困るからお互いがブレーキとなっている。だが、根本的な突撃戦法は変わらない。その結果何が起ころかと言えば、

「あーくそ、いい加減に途切れてくれねえかなあ」

「素晴らしいっつ楽しんでるくせに」

「たりめーだ。この状況を楽しまずしてどうするか」

「……普通は漠然と怖いはずなんだけどなあ……」

ため息交じりに言うレインだが、当の本人も怖がっている様子が毛頭ない所を見ると、相変わらず相当肝が据わっているようだ。

トラップを踏んで敵に囲まれて絶体絶命。今の俺たちの状況を端的に説明するとそうなる。

どうやらこの迷宮区、前半部分こそ今まで通りの迷路だが、後半部分は謎解きをしなからひたすらくねくねと長いつくりのようなのだ。その謎解きを失敗したり、考えるのに時間がかかりすぎる——有体に言えばタイムアップとなってしまうたりすると、こ

うして敵がわらわらと湧いて出て来るのだ。その場合、敵を全滅させればいいだけの話なのだが、いかんせんこれが面倒くさい。だが、途中から俺は考えるのはふりだけで、わざと戦闘に持ちこむようにしていた。まあ、隣の少女には敵が湧くたびにやる気を出す俺の様子を見て、途中から当てにしなくなっただが。

「さすがにこのレベルで連戦はちよつと厳しいね」

「確かに。楽しいけど」

「・・・たぶんそういう発想に至るのは君くらいのものだと思うよ」

「安心しろ、自覚はある」

「・・・だよねえ」

隣のため息を吐くレインをよそに、俺は戦うたびに顔色が明るくなっていった。巻き込まれる側としてはたまったものではないというのがレインの本音だろうが・・・この様子だとたぶん諦めているな。

「まあ、私だからこうして付き合うけどさ、他の人なら間違いなく愛想尽かされるよ？」

「そうだなー。ま、その辺も踏まえて俺はあんたと組んでるわけだし。その辺察しろ」

「それって果たして喜んでいいのかなあ・・・」

雑談しながら、迫りくる雑魚の群れを一掃し、お互いに剣をしまし。すたすたと先に歩く俺に続いて、もう一つため息をつきながらレインも歩く。今までの敵の様子を見る

に、これはあくまで消耗させるためのものだ。いわば前哨戦に過ぎない。

「なあレイン、ここまで謎かけて覚えてるか？」

「え？・・・さすがにそこまでは覚えてないよ」

「なら質問を変えろ。ここまでで同じ謎かけてあつたか？」

「なかつた、と思うよ。あつたらたぶん気づくと思うし」

あくまで確認の問いかけ。だが、その言葉である程度パズルが組みあがつた。だが、これを確証とするには複数回ここに潜り、深部まで到達する必要がある。

「最悪のパターンもあり得る、ってことか・・・」

「ボス部屋到着前にメンバーが減るってこと？」

「ああ。ここまで徹底して消耗させにかかっているんだ。ありえない話じゃない。それに、一般的には——」

そう言っていると、目の前に扉が現れた。ボス部屋のそれではないが、今までの扉とは一線を画している。

「いやな予感の中かな。当たってほしくなかったけど」

「一般的には、何？」

「よく言うだろ。『津波は最後が一番でかい』って」

「・・・てことは」

「おそらく、ここが最後か、最後じゃなくても近い所であることは間違いない」

「で、さっきの理論に当てはめると・・・」

「ああ・・・気を引き締めていくぞ」

お互い、それ以上の言葉は必要なかった。先行する俺が扉を開ける。二人が部屋に入ると、その扉はひとりでに閉まった。これは今までもなかつたギミックだ。今までは謎解きに失敗した時のみに扉が閉まっていた。

(逃がさない、つてことか)

ここまで来たら腹をくくるしかない。部屋の中には石碑が一つ、中央にあるだけだった。その前には、いくつかの像。近づくと、線香のようなものが横にあることに気付いた。文字が読める位に近付くと、その線香もどきに火が付いた。よく見るとこの線香もどき、紐がいくつか括りつけてあり、その先には重りがついている。その下には金属と思われる受け皿があった。

石碑に書いてあった内容はこうだ。

其は魔を退けるものにして、甘美なり。瑞々しきもよきものなりけるが、その干したるものもよし。そのものを象るものに触れよ。しからば、最後の道の鍵は現れん。

・・・これまた。謎かけていうか、これ知識を問う類じゃねえか。

「これって、どういう意味だろう・・・?」

「それを考えろつてことだろ」

思わず隣のレインにツツコミを入れる。さすがにここを落とすと、命まで落とす可能性もあり得るかもしれない。ここは本気で当てに行く必要があった。

（魔を退けるもの・・・魔除けの類か？でも見たところ、お守りの類はなし。ま、そんなわかりやすいもんを置いておくわけもない、か。となると、それ自体が魔除けとなる、ゲン担ぎとかの類か・・・）

見たところ、そんなものに縁のある様なものはなさそうだ。モニュメントはどれも現実世界にある様なものだ。林檎、梨、ミカン、柿、桃・・・どれも果物ということくらいしか思いつかない。

ゴーンと一つ音が鳴った。思わずそちらを見ると、紐の一本が切れてその先の重りが地面に落ちて、その下の受け皿となつている金属に音が鳴つたのだ。そういえば昔、資料集でこんな時計があつたと聞いたことがある。もつとも、これが盛んに使用されていたのは軽く一千年以上前の時代だったようだが。古臭いものを使うものだ。

（ん、待てよ、今何か・・・）

何か引つかかった。線香というと、仏前に供える位しか思いつかない。その心は、確か線香の香りが成仏するまでの食事になるから、だったか。黄泉の国までの食事が線香の香りだけとは寂しいものだと思つたことをよく覚えている。——ん、待てよ、黄泉

の国？

「・・・そうか!!」

思わず大きな声が出た。隣で驚いた表情をするレインをよそに、俺は迷わずに桃を象ったオブジェクトに触れた。瞬間、そのすべてが消え去った。

『賢しきものよ。その英知を称え、易しき試練を与えよう。あくなき向上心の前にのみ、道は開かれん』

どこからかその声が響くと、俺たちの目の前に敵が現れた。HPバーは・・・2本。

「結局中ボス戦かよ」

「しかも二人で、ね」

後ろの扉は依然として固く閉ざされている。もしかしたら内側からなら開けられる類のやつかもしれないが、今、目の前の敵から背を向ける勇氣は俺たちにはなかった。

「ところで、なんで桃って分かったの？」

「その話はあとだ。まずはこいつをぶっ倒す」

「・・・了解!」

そういうと、俺たちは同時に剣を抜き放った。ボスの名前は・・・The Phantom scythe。幻影の鎌、か。見たところ、武器は鎌一本。俺鎌の対処苦手なのによ、と内心で毒づきながら、俺はまっすぐ走り出した。続いてレインも走り出

す。相手が威嚇するように鎌を振りかざす。それに怯むことなどは一切ない。

垂直に振り下ろされた鎌を、わずかに体を振ることで回避する。その回転のまま、裏拳を一発、剣を一回転しつつ切り払う。残心の要領で切り抜けてから構えると、続くレインは右の斬り払いを四回繰り返す、ホリゾンタル・スクエアを見事にクリーンヒットさせていた。レインの硬直より相手の行動遅延デレイのほう若干ながらも短い。その隙をついて攻撃しようとする背中に、今度は俺の剛直拳が脇腹に当たる。この手のモンスター独特の軽い手ごたえと共に相手が大きく吹っ飛ぶ。続いて硬直から抜けたレインが走って高くジャンプし、その位置エネルギーを活用したバーチカルをお見舞いした。続く俺の牙狼撃で完全にダウンを奪う。瞬間に、相手のHPゲージのうち一本の半分が飛んだ。と、言うことは、

「こいつ、もしかしなくても……」

「滅茶苦茶弱い……?」

俺とレインは思わずつぶやいた。少なくとも、これまでの中ボスや雑魚の群れ、フィールドを徘徊していた雑魚から考えれば異常なほど弱い。なるほど、易しい試練とはそういうことか。確かにこのくらいならば二人でも十分突破できそうだ。

「やるぞ、レイン。交互にソードスキルをぶちかまして一気にHPバーを削り飛ばす。こんなところに長居は無用だ」

「そうだね。それができそうな相手みたいだし」

そういうと、俺ら二人は一気に突っ込んでいった。

その後、その中ボス戦はものの3分で片が付いた。HPゲージが赤く染まると、その名の通り透過するという特殊技能を使ってきたが、完全に全力攻撃のみの攻めダルマ状態だった俺たちにとって、そんなものはほぼ無意味だった。というのも、透過するときはその場に棒立ちになるため、お互いそこに向かってピンポイントで攻撃を集中させて透過を強制的に解除させていたのだ。いくら雑魚中ボスといえど、さすがにこれは少し不憫になるボコボコ度合いだった。

「なんつー歯ぐたえのない・・・」

「でも普通の雑魚に比べればあったほうじゃない？」

「仮にも中ボスだからな。でも、俺としてはもつと強くないとやりがいつてのがなあ・・・」

「まったく、相変わらずの戦闘狂っぷりなんだから・・・」

いつも通りの会話をしながら、お互いに剣をしまう。そのまま、また俺が先導する形でダンジョンを歩いていく。

「あ、そういえば」

「なんだ？」

「なんで桃が正解って分かったの？」

「あー、それな。」

「魔を退けるもの」、これは魔除けを表すことはすぐに発想できた。その後の、「甘美なりて干したるものもよし」、だったか？これはおそらく干すことによる用途もあるってことだ」

「例えば？」

「今回の正解でもある桃とか、あとは柿とか芋とかは食用として使うよな。そもそもが、ドライフルーツっていうくらいだから、それだけだと果物全般はほぼOKだ。それ以外にも、稲を刈った藁とかは保温とかだけじゃなくて、納豆を作るのに使ったりとか、香りづけとかにも使うって聞いたことあるな」

「藁で香りを付けるの!？」

「所謂燻製ってやつだ。カツオのたたきとかに使う。俺も何回か食ったことがあるけど、結構いけるもんだぞ、あれ。」

と、話が逸れたな。とにかく、魔除けになつて、かつ干しても使えるものを探せばいいわけだ」

「で、その両方に合致するのが桃だった、ってこと？」

「ま、そういうことだ」

「・・・桃に魔除けの効果があるなんて、聞いたことないけど」

いまだに疑問が晴れない様子のレインを見て、俺はもしかしてと思つて聞いた。

「あー、もしかして、古事記とかつて知らないか？」

「名前しか知らない」

「やっぱりな。」

俺も細かくは知らないんだが、その部分だけ抽出して説明すると、古事記において、イザナギがイザナミに会いに行つて、その帰りにイザナミやらなんやらに追われることになるわけなんだが、その時に桃の実を投げつけて追つ払つた、つて逸話があるんだよ。転じて、桃の実には魔除けの力がある、なんて言われたりするつてわけだ」

「・・・よく知つてるね？」

「その手の学部に通つてるやつなら知つてるようなことだよ。まあ、俺が知つてたのはたまたまだけだな」

高校の授業がつまらないからと電子辞書でこの手のやつを讀んでいたことがまさかこんなところで役に立つとは本当に思つていなかった。

「行くぞ。ボス部屋までは近い」

「うん」

そういつつ歩く俺たちの光景はいつも通りの物だった。

俺の予想した通り、ボス部屋はすぐそこにあつた。数分歩いたらすぐそこに、という具合だったのだ。

「さすがに二人だと危ないから、今はここまでで下がるよ」

俺が何か言う前に、レインが言い切つた。

「ちよつと待つた、俺はまだ挑むとか言つてないだろう」

「どうせ挑む気満々だったんでしょ。伊達にコンビ組んでないよ。それに、前言ったこと、もう忘れたの?」

「いや、忘れたわけじゃないぞ。でも、偵察くらいは必要だろう?」

「それもそうだけど・・・分かつた。扉明けて、姿を確認するだけだからね」

「おう、分かつた」

本音を言うと、それが一番生殺しできついのだが、それを口にした瞬間に間違いなくピツクカタガー、最悪得物が飛んでくるので、言えるわけがない。

二人でそれぞれ、違う扉に手をかける。アイコンタクトで一気に扉を中に押した。二人が一步中に入ると、暗かつた部屋に徐々に明かりがとまり、中に鎮座するボスを照らし出した。

ボスは、見たところ人型か。だが、腕の本数が4本と多い。ついでに言えば、頭も二

つ付いていた。

「双頭の——」

「巨人、か」

冷静になろうとしても、今までと違う威圧が足を竦ませた。茅場は、4分の1という節目で何もなйдどころか、この迷宮区の雑魚相応に強力なボスを用意していたらしい。攻略組でも度胸があるほうだと自負している自分たちでこれなのだ。かなりの人数が竦んでしまうだろう。だが、それを奮い立たせるために自分たちがいる。それくらいは自覚していた。

「退くぞ、レイン」

本音を言ってしまうえば戦いたくて仕方がないのだが、ここでこの強敵に対して何も対策をせずに挑むほど、愚かでもなかった。ましてや今の自分たちは消耗しているのだ。

「……レイン?」

だが、隣の少女の反応はない。不審に思いそちらを見ると、レインはひどく怯えた様子でボスを見ていた。よく見ると、体が小刻みに震えている。

「自分の言ったことも忘れたのか、レイン!退くぞ!」

今度ははつきりと大声を上げながら言う。が、レインの震えは収まるどころか、酷くなっているように見えた。

ボスが吠える。ボス部屋どころか迷宮区全体を響かせるのではないだろうかというその咆哮に、完全にレインは竦んでしまった。

「……くそっ」

もはや手段を選んでなどいられない。そう判断した俺は、レインを抱えてボス部屋を離脱した。そのままの体勢で扉に体当たりしてこじ開ける。何とか通れるくらいの隙間から半ば飛び出すように離脱した瞬間、ボスが持つ両手剣の剣先が掠めるようにして過ぎ去った。が、何とか次の攻撃が来る前にボス部屋から離脱することに成功した俺は、ボス部屋の扉が閉まりながら、フロアボスが指定された玉座に戻っていく様をじつと見ていた。完全に閉じたことを確認してから、俺はゆっくりと息をついた。

抱えていたレインをゆっくりと降ろすと、俺は彼女の目を真正面から見つめた。そこにあるのは、深い動揺と恐怖の色。その状態を見て、俺はもう一つ、先ほどとは違う意味でため息をついた。

「まったく、手のかかる娘だ」

一つ呟きつつ、その手を取る。一瞬驚いたようにびくりと体が震えたが、それだけだった。それを確認して、その手を両手で包み込んで、俺はゆっくりと語りかけた。

「もう大丈夫だ。落ち着け」

そのまま暫くしていると、徐々にその目の色がいつも通りに戻っていった。

「ごめん、足引つ張っちゃった？」

「全く問題ねえから気にすんな」

「・・・そっか」

それに対するレインの表情は晴れない。が、ここはそのまま放っておくことにした。この手の問題は時間が解決するだろう。

「ま、とにかく。帰るぞ」

言いつつすたすたと先を歩く。こんなところに長居は無用だ。時々後ろを振り返りながら、レインの様子をうかがう。何度か雑魚と戦闘になったが、戦闘だけなら大丈夫そう。なら俺がわざわざ介入する意味はどこにもあるまい。とりあえず、レインの異変は頭の片隅に追いやることにした。

帰り道はどうにかなるだろう。そんな俺の甘い見立てはボス部屋から数えて二つ目にある謎かけ部屋であつさりと崩れ去った。というのももそこにはまた謎かけが、しかも行きとは違うものがあつたのだ。

「まさかと思つていたけど、マジだったとはな・・・」

「でもこれつてもとをただせば君のせいだよな？」

肩を落とす俺の横から入った的確なツツコミに対して、俺はふいと顔をそむける。確かに戦闘をしたがためにわざと謎解きを真面目にやらなかったところはいくつもあるが、俺だつてこんなところでそれが響くとは微塵も思つていなかった。

「とにかく、今は目の前のことをやるだけだ」

「まつたくもう……」

謎かけの問題と思われる石碑に向かいながら、自然に話題を逸らした俺の横で、レインが呆れたような—— 実際呆れているのだろう—— 声を出す。できるだけ自然な話題転換を狙ったところだったが、やはりうまくはいかなかつたようだ。

結局、その部屋の謎かけは解くことができずに、行きと同じように雑魚の群れとの戦闘になった。それを切り抜けると、これまた同じように扉が開く。それを何回か繰り返し、何度目かで変化が訪れた。その先に人がいたのだ。それが誰、いや、どの集団なのかは均一に整えられた装備ですぐに分かつた。

(これはまた、こういうところでは行き当たりたくない連中に……)

この、比較的上層となつて防具にも多様性が出てきてもお、均一に整えられた装備と色。アインクラッド解放隊、通称「軍」の連中だつた。軍というのは、第一層の自治方法と、その集団的特色ともいふべきものから生まれた、ある意味蔑称ともいえる呼称だ。

「アインクラッド解放隊だ」

「ロータス、ソロだ。こっちは一時的にコンビを組んでるレイン」

お互いに名乗りを交わし、紹介されたレインが軽く目礼する。正直なところ、この慇懃無礼というか、妙に高圧的というか、そういうメンバーが多いこの組織を俺は嫌っていた。実際、現在攻略組でも最大の人数を誇り、その戦力としては無視できない域ではあり、その画一化された命令系統は乱れというものに無縁といってもいいのだが、それと個人的な感情は別だ。

「君たちは、マツピングを済ませているのか？」

「一応、な。そっちは？」

「今から済ませるところだ。よろしければ、マツプデータを頂戴したい」

「俺は構わないが・・・どうする、レイン。これ、立派に商売になるぜ」

「うーん・・・。ロータス君に任せるよ」

「りよーかい。んじゃ、交渉と行こうか。いいか？」

「構わない。もとより、我々は要求する立場だからな」

「OK」

思ったより話の分かる奴のようで何よりだ。ここで、所謂脳筋的なやつはただ寄越せとしか言わないだろう。無論、実力行使という最終手段込みで、だ。

「情報付きになる代わりに、そうだな、5000」

「少々高いな・・・もう少し安くできないか？」

「そうだな・・・4000、いや3700」

「・・・もう一息、頼めないだろうか」

「分かった、3000。言っておくが、ここが底値だ」

「・・・感謝する」

そういうと、相手は金袋をオブジェクト化させ、俺に手渡す。プロパティでちゃんと3000あることを確認すると、俺はマップデータを羊皮紙にコピーし、手渡した。広げて確認し、「確かに」と相手が言ったことを聞いて、俺は口を開いた。

「じゃ、情報だ。マップのところどころに、少し広めの部屋があるだろ」

「ああ、ここから先もいくつかあるな」

「そこで謎かけがある。謎かけの種類はいままでダブったことがないから、おそらくストックは無数にある。だから答えを教えてやるとか、そういうことは無意味だ」

「謎かけが解けなかったら？」

「一定時間経つと雑魚が大量ポップする。閉じ込められるから脱出も不可。全滅させれば出れるから、目下有効手段はそれかな」

「・・・了解した。感謝する」

「いいってことよ。お互い困ったら助け合いつてな」

お互いやり取りを終えると、軍の連中はそのまま先に進んでいった。

「いいの？3000は安すぎたんじゃない？」

「問題ねえよ。ま、確かに3000ってのが底値だつていうのは嘘じゃないがな」

そういつつ、俺たちも今まで来た道を引き返す。軍はお堅いことで有名だが、あの頭はそこまで頭が固いわけでもなさそうだ。仮にも隊の安全を預かる立場だからある意味当然と言えるが、あいつなら大丈夫だろう。名前も知らない相手をそう断じながら、俺たちは街へと足を向けた。

11. 紹介、情報、新技

街に着いたことには、もうすっかり日が暮れていた。お互いこういう身だから、灯りには事欠かなかったが、それでも警戒すべきはちやんとしていた。夜は特に、その目視距離の短さから、いつの間にか囲まれて一方的に、という例は後を絶たない。だがそのあたりは手練れの二人、そんなことはなかった。

「はー、ようやく息がつける」

「なにそれ。おっさん臭いよ」

「そつちに比べればもうおっさんだよ」

そんなやり取りをしつつ、俺はリズの店に足を向けた。さすがにこれだけ酷使した後だ、耐久値も相当減っているに違いない。

「で、今からはどこに行くの？」

「ん、馴染みの鍛冶屋にな。さすがにこれだけ酷使したんだから、メンテくらいしておかないと後が怖い」（いろんな意味で）

今使っている武器は、すべて少なからずあの少女の手が入っている。これだけ酷使した時点で説教の一つ二つくらいはすでに覚悟済みだ。というか、その説教を恐れてぎり

ぎりまで使ったら割と本気で怒鳴り飛ばすだけでは収まらなくなる可能性がある。と、言うのは直感で感じていた。

「そーいやあいつはおたくと同じ年くらいだったな。紹介してやろうか？腕は俺が保証する」

「ロータス君のお墨付きなら信頼できるし、お願いしようかな」

「ん、んじやついてこい。こつちだ」

そう言つて俺は歩き出した。

「で、なんでこんなに耐久値減らしてんのよあんたは」

「悪かつたつて。連戦続きでなかなか戻るに戻れなくてさ」

リズの下にたどり着いて耐久値回復を頼んだのはいいものの、やはり小言は免れなかった。もとより覚悟していたのであまり気にはしていないが。

「得物を変えるつてことは考えなかつたの？」

「結構ギリギリの戦いだつたからな。得物を変えるほどの度胸がなかつた」

「それで得物が無くなつちやつたらどうしようもならないでしょうが。．．はい、耐久値フル回復」

「おう、サンキュ」

自分の得物を受け取って、ストレージにしまう。すると、リズの視線が俺の横に完全に固定された。

「ところで、その子は？」

「ああ、こいつな。お前と年近そうだし、紹介しようかなと思って連れてきた」

言いながら、軽く背中を押して前に出す。

「初めまして。リズベットっていいいます。見ての通り鍛冶屋です。メンテナンスが必要なら、今すぐにでもできますが、いかがいたしますか？」

「じゃあ、お願いします。あと、私はレインっていいいます」

そっくりつつ、自分の得物を差し出した。それを受け取ると、リズは砥石にその刃を当てて研ぎだした。

「確かに年が近いとは言ってたけど、まさか女の子なんて思ってたなかつたな」

「ちよいちよい噂は聞かねえか？腕のいい鍛冶屋のリズベットって」

「そういえば聞くような、聞かないような・・・」

「はい、お待たせしましたー。まったく、あんたもこれくらいで済むくらいにしておけばいいのじゃ」

「いいじゃねえか。俺は俺のスタイルってやつがあるんだよ」

「はいはい。あと他に何か御用なら承りますが、よろしかったですか？」

「あ、今のところは大丈夫です」

「……てか、なんでお前らそんなに他人行儀なんだよ。ため口でも全く問題ないだろうに」

「いやいや、初対面の人にいきなりため口とかかえて難しいよ?」

「そうか? キリトなんか、クライン相手には初対面からずつとため口だつて言つてたぞ」

「それは男同士だからじゃないの? あたしらは女だつての」

「同性同士つてことではどつちも一緒だろうが。年も近そうだし、ため口でいいだろ。俺が口出しするこつちゃないのかもしれないけどさ」

「ま、それもそつか。じゃあ、あたしのはリズでいいから。リズベツトだと長いでしよ?」

「あ、はい……じゃないや、分かつた、リズ」

やはりこの少女、人当たりはいいらしい。俺の時もため口に速攻で順応していたことを思い出しながら、俺はぼんやりとそんなことを考えた。

「うんうん、こんなにかわいい子と知り合いになれるとか、やつぱり生産職つてこういうところがいいわよね」

「え?」

いきなりのこの言葉に、レインは素でかなり驚いたようだった。

「いやだつてさ、かわいいは性別を超えた共通財産でしょ？つてわけでフレンド登録しよ」

「え、あ、うん、いいけど・・・」

そういうつつ、メニューを操作するレインはいまだにペースがつかめていないらしい。俺の時は名前ネタで無理矢理こつちのペースに持つていったから、同じ真似は不可能だ。

とにかく、この分なら心配はいらないだろうと思いつつながら、俺はぬるりとその場を後にした。

この後あっさりと消えた俺に、二人が少々以上にドタバタすることになるのだが、それはまた別の話だった。

そこから離れた後に、俺はある人物に会いに向かっていた。

「よ。相変わらず早いな」

「時間を守らない情報屋ほど信じられない者はいないと思つているからね」

今の時刻は20時少し前といったところだ。待ち合わせの時間は20時だから、お互いに少し早いということになる。

こいつは「ゲイザー」、情報屋だ。観測者という名前に恥じないほどの情報の詳細

さ、そして特に個人やパーティ、ギルドの情報を得ることに長けていると有名な情報屋だ。アルゴが速度と正確さを重視するのに対して、少し時間がかかっても詳細な情報が欲しいときはこいつに頼る、というやつも少なくない。が、その反面、こいつの情報相場はやや高めで、しかも必要ならば売る相手は選ばないという悪辣さも秘めている。が、俺はそういうこいつのスタイルが気に入ってちよくちよくこいつから情報を買っていた。

「で、情報はいくらだ？」

「9000」

「少し高くねえか？」

「8000」

「・・・わーっただよ」

実際、結構危ない橋を渡らせるかもしれない情報を要求したのはこちらだ。文句を言う筋合いはない。内心ではわかつてはいるが、情報量だけで8000というのは、想像していたより少なかさんだ出費だった。

（必要経費だから仕方ない、か）「で、情報のほうは？」

「少し量が多くなってしまったね。ここにまとめたから、あとで読んでみてくれ」

そう言つて手渡されたのは本。この世界では羊皮紙が一般的だ。羊皮紙一枚の厚さ

からすると、ここまで調べるのはそれなり以上に骨だっただろう。

「OK、サンキュ。それと、これ追加料金。受け取ってくれ」

よもやここまで調べてくれるとは思ってもみなかった。安価に値切ったことを後悔しつつ、俺はさらに2000コル実体化させて渡した。

「いいのかい？」

「いいって。もともと頼んだのはこっちなんだし。受け取れないってんならボーナスでも受け取っておいてくれ」

「・・・そうか。じゃあありがたく」

「ほんとサンキュな。またな」

「ああ、また」

言いつつお互いその場を後にする。その後、俺は心のうちがまるで氷が生成されるように冷えていくのをはつきりと感じた。

さつき受け取った情報はあるパーティ、いや、小規模ギルドの情報と、あるプレイヤーについてのものだった。数人からなるその小規模ギルドは、普通なら問題にならないはずだった。

「よもやこんなところで会えるかもしれないとは・・・。皮肉って呼んでいいのかねえ」
だが、その一般的な見解は、“俺の知り合いでなければ”という但し書きの元で、し

かも対象が俺というかなり限定された条件下で例外足り得る。今は必要ないかもしれない。が、俺の嫌な予感が正しければ、いずれこれが重要な意味を持つ。外れてほしいと思う傍ら、外れてほしくないと思う自分がいることはもうどうの昔に自覚していた。必要なことなら、手段を選んでいる暇はない。俺たちがこうしている間にも、リアル体がどうなってもおかしくないのだ。手段を選んでいる時間があれば行動すべきだ。

拠点の部屋に戻ると、俺はさつそくゲイザーからもらった情報本を広げた。そこに書かれている情報は、俺が望んだ以上の情報だった。

「さすがゲイザー、名前は伊達じゃないな」

まずはさつと一通り流し読む。そこに書いてある情報から、まずは目下必要なところをチヨイスして読む。

「あった、こいつだ」

そこにあつたのはあるプレイヤーの情報だった。例の先ほどの小規模ギルドとは別口で頼んでいた情報だった。

今から考えて、三か月ほど前の話だったか。武器の強化を装って強い武器を半ば強奪するという、強化詐欺が横行した時があつた。その時に、強化詐欺の手口を教えたプレイヤーがあつた。そのプレイヤーはどうやら、オレンジプレイヤー——犯罪行為に手を

染めたプレイヤーの総称だが——にその手口を教えているらしい。今はその程度で済んでいるが、この手のやつというのは完全に穴熊を決め込むか、最終的に自分の手を染めるかだろう。どちらにせよ警戒しておくに越したことはない。そのプレイヤーは、四六時中ぼろぼろのフード付きポンチョということだから、身元の特定は楽だった。

プレイヤーネーム、P.O.H. 由来は今のところ不明。時々英語などのスラングが混じる喋り方からマルチリンガルと推測される。英語が多いこと、その発音や言い回しから、おそらくは渡米したことのある人間、ないしは在日アメリカ人と考えられる。

ギルドやパーティに所属していない、完全なソロ。行動原理は不明。だが、どこかプレイヤーたちの憎悪や絶望といった、ネガティブな感情を煽って楽しんでいるような一面が見受けられる。

メインアームは短剣。その扱いのうまさから、リアルでも短剣ないしはそれに準ずるものを使用する武道の一種を習得していたか、アーミーコンバティヴ軍隊格闘術を習得している人間であると推測される。それゆえに、自衛官もしくは兵役経験者である可能性あり。

そのほかにも、身体的特徴や推測される現時点での拠点など、ゲイザーが手を尽くしたというのが痛いほどに分かる情報量だった。これがほとんどのページにある、とは考えづらいが、それなり以上の情報量が積み込まれていると考えるべきだろう。さすがに俺もここまでとは考えていなかった。チップを増額しておくべきだったかと俺は半ば

以上に後悔した。

とにかく、相手はわかった。この情報は、今はこの手の中だけに留めよう。徒に恐怖を煽るのはよくない。ただでさえ今回は強敵揃いなのだ。その親玉が弱いはずがない。苦戦は必至だ。

それ以外のデータにも目を通す。正直なところ、役に立ってほしいようなほしくないような、微妙な心境だった。俺がこの情報を手しようと思った動機を考えれば、役に立たないのに越したことはないのかもしれないが。

その本に目を通してしていると、眠気が襲ってくるのを感じた。視界の隅に表示される時間を見ると、読みだしてから数時間が経過していた。道理で眠くもなるわけだ。こういう時は欲望に従ったほうがいい、というのは今までの経験則だ。いったん情報書をストレージにしまうと、俺はベッドに寝転がった。その体勢でゆっくりと考える。

(今回のフロアボス、あいつは厄介そうだ)

双頭の巨人。二対の腕には両手剣と両手槍。どちらもリーチのある武器だ。それにあの武器の振るスピードは、攻略組のような毎日剣を振るう人間の速度に通じるものだろう。そうやすやすと打ち破れる敵ではない。そして、レインが棘んだのも納得のいく、あの威圧感。データの集合である以上、威圧感などというものはこの世界には存在しないと思っていたが、それは俺の思い過ごしだったらしい。おそらく呼吸音の大き

さ、姿勢、視線、その他諸々が合わさってそういつたものになってきているのだろう。俺はそういうのを感じると逆に奮い立ってしまうので大丈夫なのだが、いくら肝が据わっているといつてもレインは女の子だ。疎んでしまうのも無理はない。

有効な対策というのなかなか思いつかない。しいて言えば、ダメージディーラーに攻撃の回避を要求するとか言う無茶苦茶くらいだ。でも、そんなことを言おうものなら攻略人数は明らかに減るだろう。だとすれば・・・

「考えるのは後にするか」

思考の泥沼にはまっつていきそうな感覚を覚えた俺は、今度こそ自身の欲望に従つて意識を手放した。

その次の日、俺は迷宮区から少し離れた明るい森を歩いていた。ここは夜だと迷子になりやすいポイントで、狼なども出没する。囲まれて一方的になるときは大抵この狼モンスターたちの仕業だ。切り抜けるには、俺がやったようにスタンや麻痺で動きを止めて一気に撃破するか、一点突破で突破口を開いて切り抜けるか、森という地形を利用してアクロバットに回避しつつ飛び越えるというくらいしかない。もつとも、アクロバットなどリアルでその手の職にでもついていない限り成功しないし、広範囲スタン技なんてそうそうあるはずもなく、結果的に一点突破でぶち抜くのが一番確実でよく使われる

手だ。そもそも囲まれる前にさっさと離脱するに越したことはないのだが、発見が遅れると即座に囲まれてしまう。煙幕の類を持っていれば話は別なのだが、その手のアイテムは現時点だとNPCから高額で買い取るか、その手のスキルを持つているプレイヤーに依頼して作成するしかない。そのリスクと表裏一体だからというのもあつてか、ここはそこそこ以上にいい狩場だ。集中を切らせればお陀仏になること間違いないが。

昼では、そこまで迷子にはならない。囲まれるリスクも少し低めだが、厄介な敵が出て来る。

「・・・来たか」

かすかに聞こえる足音を耳が捉える。静かに俺の右手が剣に伸びた。ほとんど音を立てずに奇襲してきた人影に無造作に剣を振るう。軽い金属音と共に放たれた短剣を弾く。弾いてその先にいる暗い緑色の衣装の相手をはつきりと見る。

厄介な敵というのはこいつだ。所謂アサシン、暗殺者の類だ。薄暗い森の中に溶け込むようなその迷彩は本当に見づらく、戦い辛い。夜でもおそらく出るのだが、狼のほうエンカウトが遭遇率が高いこと、遭遇してもプレイヤー側が逃げて終わらせることが多いことからあまり警戒をされていない。狼は追ってくるが、この暗殺者は追つてこないからだ。だが、カラーカーソルと音、それに単独行動することがほとんどという特性上、慣れてしまえば力モだ。それに、その戦い辛さからか、経験値はそこそ落としていく。遭遇

率はそこまで高くないのだが、経験値と狩りやすさから俺はここを狩場としていた。しかも、その特性からあまり他のプレイヤーが近づき辛いため、結構独占することができた。

リーチが短い代わりに扱いやすさに長けた短剣を、まるで体の一部のように操り、こちらに攻撃を仕掛けて来る。それを見切り、すれ違いざまに首に攻撃を叩き込んだ。ソードスキルこそ使わなかったものの、背後で暗殺者の首が落ちる音と、続いてHP全損を示すポリゴンの炸裂音。念のため振り返って安全を確認すると、俺は剣を振って鞘にしまった。

気を抜くことはできない。だが、それはソロである以上ほとんど常時だと言っている。それに、幸いなことにここは静かだ。自分の音と他の音を聞き分けるのは、俺からしたら簡単なことだった。

そのまま暫く歩いていくと、ガサガサと周囲から音がした。瞬間に、今までとは違うレベルまで警戒と集中を上げる。今までも何度か複数の暗殺者を相手取ることがあったが、この音は明らかに今まで同時に戦った最大数より遥かに多い。

(これは、ちつとばかしやばい、かな)

いくら強い相手や逆境に奮い立つ俺でも、強すぎる逆境の前には怯える。それが今の俺だった。

「ビビってる場合じゃ、ねえよな」

昨日パーティを組んで、はつきりと分かった。レインの存在というのは、思いのほか俺にとって大きかったのだ。あいつがいるから、俺は生きたいと思える。それを今ははつきりと自覚していた。自覚したからこそ、

「こんなところで負けるわけにはいかねえんだよ」

素早くメニューを操作し換装した刀を握る手に力を籠める。今の俺の筋力値、鬼斬破の切れ味とステータス、今までの経験、すべてをもつてすれば、この場でも生き残ることは可能だ。何となくとしか言いようがないが、それをはつきりと感じていた。

ただ静かな均衡は敵側から崩れた。飛びかかってきた相手を倒すのではなく、あえて体を右に捻って躲す。続いてかかってきた相手を投げ飛ばし、さらにかかってきた攻撃は横に飛んで躲す。追加で飛び込んできた敵をあつさりと鬼斬破で斬り捨て、そのまま包囲網をあつかりと突破した。この量の敵を殲滅するのはさすがに無理だ。適当に相手をして、撤退するのが吉だろう。先回りして仕掛けてきた暗殺者を素早く右左と刀を振って斬り捨てて。そのまま突っ走ると、目の前にさらに一人出てきた。今度は刀ではなく、左手で殴り飛ばす。想像していた以上にクリーンヒットしたレバーブローに相手が悶絶する。その隙に迷わず首を落とした。死んだことを確認せずにそのまま走る。すると、先に新たな影が現れる。軽く舌打ちをしつつ、後ろから飛びかかってきた三つ

の影の真ん中を潜りながら切り上げ、躲しつつ斬った。その時に、壮年というより老年の男の声が響いた。

「お前たちは下がっておれ。東になったところで、こやつには敵うまい」

そこでようやく、俺は目の前に他とは違う人物がいることに気付いた。

「てことは、あんたが親玉か」

「いかにも。ハサンと呼ばれておる」

ハサン。確か山の翁と呼ばれた暗殺集団の頭領だっけか。面倒な相手が出てきたもんだ。

「で、なんでわざわざ親玉直々に登場したんだ？」

「何、手塩にかけて部下たちを、こうもやすやすと倒されて、おめおめと隠居を続けるなとで、きんよ」

「なるほど。で、俺に何をしてほしいんだ？」

「知れたこと。わしと手合わせをする、それだけで構わん。さすればわしの秘法を一つ、教えよう」

直後にハサンの頭上に「！」「！」マークが出た。なるほど、隠しくエストの類いか。

「なるほど、そりやなかなかない話だな」

技を教えるのはこの爺さんだろう。てことは生かさず殺さず、つてか。うまくいくか

な。

「この身は確かに老いておる。だが、侮るのではないぞ、若いのに」

「言われなくても慢心なんかしねえよ」

そう言つて構える。右足を前に、右手は体側に。刀は地面に触れない程度に下げ、左手は体の後ろに隠した。

「行くぜ、爺さん」

「いつでもかかつてまいれ」

その言葉に甘え、一気に肉薄して斬り上げる。が、それは隠し持った短剣によつて容易く防がれる。もつとも、これくらいは俺も想定済みだ。だからこそ、俺は左手で間髪を入れずに正拳突きをかました。こちらは、バックステップで回避される。その際に投剣をされるが、これは容易く防ぐことができる。が、俺はあえて大きく回避した。その判断は結果的には正解で、直後にもう一本短剣が飛んでくる。その位置は先ほどの攻撃を防いだり、最小限の動きで避けたりしていれば確実に当たつていただろうというのが分かるような位置だった。今度こそ攻撃を防ぐ。が、今度は防ぎつつ前に踏み込む。この刀はリーチがそこそこ長い。数歩踏み込めば確実に射程距離に入る。それが分かっているからこそその判断だった。だが、相手も馬鹿ではない。後ろに飛んでそれを躲すと、再び投剣。片手で防ぎながらも片手でこちらも投剣。相手の小剣が甲高い金属音

と共に弾かれ、こちらの小剣が相手の膝頭に突き刺さる。

「ぬう……!?!」

「はあああああああ!」

相手の動きが一瞬だが確実に止まった。その隙をみすみす逃がす訳はない。素早い踏み込みと共に大きく胴を斬る。斬り抜けて残心のように向き直ると、ハサンは片膝をついて、くつくつとその体を揺らしていた。

「いやはや、慢心するなど言っておきながら、こちらが慢心するとはな。」

「誇れ、若人。これほどの一撃を浴びせたのはお主が初めてだ」

「へえ、そりやまた。で、これで終わりか?」

正直、これで終わりではあまりにも呆気なかった。そして、その俺の予想は的中することになる。

「いやいや。ここからが本気の本気、というやつよ。使うとは思っていないんだが」

そういうと、爺さんは短剣を取り出し、指の間に挟んだ。俺はただ単に複数本を、時間において投げているからできていただけだ。それも二本持った状態が限界だ。だがハサンは四本も持っている。傍から見ればそれは意味の無いことだ。そんな持ち方でコントロールなどつけられるわけがない。しかも、スローイングタガーより少し大ぶりの短剣でそれをやろうとしているのだ。だが、この場面で出すということは少なからず

意味があるということなのだろう。

「さて、では今度はこちらから行くぞ、若いの」

「ああ、いつでも来い」

油断なく構える。突っ込んだところに数本一気に投剣が来る。信じられないことではあるが、そのすべてが命中コースであると直感した。すべて躲すのは不可能。ならば、

(致命傷だけ避ける。こうなったら少々のダメージは覚悟だ)

頭と膝頭の部分だけを防ぎ、躲し、それ以外の体に当たるものはあえて防がずに突っ込む。行動遅延^{ディレイ}が少し発生する中を強引に進んでいるからだろう、進む速度は想像以上に遅い。だがそれでも、一步一步確実に歩を前に進めた。投剣の雨をくぐり抜け、ようやく射程圏内に納め、こちらの攻撃を当てようとした瞬間に、俺の喉元に短剣が突きつけられていた。

「・・・参った。読まれてたってことか」

「左様。

若いな。それが長所でもあり、欠点でもある。よく覚えておけ」

短いやり取りの後にお互い武器を納める。

「さて、約束は約束だからの。わしの秘法を教えよう」

そういうと、爺さんはこつちに歩いてきた。

「どうやらお主、投剣はそこそこやるようじゃな」

「ん、まあ、な」

「ならば、これがよいじゃろう。先ほどわしが使った技を覚えておるか？」

言われて、俺の脳裏には指に複数の投剣を挟んで一気に連続で投げてきたのを思い出していた。

「ああ、あの一気に何本も投げるあれか？」

「そうじゃ。まさにそれを教えよう。難しい技ではあるが、お主なら使いこなせよう」

「そう、か」

それから俺は、爺さんの教えの下に、短時間で気の遠くなるような本数の投剣を行った。正直に言つて、ここまで投剣をしたのも、こんなに繊細にコントロールの訓練を行ったのもこれが初めてだった。なんとかあくせくしてこれをクリアしたころには、もうどつぷりと日が暮れていた。

「さすがじゃな。わしが見込んだ日よりよっほどか早い」

「これで早いほうなのかよ」

思わず地面に大の字になったところに、ハサンの声が降ってくる。半日で習得できたというのは早いかもしれないが、神経はかなりすり減らした。確かにこれによって習

得できた投剣のエクストラMod、並列投擲は便利だが、この消耗に似合う利益かといえれば微妙なところだ。

「当然じゃ。普通なら日をまたぐからの。」

さて、再び手合わせしたのであればまた来るとよい。新たな秘法を授けるかどうかは、その時のお主次第じゃ」

「ああ。そうさせてもらおうよ」

そう言つて、俺は立ち上がった。結果的には今日一日レベリングをさぼったことになるのだ。明日から本気出す。その覚悟の下に、俺は森の外に向けて歩き出した。

12. 不穏と出会い―第二十五層フロアボス攻略会議―

その次の日の昼、第二十五層攻略会議が開かれた。

「さて、いつもだけどもみんなありがとう。知ってる人も多いと思うけど、俺はディアベル。第一層からずっと攻略レイドのリーダーを務めさせてもらってます。みなさんがよければ、また今回も務めさせてもらいます。よろしいですか？」

その音頭に、そこかしこから拍手の返答が返ってきた。
「ありがとう。では、改めて攻略会議を。」

また今回も、多数の情報が寄せられた。これに関しては皆、特にその中でも多くの情報を集めてきてくれたALSの皆さんには感謝です。この場でプレイヤーを代表して言わせてください。本当にありがとう。

今回のボスは“The Double Titan”。双頭と四つの手足を持つ巨人で、その腕には両手剣と両手槍が握られている。こちらの情報では、それぞれのソードスキルの重さは今までの比ではなく、しっかりと防御したタンクプレイヤーが一撃でゲージを警戒域イエローまで落としたという情報もある」

その言葉に周囲が騒然となった。防御をがちちりと固めているタンクで一撃警戒域

ということは、その防御の分を攻撃に上乗せするビルトのダメージディーラーがクリー
ンヒットをもらったら、ほぼ確実に一撃危険域^{レッド}、最悪一撃死もあり得る。もつとも、一
撃死というのはさすがに考えられないが。

(・・・正直に言えば、考えたくないよな。そんなこと)

その暗い雰囲気を感じたのか、ディアベルが手を叩いた。

「はいはい、気持ちわかるけど、あれこれ考えるのは後にして、今は話を聞いてくれ。
確かに一撃は重たいけど、両方とも剣を振る速度にこちらと大きな差があるわけでは
ないそうなんだ。つまり、片手剣並みの速度で両手剣が飛んでくるとか、そういうこと
はないといっている。両手剣も両手槍も、それ相応くらいの速度でしか飛んでこない。
ちゃんとモーシヨンを見ることができれば、回避は十分に可能だ。

敏捷性に関しては、見た目に違わずそんなに高くない。むしろ、一般的な基準で考え
れば低い。最悪、レッドゾーンになったら足で無理矢理振り切ることは可能だろう、と
のこと。

俺が現時点でつかんでる情報は以上だけど、何か他に意見とか情報とか、あれば出し
てくれ。できれば明日にでもこの層は突破したいから、今日で話し合いは終わらせた
い」

「ちよお待ってんか、ディアベルはん」

最後の言葉に、キバオウが手を上げた。キバオウは攻略において、できうる限り多くのプレイヤーに分配すべきという考えを持っていたことで、その利をある程度独占しても仕方ないというディアベルと袂を分かち、今はアインクラッド解放隊という一大ギルドの長となっていた。もつとも、ALSはその命令系統や規律の強固さなどから、半ば蔑称として「軍」と呼ばれているが。

「何だい、キバオウさん」

「今回は四分の一つで節目や。茅場が何らかのギミックやなんやで、このボスの難易度をはね上げている可能性は十分にあり得ると思うんや。せやから、わいらALSボス攻略隊は今回、人員を大幅に投入する」

「へえ、確かに、人が多ければそれだけ生存率も上がる。それは助かるよ」

ディアベルの言った通り、人が多ければいざとなった時のカバールなども含めて楽であることは確かだ。だが、多すぎると逆に命令系統が混乱し、かえって危険になる。が、軍ならあるいは・・・と、俺は思った。総じて、これは有効だという結論だ。ならば、なぜここで提案する？軍の連中が大量に人員を投入するなんて今に始まったことじゃないかろうに。

「正確には大幅増員、やけどな。できれば今回はツールレイドで挑めるくらいに投入したい、と考えると」

それに、ALS以外の攻略組がざわついた。

「無論、全体リーダーはあんさんに任せる。軍のリーダーはわいが務める。あんさんと連絡役も、わいが担う。こつちがぐだったら、わいが全責任をとる。どよろか?」

その言葉にディアベルは少し考えている様子だった。それもそうだろう。いくらなんでもツアーレイドとなると最大100人近くがあこのボス部屋に集中することになる。ある程度顔見知りならともかく、それだけぶち込むとなると知らない人間も大量に入ってくるだろう。そうなれば、連携をとるのは難しい。

「全体に聞いてみようか。今のキバオウさんの意見、反対だという人は手を上げてくれ」その声に手を上げたのはちらほら。やはり俺と同じ懸念を抱いた人は少なくないのだろう。だが、それはあくまでごく少数に過ぎなかった。

「そ、つか……。ありがとう、手を下ろしていいよ。反対の人には申し訳ないけど、ここはツアーレイドということで納得してもらえるかな?」

それに対する反対意見は出なかった。ディアベルのことだ、これでもし反対多数ということならば考え直しただろう。だが、反対意見が少ない状態でわざわざ却下するほどの理由はない。

続くディアベルの言葉にも反対意見は出なかった。

「うん。なら、今回はツアーレイドで挑もう。」

キバオウさん、ALSはどのくらいの人数を投入できる？」

「せやな・・・最大で50、つてとこや」

「増加分は30、か。よし、なら聖騎士連合も増員しよう。そうすれば、フルツレーイドに近い形で臨める。大抵の状況には対応できるはずだ」

「やっぱり慣れてない感じだな、ディアベル。聖竜連合から呼称を聖騎士連合にして日が浅いからか。ちなみに聖竜連合から聖騎士連合になったのは、今まで似合わなかったというのと、少し前にボスドロップでディアベルがマントを手に入れたことに起因する。」

「ま、やっぱりそっちのほうがあんたには似合うけどな、パラディン聖騎士様？と軽く茶化すような目線を送る。と、向こうはそれに気づいたのか、微かに照れたような表情を浮かべた。それから参加するギルド、パーティの頭が集まって人員調整をした後、ディアベルが周囲に向けて号令をした。」

「さて、では毎回恒例だけど、パーティを組んでくれ。その後で、どちらにつくかの希望を取りたい。数が揃わない分はこつちで振り分けさせてもらうけど、それは妥協してくれ」

ディアベルの号令でプレイヤーが三々五々に分かれていく。今回もディアベルに加わろうかと思えば彼に近寄ると、向こうからこちらに気付いた。

「ごめん、ロータス。今回君は別パーティになつてくれるか?」

「・・・何があつた」

そのディアベルの表情がいつもより硬く暗いことに気付いた俺は声を潜めて言った。

「気になる情報があるんだ。例のPK集団が、こつちにもちよつかいをかけるかもしれないつて。同じパーティじゃなくても全体の監視と情報共有くらいはできる。むしろ、今は——」

「少しでも違う視点が欲しい、か。分かつた。どこに入れてほしい?」

「そこまで指定するほど面の皮が厚いわけじゃないよ。でも、」

「そこでいったん区切つて親指で俺の視界の外を指差した。そちらには、こつちに向けて手を振る少女の姿。」

「それを考える必要はないんじゃないかい?」

「みたいだな」

短いやり取りの後に、俺は少女の下に歩いていった。

近くまで来ると、向こうから俺に近付いてきた。

「ディアベルさんと何を話してたの?」

「ちよつと、な。今回は向こうの考えで、別パーティになつてほしいらしい。そつちに空

きは？」

「丁度こつちでもその話をしてたのよ」

新たな声に顔を向けると、そちらには、新調したと思われる白に赤い縁取りがされたプレストプレートを付けた少女がいた。

「アスナか。久しぶりだな」

「ええ、久しぶりね、ロータス君。レインちゃんも」

そう言ったアスナの表情は柔らかい。第一層であの捨て身の攻略を行っていた人物とは思えないほどだった。

「はい。どうなんですか、今度入ったギルドって」

「良いギルドよ。小さいけど精鋭揃いで、少なくとも今は私が女だからって侮られたり無駄に崇められたりってこともないし」

「おっと、おしゃべりはそこまでだ。」

で、アスナ。パーティメンバー云々の話、もしかしてそつちのギルド絡みの話か？」
女子同士の会話をぶった切って推論を述べた俺に、アスナは顔を引き締めた。

「ええ、その通りよ。今回の攻略に私のギルドも参加するんだけど、人数が半端でね。今までのボス攻略ならそれでよかつたんだけど、今回のこの様子だともう少し協力者が欲しいの」

「なるほどな。で、俺に目を付けたと」

「正確には君たちね。二人が入ると、丁度よさそうだから。どうかしら」

確かにそれだとかかなりの少数精鋭だな。それなら、ある程度即席の連携もうまくいくかもしれない。

「俺としては断る理由がないな。あぶれ者だし」

と、俺。

「私としても、アスナさんと一緒に戦えるのは久しぶりなので、楽しみです」

それに続く形でレインもそれに従った。

「さて、じゃあ団長に言ってくるね」

くるりと背を向けて去っていくアスナの背を見ながら、俺は変化を感じていた。まあ確かに、この世界に囚われてから早半年。変化は多かれ少なかれ起こるだろう。肉体的な変化はなくとも、精神的な変化は様々なところに影響を及ぼす。アスナにしても、俺にしても、おそらくキリトやレインもそうだろう。それでも、アスナは本当に前を見て歩き出している。それを改めて感じていた。

「・・・若者ばつか大人になってくねえ・・・」

ため息交じりにつぶやいた声が二人の耳にも入ったのだろう、レインが怪訝な顔をすする。それに「なんでもない」と答えながら、俺はアスナのほうに目をやった。と、

「アスナが呼んでる。いくぞ」

俺のその言葉に促されて、俺たちはアスナと彼女の言う団長の下に足を運んだ。

アスナたちのギルドの団長は、長身痩躯で、どこか鋼のような雰囲気のものだった。俺もこうして間近で見るのは初めてだ。

「増援というのは、彼らかね？」

「はい」

短いやりとりの後、団長はこちららに向き直った。

「私はブラッドアライアンス^Aの団長、ヒースクリフだ。このたびは協力感謝する」

ブラッドアライアンス・・・血の同盟、か。なかなかいい趣味をしている。

「ロータスだ。こちらこそ、パーティに入れて貰えて助かった」

「レインです。よろしくお願いします」

それぞれの名乗りを聞いて、ヒースクリフは微かに笑みを深めた。

「なるほど、ね。アスナ君から話はよく聞いているよ。」

さて、と。君たちは、やはりといったは何だがダメージディーラータイプみたいだね。

では、ステータスはどうに振っている？」

「結構AGI寄りです。アスナさんほどじゃないですけど」

「AGIに多め。だけど刀を片手で振れる程度にはSTRも上げてあるから、結果的にバランス型に近い。・・・やっぱりステバランスは違うか」

レイン、俺の順に明かす。同じレベルだとすると、STRは俺<レインになるんだろ
うな、というのはある程度戦ったことからついてた推測だったから、これ自体にはあ
まり驚きはない。むしろ問題は、

「どういう風に組めばいい?」

ということだ。これによって俺たちの戦略は大きく異なることになる。

「君たちはアスナ君の指揮するBA2隊に入ってもらおう。アタッカー側の指揮は基本的
にアスナ君に任せるから、アスナ君の指揮に従ってくれ。それで構わないかね?」

ヒースクリフの言葉に、全員が首肯する。それを見て、ヒースクリフは改めて軽く笑
んで声を発した。

「それでは、パーティ申請をしてきなさい。よろしく頼むよ」

「改めて、こちらこそ」

「はい。お願いします」

ヒースクリフに続く形で改めてお互い挨拶をする。

その日の攻略会議は、明日の昼13:00に、街の中央広場に集合するということを
最後に確認して解散となった。

解散となった直後、俺は即座に街を出て森——ハサンの森とは違う場所にある——に來た。今はまだ夕方だ。レベリングにはおあつらえ向きだ。

目の前の大蜂をポリゴン片に変えて、周りに敵がいなことを確認すると、俺はゆつくりと剣をしまった。蜂や蛾の類は、その大きな見た目を抜きにすれば空を飛んでいることが厄介たる条件にあてはまるが、俺の装備する刀は本来両手武器。リーチがその条件をほぼ無効化した。周囲を警戒しつつ歩いてみると、また蜂が数匹こちらに飛んできた。

「まったく、なんでここからはこんなに蜂々天国なんだよ」

呆れながらも一度剣を抜く。だらりと自然体でぶら下げ、敵の動きをうかがう。尻尾の針の突きをあつさりと躲してその羽の付け根に刃を当てて斬った。こういう使い方をするたびに、鬼斬破の切れ味の良さを実感する。羽根をもがれて地に墮ちた蜂を足で踏みつぶして俺は冷静に他の蜂の動きを見る。ほかの蜂は攻撃態勢に入つてこそいるが、今は威嚇にとどまっているようだ。

「なら、ここから行かせてもらうか」

素早くピックを左手で数本抜き、そのまま並列投擲で一氣にバックシユート。それらすべてが吸い込まれるように複数の敵に命中し、デイレイを引き起こす。そこを刀で横

薙ぎに二閃すると、あまりにもあつさりと蜂たちはポリゴンとなって消えた。こうしてみると、並列投擲というやつはなかなか便利だと分かった。

「ま、この蜂が群れている分には、俺としてもまったく気にならないんだけど」

しかもこの蜂、存外に経験値効率がいい。おそらく空に飛んでいるというのがその高めの数値の意味なのだろう。俺のようにカウンターを安定して成功させられるのなら、ここはいい狩場だった。そのうち、軍が管轄、もとい占領に入ると思うが。だが、

「あいつらがいるからこそ狩場の秩序が保たれているところはあるんだよなあ・・・」

アインクラッドでは、どういうからくりかいい狩場として広まると、その経験値効率が悪くなる傾向が高い。ならば、経験値効率が高いうちにその狩場に人が大量に集まるのは自明の理だ。だが少なくとも今のところは、軍が順番を作ったり時間を指定したりすることで狩場の秩序は保たれている。逆らおうものなら数の利をもって強制的にそのプレイヤーは排除されるため、実質的に逆らえない。大集団ならではの利点だった。

そんなことを考えていると、目の前には大きな球体が現れた。まるでスズメバチの巣を異常に大きくしたようなそれから、先ほど倒した大蜂が次々に飛び出していた。すでにこちらの姿を認めて、何匹かが威嚇体勢に入っている。

「・・・あつちや・・・」

「思わずそんな声が出る。蜂々天国だったのはただ単純に巣が近くにあったからという理由だったのだ。この尋常じゃなく大きな巣にいったい何匹の蜂がいるのかは知らないが、これはゲームなのだから無尽蔵に出て来るだろう。」

さすがにこんな戦いを仕掛けるのは無謀というものだ。

「三十六計逃げるに如かずってなあー！」

こういうのは逃げるに限る。武器をしまっただけ暇も惜しんで俺はさっさと逃げ出した。無論、蜂も大勢ついてくる。

「……なーんっつて」

ぼそりとつぶやきつつ、振り返りざまに腰だめに剣を構える。そのまま一瞬で踏み込みつつ放たれた斬撃は縦一列に近い状態で並んでいた蜂の群れをまとめて半壊させた。

「あっさり風味すぎて味気ないわー。つまんねーわー。てかああして逃げた時点で察しろよお前ら」

もしこれが人型NPCやプレイヤーがいたら本当に完全に煽り文句だっただろう。だが、普段の鬱蒼とした攻略会議のストレスが溜まっている身としては、これだけでも十分すぎるストレス解消だった。

結局、他の敵もあっさりと倒し終えたところで、蜂のテリトリー外に出たのか、ポツポツもほとんどなくなった。それを確認して、俺は森を出た。

リズに武器のメンテを頼み宿屋に戻った俺は、再びあのボスの姿を思い浮かべた。

（頭が二つだから腕とか足が多いのも、まあ理解できる。が、．．．足も四本必要か？腕は頭があるからどうにかなるかもしれないが．．．）

それに、25というのは50の次に大きい100の約数だ。そんな大きな節目に、何かかけてこないというのは考えにくい。少なくとも、ここまでは雑魚も中ボスもかなり強かった。

「ここで考えても仕方ない、か」

そう思いつつ、俺はしっかりとタイマーをセットして眠りについた。

13. 序の口―第二十五層フロアボス攻略戦、1―

ボス攻略当日。広場はいつも通りでもいつも通りではない雰囲気にも包まれていた。具体的に言えば、いつもよりピリピリとしていた。当たり前だろう。ツーレイドでボス戦に挑むなど先例がない。それだけボス攻略レイドの緊張感も高まるというものだ。

いつも通り15分前に来て、自分のアイテムなどを改めて確かめる。今ならまだ補給は間に合う。だが、日課のアイテム整理が功を奏し、回復アイテムなどが不足しているといったことはなかった。

「おはよ、ロータス君」

後ろからかけられた声にゆっくりと振り返る。そこには、既にブレストプレートを装備したレインがいた。

「ああ。元氣そうで何よりだな」

「もつちろん！強敵なんだから、準備はしっかりしないとね！」

最初、リトルネペントの群れに囲まれて震えていた少女がこうなるとは、人の適応力とはたいしたものである。誰がそうしたかって？知らんなあ。

「そう、か。慢心だけはするなよ」

「言われなくてももしないって。案外心配性だね?」

「まあな」

「こういう時の度胸は俺よりこいつのほうがあるんじゃないか。今の自分とこいつを見てみると、そんなことさえ思えてきた。」

「ちつとばかし、怖くてな。なんか起きそうで」

「珍しいね、強敵相手なのに」

「それとこれとは別だつての」

「今回俺が感じているのは所謂 “嫌な予感” というやつだ。この戦いがボス戦だけでなく、もう一波乱起きそうな、そんな予感がしていた。」

「・・・ま、予感的中しないことを祈るか」

「小さく呟いて立ち上がる。周りにはもうすでに多くのプレイヤーが集まっていた。」

「さて、と。そろそろ行きますか」

「そうだね。最後の打ち合わせもやっておきたいし」

「そういうえばそうだな」

「そんな会話をしながら俺たちは攻略レイドに合流した。」

最後の打ち合わせも終わり、総勢90名超という大集団がボス攻略に乗り出した。俺

たちはヒースクリフも含めたタンク陣が受け止めたりパリングしたりした瞬間を狙って一気にブレイクポイントを作って攻撃のチャンスを作るという役割を担う。俺たちは完全なダメージディールタイプばかりだから、おそらくその隙をつくということなのだろう。

こうしてみると、アスナがB Aは少数精鋭といていた意味がよくわかる。メンバー数こそ少ないものの、その中で各々がしつかりと己の役割を果たし、無駄がない。俺好みの良いギルドだった。アスナとしても、このようなギルドに入ることができたのは僥倖だったに違いない。

迷宮区までの道のりは、そんなことを考えていられる余裕があるくらいには楽だった。人数が多いのに、指令系統が混乱しないのは、軍のそれがあるからだろう。

そして、ボス部屋の前までたどり着く。ディアベルとキバオウが合図をして扉を開けた。開き切った瞬間に、ディアベルが剣を前に突き出した。

「全員前進！」

その声を守っていたと言わんばかりに、攻略レイドが突撃する。全体がボス部屋に入り、最初の突撃部隊が突っ込んできたところで、ボスが天高く吠えた。同時に、6本のHPゲージが出現する。相変わらず巨大なその咆哮の前に怯むことはない。いつぞやのレインのように、最初から恐怖を覚えている状態ならいざ知らず、普通の状態からこ

の程度を食らったところで怯むようなら、そもそもこんなところにはいない。

戦闘のタンクが最初に振ってきた両手剣をパリングする。ジャストタイミングできれいにパリングしたにも関わらず、それを行った本人は軽く呻いた。続いて行われたソードスキルによる攻撃もあまり効果を発揮していない様子だ。

(やはり、そうそう簡単に勝たせてくれる相手じゃないか・・・！)

確実にこれは長丁場になる。まだ戦いは始まったばかりでも、俺はそれを感じ取っていた。

やがて、前線のHPゲージが少しずつ危なくなってきたのだろうというのがこっちにも感じ取れるようになってきた。少しずつポーションを飲む人間が増えてきたのだ。今はまだパーティ内でカバーできる範囲のようだが、

「よし、A隊両方スイッチ準備！B隊、突撃準備！」

「了解！了解！」

B隊というのが俺たちだ。即座に帰ってくる返答は力に満ちている。

「さて、と」

もう片手の扱い方を心得た鬼斬破に手を軽く添える。一斉にA隊が揃ってソードスキルを発生させ、ボスが行動遅延する。

「スイツチ！」

前から入ってきた掛け声に、俺は微かに抜いてあつた刀をしつかり握つて前へ一步踏み出した。そこからもう少しだけ抜く。刀に光がともったところで、もう一步。瞬間、システムアシストで体が前へと一気に進む。その感覚を自分の体の動きでブーストし、一瞬で切り抜ける。微かに斜め上へ放つた、刀系ソードスキル「辻風」はボスのわき腹を切り裂いた。ぱつと見た限りでは紛うことなきクリーンヒット。が、俺は技後硬直ポストモーションの中で顔をしかめていた。

「ちっ……」(硬つてえ……しかも、浅い！)

ここまでのHPゲージの減り方から推測はついていたが、想像以上に硬い。そして、今の斬り角から察すると、おそらく相当浅くしか斬れていない。

だが、この俺の動きで行動遅延が上乘せされ、追撃を入れるには十二分な隙が生まれた。ヒースクリフを筆頭としたタンク部隊ががちりと前を固める。

「こつちこいおらあ！」「かかつてこいやあ！」「よそ見しとんなあ！」

俺が技後硬直から抜ける少し前に、タンク隊から揃つて雄叫びが聞こえる。おそらく、一時的にヘイトを大幅に高めつつターゲットを移させるハウリングスキル「バトルシャウト」だろう。あちらがヘイトを引き受けてくれたようだ。実際にそれはうまくいき、明らかにこつちに向いていたボスはタンクのほうへと目標を移した。それをいい

ことに、俺は隊に合流する。直後に、あきれ顔のプレイヤーたちに出迎えられた。

「相つ変わらざるの突撃思考ね」

「切り込み隊長は必要だろ?」

「事前打ち合わせというものも必要だけどね」

「いいじゃねーか、どういう風にやろうとよ」

「それで死なれたら困るだけど?」

アスナにあつさりとして反論したはいいものの、最後のレインの言葉と目に強制的に黙らされた。

「・・・はい、すみません・・・」

その反応を見て、アスナが嘖き出す。それにツツコミを入れようとしたときに、ヒー スクリフから号令がかかる。

「アタック隊、突撃!」

「先陣は私が」

「俺も手伝う」

短いやり取りの後、アスナと俺が飛び出す。それぞれの剣には光がともっていた。

「やああああっ!」「食らつと・・・けえ!」

アスナのシューティングスターと俺の疾風ノ太刀が両足に炸裂。ボスが派手による

けたところを、タンクを使った人間砲台で位置エネルギーをこれでもかと蓄えた一撃が襲う。あの動きはおそらく「バーチカル」だろう。もつとも、あれだけの高さからの振り下ろしとなると、振り下ろしというより唐竹割りに近い。どちらにせよ、相当な威力になることは疑うべくもない。

技後硬直に入った二人を、俺とアスナが文字通り放り投げる。強制的に隊列の最後尾に飛ばされたレインは空中で体制を整え、きれいに受け身を取って着地した。だが、文句は言われない。直後に振ってきた剣と槍は、俺とアスナ、そしてタンクの面々で見事にその威力を削がれていた。

「・・・ありがと」

「構わねえよ。数少ないアタッカーだしな」

後ろから聞こえて来る声には顔を向けずに答える。その目はまっすぐと目の前を見たままだった。

後ろから見てもそれと分かるほどに、タンク部隊には余裕がない。やはりこのボス、攻撃が相当以上に重たいのだろう。しかも鈍重というわけでもないから性質が悪い。

「俺たちもいこう。危険を冒しても、いざとなった時に一呼吸でフォローできる間合いにいたほうがいい」

「私も賛成よ。このボスは一撃が命取りだから」

俺の提案に、アスナが賛同した。もつとも、反対されたら余計に状況はこじれるのだが、

「反対するつもりはないよ。ここ一発の判断は信頼しても大丈夫そうだし」

その心配はなかったようだ。

「よし、なら微前進だ。数歩距離を縮めれば十分だろう」

その言葉で少し前に出る。瞬間に、パリングを微かにミスしたのか、タンクの一人が大きく体勢を崩した。

「ちっー」（言わんこつちやない・・・！）

一つ舌打ちをして一気に飛び込む。おそらくアスナもあとから続いているはずだ。両手のふさがった状態で完全に転倒してしまったそのプレイヤーはなかなか立ち上がることができない。対して、ボスは数歩下がって両手剣を上段に構え、ソードスキルを放ってきた。確かあれば、アバンラシュ。下手に受けると高いノックバックを食らう。そうなると、このプレイヤーの命はない。ならば、やることは一つ。

刀を腰より少し上、剣先を少し上にして体の左で構える。外すことは許されない、一発勝負。だが、そんなことは、

「・・・ちとら今まで何度も経験してんだっての！」

気合とともに跳躍する。放たれた刀は、俺の動きに従って円軌道を描き、一の太刀は

両手剣の側面を叩いて軌道を逸らし、さらに踏み込んだ二の太刀で腕を斬り裂いた。強制的に外された両手剣は、他のタンクプレイヤーががちりと受け止めたのは、音ではつきりと分かった。刀系二連撃ソードスキル「桜花気刃斬」だ。本来はもつと呼吸を合わせ、溜めを作ることと威力をさらにブーストすることが可能なのだが、今回はその必要は全くなかったし、している余裕もなかった。続いて、

「いやああああ！」

アスナの気合が入る。背中を向けているからどのソードスキルを放ったのかはわからない。が、俺の作った隙に叩き込んだのだろう。

「はっ！とう！せいっ！やああ！」

さらに続くのはレインのリズムミカルな掛け声。おそらくはホリゾンタル・スクエアかバーチカル・スクエアあたりだろう。だがボスもただ食らうだけではない。お返しとばかりに槍を放ってくる。が、それは、

「なめんなああ！」

とうの昔に硬直から逃れた俺がソードスキルなしで逸らす。そのままレインを後方へ投げ飛ばす。アスナのほうはAGIで無理矢理離脱しようだ。ということとは、

「・・・俺だけってか」

ぼそりとつぶやく。この間合いだ、逃れることは容易ではない。それに、レインを投

げ飛ばしている間に、向こうは剣を拾っていた。腹をくくるしかないか。そう思ったとき、

「どこ見とんだあ!」「お前の相手はこつちだあ!」「ふらふらしとんなあ!」

「C隊、スイツチ準備!」

後ろから聞こえるバトルシャウト。その声に混じったディアベルの声。それらを聞き分けた俺は、文字通り跳んで後ろに下がる。

「アスナ、悪いが一番槍頼む。俺、レインの順で続くぞ」

「了解!」

実質的な指揮権はアスナのはずなのだが、当の本人が承認したのならば文句はないだろう。そう思いながら、俺は大きく踏み込んで得物を振りかぶったボスの足にドライブツイスターをかまし、行動遅延を起こさせた。ほぼ間髪入れずにアスナがカドラプルペインを命中させ、レインがバーチカル・アークを当てる。連続で当たったことによる長い行動遅延を食らったのを確認したところで、とどめとして俺が蹴りを入れつつ後ろへと飛び退りながら、「スイツチ!」と叫んだ。瞬間に、C隊の面々が一気に突撃していく。後ろでB隊のタンクとC隊のタンクの交代を見つつ、ポジションの種類、飲む量からHPの減りをおおよそで推測する。

(あれは普通のポジションだな……がぶ飲みしてる感じでもない……。つてことは、

まだまだ行こうと思えば行けたってことか。なるほど、確かにこれは頼りになる戦力だ)

本当にアスナはいいギルドに参加したものだ。そして、このようなギルドがいるということは本当に頼りになる。背中を預けるに足る相手だということ、ここではつきりと認識した。

ボスのHPゲージが一本消えて、二本目も真ん中に差し掛かろうかといった頃に、ディアベルの号令が鳴り響いた。

「B隊、再スイッチ準備！C隊は念のためのカバーができるように準備してくれ！」

「了解！」

思わず口元が緩む。鬼斬破だけでは耐久値が心もとない。念のため、携帯砥石を持ってきてはいるから、ある程度耐久値回復は見込めるが、刀も曲刀もともとそこまで耐久値が高いわけではない。証拠に、俺の手には予備である店売りの曲刀をかなり強化したものが握られていた。ちなみに、こちらはどれを選んでもいいように、すべて鋭さと丈夫さを均等に、限界試行回数が奇数なら丈夫さ重視で鍛えている。

そんなことを考えていると、目の前で息の合ったウエポンバツシュが一斉に命中、ボスを行動遅延させた。

「スイッチー！」

その声に反応して俺が飛び出す。横で飛び出すもう一つの影、いや光がちらりと視界に見えた。

「いやあああああつ!!」

隣からアスナが一気に飛び出す。その光の色と軌跡からして、おそらくはリニア。最初期のソードスキルにして、アスナの代名詞ともなったそれはまさに閃光。

「ぜやああああああああ！」

続いて俺もリーバーを使って突撃する。連続でソードスキルが入ったことによる長い硬直の間に、タンク部隊がハウリングスキルでターゲットを引き受ける。初期ソードスキルの硬直の短さを利用してさっさと離脱すると、そこにはタンク隊を指揮しつつ時折痛烈な攻撃を与えるヒースクリフが目に入った。

「すげえのな、あのおっさん」

「ええ。ペース配分、どこに誰を配置するか、どの攻撃に対してどのように対処するのか、反撃を入れるタイミングとその攻撃。常に流動的になりやすい中で、それを常に考えて動いている。きつと頭の回転がものすごく早いんでしょね」

何の気なしの呟きはアスナの耳に入ったようで、追従する形で肯定する。

「ま、じゃねえとあんなことできねえか」

「そうね。・・・アタッカーはカバールをいつでもでもできるように。タンクにはころびができたらウエポンバッシュやソードスキルで援護して！」

「了解！」

やはり、俺なんかの付け焼刃の指揮より、アスナの冷静な指揮のほうがいい結果が出そうだ。いついかなる時も冷静に状況を分析できるからこそ、ヒースクリフもアスナに部隊を任せただろう。

丁度俺たちは囲いすぎずに前線を維持しているタンクに均等に割り振られているような格好だ。こうしてみると本当にBAというのはかなりバランスよく、それでいて安全なレベリングシステムが構築できていることが実感できた。こうもタンクが崩れないのであれば、アタッカーは隙を虎視眈々と伺い、一撃必殺を狙うことができる。つくづく少数精鋭だ。

まだ前線は崩れる様子はない。ボス戦は始まったばかりだ。

14. 変化―第二十五層フロアボス攻略戦、2―

HPゲージの3本目が消える。

「パターン変わるかもしれない、いったん下がれ！」

すぐに聞こえたディアベルの号令により前線が数歩後ろに下がる。その瞬間に、ボスが得物を放り捨てた。その剣の落下点には、

「ディアベル、上だー！」

俺の咄嗟の叫びが功を奏し、ディアベルは振ってくる剣に貫かれるという間抜けを冒すことはなかった。槍もくるくると周りながら軍のほうに落ちる。こちらはあまり混乱が出なかつたようだ。

「ありがとう、ロータス」

「気にすんな。・・・さて、」

その時の俺の目には、どこに刺さっていたのか、背中から剣と片手槍を二本ずつ取り出したボスがいた。

「どう攻めるかねえ・・・」

今までは得物が大きいのがゆえに助けられていたところもあった。得物が大きいとい

うことは、細かな操作がしづらいということでもあるからだ。これは俺自身が経験上でよくわかる。だが、今ボスが持つている剣は、サイズからしたら明らかに片手剣に近い。少なくとも、さっきの剣よりは小ぶりだ。それは槍に対しても言える。ということは、今までの守り方、攻め方は通用しないということに他ならない。

「全タンクプレイヤー、今後は危なくなつたらすぐに下がれ！最終判断はこつちでする！そこまでは何とか持ちこたえてくれ！」

「「了解」」

そこかしこから返事が返ってくるが、力はない。それもそうだろう。最終判断までは、さっきより早く息がつかない剣戟を捌き続ける必要があるのだ。

俺の記憶が正しければ、今タンクを担っているのはエギルたちのE隊だ。だが、これでは長くはもたない。もともと、エギルたちは両手武器の使い手が多い。この攻撃を捌き続けるより、かえって一撃必殺を叩き込むダメージディーラーに回ったほうがいいかもしれない。

「A隊、行けるか!？」

「スマン、回復が終わつとらんのや！」

即座に帰ってきたキバオウの声。人数が多い分、回復にも時間がかかるのは容易に想像ができる。これは仕方がない。

「了解、そのまま回復していてくれ。B隊は!？」

「問題ない」

「よし。なら、B隊突撃準備！E隊はスイッチ準備！」

「了解！」

返答をしつつ、例によつて俺は愉しそうに笑う。実際、このような相手は久しぶりで、楽しませてくれそうさ。そう思っていると、ちょうどいいタイミングでパリングとブレイクがかみ合った。

「スイッチ！」

その声に、後ろから俺とアスナが猛チャージをかける。

「やああっ！」

アスナは突っ込みながら、最初の初段が当たると同時に神速の3連撃を叩き込み切り抜ける、突進系連撃という珍しいカテゴリのソードスキル「フューアファルケ」をぶちかます。

「そらよー！」

その後ろから俺がソードスキル「カブトワリ」で追撃する。垂直に跳躍してそのまま振り下ろすだけの単純極まりないソードスキルだが、それゆえにコツを掴めばブーストもしやすいし、使い勝手のいいソードスキルの一つだ。長くない硬直を抜けた直後

に、さらに体術系ソードスキル「バックキック」を叩き込み、後ろに下がる。バックキックは片足で蹴つてもう片足で後ろに下がるソードスキルだ。攻撃しつつ後退することができると、ノックバックや行動遅延デレイの性能は低めのソードスキルだ。横を見ると、アスナももうすでに後ろに下がっている。

「アタッカー勢、ここからはきついと思うけど集中を切らさないように！積極的にフォローに入って！」

「了解！」「アイマム！」

そこかしこから返事が返ってくる。雰囲気や和らげようとせめてものユーモアを聞かせてみるが、

「ふざけている余裕があるのなら大丈夫そうね、ロータス君？」

「・・・へっ、このくらい問題ないっての」

この少女には効かなかったようだ。

「それより、肩の力抜いていけよ。メリハリが大切だ。いつも気を張っていると、最後まで持たない」

「余計なお世話よ。今までも大丈夫だったんだから」

「今回を今までと同じ物差しで測るべきじゃないと思うが？つと！」

議論しながらも状況はちゃんと見ている。タンクの一部が崩されるところを見逃す

俺ではない。即座に地面を蹴飛ばすと、タンクに剣が降ろされる前に横合いからこちらの得物をぶつけ、軌道を逸らす。続いて飛んできた剣には懐に潜って拳を振り上げることで無理矢理逸らしにかかるが、

（くそつたれ、想像以上に重たい・・・！）

手首を叩いて武器落としを狙ったつもりだったのだが、そこはやはりフロアボス、簡単にはいかない。押しつぶされそうになったところで、

「ぬううんっ！」

横合いからヒースクリフがタワーシールドによるシールドバッシュで吹き飛ばした。

「助かった」

「何、礼には及ばないさ」

それだけ言うと、それぞれ自分の立ち位置に戻る。隊列はもうすでに元に戻っていた。優秀な人材をかき集めて作り、それをまとめ上げる。そしてあの指揮能力。・・・天は二物を与えずというが、あの男はある意味では例外なのではなからうか。そんなことを考えながら、俺はポジションの蓋を指ではじき、中身を一気に飲み干した。徐々に回復していくHPゲージを確認し、俺はその空き瓶を投擲スキルでボスに放り投げた。所詮は空き瓶に過ぎないので大したダメージは与えられないが、それはまっすぐにボスの片方の頭に直撃した。ボスの片方の頭がこちらを捉え、俺にターゲットが向く。

「よし、じゃあ行きますか！」

振りかざされる二本の剣。それに対し、右からの薙ぎをしゃがんで躲し、続く振り下ろしは一気に懐に入ることと躲す。そこから一気に踏み込み、次の一步の着地と同時に振り返りつつ跳躍するために足に力を籠める。瞬間に剣に光がともる。そのまま空中で高速の連撃を叩き込む。『飛燕瞬連斬』を発動する。攻撃が終わったところをボスが槍で串刺しにしようとするが、

「甘〜」

至近距離から剛直拳を繰り出し、無理矢理攻撃を止める。と同時に、相手の重量が異常に重たかったせいもあり、相手ではなくこちらが後ろに下がる。ソードスキル二つ分の硬直が体を襲う感覚を味わいながら、俺は着地した。膝で衝撃を吸収することもできなかつたので、足にかなりの衝撃が来たが、その辺は妥協だ。

着地したときの足のしびれを何とか堪えた俺は、即座に横から声をかけられた。

「ちよつと、今の何よ!？」

あまりにも驚いているのだろう、口調が素に戻っている。

「ただ単に、ソードスキルの硬直を、別のソードスキルを発動することで上書きしただけ。俺は剣技連携スキルコネクトって呼んでる。たまたま見つけたんだが、タイミングがえらくシビアでなあ……。成功率は……。そうだな、三割あればいいほうかな」

きつかけとしては俺のバトルスタイルが影響している。片手がフリーとなつてることが多い俺にとつて、もう一本の手の有効活用は目下大きな課題となつていた。もとより投剣スキルと体術スキルを手に入れたのはそれが理由だ。そこで、ソードスキルの硬直を、別のソードスキルで上書きするとどうなるのか、という半ば以上に無茶苦茶な発想から生まれたのがこれだ。この様子からすると、ほとんどのメンバーがその存在どころか、発想すらなかつたらしい。

「それって誰にでもできるの?」

「ぶつちやけ、よつぽど慣れないと安定して発動するのは不可能。さっきの俺も半分賭けだったからな。成功すれば儲けもの、ミスってもそんな大した被害にはならない。そういう判断だ」

あの状況なら、さらに一つ二つソードスキルを連続で叩き込むことで行動遅延デレイの時間を大幅に伸ばすことができる。そうすれば、あの技の硬直時間が抜けてからも十分に離脱できる。それくらいはこいつらなら楽勝だろう。実行した時はそこまで考えていたわけではなかつたが、今は冷静にそれくらい考えることができた。

「・・・凄まじいわね」

「言つたら? 慣れだつて」

俺もここまで、何千回と反復練習を繰り返してようやく成功率を三割ほどまで伸ばす

ことに成功したのだ。慣れでタイミングをつかむくらいしか有効な方法は思いつかなかった。それでも、

「三割じや実戦だと成功率低すぎで、今のままじや到底使い物にはならんけどな」
「てことは、使い物になれば・・・」

「戦鬪の幅がぐつと広がる。めっちゃ楽になるだろうな」

その眩きはかなりの説得力があった。確かに攻撃後はかなりの隙ができるが、倒しきつてしまえば問題はない。連携を繋げるたびに全体的な成功率は一つの成功率の累乗という速度で一気に減っていくが、倒しきつてしまえば問題ない。

「ねえねえ、ということとは、今の場面では使う必要はなかったつてことだよね」

「まあな。でもま、成功していたほうがより大きなブレイクポイントを作れたことも確かだ。現に、タンクがタゲを取り直すには十二分だっただろ」

「それはそうだけど・・・分かった。そういうことにしておく」

微かに口角を上げる。内心ではここで大目玉を食らったら面倒だと思っではいたが、取り越し苦労だったようだ。

「とにかく今は目の前に集中するぞ。さつきより特に息がつけないんだ」

タンクの一人が背中に回り込み、一撃叩き込む。瞬間、信じられないような光景が飛び込んできた。何と、二本の剣に同時に光がともったのだ。

「なっ!?!」「えっ!?!」「嘘っ!..」

近くに固まっていた俺たち三人の声が見事にシンクロする。だが、それほどまでに信じがたい光景だった。このSAOにおいて、両手に剣を握ってソードスキルを発動できる組み合わせは、今のところ細剣と短剣の組み合わせで細剣のソードスキルが発動できることしか確認されていない（そちらは短剣をわざわざ持つより、盾で防御したほうが効率がいいという理由からほとんど使われていない）。片手剣を両手に持った状態でソードスキルを発動するなど見たことも聞いたこともなかった。右の剣で右半分を薙ぎ払い、左の剣でもう半分を薙ぎ払う。ほとんど体の向きを変えないで行われた全範囲攻撃に、一同は目を向いた。反射的に俺はメニューを開き、一瞬で今行われたソードスキルの名前を探す。幸いなことに、それはすぐに見つかった。

「・・・二刀流全範囲ソードスキル、エンド・リボルバー・・・」

「全範囲!?!」ってことは、あれで全部の範囲を!?!」

俺の言葉にレインが驚きの声を上げる。それはもはや悲鳴だった。

「そういうことだろうな。それに、あくまでスピードは片手剣程度。・・・厄介なものを実装してくれたなコンチクショウ」

最後の一言は怨嗟とも取れるものだった。タンクたちもあまりに突然の範囲攻撃に戸惑い、一様にうめいている。

「くっそ、厄介なもんを・・・」「片手剣なのになんでこんなに重いんだよ」「てか片手二本に範囲技とかもはや半分チートじゃねえか」

そこかしこから恨み節が聞こえて来る。続く形で、今度は残りの槍二本に光がともる。

「まずいつ・・・!」

アスナが思わず呻く。今の状況でさらに槍による追い打ちを食らったらひとたまりもない。

迷っている暇などなかった。というのは事実ではあるが、その後の行動は反射だった。ポーチに残っているポーションを一本適当に取り出し、一気に飲み干す。そのまま一気に突っ込んでいった。基本的にステータス強化ポーションは使わない人種だから、入っているポーションはおのずと回復ポーションのみだ。そして、ポーションの回復効果は一瞬で一定量回復するものではなく、一定時間をかけてじわじわと回復していくもの。

隣で制止する声などどこ吹く風、一気に蹴りだしつつ飛び出した。同時にクイックチェンジを使って本命の曲刀に切り替える。この世界に来てから習得した縮地を使用し、懐に潜り込んだところで、一気に斬り上げる。曲刀系ソードスキル「顎狩り」だ。縮地を使う必要はないのだが、使うのはただ単に俺の趣味だ。微かにボスの攻撃が入っ

て左腕を深く斬られる。だが、構っている暇はない。

「だらっしやあああいいい！」

訳の分からない掛け声を上げつつ、剣技連携で空中ソードスキル“飛燕連脚”を発動させる。この際、リスキーだからなんて言っていてられない。剣が二本になったことによる手数の多さと片手剣のスピード、そして二本の槍だけでも十分に厄介なのに、これ以上ソードスキルを発動させられたら面倒などというレベルではない。

(まだだっ……！)

気概と共にさらに虎牙破斬を出そうとするが、流石にそうは問屋が卸さない。さすがに十分の一以下の確率を引くというのはかなり難しかったようだ。だが、時間稼ぎには十二分だった。

「やあああああっつ!!」

まずはアスナのパラレルステイングが突き刺さる。続く形で、

「いやあああああっつ!」

レインがさらにソードスキルを繰り出す。五連続の突きから斬り降ろしと斬り上げ、最後に全力の上段という組み合わせは、現時点での片手剣の最大ともいえる大技、ハウリングオクターブ。ソードスキルのオンパレードにボスが長い硬直に入る。もう一発ソードスキルを発動させる寸前、ディアベルにアイコンタクトをとった。一瞬だが、そ

の意味を正確に理解したディアベルはすぐに声をかけた。

「A隊、行けるかい!？」

「もう大丈夫や! あんさんに命預けたで!」

「ありがとう! A隊、スイッチ準備!」

「了解!」

瞬間に、俺は剛直拳からの爪竜連牙蹴でボスに長い行動遅延を与える。直後にタンク隊から息の合ったウエポンバッシュがかまされた。

「スイッチ!」

「了解!」

ポストモーション
技後硬直に入った俺を尻目に、A隊の面々が突入していく。当の俺も硬直が抜けるや否やすぐに後ろに下がった。落ち着いてボスのHPバーを見てみると、まだ5本目突入には程遠い。

(あれだけ叩き込んで、それでもこれだけか……)

これは相当きつい。おそらく、最後のHPバーに入った時——相手のHPバーが赤く染まった時に、もう一回パターンが切り替わる。その時、俺たちはどこまでやれるのか。それが肝だ。そして、その時まで最後のラッシュ分のスタミナを残しておく必要がある。落ち着いた頭で冷静に考えながら、俺はボスの一挙手一投足を見逃すまいと睨ん

で
いた。

15・喪失―第二十五層フロアボス攻略戦、3―

いよいよその瞬間がやってきた。HPバーも、残り一本と少し。ここまでに掛けた時間など凶りたくもない。全員、もうそろそろ限界が近づいてきているはずだ。現に俺も、予備の曲刀を一本、この戦いだけで無くしている。メンテはきっちりとしていた。でもこうなるということは、それだけ相手が固いということだ。

「ようやく、か」

HPバーが一本消える。その瞬間に、異変は起こった。

「うおおおおおおお!!」「突っ込めー!!」「倒せー!!」

突然、ALSの多くのプレイヤーがボスに突っ込んでいったのだ。

「ま、待てやお前ら!戻ってこい!」「危険だ!!下がれ!!」

キバオウとディアベルの必死の号令もむなしく、レイドの実に半分近くが一気にボスに突っ込んでいった。隣でアスナがカバーに走ろうとするが、それを俺は制した。

「ここで俺たちが突っ込んでいったら、最悪二次災害が起こる」

「だったらどうしろって言うの!?!このままここで、指咥えて見てろとも言うの!?!」

「そっちのほうが合理的だ。今は、より多くを生かす可能性より、少なくとも確実に生か

したほうが合理的だ」

「だからって!」

なおも反駁しようとするアスナの目を、俺は真正面から射抜いた。その眼つきに、アスナが押し黙る。

すぐにボスのほうに視線を移すと、ボスは頭を互いに反らし、その体を横に膨らませていた。考えられる可能性を即座に頭に思い浮かべる。四本ある足、片方の頭に対して、片方しか反応しなかったこと。そして、この行動。

「・・・まさか!」

思いついた瞬間に、俺は敵の頭に向けて並列投擲。すべて吸い込まれるように片方の頭に当たるが、それで行動が止まるわけではない。そして、ボスは俺の恐れていた行動を実際にやつてのけた。

ボスの体が二つに裂ける。そして、片や片手剣二本が、もう片方は槍二本が、それぞれ両手に握られていた。

連続でかわるがわるソードスキルを発動させていたALSの連中は、的がいきなり増えたことに驚き、一瞬動きを止めてしまった。その一瞬は、どう考えても致命傷だった。

まず、前面に技後硬直ゴストモーションで突っ立っていたアタッカーを蹴り上げる。まるで何かのボールのように高く蹴り上げられたプレイヤーは、ボス部屋の壁に叩き付けられ、そのまま

ポリゴン片となった。

「防御ができなかったとはいえ……」

「……一撃死、だと……」

いかに無抵抗なダメージディーラーが、壁に叩き付けられたことによるダメージ込みだといつても、現時点でトップクラスの集団に属する人間が一撃死。その事実は、十二分にレイドを揺るがした。そして、硬直をしていなかったALSのメンバーから、その恐怖は一気に伝染していった。

「う、うわあああああー!」「く、くるなあああああー!」「こつちくんあああー!」

それはまさしく阿鼻叫喚。しかも、ボスが二体いるからそう簡単にも逃げられない。そんな中で、あるプレイヤーが不文律で禁じ手となっていた手を使った。使ってしまった。

「て、転移いい! 始まりの街いい!」

ところどころ裏返った声ははつきりと俺の耳に届いた。そして、おそらく前線で逃げ惑うALSの人間にも。

「て、てめえ! ずりいぞ!」「やってられるかあ! 転移、ロービア!」「転移、タフト!」「ふざけんなやお前ら! てめえの後始末くらいしてけや!」「逃げちゃだめだ! こっくに留まってくれ!」

二人の制止もむなしく、次々にあちらこちらから「転移！」の声がしてきた。現時点で安くない転移結晶を使って、だ。そちらを止めるのも重要だが、今必要なことはもう一つある。

「クソが……！」

予備の曲刀を持つて一気に飛び出す。ボスに近いところまで来てから、俺は一気に息を吸いこんで、声を張り上げた。

「かかってこいやああ!!」

今できる、俺の全力シャウト。バトルシャウトなどは取っていないが、この局面での俺の大声は十二分に代用になった。ボスのタゲが俺に向いたことを確認してから、俺はちらりとディアベルのほうを見た。一瞬ではあるが、確かに目が合う。瞬間に、俺はボスに対して正対した。

圧倒的不利など百も承知。それでも、俺はこの役を買って出た。誰かが渡る必要のある橋ならば、俺が渡る。この世界に来てからできた、俺の信念だ。なすり付け合っては、どうしようもならない。

一瞬で極限まで高めた集中力で剣を次々に見切っていく。何とか攻撃の合間に一太刀入れられるかと思っていた俺の予想は相当以上に甘かった。一撃の重みのある程度捨て、手数で勝負することによって得られる息つく間無い連撃は、少しずつでも確かに

俺のHPを削っていった。完全に躲すことは不可能だというのはこの行動を起こした時から覚悟していた。だが、一発当たりで減っていくHP量が想像以上に多い。これでは最悪、時間稼ぎにもならない。そう思った直後だった。

ガキイインという金属の音を立てて、横合いから迫ってきた槍が逸らされる。続いて飛んできた剣は俺がいなし、お互いにボスに一太刀入れる。手をしっかりと握り、接近してきた誰かと肩を合わせる。

「考えてみると、こうして君と戦うのは初めてだね」

「そーいやそーうだな」

気を回す余裕などなかったが、どうやら援軍はディアアベルだったらしい。ディアアベルは普段レイドリーダーとして指揮役に回ることが多い。なので、こうして肩を並べて二人で戦うというのは、思い起こしてみると初めてのことだった。

「まさかこんな状況だとは思ってもみなかったけど」

「俺だつてそうだつての。もう少し穩便に行きたかつたつてのが本音だがな」

だが、事ここに至ってはもはや是非もない。目の前の敵に全力で立ち向かうまでだ。その覚悟を新たに、俺たちは再び踏み込んだ。

戦いだしてすぐに分かった。やはり、このような手練れがいるというのは、とても頼もしい。特に、レインの場合は、攻撃重視で盾を持たない。それは俺にも言えることだ。

だが、ディアベルは盾で防いできつちりとカウンターを返す堅実なスタイル。その戦術の違いが、俺にさらなる安心感を与えていた。だがそれでも、相手の手数が多さが、その安心感などほとんどないかのように感じさせていた。それほどまでに、ボスの二刀流、そして二槍流——便宜上こう呼ぶが——は脅威だった。

「くっ……！」

時折、ディアベルからもうめくような声が漏れる。手数重視といってもそれだけ攻撃が重いということだ。こちらが受け持つているのは剣のほうだ。槍のほうが受け流すのが容易であることが多い。フロントヘビーであるからこそ、真つ向勝負ではなく、横の力に弱い。盾があるなら、真正面から受け止める結果になっても受け流すことができ。剣に比べて突きが多くリーチのある槍に剣はいささか相性が悪い。今のようには飛び込むことを許さない状況ならなおさらだ。そして、ディアベルなら受け止めて流すということはできるプレイヤーだ。それを絶え間なく続けるディアベルがいるからこそ、俺も奮い立ち剣を一発も逃さずに受け流すことができるのだ。

(不思議だ……)

今まで、こんな風に背中を完全に預けることなどなかった。レインはどちらかという俺が守るという意識があった。レベルは俺のほうが上だというのもあるが、何よりあいつは普通だ。いくら度胸があるといっても、度を過ぎた恐怖の前には凍んでしまう。

が、俺はそういう状況で冷静になり、奮い立つ。だから、あいつがストッパーであり、俺の理性となりえた。だからこそ、守る必要があった。

だが、今は違う。度を過ぎた危機だからといって疎んでいる暇などない。敵は待つてなどくれない。他の誰もが、おそらく今背中を預けているディアベルがその義務感や勇気で律している恐怖を強く感じる状況下でも、俺は冷静でいられる。それこそが重要なのだ。人は俺を異常という。そんな環境下で、どうしてそこまで冷静でいられるのか、と。だが、俺にとつてはこれが普通なのだ。

完全に背中を預けて、自分の全うすべきことをなす。それが、ここまで心地の良いことだとは思わなかった。その得も言われぬ快感が、俺を今駆け巡っている。それが原動力の一部となっていることは間違いない。二本の剣のうち、一本を手首への強打で叩き落す。続いて襲ってきたもう一本の叩き付けをパリングし、ボスが下がりながら得物を拾ったことを確認して、俺は横目で復活しつつあるボス攻略レイドの様子を見た。さすがはキバオウ、伊達に一つのギルドをまとめているわけではない。

その直後だった。

「くっ……!?!」

突然後ろから聞こえた呻きが変化した。思わず後ろを振り返ると、そこには膝から崩れるディアベルの姿。

「ディアベル!？」

同様の声が俺の口から洩れた。ボスの攻撃を受けていた時間は長くはないが、決して短くはない。攻撃パターンも、ある程度出し尽くされたはずだ。小細工なしの正面突破型、それがこいつらのはずだ。ならば、なぜ今更になって、こんなことが。

その疑問は、すぐに解決した。浅くだが確実に刺さっていた、黄緑色の刃を持つ短剣を見たことよって。

(麻痺ナイフ!?! いったいどこから!?)

その思考はボスの攻撃によって強制的に中断させられた。槍の軌道を逸らし、剣を受け流す。その中で、俺の耳が一つの怒号を捉えた。

「おいテメ、ジヨー! いったいなんのつもりやワレエー! こんで答えエー!」

それはまさに怒号だった。攻略方針で袂を分かったとはいえ、キバオウはずっと頭であつたディアベルに彼は心酔している節があつた。その彼が、俺と孤軍奮闘している中で、寄りにもよって自分の仲間によって一気に窮地に立たされた。それに対する怒号だった。

俺の意識が一瞬でも逸れたその瞬間に、ディアベルはボスの足に蹴られ、一気にボスとの距離を離された。壁に叩き付けられなかつた分だけ一撃死は免れたようだが、長期離脱になることは間違いない。

「・・・ちっ、くそっ」

舌打ち一つと共にスイツチを切り替える。会話の内容を聞きたいところだが、今はそつちに集中力を割けるほど余裕がない。吹き飛ばされたディアベルへと視点を移すボスに向かい、俺はもう一発吠えた。

「よそ見してんじゃねえぞこのクソボケえ!!」

その大声に、もう一度ボスのタゲがこちらへ向く。俺に向かつてくる刃を冷静に俺は見切りにかかっていた。

「おいテメ、ジョー! いったいなんのつもりやワレエ! ここで答えエー!」

キバオウは理解ができなかった。何故ずつとここまで攻略集団の一員として戦ってきた、自分のギルドのメンバーがこんな凶行に及んだのか。理由が知りたいとかそれ以前に、目の前の人物が突然得体の知れない誰か、いや何者かになったかのような空恐ろしさを感じていた。

「なんで、って、決まってるじゃないっすか。楽しいから、ですよ」

「なんやとお!」

キバオウが激昂する。対するジョーはへらへらと笑っていた。

「だって楽しいじゃないスか。見ました? ディアベルの、麻痺った時の、あの焦りと恐怖

と不信が思いつきり前に出た顔！傑作だった！」

その笑みを狂気に染める。そのまま発せられた高笑い、哄笑と呼ぶにふさわしいものだった。その様に、あたりは静けさに呑まれた。そんな中、誰かが呟いた。

「狂ってやがる……」

その呟きは、攻略組の総意といってもいいものだった。

「狂ってる？違うっしょ。こんな環境だからこそやれることを楽しんでるだけ。それだけだっつて」

「それがこの場にいる全員を危険に巻き込む、つちゆうことを承知の上で、それでもなおそういうことを言うてるんやな、ジョー」

狂ったように唾うジョーとは対照的に、先ほどまで激昂していたキバオウがひどく静かに言った。その静けさに、ALSのメンバーは一樣に押し黙り、中には軽く震えるものもいた。というのも、

((リーダー、めつつちや怒ってる……!))

この男、普段こそ熱血漢なのだが、怒ると一気に冷静になるのだ。

「ジョー、いや、ジョニーブラック。ここから今すぐ出ていけ。そして、二度とワイらに
関わるな」

それだけ絞り出すように言われると、ジョー、いや、ジョニーブラックはあきらめた

ように両手を広げた。

「へーへー、分かりました、よつと！」

だが、置き土産としてナイフを投げていった。そのナイフは、見事にディアベルに突き刺さった。瞬間、キバオウたちが飛びかかる。が、直前でジョニーブラックは転移結晶を持ち出した。

「転移、——」

どこへ転移したのか、そこまでを知るすべはなかった。その声は無声音で、彼は口元を覆う装備を使っていたからだ。転移結晶を持ち出した瞬間にキバオウが飛びかかったが、それは間に合わなかった。

いつの間に傍に来たのか、ディアベルの傍らにはロータスがいた。そして、ディアベルが何か呟いたその時に、蒼い髪の騎士はその体をポリゴン片と化した。

歴代のフロアボス、レイドリーダー。その人がボス攻略中にPKされた、という事実、周囲は茫然とした。その中で、彼が、ロータスだけが、その身すらも一振りの刃と化したかのような、冷たい顔でボスへと突っ込んでいった。

ボスの攻撃を、俺は正直自分でも驚くほど冷静に見切ることができていた。それは

「いったいどういうわけか、俺自身にも理解はできなかった。とにかく一つ確実なのは、このボスの攻撃パターンがある程度読めてきたという事実だ。だが。」

「ぐうっ……!」

思わず呻いてしまう。槍を防いだことによる一瞬の俺の硬直を、もう一頭が逃がさなかつたのだ。そのまま、剣を振り上げる。何とか直前でガードに成功するも、下からの振り上げに俺の体は横に大きく吹っ飛ばされた。直後、隣から、何かが刺さつたような音がした。何とかそちらを見ると、そこには二本目のナイフを突き立てられたディアベルがいた。

「ディアベル……!」

即座に結晶を取り出す。時間回復のポジションではなく、瞬間回復の結晶を今使えばまだ間に合うかもしれない。が、その行為をディアベルは押しとどめた。

「ディアベル……?」

彼も、もうわかつているのだ。自分がどういう状態なのか。

「頼む。ボスを……倒してくれ。願わくは、これからも」

麻痺でしゃべりにくいだろうに、ディアベルはその言葉を押し出した。

「ああ。任せておけ」

ならせめて、笑え。最後の最後で、安らかにこいつが逝けるように。その思いと共に、

精一杯力強く笑う。その俺の顔を見てか、ディアベルは俺の手を取って、一つにこりと微笑むと、——その体を、ポリゴンのかけらとした。その場に落ちた遺品を素早く回収すると、俺は体制の整っていないタンク隊に向かい攻撃を繰り返そうとするボスに向かい突撃した。

「何度も言わせんなあ!!俺を倒してからそつちに行けえ!!」

もう何度目かもわからない、全力のシャウト。再び俺に向いたタゲを、もう耐久値が危ないであろう今の予備曲刀を放り投げることで確固たるものとする。想定していた通り、投げた曲刀は砕け、もう一本の予備を取り出しながら、俺は再び突撃していった。

16. 終幕—第二十五層フロアボス攻略戦、4—

俺が再びボスに突撃していった頃、その他のボス攻略隊は大混乱に陥っていた。全体のパーティーリーダーがPKされた、とあれば無理もない話ではある。みんなが茫然とした混乱の中にいる状況で、ただ一人立ち上がった人間がいた。

「お前らあ！ 萎えとる場合かああ！」

それは、2隊の、ALS主体のレイドリーダーであつたキバオウだ。

「ディアベルはんのPKも含めた、ALSメンバーの暴走に関しては、後でわいがかよ
うにも責任をとる！ これはここではつきりと言ゆうておく！ せやけどな！ 今わいらがす
べきはなんや！」

そう言つて、今もボスの攻撃を見切り、たまに攻撃したり叫んだりしてボスのタゲを
一手に引き受ける俺を指差した。

「あのアホウを援護して、ボスを倒すことや！ それがディアベルはんの望みでもあるは
ずや！ 違うか！」

なら、ここで今俺らが萎えとるつちゅーのは、それに対する反逆とちやうんか！」
そう言つて、自身の剣を真上につき上げた。

「僭越ながら、こつからの指揮はわいがとらせてもらう！議論している暇などありません！この意に従うのなら、わいに続け!!」

その声に、ばらばらになりかけていた集団はまとめ上げられた。大きな鬨の声にキバオウが安心したような笑みを浮かべる。

「よし！ほんならまずA隊は前進！あのアホウと代わってきー!」

「了解!!」

「B隊、C隊、カバーでできるよう用意しときやー!」

「了解!!」

「隊を二つに分けて、それぞれが剣のほうと槍のほうの防御に徹せい！受け損ねて味方に貰わせるつちゅー間抜けをすなよ!」

「イエス、ボス!!」

こうして、おそらく誰もが思わない速度で、ボス攻略レイドは一瞬で立て直された。

その頃、俺もかなり限界に近付いてきていた。何せ、一発直撃を食らったら即行危険、二発食らったらおそらく死亡、しかもそれを二頭分続ける必要があるという、難易度工クストリームもいいところの無茶苦茶をやっているのだ。俺が好きでやっているからまだ救われているが、そうでなければまず間違いない罰ゲームだ。その思考すらも歯切

れになり、すぐに散らばる。この頭が真っ白になっていく感覚が俺は好きだ。そんな人間はこの世界にもなかなかないだろう。特に、平和を保ってきたこの国に、その手の人物は危険とみなされ、すぐに排斥される。そう、丁度俺のように。

最小限の動きで攻撃を避け続けていた時だった。突然ボスが二頭ほぼ同時によろけた。それは明らかに行動^{ディレイ}遅延のそれ。誰がやったのかは知らないが、数少ない好機を逃すことはしない。もうすでに完全に動きを見切れる段になっていた剣のほうに飛びあがりつつバックキックを叩き込む。仕切りなおそうとしたときに、後ろからALSのタンク隊が突っ込んできた。統制のとれた動きを見て、俺はボス攻略レイドが立て直したことを察した。何度か後ろに飛び安全圏まで離脱すると、今度はハイポーションを飲み干した。ハイポーションは今のところ高額なアイテムだが、仕方ない。ちらりとHPバーを見ると、そこに残ったHPバーはすでに三角形になっていた。間違はなく、後一発貫つていたらここにはいないだろう。クリーンヒットをもらわなかったといってもこの減りというのは、相手の攻撃力の証左だ。

空になったポーションの瓶を投げ捨てると、肩を叩かれた。そこにはキバオウがいた。

「お疲れさん。めっちゃ助かった。おおきに」

「おう。……次のパーティーリーダーは、あんたが？」

「せや。言いたいことは後にしてくれんか」

「ここであれこれ言うほど、俺もあほじゃねえよ」

「感謝。ほんまに」

「礼も謝罪もあとだ。今は、ここにいる相手をぶつ倒す。それだけだ」

「せやな。とにかく、あんさんはゆつくり回復しとき」

そう言うのと、俺は視線を前に向けた。キバオウのビルトもダメージディーラータイプだったはずだ。ということとは、キバオウは危険を承知の上で、前線指揮の役割を担っていることになる。この様子では、立て直したのも彼だろう。どうやら、俺は彼のことを正しく評価できていなかったらしい、とキバオウの評価を改めた。

「お手柄だったね、ロータス君」

次のポジション——こちらは普通のそれだ——を飲んでいると、今度はヒースクリフ以下B隊の面々がこちらに来ていた。

「いや、なんつーか……。体が勝手に動いてた、ってやつだ。」

「ごめんな、レイン。やっぱりこの性は直せないみたいだ」

最後の一言は、しばしば相棒として共に戦ってきた少女に向けての言葉。おそらく彼女は激怒しているだろう。この言葉をかけたところで焼け石に水だろうが、やらないよりはまし、と、そう考えていた。が、返ってきたのは長い溜息だった。

「いいよ、もう。なんていうか、慣れてきたし。ただし、」

——死なないこと。これが条件。——

レインの一言は厳しく、それでいて正しかった。当たり前だ、死んでしまったら何にもならない。

「——おう」

俺も、それに微笑んで返した。が、それで終わり、というわけではなかった。HPバーは同一パーティーにならば参照可能なのだ。レインからこの言葉が出てきたのは、信じていたからこそである。だが、

「本当にそうよ。あなたの回復する前のHP量、1000切ってたのよ？ まったく、そこまですりギリの戦いを続けてたら、いずれ死んじやうわよ」

パーティーリーダーでもあるアスナもHPバーは見ることでできるわけで、しかもアスナにはそこまで信頼されていないと来た。それならば、叱られるのは当然だ。

「死にやしねえよ。俺にはまだ、やるべきこともやりたいことも残ってるからな」

「それなら、もつと安全な戦い方をしなさい。見ていられないわよ、まったく」

柔らかく微笑むレインも、そっぽを向くアスナも、どちらも本気で心配してくれたのだらう。

「……サンキュな、ふたりとも」

ぼそりとつぶやく。二人が怪訝な表情をするが、それを「何でもない」とやり過ぎず。今はこのボスを攻略することだけを考えればいい。それ以外は何も考える必要はない。軍のことも、ジョニーブラックのことも、そして今回も背後にいろであろうPOHというプレイヤーのことも。

そして、今回死亡した、ディアベルのことも。

何もかも捨て去って、今は目の前の強敵に集中しろ。それが今やるべきすべてのことだ。自分を一振りの刃と化し、目の前の敵を斬ることだけを考えろ。そう自分に言い聞かせる。幸いなことに、こんな状況でも頭に血が上ることはない。頭はいたって冷えている。

そのままどれだけ時間がたっただろうか。冷静に見つめっていると、前線で坦克のバランスが崩れた。片方の剣を受け止めている間に、別方向から来たもう一方の剣を受け止めて、二人がもつれ合う形で崩れたのだ。一点が崩れたことで、後も連鎖的に崩れていく。

考えている暇などなかった。幸いなことに、剣の動きはもうすでに頭に入っている。ましてや、今の状況ならば、攻撃に入るのは容易い。

「ぜやああああつー！」

気合と共に、途中からここまで封印して、携帯砥石で切れ味と耐久値を復活させた鬼斬破を使い、刀系空中ソードスキル「韋駄天」を繰り出す。空中で縦に回転しつつ加速しながら前進し斬るといふこのソードスキルは、終端部になればなるほど攻撃力が上がるが、空中でしか発動できないというトリッキーなスキルだ。だが、韋駄天の名前を冠するだけあって、移動能力は高い。なので、移動用ソードスキルとして割り切つて使っているプレイヤーもいるほどだ。縦の傷を付けられたことにより、ボスが技後硬直ポストモーションの俺に攻撃しようとする。だが、それは強烈なウエポンバツシュによつて防がれた。

「ラストおお！あんさんに任じたああー！」

大きなだみ声俺にはつきりと届いた。一つ頷くと、俺は集中した。確かに、相手のHPゲージはもはやラスト1ドット。だが、相手はフロアボスだ。一撃で削りきれぬ保証はない。ならば、取れるソードスキルはただ一つ。確実に屠れる威力、今持てる最大威力をクリーンヒットさせることのみだった。

呼吸を整え刀を頭の前に水平に掲げ、左手で峰を支えるように持つ。襲い来るはこれで終わらせると言わんばかりのボスの上段斬り。それを俺は刀で受け止めた。瞬間、ボスがその動きを止め、ポリゴンとなつて消えた。あとに残つたのは、地面に叩き付けるように刀を振り切つた体勢の俺だけ。

「刀系反撃ソードスキル、鏡花」

このソードスキルの特徴は、反撃というその名の通り、構えの状態で攻撃を受けると発動するという点にある。が、この受けるというのは、文字通り刀身に受けなくてはならない。しかも、構えの位置から大きく刀の位置がずれていると発動しない。つまり、受けられる攻撃が極端に限られるのだ。だが、俺はこのボスに対し、暫くの間攻撃を見切り続けていたのだ。そのくらいは余裕というものだ。そして、このソードスキル最大の特徴、それは、相手の攻撃の攻撃力の一部を基礎威力に上乘せする”という特徴にある。つまり、今回のように異常なほどの攻撃力を持つボスの攻撃に対してこれを繰り返す。つまずき、一撃の威力は途方もないものとなりえるのだ。先ほどのように、ごく少人数でこのボスを相手取る必要がある状況下では、技後硬直の間に切り刻まれるのは明白だったから使えなかったが、片方を大集団で食い止めている今なら可能だ。硬直が解けるや否や、後ろを振り返る。そこには、A隊が必死の防衛を繰り返していた。と、ボスが突然こちらと距離をとった。すると、手に持っていた槍のうち一本をこちらに投げた。

「うわっ！」「あやかそれ！」「ぐうっ！」「くそっ！」

さすがにこの蛮行にはボスレイド全体が狼狽えた。よもや、自分が今まで戦いを共にしてきた相棒とも呼べる武器を、そのまま投げるとは考えづらい。俺が先ほどやったのは、耐久値の危ない予備の武器だったからこそできたことであって、あんな明らかメイ

ンアームの武器を投げるなどというのは、まず考え付かない。そして、その一瞬の隙を
ついで、ボスは地面に突き刺さっていた長槍を抜いた。しかも、その短槍はやはり相応
の威力があつたようで、受け止めた人間もまとめて吹き飛ばされた。

長短二本の槍による、二刀流ならぬ二槍流。お前はどこのファイオナ騎士団一番槍かと
内心でツツコミを入れながら、俺は再び状況を見守った。タンク隊は応急でD、F
隊のメンバーが入ったことで持ちこたえていた。

先ほどのカウンターでわずかにHPを減らされていたので、改めてポーションで回復
しようとした——時に、ポーチにポーションが入っていないことに気付いた。どうや
ら、先ほど回復に使った分が最後だったらしい。急いでメニューを開いてストレージか
らポーションを取り出そうとしたところで、そこにポーションが一つも入っていないこ
とに気付いた。回復結晶ならいくつか持つてきているが、結晶系アイテムは高額だか
ら、あまり消費したくない。つまりこれは、

(後がなくなつた、か)

まさに背水の陣というやつだ。下がれば今までの努力は水泡と化し、攻めすぎればそ
の命はない。攻めなくても、その命は怪しい。追い込まれたならば、鼠の意地というや
つを見せてやるだけだ。

「C隊、スイッチ準備! 全員、一斉攻撃準備!!」

「了解!!」

一斉攻撃。つまりキバオウは、これで終わらせる腹積もりか。ならば、こちらも相応の対応というやつをする必要がありそうだ。

「ギョー、と」

抜き放ち、構えて呼吸を整える。一種の精神統一だ。これにより威力を上乗せするか、そう言ったことはないが、自身の集中力を一時的に引き上げることによるラツシユ力は何物にも代えがたい。

「スイツチー」

前方から声が聞こえる。瞬間に、全体が突つ込んでいく。色とりどりの光が舞い踊るようにボスを切り刻む。一步遅れる形で、俺は韋駄天を繰り出した。着地してそのままスキルコネクト剣技連携で体術系ソードスキル「列破掌」につなげる。前に出した手に熱が集まり、炸裂する。その直後、刀系四連撃ソードスキル「爪竜連牙斬」につなげる。それを出しながら、俺の頭に不安がよぎった。

(ここから先は、成功率が著しく落ちる。・・・どうする?ここで止めるか、一気に押し切るか・・・?)

一回当たりの成功率が三割と仮定すると、四回目は0.81%、五回目の成功率は0.243%だ。お世辞にも高いとは言えない数値。普通で考えれば、その危険を冒すべき

ではない。だが、瞬間に俺の脳裏によぎる一つの表情。

『頼む』

ディアベルは、俺に託した。ならば、俺が今すべきことは一つだ。

「・・・まだまだああああつ!!」

不安をかき消すように叫ぶ。左手に光がともる。あえて行動遅延重視の剛直拳ではなく、威力重視の罅を繰り出す。そして、低い位置に持っていった刀を大きく円を描くようにして振りかぶった。その構えから繰り出される技を分かってか、ボスが最後の一突き、いや二突きを繰り出しにかかるが、わずかにこちらのほうが早いことを俺は直感した。

「これで・・・」

ボスの切っ先がこちらに来る。硬直が襲い来る一瞬手前に、強く踏み込み鬼斬破が光に包まれた。

「・・・終われええええええええええ!!!」

俺の全身全霊ブーストが乗った刀系単発ソードスキル「気刃斬」がボスに炸裂した。本来、気刃斬はさらに「気刃連斬」に、そしてそこからさらにシビアなタイミングで「気刃斬・三連」につながるのだが、そんなの関係なかった。間違いなく、外したりしよものなら確実にこの槍に俺は貫かれるだろう。そんな周囲の不安をよそに、鬼斬破の

切っ先は吸い込まれるようにボスに直撃し、長槍はわずかに前進した俺の顔の左を通り背中側に抜け、短槍は俺の目の前で止まった。長槍と短槍の持ち手が逆だったならば、間違いなく死んでいた間合いだ。だが、その運にも恵まれたのか、お互いに硬直したまま、——ボスはその体を膨大なポリゴンに変えた。壮大なポリゴンの炸裂する音が鳴り響き、ボス部屋が静まり返る。

「——終わった、のか・・・？」

誰かが小さく呟いた。呟いたという表現が適切なほどに静かで、低い声だったにもかかわらず、その声はボス部屋に反響した。そして、それに答えるように、先ほどまでボスが立っていたところに“Congratulation!”の表示が浮かび上がった。

「終わった、か・・・」

俺も呟くと、どうと後ろに倒れ込んだ。カランと鬼斬破が俺の隣に転がる。鞘にしまうこともおつくうで、ブラインドタッチで鬼斬破をストレージに直接放り込む。大の字で見上げながら、俺は静かに拳を突き上げた。・・・仮想世界ではなく、現実世界の空の向こうにいるであろう、戦友に向かって。

(勝ったぜ、ディアベル。あんたのおかげで、な)

いつも先頭に立って、フロアボスの攻略を共にしてきた。指揮官でありながら、全体

の危機と知ったら迷いなく自ら突撃してかばう場面もあった。だからこそ、彼の下に集まる人間は絶えなかつた。そんな彼はもういない。おそらくここにいる全員が、その空虚さを嘯みしめていた。

17. 幕引き―第二十五層フロアボス攻略戦後―

「ほんまに、おおきにな」

回想にふけっていると、近くから声がした。ふと顔を向けると、そこには安堵、自罰、罪悪、混乱、おそらくその他諸々の感情がない交ぜになって、得も言われぬ表情のキバオウがいた。

「いや、いいよ。俺が好き勝手暴れただけだし。むしろ、フォロー助かった」

「そんならい当然やつちゅーの。あんさんのおかげで、ここのボスを倒せたんや。もとはといえ、わいらの不始末が大本や。それで、攻略レイドが総崩れになってしもた。ほんまに、ほんまに、なんちゅーてええか……。ディアベルはんにも……」

微かに声が湿ってくる。あちこちからねぎらいの声が聞こえるが、どれも活力があるとは言い難かった。俺もその例外ではない。だが、そんな状態でも思考する能力くらいは残っていた。

「そう、だな……。」

一度そこで声を区切る。ゆっくりと立ち上がると、俺は二つ手を叩いた。

「皆、ちよつと聞いてくれ！」

こういう時に、声の響かせ方というのを心得ているというのには役に立つ。高校や中学時代に吹部だった俺にとつてみれば、楽器を響かせる延長というだけだ。その声は、はつきりとボス部屋に響いた。

「今後のALSの件なんだが、ここでは何も言わずに、また機会を改めないか？」

「どうしてだ！今ここでそれを決めるべきだ！ALS側が逃げる可能性もある！」

即座に噛みついた声はリンドか。確かに、彼の言うことにも一理ある。だが、俺には俺なりの考え方もある。

「俺がこういうことを言うのは、皆疲れていて、話し合いにならない可能性を危惧しているからだ。疲れていれば、理性も働かない。効くべきブレーキも効かなくなる。そうなれば、ヒートアップしていくばかりだろう」

「でもそれで！話し合いの場そのものが奪われたら！」

確かにリンドの危惧はもつともだ。だが、俺にはもう一つの理由があった。

「リンド、あんた、PAのサブリーダーだろ？なら、POHって名前に心当たりがあるはずだ」

「・・・誰だそれ。俺は知らないぞ」

「オレンジの黒ポンチョ男、つていえば分かるか？」

俺の言葉に周囲がはつきりとざわついた。随分と前に当時の最前線近くで起こった強化詐欺に関して、その行つた側に手口を教えた、と思われるのが、そのP O Hなのだ。そして、俺はストレージから例の情報書を取り出す。

「ここに、俺がゲイザーに調査させた、P O Hに関する情報がある。それ以外にも俺が私的に頼んだ情報もあるから、一概にはいどうぞつて訳にはいかないが、ここにはつきりと書いてあるぞ。〴〵取り巻きのプレイヤーにジョニーブラック、モルテというプレイヤーあり。また、最近彼らの一味に入った、刺剣^{エストック}使いのザザはやたら腕が立つから注意“つてな”」

その言葉に、今度はP Aがざわつく。P AがまだD K Bと名乗っていたころ、そのモルテというプレイヤーはA L S、D K B両ギルドに所属して、今日までの二大ギルドの対立要因を作り出した。ジョニーブラックについては言うまでもない。今回の騒動の火種だ。

「と、いうことは、だ。動機とかは一切わからないが、奴らはおそらくここで全員が潰し合うことを望んでる。もつとありていに言つてしまえば、殺し合いを望んでいる可能性があるわけだ」

俺のあまりに飛躍した可能性を荒唐無稽だと笑う人間はいなかった。誰かが、このよ
うなことをP K教唆の一種として、煽動P Kと呼んだ。今回も、その手口である可能性

は高い。それに、

「ブレイブスのときから、手口の本質は変わっちゃいない。だからこそ、一回クーリングが必要だ。違うか？」

あの時もそうだった。もしあの時、ブレイブスの面々が揃って土下座による謝罪をしなければ、あの場で多数の合意の下、“処刑”という名目でPKが行われていただろう。「・・・私は、その意見を支持しよう。私たちはブレイブスの一件、というやつを知らないが、彼の言っていることは至極まっとうだ。ここで疲れ果てた状態で何を言っても、感情論に終始するのが関の山だろう」

少々劣勢かと思われていた状況下で、思いもよらぬ援護射撃が来た。声で分かっていたが、ヒースクリフだ。だが、この状況を好転できるのなら——

「だけど、そいつが何か企んでも限らないだろう！ここで裁決をとるべきだ！」

「あなたねえ——」

「アスナ」

——というのは、問屋が卸さないようだ。誰の声かはわからない。だが、その声にすぐさま反論しようとしたアスナを、俺が静かに声をかけて押しとどめた。このあたりは、理性的な彼女に感謝だ。

「確かに、俺が何か企んでいるかもしれないって疑うのは至極もつともだと思う。だけ

どき、ここで俺が理性の判断を求めることに、何のメリットがある？むしろ、PKを止める側なんだぞ？」

「だからこそだ！暗躍する可能性もあるかもしれないだろう！」

あー、その線があつたか。すっかり失念していた。ならば、

「ならば、キバオウさん。この件が一件落着するまで、俺があんたの傍にいる、つてのは？たくらみが成功しなかったことを知った奴らからの、直接の攻撃を防ぐ、つて目的だな」

「なっ……！」

気炎を上げていた張本人が、俺のその発言に絶句した。

「なんでだ？もし俺が何か企んでいるのなら、そういう状況で何も起きないほうがおかしい。違うか？」

微かに微笑みすら浮かべる俺に、その男がさらに気炎を上げようとした矢先、

「落ち着きなさい、ご二人」

これまた思わぬ援護射撃。

「ならば、第三者から護衛を受け持てばいいだろう。そして、それが必要ならば、その役目は我々ブラッドアライアンスが引き受ける。血の同盟の名に懸け、誠実を誓おう」

その言葉に、俺は内心ヒヤヒヤしていた。そんなこと言っているのかヒースクリフ。

下手したらあんたまで疑われるぞ。と、内心ひやひやしているところに、別の声が上がった。

「ええわ。もう、ええ。ロータスが人柱まがいのことをするんも、BAの協力を仰ぐんもなしや。気持ちだけ、受け取っとくわ」

「キバオウさん！」

「ええんや。もともと、組織の腐敗と暴走を止められず、結果的にディアベルはんを死なせる原因を作ったのはわいや。その責から逃げるなんちゆう真似はせん。ここで、誓わせてもらうわ。もし破ったら、ギルドのストレージを公で可視化させて、すっからかんにする。これでどうや」

・・・キバオウ。あんた、すげえな。その覚悟、きつとみんなに伝わったぜ。

もはや俺が声をかける必要はない。そこまで言われて反論する人間などいなかった。

「決まり、だな。なら、キバオウ、時が来たらあんたに通達する。それでいいか？」
「ええで。せやけど、事態把握のために、最低でも半月は欲しい」

「ま、妥当だな。よし、じゃあそうしよう。リンドさん、そういうことでいいか？」

「ここまで言われちゃ、何も言うことはねえよ。そして、仲介人の第三者は、あんたが担ってくれ」

「・・・了解した」

なんで俺なんだよと叫びたいところではあったのだが、そんなことをしている場合ではないということくらいはわかっていた。キバオウとリンドに連絡のためのフレンド申請を行い、その場はお開きとなった。

「さて、と。それは置いといて、ボスドロップのことなんだが」

その声に、全員の顔が怪訝なものになる。大抵、ボスドロップはワンオフものの高性能品で、暫くの間は十二分に活躍してくれる代物だ。だが、今回に限っては例外だった。「使えるものもたくさんあるから、使えるものは俺がありがたく使わせてもらう。けど、問題は他にあつてな。L A ボーナドロップが片手直剣と槍なんだ。俺はスキル取つてないし、今後使う予定もないから、誰かに譲りたい。こういう案がいいと思うか、みんなの力を借りたい」

ボスドロップはL A じゃなくても十二分に使えるものばかりだった。どれもステータスが高いものばかりではあるが、装備できるものばかり。刀も曲刀もドロップした。両方とも相当に消耗して、メインアームの切り替え時はおそらくすぐ来る。それまでは、鬼斬破に頑張ってもらうしかない。しかしまあ、

(こりや後でリズにどやされるなあ・・・)

刀は両手武器である分丈夫ではある。アスナの細剣に比べればそれは確かだ。刀や細剣は、その刀身の細さから耐久値はお世辞にも高いとは言えない。耐久値の減りは両

方ともほぼ同等である、というのは、情報で出回っている。というのも、誰かがまったく同じ金属から作った同じようなプロパティの武器を使用し耐久値テストなるものを行った結果である。とにかく、耐久値の減りがほぼ同等ということは、この後武器の整備に持っついていったときに、アスナと俺の耐久値の減り方の違いが明白になるわけで。鍛冶屋である以上、その辺はしっかりしているわけで、小言の一つや二つくらいは仕方ないということはある。

「ま、その辺も含めて考えておいてくれ。これに関しては、情報屋に掛け合っつて、ドロップした本人である俺を頭としたネットワークを構築してもらうことにするから、みんなの知恵を貸してくれ」

そう言っつて俺は頭を下げる。その声に周囲がざわついたが、関係はない。

「頼む」

静かな声。だが、その声にはしっかりと力が入っていた。これは心からの頼みだ。だが、もし仮に演技でも、このくらいは造作もない。

「むしろ逆に聞きたいね。そう言われて、ここにいるメンツが断ると思っつてんのか、あんた」

この声は、さつき気炎を上げていた男か。そしてそれに続くように、

「そーそー」「それな」「ほんとだよ」

「ロータス。俺はあんたとパーティを組んだこともある。だから、ある程度人柄も分かっているつもりだ。だからこそ言わせてもらおう。——その程度、屁でもねえよ」

その言葉に、俺は改めて頭を一つ下げ、くるりと踵を返した。

「俺はまだ耐久値に余裕がある。次の層の有効化アクティベートに行ってくる」

「いや、その役目はP Aが担う。特にあんたはダメだ。疲れもたまってるだろうし」

「それには同意するで。さすがに、あんさんが行くんは反対や」

二大ギルマス——片方は仮だが——に止められては、頷くしかなかった。歩き出した歩みを止め、再び攻略レイドに向き直る。

「でも、あんたをこのままにしておくのも忍びない。ここは、俺の指揮下で元ディアベル班があんたを護衛し、主街区まで送り届ける。何かあつたら、俺が全責任を持つ。：：それでいいか？」

「構わないよ。こちらから歓迎したいくらいだ」

「こちらとしても問題はない。が、こちらからアスナ君とレイン君を派遣しよう。彼女らは、ロータス君と懇意のようだからね。友人がいたほうが気が休まるだろう」

「・・・それもそうだな。じゃあ、行けるのなら声をかけてくれ」

「かけてくれも何も、俺は今すぐでも大丈夫だぞ」

「なら、少し待ってくれ。こっちも状況の確認をする。すぐに終わる」

その後、本当に少しの確認の後、俺たちは出立した。螺旋階段を上がって、上がりきったところの扉を開ける。そこで、アスナたちがこちらに来了。

「お疲れ」

「おう、お疲れ」

「まったくもう、最後のはヒヤヒヤしたよ。確率低いんじゃないなかったの?」

「確かにそうよね。一回当たり成功率三割だったら、四回だと9%、つまり0.09の二乗だから、1%を切る計算になるわね」

「そーだな」

「そーだな、つて……。無茶苦茶だよ!?!」

「でもさ、うまくいく気がしたんだよ。あそこで攻め切れる気がな。それに、ディアベルの顔が浮かんでな」

会話で出たディアベルの名前に、周囲の雰囲気が変わる。

「さて、しんみりするのはいいが、今は目の前に集中だ」

その俺の声に、幾分か吹っ切れた雰囲気にはなったものの、やはりしんみりした空気は変わらなかった。この雰囲気は、時間が解決するのを待つしかないようだ。

第二十五層フロアボス攻略戦は、こうして波乱の火種を多数生み落としながら、ここ

に幕を閉じた。

SAO、幕間

18. 幕間、戦いの準備

それから、一週間足らずのある日、俺はリンドとキバオウを呼んで会食をしていた。

「さて、と。まずは、忙しい中来てくれたお二人さんに感謝を」

「いや、構わないよ。一件が一件だからね」

「せやな。それに、わいとリンドはんを呼ぶってことは、それなり以上の大事おおごとなんやろう？」

「ええ、まあ」

「……と、このやり取りからわかるように、今回の呼び出しは俺主導で行われた。と
いうのも、

「本題に入る前に、まずは舌鼓と行こうか。乾杯」

俺の声に、静かに三人が杯を上げる。中に入っているのは、もちろん酒だ。もつとも、
酩酊感はないので、ノンアルコール飲料を飲んでいるような感覚に近いが。そして、肝
心のお料理は、

「うまいな……」

「さすがは高級料亭やな・・・」

「うむ・・・」

ちなみに、俺が会場として選んだのはSAOでも随一の高級料亭だ。見積もりなどを見ると、俺の想像以上のお値段で少々以上に驚いたものだが、一応予算の範囲内ということでOKを出した。それに、こちらとしてはもてなす立場で、呼び出した側だ。少々値が張ってもある程度は目をつむるのが吉だろう。

「いやはや、ごちそうさま。さすがは高級料亭だよ」

「せやせや。SAOやってこのかた、こんなうまいもん食ったの初めてや。感動したわ」

「気に入ってもらえたようで何よりです」

「それより、ここまでおいしいと金額とかもかさんだんじゃないのかい？」

「そこはそれ、ソロプレイヤーの強みというやつですよ。稼ぎから必要経費差っ引いても常におつりが来ますから、貯蓄はそれなり以上にあるんです」

「そうかい？それじゃ、遠慮なく」

「この手のお約束通り、俺のおごりである。満足してもらえたところで、俺は本題に切り出した。」

「さてと、じゃあ本題に入ろうか。メールでも言った通り、今回の用件は二十五層フロア

ボスLADドロップ品について、なんだけど。情報屋のつてを使って、あれこれと案を出してもらって、それに俺の考えを含めた折衷案として、考えたんだが・・・祭りを開こうと思う。で、二大ギルドには警備をお願いしたい」

そこでいったん区切る。正直に言って、この案は少々リスクをはらんでいることも確かだ。

「ま、祭り、やと？それは、いったいどうゆうこつちやいな？」

流石にこの説明だけではさっぱりわからなかったであろうキバオウが疑問の声を上げる。

「祭りのメインイベントで、闘技大会を開いて、その景品をラスボスのLADドロップとする、って手法だ。初撃決着にしてしまえば、PKされる危険は限りなく防ぐことができる」

「でも、PKがもし起きたら・・・」

「そんなときやそんな時。と、言いたいところだが、ちゃんと参加者名簿を作って、そこで追跡してやればいい。SAOではまったく同じ綴りつてのはいないからな。ネーム変更クエの類も見つかってないし」

「なるほどな・・・。攻略組には、槍も剣も、名人がぎょうさん居る。それに、おんなじギルドで、ギルメンに持たせたいと思って参加する輩もある。参加者は相当見込め

る。参加費をかなり廉価にしても、そこそこの利益が見込めるわな」

「それに、それに伴って露店とかも許可しようものなら、店側からしたら宣伝もできるわ利益も見込めるわでいいことづくめ、か」

「そーいうこと」

流星は二大ギルマス、頭の回転が速い。にやりと俺は笑った。

「なるほど、な・・・。俺も思いつかなかったよ。どうやって思いついたんだ？」

「誰かはわからんが、デュエルで決めたらどうだ？ って意見が出てな。そこから転じてこの案になった。ついでにリフレッシュにもなるだろうし」

少し二人は考えたが、結論は早かった。

「青龍連合、略称DBは、その案を支持する。断る理由もないしな」

「ALSについても支持や。リンドはんの言う通り、断る理由がない」

「OK、サンキュ。・・・ところでリンド、DBってのは新しい名前か？」

「まあね。ディアベルさんの遺志を継いでいきたいから、青龍。四神の一角を冠するには、まだまだ未熟だと思っけどね」

「そつ・・・か。」

「諸々の仲介は情報屋を通じよう。そつちのほうは情報が多く集まるし、より多くに拡散できる。どうかな」

「せやな。わいらが宣伝しても、限りあるしなあ」

「そうだな。賛成」

こうして、ラスボスL Aドロップ争奪デュエル大会、通称デュエル祭りの開催が決まったのだった。

それからの日々は目が回るようだった。言い出しついでであり主催者でもある俺が何もしない、というわけにはいかない。人数に理があるALSには会場の警備、大会の取り仕切りを行ってもらい、DBには大会参加者などへの窓口となってもらった。普段はいがみ合っている、とまではいかなくとも、仲はお世辞にもいいとは言えない。これが融和の第一歩となれば、と俺は思っていた。

そうして忙しい日を過ごしていた俺に、少々以上不穏な情報が飛び込んできたのは丁度忙しいさなかだった。メールが飛んできたことをシステムの通知で知った俺は、あとで見ることにして今のところは虫を決め込——もうとして、すぐに開いた。

(このタイミングでゲイザーからのメール……?)

今、ゲイザーに頼んでいる情報はない。だが、何か不穏な動きがあったらすぐに知らせてほしい、とは伝えてあった。つまりは水面下の諜報活動だ。ゲイザーは商品——彼にとつては情報だが——の仕入れもできるからという理由から二つ返事で引き受

けてくれた。だが、依頼時に彼も言っていたが、この手の活動というのはある意味では役に立たないほうがいい。それは、俺と共同依頼者であるリンド、キバオウの共通認識だった。

(いったいどうしたってんだ・・・?)

今の時刻は、皆比較的ゆっくりしている時間だ。そんな時間に送って来るといのは、おそらく重要な要件だろう。そう思いつつ、俺はメールを開いた。そこには、

(直接会って話したい。どこかいい場所はないか、つて・・・)

ここで言う「いい場所」というのは、つまりは人目につかないということと同義だろう。今の時点で人目につかないところ、というところ・・・。

(第五層のボス部屋、とかかな。あそこなら、通る人も少ないはずだ)

ボスを倒した後のボス部屋は空室だ。ただただ、広い空間がそこにあるだけだ。通る人間といえば、踏破目的のもの好きくらいのものだ。加えて、第五層は遺跡エリアとなっており、遺物拾いの「ヒロワー」で溢れてはいるものの、ボス部屋には何も落ちていない。上に、あそこはアストラル系、要するに幽霊の類も出てくればルーターMobも出て来るといいう、運営の悪戯心あふれたエリアでもある(だからこそ、セルムの一件は俺を大いに驚かせたわけだが)。それに、ヒロワーの数も、一時期に比べれば一気に減っていた。そもそもその拾うアイテムがどんどん減ってきたからだ。何が言いたいか

という、第五層に好き好んで潜り込み、あまつさえボス部屋まで行こうなどというものの好きなどそうそうはいないのだ。すぐにゲイザーからも了承の返事が返ってきた。それを確認して、俺は拠点としている宿屋の部屋を出た。

俺が第五層のボス部屋にたどり着くとほぼ同時に、ゲイザーが現れた。すぐに俺は本題に切り込んだ。

「で、話ってなんだよ」

「いや、なに。ちよつと耳に入れておきたくてね」

その言葉に、俺は思い切り眉をひそめた。こいつがわざわざこんな遠回しな言い方をするということは、少々以上に厄介事だろうということは簡単に想像がついた。

「何があった」

「POHやジョニー、ザザ、モルテの情報をまったく聞かなくなった」

その言葉に俺は片手で両方のこめかみを押さえた。その情報は確かに厄介だ。何も聞かなくなった、ということとは、何も兆候をつかむことも、動機を推測することもできなくなった、ということだ。

「確かにそりや厄介だな」

「ああ。こちらも全力を挙げているが・・・」

「うまくいったら、こうしていることもない、か……。心当たりは？」

「あらかた探したのだが、すべて空振りだ」

「なるほどなあ……。しっかし、情報屋が探し回ってもだめつてのは、どれだけうまく隠れおおせていることやら……」

「ああ……。他のMMO系でも私は情報屋をやっていたことがあるが……。こうなつてしまつたらもう読めない。おそらく、各地を転々としてたどらせないようにし、煙に巻く算段なのだろう。そして、こちらにはそれを防ぐ策がない」

「たまたまあいつらを捕捉できたところを追っかけるしかない、つてことか……」

「ああ。今回の闘技大会で直接PKをしようとするなら、新たなシンパを投入してくるしかない。そして、今回の相手は誰も一筋縄ではいかないプレイヤーばかり。はつきり言つて、直接PKは難しいだろう」

「ああ。それは俺も思っている。景品がラスボスのLADロップで、プロパティも公開してる。要求するステも高いし、端から上級プレイヤーの大多数が参加してることが予想されるからな。中級以下プレイヤーはもっぱら観戦に徹するだろうからな。予選からそこそこの以上のハイレベルな戦いになるでしょ」

「そうだな。むしろ、それを狙つてプロパティを公開したのだろうか？」

「こそ。わざわざしみたれた戦いを見に来る奴なんていないでしょ」

この俺の言葉通り、この剣と槍はそこ以上にプロパティが高い。これを溶かしてインゴッドにして新しく武器なり防具なりを作るもよし、そのまま強化して使うもよし、といったところである。俺の場合、金属製の防具を使うわけでもないし、そのまま使うにもスキルを取っていないし取る予定もないから、速攻で誰かに譲ろう、となったわけである。が、問題は、

「でもまあ、プロパティ相応、といつてはあれなのだが——なかなか癖のありそうな武器だな」

「それは認める。無茶苦茶だよ、こんなの」

「そうだな、使い手を選ぶという点ではこの上ない」

微かに肩を揺らしてゲイザーは言う。その言葉に、俺も一つ笑った。

槍のほうは明らかに両手槍のリーチを持っていながらも、全体的な重量は片手槍並に軽い。が、相当なフロントヘビーである上に、その鋭さはまさに蜻蛉切だ。そのため、下手に扱おうものなら武器に振り回され、斬った手ごたえすらも気づかずに地形に突き刺すことになる。剣のほうは、今のところ考えれば異常といつてもいいほどに重い。代わりに、威力はそこらの両手剣を軽く上回る。それゆえに、両方とも要求ステ値が相当に高い。一度試し振りをした身としては、プレイヤースキルも相当に要求されるものだろう。確かに、システムアシストなしに何回か素振りした程度ではあるが、その扱い辛

さというのはいすぐに直感した。だからこそ、さつきとプロパティを公開して、最上級のプレイヤーのみが集まるように仕向けた。端から負けると分かつたうえで勝負に挑むなど愚者の行いだ。力試し程度に挑む人間はいるかもしれないが、明らかかな下級プレイヤーが挑んでくるようなことはないだろう。

「性能は一級品だけになあ……。」

まあとにかく、だ。これ、俺から個人的な追加報酬」

10000コル分実体化させて手渡す。ストレージにしまうと、改めてゲイザーは問いかけた。

「で、この件はこの後どうする?」

「引き続き情報収集を頼む。ただし、今までみたいに全力を尽くす必要はもうない。片手間で構わない」

「了解した。こういうときはいい仕入れ時でもあるからね。こちらとしても好きにやらせてもらおう」

「おいよー。護衛が必要ななら引き受けるけど、……ま、こんな下層なら必要ない、か」

「ああ。攻略組には遠く及ばないが、自分の身を守る程度にはレベルは上げているからね」

「そっか。んじゃ、俺は先に帰るわ」

それだけ言い残すと、俺はボス部屋の螺旋階段を昇っていった。まだまだまとめておく情報はたくさんある。きついけど、ゆっくり休んでいる暇などない。宿に戻ってさらに情報をまとめる必要がある。そう思いつつ、俺は第六層の主街区に向かつて走り出した。

第六層の主街区から転移門を使って、拠点とした宿屋で、俺は大量の羊皮紙の前で考えていた。もともとアイテムストレージの限界は体積ではなく質量だ。羊皮紙というのはもとをただせば動物の皮であるとはいえず、厚さなどは殆ど紙と大差ない。そのため、体積と面積は殆ど比例する。単位によっては、面積のほうが体積より大きくなってしまふほどだ。元が皮であるといえど、密度が少ないのであれば相当な量の羊皮紙をぶちこんだところで、大した重さにはならないから、こうしてコンスタントにかなりの量の羊皮紙がストレージに入っている。そして、俺は大抵考えるときに書くものは殆どとりとめないメモと化すことが多い。・・・ノートをきれいに取ることができる人間というのはどうしてあにも簡単にやるんだろうか、というのにはさておき。その結果何が起こるかといえば、毎回のように考えをまとめるときに紙が悲惨なほどに散らかってしまふのだ。だが、俺はこのほうが考えをまとめることができるのだから仕方ない。もつとも、後から見てちゃんとどれがどれかわかるのなら、という前提があるが。

(とりあえず、P O Hの件に関してはおいておく。今のままじゃユーレイ相手取る様なもんだからな。土台無理な話だ。んでもって、軍の警備は全体的にばらつかせて配置する。軍のほうの協定で、軍もそんなに大量の人員を割くことはない。調査もこの日には終了している予想だ。完全に終了していなくとも、この日だけは一時中断してこつちに兵力を回してもらえようように約束してある。リンドもいる場での協定だし、キバオウの性格からいって破るってことはないだろう)

となれば、やることは一つだ。そう思った俺はまず大会の要綱をメモした用紙を探しだした。

大会の会場、そして現状で使用できる戦力を鑑みて、どのあたりに警備役のプレイヤーを配置するかを決めていると、視界の端にメッセージの着信を知らせる表示が現れた。余裕もないので誰からだろうと思いつつメールを開けると、差出人はエギルだった。端的に言って、晩酌のお誘いだった。

(・・・別に否定する理由もない、か)

幸いなことにまだ時間はあるし、自分が思っていたより計画を立てるペースも早い。了承の旨の返事をしつつ、俺は改めて書類の山と向き合った。

その日の夜、現時点最前線の4層の転移門前で待ち合わせた俺たちは、エギル先導の

元飲み屋へと行った。もつとも、ロービアは船で移動するため、「先導」というより「船頭」といふべきかもしれないが（アスナ曰く、「ゴンドラなんだから船頭じゃなくてゴンドリーエでしょ」とのことだが、細かいことは気にしない）。連れて行かれたのは、海辺の景色のいいバーのようなところだった。

「お前にやこういう雰囲気のほうがいいだろ？」

「ああ。助かる」

「いいってことだよ。こっちの仲間も、今度の大会は楽しみにしてるしな」

目下アタツカーとしてもタンクとしても大きな戦力となっているヒースクリフはタワーシールドと重量片手剣では総重量が多すぎるという理由から今回の争奪戦には参加しないようだが、そう考えない人間もいるのだろう。そもそも、エギルたちはもともとタンクなのだから、総重量など今更なのだろう。

「さて、今日はゆっくり呑むか。呼びつけたのはこっちだし、おごるぜ」

「マジか、サンキュなエギル。実をいうと、最近懐がだんだん寒くなってきててな……」
「だろうと思った。それに、お前基本バトルジャンキーだろ。そんな人間が戦わずに書類とにらめっこし続けてたら、懐だけじゃなくてストレスで心も寒くなるぞ。今更かもしれんが」

「一言多いつての。……俺はこの、フルフィウス・ロゼつてので」

「相変わらず注文決めるの早いのな」

笑いつつ、店員NPCを呼び止めて注文を伝える。飲み物二つということもありすぐに来たグラスを持つと、二人とも軽く持ち上げた。

「乾杯」「乾杯」

そういうと、お互いに一口飲む。ゆっくりとテーブルにグラスをつけると、俺はグラスを持つていないほうの手で軽く頭を掻き、まぶたをこすった。

「この世界の酒の酩酊感のなさっていうのは、まあ仕方ないのかねえ・・・」

「ゲームである以上、その辺は仕方ねえだろう。てか、その言葉から察するに、もう成人してるのか?」

「一応、って言葉が前につくけどな。そっちは・・・聞くまでもないか」

「おいおい、そりゃ随分な物言いだな」

「エギルみたいな未成年がいてたまるか」

言いつつ一口。こんな無駄話以外の何物でもない会話だが、絶え間なく会話してないと、すぐに大会のことを考えてしまう。そうならないようにこういう場をセッティングしてくれただろうに。

「まったく、こういう話でもしないと、考えちまうからって無理してんだろ」

「・・・悪いかよ」

時間がないわけではないが、決して余裕綽々というわけでもない。最近はほぼ常に大会のこととかを考えていた。

「そんなんじや、ディアベルが泣くぞ?」

「あいつがそんなタマか」

「そうだな。でもま、俺が思ってたより深刻そうじゃなくて安心したぜ」

疑問に思いつつエギルの顔を見ると、そこにはほっとしたようなエギルがいた。

「正直に言つて、多くの人間が死んだからな。俺たちみたいに直接の知り合いが死んでない奴ならいいんだが、お前は目の前で死にざまを見ちまったからな。しかも、知り合いの」

「まあ、な。でも、立ち止まっているわけにはいかない。今回の大会は、強制的に前を向かせるためのものでもある。立ち止まったら、それこそディアベルにどやされる」

「ハハハ、それもそうだな」

そういうと、お互いに喉を湿らせた。

「それにな、俺は結構ああいふ場でも冷静でいられるんだ。昔っから、な」

「そういえば、アスナが飛び出しそうになってた時、いさめたのもお前だったな」

「そゆこと」

どうやらあのシーンを見られていたらしい。

「とにかく、だ。今はゆっくり呑もうぜ」
「ああ」

そういうと、お互いにグラスを軽く打ち合わせた。

19. 幕間、デュエル大会、前編

大会当日。俺は本部にて警備の指揮をしていた。これは俺本人の希望だ。主催者である以上、大会に出場するわけにもいかない。かといって何もしないのは性に合わない。ならばということ、こうしてここで警備の指揮をしている、というわけだ。いっそや読んだ本に、警備は予測不能のパズルのようなもので、頭を隅々まで使えるから楽しい、なんて一文があつたが、今ならその事がよく分かる。確かにこれはこれでなかなか楽しいものだ。

「各箇所、異常はないか」

開きっぱなしのボイスチャットに声をかける。そこかしきら異常なしの返答が聞こえてきたところで、俺は改めて警備の配置を睨んだ。

ボイスチャットは電話のようなものだ。少し前のマイナーアップデートで導入された。俺たちのような若者はメールでも全く問題ないのだが、年寄りからしたらメールより電話、という人種もいる。そういう人間にとってはこれは楽だ。そして、これはグループチャットということもできるため、素早く多数と連絡を取りたいというときには本当に便利だ。

(あつちはどうなつてるかねえ．．．)

そんなことを思いつつ、メインイベントが催されている方へ目をやる。何かとペアを組むあの少女も、今回の戦いに参加しているはずだ。彼女ほどの腕前であつさり負けるというのは考えづらいが、どれほど盛り上がるかと楽しみでもあつた。

改めて目を全体図に向ける。軍の面々には、たとえ子供のちよつとした万引き一つでも見逃さないようにして欲しいと言つてある。その辺は問題ないだろう。オレンジの襲撃も、追いつ返せるだろう。その辺り抜かるキバオウではない。

(ま、俺は俺のやるべきことつてやつをやりますか)

そう思い、再び意識を警備に向けた。

時々遠くから歓声が上がる。今回は開催者側が親となつて賭けも行われている。それも活気付けに一役買つているようだ。今回はキリトやレイン、アスナなど、攻略組プレイヤーや準攻略組といえる実力者が多数出場していた。それも大きいのだろう。

今のところ、警備に異常はない。何もないのはある意味ではいいことなのだが、どこか薄気味悪いのもまた事実だつた。まるでこれは、

(嵐の前の静けさ、つてか．．．?)

だとすれば、連中の狙いはなんだ?そもそも、なぜこんなに静かである?そんなこと

を考えていると、部屋を誰かがノックした。

「はい」

いつも通りに返事をする。が、念のためにと右手は装備している鬼斬破にかかっていた。

「わいや、キバオウや。そろそろ本戦やからな、迎えと交代に来たで」

慎重にドアを開け、周りを警戒する。キバオウとその側近の二名のみであることを確認すると、俺は警戒をわずかに解いた。

「あと任した」

「おう、任された」

参加者が思いの外多かったこともあり、デュエル大会は予選と本戦に分けて行われていた。そして、例のフロアボスLADロップ品は盗難防止目的で俺のストレージに放り込んだままだ。つまり、景品の手渡しには俺が必要不可欠となる。その間、当然俺は警備の指揮などできないわけで、一番に言い出した人間がメインイベントを何も見ていないなどというのはさすがにかわいそう、ということもあり、本戦の開始から最後まではキバオウが警備の指揮をすることになっていた。

正直に言つて、俺もこの大会の本戦がどうなるのか、興味津々だった。

「大会の方は順調？」

「ええ。予選の方にも白熱した試合はたくさんありましたよ。しばしば番狂わせも起こって、賭けの方で財政も潤いそうです」

「そいつはよかった」

半分ほど本音で言いつつ、俺は口の端で笑った。俺としても、大会を間近で見られるのは楽しみだったのだ。

行く道すがら、屋台でつまみ食いをしつつ（もちろんお代は自腹で払っている）、本戦出場者の名簿を見ていた。そこにはアスナ、レインなど、攻略組の名だたる面々の名前が連なっていた。ときどき新興ギルドなのかソロなのか、とにかく聞きなれない名前もあつたが、ここまで勝ち上がってくるということは実力者なのだろう。そして、もう一つ気になる事実も分かった。

「PKO集団と思われる連中の本戦出場は一切なし、か」

隣にいる軍とDBの護衛に、どちらともなく話しかける。PKOとは、PKをするOrangeの集団、という意味だ。現実でのPKOとは平和維持活動のことを表す、ということを考えてると、これはとてつもない皮肉だ、と俺は名付け親ながらに思つたものだ。

「はい。そもそも、参加希望すら来なかったと聞きました」

「そう、か・・・」

つくづく不気味だ。何もアクションを起こさないなど、俺なら考えない。こんな場なのだ、煙幕の一つでも焚くとか、参加してPKを狙うとか、やりようはいくらでもあるはず。

(ま、起こってねえことを気にしても始まらないか)「まあとにかく、ここにいるみんなは幸せそうだからな。それが安心の種だ」

「そうですね。皆さん本当に楽しそうです」

その言葉に、もう一人の護衛も頷く。貼り付けたような笑顔を浮かべながら、俺はその光景をゆったりと眺めていた。

会場は凄まじい熱気に包まれていた。今までこういうことが行われなかったということ、またプレイヤー主体のお祭りというのが久しぶりであることが重なって、ここにはすさまじい熱気が集まっているのだろう。

「ロータスさんはこちらへ」

護衛に案内される形でついていくと、つれてこられた場所は他より少し高く、全体が俯瞰でき、席もゆったりしている場所だった。どこからどう見ても、特等席といって差し支えないものだった。

「・・・本当にこの席で間違っていないのか？」

「ええ。合っていますよ」

開催者側だからというのはあるのかもしれないが・・・さすがに少し気が引けるレベルの席に内心戦きつつ腰を下ろした。

（いやま、確かにゆっくり静かに観戦できる場所にしてくれとは言ったけどさ・・・）

席の希望を聞かれて「ゆっくり静かに見れるところならどこでもいい」とは言ったが、まさかこんな席が来るとは思ってもみなかった。

席に座って改めてゆっくりと本選出場者の名簿をみる。今回のこれは、欠員が出た攻略組参加者のある種スカウト的な意味合いもある。集まっているのはどれも実力者のみだ。それと、これを仕組んだのもう一つの意味合いもあるのだが、これはいうべきではないだろう。

ちょうど一通り目を通し終わったところに、大きな声が鳴り響いた。

「さあお待ちをいたしました！ たいだいまより、第25層フロアボスL Aドロップ争奪デユエル大会を再開いたします！」

司会の声に会場は大いに沸く。というか、バトルシャウトか何かの応用か？・・・うまいこと考えるやつもいたものだ。

「まずは第一回戦、赤コーナー、ギルドB A所属、攻略組数少ない女性プレイヤーの一人、

「閃光」、アスナ！」

「アスナ様ー!」「頑張ってー!」

その声にアスナが応える。会場は沸きに沸いた。何せあのルックスに加えて剣の腕は最高と来た。こうもなるだろう。

「続きまして青コーナー、第一層からの攻略戦士ながら、今は商人もやっております!常にごタンクを支える文字通り「大黒柱」、エギル!」

こちらでも歓声は上がる、が、どうしてもアスナには劣る。というか、むしろところどころブーイング、というより、ヤジが起こっている。その内容が「ぼったくり商人ー!」だとか、「も少し値切らせろー!」という内容であることから、どういう店であるかはお察しだ。ついでに言うと、この組み合わせの時点で結果は、というか過程までもう大体見えている。哀れ、エギル。

「それでは両者、デュエル申請!くれぐれも初撃決着にしてくださいよ!」

アスナとエギルがデュエルを申請する。二言三言交わして軽く握手すると、そのまま少し離れたところにお互い構えをとった。エギルは重そうな両手斧を下に、剣道という脇構えに構えた。対するアスナはレイピアの剣先をわずかに垂直上へ向ける、フェンシングのような構え。

システムウィンドウに「DUEL!!」の文字が躍る。瞬間、アスナが一気に突っ込

む。エギルが逆袈裟で迎え撃ちにかかるが、アスナはそれを難なく躲す。だが、その動きを読んでいたかのように、両手斧の重量を生かして横に躲す。アスナも横に斬撃をお見舞いしようとするが、その切っ先の先にエギルの両手斧があることに気付いてすぐに剣をひっこめる。直後にエギルが今度はスタンプを繰り返す。が、これは完全に見切つて飛びのいた。そのあとの痛烈そうな突きは足で蹴り飛ばそうとする。が、アスナはそれをあつさりとはバックステップで回避し、着地した瞬間に代名詞たる“リニア”を出し、それをきつちりと肩口に当てた。ウイナー表示を確認すると、ひゅんと軽く血振りをするような動きをしてから剣を仕舞った。

「さっすが、アスナだな」

と、口では言いつつ、心の中ではやっぱりと思っていた。STR型のエギルに対して、AGI型のアスナ。アスナがスピードと見切りで翻弄して決めるといふのは俺の想像通りだった。

「勝者、アスナ！」

簡素であるがゆえにわかりやすい勝者コールに、会場がまたどつと沸いた。この組み合わせになった時点で勝敗が見えていた人間も少なからずいたというような感じの歓声の沸き方のように感じた。哀れ、エギル。

「続く試合は実力派同士の対決！赤コーナー、攻略組ソロプレイヤーの紅一点！」

「レイン！」

「かわいいー！」「がんばれー！」

黄色い歓声にこたえつつ、レインの顔は少々複雑そうだ。アスナは立場上広報のような役目を負うこともあるだろうから完璧な愛想笑いだったが、レインは照れと苦笑と愛想笑いの混ざったような、まさに「複雑」としか言えないような笑い方をしていた。

「対する青コーナー、最近急成長中のギルド、風林火山がリーダー！「野武士」、クライン！」

その声にもこちらも歓声上がる。が、こちらはやはりレインに比べれば見劣りするところはあった。だが、一般的に知られないギルドのメンバーであることを考えれば、この歓声は十分だろう。おそらく、全体的なプレイヤーの割合を考えれば、攻略組がかなりの少数派であることも影響しているのだろう。

やがて、デュエル申請が終わり、カウントが尽きる。瞬間に、クラインが一気に踏み込む。レインはそれを鎬と体を最小限に動かして受け流す。背中越しに刃を返して背中に反撃をお見舞いするが、それは予測していたようにクラインも刀を立てて受ける。そのままレインが回転しつつ横に薙ぐ。クラインはそれを後ろに回避して反撃に備えた。瞬間に、レインが一筋の光となって突っ込んでいく。辛くもそれを防いだクライン

「けんひめ」

だが、その顔は驚きと危機を乗り切った安心に染まっていた。

「なーるへそ。クライン、って言ったっけ。面白くなるかも」

「・・・え、今の攻防で、ですか？」

「うむうむ。今の中で、いくつか駆け引きがあつたからね。まず、最初のクラインはソードスキルを使わなかった。初っ端だからこそ景気付けに突進系をかますかな、と思つただけだ。んでもって、それをさばいたレインはしっかり攻撃を見切つて、最小限の動きでカウンターまで繰り出した。クラインも、あの様子から察するに反撃がどこに来るのか読んでたっぽいしな。あの体勢で、殺さないのならば背中が一番確実だ。でも、PK覚悟でほぼ確実にクリーンになる首とか頭を狙ってくる可能性もあつた。だから刀をあえて立てて受けた。そこからの回転しながらの薙ぎでクラインが下がつたのは多分ホリゾンタル・スクエアの後の硬直狙いだつたんだろうけど、あえてレインは普通の攻撃を出して、それを布石にしてソニックリープで勝負しにかかった。

「玄人受けする、駆け引きの多い戦闘だ。こりや面白くなるぞお」

正直に言おう。組み合わせを見た瞬間に、ここも即効で終わりそうと思つた。だが、こんな面白い番狂わせがあるとは。

「頑張れー、レイン」

個人的にはレインを応援したい。たまにとはいえパーティを組んでいる身なのだ。

「あの少女に何か思うところでもあるのですか？」

「え？あー、まあ、ちよつとね。どうして？」

「いえ、今まで試合を見てきて、どちらかに肩入れするということがなかったのですね」

「あー、そういうこと。ま、一応攻略中にパーティを組むこともある仲だし、個人的には勝つてほしいってこと。それだけ」

後ろから突然かけられた声に驚きつつ答える。これでも俺は攻略組の中でデュエルした時に確実に高い勝率を誇る人間だ。俺に安定して勝てるのは、アスナと、今は長期離脱しているキリトくらいのものだろう。それ以外の相手には、レインやリンドなども含めてかなり安定して少なくない勝ち星を積んでいる。

戦いは完全に膠着状態にあった。お互い大体手の内が読めてきたのか、攻撃も防ぐより躲すことが多くなっている。だが、仕切り直しから仕掛けるのはクラインのほうが圧倒的に多くなってきた。ここまでそう長い時間がたったわけではないが、会場の盛り上がりもここまでで一番のものになってきていた。

（さて、と。そろそろかましたれ、レイン）

俺のその思いが伝わったのか、一度仕切り直しとなった戦いは焦れたように踏み出してきたクラインによって再開される。懐まで一気に飛び込み、なかなか勝負が決まらないことに焦って攻撃を繰り出したクラインに対し、レインは冷静だった。クラインの攻

撃は単純な上段。それをあつさりと後ろに回避すると、レインは一步踏み込んだ。その隙に斬り上げソードスキル「浮舟」を繰り出す。大抵の人間はレインが斬られる光景を予測した。が、

「勝負あつたな」

ぼそりと呟く。レインは、クラインの必殺の一撃すらも一步引いて躲した。会場がどよめき、短いながらも確かな硬直に陥ったクラインに、レインは一発瞬迅剣を叩き込んだ。クラインのHPバーがきっかりイエローまで落ち、デュエルのウィナー表示が空に現れた。

割れんばかりの拍手を送る観客に手を振って応えつつ、レインはこちらに向けてピースをした。それを見て、俺もサムアップで返す。

「ナイス、レイン」

小声で小さく呟く。その声を聞いたのか、護衛の一人が不思議そうに聞いてきた。

「レインさんが勝つことを予見していたので？」

「戦ってる途中から、だけどな。」

あの二人、確かに技量としては互角といつて問題ないだろうよ。おそらく、レベルもそう大差ないだろう。準攻略組っていつても問題ないレベルだ。近いうちに共闘するかもしれないくらいに、な。で、技量が互角ならどこで勝負が決まると思う？」

突然話を振られ、ふたりの護衛は顔を見合わせた。

「武器の相性ですか」

「うんにゃ、それだったらもつと早々に決着がつくだろうし、技量が互角つて時点でそんなのはほぼないと考えていい。第一、飛び道具が実質無いといつてもいいSAOで、相性なんかないに等しい」

「・・・ならば、気合、でしうか」

「惜しい、っちゃー惜しいか。」

正解は精神状態。いかに冷静でいられるか。平常心でいられるか。この手の戦いつてのはその辺がキモ。戦いの最後らへん、明らかにクラインは焦れて攻撃が単調になっていた。だから、レインも自分から積極的に仕掛けることはなかった。相手のほころびをつこうとしてたんだろう。けど、なかなかボロを出さない。だったら、ブレイクポイントを作るまで、つてわけだ。最初ならともかくとして、焦れた状態ならばフェイントの一つ、引つかかってもおかしくないと踏んだんだろうよ」

「ならば、戦いの序盤であのフェイントは」

「効果なかっただろうね。よく見れば、あの踏み込みが浅いつてことに気付いただろうし。その辺は、レインの読み勝ちだな」

この手の化かし合いは俺もしばしばやるが、レインはそれをかなり直系で受け継いで

きている。例えば、視線を読むこととか。今でこそモンスターも視線で攻撃する場所を見て来るのでこの技術はかなり有用だが、俺は最初からそれを見抜いていたから、その精度は俺に次ぐレベルでレインは高い。読み合いならレインに勝てるのは俺くらいのものだろう。

「さて、と。残りの戦いはどうなるかねえ」

興味津々といった様子で俺は残りの試合を楽しみにした。

20. 幕間、デュエル大会、後編。そして――

その後の試合はたいしたものではなかった。レインやアスナも順当に勝っていったし、リンドやキバオウはそもそも大会運営側だったので不参加だったのだ。そんな強敵もいなかったもので、危なげないのはある意味では予想通りだった。

「この組み合わせか、もうちよつと番狂わせとかあつてもよかつただろうに」

「そうですね。やはり、一番盛り上がったのはレインさんのあの試合でしたが」

「だな」

俺たちがそう言っているのは決勝の話だ。決勝の組み合わせはレイン対アスナとなった。俺からしたら意外性の欠片もない、よく言えば下馬評通りのマッチングとなった。

「まあ、あんだだけ読み合いになるっていうのは珍しいしなあ。でもま、決勝はあの試合とは別の意味で盛り上がるだろうな」

「女性同士ですからね。しかも美少女同士」

「それな」

アスナとレイン、両方とも見目麗しい女性だ。もつとも、二人ほど年をとっている印

象はないので、美少女というべきなのだろう。

「それになにより、ふたりとも実力者だからな。あと、ああ見えて案外アスナは結構直情径行型だから、読み合い化かし合いっていうより、力と力の勝負になるんじゃないかね」
「そうですかね？」

「ああ。最初にアスナと会ったときは、まあ、ある種諦めっていうか、思考停止っていうか、そういう状態にあつたからかもしれないけど、基本的には戦いになつたら自分の感覚を信じるタイプだ。きっちり思考して読みをするようになったレインとは年季が違
う」

「その口ぶりから察するに、レインさんもそうだったのですか？」

「ああ。対人模擬戦で俺と何回もやり合つて、その中で読み合いの技術をあいつは取得した。アスナも理論がある程度建てて、その上で戦いをコントロールしようとする。想定外のことが発生した場合、あいつは感覚を信じる。レインは、想定外のことしか起こらないという、極端な話、相手の動きを見て、その動きから相手の目的がある程度読むっていうことをする。だけど、アスナの速度と見切りの精度を考えると、そういうことをやすやすと許してくれる相手じゃない。そういうときは、あいつも感覚に頼らざるを得ない。あくまでクラインとの試合が読み合いになつたのは相手がクラインだったからに過ぎない。ならば、最終的には感覚と感覚、力と力の勝負になる」

「よく読みますね・・・」

「まあな。戦いつてのは実際に刃を交える前から始まつてるんだよ」

そんな会話を終えたころ、丁度二人は会場の中央でデュエル申請を終えていた。ほぼ同時に抜剣して、胸の中央あたりに手を置いて剣先を垂直に上に上げる。アスナは例によってフェンシングの構え。対するレインは、

「えっ!?!」「そんな?!」「・・・ほう」

二人が驚いたように声を出す。レインは左足を前に、左手を剣の下に添え、剣はまっすぐ水平正面に、その剣先はアスナの喉笛をしっかりと捉えている。それはかの有名なあの構えに酷似していた。もつとも、あちらは左手で剣、もとい刀を持つために左右反転しているが。

「あれつて、あの構えですよね、あの・・・なんでしたっけ」

護衛の最後の言葉に思わずすっこける。知らないのかよ。

「“牙突”だよ、るろ剣の。確かに古い作品ではあるけど、有名な技だろ」

「あー、そうだそれだ!」

名前を聞いてしつかり思い出したのか、大きな声を出す。その声を聞きながら、俺は前に顔を戻した。少して“DUEL!!”の文字が現れる。瞬間、アスナが飛び出した。ソードスキルを使っていないにもかかわらずその速度は閃光の二つ名に恥じない

速度だ。だがそれを、レインは右回りに一回転して躲しながら横薙ぎを放つ。だが、そのそれがアスナの胸を薙ぐより先に、アスナはそのままの勢いで駆け抜けることで攻撃を回避していた。即座にレインが追撃に入るが、それはあっさり回避し、即座に高速の三連突きを見舞う。それは後ろに飛び退りながらの剣さばきでいなし、躲す。そのまま距離をとって、今度は半身気味に、腰のあたりに手を持ってきて、胸の中央あたりの高さに剣先を持ってくる。

その光景を見ていて、俺は自身の口元がゆがむのを感じた。なるほど、構えを見て相手の最初の一手を読むことはしても、その先は感覚頼り、つてことか。あいつらしい突撃思考だ。つつつても、アスナも大概か。あいつもかなり感覚で動いてるみたいだし。明らかにあの回避とかたまたまだろ。

(ま、これはこれで面白い、か)

そう言いつつ戦況を見守る。雰囲気からして、もう一度状況が動きだすまではそう遠くない。

俺がもくろんだ通り、即座に状況は動いた。だが、傍目から見てアスナは劣勢だった。レインの攻撃は尽くクリーンヒット狙いなのに対し、アスナの攻撃は掠める程度に躲され、いなされている。これは観客の一部からもざわめきが起こっていた。だが、もつと頭の回る観客は即座に原因が分かったのか、冷静さを保っていた。

「なぜ、こころもレインさんが優勢に……」

「簡単な話。武器の相性を考えるのと、武器の特性を考えるのは別物ってこと。レイピアは基本的に『斬る』のではなく『突く』ものだ。斬ることもできるけど、最悪相手の鎧にクリーンヒットしたら折れたり曲がったりする可能性があるから、むやみに使えない。レインもそれを分かっている。だから時折繰り出される斬撃には、レインは刃をぶち当てることで処理している。親しい相手の武器をへし折るっていう罪悪感を抜きにすれば、相手の得物を奪うっていうのは有効な手段だからな」

「お言葉ですが、突きのほうが処理は難しいのでは」

「のんのん、そつちしか来ないって分かっているんなら話は別。突きっていうのはな、当てられる側からしたら躲し辛いものだけど、当てる側からしたら正確に当てれるところに攻撃しないといけないっていうプレッシャーもあるわけよ。だって、外したらその時点でカウンターが来るわけだからな。となると、腕や足に攻撃してくる可能性は低い。つてことは、武器落としを狙ってくる可能性はほぼ切つていいわけだ。んでもつて、相手の攻撃はおそらくほとんど当てやすい胴に集中するってことも併せて読める」

「体術による攻撃、というのは」

「あいつらもすぐに分かるだろうし、あのスタイルなんだから体術スキルにはかなり精通してるだろ。なら、まずその手のだまし討ちは意味がないって考えてるだろうな」

その言葉に、少し考えてから護衛のうちの一人が呟いた。

「ならば、ミスディレクションを誘えばあるいは、ということですか」

「そだな」

もう一人の護衛がぼかんとした表情を浮かべたのを見て、俺は解説に入った。

「ミスディレクションってのは、あえて間違った認識を与えることによる効果のこと。ここでレインはアスナからの武器落としはないって読んでるわけだ。アスナも、おそらく相手は体術と片手剣の複合で戦ってくるって読んでる。ならば、その既成概念を崩しちまえばいい。……ってことまで頭が回るかねえ、あの猪娘二人に」

見てわかるほどに、今の二人はヒートアップして固定概念に縛り付けられている。こうなってしまうたら、天秤を傾けるのは意地とか気合とか、その手の「熱さ」か、いかに冷静でいられるかという「冷たさ」のどちらかだ。どちらになるかというのは状況にもよるが、今回の取り合わせからして、なんとなくだが「冷たさ」がキーになると踏んでいた。

「頑張れー、レイン」

小声で声援を送る。柄じゃないとわかっていても、俺にできることはそれだけだった。

その頃、レインとしてはかなりギリギリの状態になっていた。正直に言って、アスナの攻撃の苛烈さというのは想定していたそれよりさらに上をいくものがあつた。

(これ、は……！想像、以上、に、キツツイ……！)

もう少しまでもに思考する暇でもあると思つていたが、そんなことを許してくれるほどアスナの連撃は甘くなかつた。ある程度飛んでくるコースが読んでいるにもかかわらず、その攻撃は早く、正確だつた。お互い、ソードスキルを使つたらいなされて、硬直の間に切り刻まれることなど百も承知だから、リスクを承知でソードスキル抜きを組み立てをする必要があつた。硬直がないことをいいことに攻めに攻めるアスナの攻撃を防ぐだけでも手一杯だ。

「やあつー！」

「はっー！」

気合と共に放たれる両者の攻撃。もはやそこにはPK覚悟の上の攻撃があつた。現に、相手の突きははつきりと胸の中央から少し左寄りのところを狙つてきたし、こちらのカウンターも首を狙つた。どちらもクリーンヒットしてしまえば急所一撃判定であつという間にHPバーが消し飛ぶ。だからこそ、この戦いはもはや死闘に近いものなつていた。

何度目かの仕切り直し。最初は相手の突きの攻撃範囲を絞るために半身になつてい

たが、もはやそんな余裕すらない。相手も、ただこちらを倒すということのみに集中しているように感じた。

(あれ、ちよつと待つ……！)

考えている暇などないと言わんばかりのアスナの攻撃。突きを防御しつつ、防御と回避、時折カウンターに徹しながら何とか思考する。

(アスナさん、もしかして、剣しか見てない……?)

つまり、思い切つて体術側の攻撃はないと踏んでいるわけだ。ならば、そこに突破口はある。

「やっ！せいつ！はっ！」

迫りくる高速の三段突き。左右の布石からの正面の突きをすべて処理し、残心でレイピアを引いた瞬間に、少し大振り気味に右の剣を掲げる。瞬間、アスナの目に「獲った！」という色が浮かんだ。瞬間に、剣を持った右ではなく、左手を握りしめる。右手をコンパクトに畳んで突きを払い落とすと、左手で相手の右側の肋骨の下あたりをアツパー気味に振り抜いた。

「かっ……はっ……」

思わずアスナの足が止まる。直後に、相手の首筋にこちらの刃を当てた。

「……参ったわ。降参」

その言葉がアスナの口から洩れた瞬間に、デュエルのウィナー表示が、レインの勝利という形で表示された。

「・・・右の囿からのレバールローとはね。完全にやられたわ。おめでとう、レインちゃん」

「いえいえ。アスナさんもさすがでした」

そう言つて二人は笑いあい、軽くハグをした。その光景を何人もの観客が記録結晶——写真や動画、録音のできる結晶のことだが——に納めていたのは言うまでもない。

「今のは!?!」「うっはー、えげつねえー」

驚く護衛に対し、少々面白げな俺。もう一人の護衛は、少し考えた後に呟いた。

「・・・レバールロー・・・?」

「たぶんね。なんでそんなところまでリアルに再現されているのか、というのはさておくとして。・・・さて、行くか」

そう言いつつ腰を上げた。この後は表彰式に入る。ならば、俺がいなくては話にならないだろう。件のアイテムが盗まれていないことはもう既に確認済みだ。

レバーブローというのは、レバー、つまり肝臓の上をしたたかに叩く、格闘技の有効打の一つだ。ここは筋肉で保護されることがなく、きつちりと入ってしまえばほぼ確実に相手を悶絶させることができる。だが、それを承知でやることも多い格闘戦ならまだしも、見知った、しかもそこそこ親しい相手とのデュエルでそれをやるとは。

（確かに何度か対人戦で俺もレバーブローがましましたけどさ。それはあくまで手段を選ばない俺だからこそ、ということもあつたわけで、あのレインがそんなことをするとはなあ……）

一応、有効テクニクの一つとしてレインにも知識だけ教えてはいた。が、まさか実行するとは思ってもみなかった、というのが本音だ。

槍のほうの争奪戦は、正直に言つて知らない名前ばかりだった。たいていがタンクに近い人間ばかりだったのもあるのだろう。

表彰式も終わり、俺はまた圏外で狩りをしていた。時刻はもう深夜どころか、下手したらもう少して明朝になってしまうくらいだった。が、今まで狩れなかった分の鬱憤を晴らすかのように俺はひたすらMob相手にバーサクしていた。

一区切りついたところで、軽く刀を左右に振る。血など付くはずもないが、その辺は

「ご愛嬌というものだろう。刀を鞘にしまおうとした瞬間、俺の背筋に悪寒が走った。風邪だとかそういうものではなく、所謂いやな予感というやつだ。」

鬼斬破をしまわず、右手をただぶら下げる。左手でスローイングピックをすぐに投げられるように静かに抜く。すぐにどこにでも対応できるように警戒は全方向。それを悟ったのか、相手は暗闇の中から、俺の正面に姿を現した。その相手は、隠蔽スキルのブーストのためか、黒いフード付きのポンチョを着ていた。

「Oh、俺はhidingには自信があるんだが、それも簡単に見破られちゃ形無しだな」

相手の姿が見えたのなら世話はない。足と腕に力まない程度に力を籠め、いつでも飛び出せるようにする。幸いなことに、相手の名前も、得物も、もうすでに俺は知っている。

「・・・POH」

「hmmmm、どうやら俺も相当famousになったみたいだな」

これまで、散々暗躍してアインクラッドを掻きまわしてきた問題プレイヤー。そして俺は、おそらくオレンジをたどれば大抵こいつにつながると思っている、わかりやすい「諸悪の根源」。

「しっかしまあ、いくら効率がいいからって、人型はすべて問答無用で首を飛ばすついで

うのは、少々crazyだな」

「ちまちま削るほうが非効率だし、時間もかかる。これが俺のスタイルだ。悪いかよ」
「いやいや、悪くなんか無い。むしろいい傾向だ。殺しへの忌避感がないことの証左だからな」

その言葉に、俺は思わず黙り込む。この世界に来てからというもの、それは他ならぬ俺が実感していた。いくらMobといっても、相手は人によく似ている。それでも、俺は首を飛ばしたり、胸を貫いたり、両腕を斬り飛ばして倒していた。傍目から見たらそんな必要はなく、普通に隙を見つけてちまちまと攻撃を仕掛けて倒すのが普通だ。だが、俺は文字通り手段を選ばずに倒していた。

「それがどうした」

「それだけじゃない。お前さんはかなりbattle junkieのようだからなあ。俺たちと一緒にamuseを追求できそうだ」

その言葉を聞きながら、俺はもう一度周囲の警戒を厳にする。俺としたことが、こいつのみに注意を割きすぎた。今更だが、周囲の警戒も必要だというのに。

「そう警戒なさんなつて。こちらとしても、危害を加える必要はないからな」

「逆の立場になれよ。そう言われて、はいそうですかって警戒解くか?」

「Hahaha、そりやそうだ」

笑いつつ、POHは両手を広げた。敵意がないことのアピールだろうか。

「で、その口ぶりから察するに、お前が来たのはお誘い、つてことか?」

「Yeah」

さつきから無駄に発音いいこの野郎。なるほどこの発音ならネイティブだと言われても頷ける。

「そうだな、考えておく、と答えておくか。少なくとも、まだ時ではない」

「そう、か」

「ただし、もしかしたらあんたらの手を借りることがあるかもしれない」

「その時は喜んで手を貸すぜ。いい返事を待ってる」

「そうかよ」

一応形式上とはいえフレンド登録を済ませると、俺はゆっくりと背中を向けた。納刀はしない。頭の中では、先ほどのお誘いを受けて浮かんだった一つの案を実行すべきかを練るということのみを考えていた。

SAO、中章

20・5・暗雲

それからというものの、俺は前線で戦い続けていた。時間は流れて、もう25層を攻略してから2ヶ月が経過していた。

「そい、そい、そおおい！」

自分でも奇妙だと思う掛け声と共に短い刃で敵を切り刻む。やがて相手が爆散したのを見て、俺は手にもった得物を鞘にしまった。いつもよりかなり短い鞘に小気味良い音を立てて短剣が収まる。さらに別の敵を求めて、俺はまた歩き出した。

例のPOHの「お誘い」の後、俺は短剣を使いだしていた。確かに、刀というものもそれはそれでよかったが、いかんせん少々重たいというのがネックでもあった。重量による威力と長い刀身のリーチを捨てて、軽量による手数得多さと素早さに欠けたほうがいいときも、少なからずとして存在する。それは、俺も経験則で分かっていた。

(何より、あいつを倒すのなら、刀を使うのは愚策だ)

直接対峙して分かった。確かに、あれだったら元米軍兵と言われても納得がいく。口調はふざけていたが、纏っている雰囲気は一流と呼んで差支えないものだった。そし

て、あいつの得物は短剣。こっちの一撃必殺など、すべて躲されたうえでちまちまと削り飛ばされるか、その短いリーチを最大限に生かして腕を飛ばされるに違いない。あの手のやつは、その手の行動に躊躇などミクロンたりとも持たない。そういうものだ。（最大多数の最大幸福。そんなの、いつも変わらないはずなんだがな）

俺はまだ、P O H の “お誘い” に対して答えを出していなかった。内心苦笑しながら、少しずつ上がってきた短剣の熟練度を見ていた。今現時点で俺のレベルはすでに大台の50まで乗っかっており、その時にとった新規スキルが短剣だった。それまでにとったスキルはどれも廃棄することができず、結局こうなった。最近はフロアボス攻略戦にも参加せずに、ひたすら短剣の熟練度上げとレベリングに徹していた。幸いなことに、人型を好んで戦っていた影響か、短剣はドロップ品の中に大量にあった。無論、そのまま最前線で使うにはいささか物足りないものばかりだが、ならば最前線で使わないか、強化して使えばいいだけのこと。リズには大量の短剣の強化を依頼した時に露骨に嫌な顔をされたが、そんなのは些末なことだった。

今現在、短剣の熟練度はようやく300に乗ったところだ。餌となる生肉を置いて敵をおびき寄せるという形でレベリングを行ってはいるが、その生肉もそろそろ在庫切れだ。倒したモンスターの肉を置いたこともあったが、見事にほとんど食いつかず、あっさりとおきらめざるを得なかったのだ。

(えっと、誘いの液薬は．．．そこそこ、か。しゃーね、いったん帰るか)

誘いの液薬、というものは、自分に少量振りかけると敵をおびき寄せやすくなるというものだ。簡単に言ってしまうと、周囲のポップ率の上昇と、使用者のみへの敵の索敵強化といったところだ。餌を置いていたほうが確実性があるのでそうしていたのだが、こうなってしまうのは仕方ない。液薬の効果と残りの道を考え、ルートを決定すると、俺はそちらに足を向けた。瞬間だった。

一瞬で声押し殺し、近くの茂みに身をひそめる。ついでに、茂みの色によく似た深い緑色のコートを素早く呼び出して、ハイディングをする。

(誰だ．．．！)

俺がとつさに隠れたのは、人の声と音がしたからだ。この辺は人型モンスターがポツプすることはなかったはず。ということとは、ほぼ間違いないプレイヤー。

やがて聞こえてきたやりとりと、見えてきた顔立ちですぐに相手が分かった。何しろ、俺が情報を集めさせた、まさにその集団だったからだ。

「いやー、今回の相手は貧弱だったねえ」

「そうね。最初は女だと思つて強気に出てたのに、最後になつたらみつともなく命乞いとか。貧弱な上にピンボーだし、ある意味最悪」

「でも何も無いよりましじゃない?」

「それもそうね」

「ま、でも、次は実入りのよさそうなもの選ぼうよ。それこそ、攻略組とか。あたしからしたら敵じゃないでしょ」

「でもそうねえ・・・、対人戦闘っていう点なら勝てるかも。デュエル祭りみたけど、そんなにレベル高くなかったし。剣のほうの決勝に進んだ二人は群を抜いてたけど」

「というか、ジャスミンだったら楽勝じゃない? 碌に反撃させてないわけだし」

「簡単に言うわね、ヴァイオレット」

「だってみんな信頼してるし。ねえ?」

その声に、そのほかのメンバーも同意する。が、近くの茂みに隠れている身としては、(ねえ、じゃねえよクソボケ。・・・何はともあれ、間違いないな)

攻略組はここ一発の度胸ということにかけては一級品の奴らばかりだ。舐めるな、というのが本音だ。

正直なところ、こんなところで会うとは思ってもみなかった、というのは確かにあった。いくら調べてあったとはいえ、確認のために、一度直接言葉を聞く必要があった。それを、こうしてこんなところで達成できるとも思っていなかった。だが、その偶然のおかげで、今回確認がとれた。

(逃がさねえぞ、 女狐) どもが)

だが、今回は間が悪い。一切、何も準備ができていない状況で飛び出すのは、どう鼻
 根目に見ても得策ではない。ここは退くのがベターだった。

物音を立てないように、立ち上がらずに移動する。かなり距離の取れたところで、か
 なり適当に作ったワイヤー付きピックを投げる。それは十分に効力を発揮したようで、
 突然飛んできたピックに泡を食っている間に俺は全力ダッシュを持ってあっさりと離
 脱した。

あのプレイヤーたちは、"ハーブテイ" という名前の小規模ギルドだ。構成員に女
 性が多いことで知られている。そして、そのプレイヤーにしばしば植物の名前が付けら
 れている。例えば、先ほど出たジャスミンは言うまでもなく、ヴァイオレットというの
 は英語で葦すみれを指す。名前こそかわいいものだが、あまたのプレイヤーたちから略奪行為
 を行うオレンジギルドだ。しかも、システムの抜け道をうまく使い、ほとんどのギルメ
 ンがグリーンであることが多いという、質の悪いことこの上ないギルドだ。その行為か
 ら、ついたあだ名が"女狐"だ。

(どこに行っても、多分どれだけ時間が流れても、あの手の輩のやることつてのは変わら
 ねえのな)

そして、俺にとっては少なからず因縁のある相手でもある。相手にとっては些末なこ

とかもしれないが、俺からしたらかなり恨んでもいいはずだ。たとえ、それが些末な、他人から見たら笑い飛ばせることの一つだとしても。

そして、彼女らを見て、俺の中ではつきりと一つの結論が出た。いや、自覚した。

(まったく、「とんだ道化だな、俺も」)

そう思いつつ、俺は思い浮かんだ相手に連絡をとった。

返信はすぐに来た。ふたりともすぐに来てくれるとのことだったので、すぐに打ち合わせをすることにした。

すぐに目的地である、第一層ボス部屋に向かう。すぐにアルゴが来て、ゲイザーが来た。結論から言えば、俺の望んでいた情報と要求を二人は呑んでくれた。流星はアイコンクラッドでも大手の情報屋二人だ。

そして、俺は久しぶりに、フロアボス攻略戦に参加した。その時のことが語られないのは、あまりにも終了後におこったことが衝撃的だったからだろう。

ボス戦終了後、全体が疲れ果てている時に、ボス部屋に三人のプレイヤーが入ってきた。その一人が誰かというのを認識した瞬間、全体に再び緊張が走った。

「P O H . . . !」

どこからか上がったその声に、P o Hは片手を軽く上げた。

「おつとstopだ、お歴々。今俺たちがここに来たのは、返事を聞きに来た、つてだけだ」

「返事、だと」

唸るようにリンドが言う。それを腕で軽く抑えて、俺は立ち上がった。

「俺に、だよ」

決して声を張ったわけではない。が、その声は静かな部屋に、やけに大きく響いた。

「P o H。理由とか喋ってたら長いから結論だけにしてやる。

誘いは受ける。ただし、条件がある」

開口一番の俺の発言に、P o Hは面白そうに目を細めた。

「なるほど。聞こう」

「前線でのP K、具体的には最前線の層を含めて上三層——つまり、最前線とその一個下、さらにその下の層だが——での、少なくともP o H集団によるP Kの禁止。これを守る約束がなされない場合、誘いを受けるわけにはいかない」

その俺の発言に、さらにP o Hは口角を上げた。

「I've got it. お安い御用というやつだよ」

「そうか」

それを受けて、俺は立ち上がる。もうすでに、刀は鞘に収まっていた。

「待てよ、いったい何が何だか」

慌てたようにかかる声は、最近攻略組入りしたクラインか。新参者とはいえど、その度胸と技量は尊敬に値するものがあった。あのレインと張り合っただけはある。

「俺は、P O H 側につく」

それだけ言い残すと、俺はP O Hのほうに歩いていった。その姿に、その場にいた攻略組全員が言葉を失っていた。

「そういうことだ。よろしく頼む」

「歓迎するぜ、l o t u s 君よお」

完全なる静寂の中、俺とP O H、そして取り巻きたちはボス部屋を後にした。

21. 初殺しと逡巡

俺たちは、いや、俺はフィールドに出てきていた。今日は俺の初めてのPKだ。不思議なほどに恐怖心はない。ターゲットが狩場としているあたりに身を潜めつつ、ターゲットが通りかかるのを待っていた。もうすでに、黄緑色の刃をした「パラライスローイングピック」を抜いてあった。

(もうそろそろ……)

今回は、こつちにターゲットを追い込んで、とどめを俺が刺す、というものだ。つまりは、お膳立てはするから後はしつかりやればよし、というわけだ。

そんなことを考えていると、ターゲットがこちらに走ってきた。

(……ハッ！)

狙いを澄まして、シングルシユートを投げつける。ピンポイントで俺が投げつけたスローイングピックはきつちりと相手を捉え、相手は崩れ落ちた。

「……え……？」

何が起こったかわからない、という様子の相手の前に、俺は刀を——鬼斬破ではなく、替えのきくドロップ品だが——肩に担ぎながら、口元には微笑すら浮かべて前に

出た。

「あんたは……!」

意外なことに、相手は俺が誰なのか知っているらしい。俺のカラーカーソルをはつきり見て、顔が驚愕に染まった。もうとうの昔に俺のカラーカーソルはオレンジになっていた。

「本当だったのか……」

「まあな。こういうことも、まあ悪くないって前から思ってたな」

そこで、相手も俺の浮かべる笑みの意味に気付いたらしい。

「なぜ……なぜ、こんなことを!」

「言っただろ? こういうことも悪くないって」

言いつつ、刀をぶらりと振り下ろす。その刃は相手の右腕を、実にあっさりとは斬り落とした。相手は一瞬何が起こったかわからなかったようだが、すぐにどういう状態になっているのかを悟って声を上げた。

「うわあああ!」

「んだよ、うつせーな。たかだか腕一本じゃねえか」

そう言いつつ、俺は移動する。体の反対側に移動した俺は、俺は刀を返すように斬り上げながら、もう片方の腕も切り落とす。もう相手は恐怖のあまり言葉もないらし

い。

「ま、こうやって両腕チョンパされたら、怖いのも納得だけど」

そう言つて、俺は足で無理矢理仰向けにした。こうすると、相手の表情がよくわかる。「おーおー、いい感じに絶望してんなー」

相手の表情は絶望に染まっていた。絶望と恐怖、少なくとも俺にはそれだけしか感じられなかった。表向きでは変わらず冷笑とも取れる微笑のまま、それが余計に相手の恐怖を煽っているらしい。相手は完全に言葉を失っていた。

「抵抗されるのも面倒だし、足も切っちゃおうか」

「やめ……!」

ようやく怯えたように声を出す、もう遅い。あつさりと両足を斬り捨てる。小さく確かなポリゴンの炸裂音と共に、あつさりと両方の足が消えた。

「んじやま、あんたに恨みはないけど。俺らの標的になったことが最後だ。恨んでくれて構わないから死んでくれや」

そう言ふと、俺はその胸に刀を突き立てる。ピックによる追加ダメージに加え、先ほど両足を斬り捨てたことよつてクリティカルダメージが入つたことで、かなりの深いダメージが入つたことでレッド一步手前のイエローまで落ちていた相手のHPは、それで全損となつた。人一人分のポリゴンが炸裂し、そのプレイヤーがそこから消える。完

全にポリゴンのかけらが消えたところで、俺は刀を振って、静かに鞘に納めた。直後に、パチパチと静かな拍手が鳴り響いた。

「excellent! やっぱりお前は俺の見込んだ通りの男だよ」

「そりやどうも。お眼鏡にかなったようでは何よりだよ」

暗闇から出てきたのはP.O.Hだった。今までなら警戒するところだが、もうその必要もない。というか、同じギルドに入った以上、警戒したほうがかえって不自然だ。

「いやはや、ここまで躊躇がないとはな。正直、想像以上だったよ」

「そりや何よりだ」

そう言いつつ、俺たちは同じ方向へと歩き出す。攻略した階層が増えたことで、拠点にできる村の数も必然的に増えた。その中で、最近発見されたのが通称「圏外村」だ。これは、アンチクリミナルコード犯罪防止機能が機能していないが、Mobが来ないのももちろん、アイテムの販売や鍛冶屋、場所によっては簡易の宿屋まであるという、まさに「圏外にあるだけの普通の村」というものだ。おそらく運営側としては期せずしてオレンジになってしまったプレイヤーに対する、カルマのクエスト発見前の救済措置として設けたものだろうが、それがかえってオレンジや、殺人を積極的に犯すP.O.Hたち、通称レッドの格好の補給場所となっている。

不幸中の幸いなのは、P.O.Hたちが行うのはあくまで快樂殺人のみということだ。つ

まり、狩りを行うのはフィールドのみということ、補給をしているプレイヤーからの篡奪は一切しない。つまり、運営が本来想定した目的である、たまたま事故でオレンジになってしまったプレイヤーが補給に立ち寄っても、少なくともPOH一派には殺される心配はないわけだ。もつとも、そこで目を付けられて勧誘も兼ねた対象に挙がってしまう可能性は否定できないが。

圏外村を経由してとあるダンジョンへとたどり着いた。経由してきた圏外村はあくまでダミーだ。このダンジョンこそ、俺たちの本来のアジトだった。

「おー、ヘッド、お帰りなさい」

「その、様子では、大丈夫、だったようだな」

迎えたのは細い目のジョニーブラックと、赤い目のザザがいた。この二人は大抵セツトで動いているので、片割れだけいないということはほとんどない。

「Yeah、俺が思っていた以上にamazingだったぜ。お前らにも見せてやりたかった」

「それは、確かに、見てみたかったな。だが、こいつが、堪えられたかどうか」

「なんだよ、人をこらえ性がないみたいに」

「実際、そうだった、節は、あるだろう」

「Haha、それは確かにな。お前さんはamuseを求めるあまりがつく節がある

からなあ」

ザザの的確な指摘には軽くふてくされたが、P o Hの同意には納得いかなさそうながらも声を押さえた。もつとも、表情はまだ不満が残っていたが。

「ま、とにかく、だ。これで本当の意味で仲間だな。改めてよろしく」

「ああ」

そう言つて、俺たちは手を取り合つた。

元攻略組で、現P o H一派のロータスが、中層においてついにPKを行つた、という情報は、その日のうちに回つた。ロータスがPKO集団側についてからもう2か月になる。そろそろ動きを見せてもおかしくないとみられていた矢先のこれだ。攻略組のみならず、普通のプレイヤーもこぞつてこの情報に飛びついた。が、

(本当に何を考へてるんだ、ロータス……)

このプレイヤーだけは違つた。名前はアルゴ。アインクラッドの情報屋で、その速度と正確さには定評がありお得意様も多いプレイヤーだ。

彼女の武器はなんといつても嗅覚だ。といつても、五感の一つであるそれではなく、第六感的なものだ。要するに、”なんかここ怪しいぞ”というのをかぎつける能力の高

さこそが彼女をアインクラッドーといわしめているものだ。だが、そんな彼女でも、彼の行動には謎が多すぎた。

ことは2か月前、丁度ロータスがお誘いを受ける前までさかのぼる。

突然、アルゴにメールが届いた。それ自体は珍しいことではない。が、件名はおろか、内容すらも珍しかった。

(できるだけ早く会って話しがしたい。都合のつく日を教えてくれ、って……。めっずらしーなー、あのハスポーが)

ロータスという人間は、基本的にこういった待ち合わせはしっかりと準備できる期間を置いて行動する人間だ。しかも、件名にはご丁寧に「火急」の文字。本当に急いでいるのだろう。

(こっちはいつでも大丈夫。何なら今でもいいゾ。っと)

思ったことをそのまま送る。返信は5分と経たずに帰ってきた。

「おいおい、マジかヨ……」

返信された内容は「おっけ、なら今から第一層ボス部屋に来てくれ」だったのだ。確かに、もぬけの殻となった第一層ボス部屋に行くもの好きなどそうそうはいないだろうが、何せ今からである。リアルと違ってあれこれ準備する必要はないが、心の準備とい

うものは必要だった。必要最低限の準備をして、アルゴは拠点としてある部屋を出た。

アルゴがボス部屋についたとき、もうすでにロータスはいた。だが、その表情はとも思いつめたようだった。向こうもこちらが入ってきてすぐに気づいたようで、

「悪いな、急に呼び出して」

とだけ言った。だがすぐに元の表情に戻った。

正直なところ、その時点でもうすでに意外だった。この男は、どんな状況にも飄々としてつかみどころのない、柔よく剛を制するという言葉を体現しているかのようなふるまいをすることが多かったからだ。それに不思議に思いながら考えていると、もう一人やってきた。そちらに目を向けると、アルゴにとっては商売敵のプレイヤーがいた。

「ゲイザーも悪いな、急に呼び出して」

「いいや、君がこんなことを言いだすなんて珍しいからね。」

それで、話とは？」

表面上は本当に快く引き受けてはいるものの、ゲイザーもどこか訝しげだった。

「まず初めに言っておく。怒らずに最後まで聞いてくれ」

最初に切り出されたその言葉に、言い様のない不安感を感じた。

「今、俺はP O Hからこっちの派閥に来ないか、とお誘いを受けてる。で、結論から言っ

ちやうと、俺はこのお誘いを受ける。おたくらには、この情報をばらまいてほしいんだ。タイムリングとしては、俺がお誘いを受けたその日の日付が変わるとき。引き受けてもらえるか」

言っていることは無茶苦茶だ。それに、こんな情報を新聞に売ったらそれこそ想像を絶する価格で売れるだろう。だが、そもそも根本となる信憑性が怪しい。そのあたりまで考えていないこいつではないだろう。何より、

「・・・本気なんだな」

あえて、いつものちよつとおどけたような口調ではなく、真剣な口調でアルゴが尋ねた。正直、本人から直接、こうして聞かなければ眉唾として斬り捨てていただろう。

「ああ。この先どうなろうとも、後悔をするつもりはない」

一言に込められた、覚悟、決意、気迫。ただのデータの塊でしかないはずのそこに込められたものを感じ取り、アルゴの心は固まった。

「理由を聞いても？」

だが、隣のゲイザーはそういうわけにはいかないようだ。

「今は言えない。いつかきつと言える日が来ると思う。それまでは、リスク軽減のためにも、言わないほうがいいと思う。何より、これ以上、巻き込めねーよ」

ゆつくりと息をつきながらゲイザーは目を閉じた。そのまま暫く、まるで眠っている

かのような沈黙を保っていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「引き受けよう。そのお誘いを受ける日付というのはわかっているのかな？」

「ああ。今週、フロアボスの攻略が行われるのは知ってるよな？フロアボス攻略後、その返答を出す」

「攻略組全員の前で、ってことか？」

「ああ。それなら、あいつらも余計なことではできないだろうし、こちらとしても手出しはできない。おそらくは、一番スムーズにことが進むはずだ」

それは確かにそうかもしれない。今の時点でP O H側と攻略組側が戦ったらどうなるかなど火を見るよりも明らかだ。ならば、ことが起こることはないだろう。

「攻略組が帰ってくる、その前に情報を広めればいいんだな？」

「ああ。できれば、攻略組が広める寸前に。新聞屋とかに売りつければ高値で売れるはずだし、後は勝手に広まるはずだ」

その理屈なら十分に理解できる。

「分かった。こつちとしても、十分に利益の見込める話だしね」

「鼠の名前にかけて、絶対にこの依頼は達成するヨ」

「・・・恩に着る」

一つ頭を下げて、ロータスはメニューウィンドウを表示させた。だが、その瞬間に、ア

ルゴが止めた。

「おっと、今回のお代は要らないヨ」

「でも、あんまりにも無茶な依頼だ。少しでも払っておかないと」

「あんまりにも無茶だからこそ、だよ。それに、今回の件は十分に報酬が見込める。お代などもらわなくとも十分な収益を見込めるさ」

そう言うとき、ゲイザーはアルゴの肩を軽く叩いた。

「さて、これからは打ち合わせだ。お互い情報の取引と、どちらがどこに売り込むかを決めなくてはならない」

「そーだナ。んじゃそーいうことだから、こっちは任せろ」

そう言うとき、お互いに出口へ向かって歩き出した。その背中に向かって深く頭を下げると、ロータスは逆側の出口に向かって歩き出した。

それが、2か月前の出来事。

あれからアルゴはロータスの動きをできるだけ注意深く追うことにしていた。あれ以来、ゲイザーとは商売敵でありながら共闘関係でもあるという、複雑という人子に尽きる関係になっていた。だが、ふたりの間での共通認識は、当面の間のロータスの動きを共有するということについてはほぼ同一といってもいいほどに共通していた。だか

らこそ、今回別件で手が離せなかったアルゴに代わって、ゲイザーが何とか情報を収集して報告したことで、いち早くアルゴがこの情報を知ることができたのだ。

（たぶん、あの時濁した“理由”……それが、今回の行動原理であり、これからの行動指針になってくる……。逐一分析しないと……）

暗く静かな部屋の中で、アルゴはずっとそれだけを考えていた。

22. 狩り

俺が初めてPKしてからすぐ、俺は服装を変えていた。表向きは隠蔽だ。俺のことは俺自身がばらまいたから、今までと同じような恰好をしていたら、間違いなく一発で気づかれて逃げられる。特に、俺は何の因果か、この世界に来てからというものはほとんど臍脂というか、所謂暗い赤色系統の恰好ばかりしていたから、姿を変えるのは楽だった。

今の俺の服装は、黒のインナーにそれより若干色の明るい外套を羽織って、それを革の色に近いベルトで前を留め、ダークグレーのスボン。かつてのイメーヅカラーである臍脂は口元を覆うマフラー状の布にのみ残ることになった。・・・結果的にどこかで見たような感じになってしまったが気にしない。

そして、今俺は暗闇に紛れて待ち伏せをしていた。俺が初めてのPKを成功させてからもう1か月になる。その間に何人か殺し、完全に殺す感覚に慣れてしまった。今回は、完全に俺のみでの、完全に俺しか知らないPKを行うことになっていた。

「んー、なんでだろ、最近実入り薄くない？」

「そうだねー。なんでだろ？」

「それを聞いてんじゃん・・・」

「大方皆ビビってんでしょ。最近出てきたP K O集団とか言うのに」

「あーそうかもねー」

いつものジャスミンとヴァイオレットのやり取りに加わって平坦に答えたのは古参メンバーの一人のウエステイリアか。他にも何人か見える。全員ではないが、そこその人数が集まっているようだ。——そう、今回のターゲットはハーブティード。

(まあ、あとでまとめて壊滅させるから、俺としてはどうでもいいけど)

そう思うと、集団と音をたてずに並走する。そのまま無音で愛用の少し大振りの短剣を抜き、もう片方の手で普通の投げナイフを抜く。普通の、といっても刃も含めて黒塗りにある上に、俺の服装もほぼ黒づくめなのでまず見えない。それを音も動きも悟られずに上に投げた。直後に対象にも投げる。

まっすぐ投げたナイフは先頭を歩いていたジャスミンの膝にきれいに突き刺さった。突然襲った感覚に平衡感覚を崩したのか、あつさりとジャスミンが倒れる。そこに、あつさりと上から投げナイフが防具ともなっている衣服をきれいに縫い付けた。

「ジャスミン!?!」

「おや、気付かなかったのですかな」

うつすらと片頬に笑みを浮かべ低い声で語りかけながら、俺は奴らの前に出た。もっ

とも、そのあたりまで完全に覆われていたので、相手がこちらの笑みに気付いていたかどうかはわからない。

「あんだ、何者よ!?!」

「はてさて、こちらに名乗る義理などありませんまい」

言い切るが早いのか、俺は一瞬で踏み込み、集団の後ろに抜けた。何も起こらないと思いい、軽く笑いすら浮かべたメンバーもいる中で、ヴァイオレットだけが驚きに顔を染めていた。その理由は、——俺が向き直る寸前にヴァイオレットの頭部から発生した炸裂音ですぐに分かった。

笑いがすぐさま凍り付き、恐怖の悲鳴が喉をつき上げる。何人かは我慢できずに漏れたが、大半がこらえたのは意地か誇りか。

「リカバー、ヴァイオレット」

「なっ!?!」

俺の手の中にいつの間にか握られていたピンク色のクリスタル——状態異常回復結晶、通称リカバークリスタルが砕ける。瞬間に、ヴァイオレットの首はもと通りとなった。

「この通り、首チョンパされても救済手段として、直後にリカバークリスタルを使えばHP減少も止まるし、死ぬことも避けられる。腕でも似たようなもんだけど、ま、HP減

「少ない分まだましかなー」

「何が言いたいの」

相変わらず平坦な声でウエステイリアが問いかける。それに対して俺は笑みを深めて言い放った。

「ゲームを始めようってことだよ。あ、逃げようとしたら問答無用で殺すから」

につこりと擬音がつきそうな、柔らかいとしか言えない口調で言い放った。それは得体の知れない恐怖を内包した反感となつて帰つてきた。

まず飛びかかつてきたのはウエステイリアだ。武器は短槍。無造作な突きをあつさりと躲し、首を狙う短剣は躲された。続いて飛んできた短剣数本はすべていなし、躲し、受け止めた。

「なっ・・・!?」

「甘い」

一瞬で間合いを詰めると、俺はあつかりと投げた張本人であるヴァイオレットの首を飛ばした。

「リカバーヴァイオレット!」

すぐに叫ばれる結晶の使用コマンド。その首が治るや否や、すぐにもう一度ヴァイオレットの首を飛ばした。振り返りざま、数本の投げナイフを一気に放り投げ、何人かの

動きを止める。

「投げナイフを使うんなら、これくらいの技術は身に付けておけよ」

ヴァイオレットに向かって不敵に笑いながら言い放つ。当のヴァイオレットは連続で首を飛ばされたことによる戦意喪失により、腰を抜かしてぺたんとして座り込んでいた。

「や・・・」

その顔は完全に恐怖に染まり、よく見ると微かに震えているようにも見える。

「なんだよ、口だけかよ。拍子抜けだな」

これは本心からだ。あれだけ大口を叩いていたから、少なくとも、もう少しは度胸があると思っていたのだが、これではあまりにも拍子抜けだ。

「さて、次はどうだ？」

手の中で短剣をくるくると回して遊びながら、相手の様子を見た。各々自分の武器を構えてこちらに向けてはいるが、人によってわずかに差があるが、目には躊躇が微かに見える。やはり、人殺しというのは忌避感が強いのだろう。

「上等。全員まとめてかかってきな」

右手で短剣を逆手で握ると、胸の中央の周辺で、空いた左手は左の一番下の肋骨のあたりに構えた。俺の返答を売り言葉に買い言葉と見たか、全員がまとめてかかってきた。だが、俺からすれば、その攻撃は連携こそできていたが、その太刀筋は甘いとか

言いようのないものだった。

「握りが甘い」

まず袈裟に打ちかかってきた相手の手首を強打し、武器落としを誘発すると、相手の右から首を半ば力任せに落とす。背中から迫る刃にはギリギリまで引き付けて躲すことで、同士討ちを恐れて硬直したところを素早く刃を振るって両腕を落とす、とどめとして仕込み靴の刃で足を落とした。

「ワーンダーウン」

笑いながら語りかける。その様はさぞかし狂気に映つただろう。

「あああああああああああああ!!!」

後ろから女性にあるまじき咆哮を上げながら、隠すということは一切せずに全力で打ちかかってきた刃を受け止める。

「よくも、よくも、ヴァイオレットを・・・ッ!」

「おやおや、うら若き乙女とは思えぬ振る舞いですなあ」

「うるせええ!!」

完全にそれ女性としてどうだよ?と思うような声と態度を表に出しながら、打ちかかってきた当人——ジャスマンはさらに刃に力を籠める。

「てめえは、ここで、絶対に、殺す!」

「やれるもんならやってみな、腰抜けお譲さん」

軽い挑発と共に、俺は力を受け流して相手と立ち位置を変える。ヴァイオレットは依然として戦力外、ウエステイリアはヴァイオレットを何とか再起させようとしているが、ほとんど効果が無いようだ。他のメンバーも、臆したのか仕掛けてくる気配はない。その中の一人が、こちらに背を向けて走り出した。が、

「言ったよね？逃げようとしたら——」

そう言つて、一瞬で回り込んで、胸にその刃を突き立てる。と同時に、もう片方の手で今度は黒に近い紫色の刃をしたピックと、黄緑色のピックを一種類ずつ抜いて突き刺した。

「問答無用で、殺すつて」

同時に点灯するのは、最高レベルの麻痺と毒を示すアイコン。胸でクリティカルヒット扱いになったHPに、その麻痺と毒が完全に追い打ちになった。俺がその体を無理矢理ぶん投げ、相手はなす術なく地面に叩き付けられた。そのダメージは残り僅かなHPを食らいつくし、体を爆散させた。それを追う形で、優雅とも取れる足取りで元の場所へと戻りながら、俺は言った。

「君ら程度のレベルで俺から逃げれるとは思わないことね。攻略組に匹敵するレベルングでもしてなけりや、俺のレベルには追い付いていないと考えると問題ないだろうし」

俺が攻略組から抜けてからまだ二か月しか経ってない。加えて、ペースは落ちているとはいっても俺はレベリングを続けている。あれから10層以上攻略は進んだが、その間に俺のレベルも8ほど上がっている。攻略組の中でも俺はかなり高いレベルの部類に属していたため、こいつらが攻略組レベルのステータスと経験値を持つていない限り、俺がステータス負けすることはない。といっても、慢心などするはずもないが。

「まさか、ブラッディ・ロータス・・・!?!」

「あれま、いつの間にか俺もずいぶんと有名人になったもんだな」

攻略組からPKO集団の一員へと堕ちた俺は、攻略組に所属していたころからずっと暗い赤色の服を着ていたことから、今では血まみれの蓮、鮮血の蓮、という意味からブラッディ・ロータスと呼ばれるようになっていた。

それほどまでに名前が売れていても、彼女らが気付かなかったということ責める理由にはならないだろう。基本的に俺たちは姿を悟られた相手は尽く葬るか「お話」の上での説得をしているのだから。しかも、ここまで俺は意図してキャラを思い切り変えているどころか、声域が狭いため若干止まりだが声の高さも普通とは変えている。むしろこの状態で気づくのは顔なじみの連中くらいだろう。

「てことは、こいつ、PKO集団の・・・?」

「そゆこと。ついでに言うと、あんたらは蜘蛛の巣にかかった蝶同然だと自覚して?」

蜘蛛の巣に運悪く捕まった蝶は、やがてそれを知った蜘蛛に食われるだけ。逃げることも許されず、ただその身を食われる。ようやく女たちは、自分が狩る側から狩られる側へと回っていることに気がついた。

「さて、と。かなり興が削がれた感はあるけど、改めて、ゲーム再開と行こうか」

相変わらず笑みを絶やさずに俺は語りかける。その直後、俺を囲んでいた雰囲気明らかに変わった。今までの、強い反感や反発をはらんだものから、恐怖と、微かな覚悟をはらんだそれへと。

「んー、悪くない。やっぱり得物は活きがよくないとね」

言いつつ、俺は改めてアプローチを考える。その時に、一人が突然叫びだした。

「わあああああ!!」

駆け引きのかけらもない、ただ恐怖にかられただけの突進。稚拙以外の何物でもないその攻撃を、俺はあっさり回避して、すれ違いざまに首をあっさり飛ばした。

「リ、リカバークリサンセマム」

ところどころ裏返ったコール。その結晶が砕けるのとはほぼ同時に、もう一つの炸裂音が重なった。首が飛んですぐにもう一つコールが入る。

「リカバーアマリリスー」

今度ははつきりとしたコール。だが、こちらも、今度は複数の炸裂音が重なった。そ

のコールした張本人の手足と首が一瞬で飛んだのだ。次のコールはなかった。

「まさかとは思うけど、もう在庫切れ？ さすがに早すぎない？ それとも、仲間を見捨てたの？」

そう言いつつ、周りを見渡す。背後からする、人一人分のポリゴン炸裂音を聞きながら、試しに周囲に刃を向けてみるが、返ってきたのは腰が引けてただ自分の得物を握っているだけの、完全に恐怖に染まったそれだけ。

「・・・マジかよ。もう少し粘つてくれるかなと思つてたのに、これでもう完つつ全に興が冷めたわ」

本当に落胆したふりをしつつ俺は短剣を納めた。それにより安心したのか、今まで張りつめていた空気が一気に緩んだ。それこそが、俺の狙いだった。いったん上着の中に入れて、腕を出しざまに振る。瞬間に、その場で俺に一番近いプレイヤーがその場に崩れ落ちた。

「え・・・？」

その後も、次々とプレイヤーが崩れ落ちていく。やがて、ジャスマミンが不思議そうにつぶやいた。

「どうして・・・？」

「どうしてってそりゃ、麻痺したら倒れるに決まってるんだろ。身動き取れないんだから」

俺が行ったのはひどく単純な行為だ。上着に仕込んであった大量の麻痺投げナイフを、次々に投擲しただけだ。もつとも、投げる順番やタイミング、目標を間違えたりすると面倒なことにもなりかねないのだが、うまくいったのでそのあたりは考えないこととする。

「なんで、麻痺状態なんか……。Mobの気配もないのに」

「はあ……。恐怖で頭までおかしくなったか？ Mobしか麻痺攻撃使わないって根拠はいつたいどこから湧いて出てきた？」

ため息をついて、俺はもう一本あった麻痺ナイフを見せる。

「で、あたしたちをどうするつもり？ あんたは男だから、どうしようもならないわよ」

「そうだなあ、面倒なことにもなりかねないし。でもな、外道が男ばかりと誰が決めた？」

そう言うと、俺は軽く右手を掲げて指を動かした。瞬間に、完全に見えない位置から深緑の迷彩ポーチを着たプレイヤーが出てきた。

「ようやくお仕事お？ どれだけお預けにしてるのよ？」

「ほらほら、グダグダ言つてねえでやれ、エリーゼ。麻痺はきつきかけたばっかだし、何よりこの腰抜けどもなら大丈夫だろう。報酬はきつちり払うし、後はこっちで処理する」

「はいはい分かりましたよー」

そう言うのと、そのプレイヤー、もといエリーゼは麻痺で倒れているハーブテイーのメンバーの右腕を操作し、メニューウィンドウを操作していく。一般的には他のプレイヤーには詳細を見ることはできないが、それはオプシオンで変更することができる。それはこの手の犯罪ギルドにとっては公然の秘密だ。もともと、普通なら使う機会などほとんどないが。

やがて、エリーゼがあるタブを見つける。それを、

「やめ——」

「イ、エース」

どこかあけすけすぎるほど陽気にタツプする。警告ログとそのプレイヤーから上がる声を無視して、もう一度タツプ。

「やだ、やだやだやだやだ．．．!」

当の操作されたプレイヤーは、先ほどの怯えた表情のほうがまだましなのではないかと言うほどに泣き崩れ、絶望していた。明らかに一変したその様子に、ジャスミンがこちらに向かって強烈に睨む。

「何をした．．．!?!」

「なあに、とあるタブを解除しただけだ。いずれあんたにもわかるだろうから、何を操作

したのかはその時までのお楽しみ、ってことで

悪いエリーゼ、急で悪いが一つ追加注文頼む」

「何よっ。」

「あいつを最後にしてくれ。後は任せる」

「了解。そのくらいなら追加料金は1000でいいわよ」

「さんきゅ、じゃあ頼んだ」

片頬のみをつり上げ、不敵に、邪悪に嗤った。

次々とエリーゼが、ハーブティーのプレイヤーのメニューを操作し、操作されたプレイヤーは次々に絶望していく。泣き崩れるもの、声もないもの、唇を噛みしめるもの、様々なものがあった。

やがて、ジャスミンの順番が来た。それまでも、まだ強気な態度を崩さない。

「いいねえ、そう言う表情のやつが絶望する瞬間が見られるっていうのは！いやはや、ここまで煽った甲斐もあつたというものだ！」

今度こそ、俺は大口を開けて哄笑する。俺のその顔が不愉快極まりないのだろう、ジャスミンはこちらをさらに強くにらんだ。

「もうやっていいの？」

「ああ、やっちゃまえ。あ、そうだ。何なら、読み上げながら操作つてので」

「・・・5000。さつきとは別で」

「合計で追加6000ね、承知」

そのやり取りを終えると、エリーゼはジャスミンの右手をとった。手始めにメニューを開く。

「さて、まずは可視状態に変更して」

まず一回タップ。

「オプションタグを開いて、スクロール」

さらにタブを送っていく。

「倫理コード解除設定、つと」

「え・・・!?!」

そこまでいって、ようやく何をされるのかを悟り、怯えたように声を上げる。だが、もう遅い。

「やめて・・・」

「全解除を選んで、警告なんて無視してイエスをタップつと」

「やめてええええええ!!」

か細い声の抗議など耳を貸さず、あつさりと作業を続ける。絶叫とも取れる抗議すらもどこ吹く風で、無慈悲な処刑宣告が行われた。瞬間、ジャスミンの表情が絶望に染ま

る。

倫理コード設定。それは、SAOの中において、所謂セクハラ、痴漢行為全般を防止するために設けられたものだ。具体的に言うと、異性のプレイヤー——どちらからでもだが——の一定以上の接触を続けると、まず軽く弾かれるような不快感が発生し、やがて強く弾かれ、最終的には強制的に牢獄送りになる。解除にはある程度段階があり、全解除をすればセクハラ行為で牢獄送りはなくなる。つまり、普通はシステム上不可能な性行為も可能となる。加えて、ステータスは俺のほうが圧倒的に上。これが何を意味するのか分からないほど馬鹿じゃないだろうとは思っていたし、実際そうだった。「昔のアニメの台詞にこんなものがある。

『恐怖というものには鮮度があります。怯えれば怯えるほどに感情というものは死んでいくものなのです。真の意味での恐怖とは、静かな状態ではなく、変化の動態。希望が絶望へと切り替わる、その瞬間のことを言う』

なるほど、実際に体感してみると優れた比喻だな。さて、その瑞々しく新鮮な恐怖の味はどうだ？ 殺されなれないと思ったら、一方的に、女としても凌辱されながら死んでいくかもしれない……。その感想は？」

完全に恐怖に染まったその顔に、俺は傍から見れば穏やかそのものの口調で語りかける。だが、その顔は泣き崩れ、筆舌に尽くしがたい恐怖しか感じ取れなかった。

「ところでさ、もし俺は今後あんたらに何もせず、もちろんメンバーを殺すこともないって選択肢があるっていったら、どうする？あ、無論あんたも込みでね」

一瞬表情を消してから、にこやかに再び笑った。だが、それは今までの嘲笑ではなく、本当に柔らかな笑みだった。だが、それだけで安心するほど相手も馬鹿ではなかった。だがそれは、平常時ならばの話だ。

「本当？」

「ああ、本当だ。俺は、約束は守るからな」

さつきまで自分を殺そうとしていた人間の言葉だ。それでも辱めの限りを尽くしたうえで殺されるのと、何もせずに生きられるものものどちらがいいか、というのは選ぶまでもなかった。溺れる者は藁をもつかむ、という言葉の典型だった。

「よし、それじゃまず——」

そうして俺は笑みを崩さずに、その計画の一端を少しづつ話していく。こうなつてしまつたら後はマリオネットだ。こちらの掌の上で踊るしかない。内心ではこの上なく昏い笑みを浮かべていた。

だが、1ミリでも考える余裕がこいつにあるのであれば、そして先ほどの言葉を覚えていたのならば、俺が何もしないなどということがあつたら、果たして思つただらうか。もつとも、その精神的余裕を潰すことがこんなあまりにも回りくどい手段の一つでも

あったのだが。

「さてと、あんたはもう帰ってもいいぞ。報酬の件はまた追って連絡する」

「ん、分かった。もし払わなかったら本気で殺しにかかるからそこんところよろしく」

「分かっているっての。約束は守る。契約の類ならなおさらだ」

そういうと、エリーゼは去っていった。ジャスミンが俺の指示した行動をするその隣で、俺は得意技でもある高速タイピングで、あるプレイヤーに連絡を取っていた。

その後、俺はジャスミンの案内である場所に向かっていた。その後ろにはまるで葬式にでも行くような生き残りのハーブティーの面々。

どこか暗く、絶望している。だがそれでもついてきているという奇妙な状況。その原因はほんの1時間ほど前にさかのぼる。

「じゃあまずは、君たちの本拠地の場所教えて？」

「知ってどうするの？」

「まあいいから。逆らったらどうなるか、分かるよね？あ、それも、矛先は君とは限らないわけだし？」

その瞬間に、俺の「にっこり」の意味が分かっただけらしい。だが、脅しがまやかしても

何でもないと分かっている以上、選択肢はなかった。

「・・・第13層の圏外村、ネモスにあるわ」

「もつと具体的には？」

「大きな、洋館のようなプレイヤーハウス。そこが私たちのアジト」

「そっか。なら、今からみんなで向かおうか、そのアジトに。あ、待ち伏せとかは、少なくとも俺ら側はしないから安心して。」

あ、言い忘れてたけど、妙な行動起こすとか、可視モードの解除と倫理コードの再設定はしないでね。した瞬間に、気分で誰か選んで、インナー以外すべて装備全解除の上、フィールドに麻痺らせたまま放置するから」

背中への気配を敏感に感じ取り、思い出したように言う。その言葉で、何人かがすぐにメニューを閉じる。それができないのならば、メニューウィンドウに意味はない。

「いい子だねー」

それと、ギルメンを全員本拠地に集合させといて。いいね？」

疑問とささやかな希望が混じった表情で、こくりとまるで人形のように頷いた。

「さて、行こうか。そろそろ麻痺も治ってるでしょ？ま、治ってなかったら引きずつても連れていくけど」

そう言うのと、俺は立ち上がった。直後、他のメンバーものろのろと立ち上がった。

「えっと、ここが14層だから、一個下か。迷宮区抜けることになるけど、問題ないね？
ある程度は、俺も護衛するし」

「信用できない」

「だろうね。でもまあついてきてよ。生きたいんでしょ？」

生きたい。その言葉を出された瞬間に、少女たちは退路などなかったことに気付いた。

「・・・分かった」

「ん、よろしい」

にこりと微笑んでこちらを振り返る青年からは何も読み取れず、それが空恐ろしさを加速させていた。

やがて、彼女らのアジトに到着した。攻略組であった俺からしたらこのあたりになど敵はいない。遭遇した敵を片っ端から倒していても、特に問題はなかった。見たところ周囲には誰もおらず、彼の言葉が正確であることを明確に物語っていた。

「中に入ったら、ギルメンを外に連れ出して」

「全員？」

「もちろん。あんまりにも出てこないようだったら中に乗り込んで血吹雪舞わすから」

耳打ちでの会話を終えると、俺はジャスミンの背中を軽く押した。

やがて間もなくして全員のギルメンが出てきた。

「で、次は何をすればいいの?」

「次が最後で、一番簡単。ここに署名して」

そう言つて取り出したのは一枚の紙。だが、その上には青白い炎がともっていた。

「こうすれば、俺という脅威から、君たちの命は保護される。システム的に、ね」

そのアイテムは、一般にはなじみの薄いもの。だが、オレンジギルドの面々にとつてはとてもポピュラーなものだった。

「ギアススクロール……!」

「そ。口約束だけじゃ信用されないだろうからね」

正式名称、『誓約の巻物』。これに署名したプレイヤーは、システムのその条文において制限されている行動の逸脱が不可能となるというアイテムだ。これは、このアイテムが損傷——破られる、燃やされるなど——しても、効力は持続する。その性質から、某英霊や魔術師が出て来る作品から、ギアススクロールと言われている。そして、この書物にはすでに *lots* という名前が署名され、あと一つ署名欄が空いていた。

「条文を確認しても?」

「どうぞどうぞ。つていつても、本当に確認にしなければならないだろうけど」

そう言われ、紙を手に取り読んでいく。そこに書かれた内容はこうだ。

Lotusは、以降ギルド・ハーブティーに対し、傷害行為を働くことはできない。この契約は、このプレイヤーとギルドリーダー、双方のサインがなされた瞬間から効力を発揮する。

「・・・分かったわ」

そう言つて、ストレージからペンを取り出して署名する。jasmineという名前が署名されたものを、俺はそのまま差し出した。

「これにて契約は成立だ。現に、ほら」

そう言つて俺は手近なメンバーにスローイングタガーを突き立てようとする。が、それは、ここが圏外であるにもかかわらず反発のフィードバックと共に弾かれる。もちろん、HPは1も減っていない。

「そう。ならよかった」

そう言つて安心しようとした。だが、ジャスミンが背中を向けたときに、異変は起こった。俺が片手を上げ、その瞬間に無数の麻痺武器が周囲に降り注いだのだ。次々とハーブティーのメンバーが倒れていく。

「どう・・・して・・・？ 契約はちゃんと発動しているはず・・・」

「ああ。俺にあんたらを傷つけることはできない。俺には、な」

わらわらと出てきたプレイヤー。だがそれは、すべてPKO集団ではなかった。

「いやー、急用っていうから飛んできちゃいましたー」

「おう、無理言つて悪かったな」

「いえいえ。むしろ、この状況ならおつりが来ますよお」

そう言つて話しかけてきたのはそのプレイヤーの頭だ。

「にしても、評判通りの上玉揃い。意外だな」

「ええ。いろいろと意外ですが・・・まあ、上玉であることに損などありませんしねえ」

「それもそうだ」

そう言つて、俺は口の端で笑つた。

「上玉・・・? どういうことよ・・・!?!」

「ま、それはいずれわかるさ。んじゃ、後任した」

そう言つて、俺は頭の肩を一つ叩いてその場を去つた。

「ふざけんな、この、クソ野郎、外道! 地に堕ちろ!!」

後ろから聞こえて来る叫びに、俺は一度だけ振り返つた。そして、静かながらもよく通る声で言つた。

「悪いがこちとらもうすでに堕ちてるんだ。あと、俺が外道でないといつかから錯覚していた?」

不敵に嗤い、俺はその場を去っていった。その心は、不思議とあまり晴れていなかった。

23. 蓮の蕾

それからというものの、俺はPKを続けていた。そのまま年月は流れ、気が付いたらデスゲームが始まって一年が経とうとしていた。

例によっていつもアジトにしているダンジョンに、俺たちはいた。もつとも、リーダーであるPOHはいない。あいつは、オレンジからグリーンに戻ることできる、通称「カルマのクエスト」に出掛けていた。なんであいつがわざわざそんなことをしているかというのは、補給のためというものもあるのだが、もう一つ目的があった。

微かな物音で目が覚める。一応ここもダンジョンなので、人が来るときもある。その時は、「お話」の上で丁重にお帰りいただいている。いったいどういふことをしているかというのはお察しだ。だが今回は、

(この足音……)

お話の必要はなさそうだった。

「リーダー、帰ってきたか」

「え、マジ!？」

俺のぼそりとした小声の呟きにジョニーが即座に反応する。間もなくして黒いボン

チヨの男が入ってきた。

「おう、今帰った。よくわかったな、ロータス」

「あんた、リアルだと自衛官か警察か、それか兵役経験者じゃないか？ 足音がかつちり揃ってるから、特にわかりやすい」

「なるほどなあ。何というか、やっぱりお前さんはcleverだな」

「褒めても何もでないぜ？」

軽く微笑む。そして、俺は静かに尋ねた。

「で、俺たちの名前は？」

そう。何故、わざわざカーソルを戻してまでPOHが行動していたのかというのは、ここに起因する。もつと言えば、とあるクエストをこなすためだ。そのクエストとは、

「まあそう急ぐな。」

今日から俺たちは、『Laughing Coffin』だ」

「ラフィン・コフィン……？」

「笑う、棺桶、か」

「なるほど。なかなかいい名前だな」

いまいち得心の言っていないジョニーだったが、続いたザザの言葉で俺と同じような感想を持ったらしい。ちなみに、モルテは“狩り”に行っていない。

そのクエストとは、ギルド結成のためのクエストだ。かなり下層において受注可能なこのクエストを受けないとギルドの作成はできない。無論、パーティとして活動するという選択肢もあるが、作っておいて損のないものであることは間違いない。

「さすがつすねヘッド！ネーミングセンス抜群つすよ！」
「気に入ったのなら何よりだ」

そう言うと、P o Hはウィンドウを操作した。直後に、俺たち三人にギルドの加入申請ウィンドウが表示される。即座に俺たちは揃ってY E Sの方を押した。三人のH Pバーの横に、ギルドのマークが表示される。

「このマークは誰がデザインしたんだ？」

「補給がてらP a i n t e rとお話してな。少し時間は食っちゃまったが、まあn o p r o b l e mだ」

棺桶を象った黒い下地に、ニタリと笑った目元と口。そして、骨の腕が片手だけ出ている。一言で言おう、悪趣味だ。だが、不気味さというのは俺たちに必要不可欠な要素なので、そういう意味では十分な効果を発揮するロゴだ。

「そりやいいデザイナーを発掘したな」

「どいつもこいつも褒めるなよ。何にもならないんだから」

そこまで言って、近くにどっかりと腰を下ろした。

「そーいやザザ、お前結構頭いいのな」

「別に。家柄上、英語や、ドイツ語には、親しみがある、というだけだ」

「ふーん、医者一家なのか？」

俺のその返答にザザが驚いたような反応をする。それに俺は平然と答えた。

「英語だけならかなり職種が多いけど、ドイツ語って時点で大体絞れた。医療用語にはドイツ語って結構使われるからな」

「・・・慧眼、恐れ入るな。油断も、隙もない。敵にいらなくて、本当によかった」

「褒め言葉として受け取っとくよ」

軽く目を伏せながら言われた言葉に、軽く手をひらひらと振って答えた。

「で、次のターゲットは何なんですか？ヘッド」

ジョニーがにやにやと笑いながら問いかける。それに対して、POHは悩んだ。

「まだ決まってる。俺たちの存在はそれなりにPopu-larにはなっている。が、いかんせん人数が少ないっていうのがいただけじゃないよなあ・・・」

POHの言う通り、俺たちは人数が少ない。水面下での活動に終始せざるを得ない以上、大つぴらにメンバーを集めることはできず、結果として少人数でのこまごまとした活動に終始することになっていた。

「ならば、思い切って大胆に宣伝しちまえばいいんじゃないか？」

俺の発言に、その場にいた三人の目が向く。

「確かに、そうすれば面子を集めるのも楽になる。こつちの情報屋とかは all gr
en なわけだから、街への情報拡散も no problem だ」

「そうだが、あまりにも、リスクが大きい。集めすぎて、首が回らなくなったら、意味がない」

「その辺は入る時点でふるいにかけてれば問題ないだろ。少なくともある程度はぶつ飛んだやつじゃないと意味がないしな」

俺がそういつても二人はまだ納得していないようだ。

「ま、その代りに、宣伝方法は飛び切りぶつ飛んだ方法にしようぜ」

不敵ににやりと笑った俺に、他の三人も似たような笑みを浮かべた。

それから時間は過ぎ、X—DAYの前夜となった。そのX—DAYにおける俺の担当は、POH、ジョニー、ザザ、モルテと共にパーティ狩りだ。狙う相手はKOB。血盟騎士団ブラッドアライアンスが組織の巨大化と共にその名称と形を変えたもので、アスナはこの副団長をしているらしい。

話を戻そう。KOBはその組織の巨大さから、新人の教育として中層においてプレイヤ—の育成兼レベリングを行っている。そこを狙うのだ。無論、その中には高レベルプ

レイヤーも少なからずいる。が、そのあたりは駆け引き慣れしている面子ばかりというのもあるし、そもそも高レベルプレイヤーが何人もいるとは考えづらいので、そのあたりはそれなり以上にレベリングをしている俺がいる時点で問題ないとの判断だ。

俺は自分の短剣の手入れをしていた。システム上、こうして得物を、スキルを使わずに手入れたところで変わるのを見た目だけなのだ。それでも、気分的にはしておきたいものだ。

（目的の一つは達成した。あと一つの目的。それをなすためには、相手の意識を、こちらの意図を悟られずに誘導する必要がある。

決して簡単じゃない。だが、それができなければ、俺が外道になった意味がない）

俺がこうしてここに所属することになった、その意味。それは、俺がかつて録音したメッセージクリスタルの暗号を解けば、それは察せられる。が、まだそれを渡すには時期尚早だ。

達成したもう一つの目的。だがそれでも、俺の心は晴れているとは言いがたい。そして、なぜそんなことをすることに至ったのか、というのには、俺の過去が関わってくる。（いい機会だ。少し、ゆっくりと思いだすか）

達成したとはいえ、当初の目的を思い出すことで気分を紛らわすことくらいはしてもいいか。そう思った俺は、ゆっくりと過去を思い出していった。

事の発端は小学校の頃だ。その時の俺は、とことん自己顕示欲の強い、所謂「むかつくガキ」だった。勉強はそんなに必死にやらない、でも、どんなに悪くても平均より上には絶対にいる。音楽系の部活をやっていたが、他人よりも正確に、上手に曲を演奏することができた。それまではいい。問題はその後だった。

中学校の時の俺は、お世辞にも真面目とは言い難いものだった。授業は毎回のよう寝ている。もちろんノートは常に真っ白。課題は必要最低限。それでも、その内申ではかなり厳しいという高校を当たり前のよう狙えるくらいのテストの点数を出していた。部活でも、そんなに真面目というわけでも不真面目というわけでもないのに、パトの誰よりも上手だった。

ここまで聞けば、一つの都道府県どころか、まわりに一人や二人くらいはいそうな人間だ。教師陣からも聞こえはよくなかった（これ自体は理由も含め自覚していたし、よくなるものではないとして半ば諦めていた）。だが、それがいけなかった。突出した力というのは疎まれたのだ。

やがて、俺をピンポイントで狙ったいじめが横行した。最初は違和感程度だった。例えば、筆箱から鉛筆が一本無くなっているとか、グループに入れてもらえないとか、そ

の程度だったのだ。だが、それがどんどんエスカレートしていった。筆箱を隠されるとか、そのくらいだったらまだいい。教科書がなくなっているなんてことは何回もあった。大抵後から、教卓やら教室にある先生の机やら、考えもつかないところから出てきた。部活を始めようとしたら自分のチューナー——楽器の音を合わせるための機械のことだが——がなくなっていたなんてことは、少なくとも片手では数えきれない。やがて、パート練習に参加もさせてもらえなくなった。OBの先輩に会うことも許されなかった。自分の自転車の鍵を盗まれ、そのまま自転車を奪われて、家までいつもの倍以上の時間をかけて帰ったこともあった。その陰にはずつと、とある女生徒の邪悪な笑みがあった。

ここまでの話を聞けば、〃そもそも親はどうしてそこまでなつても気づかない？気づいたとして、なぜ行動しない？〃と思うだろう。そこは、うちの家庭環境による、という一言に尽きる。うちの家庭環境は、一言で言つてしまえば、〃時代遅れなほどの亭主関白〃だ。俺は長兄だから、家を継がなければならない、などというセリフを、生まれてこのかた何回聞いてきたか（ちなみに父親は普通のサラリーマンだ）。

学校から歩いてきた日には、事情を一通り話し終える前に、父は俺に怒鳴った。

「そんなもの、取られるお前が悪いんだろうが！もう一台自転車を買うなどということはないから、これからは歩いて学校まで行け！」

母親が反論することなどできなかつた。それほどまでの亭主関白なのだ。もし逆らったら、最悪では誰かれ構わず父の鉄拳が飛んできた。

そして、そんな折に、極め付けの出来事が起こった。

修学旅行の日のこと。電車で移動する道すがら、俺は近くの席のやつとトランプをしていた。何せ移動中なのだから暇で仕方がない。そんな折、荷物検査が行われた。俺は疚しいものなど一切持つてきていなかったから、普通に差し出した。そして、俺の荷物から、出て来るはずのないものが出てきた。

「おい、これはどういうつもりだ」

担任教師が俺に向かって怖い形相で言ってきた。その手にあつたのは、携帯ゲーム機。一瞬で頭が真っ白になった。

「え、・・・」

人って驚くと言葉も何もなくなるのだ、と、この時初めて思い知った。真っ白の頭のまま、状況を聞かれた。何も知らない、なぜこんなものが入っていたのかもわからない。そう繰り返すしかなかった。泔々ながらも、他の手荷物検査に戻っていく担任。そんなタイミングで、俺はトイレに立った。本当に何が起こったのか、俺にもさっぱりわからなかつた。だが、今まで続いていたいじめの延長線にあるものだ、ということばぼんやりと分かつた。

何とか心を落ち着けて、席に戻った俺を待っていたのは、般若すら生ぬるいと思えるほどに激怒した学年主任と学年副主任、そして担任の三人だった。いや、むしろ担任は残り二人があまりにも激怒していたから止めるために冷静になつていたか。

「お前は、とことんまで、この場をどういふ場なのか勘違いしているようだな」

副主任の言葉に、俺は思わずげんなりしつつ、きよとんとした。先ほどしつこいほどに事情を聞かれたのにも関わらず、また叱られるのか。だが、担任から事情は行っていないはず。嚴重注意レベルならまだしも、目の前の雰囲気はどう考えてもそれを明らかに通り越している。

「取られたから取り返す、か。なるほど、わかりやすいな」

学年主任の呟きに、何が起こったのかを察しがついた。何者かが俺の鞆の中にあのゲーム機を入れて、あまつさえ担任が他の手荷物検査かなんなりで席を立ち、俺がトイレに立った隙を狙つてもう一度鞆の中にぶちこんだのだ。

「とにかくこつちにこい。話はそれからだ」

引きずられるようにして連れられる。その直前に見えた、ある女生徒の不気味なほどのにやりとした笑みは、おそらく一生脳裏にこびりついて離れないだろう。

それが初日の、本当に初つ端の出来事だったので、修学旅行の思い出など俺にとって無に等しいものとなった。だが、一つだけ。

『お前の人生そんなもんだ』

誰かに——声からしてたぶん教師の誰か——に言われたこの言葉だけは、ずっと俺の心を縛る鎖となった。

帰ってきてからも悲惨だった。先にも述べたような家庭環境だったから、玄関を開けることさえしたくなかった。しかも、帰ってきたのが土曜日、つまり父親がいるということも、それに拍車をかけていた。だがそれでも、ずっと棒立ちしているわけにもいかない。

扉を開けて、中に入る。

「ただい——」

顔を上げずにその言葉を紡ごうとした瞬間に、父親から遠慮なしの鉄拳と投げが飛んできた。あまりの衝撃に旅行カバンが手から離れ、俺の体は玄関の外まで飛ばされた。茫然とする俺を見下ろしながら、父は扉を閉め、鍵をかけた。もう中三の俺にとって、それが何を意味するのかはすぐに分かってしまった。かといって、行き場もない。どうしようかと完全に途方に暮れた。何とかその次の日から家に入れて貰えたが、家での俺との会話は一切なかったものになっていった。本当に、生活しているだけだった。

修学旅行明けの学校は休み、その次の日から学校に通いだった。

いじめは前よりエスカレートしていた。それも、教師の前でやっているにもかかわら

ず、教師もともに止めに入らない。なので、エスカレーターは留まるところを知らなかった。部活のほうは、パート練習はおろか、合奏の参加すらもできなくなり、やがて自分の楽器すら隠される始末。このままではいやだと思い、帰ってきて一月と経たずして、部活を辞めた。高校の見学などにも行こうにも、修学旅行の一件で禁止されてしまい、体験入学の類は一切できなかつた。このころは、周りに味方などいなかつた。

そんな環境の中、俺はひたすらに耐えるしか手段がなかつた。ゲームやネットにどっぷりとかかるようになったのはこのあたりの頃だ。ろくな娯楽も何もなく、俺はそのくらいでしか憂さを晴らすことができなかつた。どんどんとのめり込み、いつの間にかなくてはならないものになつていた。

高校は、思い切つて周辺の生徒があまり選ばないところに進学したから、特に問題はなかつた。幸いなことに、内申はいまいちでも、肝心となる学力だけ見れば選択肢は山ほどあつた。だが、それまでの経験の内容が内容だけに、人を信じ切ることができずに、友人と呼べる存在は一人もできなかつた。

勘のいい人はもうすでに、達成したもう一つの目的の中身に気付いたかもしれない。俺の人生をここまでひたすらに狂わせた、その諸悪の根源。——ジャスミンへの復讐だつた。

本名などどうの昔に忘れた。だが、それでも記憶は痛烈に残っている。小さいと思う

かもしれない。矮小だと笑うかもしれない。だがそれでも、俺にとつて、それほどまでに、彼女は憎かったのだ。何度も夢で斬り捨てた。だが足りなかった。斬り殺し、殴り殺し、蹴り殺し、絞殺した。一通りの殺し方はすでに夢に見た。だがそれでも、想像だけでは到底足りない。それが、まさかこんな風に、実現できる機会が来るとは思ってもみなかった。そして同時に考えた——彼女の心を、もはや立ち上がることなど許さなと言わんばかりに砕いてやりたい。そう思ってしまったのだ。

あの時から俺の心は晴れてなどいない。いくらPTSDが残る様なことをしたところで、俺の心が晴れるわけではない。それを分かっているなお、やらなければ気が収まらなかった。

そんなことを思いながら、刃に映る自分の顔を冷静に見つめる。その顔は、ひたすらに冷酷だった。

レベリングは効率重視で刀を使って、普段のPKには短剣を使っていた。片刃と両刃の違いもあり、慣れないところもある。が、PKということのみを考えれば、一撃ダメージは下でも、それを上回る手数によって秒間ダメージがほとんど同等である短剣を使っていたほうが、圧倒的に楽だった。それにより、今の刀スキルの熟練度は800を突破

していた。そして、短剣も500を突破したのがかなり前のことだ。

(いよいよだ・・・)

あくまで、完全に大つぴらにするのは俺の目的の中では通過点にすぎない。どのよう
に行動するかというののもうすでにシミュレーション済みだ。問題は、いつ行動する
か。そのタイミングをしつかりと見極める必要があった。

(腹は括つてある。あとは、どこまで思いきれるかだ。

・・・生半可じや呑まれるか消されるかだ。本格的に覚悟を決めろ、ロータス)
覚悟を改めて、俺は短剣をしつかりと鞘にしまった。

24. Laughing Coffin

2025年元日。そして、X―DAY当日。俺たちは息を潜めていた。周囲に人気がほとんどないというのがそれに拍車をかけていた。もつとも、こんな日までフィールドに出て狩りをしている人間などほとんどいなかった。だが、何事にも例外はあった。その数少ない例外が、今回目の前にあった。

まずはP〇Hと俺が行く手をふさぐ。逃げ道はジョニー、ザザ、モルテがふさぐ。後はいつも通りの流れだ。俺とP〇Hがまず姿を現すのは、姿をさらしても問題ない実力者が俺たち二人であるという点に尽きる。ジョニーもザザも悪くはないが、俺たちからしたらまだ見劣りするところはある。

手筈通り、俺とP〇Hがまず目の前に姿を現す。一瞬相手は怯むが、各々得物を抜く。あらかじめこうなった時のために打ち合わせしてあったのだろう、後ろが何人か踵を返すが、その先にはジョニー、ザザ、モルテがいた。

「逃げようだったってそうはいかないってなあ」

ジョニーが麻痺属性の短剣を片手でもてあそぶ。それを見て覚悟を決めたのか、相手も得物を強く握りしめる。俺も自分の鞘から短剣を抜いた。まっすぐ正眼に構え、相手

の動きをうかがう。

「来ないのなら、こつちから行かせてもらおうぜ」

一気に踏み込む。想像以上の速度に驚いたのか、相手が少し焦りながら防御をする。が、そんな防御は、今の俺の前には意味を果たさない。あつさり回避すると、左手で顎に掌底を叩き込む。一瞬スタンが発生した瞬間を見計らって、腹を横に薙いだ。続いてかかつてきた相手の剣戟を受け止め、手首を巧みに回して首を搔こうとするが、これは躲された。

「あっちゃー、あれ躲されちゃったかー」

正直、モンスターはしてこない攻撃だから対応しきれないだろうと踏んでいたのだが、これは少し意外ではあった。相手の目の光はまだ恐怖に落ちたそれではなかった。「いい目だ」

片頬をつり上げながら、俺は言う。後退しようとした数人はジョニーたちが、そして前衛のもう一人の高位プレイヤーはP O Hが相手しているようだ。ジョニーたちが中層プレイヤーごときに手こずるとは思えないし、P O Hもかなりの手練れだから、それこそアスナ、ヒースクリフ、そして最近名前を聞かないがキリトあたりでなければあいつと渡り合うことなどできないだろう。駆け引きということも含めれば俺も入るかもしれない。それでも、

(もう一人くらい担当してくれてもよかったですらうに……)

確かにバックアップのメンツは十分すぎる。だからといって、ふたりを食い止め続けるのはさすがに厳しいものもある。腕前を信頼されているというのはうれしいが、若干重荷でもあることも事実だ。そんなことを考えていると、一人がかかつてきた。片手剣にしては少し遅めのスピードを見るに、一撃は重めか。ギリギリまで引き付けて躲すと、ほんの少しかがんで右の下から短剣で右足を薙いだ。完全に切断とはいかなかったが、動脈に触れたと判定されたのだろう、一気にHPが減る。もう一人もかかつてくるが、それはあつさりを受け止める。

「背後から襲ってくるのはいいが、ならせめてもう少し気配をひそめろ。奇襲というのはそういうもんだ」

くるりと身をひるがえすと、左手のボディーパーローからの短剣の袈裟をお見舞いする。もう一人のほうのHPバーがぐんと減った。

再びリラックスして構える。対する相手は、まだ力が抜けきっていない。

「少しは気持ちも分からんでもないが、もう少し力を抜かないととつきには動けないぞ、っと」

最後の掛け声と共に横に踏み出す。そのまま直後に前へ踏み込んで回り込む。

「(う)う(う)とき(に)、な！」

相手が振り返る前に、その首を搔く。その相手は音もなく、首から上を無くして崩れ落ちた。ちらりと周囲を見渡すと、P o Hはとうの昔に戦闘を終えて、こちらの様子を見ていた。ジョニーたちも、ザザがこちらの様子に気を配っているのが分かった。

「もしかして、最初のあの踏み込みが全力だと思った？ 駆け引きも勝負のうちだよ。それに、こんなのアスナの踏み込みに比べれば随分遅いはずだけど」

その言葉に、正確には「アスナ」という単語に、相手の眉がピクリと動く。目の色も微かに変わったことを、俺は見逃すほど甘くない。

「それに、中層プレイヤーといっても、ここで俺らから生き抜けばそれこそ英雄だねー。あのアスナ様にも、見込まれるかもよ？」

にこにこ笑いながら、俺は心にもないことを、まことしやかに言う。その声は、手からしたら毒と分かっていても手を伸ばしてしまふようなものだった。だが、このままではまだ精神的な敷居をまたがせることはできない。

「・・・本当、か？」

「さあ？ 確証はないよ。でも、そういう可能性もあるんじゃない？ つてこと。少なくとも、あの副団長殿に見込まれるには、どつかで大きい実績をぶちあげる必要がある。なら、俺らがその一つを担ってあげよう、つて話。

そのかわり、こつちの言うことも少し聞いてもらうけど、邪魔者を排除できるような、

それこそ独り占めすることも不可能じゃないような技も教えてあげる。悪い話ではないと思うけど?」

毒だ。そうわかっているても、その毒を飲み干して得られるものが大きいと判断したものは手を伸ばす。特に、今の、そしておそらくこれからもアスナの傍にはキリトがいる。ならば、アスナを手中に収めるにはキリトをどうにかする必要はある。そのキリトを排除できるのならば、十分にそれはメリットたり得る。ましてや、相手は良くも悪くもプライドの高い攻略組ではなく、準攻略組ともいえるべき中層プレイヤーだ。ならば、

「何をすればいい」

やはりな。普通にやっても決して落ちないものが、自分の手に落ちる可能性を手に入られる。それだけで、毒を飲み干す覚悟などあつさりするだろう。異常に崇め奉る狂信者の類ならなおさらだ。

「んー、その辺はちよつとこつちでも考えさせてもらおうかなー。そういうことでもいいですよ、リーダー?」

「Yeah, off course」

「つつーわけで、こつちのリーダーの承諾もとれたし。君とフレンド登録させてちょ、つと」

言いつつメニューを開いてフレンド登録の申請を送る。すぐにフレンド登録完了の

通知が来た。

「ほんじやまよろしく、えつと、これは、グラディール」、であつてるのかな」

「ああ、合っている」

P O Hと俺との握手を終えると、ちょうどジョニーたちも戻ってきていた。背丈上ザザの背が一番高いからか、ザザの背中には一人のプレイヤー。

「終わりましたぜ、ヘッドー」

「・・・その、プレイヤー、は？」

「ん？ああ、新たな緑のお仲間よ。見ての通りK O Bのギルメンだから、正式なギルメンにはなれないけど」

「俺が端的に説明すると、後ろでモルテが口の端を釣り上げた。

「なーるほど、仲間は必要ですからねえ」

「てかもともとこれも仲間集めのためだろうが。で、ザザが背負つてるそいつは麻痺つてるだけ？」

「ああ。一人くらい、生かして、おくべき、だろうと、考えたからな」

その言葉に俺は一つ指を鳴らした。

「グツジョブ。演出要素がさらに増えた」

そう言うのと、俺はあえて短剣で浅く斬ってポーシオンを飲ませ、さらに猛毒ピックを

使ってHPを調整しにかかった。こうすれば、圏内につくつかつかないかでこのプレイヤールのHPは消えるだろう。

「よおし、クラディール。君に記念すべきFirst orderを与えよう。俺たちはここに、殺人ギルド『Laughing Coffin』の結成を宣言する。君たちはそのtargetとなり、彼はその毒牙にかかりかけた」

「毒で死んじゃうかもしれないけどね」

横から一言付け加えるも、POHは構わず続けた。

「だが君は彼を助け、命からがら逃げのびた。そういうsituationを伝えるんだ。いいな？」

「ヘッドー、ならこいつのHP、もうちよつと減らしておいたほうがいいんじゃないですかあー？」

俺の作業を、手と足を押さえつけることでサポートするジョニーが軽口を叩くように言った。

「そうだなあ……。だが、俺の得物じゃちと威力が高すぎる」

そういうと、POHは自分の得物に目を落とした。彼の得物は「メイトチョツバ友切包丁」という、

今のところ発見されている中でも最高クラスの魔剣だ。掠めただけでもかなりの威力を持つていくだろう。だが、すぐにその心配はなくなつた。

「使ってくれ」

状態異常処理を終えた俺が、P o H にストレージに入っていた適当な短剣で、しかも A T K 値がそんなに高くないものをひよいと投げた。きっちりつかむと、P o H はプロパティを見ると、満足そうに目を細めた。

「OK、niceだ。じゃあ、少し我慢だぜ」

そう言うと、P o H はその短剣で腕を切り落とした。基本的に部位欠損で継続ダメージが入ることはない。欠損部位は、結晶系アイテムを使うか一定時間経過、宿屋のベッドで寝るなどの行為で、トカゲのしっぽよろしく生えて来る。なので、このままでも特に問題はない。

そのまま数か所に切り傷を付けると、P o H は再び満足そうに微笑んだ。

「よし、これでいい。じゃあ、お仲間——っっていうても元だが——を連れていきな」その言葉で、クラディールはもう一人のプレイヤーを担いで最寄りの街のほうへ向かった。その姿を見送ってから、P o H は俺に向かって行った。

「なあ、毒で死んじゃうかもしれない、っていうやつ。I t ' s l i e , i s n ' t i t ? 」

「ちよつと違う。嘘じゃなくて、本当のことを言っていないだけ。俺が計算したのは、あくまで普通に走って最寄りの圏内までどれくらいかかるか、っていうのが前提だからね。

あの状態なら、どう考えても圈内にたどり着く前に死ぬでしょ。それに、俺、今回ちょっと意地悪したし」

「それってもしかして、あいつに飲ませてたあの液体？」

「そそ。ザザならわかるんじゃない？」

指名を受けて少し考え込んだザザは、少しして答えを出した。

「・・・遅効性の、毒物、か」

「せいーかい。具体的には一分後、今の毒の効果に加えて、さらに同じ毒の効果が加わるって寸法。その頃にはポーションの効果も切れるから、一気にHPバーが減っていつてジ・エンド、ってわけ」

そんな会話をしていると、モルテが聞いてきた。

「そういえば、クラディールさんが我々を裏切るといふ可能性は捨てているんですね？」
「狂信者っていうのは、信じていたものが手に入ると分かれば手段なんて選ばないもんよ。それに、万が一裏切ったらこっちの位置追尾で追っかけてってフィールドで殺すだけだし」

あつさりと言いつつ俺に、モルテも黙った。

「さて、目的は果たした。帰るぞ」

POHの鶴の一声で、俺たちはアジトへと歩を進めた。

P o H一派改め、殺人ギルド「ラフィン・コフィン」のK o Bメンバー殺害事件という衝撃的な事件は、こぞって新聞が一面を飾ったことによつてアインクラッド全土に広がった。

こうして、ラフィン・コフィンは一躍その名を轟かし、その組織の拡大にも成功したのであった。

25. 暗示

それから少しして、俺はある情報を耳にした。何でも、銀のなんたらとか言うギルドのほとんどのギルメンがPKにあつたらしい。それだけならまだいいのだが、もしそれが使える人材だったらリクルートする必要がある。そう思った俺は、POHにもその旨を承諾させたうえで暫く単独行動に出た。

フレンド登録を解除していないものの、それはこちら側だけであつて相手が解除していないとは限らない。が、あいつなら。そう思って送つたメールはすぐに返つてきた。それを見ると、俺は指定された場所へと向かつた。

指定された場所へと向かうと、すでに相手はそこにいた。俺はまだ覆面を付けているのでもしものことがあつてもごまかしがきく。そのくらいは相手も判断で来たのだから。もともと、金になるのなら相手は選ばないタイプだ。

「よう。久しぶりだな、ゲイザー」

「ああ。……まさか本当にこんな形になつてしまうとは……」

「なんだよ、俺が冗談か何かであんなことを口走つたとも思つてるのか？」

「……そう、だな。君はそういう人間だ」

そう言うと、ゲイザーは一つため息をついて近くの壁に寄りかかった。

「で、今回こうして、ということとは、情報かい？」

「ああ。てか、お前に頼むことで情報以外って考えられるか？」

「違うない」

笑いながら言うと、ゲイザーはメニューを開いた。

「どのような情報をご所望かな？」

「最近、中層であったっていうPKについてだ。銀のなんたらだかつてギルドがかかわったってやつ」

「銀の・・・？ああ、シルバーフラグスのことだね」

「あー、そう言えばそんな名前だったな」

「でもどうして？」

「有用な人材ならリクルートして来い、だと」

「なるほどね」

そう言うと、ゲイザーはそのメニューを見ながら情報を言いだした。

「PKを行ったのは、タイタンズハンドっていうギルドだ。リーダーはロザリアという女ランサー」

タイタンズハンドという名前になら聞き覚えがあった。俺が攻略組であったころか

ら活動していた犯罪ギルドの一つだったはずだ。だが、

「タイタンズハンドって・・・確か、下層から中層のこそ泥ギルドじゃなかったっけ？」
「稼ぎが少なくなってきたからなのかな、最近PKも行うようになってたらしい。グリーンであるロザリアがターゲットの目星をつけて、『狩り頃』になったら追い込んで殺す、という手法を取っている」

「うつわー、古典的。までもいいや、次の狙いの情報は？」

「・・・すまない、そこまでは。ただ、迷いの森あたりを主にうろついている姿が目撃されている」

「いや、十分だ。しっかし、迷いの森か・・・」

迷いの森は、森の中がある一定の範囲——体感で十数メートル四方くらい——で区切られていて、その区画から出るときに飛ぶ場所がランダムになるというマップだ。通常なら地図を持っていけば問題ない。俺もソロでやっていたから、地図はまだ持っている。出て来るモンスターは今となつては下層のモンスターばかりだから問題はないはずだ。・・・つてちよつと待て、

「ゲイザー、差支えなければなんでそんな正確な情報を持つてるか聞かせてもらつていいか？ 誰か買いに来たとか？」

「いや、実はな。そのシルバーフラグスのPKは完全じゃなかった。リーダーだけ残つ

て、そのリーダーが最前線で毎日ダイヤモンドズハンドを牢獄に送ってくれと頼んでいるそうなのだよ」

「牢獄送り、つて・・・どうやって?」

「全財産をはたいて回廊結晶を購入したらしい」

「なるほどなあ」

回廊結晶は、集団で使える転移結晶のようなものだ。とても便利な代物ではあるのだが、レア度も恐ろしく高く、それに応じて値段もかなり高い。全財産をはたいたというのも嘘ではないだろう。

とにかく、情報を持っていたのは、買われる可能性が高く、しかもそこそこ大口の客が見込める情報だから持ってたっただけか。しかし、仕事はちゃんとしておかないと、こういう面倒なことになる。殺すのなら正確に、一人残らず最低限で、だな。・・・腕次第、か。

「とにかくサンキュ。いくら?」

「50000」

「・・・値上げしてね?」

「ある種の口止め料込だと思えば安いほうだろう」

どちらにせよ、こちらはあまり金を使わなくなったので余っている。問題はないのだ

が、手痛い出費であることに変わりはない。

「ほいよ」

きっかり500000コルを実体化して渡す。

「また頼むな」

「ああ」

その短いやり取りを終えると、俺は歩き出した。ここからではいくつか迷宮区を駆け上がることになるが、まあ仕方がない。元よりそのあたりは覚悟の上だ。

フィールドを一気に駆け抜け、迷宮区をいくつか突破して迷いの森にたどり着いた頃には、もうすでにどつぷりと日が暮れていた。俺は地図を持っているから、どこをどういうふうなワープすればどのような場所に出るかというのがわかるからまだいい。だが、今重要なのは、「どこにタイタンズハンド、ないしはタイタンズハンドの次のターゲットがいるか」である。ここまで調べさせるつもりはもとよりなかったし、あの様子だとその情報も持っていないだろう。

「・・・しらみつぶしに探すか」

一番面倒だが、それくらいしか方法がないだろう。一つため息をつくとき、俺は腹をくくって迷いの森の中へと入っていった。

暫く狩りをしながら迷いの森を突き進む。もとより、俺からしたらこんな下層に敵などいない。もう何回目かもわからないワープで、俺の耳が人の声を聞きつけた。反射で隠蔽スキルを使うと、その近くまで物音を立てないように歩いた。

「君の友達を、生き返らせてあげることができるかもしれない」

「本当ですか!？」

「ああ。第47層にある、思い出の丘っていうところに咲く、プウネマの花っていうアイテムがあれば、心アイテムになったモンスターを蘇生させることができるらしい」

(この声……キリトか？あと一人の子は、女の子っぽいってことしかわからんかな。声は幼い感じがするけど、果たしてどうだか)

とにかく、キリトがいる状況で出ていくのはまずい。ここは暫く様子を見ることにして、俺は音を立てないようにその場に隠れ続けた。

その夜、適当なところで圏外村を見つけて、一夜の寝床にしようとは準備をしているときに、メールが届いた。差出人はゲイザー。ということは、

「……新情報かな」

そう思いつつ見ると、そこにあつたのはやはり新情報。次のターゲットが分かったら

しい。

「ビーストテイマーが取りに行ったプウネマの花を強奪する、か。：プウネマの花!」
小さい声で驚く。ビーストテイマーというのなら、心アイテムを落とすというあの少女に条件が合致する。

「もしかして、そのビーストテイマーってロリっ子系の女の子か?」

軽くふざけたが、このくらのノリのほうがいいだろう。ゲイザーだって疲れているだろうし、このくらのジョークは許してほしいものだ。

返事はすぐに返ってきた。そこに書いてあったのは、俺の予想が当たっていたことと、ビーストテイマーの少女の名前がシリカで、その愛らしいルックスも相まって——その手の趣味のやつも含めて——ある種のアイドル的な人気を持つ「竜使いシリカ」であるということだった。

「て、ことは……」

アスナの好意をいまだに気付いていないであろうことも含めて、恋心にはとことん疎いあいつでも、他のことは案外鋭かったりする。ゲイザーの情報も照らし合わせて考えれば、おそらくキリトはタイタンズハンド捕獲任務を受けたということになる。ということは、

(最悪、あいつとやり合うことになる、か……)

あまり戦いたくない相手ではある。が、必要であるというのであれば仕方がない。手元に置いてある、短剣にも刀にも見える武器の刃に自分の顔を移した。冷静になれないときは、こうすると不思議と心が落ち着いた。

この武器は「小太刀」だ。名を、「闇牙」という。あんが、とても読めばいいのだろうか。とにかく、この剣が今の相棒だった。

小太刀スキルは、短剣の上位スキルだ。曲刀を使いこめば刀が使えるように、短剣を使いこむと小太刀が使える。それだけならまだいいのだが、この小太刀スキル、刀と短剣、そして曲刀スキルを入れたまま使うと、曲刀、短剣、刀、小太刀という四種類のスキルがこれ一本で使えてしまうという、一種のバランスブレイカーでもある武器だ。だが、この隠し性能は、何を隠そう、俺が暴いたものだ。そもそも、武器の種類をそんなに変えまくる人間など、SAOにおいては存在しないといってもいい。つまり、片手直剣と両手剣や曲刀と刀のような、両手変化——と俺は勝手に呼んでいるが——の組み合わせでいれてあるのならともかくとして、短剣と曲刀と刀など取る人間がいなかったのだ。俺も、訓練も兼ねての戯れで、小太刀で刀の辻風やら旋車やらが発動できたときは肝をつぶしたものだ。それまでは、短剣より重たくなったことで、短剣の良さである取り回しの良さや手数が多さがなくなってしまう、完全な不人気武器であった。この隠し性能が分かった後も、スキルを取り熟練度を上げる手間から、挑む人間はほとんど

いなかった。

「さて、と」

今のうちに移動をしておく必要がある。休息は軽くしか取れていないが、仕方がない。それに、流石の俺でも一気に10層以上も上り詰めるというのはハードというものだ。確か、あの層にも圏外村はあったはずだから、最悪そこで休めばいい。

「転移、フロリーア」

ひっそりと転移結晶を握って呟く。瞬間に、俺の体は光に包まれ、第47層の主街区へと飛んだ。

転移した直後の追っかけっこを終えて、圏外村にて俺はひっそりと息をひそめていた。ここに来た回数などが知れているから、この層に関しては「花たくさんのきれいな層」としか覚えていなかった。所謂観光スポットやデートスポットの類というのは、アインクラッドにおいて大量にあったから、そんなに印象深い所でもなかった。

自力でマップピングした地図を見て、俺は考えていた。もともと、深く短く眠るタイプだから、そんなに睡眠時間は長くなって大丈夫だ。

(狙いはプウネマの花。だけど、あれは確か、ピーストタイマーか近づかないと花が咲か

ない。ということは、取る方法はおそらく待ち伏せ。しかも帰り道だ。人を排除しやすく、しかもほぼ確実に回り込めるルート、となると・・・ここだな)

思い出の丘から、最短経路。その中にある橋の前後。そのあたりだろう。おそらくそのあたりを待ち伏せするはずだ。そのあたりを狙って、

「殺す」

もとより、こそ泥のギルメンなのだ。そうと分かれば生かしておく意味などない。これ以上殺しをする可能性がある以上、牢獄送りなどという程度で許すつもりはない。俺としては、そんなに恨みもないのだ。

念のために索敵スキルを発動させる。周囲に誰もいないことを確認すると、俺は録音結晶を取り出した。メッセージを聞き、俺の思っていた通りの文言が録音されていることを確認すると、俺はそれをもう一度戻して、明日の予定を頭の中でシミュレーションしていた。

朝、シリカを連れて思い出の丘へ行つたキリトは、帰り道に思いもよらぬ光景を目にする。

「何、あんた・・・！なんで、そんな・・・！」

「しいて言えば、慣れだな」

その人物は、次から次へと打ちかかってくる相手を払って、次々に屠っていく。そして、その牙はあつきりと後方にいた女に向いた。

「ロザリアさん……!?!」

小声で、シリカが呟く。

「ね、ねえ……、あなた、私と組まない?」

ちらりと後ろを向いた男だが、まったく歩調を変えずに、女——ロザリアへと歩いていく。

「あ、あなたとなら、きつと、かなり稼げるわ! 分け前は半々、いや、8割をあげるわ! だから——」

「あいにくと」

震えながら、己の得物である十字槍を握る手も、足どころか全身を震わせているロザリアとは対照的に、男は冷静に女の言葉を切った。

「俺はもとより、見返りを必要としない」

「じゃあ——」

「その代わり、」

そう言うのと、その武器を自身の首の横に持つてきた。

「お前に要求するのは、死に際に俺を興じさせることだけだ」

言いつつ、まず一閃。すると、女の両手首が落ちた。直後に、キリトは少女の耳をふさぎ、自分を壁として視界をふさいだ。いくら外道とはいっても、知り合いが自分の目の前で嬲り殺されるといふのはあまり気分の良いものではない。

「え……!?!いや……!!」

得物を落としたことと、その一閃が見えなかったことに対する恐怖で、ロザリアはひどく怯えた。

「おいおい、そんなに怯えるなよ。たかだか両手首じゃねえか」

そういつて、その男は、また腕を何回か振った。すると、今度はロザリアの四肢が落ちた。その間に、キリトは静かにシリカを連れてその場を離れ、物陰に隠れた。

「ひっ……!!」

こうなってしまったら完全に怯えているだけの哀れな状態だ。しかも、救いなどそこにはない。

「うっわ、これだけでこの反応かよ。あの女狐たちのほうがまだましだったぞ」

肩を自身の得物の峰でたたきながら、その男はその傍に立った。

「まあいいや。もう死ね」

そう言うど、男は滑らかとも取れる手つきで、ロザリアの中央から少し左の胸――

心臓に突き立てた。直後に聞こえた、ポリゴンの炸裂音。それがいったい何を意味するのかなど、考える必要もなかった。

「ところでさ、いい加減出てきたらどうなんだ？ 言つとくけど、こつちはとつくの昔に気付いてたから」

そう言うのと、男はゆつくりとキリトたちのほうへ振り返った。その顔は、あまりにもいつも通り過ぎて、それがキリトには恐ろしかった。

「いったいどういふつもりだ、ロータス」

「どういふつもり、つて言われてもなあ……。俺が今どういう立場にあるかってことは、聞いてるんじゃないのか？」

事情は聞いている。キリトが攻略組を離れている間に、ロータスが今のラフィン・コフィンに加入したことも。そして、今となつてはラフィン・コフィンの古参メンバーの一人であるということも。だが、事情を聞くのと実際に目にするのとは違う。

「ああ、怯えなくても大丈夫だよ、お嬢さん。俺は君に危害を加えるつもりはない。少なくとも、今は、ね。それに、君のような子は、笑顔のほうがよく似合う。——つていつも、効果ないかもしれないけど」

苦笑を浮かべるロータスに裏は見えない。が、シリカはキリトのコートの裾をぎゅつとつかんでいた。

「まあ、俺はもう何もするつもりはない」

「信じろって言うのか」

「ああ。それと、あんたにちよつとした贈り物だ」

そういつて、ロータスはキリトにあるものを投げつけた。反射的につかむと、それは何かの結晶のようであった。

「ゆっくり考えてみな」

俺はもう行く。追ってくるのは構わんが——その時は、決死の覚悟を抱いて来い」

そう言うのと、ロータスは道を迷宮区へ向かつて走り出そうとした。ひとたびトップスピードに乗ってしまえば、もともとAGI—STR型だったあいつに、STR—AGI型のキリトが追い付ける道理はない。だから、すぐに声をかけた。

「なあ。どうして、お前はそっち側にいるんだ？」

ずつと疑問に思っていた。ロータスという人間はこの程度で狂ってしまうほど弱くない。ならば、なぜこんなことをしているのか。それが気がかりだった。

ロータスが振り返る。その顔には不敵な笑みが浮かべられていた。

「故あつてのことだ。そこから先は 知る必要のないこと needed not to know、つてやつだ」

そういつて。ロータスは振り返る気配もなく、走り去っていった。

「キリト、さん……？」

声のほうを向くと、シリカが不安そうな顔でこちらを見上げていた。どうやら、無意識にきつい表情をしていたようだ。

「ああ、ごめん。大丈夫だ。ちよつと急ごうか。ピナも待つてるだろうし」

「はい」

そう言うと、歩き出したキリトの横を、シリカが歩き出した。

「・・・あの、」

「ん？」

突然、シリカが声をかけた。

「私に力になれることなら、何でも言うてくださいいねー」

そういつて、天真爛漫な笑顔を見せた。キリトは優しく微笑んで、

「ありがとう、シリカ」

言いつつ、頭を一つ撫でて、また再び街へと歩きだした。

部屋に戻ってピナを生き返らせた後、キリトはさつそく先ほど貰った録音結晶を取り出した。そのまま再生ボタンを押すと、そこから流れてきたのは、意味不明とも取れるメッセージだった。

『それは木馬。大きな大きな木馬。木馬は大きすぎて街に入れない。だから人々は門を

壊した。馬の中の虫に人は気づかず、虫たちに人々は食らいつくされた』

「・・・なんだこりゃ」

「さあ・・・？」

さながら暗号だ。いや、意外に慎重なあの男だ、実際に暗号なのだろう。

「とにかく、俺はそろそろ前線に戻るよ」

「いろいろとありがとうございました」

「いいって。じゃあね」

そう言うと、キリトは部屋を出た。

出てからというものの、ずっとあのメッセージのことが気がかりだった。いったいどういう意図で、あんなメッセージを送りつけたのか。なんでわざわざ暗号にしたのか。わからないことだらけだった。

そんな迷いを抱えながら、キリトは戦い続けていた。場所は最前線の迷宮区。最前線で少しよそ事を考えていても死ぬどころかイエローにすら落ちないのは、年末に行っていたあの異常なレベリングの成果だ。あれから、アスナにひっぱたかれて泣きながら説教され、ようやく攻略を続けていける精神状態までなった（それでも一番効いたのはサチからのクリスマスプレゼントだった）。だからこそ、こうして攻略を続けている。

よそ事をしていたのが祟ったのか、後ろに敵が来ていることに気付くのが遅れた。一発貫うことを覚悟の上のカウンターを出そうとしたとき、

「やああああっ!!」

後ろからまるで流星のような一筋の光が突っ込んできて、その敵を散らした。光を放った人物が誰かを悟った瞬間に横によけたキリトは、その風を肌を受けるだけで済んだ。今のソードスキル——細剣の最上位ソードスキルであるフラッシング・ペネトレイターを放つことのできる人物など、両手で数えるほどしかない。それに、この剣速と正確さなど、そう何人もいてたまるかという話である。

「横取りしちゃってごめんね」

「いや、今のは気づくのが遅れた俺が悪いんだし」

鯉口を鳴らして振り返るアスナは、本気でキリトを心配していた。それもそうだろう。この男が戦闘において油断しているというだけでも珍しいのに、

「どうしたのキリト君？」

「ん？そんなに様子が変だったか？」

「だって、戦闘狂のキリト君が見える敵に飛びつかないなんてこと、珍しいから」

普通の状態なら、見える範囲に敵がいるのに、バトルジャンキーであるこの男がほとんど反応しないなどということがあろうか。

「ちよつと、考え事をしててな・・・」

「何かあったの?」

「・・・ここじゃまずい。できれば、衆人環境の、しかもこんな音が響くようなところで言わないほうがいいと思う」

「それは、どうして?」

「情報源と、後は何というか、予感?」

「どうして疑問形なのよ?」

まあいいわ。なら血盟騎士団の本部へ行きましょう。あそこの会議室は盗聴除けもしてあるし、大丈夫よ」

「そうだな。じゃあ、とりあえず一時的にパーティを組もうか」

「そうね。とりあえずよろしく」

こうして、キリトとアスナは一時的にパーティを組んで、第5層主街区のグランザムにある血盟騎士団本部まで行くことになった。

「・・・なにこれ」

「それが分かかってたら苦労はしてないさ」

アスナに例の録音結晶を聞かせた最初の反応はこれだ。だが、キリトが気がかりなの

はこの暗号が謎めいているというのと同時に、

「どつかで聞いたことあるんだよなあ、こんな話……」

「どこですよ？」

「それが思いだせていたら苦労はしてないよ」

ため息交じりに呟く。そう、キリトはどこかで聞いたことがあったのだ。これと全く同一とはいかないが、これに似た話を、どこかで。どこで、どういう形で、の部分が思いつかないが。

「とにかく、これが気がかりだったんだ」

「そうね、確かにこれは謎めいているし……。でも、わからないことをうだうだ考えていても始まらないわ。いったん忘れましょ」

「そう、だな」

こういうところは、アスナの強みだ。良くも悪くも真つ直ぐで、それに関係のないこととならば、さっぱりと切つて行動することができる。それは、自分にはないものだ。

「ところで、こんなものどこで手に入れたの？ロータス君の声が入っているようだったけど……」

「たまたまファイルドで行き会つてな。そしたら、こいつを寄越したんだ。そのまま当の本人は消えたが」

「・・・え・・・!？」

椅子を蹴飛ばして立ち上がる。

「直接会った、って・・・どういうことよ!？」

「まあ落ち着け」

キリトのその一言でようやく我に返って、今度はゆっくりと座った。

「・・・で、直接会った、ってというのは?」

そう問われ、キリトは会うまでの経緯を話した。

一通り話を聞き終えると、アスナは机の上で手を組んでゆっくりと息を吐いた。

「そう・・・。以前からロータス君のPKは何個か報告を受けてるけど、本当にやっていのね・・・」

「ああ。それに、最後に走っていったあの速さを考えると、少なくとも準攻略組と肩を並べる位のレベルはあると考えるべきだ」

「技量もレベルも高い水準で実現している、ということね・・・。かなり怖いわね」
頭を軽く抑えて振るアスナに、軽く頷く。

「それに、あいつの去り際の言葉も気になるんだ」

「何、それ」

「なんでそっち側にいるんだ、って俺が聞いたたら、故あつてのことだ、ってあいつ答えた

んだ」

「故あつてのこと・・・？なんでわざわざそんな含みのある言い方をしたの？」
「俺に聞くなよ。」

とにかく、いろいろ謎めいているのは事実だ」

「でも、攻略をサボっていい理由にはならないからね」

「分かつてるって」

その会話だけで、今回はお開きとなった。だが、心に残ったしこりは消え切っていない。
かった。

帰ってきた俺は、POHたちに開口一番言い放った。

「使えなさそうだから殺してきた」

それに対する反応はただ一言、

「そうか・・・」

とだけだった。

「それにしても、少しもない間に随分人が増えたな」

「ああ。もつとも、これでも入試の段階で人を減らしたんですけどね」

「減つてこれかよ。おー怖」

「お前も、その、一人、だがな」

「いやまあ、その通りなんだけど」

帰ってきたザザとジョニー、それからもこの場にいたモルテに、俺は軽口とも取れる口調で返す。これも、いつも通りの光景といつても差支えないものだった。だが、今までとは少し違っていたのは、この後のジョニーの言葉だった。

「そう言えばヘッド、殺しの依頼が来てるんですけど」

「ほう、どんなだ」

「それがー、グリムの旦那からなんですよー」

俺たちは基本的に自発的に行動するから、依頼で殺すということは珍しい。グリムの旦那、というのは、どうやらこいつらの知り合いのようだが、比較的付き合いの長い俺ですら知らないというのは珍しい話だ。

「おっと、そうだった。お前さんはあの時まだmemberじゃなかったな」

「道理で知らない名前なわけだ。んで、誰なんだ、その、グリムっていうのは？」

「正確なplayer nameはGrimlock。かつて俺たちに、自分のギルドリーダーの殺しを依頼してきた変わり種だ」

「ギルドリーダーを？クォーターの類か？」

「I don't give a damn. とにかく、そういう話があったってだけ」

だ。

で、あいつからどんな殺しの依頼だ？」

「えっと、何でも元ギルメンを殺してほしいとか。殺し方とかはこっちに任せる代わりに、知っている情報はすべて開示するそうです」

「へえ・・・」

目的などどうでもいい。だが、

「フーことはさ、なんかほぼ確実に誘導できるような方法でもあるわけ？」

それが問題だ。こいつらが殺しに飛びつかないということははずだから、この依頼は受けることになるだろう。ならば、その依頼が確実に成功できるような保証がなければ、受けるべきではない。

「それが、一つ事件を作って、そこにメンバーが集まるから、まとめてつてことらしいです」

「どんな事件？」

「それがなかなか面白いんですよ」

そういつて、ジョニーは愉快そうに話しました。

のちに、“圈内事件”と呼ばれる、そのトリックを聞くと、

「Wow, It sounds so exciting!」

「同感。どこにもその手の頭が回る奴つてのはいるもんだな」

楽し気なPOHのコメントと共に、俺は冷静に分析した。だが、

「それ、最初は滅茶苦茶な騒ぎになりそうだな。本来死なない圏内で死ぬ可能性が出て来るわけだから」

「それもそうですよねえ。その辺、どうするつもりなんでしょうか」

「少なくとも、俺たちが、考えるような、ことじゃ、ない」

「そうだな。しかしまあ、二か月先かあ。長いなあ」

「案外あっという間だと思いますよ」

俺の答えにモルテが突っ込み、その話はそこでなくなつた。その後は無駄話に興じた。

26. 謎

あれから一月、俺はモルテとフィールドに出ている。今回の得物は定めていないが、規定に則ったギリギリの層での狩りだ。そこそこ大きな得物になるだろう。

「ロータスさんも物好きですよねえ、わざわざ強い相手と戦いたいなんて」

「俺でも思うよ。でもさ、どうせ戦うんならある程度強くないとつまないだろ？」

「それもそうですね」

小声で会話を交わす。目の前にいたのは、俺も知っている、思いもよらない人物だった。

「・・・リンド!？」

「お知り合いで？」

「ああ。DBリーダーのリンドだよ。どうしてこんなところに」

「DB・・・そういえばそのギルドは、第50層攻略戦でそこそこ大きな打撃を受けたというギルドでしたね」

「そういえばそうだったな。まあハーフポイント、大きな障害になったことは間違いないが・・・」

ということ、今ここにいる理由はおそらく、ギルド再建だろう。そのための戦力補充が目的と見て、ほぼ間違いない。最前線ではないこのあたりで狩りを行っているのも、安全面に配慮した結果なのだろう。案外安全志向のあいっらしい。

「とにかく、思いもよらない大取り物だ。行くぜ」

「ええ」

いつになく楽しそうな俺とモルテは、静かに物陰から飛び出した。飛び出した瞬間に、何人かがこちらに気付いて振り向く。だが、

「もう遅いー」

一瞬で間合いを詰めた俺が手近な相手の腕を飛ばす。それによって相手の戦闘力を奪うと、後ろにいる相手の足を刈り、その背中に闇牙を突き立てる。そのように突き立てれば致命傷ではないが大きくHPが削れることを俺は知っていた。

「もちつと周囲に気を配ったら？」

手の中でぐるぐると得物をもてあそぶ俺に、誰かが気付いた。

「ロータス・・・!?!」

「おう、そうだ。俺はあんたの顔を覚えていないが、一応久しぶりといっておこうか」
にやりと笑って答える。その笑みは相手にとって完全に不気味としか言えないものだった。

「お前は確か、モルテ！」

「おやおや、僕を覚えてくださっているとはありがたいですねえ」

モルテも自身の得物をぶら下げる。俺も、いまだにモルテを覚えている面子が生きているというのは驚きだった。だが、そんなことはもう関係ない。

「さてと、It's show time!!」

惨劇の幕を開ける一言と共に、俺は踏み込んだ。強烈な踏み込みで発生したSTR補正と、鍛えたAGI補正がもたらすのは電光石火の縮地。一瞬怯んだ隙について右から胴を薙ぎ、そのままの勢いで斬り抜けて回転の勢いそのままに闇牙を振り抜く。暗い赤色の刃の先は首筋を捉え、完全に斬り落とすまではいかないものの、大きくHPを削った。

「リカバーヒギンズ！」

すぐに治癒結晶のコールがかかる。このあたりは腐ってもトップギルドの一角を担っているだけはある。対応は見事としか言いようのないものだった。そして、モルテも想像以上の戦力に押されているようだった。

(こういうときのためだ)

戦いながら、相手の攻撃とこちらの攻撃をうまく誘導する。うまくある程度誘導することができたことを悟った俺は、相手の攻撃を受け止めた瞬間に振り返り、真後ろにい

たこちら側のプレイヤーを斬った。

「なっ！」

一瞬こちら側のプレイヤーが固まる。瞬間に、相手のパーティのプレイヤーが、俺がさつき斬ったプレイヤーを斬った。それにより、こちらのプレイヤーが一人消えた。

「悪い、敵かと思つて斬つちまつた」

微かに悪びれつつ謝る。このくらいの技術は身につけていた。とどめを刺した当の本人は恐怖で固まっているが、こちら側のプレイヤーも驚きで固まっていた。それを俺が逃すはずもない。一瞬でジグザグに走りながら、小太刀と同じく装備していた刀である「黒刀」で斬り伏せる。

刀との同時装備。これこそ、小太刀の最大の利点と俺が考えるところだ。それを生かした戦闘スタイルは、おそらく俺しか確立させていない。ならば、それに対抗する手段などあるはずもなく、本当に一瞬で目標のプレイヤー全員を斬り伏せた。残ったのは、本来襲われる側だったD.B.のプレイヤーたちだけだった。

「ふう、これで終了つと」

鯉口を二回鳴らして得物を両方とも納める。振り返ると、そこには恐怖と驚愕のない交ぜになったリンドがいた。

「ここであんたらは俺らに襲われたが、何とか返り討ちにした。俺一人だけ残つて逃げ

た。OK?」

「あ、ああ……」

いまだに驚きが抜けきっていないリンドを尻目に、俺はその場を去ろうとした。が、その背中にリンドは声をかけた。

「なああんた。どうして、あんたはそっち側にいるんだ?」

その言葉に俺は足を止めずに言った。

「故あつてのこと、つてやつだよ。あんたにはわからんだろうけど」

それだけ言って、俺は片手を上げてその場を去った。

彼はその次の日、待ち合わせをしていた。待ち合わせの相手は、ロータスを待たせていた。まあ、彼としてもそのくらいは想定していたから、それくらいは全く問題にならなかった。

ロータスが相手に気付いて軽く手を上げると、相手は走ってきた勢いそのまま傍に来て、呼吸を整えることもせずに言った。

「ごめん、待った?」

「うんにゃ、ほとんど。」

でも、一つだけ言わせてもらおうと、常時5分前行動くらいは心がけておいて損はないぞっ？」

「あなたの場合、よっぽどのことがなければ、15分前以上は、余裕を、持たせるでしょう？」

そもそも、ロータスが待ち合わせ場所についたのは彼女が来る15分ほど前で、彼女が来たのは待ち合わせ時刻の3分前。つまり、彼は待ち合わせ時刻から数えて20分ほど前に到着していた計算になる。ちなみに15分前行動が癖になっているのは、部活が音楽系で、部活開始時刻までに準備から音出し、チューニング、軽い基礎練習——つまりまるところ運動のウォーミングアップに当たる行動を済ませておくためについたもので、直す必要がないのでそのまま放置となっているというだけだ。

「ま、癖だね。でもなエリーゼ、心がけなければそのあたりは身につかないぞ」

「ご教授どうも」

相手の息が整うのを待って、ロータスは麻袋に硬貨を入れて手渡した。

「ほい、いつぞやの報酬と、追加分。確認してくれ」

麻袋を受け取ると、エリーゼはそのプロパティを確認した。そこに表示された金額を見て顔色を変える。

「え、と、少し多いような気がするんだけど……？」

「そりやチツプ込だからな」

「チツプにしても多いわよ!? さすがに、全体の、えっと……4割にも上るじゃない!」
 一瞬言葉が淀んだのは、計算に手こずったからか。でも、すぐに計算ができたところを見ると、案外頭は回るようだ。——まあ、こちらが計算を面倒くさがって切り良い数字にしたのは事実なのだが。

「ま、そりやな。胸糞悪い気分にしたつていう詫び賃も入つてるし。こんなんじや気は晴れないだらうけど、受け取つてくれや」

「……分かつ……た……」

そう言われてはこちらもそこまで突つ張る理由はない。引き下がるしかなかった。だが、今の言葉で、なおのこと一つの疑問が湧いた。

「ねえ。どうして、あなたは、そんなにも狂つていないのにそつち側にいるの?」

それに、ロータスは含み笑いを浮かべて言った。

「故あつてのこと、だよ。今はまだ、その理由を言うべき時じゃない」

じゃな、と軽く手を上げて去つていく背中に、エリーゼは一言叫んだ。

「必ず生きててくださいいね、レン先輩!」

その声に足を止める。振り返つた顔に浮かんでいたのは、今までの覆い隠すようなものではなく、どこか困つたような、不器用で嬉しそうな笑み。

「ああ。そつちも生きて帰れよ、エリちゃん」

その口調も表情も、エリーゼが覚えている、そのままだった。

ゆつくりと、俺は彼女の——エリーゼのことを思い出していた。

彼女は俺のリアルでの知り合いだ。もつと言つてしまえば、一個下の後輩だ。

俺は部活では完全にのけ者扱いだった。だが、そんな俺でも慕つてくれる、そんな物好きもいたのだ。その物好きが、エリーゼのリアルだった。もつとも、俺はそれまでずつと邪険にされ続け、クラスでもあまり居場所がない状態だったことから、他人に興味というものが一切といてもいいほど湧かず、ほとんど覚えていなかった。よもやこんな形で再会するとは思つてもみなかったが。

こつちで再会したのは本当に偶然だ。ハーブティィ強襲の時に、女性で、ある程度汚れ仕事も任せられるような傭兵の紹介を頼み、紹介されたのが彼女だった。最初はどこかで見たような、といった具合だった。会う度に彼女のことを思い出していつて、世の中似た人もいるものだと思つてはいた。正直なところ、真面目なやつが多かつたうえに、リアルだとエリーゼは眼鏡をかけていたため、同一人物だと思わなかつたのだ。よくよく考えてみれば、俺のようなヘビーゲーマーは少なくともゲーマーはいてもおかし

くないし、ナーヴギアはフルフェイスヘルメットに近い形なのだから、眼鏡をはずしていても不思議ではない。というのには、先ほどエリーゼからああいわれてようやく得心が行った話だ。とにかく、俺からしたら彼女はそういう存在なわけだ。

(まったたく、よりにもよつてあの子かよ。他のやつなら利用するだけつて割り切ることもできたのに……)

さすがに、自分を慕つてくれていた相手をただの利用相手と割り切るほどに情がないというわけではない。もとより、女性でなければならぬものなど、もうやるつもりはない。やるとしても、彼女に頼ることはない。

(彼女まで、こちらに落ちる必要はない)

それまでになかった感情に、一つ苦笑いを浮かべる。どちらにせよ、今までの消耗から言つて、補給が必要なのは間違いない。アジトに帰るのはその後でいいだろう。そう思った俺は、圏外村へと向か——おうとして、

(そういえば、あいつらはどうなったかねえ……)

向かう先を変えた。あそこも圏外村だったはずだし、補給ならちようどいいだろう。しかも、あそこには転移門があつたはずだ。だが、あまり大つぴらに移動をしたくはない。そう思うと、ウィッグと伊達眼鏡をかけ、ある程度の変装を行う。案外眼鏡と髪形で誰かわからなくなるといふのはよくあることだ。

俺が一応の補給も兼ねて訪れたのは、第13層にある圏外村だ。ここには、とあるギルドの拠点の一つがあるのだ。それまでの拠点は、彼ら曰く「一号店」らしいのだが、そちらよりこちらのほうが一号店らしい。少なくとも俺はそう思っている。

今回用があるのは、ここに陣取っている連中ではなく、そいつらの手駒の状態についてだ。

無言でドアを開ける。俺に一瞬目線が集中するが、俺が変装を解くと、すぐに一人が寄ってきた。

「これはこれはロータスさん。今回もご利用ですか？」

「うんにや、それはまたの機会にするよ。奴らの様子はどうよ？」

「いやー、今はいい感じになってきましたよ。ご案内しましょうか？」

「おう、頼むわ。あ、ちよつと待って」

できれば、こういう形のパイプはあまりばれたくない。何より、今行われている——行われていたかもしれないが——ことと、その相手を考えると、顔はばれないに越したことはない。変装をもとに戻すと、俺は言った。

「よし、じゃ案内してくれ」

そいつに続く形で、本来なら従業員側が入るほうに回る。その扉を開けた瞬間に、微かではあるがよろしくやってる声が聞こえた。

「この声……」

生憎と耳はいいので、その声だけで大体その声の主が誰なのか、想像を付けることができた。

「ええ、あの子たちの中の一人ですよ。この声の子はかなり早く落ちたので、やり甲斐がなかったのはありますが」

「でも、あんまり落ちないと迷惑するところもあるだろ。商売なんだから、利益出してもらわないといけないんだし」

「そこが難しい所です。いやはや、人を使うというのは難しい」

そのあたりをあっさりと素通りして、隠し扉の仕掛けを外して中に入る。そこは、部屋の中で行われている様子がよく見えた。が、

「これって大丈夫なのか？」

「そのあたりは問題ありません。大声を出さなければ、ですが。リアルでいう、マジックミラーのようなものだと思います」

小声で問いかけると、相手も小声で答えた。なるほど、そんなものがあつたとは。いや、作つたかもしれない。そして、今俺の目の前で、所謂風俗的なサービスを行つて

いる相手の顔には見覚えがあった。上辺だけかもしれないが、その顔はある種の恍惚すら浮かんでいた。

「しっかし、あの淡白で冷血な女がねえ……」

「ウエステイリアさん、ですか。最初のほうは所謂マグロだったのですが、根気よくやっていたら、ある時を境にすくと落ちました。もともとその辺の素質があったのか、今となつては良い稼ぎをしてくれますよ。スタイルがいいですからねえ」

そう、俺たちの前であられもない痴態を見せているのは、かつて俺が襲撃したギルド、ハーブティーの中でもおそらく実力者の部類であろうウエステイリアだ。調査していた時は、彼女は感情をなかなか表に出さない、良くも悪くもつまらない女だった。倫理コードの解除をしたときも、絶望しながらも、唇を強く噛んで泣くまいとしていた。俺としては、あの中では一番殺してもいいと思った。

勘のいい人は気づいたかもしれない。ここは、第13層にあるハーブティーの元アジトを、売春ギルドが新たな拠点としたものだった。

惜しげもなく、暴力的とすら言える魅力を持つ体には、文字通り一糸たりとも纏っていない。自身の性器に相手の性器をあてがい、自身の欲望に従って腰を振る。そのたびに艶っぽく嬌声を上げた。

「ハハハはもういい」

「よろしいので?」

「ああ。こいつらの元頭はどうなってる?」

「ご案内いたします」

そう言うのと、俺たちは再び移動を始めた。

再び仕掛け扉をくぐって外からは見ええないように入ると、そこには恍惚として複数の男性器を手や口、挙句には自身の性器でも処理している女がいた。だが、彼女にとつてみればそれはまさに食るといっても差し支えの無いように思えた。その顔にはすでに、白い液体がついていた。

「また薬漬けにでもしたのか?」

「確かに、その類を使ったことは認めますが……この光景は、彼女自身が望んだことですよ」

「は?」

思わず間拔けな声が出た。いやいや、AV女優じゃあるまいし、こんなプレイが好きとか、

「ただの変態じゃねえか、それじゃ」

「ええ、調教していく過程で、彼女の変態的な性癖が明らかになりましたね。ならばいつ

そ、突き抜けさせてしまおうということになりまして」

「性欲が強いとか？」

「それも多少はあるのですが……俗に言う、ぶっかけ大好きなクチだったようでしてね。しかも、多数の男から大量に、というのが一番いいそうです。あくまで本人談、ですが」

「……ああ……」

そりや変態だ。しかも、”ド”がつくレベルの。女性の多くは顔に精液をかけられるのが苦手っていうのは有名な話だしな。それを、しかも多人数からやられて喜ぶとか変態の極みだ。

「ま、いいや。今日はこのくらいで」

「よろしいのですか？」

「ああ。もともと、サービスを受けなかったのは時間があんまりないっていう理由だしな」

「かしこまりました」

最後に俺は、男どもの射精を浴びて恍惚とする女に、精一杯の邪悪な笑みを浮かべてその部屋を出た。

そこから出て、圏外村の中で補給すると、そこにある転移門に近付いた。圏外村にも

転移門が設置されているところはある。ここは、その数少ない例外の一つだった。そこから、第47層の圏外村に飛ぶ。少し歩くと、すぐに花のいい香りがした。

「やっぱり、落ち着く」

自分がしてきた業から逃げるようなことはしない。が、飲まれるような無様は絶対にさらさない。それは、俺が心に決めていたことだった。そして、俺が道を見失いそうなきときには、この層に来ることにしていた。リラクゼーションの一環のようなものだ。

暫く歩くと、俺がいつも来るところについた。が、先客がいた。

「誰ですか!？」

警戒したように手を背中に回す。ここからでは得物がよく見えないが、手の回し方から見て、片手で扱える武器なのは間違いないだろう。だが、そんなのは今さしたる問題ではない。

「待ってくれ。怪しいもんじゃない」

我ながら説得力の無い台詞を言いながら、俺は近くに腰かけた。その影も、それを見て警戒を解いたのか、隣にちよこんと座った。が、その片手はいまだに得物をすぐ抜けるように構えられていた。実際、俺の得物は刀で、相手の得物は見たところ短剣だ。すぐに抜いて防衛だけでも取れるようにしておく必要があるというのには理解できる。だが、こうも警戒されてはこちらも落ち着かない。俺は一つため息をつく、自身の得物

を外して横においた。かしやんかしやんという音で俺が何をしたのか気付いた相手が、驚いたよな顔をしたのがはつきりと分かった。

「ここまでやって、警戒する必要はないだろ？」

片足を伸ばして、もう片方は立て、その上に両腕を乗せた、完全に攻撃の意志がない姿勢に加えて、武装の解除。その意図を悟って、ようやく相手はゆつくりと警戒を解いた。

「あなたは、確か、この前、ロザリアさんたちを・・・」

その言葉で、ようやくこの少女が誰なのかを悟った。鈴を鳴らしたような、はかない声は確かに聞き覚えがあった。

「ああ、あの時キリトと一緒にいた女の子か」

「はい」

それで、一瞬言葉が途切れる。ゆつくりと花を眺める俺に、女の子は勇気を出したように――実際そうなのだろう――答えた。

「あの、どうしてここに？」

「気分を落ち着けたいときは、ここに來ることにしてるんだ。この花は、現実でも好きな花だからな」

「確かに、きれいな花ですよね」

ここに、一面を埋めるように咲いている花は、黄色く丸い半球のような周りに白い花弁を持つ、はかなげな花だった。

「それに、いい香りもするし」

「林檎みたいだろ」

「あ、言われてみればそうですね！」

そういつて笑う。その笑顔はまっすぐ純粹だった。

「ま、俺が好きなのはその花言葉なんだけどな」

「え、どんな花言葉なんですか？」

「どんなだと思う？」

質問を質問で返し、少女は悩んだ。ころころと表情を変える様は見ていて飽きず、純粹さが眩しく思えた。

「純潔とか、可憐とか、でしようか？」

「こういつちやなんだが、難しい言葉知ってるのな」

俺のあまりにあけすけな物言いに少し機嫌を悪くしたのか、軽く膨れる。その頬を二本の人差し指でつついて、俺は言った。

「残念ながらどつちもはずれ。正解はな、*“逆境に耐える”*、*“逆境で生まれる力”*だよ。俺は、*“苦難の中の力”* って覚えてるけどね」

自分の考えるまま、思うままにここまで進んできた。今がそうでなくとも、いつか振り返った時、今まで歩んできた道を、間違っていないなかったと胸を張って言えるだろうか。いや、少なくとも間違っていないなかったと胸を張って言えるほど、きれいな道を歩むつもりはない。それでも、どんな逆境でも、この花の花言葉のように、逆境に耐えるだけじゃなく、その中でも力を持って進む。その覚悟を確かめるために、俺はここに来ることにしていた。今日、自分のしてきた業を見た。その覚悟を改めるため、俺はここに来た。そして、気持ちちは固まった。何があっても、俺は俺の道を進む。たとえそこが茨の道であつてもだ。

自身の得物を拾って、ゆっくりと立ち上がる。来た道を引き返すその背中に、女の子は声をかけた。

「あのーまた、いろいろと教えてくださいー！」

ひらりと片手を上げて、俺はそれに返答した。

「機会があればね」

そのまま、俺は圏外村から、今度こそギルドアジトへと向かった。

27. 再会

圈内事件実行が近づいたある夜、俺は寝袋に入つて、静かに考えていた。

(圈内で人死にまがいのことが起きたら、絶対調査の手が入る。どうやら、50層の攻略で、DBもそれなり以上の痛手を負つたようだし、入るとしたら血盟騎士団のメンバーである可能性が高い。なら、最悪クラデイルを介せば)

だが、あくまでクラデイルを介するのは最後の手段だ。それでクラデイルがこちら側であることが露見してしまつたらかなりの痛手となる。少なくとも今、クラデイルを失うのは痛い。

「とにかく、そのあたりはゆっくり考えるか」

今は睡眠を優先すべきかと考えた俺は、そのままゆっくりと眠りにつ——こうとした、その前に、俺はメールフォームを立ち上げて、ある人物にメールを送つた。タイプミスがないことを確認すると、送信を押す。送信を確認した後、今度こそ眠りについた。

それから時間は経ち、圈内事件決行初日。ロータスは事前にメールを送つて打ち合わ

せをしてあつた相手との約束へと向かつていた。ラフコフ——ラフィン・コフィンの通称だが——には、今日は複数の人間と会うからという理由から、個人行動が認められていた。もうすでに彼はそれなり以上に古参メンバーの一人となつていたので、怪しまれるようなことはなかつた。

最初の待ち合わせの相手は、俺が到着する前に、待ち合わせ場所に来ていた。ロータスに気付くと、片手を上げた。

「やあ、ロータス。元氣そうで何よりだよ」

「あんたみたいな立場の人間からすれば、俺みたいな人間はとつとくたばればいいって話じゃないのか？」

相手——ゲイザーの軽口とも取れる一言に、微かな笑みを浮かべながら返す。それに、ゲイザーも含みのある笑みを浮かべた。

「まさか。お得意様が死ねばいいなんて思うわけじゃないじゃないか」

「ある意味人気稼業なのにか？」

「誰であろうと売れる相手には売る、それが私のスタイルだ。これはもう世の中に広まつてしまつているから、ある種開き直るしかないね。それでも買い手がいるあたりがこの商売なんだが。」

それに、君がそちら側についた目的も、ある程度は推測がつくしね」

最後に付け加えられた一言に、ロータスは苦笑いを浮かべた。

「察しが良過ぎる相手つてのは苦手だよ」

「褒め言葉として受け取っておくよ。」

で、依頼の件なんだが」

「ああ。どうだ？」

「初動は、キリト君ともう一人。血盟騎士団の制服に栗色の長い髪、背丈はキリト君とほぼ同じか少し低いくらい、という特徴から推測すると——」

「アスナか」

ロータスの言葉に、ゲイザーは指を鳴らした。そのあたりが様になるのがこの男である。

「君の想定していた、最良のシナリオになりそうだよ」

「果たしてどうだか。後は俺次第、つてとこかな」

目線を遠くにやって言う。キリトもアスナも絡むというのは、想定外ではあったが、ロータスにとつては悪くはない事態だ。

「とにかく、サンキュな。お代は？」

「10000」

「高くねえか？」

「7500」

「・・・ん、じゃあそこで妥協しとこうか」

一応納得してコルを実体化させ、手渡す。もとより、ロータスにとつては手元にあつてもどうしようもない金だ。

「んじゃあな。刺されるなよ」

「お互いに、ね」

ひらひらと手を振ってその場を去る。そして、ロータスは次の相手との待ち合わせの場所へと向かった。その背中を、ゲイザーは静かに見送っていた。

その翌日、俺たちは物陰に隠れて事の結末を待っていた。ある種の結末を迎えたところで俺たちが出ていって、真実を知る人間を皆殺しにして口を封じる。それが、グリムロックからの依頼だからだ。

やがて、その簡素な墓の前に、一人のプレイヤーがやってきた。そのプレイヤーは、俺にも見覚えのある人物だった。

「シュミット!?!」

「知り合い、か?」

「まあな」

小声でやり取りする。攻略組にいた俺にとつて、現DB副リーダーで坦克の主戦力の一人であるシュミットは見覚えのある人物だった。

「そろそろ行くぞ」

俺とジョニーが麻痺ナイフを構える。ジョニーは手前で蹲っている——というより土下座しているシュミットを、俺は残りの二人である男女を狙う手筈になっている。アイコンタクトと共に投げられた三本のナイフは、変わらずそれぞれに当たつて麻痺属性をいかにく発揮した。

あえて足音を立てて近寄る。女の傍に転がっている細身の剣を手にとると、それをしげしげと眺めた。剣先とは逆の向きに棘が生えているようなそのデザインは、

「へえ、エストツクかあ。これまためつずらしいものを。お前の好みなんじゃないか？
これ」

そういつて投げ渡す。受け取ったザザは、その剣を鑑定するように眺めてから口元をゆがませた。

「確かに、デザインは、まあまあだな。俺の、コレクションに、加えてやろう」
しゅうしゅうと息が漏れるような声でザザが言った。

「POH・・・」

震える声でシュミットが呟く。その声には恐怖しかなかった。

「ひっくりかえせ」

その指示で、ジョニーがシュミットを仰向けにする。その顔を見て、POHは眉を上げた。

「Wow、これは驚いた。タンク隊のリーダー様じゃないか」

楽し気な俺たちに対して、相手は恐怖の表情を浮かべている。そのうちの一人——女性プレイヤーを眺めて、俺は微笑を深くした。

「んー、決してスタイルがいいってわけじゃないけど、こういうタイプの美人もまた乙なもんがあるよなあ」

「お前は、本当に、女好き、だな」

「美人さんが大好きじゃない男なんてこの世にはなかなかいないだろ。性格最悪ならともかくとして」

俺たちのそんな会話をよそに、後ろでは楽し気に物騒な会話がなされていた。細かいことはそこまで聞き耳を立てていないからよくわからないが、要するに「どうやって殺そうか」という話らしい、ということはわかった。

「それに、あのギルドはきつちりリターンをしてくれることが多いからねえ。貸しつてのは作っておくに越したことはないし」

「理解、できないな。殺したほうが、楽しいときも、多いというのに」

「価値観つてのは人それぞれだから何とも言えないけど、あんまり怯えさせて殺すよりも、生きられるかもしれないって思わせてからもつと絶望させたほうが——」

そこで俺は言葉を切った。遠くから聞こえる蹄の音。しかも、こちらに向かつてきている。一つ舌打ちをすると、俺は己の得物に手をかけた。

「どうした？」

その問いに対する答えは必要なかった。人より明らかに早い速度で小高い丘を駆け上がってきたのは馬だった。それは俺たちの傍まで来ると、甲高いいななきと共に後ろ足で立ち上がった。一番近い位置にいたジョニーが馬を警戒して後ずさる。直後、落下音と共に「痛てつ」という、ちよつと間抜けな毒づきが聞こえた。

「キリト……」

こいつが来ることは想定していなかった、といえば嘘だ。初動でこいつが動いている以上、この可能性は捨てていなかった。俺の目的を考えれば、ここでこいつを斬ることはあまりよろしくない。だがこうなつては仕方がない。意外と頭の回るこいつのことだ、おそらく真相をすべて見切つたうえでここに来ているのだろう。ならば、元G.A.ギルメン及び妨害分子の抹殺が依頼である以上、ここで俺がとる選択肢はただ一つだった。

(やむを得ん、か……)

もとより、知り合いだらうと斬る覚悟はできている。たとえこの身を返り血で浸そうとも、俺はもう選んだのだ。

「キリト、一応言っておく。状況わかってないお前じゃねえよな？」

低い、俺の問いかけ。それに続く形でP・O・Hが言った。

「こいつの言う通りだ。格好良く登場したのはいいが、俺たち四人に対して勝てるのも？」

「無理だろうな」

腰に手を当てるキリトは即答した。その上で言葉が続ける。

「だが、対毒P・O・T飲んでるし、ロータスに至っては手札も大体読める。十分くらいは耐えてやるさ。それだけあれば、援軍が来るには充分だ。さすがに攻略組30人に対してあんたらじゃ、厳しいものがあるんじゃないか？」

その言葉に嘘は見られない。はったりを大げさにかますタイプではあるのだが、それがもし事実なら。そして、それを確かめるすべはこちらにない。

「Suck」

舌打ち交じりの罵倒と共に、P・O・Hが指を鳴らした。その合図で俺たちがゆつくりと武装を解除する。

「黒の剣士。お前は、絶対地に臥せさせてやる。お仲間の血の海だな」

そういつてP O Hはくるりと背を向けた。それにジヨニーが続く。

「今度は、俺が、馬で、お前を、追い回す」

「なら練習しとけよ。見た目ほど簡単じゃないぜ」

それにひゆうという呼吸音を一つ残して、ザザは去っていった。残ったのは俺一人。

「ロータス・・・」

その目に宿るのは・・・悲しみ？

「なんでそんな目をしてんだよ」

「こうして会いたくなかったからだ・・・！」

「あっそう」

冷めた口調で言うと、俺はポーチに入っていたものを投げつけた。それは、四角錐を底面で合わせたような形の結晶——録音結晶だった。

「どうせ来てくれたんだ、メッセンジャーくらいの役割は果たしてくれよ」

それだけ言い残すと、俺も三人の後を追った。

追いついた瞬間、隣のザザが聞いてきた。

「黒の剣士と、何を、話していた？」

「ん？まあ、宣戦布告、つてやつかねえ」

俺のどこことなく濁した答えに、ザザは「そうか」と一言だけ言った。

すべてが終わった後、キリトはアスナに一つ相談を持ち掛けていた。

「なあ、アスナ。ロータスから、また」

その言葉と、手にある録音結晶で何があったのかを察したアスナは、一つため息をつくと、

「血盟騎士団の会議室に行きましよう」

それだけ言っただけで先に歩きだした。

『虫は狡猾。細かい網目を上手にくぐって潜り込む。潜り込んだら引つ掻き回して、大丈夫なのに大丈夫じゃないと嘘を吐く。そうしてだまして、人の大切なものを盗んで食らう』

「・・・これまた何だこりや」

「私に聞かれてもわからないわよ」

二人して首を傾げる。訳が分からない暗号だが、あいつが無秩序にこんなことをするとは思えない。何か理由があるはずだ。

「何か理由が・・・」

「いったいどんな理由よ？」

ぼろっと漏れた呟きにアスナがジト目で反論する。慌ててキリトは思考のスイッチを切り替え、

「・・・ダイイングメッセージ？」

「彼は死んでないでしょ」

苦し紛れに出した意見は速攻で叩き潰された。

「とにかく、この件はいったん保留。いいわね？」

「あ、は、はい・・・」

半ば気圧されるような形で、キリトは頷いた。このままお流れになると思ったところで、アスナが思い出したように言った。

「そういえば、前にも似たようなことがあったわよね？」

「ああ。あの時も、意味不明な暗号を・・・」

そこまで言つて、一つの可能性に思い至る。急いでメニューを開いてアイテムを探すと、もう一つの記録結晶を取り出して、再生した。

『それは木馬。大きな大きな木馬。木馬は大きすぎて街に入れない。だから人々は門を壊した。馬の中の虫に人は気づかず、虫たちに人々は食らいつくされた』

「共通する言葉は、人、虫、食らう、か」

その上で考える。似たようなことなのだから、関連して考えるべきかもしれない。

「それって、前にロータス君からもらってた記録結晶のメッセージよね？」

「ああ。何か関連しているかなと思っただけど……」

「違うみたいね」

一つ頷く。そのまま手を組んで考える体勢に入ったキリトに、アスナは一つため息をついて記録結晶を取り出した。

「キリト君、そのメッセージ、こっちにコピーしてもらえる？」

「え？」

少なくともキリトにとっては突拍子もない提案に、キリトは軽く動揺した。

「こっちでも考えるって言ってるの。情報源が情報源だから、言いふらすわけにもいかないけど」

「アルゴなんか論外だな」

「こういつては何だけど、その通りね。情報屋のネットワークで伝染したら、私たちも危ない。ソロの時に襲われたら、ひとたまりもないから。だけど、一人で考えるよりましだわ。それとも、私が信用できない？」

やや上目遣い気味の目線で問われた言葉をどうして否定できようか。しかも、相手はこのデスゲーム最初期からの知り合いの一人なのだ。少なくとも、背中を預ける位には

信頼している。それだけ考えると、記録結晶二つを再生して、アスナの記録結晶に録音した。

「じゃあ、何か手がかりを掴んだら連絡するね」

「ああ。また」

それだけ残すと、今度こそキリトは血盟騎士団本部を後にした。

28. 急転

レインは異常としか言えないレベリングを繰り返していた。周りの制止も聞かず、ボス戦にも参加せずに、ひたすらに狩場でモンスターを屠っていた。いや、正確には最前に近い層で、対人戦に近い戦闘を繰り返していた。

(まだまだよ……)

背中から襲い来る一撃を、体を反転させて打ち払う。そのまま同じ呼吸で、胴を薙ぐ。バランスを崩したところで、頭を一突きしてHPを散らした。

(こんなんじや、足りない……！)

ただただ、力を。それだけのために、彼女は戦い続けていた。

今から10か月ほど前のあの日、彼がどうしてあちら側についたのか。それが彼女にはなんとなくわかった。長くパートナーとして戦った彼女だからこそ分かったことだ。これは、ずっと自分の中にある矜持のようなものだ。

ゲイザーと彼が関係を保っているように、彼女とゲイザーも関係を保っている。だからこそ、彼に関するいろいろな情報はおのずと耳に入ってくる。ハーブティーの惨劇も、彼女の耳に入っていたのだ。おそらく、彼はもう、すでにその身を鬼と化させてい

ることは容易に想像がついた。早く戻さないと、手遅れになる。

そうこうしていると、狩場での持ち時間が尽きかけていた。現在のレベルはもうすでに大台の80に乗っている。だが、こんなのは数値に過ぎないこともまた、わかつて居た。

狩場で順番待ちをしていると、肩を叩く人がいた。怪訝にそちらを振り向くと、そこには美人とはいかなくとも、ある程度容姿の整った女性プレイヤーがいた。

「初めまして。あなたがレインさん？」

「そうです」

レインの声を聞いて、相手が少々苦笑する。

「私、エリーゼっていいいます。いつでもいいから、少し一緒にお茶したいのだけれど、時間取れないかしら」

正直なところ、初対面の人にそんなことを言われても、形が変わったナンパのようにしか思えなかった。それに今は、少しでも多くの対人戦闘の経験を積んでおきたい。

「ロータスのことで、少しお話ししたいなって思っただろう？」

その名前を聞いた瞬間、微かに心臓がはねた。目の前の女性は相変わらず柔和な笑みを浮かべている。

「分かりました。特に用事とかもないですし」

「そう。なら、今からでも大丈夫かしら？」

「はい」

「なら行きましょう」

それだけ言うと、二人は連れ立って歩き出した。

第61層主街区、セルムブルク。その湖畔に佇む洒落た喫茶店“レディレイク”に、エリーゼとレインはいた。案内されたところはちよつとしたコンパートメントになっていて、それでなお景色も美しいところだった。

「きれいな場所ですね」

「うん。落ち着きたいときとかは、ここに来るようにしてる。ここなら大声出さない限り、外には漏れないし。うるさいナンパとかも来ないしね」

そんな会話をしていると、注文した飲み物が来た。ふたりともそれに口を付けたところで、ゆつくりとカップを置いて、エリーゼは言った。

「さて、改めて自己紹介させてね。」

私はエリーゼ。傭兵やっています」

「レイン、ソロです」

「うん、知ってるよ」

レインの自己紹介への反応に、レインは驚いた。まさか、自身がそんなに名の売れた人間になっているなどは考えていなかったからだ。

「君は、自分の知名度というものを理解したほうがいいよ。攻略組の数少ない女性プレイヤーで、盾無しの片手剣に体術の複合による攻撃的スタイル。華麗に戦場を舞い、的確に立ち回っていくその姿から、付けられた二つ名は“劍姫”、ヴァルキリー。熊みたいな女傑なのかなと思つてたらこんなかわいい子だとは思つてなかつたけどね。

そして、かつてとはいえ、頻繁にロータスとパーティを組んでいたプレイヤーでもある。そんなあなたなら、相談できると思つてね」

「彼は、裏切り者です」

「ええ、そうね。少なくとも、攻略という大局を見れば、彼はとんでもない大謀反人だわけど、あなた自身は、果たしてそう思っているのかしら？」

一言のレインの呟きに、エリーゼは、笑みを一瞬消して、静かに語りかけた。その一言は、レインを完全に沈黙させた。何故なら、

「あなたならわかるはずよ。最前線という、どうしても人柄というものが出る場で、長い間、彼と背中を預け、肩を並べて戦つたあなたなら。彼は、合理的であるならばという前提の下でなら、どのような手段ですら厭わないということに」

レインは、ただの一言として発しなかつた。いや、発せなかつた。この女傭兵の言葉

は、どれもの確だった。そして、それが分かったからこそ、レインはこうして戦いに明け暮れていたのだから。きつと彼も、来るべき時のために肅々と力を蓄えているという確信があつたから。

「知ってますよ」

あの人は、そういう人だ。それがどんな無茶でも、無謀でも、地獄でも。合理的であるのならという言葉だけで、すべてを投げだして飛び込んでいってしまう。そういう人種なのだ。あの時の無念も、無力さも、悔しさも。すべて、今の鎖となつている。それを忘れたことなど、あの日から一日もない。

その瞳を見て、一つため息をついた。テーブルの上に両肘を乗せて手を組んで、手の後ろに口を持つてくる。

「一つ、昔話をしようか」

少し目を伏せて、エリーゼは雨だれのように話し出した。

「あるところの音楽系の部活に、青年がいました。その青年は、部活の中で誰よりも上手で、誰よりも孤独でした。だからこそ、彼を妬み、憎む人も少なからずいました。けど彼はそれを何も感じていないようでした。ある日、誰かが彼に聞きました。『あんなことをされているのに、どうして何もしないのだ』と。それに対する彼の返答は簡素なもので、『やり返したところでうまくなるなんて道理はない。なら、少しでも前進する努力

をしたほうが合理的だ。まとまることが重要なのに、わざわざ足を引つ張る真似をする神経は理解できない』と。事実、良い成績を出すその一因は、彼にあったのです。——もつとも、気付くのはもつと後になってでしたが。

やがて、彼があまりにも酷な環境に、とうとう離脱しました。それは、彼なりの最後の抵抗だったのでしょうか。たった一人、抜けただけ。それだけなのに、なんということでしょう、今まで当たり前のようになんかできていたことができなくなつたのです。音は乱れ、素人でもわかる様な狂いが目立つようになりました。その結果、当たり前のように突破できていた、通過点に過ぎないと思つていた大会すら、突破することはできませんでした。そこで初めて、周囲の人間が、彼の力の大きさというものに気付いたのです」

レインはその話を黙って聞いていた。話している間に、伏せられた目はやがて完全に閉じていた。痛い沈黙の中で、エリーゼはゆっくりと瞼を開けた。

「君なら分かると思うけど、一応言っておくね。この青年こそが、ロータス。あの人は、どんな逆境でも、自分が決めた目標や目的のためなら突き進む人なの。だからきつとも、辛くても前に進む、って決めているから、誰にも連絡も取らない。おそらく、レインちゃんにも取つてないんじゃない？」

膝に手を置いて、ゆっくりと頷いた。こちらを安心させようとする、柔和な笑みが痛い。

「だろうね。あの人、とことんまで冷徹になれるけど、人を思いやることのできる人でもあるの。」

私はね、実は、ハーブテイーの惨劇に加担した人間の一人なの。傭兵として、彼に雇われてね。その時に彼はこういったの。『狂いたくないのなら、狂った自分を演じろ。あけすけに陽気になるか、逆に異常なほど冷静になるか。お薦めは前者だけどな』、つて。そのおかげで、あの経験を思い出しても、冷静でいられるの。冷静に狂った自分を演じ切れたって自信が、狂わせないの」

エリーゼの言っていることは、一見支離滅裂のように思える。だが、本質に少し近づくと、この上ない技法となっていた。

「レインちゃん、分かっているんでしょう？彼が、どうしてあちら側についてたのか」

「・・・そう言うエリーゼさんは、どうなんですか？」

長めの沈黙の後、レインは一言だけ問いかけた。それに、一瞬考え込んだエリーゼは、「心当たりはある。けど、信じられない。——いや、信じたくないの間違いかな」自嘲気味に呟いた。

「たぶん、私もレインちゃんも、考えていることは一緒だと思う。だから、せーの、で言ってみない？」

その言葉に、目を合わせる。小さなせーの、という合図と共に、二人の声が揃った。そ

れに、レインは表情を暗くし、エリーゼは自嘲気味の笑みから、どこか物憂げな表情に変えた。

「私は、ロータスを助けたい。でも正直ね、私じゃ力不足なんだ。私じゃ、レン先輩を、あの地獄から引き上げることはできない。蜘蛛の糸を垂らすことすら、きつとできない。でもね、私でも、後方支援くらいの役には立つよ。」

手伝わせてくれない？ラフィン・コフィン壊滅に」

少し涙交じりの嘆願に、レインはゆっくりと、組まれたままのエリーゼの手を両手で包んだ。

「約束します。——あなたの力を借りて、あなたの思いを乗せて、あの人を修羅や鬼から、人に連れ戻して見せます」

約束というより、誓うように。一言一言に重みを乗せて言うレインの瞳には、今までなかった強い光が宿っていた。その光を見て、エリーゼは一言、

「ありがとう」

とだけ、漏らした。

それから二か月後、事態は急変した。

クリスタライトインゴッドを手に入れ剣を作り、その後諸々あつて店に戻るときに、アスナは慌てて店から飛び出してきた。

「キリト君、ごめん！落ち着いて話したいところなんだけど、今すぐ血盟騎士団本部の会議室に来てくれる!？」

「ど、どうしたんだ、アスナ」

「詳しくは向こうで話すわ！ごめんリズ、話はまた!」

それだけ早口で言うのと、アスナは走っていった。

「悪い、もっと積もる話もしたいんだけど」

「いいわよ。あのアスナがあんなに焦るなんて、よっぼどのことだしね」

それだけで会話を終わらせると、キリトもすぐに後を追った。

血盟騎士団の本部につくと、門衛はすぐに俺を会議室の一室に案内した。会議室の中では、すでにアスナが難しい表情で考え込んでいた。

「今度のメッセージも暗号なのか？」

「ええ……。しかも、今回はK○Bのメンバーから直接届いたの」

それだけ言うと、もうすでにオブジェクト化してある録音結晶を操作して再生した。

『その虫は母体であり、その中で肥大する。やがて肥大し過ぎた虫は、母体を食らいつく

す』

「これだけか？」

「たぶん……」

今までに比べると、少し短めのメッセージ。だが、不自然なのは、録音結晶の再生を示す光が失われていないことだった。

「母体にある虫、っていうと、寄生虫の類かな……」

「だろうなあ……。でも、母体を殺す寄生虫って何種類かあるからな。特定はできない」

「そうよねえ……」

二人して考え込む。そんなとき、

『考え込んでいるかな、お二人さん』

「うわあっ!」「きゃああ!」

突然流れてきた声に二人して驚く。その発信源は、

「これ？」

「だな……」

暗号の録音されていた録音結晶だった。

『さて、と。そろそろびつくりが収まったところかな。ま、びつくりしてなかったら申し訳ないけど。あ、一人かもしれないわけか。そうだったら悪い。』

で、メッセージを合計三つ送ったわけだが、ここまでの展開として考えられるのは、メッセージの内容を全部理解しているか、まったく理解できてないか。ま、中途半端に理解してるってことはないだろ。しいて言えば二つ目が変化球だけど、一つ目が分かればわかるようにしたつもりだし。

さて、今の言葉で分かったかもしれないけど、ヒントとしては、全部を関連させて考えてみる”ってことだ。特に、一つ目と二つ目、それから一つ目と三つ目。そしたら、多分見えて来る。二つ目と三つ目の関連性はほぼないって言ってもいいからな。

俺からフレンド登録は解除しない。メッセージの意味が分かったら、俺に一報くれ。もし、そっちからフレンド解除しているようなら、ゲイザー”って情報屋に伝言を頼む。そうすれば、俺につながる。もつとも、その時に、俺に手を貸してくれるというのなら、ただいな。

それだけだ。精々悩めよ若人』

それだけ残して、今度こそ録音結晶から光が消えた。その言葉に、キリトは二つの録音結晶を取り出して次々に再生した。だが、ふたりともわからなかった。

「とりあえず、この件は保留にしましょう。分かったらまた連絡を取る。いい?」

「そうだな。リズベットのところも飛び出してきちやった形になるわけだし、一回戻るか」

「そうね。一回戻らないと。．．．いろいろ根掘り葉掘り聞かれそうだけど．．．」
「ま、その辺は割り切るしかないさ」

少し肩を落とすアスナの肩を一つ叩いて、キリトは言った。アスナも、いつかはわかることなのだからと割り切ることにした。

それから店に戻ったアスナとキリトを迎えたのは、満面の笑みを浮かべたりズベツだった。

「いらつしやいませー、というよりお帰りバカップル！」

その、どこと言うまでもないほどの言葉に込められた思いに、二人はそろって赤面した。

「ちよつとリズ、恥ずかしいよ」

「えー、いいじゃん。それとも何か、揃つてるところを一目見た瞬間に分かるレベルでバレバレなのにまだくつついてないとか、そんなことがあるわけ？」

なおも顔が赤くなつたままのアスナが一言抗議するが、それはあつさり一蹴された。どころか、さらに反論され、アスナはただ口をパクパクさせ、やがて俯いた。

「．．．そんなにわかりやすいか？」

「うん、モロバレ」

キリトの半ば以上本気の眩きには、リズはあつきりと答えた。アスナとは対照的に天を仰ぐキリトとアスナの肩をやや強めにバンバンと叩く。

「まー、ゴールしたら指輪作ってあげるわよ。一応鍛冶屋だから、装飾品作成スキル取ってるし」

もう二人の顔は熟れたトマトさながらの真っ赤になっていた。

少々以上にからかいも入っているだろうが、祝福されたことは純粹に嬉しかった。

そのあと、馴れ初めなどを散々根掘り葉掘り聞かれ、かなり恥ずかしいことになったのはまた別のお話。

それから暫くして、キリトはレベリングのためにクエストをこなしていた。今回こなしているのは、指定されたモンスターを討伐するというものだ。そのモンスターはキリトも知っていて、大して手ごわい相手ではなかったはずだ。

暫く歩くと、林の中に入った。索敵マップを開くと、それまでちらほらあった敵を表す光点がまったくなかった。その意味を考える前に、それは彼の前に現れた。まるでライオンとトラ、それぞれの特徴をほとんどそのまま受け継いだような、ライガーともタイゴンとも取れないモンスターだ。だが、今のキリトにとってみればただの虎猫同然で

ある。向こうもこちらに気付いて一つ吠える。ゲージは二本。名前は、"The li ger tigon"と表示された。ライガータイゴンとは、これまたそのまま名前にしたものである。幸いなことに、光点が一切消えたということは、インスタンスマップであれそうでないであれ、周りに人はいないということだ。ならば、出し惜しみする必要はない。そう判断すると、装備フィギュアを編集する。すぐに加わった背中の中の重みを感じると、背中から二本の剣を抜いた。二本なら攻撃力二倍、などということをつもりはないが、ラツシユ力が上がるのは確かだ。何より、これにキリト自身が慣れておく必要がある。その思いと共に、キリトは相手に向かつて踏み込んだ。最初の右ひつかきを剣のパリイと体さばきでやり過ぎし、左の剣でその腕を一発斬りつける。あの工房での試し振りでも思ったが、やはり重くていい剣だ。立ち位置を入れ替えてもう一度構えなおす。自身の一撃を躲され、さらに反撃まで加えられたことに怒りを覚えたのか、ライガータイゴンが吠える。とびかかってから体全体でのしかかりは前に飛び込むことで回避し、追撃をと思ったが、後ろ蹴りが来ることを悟ってすぐに横によける。そのまま蹴りを繰り返してはいないほうの足の関節と思われるあたりを斬りつけると、相手はキリトの想像通り短いダウンに入る。その隙を見逃さずに、キリトは二刀流のソードスキル"鳴時雨"^{なきしぐれ}を発動させる。素早い連撃と比較的短めな硬直の直後に飛びのき、もう一度構えなおした。

落ち着いてHPバーを見たときに、キリトは奇妙なことに気がついた。こちらがいれた攻撃は、右前脚へ一発と、先ほどのソードスキル一発のみ。確かに二刀流は手数が多いから、一発ソードスキルを入れるだけでも案外火力が出る。だが、いくらなんでも中ボス程度のHPバーを半分以上削るほどの火力はない。こつちが大したバフをかけていない以上、考えられるのは、威力増強のデバフか、自動で毒などの自然HP減少のデバフが入っているか。だが、その疑問はすぐに解けた。少しの間攻撃せずに回避に徹していると、向こうのHPバーが微かだが確かに減っていることに気付いたのだ。つまりこれは後者だ。

(なら、無理に強行突破する必要はないな)

何もしなくても勝手に相手のHPが減っていくのなら、無理して攻撃していく必要はない。完全な隙にちまちまと削っていくだけで十分だろう。それだけ思うと、キリトは戦闘を再開した。

やがて、相手のHPがつきかけたとき、キリトは妙なことに気がついた。

(そういえば、こいつ、なんでバファイコンがついてないんだ・・・?)

普通なら、継続ダメージのバファイコンが点灯しているはずなのだ。だが、目の前の相手にはそれがない。つまり、今タイガーライコンは特に何の以上もないのに、勝手にHPが減っていつているということだ。普通ならありえない。

(なら、何か理由があるはずだ。何か……)

そう考えているうちに、タイガーライゴンのHPゲージが消えた。同時に、タイガーライゴンが崩れ落ちる。それを見て剣を背中にしま——おうとして、その手が止まった。

(待て、なんでこいつは死体が残ってるんだ?)

普通は、この手の討伐クエストなら、相手の体はHPを削りきった時点でポリゴンとなつて散るはず。なのに、そのまま残っている。これの示すことは、

「まさか……」

そして、予感というのは大抵、悪いときばかりに当たるものなのだ。タイガーライゴンの背中に当たるところから何かが出て、タイガーライゴンの死体を食い荒らした。そして、それを完全に食い切ったそれは、目の無い頭でこちらを見た。その姿は、タイガーライゴン並みの大きさの、ミミズのようなものだった。名前は、*The worm into ligger tigeron*。名前がそのまますぎるのは突っ込むだけ野暮というものか。

(獅子身中の虫、獅子を食らいつくすとは、まさかこのことか)

その瞬間に、脳裏に一つの考えが閃いた。一瞬でその考えは頭の中を駆け巡る。

(くっそ、そういうことかよ……!)

そうとなれば、時間をわざわざかける理由はない。剣を構え、全力で一気に踏み込んでいった。

その日の夕方、キリトはアスナを呼び出していた。場所は、いつもの会議室だった。会議室に入ると、すでにキリトはその中にいた。だが、その顔は決して明るいとは言えなかった。

「キリト君、どうしたの？」

「分かったんだ。メッセージの意味が」

「え・・・!？」

驚いたようなアスナの言葉に、キリトは机の上で手を組んで、静かに話した。

29. 直下

「二つ目はトロイアの木馬を表しているんだ。二つ目もトロイの木馬だけど、こっちは言葉じゃなくて、マルウエア——一般的にコンピュータウイルスって呼ばれるもの一種だ。三つ目は、獅子身中の虫、ってことだと思う」

「なるほど、それで、一つ目と二つ目、一つ目と三つ目を関連させろ、って言ったのね……」

トロイの木馬という名前つながりで一つ目と二つ目、意味的なつながりで一つ目と三つ目が関連していた、ということだ。

「でもどうしてそういう風に考えられるの?」

「前にも言ったけど、一つ目は、どっかで聞いたことがあったんだ。実際、あのメッセージはトロイアの木馬の語源となったエピソードそのままでもいい。俺の妹は神話系が好きで、俺も何度か読み聞かせをしたから、それで覚えてたんだ。二つ目は暗喩で、最初はさっぱりわからなかった。けど、俺はネットとかの知識があって、一つ目と関連して、ってとこで分かった。三つ目は、一つ目と関連して考えれば、似たような意

味であるこれにたどり着くと考えた」

「なるほどね。でも、獅子身中の虫って、内通者とか裏切り者って意味よね？ どういうこと？」

「それは、本人に直接聞いてみるしかないさ」

それだけ言うと、キリトはホロキーボードでメッセージを送信した。

「メッセージは送れたの？」

「ああ。返信がすぐ来るとは限らないけど……」

その言葉は少し不安げだった。

その頃、俺はフィールドで狩りをしていた。こちらは普通にモンスター相手の狩りだ。右手には、最近ドロップした新しい刀を握っている。メッセージが届いたことも、その送り主がキリトであることも分かっていた。一通り狩り終わると、俺はそのメッセージを開いた。

(暗号が解けた、か。まったく、遅いつての)

それだけ思うと、俺は歩きながら連絡をとった。ここから先は、見えない背中を追うスピード勝負だ。ここから先、タイムロスなどという単語は殆ど許されないといい。まずは手始めに、連絡を取る必要がある。

それから少しして、キリトとアスナはゲイザーに呼び出されていた。先に場所についていたゲイザーは、ふたりにあるものをふたつ手渡した。それは、ふたりにとっては見覚えが強すぎるもの。

「その中のメッセージは、万が一盗聴されても問題ないような場所で聞いてくれ。間違っても、衆人環境で再生することの無いように、とのことだ。中身は、両方ともまったく同じらしい。それと、」

そういつて、また別のものを取り出す。それは、何かの冊子だった。

「これは、いつか必要になると思って集めていたデータだ。もつとも、昨日時点で、の話だがね」

「中身は？」

「ラフィン・コフィン内部に関する情報、とだけ言っておくよ。それ以上のことは見ればわかる」

「ラフィン・コフィン内部のつて、どうやって調べたんだ？」

「こちらにも伝手というものがあってね。それに、君たちならば、発信源が誰なのか、察しがついているのではないのかな？」

そこに来て、ようやく二人は、あのメッセージの真の意味を知った。

(獅子身中の虫……。そういうことかよ……！)

あまりにも無謀で、罪深き道だ。どんな人物でも、好き好んで渡ろうなどとは思わな
いだらう。

「お代はサービスだ」

「そう、ありがとう。いきましょ、キリト君」

「それと、」

そう言つて去ろうとする背中に、ゲイザーは声をかけた。

「これは、いち友人としてなのだが……彼のこと、よろしく頼む」

おそらく、このインクラッド中でもトップクラスに長い付き合いの人間の頼みだ。

それに、茨どころか火の中を渡ろうというような覚悟を無下にするつもりはない。

「……はい」

「ありがとう」

一言、呟くと、ゲイザーはキリトたちと違う方向から去つていった。その背中に読み
取れるものはない。が、託された以上、受け取らなければ嘘だろう。

「いったん会議室に行きましょ。あそこなら見られる心配も聞かれる心配もないわ」

その言葉に頷き、二人は会議室へと向かった。

会議室で、二人はゲイザーからもらった録音結晶と冊子を取り出していた。

「まずは、貰ったデータを見ましょう。内容いかんによつては、冷静には聞けないだろうから」

アスナの意見に異を唱えるつもりはない。もともと、こういうことの決断という点ではアスナのほうが上をいく。ならば、自分が逆らう道理はない。

「ラフィン・コフィンの名簿ね。あと、一部は死因も載っているわ」

「ラフコフのメンバーがPKにあつてることか？」

「PKというより、返り討ちに近いのじゃないかしら。防衛に近いかもしれないわね」

しかし、そのアスナの思いは、データを見た瞬間に間違いだつたと分かった。

「なにこれ、状態異常によるスリップダメージが四割を占めてる・・・」

「斬撃ダメージが三割つて、どうということ・・・？他の武器ダメージによるとどめが一割程度なものも気になるし、Mobのとどめが残り二割も占めるかしら？」

「あまりにも、不自然な比率だよな。確かに、カテゴリに分類すれば、斬撃系に該当する武器種が一番多いのは事実だけど、あんまりにも不自然だ。それに、主にPKerであるラフコフがMobを相手にする確率自体高くないはずなのに、とどめをMobに刺されるなんてことはもつとないはず。それに、数が多すぎる。いくらなんでも、この名簿

の四分の一から三分の一を占めているというのは、あまりにも多すぎる」

ゲイザーは、おそらくこういう事態まで見越していたのだろう。でなければ、ここまで情報分析が終わっていることの説明がつかない。情報屋でありながら分析屋でもある。それが、彼の高い評価の源となっている証左だった。

「疑問はあとで、まとめて解消しよう。これだけのものを作る人間が、無意味にこれだけ書くとは思えない」

「そうね」

短いやり取りの後ページをめくると、そこにあつたのは驚くべきデータだった。

「えっ……!」「嘘……!?!」

そこにあつたのは幹部陣のステータスデータだった。それだけならまだしも、その得物や腕前まで書かれている。おまけに、それがどの時点でのデータなのかというのまで書かれている。

「これって、でもこんなものどこで……!?!」

「……そういうことかよ……っ!」

驚きを隠せないアスナに対して、キリトは手が白くなるほど強く握った。

「ロータスだ……。多分、寝ている時にやったんだろ……」

「そんな、でもどうして!?!」

「そこまではわからない。けど、これを流したのはロータスだ。あのメッセージは、やっぱりあいつが、自分自身を指して言ったことだったんだ……!」

「でもどうしてこんなことを……。危険もあつたでしょうに……」

「たぶん、録音結晶の中にその答えがあるんだろうよ」

それだけ言うと、キリトは録音結晶を再生した。

『えつと、このメッセージを聞いてるってことは、俺の想定したシナリオの中では、可もなく不可もない、つてところをたどってる、つてことかな。上等なのは、俺と協力してつとつとPKO集団を一掃しているってシナリオだけど、そうそううまくいくとも思えない。それに、おたくらは頭の回転がそこそ速いクチみただから、おそらく時間がたちすぎて俺が直接行動してるって線もなさそうだしな。一応言っておくと、俺がPKO集団に入ってから、そうだな、待って二年。それまでに動きがなかったら、こつちで動く。もし俺の命が無くなるうとも、だ。ま、その場合このメッセージクリスタルは俺の手で粉碎されるか地面に埋めて自然消滅を待つか、つてなるんだが……。ま、そんなのはどーでもいい。』

先に言っておくと、俺はこのメッセージをPKO集団側につく前に録音している。ま、信じる信じないは勝手だけど。でも、俺はこれからやることを大体でも決めてあるし、変えるつもりも曲げるつもりもない。だからこそ、俺のしていくことを許せとも認

めろとも言わない。特に、アスナは女性だし、これを聞いている頃はもういい加減お前らくつついてるだろ。言つとくけどお前らお互いバレッツバレだったからな。特にアスナ。わかりやす過ぎ』

本人が目の前にはいないとはいえど、あまりにもあけすけな物言いに、二人はそろって顔を赤くした。実際、キリトとアスナはもうすでに恋仲になっていた。

『ま、そんな無駄話はさておくとしてだ。

さて、これから先について言わせてもらおうぞ。まず、このメッセージを送っているということは、俺がPKO側についてからそれなりに時間がたっているってことだろ。案外俺は優柔不断で、決断できずにずるずる引きずっていくタイプだからなー。いい加減直さないといけないとは思ってるけど。俺の場所を特定することはそう難しくないはずだ。ゲイザーの伝手もあるしな。頭の回転の速いあいつのことだ、俺の位置追跡を怠るってことはないだろ。それに、万が一という手は打っておくつもりだ。

ま、そういうわけで、遠からぬうちにアジトはばれるだろう。もし、場所が分かたら、全力で叩き潰しにかかれ。遠慮なんかするな。奴らは殺しに關してはまったく忌避感とかはないはずだ。俺と同じ異常者だからな。捕縛なんざできればラッキー程度に考えておけ。必要なら何人でも殺す。そのくらいの覚悟でかれ。

それと、特にアスナにはつらい話だとは思うが、隣人を疑え。俺が本気で相手を落と

しにかかるのなら、まずは情報が必要になる。相手がほぼ間違はなく迎撃に来るって分かってるんならなおのこと。なら、おそらくもつとも高いといつてもいいほどの効果を得られるのは内通者を得ることだ。しかも、俺みたいに単独で動いて内側からぶつ壊しにかかるんじゃないかと、完全にスパイとなった人間を、だ。しかも、俺の予想が正しければ、そこそこの時間がたつていふということになる。つまり、もうすでにスパイがいると考えたほうがいい。隣人を疑え。疑わしきは罰する覚悟を持って。

・・・つと、そろそろ容量がやばいか。じゃあな。こんな俺でも許してくれるってんなら、リアルでメシでも奢ってやるよ』

それだけで、メッセージクリスタルは光を失った。容量ギリギリという言葉は嘘ではないだろう、その長いメッセージを聞いた二人は、完全に沈黙していた。

「・・・言つてなかったわね、理由」

「そう、だな・・・」

それだけ呟くと、完全に黙り込んでしまった。許しを請うことはしないというその言葉に嘘はないだろう。それでも、彼はこのメッセージを託した。彼が直接行動に出ないのかも、なぜこのような行動に出たのかも触れていない。だが、大体察しはつく。

「どちらにせよ、ラフコフの活動はアインクラッド全域で見れば看過できなくらいにはなつてきているから、そろそろ具体的な行動に映るべきだ、という声はK o BとB Dの

中で大きくなってきているわ。これは、渡りに船よ」

「ああ。どちらにせよ、ゲイザーにもう一度連絡を取る必要があるな」

「いや、その必要はないみたいよ」

アスナのその言葉に驚きつつ、指差す先を見る。そこには短く、*Find out*
*Elise!*と書かれていた。

「直訳すると、エリーゼを探せ？」

「そのままの意味でしょうね。エリーゼさん、という方がキーを握っている、ということでしょう」

「で、誰なんだ、その、エリーゼっていうのは」

「聞いたことがあるわ。攻略組に匹敵しないまでも、準攻略組くらいの腕前の女傭兵。エリーゼ」って。私も何度か会ったことがあるし」

「本当か!？」

ぼつぼつとした会話から突然食いついたことにアスナは肝をつぶしたが、落ち着いて会話を再開した。

「え、ええ。彼女、よく始まりの街の教会に通ってるみたいだから、多分あそこに行けば会えるんじゃないかな？」

「よし。なら行こう、アスナ」

「え、ええ……」

いつになく積極的なキリトに半ば引きずられる形で、二人は始まりの街の教会に向かった。

二人が始まりの街の教会に行くと、そこには女性三人が談笑していた。うち一人は、キリトもよく知る人物だった。

「レイン!」 「レインちゃん!」

二人が揃って呼びかけると、その人物はゆっくりとこちらに振り返った。その顔に苦笑が浮かんでいるのは気のせいではないだろう。

「今まで何してたの!?!心配したんだよ!大丈夫?怪我とかない!?!」

「アスナ、少し落ち着けて」

「あ、ごめん……」

「あはは……いいよ。心配かけたのはこっちなんだし」

出会い頭に機関銃のごとく質問などを一気にぶつけるアスナをキリトはたしなめ、レインは苦笑いを浮かべた。その雰囲気、残りの二人のうち一人が営業スマイルで話しかけてきた。

「お久しぶりです、アスナさん」

「久しぶりです！そんな硬い口調じゃなくても・・・」

「いえ、一応依頼主ですので」

「もうそんなの関係ないですよ。もつとフランクにしてください。そもそも、年上っぽい雰囲気の人に敬語使われるとむず痒くて仕方ないです」

少々ハイテンションなアスナに押し切られる形で、その女性は少しだけ沈黙した。

「・・・分かった。じゃあ、いつも通り話すね。その代り、アスナも普通にしゃべって？年下とか先輩とか、そういうの嫌いなんだ」

「うん、分かった。ところで、今日の話なんだけど、場所変えていいかな？」

「そうね。ここでの用件は終わったし。じゃ、レディレイクで。アスナ奢ってね」

「えー、でもまあ仕方ないか。いいよ」

完全に蚊帳の外に置いていかれた二人をよそに、女性二人組が転移門に向かって歩き出す。

「俺たちも行こうか」

「はい・・・。なんか、テンション高いですね、アスナさんとエリーゼさん」

「ああ・・・。純粹に女友達に会えたのがうれしんだろうな・・・。ただでさえも攻略組は男所帯だし」

それに続く形で、残りの二人も歩き出した。本来、完全にテンションが振り切り気味になっているアスナを本来なだめる必要があるかと思つたが、あまりにも楽しそうなので放つておくことにした。

湖畔に佇むレディレイクで、四人は一つのコンパートメントで向かい合つていた。アスナの先ほどもまでのハイテンションは完全に息をひそめ、雰囲気としてはどこか張りつめたものになっていた。

一通り注文したものが届き、各々軽くカップを掲げて一口飲む。

「さて、改めて自己紹介させてください。私はエリーゼ。傭兵やっています」

「キリト、ソロだ」

「で、今回のお話は、ロータスについて、ね？」

「正確には、彼の所属するラフコフについて、だけど。まあ、そういうことね」

「そう……。で、何が知りたいの？」

「ラフコフのアジトの場所。それが分かれば、後はこちらで叩く」

「分かった。教えてもいいけど、一つ条件がある」

「何かしら」

「簡単なことよ。私たちを、ラフコフ討滅戦に参加させること」

その一言に、アスナとキリトは黙り込んだ。ラフコフを攻撃するということは、最悪ロータスをも相手することになるのだ。また、P O Hも相当な実力者で、ザザは彼らには及ばないものの実力者だ。そんな人間が、何の躊躇もなく攻撃してくるのだ。一般的に言えば、危険すぎる。

「危険なのは重々承知よ。この子もそれは同意してる」

隣のレインの肩を軽く叩きながら、エリーゼは続けた。

「でも・・・」

「それに、いい加減、血で血を洗う連鎖を途切れさせないと。きっと彼は、続けていくことになる」

キリトの抗議の声をぶった切って、エリーゼは続ける。

「これまで半年以上、その日を待っていた。だからお願い。私たちにも協力させて」

その目に映るのは、ただただ真摯な願い。それを見て、アスナは一つため息をついた。

「分かったわ」

「アスナ!?!」

「こうなっちゃったら止められないわ。同じ女だし、エリーゼさんは友達だから。断つても勝手についてくるわ」

「ええ、そのつもりよ。どうせフレンド登録で位置追跡はできるのだし」

につこりとしか形容できない笑顔だが、そこには言葉にできない威圧感があった。

「さてと、本題のラフコフのアジトだけど、10層にある隠しダンジョン、キジユの洞内にあるわ」

「キジユの洞……？そんなのあったのか？」

全体効率を優先して、不要なところはそこまで回らないアスナだけでなく、基本的にダンジョンはすべてマッピングするキリトも分からないということは、ほぼ未発見のダンジョンといってもいい。キリトの言葉に、一つため息をつけてエリーゼは答えた。

「あのねえ……そう簡単に見つかったら『隠し』の意味がないじゃない。その中にある安全圏をすべて占領する形でラフコフのアジトになってるわ。運悪く迷い込んでしまったプレイヤーは殺されるか、『お話』の末のお引き取りで対処していたみたい」

彼女の言う『お話』に含まれる意味をなんとなくだが理解した三人は、思わず黙り込んでしまった。

「あえて具体名は出さないけど、情報提供者によると隠し通路の類はごまんとあるそうだから、抜け道回り道は大量にあるそうよ。名前が名前だけに、NPCも含めて人なんて訪れないから、NPCのマップ販売もないみたい」

「そりゃ厳しいな。自力マッピングもほぼ不可能ってことは、完全な遭遇戦に近いってことか」

「その辺は仕方ないと割り切るしかないわ。ところで、名前って？」

「キジユの洞のキジユっていうのは、忌まわしい呪いで、『忌呪』。明らかに不気味な名前でしょ」

確かに、そんな名前のところが好き好んでいきたがるようなもの好きなど、それこそここにいる黒ずくめの少年のようなヘビーゲーマーくらいのもだろう。

「それより、抜け道回り道がたくさんあるっていうのは厄介だな。いつの間にか回り込まれているとかってことも考えるべきか」

「そうね……。でも、そんなことは今考えても仕方ないわ」

それだけ言うと、アスナは立ち上がった。

「さて、じゃあ私はいくわね。団長も含めて、血盟騎士団のほうでまず動くことにするわ。正式な打ち合わせの日程とかが判明したらまた連絡するわ」

「息まきすぎて空回りするなよ」

「折角開いた突破口よ？絶対ものにするわ」

軽く忠告するキリトだが、アスナの強気の返答に一つ息をついた。こうなってしまうアスナは強い。それは、キリトがよく知っていた。

もうすでに、最初のメッセージが送られてから早四か月余りが経過していた。

30. 決戦前夜

俺が最後のメッセージを送ってから少しして、クラデイルから不穏な一報が入ってきた。それは、幹部陣の間に瞬く間に広がり、その晩に会議が開かれた。

「少し厄介なことになった。ここは攻められる」

「マジすか!？」

即座にジョニーが声を上げた。ザザも顔をしかめた。表情を変えなかったのは俺と、連絡を受けて発表したPOHくらいものだ。

「驚かないんだな、ロータス」

「ああ。一応約束はしたけど、いずれこうなることは予見してたからな。ま、少し遅すぎた感はあるけど」

俺の淡々としたコメントにはもうツツコミは入らない。俺がこんなコメントをするということはもう珍しくないからだ。その手の印象操作も含めて、俺の思った通りにことが進みだしていた。

「で、だ。今日こうして集まってもらったのは他でもない。その襲撃に際して、どうするかということだ」

「逃げた、ほうが、いい。やつらは、ここの地形を、知らないだろうからな」
「セオリーで行けば、な」

俺の一言に、ザザがこちらを向いた。その顔にあるのは純粹な疑問。

「確かに向こうのステータスとこつちのステータス、どつちが高いかなんて考えるまでもない。だけどよザザ、お前も言った通り、向こうはこつちの地形を知らない。ならば、計略で返り討ちにできる手段などいくらでもあると思わないか？」

「でもよロータス、相手は数もそこそこ動員してくるぜ？」

「だろうな」

俺のその言葉に、全員の目がこちらに向く。それを軽く手で制して、俺はさらに続けた。

「だがな、過去の歴史が証明しているように、計略を練れば数の有利なんざ簡単にひっくり返る。ましてや、相手は殺すことをためらう腑抜けどもばかりだ。そんなのに、よりよつて俺たちが後れを取ると思うか？」

「その計略はどうするんだ？」

P O Hの至極まつとうな質問に、俺は片頬を上げた。

「こういうときのための、グリーンの内通者だろうが」

「なるほど。クライドルに researchさせて、それをもとに作戦を練るか」

「そゆこと。最低限、いつ攻めて来るのかくらいはわかるだろう」

その言葉に、残りの三人も獐猛に嗤った。

「それじゃ、行動開始と行くか」

「そうっすね。決戦前夜ってなんかテンション上がるう！」

「落ち着け。冷静に、ならないと、やれるものも、やれない」

四者四色な反応で、その場はお流れとなった。俺としては、かなり理想に近い形で持って行けたことになる。

(あとは、俺次第、か)

自身の得物に目を落としつつ、俺は内心でひとりごちた。

あの喫茶店での話し合いから数日、攻略組の全員が集合していた。その中には、もちろんエリーゼとレインも入っていた。全体を見てほとんど全員が揃っていることを確認したアスナは、話を切り出した。

「今日皆に集合してもらったのは、ある事案についてです。」

先日、ラフィン・コフィン、通称ラフコフのアジトの正確な場所が分かりました。つきましては、ラフィン・コフィン討伐戦の企画をここで行います」

その言葉に、全員がざわめいた。それを制するようにアスナがそのよく通る声で言った。

「ラフィン・コフィンの活動は、もはや無視できるものではありません。ですがこれには、おそらくボス戦に比べ、より大きな危険が伴います。降りるといふ人は今のうちにお願いします」

その声に、何人かが席を立つた。それにつられる形で、さらに何人かが席を立つ。それもそうだ。命がけの戦いになると分かっただけで挑むようなもの好きなどそうはいない。それも、相手はボスのように決まった行動しかないのではなく、常に学習し新たな動きをする可能性のある敵なのだ。危険度など比べるまでもないだろう。だがそんな悪条件下でも、大半のメンバーは残っていた。

「ありがとうございます。あなたたちに、私は最大の敬意を表します。では、こちらで得た情報を、あなたたちに開示します。ですが、その前に、改めるまでもありませんが一つ言わせていただきます。この情報をもし外部に漏らした場合、その漏らされた人物をも危険にさらされる可能性があります。無理に漏らさないようお願いします」

それだけ言うと、あらかじめ用意してあったミラージスフィアを起動させた。

「ラフコフのアジトの位置はここ、10層にある隠しダンジョン、*“忌呪の洞”*内にあります。このダンジョンは、NPCによるマップなども確認されていません。また、ダン

ジョンらしく回り道抜け道がたくさんあるという情報もあります。つまり、殲滅戦が開始したら、いつの間にか回り込まれていたということまで気を配る必要があるということですよ」

その言葉に、さらにざわつく。さすがに何も情報なしで殴り込めなど無茶にもほどがある。

「ですが、彼らの主力であるPOH、ザザ、ジョニーブラック、そしてロータスの情報はこちらにあります。他のメンバーについても、一角が死亡しているという情報も上がっています。」

今から、彼らの情報を開示するとともに、対策を立てていこうと思います」

それだけ言うと、アスナは記録結晶を取り出し、近くの壁に投影した。そこに映ったのは、ゲイザーから渡された、例の情報本に書かれている情報だった。アスナは、それを事前に撮影することで今回の説明としたのだ。

「これは、事前に内部から寄せられた情報ですよ」

「嘘だろ！そんなのありえない！」

「いいえ、嘘ではありません。ゲイザーという名前をご存知の方も多いと思いますが、かの情報屋から、私を買ったものです。彼も、これは信頼できる情報だといっていました」

その言葉に、全体がざわついた。それを睥睨することで黙らせ、話をつづけた。――

—そもそも女性としてその方法はいかなものかというところはあるが。

それと同時に、俺は自分の部屋となった一室で武器の手入れをしていた。その武器はいつもPKのときに使っている暗い刀身の刀ではなく鬼斬破だ。本来対人戦で使うつもりはなかったのだが、偶にはストレージから出して手入れをしてやる必要があった。まあシステムのそんなの必要ない、と言っつてしまえばそれまでなのだが、気分だ。それに、

（アスナは決戦だ。あのアスナが、ゆっくり手をこまねいているとは思えない。会議が開かれた時点で、速攻を仕掛けて来ると読むべきだろ）

連絡はクラディールからもうすでに受け取っていた。怪しまれる心配の無いよう、メールで届いた連絡は瞬く間に広まった。俺のあの一言で、ラフコフは完全に迎撃ムードに入っている。もうすでにメンテナンスが終わった二本を腰に差し、俺はゆっくりと目を閉じた。こういうときの休息以上に必要なものなどない。その冷たい集中とも取れる状態に、誰も話しかけることはなかった。

会議が終わってから、レインはリズベットの工房を訪ねていた。理由は武器のメンテナンス。今まではNPCの鍛冶屋で済ませていたが、こういうときは念を入れて腕のいい人間に頼むのが一番だと感じたのだ。

「それにしても、いい場所に立てたわねー、この工房」

「いち早く目を付けて、他の人に買われる前に買っちゃったそうです」

「なるほどなるほどー。さて、どんな女の子なのかなー?」

横で少々テンション高めに歩くのはエリーゼだ。レインが顔なじみの鍛冶屋に行くと言ったら、ぜひ紹介してくれと言われ、半ばなし崩し的にこうなった。

「エリーゼさんって、女の人が大好きな人なんですか?」

「違うよー、私はバイだからねー」

少々遠回りな質問にドがつくほどの直球で返され、一瞬顔を赤くした。

「お、なかなか初心ですなー」

面白そうに言うのと、エリーゼは素早くレインの前に回り、下あごをくいと持ち上げて目を半ば強制的に合わせさせた。レインはその突拍子もない行動に、思わず固まってしまった。

「私、そういうの好みだったりするんだけど」

追い打ちをかけるように、突然我に返ったような真面目口調。カスタムされたのか、

微かに青みが入った藍色と黒の中間のような色合いの瞳は、まるで吸い込まれそうな色合いを帯びていた。暫くの間、そうして呆けていると、エリーゼが笑いだした。

「ほんつとうにからかい甲斐がある子。ちなみに今のは半分冗談ね」

それだけ言うのと、顎の手を放して再び横に並んだ。

「さて、んじゃま改めて、そのリズベットちゃんのところ案内して？」

「あ、はい」

そうして歩き出した時に、ひとつあることに気付いた。

「ちよつと待つてくください、半分冗談ってどういうことですか!？」

「ん？別段深い意味はないけど？」

口の端を上げて笑うエリーゼからは何も読み取れない。それを悟って、レインは一つため息をついた。どうやら、この女性の真意を読み取るのは至難の業らしい。

水車の回るリズベット武具店を訪れると、エリーゼは店内をくまなく見渡した。傭兵という職業柄、こういったところを訪れるということは枚挙に暇がないのだろう。一つ一つの商品を見ると、その見た目をしげしげと見ていた。

「リズベット武具店へよう．．．こそ．．．」

いつも通り——といってもほぼ初対面なので何とも言えないのだが——の営業

スマイルで出迎えようとしたリズベツトは、来店者が誰なのかを察すると、そのスマイルがそのまま固まった。言葉も尻すぼみになっている。少々きこちなく手を上げるレインに、文字通りリズベツトは飛びかかって抱き着いた。

「わ、ちよつと!」

さすがに鬼のようなレベリングを繰り返してきただけあり、リズベツト渾身の飛びかかり抱き着きでも倒れるようなことはなかったが、それでも肝をつぶしたレインは完全に反応に困っていた。

「生きてるわよね!? 亡霊なんかじゃないわよね!? てかいままでどうしてたのよ!? 心配したのよ! 連絡の一つも寄越さないで、しかもこつちから連絡してもなしのつぶてだし! 得物を欠損とかさせてないでしょうね! させてたらこの場でぶつ飛ばす!」

「だ、大丈夫だって、だからその、落ち着いてもらえると助かるかなー、みたいな…」
「黙らっしやい! これが落ち着いていられるか! まったくもうまったくもう、本当に、あーもう… 言葉が出てこない…! とにかく本当に——」

マシンガンどころかガトリング並みの言葉の嵐に、思わずレインは怯んでしまった。しかも、その嵐が距離30cmそこそこの距離から放たれるのだ。怯むという方が無理だ。だが、それだけ心配させたということだ。

「…(い)めん」

一言だけ謝ると、リズはゆっくりとため息をついた。

「・・・はあ、まったく。もういいわよ。で、今回は何？手入れ？」

「あ、うん。これお願い」

「はいはい。んじやその辺で待ってて、すぐ終わらせるから」

レインから得物を受け取ると、リズベットは奥の作業場に入って行った。その光景を

横から見ているエリーゼはただ一言、

「来てよかったね。いろんな意味で」

とだけ、呟くように言った。

「はい」

少し目を閉じて、レインも一言答えた。すると、リズベットが出てきた。

「わ、本当にすぐだね」

「そりやまあね。ほら、耐久値回復。ついでに見た目もちよつと手入れしておいたから」

「ありがとう」

この辺の細やかさが、リズベット武具店に客足が途絶えない理由の一つなのだろうな、とエリーゼは考えていた。そんな時に、リズベットはようやくエリーゼに気付いた。

「で、そちらの人は？」

「あ、初めまして、エリーゼです。傭兵やっています」

「店主のリズベットです。噂はしばしば耳にしています。何かいい品があればどうぞ言つてください」

「なら、これをもらおうかしら」

そう言つて指差したのは少し長めの、レイピアに近いような細身の剣。名前を「ハイオプティマス」というものだ。

「分かりました。お代は最初なのでサービスつてことで、230000コルです」

「あら格安。これでいい？」

「えっと、はい丁度ですねー。どうぞ」

「ありがとう」

正直なところ、ハイオプティマスは傑作品といつてもいい。だがいかんせん、蓄積ではなく確率で睡眠にさせるといふ少々トリッキーな性質からなかなか買手が見つからなかったのが泣き所だった。それをあんな格安で売るといふのは少々気後れするところがあつたのだが、値を釣り上げて売れないのならばもつと意味がない。そう判断した結果だった。

「うん、やっぱりいい剣だね。大切に使うね」

「そうしてあげてください」

リズベットは、ふたりの雰囲気はどこか違うことを感じ取っていた。だが、それは長

くレインと会っていなかったことによる違和感だろうと決めつけてしまった。――
本来はもう少し意味が違ったことに気付くのは、もつと後のこと。

「では、またお越しください！」

「うん、またね。その時はご飯でも奢るから」

「そんなの必要ないって言ってるでしょ」

その言葉に答えることはなく、二人は店を出ていった。工房に戻りながら、リズベツトはまるで今の言葉が一種のフラグのようだとぼんやりと思っていた。

レインとエリーゼがリズベツト武具店を訪れていたころ、アスナとキリトは誰もいなくなつた会議室に二人きりになっていた。

「とうとうこの時が来たわね・・・」

「・・・ああ」

何せ、この二人はこの剣に関して、最も深い位置から関わっていたのだ。ここまで来た、その事実だけでもひとしおというものだ。

「もろもろ片付いたら、あの馬鹿をぶつ飛ばさないと」

「そうね。さすがに、今回のことはいろいろと看過できないわ」

特に、ギルメンを丸ごと売春ギルドへと売り払った、「ハーブティーの悲劇」は、同じ女性としてアスナは強い憤りを感じていた。最初はロータスがほぼ一人でしたと知って、ある種の戸惑いも感じていたようだが、追加で行われてきた所業の数々から嘘でないかと判断して、だんだんと強い怒りに変化していたということを、キリトは痛いほどわかっていった。

「なあ、アスナ」

「なあに、キリト君。改まって」

ちよつとおどけ気味に答えるが、いまだに深く沈んだキリトの横顔を見て改めた。

「俺たちは、ロータスをどうすればいいのかな」

その言葉に、すぐに答えることができなかった。ロータスとは、アインクラッド第一層のフロアボス戦からの付き合いだ。50層は経験しなかったが、25層のボス戦は彼なしには成り立たなかっただろう。そんな、ある種戦友とも呼べる相手に形だけとはいえず刃を向け、ことが収まったら。それでも、ロータスを斬るべきなのだろうか。だが、「それは、キリト君が決めるべきことだと思ふよ。私も、そうするつもりだし」「アスナは、どうするんだ？」

その問いにすぐ答えることはできなかった。アスナにとつても、彼の存在というのは、案外大きかったのだということを、ここで初めて実感した。

「そうね、私は——」

その続きは、キリトだけに耳打ちした。その答えを聞いて、細かい理由を聞きだすことはしなかった。

「・・・毅いな、アスナは」

「そんなに強くないよ。まだまだ弱いわ」

それだけ言うと、アスナはキリトの手に自分の手を触れさせた。その時になって初めて、目の前の想い人が抱く感情に気付いた。あまりにもいつも通り過ぎて気付かなかった、ある感情。

「分かるでしょ？」

「・・・ああ」

手から伝わる、微かだが確実な震え。それを少しでも思っ、キリトはその手を両手で握った。

「大丈夫だ」

本音を言ってしまうと、キリトだって怖い。ロータスは斬ることにためらいを覚えるなどといった。だがそれは、どうもできそうにない。

何とか震えさせずに言ったその一言に、アスナは安心したように頭を最愛の少年の肩に預けた。

「信じてる」

ただ一言。ふたりの間にはそれだけで十分だった。

それから数時間後。

「……いよいよね……」

「……ええ」

少女と、それより少し年上の女性が、覚悟を新たにする。

「行きましょう」

「ああ……!」

少年と少女が、戦場へと向かう。

「……行くか」

懐かしい血色の外套を着た少年が一人、自身の得物を持って立ち上がり、所定の場所につくために動く。

形は違えど、全員のその思いは一つ。
「決戦の時だ」

3 1. 決戦—ラフィン・コフィン討滅戦—

俺は、アジトの最前線と言っているいい位置で待ち構えていた。ジョニーやザザ、P O H は追撃部隊の指揮に回っていた。やがて、そろそろと多くの足音が聞こえてきた。

「来たか」

それだけ呟くと、俺はゆっくりと立ち上がった。得物はもうすでに両腰に構えられており、いつでも抜刀できるようにしてある。そのままの体勢で、俺は来るべき来客を待った。

待つ必要などほとんどなかった。戦闘は、俺の想像していた通り、リンドとアスナだった。見たところ、ヒースクリフはいない。その事実には俺はひとまず安堵した。あのおっさんとはタイマンでもやりたくない。

「ロータスだけなのか？」

「まさか」

リンドの言葉に、ただ一言だけで答える。右手で音高く抜刀すると、その刀を高く掲げた。瞬間に、それなりの量のラフコフメンバーがわらわらと湧いて出てきた。

「馬鹿な、どこからこれだけ!？」

「忘れたか、ここは、未踏破ダンジョンなんだぜ？」

マッピングのされていないダンジョンの最大の特徴は、隠し通路の類が一切ないことだ。そして、ここは俺たちにとっては文字通り家だ。隠し通路など、少なくともこちらで調べた分は調べ尽くしたといってもいい。ラフコフメンバー以上に、ここを知り尽くしている人間などいない。

「野郎ども、血祭りにしてやれ！」

その声と共に、刀を真っ直ぐに突きつけた。瞬間、十人ほどが一気に飛び出す。それに合わせて、攻略組側が剣を抜いた。

俺は動かない。もとよりそういう作戦だからだ。それに気づいた人間が、少人数で飛び出した。おそらくこの集団の将たる俺を獲ろうという腹だろうが、そうはいかない。今までずっとフリーにしていたの片手で小太刀を音高く抜刀し、掲げる。瞬間に、集団の両側面と後方からの強襲が攻略組を襲った。

索敵スキルと単独戦闘能力が高い俺が小規模集団と共に待ち構え、機を見計らって残りの三幹部の指揮する待機部隊が強襲、勝負を決めるといふものだ。実際に、かなりこれはうまく行った。

「くそっ」

誰かが毒づく。それは完全な全面戦闘への移行を示す合図だった。同時に、俺も両手の刀を構えて集団に突入していった。

戦闘はすでに乱戦模様を呈していた。斬り込んでいる俺もそれは感じていた。といても、悠長に思考などしていたら殺されることはもうすでにわかりきっていた。

「つと、危ね」

今も、こうして考えている間に二人がかわるがわる斬り込んできた。ふたつの剣戟を両方の手でそれぞれ捌いて、最後の本命と思われる剣筋をがちりと受け止める。

「どうしてだ、ロータス！」

打ってきたリンドの、そのままでは何も伝わらない言葉。だが、俺にとってはそれだけで十分だった。

「言ったはずだ、故あつてのことだと」

「それがたとえ、お前の手を血で汚すことになってもか!？」

「ああそうだ」

受け止める刀に力を籠める。そのままはじき返すと、俺は右から斬りかかってきた相手を一発パリィする。その反対側から丁度のタイミングで飛んできた突きは小太刀で逸らして蹴り飛ばす。前後から同時に来た攻撃はジャンプして躲し、空中で納刀して体術スキル“衝波魔神拳”を発動させる。拳を地面に叩き付けることで発生する衝撃波で攻撃する技だ。その衝撃で周囲がよろける。俺にも硬直が入るが、至近距離で衝撃波を食らった相手はそれより若干ではあるが硬直が長い。その隙を逃さず、俺は小太刀を抜き放ち片手剣系汎用ソードスキル“ラウンドフォース”を発動する。使い込んだそれは周囲を巻き上げ、囲んでいたプレイヤーをまとめて吹き飛ばした。時間差で両側から斬りかかってきた相手を二本の剣で受け止め、はじき返す。もつとも、はじき返せるとは思っていなかったから、少々これには驚いた。

「その程度で、俺を殺せると?」

俺のメッセージが全員に共有されている様子がないことは、ここまでの戦闘で分かってきっていた。だからこそ、俺も全力で攻撃する。

その時、視界の端で何かがポリゴンとなつて散つていった。細かい状況はわからない。が、その近くにはキリトがいた。

(くそつたれ・・・！)

見た目以上にナーバスで自罰的意識が強いあいつを、人斬りにするわけにはいかない。そうなれば、攻略ペースは大きく落ち込むことになる。何より、アスナのブレーキ役がいなくなるのだ。一時期といえど、行動を共にしていた俺だからわかる。あいつには、いやあいつらには、傍にお互いがいる必要がある。だからこそ、俺は自身最速の踏み込みを行った。が、一瞬遅かった。俺の剣があいつに届く前に、あいつはなし崩し的にラフコフのメンバーを斬っていた。

過ぎたことを悔やんでも仕方がない。せめて、今だけでもこのことを考えないようしてやらなければ。柄にもない正義感と共に、俺は一気に踏み込んでキリトに斬りかかった。案の定、キリトは反応してこちらの攻撃を防御した。だが、その目にはいまだ迷いが若干あることを俺は一瞬で見抜いた。

「どうしたキリト、もう色は関係ない。躊躇う理由などないだろう」

「だけど・・・！」

「躊躇うな。じゃねえと、殺されるぞ」

それだけ言うと、俺は弾き飛ばしながら飛び退った。すぐに飛び込んでもう一度、右で袈裟に斬りかかる。キリトはそれを剣でパライして回避する。だが、俺は二本剣を持つている。そのまま左手でもう一度薙ぐ。これには回避が先立ったようで、キリトが飛び退る。そこを俺が追撃した。

「今更躊躇うな。俺たちは殺人者だ。殺すんだから、殺される覚悟もある」

俺の構えは、構えとすら呼べない、ただぶら下げているだけのものだ。だがそれでも、どこに打ち込んでも確実に反撃されるような、えもいわれぬ隙のなさがあった。

「来ないのなら、こつちから行かせてもらおう」

一気に踏み込む。神速とも取れるその踏み込みは、キリトにとって見れば十分に反応できる範囲内で、即座に放ったガードは十分に間に合った。打ち合って、すぐに俺は力

の加え方を変えてキリトの体を横にはじいた。直後の間合いで斬りかかってきたラフコフメンバーの足を刈った。タイミンクからして狙いはキリトだったのだろうが、もう遅い。倒れたラフコフメンバーの頭を何度か突き刺し、HPを全損させる。アスナのほうを見ると、彼女は躊躇いなくラフコフの相手を戦闘不能にさせている。こういうときは女のほうが強い。

「さて、と。もう演技の意味もないかな」

それだけ咄くと、俺は手始めに、アスナと対峙するジョニーブラックの背後に一瞬で回り込み、小太刀をしまったことでフリーになった左手でスローイングパラライタガーを抜いて一閃した。ジョニーが崩れ落ちたことに寄り硬直したアスナの背後に、別のラフコフメンバーが襲い掛かるが、それは俺の弧月閃で両断された。近くのラフコフメンバーが気付いて俺に向かって斬りかかるが、その程度、今更苦にする俺ではない。刀と小太刀で一気に切り刻みにかかる。まず一人目の胸を薙いで、二人目は足首を切り落とす。三人目は得物を持つ腕を切り落とした。だが、四人目は完全な死角からの襲撃で、反応することができなかった。

(しまったた・・・！)

気づいたときにはすでに遅い。その瞬間、横から誰かが飛び出し、その四人目の腹に剣を突き刺した。相手が崩れ落ち、それに驚いて刺された相手を見ると、どうやら寝ているようだ。それを確認して、その相手はこちらを振り返った。その時に、俺はようやくその相手が誰なのかに気付いた。

「エリちゃん・・・」

思わずリアルネームで呼んでしまうほどに、その時は動揺していた。彼女は仮にも中層プレイヤー、こんなところに出張ってくるとは思ってもみなかった。それに、正直彼女はこんなことに関わってほしくなかった。なにより、その空洞のような瞳に、俺は動揺していることに気がついた。

(何を勝手なことを・・・)

そもそも、こんなことを俺がしなければ、彼女がこうしてここにいることはなかった

のだ。だが、そんなことは今言っても仕方のないことだ。と、ここまで来て、あることに気がついた。

(そう言えば、P O Hの野郎はどこに行きやがった・・・?)

追撃部隊の指揮に当たっていたはずのP O Hの姿が見えない。てつきり俺はザザやジョニーたちが殴りこんできた段階で一緒にいるものだと思っていたのだが、落ち着いて周囲を見渡すと、あの黒ボンチョと中華包丁のようなタガーはない。そこまで考えて、俺はある可能性に思い至った。

(クソが、馬鹿か俺は・・・!)

それだけ思うと、俺はエリーゼを睨みながらスローイングタガーを彼女の背後に投げ、すぐにP O Hが指揮していたはずの追撃部隊の位置へと向かった。俺の索敵スキルはそこに敵が潜んでいることを伝えていた。

追撃部隊がいた位置に、P O Hはそのままいた。まるでそれは、何か見世物でも見て

いるかのようだった。いや、実際にこいつにとっては見世物なのだろう。

「趣味が悪いぜ、P O H」

「そつちもな。最初からどこかきな臭いとは思っていたが、まさかこんなことを企んでるとはな」

「ああ。お前たちに潜り込んでからここまで、この時を今か今かと待っていた・・・！」

お互いに、もうすでに得物は抜いてある。

「さあ行くぞ、P O H。てめえの罪を数えろ」

「そつくりそのままお前に返すぜ」

それだけで、俺たちは踏み込んだ。まず繰り出した俺の右下からの斜めの斬撃はきれいにパライされ、そのままこちらに、向かって右下からカウンターの斬り上げが襲う。それを小太刀で防いで、勢いそのまま手首を返して左から薙ぎ払う。飛び退ろうとした

瞬間を逃がさずに、俺は踏み込んで追撃にかかった。さらに飛び退ることで回避されたことにより、半身で俺は右手を正眼に、左手を体の後ろに構えた。

少し呼吸を整えて、もう一度踏み込む。俺の小太刀と刀の二刀流は、あいつの短剣より手数で勝る。俺にとつて小太刀は防御するためのものにあらず、二本の剣で完全に攻め込んでいた。だが、その分相手は体術とスピードで勝る。それでも、攻撃の手を緩めるわけにはいかない。こちらの猛攻は殆ど躲し、いなされている。もつとも、相手の攻撃の殆どが有効打になっていない。だが、

(ちいっ、このままじゃジリ貧だ・・・！)

それは、戦っている当事者である俺が一番よくわかって居た。このまま戦いを続ければ、間違いなくあいつのタガーは俺を斬り裂くだろう。だが、もう止めることはできない。こうなつては、もうなりふりなど構っていられない。

無言でもう一度踏み込む。俺は小太刀を右腰に、刀を上段に振りかぶり、P O Hも短剣を振りかぶつた。ギリギリまで引き付け、俺は刀を振り下ろさなかつた。結果的に、P O Hの友切包丁が半身になつた俺の左肩を斬り裂いた。あまりにも俺の異常な行動に、一瞬P O Hが硬直する。その瞬間を俺は見逃さなかつた。

「ぜやああつ!!」

裂帛の気合と共に、まず、小太刀の「浮舟」が襲い、無造作な薙ぎ払いの刀系ソードスキル「吹柳^{ふいりゆう}」を繰り出す。そのまま足で体術スキル「転身脚」を繰り出す。

「D a m m i t !」

P o Hも攻撃が途切れたところを見計らった横薙ぎを繰り出してくるが、

(かかった!)

これは俺のトラップだ。もつとも、ある意味では賭けに近かったのだが、今回はきつちりとうまくいった。立てて構えた刀に、P o Hの友切包丁が当たった瞬間に、俺の体が一瞬で横移動しながら右からの横薙ぎの斬撃を繰り出し、移動が終わると唐竹割りのような上段斬りを繰り出した。刀系反撃ソードスキル「断禍消穢^{たんかしょうわい}」だ。そこまでガードされながらも連撃を当て、しかも最後はクリーンヒットだったが、そこで本当に長い

硬直に入ってしまった。

「ククク……。すげえなあこいつは。まさかソードスキルを連続で発動させるとは、そんな発想すらなかったぜ」

こちらは剣技連携スキルコネクトの硬直で動けない。これを出すからには必殺である必要があったのだが、それは抜かった俺のミスだ。

「もっと楽しみたいのはやまやまだが、これでThe endだ。苦しまないように、一撃で決めてやるよ」

POHの友切包丁がゆっくりと上がる。構えて、何が来るか一発で分かった。短剣の最上位ソードスキルが一つ、**斬**。手数に重きを置く短剣にあるまじき、単発技。だが、その威力は凄まじい。加えて、あいつの武器は魔剣クラスの代物だ。あいつの宣言通り、俺の体は一撃で両断されるだろう。

(「い」まで、か)

目的のために何もかも捨てて、最低限光の中で生きていてほしかった人物ですら闇に墮とした。そんなどうしようもなく愚かな俺は、こうして目的を果たせずに終わるのがふさわしい。そう思っ、軽く目を閉じた。

「やあああつ!!」

直後、その場に似合わない、高めの気合と共に、何か剣が振るわれる音がした。それを防いだと思われる甲高い音。ゆっくりと目を開けると、そこにはP O Hと鏑迫り合いを繰り広げる姿があった。その後ろ姿を見た瞬間に、俺はもう一度ゆっくりと目を閉じた。

（ああ、本当に俺は、愚かだ）

いくら懺悔しようとも足りない。そんなことはよくわかっていたつもりだった。だが、自分の業はもつと深かったことによく気が付いた。

「なかなかいい踏み込みをしてくれるな、嬢ちゃん」

そのP O Hの眩きには答えず、剣士は開いた左手でストレートを放った。それに対し、P O Hは後ろに下がる。その頃によく俺の硬直が切れて、小太刀スキル^{まいはだれ}“舞斑雪”を繰り出した。単発ながらもその出の速さとリーチの長さから使いやすいソードスキルの一つだ。だがそれも、P O Hは後ろに飛びながら受け止めてやり過ぎた。短い硬直を抜けて追撃を加えようとした矢先、煙幕があたりを覆った。

「また会おうぜ、ロータス君よ」

その中でも俺は直感で動いた。こういう事態を想定して、ある程度目をつむって動くくらいにはしてある。加えて、大体逃げるルートは推測がつく。

「逃がすか・・・っ！」

即座に追いかける。だが、そうしようとした直後に、俺の首筋に刃が当てられた。

「意味は、分かるわよね」

言われなくとも分かっている。俺は得物をしまうと、ゆつくりともろ手を挙げた。

「随分と早い到着だな、アスナ」

そのまま振り返らずに俺は言った。どこか悪役のような口調の俺とアスナの会話は、盗み聞きされたところでその真意まで測れる人間は少ないだろう。

「レインちゃんのおかげだね。真っ先にどっか行っちゃうんだもの、その後を追ってき
てみれば、ってところよ」

「攻略の鬼恐るべし、だな。で、俺をどうするつもりだ」

俺が一番尋ねたい部分を直球で問いかけた。

SAO、終章

32. 決裂

「で、俺をどうするつもりだ？」

俺の問いかけに、アスナはすぐに答えなかった。というより、答えられない様子だった。もっとも、俺は背中越しなので、雰囲気で察するしかないのだが。

「あなたがどうしてこんな手段をとったのかなんてわからない。だから、頭ごなしに否定はできない。それでも、私はあなたを許すことはできそうにないわ」

「そうか」

かけられたのは拒絶の言葉。俺にとって驚きなどなかった。なにより、これなら何も知らない人間にとって嘘などないのだから、演技が演技でなくなる。わざわざ演技をした甲斐もあつたというものだ。

「俺がこの手段をとったのは、ただ単にこっちのほうが無効だったからだ」

「人殺しが効率的なんて、お笑い種ね」

「かもしれない。でも、ラフコフメンバーが殺すであろう数十人。俺が殺すであろう十数人。同じ命なら軽いがどちらかなんて考えるまでもないだろう。それに、ラフコフ

はもう空中分解。一石二鳥だ」

俺の言葉に、アスナは黙り込んだ。やがて、アスナは俺に向かって、はつきりと言った。

「確かにあなたのやったことで救われた人はいたかもしれない。でも、それであなたのやったことがすべて許されるわけじゃない」

「目的は手段を正当化しない。ま、当然だわな」

言いつつ、俺は右のつま先を一つ打ち付ける。このブーツは底に刃を仕込んだ特別製だ。底にあつたものが移動する感触を確認して、俺は振り返りざまアスナに後ろ回し蹴りを繰り出した。手を叩かれただけでなく、思わぬ感覚に一瞬アスナが悶絶した瞬間を見逃さずに、俺は即座にポーチの中から煙幕を取り出して地面に叩き付けた。

一瞬で広がる煙に周囲が目を閉じた瞬間に、俺は移動した。こんな状況で、よくわからない地形を移動する馬鹿はいない。だがそれは、よくわからない場合のみだ。俺にとってここは、文字通り庭同然だった。直後に移動した俺は、レインがいたと思われる場所に移動すると、索敵のModである「視覚強化」を使って周囲のプレイヤーを探した。すぐにそれは見つかり、俺は首筋に手刀を下ろし、レインの意識を狩った。

「すまん」

一言だけ謝って、すぐに俺は隠し通路から飛び出した。

煙幕が晴れたとき、もうすでにそこにロータスはいなかった。さすがにこのダンジョ
ン内で追いかけたところで、迷子になる落ちしか見えない。実質取り逃がしたというこ
とになる。

ワンテンポ遅れる形でエリーゼが合流した。エリーゼに気付くと、アスナはゆつくり
と首を横に振った。

「あの人は、まったくもう、とことん馬鹿なのかねえ・・・」

「男の子っていうのはそういうものでしょ」

「お、男を知った女の言葉ですなあ」

「そんなじゃないわよ!」

思わず嘸みついたアスナを軽くあしらうエリーゼに、アスナはどこか既視感を感じて
いた。

(やっぱりこの感じ、ロータス君に似てる・・・)

そう、この二人はどこか似ているのだ。外見的なものではなく、雰囲気的な意味で。
「とにかく、もうここは出よう。用件はもう済んだんだし」

「そうね」

あれだけ固執していた割に、エリーゼの反応は薄いものだった。それにどこか不審さを覚えたが、アスナはいったんそれを置いておくことにして、気絶したレインを抱えて移動した。

「撒いた、か」

後ろを振り返りながら、俺は言う。念のため視覚強化を使って周りを見渡すが、追手はいない。きつちり撒いたことを確認して、俺は隠蔽スキルと集中を切った。

「これでもう、後戻りはできねえな。もともとないか、戻そんなものるところなんて」

とにかく、これであの少女が俺と同じところまで落ちることは防いだ。

エゴイストだと罵ればいい。独善者だと笑えばいい。俺はどうなったってかまわない。落ちるところまで落ちるのは、俺一人だけで十分だ。

「さて、とりあえずカーソルの色をもとに戻すか」

このままでは動き辛い。幸いなことに、ほとんどの層のカルマクエスト開始の場所は頭の中に入っている。この層も例外ではない。グリーンに戻すまでには数日かかるだろうが、たかだか数日だ。

33. 新たな相棒と

カルマクエストを攻略した直後、俺は情報をもとにリンダースの外れに来ていた。服装は黒いインナーに空色に近い色合いの明るいトップス、下は紺色を少しだけ明るくしたような色のロングズボン、そしてフレームが細めの眼鏡というスタイルだ。以前の俺では考えられないようなスタイルなので、パツと見では誰かというのとはわからないだろう。実際、何人かそれっぽい服装のやつは見かけたが、誰にも声をかけられなかった。

リンダースの外れまで足を延ばしたのは、ある人物に会うためだ。その人物は、川の近くに自分の店を構えているとのことだったので、わざわざこうしてきたというわけだ。もつとも、あいつのことだから、誰かわかった瞬間にグーパンか張り手の一発くらいは飛んでくるかもしれないが、そのあたりは覚悟の上だ。

(ハハ)か

水車の回る、静かで落ち着きのある店構え。案外いいセンスをしていると思いがながら、俺はゆつくりとドアを開けた。そこに店主がいないことを確認すると、俺は店番のNPCに声をかけた。

「店主と話がしたい。呼んできてもらえないか」

「かしこまりました。少々お待ちください」

それだけ言うと、NPCは奥に引っ込んだ。どうやら、奥に工房があるらしい。その間に俺は眼鏡をとった。

「お待たせし……！」

用意していた台詞を最後まで言う前に、俺が誰なのか気付いたその店主は驚きで息を呑んだ。

「よう。久しぶりだな、リズベス」

「……リズベットだつて言つてんでしょ」

俺のいつもの——といつてもしばらくしていなかったわけだが——のからかいに答える声に力はなかった。当然だろう、俺のことはもうアインクラッド全土に広がっているだろうから。

「無事そうで何よりだわ」

「おかげさまでな」

「そ。で、今日は何の用よ？」

「こいつを打ち直してほしい」

そう言つて、俺は腰に装備していた得物をリズに差し出した。

「鬼斬破……？これ、もう戦力外レベルの武器よね？」

「ああ。でもお気に入りに入るんだ。強化素材はたんまり持ってきたつもりだし、足りないのならまた出直す。それに、信じる信じないは勝手だけど、お前の作った武器で人斬りは一度としてしていない」

なんとなく気分的に、リズの刀で人を殺すということには抵抗があつたのだ。だから、ただの逃避と思つていてもずつと、鬼斬破は俺のストレージで眠っていたのだ。強化されることはおろか、鞘から抜かれることとして一度もなく。

「……ついてきて。店番お願い」

俺とNPCに一言掛けると、リズベツトは奥のほうに歩いていった。店の奥はやはり工房になっていた。

「あんた、レインに声かけたの？」

「いや、かけてない。というか、かけれない、かな」

「あつそ。あんたがどう思おうと勝手だけど、あの子の想いも酌んであげなよ」

それだけ言うと、リズは溶鉱炉に向かいあつた。強化素材を無言で出した俺に、リズは同じように無言で受け取って中身を確認する。と、すぐに驚きの声を上げた。

「あんた、これだけの量どこで……!?!」

「最高層でレベリングしてて、その副産物でな」

これは事実だ。もつとも攻略組が迷宮区に行きやすい時間帯をハイディングで調べ、

その間にワールドで素材集めに勤しんだのだ。加えて、俺は刀を片手で扱える程度にはSTRを鍛えてあるから、ストレージ容量が危なくなるということはあまりない。結果的に、俺のアイテムストレージには相当量の強化素材がため込まれることになった。

「最高層つて、そんなところにいたら危ないんじゃないの？ だつてラフコフのPKの範囲は——」

「攻略中の階層を含めて上三層、その通り。だけど、あくまで禁止しているのはPKだ。レベリングも含めた、侵入が禁止されているわけじゃない。それに、ここまで俺は特に誰にも気付かれずに来た。つまりはそういうことだ」

その俺の理屈に、リズは呆れたようにこめかみを押しさえた。実際呆れているのだろう。

「分かったわ。でも、これは時間がかかるわよ。今はそう大したことない刀だけど、仮にも当時の中では最高傑作の一つだったんだから」

「構わない。どのくらいかかる？」

「一週間あれば十分よ」

「そうか。なら頼む」

「はいはい。お代はふんだくるからねー」

「ぼつたくり宣言かよ。まあ、俺も大して金は使わないから余ってるしな。じゃあ、一週

「間後にまた来る」

「ええ、待ってるわ」

それだけで立ち去ろうとした俺を、リズベットは呼び止めた。

「ああ、それと。一つ約束して」

「何をだ」

「絶対もう一回、レインに会ってあげること。いい？」

そこには、俺より年下とは思えないほどはつきりとした気迫があった。

「・・・分かった」

少しため込んで答えた俺に、リズベットは表情を崩して一つ頷いた。

「じゃ、期限には絶対間に合わせるから」

「ああ。信頼してる」

それだけ言うと、今度こそ俺は工房を出た。

それからというものの、俺はひたすらに情報をかき集めていた。目標は、ラフコフの残党メンバー及びオレンジギルドのメンバーだ。ここまで来たらもう引き返せない。

「待たせて悪いな、アルゴ」

「そんなに待ってないから気にすんな。で、今回はどんな危ない橋をおねーさんに渡らせる気ダ？」

「危ない橋前提かよ。そんなに信頼されてねえのか、俺」

「お前さんの依頼はあんまり碌なものがないって、もっぱらの噂だからナ」

「誰情報だ・・・いや、答えなくていい」

「この一年間でもっとも接触した情報屋など一人しかいない。あいつが拡散したのだろう。」

（あんにやろう・・・）「今欲しいのはオレンジプレイヤーの情報だ。ラフコフ残党の居場所が分かれば御の字なんだが・・・」

「ラフコフ残党はさすがにまだ情報が入ってないナ。でも、オレンジプレイヤーの情報なら分かるゾ」

「マジか!？」

思わず身を乗り出してしまった。一瞬アルゴが引いてしまったところを見てすぐに頭を冷やして元に戻る。

「悪い」

「いや気にすんなって。で、オレンジプレイヤーの情報だナ」

「ああ」

「いったん場所を移そう。こんなところで話してたら明らかに怪しまれるしナ」
その言葉に頷いて、俺はアルゴについてそこから離脱した。

連れてこられた宿屋の一角で、俺はアルゴから話を聞いていた。

「・・・とまあ、今あるオレンジの情報はこんなもんだナ」

「サンキュ、アルゴ。お代は？」

「そーだな、このくらいだし、9000で手を打とウ」

「サンキュ。お前は良心的な値段なのな」

「それはまるで良心的じゃない値段の情報屋がいるように思えるナ」

「その辺は想像にお任せするよ」

それだけ言うと、俺は部屋から出ていこうとした。その背中に、アルゴが声をかける。

「なあ、レインちゃんに声はかけたのか」

いつものふざけたような口調ではなく、真面目な口調。それだけで、アルゴがどんな顔をしているのか大体想像がついた。

「これ以上あいつを巻き込めねえよ」

「本人がどんな形でも協力を望んでいるとしても？」

「ああ。あいつまで俺と同じになる必要はない」

それだけ言うと、今度こそ部屋から出ていった。

「どうあつても一人で抱え込む気なんだな……」

ロータスが去った部屋で、アルゴはひとりごちた。できるだけ力になりたかった。悔しいが、彼女の實力では彼と肩を並べて戦うことはできない。ならば、せめて彼を追いかけているあの少女ならばと思つた。が、あの目を見た瞬間に、そんな説得も意味をなさないということを知つた。あの少女をこれ以上巻き込みたくないというは、嘘偽りない本音なのだろう。そこにあの少女の想いは考えられていない。いや、あえて考えていないのかもしれない。

(とんでもないエゴイストだな)

それすらも本人は承知の上なのだろう。分かっているからこそ、一人を貫く。それがどれだけ孤独で辛くとも、曲がることはきつとない。

自分の今持てるオレンジギルドの情報をほとんどすべて売ってしまったのは間違はなくミスだった。あの男が次に狙う相手が分からないからだ。それでも、何も無いよりはマシだ。

(私には無理だ)

そう思いながら、アルゴはある人物にメールを送信した。その中身はロータスに渡し

たものに、〃この中のいずれか、ないしはすべてをロータスが標的にした〃と加えたもの。それだけで十分はずだ。

(だから頼んだよ。——レイインちゃん)

年端もいかない少女にこんなことを頼むのは少し酷かもしれない。が、彼女以上の適任などなかなかないだろう。だから、アルゴはレイインに託すことにした。

刀を鍛えて貰っている間、俺はクエスト巡りを続けていた。俺のレベリングはちよつとした攻略組に比肩するという自覚も自負もあった。なにせ、最前線が70層手前まで行っている状況で、俺のレベルはもうすでに80を超えている。よくアジトを抜け出してレベリングをしていた甲斐があったというものだ。

俺が今来ているのは、鬼のように強いNPCがいるという噂のフィールドだった。何でも、そのNPCがクエスト開始フラグを持っているため何人もそいつに挑んでいるらしいが、尽く返り討ちらしい。そんな噂を聞いて、

「戦いたくなるあたり、俺も物好きだよなー・・・」

軽く独り言ちつつ、俺は歩を進める。今は、その強さから断念する人物が多く、挑む人間は一握りなのだとか。そう聞いて、俺はPKの時によく使っていた二振りを携え

て、NPCに向かって歩いていった。

「ふん、性懲りもなしにまた俺に挑むか」

そのNPCの前にたどり着いて、ある程度近くまでよると、NPCはそう言った。それと同時に、手に持つ刀を八相で構える。要するに、

(問答無用、つつーことか。狂ってんなー)

加えて、その刀はどこか禍々しきすらも感じられる紅色。見た瞬間に分かる。あれは妖刀の類だ。

「さあ行くぞ、精々楽しませろ」

「楽しむ余裕が果たしてあるかねえ……」

ゆっくりと刀のみを抜く。台詞とは裏腹に、俺の口元は完全に歪んでいた。久しぶりにただ純粹に戦うことだけに集中できそうな、骨のありそうな相手だ。存分に楽しませてもらうとしよう。

俺たちの踏み込みはほぼ同時。両方とも獲物は刀だから、本来は両方とも強く打ち合わずにパライイに入るところなのだが、俺たちは両方とも真正面から全力で打ち合っていた。向こうの目的はわからないが、こちらの目的はひとつ。打ち合ったときの力で、おおよその相手の実力を測ること。実際に、こうして打ち合ってみてひとつの事実気づ

く。

「あんた、相当強いな・・・！」

「そういうお前も強いのだろう。気迫でわかる」

「あつそ、そいつは光栄だね！」

それだけつぶやくと、俺は相手の力の向きを変えて、立ち位置を入れ替えた。そのまま片手で刀を持った状態で構える。小太刀は暫く使うべきではないと最初から俺の第六感が囁いていた。実際に、打ち合ったときの力の強さからして、うかうかしていると武器落としを狙われかねない。いざとなれば小太刀のみでの応戦も視野に入れておくべきだろう。

(くそつたれ、マジで厄介・・・！)

これならある意味ラフコフメンバーのほうが戦いやすかったくらいだ。しかも、どこか自我が奪われているようでいて技量は高いというのだからなおのこと。某アニメに出てきた戦闘機をも自分の得物にしてしまうあの人と正面から渡り合うとこんな感じなのだろうなとぼんやりと思った。

(とりあえずは打ち合って、突破口を見つけろ！)

それだけ考えると、俺は再び踏み込んだ。右上からの袈裟と見せかけ、右足で蹴りを繰り出す。それを相手は飛び退って避け、こちらに踏み込もうとするもそれは俺が放つ

た複数の投剣が許さない。すべて弾かれたのは計算外だったが、そのくらいで怯む俺ではない。低い姿勢で飛び出すと、今度は右下から逆袈裟を放つ。これは剣先で防がれ、器用に剣先がくるりと上を向いて今度は上から斬撃が襲い掛かる。得物を素早く引き戻して右に打ち払うことでそれを回避すると、今度は左手でフックを顔面に叩き込もうとする。が、これは空いたほうの手で受け止められた。そこまで来て、相手の得物に見当がついた。

「あんたのそれ、小太刀か？」

「ほう、よくわかったな。だがそれが分かったところでどうにもなるまい」

「それはどうかね」

それだけ言うと、膝にため込んでいた荷重を爆発させ飛びあがりながら膝蹴りを放つた。着地と同時に放った上段は完全に読まれていただろうが、それでも飛びあがったこともあって威力が強かったのだろう、受けた相手を無理矢理下からせた。

「何を言おうと同じこと。所詮はこの刀の錆になる一人にすぎん」

「そいつは困る。俺にはやるべきことやってやつが残ってるんでね」

「ほげげ」

ゆつくりと構えなおす。相手は再び八相に、俺は右手を鞘の近くに、左手は小太刀の柄に置いた。

突破口は見えた。正面切った勝負では互角かこちらのほうが若干下。ならば、正面切った勝負をしなればいいだけだ。

「さて、行くぜ」

一気に踏み込む。俺の下段を相手は上段で迎え撃つが、それが間違いだった。

(かかった)

相手の一太刀は、俺が放った小太刀の居合で防がれ、届くことはなかった。直後に、俺は刀の柄頭でしたたかに相手の手を打つ。その強打にたまらず相手が得物を取り落とした。そのまま手首を返して袈裟を放とうとした瞬間に、

「ひいひいひいっ！」

相手が頭を抱えて蹲った。俺も呆気にとられて刀を止めてしまう。が、すぐに気を取り直して、首筋に刃を突き付けた。

「いったいどういうことか、説明してもらおうか？ 言っておくが、妙な真似したら速攻で首を飛ばす」

ただの事実を淡々と述べると、その相手はぽつぽつと話し出した。

「私はしがない刀匠なんだ。ずっと自分の納得のいく刀を打つことは全くできなかった。だがある時、ようやく誰の目にも業物と映る刀を打つことができた。だが、その試し斬りをしたとたんに、私は人を斬りたくて仕方ないような状態になってしまった。

何とかその時は手放すことができたのだが、何人もの剣士がその剣の餌食となり、錆となった。恐れを覚えた私は、刀を取り戻すことにした。かつて衝動を制御で来た私ならと思っただからだ。何とかその刀を取り戻すことに成功したのだが、

「今度は自分が吞まれた、か」

俺の一言にうなだれた目の前の刀匠の言葉に嘘は見られない。が、一つ気になったことがある。

「解せんな。話を聞く限り、あんたはただの刀匠だろ？ そんなに大した技術を持つてるとも思えないし。ならなんで俺と太刀打ちできたんだ？ 手前味噌になるけど、俺もそこそこ以上の実力者を自負してんだけど」

「あの刀には魔法をかけてある。使用者と対峙者の技術を吸収して刀に取り込み、それを使用者に反映するというものだ」

「てことは何か、あの刀には今、今までの持ち主と、今まで戦った人物の技術が宿ってるってことか？」

「そういうことになる。それに応じて、刀が血を求める力も強くなっていっただようだが・・・」

「それで、最初に持った時は大丈夫だったのに今回は吞まれた、ってわけか。ざまあないな」

「返す言葉もない」

その返答を聞きながら、俺は地面に転がっている刀をとった。こつちまでフィードバックがあつたらどうしようかと思つたが、そういうことはないようだ。

「君、大丈夫なのか・・・？」

「みたいだな。俺も理由はわからんが」

大方、その刀に関する設定が設定にすぎなかつたことと、HP全損⇨死亡のSAOでそんなフィードバックを実際に与えたら、持ち主を止める⇨持ち主を殺すことになりかねないからという理由だろうな、と俺は冷静に考えていた。

「なら、その刀は君に譲ろう」

「良いのかよ？」

「ああ、構わないさ。むしろ、私の刀でこれ以上人を虐殺されるというのは、作成者としては複雑な心地だからね」

「そうか。銘はなんていうんだ？」

「オニビカリだ」

「そうか。じゃあ、貰うぜ」

「ああ。ありがとう」

視界の端に、クエストクリアを告げるシステムメッセージが表示されていることを確

認して、俺はその刀、*“妖刀オニビカリ”*をアイテムストレージにしまった。とりあえずいったん圏内に戻ってプロパティの確認と、リズに鞆を見繕ってもらう必要がある。あいつには連続の依頼となってしまうが、彼女に依頼するのが確実だと判断した結果だった。

「な、んじゃこりゃ・・・!?」

圏内に戻ってプロパティを見た瞬間に俺は思わず叫んでいた。何とこのオニビカリ、攻撃力が680―720という化け物剣であったのだ。ちらりと聞いた限りだと、魔剣クラスであるキリトの愛剣*“エリユシデータ”*のスペックが攻撃力700ちよいくらいらしいので、この剣は相当な化け物ということになる。それに、重さのほうはそこまで重たくなく、軽量片手剣と重量短剣の中間くらいだ。

「バランスブレイカーもいいところだろ・・・」

異常なスペックに軽く引きつつ、剣をアイテムストレージに入れて、俺は宿屋を出た。ここまでスペックが高いのであればなおのこと鞆は急務だ。

翌日、リンダースの外れに、前と同じような変装で訪れた時に、俺以外に客はいなかつ

た。そのままNPCに店主を呼んできてほしいと頼むと、リズは奥から出てきた。

「何よ、期限はまだでしょ?」

「まあな。今日は別件を頼みに来た」

そう言うのと、俺はアイテムストレージから妖刀オニビカリを取り出した。

「こいつの鞘を作ってほしい」

オニビカリを見た瞬間に、リズの顔が目に見えて変わった。

「なにこれ」

「妖刀」

「いやそんなこと見ればわかるわよ」

思わず漏れたコメントに短く返すと、リズはあっさり突っ込んで、オニビカリのステータスを見た。瞬間、リズの表情が驚きに染まった。

「何このステータス!?! 化け物じゃないの!?!」

「俺も思った。で、頼めるか?」

「お安い御用よ」

「OK、サンキュ」

「あ、ちよつと待ってなさいよ」

それだけ言うと、リズはもう一度工房に戻った。すぐに戻ってきた手には、鞘に入っ

た一振りの刀。

「銘は『鬼怨斬首刀』きえんざんしゅとう。あんた、武器の名前に呪われてるんじゃないの?」

少しだけ鞘から引き抜いて刃を見る。その色と刃紋、そして手から伝わってくる感触で、俺はこれが間違いなく名刀であることを理解した。

「外で試し振りしていいか」

「もつちろん。というか、作成者として、使用者とのマッチングも気になるしね」

その言葉を受けて、俺はリズベツト武器店の前の道で鬼怨斬首刀を抜いた。ゆつくりと構え、素振りとソードスキル一発を放つ。やがてゆつくりと剣をしまうと、店の前で胸を張っている少女に振り返った。

「どうだった?」

「さすがはリズ、いい出来だ」

そう言うのと、俺は刀をストレージにしまった。本当にいい剣で、これなら命を預けられると掛け値なしで言えるものだった。

「料金はどれくらいだ?」

「それに関してね。実を言うと、あんたのもって来たあの素材、使いきらなかったのよ」

「マジで?」

「まあ、こつちも仕入れてものがあるし、ストックがある奴もあつたからね。で、その

素材をあんたが自分で引き取るかどうかで、値段も変わるんだけど」

「俺は要らない。俺の手元にあつても無用の長物だし、ストレージ整理の意味もあつたからな」

「あけすぎすぎるわよ。なら、そうね、大体74200コルつてとこかしら」

「OK、了解」

それだけ言うと、俺は皮袋に指定された金額をぴったり入れると、リズに渡した。

「ほらよ」

「えっと、はい確かに。店内適当に物色してて、鞆くらいは速攻で作るから」

「サンキュ」

それだけ言うと、リズは店に戻った。俺が店に戻ると誰もいなかったもので、奥の工房に潜っているのだろう。そのままそこで待つことにした。

工房の奥に戻ったリズは、ゆつくりとシステムウインドウを操作していた。そこで操作するのは、鞆を作るための素材を出すためでなく、あるメッセージを送るため。

(「こういうことはしたくなかったんだけど・・・」)

状況が状況だ、仕方あるまい。それに、彼は根無し草だ。この機を逃せば、またどこぞへと去って行ってしまふのだろう。そうなつては、もうこちらに追いつがるすべはな

い。精々言つて世間話で足止めするのが関の山だ。だが、ここにいるのなら話は早い。送信がされたことを確認して、リズは鞄の作成にかかった。彼女らなら、おそらく鞄を作っている間に来るだろう。

どこかいやな予感がした俺は、店の中で改めて変装をしていた。軽いウィッグと眼鏡、それから服装も黄色系のインナーと暗い緑色の外套にオレンジ色系のボトムスという変装は、普段の俺からしたらまつまつたく違う印象に変えていた。

そのいやな予感は的中した。ドアベルがなったかと思いちらりとそちらを見やると、独特な色の髪を長く伸ばした美少女がそこにいた。その少女を俺が忘れるわけではない。ことごとくいう状況になってしまうと、周りに客がいないという状況が最悪のものに変わってしまう。

(ちっ、間の悪い・・・！)

弁明などしようがない。わからないことを祈るだけだ。もつとも、そう簡単に見破れる変装であるとも思っていないが。

その時に、奥の扉が開いた。

「できたわよ、ロータス」

あえて少し強調するようにしてリズベットが言った。その手には、鞄に収まった妖刀

オニビカリがあつた。が、

(余計なことしてくれやがつてこのド馬鹿)

今の一言と、彼女の目で確信した。大方、こいつの連絡を受けてこつちに来たのだから。

つかつかと歩いて鞆を受け取ると、短く聞いた。

「代金は？」

「あの子としゃべることでチャラ。どう？」

つくづくおせっかいなやつである。俺からしたら “物凄く有難迷惑なおせっかい” だが。

「分かったよ」

それでタダになるのであれば安いものだ。振り返ると、そこには暗い表情の少女がいた。

「なんて表情してんだよ」

「だって、辛そうなんだもん」

「俺がか？まさか」

「本当だよ！」

俺の自嘲を悲痛とも取れる声がかき消す。

「辛くないのなら、どうしてそんな暗い顔をしてるの？」

「暗い顔なんかしてねえよ」

「いいやしてる。それに、いつまで一人で抱え込むつもりなの？」

その言葉に、俺はひとつため息をついた。どいつもこいつも同じようなことしか言わないのか。

「これ以上巻き込めるか」

「つまらない意地だね」

「つまらなくて結構だ」

それだけ言うと、俺は店を出た。その背中に何か言おうとしていたようだが、わからないふりをした。

34. 目的のために

ロータスが店を出た後、リズベット武具店の空気は妙なものになっていた。レインは行き場を失った言葉は何とか飲み込んだ。リズベットはそんなレインにかける言葉が見つからなかった。

そんなときに、店のベルが鳴る。そちらへ目をやると、そこにはエリーゼがいた。

「もしかしなくとも一足遅かった？」

「まあ、ね」

空気を察してそれだけで黙り込んだエリーゼは、レインの肩を一回だけ叩いた。

「ありがとうね、リズちゃん」

「いえいえ、このくらいは。それより・・・」

そう言つて、リズはレインに目をやる。そこには完全に肩を落としたレインがいた。

「ほんつとうにこの大好き娘を泣かせるとか、どういう了見してんだか」

「それ、一部ブーメランですよ」

「自覚あるから大丈夫」

それ果たして大丈夫なのだろうか。というか、

「自覚、あったんですね」

「随分前からね。リズちゃん、奥借りれる？」

「ええ。どうぞ。」

店番お願い。一番奥にいるから、もし対応できなくなったり、私が呼ばれたりしたら呼んで」

「かしこまりました」

リズの言葉に反応したNPCが恭しく言葉を返したことを見て、リズは奥の扉を開けた。

奥はまさに工房で、武器作成のための炉や鉄を打つ台、あとは強化素材のストックなどがあつた。そんなところを抜けると、良くも悪くも女の子らしいが小ぎつぱりとしたインテリアのところに出た。

「どうぞ。狭いし特に何も無いけど」

それだけ言うと、リズは奥のほうへと小走りで行って、帰ってきたときにはその手にティーセットを持っていた。気兼ねなくできる状況と分かったからか、レインは唇をかんでうつむいて、その目からは光るものが落ちていた。それを見て、エリーゼが優しく抱きしめ、ゆっくり優しく背中を叩いた。それがきっかけとなって、レインは静かに泣

き出した。

泣いているレインをあやししながら、エリーゼは事の一部始終をリズから聞いた。それが終わったところに、レインもひとしきり泣き止んだ。

「ほんつとうに、馬鹿な人」

誰がとも言わなかったが、誰のことを指すのかなど明白だった。そこで、いったん言葉が消える。

「あの人は……」

そんなときに、ぽつりとレインが漏らした。

「本当に、一人で落ちて行くつもりなんだと思う。たとえその底で朽ち果てることになっても」

「……そうね。そうなる前に止めないと」

どうあつても止まらない。それをリズベットは改めて察した。

「あたしにできることがあれば手伝いますよ」

「ありがとうね、リズちゃん。でも、無理しなくていいよ」

「そんな、無理なんて……」

するつもりはないし、そもそもがこの二人に比べれば自分の力なんて微々たるものだ。無理などできるはずがない。

「でも、本当に今日はありがとうね」

「おかげでロータス君の今も見れたし万々歳」

「そういう顔してないけど」

「それはそれよ」

軽いリズムの茶化しにもきつちりと反応してくるところを見るに、もうほぼほぼ復活したようだ。

「とにかく、今はやれることをやる！」

「ただ、無茶して得物折ったら今度こそぶつ叩くからね」

「なんか、リズムが言うと迫力が・・・ナ、ナンデモナイデス」

途中で言葉を一旦切つてどこか片言で言いなおす。どうしてそんなことになったのかは、言わないほうが本人のためというものだろう。

「とにかく、今日はありがと。もう行くね」

「無理はしないように・・・って、もう行っちゃったか」

出されたお茶を飲んで飛び出すレインにリズムが言葉をかけたが、彼女はすでに部屋の外にいた。

「まったくもう・・・」

言葉とは裏腹な、穏やかな表情で自分もお茶に口を付けた。そこに、エリーゼが年長

者らしい笑みで言った。

「思い立ったらすぐ行動、って子だもの。それに、恋する乙女は強いものよ」

「あー、それは間近で見ました」

その強さを見ると同時に、彼女の場合は失恋もしたわけなのだから、よく覚えている。今でもたまに夫婦そろってこの店を訪れるが、あの間に割って入る勇氣はない。

「あ、そっか。そういえばアスナちゃんのあのレイピアはリズベツトちゃんの作品だけ」

「そうなんですよ。あんな業物は何本に一本あるかわからないくらい」

「私も、この子は結構重宝させてもらってるしねー」

そう言つて腰の得物を一つ叩く。そこには、リズの打つた業物で、確率で相手に睡眠のデバフを与えるハイオプティマスが入っていた。パーティとして考えるのなら、いきなり眠られたら、その次の攻撃のタイミミングなどが計り辛くなる。が、ソロの彼女にそんなことはあまり関係なく、その業物度合いも相まって、現時点でのエリーゼ最大戦力となっていた。

「まあ、あいつの持つてきた武器はプロパーティ見た瞬間にびっくりしましたけど」

「え、どんな武器持つてきたの？」

そのまま二人はロータスの衝撃をまるでなかったことのように雑談に花を咲かせた。

もつとも、話している内容が日常でよくある様な事ではなく、少々物騒な話になっているのはご愛嬌だろう。

その頃、ロータスは複数回の転移の後に、目的地へとたどり着いていた。

「まったく、こんなことがあるとはな」

正直言つて予想外のエンカウントである。リアルで寿命が縮んだような心地だった。そのままの足で他の補給を終えてフィールドに出る。今いるこの林と森の間くらいの小さな森林地帯は、事前に得た情報をもとに来たものだ。今の俺は、ウィッグと眼鏡、それから服装で完全に変装しているうえに、装備しているのは妖刀オニビカリ。傍から見ると、今の俺を見て誰かわかる人間はいないだろう。

カサリと小さな音を俺の耳が捉える。気づきながらも歩調も表情も変えずに歩いていく俺の後ろで、ダン！という大きな音がした。

(足音と踏み込みの音、後は気配からして)「そこか」

そのまま振り向きざまに居合を放ち、文字通り飛びかかってきた相手をはじき返す。相手が着地するかしないかくらいのタイミングで、俺は空いているほうを上に掲げた。

「今の、気付いてたのか・・・!?!」

「ああ。ついでに言うのと、あの茂みから出てきたあたりから気付いてたぜ」
後ろの茂みを親指で指しながら言う。

「それだけの実力者なら楽しめそうだ」

「それはどうか」

その俺の一言に怪訝な顔をした襲撃者だったが、すぐに意味が分かることになった。俺が手を上げたのはしつかりと意味があつてのことなのだ。襲撃者は突然襲つた麻痺の感覚に、なす術なく崩れ落ちるしかなかった。

「俺はどんな装備でも、投剣の類を少なくとも20は仕込んであるようにしてるからね。その中には、麻痺属性のものもたくさんある」

「だが、今お前はまったく動いていなかったはず……」

「そうだね。だから、最初の会話の時点で仕込みを終わらせていたわけ」

俺の言葉がいまいちわからなかった襲撃者だったが、すぐに一つの可能性に思い至つた。

「まさか、上に放り投げたとしても言うのか……!?!」

「そゆこと。襲う相手を間違えたね、ナイフアー」

ナイフアーとは本来、FPSにおいてナイフしか使わない、ないしはナイフの技量が卓越したプレイヤーに与えられる、ある種の称号である。だが、このSAOにおいては

使われない。短剣使いがすべてナイフアーの圏内にあてはまってしまいう可能性があるからだ。だが、俺の発言は間違っていない。何故なら、

「まさか、ロータスさん・・・？」

「そうだよ、ナイフアー」

こいつのプレイヤーネームがナイフアーだからだ。大方、ここに来る前はFPS厨だったのだろう。

「てか、この状況でいまだにさん付けとか」

そういういつつ、得物を一振り。それだけで、相手の片足が消えた。

「甘ちゃんすぎて反吐が出る」

そこに至って、ようやく俺の目的が分かったのか、必死に体を動かそうとする。が、無駄だ。俺の麻痺ナイフは、すべて現状最高ランクに近いものしか使っていない。少なくとも、10分は動けんよ」

その言葉に、ナイフアーは不可解そうな表情を浮かべた。

「どうして・・・？」

「どうしても何も、最初から俺の目的は変わっちゃいねえよ」

それだけ言うと、俺は頭と中心から少し左の胸を突き刺し、HPを全損させた。その場に落ちたスローイングタガーとピックを拾って装備ホルスターに戻すと、また再び歩

き出した。

「この世界からラフコフの残党を駆逐する。それだけが、今の目的で、生きがいだ」
もうすでに消えつつあるポリゴンに向かつて、俺はそう呟いた。

ラフィン・コフィンの壊滅。あれから俺は、こうしてラフコフの残党狩りに回っていた。情報を頼りにひたすらに殺して回る。それが、今の俺の生きる目的であり、行動原理だった。空振りすることも多かったが、それはそれ。とにかく、今の俺は犯罪者のみを狙うオレンジキラーだった。

(さて、この辺での発生件数を見るに、もう一つあると考えてまず間違いないはずなんだが……)

このあたりには、ナイフアームともう一つ、別件で物取り目当ての辻斬りが出没するという噂があった。だからこそ、滅多なことがない限りこのあたりを主戦場とする奴はここを通りたがらなくなったのだが、時たまそこそこの層のやつが素材集めの帰りにここを使ったり、下から来る奴がこの辺を通ったりしていたので、滅らなかつたのだ。今いる場所と街、それから狩場を結んだ時に、ここより少し狩場に近い所にそれがあったはずなのだが、

「……帰るか」

それだけ呟くと街へと足を向け——ようとして、懐に手を忍ばせた。このあたりの

地形を考えると、考えられる可能性。

(ちつ、遮蔽物が多すぎる!)

このフィールドの特性を軽く恨みながら、周辺を見渡して気を配る。すると、視界の端、右上くらいで何かが光った。

「そこか!」

言いつつ、往復ビンタの要領で手を往復させる。パパシャンという連続した二つの小さなポリゴン炸裂音に続いて、どざりと何かが落ちる大きな音がした。大きな音のしたほうへ歩いていくと、その相手を見下ろした。

「考えてみりや不自然だったんだ。なんで人斬りが出るところの近くに物取りが出るんだって。だってそもそも、人斬りが出るって分かってんのに近づく馬鹿はいない。物取りでも似たり寄ったりだ。ならなんで、それでもある程度うまくいったか。答えは簡単だ。——お前ら、グルだったな?」

俺の考えているシナリオは、まず片方が斥候となって張り込み、得物を見つける。見つけると、その後をつけ、もう片方がまず狩る。こちらは物取りだ。で、もう片方はその先で待ち構え、PKを行うという二段構えだ。これなら、ある程度ルートを変えられても対応ができる。そのためのタッグだったのだ。そして、もう一人の襲撃者の顔を見て、それを確信した。

「お前ら昔つから仲良かったしなあ、クレイモア？」

その俺の言葉に、襲撃者がゆっくりとこちらを見上げ、その顔が驚愕に染まった。

「ロータス、さん」

「よ、久しぶり」

相手の驚きなどどこ吹く風と言わんばかりに、俺は声をかけた。あまりにも気安いその声は、相手にとっては絶望の対象らしく、驚愕に微かな恐怖が混じった。

「ま、ここで会ったっていう不運を呪いながら死んでくれや」

首を一閃。少し遅れて体全体がポリゴンとなった。ゆっくりと刀を納めて、俺はくると踵を返した。

俺の最後の言葉に嘘はない。これだけ殺すのだ。恨みの一つや二つ、増えたところで背負うものが少し増えた程度だ。こんな怨嗟の道に、あの少女たちを巻き込むわけにはいかない。それがどこまでも俺のエゴだとしてもだ。

とにかく、今日の仕事はとりあえず終わりだ。ここから向かうとしても間に合わないだろう。となれば、ゆっくりと今日は体を休めるべきだろう。とってから、鏡で自分の顔を映して、一つの事実気付く。それは、今のプレイヤーカーソルがオレンジになっっていることだ。大方、あの二人のどちらかがカーソルの色を戻していたのだろう。こんなことは俺にとっては覚悟していたことだ。カルマのクエスト分でタイムロスが

発生するが、それは避けて通れない道だから諦める他ない。こんな時にも俺一人というのは気楽でいい。

こんなこともあろうかと、カルマのクエスト発生場所はすべての層で覚えている。その方向へ向かって歩き出した。

35. 新たな力、再会、対面。

それからしばらくして、俺は相変わらずオレンジ狩りを行っていた。普段はおしゃれなどまったく興味の無い俺だが、変装のためにその手の知識はおのずとついていた。今日の獲物はいつもの刀と小太刀ではない。最近、俺のスキルリストに現れた、とある妙なスキルを試すためだ。

武器を構え、狙いを付ける。俺の目標は、少し先にいるオレンジだ。俺は隠蔽スキルを完全習得していて、しかも俺が陣取っているのは完全に相手の死角の位置。相手はこちらを確認するには、頭を動かして俺のほうを凝視するしかない。そんなことをしている間には、俺は完璧に捕らえられる自信があった。そのくらいのトレーニングはしている。

俺の手から離れた得物は過たず、相手の眉間を一撃でとらえた。続いて第二射を素早くつがえ、放つ。今度は右胸に命中した。その一撃がとどめとなり、目標はポリゴン片へと変化した。

(着弾点が20cmくらいずれたか。まだまだだな、俺も)

俺はゆっくりと得物を背中に背負った。そのまま歩いて、先ほど一人の命が散ったところに転がっている二本の剣を回収した。本来剣はこんな使い方をするものではないというツツコミはさておく。

(しっかし、慣れは必要だが、これは結構使えるな)

勘のいい人は気づいているかもしれないが、俺が新たに習得したスキルとは、その名も「射撃」だった。弓を使ったもので、威力は弓自体の攻撃力に、放つ物による攻撃力を上乘せするというもの。その特性上、スタン値はそんなに高くないのだが、行動遅延^{デレイ}を起こしやすい特徴がある。放つ物というのは、通常の矢なら特に大したことはないのだが、威力の上がる特殊矢だったり、状態異常を起こす矢だったりするとそれが付与される。また、本来の使い方ではないというツツコミはまあさておくとして、剣をつがえて撃つこともできる。その場合、威力は確かにかなり高くなるのだが、弓の弦部分の耐久値減少がかなり早くなるうえにコントロールが非常に難しくなるという諸刃の剣な性能となっている。それにそもそも、弓に剣をつがえる時点でそんなに重い剣は使えない。なので、攻撃力もそれ相応といったところだ。しかも、鏢の形状によつてはよしんばつがえられたところで放てないから、放つことのできる剣はさらに限られる。リズムに頼んで何本かその手の剣を作ってもらったはいいものの、定期的メンテナンスが必要な上に、密度の大きな剣はストレージの要領を地味に圧迫するので結構俺のほうも考え

ることが多かつたりする。主に素材。素材に関しては俺が拠点としているあばら家においてくるか、リズに半分押し付けで売り払うのでまあいいのだが、いかんせん狩りの実入りが良かったりするとどうしようもない。そういうときは素材を捨てて無理矢理スペースを作ることになるのだが、未練があることは変わりない。そもそも、普通の矢は一切補給なしで撃ち放題なので、わざわざ剣やら特殊矢やらを補給する必要はない。ただ一つだけ言わせてもらおうと、剣をつがえて超長距離を百発百中の某弓兵は化け物。

まあそんなのは置いておくとして、とにかくこれのおかげで俺は今まで得意としてきたロングレンジを、独壇場といつてもいいものに進化させることに成功したのだ。結果的に何が起こったのかといえば、誰にも気付かれずに超長距離からの狙撃のみでキルするという、およそ一般的には考えられない所業をも可能としたのだ。今までの俺は遠距離からの攻撃で動きを止めて、その上で接近してどめを刺していたため、接近する一過程が省略できるようになったのだ。これは地味にかなり大きい。しかも、完全なサイレント&ハイドキルができるというのも特徴。何せ、音らしい音といえば弓を放った時の弦が鳴る音くらいだ。そんな小さな音を、少なくとも30mは離れている距離で聞き取れる相手がいいたら知りたいというものだ。

とにかく、俺からしたらかなりこれは楽なことだ。何せ、今まで外したらそれで使い捨てだったところが、矢や剣が飛んできたとなれば一瞬でも固まる。その間に第二射で

仕留めればいいのだからから、後は俺の練度次第だ。その練度もそんなに低いものとは言えなくなってきたので、ざっくり言ってしまうえば二発あればほぼ確実に当てることのできるのだ。

とまあ、解説はこの辺にして。とにかく、俺は相も変わらずオレンジ狩りをやってたわけだ。あれから時間も経って、季節は空きを通り越して冬一步手前みたいなどころまで来ているのだが、俺のやることは一切といてもいいほど変わっていなかった。あれから俺が殺したプレイヤーは数知れない。P o Hの噂は最近聞かないから、俺のカウントではP o Hが殺した人数より、俺が殺した人数のほうが上をいつてもおかしくないところまで来ていた。

(こりや、どっちが化け物かわからないな)

ここがもう一つの現実である以上、俺が殺人鬼であるという事実は変えようがないだろう。しかも、人を殺すという作業を、眉ひとつ動かさないとどこか嫌悪感すらも抱かずに淡々とこなすことができるなど、それはもはや人の形をした化け物と呼んで差支えないだろう。なら、それができる俺は化け物以外の何物でもない。ゲイザーとアルゴにはこれでもかと言うほどの口止め料を積んで、レインとエリーゼに俺関連の情報がいかないようにしている。つまり、彼女らは俺が今どこで何をしているのか、俺がこれまでに何人殺したのか、どんな奴を相手にしたのか、それらが分からないということだ。俺

が、服装だけでなくウィッグや眼鏡も使って変装しているということを知っているあいつらからすれば、俺とのエンカウント確率なんてそれこそちよつとしたレアモンスター並になるだろう。まあもつとも、俺が変装しているという前提で探すから見つかからないのだが。というのも、今の俺の服装は昔懐かしの血色のコートだからだ。

この血色のコート、名前を「カースドブラッディロゼコート」は、第十五層フロアボスドロップのブラッディコートと、セルムからもらった「ロゼコート」を合わせ、さらに強化したものだ。直訳すれば「呪われた血まみれで深紅の外套」である。これを作成したりズに「あんた本当に呪われてるんじゃないの？」と割と本気のトーンで言われたように、かなり物騒な名前である。直後に軽く脳天チヨップして黙らせたが、俺も半分そう思っている。もう半分は、呪われてしかるべきという自虐だ。

こうして行動しているのは、二つほど目的があった。一つ目は、ラフコフ残党の再結集の阻止。そもそも人間がいけないのでは、再結集も何もない。もう一つは、POH自身の殺害。ジョニーはあのまま投獄コースだろうし、どうやら捉え損ねたザザは捕縛、投獄されたようだから問題ないとして、一番危険なやつがそのまま野放しになっているというのはいかに問題だ。あいつは探し出して殺す必要がある。他ならぬ俺の手でだ。あいつとタイマンで勝てるかどうかはわからないとしか言いようがないが、このユニークスキルがあれば、少なくとも先手は取れる。それで死ぬのならそれまでということ

だ。これ以上は巻き込めないというのもそういう理由だ。あいつ相手では、生半可な実力の味方はかえって足手まといでしかない。これがある意味最善手なのだ。俺もあの時から強くなった。剣技スキルコネクト連携も、今となつては成功率が八割を超える。できる種類も多くなった。前回のようにな意をつくことはできなくとも、その威力で押し切るくらいはできるはずだ。

とにかく、今は我慢の時だ。焦らず一人ひとり殺していけばいい。正直に言つて、このだだっ広いSAOの中でPOHを探すなどというのはかなり難しいと言わざるを得ない。見つかったらラツキー程度に思うべきだろう。だからこそ、一つ目の目的を遂行する必要があるのだ。一つ一つでも芽は摘んでいく必要がある。

(一回帰るか)

射撃スキルは確かに便利なのだが、いかんせん集中力が持たない。現実でも弓道とかアーチェリーとかクレールとか、とにかく射撃系の類をやつて居れば多少はなれというものがあつたのだろうが、俺はそんなことをした覚えはない。必然的に弓で狙いを付けて放つというだけでも剣を振るうより神経を使う。まあもつとも、便利な上に合理的であるから使っているだけなのだが、そうでなかつたらとうの昔に切つているスキルの一つだろう。時間は過ぎて、最前線はもう間もなく70の大台に突入するところだ。そして、俺のレベルは相変わらず攻略組並の水準をキープしていた。

(今日はこのまま狩りに向かうか)

定期的なレベリングも兼ねた、最前線でのフィールド漁り。もうすでに全体評価がストップ安の俺にとっては何人からのヘイトなど些細な問題に過ぎなかった。それに、腐つても最前線だから、ただフィールドで適当に勝っているだけでも、かなりレベリング効率は高かったのである。もともと、場所によつてはやはりポップしにくい場所というのもあったのだが、そのあたりはご愛嬌だ。加えて、俺は刀と小太刀の二刀流、しかもその得物も、刀は名刀、小太刀は妖刀という組み合わせ故に、DPSはおそらくこのインクラッドでも一二を争う。狩場になりかけているところを見るや否や、さつくりとそのDPSで一気にレベリング、などということも結構ザラだったのだ。そして、俺は今からそれを実行しようと、転移門のある街に向かって歩き出した。

相変わらず射撃スキルを使ってスニークハントを繰り返していた俺は、何度目かのリザルトメッセージを閉じた。この作業も、もはや慣れたものだ。すぐに次の目標を探しかかるところで、微かな悲鳴を耳が捉えた。

(まったく、お人よしだよな)

自分で呆れながらもそちらへ向かう。幸いなことに、ここは林とはいかないものの木はある。空中機動くらいは俺も習得しているから問題ない。スニークキングに関しては

言わずもがなだ。

手ごろな木に登って周囲を見渡す。リアルだとそんなによくない目も、こっちでは問題ない。すぐに目的の相手を見つけた俺は、普通の矢をつがえて、素早く狙いを付けて放った。狙いは、二人組で攻撃していると思われる片割れ。狙い通り、放たれた矢はそのまま相手に突き刺さった。もともと抵抗していてダメージが入っていたこともあったのだろう、そのまま相手はポリゴン片となった。突発的になぜかいきなり死んだ相棒に茫然としている間に、そのまま第二射をつがえ放つ。今度は少し外れて首筋に突き刺さった。それでようやく遠距離から射撃を受けていると気付いたのだろう、相手の意識がこちらに向く。が、どうやらその襲撃者は「窮鼠猫を噛む」という言葉を知らなかったようだ。自分の襲っていた相手の刃が、自分のとどめを刺すものになったということ、その死んだ相手が知っていたかどうかは、神のみぞ知るといふものだ。そのとどめを刺したのが誰かというのは、考える必要もない。いや、考えたくない。

(何を考えているんだ、俺は。彼女をこんな道へと落としたのは俺だって言うのに)

音を立てずに木から降りる。そのまま立ち去ろうとする前に俺の前に誰かがいた。いや、そんな気がしたただけだろう。こんな偶然があつてたまるか。その幻像の傍を通りすぎようとしたときに

「待って！」

背中にかげられる声。だが、俺は気付かないふりをした。一時期とはいえ、背中を預けた相手だ。今でもたぶん、背中を預けるとしたら、この声の主たる少女以外にはいない。だが、

(俺に、あの子の傍にいる資格はもうない)

俺のような外道に、わざわざ関わらせる理由などない。外道は俺一人で十分だ。

何をするでもなく、私はただ、遠ざかっていく背中に手を伸ばすことしかできなかった。パーティを組んでいたからわかる。あの背中は、「追ってくるな」と暗に言っているのだ。もともとそんなに口数が多いほうじゃない。だから、こうして察することに慣れてしまった。あの、ラフコフ勢力についていったときのような背中を見ては、追うことなどできるはずもない。

「逃がしちゃった、か」

いつの間にか、後ろにはエリーゼさんが来ていた。彼女は今回囷になってくれたのだ。作戦としては、彼女が囷となってPKerをおびき出し、それを殺しにかかるロータス君を捕まえる、というものだった。第一射で遠方からの狙撃を悟った私は、隠蔽スキルを発動させたまま、地面に突き刺さった矢から大体の方向を察知して、コンプリー

トした索敵スキルをフル活用してロータス君をあぶりだした、というわけだ。だけど、結果はこの通り。

「はい……。なんか、追えませんでした」

「ま、そういうもんでしょ。男ってなんでこういうときにこんなに面倒くさいかねえ」
腰に手を当てて呆れたように言うエリーゼさんは、どこか様になっっている。というか、ロータス君にそっくりだった。似たのか似せたのかはわからないが、元が彼の癖であるのは間違いないだろう。

「まあ、仕方ないんじゃないですか、ロータス君ですし」

「まあねえ……」

そう言っただけのため息を一つ。ぼりぼりと頭の後ろを搔いて、エリーゼさんはゆっくりと反転した。

「行きましょ。今日の目的はもう達したわけだし、彼を追いかけるにも情報が少なすぎるわ」

「はい」

そう言われて、私たちは帰路についた。

俺は相変わらず狩りをしていた。このままここで狩りをするというのはいくつか目

的がある。一つ目は、言わずもがなレベリングや素材集め。二つ目は、情報集め。最前線だけあって、様々な情報の宝庫なのだ。これを逃す手はない。三つ目は、最前線に出て来るプレイヤーを狙ったPKer狩り。三つ目に関しては半分エンカウントのようなもののだが、まあ案外これが大事だったりする。まあ、今日のエンカウントは想像以上に意外過ぎたが。

(まさかあいつらが最前線まで出張ってくるとはな・・・)

俺に限った話で考えると、わざわざ最前線まで出張ってくる理由はない。それは彼女たちも共通しているはず。さらに考える必要があるのは、俺の射撃スキルに関して何らか情報が流れている可能性がある点だ。知っていてもやられる類のスキルがこれに当たるが、知っているのと知らないのでは警戒の度合いが違う。必然的に、難易度も段違いになってしまう。まあ、そんなことなど関係ないくらいまでに俺の腕が上がりだしたから、そこまで問題ではないうえに、最悪クロスレンジでぶっ倒すという手がある以上どうにでもなるところはあるのだが。そちらのほうの鍛錬を怠る俺でもないから、腕も落ちていない。

そんなことを考えながら狩りをしていると、システムメッセージが出てきた。どうやらレベルが上がったらしい。さすがは最前線、経験値の落ちる量が多い。だが、その代り消耗が激しいのもまた事実だ。

(今日のところはこのくらいにして帰るか)

そう思つて武器をしまった瞬間に、視界の端で何か動いた。そちらを見ると、なにやら狐とリスを足して二で割つたような小動物がいた。そして、俺はそれに見覚えがあつた。見た瞬間に、大体は察せてしまう程度には。俺はゆつくりとその小動物の傍に行くと、しゃがんで一言だけ言つた。

「案内してもらへるか」

言葉が通じたとは思えないが、その小動物は少しの間まじまじと俺を見て、すぐに背中を向けて歩き出した。何せ小さいので追うのには一苦労すると思つていたのだが、そんなことはなかつた。というのも、そこそこ広い道しか通らないのだ。やがてたどり着いた小さな穴も、あの時とほとんど変わつていなかった。あの時と同じように、装備を解除して中に入った先は、まるでずっと変わらないかのような、神聖とも思える不思議な空間だつた。

(変わんねえのな。変わったのは、俺のほうか)

あれからここまで、本当にいろんなことがあつた。いつの間にかこの手は血に塗れて、振り返ればそこにあるのは屍の山だ。寝れば絶えず断末魔が聞こえ、深くも眠れない日々。それでも、俺はずっとこんな生活を続けていく。それが俺自身の業だからだ。少なくとも、あの時にここに似た空間を訪れたときはこんなことになるとは、本当に夢

にも思っていないかっただろう。

そんなことを考えていると、後ろから足音が聞こえてきた。微かに振り返ると、そこには見覚えのある青年と、その隣には一人の少女がいた。

「よ、セルム。久しぶりだな」

「そうだね、ロータス」

まるで久しく会っていないかった親友のようなやり取りをすると、セルムは俺の隣に座った。

「元氣そうで何よりだ」

「そっちもね。君の様子は聞いてたよ」

その言葉に俺は驚いた。彼はあくまでNPC、しかもこういう限られた状況下でしか会えないようなNPCだ。そんな彼まで情報が回るほど、俺も有名になっていたということだろうか。

「あ、いや、そういうわけじゃなくてね。この子に聞いたんだよ」

そう言つて、隣にちよこんと座っている女性の頭を撫でた。空洞に近いその瞳に何が映っているのか少し気になった。

「心が読めるのか？その子。いや、ちよつと待てよ」

そこまで来て、少し考える。ナーヴギアは、脳波を観測して、それをアバターに反映

させる端末だ。ということは、その中から感情のパラメータを読み取ることも可能なのではないか。また、それをもっと突き詰めれば、今誰がどういう思考をしているのか、というところまで推測することも可能なのではないか。つまり、この女性の正体は——

「プレイヤーの精神面を観測、もしかしたら分析まで行う、AIか」

一瞬NPCと言いつつそうになったが、こんな高性能なNPCがわんさかいてたまるかというものである。ここまで来たら、もはやAIという表現のほうが適切だろう。

「その通り。彼女たちは分析を行うことはないけどね。もともとは、プレイヤーの精神状態を観測、問題のあるプレイヤーの下に赴いてカウンセリングを行うAIだ。」

ヘルスカウンセリングプログラム
H C P、というそうだ。彼女はその二つ目……いや、二人目らしい」

「らしい、つつーのは？」

「彼女自身がぼつりぼつりと漏らす情報をまとめるとそうなる。もつとも、何らかの影響でこのような状態になってしまっているけどね」

「その影響の原因が何か、つてのは……分かってりや世話ねえよな」

「そうだね。精神的な健康に関するプログラムの精神的健康を取り戻すために話すつて言うのも、おかしな話だけど」

「まあ確かにな」

セルムの言葉に、俺のひとつ笑みをこぼす。その顔を見て、セルムの表情は少しだけ

だが沈んだ。

「君も、いろいろあつたみたいだね」

「ああ、まあな。……本来、俺みたいな人間がここに来る資格なんて、もうないのかもしれないがな」

「そんなことはないよ。君は優しいからね。この子達も、君が危ない人じゃないとわかっているからこそ、こんな風にいるんだよ」

確かに、俺たちの周囲にはいつぞやと同じように動物がたくさんいた。兎は目を閉じて蹲っているし、猫は丸くなっている。リスは手に持った木の実を頬張っているし、木にとまっている鳥たちはこちらをじっと見つめたり、落ち着かないように体をぶるりと振るわせたりしている。どれも、警戒している様子はなかった。

「俺は何人どころか何十人と人を殺した極悪人だぞ？そんな人間が優しいわけねえだろ」

俺の言葉に、セルムはゆっくりと首を振った。

「違うよ、君は優しい。そうでなければ、とつくの昔に、あの長髪の少女や、君の知り合いらしいあの女性の傭兵を巻き込んでいるはずだろう？」

「ただのエゴだよ」

「優しさなんてたいていそんなものだよ」

まるで論すように言われたセルムの一言に、俺は言葉を失った。そう言われてみれば、そんなのかもしれないと思ってしまう。

「・・・本当にお前って、不思議なやつだよな」

「変わってるってよく言われるよ」

「なんとなくわかる気はするがな」

いつの間にか、俺の肩には先ほど俺を案内した小動物がいた。ゆつくりと指で頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。

「結構人懐っこいのな」

「そんなことないよ。今でこそそうだけどね。前会ったとき、僕があのコートを着たら似合わないって言われたって言ったろ？」

「あー、そんなこと言ってたなそういや」

「その論評をしたのが、その子の元の飼い主でね。その子も、最初は嘔まれたって言ったよ」

「へえ・・・。お前も丸くなったのな、テト」

ぼろっと思わず漏れた俺の一言に、セルムが目を丸くした。

「その子を知っているのかい？」

「え？」

一瞬、驚いたことに驚いたが、すぐに原因に思い至った。大方、さっきの一言だろう。「ああ、名前ね。実を言うと、俺が好きだった本にテトに似たやつがいてな。そいつの名前がテトなんだ」

「なるほどね」

そこまで喋ったところで、俺は場所を、例の少女の前に変えた。その目は完全に空洞で、何も考えていない・・・いや、何も考えられないような顔をしていた。

「この子、名前はなんていうんだ？」

「ストレア、って言うらしいね。意味は分からないけど」

「ストレア、ね」

ストレスケアとかでストレアかな、などと少々余分なことを考えながら、俺はストレアの目を覗いた。その目は相変わらず空洞で、吸い込まれそうなほどだった。

「そういうえば、ストレアはどうして俺に目を付けたか、って言うってたか？」

「言っただけはいた、けど意味が分からない」

「とりあえず聞かせてくれ」

「一言、『白の花畑』と。そう言っていたよ」

「・・・なるほど」

一瞬俺も意味が分からなかったが、すぐに理解した。

「たぶん、それは花言葉だろうな。俺は、ちよくちよく白い花が咲く花畑に足を運んでたから、おそらくそれを指しているんだろう。でも、なぜそれが理由となるのか、ということまではわからないが」

「なるほどね」

あの花の花言葉は「苦難の中の力」で、他の意味はなかったはずなのだが、いったいどういう意味なのだろうか。確かにここまで平穏無事だったかと言われれば、決してそうではないという回答になるのだが、そこまでの逆境だろうかというところもまた事実だ。

「ま、とにかく、よろしくな、ストレア」

「・・・よろしく」

やはり、声もどこかうつろだ。カウンセリングプログラムということは、言語モジュールもより高度なものが採用されているはずなのだが、こんな状態であるということとは何かあったのかもしれない。

「何らかのバグの蓄積かな？ それか、あんまりにも対象が多すぎてプログラムエラーを起こしたか、つてとこかな。どちらにせよ、正常な状態ではないことは確かだよな」

「暫く僕のほうで匿うことはできるけど、どうする？ 一度誰かに相談すべきだとは思っていたんだけど、ここまでくる人は少なくてね」

その言葉を受けて、俺は暫く黙り込んだ。

「このまま放っておくわけにもいかないけど、いまGMコール使えないしなあ……。悪いセルム、頼むわ」

「うん、お安い御用だよ。どうせこんな生活だから、食料とかも傷めることのほうが多くてね」

「そか、それならよかった」

それだけ言うと、俺は立ち上がった。ここは確かに居心地がいいが、だからといってずっと居座るわけにもいかない。

「行くのかい？」

「ああ。また来るよ」

「待ってるよ。この子たちも、君が来るのを楽しみにしているようだ」

「・・・そか」

一瞬間が空いたのは思わぬ言葉による驚きだった。

「またな」

「ああ、また」

それだけ言うと、俺はその場を去った。

36. 凶兆

それからさらに時は流れて、最前線は74層まで行っていた。想像以上のハイペースなので、俺もレベリングがかなりきついなとなっていた。ゲイザーからの情報によると、レインは攻略組に復帰して完全に最前線で戦っているらしい。エリーゼはエリーゼで傭兵をしながら、その収入の一部を第一層の教会孤児院——とゲイザーが呼んでいたので俺もそのままそう呼んでいるが——に寄付しているらしい。どちらか会わなくなつてから相当久しい。元氣そうだということが分かるから一種の安心はあるが、それだけでしかないのもまた事実だった。

(・・・他人の心配してる場合じゃないろうに、俺ものんきになつた)

暫くこんな生活をしてきたから気付いたが、俺も賞金首扱いのようなものになつていられるらしい。もつとも、襲つてきた相手は尽く返り討ちにしたので、もう襲つてくる相手自体がほとんどいなのだが、警戒する必要があることには違いない。

「ま、どいつもこいつもスニーキングが下手過ぎてバレバレだけど・・・なー」

最後の一言と共に、後ろから接近してきた襲撃者の攻撃を、腰に供えていた小太刀ではじき、いなす。当の襲撃者は気づかかれていたことに驚いたような表情を浮かべたが、

俺からしたら、

「尾行下手過ぎ、殺気殺せなさすぎ、ポイント悪すぎ、加えて音を殺せなさすぎ。暗殺としては落第点もいいとこだぞ」

今の俺はまた変装をしているから、分かり辛いことは認める。というか、そうでなければ変装の意味がない。が、街中からずつとじろじろ見ているわ、一定間隔でずつとついてくるわ、フィールドに出たら出たで隠蔽スキルを発動させっぱなしにしてずつとにらんでくるわではさすがに気づく。加えて、時折ガサリと音を立て、しかも襲撃ポイントがちよつとした林に入ってから少ししたところという、殺しに行くから警戒していただくさいと言わんばかりの行動。その程度で俺を殺そうなど片腹痛いというものだ。

「で、どうすんの？俺の実力を知らないわけじゃないでしょ」

最近射撃スキルの訓練ばかりしているとは言えど、近接の訓練を怠っているわけではない。俺は近接も十分に辛口だ。少なくとも、そんじよそらの奴らでは、俺には文字通り傷一つ付けることすら許さないほどには腕を上げている。加えて、俺は対人戦闘のスペシャリストといってもいいほどに対人戦闘経験を積んでいる。対人戦闘という点において、俺の右に出るのはおそらくP o Hくらいのもだろう。

「二応言っておくけど、ここで大人しく引き下がるって言うんなら、もう追わない。ただ、——二度目はないと知れ」

一氣にトーンを落とした俺の最後の一言に、相手は一つ舌打ちをして、ゆっくりと街へ戻っていった。その光景を見て、俺はゆっくりと小太刀を腰へとしまった。

(まったく、いい加減にしてほしいぜ)

確かに元をたどれば俺のせいだが、いい加減諦めというものを知ってほしいというものである。こうして迎撃警戒をする身としても、あまり精神衛生的によろしいものではない。しかも、今日はこれから迷宮へ向かう予定で、ただでさえも無駄な消耗は回避したかった。今日は大人しく引き下がってくれたからよかつたものの、そうでなければいったん引き返して回復するか、転移結晶で無理矢理圏外村にでも移動させて補給させるかといった具合なので、それなりに大変なのだ。とにかく、今日の予定に変更はない。そのまま俺は補給のために街に戻った。

街に戻ると、転移門の近くに見知った黒ずくめを見かけた。ファツションとか何それおいしいのと言わんばかりの年がら年中黒ずくめの少年剣士を、俺が見間違ふことはない。だが、どこか様子がおかしい。具体的に言うところ、誰かを待っているようだった。それに、ここは見つかるべきではないだろう。隠密行動は物事を平穩に終わらせる手段の一つとは誰の言だったか、今ならそれが言い得て妙だと思えた。

やがて転移門が光を発すると、そこから一人の少女が飛び出してきた。一瞬捉えたそ

の姿から見るに、その本人はこんなへまをやらかすようなドジっ娘じゃないはずなのが、いったい何があったのだろうかと考えている間に、もう一度転移門が光り、今度は男が出てきた。その男は、俺が良く見知った顔だった。

「アスナ様、勝手なことをされては困ります！ギルド本部までお戻りください！」

「嫌よ！今日は活動日じゃないでしょ!?!そもそも、なんであなたは私の家の前で張り込んでるのよ!?!」

「私はアスナ様の護衛です。それには、あなた様の自宅の監視も——」

「含まれないわよ!!」

思わず怒鳴り返したアスナを責める人間などいない。そして、俺はその男を知っている。

(こいつ、ストーカーにまでなり下がりがつたか)

もとはといえば俺が原因の一端を担っているところはあるのだが、正直なところ、ここまでこじらせるとは思ってもみなかったというのもまた事実だ。

どうやら今日パーティを組む予定だった少年剣士とデュエルをすることになったようだ。だが、正直なところ結果は見えている。俺も一応、あいつに対人戦闘の心得は教えたつもりだが、それはあくまで手ほどきレベルだ。あの少年レベルと当たれば分が悪いことは明白だ。

俺が想定していた通り、戦いは少年の勝利で決着がついた。それだけ見届けると、俺は迷宮に足を運んだ。

迷宮に足を踏み入れて暫くして、俺は戦闘音を聞いた。すぐに隠蔽スキルを発動、そのままゆつくりと伺うと、そこには深緑色のアーマーで統一した集団がいた。指揮官と思われるプレイヤーを筆頭に、まさに一糸乱れぬといった様子を見せる相手を、俺は思わず二度見した。

(まさか、軍か・・・?)

軍は確か、第25層ボス戦で攻略集団が事実上壊滅した後、長らく攻略には乗り出していなかったはず。これより少し下で力を蓄えているという情報はあったが、最前線付近までは出てきていなかったはずだ。まさか、いきなり最前線に放り込んだとでもいうのか。そんなのはただの自殺行為だ。

(目の前であの大集団が死なれるときさすがに気分が悪いよなあ。・・・ありえないとは思うけど)

よもやあれほどの集団なら、余程の強敵か消耗がない限り、瓦解することはないだろう。ここに来るといことはそこそこのハイレベルプレイヤーのはずだし、そのくらい

の訓練は受けているはずだ。だが、いくら戦士が屈強でも指揮官がそのレベルまで到達していなければ意味がないし、その逆もまたしかりだ。その二つが高い水準で実現して初めて、この場を生き抜くことができる。最前線とはそういう場なのだ。ましてや、急ごしらえの部隊が生き抜くことなど至難の業だろう。

(しかたない、か)

本来、得物の横取りというのはオンラインゲームではマナー違反に当たる。が、もうすでに俺の評判などストップ安なのだ。これ以上落ちることなどなからう。そう決意した俺は、隠蔽スキルを発動させたまま、軍の後ろを追った。

「やああああっ!!」

裂帛の気合と共に、私は光る左の拳を振り抜いた。自分の体が制止する寸前、意識を右手の剣に移す。

(・・・)・・・!

ソードスキルの硬直が発動する寸前のタイミングで、光った右手の剣が振り下ろされる。そのまま手が動き、左下からの水平斬り、右上からの水平斬り、左上からの垂直振り下ろしと繋がった。最後に放ったソードスキル“バーチカル・スクエア”に、相手の

蜥蜴騎士は完全にHPを散らし、ポリゴンのかけらとなった。硬直が抜けたことを確認して、剣を鞘に納めた。

私は、今日も迷宮区に潜っていた。でも、やはりキリトさんたちのようにはうまくいかずに、ずっと袋小路に入ってばかりだ。アインクラッドが円錐状になっていて、上に行くにつれてフィールド面積が少なくなっていくっていても、迷宮区的面積は変わらないので、かなりこれだけで消耗することになった。しかも、今日はそんなに朝早く出たわけでもなかったたので、これだけでもうそこそこいい時間だ。と思つた矢先、安全区画があった。

(ちようどいいや、一休みしよう)

それだけ考えると、私は安全圏内でゆつくりと腰を下ろした。あのレベリングの影響で、もうすでにレベルは100の大台を突破している。そんな私でさえ、ソロで最前線に潜るのは少し辛く思えてくるほどに、最近は消耗を強いられていた。今持つてきている食べ物と飲み物も、全体的に少し甘めなものを優先的に選んでいた。疲れたときには甘いものという固定概念は、なかなかどうして抜けないらしい。

ある程度補給を終えたところで、遠くから声が聞こえた。ふとそちらを見やると、ふたりのプレイヤーがまさに猛ダッシュでこちらに向かつてきていた。もうそれはそれは、漫画なら後ろに砂埃がまきあがって居そうな雰囲気だ。最初は誰なのかさっぱ

りわからなかったが、やがてこちらに近づいてくると、誰なのかは分かった。その二人組は、勢いそのままに安全区画に転がり込むと、ふたりして肩で息をしていた。

「・・・何してるの、キリト君、アスナさん」

割と本気の問いかけに、二人は顔を見合わせて、同時に噴き出した。その笑いが私にも移って、暫く私たちは笑いあった。

ひとしきり笑いあって、キリト君とアスナさんはここに至るまでの事情を説明してくれた。特に、顔だけ見てきたというボスは確かに厄介そうだった。

「特殊攻撃の種類によるけど、タンクがたくさんほしそうな敵だね」

「ああ。盾持ちが10人くらいは欲しいな」

その言葉に、アスナの目が細くなる。それに気づいたキリトが「な、なんだよ」と声をかけると、アスナさんはそのまま唐突に、

「キリト君、何か隠してない?」

といった。考えもなくいきなりそんなことを言う人ではないので、「どうしてですか?」と横から一言言うのと、アスナさんは理由を説明しだした。

「だって、片手剣の最大のメリットって楯を持つことですよ? 短剣とか、私の細剣レイピアとかなら、スピード重視のスタイルで持たないって人もいるけど、キリト君はSTR—AG I型で、そういうわけでもないし。・・・怪しい」

最後の一言と共に、さらに目が細くなる。微かに冷や汗を流しだしたキリトさんは、傍目から見ていても明らかに何か隠していた。

「まあまあ、私みたいに体術を混ぜる人もいることだし、スタイルは人それぞれですよ、アスナさん」

「・・・それもそうね。それに、人のスキルを詮索するのはマナー違反だし。」

そろそろ時間もいい時間だし、お昼にしましょうか」

それだけ言うと、アスナさんはメニューを操作しだした。その間にアイコンタクトで（すまん、助かった）（このくらいいいですよ）といったやり取りをする。やがて、バスケットがアスナさんのストレージから出てきて、その中身はサンドイッチがたくさん入っていた。

「わあ、おいしそう・・・!」

「レインちゃんも食べる? ちょっと多めに作りすぎちゃったから、少しくらいなら全然大丈夫だし」

「いいの!」

「いいって。ほら」

一個こちらに差し出してくるその顔を見たら、断るといふ選択肢は消えた。最初からおいしそうだから食べてみたい、という感情があったことは否定しないが。ちなみにキ

リト君はもうすでに一つ食べていた。

「おいしー！」

「これ、ちよつとした売り物になるぞ」

一口食べたときに、私は思わず驚いていた。アインクラッドのNPCが販売している食事は、どこか物足りないというようなものが多かったものだから、これは驚きといつてもいいほど美味しかった。キリト君の言葉も納得だ。私たち二人からの褒め言葉に、アスナさんは胸を張った。

「ここまでの研鑽の成果よ。味覚エンジンを解析して、調味料を自作したの。例えば、これは」

それだけ言うと、手の中には何やら液体が乗った小皿があった。色は何とも言えないが、そこにあるものの味は、

「マヨネーズだ！」

紛うことなきマヨネーズだった。

「あとこれは」

そう言つて、もう一つ出てきた小皿のものを指先につけて舐めると、

「醤油だ！」

これまた疑う余地なく醤油だった。

「すごいですー！」

「すげえよアスナー！」

思わず驚嘆して私たちは声を上げた。キリト君に至っては、興奮したこともあつてか、思わずといった様子でアスナーさんの手を取った。突然手を取られたことに驚いたのか、アスナーさんが赤面する。その光景を見て、思わず私はにやりと笑ってしまった。

「・・・ほほうー」

今鏡を見たらさぞかし悪い顔をしているんだろうなー、などとぼんやり思考していると、遠方から足音が聞こえた。表情を引き締めて、必要とあらばいつでも抜剣できるように構えると、近づいてきたのは頭にバンダナを巻いた、武将のような赤い鎧を着た男を先頭とした集団だった。そのメンバーを私は知っていた。

「クライナー！」

先ほどのラブコメの波動はどこへやら、キリト君が気付いて声をかける。向こうはすでに気付いていた様子で、軽く片手を上げた。

「ようキリト。元気そうだな」

「そつちこそ、相変わらず冴えない顔してんな」

「そいつはひつでえなキリトよ・・・」

そこでクライナーさんが固まる。その視線は私とアスナーさんをいたり来たりしてい

る。と、突然クラインさんが気を付けをして、

「く、くくクラインと言います24歳独身——」

と、何やら訳の分からないことを口走ろうとしたところで、キリト君の見事なボディーブローがHPを減らさない程度の威力で炸裂。鳩尾に入ったようで、クラインさんが悶絶した。

「ひ、ひでえよ、キリの字・・・」

「いや、今のはリーダーが悪い」

風林火山——クラインさんたちのギルドだが——のメンバーの誰かがいれたツツコミに、周囲がどつと沸いた。お互いの状況などを確認していると、遠方からやけに揃いすぎた足音が聞こえた。

暫く後を付けると、軍の連中は小規模集団に会った。その一部は俺にとつても見知った顔だった。

(アスナと、キリトと、レインと、あのバンダナ武者みたいなやつはクラインつつたっけ? てことは、風林火山のメンバーかな)

隠蔽スキルを発動させたまま、俺はうまく距離をとつたままにしていた。俺のコンプ

リートした隠蔽スキルと、索敵スキルコンプリートでの索敵範囲を考えて、ギリギリ引つかからないだろう範囲で様子をうかがう。どうやら、何か取引をしているようだ。金銭的な取引をしている様子がないことから、おそらく、

(マップデータの譲渡、か。いくらなんでも気前良過ぎねえ?)

これでも一応、過去には攻略組の一員として迷宮にほぼ毎日のように潜っていた身だ。マップピングという作業の地味さと大変さはある程度分かっているつもりだ。ここまで尾行して様子を見たところ、軍の連中はマップピングができていない。ということはおそらくあの攻略ジャンキーなあいつからマップデータのほぼ全土といってもいいマップデータを譲渡されたと考え——

「私の部下はこの程度でへこたれるような軟弱者ではない!!」

と、突然、距離をとっているはずなのにはつきりと聞こえる声量で指揮官らしき男の声が聞こえた。俺としては、レインの様子も少しは気になるのだが、

(・・・いやな予感がしやがる)

軍の尾行を続行すべきか、かなり迷っていた。何より、俺もマップピングが終わっていない身なので、高確率であいつらの索敵範囲に入る必要がある。

(仕方ねえか、あんまし使いたくないけど)

うまく物陰に隠れると、俺はさっくりと装備を変えた。使うのは、リズベットに頼ん

で作った、隠密ボーナスがかなり高い値で付く装備だ。この装備と俺のフルコンプした隠蔽スキルがあれば、並大抵の索敵スキルは逃れられるはず。範囲に踏み込んで、サクツと軍の後を追った。念のため振り返ったが、全員が気付いていないようだった。

そのまま尾行を続けると、何度かモンスターと遭遇した。遠くの敵は俺が狙撃キルしまくったからいいとして、近くにポップしてもそんなパニックを起こすこともなく、さつくりと討伐していった。このあたりは腐つてもハイレベルプレイヤー集団ということだろう。ちなみに俺は装備を変更していなかったため、その高い隠蔽スキルをフル活用して、細かい指示が聞こえる位の範囲で距離をキープしていた。どうやら、索敵スキルフルコンプの奴はいないらしく、気付かれた様子もなかった。だが、問題はこの後。集団は迷宮の最奥に到達した。迷宮の最奥に鎮座するもの、それはフロアボス部屋だ。普段なら扉を開ける程度が関の山だが、ここで指揮官は信じられないことを言い出した。

「これから我々は、フロアボスの討伐に取り掛かる！強敵だが、成功した時の利益は計り知れない！心してかかれ！」

(なっ・・・!?)

大声を上げる寸前で止めたのは、我ながら奇跡的に近い。この指揮官は今の状況が見えているのか!?ここまで迷宮区を進んできて、メンバーは例外なくいつてもいいほど

が目に見えて消耗している。加えて、レベルが最高にも達しておらず、ボスレイドに比べればよっぽどな小規模集団で、フロアボスを偵察ではなく討伐するだど!? 確かにできれば海老どころか釣り針だけで鯛を釣るようなものだが、こんなのは勇気や勇敢などではない、ただの無謀な特攻だ。その踏ん切りすらわからなくなつたか!?

一昔前の俺で、しかもなおかつこんな状況でなかつたなら、俺はあの指揮官を膝詰めで小一時間説教していただろう。そのくらい、この行為は馬鹿げていた。だが、今の俺の状況では、飛び出していったところで逆効果だろう。俺はここで、指をくわえて見ているしかない。

(いや、そういうわけでもないか)

俺に許された、一つの方法。だが、うまくいくかどうか。

(・・・やってみるか)

俺が決意を新たにしたとき、指揮官がボス部屋の扉を押し開けた。

「まさかあいつら、ボス部屋に突撃とかしてないよな・・・」

「心配しすぎだぜ、キリの字。いくらなんでも、あの状況でフロアボス戦はねえって」

「・・・だよな」

クラインの言葉にも、キリト君の表情は明るくならなかった。私も、あんな状態でのボス戦などというのはありえないと思っている。人数も状態も決していいといえない状況で、人数と状態がベストに近い状態でも危なくなることのあるフロアボス戦を仕掛けるなど、正気の沙汰とは思えない。だが、私にはさっきのコーバツツと名乗った指揮官の言葉が耳に残っていた。

『私の部下は、この程度でへこたれるような軟弱者ではない!! さっさと立て貴様ら!』

あの様子に、自分たちの実力を過信している様子はなかった。最前線をなめているというのはあるが、それに加えて少しの焦燥と恐怖があつたような気がする。恐怖はともかくとして、焦燥はいつたいどこから来るものなのかというのかはわからないけど、なにせよいい予感はない。

「念のために奥に向かつてみよう。なんか、嫌な予感がある」

「そうね。なんとなくだけど、よくないことが起きるような——」

「うわあああああ」

アスナさんと私がそう言ったところで、遠くから悲鳴が聞こえた。

37. 邂逅

遠くから聞こえた声に、その場にいた全員が反応した。

「今のは!？」

「ボス部屋の方向だ!」

「キリト!・・・ちっ、クソツ!」

特に反応が早かったキリト君、アスナさん、私が先行する。それに一步遅れる形で風林火山が追従するが、最初の一步が遅れた影響で湧いたMob複数につかまってしまった。

「ごめんなさい、先いきます!」

「おう、頼んだ!」

戦闘に入ったクラインさんにそれだけ言うと、私も二人の後を追った。

ボス部屋は混乱の中にあつた。集団はぐちゃぐちゃで、もはや気力だけで何とか立っているような状態のプレイヤーがほとんどだった。

「まだ誰も死んでない・・・!」

とつさに人数を数えたのだろう、アスナさんが呟く。

「何やつてる！早く転移結晶を使え！」

「結晶が使えないんだ！」

キリトさんの叫びには、悲痛な叫びが返ってきた。

（そんな、結晶無効化空間?!?ボス部屋で?!?)

結晶無効化空間。それは、文字通り結晶系のアイテムの一切が使えない区画を示す。今まではトラップ部屋などでしか見かけられなかつたギミックだが、それがとうとう一瞬の判断を要するボス部屋で採用されたということか。しかも、確認しやすいようにだろう、他者からも可視化されたHPバーは、黄色どころか何とか生きているような、赤でもギリギリのラインのプレイヤーが何人もいた。

「我々解放軍に撤退などという文字はない！戦え！戦うんだ！」

コーバッツが手を前に出す。その声にこたえるように、ふらつきながら一人、また一人と立ち上がる。

「やめて！もう限界なら戦っちゃ——」

「全体、突撃！」

「馬鹿、やめろ!!」

私の言葉など聞こえないといったように、コーバッツが指示を出す。その指示にキリ

ト君がすぐに打ち消すように大声を上げた。が、意味はなかった。それに、ボスの目が一瞬ながらも細まったような気がした。そのまま大きく息を吸い込むと、ものすごい勢いで吐き出す。

「ブレス……!」

それで、集団は尽く地に臥せた。ボスの魔の手に一人がかかろうとしたとき、ボスが不自然に動きを止めた。その一瞬は確かに時間稼ぎにはなったものの、それだけだった。一步一步近づいてくるその様は、まさに悪魔に思えた。

「悪い、遅くなった!……ッ……いつは……!」

遅れて到着した風林火山の面々も、あまりの惨状に言葉を失った。

「戦わ、ねば……!」

もう限界だというのに、何とか立ち上がろうとするコーバツツ。その時、私の耳が微かな音を捉えた。その時になって初めて、私はアスナさんの様子がおかしいことに気付いた。

「駄目ええええええ!!」

「アスナ(さん)!!」

私たちの制止も聞こえない様子で、その高いAGIをフル活用して一気に肉薄すると、ソードスキルを叩き込んだ。だがそれだけでは気を引く程度しかできず、アスナさ

んはすぐに吹き飛ばされてしまった。

「アスナ!!」

「キリト君!」

「……あーもうどうにでもなりやがれ!」

再び叫んでキリト君が突っ込んでいく。それに追従する形で私とクラインさんが突入した。なし崩し的に風林火山の面々も巻き込まれる形でボス部屋に突入した。

感覚的に、今すべきことが何かというのはわかっている。今私たちがすべきなのは、ボスのヘイトを取り続けること。そうすれば、クラインさんたちが軍の人たちを安全圏まで離脱させてくれる。キリト君もそれが分かっているから、深追いをしていない。アスナさんと絶妙なタイミングでスイッチを繰り返して、二人でヘイトを取り続けている。何とか私もうまくヘイトを稼いで、ボスの目をこちらに向け続けた。

だが、ここで異変が起こる。ボスがその巨体相応の大きな足を垂直に振り上げたのだ。そこから来るのは、

（踏みつけ……でもこの距離じゃ!）

直撃を回避できたところで、振動のデバフは避けられない。しかし、さらなる異変が起こった。ボスが突然転んだのだ。だが、すぐに立ち上がる気配を見せた。

（もう持たない、けど……!）

今私たちは、ボスと部屋の中心近い所で戦っている。対して、軍のパーティは部屋の奥にいた。つまり、脱出するには大回りするか、ボスの近くを通るかの二択しかない。その時だった。

「アスナ、レイン、クライン！悪い、10秒だけ時間稼いでくれ！」

「了解！」「分かった！」「おうよ！」

その言葉を聞いた瞬間に、なぜか私は頭の中に、弓に似た何かを持った彼の姿が思い浮かんだ。このソードアートオンラインにおいて、遠距離攻撃スキルは存在しない。ならば、彼の背負っていたあれは、果たして何だったのか。もしそれが、弓に似た何かではなく、弓そのものだとしたら。そして、そのような特殊なスキルがほかにもあるとしたら。そんな思考は一瞬だけ浮かんで、すぐにラッシュを叩き込むことに意識が傾いた。アスナさんとタイミングを交互にする形にして、剛直拳を繰り出す。その硬直が発生する寸前に、剣で「ハウリング・オクターブ」を繰り出した。剣技連携は、最初はなかなかできないかったが、最近になってようやく少しタイミングをつかめてきた。彼のように変幻自在に繰り出すことはさすがにまだ無理だが———というかそもそもあれだけ剣技連携のレパートリーがある時点で異常なのだが———一部なら成功率もそこそこといったところだ。これだけがまだ限界だが、これだけで今は十分だった。私と入れ替わる形で、クラインさんが浮舟から刀系ソードスキル「緋扇」を繰り出す。それだけ

で、十分だった。

「よしーもういいぞー！」

それだけキリト君が叫ぶ。私も硬直が抜け、キリト君がいる位置から考えて、道を開けるように動く。

「スイッチ!!」

キリト君の号令で、クラインさんとキリト君がスイッチする。キリト君は襲い来る斬馬刀を剣で軽くパリイして、そして——新たに背中に現れた、二本目の剣でボスの巨体をのけぞらせた。その後、振り下ろされた斬馬刀を、二本の剣を交差させて受け止めると、キリトさんの両手の剣がほぼ同時に輝いた。

「な・・・」 「・・・んじゃ、ありや!?!」

クラインさんの言葉は、おそらくその場にいた全員の心情を代弁していた。

そもそも、SAOにおいて、両手に剣を持った状態でソードスキルを発動させるということは不可能なのだ。システムが両手に剣を持つ状態をエラーと判定してしまうため、一切のソードスキルが発動しなくなってしまう。無論、盾系のソードスキルや、小太刀と刀、マイナーどころでは細剣と短剣（この場合細剣のみソードスキル発動可）といった例外は存在するが、そのくらいだ。少なくとも、片手剣を両手に持つてソードスキルを発動させるなどという話は聞いたことがない。

外野の驚愕などどこ吹く風、キリト君は次々と連撃を叩き込んでいく。剣技連携の断続的なそれではない、明らかにシステムに設定されたであろうその動きはまるで星屑のごとく。それに怯まず、ボスも攻撃を繰り出す。お互いの攻撃が交錯し、キリト君のHPとボスのHPが減っていく。最後の一撃を前に、両者が交錯する——瞬間、ボスが一瞬だがのけ反り、キリト君の最後の一撃が炸裂した。ワンテンポ遅れて、ボスがその体をポリゴンと変え、虚空に“*Congratulations!!*”の文字が現れた。それを確認すると、キリト君はどうと後ろに倒れ込んだ。

それを確認すると、私はすぐにボス部屋の外に飛び出した。これまでの一連の流れを見ると、絶対にあの人が絡んでいるはず。そして、あの人性格からして、こちらにいるはずだ。

(なんとかなった、か)

ボス部屋の外で、俺は弓を背中に背負った。ボス戦前半は軍の連中を援護する形で攻撃し、キリトたちがボス部屋に入ってから、ボス部屋の外からちまちまと矢を射ていたというわけだ。こんな身の上になったことで、使えるものは何でも使った超立体機動などとうの昔にマスターしている。壁キックからの曲射——上に矢を放って真下に近い位置に時間差で攻撃する俺オリジナルの技だが——や、壁走りしながらの射撃、

ボスを蹴っ飛ばして真下撃ち、前転からのほぼノールックでの後方射撃などなど、仮想空間ならではとしか思えない変態機動を大量にやりまくった結果、何とか死人を出さずに済んだ。軍の連中からしたら、俺でなくとも誰かがいる位には気付いたはずだが、俺の高い隠蔽スキルと、高いハイディングボーナスがつく装備、そして鍛え上げたAGIのおかげで、俺の存在は気づかれずに済んだようだ。もつとも、キリトたちが殴り込んでからは、うまくボス部屋を離脱することでヘイトを完全消去しつつ、遠距離から攻撃を加え続けるという、いやがらせ以外の何物でもないような行動を繰り返していた。

とにかく、状況が終了した以上、俺にできることは一切ない。ここからはさっさと立ち去るのが一番いいだろう。踵を返して引き返した時だった。

「待って!!!」

あまりにも必死なその声に、思わず俺は足を止めてしまった。ゆっくりと振り返ると、そこには膝に手を置いて肩で息をしている少女がいた。

「待って……!」

まだ息が整っていないというのに、こちらを引き留めようとする少女の姿に、俺は一つ目を閉じ、限界まで冷徹な光を持って少女を見つめた。

「……何しに来た」

「それは、こっちの台詞……!そっちこそ、こんなところに用事はないはずでしょ……」

!?!?なんで!?!?

「俺はただ、レベリングに来てただけだ」

「嘘ばかり!?!?どうしてそんなことを言うの!?!?」

「本当のことを言ったところで、大した意味はあるまい」

それだけ言い残して立ち去ろうとした俺に、少女はさらに声をかけた。

「なら本当のこと言つてよ!?!?ほとんど変わらないのなら、言つても言わなくても同じでしよ!?!?」

その言葉に、俺は言いようのない苛立ちを覚えた。半ば無意識に、俺は頭を片手で掻きむしっていた。

「……どうしてそこまでして関わろうとする?」

低い声で問いかける。突然降つてわいたこの苛立ちを押さえたくて仕方ないという思いが、一種の衝動となつて俺を焼き焦がした。

「俺は大量殺人者だぞ? 関わらないほうが得なことだつて大量にある」

「どうしてつて……」

そこで一回、少女は言葉を切った。一回伏せ、再度上げると、勢いのままといつてもいいほどに声を上げた。

「心配だからに決まつてるでしょ!?!?なんで今更そんなこと言うの!?!?一緒に攻略してき

て、背中を預けて！そうして戦ってきた相手がこんなことになって！今までみたいに笑わなくなつて！それでも心配するなつて言うの!？」

「ああそうだ！それがお前のためだ！」

売り言葉に買い言葉とばかりに声を上げる。今になって、はつきりと俺の中の感情が変化した。今までの苛立ちではなく、はつきりとした烈火のごとき怒りに。

「背中を預けて戦つた!?!確かにそうだろうよ。でもそれだけだ！お前に俺の何が分かる！」

堰が切れたらあととは止まらない。

「俺みたいな人間に好き好んで関わりたくないなんて他に知られたら絶対面倒なことになる！俺は必要なら、何人だろうと、何十人だろうと何百人だろうと、たとえこの世界に生きる全員だろうと殺す覚悟がある！でもな！そんなのは俺一人で十分なんだよ！もうすでに何人も殺したから分かる、この道は想像を絶するほどに地獄だ！なんでわざわざそんな地獄に飛び込もうとする!?!」

止めなければならぬ。分かっている。相手の目だけでなく、頬にも光るものがある。分かっている。そもそもここは安全な場所ではない、すぐに移動する必要がある。分かっている！でも、止まらなかつた。こんなことは初めてだった。

「お前までこんな地獄に来る必要はない！必要がないなら来るな！それがお前のためな

んだよ！なんでわからない！なんでいつまでも関わろうとする！?! いい加減吹っ切れよ!!」

切れた堰から溢れるものが無くなって、ようやく俺の言葉は止まった。そこまで来て、ようやく俺は俺の制御を取り戻した。

「・・・頼むから、もう俺に関わろうとするな」

それだけ言うと、俺は今度こそ踵を返した。言いたいことは言い切ったはずなのに、不思議と心は晴れていない。むしろ、苛立ちは募るばかりだった。

私は泣いていた。あれほどまでに悲痛な叫びを上げるロータス君を見るのは初めてだった。でも、初めて見せてくれた心のうちだった。それに私は涙していた。その隣にいられないという事実にも。

(そんな地獄の中で、一人で背負わないでよ・・・)

今は誰にも顔を見られたくない。その思いから、私は顔を手で覆った。今どんな顔をしているのかはわからないが、ぐちゃぐちゃであることは確かだ。

(決めた。——あの人の傍に立つ。どれだけ時間を必要としても)

あの人は、本来は優しいのだ。それに、そんなに精神的に強いわけでもない。一人で背負い続けたら、きつとつぶれてしまう。その決意を固めた直後、周囲でモンスターの

ポツ音が出た。

「悪いけど、今私、すごく機嫌が悪いの」

通じないと分かっているが冷たく言い放ち、抜剣する。神速の踏み込みと共にラウンドフォースを使い、敵を打ち上げる。直後、右足を強く踏み込み、左手は拳にして脇腹に持つてきた。一瞬の溜めを作り、落ちてきた相手に添え、また更にそこで一瞬溜める。直後に振り抜かれた強力なアッパーは、先ほどの比ではないほど大きく敵を吹き飛ばし、ポリゴン片へと変えた。体術の最上位ソードスキルである「絶拳」は、正直いち雑魚敵相手にふるまうにはオーバーキルにもほどがある大技だが、今ならこのくらいしてもいいだろう。実質単発技で、しかも硬直が短めな体術スキルであることを考えると長すぎるとしか思えないほどの硬直を抜け、振り返りざまに剣を左から振りつつ斬りぬける。右手で片手の正眼に剣を置くと、相手と正対した。

俺は迷宮区を抜け、片っ端からフィールドのMobを狩っていた。だが、いつまでたつても心の中のものもやもやは晴れなかった。むしろそれは増すばかりで、それが余計に俺を苛立たせていた。

(いったい何だつてんだよ)

あえて射撃スキルではなく、例の二刀流で二本の刃を乱舞させつつ、俺は考える。俺

のレベルは現時点で85という、ギリギリ攻略組水準といったところだ。だが、現時点でハイレベルプレイヤーの一人であることは間違いない。そんな俺が、しかも片や魔剣級の得物を振るい続けたらどうなるかというのは明白だった。

(ちっ、もう終わりかよ)

一瞬でモンスター湧きがなくなったことを確認すると、俺は再び移動を開始した。こうしていることかれこれ数時間、もうすでに日も沈んでいる。それでもまったく気分転換などできていない。いつもならこうして戦いに明け暮れば何とかかなるところはあったのだが。

(そういえば……)

戦いに向かいながら、俺はあるプレイヤーを思い出した。今までなぜかわからないほどすつかりと忘れていた、一つの問題。そう、

(クラデイル……あいつをどう処理する)

今となつては、キリトとアスナのカップルなど公然の秘密。それを引き割くのは容易ではない。そう、死別などでもなければ、

(あいつらを失うのは、かなりの痛手だ。片方が消えれば、それだけでもう片方が使い物にならなくなる。……厄介だな)

加えて、クラデイルはいまだに血盟騎士団に籍を置いている。あいつだけ排除する

のは困難を極める。いっそのこと、ことを起こしてくれればこっちもやりやすいのだが、そんなことはまれだろう。秩序を重んじるアスナにあそこまで心酔しているのだ。わざわざ自分から秩序を乱すような真似はすまい。

(とにかく、まずは情報収集だな)

其れなら気も紛れるだろうと思いつつ、俺は足を街へと向けた。

血盟騎士団の本部のあるグランザムだけでなく、アスナの自宅があるセルムブルクでも聞き込みや、情報屋から情報を買ったところ、クラディールはアスナの半分ストーカーのようなものになっているらしい。ただのストーカーなら出るところに出れば解決なのだが、それが名目上とはいえっても護衛なのだから性質が悪い。だが、それが表層化した先日の一件で、護衛から外され、今はグランザムにて待機という名の謹慎を行っているところなのだとか。このまま済んでくれればいい、というのはあくまで血盟騎士団側の立場から言えばの話で、俺からしたら、

(厄介なことになった)

何せ、今や攻略組のトップギルドの本丸だ。そうやすやすと侵入を許すような場所でもないし、正面突破も難しい場所であることは明白だ。しかも圈内だから、殺すには麻痺させるか眠らせるか、それも攻撃以外の方法でそれらのデバフを付与し、その上で圏

内デュエルのうえ片を付けるくらいしか方法がない。何か方法があればいいんだが……。

(まあとにかく、あいつが手を出すとすればキリトだ。キリトを付けていれば、確実にたどり着く可能性は高い)

ラフコフの残党であり、隠れオレンジを仕留められるというのは大きい。時間はかかるだろうが、そこには目をつむるほかあるまい。四六時中張り付くとはいかなくとも、少なくとも気に掛けるくらいは必要だろう。これくらいなら仕方あるまい。まあどちらにせよ、情報収集は続けるべきだろう。グリーンになった影響で普通の宿にも止まれるため、一応の仮の拠点としている宿のベッドで、俺はぼんやりと次の一手を考えながら眠りに落ちた。

38. 表の剣士、裏の弓兵

それから少しして、俺は興味深い情報を掴んだ。何でも、キリトとヒースクリフがデュエルするとか。片やHPバーをイエロー以下に落としたことのない、鉄壁の聖騎士。片や、二本の剣で圧倒する、黒衣の剣士。どこか魔王と勇者のような構図に思えたのは俺だけか。とにかく、そういう場なら、犯罪プレイヤーの一人や二人釣れてもおかしくない。まあ純粹に戦いが見たいというのもあるが、俺はそんな考えから見に行くことにした。

舞台となる第75層主街区のコロセオは凄まじい熱気に包まれていた。商人プレイヤーはこぞつて出店を開いているし、トトカルチョ——要するに博打だが——もきつちりと商売になっているようだ。加えて、ここはもともとそういう目的のためだったのだろう、兵庫県にある某有名屋外野球場の中のようになっていたから、やりやすうだった。もつとも、俺もあそこには一回しか行ったことがないからよく覚えていないが。俺としては、これだけ人がいるというのはかえってありがたかった。中途半端に多いと目が多いだけになるが、これだけ多いと目が分散する。木を隠すなら何とやらというやつだ。加えて、俺は変装をしている。そうそう簡単にばれることはないだろう。

案の定、誰にも気付かれないよう、俺は観客席についた。鏡をうまく使って、周囲を見渡しても、見知った顔はなかった。中央には、今日の主役たる二人が上がった。二言三言交わしたのち、デュエルの開始申請を行う。

カウントが付き、まず挨拶代わりにキリトがソードスキルを放つ。両方が光っているところを見るに、二刀流のソードスキルか。二発ともきっちり防御するあたりさすがだな。立ち位置を変え、キリトがヒースクリフの盾側に回り込みつつ攻撃を仕掛ける。

(盾は基本的に攻撃には使えない。だから、盾のほうに回れば少なくとも攻撃が飛んでくることはない。ま、定石だわな)

俺もそう思ったからこそ、次のヒースクリフの行動は驚いた。何と、ヒースクリフは向かってくるキリトに向かって盾をつきだしたのだ。よく見ると、盾が微かな燐光を放っている。つまりは、神聖剣のソードスキルに盾を使った攻撃があり、それを使っただけということだろう。

(鉄壁の防御に加えて、攻撃も辛口か。無茶苦茶もいいとこだな)

現時点での最強プレイヤーと名高いだけはある。キリトも確かにやり手なのだが、こいつ相手では分が悪い。戦いを見ている限り、普通に戦ったらキリトの勝ち目は薄い。が、可能性があるとすれば、あいつが剣を二本持っていることだろう。とことんえげつなく、そしてあいつが自身の限界ギリギリの力を使えばあるいは。だが、果たしてキリ

トがそこまで捨ててきれるかどうか。

（あいつがとことん非情になり切れれば、勝機はある。果たしてできるかねえ、あの鉄壁相手に、豆腐メンタルのキリトが）

俺ならやり切れる自信がある。だが、それでも成功するかは五分。あいつなら、おそらく成功する。俺の記憶にあるあいつは、そういうやつだ。

戦いも最終幕、キリトがソードスキルを発動させた。構えなどから見て、おそらく第74層フロアボスに向けて放ったあれと同一の物。

（となると、超連撃の大技か。．．．決めにかかったな）

確かに、連撃のソードスキルは息が吐けないだけでなく、その速さも大きな武器の一つだ。加えて、キリトはSTR型だが、反応速度が異常といってもいいほど早い。限界を突破することができれば、あの鉄壁もひとたまりもないだろう。

連撃がヒースクリフを襲う。キリト自身がブーストしていることも相まって、かなりの速度の連撃となって襲ったそれは、終盤になってついにその防御を突破した。即座に盾を引き戻そうとするヒースクリフだが、その寸前でキリトの剣が顔を掠め、動きをそちらの回避に割いてしまう。加えて、キリトは最後の一撃を残している。

（抜いた！）

大抵の常識通り、初撃決着モードになっているはずだ。次の一撃が首から上に決まれ

ば、間違ひなくキリトの勝利。勝負あつたと思つた瞬間、妙なことが起こつた。

一瞬だが、ヒースクリフの盾が瞬間移動したかのごときスピードで戻つたのだ。その盾は、本来クリティカルが決まるはずだつたキリトの剣を受けた。直後、隙だらけとなつたキリトにヒースクリフが一発浴びせ、それでデュエルは幕を閉じた。

(今のは・・・?)

様子を見るに、気がついた人間は一握りどころか、居るかどうかも分からないほどのようだ。とにかく、俺からしたらもう用はない。今は、ここを一刻も早く立ち去るほうがいいだろう。そう思つた俺は、人目につかないようにひっそりとその場を去つた。

それから少しして、クラデイルの謹慎が解かれ、団員と一緒に訓練に出掛けるという情報を掴んだ。場所に関して詳しいことはわからなかつたが、そのあたりはクラデイルの間抜けがフレンド登録を解除していなかった時点で筒抜けだ。それに、訓練というからにはフィールドを使うのだろうが、大きな街から発つことは容易に想像ができる。ここまで条件が揃えば追跡は容易だつた。

その訓練の日、俺はクラデイルを追つてフィールドにいた。昼日中だから難しいところはあつたが、こんなこともあるのかと俺は多彩な色のポンチョを用意している。その

一つをかぶって、隠蔽ボーナスを付けたうえで隠れていた。一般的に考えれば距離が離れすぎているのだが、アイテム作成スキルで双眼鏡を持つている俺からしたら何ら問題の無い距離だ。だからこそ、俺は驚きの光景を目にした。

(キリト・・・!?)

それは、血盟騎士団の制服に身を包んだキリトだった。

少し前に、キリトとクラデイルはいざこざを起こしている。しかも、かなり面倒そう。確かに、同じ組織に所属することになったらある程度の関係修復は必要だろうが、それはもう少し時が解決してからのほうがいい。少なくとも今は時期尚早だ。

(いやな予感しかしない・・・)

クラデイルは、曲りなりとも俺たちから殺しの技能を習得した人間の一人だ。もし、今回の水分などを、あいつが調達したとしたら。最悪のケースも免れない。俺はあいつらの後をつけることにした。

一行は順調に戦闘を重ね、休憩に入った。場所も、決して見通しがいいとは言えないが、悪いともいえない場所だ。ただ一つ難点を挙げるとすれば、峡谷のような地形なのに上からの襲撃をほとんど警戒していない点だ。ロッククライミングがある程度できたり、あとは普通に上に乗ることのできる地形だったりする場合、上からの襲撃は可能なのだから、こういう地形は常に上から襲撃される可能性を加味しておく必要がある。

そういう点からすれば、俺に言わせれば落第点もいいところだ。

渡された食料と水分を、まず隊長格と思われる存在と、もう一人が口に含む。キリトは一口だけ口にしたところで、水の入った水筒を投げた。だが、すでに遅かったようだ。麻痺のエフェクトが全員を襲い、隊長格が結晶を使おうとするも、それは唯一麻痺していなかったクラデールによつて蹴飛ばされた。

(クソが……！)

即座に手に持った弓に手をかける。つがえてあるのは麻痺を付与する矢だ。そのまますぐに狙いをつけて放つ。まず一人を手にかけてようとしたクラデールにその矢は突き刺さった。何が起こったかわからないような表情で崩れ落ちるクラデールを、そのほかのパーティメンバーもわけが分からないといった表情で見ている。第二射で確実に仕留めようとした矢先、俺の索敵スキルが超高速といってもいいほどの速度で接近するプレイヤーを捉えた。この速度だと、俺が放つて殺すより先に、この目標が到達する。あらかじめオブジェクト化してあった、変装用の深緑で迷彩柄のフーデットポンチョを着ているから、こちらを見られてもばれる心配はまずない。ちなみに、先ほどはなった矢は耐久値ギリギリの設定であったため、当たって効果が発生した瞬間に消滅している。が、用心に越したことはない。俺はいったん射撃を中断して、様子を見ることにした。

接近してきたのはアスナだった。俺からしたら十二分に予想の範囲内な相手だ。そもそも、あれほどまでの速度で移動できるプレイヤーが早々いてたまるかという話である。アスナはキリトのみの麻痺を真っ先に解除すると、その体を抱きしめた。だが、その後ろでゆっくりと立ち上がる一つの影。

（クソツタレが、麻痺耐性付けてやがったか！）

各種デバフには、対抗するバフがある場合が多い。おそらくあいつは、カウンターで状態異常を食らう可能性も見越して、対麻痺を自身に付与していたのだ。アイテムの効果なのか、何らかのエクストラスキルなのか、そのあたりはどうでもいい。とにかく、今重要なのは、クラディールが立ち上がってアスナもろともキリトを殺そうとしていることだ。即座にもう一度狙いをつけるが、手を弦から離す必要はなかった。

背後に迫ったクラディールの両手剣を、アスナが振り向きざまに打ち払ったのだ。細剣の数少ない打ち上げ系のソードスキル『デライトロール』が決まり、クラディールは吹っ飛ばされた。が、器用にも空中で受け身を取り、もう一度相對する。

「あ、アスナ様、これは、その、訓練……そう！訓練の一環で——」

「問答無用」

クラディールの弁明は、アスナの低いながらもよく通る声でぶった切られた。冷徹な光を以って繰り出されるのは、片手剣系汎用ソードスキルが一つ『散紗雨^{ちりさざめ}』。素早い6

連撃の刺突を見舞うソードスキルだ。もともと攻撃速度では神速ともいつていい彼女が出すそれは、まるで同時にいくつも刺突が襲ってくるような錯覚を覚えるほどだった。

「ひいひいひいひい、もうやめてくれえ！もうあんたたちには会わない！K O B もやめる！だからせめて命だけはあ！」

蹲つてみつともなく命乞いをするクラディールに、アスナのとどめの一撃が鈍った。突き刺さんとしていた剣を寸止めして、そのままゆつくりと後ろに下がろうとする。が、俺からしたらそれは悪手だ。それをするには、最低限相手の武装を解除しなければならぬ。そうしなければ――

と、考えているそばから、クラディールが直前で立ち上がり、アスナの細剣を叩いた。クラディールの得物は重量のある両手剣で、アスナの得物はスピード重視で軽いレイピアだ。いくらレベル差があっても、それが不意打ちに近い形で叩かれればひとたまりもない。現にアスナのレイピアは、宙を舞って離れたところに落ちた。

「アアアア甘エエエエンだよオオ、副団長サアアアン!!」

狂っているとしたか表現できない表情で、クラディールは両手剣を上段に掲げ、振り下ろそうとした。が、流石にそこまでは問屋が卸さない。番えたまま構えていた俺の手が離れ、クラディールの剣を叩き落とした。

(ちいつ、外した！)

舌打ちを一つして、俺は第二射をすぐに番える。狙うは眉間ただ一つ。心臓でもいいが、ヘッドショットは一撃と相場が決まっている。だがその前に、キリトが自身の左手でソードスキルを発動させた。躲すことなど到底できない距離で放たれた、体術系ソードスキル「エンブレイザー」は、ピンポイントでクラデールの心臓を貫き、HPを刈り取った。

後は俺のあずかり知らないところだ。そう考えた俺は踵を返して、カルマのクエストの発生場所へと向かった。

39. 教会の子供たち

キリトたちが血盟騎士団を脱退してから、私はいつものように始まりの街の教会へと足を運んでいた。もともと、私はここに、狩りや傭兵業で得た収入の一部を寄付していた。サーシャさん——教会の代表者のような人だが——はいつも遠慮するのだが、私が好きでやっているのだからと毎回受け取ってもらっている。それに、私としてもここに来るのは楽しみの一つでもあった。

最近、アスナも手伝ったりしてくれていたのだが、アスナは今血盟騎士団を脱退して新生活生活なので、流石に巻き込めない。というか私より年下で結婚生活とか何それけしか・・・うらやましい。あんまり変わってないって？やかましわ。

教会の扉を開けると、その音に気付いたのか、まずサーシャさんがこちらを見て一體會釈した。それで気付いたのか、子供たちの目がこちらに向く。

「あ、エリー姉^{ねえ}だ！」

トトトトといった感じに突撃してきた子たちを優しく受け止め、あやす。

「うん、元氣そうで何より」

「そりやそうだよ」

元気そうな子供たちを見て安心する一方で、私は周囲をぎつと見ていた。まだこの建物の中まで影響はされていないようだ。とりあえずサーシャさんに挨拶を使用とした矢先に、ノックの音が聞こえた。子供に気付かれない範囲で集中力を高める。得物に關しては自衛の意味も込めて装備したままにしてあるため、問題はない。サーシャさんとアイコンタクトをして、サーシャさんが扉を開ける。そこから覗いた姿に、私は警戒を解いた。

「なんだ、レインちゃんか」

「ええ。それと、扉越しにもある程度察せられるほどに練られていたら、流石に気づくと思いますよ」

「あっちゃー、そんなにわかりやすかった？」

「ええ」

そんな会話をしていると、彼女の下には女の子が何人か寄ってきた。ここも全体の大部分に漏れず、比率としては男の子のほうが圧倒的に多いのだが、女の子もいる。だがなぜか、女の子の大半はレインのほうに行ってしまう。ちくしやう、お前らまで若いほうがいいって言うのか。

「レインお姉ちゃん！久しぶり！」

「うん！最近ちよつと来れなくてね」

「良いよ！元氣そうだから許す！」

「何それ」

笑いながら会話する私たちに、サーシャさんが近付いてきた。

「お二人とも、いつもありがとうございます」

「いえいえ、私もこの子たちには元氣をもらってますから」

「そう、ですか……。何せやんちゃな子たちばかりなので、迷惑をおかけしてなければと思いましたが……」

「むしろこのくらいの子たちは迷惑かけてなんぼなところはあるでしょう」

毒ともつかないレインの言葉に、二人はほぼ同時に嘔き出した。

「言い得て妙ね」

「全くです」

そんな会話をしていると、もう一度ドアがノックされた。静かに集中して、サーシャさんがゆっくりとドアを開ける。そこには、

「キリト君!」

「アスナ!」

絶賛新婚生活満喫中なはずの二人がいた。

二人から子供——ユイについての事情を聞くと、三人とも唸った。

「ごめんなさい、私、そのような子供はわかりません……」

「私も分からないわ」

「私も知らない……。ごめんね、力になれなくて」

「いいよ、それくらい。ここにいと限ったわけではないしな」

レインちゃんの言葉に、キリト君はあっさりとそれだけ言った。その時、ボタンと音を立ててドアが開いた。

「サーシャさん、大変だ！」

私が入ってきた子をジロリと睨む。その目に気付いたのか、その子の目がこっちに向く。

「それどころじゃないんだよエリー姉！ギン兄たちが、軍の徴税に引つかかって！」

「ツ……。」「えっ!?」「何!?!」

その言葉を聞いた瞬間に、私とレインちゃんとサーシャさんは立ち上がっていた。

「軍って、あの軍?」

「それに、徴税って……。?」

「話はあと！場所は」

「35番路地！ブロックされて、俺だけ逃げれたんだ！」

こういうときやどこかで迷子になった時に備え、あらかじめそれぞれの路地に番号を付けていた。記憶が正しければ、35番路地は行き止まりだったはずだ。

「分かった。ごめんねアスナ、——」

「私たちも行くわ」

私が言い切る前に、アスナは返答していた。

「なら俺たちもいくー！」

「それはダメ」

追従するように声を上げた子供には、睨みと強い口調で止めた。この子たちまでついていくと、事態がこじれる可能性がある。

「このお姉さんたちは、私よりよっぽど強いから大丈夫。だけど、君たちまで来たら危ないから」

それだけ言うと、サーシャさんがキリトたちに向けて言った。

「それでは、申し訳ないですが走ります！」

「レインちゃんはここに！万が一のことがあったら、防衛を最優先！」

それだけ言い残すと、私たちは走り出した。

35番と名前を付けた路地に入っただけですぐ見えたのは、深緑の装備の集団だった。言い

争う声を聞くに、おそらく向こうには3人いる。狭い路地を集団でふさぐことで脱出を難しくする、"ブロック"と呼ばれる行為だ。それで子供たちは完全に退路を断たれてしまっている。

私たちが近づくと、一人がこちらに気付いて振り向いた。

「おっと、保母さんの登場だ」

「ギン、ケイン、ミナ！そこにいるの!？」

軍の誰かが呟いた、嘲るようなセリフを聞き流してサーシャさんは言った。

「サーシャ先生！」

「こいつら、僕たちがとってきたものを出せつて！」

その言葉を聞いて、サーシャさんはほんの少し考えて言った。

「それだけなら渡してしまいなさい！」

「それだけじゃ足りないんだよなあ」

軍のメンバーの誰かがその言葉を聞いて、こちらに高圧的に迫ってきた。

「あんたらは随分と税を滞納しているからなあ。装備も含めて文字通り、全部寄越してくれてようやく、つてところなんだよなあ」

この軍の連中の向こうには女の子もいる。装備を解除するということは、裸になるということと同義だ。明らかに下心があるというのが見え見えだった。

(下種が・・・)

それだけ思ってから早かった。少しだけ下がって、何度か小さくジャンプする。サーシャさんだと少し厳しいところはあるが、私からしたらこのくらいは余裕だ。そのまま助走をつけると、強く地面を蹴って飛び越した。その後から、ユイちゃんを背負ったアスナと、キリトも飛んできた。

「もう大丈夫。装備を戻して」

努めて優しく言うと、子供たちは安心したのか、微かに目を潤ませながら装備を戻した。

「おいおいおい、何してんだあ?」

軍の集団の中でも、幹部と思われる人物がこちらに歩いてきた。その手には、抜剣された両手剣と思われる剣。

「この町で俺たち軍に逆らうってことがどういふことかわかってんのかあ・・・?」

どうやら威圧させて税とやらを取ろうという魂胆らしい。だが、こちらとしては怯える理由など一つもなかった。それは、装備を見た瞬間に分かる。使い込まれ、強化された装備や、明らかな業物にはそれ相応の輝きというものが宿るものなのだ。そして、目の前の相手の装備にはそれが一切ない。怯えるはずもなかった。

怯えない理由はもう一つある。アスナとは、何回か一緒に会ってお茶をしたりしてい

るから、大体雰囲気で相手の心理状態を読めるのだ。そこから察するに、この副団長様はたいそうお怒りになっている。それがかえって冷静にさせていた。

「エリーゼ。キリト君」

「はいよ。引き受けた」

「やりすぎるなよ」

必要最低限のやり取りと、ユイを預けた後、アスナはいつの間にか実体化したランベントライトを引き抜く。しゅらんと抜剣音が清廉に響いた。

「おお？一戦交えるかあ？何なら圏外行ってもいいんだぞ圏外にい、あああ？」

目の前の男は、その抜剣が処刑開始の合図であることに気付いていない様子だ。いつもの柔和な雰囲気から、得物を狙う狩人が如き目つきに変えたアスナは、手始めにソードスキルなしで突きを放った。私たちからしたら目で追うことくらい余裕だが、相手の男からしたらあまりにも一瞬すぎて何が起こったのかわからないほどだったに違いない。突きの位置は眉間に寸止め。お見事と拍手したくなるほどのコントロールだった。

「圏外に行く必要なんてないわ。それと、圏内での戦闘でHPが減ることはないから安心して。その代り——」

続いてレイピアが輝き、繰り出されるのは彼女の代名詞となった“リニア”。今度は寸止めではなく、きつちりと胸の中央に当てた。その衝撃フィードバックで相手が

吹っ飛ぶ。当然だ、圏内でHPが減るなどということはありえない。それは、彼女らは誰よりも知っていた。

「圏内戦闘は、その体に恐怖の何たるかを刻み込む。骨の髄までわかるまで、いつまでもね」

アスナはもう剣を構えておらず、ぶらんと下げていた。だが、不思議なほどに隙がなかった。そこまで来てようやく、男は自分が圧倒的な格上に喧嘩を売ったということに気がついた。

「お、お前らあ！見てないで手伝ええー！」

そこでとった手段は、数による押しつぶし。だが、利口なやつなら、アスナが圧倒的な格上であることは明らか。だがそれでも、全員が形だけとは言っても抜剣した。どうやら、それほどまでに軍のメンバーにとって上官の命令は絶対のものらしい。

「あら、そっちがそのつもりならこっちも考えがあるけど？」

そう言つて、私もハイオプティマスを抜剣する。これは一応片手剣に分類されるらしいのだが、リーチは片手剣にしてはかなり長く、その割には刀身が細いからか軽量、しかもリズが認めるほどの業物だ。それに、それを扱う私も、それなりには腕に覚えがある。さらには、攻略組でも最強クラスであるキリトが奥に控えている。キリトはユイちゃんを負った状態だが、この程度の相手に後れを取るほど落ちぶれてなどいるはず

がない。だが、それでも軍の奴らは打ちかかってきた。それに、私たちは応える形で打ち合った。

2分後。軍の連中は尽く伸びており、その前には私たち三人が余裕綽々といった様子で立っていた。

「まだやるってんなら相手になるけど、どうする?」

脅しではなく本気を多分に含んだ口調で言う。すると、残ったメンバーは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。そこで、私たちはゆつくりと剣をしまった。

「さっすがエリー姉!」

「ありがと。でもま、ほとんどアスナのおかげだけだね」

アスナの武器は刺突を主攻撃とするレイピアだから、一対多だとしても不利になりやすい。だが、それをものともしない戦闘は、圧巻としか言えないものがあつた。その様、さながら狂戦士がごとく。その戦いつぶりを見て、子供たちは目をらんらんと輝かせていた。

「お姉ちゃん、めっちゃ強!」

「そりやそうよ。私よりよっぽど強いもん」

「エリー姉より!?!」

私の言葉に、ギンが目を剥く。この子たちに狩りの手ほどきをしたのは私だ。この子

たちにとって、私はおそらく目指すべき目標。その人物より強いということが信じられないのだろう。

「うん。こつちのお兄さんもあつちのお姉さんも、私が戦つたらたぶん3分クッキングされるからねー」

「さすがにそれはないと思うけど」

こちらに自身の得物をしまいながら歩いてくるアスナは、先ほど暴れてすつきりしたのか、いつもの柔和な雰囲気に戻っていた。

「どーだか。少なくとも、私より強いのは確定でしょ。それに、旦那の戦闘狂気質が少し移つてみたいだし」

「そ、そんなこと、ないと、思う・・・」

「そこは言い切りなさいよ」

思わず苦笑する。こんな美人で年頃の女子が大量の怪物相手にヒヤッハーしている様子など誰得としか言いようがない。その手の筋には受けるかもしれないが、大抵の人物はドン引きだろう。

「ま、とにかく教会に戻りましょ」

その言葉に、私たちは来た道を戻ろうとしたとき、ユイちゃんが何も無い所じつと見つめた。

「どうしたの、ユイちゃん」

アスナが問いかける。だが、まるでユイちゃんは声が聞こえていないようだ。

「みんなの、心が……！」

「どうしたユイ!?!」

「しつかりして、どうしたの!?!」

「ううううう……うわあああああつ!!!」

慌ててとにかく状況を確認しようとする二人の声もまったく聞こえていないようだ。やがてユイちゃんは苦しそうにうめいて、それから大きな悲鳴を上げてから、気を失ってしまった。

「とにかく、一回教会に」

その言葉に、一行は逸る気持ちを押しえて教会へと向かった。

結局、その日のうちにユイちゃんの意識が戻ることはなく、全員はサーシャさんの好意も相まって協会に一泊することになった。曰く、「そういう場所を選んだことも相まって、部屋はかなり余っているんです」とのこと。そして、翌朝。

「ああ、それ俺のハンバーグ!」

「代わりに人参やっただろ!」

「それただ単にお前が食べたくないだけだろ！好き嫌いすんなよ！」

こんな感じでやいのやいのとおかずの取り合いをしている子供たちに、レインと私はどこか暖かそうな、残りの三人は困ったような笑みを浮かべていた。

「騒がしくてごめんさい」

「いえいえ」

「最初は私も注意してただけだし、一向に収まなくて。もうほつたらかした結果がこれ」

「むしろ、子供らしくていいと思う、って、私も言ってるんですけどねえ・・・」

「ある程度の節度は必要だと思うけど？」

「まあ確かにそうかもしれないが・・・」

そんな会話をしながら、一同はお茶を飲んでいた。ちなみに、料理は子供のそれをサーシャが、大人分はアスナが、それぞれのサポートとしてレインとエリーゼが手伝ったため、かなりてきぱきと短時間で出来上がった。ちなみにキリトはその間、朝方に目が覚めたユイちゃんの相手をしていたそう。もう立派な親御さんである。

「で、昨日はユイのことで手いっぱいになっちゃってお流れになっちゃいましたけど、あの徴税って言うのはいったいどういうことなんですか？」

「俺からも聞きたいな。俺の知っている軍は、統一のとれた集団で、高圧的ではあるがあ

んなことをするほど腐ってはなかつたはずだ」

「アスナとキリトが連続で尋ねた。軍が攻略を離れたのは25層の時。今からすれば大昔に等しい。だが、私たちからしたらある程度このようなことにはなれていた。

「こんな状態になったのは、キバオウ派が台頭してきてから、かな」

「キバオウ、つて、あのキバオウか？」

「そ。あのイガグリ頭の関西弁野郎。それまでは、シンカーつてプレイヤーがトップを張ってただけで、途中からキバオウと双壁をなすようになってきてたの。そのくらいかな。その頃はまだまだだったけど、特に最近はひどい。シンカーさんを支持する人が、軒並み軍を去るか、力を失ってしまったから」

「そうだったんですか？」

「それに関しては私も初耳です」

私の言葉に、サーシャさんも微かに驚いた顔をした。まあ、この辺の情報はもっぱら私が集めてきているから、大抵の情報は私からもたらされる。だから、レインもサーシャさんも驚かないけど、二人はその情報の詳しさに大いに驚いたようだ。

「どちらにせよ、キバオウ派が台頭するようになってから、軍は今までの治安維持だけでなく、一種の支配とも取れる真似を始めました

最初は、それで治安が良くなっていったところもあつたのでよかつたんです。何せこ

こは広いし、必然的といつてもいいほど人も多いですから。でも、やがてそれが行き過ぎになりだしたんです」

「狩場の独占くらいならまだいいほう。横取りとかは日常茶飯事。それによつて抗議が出たら武力威圧。加えて徴税と称したカツアゲ。これだけならまだよかつた。けど、そればかりになつて、攻略がないがしろになりだした。それで末端プレイヤーはおろか、軍内部でも不満が噴出してね。ならばと今度はレベルの高いプレイヤーをまとめて前線に放り込んだ。フロアボスを狩つてこい、なんていう馬鹿げた指令と共にね」

その言葉に、ふたりの表情が暗くなる。

「・・・コーバツツ・・・」

キリトが微かにつぶやく。その言葉に、私は一つ頷いた。

「あの人も随分と丸くなつたよ。その言葉に、私は見えませんが助太刀してくれた奴のおかげで命拾ひできた。ただ突つ込むだけが能じゃないと、身を持つて自覚できた。つて。おかげで、軍内部の情報もつかめるようになったんだけど」

「情報ソースはそこだったんですか。道理で耳が早いわけです」

「ちよつと脱線したね。とにかく、それが失敗したおかげで、キバオウ派は失脚しかけたらしい」

「ちよつと待て、しかけた？」

「そ、しかけた」

「一つ指を鳴らして私はさらに言葉を継ぐうとして、キリトの目が入り口に向いた。
「誰か来るぞ。一人」

40. Y u i

「誰か来るぞ。一人」

キリトの言葉を聞いて、私はハイオプティマスを装備しながら立ち上がった。ほぼ同時に立ち上がったサーシャさんを手で押さえ、私が入り口に向かう。昨日の今日だ、報復くらいはありえる。だが、私が軍のプレイヤーごときに後れを取るなどない。だが、私の心配は、扉を開けた瞬間に消えた。

「あら、エリーゼさん」

「ユリエールさんでしたか。連絡をくだされば迎えの一つくらいはいたしましたのに。まあとにかく中へ」

凜とした美人であるユリエールは、グリーンムアイズの一件を機に、キバオウ派とシンカー派の懸け橋となろうとしているコーバツツから紹介された人物だ。シンカーの副官も務める才色兼備な姿は、軍のプレイヤーの羨望の対象の一つなのだとか。

中に入ると、キリトとアスナは露骨に警戒の色を浮かべた。それもそうだろう、彼女はどうあがいても軍の人間だ。服も軍のそれである。

「心配しないで、この人はその手の人じゃないから。彼女はユリエールさん。見ての通

リギルドALFの一員で、シンカーさんの副官である人よ」

「ALF?」

その言葉を聞いて、私は少し意外な一面を見た気分になった。このくらいの言葉は知っていてもいいかと思っただのだから。

「Aincrad Liberation Force——アインクラッド解放軍の略よ。あんまりこの呼称を好まない人もいてね、ユリエールさんもそうなのよ」

「はい……」

そのくらいにして、ユリエールさんは席についた。そこで、私が話を切り出した。

「それで、話とは」

その言葉で、ユリエールは顔を引き締めた。

「はい。今の軍の内情はご存知でしょうか」

「キバオウ派が失脚仕掛けていてるけど、リーダーであるシンカーさんが行方不明で、他に指導者もないから完全失脚には至っていない。だよな?」

「……相変わらずお耳が早いことで……」

私の言葉に、ユリエールさんは驚いたようだった。

「問題は、そのシンカーのことなんです」

「まさか、そのシンカーさんに何かあった……?でも一応ALFのリーダーなわけです」

し、確か碑に名前残ってましたよね」

その言葉に、ユリエールさんの表情に影が差した。それを見て、エリーゼはまさかと思った。

「何があつたのですか」

短く問いかける。その声は、かなり抑えられていたにもかかわらずよく通った。

「知つての通り、キバオウは失脚しかけました。そこで、キバオウは強硬手段に乗り出しました。・・・シンカーは優しすぎたのです。丸腰で話し合おうというキバオウの言葉を鵜呑みにして・・・。転移結晶も持っていかなかつたんです」

(・・・ポータルPK・・・。キバオウめ、そこまで堕ちたか)「・・・で、シンカーさんは今どうなっているんです?」

ポータルPKとは、高難易度ダンジョンやMobの群れに置き去りにする、一種のMPKだ。少なくとも、一つの大ギルドの幹部たる人間がとる手法ではない。

「今、彼は高難易度ダンジョンの最奥にある安全圏内に取り残されている・・・と思います」

「その状態で、どのくらい・・・?」

「もう・・・三日ほどになりますか。私が助けに行こうにも、難易度が高すぎて助けに行けず・・・。そんな折、鬼のような強さで徴税部隊を撃退したという三人の噂を聞きま

して。徴税部隊はあまりにもいきすぎなところがありましたし、本来私たちがやるべきことをやってくれなかったお礼と、依頼をするためにここへ参りました」

そこまで話を聞いて、私は一つため息をついた。

「私は傭兵よ。依頼としてなら、基本的に対価をいただくことになるわ」

その言葉に、ユリエールさんは困ったような顔をする。だが、そのくらいは想定内だ。「でもさ、たまたま私がダンジョンに潜り込んで、たまたまそこにいた人を助ける分には全く問題ない、って決めてるわけ。OK?」

その言葉に、ユリエールさんの表情が一転して明るくなった。

「で、では……!」

「あくまでたまたまよ。それに、あくまで傭兵なのは私だけ。そのほかの人間については、個別での相談次第、ってところじゃない?」

「私は行きます」

私の言葉に、レインは即答で言った。にやりと一つ笑って、横目でキリトとアスナを見る。だが、その顔ははつきり言って、

(信用してない、って顔してるわね……。ま、無理ないか)

私からしたら、ユリエールさんがこんな嘘をつく理由もないだろうというのは簡単に推測がつく。彼女の人柄がそうさせているのだ。だが、ふたりからすればユリエールさ

んとは初対面といって差支えないはず。さすがに今さつき会った相手を信用しろというのは無理のある話だ。

その不信を打ち払ったのは二人の間にいた少女だった。

「大丈夫だよ、パパ、ママ。この人、うそついてないよ」

その言葉に、一時的とは言っても親代わりの二人が驚いた。

「分かるの？ ユイちゃん」

「うん、なんとなくだけど、わかる！」

その無邪気な笑顔にこそ、嘘は見られない。

「・・・行きます」

小さいが確かな声でアスナが言った。その言葉に、キリトも頷く。夫婦そろって話し合いもなしに同意できるとは、本当に似た者同士な夫婦だった。

「ユイはここでお留守番な？」

「やだ！」

キリトの言葉に、ユイちゃんは即答で拒否した。

「ユイちゃん、今から行く場所はとっても危ないから、お留守番していて？」

「やだやだ！ ママたちと一緒に行く！」

「そうはいつでもねえ・・・。お留守番していたほうがいいでしょ？」

「やだ!!」

「おお・・・これが反抗期というやつか」

「キリト君も説得する!」

キリトのどこか感慨深げな台詞に、すぐアスナが反論した。

結局、ユイちゃんはまったく折れず、キリトたちと一緒に行くことになった。

「それで、そのダンジョンというのはどこにあるんです?」

私たちが移動していると、アスナが切り出した。キリトが黙っているのは、こういったことはアスナのほうに向いているという認識の結果だろう。

「どこです」

「は?」「え?」

ユリエールさんの下を指差しながらの答えに、私たちはそろって間の抜けた声を出してしまった。ここは最下層、下はない。つまり、

「街中の地下にダンジョンがある、ということですか?」

私の答えに、ユリエールさんは頷いた。俄かには信じがたいが、それしか可能性がない。

「最初発見した時、キバオウは独占しようとしたそうなのですが、存外に難易度が高かったらしく、消費したアイテムの補充で赤字になってしまい、断念したそうです」

「・・・攻略の進行度合いに応じて解放されるタイプのダンジョンかな・・・」

「可能性はあります。開始当初は発見されていませんでしたから。我々なら難易度が高すぎますが、——」

「この三人なら、最前線レベルがじゃんじゃん湧いてもある程度ならどうにかかりますね」

レインの答えはもつともである。攻略組の中でもトップクラスの腕前を持つ閃光&黒の剣士に、レベルもさることながら実力も一級品の劍ヴァルキリー姫ことレイン。そして、三人には一歩劣るものの、準攻略組レベルの実力はあると自負する、実力があつての傭兵である私。よっぽど強いボスカ、無限湧きレベルの雑魚が出てこない限りは大丈夫だろう。

「はい。頼りにさせてもらいます」

それだけ言うと、私たち6人は始まりの街の隠しダンジョンに潜り込んだ。

さて、ダンジョン攻略なわけだが。

「おりゃああああつ!!!」

端的に言おう。もうあいつキット一人でいいんじゃないかな。だって、前線でひたすらバ

サクしているし、本人めっちゃ楽しそうだし、私たち出る幕一切ないし。ユリエールさんとか引き気味の苦笑い。唯一ユイちゃんだけはめっちゃ楽しそうに顔輝かせているけど、それ以外は呆れの一言だ。

「すみません、完全にお任せしてしまつて・・・」

「いいんですよ、本人好きでやつてるんですから」

「どうか、あれは一種の病気」

さすがに少しは手伝おうと思つていたのだろう、ユリエールさんが申し訳なさそうに言う。だが、キリトはそんなのどこ吹く風と言わんばかりにバーサクを続けていた。そしてレイン、それは思つても口に出さなすべき。

「ふーすつきりした」

一通りポップしてきた敵を薙ぎ払つてキリトは言う。その顔がつやつやしているように見えるのは気のせいではないだろう。

「キリト、ちなみにさ、あのカエル何か落とすの？」

「ん？ああ、これを」

私の問いかけに、キリトがアイテムストレージから取り出したのは、さつきのカエルの足のような形の肉。

「・・・なにそれ」

アスナがかなり引き気味に問いかける。そういえばアスナはゲテモノとかお化けとか、所謂「気味の悪いもの」全般が嫌いという、女の子らしい一面もあったなあなどと、完全に他人事のように思い出した。

「ああ、さっきのMobスカペンジトートの肉だよ。見た目はこんなものでも、結構いけるらしい。今度料理してくれよ」

「絶！対！嫌！」

そう言うのと、アスナはその肉を素早さパラメータを全開にして一瞬でひつつかむと、筋力パラメータ全開でスローアウェイ。この間一秒足らずにして、投げた肉は軽く50mは飛んで行った。何というステータスの無駄遣い。

「うわもつたいたい！それなら……！」

というと、今度実体化したのは、——そのスカペンジトートの肉山盛り。

「いやあああああああ!!!」

絶叫しながらアスナはスカペンジトートの肉を次から次へと後ろに放っていく。ついでに私とレインもそれに協力する。この嫌がり方は結構全力の嫌悪だと同性の直感で理解した。その光景を見て、ユリエールさんはほほえまし気に笑った。

「あ、おねーさん、初めて笑った」

ユイちゃんが無邪気にそれを指摘する。と、そこで私も初めてユリエールさんの顔を

見た。正直に言つて、この女性がここまで柔らかい表情を浮かべるのを見たのは初めてだった。

「いえ……。とても仲がいいのだな、と」

「ええ。……過去にいろいろありまして」

意図してかせずしてかその懸け橋となつた青年は、ここにはいない。というより、もう表舞台に出て来るつもりもないようだが、あの青年のおかげでこのような仲になつたのもまた事実だった。

「そうですか……。うらやましいです。そういつた仲は、もう軍の内部にはありませんから」

「無理のない話ではあると思いますけどね」

私は直接その光景を見たわけではない。が、軍の内部に潜んでいたジョニーブラックの仕業で、当時攻略組のレイドリーダーが死亡し、軍も大幅な痛手を負つたというのは有名な話だ。だからこそ、軍は「常に隣人を疑う覚悟を持って」というような風潮が強い傾向にある。

「先に進みましょう。シンカーさんはこの先にいるのでしょうか？」

「……ええ」

それだけ言うと、私たちはさらに歩を進めた。

しばらく進むと、Mobのポップがやけに少なくなつた。いやな予感を覚えて、警戒のレベルをはね上げつつ進むと、キリトが一つ呟いた。

「少し先にプレイヤーが一人。．．シンカーかもな」

その言葉に、私たちの警戒は跳ね上がる。シンカーがいるということは、ダンジョンの最奥が近いということと同義だ。そして、――

やがて、私の索敵スキルにもプレイヤーの反応が引つかかった。目を凝らすと、かなり先に人が一人いる。それに気付いたのだろう、ユリエールさんが駆け出した。追隨する形で私が駆け出す。

「シンカーー！ー！」

やはりシンカーさんだったようだ。だが、当のシンカーの顔には焦り。

「ユリエール来ちゃだめだ！その通路には――！！」

（まずい．．．！）「ユリエールさんごめんなさい！」

シンカーさんの言葉が終わる前に気付いた私は、ユリエールさんを全力で安全圏に向かつて放り投げた。その勢いのまま一回転して抜剣する。シンカーがいたということは、やはりここが最奥なのだろう。そして――

「は、はは．．．ちよつといつは．．．やばいかな．．．？」

この手のダンジョンはお約束のように、最奥にボスが控えていることが多い。今日の前にいる、鎌を持った死神のように。

頬から冷や汗が流れるのが分かる。識別スキルとか、実際に刃を交えなくとも分かる。こいつは、今まで出会った中でも規格外だ。

「アスナ、エリーゼ、ユイを連れて逃げろ」

「冗談。こんな強敵目の前にして逃げれるかつての」

すぐ意図を察して、私は即断即決でその言葉を却下した。

「どうしてよ、キリト君」

「俺の識別スキルでもほとんど何もわからない。間違いなく80層、もしかしたらもつと上のボスだ。今の時点で勝てるとは思えない。——逃げてくれ、アスナ」

「無理だよキリト君！君を——」

「頼むから！」

なおも言葉をつづけようとするアスナの言葉をぶった切って、キリトは続けた。

「逃げてくれ。俺もあとで行く」

その言葉を聞いて、アスナは腹をくくったようだ。私たちがならみ合いを続けている間に安全圏に脱していたユリエールとユイ、そしてシンカーに向かって一言、

「ユイちゃんを頼みます！」

それだけ言うと、アスナもランベントライトの切っ先を向けた。その隣で、おそらく二人を送り届けた帰りであろうレインも得物を抜いている。それを見て、キリトは一言、

「死ぬなよ」

「互いにね」

「まったく。こんなところで死んでたまるもんですか」

キリトの警告に、私とレインちゃんはそろって挑発的に答えた。まったくこの手の性は死ななければ治らないらしい。

死神が鎌を振り上げる。二人が揃って防御の体勢を取る——が、二人はあっさりと弾き飛ばされた。直後に私が前に出た。それを見て、横薙ぎが来る。上に向かってパリイしにかかる。片手剣を両手で支えてようやく何とかパリイに成功したが、

(なにこれバツカじゃないの!?)

想像をはるかに超える衝撃に驚愕を隠しきれないでいた。これは明らかに90層クラスだ。下手したら95より上かもしれない。どちらにせよ、こんなところで4人で相手取る相手ではない。

(でもま、「ま」まで来ておめおめと引き下がれるもんですか」

改めて切っ先を前に向ける。まっとうに戦える相手ではない。なら話は簡単。まっ

とうに戦わなければいい。

ゆっくり腰を落とす。さてこの均衡どう崩そうか、と考えている時、

「ユイちゃん!?!」「ユイ!?!」

後ろからキリトとアスナの声が聞こえた。驚きつつ精神力で振り向かず、均衡を保つ。直後に繰り出された振り下ろしを、私はバックステップで回避した・・・直後に、
(しまった!)

そこに黒髪の少女がいることに気付いた。死神の鎌は少女に向かう。斬り裂かれると思った瞬間に、その前に小さなシステムメッセージで *Immortal Object* と表示された。

(え・・・!?)

その表示を見て、私は驚愕した。イモータルオブジェクト、つまり非破壊物質。プレイヤーには絶対に付与されない性質の一つだ。これがもしプレイヤーに装備されるようなことがあれば、間違いなくそのプレイヤーは不死身となる。そんなゲームの公平性を著しく欠くことはまずしないはずだ。なら、今日の前で起こっている事象はいったい何なのか。そんなことを考えていると、ユイちゃんはさらに虚空から燃え盛る大剣を取り出した。明らかに自分のSTR要求を超えているだろうそれを、ユイちゃんは軽々と振るって大上段から死神に振り下ろした。そのまま一刀両断にすると、死神はまるで

初からいなかったように掻き消えた。

「パパ、ママ……。全部、思い出したよ」

そこには、今までの幼児のようなユイちゃんはいなかった。ただ、静かで理知的な女の子がいるだけだ。

安全圏内には、他のそれとは一線を画すものが置いてあった。それは見た目には大きな石だ。そこにちよこんと腰掛ける形で、ユイちゃんは座っていた。シンカーとユリエールには一足先に離脱してもらって、軍のごたごたを収めてもらうように頼んだので、ここに居るのは5人だけだ。

「それで、思い出した、って、記憶をつてこと？」

「はい。すべてお話しします。キリトさん、アスナさん、レインさん、エリーゼさん」

先ほどとは打って変わった冷静な言葉に、キリトたちの目に軽いシヨックが生まれたのを私は見た。

「この、ソードアートオンラインは、カーディナルという一つの巨大なシステムで運営されています。通貨、モンスターのポップなど、文字通りすべてをカーディナルが担っています。その中には、プレイヤーの精神状態の監視というものもありました。異常をき

たした場合はその除去の努力も。そのためのプログラム、メンタルヘルスカウンセリングプログラム M H C P 01、
コードネーム《Yui》。それが私です」

淡々とユイちゃんは話した。その言葉に、私たちは大いに驚いた。

「プログラム……つてことは……」

「AIなの!?!」

こうして明かさなければ、私はユイちゃんをプレイヤーだと思い続けていたに違いない。どこから見ても、悲しみや喜びといった「感情」がユイちゃんには備わっていた。

「私たちには、プレイヤーと話して不自然でないように、感情模倣機能が搭載されています。——偽物なんですよ、全部」

いまだに驚愕が冷めきらなかった。よもや、こんなものまであったとは。

「なんであんな森の中にいたの？ユイちゃんの役割から考えれば、あの時あんな状態だったのは普通じゃないと思うのだけど」

一つ軽く頷くと、ユイちゃんはゆっくりと語りだした。

「先ほども言ったように、私の役目はカウンセリングです。ですが、ゲームが始まってすぐ、おそらくはゲームマスターの手によって私たちはプレイヤーとの接触を禁止させられてしまいました。いつ解除されるかもわかりませんが、私たちはずっとプレイヤー

の監視を続けていました。その間、プレイヤーは負の感情をどんどん蓄積させていき、そこに行かなくてはならないという義務感と、いけないという閉塞感で板挟みとなった私たちは、エラーを蓄積させていきました。そんなときに、イレギュラーとも取れるプレイヤーを見つけました。悲愴でも絶望でもない、温かい感情。それを持った二人。そして、どんな状況であつても、自身の根幹となる感情パラメータをほとんど変動させない一人のプレイヤー。私は、その三人を重点的に監視し続けました」

根幹となる感情パラメータ、おそらくそれは覚悟と同質の物だろう。それがほとんど変化しないというのは、ほぼ間違いなく彼だろうと私は思った。

「その三人のプレイヤーを重点的に監視していると、私たちの一人が閉塞を打ち破ったんです。β時代に使われていて、本サービスで使われなかったアカウントを、半ば以上に乗っ取る形で無理矢理外に出たんです。それを見て、私はMHC Pとしての姿を使つて、ふたりのプレイヤーに近い場所のシステムコンソールから外に出ました」

「で、それがキリトたちの住んでいた森の近くだった、と」

私の言葉に、ユイちゃんはこくりと頷いた。

「偶然ではないんです。何を隠そう、私がパラメータを重点的に監視していた二人とは、他ならぬキリトさんとアスナさんだったのですから。そして、そこからは、皆さんも知つての通りです」

俄かには信じがたい。だが、気になるのは、

「ねえ。プレイヤーとの接触を禁止させられた、って言ったよね？ということは・・・」
レインはあえてみなまで言わなかった。だが、その後が続くのがどのような言葉なのかわからないほど、二人が馬鹿ではないと知っていた。

「あのままなら、問題なかったと思います。ですが、私は先ほどのボスモンスターを、システム権限の一部であるオブジェクトレイザーを使って消去しました。それも、この石——システムコントロールに触れたうえで、です。今、カーディナルが私を調べています。いずれ私は、プログラム側からエラー認定を受けて削除されるでしょう」

その言葉が何を意味するのかなど言わなくとも分かる。プログラムの削除、つまりはこの世界から消えるということだ。

「嫌だよ！ユイちゃんがいないと私・・・！」

アスナは、子供のように泣きじゃくった。だが、私は違った。

「昔のゲームの話だけだね、AIに自我が生まれるのは、AIのプログラム過程のバグによるものなんだって。もしそうだとしたら、エラーによるものだとしても、バグを生じて自分の意志があるのなら、プログラムじゃないよ。」

言ってごらん、ユイちゃん。君は何がしたい？」

私の言葉に、ユイちゃんは一つうなだれて、ゆっくりと顔を上げて言った。

「私は、皆さんと一緒にいたいです……!」

その顔は涙にぬれていたが、純粋な願いの込められた笑顔だった。

「私もだよ。大事な娘だもん……!」

「ああ。ユイは、俺たちの愛娘だ」

そうして、三人は抱き合った。その光景を見ながら、私は一つの可能性に行きついた。

「ユイちゃん、これはシステムコンソールなんだよね?」

私は、ユイちゃんが座る黒い石を指差しながら言った。ユイちゃんはそれに一つ頷いた。

「なら、可能性があるかもしれない。——ちよつとごめんね」

それだけ言うと、私は黒い石をベタペタと触りだした。ある一点でキーボードが表示された瞬間に、私は高速ブラインドタッチでコンソールの操作を始めた。その時に、後ろから声が聞こえた。

「どうやら、お別れのようです。……どうかお元気で、パパ、ママ」

その言葉と共に、ユイちゃんは消えた。すぐにキリトが隣に来て一言、
「手伝う」

とだけ言った。キリトが石に手をかざすと、もう一つキーボードが出てきた。不思議なほど息の合ったタイプが終わった時、私たちはそろって吹っ飛ばされた。

「大丈夫!？」

その言葉に、私は手を上げて答えた。そして、キリトの手の中には零型のペンダントがあった。

「これって……」

「ユイちゃんを消す時に、まず実体化を解除して、つてプロセスがあつたのね。で、そこには少なからず運営側——つまりG Mゲームマスター権限が入り込む。そこに、疑似GM権限とでも呼ぶべきもので無理矢理割り込みをかけて、削除される寸前のユイちゃんをシステムからパージ、簡易だけどオブジェクト化したの」

「……よくわからないけど、」

「つまり、これは……」

「ユイの、心とも呼べるものだ」

ゆっくりとキリトが言うと、アスナはペンダントを抱えて泣き崩れた。

私は、キリトたちを見送っていた。シンカーを救出できた時点でキリトたちの目的は達している。いったんホームに戻るといふ意見を、少なくともあの二人は認めてくれるだろう。まったく未永く爆散しやがれ。

最初は同行を断った。誰があんなバカカップル新婚夫婦の空間に入りたいと思うのか。

邪魔しようとするやつはマジで死ねばいい、というかあまりにひどかったら私が殺す。だが、アスナに押し切られてしまって、半ば強制的に、表向きは護衛として同行している。レインは教会のほうに、一応お守りの手伝いも兼ねて置いてきていた。

そんなこんなで、キリトたちのホームへ向かっていたアスナが、思い出したようにふと叫んだ。

「そういえばあの時、ユイちゃんをシステムからパージしたって言ったよ？ ユイちゃんのデータってどこに保存されているの？」

「保存先は、キリトのナーヴギアのローカルメモリーに設定したよ。最初はアスナとキリトどっちにしようか、ってなったんだけど、キリトが自発的に自分のほうを指定してたから、そのままにしちゃった」

「圧縮してもかなり容量がいっぱいになっちゃったし、もともとSAO内で活動すること前提のプログラムデータだ。そのまま現実世界で会えるのはかなり先になりそうだが……絶対会わせて見せる」

そこには、確かな覚悟があった。それを見て、私は年下の成長に一種の感動を覚えていた。

4 1. 激闘―第75層フロアボス攻略戦―

カルマのクエストをクリアしてから、俺は最前線に潜り続けていた。理由はただ一つ、ボス戦への協力だ。俺の身の上からして、参加は難しいものがあるだろう。だが、協力くらいなら誰にでもできる。例えば、迷宮区を真っ先にマップピングして、そのマップデータを提供する、とか。

俺がこだわるのには理由がある。それは、ここが第75層だからだ。ここまで、25の倍数層の攻略には犠牲を払うことが多い。第25層では軍の攻略部隊が壊滅する事態に陥り、第50層ではこれまたボス攻略の最前線を担っていた青龍連合が大打撃をこうむった。もう一つ付け加えるなら、ヒースクリフ及び彼が率いるKOBの名前を天下に知らしめたのもこの層だ。とにかく、ここで何も起こらず、すんなり通れるということとはまずないだろう。なら、微力ながらも協力はすべきだ。もつとも、そこに眠っているレアアイテム狙いというものもあるのだが。

迷宮区で狩りが続いていると、やがて攻略集団と思われる集団に遭遇した。俺の顔が割れているとは限らないが、用心に越したことはない。それに、今その攻略集団は、大きな二枚扉の前にいた。

(つまりは、そういうことだよなあ．．．)

ここがボス部屋ということだろう。74層が攻略されてから3週間余り。最近の攻略ペースを考えると、少し遅めな攻略となりそうだ。俺も戦っていて思ったが、ここはやはりかなり手ごわい。遅くなるのも納得だろう。

やがて、攻略集団が二つに分かれた。どうやら、先遣隊が中に突入、何かあったら待機している後衛隊と合流するという流れらしい。過去にはボス部屋が水浸しになったということもあつた。その対策も兼ねてだろう。これに関して、俺はまったく異存を覚えなかつた。

問題が発生したのはこの後だ。先遣隊が突入するや否や、扉がひとりでに閉まり、そのまましつかりとしまつてしまったのだ。遠目から見ると、押して、引いて、横に動かして、という手段はすべて試しているようだが、扉はピクリとも動かない。考えられる可能性があるとすれば、

(俺、だろうなあ．．．)

ボスがボス部屋から出てこないことをいいことに、射撃スキルでボス部屋の外からちまちま撃ち続けるというあれは、完全に反則技だ。作戦と言つてしまえばそれまでだが、難易度を大きく落とすだけでなく、面白みもなくなつてしまう。もともとその手の対策が速いSAOだ、早速その対策がなされたのだろう。

やがて、扉が開いた。長く感じられたが、時計を見てみると10分しか経っていなかった。そして、扉の中には、何もなかった。ボスも、先遣隊も、何も。転移結晶で転移したような痕跡は一切ない。ということとはつまり、

(死んだ、か)

攻略集団10人が、10分という短い間に全滅した。その事実だけでも十分に脅威たり得るものだった。これは看過するわけにはいかない。俺の目的も考えれば、ここで助太刀に入るべきだ。だがおおっぴろげに入るわけにはいかない。そのために俺の頭は回りだしていた。

その翌日の昼下がり、ボス攻略隊が75層攻略に乗り出した。そこには、キリト、アスナ、レイン、クラインだけでなく、エギルもいた。街中にもかかわらずハイディングをしてそこに紛れ込んだ俺は、まるであたかもボス攻略集団の一員であるかのようにふるまった。念のため仮面のような防具をして、素性を知られないようにしているから、一目では俺と分らないだろう。いかに強豪ぞろいの第75層迷宮区といっても、これだけ百戦錬磨の猛者たちばかりでは、間違いなく形無しだろう。まあ、フロアボスを除けば、だが。俺は弓を背中に担いでその場からするりと離脱した。

相変わらずのハイディングと俺のスニーキングで、誰にもばれることなく俺はボス部屋前に到達した。ボス部屋の扉がゆっくり開くと、戦闘のヒースクリフが号令をかけた。

「全体、突撃——!!」

その声に、掛け声を上げつつ全体が突進する。俺もそれに追従する形で突撃した。何とか扉が閉まる前に俺も滑り込んだ。が、薄暗いボス部屋にボスの姿はない。はてさてどこにいる、と思つた矢先、

「上よ!!」

アスナが大声を上げた。その声に従い上を見ると、そこには天井に張り付くように骸骨のムカデのようなボスがいた。間違いなくこの部屋の主たるフロアボスだろう。銘は“The Scull Reaper”。骸骨の死神、つてところか。悪趣味なネーミングをしゃがる。——てちよつと待て、天井に張り付いているつてことはこいつ……!

「逃げろ!!!」

俺は全力で声を張り上げた。正体とか今更どうでもいい。こうなつたら死なないことが最優先だ。一泊遅れて周囲が動き出す。が、それを見てかフロアボスが降つてき

た。最後尾の二人が遅れている。俺は一つ舌打ちすると、メニューをさっさと操作して適当な剣を一振り取り出して弓につがえた。こういうことも想定して、すぐに取り出せるところに剣を置いておいて正解だった。そのまま狙いは適当に放つ。だが、それはあつさりとボスの両手にあつた鎌の片方に弾かれ、もう一つの鎌が遅れていた二人のうちの一を狩った。そのまま吹っ飛ばされたプレイヤーをキリトが受け止めようとするが、その前にそのプレイヤーはポリゴン片となつた。つまり、

「一撃死・・・だと・・・」

「こんなの、無茶苦茶だよ・・・!」

しかも、おそらくあの位置から遅れるとなると頑丈なタンクプレイヤーの部類だろう。そのプレイヤーが一撃死ということは、ダメージディレイラーが食らつたらどうなるかなど推して知るべしだ。加えて、あいつは俺の放つた剣を鎌で弾いたので。高速で飛来する剣を弾く技量もある、ということに他ならない。アスナの言う通り、無茶苦茶もいいところだ。その火力に疎んだプレイヤーが固まっているところを見逃さず、スカルリーパーは鎌を振り下ろしにかかった。が、今度は距離が近かつたこともあり、キリトがパライシしにかかった。が、勢いが殺しきれていない。そこにアスナが割り込むことで何とか止まつた。

「横は任せて」

レインはアスナたちにそれだけ言い残して、側面からの攻撃にシフトした。彼女はスピードタイプの剣士だ、あの重撃は受け流すこともままならないに違いない。早々に側面からの攻撃に切り替えるあたりさすがだ。そして、クラインやエギルも側面からの攻撃に切り替えたようだ。なら、俺のやるべきことは一つだ。そう思うと、俺は武器を弓から刀と小太刀に切り替えた。

「行くぞ」

ダン！と強く地面を蹴る。キリトたちが受け持つていないほうの鎌をヒースクリフが受け止めたことを横目で確認して、俺は斜め上に辻風を繰り出し、空中でリーパーを繰り出した。二重の加速により爆発的な加速を得た俺は、さながら砲弾のようにスカルリーパーに飛びついた。そして、斬り込むときに丁度硬直が切れたことを確認して、俺は振り下ろしを繰り出した。予想通りというか、頭蓋骨に当たる部分は硬く、簡単にはじき返されたが、それによつて空中に放り出さながら、俺は速攻でクイックチェンジ、弓に矢をつがえて連射した。もうこんな相手だ、出し惜しみなどしていられるか。軽く滑りつつ着地すると、スカルリーパーのヘイトは完璧に俺に向いた。振り向きざま鎌を薙いでくるが、そんな大振りの攻撃、

「当たるかよー！」

言いつつバックジャンプしながらさらに矢をつがえて放つ。矢が光り輝き、スカル

リーパーが目に見えて怯んだ。

「今だー！」

ヒースクリフの号令が轟く。瞬間、その場にいた全員の得物が様々な輝きを放つ。一気にフルアタックを決めにかかった時に、俺も本数の少ない虎の子の矢を放った。そいつは足に刺さった瞬間に爆発を起こし、スカルリーパーを強制的に転ばせた。

レベルが80になって取った、アイテム作成スキルを使って俺が作った、俺お手製その名も「爆裂矢」。文字通り刺さったら爆発するギミックを搭載した矢だ。はいそこ、そのままとか言わない。その後も、普通の矢を三連続で放つ。特に、最後のは大きく溜めての三本同時発射だ。俺がここ一番というときに決める、射撃スキルソードスキル「トリニティレイヴン」だ。だが、それを放った瞬間に、この一時的な転びがもうすぐ回復することを察した。瞬間、装備を操作して防具を最高級のものに切り替えた。おそらく誰もが見慣れた血色の外套と、露わになった俺の顔に、一瞬だがざわつきが生まれる。

「動揺しとんな死にてえのかっ!!!」

再びの俺の怒号に集団がまた動き出す。このあたりはさすが攻略組だ。その隣に、一人の少女がやってくる。

「前は任せた。頼むぜ、レイン」

「……うんっ!」

俺の言葉に一瞬嬉しそうに笑みを浮かべ、レインは再び突っ込んでいった。俺にできるのは、その背中を守るだけ。申し訳ないが、正面は新婚ラブラブバカツプルな黒白夫婦と最強○と名高い聖騎士様にお任せしよう。言葉に棘があるって? 知らんなあ。だから、

「そう簡単に死なせやしねえっての!」

言いつつ、思いつきり弓を引き絞って発射。ほとんどずれなく尾の剣に命中し、その軌道をずらした。

「横から攻撃する部隊は、尾の刃に注意! できるだけフォローはする! でもアテにすんなよ!」

「大丈夫だ、誰もお前なんか最初っから戦力の勘定にや入れてねえ!」

そりゃひどい。が、言われつつ俺の頬は緩んでいた。さてと、

「楽しい楽しい狩りの時間だ」

その一言と共に、俺は再び狙いを付けた。

戦いの狼煙を上げてからどれだけ経っただろうか。とにかく、時間感覚がおかしくなるくらい戦っていたという事は確実だ。そして、俺たちはかつてないほどの死者を出

しているということも自覚していた。弓の耐久度もだいぶ落ちてきた。
(仕方ないか)

前衛もかなり薄くなってきた。唯一の最後衛としては、前衛がいないと危険度は倍どころの話ではない。ならば、自分が前衛に出ればいいだけの話。その覚悟をする
と、俺は装備を鬼怨斬首刀とオニビカリに変更して突撃した。丁度その時、尾の剣が一人を屠りにかかるころだ。その相手はあきらめたように動かない。ならばやることは一つ。

「そら・・・よっ！」

ドライブツイスターを使って剣を弾き上げる。軌道は逸れて、俺にも後ろのやつにも当たらなかった。そのまま横に一回転して構えなおした。

「どうしたお前、援護するんじゃないのかよ」

「前がこんなに薄くなったら援護どこじゃないっての」

事実、今はPOT休憩している奴が多い。加えてこの攻撃力だ、生半可な回避は役に立たない。

「お前は大人しく後ろでちまちま援護だけしてりやいいのによ」

「なんだよその言い草は・・・よ！」

会話しつつ、飛んできた攻撃を一発パリイ。うん、今のは会心。

「正直言って邪魔」

「正直上等だし邪魔なんざ百も承知だ。だからお前も死にかけてるって白状して回復しとけ」

「へいへい」

それだけ言うと、俺と会話している奴もPOTローテに加わった。その代りに隣に立つのは長髪の少女剣士。

「前言撤回。背中預けた」

「預けられた。だから勝手に死なないでね？」

「互いにな」

俺にはまだやることつてのが残ってたんだ。こんなところで死んでなんかいられるか。

短いやり取りの後、俺たちは同時にかけてだした。

戦っている、不思議な感覚に襲われた。ボスの攻撃はよく読めるし、連携は今までは段違いでとれる。本当に不思議な感覚だ。そんなときに、レインの右から攻撃が飛んできた。今の立ち位置から考えると、

——右60、尾の剣の薙ぎ。しゃがみながら上30から40にパリイで凌げる！

——了解！

(は・・・!?)

驚いているまもなく、レインが俺の指示通りにパライした。こつちに振り返ったレインと目があう。

——— ありがとう助かった！左120から鎌の突き！下がれば躲せるよ！

——— おう！

(いやおうじゃなくて・・・！)

思いつつ全力のバク宙で躲す。俺くらいのもS T Rでの全力バク宙ともなると、比喩でも何でもなく数メートルはゆうに吹っ飛ぶ。そのまま空中で

(ああもう出し惜しみはなして決めたらうに！)「ウエポンチェンジ、ボウー！」

心の中で毒づきながら一言早口に叫ぶ。それだけで、俺の手には弓が握られていた。目の前には鎌を空振りして完全に隙だらけなスカルリーパー。そいつに着地と同時に矢をつがえて放つ。一瞬怯んだ隙に俺は両手を広げてもう一言、

「イクイツプメントチェンジ、セットワン！」

早口にそれだけ言うと、今度は両手に鬼怨斬首刀とオニビカリが現れた。

俺が新たに習得したエクストラスキル、*“高速武器換装”*だ。どうやら、両手化を複数習得かつレベル一定以上で発生するものらしく、あらかじめ決めてあった装備セットを、ボイスコマンドで呼び出すことのできる便利スキルだ。その代りセットを間違えると悲惨なことになりかねないのだが、そのあたりは気を付けるだけだ。

新たに現れた得物を握り込むと、俺は再び突撃した。

——一気に叩く！足にホリスク！

——了解！

(間違いない……)

ひとまず、なんでこうなったとか、どうしてこんなことになったとかどうでもいい。とにかく、レインとはテレパシーもどきのようなことができるようだ。これなら連携も楽になると思いつつ、ホリゾンタル・スクエアを繰り返すレインの横で、俺は吹柳ふいりゅうを繰り出した。そのまま連続で転身脚につなげた。それでボスがこける。だが、その転びの時のボスがあがく。その時に、微かだが確実にパシヤンという音が聞こえた。俺も、その音の回数を少なくするように努力はしてきた。が、全部防げたわけではない。現に、この音を聞くのは、このボス戦だけでも何回目かだった。数えることは少し前に放棄していた。

(……くそっ！)

心の中で毒づく。だが、今のタンブルを起こした攻撃でボスのHPバーはラスト一本に突入していた。

「全員、突撃！」

ヒースクリフの号令が轟く。ヒースクリフのユニークスキルである神聖剣ソードス

キル“ユニコーンチャージ”を筆頭に、剣が様々な色に輝く。———どうでもいいが茅場、ユニコーンは処女厨だぞ。と、まさにどうでもいいことを考えつつ、

———これで決める！サポート任せた！

———うん！

それだけ通じ合うと、俺は勝負を決める覚悟を決めた。先の二つは硬直が短い。それを大いに利用して、硬直が抜けるまで待つと、俺は集中力のギアを上げた。ここからやる作業にミスは許されない。

まず手始めに、小太刀で巻き上げるように飛びあがる。小太刀系ソードスキル“閃空烈破”だ。空中で体制を整えると、技の終わりに再び剣がきらめく。刀などの一部に見られる、連発で出すことのできるソードスキルの組み合わせが一つではないことは、何回も使つてわかつていた。そのまま、今度は斜め上にシステムアシストを得て吹っ飛ばす。同じく小太刀系ソードスキル“空破特攻弾”だ。硬直が抜けるや否や、俺はその刃を今度は真下に向けた。俺も最初知つた時は驚いたが、閃空烈破からはタイミングがシビアではあるものの三つのソードスキルの連発が可能なのだ。そのままさらに連続で小太刀ソードスキル“神縫い”を発動した。とここで、ボスが転びから復帰した。

(この体勢からだとききついかな．．．?)

いや、いけ．．．！決めるんだろうが！

強い意志を持ってさらに発動。転びから復帰して直後に、俺に攻撃を仕掛けようとしたスカルリーパーだが、そこには俺はいない。一瞬で背後に駆け抜け、切り払う刀系ソードスキル『幻狼斬』だ。直後に、俺は剣技連携でさらに、左手で爪竜連牙斬を繰り出す。間髪入れずに爪竜連牙蹴。三連続くらいは余裕でつなげられるようになった。総ヒット数15という、三連撃ということを考えて、俺の中でも最大といつてもいい手数。それが炸裂し、お互い長い長い硬直に入った。復帰は向こうのほうが早い、こっちは一人じゃない。

「やああつつ!!」

後ろから来たレインの剛直拳からのハウリングオクターブが炸裂。大技二つで再びボスが転ぶ。爪竜連牙蹴をかました俺の手に戻ってきた鬼怨斬首刀に、さらに光がともる。

「腹あくくくれよ・・・」

低い俺の唸りは、おそらく誰にも聞こえていない。その俺が繰り出す、単発としては相当なヒット数と威力を誇る、俺が出せる第二の大技、刀系九連撃ソードスキル『天狼滅牙』が炸裂した。その代りこちらでも硬直に入るが、なんといいことはない。

「うおおおおつつ!!」

「やああつつ!!」

正面で太陽のコロナさながらな二刀流の超連撃大技を繰り出し、助走をつけて神速にして必殺の一撃を叩き込む新婚夫婦のおかげで、大分時間が稼げた。その間に、俺の硬直が解ける。

「これで決めるー！」

暗示にも似た宣言と共に、俺は小太刀を逆手でしまつて刀を両手持ちし、横に跳んだ。呼応するかのように、刀が白い光に包まれる。この動きは、刀を両手持ちで振るわないと制御がかなり難しい。新婚夫婦でなく、それまでこれでもかと言うほどダメージを与えた俺にヘイトが向くが、なんということはない。何故なら、スカルリーパーが振り向いた位置に、俺はいないのだから。

スカルリーパーの視界外から、横薙ぎと振り上げが見舞われる。そちらを向いても、次の瞬間にはもういない。背骨を飛び越しながらの一回転から、そちらを向いてもいない。史上最強とって間違いないフロアボスは、まるで道化のように見当違いの攻撃を繰り出すだけだ。残り少ないHPバーはどんどん減っていく。

外から見ていれば、俺の人外じみた動きがよくわかったことだろう。俺は、ヒットアンドアウェイを繰り返しているだけだ。だが、そのスピードが異常に早いというだけだ。

その刃は鮮烈で、まるで周りの闇を斬り裂くかのように、フロアボスを細切れにして

いった。そして、この技の隠れ性能も引き出した結果、この技の最大ヒット数を引っぱり出す。

最後に、斬りぬけた体勢から大きく飛びあがり、完全にダウンしたスカルリーパーに、振り向きざま大上段から振り下ろす。

「とどめだ!!」

その一言で、ボスは膨大なポリゴンとなった。

刀系裏最上位ソードスキル、「ぜんごうろうえいじん漸毅狼影陣」。そのヒット数は、単発技としては異常としか言いようのない40。その代り、ヒット数5以上のソードスキルを叩き込んで発動可能な天狼滅牙を発動し、その直後でないと発動できないという、厳しすぎるといつてもいい制約がある。しかも、そういう完全にパーティ戦前提の仕様なくせに、動き回るといいう特性上一対一のほうが効果を発揮するといっておまけつきが、それを果たすことができれば、このトンデモ技は最大の効果を発揮する。

「終わった、か」

思わず、俺はその場に大の字で寝転んだ。というか、その場にいた全員がその場へたり込み、寝っ転がった。

42. そして――

ボス討伐後というのに、歓喜の声は一切なかった。周囲の様子はひたすらにぐったりしていて、それがこのボス戦がいかに過酷なものであったかを物語っていた。

「聞きたいことは山ほどあるが、後にしてやる」

「そいつはありがたい。そのまま忘れてくれるともっとありがたい」

「そいつは無理な相談だ」

「そうかい」

誰とともない軽口のような問答に力はない。というか、入れる力もないというのが適切か。

「何人やられたんだ・・・？」

誰かが呟く。それに、視界の端でキリトがメニューを開いてカウントしているのが見えた。

「10人、やられた」

力なくキリトが言う。それに、周囲が絶望した。

「10人、だって・・・？」

「嘘……だろ……?」

「おいおいマジかよ……」

それもそうだ。今回はフルレイドではなく、40名前後のレイド。しかも、俺が裏最上位ソードスキルと射撃スキルを使用して、それでもなお四分の一がやられたということだ。

「俺たち、このゲームをクリアできるのか……?」

力ないバリトンでエギルが呟くように言った。それは、おそらくこの場全員の代弁だった。

「クリアするしかない。たとえ全滅することになっても、その最後まであがくしか方法はない。世界つてのは得てしてクソツタレなものだ」

俺はそれだけ言った。それに、周囲の雰囲気如意志が少しずつ戻った。そんな中、俺の瞳にある人間が映った。そこには、＼どんな状況下でもHPゲージをイエロー以下まで落としたことがない＼という、絶対神話を持つ聖騎士がいた。その目を見て、俺は気がついた。あの目は、ただレイドリーダーとして仲間をいたわる目ではない。そこにあるのは、冷徹といつてもいいほどの観察だ。研究者か医者がレポートや論文を見るような、まったく感情のこもっていない目だ。

周囲を見る。視界の端で、キリトが剣を握りなおしたのが見えた。その顔を見るに、

キリトも同じ結論に至ったらしいというのはすぐに分かった。だから、俺は素早く武器を弓へと変更し、キリトのタイミングに合わせる形で、矢をつがえた。

直後に、キリトがヒースクリフへ突進する。それを防御しようとしたヒースクリフだったが、ガードする前に俺の剣が盾を持つ手を貫いた。いや、貫こうとした、というほうが正確か。そのままの体勢でキリトと俺の刃を受けたヒースクリフの前に、ある文字が浮かび上がった。それを見て、

「Immortal Object」・・・。やっぱりそういうことか」

俺は当たってほしくない予想が的中していることに気がついた。

「キリト君何を・・・ッ!? 不死属性・・・?? どういうことですか、団長」

キリトの突拍子もない行動をとがめようとしたアスナが、その表示を見て硬直しながら問いかけた。それに、俺は大体状況が読めた。

「簡単な話だ。どんなゲームでもGMはいる。このゲームならGMは茅場ただ一人だ。だとすれば、奴さんは今どこで俺らを監視してるんだろうな?」

その言葉に、キリトも頷いた。

「そうだ。そして、人がやっているゲームを横で見るほどつまらないものはない。そう考える人種も少なからずいる」

「ましてや、それが自分の開発したゲームであるならなおさらだろうな。だが、このゲー

ムはHP全損が死だ。ならば、何かしらの工夫をするはず」

「ああ。だから、不死属性をかけたうえで自分もプレイヤーとして潜り込んだ。――
そうだろう、茅場晶彦」

最後の一言に、周囲がざわめいた。若干ではあるが、眉がピクリと動いたのが俺の目に映った。

「・・・参考までにどうしてそう思ったのか、聞かせてもらえるかな」

「最初におかしいと思ったのはデュエルの時だ。最後の一瞬、あんたあまりにも速過ぎたよ」

「俺のほうは大体一緒。でも、決定的となったのはあんたの目だ。思えば今までずっと、あんたの目はプレイヤーがプレイヤーを見る目じゃなかった。それこそ神様が見下すような目だったんでな」

俺の言葉に、ヒースクリフはかなり露骨に驚きを浮かべた。・・・そんなに驚くほどのことか?これ。

「それだけでわかるものなのかい?」

「ああ分かるとも。この世界は精巧にできているんでな、そのくらいは再現できる。それに、俺がこの世界でこれまで、どれだけの人間の表情を見てきたと思ってる」

「分かるのかい?」

「ああ。少なくとも、ボス戦が終わった時のあなたの顔は、プレイヤーがプレイヤーに向ける目にしては情ってやつがあまりにも欠けていた。それだけで十分つてもんだ」

俺の言葉に、ヒースクリフは呆れ友驚きともつかない表情を浮かべた。

「慧眼恐れ入るな……」

いかにも私は茅場晶彦だ。さらに付け加えるなら、君たちを第100層にて待ち受けるはずだった最終ボスでもある」

そのカミングアウトに、周囲が完全に動揺したのがはつきりと分かった。それもそうだろう。まさかこんなところに、自分たちを閉じ込めたその元凶がいようとは思えない。その上、

「最高のプレイヤーが最悪のラスボスに、か。趣味がいいとは言えないぜ」

「なかなか洒落たシナリオだと思っただがね」

キリトの言葉にそれだけ言うと、微かだがヒースクリフは苦笑を浮かべた。

「キリト君のデュエルの時は痛恨事だった。不死属性を解除し忘れていた私の抜かりというのもあったが、思わずシステムのオーバーアシストを使ってしまった。」

「魔王」に対する、いわば「勇者」ともいえる立ち位置のキリト君はもちろん、いかな逆境の中でも己を曲げないロータス君も不確定因子で、特異点ともいつてもいいような存在ではあると思っていたが、想像以上だよ。予定では攻略が95層、せめて90層

に到達するまでは明かさないつもりだったのだが……こうなってしまうては致し方ない」

「ここで全員殺して口封じ、とか？」

「合理的ならばいかなる犠牲も払う君らしい発言だね。だが、そんなことはしない。第一、ここで君たちを殺してしまつては攻略が進まないし、流石にこれだけ苦楽を共にすれば情も湧く。それに、そんなことをしてはあまりに理不尽だろう」

「淡々と語るその言葉に嘘はなさそうだ。だからこそ、俺も斬りかからずにそのままだった。だが、

「貴様、今まで、私たちの忠誠を、よくも――！」

我慢できないやつもいた。そいつは己の得物である斧槍を振りかぶり、振り下ろそうとした。だが、それは左手を少し操作したヒースクリフによって阻まれた。その体は、独特の黄緑色に包まれていた。

「麻痺か……？」

俺が呟く間に、周りのボスレイドの面々がこぞつて崩れ落ちていく。その誰もが麻痺を起こしていた。その例外は、俺とキリトのみ。

「最速の反応速度を持つキリト君はもちろん、最高の投擲能力を誇り、遠距離からの暗殺に優れるロータス君は、最終的に私の最後の壁であり不確定要素になるえると思つてい

た。キリト君が魔王に対する勇者なら、魔王に対する、いわばジョーカーがロータス君、といったところか。その予感、幸か不幸か合っていたことになるがね」

「そうかい。で、あんたはどうするんだ？」

「私は一足先に、100層のボス部屋——紅玉宮にて君たちを待つことにするよ。ここまで手塩にかけて育ててきた諸君を放り出すのは忍びないが・・君たちならきつと私の下にたどり着けるだろう。その前に、キリト君とロータス君には報酬をやらねばな」

「報酬、だと？」

キリトの言葉と同時に、俺の目が極端といつてもいいほどに細くなる。なんとなくだが、うさん臭さを感じたのだ。

「私と勝負するチャンスを与えよう。無論、不死属性は解除する」

「てか、解除しなきゃだめだろ」

「そうだね、それもそうだ。勝てると分かっている勝負など退屈以外の何物でもない。そして、君たちのいずれかが勝利を収めた場合、このゲームのクリアとみなし、全プレイヤーを開放する。どうかね？」

その言葉を聞いて、俺は戦いを求める本能を制御した。隣の少年の雰囲気を見て、というのもあるが。

「キリト」

肩を一つ叩いて、静かに首を振る。それだけで十分なはずだ。

「キリト君だめだよ……！ここで、君を排除するつもりだよきつと……！」

痺れに似た不快なフィードバックの中で、アスナが必死に訴えかける。正直俺も同意見だ。魔王に対する勇者がキリトで、ジョーカーが俺だとあいつは言った。なら、排除したいと思うのは当然とすらいい。だが、俺はその横で、この少年の意志が固いことを悟った。なら、俺は俺の信条に従う。ここではなく、先を見据えた選択肢だ。そのため、俺は一步下がった。

「俺は降りる」

「ほう、ここでゲームクリアのチャンスだというのにな？」

「そうかもしれないがな。長い目で見たとき、ゲームクリアを目的とするのなら、あんと戦うのは合理的じゃないと判断したまでだ。その代り、でかい貸し1つてことにしておく」

俺のその言葉に、ヒースクリフは面白そうに笑った。このでかい貸し、というのがどこで使えるかというのがあるが、切り札の一つとして手元に置けるのは事実だ。

「よかろう。で、キリト君はどうするのだね？」

その言葉に、キリトはまるで未練を絶つようにアスナを見た。

「いいだろう。決着をつけてやる」

「キリト君……!」

「ごめんな、アスナ。ここで退くわけにはいかないんだ」

「死ぬつもりじゃ、ないんだよね……?」

「ああ。勝つてこの世界を終わらせる」

その言葉には強い意志が込められていた。そのことははっきりと分かった。ゆつくりと腕を抱えていたアスナを下ろすと、キリトは静かに二本の剣を抜いた、

「キリト!」「キリト!」

クラインとエギルが大声を出す。だが、その程度でキリトは止まらない。

「エギル。今まで、中層クラスの剣士のサポート、サンキュな。知ってたぜ、お前が儲けのほとんど、そっちにつき込んでたってこと」

その言葉に、エギルは驚いたように目を見開いた。大方知っているとはいない。かっただのだろう。ゆつくりとキリトはエギルに笑いかけ、キリトはクラインに目を向けた。

「クライン、……あの時、お前を置いていつて悪かった」

その言葉に込められた意味を、俺ははつきりと理解した。

「て、めえ……キリト!今謝ってんじゃねえよ!向こうで飯の一つでも奢って、それで

ようやくチャラにしてやる！」

「ああ。向こうで、な」

なんだかんだで攻略組でも年長組の一人であり、粒ぞろいの実力主義な小ギルドの長であるクラインもそれを察したのだろう。俺が思っていたことをそのまま言ってくれた。

「ロータス。ここで全滅して終わるかもしれない、土壇場で駆けつけてくれてありがとう。お前のこと、ようやくわかった気がする。それにレインも、そんなこいつを支えてくれて、感謝してる」

「そうかよ。でもな、短い付き合いで勝手に分かったつもりになってんじゃねえ。人つてのは表層で語れないからな」

「だから面白いんだよ。付き合っていくうちに、いろんな面が見れるんだから。だからさ、これからも、みんなのいろんなところを見てこ？」

俺たちの言葉は、偶然か必然か同じと喋っていいものになっていた。

「死ぬんじゃねえぞ」

「ああ」

俺の低い声に、キリトは頷いた。最後にキリトは、アスナに一つ微笑みかけて、
ヒースクリフの前^魔に立った。

「悪いが、一つ頼みがある」

「何かな？」

「簡単に負けるつもりはない。が、もし俺が死んだら。——少しの間でいい。アスナが自殺できないよう、計らってほしい」

その言葉に、ヒースクリフは少し片方の眉を動かした。それは驚きのようだが、微妙に別の感情も交じっているように見えた。そして、軽く目を閉じながら言った。

「・・・よからう。彼女は、圏外に出られないような設定にしておく」

「キリト君、そんなのだめだよ！そんなのってないよー！ツッ!!」

アスナの嗚咽交じりの絶叫が響く。が、キリトは振り返らなかつた。ゆっくりと二本の剣が戦闘態勢に構えられる。その中で、ヒースクリフのHPバーがキリトとほぼ同値——いや、実際同値なのだろう——に変わる。そして、*changed into mortal object* の表示と共に、ヒースクリフは抜剣した。大きな盾を前に、剣を後ろにした、攻撃より守備を重視する、SAOではよく見られる構え。冷静で冷え切ったヒースクリフとは対照的に、キリトは冷えてはいないものの激情をたぎらせているのが後ろ姿でもはつきり分かつた。

「殺す……!」

一言、鋭く呟くと、キリトは低い姿勢で疾駆した。その剣に輝きはない。それもそう

だろう。考えればすぐに分かることだ。この世界を一から作った張本人相手に、システムの補助を完全ともいつていいほどに受ける型――ソードスキルを使うものなら、攻撃はすべて読まれる。しかも、このあたりの練度になつてくればコンボから締めでソードスキルは半ば定石だ。加えて、情報によればキリトは剣技連携スキルコネクトすらも使えるようになつてゐるらしいが、それも所詮はソードスキル。つまり、キリトの勝利条件はただ単純に、その反応速度をフル活用し、しかもスタイルに合わない戦闘方法で無理矢理突破口を開き、ヒースクリフの絶対防御を括り抜けて剣を突き立てることなのだ。そしてヒースクリフはただ、相手が焦れてソードスキルを使つてくるまで防げるかどうかだ。加えて、ヒースクリフの盾は防御性能に優れたタワーシールドに近い大楯。その難易度の差は推して知るべしだ。

お互い、先のデュエルで手のうちは明かし合つてゐる。息つく暇も隙もないキリトの連撃は、正確無比なヒースクリフの盾さばきで尽く叩き落された。加えて、少しでもキリトが隙を見せようものなら容赦なく攻撃を仕掛けて来る。その瞳は、どこまでも冷静で冷徹だった。

(すげえな……)

息つく間の無い連撃。しかも、それを一発クリーンヒットで即終了のHPで繰り広げる。それがどれほどの集中力を要するか。キリトはどうやらモチベーションを集中力

に変換するタイプのようだから、ある程度熱くなってもある意味仕方ない。だが、ヒースクリフ——茅場は対照的だ。静かに、集中力を高める。そのため、あいつの場合、極限まで集中すると逆に静かになる。その対比がはつきりすればするほど、お互いの集中力が増しているということになる。が、

（気づけよキリト、相手も決めどころがなくて困ってるはずだ・・・）

二刀流が最強の矛なら、神聖剣は最強の盾だ。なら、後は使い手次第。それにキリトが気付いているかいないか、そこが大きな分かれ目となる。が、俺は嫌な予感がしていた。というより、はつきりと予感していた。

やがて、ヒースクリフの的確な反撃がキリトの頬を掠めた。それに、一瞬だがキリトの表情に焦りが見られた。

「いかんー！」

思わず声を上げるが遅かった。キリトの二本の剣がまばゆい輝きを放つ。それは、まぎれもなくソードスキルの輝き。その瞬間に、ヒースクリフが両頬を歪めた。それは、確信の笑み。それが何を意味するのかをすぐに理解したキリトは、しまったという顔をしていた。

先も言った通り、製作者たる茅場、ひいてはヒースクリフにソードスキルの動きは通用しない。完全に読み切られる上に、あいつはその硬直を狙えばいいだけの話なのだか

ら。

完全にキリトの攻撃が防ぎきれられ、その途中でキリトの左手の剣の先がぼつきりと折れた。最上位技の長い硬直に入ったキリトに、ヒースクリフはゆっくりと剣を掲げた。

「さらばだ、キリト君」

だが奴は、一つ致命的なミスを犯していることに気付かなかった。俺は静かに身動きをとった。ヒースクリフにとって、この一太刀は外してはならない一太刀だ。だから、そこに集中する。そう、俺が何をしているのか、あいつの目には入っていない。それが、俺にはわかった。

「ぬかったな、ヒースクリフ」

それだけ呟くと、俺は右手を静かに離れた。直後、ヒースクリフの手から彼の剣が離れる。

「ぬうっ・・・!?!」

何が起こったのかわからないという顔で、ヒースクリフが手を押さえる。あいつが見た俺はいつたいたどういう顔をしていたのかはわからないが、第二射の準備をしている俺を見たというのはつきりと分かった。地面に落ちた自分の剣を構え、こちらを見据えた直後、

「はああああああつ!!!」

二つの少年少女の声と共に、その体に二本の剣が突き刺さった。その時、若干だがヒースクリフ——茅場は笑ったように見えた。一泊遅れてヒースクリフの体がポリゴンになり、その場が静寂に包まれた。

——ゲームはクリアされました——

無機質なシステムの声が、やけに大きくボス部屋に響いた。そして、俺たちの意識は闇に落ちた。

次に俺が目を覚ますと、そこは夕焼け空だった。そういえば、ボスをクリアした時間を見ていなかったが、始まったのが昼過ぎで、あれだけの激闘があり、しかも今の季節が昼の短い冬であるということを考えるとこの空も納得だった。だが、まるで空に浮いているようだとはこれいかに。

最後の瞬間、俺は、あいつが麻痺を忘れかけていたことをいいことに、狙い定めたスナイピングをしたのだ。最後の一番いいところをかつさらっていくようでシヤクだったが、まあもともと俺はこんな役回りだ。

俺が疑問を浮かべる視線の先には黒白夫婦がいた。あそこに割ってはいる気はない。これが最後の光景だということは、俺にもおぼろげではあるが分かった。なら、最後の

瞬間くらいお互いの想い人と二人きりにさせてやるのが人情というものだろう。

「君は最後まで、そのような考えを貫くのだな」

やけに落ち着いた声が俺にかけられる。その口調は、声こそ違えどそのままだった。

「それが俺だからな。それに、最後まで水入らずでいさせてやったほうがいいだろう。違うか？ 茅場晶彦」

ゆっくり振り返って俺は言った。

「そう、だな。そういうものだな」

その目がどこか遠くを見つめていることを俺はとつきに見抜いていた。

「あんだ、恋人でもいるのか」

「——ああ。明確な告白をしてもされていないし、どうしようもない人だが、——私
はあの人に心を許している」

こいつにしては珍しく、かなり考えながらの回答だった。

「なら、傍にいてやれよ」

「それができるのならしている。だが、——私にその資格はない」

その言葉に、俺は微かに笑ってしまった。

「あんだ、本当に荒野と崖のようなすさんだやつなんだな。少し驚いたよ。もう少し愛憎に狂って初恋相手とのその子供殺す、くらいのはしてもおかしくないと思ったん

だが。名前的に」

「私としてはそのようなマイナーなネタを君のような若者がいうことが驚きだがな」

その言葉に俺は、微かに笑った。

「人は見かけによらないってことだよ。あんな細っぽつちの、幼さすら残る少年少女が勇者になっちまうようにな」

「———そうだな。では、その勇者たちに声をかけることにするよ」

それだけ言うと、茅場は俺の隣を通り抜け、キリトたちの下に向かった。

「おい、ヒースクリフ。俺がお前に貸しがあったこと、忘れてないよな？」

「ああ。忘れなどしないさ」

「ならその貸しをここで清算させてもらおう。」

———MHP02、あれをもらい受けたい」

その言葉に、茅場は片眉を上げた。

「あれを、か。確かに、バグも大方消去されてきているようだ」

「ああ。いいか？」

「お安い御用だよ。アーガス本社サーバー内のデータはオールデリートするつもりだからな。ついでのついで、というやつだ。彼女のデータは、君のローカルメモリに保存されるようにしておこう」

「そうか。感謝する。」

「ところで茅場、何人助かったんだ？」

「6508人、といったところだ」

「そうか」

俺が助けられたのが何人なのか、助かるはずだったのに摘み取った命が何人なのか、そこまではわからない。だが、この場合は6500人が生きて帰ることができた、ということに感謝すべきなのだろう。

「それと、これで清算できたと思わなくてもいい。何か要求があれば言ってくれ。もつとも、叶えられるのなら、だが」

「覚えておこう」

それだけ答えると、茅場は今度こそ黒と白の勇者たちの下へと向かった。その背中を見て、俺はゆっくりと空を見上げた。真つ赤な空は普通には綺麗と感じるのだろう。だが、俺には幾度となく見てきた傷跡のポリゴンの色を連想していた。時々見える黒っぽい赤い雲は、まるでそこから血が自分に滴ってくるのではないかと錯覚するほどだ。

「ロータス、君、なんだよね？」

その声に、俺はゆっくりと目を閉じた。顔を一度下げ、もう一度ゆっくり上げながら目を開ける。そこに映ったのは、プラチナブロンドの長い髪に、可愛らしく端正な顔立

ちの少女——レインが、こちらに歩いてくるところだった。

「・・・こうしてゆつくり話すのはいつ以来だろうか、レイン」

「そうだね」

それだけ言うと、レインは俺に倒れこむように抱き着いた。

「会いたかった・・・」

それだけ、ぽつりと漏らした。

「そう、か」

ここまで来て、ようやく俺はこの少女が自分に抱いていたであろう感情の正体に気付いた。いや、気付いていたことに気付いた、というべきか。

「心配、してくれてたんだな」

「当たり前だよ。あんなに、考えるまでもないほど重たいものを背負って、それで心配にならないほうがおかしいよ」

「そう、か・・・。サンキュな」

そう言つて、ぽんぽんと柔らかく背を叩いた。両肩を掴んで顔を見る。

「そんな優しい顔、初めて見た」

「そうか？」

「うん。でもそれで安心した」

それだけ言うと、もう一度レインはゆっくりと俺の体に顔をうずめた。

「なあ、レイン。お前、名前はなんていうんだ？」

その言葉の真意に、レインはすぐに気づいたのだろう。少しの間があつてからゆつくり言った。

「からたち枳殻虹架。植物の枳殻に、虹が架かるつて書いて、虹架」

「にじか、か。いい名前だな」

「ロータス君は？名前」

「あまかわれん天川蓮、だ。天の川に、蓮」

自分でも驚くほどあっさり、その名前は出てきた。いつも自己紹介など、苦手の最右翼だというのに。

「れん、か……。それでロータスだったんだね」

「ああ。そう言うお前は、虹でレイン、か」

「うん」

それだけ言うと、レインは真正面から俺の目を見た。

「またね」

「ああ。またな」

それだけ言うと、甘えるようにレインはまた顔をうずめた。その背中に、俺はゆつ

りと手を回した。

——そして、世界は真っ白になった。

次に目を開けたとき、見えたものはなかった。そこはただ真っ暗だった。

「いやー驚いたね。門番程度に使えるやつがつれれば儲けもの思っていたが、まさかこんな良い駒がとれるとは」

どこからか、粘性すら感じる声が聞こえる。

「でもまあ、使える駒がとれたんだ。ちょうどいいし使わせてもらおうか」

それだけ聞こえると、再び俺の意識は闇に沈んだ。

再び少年が目を開けたとき、その部屋にいるのは下卑た表情を浮かべた金髪の美男子。だが、その表情がすべてを台無しにしていた。

「さて、と。私が誰かわかるか？」

「はい、妖精王オベイロン様」

「よろしい。ならば君は？」

「ホロウと申します。以後何なりとお申し付けください」

「よしよし」

満足げに金髪の美男子——オベイロンが囁う。

「なら手始めに、アイフリードの狩場のサラマンダーを滅ぼしてこい。それだけの力は与えるし、技量も問題ないだろう」

「御意」

それだけ言うと、青年はその場から掻き消えた。

そんな会話をした直後、ネームドとの対戦に戦に備えていたサラマンダーの軍勢は、突然目の前に現れた、プレイヤーともNPCともつかぬ赤い外套の青年を見定めていた。

「ああ？誰だあんた」

「私が誰など、関係はない」

それだけ言うと、ゆっくりと剣を抜き放った。そこからは余裕以外に何も感じなかった。

「調子こいてんじゃねえぞ、クソ野郎」

その様子に集団が次々に得物を抜いた。直後、その青年の姿が掻き消えた。訳の分か

らないといった様子の集団が、一人、また一人と消えていく。

「貴様……、何者だ！」

「言つたはずだ。私は何者かなど関係ないと」

すぐに手首を返し、首を刎ねる。

「さて、次は誰だ」

ゆつくりと振り返ると、そこには蜘蛛の子を散らすように逃げるサラマンダーの群れ。見逃してもいいが、俺が主から受けた命は「滅ぼすこと」。つまり、殲滅以外の選択肢はない。圧倒的ステータスで一気に踏み込むと、俺は次から次へとその刃を振るってリメインライトに変えていく。だが、俺にはリメインライトなどわからず、炎を斬っても変化がないことから、ようやくそれが、HPがなくなった証であると分かった。

「私の名はホロウ。王の影として裁きを下すもの。覚えておきなさい」

それだけ言うと、ホロウは再び消えた。

A L O 編

4 3. 蓮を探して

「おはようございませう」

朝、いつものように私はバイト先に挨拶をして、着替えて現場に入る。

S A O がクリアされてから数か月、私は生活に戻っていた。もつとも、学校に復帰するにはあまりにも中途半端だったから、学校へは復帰していないから、果たして私たちの年での「普通」とは言い難いが。

いつの間にか年がまた変わっていた。そして、私の生活は、学校の有無だけでなく大きく変わっていた。

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

私は、S A O から帰還して、リハビリを終えると、今度はバイトを始めていた。バイト先はメイド喫茶だ。バイト先がメイド喫茶であることは、母には隠してある。来春から S A O 帰還者のための学校が始まることはもう通達があつて、それに伴って一人暮らしを始めていた。なけなしの貯金と S A O での賠償金を使って、母は一人暮らしをする私に家電などを買いそろえてくれたから、衣食住に困ることもなかった。普通で考えれ

ば、私くらいの女子高生で一人暮らしなんてしようものなら、家事全般が壊滅的なことになって目も当てられなくなるのがオチというものだが、私の家は母子家庭で、私もある程度以上に家事はできる。その辺はぬかりなかった。

「それでは、こちらへどうぞでー！」

笑顔で営業を続ける。それが、自分がSAOから帰ってきて来た私の日常、その一端だった。

SAOから帰って、いろんなことがあった。それを一気にいろんな人から聞かされて、私は年甲斐もなく知恵熱が出るかと思つたほどだ。その中で、私は役人の人にある人物の行方を聞いた。それは、私が半分妄執のようにならずと追つてきた、ロータス君と天川蓮さんのことだった（聞いてみて分かつたことだが、彼のほうが年上だった）。

彼は東京ではなく、愛知県のほうでダイブしているらしい。愛知の真ん中あたりの位置の場所でダイブして、そして、——まだ目覚めていない。コツコツ溜めたバイト代の一部を交通費に当てて、私は彼のお見舞いに行つた。だが、そこにいたのは、やせ細つて、ナーヴギアをかぶり、ただ寝続ける彼の姿だった。

「レインちゃん、お客。ご指名」

「あ、はい」

S A O が終わって、そんな生活をしてもう二か月になる。距離が距離だけに、そうそう頻繁に会いに行けるわけでもないが、目が覚めたら連絡してくれとは言つてある。それで連絡がないということは、——つまりはそういうことなのだろう。

「あそこのお客様ね」

「分かりました」

別のスタッフから私を指名された人を指す。その人は眼鏡をかけている女性で、どこにでもいそうな程度には整った容姿をしていた。

「お待たせしました、お嬢様」

「やつほー」

静かながらも確かに親し気な声で話しかけてきたその客に、一瞬怪訝な顔をしてしまう。何故かといえば、自分は目の前の人物に心当たりなど——、いや、待て。もしこの人物が眼鏡を取って、瞳を暗い青色にしたら。そして、その服装を、あの世界のようにしたら。

「——エリーゼさん？」

「そ。おひさだね、レインちゃん」

予想が当たつていてほっとした半面、驚きもかなり大きかった。

「どうしてここが分かつたんですか？」

「ん？ちよつと、ね。ま、その辺は深く聞かないほうがいいよ」

そんなことを言いつつ、私に向かって一枚のメモ用紙を渡した。

「連絡先。近いうちに連絡して？」

「何かあつたのなら、ここで話せばいいじゃないですか」

「まあそれはそうなんだけどね。仕事の時間をこれ以上割いてもらうっていうのは、私としても罪悪感大きいし。何よりきつと、聞いたら仕事に手がつかなくなるよ？」

その言葉、そしてその雰囲気、思わず私は息を呑んでしまった。この女性は、冗談は多いし時折本意が分からなくなる、本当につかみどころのない女性なのだが、無意味な嘘はつかない。そんなことをされたことがなくとも、なんとなくそれが分かる程度には、私はこの女性を分かっているつもりだ。

務めて自然な動作でメモを受け取ると、それを普段は何も入れないポケットに入れた。それを見て、エリーゼは満足げに微笑んだ。

「うんうん、ありがとね。それだけ。またどっかでお茶しよ？」

「はい。では、失礼します」

職業病といつてもいいほどに身についた動きでその場を立ち去ると、私は普段の仕事に戻った。

帰ってから、エリーゼの一件は頭の片隅に残っていた。そして、部屋のベッドで腰かけ、私は渡された電話番号に電話をかけた。エリーゼさんはすぐに出た。

「もしもし?」

「もしもし、レインですけど」

「ああ、レインちゃん。さっそくかけてきてくれたわけね」

「あ、はい」

「うんうん、お姉さんうれしいよ。それで早速だけども、どつか時間見つけれない? ちよつと積もる話もあるし、できればちよつと遠くまで、ね」

遠く、という場所に込められたニュアンスを、レインは正確に感じ取った。

「・・・分かりました。でも、今ちよつとお金がないんですけど」

「いやいや、年下の女の子に払わせるほど私は人でなしじゃないよ。そんなくらい出したげるって」

交通費についても、これでクリアだ。その後、待ち合わせなどをしてその電話は切れた。電話を切つて、携帯を横に放った。そのままベッドに身を預けると、額に手を当てた。

(遠く、か)

彼の搬送先も、ここから考えれば十分に遠い。電車で行こうと思えば、新幹線という

選択肢が真つ先に思い浮かぶ程度には遠い距離だ。加えて、連絡を取ってきた相手が相手だけに、無関係だと笑い飛ばすことは到底できなかつた。とにかく、

(考えても仕方ない、か)

それだけ考えると、適当なゴムボールを手にとつた。リハビリでほとんど戻ってきているとはいっても、元の体力を考えればまだまだだ。加えて私はバイトもしているから、その分の体力もつけなくちゃいけない。だからこうして、今でもリハビリをしている。もつとも、気が向いたら程度でよくなった、ということを考えれば、十分に進歩ではあるのだけど。

あれから数か月。数か月だ。いくら戻るときにラグがあるといつても、数か月以上もラグが発生するなど考えられない。そして、あの鋼鉄の魔城が崩壊していく様を見ていた私からすれば、SAOサーバーからのログアウトが完了していない、などということもないとはつきりと言いきれる。ではどうして、彼は戻ってきていないのか。そして、それを見計らつたような、エリーゼの連絡。まず間違いなく、これはつながりがある。そのために、ゆつくり休むのが先決だ。そう思った私は、今度はしっかりと寝る体制に変えた。

そして、約束の日。私が待ち合わせの場所につく前に、エリーゼさんはもうすでに居

た。

「ごめんなさい、お待たせして」

「そんなに待ってないから大丈夫。それと敬語はなしだよ、レインちゃん」

「あ、は・・・じゃなかった、うん」

「よし！」

一つ笑って頷くと、エリーゼさんは思いっきり手を取って引つ張った。

「ほらほら、電車はこつちだから。何、電車に乗ってる時間も長いから、積もる話はそこで」

「あ、うん、分かった」

このどこか無理矢理さすら感じさせる強引さで私はこの人がエリーゼさんだということに気付いた。そして、それに不自然や不愉快さを感じさせない不思議さも変わらな
いと思った。

新幹線で、私たちのほかにはほとんど誰もいなかった。半分貸し切りのようで、私は
少し緊張した。

「なに、緊張してんの？」

「あ、はい、ちよつと・・・」

「ふっふっふ、可愛い奴め。ま、そう硬くなんなくてもいいよ。高々2時間前後だし、そのくらいなら喋ってたらすぐでしょ」

そう言うのと、改めて切符を確認しつつ席に座った。

席に向かいあうと、エリーゼさんは真正面から私を見た。

「さて、改めて自己紹介するね。」

エリーゼこと、たはなえり橘永璃。漢字は植物の橘に、永遠の永、瑠璃の璃。よろしく」

「レインこと、枳殻虹架です。植物の枳殻に、虹が架かるで虹架、です」

改めて、リアルネームで自己紹介する。

「ふうん、虹が架かる、でレイン、ね。いいネーミングセンスしてるね」

「そんなことないで・・・よ」

「そんなことある。少なくとも、永璃だからエリーゼ、なんていう直球のネーミングセンスよりよっぽどかマシ」

「そうか、な・・・?」

「そういうもんよ」

それだけ言うと、エリーゼさん改め永璃さんはバックから何やら資料を取り出した。

「まずこれを見てもらう前に。SAOを経営していたアーガスがどうなったのか、知っ

てる?。」

「・・・知らないけど、あれだけの事件を起こしてただでは済まない、よね?。」

「その通り。ま、そこから説明しようか。」

まず、虹架ちゃんが推測した通り、アーガスは多額の賠償を抱え、倒産した。正確には、開発費と賠償金で多額の負債を抱えて会社は消滅。でも、SAOに遭遇した人間を生かすには、サーバーを維持する必要がある。その維持を請け負ったのは、レクトつという企業。そこで・・・あつた、これ」

そう言うと、一枚の紙を見せてきた。

「何かの名簿ですか?」

「そ。正確には、SAOに巻き込まれた人物の一覧」

「・・・そんなもの、どこで?」

「ま、企業秘密つてことで」

本当にこんなものどこで手に入れたんだろうと思うが、これ以上聞くと蛇は蛇でもキングコブラあたりが出てきそうなのでやめておくことにした。

「で、問題は、このサーバーの維持が切り替わった、つていう点。つまり、その間で何か介入があれば、つてお話し」

「・・・まさか、その、レクト?が何か仕掛けた、つてことですか?」

「そのまさか。ま、私もここまでホコリが出て来るとは、思ってたけど」

そう言うと、資料をさらに数枚めくる。そこにあったのは、カラーのスナップ写真が数枚。そこには、二人の男が写っていた。

「この人物は？」

「年配のほうは、結城彰三氏。さつき言ったレクトのCEO。有体に言っちゃえば社長さん。で、若いほうが、須郷伸之。レクトのフルダイブ技術研究部門、つまり、今SAOサーバーを管理下に置いている部署に勤めてる」

「随分と懇意のようですね」

「そうだね。こんな写真が何枚もとれる程度には懇意みたいだね。それに、その写真がとれた場所が場所のだけに、余計ね」

「どこなんですか？」

「所沢の病院。やったらセキュリティ厳しいし、そんじよそこの病院じゃないだろうな、」と思つて調べてみたら・・・」

そこでいったん言葉を切つて、もう一枚資料を取り出した。

「かなり大きな病院ですね」

「うん。それこそ、SAOに囚われて目覚めない社長令嬢が入院していてもおかしくないくらいに、ね。で、そこに父親が来るのはまったく不思議はないんだけど、」

「一社員がわざわざ見舞いに来るなんて、ということですか」

「そういうこと。加えて、アスナ——結城明日奈は16歳。民法上、結婚も可能な年齢ときてる」

「まさか!」

思わず声が大きくなる。それを見て、永璃さんは静かに唇に人差し指を当てた。その目つきがいつになく真剣なことに、今更のように気がついた。

「ありえない話じゃないよ。しかも、須郷はフルダイブ部門の主任と来ている。今S A O未帰還者の生死はこいつの手にかかっているといっても過言ではない。で、そこで後二個、決定的なやつが出てきた」

そういつて、今度は二枚紙を渡した。そこまでネットに詳しいわけではないからよくわからないが、

「・・・何かの接続先?」

「ん。正確には、今レクトサーバーに、頻繁に接続している人間のね。場所が場所だから、気付き辛かったけどね」

「どこなんですか?」

「レクトつてゲームも経営してるんだけど、そのゲームサーバー。だから気づき辛かったのよ。ただ単に頻繁に接続してるだけならただのゲーマーで片づけられちゃうから。」

でも、いくらなんでも流石にこれは、ね」

そういつて、その資料に載っているものを指した。

「でもま、それだけだと分かり辛いにもほどがあるから、もう一個作ってきた。それがもう一枚」

そういつてめくると、そこには接続時間の長い順に、ある一定の塊で統計をとったデータが示されていた。

「さすがにいくらなんでも、記録にある範囲でさかのぼってイン率が80%どころか90%、一部は100%近いっていうのはあまりにもおかしい。飯いつ食ってんだ、そんなに長い間ほとんど眠らなくて大丈夫なのかって話になるし、何よりそんなにインしていたら生活にも支障が出る。で、そこでさらに調べてみたら」

そういつてもう一枚とりだした。そこには、先ほどのSAO遭遇者の名簿に、さらにいくつか蛍光ペンのしるしがあった。

「この通り。IPアドレスが一致したことも考えれば、そのゲームサーバー内に潜り込まされている可能性が高い」

「いったい何のために……」

「さあね。ただ、」

そこでいつたん言葉を切ると、永璃さんは目を細めた。

「ろくでもないクソツタレな臭いがするっていうのは、確かだね」

その顔は、ただ真剣というにはあまりにも鋭さを帯びていた。

それからは何とか、雑談で間を繋いだ。電車を降りて、それからは殆ど会話もなかった。ついた場所は、やはり蓮さんが入院している病院だった。

病室について、さらに永璃さんは鞆の中から紙を取り出した。

「電車の中で言ったように、SAO未帰還者はレクトのゲームサーバー内にいる可能性が高い。けど、その決定打が見つからなかった。だけど、その決定打となったのはこれだったのよ」

そこに映されていたのは、赤い外套に身を包み、弓を背負い、刀を手にした青年の姿。顔は斜め後ろからだからよくわからないが、顔をはつきり見なくとも誰か分かった。

「……ロータス君!」

「そう。彼は、特に長いんだ。その反応から察するに気付いていなかったみたいだけど」
そう言うと、電車の中で見せた資料をもう一度繰り出した。その中の、接続順に並べられた中のトップを指差した。そこに書かれてあった場所は、

「ここから……!?!ちよつと待つて、てことは」

「そう。間違いなく、彼は一番長くそのゲーム、アルヴ Heim オンラインに接続してい

る。そして、まだ目を覚ましていない」

そういつて、ゆつくりと彼の肌を撫でる。その目は、慈愛に満ちていた。

「どんなゲームなんですか、その、アルヴヘイム、でしたっけ？」

「まあまあ落ち着きなさんな。順番に話していくから。」

アルヴヘイムオンライン自体は、潰れかかったVRゲームの中でも古参なものだよ。

S A O 事件があつてもVRのブーム自体は衰えなかつた。そこで、大手メーカーからナーヴギアの後継機が登場した。それ用のソフトも、ね。その中の一つが、アルヴヘイムオンラインってわけ」

「アルヴヘイム、ってどんな意味なんですか」

「平たくいっちゃうと、妖精の国とかそんな感じの意味」

「ファンタジー系のほのぼの系に、こんなのは似合わないと思うんですけど」

彼の雰囲気は、写真越しでもわかるほどにS A O と似通っている。ついでに言えば、得物も似たようなものだ。どう考えてもほのぼの系ではない。

「いやー、それがね。羊の皮被った狼よろしく、まったく実物と題名の印象が違うんだよね。」

ドスキル制な上にPK推奨、プレイヤースキル重視っていうね。もうそれプレイする人間を選ぶって感じの雰囲気だよ。ファンタジーなのは世界だけ」

「・・・まるでソードスキルがないSAOみたいですね。あれも、ちゃんと動かないといけませんし」

「その代り、魔法とか弓はあるから、遠距離でちまちまやるっていうのもできるけど。まあその場合はそれに応じた立ち回りしてやらないと悲惨なことになるけどね」

SAOでも、かなり男性向けの、人を選ぶジャンルだっただけに、それをさらにハードな内容にしてしまった、というのは間違いではないらしい。

「でも、それじゃ人気は出ないんじゃないですか・・・？」

「いやー、そうでもないのよね、これが。飛べるからっていう理由から遊んでる人は結構多いみたい」

「飛べる・・・って、飛行機みたいにですか？」

「飛行機っていうより、鳥に近いかなー。アルヴヘイムが妖精の国って話はしたでしょ？」

「あ、はい」

「あれ、プレイヤー自身が妖精になるのよ。つまり、プレイヤーの背中に羽が生えて、それでパタパタ飛べる、っていうからくりみたい。飛行機とは別物だから、これはこれで人気があるみたいだね。あと、世界がリアル、って結構評判。まるでSAOみたいだ、って、自称本サーブスでログインできなかった元SAOβテスターが言ってた」

「SAOみたい・・・」

SAOサーバー管理を引き継いだ会社のゲームが、まるでSAOのようだと言われる。それは、決して偶然ではない気がした。

「ま、偶然じゃないだろうね。SAOのサーバーからスキミングするくらいなら、ちよつと詳しい人間なら誰でもできるだろうし」

「ということは、SAOの根幹プログラム、えつと、ユイちゃんが確か言つてたやつ、だよね？」

「そ。それに、何人かSAO帰還者がALOをプレイしてるんだけど、SAOのデータの一部がALOにそっくりそのまま引き継がれてた、つて言ってるんだよね」

「偶然、で片づけられる話ではないよね」

「そういうこと。で、百聞は一見に如かず」

そう言つて手渡されたのは、明らかに新しいソフト。その表紙には、`“Alfheim Online”`の文字。

「私のサブ垢があるけど、どうする？自分のアカウントで行く？それともそもそもでもない？あ、ナーヴギアで動くから、ハードは心配しなくて大丈夫」

自分は止めない。その顔に書いてあつた。だが、そんな顔をされなくとも、答えは決まっていた。

「私のアカウントを使う。ないのなら作る。そのまま、私はアルヴヘイムに行く」
迷いなど、あるわけがなかった。

44. 仮想世界で

家に帰って、まだ回収されていなかったナーヴギアを取り出した。ソフトは永璃さんからもらったし、このソフト自体はナーヴギアで動くらしいので問題ない。とにかく、私はあの人にまた会いに行くために、自分の意志でナーヴギアを被る決意をした。それだけだ。

永璃さんとは向こうで合流することになっている。あとは私がダイブして会いに行くだけだ。永璃さんにも、そして、——蓮さんにも。

「リンクスタート！」

そして、二年前のあの日以来使われなかった台詞を言うと、まるであの日のようにナーヴギアは接続を開始した。

接続した直後、最初の設定画面に移った。名前は今まで通り、“rain”でいいとして、種族の選択画面で私は一瞬固まってしまった。エリーゼさんの種族はケットシーらしい。なんでも、見た目は猫のようにかわいらしく、テイミング——モンスターを飼いならすことにたけているらしい。彼女に言わせると、猫のような敏捷性と視力の良

さからケットシーにしたそうだ。正直、前線に出られない種族は私の肌合いそうにない。戦闘の支援という点でウンディーネやプーカもいいが、私はそこまで器用ではないのでなし。インファイトがそこまで大好きというわけでもないのだからサラマンダーも却下。宝探しが好きというわけでもないから、スプリガンも却下。と、ここまで考えたところで、一つの種族が目に残った。

「レプラコーン……」

鍛冶妖精レプラコーン。その名前の通り、装備を作ること得意とする種族だ。考えてみれば鍛冶屋はリズさんくらいしかいない。それに、モンスタードロップの装備は、決して性能と見た目が一致しているとは限らない。むしろ、性能がいいのを見た目が、というものも結構多い。性能だけで装備を選ぶと妙な見た目になってしまうことも多かった。そのため、見た目だけのアレンジとして鍛冶屋に持ち込む人もいたくらいだ。無論、完璧に見た目をアレンジできることなどあまり、いやほとんどないといつていいが、それでも幾分ましになることは多かった。それに、私だって女の子だから、おしやれの一つくらいはしたいというものだ。それをタップすると、確認タブのYESを押しした。

『では、ホームタウンに転送します。よい冒険を！』

システムメッセージが聞こえた直後、私に襲ったのは転送の感覚——ではなく、足

元が崩れるような感覚だった。

「うわああああああ?!?!?」

流石にこれは面食らつて、自分でも情けないと思う悲鳴と共に私は落ちて行つた。

(えつと、確か・・・!)

一応事前にある程度、このゲームについて調べてはある。意志力だけで飛ぶことができる、らしい。そのための行動を起こしてみるが、なかなかうまくいかない。仕方なく、私はもう一つの方法——コントローラーによる手動コントロールに切り替えた。何とかホバリングをしつつ周囲を見るが、街らしき影は全く見当たらない。どうやら何らかのバグのようだ。

こうなってしまうっては仕方がない。とりあえず今のステータスを確認しよう。そう思つて左手でメニューを開く。SAOと何ら変わらないような、というよりほぼ一緒の作りに、私は驚いていた。似ているとは聞いていたが、ここまで似ているとは思つていなかった。ステータス画面に映ると、そこに映つていたステータスは、
(やっぱりというか、なんというか・・・)

想定通り、SAOのステータスそのままだった。とここで、妙な通知が入った。

(メール通知? 誰から? なんで?)

さすがに開始数分で垢割れ——アカウント情報漏えいを引き起こしたとは考えづ

らい。となれば誰だろうか？と思いつつ私はそのメッセージを開けた。どうやら何か添付されているようだ。そのアイテム名は“M H C P O 2”。なんだろうと思いつつ開けると、そこには一つ薄紫の滴があった。

(これって……)

それには見覚えがあった。正確には、それに似たものに見覚えがあった。恐る恐るタップすると、目の前に現れたのは、薄紫でかすかにウェーブがかかった髪をした、見た目私と大差ないくらいの少女だった。その少女に見覚えはないが、心当たりはあった。

目の前の少女は目をつむっていたが、やがてその目を開くと、私の顔を見て微笑んだ。

「やっぱり、あなただった」

その言葉に、私は確信を覚えた。

「あなたは、ユイちゃんと……」

「そう。私は、元S A OのM H C P、その二号。コードネームはストレア、だよ。よろしくね！」

予想はやはり当たっていた。そういえば、ロータス君はデュエルを受けなかったという貸しを利用して、M H C P O 2をもらい受ける、とか言っていた。そして、それに対してヒースクリフは、そのM H C P O 2を彼のローカルメモリに保存するようにしてお

く、と言っていたはずだ。ならば、

「君は本来、ロータス君のローカルメモリに保存されている、はずだよな？どうして、こんなところに？」

「あー、まあ、話すとき長いんだけど……。その前に、プレイヤー反応。3人。こつちに向かっているところを見ると、PK狙いかな」

「PK、つて……。そうだった、このゲームPK推奨だったね」

「そういうこと。加えて真つ逆さまに落ちて来たら、そりや目立つつてもものよ」

それだけ言うと、ストレアは少し光ると文字通り小さくなった。サイズとしては手乗りサイズである。

「ええ!？」

さすがにこの変化は面食らった。

「ま、もろもろの説明はちゃんとするから、今は迎撃。お誂え向きに、初期装備は一括で片手剣だから、使いづらいつてことはないはずだよ」

そういわれて腰のあたりに目を落とすと、そこには確かに、いかにも初期装備というような片手剣があった。確かにこれなら、何も無いよりはよっぽどかましである。それに手をかけて、空を見上げる。すると、やがて三人の女性プレイヤーがやってきた。

「およ？女の子がこんなところに一人きりとは不用心だよーつとー」

その人物は、こっちに向かってくる、器用に空中で一回転して着地した。

「しかもレアアバターかな？かわいいね」

「あ、はい、ありがとうございます……?」

「いいのいいの、女にとつて容姿は武器よ」

かわいらしくウインクするその美人アバターの女性に、私は完全に毒気を抜かれてしまった。というか、ペースを完全に持っていかれてしまった。

「で、そんなバリバリ初期装備の格好で、どうして中立域にいるわけ？しかもソロで」

「あ、えっと、その、私にもよくわからないっていうか……」

「なにそれ、喧嘩売ってんの」

「あんたは黙ってな、話がこじれる。」

で、わからないっていうのは?」

三人のうち、私のあまりにもあいまいな物言いにイラついたのか、一人が食って掛かろうとする。が、それは最初に話しかけた人の一睨みで黙り込んだ。どうやら、この人がリーダー格らしい。

「なんか、最初にログインして、ホームタウン?への転送の時に、落っこちたと思つたらここにいた、って感じですよ」

「……なるほど、つまりはバグか。君、種族は?」

「レプラコーン、です。一応」

「へえー、女の子でレプラコーンかあ、めっずらしい」

それだけ言うと、しげしげとこちらを眺めた後で腰に手を当てた。

「よし、決めた！君をレプラコーンのホームタウンまで案内しよう。なに、心配することはないよ。私らそこそこ強いし」

「え、でも、私、会わなきゃいけない人がいて、」

「へえ、誰？」

「たぶんこつちだと、エリーゼ、って名前だと思うんですけど」

「エリーゼ、ねえ。綴りはわかる？」

「えっと、たしか、e, l, i, s, e, だったと思います」

そこまで会話したとき、今までしゃべってなかった人が口を開いた。

「ねえ、もしかしてそのエリーゼさんって、ケットシーの女性で傭兵やってない？」

「あ、そうかもしれないです。前のMMOだと、傭兵やってた、って言ってたので」

「・・・ビンゴかな。」

フカ、もしかしたらそのエリーゼさん、私の知り合いかもしれない」

「マジ!?!」

「こんなところで冗談言ってどうすんの」

まさかのまさか。こんなところで知り合いの知り合いに会う、いや会うことになろうとは。

「なら、今すぐメッセ送って。向こうがどこにいるのかはわからないけど、レプラコーンのホームタウンならまず大丈夫でしょ。あそこ事実上の緩衝地帯だし」

「りよーかい」

何気ないその呼吸から、かなり親しい間柄だということはわかった。確かに頼りになるらしい。

「なら、お願いしてもいいですか、護衛」

「いいってことよ。ついでにレクチャーもしてあげる。その感じじゃ、まだインして一時間もたつてないでしょ」

「一時間どころか、30分経ったかどうか・・・」

「だと思った。ま、このお礼はいつか、ってことで。」

私はフカ次郎。フカでいいよ。で、最初に食って掛かったこの狂犬がシエピ。こつちの普段は静かなのがベリア

「誰が狂犬か誰が！」

よろしく、シエピよ

「ベリア。よろしく」

「レインって言います。よろしくお願いします」

こうして、なりゆきで妙なパーティーが組まれることとなった。

「まず、随意飛行を習得しちやおうか」

「ずい、ひこう？」

「コントローラーなしの飛行のこと。こんな感じ」

そういうと、フカは少しだけ浮かび上がった。その手には確かにコントローラーがない。

「便利そうですね」

「便利だし、何より楽しいよー。まあ、妙な疲れ方するのが玉に瑕だけど」

それだけ言うと、フカはレインの後ろに回り込んだ。そして、静かにレインの背中を指一本でなでる。

「今指が触れてる場所、わかる？」

「あ、はい」

「ちようどこの辺がフライトエンジン、要するに羽が生えるその付け根の部分。そこを大きく素早く動かすのが肝。リーファに言わせるとスピードが上がるとちよつと羽の動かし方が違うらしいけど、その辺はあのスピードホリックに聞くしかないか」

「リーファ？つて誰ですか？」

「胸のおっきい少女アバターのシルフ。私もシルフのはしくれだからねー、一応知り合いなんだ」

「へえ。強いですか？」

「そりやもう。見た目かわいからつてなめてかかったら1分で沈められるよ」

「それはすごいです」

それだけ言うと、レインは背中中の動きに集中した。先ほどなぞられた部分は肩甲骨の少し内側から背中の中ほどあたりまで、縦に長くわたっていた。ということは、そのあたりの筋肉を動かしてやるイメージでやれば――！

「おお、うまいうまい。結構筋がいいよー」

「ありがとうございます」

「うむうむ、素直なのも高ポイント。さて、飛び上がりはジャンプとかでどうにでもなるとして、問題は着地だね」

「難しいんですか？」

「コツをつかむまでは。ただ、失敗すると文字通り地面とキスする羽目になるから、きつちり習得する必要があるのも確か」

レインちゃん、飛行機乗ったことつてある？」

「ありますけど・・・すごく小さいころの話なので、あんまり覚えてないです」
「そっか・・・、ならそっからかな。」

飛行機とか鳥とかかってね、着地時は翼を大きく広げるの。鳥はたたんでた部分も広げるし、飛行機は格納してある翼、フラップを広げて着地する。なんでかわかる？」

「・・・何ですか？」

「答えは簡単、減速するためだよ。でもただ減速するだけだと、今度は浮かび上がる力、揚力が足りなくなつて、墜落する。飛行機っていうのは、前から流れる空気によつて揚力を生み出してるからね。だから、それを補うために、翼を大きく広げて揚力を確保しつつ、減速して安全な速度で降下する。スピードが速すぎてもうまく着地できないからね」

「つまり、着地の時も、羽を大きく広げる必要がある、つてことですか？」

「お、飲み込み早いねー！その通り。正確には、横に大きく広げるの。さつき、羽を動かすときに使つた筋肉。あれを思いっきり横に広げるイメージ。やってみ？」

いわれて、そのままのイメージでやってみる。いつの間にかフカは正面に回り込んでいた。

「そうそうそう！ほんつと飲み込み早くて助かるわー！要点がわかつたらさつきそく実践、つてわけでさつきそくレプラコーンのホームタウンヘレッツらゴー！」

元気に宣言すると、フカは私の手を取った。が、その背中から、ベリアが声をかけた。「そうしたいとこだけど、もう少し飛ぶのは待ったほうがいいかも」

その言葉に、フカの目が若干だが細くなる。

「敵？」

「たぶん。それなりに多い」

「距離にして300mくらい先に5人、だね」

その言葉を受けてか、ストレアが初期装備の服の胸ポケットからびよこと飛び出して言った。これにはその場にいた全員が面食らった。

「え、なにそれ、私初めて見たんだけど」

「あ、どうも。レインさんのナビピクシーのストレアです」

「あ、これはご丁寧に。フカ次郎です。……ってそうじゃない！なんでナビピクシー!?あれって確か初回特典の超レアものだったよね!」

「レインさんは、初めてすぐやめて使われてなかったアカウントを使ってインしてるみたいで。私も中の人が違うと知ってちよつとびっくりしていたところなんだー」

「そんなことどうでもいいよ!300ってすぐそこじゃない?」

「つちやーそうだったー!」

まとにかく、こんなところで堂々とPKなんていう、挑発まがいの行為をすとなつ

たら、サラマンダーでほぼ確定かな」

どこかふざけたように言うと、フカは自身の獲物であろう両手剣を抜剣した。

「さてと、無粋な邪魔者を迎え撃つよ」

「了解!!」

本当に統制のとれたいいチームだ、とレインは分析した。今まで見てきたどのチームよりも、しつかりとしている。

「来るよ!」

ストレアの声とともに、上空から突撃してくる影が4つ。それをフカはいなし、シエピは迎撃してさらに打ち返し、ベリアは防ぎ、私は躲した。見事なコンビネーションだ。

「なんだ、誰かと思えば犬猫どもか」

「犬という認識は改めてもらおうか。我々は鎖を食いちぎる狼だよ」

どこかで聞いたようなフカの返答に、襲ってきた赤い部隊——サラマンダーのリーダーは鼻で笑った。

「狼も犬の仲間だろうが、ドッグアンドキャッツのリーダーさんよ。そっちのニュー

ビーは新入りか？」

「誤合って今は仲間。手を出すっていうのなら容赦はしないよ」

「そうか。ならこっちも遠慮はいらさないな」

そういうと、そのリーダーは手を軽く掲げてから前に出した。そこから放たれるのは、私たちを軽く呑み込むサイズの火の玉、つまり魔法。——突撃してこなかった最後の一人はメイジか！

「回避！」

「させるか！」

フカが即座に指示を出すのが、それを阻むようにサラマンダー部隊が立ちほだかる。相打ち覚悟、ということかもしれない。

「くっそが、退けえ！」

シエピが大声で毒づく。が、それで退いてくれるような相手ではない。とにかく、これで退路は断られた。——ように見えた。そう、ここにいる全員が勘違いしていた。

「やあああああつ!!!」

レインが、ただのニュービーであると。

SAOで培った圧倒的ともいえるAGI—STR型ステータスと、攻略組として戦ってきたことにより磨かれた戦闘センス、加えて彼女の鍛えられた対人戦闘能力。それが生み出すのは、神速の連撃。瞬く間に三人を斬り伏せ、

「今だよ！」

一言それだけ叫ぶと、自分はその炎を紙一重で避けられるルートで飛行。あつという

間にメイジに肉薄すると、首と胸を一瞬で斬って落とす。そのまま、羽を動かすことをやめたレインは、まるで軽くジャンプしたかのように軽やかに着地した。その背後で、先ほどの大火球が爆発して、まるで特撮のような演出を生み出した。

「で、まだやるつもり？」

装備はただの初期装備だ。だが、あんな真似をされたらその初期装備が初期装備には見えない。口調は柔らかいし、その表情は穏やかとしか形容しようがない。なのに、そこには得も言われぬ威圧感すら漂っていた。

「くそが……！」

それだけ吐き捨てると、残ったサラマンダーのリーダーは飛び去って行った。それを見て、私は剣を収めた。

「すつご、なに今の全然見えなかつただけど!？」

「あ、えつと、……」

なんて答えるべきだろうかと私は悩んだ。馬鹿正直に「私はSAO帰還者」、と答えるべきだろうか。

「まあ、その元のアカウント所持者が相当やりこんでたんでしょ。深く詮索する必要もないわよ」

「それもそつか。じゃあ改めて、レプラコーンのホームタウンに向けてアイキャンフラ―

「イー！」

改めて、フカは私を連れて高く飛んだ。

「そーいえば、そのエリーゼさんとレインちゃんはどうして知り合ったの？」

隣で飛びながら、フカが私に聞いてきた。

「前同じゲームやってて、それ関連でリアルでも知り合いになって、誘われたって感じですよ」

「へえ、てことはエリーゼさんは結構なプレイヤーなのかな？」

「いや、むしろエリーゼさんは新入りにあたる部類だよ。でも、護衛から何から実力行使ならなんでもござれ、っていうプレイスタイルと、とんでもない腕前のおかげで、一躍有名になったんだよ」

「てことは、私もお世話になってたり？」

「しないね。ただ、本当に種族間抗争には興味がないらしくて、力のないスプリガンの護衛からサラマンダーと手を組んでのボス戦まで、本当になんでもござれって動きをしてみたい。その代り、対価を払わなかった相手はことごとく斬り捨てるって話だけど」

「わーお、そりやお近づきになりたいね」

その話を聞いて、いよいよこれは人違いなどではないと確信を深めた。SAOでも腕利きの傭兵として鳴らしていて、そのうえどこまでも中立な彼女と、今の言葉はほとん

ど一致するといつていい。

「あ、そうそう、言い忘れてた。A L Oについてある程度調べてきてるのなら知ってるかもしれないけど、A L Oでの飛行は制限時間があるから注意ねー!」

「わかりましたー!」

だんだんスピードが上がってきた。最初はついていくのもいっぱいだったけど、何となく感覚がつかめてきて、今ではもつと早くと思うようにさえなっていた。

「感覚つかめてきたみたいだね」

いつの間にか真横を飛んでいたフカに話しかけられた。このあたりからも、彼女がそこそこ以上の手練れであることが察せられた。

「ええ。飛ぶって、こんなに楽しいんですね」

「うんうん、よきかなよきかな。」

よしみんなー、フルスロットル行くよー!」

一つ宣言すると、フカが飛び出した。一泊遅れて二人も飛び出し、直後に私も飛び出した。

「おーおーおー、すごいすごい! たつのしー!」

「ちよつとフカー! レインちゃんおいてっちゃったらどうするのー!」

「だいじょーぶだいじょーぶ、この子センスいいからー!」

「どーしてそーいいきれるわけー!？」

「勘だけどー!？」

その答えに、シエピは半分反射でこめかみを押さえた。

「ごめんね、あんなリーダーで」

「いえいえ。というか、やっぱりフカさんがリーダーだったんですね」

「うん。あんなんでも腕は立つから」

それは見ていればわかる。何となくだが、立ち居振る舞いが若干違うのだ。攻略組の面々には及ばないが、教会の子供たちに比べればその動きは洗練されていた。そのくらの目は養われていた。

「フカ、エリーゼさんからメッセが返ってきた」

「ん、なんて?」

「どうせ通り道なんだから、フリーシアで待つてる、だつて」

「フリーシア、つていうと、ケットシー領の主都か。私らなら顔パスだから問題ないね」

「アリシャさんに感謝だよね、そこは」

いつの間にかフカが速度を落として、私たちは横一線で飛んでいた。

「ごめん、目的地変更! 目的地、ケットシー領首都、フリーシア!」

「了解!」

「てかフカ、ただ単に經由地が目的地になっただけでしょ」
「あ、ばれた？」

「方向感覚がいい人間ならすぐわかるわよ。だってこれ、ルグルーから央都抜けて行くんじゃないかって、わざわざ大回りしてレプラコーン領に行くルートでしょ。なら、ケットシー領は通り道じゃない」

「あっちゃー、もろばれだったか。」

その通り。私たちはこのままケットシー領に行くつもりだった。その人ケットシーだっていうし、好都合かなーって」

「あ、そっか。もうすぐだっけ、蝶の谷」

「そ。だから、レプラコーン領まで往復してる時間が惜しい」

私の知らない話をしているが、どうやらほぼ予定通りということらしいということだけわかった。とにかく、私はこうして何とか合流地点へと急ぐことになったのだった。

45. 再

ケットシーの主都、フリーシアはとても賑やかなところだった。ケットシーは猫のよ
うな姿をした種族で、テイミング——早い話がモンスターを使い魔にする技術に長け
ている。あの人は他人の力を借りるような性格じゃないから、なぜケットシーにしたの
かというのは難しい所だが、それを考える必要はなかった。

「エリーゼさんー！」

普段のものの静かさはどこへやらといった様子でベリアが声をかける。すると、少し先
にいた白髪のケットシーが反応した。

「ベリア、久しぶり。元気そうで何よりだわ」

「そちらこそ。噂は耳にしますよ」

「私は好きなことしてるだけよ」

それだけ言うと、エリーゼさんは私の前に来た。

「ふーん、やっぱりあつちのアバターによく似た感じだね」

「そうなんですか？ここまで鏡見てこなかったから、自分だと分からないですけど」

「ぶっちゃけ、髪色が違うことくらいかな。あと、服装と。見る人が見れば一発で分かる

よー」

「うへえ……」

一時期攻略から離れていた時も、注意しないとファンが群がってきたというのに、こちらでもそんな心配をしなければいけないのかと思うとげんなりした。言われてみてよく見れば、エリーゼさんも人のことは言えない。髪色を変えて猫耳と尻尾を生やせばそのままだ。

「あ、その手の美形アバターはこっちでは事欠かないから、そんなに心配する必要はないと思う」

「あ、そっか……って、それもそうだね」

私の場合は少し特殊だからこうなっているというのもあるのだろう。が、本来アバターはランダム生成だ。つまり、長身の人やログインしたからといって、必ずしも長身のアバターが生成されるということはないわけだ。

「さて、改めて、——ALOによるこそ、レインちゃん！」

その言葉、手の上げ方、笑い方。それらすべてが一致していた。

とにかく、いったん装備を整える必要がある。そのために、私たちはケットシーのホームタウンを回ることになっていた。

「でも、それってレインちゃん不利じゃない？」

「そんなことないって。もしそうなたら私らが盾になればいいっしょ。それに、この子なら、そんじよそこらのチンピラじゃ絶対歯が立たないし」

「あ、その腕前は見せてもらったわ・・・」

何やらまた知らない話をしている。いまいちついていけないことに気付いたのか、エリーゼさんが補足説明に入った。

「それぞれの種族の領地では、その種族は他の種族をPKできるけど、その逆はできないの。だけど、レプラコーンに関しては、どの領地でも、非戦闘状態にあるレプラコーンをPKしたら、その種族に対して一切の支援をしないって領主が宣言してるから、レプラコーンに関してはPKの心配はない。でもま、レインちゃんみたいなニュービーは知らないからね、たまりにPKしにくる馬鹿者がいるのよ」

「へえ、そうなんだ」

「そうそう。」

あ、言い忘れてた。レインちゃん、アイテムストレージ確認した？」

「言われてみれば・・・」

「してみな。私と同じなら大変なことになってるはずだから」

そう言われて、おとなしくアイテムストレージを確認すると、確かに「大変なこと」

になっていた。

「うわ、何この文字化けだらけ」

「やつぱりかあ……。エラー認定で垢ロックされるかもしれないから、早々に全部処分しといたほうがいいよ」

「ええ……」

さすがにその言葉に、私は躊躇いを覚えてしまった。全処分ということは、SAOの思い出の品をまとめて処分するということだ。少々以上に後ろ髪を引かれる思いだが、このアカウントが使えなくなるかもしれないというリスクと両天秤なら、考える必要はなかった。

設定タブを潜って、アイテムストレージの全処分をタップする。少しためらったのちに、警告タブの続行ボタンを押した。

「さて、と。で、もう一つ想定通りなら、レインちゃんの手元には並々ならぬ金額があるはずなんだけど」

そう言われてステータス画面を改めて確認する。するとそこには、明らかに初期金額ではない所持金が記載されていた。

「……なんでこんなことに」

「私が聞きたいわよ。ま、そっちは処分することもできないみたいだし、そのまま放つて

おくしか手はなさそうかな。ま、バグとかはなさそうだから、その辺は安心だけど。ま、とにかく、今は装備を整えに行こうか。店売りでも、初期装備よりはましだと思うし」

「あ、はい」

そういわれて、私たちは私の装備を手に入れに向かった。さすがに自分のホームタウンだけあって、エリーゼさんの歩みは早かった。そのまま、私たちは装備を整えた。どうやらエリーゼさんはかなりケットシーの中では顔が利くみたいで、かなりいろんなところにつながりがあった。それに、エリーゼさんの「在庫処分」でいくつか装備ももらった。結果として、

「んー、どう？ステの配分とかも考えてこんな感じがいいかなーって思ったんだけど」

「大丈夫です。ありがとうございます」

私はエリーゼさんの手によってコーディネートされていた。性能としては、そこそこ以上の良品がそろったのだが、

「なんでこんな格好に・・・？」

「え、だってリアルでも着てるんだし、耐性あるかなー、って」

「だってあれはバイトだし」

私の格好はいわゆる「メイド服」に近いものになっていた。色としては、赤基調に白が差した感じ。

「でもま、性能はそこそよ？ 最初期の装備としては十二分の性能」

「それはそうなんだろうけど・・・」

「別にかわいいからいいんじゃない？」

「それと恥ずかしさは別だよ・・・。スカートも短いし」

ストレアの言葉に、私はかすかにため息をついた。ちなみに、ストレアの存在に関してはナビピクシーということで話がついている。それでもソロプレイヤーとして結構長いことやつてきた身だ。初期装備やその他諸々の装備の値から、この防具の性能がそこそこ上位に位置することは大体想像がついた。

「あ、いたいた。エリーゼちゃんー！」

その声に私たちが反応すると、その先にいたのは金髪猫耳の小柄な女性だった。猫耳ということとはケットシーなのだろう。

「アリシャさん、なんであなたがこんなところほつき歩いてるんですか・・・」

「それはこつちのセリフだよ！ エリーゼちゃんが遅刻するとか珍しいから、探してたんだヨー！」

そういわれて、エリーゼさんの視線が少し動く。たぶん、視界の端にある時間を見たのだろう。

「あ、ほんとだ。でも、わざわざ領主様がいらっしやることはなかったのでは？」

「やだなあもう。ケットシーの切り札、って呼ばれている所以とか、もっと知りたいし。ところで、そっちの彼女は？」

「前同じゲームやってて、そのつながりで。ALOは今日始めたばかりですけど、フカにしごかれたみたいで」

「しごいたって失礼な。特訓したって言ってよ」

「ほとんど意味同じでしょ」

「フカ、つてことは、あなたがドッグアンドキャッツのリーダーさん？」

「はい、フカ次郎って言います！お呼びとあらば即参上するので、なにか御用があれば遠慮なくー」

「うん、そうさせてもらうネー！噂通り、ずいぶんと気さくな子みたいだし？」

「それが売りの一つですし」

「と、そんなことはどうでもいいでしょ。遅れたのは私のせいなんだし、行きましょう」
「うん、ソダネー。で、そっちのカワイ子ちゃんはどうする？」

「連れていきますよ。腕は私が保証します」

「私も私もー！目の前で見せてもらったけど、そんじよそこらの傭兵よりよっぽど手練れだよこの子ー」

我先にと立候補するように実力を保証されて、私は少し恐縮した。

「フーン？なら、ほんの少しだけ手合わせしちやおつかー」

「領主！お時間が——」

「ほんの少しだけ。すぐに終わるからダイジョーブ」

それだけ言うと、彼女は己の獲物であろう短剣を取り出した。それを見て、私も抜剣して構える。しばらくそのままだった後、おもむろに相手が剣を収めた。

「ウン、この二人に保証されるだけあるネ。全くスキがない」

「領主、ではそろそろ」

「ソダネー、さすがにこれ以上は制限時間オーバーかな。」

「キミ、名前は？」

「レインって言います」

「ならレインちゃん。私と一緒に来てくれない？」

その言葉の意味を理解できず、私は少しの間固まった。

「この後、領主はシルフと同盟の会合に向かわれるの。場所は中立域、*“蝶の谷”*。そこにはもちろん、護衛が付く。私はケットシー側の護衛だし、——」

「わたしらドッグアンドキャッツはシルフ側の護衛、つてわけ。つまるところ、護衛へのお誘い、つてどこじゃない？」

その言葉を聞いて、私は心を動かされた。今は装備も整っている。腕に覚えなどなけ

れば私はあの世界で最前線など張ってはいなかった。

「それは、世界樹を目指しますか？」

「あつたりまえ！そのための同盟だからネ！」

「ならば、是非に。」

会わなきやいけない人がいるんです」

「ウン、大歓迎だよ！」

「領主、そろそろ」

「分かつてるって。エリーゼちゃんはお堅いなあ」

「あなたが自由すぎるんです。・・・まったく、もう」

「じゃ、私らはこの辺で。」

レインちゃん、いい冒険を！」

「ありがとうございます」

「いいっていいって。またなんかあつたら、傭兵ギルド“ドツグアンドキャッツ”をよろしく！」

そういうと、彼らはそのまま飛び去って行った。それと同時に、私たちも蝶の谷へと向かうべく、二人の後を追った。

「ハアイ、みんな、お待たせ！」

「全くですよ、おかげで全速で飛ばなくてはならなくなりました」

「ごめんって。間に合うから大丈夫でしょ」

「全く・・・」

おそらく副官なのだろう男性が呆れたように眉間を押さえる。その様子から察するに、こういうことは初めてではないらしい。

「そちらは？」

「今回の護衛の飛び入り参加。腕前はエリーゼのお墨付き」

「なら安心です。お名前は？」

「レインです。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

どうやら、エリーゼさんはかなり信頼されているようだ。つかみがあつさりいったことにかなり安心しつつ、私は雰囲気を見た。

「正直物足りないでしょ」

いつの間にか横に来ていたエリーゼさんが、こつそり私だけに聞こえるようにささやいた。

「ええ、まあ。まあ、最上級の人々に見慣れすぎただけかもしれないですけど」

「ま、あの白黒夫婦とかは特に別格だったし、仮にもその二人と並び立って紹介されるようなプレイヤーだったレインちゃんにとつてみれば、ま、雑魚だろうね」

それほどでもないのだが、まあ、否定はできないので、あいまいにごまかすことにした。

「そんなことは置いといて。」

領主、蝶の谷へ向かいます。このままでは、本当に遅刻しかねません」

「ええ、もう少しおしゃべりしていきましょうよ」

「それは飛びながらでもできるでしょう。早く参りませんと、シルフの領主にどんな無理難題を吹っ掛けられるか・・・」

「サクヤちゃんはその子じゃないから大丈夫だと思っただけだね」

「といいつつ、本人は背中中に羽を出した。それを見て、私もあわてて羽を出す。

「さて、じゃあ蝶の谷へ向かおうか！」

その言葉を皮切りにして、その場にいた全員が飛び上がった。

ケットシー領主一行が首都フリーシアを発った頃、世界樹の上の謁見の間に、一組の主従がいた。玉座に座るのは、雰囲気がまともであれば万人が振り向く美男子。その名はオベイロン。この世界の王たる者である。

「今、ケットシー領主が首都を発った。シルフの領主も、もう間もなく首都を発つ。その目的は、同盟だ。手を組んで世界樹を攻略しよう、という算段らしい。漁夫の利を狙ってサラマンダーの集団が会合を強襲するらしい。その集団を殲滅しろ。簡単だろうか？」

「御心のままに」

「ああ、それと。この二人は生かしておけ。この後の戦力になる」

そういわれて、渡されたのは二人のプレイヤーの写真。そこには、レプラコーンと思しき赤色の髪の少女と、白髪のケットシーの女性が写っていた。

「・・・御意」

従者は、一瞬の間ののち、いつも通りの返答をした。

「よし、下がれ。そして、迎撃に迎え。場所は蝶の谷だ」

「はっ」

従者が下がったのち、オベイロンは玉座にて下卑た笑みを浮かべていた。

「さて、血濡れの蓮を手駒に加えるだけでなく、剣姫と手練れの女傭兵まで加えられる機会が来るなんて・・・。どうやら運が向いてきたらしい」

その奥では、

「ぐうっ・・・」

先ほどまで王と謁見していた従者が、頭を抱え激しい頭痛と戦っているとも知らず

に。

（なんなんだ……。私は、オベイロン様の従者のホロウだ。かの王の影武者だ。ならばなぜ、この少女に対してこれほどまで心動かされる……。!?）

それが、崩壊^{解放}の序曲だった。

会合までには時間がある。それは、シルフ側及びケットシー側の双方が移動を開始したというだけでも十分に察せられた。それに、飛行時間に制限がある下等妖精ではなく、アルフである自分は飛行制限もない。さらに言うなら、好きな場所への転移も可能だ。だから今はこうして、

「うわああああ」

氷の大地、ヨツンヘイムにおいて、邪神级モンスターを狩ろうとする集団を狩ることで、私は時間を潰していた。一瞬で断末魔の合唱は終わり、周りには残り火が微かに漂うだけとなった。

「はあ、はあ、っ……」

しかし、戦いはいつもより苦戦で終わった。もつとも、いつもより苦戦したというだけで、ほとんど苦戦していないも同義なのだ。

（なぜだ。なぜだ、なぜだなぜだ、なぜだ……。!）

私の頭に回るのはそればかり。

(私はホロウだ。妖精王オベイロンの影にして、忠実な従者だ。決して、決してロータスなどという存在ではない。あの少女の名前を知っているなど、あるはずがない)

—— 本当にそうか？

(ああそうだ！)

—— ならば、なぜお前は思^俺いだした？

(どこかで見たのだろう。私はこの立場上、王の補佐もしている。研究の協力もだ。その過程で——

—— 本当に、そうか？

頭の中で声が響く。

—— 研究を見てんならわかんだろうが。あんなの、まっとうな人間の所業じゃねえ。そして、その雛形が、お前自身にかけられているとしたら？

(うるさい。うるさいうるさいうるさいうるさい——

—— 目を背けるな。それは、俺がしてきたことへの最大の罰だ。それに、——

どれだけ頭を抱えようと、念じようと、頭の声はやまなかつた。そして、

(黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ——

—— お前は、《本当にこの世界の住人か》？

「うわあああああああああああ!!!」

決定的なことを口にした。その瞬間、私の口からはこれでもかというほどの絶叫が迸った。その絶叫は、果たしてどこまで続くのかと思うほど延々と続き、やがて止んだ。そのまま暫くぐったりして、その後、

「・・・つたく、面倒なこととしてくれたなあオイ。おかげで時間がかかっちゃった」

一言、そんなことをつぶやいた。

「いろいろ見させてもらった。手始めに、この世界のGMは、」

——ぶっ殺す。

それは、今までの『忠臣』ホロウではない、全く別人だった。

46. 影

ローテアアウトしつつ、私たちは蝶の谷にたどり着いた。そこには、もうすでにシルフの団がたどり着いていた。フカを含めたドッグアンドキャッツもそこにいた。

「遅いぞ、ルー」

「ごめんごめん」

「全くお前は……。調印を始めるぞ」

「はいはい」

そういつて、二人が席に着こうとしたその時だった。

「悪いが、その会合は中止だ」

第三者の声が鳴り響いた。そちらに顔を向けると、そこには赤い影があった。

「サラマンダー……っ!」

「しかもあの量、レイド一個分くらいはあるぞ」

レイドひとつ、つまりは約50人。その人数が集まっているということは、

「どこからか情報リークがあった、って考えるのが自然か」

「そんな!」

エリーゼさんのつぶやきに、私は内心で同意した。それに一言付け加えるならば、かなり領主に近い地位の人物から、だ。100%確実な情報と分かっているなければ、これほどまでの人数は集まるまい。

「悪いけど、最低30人くらいは道連れにするよ」

「了解」

フカの号令で、護衛全員が抜刀した。

道連れにする。つまりは、玉砕覚悟で特攻するということと同義だ。つまり、ここで死んでもかまわない、ということの証左でもある。

「その心意気やよし」

それだけ言うと、静かに指揮官が片手をあげた。その合図で、敵も全員が一斉に武器を構える。そのまま振り下ろそうとするときに、近くで轟音が響いた。まるでそれは、隕石でも落ちたのではないかと思うほどのものだった。

「双方、剣を引け!!!」

とんでもなく大きな声で、その割り込んできた人物は言った。見たところ、黒いとかわからない。黒系となると、影妖精スプリガンが該当したはずだ、と頭の片隅で思った。

「指揮官に話がある」

あまりにも傲岸不遜な態度に、サラマンダーの中から指揮官が出てくる。

「あんたが指揮官か」

「ああ。そういうお前は何者だ」

傲岸不遜な態度。それとともに、実力者にふさわしい風格。横に目線を移せば、そこにはおそらくあの少年の連れであろう少女がいた。

「あの子だよ、リーファちゃん」

「ああ・・・」

いつの間にかそばに来ていたフカが小さくつぶやく。道理で強そうなわけだ。もろもろ終わったら手合わせしたいほどには強そうだった。

「俺はキリト。スプリガン・ウンディーネ同盟の大使だ」

キリト。まさか、あの黒の剣士か。ならあの雰囲気も納得だ。が、その言葉が飛び出した瞬間に、リーファの顔が目に見えて固まったのが見えた。ということは、

(ブラフ・・・!?これが!?)

ブラフとして切るにはあまりに大きすぎるカードだ。だが大きすぎるがゆえに露呈することも考えづらい。

「同盟の大使、か。護衛の一人もつれずにか」

「ここには貿易交渉のために来たただだからな。それに、並大抵の護衛なら、俺にとって

は逆に足手まといだ」

「・・・ほう？」

最後に付け加えるように言われた一言に、相手の指揮官は目を細めた。

「そこまで言うのなら、試してやろう。30秒持ちこたえたら、お前を大使と認めてやる」

「随分気前がいいね」

そういうと二人とも、己の獲物を引き抜いた。スプリガンのほうは、大きくて黒いしかし特徴のないような大剣。それを片手で振るえる時点で彼がかなりの使い手であることは明白だ。それに対するは、つばの部分に二頭の竜の装飾があらわれた、こちらも大剣。

「・・・まずいな」

「え？」

ぼそりとサクヤがつぶやいた。それに反応すると、サクヤは言葉が続けた。

「あの剣は、公式サイトでのレジェンダリーウエポン紹介ページで見ただことがある。魔剣グラムだ。ということは、彼がユージーン将軍だろう。彼はサラマンダー中最強と言われている」

「つまり、ALLOの最強クラス・・・？」

「と、いつても過言ではないだろう。さすがに相手が悪すぎる」

サクヤの返答に、リーファに浮かぶのは苦笑。つまり、それほどの強敵ということだろう。

まず仕掛けたのは、ユージーンのほうだった。突進からの上段に対し、スプリガンはしっかりと剣を立て受け止めにかかる。が、その防御など意味がないといわんばかりにその一撃はスプリガンを軽々と吹き飛ばした。

「なっ・・・!?」「なんで!?」

「魔剣グラムには防御を透過して攻撃できる、エセリアルシフトっていう特殊能力があるんだヨー!」

「んな無茶苦茶な!」

驚きに対するアリシヤの解説に、絶叫するかのようリーファが声を上げた。これは私も同感だ。防御という防御がろくに成立しないなど反則、チートもいいところである。だが、私の知っているキリトという人物は、

「はああああっ!!」

この程度でくじけるようなやわな人物ではない。実際、彼は猛然と突進してきた。その一撃はたやすく防御されたが、ユージーンは少なからず感心したように見えた。遠目からは何か言葉を交わしたとしかわからないほど二言三言交わして、すぐに打ち合いに

戻る。だが、若干キリトがジリ貧だ。いかに彼の反応速度が凄まじいといっても限度がある。加えて、ユージーンの太刀は豪打にして連撃は苛烈。それを躲し続けるなど、さすがに不可能だ。やがて、一発の斬撃がキリトに命中する。そこで、キリトはいったん間合いを取った。

「おい、もう30秒経ったんじゃないのか」

「いや、こんなに楽しい勝負は久しぶりで、終わらせるのが惜しくてな。気が変わった。首を取るまでに変更だ」

「ったく、くそが」

軽く毒づいてキリトは再び剣を構える。そこから一気にラツシユをかける。いったん距離を取るかに思えると、そのまま反転して距離を取った。すぐさまユージーンが追撃に入るが、いつの間にスペルワードを詠唱していたのか、あたりが煙幕に包まれた。

「ちよつと借りるぜ」

「え？」

かすかな声が聞こえた。直後に、リーファのものと思われる素つ頓狂な声。その言葉で私は彼の狙いを察した。ならば、この先は目をそらすことなどできない。

「時間稼ぎの……つもりかアツ!!」

ユージーンの気合とともに、煙幕が晴れる。おそらく、ユージーンが何かのカウン

タースペルを使ったのだろう。煙幕が晴れる。だが、そこにキリトはいなかった。

「まさか、逃げた？」

「「そんなわけない！」」

私の知るキリトという人間は、決して仲間を見捨てることをしない人間だ。普段はソ口を貫き通しているが、パーティになったら不退転の覚悟を持って前衛で暴れまわる。そういう青年なのだ。そして、何も考えていないようであ外考えている。この状況で一番有利な場所。それは、

（上、太陽の中）

一番光度が高く設定されていて、しかもなおかつ急降下での奇襲の狙える場所。そこ以外にない。その予想にたがわず、彼は、ユージーンの真上に構えていた。右手であの大剣を保持し、左手は大きく引き絞る。そんな見え見えの、ただはた目から見ただけでは破れかぶれの特攻にしか見えない一撃を、ユージーンは正確に処理した。そして、カウンターを叩き込もうとしたその瞬間、

「なっ・・・!!」

驚愕に目を見開いた。そこには、左手に握られた長刀。それで、きれいに受け流していた。

二刀流、というのは、知名度としてはあるものの、一般的ではない。というのも、ぎっ

くり言ってしまうば「負けないかもしれないが勝てない」からだ。竹刀を片手で扱う筋力、技量、二刀を同時に扱う連携、身ごなし。それらすべてをそろえ、しかもなおかつ一刀を両手で振るう相手に有効打を与えなくてはならない。その難易度は想像を絶するものがある。だが、キリトに至ってはその例外中の例外だ。SAOで培った、STR寄りのステータス、そして技量。その二つが相当以上に高次なレベルで実現しているからこそ可能なのだ。それが実現すれば、手数は飛躍的に上昇する。これは相当なアドバンテージとなりえる。実際、先ほどまでユージョン優勢で合ったのが、今ではキリト優勢になっている。だが、ユージョンも負けていない。凄まじいキリトの連撃に、しかも反撃を試みてすらいるようにも見える。キリトの連撃のすさまじさの前に防戦一方となつてはいるが、その目は隙を虎視眈々と狙っていた。だが、キリトの連撃には勝てず、そのままリメインライトへと姿を変えた。

「見事!!」

「すつごーい! ナイスファイトだヨ!!」

その決着に、誰もが手をたたいて賛辞を送った。本来敵であるはずのサラマンダーの軍団をもたたえていることが、この戦いのハイレベルさを物語っている。確かに、このレベルの激闘はなかなかお目にかかれるものではない。これは後からリーファに聞いた話だが、この世界の近接戦はもつと不格好なものらしい。そうでないなら魔法の打ち

合いになるだけ、という、ある意味ワンパターンなものだった。それに慣れた目からすれば、これは驚異的極まりないの一言に尽きるだろう。

「誰か、蘇生魔法頼む」

「分かった」

周囲の歓声にこたえつつ降り立ったキリトは、周囲に対して声を張った。それにこたえ、サクヤがリメインライトに向かって詠唱を開始する。やがて、リメインライトからユージーンが復活した。

「大したものだ。今までであった中で、間違いなく最強のプレイヤーだ」

「そりやどうも。で、俺が大使だと信用してくれたか？」

その瞬間、ユージーンの目が細まる。ああいつた手前、断ることも難しいのだろう。その背中に、一人のサラマンダーが寄ってきた。

「ジンさん、ちよつといいか」

「カゲムネか。どうした」

「いやなに。俺のパーティが昨日、壊滅されたつてのは？」

「知っている。それがどうした」

「その壊滅させた張本人がこのスプリガン一行なんだけど。確かに、その中にウンディーネがいたよ。大使同士だと考えていいと思う」

その瞬間に、キリトの肩が一瞬だけかすかに動いた。眼の光にも、一瞬変化が見られなかった。このカゲムネとかいうプレイヤーの行動は、私からしても分からないことだった。

「——ブラフと分かって乗ってきた？ いったい何の目的で？」

「それに、エスの情報で追ってたのも、確かこいつだ。結局、撃退どころか返り討ちにあつたらしいけど」

「・・・そうか」

私の思惑などいざ知らず、言葉は続いた。エス、おそらくスパイというのが気になったが、今はとりあえず置いておいていいだろう。やがて、少し目をつむってかすかに笑みを浮かべると、ユージーンは一つ頷き、キリトに向き合った。

「そういうことにおこう。」

確かに、現状で4種族という大集団と敵対するというのは、領主の意にも反する。だが、それとは関係なく、貴様とはもう一度闘うぞ」

「望むところだ」

キリトとユージーンが拳を交わす後ろで、小さくカゲムネがウィンクした。その視線の先にいたリーファは、それにかすかな笑みを返す。どうやら、貸し借りはここにあつたらしい。

（とりあえずぶつ殺すつていうジエノサイダーとか脳筋さんばつかじやないんだね）

少しだが、私の中のサラマンダーの意識が変化した。
直後。異変は起きた。

ゴウ、と、エンジンを思わせる音が轟く。音のほうを向くと、そこには、竜の背に乗った銀色の羽の天使がいた。その手には、長さの違う、二本の日本刀のような得物が握られていた。

「銀の羽!？」

「いったい何の種族だ・・・!?」

いわれてみれば、銀の羽持つ種族など聞いたことがない。私のリサーチした記憶にもなかった。

「私は、天の種族、アルフ。王の影たる、ホロウ」

「王の、影、だと・・・?」

誰かが、つぶやいた。

「そうだ。私は、王に代わって試練の代行を担うもの」

「つまり、グランドクエストの前にお前をぶつ倒せってことか!」

サラマンダーの、血気盛んな前衛が一気に切り込んだ。だが、刃が交わる寸前で、相手が一瞬で動き、そこにはリメインライトが残っていた。

「馬鹿な!」「一撃!？」

領主二人が驚く。それもそうだろう、瞬く間に、すれ違いざま的確に斬撃を当て一撃死させるなど、ステータスと技量が相当な高次で実現していなければ不可能な荒業だ。だが、その太刀筋を見た瞬間に、私は確信していた。

「ロータス君!!」

「全軍、撤退!」

私の大声をかき消すような、ユージーンの掛け声でサラマンダーの軍勢が撤退を始め。そこを逃さず追撃をかけようとするところに、ユージーンが立ちふさがった。

「ほう?」

「悪いが、やらせるわけにはいかん」

「そうか。ならば、ここで一度死ね」

それだけ静かに言うと、刀をはじき返してもう一度構える。が、その横合いから、ケツトシーの女剣士が飛び込んできた。それを、今度は竜を踏み台にして避けた。

「貴様も死にたがりか、女」

「どうしてよ、ロータス!」

「私はホロウだ。ロータスなどではない。しかし——」

そういつて、彼はこちらを見た。その瞬間に、気づいた。その目は、いつかのように鋼の冷たさを宿していたが、それが完全ではないことに。

「いささか状況が悪い。これほどまでに手練れぞろいとは思っておらんんだ」

それだけ言うと、彼はこちらを見た。はつきりと、その目が私を射抜く。その目に、今までの明るさも、暗さも、先ほどまでのかすかな濁りも同等になかった。あつたのは、怜悯な刃物を思わせる、冷たい光だけ。

「ロータス君！何もかも、忘れちゃったっていうの!？」

目を見た瞬間に、私は思わず叫んでいた。

「私は何も忘れてなどいない」

ただ一言、私の問いに、深い声で答えた後、全体を見渡していった。

「未だ天の高みを知らぬものよ。この世界を知らんと欲するか」

「……ええ。知りたいわ。どうしてあなたがここに居るのか。王の影とは何なのか。いろいろとね!」

半ば挑戦的に、エリーゼさんが答える。私も同じ思いだった。

「さすれば、そなたが背の双翼の、天翔るに足ることを示すがよい」

それだけ言い残すと、光の粒子を残して彼と竜は消えた。

「どういう、こと……?」

その横で、アリシヤはかすかに笑っていた。

「アリシヤ、さん?」

「え？ああ、先ほどの意味？そういえば、君はニュービーだったネ。

「さすれば、そなたが背の双翼の、天翔るに足ることを示すがよい。」これね、グランドクエストの起動文なのよ。つまり——」

「グランドクエストに挑め、というわけか」

「そういうことだ。まさか、かなり悩んでいた問題が、こんなにあつさり解決するとはな」

サクヤの横で、アリシャもうんうんとうなずいている。と、いうことは、

「彼、かなりの問題児だったんですか？」

「ああ。重要なクエストが終わったり、主力が集つているときに襲つては、問答無用で全滅させていく、とな。加えて、相対した者に言わせれば、リーファや私ですら白兵戦は少々きついかもしれないという始末。これでも私たちはシルフの中でも片手の指に収まる剣士だからな。それが無理ということは、それこそユージーン將軍の手でも借りざるを得んかもしれない、と考えていたのだ。最も、そんなことをすればサラマンダーをさらにつけあがらせる一因になるかもしれないのは、百も承知だが」

「そうなんだ……」

一瞬重たい空気になったところで、リーファが大きな声を出した。

「あ、そうだ！忘れてた！

サクヤ、シグルドがサラマンダーと通じてたんだよ！」

「シグルド？」

「シルフの幹部だ。．．．そうか、あいつが．．．。だから、サラマンダーがここに来たんだな。大方、モーターイマーに乗せられたか」

「だけど、それに何の意味があるんだ？」

「次のバージョンアップで転生システムが実装されるといふ噂。あれが本当ならば、それでサラマンダーに転生と、それ相応のポストを約束させたんだらう。ギアスクローでもない限り、あの用心深いモーターイマーが約束を守ったとは思えんがな」

「で、どうするの？シグルドは今留守を任せてるでしょ？」

「ああ。」

ルー。確か闇魔法上げてたよな？」

「うん。でも、これだけ日が高いと、月光鏡は長く持たないよ？」

「問題ない。長話をするつもりもないしな」

その答えを聞いて、アリシヤは詠唱を始めた。少しすると、虚空にある部屋が映し出された。そこにある椅子に座るのは、がっしりとした体格の偉丈夫。この男がシグルドなのだらう。

「久しいな、シグルド」

「なつ、サクヤ! どうして!」

「少し、な。そういえば、ユージーン將軍が君によろしく言っていたよ」

「……ッ!……ちっ……!」

最初は焦った顔だったが、忌々し気な顔をするシグルド。だがすぐに、あきらめというより開き直った顔を見せた。

「それで? 俺をどうするつもりだ」

「いやなに、シルフが嫌だ、というのなら、お望み通りにするまでだ」

そういうと、サクヤはシステムウインドウを操作した。直後、シグルドにも通知が発生する。その通知を見た瞬間、シグルドは血相を変えた。

「なつ……! 追放、だと……!?!」

「そうだ。レネゲイドとして、中立域をさまよえ。お前ほどの男だ、いずれどこかが拾ってくれるやもしれん。ではさらばだ、シグルド」

「貴さ——!」

何とかこちらにつかみかかろうとしたが、その言葉を言い終える前に、シグルドは部屋から消え失せていた。同時に、アリシャが月光鏡を解除する。一つため息をつく、サクヤはリーファに向き直った。

「ところで、リーファ。君はどうするつもりだ?」

「私も、シルフ領を飛び出して、この人と一緒にアルンに行つて、．．．そのあとは考えてなかつたけど。いつか必ず、スイルベーンに戻るよ」

「そうか。待っているぞ」

その話を聞きながら、私は一つの可能性に思い当たつた。

「ねえ。この同盟つて、もしかしなくてもグランドクエスト——世界樹の攻略を目指してるのではありませんか？」

「ん？まあ、究極には、な」

「なら、それに私たちも同行させてもらえませんかでしょうか」

「私からも、お願いします」

「俺からも、頼む」

私に続く形で、エリーゼさんとキリトさんも頼んだ。

「むしろこつちからお願ひしたい。だが、全員分の装備を整えるとなると、それ相応に時間がかかる」

「なら、これを足しにしてくれ」

そういうと、キリトは麻袋を取り出して渡した。何の気なしに受け取つたアリシャは、その重さに驚いた。そして、その中身を見て、目を剥いた。

「凄、10万ユルドミスリル貨がこんなに．．．!?」

「ありがたい話ではあるが、本当にいいのか？一等地にちよつとした城が立つ金額だぞ？」

「いいんだ。俺が持つてても無用の長物だしな」

「そうか」

それだけ言うと、二人の領主は中身をうまく折半してそれぞれ収めた。

「なら、私たちは一足先にアルンに行つてゐるね！」

「ああ。レインたちはどうするんだ？」

「私は護衛を全うしなきゃね。傭兵は信用第一だから」

「私も、そちらについていきます。皆さんには、あとから合流します」

「そつか。じゃあ、ここでいったんお別れですね」

その言葉を交わすと、二人はさりと去つて行つた。こちらとしても、ここに長居する理由はない。私たちはそのまま、行きと同じように分かれた。

47. 世界の裏側で

「——以上が、このたびの不始末の全容にございます」

「そうか。それほどの手練れだったのか、ユージーンは」

領主会談襲撃、そのグループを取り逃がしたことについて、俺はオベイロンに謁見していた。正直、こんな小物が王を名乗るなど分不相応にも程があると一笑に付したのだが、俺の立場上そういうわけにもいかない。今までの従順な姿勢は崩さず、その裏での行動を考える必要がある。頭の使う作業だが、悪くない。もともと俺はこつちも得意分野だ。

「ユージーンだけならまだ遅れをとることはなかったでしょうが、彼に並び立つ猛者がさらに2人もいては、さすがの私も後れを取りました」

「ほう、お前をもつてしても、か？」

「ええ。あれらに勝つことができるのは、純粋なステータスと物量の暴力のみでしょう。もしくは、よほど巧妙な計略を巡らせるか」

「そう、か……。わかった。お前は与えられた役目を遂行しろ。今回に関しては、大目に見てやる」

「ありがたきお言葉」

「よし、下がっていいぞ」

そういわれて、俺は転移魔法でその場を立ち去る。転移した先は、世界樹の上だった。(いつみても、この光景は反吐が出る)

ここからもインターネットには接続できる。プロテクトがあったが、そんなものはこのアカウントに与えられた管理者権限でほとんど意味をなさなかった。そこで、この世界——アルヴヘイム・オンラインが、表向きにはどのように宣伝されているのかも知っていた。それをする際は十二分にあつた。

表向き、世界樹の上には豪華な城がそびえたち、そこに鎮座する妖精王オベイロンに謁見することで、その種族は「アルフ」という転生体になり、飛行制限の解除をはじめとする恩恵を手に行ける。と、されている。だが、実際に存在するのは、城などとは似ても似つかない、この世界にそぐわない建築物だ。

オベイロンは、俺の洗脳が解除されていることを知らない。つまり、あいつにとつて、俺の裏切りなどありえない、と思っっているわけだ。俺からしたら、そんな推測など希望的観測に過ぎない。人を使う以上、いついかなる時も「最悪」とか「不測」には備える必要がある。確かに、いい大学を出て知識的な面での頭はいいかもしれないが、知性が全く育っていない。俺からしたら、ただの「机上の天才」に過ぎない。そういう点で

は、確かにそういった知識的な知性は感じられなかったが、頭が回るP・O・Hのほうがよほど厄介だ。あいつは、常に不測に予測を立て、何かあれば即座に、必要ならその場でプランBを生み出し、実行することができたからだ。

時計を見る。これも、本来はこの世界にはそぐわないものだ。だが、オベイロンは必要だからと俺に持たせている。そんな、常に自分が上に立っていようとすると、そのくだらないプライドも、あいつが小物だと誇示している一因だろう。とにかく、その時計には、約束の時間が表示されていた。

(行くか。あまり行きたくはないが・・・)

行きついた先には、『第2実験室』と書かれていた。静脈センサーのように手をかざし扉を開けると、そこには多数の円筒形の中に、脳のホログラムが浮かんでいる部屋に出た。その中には、先客がいた。まるでスライムに多数の目と触角がついたような、気味の悪い生き物だ。

「これはこれはホロウ様。こんなところにいらつしやるとは、いかようにございますか？」

「ただ単に時間だから来たただけだ。確認してみたらどうだ？」

俺がやや高圧的に言っても、このスライムもどきは文句ひとつ言わない。というのも、こいつらを操るスタッフは、同等どころか、邪神級——つまるところ超強いボス

——相当のステータスを与えられたアバターを使っても俺には勝つことなど到底できないからだ。というのは、実際にやってみた結果によるものだ。まあ俺に言わせてみれば、この世界の白兵戦のレベルはあまりにもお粗末が過ぎるが。

「おや、こんな時間」

「早く戻らないと主任殿とやらにどやされるのではないか？」

「ですね。ではホロウさん、また」

「ああ、また」

その言葉を最後に、スライムもどきは消えた。ログアウトしたのだろう。それを確認すると、俺はアイテムストレージから一つのバインダーを取り出した。そこに書かれている、本日の番号を確認する。その番号のついた円筒の機械をひとつずつ回って、ボタンを一回ずつおした。これは、記録のためだ。

勘のいい奴はここでピンと来るはずだ。——ここは、ただの実験場だ。しかも、思考回路や人格、感情といった、人間を構成する根幹ともいえるべきところに手を出す。そんな、吐き気がするなどという言葉では生ぬるいほどの、悪魔の所業の結晶だ。

記録というのは、定期的に情報を与えて、そのフィードバックを記録するのだ。もちろん、あまりに突然大量のデータを送られては、今度はALOサーバーが怪しまれることとはおろか、そもそもサーバーが過負荷に耐えられず、動作が落ちてしまう可能性があるあ

る。だからこそ、ランダムに抽出してその結果を出す必要があるのだ。

その作業が終わると、今度は近くのシステムコンソールを起動した。こちらも、管理者権限があるから簡単に操作できる。そこから、軽食を取り出した。仮想世界で食事は必要ないとは言っても、空腹感は存在する。だから、定期的にこうして食事をとる必要はあった。現実世界の俺は、きつと病院のベッドの上で点滴を打たれているから、解消するのはこちらのみで大丈夫のはずだ。そうでなければ、当の昔にこの身は餓死で現実世界からも含めてログアウトしている。

次の行動はどうすべきか。そう考えているうちに、俺は半ば無意識に二人のプレイヤーを検索していた。

「まったく、この大馬鹿どもが」

誰もいない部屋でひとりごちる。その言葉は誰にも届くことなく消える。動きを見るに、ケットシー領に飛んでいるのが二つだった。あの辺は俺の記憶が正しければそこそこMobのポップがあつたはずなのだが、

(心配するだけ無駄か。レインだし)

あの少女の腕前をもつてすれば、Mobの技など兎戯に等しいだろう。聞くところによれば、彼女は鬼のようなレベリングを繰り返し、SAOクリア時にレベルが三桁の大台にまで達していたとの情報もある。そこまで行けばもはや火力を上げて物理で殴つ

ているレベルになるかもしれないが、SAOはプレイヤースキル——そこまでのプレイヤーの技量が大きく試されるゲームだったから、火力というのはそこまで反映されることはなかった。

「まあ、それはいいとして」

問題は、あいつらだ。もう一つ気になった名前を、あてずっぽうで検索してみる。と、あたりが出た。

(うし、ビンゴ)

どうやら、順調に央都に向かっていているようだ。だが、

(ここって確か、あのデカワームの・・・)

今彼らがいる場所は、俺の記憶が正しければ、街一つ丸ごと擬態するという、とんでもない大きさのワーム——ミミズ型モンスターの住処だったはずだ。二人が虫嫌いなら、もうそれは地獄以外の何物でもない。加えて、このワームから逃れたとしても、行きつく先はヨツンヘイム——飛行もままならない極寒の地だ。これはミスだ。もともと、それが見かけ上の最短ルートなのだから、そこを通りたくなる気持ちは痛いほどよくわかるのだが。

その近くに、複数種族のパーティー、いやこれは小規模ながらもレイドが見つかった。どうやら、そのヨツンヘイムを闊歩する邪神級——要するにでかい強敵を狩る目的ら

しい。これは、俺の目的に合致する。そう思った俺は、とりあえず様子を見守ることにした。

少しすると、キリトたちが小規模レイドに接触した。それだけなら問題ないが、そのすぐ、その小規模レイドが戦闘に入った。俺としてはありがたいところだ。これで大義名分ができた。すぐ後に、俺はその付近に転移した。

転移した直後に見たのは、色とりどりの魔法の光だった。どうやら、魔法を使つて様子を見る作戦のようだ。だが、俺にそれが通用すると思つたら大間違い、としか言いようがない。

息を漏らすような声で早口の詠唱をかける。すぐに、俺の刀に炎がまとつた。そして、着弾点をそろえた魔法に、跳躍して舞うように刀を振るう。と、次々に魔法が掻き消えた。

「そこまでにしてもらおう」

「なにもんだ、てめえ！」

俺のことを知らないやつが声を上げる。それを、知っている奴は咎めたが、知らないやつのために俺は名乗りを上げる。

「私はホロウ。王の影にして、王に代わり試練を与えるもの」

「試練、だど？」

「そうだ。早い話が、グランドクエストに挑むには、私を倒してからにしろ、と言っている」

「なるほど。なら、さっさと倒させてもらおうか!」

血の気の多い奴が一気にかかってくる。

「馬鹿、やめろ!」

すぐに後ろから静止がかかるが、時すでに遅し。俺はいわゆる無形の構えを取っているから、余計無防備だと思ったのだろう。だが、忘れてはならない。

「もらったあ!」

隙だらけのところ、と思ってきたのだろう、頭への一撃。確かにそれは、ある程度の実力を伴っているようにも見えた。だが、

「シッ」

かすかな息を漏らしつつ、俺は無形の構えから首へ一閃。一撃に比べれば、それこそ閃きの速度で、俺は首を刈った。まだ炎のエンチャントが残っていたこともあり、一撃で相手はリメインライトとなった。

おそらく、打ちかかってきた奴は、忘れていたのだろう。——俺が、魔法で属性を付加した刀で、魔法のあたり判定を斬るといふ離れ業をやったのけた、という事実を。そこから導き出せる、俺の技量を。実際、俺からしたら先の一撃など見戯に等しい。構

えをいちいち取らなくとも、対処などたやすいものだ。

「さて、どうする？ここで引くというのであれば、追いはしない」

「ちっ……！」

忌々し気に舌打ちをひとつすると、リーダーは背を向けて歩き出した。それに従う形で、ほかのメンバーも歩き出す。だが問題は、この邪神级モンスターなのだが、なぜ、こいつは攻撃してこない。と、疑問に思っていると、シルフの少女——リーファといったか——が問いかけてきた。

「あなた、どうして助けてくれたの？」

「助けたわけではない。この手のモンスターを大量に倒されると、後々困るやもしれんからな」

この世界のひな型となっているものが北欧神話であることは、少し調べればすぐに出てきた。そして、このヨツンヘイムにはスリュムという王の住む城がある。しかもこれは当初にはなく、あとから生まれたもの。そして、その城ができてから、ヨツンヘイムはこの氷の大地になった、ということも分かった。ここから導き出される結論はただ一つ。スリュムも含めた霜の巨人族が、このヨツンヘイムの支配に乗り出した、ということだろう。となれば、多分ここに跋扈する多腕型の巨人が、おそらく霜の巨人族。それらだけになると、どうなるか分かったものではない。しかも、スリュムの城ということ

は、そこにはほぼほぼ確実にミョルニルが眠っていることになる。ミョルニルはかの雷神トールが手にしていた武器なのだから、レアリティは計り知れない。奪還は容易ではないだろうが、もし奪還できればその時は大騒ぎになりかねない。確実に魔剣グラムレベルの武器が転がり出てきたなどというビッグすぎるニュースになるのだから。

わざわざそこまで話す必要はない。そもそも、北欧神話自体の浸透率が日本ではかなり低い。細かく説明したところで、訳が分からないとなるのがおちだ。

「そう」

「ロータス」

納得したようなしなしないような、というようなりーファの横で、キリトが呼び掛けた。

「私は——」

「お前が誰だとかどうでもいい。本当に、何もかも忘れちゃったのか？」

まっすぐに、キリトは俺の目を見て問いかけてきた。

その意味が分からないほど俺も馬鹿ではない。いくら体が覚えている動きでも、記憶を封印されるなど誰も想像はしていないだろう。ましてや、マインドコントロールを受けていたなど。

「何のことかわからないな。俺は何も忘れちゃいないのだから」

その一言を残して、俺は世界樹の上へ再び転移した。

48. 乙女の秘め事

それからしばらくして、俺は興味深いものを見た。

「テイターニア様」

テイターニア、つまりはアスナがラボ内を歩いていたのである。正確には、その中でも昨日俺が入った第2実験室に入って行ったのだ。アスナはラボの外にある、鳥かごの中に幽閉されているのだ。幽閉している張本人は寵愛しているだけのつもりだろうが、そんな生易しいものではないし、本人もどうやってら出ようかと四苦八苦している様子だった。どうやってか、鳥かごからは出ることに成功したらしい。本来は報告する必要があるので、ここは見えて見ぬ振りが一番いいだろう。下手に手を出したらあの下種野郎に何されるかわかったもんじゃない。

さらに少し歩いて、俺は第三実験室にあるシステムコンソールを操作した。ここも、例のラボの一つで、どちらかというと、こちらが予備だ。だが、システムコンソールがあるので、それで動向は推測できる。順に検索すると、まずレインはレプラコーン領のまままだ。おそらく、装備を整えているのだろう。エリーゼもレプラコーン領に到着していたはず。こっちは領主の反応もあったから、きつと護衛だろう。キリトとリーファ

は、どうやらこの様子だとアルンへ向かっているようだ。が、
(こんなところに道などあったか・・・?)

俺の記憶が正しければ、彼らが今いるところは、落ちれば即死間違いなしの大きな縦穴がぼつかりと開いているだけのはずだ。飛行不可能のヨツンヘイムで、そんなところを通ることのできる道理はないはずなのだが、

(ま、とりあえずそれは後回しだ)

とにかく、今重要なのはアスナの動向、そしてこれら二組の動向だ。そう思いつつ、俺は数ある脳みその一つをみた。正確には、その計測数値を見た。

「壊れた、か」

このような外道の産物は、えてして多くの犠牲を生むことが多い。それを研究者たちは「発展のために必要な犠牲」とか、「必要な失敗」とか考えるのだろう。その考えは理解できる。だが、もともと壊れているものを、ある意味さらに「壊そう」としたらどうなるか。結果が、その計測数値だ。

その計測数値は、ずっとある一定の値で固定されていた。食事は与えているようだし、眠らせないなどということもしていない。だが、成人ないしは思春期のプレイヤーが多い中で、ほとんど解消されていないものがあつた。だが、この個体に限り、一つだけは定期的に与えていた。そうでなければ発狂寸前に陥るからだ。

つまるところ、「性欲」である。そして、こいつは常に性欲を発現させているようになった。それこそ眠っているときも、だ。これを現実例えたと、セックスする夢を毎日必ず見て、食事中も自慰欲求を押しえ続け、日中はひたすら性欲の発散相手を探し続け、見つけたら速攻で肉体関係を得る（迫る、ではない）、というようなものだ。娼婦も真つ青な性欲の権化、完全に性欲のためだけに生きているような状態だ。セックス依存症ですらかわいいものになってしまった、といってもいいだろう。

（とつとと上がってこい、キリト。このくそつたれな世界を終わらせるために）

きつと、テイターニアが逃げたことを知ったオベイロンは、鳥かごをより強固に閉じ込めるだろう。そのかごをぶち壊すことができるのは、きつとあいっただけだ。腐敗し、独裁を極めた王を倒すのは、英雄か勇者と相場が決まっている。ならば、適任は「魔王」ヒースクリフを倒した勇者^{キリト}だ。何もできない自分に歯噛みしながらも、俺はただ漂い続ける脳と変動をつづける数値を見続けていた。

私はかなり暇を持て余していた。レインちゃんはレプラコーンであることもあり、職人たちにスキル上げ、もといしごかれに行っているが、私は用心棒なのでこうして待っている必要があるのだ。だが、正直必要ない気がする。シルフの中でも名うての実力者

のサクヤさんは言わずもがな、アリシャもそこ以上の実力者だし。用心棒はあくまで保険みたいなものだから、そこまで期待していかない、というのが実情だし。だからこそ、護衛は索敵スキルがかなり高い、闇討ち防止的なものが多い。まあ私は、索敵スキルの高さとSAOで培った「勘」によるものが大きいのだが。

「随分暇してるね」

そういつて横に飛んできたのは、小さな手乗りサイズの妖精。人目に付くからとあまり出てこなかったが、

「ストレア。もう出てきていいの？」

「うん。まあね。何より、」

そこで、テントの中に目を向けた。中ではレインがスキル上げをしているはずだ。

「あれだけ真剣だと、ね」

「そっか」

ほんと、恋する乙女は強いね

その本音は中にしまい込んだが、

「そうだね。感情からくる強さは、私たちにはない、人間の特権だよね」

この子にはばれていたらようだ。かすかに驚きつつ隣を見ると、ストレアは胸を張って言った。

「そりやそうよ。私は、メンタルヘルスカウンセリングプログラムだよ？ 私のその辺の読みあいでは私に敵う相手はなかなかないって」

「道理だね」

ストレアの言葉に、かなり納得して私は言った。メンタリストがババ抜きで負けないのと同じ理論だ。

「ま、そつちも元氣そうで何より、だね」

「最初は、まあ、思いつきだったけど」

「思いつきって……。それだけでもろもろプロテクトぶち壊すだけでは飽き足らず、そこにあるプログラムぶん捕って自分の力にしちゃうとか、普通は考えつかないよね」

「いいじゃん、別に」

「いや普通に犯罪だからね!？」

しかも仮にも、アクセス記録とか患者のカルテとか、その辺も保管されているプロテクトも的確に壊し、必要な情報だけ抜き取って、痕跡すらも残さずなど、空恐ろしいというレベルではない。病院関係者涙目である。実際には情報関係の流出など、必要最小限でしかしていないのだが。

「どうだったの、レインちゃんは」

「聞きしに勝るセンスだね。だって、随意飛行なんて10分で習得しちゃったし」

「ええ!？」

ちなみに、私が随意飛行習得にかかった時間は30分以上。数分ってことは、その三分の一度で習得したことになる。

「マジか……。化け物じみてるね」

「ま、私からしたらあなたも十分化け物だけどね。本来できないことも半分ハッキングでどうにかしちゃうんだから」

「必要なのは技術だから」

いい笑顔でサムアップしながらいう私に、ストレアは思いつきりため息をついた。彼女が言った通り、ストレアはもともとあの人に与えられたプログラムだった。だが、情報収集の過程で存在に気付いて、そのまま分捕ってきて、今に至る。ちなみに、本来プログラムを添付するなどという荒業は不可能なのだが、私の直感とごり押し、それからストレアのサポートで見つけたシステムコンソールで、もう一度ストレアをアイテム化することに成功して、それをレインのアカウントにつないでどうにかしてしまったのである。誰が使っているのか、という問題は、IPアドレスの照合でどうにかしてしまっただ。法律?ばれなきや犯罪じゃないんですよ。

「で、どうなのよ」

「たぶんだけど、ソロで武器を整備できるように、鍛冶系スキルを少しとってたんじゃな

いかな? そのおかげで、ちよつとは楽みたい」

「納得できるけど、ちよつと意外だね」

「まあね。プラス、愛しの王子様に会いたっていう思いがそれをブーストしてるみたいで」

「なるほどなるほど」

「からかつちやだめだよ」

「はいはいわかつてまーす」

どうやら無意識に悪い顔をしていたらしい。ストレアにくぎを刺され、私はたくらみを心の中で没にした。

「ま、とにかく。早く行ってあげないとね」

「ええ。そのために、ここまでやってきたんだもの」

空をゆっくりと見上げた。SAO帰還者をALOサーバーに接続させて何をしているのかなど知ったことではないが、何か嫌な予感がする。それだけは感じていた。

それから数日後、俺はまた例によって三人の位置を見ようとした。瞬間に、俺は強制転移された。この反応は何度目かの出来事で、転移先にあったのは白い円筒空間。(またグラウンドクエストに挑んだ馬鹿がいたのか)

内心軽いため息をついて、俺は弓を取った。矢をつがえ、狙いを定める。そこにいたのは、黒い影が一つ。・・・一つ!?

「馬鹿め、ソロでクリアできるとでも思ったか」

思わず声に出しつつ、ゆつくりと一撃必殺の機会をうかがう。待て、あの剣筋と腕は、「キリトか!?!」

驚きのあまり、俺は一瞬動きが止まった瞬間を見逃してしまった。確かにあいつは、一騎当千という言葉をそのまま体現できる。だが、それだけではこのクエストはクリアできないのだ。決してクリアできない難易度に設定されているだけならまだいいのだが、このクエストのクリア条件である扉はGM権限でロックされている。つまり、あの下種野郎以外にクリアする術はないのだ。到達して、クリアできないという絶望を味わうのならいっそ——

その思いから、俺は弓を引いた。今度こそ生まれた一瞬の隙をついて、矢を射る。その一撃がブレイクポイントとなり、キリトの体に無数の剣と矢が突き刺さる。それらはそのまま、キリトのHPバーを削り切り、リメインライトに変えた。ゆつくりと背を向け、上昇をしようとしたときに、どこか違和感を覚えた。

(ガーディアンポップが、止まない?)

本来、クエスト失敗扱いになったら、その時点でガーディアンのポップは終了するは

ずだ。だが、現にガーディアンズのポップはやまず、むしろ彼らは何かに対して攻撃を行っている。不思議に思い、もう一度目を凝らすと、そこにはシルフの少女がいた。記憶が正しければ、蝶の谷にキリトとともにいた子だ。

(是非もなし、か)

第二射をつがえる。そのまま、狙いを引き絞って放ったが、相手は機動でそれを躲した。完全に手慣れた動きから言って、古参のALOプレイヤーなのだろう。そのまま何発も放つが、結局は逃がしてしまった。

「面白い奴もいるもんだ」

俺はかすかに笑いながら、ゆつくりと上昇して引き上げた。が、すぐに転機が訪れた。というのも、それから本当に少し後に、またグランドクエストが受注されたのだ。

(いったいどこの馬鹿だ?)

興味をもって下を見てみると、そこにはキリトと例のシルフの少女、そして少年が一人。順当に考えれば、キリトが前衛、シルフの少女は遊撃、もう一人が後衛と考えるのが妥当か。ならばまず、

(後衛を潰す!)

前衛が手ごわい以上、後衛からの援護をまず先に断つことを念頭に考えた。本来、この手のクエストは前衛を中心に狙うため、後衛の能力が問われる。だが、このクエスト

は例外で、回復などを行う後方支援を行う相手にもタゲが向くようになっていたのだ。見たところ、後衛の少年はビシヨップタイプではなく、メイジタイプ。回復技はなさそうだ。どうやら少女のほうは回復ができるようなので、おそらくそういう点での役割分担ができているのだろう。

（悪いが、こっちも役割なんぞな。——おとなしく尻尾巻いて、元の場所へ引き返しやがれつてな）

心を落ち着けて、ゆつくりと狙いを定める。ガーディアンどもが後衛を釘づけにしており、狙いは定めやすかった。その姿勢のまま、ゆつくりと手を放した。

49. 世界の真相

私は急いでいた。蝶の谷のキリト君は、どこか追い詰められているというか、焦っていた。アスナが目覚めていないことを知っていて、ここにとらわれている可能性まで知ったうえで、のダイブならば、最悪一人で突っ走りかねない。そうなる前に防ぐため、エリーゼさんと私は二人の領主の許可をもらって先行していた。

エリーゼさんに教えられたとおりに飛び、アルンの世界樹の根元にある扉にたどり着いたとき、その扉は、

「開いてるね」

「行くわよ」

SAOで鍛え上げたステータスと感覚で飛び続けた結果、周りに言うとは信じられないようなタイムで飛翔していた。そのため、正直少し疲れているところもあるのだが、関係なかった。エリーゼさんがなにやらポーシオンを一気に飲み干したところで、私たちは世界樹に飛び込んだ。

世界樹を見上げると、そこには白い装備の敵がわんさといた。雲霞の如く、とはこういうことを言うのだろうか。だが問題はその奥。真下に向けて狙いを定める、一人の弓

兵。その狙いは、

(メイジ……!)

すぐに狙いを悟ると、私は一気に垂直上昇をかけた。メイジの少年との距離を考えれば、十二分に間に合う……!

前に躍り出た瞬間に、抜剣。確かな手ごたえとともに、放たれた矢は二つに分かれて落ちていった。

「うそお!」

後ろで二人分の驚愕の声が聞こえる。まあ、二人からしたら矢を剣で弾く、などというのは絶技にあたるのだろう。だが、碌な遠距離攻撃手段のないSAOで、矢の対処は躲すか弾くかだったのだ。しかも、私は限界ぎりぎりの戦いを潜り抜けてきた。このくらい、いかなれば普通だ。そのまま、勢いを殺さずに一気に上昇して彼の懐に切り込む。「はあっつ!!」

気合とともに、袈裟斬りをひとつお見舞いする。想像通りというか、相手はしっかりと刀でそれを簡単に受け止めた。はじき返すと、そのまま今度は円を描くようにまた近距離で突撃をかける。パリティとともに放たれたカウンターをしっかりと受け流し、もう一度突撃をかける。今度は一度ではなく、ラッシュを叩き込む。それをことごとく防ぎ、いなし、時にカウンターを入れる。仕切り直しの時に、私は彼に向かっていった。彼

は、もうすでに自身の竜から降りていた。

「こうして刃を交えるのも、久しぶりだね」

彼の返答はなし。だが、一層鋭くなった気配が、さらに高次な戦闘への合図だと分かった。

「そう、だね。ここまで来たんだもん。今度こそ、あなたを救って見せる」

私も、無策でここまで来たわけではない。切り札はある。

「行くよ……！」

もう一度。それでだめなら何度でも。そのために、私はここまで来た。

突進をかける。繰り出すのは逆袈裟。次いで、左手の拳で殴りにかかる。両方とも、彼はいなした。そして、刀で反撃をかける。瞬間に、私もカウンターを合わせた。が、そのカウンターは小太刀で防がれる。下がりながら、私は手に持った剣を投げた。

「ッ!？」

向こうが息を呑んだ音が伝わるのではないかと思うほど、はつきりと表情が変わる。直後に、エリーゼさんの突進が来た。こちらも奇襲になったようで、やや苦しめなガードになる。その間に、私はかすかな声で詠唱する。これは、短時間で鍛え上げた、レプラーコーン特有の魔法。そのまま、私は無手のまま突撃する。それは、はた目から見ればただの無謀な特攻。だが、ちゃんと意味のあるものだ。

「馬鹿めが・・・!？」

吐き捨てて、エリーゼさんを後ろへいなし、こちらを見据えた相手に驚愕が生まれる。それもそうだろう、私の手には得物が握られていたのだから。

レプラコーンは鍛冶妖精の名前の通り、武器作成に長けた種族だ。その特性上、彼らには武器作成を支援する魔法やスキルが存在する。その一つが、空間のはざまに武器を収納する”というもの。つまり、これを使えば、レプラコーンは前線武器庫となりえる。そして、それは自分に対しても例外ではない。加えて、キリトの支援の関連で出た、最上級じゃないにしろそれなり以上の武器というものが、軽く数十ほど入っている。数十程度ならすぐに使ってしまうと分かっているからこそ、この相手に使いつぶす気など毛頭ない。相手は、ことごとくした飛び道具にかけては専門家といていい。相手のフィールドで戦うのは愚策だ。

「なるほど、鍛冶妖精の魔法、か」

「まあ、ね。」

・・・分かったところで、どうにかなる問題でもないでしょ」

「それもそうだ。今重要なのは、貴様らが俺の前にいる。それだけだったな」

それだけ言い残すと、彼は左手の小太刀を逆手に前へ、右手の刀は半身気味の体に隠すように構えた。彼の、防御に重きを置いた構えだ。ということは、

「倒すことが目的じゃないんだね」

「さすがに、手練れを二人も相手に、攻めることに重きをおいては討ち取られかねんからな。ここを通さない、ということに重きを置かせてもらう」

そう思った矢先、後ろで大爆発が起こった。後ろを向きたくなる意思を、鉄の意志で抑え込む。そこで、一つ彼は言った。

「自爆、か。死なないからできることとはいえ、なかなかどうして気骨のある真似を」

その言葉に、私は一つの確信を得た。だが、それを証明するためには、おそらく先へ進む必要がある。

「はああああっ!!」

気合とともにもう一度突撃する。上に下に、目まぐるしく立ち回りが変化しながらも、お互いがお互いを読みあい、斬りあっていた。彼の乗っていた竜の相手をしてくれているのか、エリーゼさんの援護はないが、彼の竜の援護もない。不退転の覚悟で、私はひたすら切り結んでいた。

二人がエアレイドを行っている間、私は下に降りて援軍の援護に回っていた。彼が乗っていたと思われる竜もいるから、かなり働く必要があった。全く、追加分の報酬をふんだくらなくてはやってられない。キリトは確かに一騎当千の戦士ではあるが、その

理論でも万の軍勢を向けられては立つ瀬がない。だが、その心配はなかった。

「後ろ頼むー！」

「任せてー！」

キリトとリーファが背中合わせで構える。二人が闘う呼吸は、まさに阿吽の呼吸だ。明らかに、援護は必要ない。ならば、

「露払いくらいは役に立たないと、ねー！」

言いつつ、投げナイフを投げる。過たずそれは上から狙いをつけるガーディアンの間突き刺さった。私も結構この手の飛び道具は詳しくなった。魔法戦を仕掛けてくるメイジ相手に、飛び道具を持たない理由などなかったからだ。それに、あの人が飛び道具を扱うところにあこがれた、というのもある。あの戦い方は、アレンジされて私の糧になっている。近接して殴りかかってくる竜の動きを読んで、攻撃してきた彼の騎竜の攻撃をいなす。状況としてはやや劣勢。だが、私も、

「必殺技の一つや二つ、仕込んでるんだからねー！」

この世界に来てから戦う術を身に着けていた。肩の前で突きの構えを取り、詠唱を始める。入り口で一本、戦闘中に二本。ぎりぎり最初の魔力ポーションの回復力は残っているため、全部で三本分の魔力回復ポーションと、発動時に魔力が減る仕様。この二つが組み合わさった結果、魔力回復量は桁外れなものになっている。今までに消費した魔

力量、発動する瞬間までの時間と、魔力の回復量を考えれば。

むろん、この間は動けない。だが、問題ない。

「せいっ！ そりやつ！ てやあっ！」

心強い相棒がいた。意外なことに、ストレアは前衛で暴れるタイプだったのだ。私の背とそんなに変わらない大きさの大剣を振り回すその姿は頼もしい。キリトと気が合いそう、というのは実際に口に出したらぶっ飛ばされそうなので言わない。口を止めずに目だけで礼を言うと、ストレアは意味ありげに一つウインクを飛ばしてきた。

詠唱が終わる。あとは、ぶちかますだけだ。

「ストレアっ!!」

「おっけーやつちやつてー！」

ストレアがまるで悟っているかのように射線から逃れる。そこに向かって、突きを放つ。

「ぶっ飛べ!!」

イメージするのは某運命なゲームのヒロイン、その少女剣士の技。風をものすごい勢いで打ち出すだけ、という技だ。だが、私が生み出したこれは一味も二味も違う。なにせ、私の魔力が、一発撃つだけで満タンからほぼすっからかんになるほどの大技なのだから。威力もそれ相応というものだ。たまらず竜がその攻撃をかわし、ガーディアン

群れに文字通りの風穴が開く。

「キリト!!」「おにいちゃん!!」

私とリーファの声に、キリトが反応して上昇する。その手に、ピンポイントでリーファの長刀が投げ込まれた。——てちよつと待て、お兄ちゃん？

「全軍反転、後退!」

あの勢いのキリトならば、絶対最上までたどり着く。その確信があつたからなのか、サクヤとアリシヤから出た命令。ならば、

「しんがりは引き受けるよ!」

「追加料金は値切るからね!」

「いいわよ、踏み倒しなら容赦なく下剋上に行くからよろしく!」

「ワーオ、それは怖いネ!」

おちやらけたようなアリシヤの声をよそに、私は刃を構えた。その隣で、両手剣を構えたストレアが並ぶ。

「さつて、ここまで日陰者だったんだし、暴れてやろうじゃないの!」

「女の子がそういうこと言うんじゃないやありません」

「そういうことを大量の敵を目の前にしてバーサクする気満々な笑顔で言われても説得力皆無だよ?」

「ふふ、それもそっか」

まあ、あとはあの二人に任せる。それしかない。その思いを胸に、私たちは散開して追撃にかかるガーディアンに切り込んだ。

その時から少し時間を戻して。

「はあああああつー！」

「シッ！」

私たちはひたすらに切り結んでいた。ひたすらに打ち合い、離れ、もう一度打ち合いというのを繰り返していた。彼は防衛を専門としていたため、運動量としてはこちらのほうが圧倒的に上だった。だが、少しずつだが、私の思っている方向に立ち位置が変わっていった。具体的に言うと、高度が少しずつ上がっていった。

(この剣筋……！やつぱり間違いない……！)

斬りあいながら、私はホロウと名乗る彼の正体がロータス君であるという確信を得ていた。というのも、過去に模擬戦や共闘で見た、彼の剣筋と寸分たがわぬそれ、そして戦闘スタイル。ここまで重なれば、嫌でも気付くというものだ。

「やはり、君は……！」

「そういう君も、やはり相当な手練れだな……！こうした勝負は、本当に久方ぶりだ……」

！」

その直後、少し力の方向を変えて、彼はしつかりと受け流した。振り向きざま、彼は背負っていた弓を抜いた。その武装交換速度は一瞬で、まさに手練れだった。その弓が引き絞られ、放たれようとする寸前、轟音が響いた。それは私たちの少し横で、突風なんていうものではない。まさに、竜巻が打ち出されたようなものだった。

私の目がとらえたのは、なにやら口が速く動き、右手の矢に光がともる光景だった。ならば、見てから回避する。剣を構え、左手でスローイングタガーを数本構える。やがて放たれた矢は、まるで私を避けるかのように8つに分かれ、そのまま背後にいた世界樹の守護者を一度に10は屠った。想定外の状況に固まっていると、彼は意味ありげに口角を上げた。

(本当に、不器用な人)

それだけ思うと、私は一気に上昇した。いつの間にか彼はその場から消えていた。

「どういふことだ!？」

私が天井に到達すると、そこには一回突き刺さった剣をもう一度天蓋の割れ目に突き立てるキリトがいた。すると、胸元からずりりと小さな何かが出てきて、天蓋に手を当てた。

「これは、クエスト権限でロックされているではありません。このロックは・・・GM権限でロックされています！」

「てことは、つまり、」

私の信じられないといったつぶやきに、その小さな何かは続けた。

「はい。この扉は、プレイヤーが自発的に開けることはできません・・・！」

これですべて合点がいった。このクエストの異常なまでの難易度は、この最後のからくりをばらされなかったためだったのだ。そして、そんなところにはやましいものが隠れていると相場が決まっている。

「ユイ、こいつなら・・・！」

そういって、キリトは胸ポケットから何かカードを取り出した。ファンタジーなこの世界には似合わぬ、まるでカードキーのような何か。だが、それを感知したのか、ガーディアンがこちらに向かってきた。

「させないよー！」

素早く剣を振り、襲い来るガーディアンを薙ぎ払っていく。直後、鈍い音を立てて割れ目が少しずつ開かれた。

「レインー！」「レインさん！」

その声にこたえ、私は戦闘を中断して、キリト君たちに手を伸ばした。一回だけ大き

く羽ばたいて、あとは羽を大きく広げて空気抵抗で制動をかける。何とか手が届いて、小さな手にかすかに触れたところで、私たちは光に包まれた。

光が収まると、私たちは見知らぬところにいた。これまた、ファンタジーな世界に似合わぬ近代的な雰囲気だった。

「パパ、レインさん」

かすかな、まどろみに似た覚醒が、はつきりとしたそれに切り替わる。

「……、は……?」

「座標から考えると、世界樹の上、と、推測されます。つまり、——」

「公式でいう、妖精王の居城ってこと? どう考えてもお城って雰囲気じゃないよね」

そんなことを言っていると、規則正しい足音が聞こえてきた。

「やはり、ここまで上がってきたか」

「てめえ……ッ!」

そこにいたのは、ロータス君だった。どこか涼し気に、歩き出そうとする私たちの前に立ちはだかった。

「いやはや、あの開かずの扉をこじ開けるとは、驚嘆に値する」

「……まで来てなお、邪魔するのか」

「ああ。だが、君たちを二人同時に相手するのは、いくら私でも手に余る。ゆえにどちらかは通そう。そして、丸腰の相手を斬る趣味もない」

「つまり、ユイと追加で一人は通す、ということか」

「ああ。最善は二人とも食い止めることだが、それはできない。ならば、次善を尽くす。それだけだ」

その言葉に、私は一歩だけ前に出た。

「行つて、キリト君」

「いいのか？」

「うん。それに、久々にこの人と戦いたいと思つてる自分もいるの。お願い」

その言葉に、私は抜剣で、キリトは無言で示した。

「と、いうことは。少年のほうが先に行く、ということか」

「ええ。あなたの相手は私よ」

「そうか」

それだけ言うと、キリトはその場を去ろうとする。その背中に、彼は思い出したように言った。

「ああ、そうだ、少年。宝物ほうもつというの、高いところにあるというのが定石だぞ」

一言、それだけだった。その言葉で、キリトはようやく確信を得たようだ。

「早く行け^ゆ」

「やっぱり、お前はよくわからないよ」

その一言を残して、キリトはユイちゃんの手を引いていった。

「さて、やろうか」

「うん」

それだけ言うと、私たちは刃を抜いて向き合った。

50. 終焉

最初の一步は同時だった。そのまま、先ほどのエアレイドと同様に、連続で斬りあい
を繰り返していた。お互いがお互いの剣筋を見切りあい、いなし、躲し、防ぎ、反撃し。
向こうは小太刀も抜き、二刀を駆使して全力で連撃を繰り返していた。それに、私も追
従する。緊迫した殺伐とした斬りあいのはずなのに、その中には得も言われぬ高揚と楽
しさがあつた。

(なんか変なのかな、私)

思考は止めない。その中で、私は考える。

(こんなに、あなたと戦っていることが楽しいなんて)

右手による左下からの逆袈裟。続いて右からの薙ぎ、唐竹割り。薙ぎを受け止めつつ
前進して、逆袈裟で返す。と見せかけ、本命は拳。そこで、相手の右手首を強かにたた
く。相手も、パリーの寸前で私の狙いに気付いたようだが、もう遅い。そのまま、獲物
を取り落としてしまう。私はそれを見て、あえて少し下がる。相手は左手で斬りかかっ
てくる。今度は前進しながら左からの袈裟。それを、切り抜けつつ受け止めにかかる。
相手も、それを見てなお全く引く気はない。そのまま打ち合ったとき、私は自分の剣が

手を離れていくのを感じた。回転して改めて向き合うと、そこには両手に獲物が無い状態の彼がいた。

相手の獲物がその手にない。もう一つの得物たる弓はもうすでに間合いではない。ここで踏み込まない手はない。筋力ステータスはほぼ同じか、向こうのほうが少し上。力勝負なら、相打ちがいいところか。うまく狙いを外すことができれば倒せるが、少しリスクだ。ならば、剛直拳を狙い、絶妙のタイミングで下がって罅を繰り出し決める、というのが、まず私の描いたシチュエーションだった。相手からすれば、力づくで突破できる可能性の高い剛直拳を使うのがセオリー。

間合いに入る。相手は動かない。

相手からすれば、相打ちで十分。

ほんの少しだけ、私は動く。拳の初動のみを見せる。合わせる形で、相手はほんの少しだけ身をひるがえしつつ、アッパーカットの一撃を放った。

それにカウンターで合わせるように、私はストレートをねじ込んだ。それは私の想定通り、剛直拳よりさらにアッパーに上がった彼の腕を強かにたたき、弾き飛ばした。完全に体勢を崩されたところに、私はマウントを取って投擲用のナイフを首筋に突き付けた。

「私の、勝ちだね」

「ああ。そして私の敗北だ」

ゆつくりと息を整え、彼は一言、

「どうして、あの場面で罽が来ると思った？」

とだけ聞いた。

「あなただからだよ。本当に記憶をなくしていたのなら別だけど、完全な君なら、裏の裏をかいてくる。私が、君の剛直拳を読んで罽を出すところまで読んでいるのであれば、さらにタイミングをずらして、完全な力勝負に持ち込むというのは、十二分にあり得ること。常に、相手の裏をかくということを考えてきたあなた相手だからこそ、取れた戦術だよ」

私が言葉に込めた意味を、彼は正確に把握したようだ。どこか自嘲するように笑って、彼は言った。

「・・・そうか。ということとは、もう嘘はいらないな。どこで気づいた？」

「剣筋を見せておいて、ばれないと思つたの？それに、*“何も忘れちゃいけない”* って、そのままの意味でしょ。今までのこと、覚えてるって、そういうことでしょ。それに、おめおめと同じ手を二度も食うほど馬鹿じゃないよ、私」

「そうだったな。さて、んじやま、お姫様と勇者様の援護に行く前に、ま、もろもろ説明しなきゃな」

「それは後でいいよ。アスナさんを助けよう?」

「・・・そう、か。それも知ってるのか。なら、そつちを先にするか」

そういうと、彼は自分の得物を拾い、私の得物を放つてよこした。そのまま背を向けて、彼は言った。

「俺についてこい。大丈夫、あのバカな王様は、俺が裏切るなんてミジンコ一匹分として思っっちゃいない」

彼の後をつけると、扉の前にたどり着いた。その扉の横には、三角のボタンのようなものがあつた。・・・ボタン?」

「そうだ、見たまんま。ま、その辺の積もる話は、まとめて後にする」

どうやら、最後の一言は口に出ていたらしい。扉が開くと、彼は中に入るように促した。その見た目、中身、機能。それはまるで、

「エレベーター?」

「ああ。移動が楽で、技術力を誇示できるから、という理由らしい。・・・全く、ばかばかりかい」

そう吐き捨てる彼は、記憶あるままだつた。やがて、一つの扉の前で手をかざすと、その扉はひとりでに開いた。その中には、スライムに目玉がついたような、おぞましいものがあつた。

「これはこれはホロウ様。どうしてこのような場所に？」

「王の客人をお送りするためにな。しばらく二人で説明をしたい。少しの間、第一ラボのほうに向かつてもらえるか？ 私がそのように頼んだ、といえば、貴様らに危害が及ぶことはないだろう」

「はっ。かしこまりました」

それだけ言い残すと、そのスライムは部屋から出て行った。部屋から出る時も、どうやら一礼したようだが、すぐに見えなくなった。

「・・・よし、これでいい」

そういうと、彼はシステムコンソールと思しきものを操作し始めた。その光景を見て、彼は問いかけた。

「これに見覚えがあるのか？」

「うん。ちよつと前に、ね」

「なるほど。扉を無理やり開けたところを見るに、何らかの高度なプログラムが働いていたのだろう、とは推測していたが・・・」

とにかく、今この部屋は完全な密室空間にした。扉の前で聞き耳を立てていても、何も聞こえはしないし、扉はどうあつても開かない」

「そんなことができるの？」

「この身には管理者権限の一部が付与されているからな。このくらいは知識があれば誰でもできる。」

さて、いよいよ王の玉座に転移するぞ。あの下種王の前で、少し話を合わせてほしい。いいか？」

「・・・分かった」

「よし。じゃあ行くぞ。転移シークエンス、開始」

そういうと、まるで一つの作業の終了の時に勢いよくエンターキーを押すように、彼はシステムコンソールに指をたたきつけた。瞬間、その画面に、『カウントダウン：5』と表示された。そのカウントが尽きるまでに、彼はスローイングタガーを私の首筋に突き付けていた。そのままの体制で、私たちは転移された。

転移先は、真つ暗な部屋だった。光量は最低限しかなく、ここではアスナさんが鎖につながれ、キリト君はまるで何かに押さえつけられているかのように這いつくばっていた。その顔は、憤怒と憎悪に歪んでいた。その光景に、私は思わず顔がこわばった。対照的に、彼は転移直前の無表情のまま、目の前の男に話しかけた。

「オベイロン様」

「ホロウか、どうした？今は忙しい」

「以前申し付かりました小娘を連れてまいりました」

彼の言葉に、オベイロンと呼ばれた金髪の偉丈夫は、視線だけで振り返った。

「そうか、ご苦労。下がって——いや、そのままでいろ。せつかくのパーティだ、一人でもギャラリーは多いほうがいい」

その言葉に、私は顔に力が入るのが分かった。パーティ？こんなものが？ただの欲望を暴走させた男によるレイプのようなものではないか。その時、彼の目つきが異常に細くなり、私に込められていた腕の力が緩んだ。

「パーティ、ねえ……」

ぼそりと、小声でそんなことを言った。オベイロンはアスナさんの服を破き、その目にじりに浮かんだ涙に手を伸ばした。その瞬間、鎖が千切れとんだ。

「何者だあ!!」

大声を上げ、振り返る。その先にいたのは、恐るべき早業で背負っていた弓を構え、魔法を付マジック加した矢を射た彼がいた。

「ただ欲望を解放したただけじゃねえのか。そういうのは妄想の中だけにしたらどうだ、王様」

オベイロンは、突然の彼の変化に、混乱の表情を浮かべた。

茶番は終わりだ。もうこの男に唯々諾々と従う理由はない。この世界を、一度終わらせる。腐ったものを直すとき、一度壊したほうが速い場合もある。とりあえず、この男の無駄に小物な性格、そしてキリトの反応からして、使ったと思われる手段は、

「システムコマンド、マジカコード、グラビティをリリース」

その言葉に、キリトとアスナの顔から苦痛が幾分か消えた。どうやら俺の想定通り、テスト段階にあつた重力加算の魔法だったようだ。さらにオベイロンは混乱し叫んだ。

「いったい、いったい何が起きている!？」

「黙れよ、裸の王様。もうここにお前の味方はいないぜ」

「黙れ、黙れ黙れ黙れ、黙れエー! システムコマンド、IDホロウのアドミニストレータ権限をオールデリートオ!!」

その言葉を言った瞬間、俺が開いていたシステムコマンドウィンドウが閉じた。つまり、管理者権限がなくなったということだ。

「は、はは、ハハハハ!! 所詮君はその程度、王に従う臣下に過ぎないんだよ、シンカにい! 図が高い、控えろオ!」

ところどころ裏返りながら、オベイロンは手を前に出そうとした。が、その時、ガラシと重々しい金属の落ちる音がした。そちらを見ると、キリトが立ち上がっていた。そ

の背中に突き刺さっていたはずの剣は地面に転がっていた。先ほどの音はそれだろう。そして、憤怒と憎悪に歪んでいたキリトの顔に、幾分か冷静さが戻っていた。

「おかしいなあ、オブジェクト座標を固定したはずなのに。まだ妙なバグが残っているのか。全く運営の無能どもめ……。ゴミはゴミらしく、無様に這いつくばっているお！」

それだけ言うと、オベイロンは拳をキリトに向かって振り上げた。工夫も何もなく、ただ殴り飛ばそうとしただけだ。だが、それはキリトからすれば片目をつむってでも受け止められるものに過ぎなかった。

「システムログイン。ID “ヒースクリフ”。パスワード——」

そのあとに、キリトは長い英数字の羅列を言った。その言葉が終わると、オベイロンはさらにうろたえた。

「な、なんだ、そのIDは!？」

半分条件反射か、さらにはいつは右手を縦に振った。この世界で、一般的にメニューウィンドウは左手で開く。つまり、右手での操作が意味するところは、それとは別のウィンドウの表示。何かに恐れるように、オベイロンも右手でウィンドウを開く。だが、それによる操作は、

「システムコマンド。スーパーバイザ権限変更。IDオベイロンをレベル1に」

その直後に放たれたキリトの言葉で無効化された。現れたウィンドウが、その言葉で消えたことに、オベイロンの動揺はさらに広がった。

「な、さ、さらに高位のIDだと!? いったいどうなっている!? ありえない、僕は支配者だぞ・・・!? この世界の帝王、神——」

「そうじゃないだろう」

オベイロンの動揺任せの叫びを、キリトの静かな声が打ち消した。

「お前は盗んだだけだ。この世界も、住人も。盗んだ玉座で踊っていただけの、泥棒の王だ」

「ゴッ・・・ツの、ガキがあ・・・。後悔させてやる・・・!」

システムコマンド! オブジェクトID、エクスキャリバーをジェネレートオ!

怒りに任せたオベイロンの音声入力は、想定通りというべきか何も発生しなかった。

「システムコマンドオ!! いうことを聞け!! この、クソ、王の、神の命令だぞ!!」

「うるせえよ」

ただ喚き散らす、そのみぞおちに、ピンポイントで俺の蹴りがさく裂した。SAOで鍛え上げられたステータスでの蹴りは、オベイロンを吹き飛ばすには十分すぎた。

「お姫様を助けてやれ、キリト。時間稼ぎくらいなら、俺ごときで十分だろう」

背中越しの俺の言葉を、キリトがどう受け取ったのかは知らない。だが、

「システムコマンド！オブジェクトID、エクスキャリバーをジェネレート！」

その言葉と、何かが生感される音とともに、俺たちの間に黄金の剣が落ちてきた。それに、俺は意図を察した。

「過程も何もかもすつ飛ばして、コマンド一つで伝説の武器を召喚、か。いいご身分だったこつたな」

自分もその一員だったことに、俺は嫌気がさした。剣を取って、オベイロンに放る。「さて、裏切り者と無能な王、その戦いを始めようか」

小太刀を突き付けて、俺は宣言した。俺のどこか傲慢な態度が癪に障ったのか、オベイロンは破れかぶれの型で斬りかかってきた。そんなもの、わざとでもない限り俺が当たるわけもない。だが、オベイロンにはそれがわからない。だから、狂乱して踊りかかるとかのように剣を振り回すだけだ。無駄だらけの動きに、オベイロンは完全に肩で息をしていた。息を整えている間に、後ろから誰かが肩を叩いた。

「ありがとう、ロータス」

「おう。ここから先は勇者様のお仕事だ。やり返してやれ」

「ああ。・・・一応、管理者権限は戻してある。だから、それで先にログアウトしておいでくれ」

「あいわかった。と、言いたいのはやまやまだが、俺にもやるべきことがある。それが終

わったら、向こうで会おう」

その言葉が終わると同時に、俺たちは拳を合わせた。完全に蚊帳の外だと思われたレインは、どうやらつかの間の再会を楽しんでいたらしく、笑顔だった。

「さて、と。行こうか、レイン」

「うん。言いたいことたくさんあるんだから、覚悟しといてね」

「おお怖」

あまりにもわざとらしすぎる芝居をして、そのまま俺たちは転移した。

転移先は、第2実験室。そのシステムコンソールに用があった。

「さて、事情を説明——」

その先の言葉は言えなかった。俺の唇に人差し指を当て、にこりと笑うレインの顔には、得も言われぬ威圧感があった。・・・いつの間にかこんなもの習得してやがったこの小娘。

「分かった。とりあえず、ここは、最低限のことだけやるか。手始めに、全員のログアウトをさせる。もし、協力者が殴り込んできたら、問答無用で斬り捨ててくれ」

それだけ言うと、俺はシステムコンソールを操作しだした。本来運営しか操作ができないようになってはいるはずなのだが、あいにくとこの身には管理者権限が付与されてい

る。仮にこの動きに、オベイロンの協力者が気付いたところで、俺の横には、背中を預けるに足る相手がいる。安心して、俺はシステムコンソールを操作できた。少し苦勞して、ようやくいくつかに分散して秘匿されたプレイヤーたちの解放に成功すると、俺はふうと息をついた。

「終わったの？」

「ああ」

それだけ言うと、俺は隣の少女を見た。

「悪かったな、こんなところまで」

「そういうのはなし。私は好きでここまで来たんだから」

「・・・そう、か・・・」

好きでここまで来た。その言葉を、ゆっくりと頭の中で転がす。

「積もる話はあと。そういうことだったでしょ？」

「ああ。そうだったな」

それだけ言うと、俺は自身およびレインのログアウト操作一步手前までたどり着いた。

「さて、じゃあ、ログアウトさせるぞ」

「うん。また、向こうで、ね」

「ああ。またな」

それだけ言うと、俺は最後にシステムコンソールを操作した。

epilogue : 現実にて。

あれからしばらくして、俺は車を運転していた。というのも、東京のほうで働いてくれないか、と依頼を受けていたのだった。そこで、愛知県に住んでいた俺は引越しを余儀なくされた、というわけだ。そこで、ぎりぎり失効を免れていた免許を使って、愛知から東京までドライブ、とあいなつた。半病み上がり、しかも運転は数年ぶりと来た。そんな状態で300キロ以上の距離は難しいので、途中で一泊することになったのだが。

『目的地・周辺です。この先注意して・走行してください』

やかましわわかつとる。つかもう見えとる。という本音を包み隠し、俺は車をロータリーのほうに向けた。人の出入りが少なそうな時間を指定したこともあつてか、その姿は目立っていた。その近くに向けて車を滑り込ませると、相手もようやく気付いたようだ。

「さすがというか、時間通りだね」

「当たり前だ。時間を守るってのは最低限のマナーだからな」

「ふふ、君らしい」

そんな会話を終わると、その相手も乗り込んだ。

「さてと、道案内頼むぞ」

「うん。とりあえず、ロータリー出るところを左折したらしばらく直進ね」

「了解」

それだけ言うと、俺は車を発進させた。

駅から大体10分ほど車を走らせると、マンションについた。アパートかもしれないが、細かいことはどうでもいい。車を近くの駐車場に止めて、俺は改めて、虹架の実家へ向かった。

何を隠そう、その途中一泊の場所が、静岡にある、レインこと枳殻虹架の実家なのである。

正直、SAO帰還者ということで、色眼鏡に見られるのではと思っていたのだが、そんなことはなかったらしい。というのも、虹架が結構俺のことを話していたそう。：：いったい何喋ったんだあの娘、とそこはかたない不安を、向こう仕込みのポーカーフェイスで包み隠して、俺は挨拶をした。

「初めまして、天川蓮です」

「虹架の母です。しかし、あなたがロータス君とはね」

「ええ。まあ、キャラクターのネーミングは、そのまんまですけど」

「変にひねって妙な名前になるよりはいいと思うわ。それに、名前に関しては、うちの虹架も人のことは言えないし」

「ちよつとお母さん」

「はいはい、分かったわ。ご飯にしましょうか。時間もちよつどいいくらいだし」

そういうと、虹架のお母さんはご飯の支度に入った。

「しっかし、こんな環境が再びとはね」

「え?」

「いや、何でもない。こつちの話」

俺の独り言が聞こえたのだろう、虹架が聞き返してくるが、それはなんでもなかったように切り返した。俺からしたらこんな、純粹に温かい家庭といえる環境は本当にいつ以来だろうかと思うほどに久しぶりなのだ。

SAOから帰還した俺を待っていたのは、まずリハビリだった。というのも、戻った直後は文字通り、腕を持ち上げるだけでも一苦労だった。医者に言わせると、疑似的な脳信号を筋肉に直接送り込むことによりある程度動かしていたからまだよかつたらし

い。それでも、喋り続けることも、気軽に手を上げるのもできない。そんな状況だったので、ひたすらにリハビリをしていた。

リハビリを終えたはいいものの、俺の家に居場所はなかった。SAOに関する情報は十二分に公開されていたにもかかわらず、親からしたら「ただ2年間もゲームだけに明け暮れたバカ息子」という認識だったのだ。すぐに荷物をまとめ、俺はなけなしの金とともに家を追われた。その金も、いつの間にか独立させられていた携帯電話や、日々の生活に当てられ、ほとんど手持ちなどないに等しかった。そんな折、俺の携帯電話に連絡が入った。電話をかけてきたのは、俺の事情聴取を行った、仮想課の役人だった。彼はその中でもかなり上の部類のようで、俺がSAOでやってきたことから、直接話を聞いていた。そこで聞いたのは、東京のほうで働いてくれないか、ということだった。急な話でもあるので、住宅もこちらで便宜を図るといふことだった。どちらにせよ、親の支援が受けられない時点で、大学には通えない。俺からしたら、願ってもない話だった。で、そのリハビリ中、どこから知ったのか、虹架が訪ねてきた。そして、あれこれ事情を話すうちに、あれよあれよと連絡先を交換され、交友関係を築いて今に至る。SAO帰還者の学校への引越しが済んでおらず、いずれ越さなければならぬというのは雑談の中で知っていた。そこで、一緒に移動しよう、と俺が言い出した。それを待っていたかのように、すべてを計算しつくしているかのように、これまた押し切られた。：

いやはや、男より女のほうが計算高いというのは一般論だが、それを身をもって実感した瞬間だった。

「そういえば、虹架、お前ちゃんと宿題はやってんのか？」

俺の無造作な問いかけに、虹架はうつと声を詰まらせた。

「ちゃんとやつとけよ。手伝ってやるから」

「・・・はい」

むくれたまま顎をテーブルの上に乗せる。その様子がどこかおかしくて、俺は思わずその頬に人差し指を立てた。膨れていた頬に指が埋まる。そのからかいに、さらに頬を膨らます虹架だが、それで指をひっこめる俺ではなく、むしろくりくりと頬を指先でなでる。・・・うん、ぷにぷにして気持ちがいい。ある程度堪能したところで、指を離した。どちらともなく笑っていると、虹架の母親が料理を運んできた。

「そういういえばさ、こつちでどんな仕事するのかとかって聞いてる？」

「詳しくは聞いてない。なんかS A O 帰還者に関する話だつてのは聞いたが」

「S A O 帰還者に関する話つていうと・・・カウンスリングとか？」

「さあな。ま、俺にカウンスリングなんか勤まると思えんが」

と、口では言いつつ、実はそうではない。実はそこそこ聞いている。だが、今現時点ではできるだけ誰にも漏らさないようにと言われているし、彼女の立場を考えると隠しておいたほうがいいだろう。・・・果たして知ったときにどんな反応をするのかは見ものである。

「ま、いざれ分かるだろうよ」

「そうだね」

それだけ言うと、俺はゆっくりと手を合わせて、料理に箸を伸ばした。

思いやりがある虹架の母親らしいというか、どれもきれいに味付けがなされていて、優しい味だった。というか、いろんな意味で娘を振り回した張本人である俺に対して、ここままで、おそらくではあるが、平常通りをできるのは、ただただ素直に驚きと尊敬に値するものがあつた。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様。お口に合つたかしら？」

「ええ。すごくおいしかったです」

「それはよかつた」

虹架は先に食べ終わって片づけと風呂洗いをしていた。こういう家庭だから、家事一

般はそこそこ以上にはできるらしい。

「そういえば、ね、君にとつて、虹架はどうなの？」

「どんな、と言われても・・・いい子だな、とは思いますが」

「そうじゃないつて、分かつてるでしょ？」

思い切りド直球で聞かれて、何となく煙に巻こうとはしてみたが、きれいに返された。思わず苦笑して眉を掻いてしまう。・・・まいったな、あいつの妙な勘の良さはここがルーツか？

「正直、自分のしてきたことは許されないと思っています。俺があの世界でやってきたことを、包み隠さずすべて話したら、誰もが俺のもとを去って行くだろう。その確信もあります。でもそれでも、虹架さんについてきた。なんというか、目を離すことを許さないというか、良くも悪くも懐にずっといるような、そんな子です」

「あの子の思いについては？」

「・・・うすうすとは」

その言葉に秘めた思いに、虹架の母親は気づいたようだ。

「そう。」

あの子はね、幸せになってほしいと思つてるの。だから、どんな形であれ、あの子のこと、よろしくね」

その言葉には、果たしてどのような思いが込められているだろうか。少なくとも、俺が思っているより、もっと複雑で、多くの思いが込められた言葉なのだろう。だからこそ、すぐに返事をする事ができなかつた。

「はっ」

少しの間をおいて、俺はしっかりと目を見て頷いた。

その翌朝。ちゃんと引越しの準備を終えていた虹架の荷物をレンタカーに積み、俺たちは部屋を出た。少し名残惜し気に別れを告げて、俺たちは長めのドライブにでた。

『まもなく・右方向です。・その先、合流が・あります』

淡々とカーナビが道を教える。それと、Bluetoothでつないだ端末から流れる音楽がよく聞こえた。

「そういえばさ、」

「え?」

「ありがとな。助けに来てくれて。まだ言っていないな、って今思ってたさ」

完全に横顔だったから、どんな表情をしているのかは分かり辛い。だが、少なくとも、険しい顔はしていなかったはずだ。かすかに頬が上気して赤みが差してはいたが。

「そんなの、いいよ」

「お前がよくても、俺がよくない」

「律儀だねー」

「妙なところ妙な風に、つていうのがめっちゃ多いからな」

「面倒な人」

「ああ、自分でもそう思う」

そういつた彼の顔は心なしか明るかった。お互い口数が多いわけではないから、沈黙も短くない。だが、決してその沈黙が苦ではなかった。

寮につくと、俺たちは虹架の荷物を下ろした。順に、先に指定されていた寮の部屋に運び込む。仮にも車に積める程度の量だったこと、最初からある程度のもはそろえられていたこともあって、引越しは想像以上にスムーズに進んだ。

「さて、と。こんなところか」

「そうだね。ありがと」

「うんにゃ、大した苦労じゃないから安心しろ」

手をひらひらと振りながら、俺は言った。実際、大した苦労ではない。さつきも言ったように、どれだけ言っても車に乗る程度の量しか載せていないのだ。しかも、車には俺の荷物も載っていた。虹架自身も働いていたし、そんな苦労はなかったのだ。

「蓮さんは、どこに住むことになってるの？」

「俺は、・・・遠くはないみたいだな」

すでに、周辺の地図と住所は渡されている。その住所は、決してここから遠いところではなかった。

「ま、何かあつたら呼びな」

「あ、はい。頑張ってください」

「おう。しつかりな」

それだけ言うと、俺は車に乗り込んだ。手を振り返しつつ、俺は車を運転した。

実を言うと、俺はもうすでに仕事の詳細を聞いている。正直、俺に務まるのかわからないといったが、そこはちゃんとサポートをするらしい。そういわれて、俺は頷いたのだった。

自分の引越しを終え、もろもろ終えたところに、俺の携帯に電話がかかってきた。

「もしもし」

『あー、よかったつながつた』

その声に、俺は本気でこめかみを押さえた。頭痛すらしてる気がするぞおい。

「・・・何で俺の番号知ってるわけ。教えてなかったよね」

『調べた。菊さんと仲良くなって』

菊さん、というのは、例の役人のことだ。〃菊岡〃という苗字だから、俺は〃菊〃と呼んでいる。どうやら、電話をかけてきた相手——永璃ちゃんも同じらしい。

「で、何の用、永璃ちゃん」

『ただ単につながるかどうかの確認。働き口が一緒になるみたいなのでよろしくという挨拶込みで』

「あつそう。よろしく」

『あらそっけない』

「じゃあどういふ反応しろってんだ」

『もう少し驚くとかしてもいいな——って』

本当にこの子はつかめない。後輩時代から、なんだか距離の取り方がわからない子の筆頭だった。

『あ、こつちも少しやることがあるので、また』

「ああ、またな」

それだけ言うと、向こうは電源を切った。それを確認して電話を切つて、俺は電話帳に〃橘永璃〃を登録する。と、部屋に気を利かせて積みあげられた本とノート、それから鞆の中から筆記用具を取り出し机に放つて、レンタカーを返しに向かった。

後日、生徒は着席していた。一応は学校なので、始業のあいさつなどがあつた後、教室で顔合わせ、というわけだ。掲示に会った通りにクラスに入ると、見知った顔がちらほらあつた。

「あれ、レインじゃん」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこには茶髪にそばかすの女の子がいた。一瞬首をかしげるが、すぐに思い至る。

「リズベットさん？」

「やっぱりレインだ。久しぶり、元気してた？」

「あ、はい」

「そっか、ならよかった。あ、ちなみにアスナは隣のクラスね」

「てことは、結構多かつたんだ、この学年」

「一番多かつたみたいよ。SAOの年齢層考えれば納得はいくけど。ま、だからこの学年だけ2クラスなんだけどね」

「へえ。先生はどうなんだろ」

「年を取つてる先生が多そうだったから、再任用の先生が多いんでしょ。ま、少なくともSAOの帰還者ばつだから、それなりに頭の柔らかい人をそろえてるでしょ」

「さすがに、帰還者の先生は、いない、よね？」

「いないでしょ、さすがに。だってさ、想像してみなよ。例えば、クラインとかが先生やってる姿」

言われてみて、想像してみる。思わず吹き出してしまった。

「似合わない・・・っ」

「でしょ！」

そのまま、しばらく肩を震わせていた。釣られてリズさんも笑う。しばらくして、笑いをひっこめたリズさんが肩をたたいた。

「ほら、いい加減笑いひっこめな。ぼちぼち時間だから」

「うん、分かった」

何とかしてその笑いをひっこめ、席に着いた。

「ほーい、席につけー」

タブレットでトントンと肩をたたきつつ入ってきたその人相を見た瞬間に、私は凍り付いた。

「嘘・・・」

どこからか聞こえた、つぶやきは果たして誰のものか。

「さて、挨拶させてもらおうか」

全員が席に着いたことを確認すると、その若い男は教壇に立つて声を出した。

「今日から一年、君たちの担任を務めさせてもらう、ロータスこと天川蓮だ。まかり間違ってもキャラネームで呼ばないこと。よろしく」

その言葉に、おそらくクラスの全員が絶句した。それだけは間違いない。

SAO & ALO編 あとがきの的な何か

はい、というわけで。

先ほどの最後にも書きましたが、これにてSAO & ALO編、終了でございます。まずは感謝を。

作者の駄文に付き合ってください読者の皆様、ありがとうございます。お気に入りにやUAの伸びは——こういつては何ですが——、前書いていた長編のやつに比べると大分伸び悩んでいたの、正直それがモチベーション不足に陥っていた時もありました。これを書いているのはエピソード投稿直後なのですが、同じくらいの話数なのに、あちらのほうが両方とも倍以上多い、ということに、書きながらチェックして驚いています。ですが、決して多いとは言えないとは思いますが、高い評価をいただいたこと、非常にうれしく思います。

この場を借りて、お礼をさせて下さい。

☆9評価を下さった、雨森さん、エンジさん、どぎさん、亀宅さん、Bissyoppさん。

本当にありがとうございます。こんな駄文でも期待してくださいっている方がいる。

それが非常に大きな励みになりました。

また、最終話投稿に重なる形になってしまったので、ここで。

お気に入り、前回の「終焉」投稿後、100件を超えました。ちよつとさすがに全部は長い上に、タイプミス、重複等考えられるので、どうかそれが起こらないことが考えられないので、ここでの紹介は省略させていただきます。

ですが、お気に入りの登録、ありがとうございます。微妙な浮き沈みだったので、正直あんまり気にしていませんでしたが、こうして一応の節目に乗ると感慨深いものがあります。

改めて、ありがとうございました。

この物語は、実を言うとゴツドイーターのアニメを見て思いつきました。ゴツドイーターアニメにて、何話だったかでちようど、タイトルの「泥中の蓮」、っていうのがサブタイトルになっていて、どういう意味だろうと調べてみて。その意味から、物語の構想が浮かび上がってきました。

泥中の蓮、という言葉の意味をググると、「汚れた環境の中においても、それに染まらず清く正しく生きるさまのたとえ」というような意味が出てきます。

主人公のモデルになったのは、TOVの主人公のユーリです。もともと主が家族の影

響でT O Vを好きになっていて、この言葉がまさに彼に当てはまると思っただのが由来です。これは、主人公が使う武器やソードスキルに、彼の技が多いところなどに名残がありますね。

彼のように、どのような環境でも、明確な目的をもって、自分の信念を貫く。そのための手段を選ぶ。そんな、どこか闇落ちしたヒーローのような、そんな主人公像が広がって行きました。清く正しく生きるさまのたとえ、という意味のサブタイトルで、目的を正当化できない、清らかとはかけ離れた手段を取った、というところは、我ながら皮肉なものです。

汚れた環境、というのが、作者の中ではラフコフしか出てきませんでした。そこで出てきたのが、彼のトロイの木馬作戦だったわけです。あの暗号、実は設定段階で考えていたのをそのまま使ってます。というか、あれ以上にうまいのが分からなかった。

レインちゃんに関しては、ラフコフが途中で解体されることもあり、彼をそういう手段を必要としないところに戻す役割として考えたキャラクターでした。正直、自分にそんな女の子を描く自信はなかったもので、当時プレイしていたLSからの引用という形になりました。これは同じくゲームから引つ張ってきたストリアにも言えますが、完全に描写不足に陥ってしまった感が大きいのは否定しません。これは本当に自分の力不足です。実を言うと、もう二つくらい理由があるのですが、ここではネタバレになるかも

しれないのであえて伏せます。書けないな、と判断した場合、また別途公開します。

設定集は、気が向いたら上げます。というのもですね、何度かあとがきで書いていましたが、この子たち想定したとおりに動かないので、起こした元の設定集とあれこれかけ離れているので、ほぼ全部書き直さないといけないですよ。時間がかかるので、どうしても上げるまでに時間がかかりそうです。その辺の極めつけはエリーゼちゃん。本当にチョイ役で済ませる予定だったのに、本名つけて設定追加して、挙句の果てにはなんでか知らんけど苗字変わってるし。たぶん苗字はゴッドイーターの影響だろうなああって思ってます。ちなみにもともの苗字は椿でした。うん、どっちにしろゴッドイーターだね。

さて、この後の物語についてです。

まず、何度も言っている通り、if編を投稿します。ナンバリングで行くと「32・決裂」からの分岐です。早い話が終章ifおよびALOfifですね。その後、まあ作者のエネルギーなどにもよりますが、GGO編以降へと入っていきます。

何度かやっちゃまった的なことをあとがきでも言っている通り、日常パートが多めになってる、のか？って感じです。今までとはまた違った雰囲気をお楽しみいただければと思います。ついてきてくだされば幸いです。

では、また i f 編にて。

SAO、if編

3 2. 理

「で、俺をどうするつもりだ?」

その俺の問いかけに、アスナは暫く黙り込んだ。その後で、アスナはゆっくりと言葉にした。

「確かに、あなたのとつた方法は間違っているわ。でも、それによって救われた人もいるというのには紛れもない事実よ。だから——」

「許す、と?」

「そういうわけじゃないわ。でも、ここであなたを見限るつもりはない」

「目的は手段を正当化しないぜ」

「分かっているわよそんなこと!」

どこか達観したような俺の正論に、アスナはこらえきれなくなったように声を上げた。

「それでも、今ここであなたを放っておいたら、悲しむ人がいるわ」

「俺みたいな外道のためにか? ハッ、それこそありえねえだろ」

鼻で笑い飛ばしながら目をつむった俺は、アスナとの会話に集中しすぎたことも相まり俺の目の前に一人回り込まれたことに気付かなかった。その人物は、俺の目の前に回り込むと、そのままの勢いで思いっきりひっぱりたい。

突然ひっぱたかれたことに驚きながら目を開けると、そこにはプラチナブロンドの長髪をした少女がいた。少なからず驚きを感じていると、その本人はあけすけに抱き着いてきた。

（次から次へとなんなんだよ、ちょっとくらい喋ってくれても——）

そう言おうとした矢先、少女の体から伝わる震えに気付いた。それに交じって聞こえる、微かな泣き音。どうやら自分は、この少女に想像以上に心配をかけていたらしい。ゆっくりとため息をつく、俺はそのままの体勢で言った。

「心配する必要なんてなかったのに」

そう言うと、レインは片腕を外してぽかぽか殴ってきた。身体的にはまったく痛くないが、精神的には来るものがあった。

（ああ、そうか。そういうことだったのか——）

そこまで来てようやく俺は悟った。俺がレインたちを暗闇に墮としたくなかったように、レインも俺を光の中に戻したかったのだ。

「俺にはもう、光の中で生きる資格なんてないぞ」

「資格なんて関係ない。私はもう、あなたに人殺しをしてほしくないだけ」

ようやくレインが口を開いた。自虐的な俺に対してそのまっすぐな声は、俺にとって
は羨望の対象になりえるものだった。

「もう俺は散々殺したんだ。そんな俺が先頭に立つ資格はない」

「そんなことはないと思うけど」

後ろから聞こえた声。そちらに振り向くと、そこにはアスナがどこか呆れた表情をし
て、こちらに歩いてきていた。

「それに資格なんて関係ないでしょ。攻略組は常に人員不足なんだし、あなたほどの腕
前の人物が一人増えるか増えないかで大きく変わってくると思うけど。それに、」

そこでいったん言葉を区切ると、アスナはレインの頭を優しく撫でた。

「この子をこれ以上悲しませることに、あなたは何も感じないの？」

そう言われると反応に困った。俺だって血も涙もないわけじゃない。だが、

「これ以上、巻き込むわけにはいかない」

ポーチの中には煙幕がある。この状況なら、煙幕を炊けば離脱には充分だろう。腕を
外してポーチの中に手をつ込んだ瞬間に、俺を強烈な眠気が襲った。

（睡眠の、デバフ、だと・・・）

そのまま、抗うこともできずに俺の意識は眠りに落ちた。

「ごめんなさい」

新たに表れたもう一人の少女は、それだけ短く呟いた。その手には、かなり細身の剣が握られていた。

「何をしたの？」

アスナが驚いたように声をかける。問いかけられた当人であるエリーゼがしたのは、ただロータスの背中を切っただけだ。それだけで、あんなことになるとは誰が思おうか。

「この剣ね、ハイオプティマスって言って、蓄積じゃなくて確率で一発睡眠にするの。デバフ耐性全部抜きにして。だからこそちよつとした賭けだったんだけど、うまくいってよかった」

ある意味いつも通り、どこか飄々と話すエリーゼに、アスナは軽くため息をついた。が、ともかく。

「何はともあれ、助かったわ。結果オーライなところはあるけれど。ここにいる三人なら、無理矢理でも運べるでしょう」

「大丈夫なの？ 討滅戦のほうは」

「もう下火になってきてるし、大丈夫でしょう。それに、彼が混乱を生んでくれたおかげ

で、少しではあるけれど時間を稼ぐことができた。今更私がいなくとも、どうにかなるわ」

それだけ言うと、少女たちは戦いの終わった広間に、敵なのか味方なのかわからない青年を運び出した。

予想通り、討滅戦は完全に終了の様相を呈していた。敵勢力のほとんどは撤退か、捕縛されていた。捕縛され、監獄送りになった中には、頭陀袋を被った麻痺短剣使いであるジョニーブラック、凄腕のエストック使いであるザザも含まれていた。ボスであるP O Hは逃亡、そしてもう一人の幹部であるロータスも今、攻略組の花十女傭兵の三人が抱えて持ってきたので、これで少なくとも悪くはない結果にはなった、と言える。

「さて、撤収しましょう」

撤退ではなく、撤収。その言葉が差す意味も、もう分かっていた。

護送中に、俺は目を覚ました。背中や腕の感触、自分の姿勢から察するに、俺は縛られてどこかに運ばれているのだろう。一瞬どうしてだ、と思い、すぐに思い出した。(そうだった。俺は確か、睡眠のデバフにかかったんだっただか)

ま、アスナがああいっても、俺の処罰は彼女の独断で決められるものではない。何か

しらの会議が必要だ。それまでは、ということなのだろう。周りを探ると、俺に対して数人がいるようだ。VIP待遇というわけか。ま、一応俺はラフコフの中でも幹部格であつたのだから、当然と言えば当然ではある。

「起きたか」

俺の様子に気付いたのか、しんがりを務めていた剣士から声がかかった。この声は、

「リンド、か」

「ああ。いつぞや以来だな、ロータス」

「そうだな。モルテの一件以来、つてどこか」

まさかこんな形になるとは。ま、俺の想像通りといえそうなのだが。

「こんなこと企んでやがったとはなあ」

「誰から聞いた」

「キリトからな。あのまっくろくろすけの後ろから斬りかかったザザと、ジョニーブルックをあんたが行動不能にした、つてのを見てたやつがそこそこいてな。で、あとはあの白黒夫婦の言葉からの推測だ。でもま、あんたのやったことはやったことだから、無罪放免というわけにもいかんがな」

「そもそも、俺は人殺しだぞ。それも、最悪の殺人ギルドの幹部だ」

「元攻略組で、現時点での攻略組最強クラスを相手にして、簡単にコケにできるレベルの

な。そんな実力者はそうはいない」

ああ言えばこう言う。それは、雰囲気からしても分かった。

「分かった」

どういう意味なのか、それだけでは分からない。だが、リンドにはきつと伝わる。それは、何となくだが分かっていた。

33. 会議

捕まってから少しして、俺は独房の中にいた。正確には最初数日はカルマのクエストをクリアさせられていたのだが、ま、この展開はおおむね俺の想像通りといったところだ。正直、こうでなかったらどうしようかと思つた自分もいたほどだ。そこは疑うべくもない。いつもと変わらない、何もない一日。それが、今日も続くと思うと、何とも言えない心地だった。

「出る」

その言葉を受けて、俺は立ち上がる。何かあつたかと思ひ、視界の端の日付と時刻に目線をやり、そこで気づいた。

「そういえば今日だったか」

「忘れてたのか？」

「ああ。いかんせん、あんなところに入つてると、時間感覚も狂うつてもんでね」

「なるほどねえ」

そこまで話して、俺は気づいた。

「あんたもしかして、25層のLADロップ争奪戦の時に、俺の護衛についてなかった

か」

「そうだ。だからこそ、俺が選ばれた」

「リンドも含めた幹部陣の考えそうなことだな。有効だが」

「自分は奇妙な気分だな。ああして護衛していたやつをこうして護送することになるとは」

「俺としては気楽でいいがな。初対面のやつよりはずっといい」

それだけ言うと、俺たちはそのまま歩いて行つた。

連れてこられたのはどこかのボス部屋のようだった。最初は裁判所のようなところに連れてこられるかと思つたが、それでも無いようだ。元から、俺の処遇をどうするかということだから、攻略組の面子が中心で決めればいいということなのだろう。よく見れば、ソロプレイヤーこそいないものの、リンドを筆頭としてDB音龍連合の面々から、KOBの主要面子まで、いやはやそうそうたる面々である。

「皆、集まっているようだね。では、始めよう」

最後に入ってきて、席に着く道すがら全体を見て、KOBのリーダー、ヒースクリフは言つた。

「事前に通達してあつた通り、今日は、ロータス君の処遇についてだ。まず、意見のある

ものは言ってくれ。KOBをまとめるものとして、無下にすることはないと誓おう」

その一言に、まずはシュミットが手を上げる。無言の指名を受け、シュミットが発言をした。

「確かに、彼は何人ものプレイヤーを屠ってきた。だが、攻略組の戦力不足は、どんどん深刻になっていきます。彼の復帰は戦力としてありがたい。タンクとして、前線に出るものとして、前線の手練れが増えることは、間違いなく状況を好転させる切欠足り得ると考えます」

「その、何人ものプレイヤーを屠った、という事実が問題なのだろう」

シュミットの言葉に、KOBの幹部が反論した。決して激昂することなく、シュミットは冷静に言い返す。

「だが、彼はジョニーブラックの捕縛に協力していたという情報もあるわけだが」

「見間違いという可能性も高い。何せあの乱戦だ」

「赤い外套で、小太刀と刀の二刀流の凄腕がそう何人もいると?」

「一瞬でそこまで見分けられるはずもあるまい。お互いが殺し合いをしていたんだぞ?」

ヒートアップしてきた議論を、ヒースクリフは手をたたいて止めた。

「それに関しては、彼と直前で戦っていた本人に聞くのが速いだろう。アスナ君」

その声を受けて、アスナは自身のシステムウインドウを操作、反転させた。そこには、
“Voice Chat:kiritto”の文字。

「さて、聞こえるかね、キリト君」

『ああ、聞こえるぜ』

「さて、時間が惜しいから単刀直入に尋ねよう。キリト君、君は以前、ロータス君がジョニーブラツクの捕縛に協力した、と言っていたね。それは事実かね？」

『事実だ。と、言いたいところだが、正確には、ラフコフを途中で裏切った、ということが確かただけだ』

「では、その詳細を教えてください」

『まず、俺とロータスは、あの混戦の中で戦闘に入った。俺にあいつが斬りかかった。でも、多分、あいつは俺を本気で斬るつもりは無かった・・・と思う』

「それは、何を根拠に？」

誰かが問いかける。これはボイスチャットの設定で変えているはずだ。その辺を抜かる面々ではない。

『斬りあいの最中、あいつは俺に話しかけたんだ。あいつはあれで、相当に合理的に行くタイプだ。なら、わざわざ話しかけることはしないはずだ。それに、本気ならあの程度の太刀筋では済まないはず』

「それは誉め言葉と取っついでいいのかな」

「余計な口は慎め！」

俺が軽口をたたいた瞬間、怒声が聞こえた。軽く肩をすくめて、俺は口をつぐんだ。

『このくらいならいいだろ。それと、これは十分に誉め言葉だ。だって戦闘を短時間で終わらせるのなら、もっと無言で集中して殺しにかかる。そこが甘かった』

「そんなの、あんたの体感に過ぎない」

『それはそうだけど』

「その辺にしておきたまえ。キリト君、斬りあいになった後、どうなったのだね」

脱線した議論がそのままヒートアップしていく矢先に、ヒースクリフが話を元に戻した。

『斬りあいの最中に、あいつが俺を横に飛ばした。その関係で、俺の後ろから斬りかかったラフコフのやつが空振りして、転んだんだ。足の位置からして、多分あいつが不意打ちで刈ったんだと思う。あいつの位置からなら、動きは丸見えだったはずだから。で、そのこけたラフコフメンバーを、あいつは容赦なく殺した。そのあと、俺は赤眼のザザとの戦闘に入ったからよくわからないけど、多分アスナのほうにあいつは向かっていったと思う』

あーらら、俺の行動ドンピシャで当てられちゃったよ。よく見てたねキリトさんや。

という俺の内心をよそに、キリトの言葉を受け、全体の目線がアスナに向かう。

「その通りです。私と戦闘に入っていたジヨニーブラックを背後から奇襲、一撃で麻痺に陥れました。そのあとは数々のラフコフメンバーと戦闘になっているところを、私と私の隊員が目撃しています」

「裏を返せば、あんたの身内しか見てないってことだよな」

D Bの幹部であろう誰かの言葉に、アスナが黙り込む。こればかりはどうしようもない。だがそこで、さらに手を上げるものがいたようだ。

「俺も見たぜ」

その声の主は、確かハフナーと言ったか。青龍連合の前身であるDKB発足当初からギルドを支える幹部格だったはずだ。得物は両手剣だが、その重さを感じさせないフツトワークとキレが持ち味だったはずだ。なるほど、PVPであるの冴えを受けるのであれば孤軍奮闘、獅子奮迅の活躍もきっちりできただろう。

「本当か、ハフ」

「ああ。あんだけ目立つ格好してりや、そら分かりやすい。加えて二刀流と来た。見つけようとしなくても見つけたわ」

「で、戦闘は行っていたのか」

「少なくとも、俺の覚えている顔じゃないやつと戦ってたぜ。装備も見覚えなかったし

な。攻略組サイドじゃねえと判断していいと思う」

「そうか。情報提供、感謝する。」

で、それを踏まえ聞こうか。ロータス君、君自身は攻略組復帰に関して何か意見があるかね？」

「俺に拒否権があるとでも？ま、所感を言うんであれば、悪くないと思ってる、つてところか」

「了承した。では、ほかに意見があるかね」

ヒースクリフが事務的にそう述べると、全体を見渡した。

「では、情報はこの辺りでおそらく頭打ちと判断し、いったん決を採ろうと思う。意見、反対があれば聞かせてほしい」

それにこたえる声はない。声はなく、手ももう上がらなかつたようだ。

「よろしい。では決を採る。ロータス君を攻略組に復帰させることに賛成の者は」

その声に、手が上がる。俺の角度からは振り返ることが難しいから後ろはよくわからない。だが、少なくとも手が上がっていることくらいは分かつた。

「では、反対の者は」

その声で、入れ替わるように手が上がる。

「よろしい。では、復帰させる方針で行こう。これに対し、追加意見があるものはまた発

言してほしい。ないのであれば、このまま閉会とする」

その声に、彼の横に控えていたアスナが拳手をした。

「なんだね、アスナ君」

「確かに、彼は大きな戦力であるとともに、不安も抱えています。そこで、彼に一定期間、監視をつけてはどうかと提案します」

「ふむ……」

ヒースクリフは顎に手を当てた。確かにアスナの意見はもつともだ。反対意見のほとんどは、俺が再びPKをしないか、という不安が理由のはず。それを払拭できるのであればそうすればいいだろう。

「だが、誰にそのような依頼をしようか……」

「情報屋に聞けばいいんじゃないのか。信頼できる傭兵の中で、そういう隠密能力と捜索能力、いざという時の戦闘力にかけたやつがいねえか、って」

リンドの意見ももつともである。KOBから出しても、DBから出しても、互いが互いを癒着だと思うだろう。なら、お互いがそうしたほうがいいだろう。

「なら、鼠より観察者のほうがいいかもな」

「その意見にや賛成だ。速さと正確さ、それから情報量なら鼠だが、ことプレイヤーに対する細かい情報なら観察者のほうが一枚上を行く」

「それに関してはまた今度検討するとしよう。とにかく、彼はこのまま復帰させる。しばらくは監視をつける。以上二点、反対はあるかな」

それに対する答えは沈黙。

「それでは閉会とする。集まってくれたことに感謝する」

そのヒースクリフの一言に、三々五々に散って行つた。

「さて、まずは縄を解かないとな」

近くに寄つてきたリンドがそれだけ言うと、俺の後ろに回つた。

ロープが解放された後しばらく俺はボス部屋から出られなかつたが、やがて行ききの護衛、それからヒースクリフと出た。時間を見ると2時間と少しが経過していた。その出口で、

「では、また攻略で会う時には、よろしく頼みます」

「おう。またな。元気で」

それだけ言うと、その護衛と別れることになった。その代りの護衛が出口にいるらしい。というのは聞いていたし、それと思しき人物はさっさと見つけられたのだが。

「その護衛がこのチョイスだとまた癒着とか心配されないか？」

「大丈夫だ。妙な行動をしたらもろとも肅清対象となっている」

「それに、私たちほどお互いの手の内がわかる相手もないでしょ」

「それはそうだが」

その相手がエリーゼとレインってどういうことなんですかねえ。お隣のヒースクリフの口調が平坦なのはいつも通りとして、言っていることはもつともだから誰も反論できな

「その前に俺が殺す可能性は」

「逆に聞こう。この子たちどちらか一人を素早く殺す、またはこの子二人を相手にして殺しきれぬ自信はあるのかね。それに、君ほど頭の回る人間が、そうしたらどうなるかわからなくはあるまい」

本当に、正論しか言わない男だ。知っていたが、ここまで正論が無慈悲だと思ったことはなかった。

「・・・分かった」

全く、俺にとつて完全に退路というものはないらしい。俺に残されたのは手を上げて受け入れることだけだった。

34. 相棒たち

まず俺たちが向かったのはリズベツト武具店だった。今の装備ではさすがに厳しい。なんでも、俺がラフコフに入っている間に、彼女は自分の店を開いたらしい。場所はリンドースのはずれ。リンドースは確か、48層の市街地の名前だったはずだ。ということとは、転移門からもそこそこ近い場所にあるということだ。

「それ土地代とか高かったんじゃねえか？」

「実際結構な競争率だったって言ってたよー。アスナの話に聞くと、借金までしたって言ってたし。その借金相手も、今となってはお得意様らしいけど」

「たくましいな」

なかなか気骨のありそうな子だとは思っていたが、想像以上だ。度胸が据わると女のほうが怖い時というのは往々にしてあるが、まさにリズベツトはそのタイプらしい。そもそも女だてらに町に引きこもることもせず生産職でバックアップを担当するような子が度胸がないとも思えんが。

「ま、俺も打ちなおしてもらいたいやつもあるからな」

それだけ言うと、俺たちはリズベツト武具店へと向かった。

その店は川のほとりにあった。水車が音を立てて回る、いい店だった。

「なるほど、こりや店の競争率も高いわな」

「だよー。客足も上々らしいよ」

「へえ」

それだけ言うと、俺は扉を開けた。そこにはたまたま、変わらずあの少女がいた。

「いらつしやい、ませ・・・」

一瞬いつも通りに接客しようとして、店主の顔が固まった。ま、このくらいは想像の範囲内だ。なんでもないように俺は手を上げた。

「・・・用件は何？」

返された声はかなり固い。というか冷たい。ま、当然か。

「こいつの打ち直しを頼みたい。強化素材はそれなりにある」

差し出された刀を見た瞬間に、リズベツトはすぐにその正体を看破した。

「これって、鬼斬破よね？今のレベル考えれば、戦力外もいいとこの武器のはずだけど」「それでもだ。お気に入りなもんでな。それに、おたくの作った武器で人斬りは一度としてしていない。信じる信じないは勝手だがな」

これは事実だ。何故しなかったのか、と言われると、何となく嫌だったとしか言いよ

うがない。自分でも説得力に欠けると思うが、事実なので仕方ない。

「分かった。で、強化素材はどんなもんあるの？」

「・・・どっちやりやっちゃっていいのか？」

「それはやめて」「ダメでしょ」

女子三人の声がきれいにシンクロした。俺自身、店の中で素材どっちやりはないわー
と思っていたから、これは想定内。

「ちよつと待ってろ、案外多いから」

ある程度の範囲外に多く用意した大きめの袋に、素材を移していく。これがストレー
ジ内のできるのだから便利だ。満タン表示になったそばから俺は実体化させていく。
全部終わると、足元には50cm立方くらいで収まりそうな大きさの袋が3つほど転
がっていた。

「ま、ざつとこんなもんか」

「どこでこんな・・・」

「ラフコフメンバーは最上層でのPKを禁止されているだけで、侵入を禁止されている
わけではない。それに、俺も一応変装くらいはするからな。そうそう簡単にバレなどせ
んよ」

まあ最も、俺からしたら表に出る時と変装するときの服装が全くイメージの違うもの

にしていたというのも大きい。パツと見た程度では俺と分かる人のほうが少ないような工夫をしていた。あの年がら年中まっくろくろすけと違って一応俺は普段着も何着か持っていたから問題なし。でもって年月を重ねることにレイドボスやりポップするモンスターをソロで狩り、ドロップ品の防具を着ていけばそんなに目立たない。防具のカラーや形状は十人十色で、誰がどんなものを使っているかなど気にする人はあまりいない。というかほとんどいいない。圏外村でも加工屋がいることは珍しくないため、強化素材やらなんやらをちびちび使って作り直すことも繰り返していた。結果、俺の変装は誰にもバレることはなく、強化素材を集めることに成功していた。

「できるか」

「それなりに対価はもらうわよ」

「そのくらいは構わん」

もとよりそんなに金は使わない口だ。現実世界ではすぐに使ってしまう口だったが、こつちでは無駄金を使いすぎようものなら死あるのみといって差し支えない。結果、俺の財布はほぼ常時温かめな状況になっている。それに、現実では給料日があるが、こつちでは狩りの実入りがそのまま収入になる。だから、結構収支計算はしやすかったりする。・・・家計簿なんざつけたことなかったから最初は戸惑ったが、やってみて分かった。これめっちゃ大事。

「頼んだぜ、リズベス」

「任せなさい。絶対あんたをうならせてやるから。あとリズベス言うな」

そいつは頼もしい。ならここは餅は餅屋、任せるとしよう。

次に俺が接触した人物はアルゴだった。後ろの二人がいるが、俺はやることを変えるつもりは無い。

「待たせて悪いな」

「いいってことよ。で、その様子だと無罪放免、ってことか？」

「無罪放免ってわけじゃねえな。執行猶予、ってところか」

そういつて、俺は後ろを親指で差した。それでアルゴはすぐに納得した。

「へえ、なるほどナ。で、どんな情報をお望みダイ？」

「そうだな。手始めに、オレンジの情報をもらおうか」

「レッドの、ではなく？」

「もちろんレッドもだ。だが、俺からしたらレッドの手口なんざたかが知れてる。手口を見れば、オレンジかレッドかなんて簡単に見分けられる」

「……複雑化していく手口をたかが知れてると言いきつちまうハスポーが恐ろしいよ……」

「ん?」

「なんでもないヨ。オレンジの情報だな?」

「ああ。あるか?」

俺の言葉に、少しため息をついて何か言った後、アルゴはいつもの調子に戻った。その独特なフェイスペイントから鼠の愛称で呼ばれる情報屋は、俺の想定を上回るレベルの情報を持っていた。俺のほしい情報をあれこれ提供してくれた。

「ほかになんか知りたいことあるか?」

「うんにゃ、もう大丈夫。いくらになる?」

「んー、そうだなー、面白い情報も手に入ったし8500で」

「8500な。ほい」

適当な小さめの袋に実体化して、アルゴに渡す。渡されて中身を見ると、アルゴは一つ頷いた。

「しっかし、まさかハスボーがエリーとレインちゃんを連れてオレっちのどこに来る、なんて日が来るとはナー」

「執行猶予の見届け人みたいなところだ。色気無くて悪いな」

「フーン」

「にやつきくらい隠せ」

結構本気でひっぱたこうかと悩んでいるときに、後ろから両肩に手を置かれた。全く、俺の思考は完全に読まれているらしい。

「またよろしく」

「あいよー。今後ともごひいきに。あと二人と仲良くなー!」

そこに秘められた意味をしつかり理解した俺は、さくつと手を上げつつナイフを放り投げる。一見無造作に投げたように見えるが、ちゃんとコントロールされている。実際、

「のわあ!?!目の前に投げるなよ危ないな!!」

「んだよ。下手に避けなければ当たらないように投げたろ?」

「ギリギリすぎだ!」

俺の予想では鼻先30cmから50cmの間を通って、股下少し前くらいに落ちるよ
うに投げたはずだ。が、どうやら少し奥にずれたらしい。

「20cmもなかったぞ!」

「あーそいつは悪かったな。じゃなー」

棒読みで一応謝罪する。うん、10cmならある程度誤差と言い切れる範囲内。けどさすがに危ないかな。まあとにかく、ここでの用件は済んだ。俺の目的に向かうとしよう。

そのあと、新たな小太刀を入手するために強敵NPCを倒した後、試しにプロパティを見てみた。するとびっくり、

「な、んじゃこりやあ!？」

「え、どうしたの？」

「どうしたもこうしたも、こいつ化けもんだ。俺はSTR足りてるからいいものの、これ下手したら持つことすらままならんぞ」

「え、じゃ試しに持ってみていい？」

「ほい」

そういつて渡すと、渡されたエリーゼは一瞬驚いた顔をした。

「ねえ、これ一応、片手剣どころか小太刀扱いよね？」

「おう。One hand って書いてあるし」

「下手したらこれ、重量片手直剣レベルよ？」

「そうだな」

「そうだな、っつて」

俺のさも当たり前みたいな声にエリーゼは啞然とした。

「それだけいい剣ってことだろ。剣じゃなくて刀か」

「扱えるの?」

「俺以上に小太刀を十全に扱い切れるやつがいれば、手合わせしたいもんだ」

俺の自信満々なコメントは完全に二人をあきれさせた。だが、俺からしたらそのくらい、自分の小太刀を扱う技量に対する自信があった。小太刀が、短剣、曲刀、小太刀、刀の四種類のソードスキルを発動できると知らしめたのは俺だ。その特性をしっかりと理解し、扱い切れるのも俺だけだと自負している。

「ま、武器がこれだけいいと、腐らせないようにするのも一苦労だろうが」

「それもそうだね」

「おたくはもともと俺よりSTRよりAGI重視で、そんなにSTR強くないだろ。俺はこいつを扱える程度には上げてるけど、そうじゃないのなら重たく感じて当然だ」

腰に備えられた得物をたたいて俺は言った。今までPK用に装備していた刀は処分した。今装備している武器はKOBやDBの在庫を使っている。もちろん最前線のレベルには劣る。だが、中層では十分すぎる性能を誇っていた。あの剣士相手だと苦戦しかけたが、その辺はどうにかした。

「ま、とりあえずリズムとこだ。鞘作ってもらわんと」

それだけ言うと、俺たちは歩き出した。装備ができるのであれば、使わない手はない。そのためには鞘がいる。

「あ、なら私が作ろうか？」

「え？」

レインの言葉に、俺は素つ頓狂な声を上げた。傭兵で装備の手入れとかが必要なことも多いであろうエリーゼはともかく、完全にソロで生産職プレイヤーの援護が期待できるレインからそんな言葉が出るとは思っていなかった。

「二応、作製スキルはちよこつと取つてて。この鞆も自分で作つたし」

腰にさしてある自分の剣の鞆を軽くたたきながら、彼女は言った。言われてよく見ると、彼女の鞆はよくある味気ない感じのものではなく、ところどころ派手過ぎない程度に装飾が入っていて、それでいて装備に浮かないような作りになっていた。

「なるほどな。ならお願いしようか」

「うん！任せて！」

俺の言葉に、レインは胸を張つて答えた。——そういえば、

「鞆って何から作るんだ？」

「私も最初知ったときびっくりしたんだけど、元の材質は木だよ」

「木製なのかよ」

「私も最初びっくりした。で、周りに革を張つたり、塗料を塗つたりするの。で、変わり種だと塗料とか革を特殊なものにして、その上からさらに鍛冶スキルの応用で塗装する

人もいるみたい」

「ま、防水加工をしちまえば凝固の時、元の材質が変質するのを防ぐことができるからな」

逆にそれをしないと、メッキ加工するための金属が凝固し体積が小さくなる時に発生する力で、木が変形してしまう可能性が高い。と思う。たぶん。俺もよくわからんけど。

「へえ、そういう意味合いなんだ、あれ」

「俺も、多分そうだろう、としか言えんけどな。じゃなきやこんな面倒くさい真似をする理由がないだろう」

コーティングする特段な理由がないのであれば、その過程は省かれてもおかしくない。なのにそういう風になっているということは、そういうことなのだろう。

「とにかく、まずは木か。トレント系が出てきそうなところは案外あるからなあ・・・」
「あ、それなら私に任せて。いいところ知ってる」

材料集めを考えていたところ、エリーゼから声がかかった。なぜそのような情報を持つてるかというのとはともかくとして、今回はその情報に頼るとしよう。

35. 変化

それから少しして、エリーゼの情報を頼りに俺たちは森に来ていた。ここに出るトレントからいい材質の木材が手に入るらしい。のはいいんだが。

「なあ、まさかあれか？」

「そうだけど？」

「あれって、普通に中ボスですよね？」

「大丈夫。私らにかかれば雑魚だから。なんなら私一人でも倒せるくらい。時間かかるけど」

隠れている俺たちの前にいるのは、5mほどあろうかという巨体のトレント。焦点を合わせれば、複数のHPバーが表示される。確かに、これは中ボスだ。だが俺たちがいるのは最前線から離れた下層であることも事実だ。

「ま、ま、ままで来たら仕方ない。やるぞ」

それだけ言うと、俺は飛び出した。オニビカリはすでに俺の手に握られている。今回は珍しく、オニビカリだけで片手が開いているだった。相手がこちらに気付いて威嚇してくる。その瞬間には、俺はもうすでに相手の懐に飛び込んでいた。

この手のタイプは攻撃パターンが案外限られる。四肢があるだけに、そこからかえって行動パターンが読みやすい傾向にある。少なくとも俺はそう考えている。ゲームバランスの都合もあるのだろうが、SAOには不思議と飛び道具の類はあまりない。ならあとは度胸だ。久しぶりの片手フリーな状態でバランス感覚に若干の違和感があるが、この程度なら問題ない。腕を使った薙ぎ払いはかんで躲し、虎牙破斬を繰り出す。硬直が抜けた直後に剛直拳から剣技連携でバックキックを繰り出して距離を取ると、その一瞬の行動遅延について背後に回り込んだ二人が攻撃を繰り出した。例のデカトレントの影になって分かり辛いのが、二つのソードスキルが見えたから二人同時に攻撃したようだ。HPゲージを見ると、HPバーは早くも一本目が消えようとしていた。先にエリーゼが言っていた通り、こいつ、相当な雑魚のようだ。ならやることは一つ。

「押し切るー!」

それだけ言うと、俺はオニビカリを構えて再び向かっていった。

そのあとは一瞬だった。本当に一瞬で片が付いた。時間にして一分あるかないかだろう。確かに雑魚だとは思っていたが、ここまで時間がかからないとは、最初は俺も思ってもみなかった。素材ドロップの中からいくつか漁ると、それらしきものがあった。

「カーシオクの木材、つてのがそれなのか？」

「そうそれ！よかったドロップして」

どうやらお目当ての代物はドロップしたようだ。

「塗料とかその辺はこつちにあるからいいとして、どうする？何か希望とかある？」

「特にねえわ。その辺は任せる」

「分かった！」

それだけ言うと、俺はオニビカリを預けようとした。が、横からエリーゼがそれを止めた。

「なら、ついでに今からレインちゃんのホームにお邪魔しちやおうか。そつちのほうがやりやすいだろうし」

「つつても、さすがに急すぎねえか？」

今思いついたように行つてもさすがに迷惑だろうと、俺はポーズ半分本音半分で言つた。

「大丈夫。それに、今オニビカリがなくなつちやつたらメインアームなくなつちやうでしょ。最初からその辺は考えてあつたから」

が、もうすでに囲われていたらしい。観念して俺はもろ手を挙げた。

レインの家は39層の主街区のはずれにあった。緑豊かなこの田舎町には、グランザムに移転する前まで血盟騎士団の本部があったらしい。・・・案外いい趣味じゃねえかあの聖騎士様。

「へえ、いいロケーションだな」

「でしょー。ちようどいいんだよねー。のどかだし、森もあるし」

俺の言葉に、レインはかすかに胸を張った。俺好みのいい場所だ。それに、周りの木が常緑樹なら、それなりに環境も安定する。現実世界だと虫やら葉っぱやらで大変かもしれないが、そこはゲームだから大丈夫だろう。

「で、本当に私の好みで作っていいの？」

「ああ。しいて言えば、派手すぎるのは嫌だぞ。ピンクとか」

「しないよ、そんなの。第一似合わないでしょ」

「分かってんじやねえの」

それだけ言うと、俺はオニビカリを実体化させて、机の上に置いた。

「やっぱり結構重たいよねー、これ」

「で、それをなんで俺以上にAGIに振っているはずのおたくがあっさり持てるのか、つてのは非常に疑問なんだが」

俺の至極まっとうな疑問に対しては、レインは笑うことでごまかした。ま、聞いてほ

しくないことはあるってことだろう。そこに、エリーゼが俺に耳打ちした。

「あの子、一時期異常なレベリングしてたのよ」

「え、マジ？」

「うん。噂では、もうすでにレベルが90超えてるってものもあるくらい」

「さすがに尾ひれつきすぎだろ。90オーバーはないだろ」

現時点での最前線は67層だったはずだ。安全マージンは階層+10なので、今現時点だと77くらいだ。実際俺も79である。上げていて85か、プラス20で87ぐらいが精々だろうというところに、90はさすがにない。だが、それだけレベルが高ければ、俺よりAGIに振っているスピード系の剣士でありながらあの重たい刀をあつさりと持ち上げられることも納得である。

「それがありうるって言われるくらいだったってこと。少なくとも君より相当レベル高
いよっ。」

「みたいだな。やべえな」

「なに話してるの、二人とも？」

「なんでもねえ。で、採寸は終わったのか？」

「うん。ありがとね。作ってくるから、お茶でもして待ってて」

「じゃ、私がやろっかな。一応程度だけど料理スキル持つてるから。台所借りるよー」

「うん、ありがとう」

そういうと、エリーゼは台所へと歩いて行った。その間俺としては手持無沙汰で、監視が取れた後どうしようかと考えていた。まあ攻略組を抜ける前もソロだったし、また根無し草の流浪生活になるのだろうが、それでいいのか、という迷いができていた。というのも、P o H戦といい、少し前のあのデカトレントとの戦いといい、レインの踏み込みなどは相当なものだった。純粹な実力勝負という縛りのあるデュエルなら、もう俺は彼女には勝てないかもしれない。そう思わせるほどに、彼女は腕を上げていたのだ。レベルとかそういう次元の話ではない。こればかりは、本当に上達するために費やした「時間」が物を言う。正確にはそこには気合とか、そういう精神的な意味合いもあるのだが、今回は省略する。とにかく、彼女が強くなるために相当な時間を費やしていたのは、俺もうすうすとは感じていた。じゃなければいくら下層の、リポップするタイプでステータスが控えめだったとはいっても、あんなに一瞬で中ボス戦が終わるわけがない。

もしかしくなくても、それはおそらく俺のためだろう。俺をラフコフから助けて、俺の凶行を止めるために、彼女は力をつけた。レベルが90に達していると噂されるほどのレベリングは、あくまでついでだったのだろう。本当に欲しかったのは、戦闘経験と自

身の体の感覚。手足のようになるといふ言葉をよく使うけれど、本当に強く、ただ強くということだけを考えてやっていた。というか、そうとしか考えられない。

「——、——、——」
そんな彼女を、ここで無常に放っておいていいのだろうか。巻き込みたくないというのは事実だが、それだけで勝手に姿をくramsすというのは、果たしてそれはベストなのだろうか。

と、考えていると、誰かが俺の肩をたたいた。振り返りつつ半ば以上反射で腰に手を持っていくが、そこに得物はなく、手はむなしく空を切った。が、その必要がないことに振り返ってから気づいた。

「お茶、入ったよ」

「おう、サンキュ」

いかんいかん、圏外にいる時が多かったせいで、一瞬振り返りつつ抜刀ができる体勢にしようとしていた。警戒心が強すぎるのも考え物だ。と、顔には出さないようにしつつ、俺はお茶に口をつけた。どこか緑茶にも似た、紅茶とも緑茶ともつかない独特な味わいだが、香りはどこか嗅ぎ慣れたもので、非常に落ち着くことができた。

「さつきはどしたの、あんな小難しい顔して」

「いやなに、今後のことを考えていただけだ」

「攻略組にとどまる、つてやつ？別に、特段深く考える必要もないでしょ。前に戻るだけなんだし」

「で、済めばいいんだがな」

と、それだけ言うのと、かすかに鑿のみの音が聞こえるほうに目をやった。

「あれ、もしかして気づいてる？」

「ちよつとベクトルが違うかもしれないが、うすうすとはな」

「へー、ま、あれだけあからさまだとねえ・・・」

「おいこら何か勘違いしてねえか」

「勘違いしてるのは君じゃないの？」

「そういわれて言葉に詰まる。なまじどこか違和感があっただけに、否定する要素がない。」

「ほんと、あの時のレベリングはやばかったよー。私が止めないとひどかったんじゃない？一時期は鬼なんていわれたくらいだったから」

「鬼って、仮にも花も恥じらう乙女に使う言葉じゃねえだろ」

「そのくらい鬼気迫るものがあつたつてこと。たまーに辻デュエル挑む猛者がいたつていうけど、そういう人はことごとく一刀で斬つて捨てられたらしいから」

俺は完全に言葉を失つた。あの子がそこまで余裕のない時期があつたとは。

「ま、とにかく考えなよー。一応落ち着くような素材のハーブティーにしたから」
「・・・どつかで嗅いだような香りだと思っただらそういうことか」

そういえばあの花、お茶にするとりラクゼーション効果があるとかだったか。あの独房の中だと瞑想ぐらいしかやるのが無かったからすつかり忘れていた。そういえば、あの花畑にもしばらく行っていいない。あの時出会った少女はまだ元気だろうか。キリトか、最悪アルゴあたりに名前を聞けば、少なくとも今生きているかどうかというのは分かるだろう。だが不思議と、今はまだその時ではない気がした。

「ま、考える時間はある、か」

「そうそう、そういうこと。それに、私も一回韃作ってもらったことあるけど、案外の子早業だから、そんなにめっちゃやくちや待つ必要はないと思うよ」
「あっそう、そりゃ退屈しないで何よりだ」

それだけ言うと、俺は再びお茶に口をつけた。さすがに手持無沙汰すぎるので、何となくスキル画面を開いてみると。

(ん、なんだこれ)

見覚えのないスキルが一つ。スキル名は「射撃」。遠距離など知ったことかというようなSAOにあるまじき代物である。射撃というと銃が真っ先に思い浮かぶが、この世界に銃などあつたら世界観ぶつ壊しにもほどがある。となると、

(弓か、ボウガン、この世界に準ずればおそらく弩が精々か)

ボウガンならぎりぎりセーフだろう。モンスターをハンターするゲーム世界のボウガンは、あれはボウガンという名の何かだ。俺としては、後方から支援できるというのはかなりありがたいし、慣れれば超長距離からのファーストアタックを決めて、もしそれで仕留められなくとも何もさせずに仕留めるといふ、効率のいい方法も可能だろう。慣れは必要だが。どちらにせよ、俺が習得した覚えはない。そもそもが、俺のスキルスロットはもうすでに全部埋まっている。SAOでは、スキルスロットは20までで5つになり、それ以降は10の倍数で1つずつ増える。さつきも言ったように、現時点での俺のレベルは79なので、スキルスロットは10個。内訳は、

曲刀

索敵

投剣

体術

隠密

武器防御

刀

短剣

小太刀

アイテム作成（便利そうなので取った。実際重宝している）

で、これできっかり10個埋まってしまっているのだ。さらに追加が入る余地などない。なのになんどここに表示されているのか、と、このスキルについての考察をしていると、

「お待たせ！できたよ！」

レインが鞆に入れたオニビカリを持ってきた。その鞆は黒い革で覆われつつ、その装飾には金糸のような色で柄が彩られている。細身の得物だけに、少し柄がわかり辛いが、これは、

「蓮の花、か？」

「正解！ロータス君にはちょうどいいかなーって。どう？」

よく見ると、鯉口の部分には、ほんの少しだけ赤く塗装がされている。これは俺がよく着る赤い布系の防具の色によく合うだろう。

「ありがとな。いい鞆だ」

それだけ言うと、レインは嬉しそうにほほ笑んだ。

その数日後。妖刀オニビカリを右腰に差して、俺はリズベットの店を訪れていた。もちろん鞆はレイン謹製のものだ。

「おーいリズベス、いるかー？つてのわっ!？」

店の扉を開けつついうと、俺めがけて何かが飛んできた。反射でキャッチしたはいいものの、危うく当たりそうになった。で、それが何だったのかというところ。

「おいこらてめ、いきなりハンマーぶん投げてくるとかどういう見だこらー!」

「うっさいわね、私はリズベツト!いい加減覚えなさいよね!」

レベル差を考えれば壁にぶつかった程度の衝撃しかないだろうが、それでも痛いことには変わらない。

「で、鬼斬破のうちなおしたやつね」

「おう。できてるか?」

「ちよつと待つてなさい。持つてくるから」

持つてくるらしいの重さなわけか。そこそこいいレベルかな、と思つてみると、その刀をもつて彼女は戻つてきた。

「銘は『鬼怨斬首刀』。なんとというか物騒な名前ね」

「そんなこと言つたらキリないぜ」

ほんの少しだけ鞆から刀を抜く。一目見ただけで業物だと分かる、いい刀だ。もう一

度戻して、俺は問いかけた。

「外で試し振りしていいか」

「ええ。作った側としては、使用者の感覚というのも気になるしね」

その言葉を受けて、俺は店の外に出た。鞘から抜くと、俺は刀を片手で構えた。そこからいくつか素振りをする。とどめとして一発ソードスキルを発動させると、俺は刀をしまった。

「さすがだな。いい刀だ。お代はいくらだ？」

「74200コル」

「安くね？」

「あんたのあの素材、使い切らなかつたからね。どうせあんたが持つても使い道ないでしょ。その仕入れ代を差っ引いた金額」

なるほどそういうことか。ま、安いのなら文句はない。実体化して渡すと、リズはそれを確認して、自分のストレージに入れた。

「ところでさ、あんたの鞘、それありきたりのもんじゃなさそうだけど、どうしたの？」
「お前分かつて聞いてるだろ」

その辺の機微には聴いほうだと自分でも思っているし、その予想は間違っていないよ
うだが、にやつきを隠そうともせず問いかけてくれば、俺でなくとも分かる。

「レインが作ってくれた」

「そっかそっか、やっぱりそうよねー。あの子結構センスあるじゃん。うん、仲良さそう
で何より」

「そのにやつきやめろふつとばすぞ」

「いいじゃないいいじゃない」

俺の言葉を受けてなおにやにやを止めないリズベツト。軽くぺしつとたたいてみる
があまり効果なし。

「仲良くやりなよ」

「ああ、そのつもりだ」

「あれ、いつになく素直」

「ちよつとした心境の変化、つてやつだよ」

そういう俺の顔を見て、リズベツトは穏やかに笑った。

「いい顔になったわね」

「どういう意味だよ」

「そういう意味よ」

・・・つたく、なんでこうも俺の周りのやつは妙に物わかりのいい奴ばっかり・・・。

と、俺は内心呆れた。

「また来るわ」

「ハイハイ、せっかくの武器と鞆壊すんじゃないわよー」

後ろから聞こえるリズベットの声に、俺はひらひらと片手を振ってこたえた。

36. 再会と邂逅

その次の日、俺は最前線の迷宮に向かっていた。もちろん、その後ろにはレインとエリーゼも一緒。

「さて、んじやま、肩慣らしと行きますか。刀だけに」

「うまくないわよ」

エリーゼのツツコミをよそに、俺は敵が視界に入ったところで、二人に声をかけた。

「手えだすなよ」

「無茶しないようにね」

「へいへい」

適当に答えつつ、一気に向かっていく。納刀したままの状態、ある程度間合いがある状態から、俺は一気に三步踏み出す。最後の一撃は敵の懐に入って、少しダメージを受けつつ一気に切り上げた。小太刀系最上位ソードスキル「昇龍斬」だ。一撃の威力はぶつちやけそこらの雑魚だと一発でオーバーキルになるレベルなのだが、三步踏み込んでからぐつとため込んで一気に切り上げるといふ隙の大きいモーシヨンと、脇構えなしは腰で吊るした状態からの抜刀からのみ発動可能という面倒くさい縛りから、なか

な使用されないスキルの一つだ。あえてオーバーキルなことを承知の上で使った理由はただ一つ。ソードスキルを発動したときの感覚をつかんでおきたかったからだ。その結果は、

「やっぱりいいな、これ」

何度も振ったわけではない。決して手に持った時間が長いわけでもないのに、この刀は不思議と俺の手になじんだ。重量バランスもいいのだろう。おかげでスペックの割には相手に扱いやすい刀になっている。少し扱いづらくはあるが、それは本来に微々たるものだ。問題になるレベルではない。ピーキーなソードスキルほど、武器とのマッチングというのが顕著になる。ブーストはあくまで、ソードスキルとしてシステムに設定されている動きを正確にトレースすることでスピードを上乗せするというものだ。つまり、これによる伸び幅はどのソードスキルでもそんなに変わらない。要は運動と同じように、いかに正確に体を動かすことができるか、というのが肝なのだ。だが、初期のソードスキルは動きが単調なものも多い。例えば、片手剣の初期ソードスキルであるスラントは、いわゆる袈裟斬りか、その逆の動きの逆袈裟という、簡単な動きだ。曲刀の初期ソードスキルであるリーバーも、前進しながら剣道の抜き胴のような動きなので、動き自体はそんなに難しいものではない。細剣のリニアに至ってはただ踏み込みつつ突きを放つだけだ。が、昇龍斬にも代表されるように、上位ソードスキルになっ

てくると、連撃が珍しくなかったり、動きが複雑であったりすることも多い。それゆえに、こういうソードスキルの時のブーストの感覚が一種の指標足りえるのだ。と、考えているとお誂え向きに敵がさらにリポップした。

「よし、んじやま次はこれで行くか」

次に現れた敵に対し、俺は刀を担ぐように構えた。そのまま袈裟を繰り出しつつ、足を振り上げる。そのまま回転しつつ蹴りと斬撃を織り交ぜる。『爪竜連牙蹴』は、そのぱつと見どうやつてるのかよくわからない動きから、ブーストを使おうとすると本当に慣れが必要だ。俺もものにするまで相当の練習を要した。それに、いくら複合型といってもそこそこ連撃数が多いので、使いどころも限られてくる。最も、そのせいでこれだけ発動回数が多く、元の性能も上がるという、喜んでいいのか微妙な結果になっている。まあとにかく、その難しいソードスキルを違和感なく発動できるということは、使いやすいということの証左だ。さすがはリスといったところだろう。鞘に音を立てて刀をしまおうと、エリーゼが寄ってきた。

「んじやま」

「さすがだな。使いやすいいい刀だ」

俺のコメントに、エリーゼは一つほほ笑んだ。

「・・・なんだよ?」

「いや、つくづく穏やかになつたな、つて。討滅戦の時とか、あとはハーブティーの時とかはもつと怖い顔してたからさ」

「背負いこんでたものが一つなくなつたからだろ。俺にもうまく言えないけどさ」
「抱え込むものは増えた？」

「・・・まあ、な」

否定はしない。というかできない。ラフコフ内という特殊な環境でポーカーフェイスを鍛えた俺でも、これに関してはうまく隠し通せる自信がなかった。ならいつそ、変に否定せずあるならあるといったほうがいい。こと、レインに対しては、何となくではあるが、隠し事ができない気がした。

「でも、なんつーか、重苦しくないっつーのかな、いや、苦しきは若干あるから、重苦しくないは不適當か？まあとにかく、悪くないって思つてる自分もいるんだよな」

「珍しいね、そんな歯切れの悪いコメント」

「なんだそりゃ。いつも好き勝手言いたい放題つてわけじゃねえぞ俺は」

レインの言葉に、かすかに苦笑する。こういう、他愛ない会話に興じることができるといふのは、案外気が楽だったりする。

「さて、今日は迷宮攻略にいそしむわけなんだが。基本的に俺が前衛な。レインは後ろを頼む。エリーゼは交代要員。それでいいか？」

「いいよー」

「私も大丈夫よ」

二人の返答を聞いて、迷宮に潜っていく。入った瞬間、独特の暗さに一瞬踏みとどまりそうになることはない。もうこの手の暗さと緊張感には慣れてしまった。入って少しすると、横合いからモンスターがわいた音が聞こえた。

「ゴ」挨拶だな全く」

つぶやき、静かに鯉口だけ切る。ポップしたと思われる方向をじつと睨むと、静かにモンスターがこちらに歩いてきた。こちらに気付いたのか、威嚇のつもりで声を上げる。それをあえてそのままにして、かかってくる瞬間に辻風を合わせる。相手の動きが想定より少し早いことに驚きはしたが、狙い通りそれは相手の胸を薙いだ。硬直が抜けた直後に、振り向いて構えなおすと、相手はすでにポリゴンのかけらとなっていた。

「鮮やかなもんだな」

「まあね。なんだかんだで、ここ最近是一緒に行動することが多かったわけだし。呼吸くらいつかめるわよ」

「私としてはいつの間にか呼吸があつててびっくりつてところが大きいけど」

「ま、その辺は間合いの取り方だろ。俺はそのつかみ方がわからんが」

「たぶんだけど、私がうまいんじゃないかと、二人があんまりうまくないんだと思う」

「悪かったな万年ボツチで」

「そういう意味じゃないわよ」

「冗談だ」

「・・・分かり辛過ぎるよ・・・」

つぶやきをスルーしつつ、俺は歩く。目的は迷宮の中だ。こうして攻略するのはいつ以来だろうか。そう思いつつ、俺は迷宮に向けてもう一度歩き出した。

と、俺の視界が端で何かをとらえた。そちらに目を向けると、小型のモンスターがいた。手のひらに乗りそうなくらい小さな、キツネにもリスにも見えるモンスターだ。カーソルは確かにモンスターなのだが、アイコンはノンアクティブ、つまり自発的に攻撃してこないことを示している。だが、俺はその姿に、どこか見覚えがあった。

(まさか、な)

俺は静かにそのモンスターに近づいた。攻撃しようとする二人を手で押さえ、俺はゆっくりとそちらへ移動する。触れるくらい近づいても、そのモンスターはこちらを見上げるだけで、攻撃してこなかった。

「案内してくれるか。今回はツレもいるが」

しゃがんでそれだけ言う。さあ通じてくれればいいが。と、そいつは俺の肩に乗って、ちよこちよこ肩の上を器用に移動した。感触から見ると、二人を見極めているの

だろう。やがて軽やかに俺から降りると、背を向けて数歩歩いてからこつちを振り返った。

「ついて来いってさ」

「・・・心当たりがあるの?」

「まあな」

あの出会いは忘れようと思っても忘れられない。純粹に感心したし、今の服装を決める決め手にもなった。あの空間に、もう一度行く資格がある、のだろうな、こうしてああいうやつが出てきたのは。

あれこれ考えながらしやべりながら進むと、あの時と同じように、ギリギリ匍匐前進でくぐるくらいの大きさの隙間があった。あの時と同じように、武装を解除して俺がくぐる。

「二人ともついて来いよ」

そういつて、俺は穴をくぐった。後ろでメニユーを開く音がしたから、多分大丈夫だろうと思いつつ、俺は穴をくぐった。

そこに広がっていたのは、あの時と同じ不思議空間だった。

(ここは変わんねえな。変わったのは、俺か)

そう思いつつ、二人を待つ。二人ともくぐって来るや否や、この空間の不思議度合い

に目を丸くしていた。

「わあ……」

「す……」

腰を下ろしてゆつたりとする俺に、小動物が何匹か寄ってきた。あれ、数つていうか、種類が若干増えたか?と思っていると、胡坐をかいた足の上に、猫のような動物が上がつてきた。足に顎を乗せているあたり、なでろというこらししい。お望み通りゆつくりとその背を優しくなでると、ゴロゴロと喉を鳴らした。

「え、モフっていいの?」

「嫌われん程度にしろよ?」

俺の言葉を受けて、女子二人が怯えられない程度にその毛並みを堪能していると、奥から人影が二つ出てきた。……二つ?

「やあ、久しぶりだね」

「そうだな、セルム」

「NPC……?」

「俺ら風に言えば、な」

突然現れたセルムに、俺は二人を示す。

「こいつらは初めまして、だよな?」

「そうだね。君が誰かと一緒にいるとは珍しい」

「ま、いろいろあつてな」

「そうか。僕はセルム。君たちの名前を覚えてもらえるかな、お嬢さんたち」

「あ、レインです」

「エリーゼです」

「レインさんと、エリーゼさん、だね？」

二人がそろって頷く。一人ひとりしかできないと俺は思っていたのだが、どうやら二人同時でも十分に感知ができるらしい。・・・知らぬ間にちやつかりこの辺バージョンアップしてるんだなあ。どんなシステムなんだろう。

「ところでセルム、後ろの女の子はどなた？」

「ああ、この子ね。この子はストレア。M H C Pだよ」

「なんだそりゃ」

ここにきて、かれこれ1年以上が経過しているが、M H C Pなどという単語は聞きなれない。

「おや、聞いたことが無いのかい？」

「ああ。知ってるんなら説明頼む」

「いいとも。彼女たちは、君たちが精神的な健康状態でいられるようにカウンセリング

するプログラムだ。メンタルヘルスカウンセリングプログラム、彼女から聞いた略称がM H C P。もつとも、なぜか彼女は浮浪者のようにうろろしていてね。そこを、僕が拾った、つてところさ」

「へえ」

なるほどなあ。ここまでくるとセルムマジでなにもんだってレベルだな。どんなプログラムミングしてるんだ。

「君も、変わってないね」

「俺はあれこれ変わったと思ってるがな。お前さんこそ、変わらないようだよ」

そういうと、俺はストレアの目を覗き込んだ。どこかうつろというか、空洞というか。そんな感じの目だった。

「彼女は僕のほうで匿っておこうか。外に出すと、何があるか分からないから」

「そうだな。俺もやる人が多いし。頼むぜ、セルム」

「お安い御用だよ。ここにいる子たちも、たまには来てほしいみたいだし」

「真新しいだけだろ」

俺の言葉に、セルムはふふと笑った。

「そんなことはないかもよ。今君の肩に乗っている子だって、飼い主も最初は噛まれたと言っていたから」

「飼いまいるのか、お前さん」

そういつて、俺は肩の前に手を出す。腕伝いに器用にもう片方の肩に移ったのは、案内人になったあの小動物だった。

「うん。前、君に赤いコートをあげただろう？その時に僕に似合わないといった人が飼いまなんだ」

「へえ」

「彼女自身は赤も似合うんだけど、何分男物だったからね。ずっと使ってくれているよ
うでうれしいよ」

そういわれるとこそばゆい。今つけているコートは、あのコートに強化などを繰り返して使っているのだ。いつの間にか、これが一番使いやすいコートになっていた。

「あれこれ手を入れてるけどな」

「服というのは、そういうところも魅力だろうか？」

「まあな」

それだけ言葉を交わすと、俺は立ち上がった。それで、彼も察した。

「行くのかい？」

「ああ。まだやることが残ってる」

「そうか。君たちも行くのかい？」

「ええ。今、訳あつて彼を監視しているので」

「そうか。また来てくれ。この子たちも喜ぶ」

「おう」

それだけ言うと、セルムは背後に指をひよいと振った。すると、そこにまるでずつとあつたかのように扉が現れる。

「元の場所に戻るようになっている。またね」

「ああ、またな」

それだけ言うと、俺は歩き出した。今はやるべきことをやる。その決意を新たに、俺は前へ歩を進めた。

37. 重なる呼吸―第67層迷宮区攻略―

迷宮の中は、一言で言ってしまうと「退屈」だった。もう少し歯ごたえのある敵が出てきてくれればまだよかったのだが、どいつもこいつもお決まりの動きをするだけのA Iだ。全体的に動きが早いので、慣れるまでは少し苦戦することもあったが、慣れてしまえばそれだけだ。実際、最初の安全地帯までは全く問題なく突き進むことができた。消耗も全く覚えていない。

「二応一休みしとくか」
「そうね」

俺の言葉に反対意見は上がらなかった。だが、二人とも疲れている様子はない。戦闘は、こうして前線をソロでうろつくことの多かった俺と、攻略組でも抜きんでたレベルの持ち主であるレインがメインでやっている。でも、エリーゼもそれに足を引つ張らない程度には十分に活躍できているから、俺たち二人の負担はそこまで大きくない。

「最前線の迷宮での戦闘ってこんなに楽だったか」
「それはこっちのセリフなんだけど」

「そうなのか?」

「どうやら、これは俺の勘違いではなかったらしい。実際、二人もかなり楽しそうな表情をしていた。」

「今は三人だからじゃないの？この三人、普段はソロだから」

「それだけじゃない気がするんだよな。うまく言葉にはできないけどさ」

「以心伝心の仲だから言葉を交わさずとも援護とか完璧、とか？」

「それはない」

「息びったりじゃん」

エリーゼのツツコミは置いておいて、実際二人にも消耗はあまりに見られない。少なくとも、見て取れるほどの消耗はしていない。今俺たちが攻略するこの層が簡単だとしても、程度物というものがある。簡単すぎるのだ。

「魔物寄せの香水使っていいか？さすがに楽すぎる」

「私はいいいけど・・・エリーゼさんは？」

「使っていいわよ。いくら戦闘がないほうが気が楽って言っても、ここまで楽だと退屈だし」

魔物寄せの香水は、名前の通り、魔物を引き寄せる香水系アイテムだ。当然だが、戦闘が増えるため、リスクと利益の両天秤を考える必要がある。俺が持っていた理由は、効率の良いレベリングとMPKを行うためだった。最も、俺の場合MPKを行うのは、

グリーンカーソルのまま潜入して謀殺したりする際、カーソルを変化させないようにする程度で、基本的には俺自身が手を下すことが多かった。謀殺などという手間を加えるより、俺自身が直接手を下したほうが効率的だったからだ。その分リスクもはらんだが、よつぽどな高レベルプレイヤー出ない限り、俺が後れを取るようなことはありえない。わざわざ策を練るとしても、それはどこから襲おうか、という程度だった。それで十分だった。魔物寄せアイテムは大きな需要があるわけではないので、そこまで値段も張らない。狩場ではなくとも、適量使って、効率よく刈ることができれば、それだけでも赤字にはならなかった。そして、そのストックはまだ十分に残っている。

「じゃ、休憩開けたら使うぞ。俺だけでいいな?」

「別に三人そろって使う必要はないでしょ」

それだけ確認すると、俺はマップデータを広げた。迷宮区はたいいどこの層もほとんど同じくらいの大きさだから、今のマップピングの距離等から考えると、

「このペースだと、そろそろ次の階層への階段があるはずなんだが」

「え、もう?」

「ああ。あくまで計算に過ぎないが。どうする? 次の階層で敵が手ごわくなることは十分に考えられるが」

「かまわないわよ。退屈しのぎにはいいんじゃない?」

エリーゼの答えに、レインも一つ笑う。その笑みには隠し切れない獐猛さがあつた。

「・・・つたくバトルジャンキーどもめ」

「人のこと言える？」

「違うない」

レインのツツコミには苦笑するしかなかった。まあ、こんなものを使うと言っている時点でそうなのだから仕方がない。

「じゃ、使うぞ」

そういうと、俺は香水の容器を取り出してうなじに持つてくると、底を一回軽くたたくことで一滴たらし、軽く手で伸ばす。それだけで、独特の香りが周りに漂った。

「さて、んじやま行きますか」

「正しい香水のつけ方知ってるんだね」

「正確には教わったんだよ、レインに」

「だって、せっかくの香水なのにべたべたつけたらもつたいたないじゃん。匂い的にも」

「いいじゃねえか、ちつとは効果上がるかもしれないし」

「上がったところで精々ほんの少しでしょ。なら、ちゃんと香水つけたほうがいいじゃん。身だしなみ的にもさ」

「とまあ、こんな感じの会話をしてな。で、しっかりと教わった、ってわけだ」
「・・・ふーん・・・？」

「だからそのにやにややめやがれ」

なんだかんだでおしやれに気を配るあたり、やはり年頃の女の子だ。どれだけ前線で戦おうと、そこはこういう端々で否応なしに意識させられてしまう。・・・勝手に俺が意識しているだけ、という自覚はあるが。

香水の容器をしまうと、俺を真真中に据えて、前衛がレインで歩き出した。この布陣になったのは、ひとえに陣形を中心に魔物寄せ、つまり俺がいることで、湧きが出やすい範囲を均等にするためだ。実際、

「前に1、訂正2」

「後ろにも1。どうする?」

こうして前後に均等に敵が湧いた。俺の判断は早かった。

「エリーゼ、後ろの時間稼ぎ頼んだ」

俺の言葉に、エリーゼは低い声で答えた。

「時間を稼ぐのはいいが、別にあれを倒してしまってもかまわんのだろう?」

「ああ、がつんと痛い目に合わせてやれ」

「そうか。ならその期待に応えよう」

どこぞの赤い弓兵のようなやり取りをしつつ、俺も抜刀、レインの右に立つ。呼吸を合わせ、俺たちは同時に踏み込んだ。ここまで一緒に戦ったことで、完全に俺たちの呼吸は戻ってきていた。ゆえに、多くは無用。最低限のやり取りで相手の行動を読み取る。相手はよく見る、近接の得物を持ったモンスター。この手のやつの急所はお約束通りだ。鎧でところどころ邪魔にはなっているもの、そこはうまく避けて滅多切りにすればいいだけの話。まず手始めに、右手の刀で相手の首筋を斬る。相手は右手で上段に得物を振りかぶった状態だったから、俺から見て右に斬り抜ける。相手は右手で上段に従ってきた相手の得物、その手を逆手に持った柄で強かにたたく。俺の狙い通り、相應の衝撃があつたと判定されたらしく、相手が一瞬怯んだところでそのまま首筋に突きを放ち、左に切り裂く。回転を利用して、逆手に持った小太刀をそのまま同じようなコーズに一閃。これは防がれるが、ここまでは想定内。回転の間に納刀した刀で、今度は体術系ソードスキル「アームハンマー」を脳天に食らわせた。がつりスタンが入って行動が完全に止まったところで、罅から虎牙破斬、さらに抜刀しつつ一気に斬り抜ける大技、「抜碎竜斬^{ぼつさいりゆうざん}」でフィニッシュ。

(しまった、オーバーキルだった)

と、後悔するも、今はそんなに問題ではなかった。周りを見ると、ポリゴンが散っていた。どうやら、三人ともほぼ同時に撃破したようだ。まあしよせんは雑魚、この程度

だろう。俺が明らかにオーバーキルだったただけだ。

「あーあー、この程度かよ」

「気持ちわかるけど押さえよう?」

俺のボヤキはどうやら三人とも感じていたらしい。苦笑されつつたしなめられ、俺は軽く肩をすくめた。といつても、つまらないものは仕方ない。俺からしたら中ボスでも出てきてくれないかなー、なんて思うくらいの難易度だ。

「とりあえず先進むぞ」

「ここどうじうじしていても仕方がない。何より、敵がいなかつまらない。

そうして敵をなぎ倒して先に進む。相変わらずの歯ごたえのない戦闘ばかりを繰り返して、マップを見て俺は気づいた。

「そろそろまた次の階層への階段があってもおかしくないはずだ」

「そうなの?」

「俺の予想が正しければ、な」

「さつきも思ったけど、戦いながら進みながらよくそんなの考えるね」

「こういうことを考えてると戦闘が楽になんだよ。効率的に戦闘するのと、だからなら戦闘をするのは違うからな。あと、迷わない」

「へー」

俺からしたら、マップデータは結構貴重なものだったのである。好き好んでレッドと取引するような奴はいないから、俺たちは基本的にその辺のアイテムや情報は自前で集めるしかなかった。基本的にラフコフは個人主義だから、自然と〃その手のことは自分で考える〃ということとイコールになる。だからこうして考えることが習慣化されてしまったのだ。それに、対人戦はつまるところ、情報戦だ。相手の得物は、構えは、間合いは、初動は、攻撃パターンは。SAOのクロスレンジで、いかに一瞬で、膨大なそれらの情報を処理し、選択し、判断できるか。それが本当に重要になる。ラフコフ同士の模擬戦だと、一番やり辛かったのはやつぱりP o Hだろう。あいつは本当に読ませてもらえない。カチツときれいに読める時もあつたが、うまく肩透かしを食らわされた時も数知れない。まあとにかくそういうことだから、自分で考えることが根っこから習慣化されているのだ。

で、進んでいくと、そこにあつたのは巨大な二枚扉。つまり、この先にフロアボスがいる。

「えー・・・」

「今回の迷宮は短いんだねー」

レインのコメントはもつともなのだが、・・・つまんねー。マジで。

「よっし、偵察戦としゃれこみますか」

「そうね。さすがにこれで帰るんじゃないし」

「ちよつと二人とも・・・」

レインが止めるも、その前に俺とエリーゼが扉を開けていた。それでため息をついて二人の後についてボス部屋に入る。

ボス部屋は、広さこそそんななもの、縦の長さが異常なほどだった。見上げても天井が見えない。おそらく、階層の最上部近くまであるのだろう。そこから降りてきたのは、翼を退化させたワイバーンのような、どこか爬虫類のようにも見える竜だった。その口からは琥珀色の牙が一对伸びている。前足の内側にある、翼と思われるものの端は刃のようになり、その少し内側にとげのようなものがついていた。固有名は、*“The Wyvern of Mirage Edge”*。幻の刃の竜、か。

こちらの姿を認めると、相手は前足を少し踏ん張って一声吠えた。その声に、こちらの意思とは関係なく、射すくめられたようにアバターが硬直する。たまにボスが所有する、スタンにも似た一時的な行動阻害系のデバフを持つ咆哮、通称バインドボイスか。なるほど確かに雰囲気は強者のそれだった。

「行くぞ。援護を頼む」

声をかけて切り込む。あくまで今回は偵察戦だ、無理をする理由はない。半分様子見

のつもりで斬りこんだ瞬間、相手がこちらの視界から消えた。

(いったい何が……ッ!)

一瞬パニツクに陥りかけるが、右に感じた気配の感覚に体が反応し、左に身を投げ出す。本当に反射に近い動きで受け身を取ることもままならないまま転がったため、体勢を立て直そうとし、正面を見て俺はその考えを放棄して速攻でさらに半分転がるように後ろに身を投げだした。直後、先ほどまで俺が転がっていたところを琥珀色の牙が通り過ぎた。回避していなければ間違いなく噛み貫かれていただろう。間一髪だった。

今度こそ体勢を立て直すと、今度はその尻尾をまるで鞭のように振り回してきた。打点の低さを見切り、跳躍でこれを回避。そのまま前から飛び込んで攻撃につなげる。だが、相手に俺の刃が当たりそうになったところで、再び相手が視界から消えた。今度は完全に受け身を取って、そのまま立ち上がり、そのまゝに跳躍し、距離を取る。俺の想像通り、先ほど俺のいたところには攻撃が通り過ぎていた。着地して相手を見ると、その四肢に力を込めている。仕切り直しかと思いきや、相手は一気に飛び上がると、その尻尾を思い切りこっちにたたきつけてきた。これに関しては後ろで待機していた後ろ二人までリーチの圏内に巻き込んだらしく、

「のわっ!」「あ……ぶなっ……!」

後ろからも回避の音が泡を食った様子で聞こえてきた。

ここまで来て、ようやく俺は相手の攻撃パターンの一部が読めた。おそらく、尻尾と翼の端の刃で相手を切り裂いていくのだろう。となると、飛び道具は警戒するに越したことはないが、ほとんどない。その近接こそ最大の脅威。名前にもなっているミラージユ、幻影というのは、その動きの速さが原因だ。正確には、ストップ&ゴーの加速度が非常に大きい。慣れないとこの速度にはついていけない。だが慣れてしまえば話は別だ。

最初こそからくりが分からなかったが、二回目は至近距離から見えたから分かった。刃の内側のとげのような部分がブレーキとなって、ためられた力が移動の寸前で解放されることで、あの初見では消えたように錯覚すら起こさせるほどの加速が生み出されているのがよくわかった。こういうとピンとこないのなら、デコピンの要領と考えると分かりやすいかもしれない。あと、尻尾がどうやら伸縮性があるようで、勢いよく振り回すと、見た目以上のリーチが発生する。

(初見殺しにもほどがあんだろ……)

だが、種が割れてしまえば対処は容易だ。動きの速度に関しては慣れてきた。尻尾はリーチこそあるものの、それに気を付ければいいだけの話だ。

「もう最初の様子見は十分だろう！撤退する！」

「しんがり引き受けるよ！動きはある程度見えてたから大丈夫！」

「OK任せた!」

最低限の声掛けでレインがこちらに来る。相手がこちらに向かつて、距離をとびかかりで詰めながら刃翼で斬りかかってくる。その攻撃はもうある程度見切っている。

「スイツチ行くぞ!」

「いつでも!」

相手の攻撃は袈裟に近い斬撃にも似た機動。なら、これで大丈夫だ。顔の前に近い位置で刀を水平に構える。相手の攻撃が当たった瞬間に「鏡花」が発動。カウンターの強力な上段に、大きめの行動遅延デレイが入る。相手のそれが終わる前に、後ろからソニックリープが飛んできた。二連続のソードスキルで長い行動遅延に入ったことを確認して、俺はポーションを一気飲みする。すでにエリーゼは部屋からほとんど離脱している。俺もそれに続いて、一呼吸でフォローができるような距離を保ちつつ下がる。レインも、短い硬直を終えてバックステップで距離を取っていく。動きをある程度見切っているという言葉に嘘は無いようで、その回避は非常に正確だった。

「もう少し右方向に回避!」

「うん!」

こんな感じで、俺の指示を受けつつバックステップを繰り返し、決して目をそらさないようにしつつ、回避しながら撤退する。それを何回か繰り返したところで、入り口近

くで待機していたエリーゼから声がかかった。

「目測であと約10m!」

「OK了解! レイン、あと一回バックステップしたら反転撤退!」

「分かった!」

その少し後にバックステップでレインが回避すると、俺の指示通りレインは反転して一目散に撤退した。エリーゼがそれに続く。俺も、それを確認して、後ろに注意しつつ一目散に撤退した。

38. 変わらぬもの、見守るもの―第67層フロアボス 攻略会議―

その数日後、俺たちはボスの攻略会議に出ていた。今回の敵はすばしっこいタイプだったので、俺たちがもたらした情報から念入りに偵察戦が行われたらしい。何とか死人を出さずに偵察戦のある程度終えたからこそ、こうして会議が開かれることと相成った。俺からしたら久しぶりの攻略会議だ。

レインにつれられるようにして来た会議場は、やはりというか人が多かった。攻略参加予定の全員が参加しているから当然といえば当然か。俺が入った瞬間に何人かの目がこちらに向いて、ひそひそ話を始める。ちゃんとした説明くらいしとけよと思いつつ、その居心地の悪さに内心苦笑した。だが、このくらいの反応は予想の範囲内だ。俺の攻略組復帰を決めたのは、今の二大ギルド、KOBとDBの会合で決められたものだ。戦力を支える中小ギルドやソロプレイヤーの意見は、半ば以上に無視したこととなる。俺が脅したとも、攻略組がリスクヘッジを怠ったともとられかねない行為だ。

少ししてから、ヒースクリフが入ってきた。全体を見渡すと、
「揃っているようだね。では、会議を始めよう」

と、早速の開会宣言をした。

「まず、今回から懐かしい顔が戻ってきた。良くも悪くも有名だが、大きな戦力であることには違いない」

そういつて、こちらに目をやりながら軽く手招き。・・・全く、こういうのはあんまり得意じゃねーんだけどな。

「さて、初めましてのやつも多そうだが、一応久しぶりといっておく。俺はロータス。おそらくこの中の大多数が知っていると思うが、ラフコフの元幹部だ。もし俺に対して直接恨みがあるようなら、直接かかってこい。一時オレンジも辞さない態度でやってやる。ただし、俺は強いぞ。それ相応の覚悟を持ってこい。

ステバランスと戦うスタイルについては省略する。どうせリサーチがなされてただろうからな。よろしく頼む」

俺の挑発ともとられかねない自己紹介に、周りがざわついた。だが、これは本心だ。それくらいいなくては命など預けられまい。

「まあ、こういうことだ。これまでや、これからの素行は、もう一人新しく攻略の手伝いもかねてしてくれた、傭兵のエリーゼ君、そして、君たちもよく知るレイン君が監視にあたっている。監視を外すタイミングは未定だが、その時はこうしてまた諸君に話し、決を採る。それは、この場で宣言させてもらう。先ほどのロータス君ではないが、それ

を破ったときは、遠慮なく殺しに来たまえ」

ヒースクリフがかなり格式ばったというか、固い口調で付け加える。その口調はいつものことなので問題ないのだが、

「なあ、俺が言えた義理じゃねえが、仮にもボスレイドリーダーがそんな啖呵切って大丈夫かよ?」

「君がことを構えなければいいだけの話だろう?それに、さすがにこの人数の攻略組相手に生き残れる自信があるのかね?」

「ねえな。うん」

いやはや恐れ入るわ。少数精鋭を監視につけて牽制とし、やがて今度は攻略組を利用した圧力に変える。いざとあらば、その牽制に使った人員を斬り捨てて、圧力からの追跡、排斥にかかる。その最終手段を防ぐために、牽制要員は俺のよく知った人物にする。・・・たぶんここまで考えてたんだらうな。怖え。

「さて、では攻略会議と行こう。」

今回のボスは、"The Wyvern of Mirage Edge"。ワイバーン特有の、前足と一体化したような翼が発達せず、その端はまるで刃のようになっている。また、この刃の内側にはとげがある。刃はともかく、とげにそこまでの攻撃判定はないそうだ。

主な攻撃方法は、その刃のような翼——以降刃翼とする——を利用した攻撃だ。また、その尻尾は伸縮性に富んだしなやかな部位で、これを鞭のように振り回したりたたきついたりするという。その性質上、見かけ以上のリーチがあり、偵察班のタンクによれば、この尻尾を利用した攻撃もかなり重たかった、とのことだ。そうだね？」

「ええ、一つ付け加えると、縦方向のたたきつけは、一度大きく跳躍をするので、見てから回避でもなんとかなるか？」

「なるほど、ただし下手に下がろうものなら餌食になるわけだね？」

「そうですね。距離を取っていても、間合いによっては危ないです。想像以上にリーチがありましたから」

「なるほど、貴重な情報に感謝する」

「これくらいは俺らの最初の偵察戦で共有されていた。だが、俺からしたら足りない。

「あ、俺からもいいか？」

「なんだね？」

「初見であいつに対峙した身として言わせてもらうが、タンクみたいな鈍足プレイヤーは無理に回避せず、パライしたほうがいいんじゃないか。結構あの攻撃、素早かった記憶があるぞ」

「あー、そうだな。言葉が足りなかった」

「いいって」

先ほど補足した、偵察班の一員だろう人物の謝罪は鷹揚に受け流す。俺からしたら些末なことだ。

「だけど、AGI型のダメージディーラーみたいなすばしっこい奴は跳躍した瞬間に横に避けたほうが確実だ。最悪なのは隣同士でごっちゃんこしてまとめて終了、ってパターンだから、それだけ徹底してほしい」

まあ、そんな無様をさらすようなやつはいないとは思うが、念のためだ。

「さて、では話を戻そう。名前の『幻の刃』、というのは、その加速度が非常に高いことに由来すると思われる。初見で相対したロータス君が、一瞬見失ったように見えた、と報告を受けている。事実かね？」

「いっこ訂正。見失ったよう、じゃない。初見の時は本当に見失った」

俺の言葉に、周囲がざわめいた。特にそれは、古参の攻略組メンバーほど大きかった。古参メンバーは俺の戦闘力を知っているからだ。自慢じゃないが、俺の戦闘力はなかなかのものがある。そのダメージディーラーが完全に見失った。それは十分に共学に値するものだったのだ。

「その後の攻撃をかわせたのはただのカンだ。ぶっちゃけ、あれは本当に心臓に悪い。理想を言うのであれば、最初は偵察戦メンバーを何人か前線において、その速度に全員

が慣れるまで待つべきだろうな。じゃねえと死ぬ」

「さすがにそれは酷だ。いくらなんでも、消耗からまだ立ち直っていない偵察班を投入することはできない」

「だろうな。あくまでも理想だから聞き流してくれ」

「次善として、タンクを前面において固め、ダメージディーラーが慣れるまで待つ、というものもあるが」

「第三の策もあるぜ」

再び俺に視線が行く。

「この手のやつは、囲んでフルアタックするような人海戦術より、少数精鋭による攻略のほうが効率的だと思う。そんなにデカブツじゃないわけだしな。ましてや今回は、攻撃をしつかり見極めないと簡単に死ぬような相手ときた」

「回りくどいぞ。何が言いたい」

ハフナーが結論をせかす。ま、俺も回りくどいかなーと思ってたし、ちようどいいか。「交戦経験のある俺がまず特攻、あいつの気を引く。そのまましばらく俺が交戦して、ほかの面子が慣れるまで待つ」

俺の言葉に、全員が驚愕の色を見せた。真っ先に反対を示したのはヒースクリフだった。

「それはだめだ。危険が過ぎる」

「俺からしたらそれなりに面白い案だと思ったんだが」

「面白そう、ですべてうまくいけば問題ない。だが、君のそれは完全に命を捨てると思えない」

「リスクは必要だろう」

「可及的に小さくできるなら、それに越したことはない」

「ならそれこそ、この理論ならそのリスクを最小限に減らすことができる。リスクを負うのは俺一人だからな」

俺の言葉に、ヒースクリフはしばらく黙り込んだ。やがて、長く息をつくとき全体を見渡した。

「今のロータス君の策に、反対意見はあるかね？」

それに、レインが真っ先に手を上げた。目顔でヒースクリフが指名すると、レインは即座に答えた。

「私とエリーゼさんを交代要員で回してください」

「おま、なに言ってる——」

「いくら何でも、」

俺の言葉を意に介さず、レインはさらに続けた。

「彼一人に背負わせるのは無理があると考えます。私も最初の偵察戦に彼と参加しました。動きは覚えています」

その言葉に、再び長いため息をつくとき、ヒースクリフはもう一度全体を見渡した。

「・・・改めて決を採る。ロータス君を中心に、彼とレイン君、そしてエリーゼ君が、動きを全員が見切れるまで持ちこたえ、そこから攻勢に転ずる。以上、反対意見等はあるかね」

それに対する意見はなし。それを見て、ヒースクリフは改めて口を開いた。

「では、攻略会議を終了する。今から約3時間後、午後4時に最前線の主街区の転移門広場に集合してくれたまえ」

その言葉に、三々五々に散らばっていく。正直、俺はレインとエリーゼが危険な前線に出てくると思っていなかった。少し不安だが、俺が一人で捌ききれば問題ない。

「ロータス君」

そんなときに、レインがこつちに声をかけてきた。呼びかけた時の口調と、その目だけで怒っていることが分かった。

「悪い」

「命を捨てるような真似はやめてよ。もう分かっているんでしょ？」

「・・・悪い」

それだけ言うと、レインは呆れたように笑った。

「よろしくね」

「ああ。やるぞ」

それだけ言うと、俺たちは拳を打ち合わせた。それはまるで、かつてと同じような呼吸で、俺たちは同時に少し笑った。

「入れないわねえ」

「そうだね」

ロータス君たちが仲良くやり取りをしている横で、私は仕方ないなあとため息交じりに言葉を漏らしていた。思わず漏れたコメントに、隣に来たヒースクリスが同調する。いかに彼といえど、あの空気に入っていけるほどではないらしい。

「若いつていいなあ・・・」

「エリーゼ君、そういう言葉は自分の年齢を考えて発言したまえ」

どこかため息混じりにも、苦笑混じりにも聞こえる声でヒースクリスが言う。でも、間近であの二人を見ると、たかが数年と笑えない自分がいる。

「彼らはどうだい？」

「なんか、本当に一年近くもコンビ解消してたのかって思うくらいに息びったり。熟年

夫婦もびつくりレベルですよ」

「少し妬いているのかい？」

「少しじゃなくてかなり」

「そうか。私としては、先ほどの捨て身の作戦に、一応年上として一言言っておこうかと思つたのだが、あれではどうしようもない」

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もある、とも言いますがね」

「身を捨てるにも程度というものがある」

「そういうことができるのは若者の特権ですよ」

「若い先短い年増の権利でもあると思うのだがね」

その言葉に、私は少し笑つてしまった。確かにそうかもしれない。だが、彼がこんなことを言い出すとは、ちよつと意外だった。

「さて、んじやま私はそろそろ行きます。準備もあるし」

「君たちの活躍を期待している。存分にやってくれたまえ」

「言われなくとも」

その言葉に、私は寧猛に笑つた。存分に戦える、それが、ここまで楽しいことだとは思わなかつた。ロータス君の戦闘狂気質が少し移つたかな、と考えつつ、私は攻略の準備に向かつた。

39. 呼吸、重ねて―第67層フロアボス攻略戦、前編―

フロアボスの前までは、今まで通りというか、まったく危なげなく進んだ。ま、今からフロアボスを討伐しに行くというのに、迷宮区の雑魚モンスターに手こずる道理はなかった。ボスの扉前へたどり着くと、ヒースクリフは振り返って、俺たちのほうに合図した。俺たちが扉を開けて飛び出して行けいこうらしい。ま、今回の役割を考えれば妥当か。

「開けるぞ」

俺が一声合図をして、扉を開ける。全開になった瞬間、俺は一気に飛び出した。後ろに続く気配はレインとエリーゼ。最近まで一緒に行動してきたこの二人は、いちいちその方向を見なくとも足音などの音で察することができた。全力で走ると、上からボスが降りてきた。一度見た前足を踏ん張るモーシヨンを見た瞬間、俺は全力に近い力で跳躍した。空中でバインドボイスを食らった俺は、前進力を失ってそのまま着地する。タイミングを間違うと意味がないが、バインドボイスは空中でこうしてやり過ぎることがきるのだ。さて、

「くぐろー」

気合を入れるためかねて一声吼える。そのまま前進すると、あの時と同じように視界から相手が消えた。気配を感じて、今度は投げ出さずに跳躍する。空中で身をよじつて、ちょうど真下付近に来ていたボスに抜刀してカブトワリを繰り出す。これがちょうど刃翼の内側を支える筋組織の部分に当たった手ごたえがあった。そのまま剛直拳を繰り出し、転身脚からさらに虎牙破斬、バックキックとつなげて距離をとる。自分の領域で好き勝手されたことに苛立ったのか、こちらにヘイトは完全に向いたようだ。カチリと牙を鳴らす音のはつきりと聞こえる。

「……上等……!」

刀を前に突き付け、俺はそれだけつぶやいた。それに対し、相手は天に吠える。一瞬デイレイを食らうが、それだけだ。俺は再び、相手に向かって切り込んでいった。

それを後ろで見つつ待機している私たちは、その光景に圧倒されていた。

「よくあんなの、あんなクロスレンジで戦えるよな……」

「ああ……最初見失ったって言ったの、あれ嘘なんじゃねえか……?」

そのさらに後ろで見ている攻略組の面々も、その立ち回りに圧倒されている。何回か見て見慣れてきたといっても、加速度の大きいボスの横方向の動きは見失っても不思議ではないほどだ。それを一度も見失うことなく、一瞬遅れてでもきっちり回避をし、動

きにかウンターを合わせる。その動きのどれだけ超人じみたことか。このまま任せられるのなら任せたいと思うほど、その動きは正確だった。

「ロータス君、そろそろスイッチ！」

その声に反応はない。

「おい、^{はず}こら蓮！」

何の反応もないところにいら立ったのか、誰かが声を上げる。それを、エリーゼが振り返ってゆつくりと首を振った。その意味が分からなかったのか、眉をひそめたプレイヤーに、アスナが語り掛けた。

「たぶんだけど、彼は今、極限の集中状態にあるんだわ。だから、こっちの声掛けは基本的に反応ができない。自分の意識の外側に、それをはじき出しているから。だから、私たちがブレイクポイントを作るしかない。そして、動きを見るに、ブレイクポイントを作れるほど、まだ慣れていない。違う？」

事実、その通りだった。動きを見切れるほど、攻略組は対応できていなかった。それを見て、アスナはさらに言葉を続ける。

「私たちが今すべきことは、彼を信じて一刻も早く動きを見極めること。たったそれだけ。いい？」

かつて、攻略の鬼といわれたところを彷彿とさせるような、有無を言わさぬ口調でアス

ナは言い切った。それに対する反論など、上がるはずもなかった。

ただ、相手との呼吸を合わせ、斬りかかり、いなし、躲し。それを何度繰り返しただろうか。それだけなのに、俺はとても心地よかった。その命のやり取りが、とても危険なものはずなのに、俺は心躍っていた。

相手のHPバーが一本消える。それはそれだけ俺が相手に手傷を負わせた証拠。そして、相手はそれを知ってか、もう一度足を踏ん張った。タイミングを合わせてジャンプし、再びバインドボイスを空中で喰らうことで隙を潰す。さて、こういう時は攻撃パターンが増えること請け合いなんだが。と、考えていると、まずは飛び掛かりつつ刃翼で斬りつけてきた。これはバックジャンプで悠々回避する。と、一瞬でまた視界から消える。が、その前の一瞬でどっちに飛んだのかは見切っている。そちらを見ると、今度はそちらから飛び掛かり。これはサイドステップで回避する。と、今度はそのまま噛みつきが飛んできた。さらにバックステップで回避、と見せかけて、腰の少し上あたりに、剣先を少し上に向けて刀を構える。そのまま円軌道を描いて「桜花気刃斬」がさく裂する。そこからさらに小太刀で抜刀しながらラウンドフォース、刀での「風牙絶咬」につなげる。そのまま斬り抜け、長めの硬直に入る。コンボが決まったから見た目はかっこいい。だが、

(しまった・・・・ッ！)

こっちは硬直で振り向けない。相手も硬直に入っているが、俺は背を向けている。そして、相手は尻尾も十分武器になる相手。これは俺の失策だ。だが、一つ同時に死なないという確証もあつた。

「やあつー！」

後ろから気合の入った声。さらに相手にデイレイが入り、動きが止まる。直後、俺は振り返って何回か斬撃を加える。そのまま相手を踏みつけて元の位置に戻る。

「サンキュ」

「織り込み済みだからね。全く、何回言っても無茶するんだから」

レインのコメントに苦笑で返して、俺は構えた。隣でレインも構える。その構えはまるで鏡のようだった。

「挟撃するぞ」

「合わせるよ」

それだけで十分。お互いが反対方向に動いて斬りかかる。尻尾が少し横に振れる。

「跳べー！」

それだけで十分だった。ほとんど同時に跳んだ俺たちは、低空で空を裂いた尻尾をちようど飛び越した。紙一重の縄跳びだ。だが俺は嫌な予感がしていた。そしてそれ

は的中する。直後にかすかな足の動きを俺がとらえる。

「レイン！」

「了解！」

着地と同時に切り上げる。再び水平に振るわれた、鞭のようにしなる尻尾がそこに当たり、ぴったりのタイミングでかちあげてパリイする。今のは結構焦った。

「全体的に連撃が追加されるってどこか」

「この速度の連撃なんて、正直手が付けられないよ」

「俺はこういうほうが楽しいがな」

「全くもう……」

呆れつつも視線は外さない。

「俺が突っ込む。援護頼む」

「了解」

その一言を受けて、俺は突っ込んだ。対する相手は、何回か見せた噛みつき。その顎を切り裂くように、小太刀で横に移動しつつ切り裂く。そのまま勢いのままに回転、上段を繰り出す。後退しようとしたようだが、そうは問屋が卸さない。さらに追撃として俺は小太刀を納刀して、仰ぐようにして投げナイフで追撃する。ピンポイントで両目に当たり、一瞬ではあるが視界をふさぐ。ここぞと踏み込み——俺は戦慄した。

(見えている・・・!?)

その双眸は、つぶされてなおこちらを睨んだのだ。右足を上げてたたきつけようとす。その一瞬の動きに、俺は思わず下がってしまった。直後、相手がその右足を軸に回転、こちらに横を向ける。何をしてくるかと思うと、相手はそのままシヨルダータックルを繰り出してきた。直前で何とか反応して下がることに成功はしたものの、そこそこダメージが入ってしまった。軽く舌打ちをしつつ、体勢を立て直す。相手はそのまま尻尾の薙ぎを繰り出してきた。ここまでは想像通り。俺も即座に最低限の跳躍で躲す。振り返り様の噛みつきはさらにバックステップを重ねることで回避した。一度仕切りなおしになったことで一瞬間が入る。これは俺にとってはありがたかった。頭に上っていた血が降りてきて、いい感じに頭が冷えた。

(何であいつは目をつぶされた状態でこっちの位置を正確に把握できた?)

真っ先に思い浮かぶのは——、それが正解だと仮定した場合、俺のできる対策は。一瞬で頭が回る。今の所持品に、それにちょうどいいブツがあったはずだ。

「レイン」

「何秒?」

「30 あればお釣りが来る」

「了解」

「スリーでいくぞ」

俺とレインのやり取りに、後ろに控えている攻略組メンバーが疑問符を浮かべる。間合いが開いた俺に対しての攻撃は——突進。

「スリー！」

あわせて拳を握る。構えは横腹の辺り。

「ツー！」

拳が光に包まれる。相手の間合いは合っている。ドンピシャで突進してきた眉間にこっちの剛直拳が突き刺さる。場所が場所だけに、相手が大きくのけぞった。

「ワン！」

今度は足が光に包まれ、直後に前に振り出す。それはのけぞった下顎に直撃した。

「ゼロ！スイッチ！」

バックキックで俺が下がるタイミングに、レインがあわせてきた。さすがレイン、ドンピシャだ。

下がった俺は一瞬でウインドウを操作した。目的のアイテムを取り出し、いくつか空の腰ポーチと懐に入れ、1個だけ手に持つ。

「レイン！目を！」

「了解！」

俺の声に合わせ、レインがシヨルダータックルを右に弧を描いて躲す。正面に回り込み発動するのは、連続で突きを放つ片手剣系汎用連撃ソードスキル秋沙雨。あきさざめこれは的確に目を潰した。

「スイツチ！」

「あいよー！」

左手にアイテム、右手には投擲用のタガー。俺の予想が正しければ、

「喰らつとけ！」

左手でアイテムを放り投げる。それは俺の狙い通り頭上に放物線を描いて飛んでいく。それを、俺は右手のタガーで射貫いた。瞬間、耳鳴りをひどくしたような、不快な音が大きく響いた。相手はそれにのけぞった。

(やはり・・・！)

直後に俺は足の内側に爪竜連牙斬からの爪竜連牙蹴をぶちかます。それにたまらず相手はダウンした。

「うし、突っ込め！」

俺の号令とともに、後ろで控えていた攻略組面子も突撃する。ソードスキルの硬直をうまく考えながらのフルアタック。もともと俺一人でHPバーが一本消し飛ぶ程度しかHPがない相手にとって、これは大打撃になった。あつという間にもう一本HPバー

が消えたところで、相手が起き上がる。立ち上がった相手は、俺の想定通りに前足を踏ん張った。

「バインドボイス来るぞ!」

俺の一言で、全員が一步下がる。俺はもうその攻撃は見切っている。だからこそ、もう一発、今度は鼻先に先ほどのアイテムをたたきつけた。鳴り響いた甲高い音は、今度は咆哮する寸前の相手が完全にのけぞらせた。

俺お手製、名前そのまま“音爆弾”。ある程度以上の衝撃が加わった場合、雷管が作動して中に仕込まれた素材が大きな音を立てる仕組みだ。目をつぶされて、それでもこちらの位置を正確に把握してきた。真っ先に思い浮かぶのは、耳だ。戦闘中、暗殺でもない限りは音をしのばせるようなことはしないし、そもそもが忍ばせていてもかすかな音はする。その音を聞き分けたのではないか、と考えたのだ。耳がある位置を、オーソドックスに頭と仮定して、そのあたりにこの音爆弾を炸裂させてやれば、というたくらみだ。うまくいってよかった。

「いい加減慣れたか!」

俺の声は結構本音だ。鼻根目に見て、それなりには粘ったはずだ。動きを見切るのに十分な時間稼ぎのはず。

「悪い、もう少し——」

「A隊、スイッチ用意！」

誰かが言ったコメントをぶった切る形で、よく通る高い声が指示を出す。アスナの指示に攻略組メンバーは一瞬ひるむが、その気迫に圧されてそのまま了解の返事を返していた。その声を背に、俺はいったんラッシュを切って下がる。瞬間、赤い残光を残して相手が消えた。本能の警告のままにそのまま一回前転。背後に回った瞬間に見たのは、目の周りが赤く染まったフロアボスの姿。つまるところ、

「新局面ってか」

残る体力は半分を切っている。今度こそ底力というやつが引つ張り出されたのだから。——上等、やってやらあ！

「スイッチ中止！もう少し様子見てろ！」

「だけどー！」

「どちらにせよ、ここからはパターンが変わる！初見のやつしかいねえゾーンだ！なら少しでもなれているやつを前に置いたほうがいい！」

俺の言葉に、アスナは黙り込んだ。あの反応から察するに、おそらくすべての動きがさらに一段加速されている。持ちこたえるほかない。

にらみ合いを崩したのは向こうの右への横っ飛び。一瞬見えた残光から相手の動きを推測するが、そこに敵はいない。とすれば、俺は反転してバックステップをかける。

その直後、先ほどまで俺のいたところを刃翼が通過した。直後、相手がその体制のままかすかに力をためる。そのモーションはもう見切っている。連続して飛んできた飛び掛かりは、今度は前に身を投げ出して地面すれすれを跳び、刃翼の下をかくぐること回避する。それを見てか、相手は尻尾を水平に振り回してきた。これは刀でパリイする。と、今度はそのまま空中に跳んだ。

「回避！」

叫びながら、俺自身も躲す。想定通りの尻尾たたきつけ。だが、今回は雰囲気が違う。「もう一発！」

再び叫びながら、上を見る。タイミングを合わせて横に転がる。転がりながら左手を納刀、投擲用のタガーを放り投げて牽制とする。そのまま一気に間合いを詰めると、耐久値がギリギリ残っていたのであろう、突き刺さったままのタガーに向けて転身脚を繰り出す。それに相手が怯んだところで、もう一度バックキックで仕切り直しとした。HPバーを見ると、想定した量より減少量が多かった。

「やっぱり攻撃力も上がってやがるか」

「ここまでは想定通り。と、考えていると、後ろから声がかかる。

「ロータス君、いい加減後退して！」

「対応は間に合ったか?!」

「私が先行する!」

「俺も追従する! 見切るまでには十分だ!」

声からして黒白夫婦か。戦力には十分か。

「レイン! エリーゼ! ブレイクポイント作るぞ! スイッチ準備!」

「了解!!」

俺の言葉に、四人の声が重なる。相手は、俺に対して垂直に横になる。何度も見た、シオルダータツクルのモーシヨン。ほかの技に比べ、若干だが出が遅い。そこを突き、幻狼斬で回り込む。そのまま今度は、拳を何回もたたきつける体術系ソードスキルごうれつしゅう「**啗烈襲**」をかまし、牙狼撃につなげる。何も言わずともレインが、今度はヴォーパル・ストライクで追従する。

「スイッチ!!」

俺とレインの声に合わせる形で、後ろから一筋の閃光が飛んできた。その正体は、アスナの繰り出したフラツシング・ペネトレイター。もともと速度の速いソードスキルだが、それをアスナが繰り出せばまさにそれは相手を貫く閃光となる。その後ろから飛んできた光は、色合いとスピードから見てレイジスパイクか。それを使ったのは、防具から剣まで黒のまっくろくろすけ。硬直が抜けた直後、俺たちは即座に距離を取る。HPを見ると、とうの昔にレッドゾーンに落ちていたらしく、あまりHPは残っていないかつ

た。どうやらこまごまとしたダメージをずっと喰らっていたらしい。もう二回ほどバックステップをして、俺は想定した以上に距離を取った。安全距離は見切っているが、念のためというやつだ。そのまましゃがんでポーチから回復ポーションを取り出すと、そのまま飲み干す。相手のHPはすでに半分以下に落ち込んでいる。

「大丈夫？」

「ああ。・・・だが、さすがにクるな、こりゃ」

レインの問いに、頭を軽く抑えながら答えた。かすかであるが頭痛すら感じる気がする。無意識のうちにそこまで集中していたのだろう。

「ありがとな、レイン。やりやすかった」

「あつたりまえじゃない。パートナーだから」

その答えに、俺はふと笑って拳を突き出す。レインもそれにグータッチで答えた。

まだボス攻略は続いているが、俺はこの感覚を楽しんでいた。やはり、この感覚は悪くない。そんなことを思いながら、俺は再び前に意識を移した。

40. 相棒—第67層フロアボス攻略戦、後編—

白黒夫婦が前線で粘っている間、攻略組の面々はだんだん適応をし始めていた。そんな中、俺は隣の少女に声をかける。

「レイン」

「早くない?」

「そっちはきつい?」

「まさか」

「ならいいだろ」

「またもやはたで聞いていれば何を話しているかわからないような内容だが、当事者同士ならどういふことか分かるのだから仕方ない。」

「それに、私たちが行く必要はないでしょ」

「まあそうかもしれないが」

「と、この続きでようやくわかった人のほうが多いと思う。つまりだ、そろそろ戦線復帰しないか、という俺の問いかけに、まだ早くないか、とレインが返し、レインはまだ回復終わってないのか、そんなことない、ならもう戻ってもいいだろう、といった流れ

だ。そんなときに、俺たちの後ろから声がかかった。

「ヒースクリフ」

「なにかね？」

「そろそろ出て行っていないか？あれは本来俺たちの仕事だろう」

「・・・よし、D隊スイッチ準備！」

このバリトンはエギルか。それに、ヒースクリフが号令を出す。D班の面々がスイッチ準備をする横で、俺がさらに声をかけた。

「ヒースクリフ、俺たちにも許可を」

その言葉に、ヒースクリフは片方の眉を少し上げた。だが、ほんの少しの逡巡の後、
「・・・よかろう」

といった。

エギルの隣に立って、俺は視線を前から外さずに言った。

「俺が先行する。援護頼んだ」

「いや、むしろそれはこっちの役目だ。さつきも言ったが、ダメージテイラーにタンクやられちゃ、本職の立場がない」

「分かった。じゃあ俺は後ろで構えとく」

それだけでやり取りを終えると、エギルはふと笑っていった。

「懐かしいな」

「え？」

「第一層のボス戦もこんな感じだっただろう。キリトとお前さんが前線で粘って、あとから俺たちが回復するまで支えた」

「・・・だったな」

確かにそうだった。あれからもう、二年近くが経過している。

「あれから二年か」

早いのか短いのか、よくわからない。俺からしたらあれはもつと前の出来事のようにも思えた。それこそ、言われてもすぐにどうだったか思い出すことのできないほどに。今の階層は63層、残りは37層。二年以上たつて、いまだに攻略率は7割を超えていない。それを考えれば、もう二年、と考えるのが妥当なのだろう。

「まだ二年だ。時間はある」

顔に出ているのか、エギルが言う。・・・それもそうか。というか、そうじゃなければやってられない。

ああいうすばしっこい手合いは、エギルに代表されるタンクは天敵だ。ならば、少しは援護してやるか。

「よし、エギル、突撃準備。援護してやる」

「おう。つて、なんだそりゃ」

こちらをみたエギルが驚きの声を上げる。ま、握りこぶしみたいな状態で、両手の親指と人差し指の間以外のすべての指の間にタガーがあつたらなんだそりゃにもなるか。

「もち、こうするんだ、よー！」

まずは一本。左手の人差し指。バックスローで投げたそれは、吸い込まれるように相手の眉間に当たった。ほんの少しこちらに気が向いたところに、キリトのバーチカルスクエアが命中する。続けて左手の第二、三投は山なり放物線。先ほどのキリトのソードスキルで動きが鈍っているところに、アスナが細剣には珍しい、斬撃系三連撃ソードスキル「トライスラッシュ」で追撃する。動きが止まったところに、先ほどの山なりで放った二本が、ちょうど足に直撃。

「キリト、アスナ！ スイッチ行くぞ！」

「了解！」

手始めに、残った左手の一本をしつかり握り直し、回転しながらそのスピードを生かして放つ「スピニングシュート」でぶん投げる。威力を増幅された一撃が目突き刺さり、完全に相手が怯む。

「エギル！」

「おうよ！」

その後ろを、右手を左右に振ることで、それぞれ左右から弧を描くように強襲させる。投剣スキルの中でも、特にトリツキーで扱いづらいとされる、投剣上位スキル「フアニングシュート」が相手にそれぞれ突き刺さり、その直後にエギルのワールウインドがクリーンヒットした。入れ替わる形で、キリトとアスナも後退する。そのまま近くまで来ると、アスナは眉間にしわを寄せた。

「無茶しすぎ」

「いいだろうが。俺の好きでやってんだ」

「見てるところの身にもなってよ。ねえレインちゃん」

「私はこのくらい想定してるから、びっくりはないけど・・・」

その言葉に、アスナは額に手を当ててため息をついた。

「ねえ、本当に君たち一年以上もコンビ解消してたの・・・?」

「ご存知の通り、な。でもま、誰かさんの策略のおかげで呼吸はばっちりだ」

「ばっちりってレベルじゃないよな、明らかに」

「やかましわまつくろくろすけ」

「まつ・・・」

ツツコミを入れたキリトに対する返しに、女子三人が噴出した。

「確かに、キリト君いつも戦闘装備真っ黒だもんねー」

「いいだろ、黒好きなんだから」

「普段着も黒ばっかだしねー」

「ほう、ばっかといえる程には普段着を見たことがあると」

「本当に息びったりだな!？」

俺とレインのシンクロツツコミに、キリトは思わずといった様子で声が大きくなる。

その肩に、エリーゼの手が置かれた。

「キリト君、この二人の息びったり度合いは突っ込むだけ野暮だよ」

「・・・みたいだな」

完全に普段の雑談と似たり寄ったりの温度になったところに、アスナは前線を見て声を発した。

「そろそろ一本なくなるわね」

「はええな。ま、俺一人でも一本削れたんだから道理か」

と、言っていると、その一分後くらいに、さらに一本削れた。怯ませに怯ませたからか、ボスは壁際近くまで追い込まれていた。ここからさらに厄介になることは、今までの傾向からも分かっている。さてどうなる。

まず初手は前に踏ん張るモーシヨン。それはもう見慣れた、

「バインドボイス来るぞ!」

もつとも、それはタンクの面々も分かっていたようで、ガード体制を取ってバインドボイスを防ぐ。効果範囲は狭いようで、下がっているこちらは影響を受けなかった。さて、どうなると思った矢先に、前足に力を込めたと思うと、ボスは、

「飛んだ!」

「ワイバーンなんだから当然だろうが」

むしろ飛ばないワイバーンとか見てみたいわ。それもはやワイバーンじゃなくて、ただ単に羽根っぽい何かが付いたトカゲだから。ボスはそのまま壁に向かって後退すると、その壁に向かって突進した。その奇怪な行動に全員が首を傾げた直後、ボスはその刃翼のとげを使って壁を蹴っ飛ばしてきた。壁キックとかどこぞの赤い配管工かお前はと内心で突っ込みつつ、身を固くする。そのタゲは前線のタンク。位置エネルギーも利用した攻撃は重さもそれなりのはずなのだが、その辺はさすが歴戦のタンク、完璧に耐えきった。

「ははーん、とげはとげでもスパイクってわけか」

「スパイク?」

俺の納得した言葉に、レインが疑問符を浮かべる。それに対して俺は答えた。

「スパイクってのはとげとかさそういう意味でな。転じて、主に野外スブーツとかで、踏ん張りとかがきくように、靴の底に凸凹のとげが加工してある靴、スパイクシューズを縮

めてスパイクつつーんだよ」

「へえ」

壁をつかむときに、爪だけだと不安定になる。そこで、発達的にあのスパイクが生まれたと考えるのが妥当か。だがそれより、

「これは厄介だぞ」

「そうね」

俺とエリーゼの言葉に、キリトとレインが疑問符を浮かべる。アスナはまさかという顔をした。

「この部屋、高さはかなりあるし、形は見たところ真円形に近い。つまり、」

「理論上、部屋の全域が射程・・・!?」

アスナの言葉に俺は一つ頷く。

「そんな！」

「正確に言えば、部屋の本当に壁際は射程じゃないだろうけどな。尻尾をうまく使えばその問題もクリアだ。最も、そこまで殺しにはかからないとは思いたい」

「あと、そんな凶悪な攻撃なんだから、何かしらの発生条件があると考えていいだろうな」

キリトの言葉は道理だ。こんな攻撃、そうそうポンポン連発されたらたまったもん

じゃない。SAOで、空中の敵に対する有効攻撃手段などほとんどないのだ。いや、正確には一つあるが、おそらく一つしかない。

「技の特性上、連発はできないはずよ。見極める時間はあるわ」

エリーゼの言葉に頷いて、俺たちは観察に入った。

しばらく観察して分かったのは、想定通り連発ができないということくらいだ。だが、いかんせん発動回数が非常に少なく、見極められるほど技の特性が見切れない。となれば、考えられる可能性は、

「発動条件がある、ってことか」

「どんな？」

「それは分からん。囲んでも発動しないし、一定HP以下にしては多い。一番シンプルなのは壁際か」

「一定以上壁際に追い込むと発動するってこと？」

「ああ。考えられるのはそのくらいだ」

タンクの攻撃は、武器が大柄になりやすいのも相まって、ノックバック効果が大きい攻撃が多い。攻撃自体を観察することに集中していたから、その発動条件を見切るには至っていない。が、そのノックバックが積み重なり、壁際に追い込まれたときのみ、飛

行して壁キック。ありうる話ではある。お互いに仕切り直しになるうえ、こちらからしたら直前まで攻撃を見切ることが不可能と来た。厄介極まりないが、攻撃の種が分かれば話は簡単だ。

「前衛タンク陣！おそらくあの壁キックは、壁際に追い込まないと発動しない。できるだけ壁際に追い込むことは避けて！」

「了解！」

相手は紙耐久なのだ、種さえわかれば後はどうにでもなる。現に、もう一本HPバーは消し飛びかけていた。

「次がラストか」

ここからはさらに厄介になる。HPバーが消えた瞬間に、俺は集中をさらに一段上げた。もう見慣れたバインドボイスが終わった瞬間、その姿が文字通り消えた。

「ちっ……！」

迷っている暇はない。即座にスローイングタガールを構えると、あてずっぽうで投げる。それはなんと、虚空で弾かれた。

「はあ!?!」「嘘!?!」「どうなってんだ!?!」

俺だって、一瞬何が起こっているのか分からなかった。直後に俺たちの後ろに近い壁の中腹に砂埃のようなものが立ったことに気付いた。

「入口背にして7時方向!」

半ば悲鳴のように叫ぶ。7時方向、つまりはほとんど背後に近い。とにかく無様でも回避する。その一心で前に身を投げる。受け身もくそもなかったからか、無様に地に伏せる。その直上を何かを通り過ぎた音と感覚がした。前転して前後ひっくり返った目の前には、フロアボスの攻撃を受け流し損ねたのか、体勢を崩したタンクの姿。やはり射程は前線のタンクか。かわるがわるタンク隊が前線を支えていたようだが、そろそろ限界のはず。

「そろそろ出番かねえ」

「そうだね」

腰を上げて準備する。それを見てか、ヒースクリフが号令をかけた。

「F隊、スイッチ準備!」

「OK!」

F隊というのが俺たちだ。さて、お呼びもかかったし行くか。

前線の数人が、一斉に武器で強打した。

「スイッチ!」

「あいさ!」

交代で俺たちが前に出る。横で剛直拳を繰り出すレインに続いて、単発で浮舟を出

す。本来はここから三連撃の緋扇につながるのだが、そこをあえてつなげず強引にバツクステップをして、範囲から逃れる。体制を立て直したボスの双眸がこちらをとらえる。直後、相手はこちらに向かつて咆えた。どうやら相当に恨まれているらしい。

「さて、かかつてこい」

刀を前に突き出し、挑発する。言われなくともといわんばかりに、ボスはこちらに飛び掛かつてきた。その下のわずかな隙間を潜り抜ける。背後に回った直後に尻尾に切りつけられ、触れるなど言わんばかりに振り回してきた。飛び退つて回避すると、相手は垂直に大きく飛び上がった。上を見ると、そこには、ある種予想通り「何もない」。山勘で横に跳ぶと、さっきまで自分がいた位置を尻尾が通り過ぎた。

毒づく暇もない。が、これで種は割れた。

「空中はステルスつてか。全く厄介な真似を」

不可視の一撃。それは、本当に厄介だ。しかも、相手はびよんびよんと飛び回る相手だ。空中にいる時間が多い。つまり、消耗戦は圧倒的に分が悪い。ならば、

「短期決戦を仕掛ける！レイン、エリーゼ！」

「了解！」

俺の号令に二人が答える。たたきつけの反動から完全にその体制を整えたボスは、再びこちらに振り向く。こっちの手はもう決めてある。ここまで戦つてきたからわかっ

だが、こいつはおそらく、ブレスや体の一部を飛ばす、いわゆる飛び道具がない。ならば、選択するソードスキルは一つ。

ボスが突進してくる。が、途中で急停止して横っ飛び。その姿が再び消える。が、踏み切る寸前の動きと、足音で動きは読める。そして、たいていこの横っ飛びの後は、刃翼を使つた飛び掛かり。俺はそこに、ドンピシャのタイミングで、横に構えた刀を当てる。瞬間、まばゆいばかりの光に包まれ、刀が振り下ろされる。25層のボスの片方を屠つた、刀系反撃ソードスキル「鏡花」だ。続けて小太刀を抜きつつ、回転しつつ薙ぐ、片手剣系汎用ソードスキル「ラウンドフォース」。ここで俺の剣技^{スキルコネクト}連携は終わるが、問題ない。

「はああああっ!!」

隣からレインが、轟音を響かせてソードスキルを繰り出す。長い射程距離と高い威力を併せ持つヴォーパル・ストライクがボスに炸裂、それまでの連撃もあつて長い行動^{レイ}遅延を生み出す。その隣からエリーゼが駆け込んできて、こちらは手堅くバーチカルスクエアで追撃。それが途切れたところに俺の硬直が解ける。小太刀をしまい、開いた手で剛直拳を繰り出し、体術複合スキル「牙狼撃」、さらに連撃で、足で回転しながら低い位置を薙ぎ払う体術スキル「転泡」を繰り出す。さすがにここまでダウン性能が高い技の連発には、たまらずボスがダウンする。

「全員フルアタック！終わらせるぞ！」

俺の号令で、硬直で動けない俺を除いて全員が特攻する。ダウン状態でもがくボスに、色とりどりの光が斬撃痕を刻んでいく。長い硬直を抜けた俺も、爪竜連牙斬で追撃する。さらに硬直で抜けると、敵のダウンがちょうど終わるところだった。だが、HPは残り僅か。ちょうどいい、最近見つけたこれで終わりにしてやる。

「腹あくくれよ！」

その一言とともに小太刀を逆手で納刀、刀を同じくらいの位置に持つてくる。そのままの体制でさらに踏み込み、拳をたたきつける。と、刀に光がともった。今繰り出すことのできる中では、掛け値なし最大級の大技、刀系上位スキル一つ、*「天狼滅牙」*の九連撃が突き刺さった。最後の一撃が終わったとき、ボスのHPはきれいに空になっていった。ちょうど硬直が抜けるくらいに、俺は納刀しながら膨大なポリゴンの雪を見上げ、その中にある *「Congratulation!!」* の文字を見上げた。

「終わったか」

「終わったね」

思ったより薄い感慨に浸っていると、横にレインが来ていた。この辺の呼吸は本当に読まれている。

「思いのほかあっけなかったな。最後のあれはちと焦ったが」

「・・・ちよつとなんだね」

「まあな。こんな経歴だからさ、闇討ちするなんざほんとに日常茶飯事だったわけよ。だから、される側の警戒要素とかはもう叩き込んであるわけ。で、それが生きた」

「PKの経験、か」

俺の言葉に、レインの顔が沈む。その反応を見て、俺は内心でため息をついた。

「ま、俺が特殊なだけだ。あんまり気落ちすんな」

「そう、だよな。うん、そうだね」

その声のトーンで分かる。どうやら逆効果だったようだ。

「ま、やりやすかったよ」

「そりゃ、この数か月で呼吸を取り戻したからね」

自信をもって言い切るレインに、俺は一つ微笑みを返した。

「ま、これからもよろしく頼むぜ、相棒」

そういつて、少しだけ手を前に出す。握手とは違うその差し出し方に察したのか、レインも笑って同じように手を出した。特に示し合わせることもなく、二人の手がちやうど中間くらいで鳴った。

その翌日。アインクラッドのメディアは、こぞつて最前線である67層攻略の報を伝えた。そのどれもが、たった一人で戦つてきた劍姫の、新たな相棒の存在を。かつてその前線を支えた、二人の復活を。誰もが認める、今回の攻略の立役者を知らせた。そして、ある一つのメディアが使つた表現が、あまりに的を射ていたことから、彼らはこう呼ばれるようになった。

——鬼神、と。

4 1. 会議

ボス攻略の翌日は、たいてい休養日になることが多い。俺としては、休養日といっても強制ではないのだから、レベリングに励もうか、と思っていたのだが、やや遅寝坊した俺に届いていたメールで、その考えはおじやんになった。というのも、今日の16:00頃、第一層の攻略会議が行われたところに集合してほしい、とのことだった。議題は、俺について。さすがに欠員裁判はまずいだらう、という、半ば義務感から、俺はのそりと、とりあえずの拠点の宿屋を引き払い、適当に外で時間をつぶすことにした。と、フィールドに出ようとしたところで。

「なんでおたくらここにゐるん？」

「一応監視役だし、私たち」

悪びれず答えるエリーゼ。つまり、俺の位置は大体フレンドで監視していて、俺がフィールドに出そうだったからついてきた、ってか。ここまでくると執念すら感じるぞ。

「ま、ちようどいいや」

そういうと、俺は踵を返した。

「レイン、今からお前の家に行っていないか？」

「え、いい、けど・・・、どうして？」

「暇つぶしにその辺で狩りでも、つて思ってたからな。暇つぶせるんなら何でもいいや、つて気分なんだよ」

「・・・そうなんだ」

あれ、俺なんか変なこと言ったかな。レインの声が明らかに今数トーン沈んだんだが。

「ま、とりあえず行こうぜ」

「そうね。ほらレインちゃん」

「ああ、はい」

エリーゼの言葉に、俺ら三人は移動を始めた。

集合時間は夕方で、場所も転移門からそんなに遠くないと来た。このレインの家も、郊外といっても転移門と距離がそんなにあるわけでもない。ということだ、

「レイン、なんかお茶菓子でもないか」

「はいはい、ビスケットとかでいい？」

「おー」

雰囲気に合わせて木目調の家具に木の器が置かれ、そこにビスケットが盛りられる。ちようどいいタイミングでお茶も出てきた。軽く口をつけて、俺はかすかに驚きつつ笑った。

「よく覚えてたな、俺の好み」

「甘めのカフェオレ調、でしょ?」

そう、俺の好みの味だったのだ。俺の言葉は本当に俺の本音だ。これだけ時間が経っているのだ、忘れていても全く不思議ではない。というか、俺としては忘れていたものだと思っていた。

「何となく覚えてた」

「記憶力いいのな」

「君にも覚えあるでしょ、なんでか分からないけど覚えてた、みたいなこと」

「結構あるな」

「そういうことよ」

ま、そういうことにはしておくか。とにかく、俺たちは完全にくつろいで完全にコーヒープレイクをしている。もともと暇つぶしの延長だし、時間はかなりある。それに、ここ最近の俺らは攻略がほとんどだった。正直、ここらでプレイクも必要だろうとは思っていた。

「今日の話題は、ま、間違いなく俺だろうな」

「それ以外に何かがあるの、このタイミングで」

「だよなあ」

なんか話題ないかなー、と思いつつ口にした俺の言葉は、エリーゼのまつとうな突っ込みによつてつぶされた。ま、道理だよな。と、昨日の夜のメディアを思い出した。

「そういえば、新聞見たか？」

「見たわ。毎度毎度、一つ階層クリアしただけでよくもまあそこまで書けるものだね」
「まあそういういなさんな。奴さんらも、この閉塞した環境下でネタ探しにはリアル以上に血眼なんだろうさ。」

それにしても、鬼神つて。仮にも片方美少女に対して言う呼称じゃねえだろ」

「そうかなあ。ぴつたりじゃない？片方赤いし」

「おいおい、その理論だと俺は最後、大量破壊兵器でも使わなきゃいけないことになるぞ。それもこいつに対して」

「・・・何の話？」

「昔のゲームの話だ」

完全に置いてけぼりを食らったレインに対し、俺は短く答えた。実際これは、もう20年近く前のゲームのネタだ。話せば長い。そう、古い話だ。さてどう要約しようか。

「戦闘機のゲームでな。主人公とその相棒がいて、その主人公の通り名みたいなものが、円卓の鬼神。で、その相棒が、片方の主翼を赤く塗ったイーグル、って言うて分からね。ま、戦闘機に乗ってるわけだ」

「イーグル、って、羽根が動くやつ？」

「そりやたぶんトムキャットだな。あれこれ用途は違うけど、ま、その辺は省略するぞ。軽く2、30年くらいは第一線で飛んでた名機だよ。その片翼を赤く塗ってた、って話だつて、その相棒が片翼で基地への帰還したに成功したつて設定によるもんだしな」

「え、片翼で基地に帰還したつてどういうこと？」

「そのまんま。実際にもあるんだがな、接触事故で片方の主翼の大半が千切れ飛んで、それでも戻ってきた、って話だ」

「可能なそんなこと？」

「どうかあれ、実話をもとにしてたんだ」

「まあな。ま、イーグルが特殊なんだが。詳細は俺もいまいち理解してないから省略するけど、このF-15イーグルって戦闘機は、理論上は主翼の半分を失つても水平飛行が可能なんだと」

「でもそれは理論上だし、片方の翼しかないんじやコントロールは難しいんじやない？」
「その通り。でもまあそこは世界最高峰の一角を長いこと占めていた名機だ。その辺の

制御システムも並みじゃない。それに、イーグルに乗れることが一種の称号で、乗り手はイーグルドライバーって呼ばれる。つまるところ、腕利き。一級品の機体と、超一流の乗り手だからこそできる、常識はずれの技だ」

嘘のような話だが、本当に実話を基にした設定なのだ。画像検索かけると片方の主翼が文字通り根元から千切れているのだから本当に驚きだ。

「で、この呼び方についてなんかコメントあるかね、鬼神殿」

「え？まあ、あんまりかわいくないなあとは思っけど。そんなこと言ったら、アスナさんだってかかって鬼って呼ばれてたし」

「まあ、あの時は鬼だったな」

「ひどいこと言うね。アスナに言いつけるよ？」

「それは勘弁してくれ。マジでテールナイフが飛んできかねない」

見た目は本当に可憐なのだが、怒らせると本当に怖い。実力、ルックスもさることながら、その温厚にして苛烈な性格が攻略組を束ねる一助になっているのは間違いない。あとから二人に聞いた話だと、素のアスナはほんわかお姉ちゃんって感じらしい。本当に怒らせなければいいだけだ。ま、その場合矛先が向くのは俺じゃなさそうだが。「そういえば、新聞にも載ってたけど。本当に一年もコンビ解消してたの？ってくらい息びったりだよね」

「ま、ここしばらく前衛でコンビ組んでたしな」

「それだけで呼吸って戻るもんなの？」

「まあ、私たちは長かったからね。過去の経験から大体こうだろうな、って」

「そんな感じだな」

「・・・もうやだこの子たち」

呆れたようにエリーゼが額に手を当てる。つつても、

「事実だからなあ・・・」

「ねえ・・・」

俺たちの言葉に、もう一度深くため息をついた。ため息をつかれるのも何となくわからなくはないが、本当にそんな感じなのだからどうしようもない。

「アスナとキリトみたいに長い付き合いならともかく、こんなに長いことコンビ解消し
といて、ちょっと組んだだけで呼吸が戻るって・・・そういうもんなの？」

「体が覚えてる、って感じだな。たぶんこう動くはずだ、っていうのがお互い分かる感
じ」

「そうだねー。あと、ロータス君はすぐ突っ込んでいくから、ワンチャンスはたいていお
互いがフオローに回ってラッシュになっただけが多いかな」

「多いな、そういうこと。レインは比較的堅実なんだけど、たまーに突っ込んでいくから

な。ま、どちらにせよ、HPの少ない中ボス程度だったら、そのラッシュでジ・エンド、っていうのも少くないぜ？」

「もう少し守るってことも考えなよ」

「攻撃は最大の防御っていうじゃん？」

サムズアップしながら言う俺に対し、エリーゼはもはやあきらめにも似た表情を見せた。

「そういえば、エリーゼは俺の監視が終わったらどうするんだ？」

「んー、そのまま攻略組に残ってもいいけど、正直それは私の性に合わないんだよね。なんていうか、窮屈っていうのかな。ボス攻略だけ参加するっていうのも、それはそれでどうかと思うし。だから、多分今までの傭兵稼業に戻ると思う」

「・・・そうか」

「でも、もうちゃんと依頼は選ぶ。あの時みたいな依頼は受けない。いくら取り繕っても、私が犯罪の片棒を担いだことは変わらないけど、最低限、これから先、私の依頼で苦しむ人は生まないようにしたい」

「そうか」

「大変そうだね」

レインの気遣うような一言に、エリーゼはあっけらかんと笑った。

「確かに大変だけど。女傭兵エリーゼ、っていう噂自体はアルゴさん経由で広めても良かったからね。実力だって、今回の一件で攻略組にも追い付けるってはつきりと分かったし。追いつがるのがいっぱいいいところはあるけど」

「最初は大体そういうもんだ。クラインたちだっけそうだった。俺たちみたいに最古参の攻略組ばかりってわけにはいかないからな」

「ロータスは？」

「攻略組に戻る。気楽にソロやりながら、時々レインとパーティ組みながらやっていくさ」

「・・・オレンジも、倒していくんだよね？」

少し暗めなトーンで聞いたレインに、俺はふと少しだけ微笑んだ。

「コソ泥程度なら精々が軍に突き出すか監獄送りで終了だ。レッドの生き残りなら、殺す」

大を殺して小を生かす。どちらかしか選択できないのなら、俺はレッドを殺して、そいつが殺すだろう何人かを救う。それが、俺の選択だ。

「やっぱり、どうあつても君は、自分の手を血で汚す道を選ぶんだね」

「選ぶんじゃないよ。もう選んだんだよ」

どこか絶望にも似た諦観の言葉に、俺ははつきりと答えた。それに、レインは手を俺

の手に重ねた。

「なら、今度は勝手にいかないですよ？」

「・・・ああ」

ここまで思ってくれている相手を置いていくほど、俺も人でなしになったつもりは無い。さて、雑談つっても俺の種はなくなつちまったな。ま、もともと俺の雑談の種なんて底が知れてるんだが。

「あー、やっぱり俺、こういう雑談にや向いてねーな」

「どうしたの急に」

「もうすでに話す種がなくなつたんだよ。俺からの話題がもうない」

俺の言葉に、二人はどこか納得したように笑った。

「まあ、それは・・・」

「ロータス君だし、ねえ」

その二人の言葉に、俺はため息をついて顔を掻いた。思い当たる節がありすぎる。もう人との距離の調整方法などというものを完全といてもいいほど忘れ、必要以上の接触をしないビジネスライクだけな関係ばかり積み重ねてきたせいで、俺はこの手の雑談の種になりそうなイベントにはとんと無縁になっていた。加えて、この世界に来てからは戦闘三昧。ひたすらに迷宮やフィールドで狩りを繰り返していた。この手の雑談の

種になりそうなのは、戦闘でのことくらいのものだ。

「……ま、否定する要素がないわな」

「本当だよ。私たちが護衛についてから休息と補給以外で戦闘関連のこと、本当に何一つやってないんだもん」

「そうそう。観光すら一切しないってどういうことよ」

「いや、観光も少しはするぞ」

「て言っても、補給の時に街並みを眺めるくらいでしょ。そもそも、そんなに補給しなくて、食料はどうするの?」

「簡単な料理だったら出先でできるしな。空腹紛らす程度にはなるだろ。野戦食なんてそんなもんだ。味なんざ二の次」

「いや、そうかもしれないけどさあ……」

「でもその食料は……モンスタードロップ?」

「おう。おかげでジビエがなかなかうまいということを発見できた」

「ジビエ……?」

「リアルで言えば、家畜とかじゃなくて狩猟した生き物の肉を利用した料理。鹿とか猪とか」

「君の腕なら、文字通り飛ぶ鳥を落とすことも可能か」

「その気になりや余裕」

「鍋とかどうするの？」

「適当にその辺でちぎっておいた適当な山菜を適当につぶすなりしてアレンジして鍋に一緒にドーン」

そういうと、二人がそろってジト目になった。うん、俺も空腹を紛らせれば大丈夫って考えてたからなあ。

「ま、雑なことは百も承知なんだがな」

「そもそも、料理スキル取ってないんでしょ？煮えるの？」

「あれ、知らねえのか？料理過程ってオプションをいじりまくればほとんど手動にできるんだぞ」

「・・・え、それほんと!？」

身を乗り出して食いついてきたエリーゼに対し、少々のけぞりながら俺は答えた。

「そういう日常系オプションタブの羅列を見ていくと、料理に関するオプションがある。そいつをあれこれいじったり、隠してあるタブをやったりするとできる。最も、リアルに近い仕様になってきているみたいで、あれこれタイミングがシビアだから、たいていデフォに設定するらしいけどな。何より楽だし」

俺の回答に、納得したようにエリーゼは身を引いた。

「つまり、リアルで料理ができる人なら、かなり楽なこと?」

「ま、そうなるな。料理スキルに依存するのは、アルゴかゲイザーあたりに聞いてみると分かるが。加えて、この世界はそろいもそろって妙な味や見た目が多いからなあ。研究は必要だと思うぞ」

正直なところ、俺はたぶん料理スキルの熟練度に応じてその辺のタイミングやらなんやらがシビアになるのだろうと考えている。あれだ、某モンスターハンターゲームで高級肉焼きセットと肉焼きセットでこんがり肉ができるタイミングが違うのと同じだ。つまり、料理スキルを取っていない＝強制ゼロの俺はタイミングが最高にシビアというわけだ。

「ちよつと待って、タイミングがシビアなら、どうして食べられるレベルになるの?」
 「知ってるか? 料理を失敗するやつは三つに分けられる。レシピを見ないやつ、深く考えずにアレンジしだすやつ、味見をしないやつ。この三つだ」

指を三本立てながら、俺が言う。これでAKを片腕で抱えていれば明らかにあいつ片あ羽。

「つまるところ、細かく味見をしながら、大体どうすればどういう味になるかって考えながらやってた。最初は結構苦戦したんだが、パターン化できればなかなか野戦食の研究つてのも案外面白い」

「気持ちに分からなくもないのがなあ・・・」

実際、これ案外面白いんだ。ラフコフはそこらのフィールドにいるプレイヤーを狩ることが多い。その性格上、野戦、野宿がかなり多い。俺は楽しんでPKする口ではなかったから、何かしら楽しい要素を見つけて、それを目的として楽しそうな演技をするのが案外自然でよさそうというというのが経験則で分かったのだ。以降、実用性があることもあり、俺のささやかな趣味になっている。

「てことは、私たちと一緒にフィールドに出た時に食べていたものって」

「ほとんど俺の手作り。てきとーに宿屋の厨房を借りた」

「それってできるの・・・？」

「それなりに大きそうな所なら、NPCに交渉すれば案外あっさり貸してくれるぞ。最も、場所によるが。あとは、自作のレシピ使ってどうにでもする」

「もしかして、案外努力家？」

「たまたまそれにはまったってだけだ。この世界だと、戦闘か趣味くらいしかやる事が無いからな」

「それは君みたいなのッチだけだと思うけど」

「やかましわ」

途中で話題が尽きたとは思えないほど、案外次から次へと話題が出てきて、当初の懸

念などなかったかのように時間はすぐ過ぎていった。

俺たちは時間より10分程度早めについていた。だが、その時点でかなりの人数が集まっていた。フルレイドでもう45人を超えることは絶対になくなった。最近では、40人を超えないときもある。今集まっているのは、大体30人くらいと言ったところだろうか。この辺は、クラインはじめとする社会人連中の時間厳守がかなり浸透しているだろう。ま、俺みたいに学生でもしつかり時間を守るやつも少なくないが。

議題が俺についてなので、俺が後ろに座つてはいけなйдらう。という、半ば義務感とともに、俺はすり鉢状になっている広場の真ん中近い位置に陣取つた。

攻略組が集まるということで、必然的に議長は現在攻略組の長を務めているヒースクリフになる。これは暗黙の了解だった。その彼は5分前に登場すると、全体を見渡した。そこにはすでに全員がそろつていた。

「時間にはまだ少し早いが、揃っているようだから始めよう。

まずは、フロアボス攻略した直後に集まってもらったことを謝罪する。同時に、諸君の貴重な時間を、必要以上に使用しないことを剣に誓おう。

さて、では早速。議題は一つだけだ。私は、ロータス君の監視を解いてもいいと考えている。理由は、監視をつけてからの行動と、前回の攻略での活躍によるものだ。反対

意見があれば聞かせてほしい。そのうえで、多数決をもって決を採ろう」

その言葉に、真つ先に手を挙げたのはリンドだ。手での指名を受け、彼がその場で起立する。

「俺が問題と考える点は二つ。一つは、時期尚早だ、ということだ。これに関しては、彼ほどの戦力を、監視という形で縛り付けるメリツトのほうが少ない。それはよく理解できる。それを考えれば、あくまで俺の私見であるという前提の上で言わせてもらえば、特に問題ないと思う。全体の是非は、まあ、最後の多数決で分かるだろ。」

もう一つ。これはロータスにも聞きたい。それは、こいつの目的が分からないということだ。ここまで、PKのそぶりが全くなさそうというのは、Cで送られた監視役のレポートにも書いてあった。それに、あの攻略戦での動きも、全力で戦っているように見えた。一時期はPKギルドに所属していたような奴が、今更わざわざ殊勝に攻略に全力で取り組む？裏があると考えるのが自然だ。そのうえで聞く。ロータス、お前、何が目的だ」

ま、リンドならまつとうだよなあ。ましてや、こいつは俺がモルテをPKするとこに居合わせるわけだし。ま、ご指名とあれば答えないわけにもいくまい。挙手をしてヒースクリフの指名を受けると、俺は立ち上がった。

「俺の目的はただ一つ。このクソゲーの犠牲者を、俺が減らせる範囲で減らすこと。攻

略組に入ったのは、ただ単にここから早く抜け出したいから。ラフコフに入ったのは、ラフコフのメンバーが殺す数十人と、俺が殺すラフコフメンバー十数人ならどっちが少ないか、つて話の結果だ。それと、リンドから聞いてるかもしれないが、この際はつきりさせとく。モルテを殺したのは俺だ」

突然のカミングアウトに、周囲がざわめいた。これは二人にも、直接俺の口からは言っていない。だが、俺の口ぶりからブラフなどではないことを瞬間的に悟ったのだろう、ほかと同様にぎよつとしたような顔を見せた。

「もともとモルテは抹殺対象だった。監獄にぶち込む、やむを得ないのなら殺す。そう思っではいた。ちようど50層を攻略し終えたくらいに狩りに出た時、たまたまりンドの集団とかち合った。50層攻略直後つてことで、戦力拡充を計画していたんだろが、疲弊していかもなおかつ攻略組じやないような集団だったにもかかわらず、俺たちは若干苦戦してな。で、たまたま間違えたふりをして、その場にいたラフコフメンバーの連れ全員を消した、つてわけだ。もちろん、モルテも含めてな」

「……マジかよ、リーダー」

ハフナーが信じられないように問いかける。それに対する回答は、
「まさかこんなところでカミングアウトするとは思っちゃいなかったがな」

意外感丸出しの肯定だった。それに、また周囲がざわついた。

「確かお前さんも含めて5人くらいのパーティーだったと記憶しているが？」

「その通りだよこの野郎。何なら一人一人名前挙げていこうか？」

「よく覚えてんな、んなの」

「印象的過ぎて逆に忘れらんねえんだよ」

俺の言葉に、半分以上呆れたようにリンドは吐き捨てた。ま、それもそつか。敵だと思つたら、その敵が敵の仲間を躊躇なく斬り殺して、挙句の果てに口止めだもんなあ。印象に残らないほうがおかしいか。

「ま、俺からの回答は以上だ。他に何か質問があれば答えるが？」

その言葉に、手を挙げたものは一人。チョコレート肌の肌を持つ巨漢、第一層から攻略組でタンクを張り続ける両手斧使い、エギルだ。

「なら、もし攻略組に戻らなかつたらどうするつもりだったんだ？」

「知れたこと。オレンジ狩りだ。もつと言つてしまえば、レッド狩りだな」

「それは、レッドを殺す、つてことでもいいのか？」

「ああ。俺は投剣スキルでいえば一日の長があると自負しているからな。それに、麻痺スキルに長けたやつ——ジョニーブラックのことだが——を間近で見ってきたんだ。麻痺つて動けないやつを殺すくらいは朝飯前なんだよ」

「加えて、あの白兵戦能力か……」

「ま、そういうことだ」

誰かのつぶやきに、俺が同意する。実際、この中でも俺に白兵戦で敵うやつはそんなにいないだろう。

「それがお前さんの選んだ道か」

「そうだ。曲げる気はない」

俺の回答に、エギルは着席した。議場を見渡したヒースクリフは、拳手がないことを確認して、自ら手を挙げた。

「私からも質問させてくれ。それは、これからも曲げるつもりは無いのかね？」
「ない」

即答だった。これは金輪際曲げるつもりは無い。監視が外れても、俺はラフコフの残党や、レッドを狩っていく。これが俺の流儀だ。

「・・・よかろう。では、ほかに質問、意見等はあるかね？」

再び全体を見渡す。だが、拳手はなかった。それを見て、ヒースクリフは再び口を開いた。

「よし、では決を探ろう。賛成か反対か、拳手をしてほしい。彼の監視を解くことに賛成の人は」

それに対する反応は、ほとんどの拳手。それを見て、ヒースクリフは決断を下した。

「反対の決を採る必要はなさそうだね。では、現時点で彼の監視を解く。時間を取らせて済まなかった。では、解散」

その言葉に、全体が散会した。それを受けて、二人がこちらに話しかける。

「これで、私たちもある程度自由、ってこと？」

「そうなるな。ま、エリーゼとしても、傭兵業の関連で自由が奪われるのは正直よろしくないだろう」

「そうだね。でもま、この三人で組めないのは、ちょっと寂しい気もするけど。ほら、私基本的にソロだから」

「ま、そっちにもそっちの事情はあるだろ。仕方ない」

「そういつてもらえるとありがたいけどね。また困ったことがあつたら言つてよ。もしメールが届いても反応なかったら、第一層の教会孤児院に行つてみて。たぶんそこで子供の相手してるから」

そういつて手をひらひらさせて去つて行つた。攻略組だと、こういう別れはよくある。死と隣り合わせというのはそういうことだ。ここにいるのは、それこそ生粋のゲーマーか、命と隣り合わせの状況を楽しめる大馬鹿者、それか戦う理由というやつをはつきりと見つけたやつくらいだ。

とにかくこうして、俺は晴れて（？）自由になった。去り際、彼女の手がほんの少し

だけさみしそうに見えていたのは、気のせいであつてほしいとも、そうでなくてほしいとも思っている。

42. 一時の日常

それから一週間くらい後。俺は下層のフィールドに出ていた。というのも、ここでPKやオレンジ行為が横行しているという情報を聞いたからだ。

もともと、この辺はそういう噂は絶えない。下層ということも相まって、人も多いがそれと同時にほとんどレベリングをしていない人種も多い。アインクラッドは上に行けば行くほど面積が狭くなるような形をしているからだ。そのため、ここはその手のプレイヤーからすればいい狩場なのだ。俺にも心当たりがあるが、俺のチームは「そんなの全く手ごたえないからつまらん」という理由で全くしなかった。

想定されるポイントで、俺は隠密ボーナスの高いフーデッドローブを装備した。適当な草むらに身を隠し、自分の姿をほとんど隠す。すると、町中から何人かプレイヤーが出てきた。それに呼応するように、何人かプレイヤーの気配を感じ取った。むろん、ここはVRなのだから、そういう第六感的なものが働くことは少ない。俺の言う「気配」とは、人が動いたことよって生ずる光の動きや衣擦れの音などの、外部の情報を総称したようなものだ。それを気配と呼んでいいのかというのは果たして分からないが、何となく大体この辺だろう、という推測であることが多い。その、何となく、が正解であ

ることが多かったため、俺もその気配を信用している。そこから大体のあたりをつけ、索敵スキルと自身の注意から場所を特定する。それが俺の対奇襲スタイルだ。それに、俺は奇襲を仕掛ける側なので、大体俺からしたら奇襲のポイントは絞れるから、警戒もしやすい。で、今回の場合、奇襲のポイントとしてはベタもベタ。俺からしたら、一歩間違つたら奇襲にすらならないレベルだ。と、考えていると、俺の想像通り、敵がおそらくターゲットの背後から出てきた。

こういう、ハイディングしている状況での最大の武器が今の俺にはあった。そう、射撃スキルである。ま、距離20mくらいなら俺は投剣でも9割がた命中させ撃くことができるのだが、射撃という専門スキルがあるのなら、それを使うほうがいいだろう。それに、そういうことをしているときは、第三者の介入というのは警戒するものだ。それを怠るのはただの馬鹿でしかない。この辺は実体験で分かる。

弓に矢を静かにつがえる。すると、視界に曲線と、着弾点にレティクルのようなものが表示される。さすがに完全な初心者に対して弓は全く当たらない。というか、俺も当てる自信はない。だからこそその命中アシストだろう。常に微少でも動いており、その一瞬を狙う必要がある。このレティクルのブレは、姿勢の制御などで抑制が可能だというのは、ここまでの試射で確かめられていた。その辺の癖はあるが、使いこなせば遠距離から攻撃し続けられる。

射撃準備をしていると、相手が姿を現した。カーソルはオレンジで、人数は、3、か。ま、今回は無理にヘッドショットする必要もない。軽くビビらせるレベルでいい。気楽にその辺を狙って放つ。今回は鎗矢を使ったので、その音の効果もあったのだろう。一瞬動きが固まったところを逃さず、俺は装備を変更して左手で闇牙を抜き放ちつつ、前に躍り出た。

「狩りの出足に悪いな」

「ロータス、さん・・・!?」

「俺をさん付け、か。決まりだな」

おれをさん付けで呼ぶ、そのうえでこんな手段をとる時点でほとんど確定だ。顔に見覚えはあるが、攻略組で見た記憶はない。——決まりだ。こいつはラフコフの元メンバーだ。

「さて、じゃ、おっぱじめるか」

そのまま俺はPK集団に斬りかかった。相手は一瞬面食らうが、すぐに気を取り直して切り返してくる。だが、それは俺からしたら大甘もいとこの一発だ。手首で相手の上段を受け流し、背中に一撃入れる。左から薙ぎ払おうとした一撃は、体術で手首を押さえて封じてから、蹴りでダウン。追撃は不要と判断し、背後からの突進系の上段、おそらくアバンラシユは勢いそのまま一本背負い。たたきつけられることで先ほどダウン

ンしていた相手もろもろ沈める。背中越しにターゲットになつていたプレイヤーに、先ほど背後に一撃入れたやつが攻撃しに行つたのを確認する。回転しながらナイフを投げ、その足を止める。走つて行つて勢いそのままライダーキックでその相手は撃沈。

「戦闘続行なら相手するけど、そうじゃないんなら監獄送りだ。どっちがいい？」

「そんなの、選ぶまでも——」

「待て」

その瞬間に、俺をさん付けで呼んだ奴が、武器を捨てて空になつたもろ手を挙げた。

「ちよ、リーダー……!」

「あらら、ずいぶんと潔いことで」

「お前ら、抵抗は無駄だ。この人なら、ここにいる全員を殺すのなんざ朝飯前だ」

「そんなの、やってみなくちゃ……」

「やんなくても分かるんだよ。悔しいけど、強者多しといわれる世界でも、PVPでの白兵戦闘能力で、この人とタメ張れるのはかつてのボスを含めても、片手で数えられるくらいだろうよ。名高いKOB副団長様でも、苦戦するつてレベルじゃないらしいしな。俺も、死ぬのは怖い」

その言葉に、ほかの二人も降伏した。その反応を少し意外に思いつつ、ポーチを探る。念のため持つてきていたあれがあつたはずなんだが。

「賢明な判断だ。お前さん、まだそんなに殺してないな？」

「・・・なんで、分かったんですか」

「今の言葉だ。ラフコフで狂っていくやつらつてのは、たいていが殺した快樂に取りつかれた哀れな奴ばかりだ。お前は、多分最初に殺してから、ずっとうなされてた口だろう？」

俺の言葉に、目の前のプレイヤーは目を開いた。少しだけ呼吸を置いて、彼が言う。

「よく、分かりますね」

「お前の目の前の男がそうだからだよ。・・・こんなことに懲りたら、二度とするなよ。コリドー、オープン」

最後の言葉で、回廊結晶の扉が開いた。

「行先は監獄だ。さ、放り込まれなくてはさつきと行った行った」

俺の言葉に、三人は意外にも素直に回廊に入った。案外これ高い出費だからあんまり使いたくないんだけど、ま、そもそも使用機会が少ないんだからいつか。三人が消えた後、そこには元はターゲットだった子がいた。今気づいたがこの子、かなり幼いな。若いではなく、幼いという言葉が真っ先に出てくるくらいには幼い。

「さて、と。大丈夫か？」

「うん。お兄さん、強いんだね」

「まあ、な。でも、どうして君みたいな子がフィールドに？」

「今日はお兄たちに代わって狩りに行こうって思つて。お兄たちを除けば、おれが一番強いから」

「そつか。でも、一番強いかもしれないが、一人で行つちやだめだ。さつきみたいな怖い人、もつとたくさんいるからな。たくさんなら戦えるかもしれないけど、一人ならどうしようもないだろう？」

「うん、気を付ける……」

「でもま、気概は買うよ」

「キガイ？」

「気持ち、つてことだよ。この場合だと気合と言ひ換えてもいい。とにかく、手伝うよ。どんな奴を狩りたいんだ？」

「え、いいの!？」

子供らしくばあつと顔を輝かせた少年に、俺は笑いかけた。

「おう、もちろん。お兄さん、めっちゃ強いからな」

「ありがと！えつと、この先の森にいる、青いうろこのやつ！細くてすばしっこいけど、慣れれば狩りやすいから！」

「あー、あいつか」

少年も言っていたが、青い体躯とすばしっこさが特徴の小型モンスターだ。少年の言う通り、動きを見極められれば狩りやすく、体力も多くないので、初心者向けのモンスターとして有名だ。その肉は鶏肉のような感じでなかなかおいしいらしい。

「じゃ、行くか。えっと、」

「あ、おれはシヨウ！」

「んじゃシヨウ、行くか」

「うん！」

そうして、俺は二人で歩き出した。

さて、そうして森の中に入ったはいいものの、今回は厄介なことが起こっていた。

「ねえお兄さん、なんかいつもと違うやつがいるよ？」

「あの赤いトサカのやつか」

「トサカ？」

「頭のとっぺんについてるやつだ」

「あ、それ！」

それを聞いて、俺は少し顔をしかめた。これはまずいな。武器はまだ闇牙のままだが、このままだと少しきついかもしれない。

「さて、んじゃま、ちよつとばかし本気を出すかな」

「え、もつと強くなるの!？」

「おう。これでももつと上の層にいることのほうが多いからな。そういう時に使う装備を、ちよつとな」

敵密にはPK装備からガチ装備に変えるだけだ。だが、そんなことは些細なこと。パワーアップするのは変わりないのだから、俺からしたら些末な問題だ。そして、俺の本来の二刀流装備になると、俺はシヨウに声をかけた。

「さて、俺が先に飛び出して、あの赤いトサカのやつを狩る。その周りの、お前で言う、いつものやつ、かな。そいつらの相手を頼んでいいか？」

「どうして?」

「あいつがこの群れの頭かしらだからだ」

「カシラ?」

「リーダー、つてこと。大人になればわかるけど、こういう集団つていうのは、リーダーを先に倒したほうが倒しやすんだ」

「そうなんだ。だから、最初にリーダーを倒すんだね?」

「そ。理解が速くて助かる。でも、リーダーは強いし、その間に取り巻きが襲ってくる。だから、その取り巻きの相手をしてほしい。お前さんでも、取り巻きであるいつものやつなら狩れるだろ?」

「分かった！」

「よし、なら俺が合図したら飛び出してこい。行くぞ」

その一言とともに、俺が飛び出す。それに気づいて、甲高い声で鳴く。その声に群れ全体の注意がこちらに来る。あえて最初のヘイト集中を俺にかまし、ボスの首元にアツパーをかます。下顎を強かにたたいたからか、少し相手の動きが鈍る。背後からくる飛び掛かりは、ほんの少しだけ軸をずらして裏拳で迎撃する。そのままオニビカリを抜きつつ、シヨウの隠れ場とは対岸の方向を狙って一体を攻撃しつつ、囲みを抜ける。瞬間、完全な攻撃指令の鳴き声が響いた。

「今だー！」

俺の声とともに、幼さの残る気合と奇襲がさく裂する。突然のことに陣形が崩れた瞬間を狙って、俺は鬼怨斬首刀を抜き放ち、完全な攻撃態勢で向かっていった。

戦闘は完璧に省略する。というのも、9割がた俺の無双だったからだ。ま、俺からしたらこんな下層の中ボス以下レベルなど雑魚に等しい。

「すっげ、一瞬で……」

「だから言っただろ？俺はめっちゃ強いって」

逆手で鯉口を鳴らし、武器をしまう。もともと俺はあのオレンジ改めレッド集団を狩ればよかったので、俺からしたらこれは——こういっては何だが————いらない素

材だ。なので、ドロップ素材をすべてリザルトでいじってシヨウに押し付ける。

「え、いいの?」

「俺の目的は、さつき君が街に出てくるときにいた、あのプレイヤーだったからな。俺はあくまでお手伝いだ」

「そっか、ありがと!」

「ところで、お前さん、どこを拠点としてるんだ?」

「キョテン?」

「あー、えつと、ここでの家はどこだ、ってことだ」

「はじまりの街の教会だよ。おれと同じくらいの子がたくさんいるんだ」

「同じくらい、って、年がか?」

俺の素朴な疑問に、シヨウは頷いた。これ、俺の記憶が確かなら14歳以上のレートだったはずなんだが。ま、今更か。

「そっか。なら、そこまで送ってってやるよ。転移結晶は?」

「なにそれ?」

そもそも転移結晶を知らないらしい。ま、下層だとドロップしづらい上に、上層だと販売価格も結構なものだからなあ。恒常的に中層以上で狩りができるまではそうおいそれとは手が出んか。

「なら、しつかり俺の手を握ってろ」

そういつて俺は手を差し出す。転移門もそうだが、この手の転移系はしつかり手を握っていると一回で済む。これは結構使い古された情報だ。だからこそ、この少年も知っていたのだろう、すぐに意図を察した。俺はポーチの中から転移結晶を出すと、一緒ににはじまりの街に転移した。

彼らが拠点としていたのは、俺の想像通り、といつては何だが、例の孤児院だった。エリーゼが入り浸っている孤児院だ。その建物が見えると、シヨウはこつちを振り返った。

「ねえねえお兄さん、お兄さんも寄ってつてくれよ。いろいろと話聞かせて！」

「んー、それはやまやまなんだが、こつちにもやることがあつてな。ま、早く帰つて安心させたれ」

「えー、詰まんない」

「わりいな。また今度、絶対行くから」

それだけ言うと、俺はシヨウに背を向けた。俺はまだやることがある。そのために、俺は転移門に向かった。

4 3. 変化

ゲームが開始してから、はや二年近くが経過したころ。最前線は第74層まで迫っていた。残りは、約四分の一。だが、二年かけてようやく四分の三。長すぎると言わざるを得ないだろう。もつとも、こんなデスゲームじゃなければ、十二分のポリウム、ほとんど発生しないバグ、ゲーム内での自由度の高さ、VRならではの臨場感、高い完成度、どれをとっても最高傑作だろう。現に、最初こそ混乱も見られたが、半年もするころには、もう大抵のプレイヤーがこの環境に順応していた。

「つつても、先は長えなあ．．．」

軽いため息をつきつつ、木の上で一休みする。

俺は森のフィールドに潜っていた。クエストボスを倒すためだ。クエスト受注の際、NPCは倒してくれば守護獣に関する情報を渡す、みたいなことを言っていたから、これがある種キークエなのだろう。背中には、ようやく最前線での実践に堪えうる熟練度まで上がってきた射撃スキルの武器、弓を背負っている。で、下には今回の目標である、梟のようなモンスター。毒やら眠りやら麻痺やら、極めつけにはスタンや、動きに大きな支障の出る、混乱というデバフやら、これでもかというほどの状態異常オンパ

リードな嫌がらせ中ボスだ。最も、鱗粉やら羽毛やらを使うという設定の問題か、そのほとんどが距離を取っていればそんなに驚異的なものではないこと、鳥のような見た目の割に飛ぶ時間が短いことを見切った俺は、森というフィールド特性を生かして、木々を文字通り跳びまわることによって相手をかく乱しつつ回避、またこちらの射撃スキルでちまちまとHPを削っていくことに成功していた。だがそこはさすが中ボスというべきか、なかなか倒れてはくれなかった。

「さっさと死んじやくれませんか．．．ねー」

弓をさらに引く。機動力重視でほとんど引き絞らず、ただひたすら、わずかなダメージを蓄積させていく。塵も積もればなんとやら、だ。だが、そんな戦いをかれこれ、30分くらいか？している、さすがに飽きる。と、相手が翼の付け根を弓代わりにして撃ってきた。何が面倒くさいって、これが結構正確に撃ってくる上に予備モーションが短い。見切ってから回避までをかなりの速度でやらないと脳天に穴が開くということだ。ほとんど常に集中していないと全回避など不可能。もつとも、俺はこうして三次元戦闘を行っているから、回避率は必然的に高くなる。当たり前ではあるが、平面を動き回る敵と空間を動き回る敵、どっちに攻撃が当てやすいか、という話である。

ソロドとは言っても、これだけ長いこと戦闘していれば必然的にHPは削れるわけで、すでにHPバーは一本しか残っていない。その一本も、目算で5、6割くらいまで

には削っていた。さて、んじやまそろそろファイナーレと行きますか。

相変わらずびよんびよんと飛びつつ、相手のできるだけ直上を取り続ける。タイミン
グを見計らって、俺は中ボスに向かって跳んだ。

たいていのモンスターでそうなのだが、相手の直上というのは互いにとつて死角である
ことが多い。体の構造を考えれば当然の話なのだが、そもそも飛行方法がないのに
どうやったら直上を取るか、って話なんだが。それに、互いにとつての死角、つまりこつ
ちからも死角なわけだ。回避以上の意味は、普通はない。が、俺の武器は弓。つまると
ころ、

「ちよいとしつつれい、つとー！」

ボスを踏み台にしつつ、蹴つ飛ばしながらくるりと身をひるがえし、引き絞つてあつ
た矢を放つ。

つまるところ、飛び道具である以上、相手の死角Ⅱこつちの死角とは限らない。近接
も使えるが、わざわざリスクを冒す理由はあまりない。うまく立ち回つてさえしまえ
ば、こうして突破口を開くことはできるのだ。

ちようどうなじのあたりの弱点に当たつたらしく、相手が怯んで、HPが減った。残
りのHPは、ラスト一本のうちの半分以下まで減少。

「イクイップメントチェンジ、セットワン！」

俺の叫びとともに現れるのは大小二本の刀。言うまでもなく鬼怨斬首刀とオニビカリだ。さて、行きますか。やつぱりラッシュ力だところちのほうが上だからな。一気呵成にたたく。

手始めに繰り出すのは小太刀での舞斑雪。翼の付け根を斬り、さらに刀で空中も含めた珍しい連撃系ソードスキル「虎牙連斬^{こがれんざん}」を繰り出す。名前からも分かるように、虎牙破斬の上位スキルだ。うまくタイミングを合わせて隠し性能を生かし、最大の6ヒットをたたき出す。続けて爪竜連牙蹴、真空破斬、爪竜連牙斬とつなげる。最後の爪竜連牙斬の時に刀を納刀、地面に拳をたたきつける。そこから、最後の大技である、天狼滅牙が突き刺さった。この超連撃にたまらずボスは断末魔の叫びをあげてポリゴンになった。

「いやはや、大変大変。もうボス単独撃破とかやめよ」

言いつつ、ドロップアイテムの整理。キーアイテムである「影梟の群青羽根」があることを確認すると、俺はフィールドをあとに——しようとしたところで、俺の耳が微かな音をとらえた。

(「——いうときには、こういう自分を恨みなくなるなあ・・・)」

内心で一つため息をつきつつ、俺は腰の横に投げナイフが収まっているのを確認する。今は普通の投げナイフしかないはずだが、まあ問題ないだろう。

あえて気づいていないふりをしつつ、俺はそのまま街に引き上げる。大体の気配を追いつつ、俺は普段通り、ではなく、足音を消して歩く。俺からしたらこのくらい朝飯前だ。より感じ取りやすくなった気配から、相手は俺を追ってきていることには気が付いていた。

(この距離だと、森の中で仕掛けてはこないな。おそらく、森から草原に出た、少し警戒が和らぐところ。となると、多分最初に音を立てたのは——相手が俺と知ってかそうでないかは分からんが——、おそらくわざと。・・・案外、手慣れてやがる)

この手のPVPというのは、対Mob戦と決定的に違う点がある。それは相手が、血が通っていて、思考する人間であるということだ。これは俺も口を酸っぱくして言ってきた。いくらAIが発達してきたといっても、それは膨大な量の条件分岐が重なっているだけの話。人間独特の癖や、目の動き。それをもとにした、心理、思考、それらの分析。それを利用することがPVPにおいて重要視される。心理戦、というやつだ。それを、近接戦闘なら一瞬でこなす。感覚で全部こなす化け物じみたやつもいるが、そんなのは一握りしかない。基本的にはこの思考をいかに素早く行えるか、それがPVPの神髄だと言える。と、俺は考えている。それを、こいつは身をもって実践している。

AIに疲労などない。だが、人間なら。どうあっても油断する瞬間はある。そこを突けばいい。その突破口を開く手段として、使える手を使っているだけだ。なるほど、頭

がいい。なら、

(わざわざ敵さんの手に乗る意味もないな)

歩きながらMobの気配がないことを察すると、アンカー付きのロープを取り出す。手ごろな枝を見つけてそれを放ると、俺は木の上を移動しだした。さて、これで奴さんどう出るか。あえてストレージから石ころを取り出して、近くの木に当てる。さすがに俺でも、木から木に飛び移るときの音を殺すなんて言う超絶技巧は不可能だ。落ちた時のシヨックをどれだけ上手に吸収しても、どうあがいても枝葉のこすれる音がしてしまふ。それを逆に利用する。だが投げナイフだと枝を切断する恐れがある。だからこそ石ころだった。俺からすれば、もつと重たいものでないと音が軽すぎて違和感があるのだが、ま、その辺はうまく枝葉に当てることで多少なりともそれっぽくする。さて、これでどう出る。

気配の主は少しの間迷っていたが、やがてほんの少しずつ下がって行った。どうやら撤退したほうがいいと判断したらしい。賢明な判断だ。俺のほうが有利な地の利を取っているうえに、——相手が知っているかどうかは置いておくとして——こっちは遠距離攻撃手段を持っている。無理に踏み込んでくれば、何が起こっているのかもわからないままハチの巢だ。だが、どちらにせよ、意味はない。なぜなら、長い間俺に姿を見せてしまったからだ。結果、俺は索敵スキルを使って、相手をはつきりと視認する

ことに成功していた。素早く距離と速度を分析し、思考する。

武器を素早く弓に変更し、追撃に入る。相手は追撃を警戒してジグザグに走っているようだが、それはこの森の中では悪手だ。俺からしたら、大体読める。何より、あくまで音を立てるのは木から木に飛び移るときのみ。相手は、動きの様子から見て気づいていないようだが、俺はもうすでに地面に降りて追撃に入っている。それに、相手は時々全方向を警戒するように振り返っている。俺からすれば、俺のような例外を除いて、こんな視界の悪いところで追撃を仕掛けるならば、かなりの正確性と俊敏性をもつて追いかける必要がある。よほどのことが無ければ追撃に入ったところで追い付かないのだ。であるならば、無意味に警戒しながら逃走するより、わき目も振らず全力で前だけ見て逃げたほうが建設的だ。かく乱を入れてるのであればなおさらだ。それによって接近されるリスクは甘んじて受け入れる。そのくらいの度胸がなければ。PKから逃走への選択の速さといい、俺の評価としては、

(チキンだな)

腕の良し悪し以前に、PKには向いていない。ま、俺のやることには変わりないが。

射程に入ったことを確認すると、素早く麻痺矢をつがえて放つ。今回使うのは、鏃に麻痺毒が塗つてあるもの。対毒POTなどで対策していなければ、掠つただけで麻痺に陥るようなものだ。カーソルはオレンジ。躊躇はない。俺の狙い通り放たれた矢は、そ

のまま狙い通り相手の胸をうがった。相手が倒れたことを確認して、俺は駆け寄った。「ロータス・・・やっぱりあんたか」

「見覚えのない顔だな。てことは、お前さん、ラフコフメンバーじゃねえな？」

俺の言葉に、相手はだんまりを決め込んだ。自慢じゃないが、俺はラフコフメンバーの顔は大体覚えていて。俺の把握しているメンバーなら、少なくともどつかで見たような、くらい程度には記憶しているはずなのだ。その俺が覚えていないということは、つまりはそういうことだろう。

「なんでPKなんざしようとした」

「しようとした、じゃない。俺はもうしたんだ。殺しを」

「じゃあなんで殺し続ける」

俺の問いかけに、相手は、かなりの間を置いて答えた。

「怖いんだ。夜眠るのが。未だに、最初に殺した相手の顔がちらついて。いつそ殺して殺して殺し続けて、狂っちゃえばそれもなくなっちゃうんじゃないかって、それで・・・」
相手の独白を、俺は黙って聞いていた。武器はもうすでに刀に変えてある。まだ抜いてはいない。が、その手はすでに柄を握っていた。いつでも殺せる。

「賭けてもいい。その悪夢は、ずっと付きまとう。お前が生きている限りだ」

「どうして、そう言い切れる・・・？」

「俺がそうだったからだ。そういうやつをこの目で見てきた。そうして、怯えて、狂って。そういうやつも見てきた。そいつらがどれだけ哀れだったことか」

その手の狂ったやつは、少し揺さぶればたいいて戻ってきた。その瞬間を見て、たいいて俺は殺した。それ以上道をたがえないように。だが、こいつの場合は違う。狂って揺さぶられて、そういう風ではない。狂おうとして狂えなかった、哀れな奴だ。

いつそ殺したほうが救いになる。そう思い、俺は柄を握る手に力を籠める。その瞬間だった。

『私はもう、あなたに人殺しをしてほしくない』

その台詞が脳裏をよぎった。一瞬手が止まる。だが、その一瞬は、思考の空白を作るのには十分すぎた。

「・・・選べ。監獄に送られて、この世界が終わるまでにそれと向き合う覚悟があるか。それか、ここで俺に殺されるか」

俺の口から出てきたのは、そんな言葉だった。相手にとって、これほどまでに究極の二択はあるまい。俺もそう思った。が、このままだ黙って殺す気も失せていた。

「なんで、そんなことを・・・」

「殺したほうが救いになることもある。が、生きてりやどうにかなる」

そんなことをとつさに口走っていた。正直言つて、なんでこんな問いを投げかけたの

か。それは俺が聞いたかった。かつて、鮮血などという物騒な二つ名で呼ばれた俺が、あろうことか標的に情けをかけるようなことがあるとは。

相手の男も迷っている。まあ当然っちゃ当然か。相手にしちや、文字通り究極の二択だ。

「監獄に送ってくれ」

「OK、後悔すんなよ」

迷いに迷った男の選択を俺は即決した。こういうことを想定してか作られた、強制監獄送りのコマンドをしようとしてメニューを開いたとき、男が口を開いた。

「あんた、甘くなつたな」

「自分でもそう思う」

俺の回答に、男はどこか、ふと笑った。

「でもまあ、悪くないって顔してるぜ」

「実際そう思ってる。でもま、それはあんたに救いを見たからだ。そうじゃなけりや問答無用で首を飛ばしてる」

「そつか。・・・感謝していいのかな」

「いいと思うぜ。さ、使うぞ。監獄に入った瞬間に麻痺は強制解除される。暴れても無駄だから暴れんなよ」

「分かっている」

それだけ言うと、俺は準備が完了した監獄送りのコマンドを使った。転移結晶を使ったかのように、その場から男が消える。それを見て、俺は立ち上がった。件のクエストアイテムを納品して、情報を聞き出して、いったん帰る。明日は迷宮潜りになるから、準備も必要だろう。そんなことを頭の隅で考えていた。

44. 不穏な気配

さて、そんなことがあつた帰り。久々に、何となく夜にアルゲートのエギルの店に来た。ここは、まあもちろん時間にもよるが、夜はたまにバーになっている。本人曰く、趣味らしい。趣味で夜遅くまでバーとは粋なものだ。ま、エギルのなかなか趣味のいい家具のチョイスにより、ここは大人の富裕プレイヤーの間で隠れ家的人気を博している。らしい。ま、当の本人ちよくちよく店空けてたりするから、そういう点でも本当に趣味なのだろう。

「よう」

「おお、お前さんか。あれか？」

「おう、あれだ。久々に飲みたくなつてな」

見た目こそいかつい黒人巨漢なので、初見だとどうしても腰が引けるのだが、俺が攻略組復帰したボス攻略でも全く嫌な顔をしなかった、数少ないメンバーの一人だ。

俺の目の前に置かれたロックグラスに入っているのは、大きめの氷と明るい茶に似た液体。

「しっかしまあ、よくもまあこんな世界に酒なんざぶち込んだよなあ。未成年も多いだ

ろうに」

「現実で酔わないからいい、という考え方なんだろう。ガキンチョの舌に酒はまずいだろうしな。どちらにせよ、ゆっくり飲めるんならいいじゃねえか」

そういつて、エギルは店の外に一瞬だけ出てすぐに戻ってきた。

「どうかしたのか？」

「いや、今日は俺もゆっくり飲みたいんでな。客も来なさそうだし、店じまいだ」

「おいおい、クライン当たり来たらどうするよ」

「また今度売値をサービスしてやるよ」

「売値つってもぼったくり価格はなんだろう？」

「失礼な。ぼったくりはしねえよぼったくりは」

そんな馬鹿話をしつつ、マスターも自分のタンブラーに酒を注ぐ。相手が軽くグラスを上げたのに合わせ、俺も軽くグラスを上げて一口。

「なんかあったのか？」

「それがな、聞いてくれよ。キリトがよう、ラグーラビットの肉取ってきたんだよ」

「ラグーラビットお!!」

驚きから、思わず大きな声ができる。ラグーラビットといえば、こちらの世界では最高級の肉だ。しっかり調理すれば、それはそれは美味だという。現実世界で言う最高ラ

ンクの和牛などがこれに位置する。

「最初は俺に取引持ちかけてきたんだがな、あいつ、アスナを見るや否やそつちに行きやがって……。畜生、食いたかった……。」

「ああ、なんつーか、ドンマイ……。同情する」

かなりご愁傷さまだ。極上の食材があるのに食えないとは、生殺しである。俺だって同じ立場なら地団太を踏むだろう。

「しかも、アスナもアスナで護衛振り切ってキリトの誘いに乗ってるし」

「わっはっは、若いとは良きかな良きかな」

「笑いごつちやねえよ。そのアスナの護衛、かなりアスナに入れ込んでたみたいだしなあ」

「へえ、どんな奴なんだ？」

「ん？かなり細い奴だったぞ。細いっていうより、痩せてるって感じだな。確か名前は、クラ、なんたらとか言ってたな」

口元までもっていった、グラスを持った手が止まった。馬鹿話をして上がってた口角が下がる。

——まさか。

「クラデイル、か？」

「あー、そうそうそんな名前だった！」

一氣に酔いがさめ、頭が冷えた。

「ん？お前さん知ってるのか？」

「・・・昔のことだ」

一回グラスを置いて、ゆつくりと氷を指で回す。こうすると少しだが、中身が冷える。そうか、あいつが。あいつが、アスナの、護衛。俺の昔の意味を的確に感じ取ったのだろう、エギルが少し黙った。

「しっかしまあ、なんでアスナに護衛なんぞ。生半可な奴だったらかえって足手まといだろう」

努めて元のトーンで話す。だが、先ほどの穏やかに飲んでいるような気分ではなかった。

「なんでも、最近何通か、殺害予告の手紙がKOBに届いたらしくてな。で、一応念のため、幹部陣に護衛が付くことになったんだと」

「へえ。かなり最近の話なのか？」

「ここ一週間くらい、だったかな。お前さん、その手の話聞かないのか？」

「興味がないからな」

「おいおい、しっかしろよ若人。もう少し人生楽しむ努力したらどうだ」

「悪いが、そんな努力のやり方を知らなくてな。それと、若人なんて言つてると爺臭く見えるぞ」

軽口の応酬をしつつ、冷静に頭を回す。あいつが、アスナの、護衛。なら、殺すチャンスはいくらでもあるはず。ただ、あいつも仮にも、レッドの生き残りのようなもんだ。俺たちの教え通り、殺すときは確実に、一発で。それを徹底するはず。とすれば、今は機をうかがっていると考えるのが自然。手紙もおそらく、そのための仕込みだろう。だが、大きな疑問がある。

ごまかすように、俺は話題を変えた。

「なあ、そういえばキリトはどうするんだ？あいつのことだ、マイホームなんて持つてないだろ。厨房借りる、つて思いつくような奴じゃねえだろ、あの戦闘バカは」

「そういえばそうだな。聞いてねえが、アスナの家に行くんじやねえか。アスナは料理スキルコンプしたつて言つてたし。案外押し強いアスナだし、無理矢理パーティー組むくらいはするんじやないか」

「やりそうだな、そのくらいは」

最後の一口を飲み干す。その反応を見て、エギルが声をかけた。

「どうする、もう一杯飲むか？」

「いや、今日はもういい」

それだけ言うと、俺はお代をテーブルに置く。——考えることは山積みだ。ゆつたり酒飲むのはまた今度。

「ごつつおさん」

「おう、また頼むぜ」

それだけやり取りをすると、俺は店を出た。

店を出て、拠点の宿に戻って考える。やはり、疑問が残る。俺らの、仕留める機会をしつかり見極め、一発で殺すという教訓を守っている、と考えるのが、やはり自然だ。となると、この場合はアスナがターゲットと考えるのが自然。が。

——アスナを殺す？アスナ信奉者のあいつが？

それが、ずつと気になつている、大きすぎる疑問。妄信的に信奉している相手を殺す、というの、なかなかない発想だ。護衛についたのはまだわかる。そうすれば、信奉している相手のそばにいる理由ができるからだ。だが、ならばなぜ。

——いや。

そばにいる理由が欲しい。そのためには、今そばにいるやつが邪魔だと思つたら。なら、ターゲットは、——キリトか。アスナのキリトに対する思いは、少し見ていればバレバレだ。ターゲットにする理由としては十二分。

しかし、キリトか。ならある程度機会をうかがうのも分かる。正面切つて殺すというのも難しい。さすがに俺も、アスナの目の前で殺しをするほど命知らずじゃない。本気でブチ切れたあいつを相手取るのは怖い。攻略の鬼対鬼神の片割れ、字面はいいかもしれないが、当人からしたら本当に怖い。さすがにその時は、この命を散らす覚悟をする必要もあるやもしれん。

(・・・とりあえず、考えるのは後にするか)

ならば、普通に接触できるタイミングを計るか。なら、どうせ明日は迷宮攻略の予定だった。そこでの接触を狙うか。そう思つて、俺は眠りについた。

翌日。74層の転移門広場に、意外な影が意外な状態でたたずんでいた。珍しいな、と思ひながら、俺は近寄つて声をかけた。

「よう、キリト。珍しいな、待ち人か？」

「ああ、ロータスカ。・・・まあ、そんなところだ」

「アスナか？」

「ああ。つて、なんでわかつたんだ？」

「昨夜、エギルンとここで一杯飲んでな。そんな時に、ラグーラビットの一件を聞いたんだよ。ところで、その様子から察するに、アスナが待たせてるのか？」

「ああ」

「珍しいな、アスナが遅刻なんて。ま、お邪魔にならんうちに先行くわ」

「そっか。そっちは攻略か？」

「まあな。てか、装備みりゃ分かるだろ」

「それもそうだな」

お互い、最前線に出ることを想定した、現状の最高装備。それは、見るやつが見れば一発でそれと分かるような、独特の雰囲気がある。

「んじゃ、俺は先行くぜ」

「おう、またな」

そう言い残すと、俺はその場を離脱、するふりをして、物陰に隠れた。さっきも言ったが、アスナは基本的に時間をしっかりと守る口だ。そのアスナが時間を守らない、ということとは、何らかの事情があるはず。もし万が一、クラディール関連であるのであれば。と、考えていると、転移門が光った。そのあと、なにやらキリトと交錯した。直後、悲鳴を上げてキリトが吹っ飛ばされた。アスナが胸の前で腕を交差させる形で肩を抱えているところを見ると、どうやらラッキースケベが発動したらしい。・・・つってもアスナ、ありや半分不可抗力だろ。あの至近距離はさすがに躲せないわ。揉んだのなら問答無用で鉄拳制裁待ったなしだが。と、再び転移門が光ったところで、アスナが素早

くキリトの陰に隠れた。出てきたのはクラデイル。

「アスナ様、勝手をされては困ります！ギルド本部までお戻りください！」

「嫌よ！今日は活動日じゃないでしょ！大体、なんであなた私の家の前で張り込んでるのよ!?!」

「私はアスナ様の護衛です。それには、家の監視も——」

「含まれないわよ!!」

「……もともとアスナ信奉者だったが、こりやひどくこじらせてんなー。はたから見りやただのストーカーだぞこれ。どこぞの第四真祖の監視役じゃねえんだから。と、無理に腕をつかんで引きずって行こうとするその腕をキリトがつかんだ。

「悪いな。あんたのこの副団長様は、今日は貸し切りなんだ。それに、あんたよりはまさに護衛が務まると思うぜ。そんなじよそこのやつなんざ一ひねりにできるしな」

その挑発まがいの——いや、これは明らかに挑発か。とにかく、その言葉に、クラデイルは顔を朱に染めた。

「貴様ア……それだけの大口を叩いたからには、それ相応の覚悟というものがあるんだろうなあ……!?!」

あーあ、こりやダメだ。ただでさえも実力者のキリト相手に、こんだけ血を上らせちゃだめだ。PVPは冷静さが肝だ、つて俺言ったはずなんだけどな。ま、関係ないか。

デュエルに関しては、キリトが一刀のもとにクラディールの得物をへし折った。幅の広い両手剣の鎬しのぎを重量片手剣で強打すれば、ま、ああなるわな。

「得物を変えて仕切りなおすなら付き合うけど、そうまでする意味は——」
「くそがああああ!!」

キリトの言葉は途中でぶった切られた。短剣を持ったクラディールが、怒りそのまま突進する。が、横合いからアスナが得物を弾いた。

「あ、アスナ様——」

「クラディール。指示を告げます」

動揺するクラディールをよそに、アスナは淡々と告げる。

「副団長権限で、現時刻をもってすべての任務を解除。以降、別命あるまで本部で待機。以上」

「そんな——」

「これ以上は時間の無駄です」

きつぱりと、淡々と言い切ったアスナに、クラディールはうなだれた。小声で何か言ったようだが、聞き取れなかった。が、空中にデュエルのリザルト表示が出たことで、クラディールがリザイン宣言をしたのだろうと気づいた。そのままクラディールはグランザムへと転移した。

「——厄介だな。さすがにK O Bの本部に乗り込むわけにやいかん。だがま、何もできないうって保証ができただけ、ましとするか」

そう思うと、俺は迷宮へと向かった

迷宮へ続くダンジョン——昨日ボス狩りをやったあの森だ——で雑魚を狩っていると、俺は妙なパーティを見つけた。見つけた、というより、妙な音を聞いた、というべきか。とつさにメニューから隠密用の装備に変えると、上手く物陰に隠れた。そのまま、索敵スキルの応用である遠視スキルでそちらの方向を見つつ、静かに隠れる。と、別の二人組。こちらは分かりやすい、白と黒。音をできるだけ殺しつつ、そちらに回り込んだ。

「よう、お二人さん」

静かに俺は声をかける。と、二人が驚いて声を上げようとするのを、唇に人差し指を当てて押さえる。

「静かに。感づかれる」

空いているもう片方の手で方向を指さす。それで二人とも、その奇妙なパーティに気付いた。で、ここで一つ問題発生。

「でも私、装備が……」

アスナは、いつも通り、KOBの白基調装備。これではさすがに目立ちすぎる。さつと俺はメニューを操作した。パツと目についた隠密能力が高そうなやつって言うと、「これでも使え」

ぽいと俺は適当な黒いフード付きのコートを放る。それに袖を通して、三人で隠れた。ちなみに、俺はすでに某緑茶チックな装備になっている。顔の無い王は使えないが、十分な隠密性を備えているはずだ。

最前線である以上、パーティを組むのは自然だ。俺やキリトのように、ほとんどソロで狩り続けている輩のほうが珍しい。だが、多すぎるパーティは、かえって首が回らなくなる。だから、普通に攻略するときは5、6人で攻略することが多い。だが、あの集団はそんなちやちな集団ではない。見たところ、10名はいようかという、普通の攻略と考えれば大集団だ。仰々しすぎる。それに、動きがそろいすぎている。これでは、突発事象が複数発生したときに、かえって対応が遅れることが想定される。それに、様にそろえられた、あの深緑の装備。

「軍、か？」

「やつぱりそう思うか。でも、軍は最近前線に出てきてないぞ」

「こつちでも、前線に出てくるなんて情報は聞いてないわ」

「どうやら俺の直感は当たっていきそう。アスナが聞いていないということは、本当に

今回は突発事象である可能性が高い。ここは、

「俺が尾行してみる。どうせ索敵スキルそんなに高くないだろうし、隠密ボーナスのあの装備も大量にあるしな」

「そう、だな。悔しいが、俺たちよりその手のスキル、高そうだしな」

キリトも適性を認めていた。ま、この辺はあれだな、昔取った杵柄というやつだ。こんな形で生きるとは思ってたが。

「つーわけで行った行った。俺だってお忍びデートにこれ以上介入する気はねーよ」

「デートじゃない！ わよー！」

「息ぴったりじゃん。あ、それは返さなくていいぞ。その手のやつなんざ大量にあるから」

俺の茶化しに、揃ってしかめっ面をする白黒夫婦。もうこいつら夫婦でいいだろ。いつまでラブコメ空間作ってる気だ全く。ま、そんなわけで二人を先行させると、俺はゆっくりと、一定距離を保ちつつ気配を殺してあとをつけた。

そのまま一定距離をつけて、気づいたことがいくつかあった。一つは、少なくとも全員がそれなりのレベルには達していること。装備は業物とはいいがたいが、それなりでそろえている。が、その装備でやっているということを考えれば、討伐時間は長いとは

いいがたい。そして、これは軍らしいと言えばそうなのだが、非常に規律正しい。足音はほとんど崩れないし、陣形の指示も比較的適切。だが、一番の問題は指揮官の性格だ。体力などの不足を気力でカバーしようとするきらいがありすぎる。こういうところで、体力不足は致命的だ。その辺はどうしても実践不足と言わざるを得ない。それを無理に気力でカバーしようとするれば、最悪死を招く。それを分かちやっていると節がない。陣形は手堅く、無理な攻撃をしない。深追い禁止を厳命しているのがよくわかる攻め方だ。だからこそ、適度な休息が必要だろうに、この指揮官はそれを考えていない。というより、する余裕がない、の間違いか。それもおそらく、レベリングや経験の不足だろう。ま、はつきり言つて、

(認識が甘い)

もう少し練度を上げてから出直してこい、というのが本音。ましてや、慎重を期してというのは分かるが、高々迷宮区攻略ごときに2パーティ分もの大集団で人海戦術をしている時点でアホと言わざるを得ない。迷宮区攻略なんぞ、最悪ペアでもできる状態まで経験なり積んでから出直してこいというもんだ。かといって、今中断させるのは、それなりにリスクがある。

——いや。これまでの傾向を考えれば、迷宮に入つてすぐに安全圏はないはず。それに、迷宮区はほとんど暗く、集中力を食う。なら。

装備を変える。あえて木に近い色の装備から、くすんだ赤い色フードが付いた、顔の見えない装備に変える。相手の視界を分析しながら、上手く相手の死角を突いて静かに接近する。とうの昔に隠密スキルは最低限まで解除してある。そもそも、今の俺の装備は、くすんでいるとはいっても、森の緑の補色に当たる赤い装備。索敵スキルや周囲の注意を払えば十二分に感知できる距離にいるはずなのだ。それができないところからも、練度の低さがうかがえる。頃合いを見て、俺は一気に間合いを詰めつつ、スローイングタガーを投げた。もちろん、当てる気はない。だが、脅しには十分なる。実際、耳元で風を切る音がして、弾かれたようにこちらを向く。が、その時はもう遅すぎる。司令官の首級をとれる位置に、俺はオニビカリを添えた。寸止めではあるが、それがはつきりとわかる寸止めだ。ま、当然ではあるが俺のほうにはパーティメンバー数人から刃が突き付けられている。だが、俺は全く委縮などしなかった。する道理もない。「全く、ここまで俺の接近に気付かないとは。反応したやつも半数いない。それに、反応したやつも、俺が寸止めする前じゃなくて、その一秒後くらいに反応してるだろう。その前にはスローイングタガーを外した音が聞こえてるにもかかわらずだ。本当に俺が首を取りに来ていたらどうするつもりだ？」

俺の疑問に答えるやつはいない。そもそもが反応もできていないやつもかなりいるのだ。

「これだけ人間がいるのに、警戒も何もあつたもんじゃない。出直してこい」

距離を取って刀をしまおう。もとより斬るつもりなんざ一切なかったから、装備はそのままだ。パチンという鯉口の音で、ようやく相手も警戒を解く。司令官だけ、その緊張の糸は切つていなかった。それに関しては正解だ。彼我のレベル差を考えれば、抜刀で腕の3、4本は飛ばせる。

「貴様、何者だ」

「なに、通りすがりの元プレイヤーキラーのごろつきだ。少なくとも一息入れたほうがいい。動きに疲れも見える」

「私の部下はそんな軟弱者ではない!!」

俺の言葉に、司令官はかっとなつて怒鳴り返した。が、俺は全く動じなかった。

「そういう意味じゃない。人間ずつと集中できるわけじゃないんだ。そういう点では、少なくともマックスの集中じゃないだろう。こんな緑だらけの場所で、普通なら目立つて仕方のないこんな装備のやつに、あんたは首を取られかけたんだ。しかも、10人以上なんていうふざけた大集団でありながら。」

この先、すぐに迷宮区がある。幸いなことに頭数はいる。交代で見張りを立たせて休憩すればいい。少なくとも今よりはましになるはずだ」

怒鳴り声に全く委縮しない、俺の静かな言葉に、司令官は黙り込んだ。

「貴様、なぜそんなことを言う」

「さすがにこんなに大量に目の前で死なれたら寝覚めが悪いのでな。警告はした。行くも帰るも、それはそちらが決めることだ」

それだけ言い残すと、俺は迷宮に向かった。さて、これが吉と出ることを祈るか。

45. 変わらない距離

さて、そうして迷宮攻略をしていると、ある程度進んだところで安全圏にたどり着いた。そこにはすでに先客が腰を下ろしていた。が、それはあまりに無警戒だった。

(全くこの小娘は・・・)

呆れつつ、となりに腰を下ろす。と、リラックスしたからか、欠伸が出た。どうやら思った以上に緊張していたらしい。思わず座った瞬間に目をしばたいてしまった。ちやんとコンディション管理しないとな。

(人のこと言えんな、これじゃ)

目頭をこすりつつ、そんなことを考える。と、隣から声がかかった。

「眠たいの？」

「まあな。寝不足にはなっていないと思っていたんだが」

「なら寝れば？」

「そうしたいのはやまやまなんだがな・・・」

場所が場所だけに、そこまで無警戒になるわけにもいかない。と、言おうとして欠伸が出た。と、レインが足を伸ばして、自身の太ももをぼんぼんとたたいた。意味は分か

る。が、さすがにそこまで甘えるのはな、なんだかなあ。

「大丈夫だって、私も強いし」

「知ってる」

「……そういう問題じゃないんだっての。いろんな意味で。と、もう一度強く瞬きをした。……あかん、これじゃ今後にも支障が出るな。」

「じゃ、少し、お言葉に甘えるわ……」

「うん、ゆっくりね」

そういうと、俺はゆっくりと眠りに落ちた。眠りに落ちる寸前で、体が優しく寝かされたように感じた。

それから少しして、俺ははつきりと目が覚めた。どうやら結構しっかり寝れたらしい。体勢は、ま、想像通りつちやあ想像通りの膝枕。

「悪いな。わざわざ」

「いいよ、今更だし」

見上げる体勢から、上半身を起こす。視界の端の時計に目をやる。大体30分くらい寝ていたらしい。

「誰か来たりしなかったか？」

「特に誰も。君が来る前に、アスナさんとキリト君が来たけど、そのくらい」
「そうか」

とりあえず、クライン当たりに殴られるようなことはなさそうだ。あいつ、俺が
こ^膝う^枕い^枕うの^枕さ^枕れて^枕る^枕の^枕見^枕たら^枕血^枕涙^枕流^枕し^枕そう^枕だ^枕から^枕な。比^枕喩^枕でも^枕なん^枕でも^枕なく。・・・そ
んな^枕に^枕が^枕つ^枕つ^枕く^枕から^枕女^枕が^枕寄^枕つ^枕て^枕こ^枕ない^枕ん^枕じ^枕ゃ^枕ね^枕え^枕の、とは^枕本^枕人^枕の^枕名^枕誉^枕の^枕た^枕め^枕に^枕も^枕言^枕わ^枕な
い^枕で^枕お^枕く。

「思い出すね」

「なにをだ？」

「25層攻略の時。同じようなことしてたなーって。立場は逆だったけど」

言われて思い出す。そういえばそうだった。

「膝枕まではしなかった覚えがあるがな」

「ま、そこはそれだよ。ねえ、またパーティ組まない？」

「ま、こつちとしても断る理由はないな」

そういつてメニューウィンドウを表示させる。そのままパーティ申請を送ると、自分
のHPの下にもう一本別の表示が加わった。

「さて、早速攻略に行くか？」

「そうだね。フォーメーションはいつも通り？」

「おう、いつも通りだ」

いつも通りの感覚で攻略再開と行こうとしたところで、俺が一つの異常に気付く。

「なあ、あれなんだ？」

それは、真正面から迫ってくる人影。数は二つ。だが、その様子は。

「なんていうか、なんであんな必死？」

「つか、どつかで見覚えねえか？」

「奇遇だね、私もそう思った」

その影は安全圏に入ると、急停止をかけた。その二人を見て、呆れて俺が声をかける。

「なあにしてんだお前ら」

俺の一言に、二人は顔を見合わせて笑った。その笑いがこちらにも移り、しばらく笑い合っていた。

で、その笑いが収まった後、事情を聞いて。

「で、それであんなふうに走ってきた、と」

「はは……」

ごまかしたように笑うキリトに、俺は呆れが多分に混じったため息交じりの苦笑を浮かべた。全く、現状攻略ツートップも一皮めくればただの少年少女か。ま、当然っちゃ

当然か。

「で、どんな感じなんだ、そのボスって」

「名前は、確か、グリーンムアイズ、って名前だったな。見た目は、山羊頭みたいなほうの悪魔で、大剣を持ってた」

「となると、力で押しってくるパワータイプって考えるのが自然か……。盾持ちが大量にほしいな」

「プレスとかにも警戒しないかね」

「盾、ねえ……。 」

キリトの言葉を受けて、さらに俺たちは分析をかける。そのあとに、アスナが怪訝な顔を向けた。

「……。なんだよ?」

「キリト君、何か隠し事してない?」

それにかすかに表情の変わるキリト。……。全く、それじゃばれるぞ。

「どうしてだ?」

「だって、片手剣の最大の長所って、盾を持てることでしょ? 私の細剣レイビデとかなら、スタイル重視で持たないって人も多いけど……。怪しい」

「それこそスタイルだろうよ。仮にもキリトも体術持つてるわけだし」

疑いの目を向けるアスナを、俺はため息交じりに諫める。その言葉に、アスナも追及をあきらめたようだ。

「それもそうね。そもそも、他人のスキル構成を聞くのはマナー違反だし。

そろそろいい時間だし、お昼にしましょうか」

「あれ、そんな時間・・・だな」

視界の端で時間を確認すると、確かに昼過ぎになっていた。気づかなかつた。

「そういえば、二人は今から攻略しようとしていたのか？」

キリトの疑問に、俺たちは揃って黙り込む。うん、全く反論できないぞー。

「昼飯抜きで攻略する気だったのか？」

「黙れ小僧」
戦闘狂

某白い狼みたいな声になったが、仕方ないと思う。すっかり忘れてただけだ。

「なら、私たちも腹ごしらえしよつか。どうせ作ってきてるんでしょ？」

「俺かよ!?ま、作っては来てるが、粗雑極まりないからな」

思わず突っ込みつつ、ストレージから今日の昼食を広げる。横からの視線にはもうす

でに気付いていたので、俺はうち一つを放った。

「えっと、これは？」

「鹿肉っぽいものの蒸し焼き香草包み。その葉っぱは皿つつーか包み紙代わりにもなる

が、食えんからな。どうせこれ目当てだったんだろ？」

言われた通り包み代わりの香草を開けると、焼かれた肉独特の色合いのものがそこにあった。隣で咀嚼する俺を見て、レインも口にする。

「おいしい」

「うん、いい出来だ。個人的にはもつとレアぐらいがちょうどいいが」

「ねえ、私にも食べさせて」

俺たちの様子を見てか、アスナが横から顔を出してきた。レインから差し出されたそれを一口かじって、アスナは驚いたように声を上げた。

「確かロータス君って、基本的に戦闘スキルばっかだったよね？」

「だな。ほんの一部例外はあるが。どうしてだ？」

「普通、料理スキルがないと、料理って体をなさないよね・・・？」

「ほとんどマニュアルに切り替えてやった。ましてやこれなんざ適当な串にぶっ刺して焼いたやつを、臭み消しになりそうな香草で包んでアイテム設定しただけのモンだ」

「適当な串にぶっ刺して、焼き加減は？」

「練習だ」

「いや普通それじゃ済まねえからな!？」

キリトからツツコミが入った。が、俺からしたらそうだからどうしようもない。かの

赤軍の白い悪魔だつて射撃のコツは練習らしいし。練習つてすごい。

「・・・驚いたわ。スキルなしの料理なんて無理のはずなのに」

「無理じゃねえ。タイミングがやたらシビアなだけだ。だったら見切つちまえばいい」

「・・・そういう問題？」

「そういう問題だ」

俺の返答に、アスナは額に手を当てた。・・・うーん、俺からしたら本当にそういうもんなんだがなあ。

「ところで、アスナのそれは、サンドイッチか？」

「うん。一つ食べる？」

「ならありがたく」

言葉に甘えて一つ口に放り込む。と、想像以上にうまい。

「めっちゃうまいな。金取れるぞこれ」

「そんなに？」

「どうやって作ったのか気になるレベルだ」

少なくとも、ポツと適当にレシピに放り込んだだけ、なんて馬鹿な話はあるまい。そう思つての問いかけに、アスナは胸を張つた。

「これまでの味覚エンジンの分析データの賜物よ。その結果、あれこれ作り出せたんだ

から。例えばこれ」

そういわれて三人が手を出す。ぺろりと舌でひとなめしてみれば、それはまごうことなき

「「醤油だ」」

見た目の色があつていないのは、まあ、ご愛嬌というか、仕方ないというか。そもそもがここまで再現できた時点で驚きだ。

「ほかにもあるわよ」

そういわれてまた三人とも手を出す。と、

「「マヨネーズだ」」

これまた驚き。ここまで再現できるもんなのか調味料の味って。このままだとポピュラーな調味料は一式そろえられそうだ。

「こりや本格的に金がとれるぞ」

「すげえよアスナ！」

俺の感心した、冷静な言葉とは逆に、キリトは興奮してアスナの手を取っていた。突然のことだからか、頬を赤らめるアスナに対し、俺は思わず口角が上がるのを自覚した。

「ロータス君」

「へーへー、分かってますよー」

何をしようかを先回りされて、俺はあきらめたように声を上げた。ちつ、からかうと面白そうだったのに。

「だめだからね？」

「分かったっての」

言外の圧力に、俺は本格的にからかうのをあきらめた。と、そんなことをしていると、遠方に感。半ば反射で目をやりつつ、いつでも抜刀できる体勢に移行する。見えた人影に、俺は再び力を抜いて体制を戻した。

「なんだ、あんたか」

「なんだとはご挨拶だな。いきなり斬りかかることも辞さない雰囲気を一瞬でもだされたら、こちとら警戒するしかねえじゃんか」

俺の言葉に、寄ってきた相手、風林火山のクラインはため息をついた。

「それもそうだな。悪い」

「いや、いいってことよ。キリトも。元気そうで何よりだ」

「だな」

と、そこでクラインの視点が رفتたり来たりした。その先はアスナとレイン。と、突然気を付けをして、

「くくくクラインと言います24歳独身——」

と、最後まで言い切る前にキリトの腹パンで強制終了。HPは全く減っていないもののダメージフィードバックはしっかり入る。うん、お見事。

「ひ、ひでえよキリの字……」

「いや、今のはリーダー（クライン）が悪い」

クラインの抗議が俺と、風林火山の誰かのツツコミで笑いに変わったところで、改めて世間話になろうとした。ところに、索敵にもう一度引つかかった。

「多いな」

「え？」

レインの言葉には反応せず、俺は反応のあつたほうを睨む。

「ん、どうしたよ？」

「集団が来る」

「みたいだな。二つぶんか？」

「いや、多分一つだ」

俺の様子に気付いたクラインが俺に問いかけ、返答にキリトが乗じる。想像通りであるなら、あいつらのはずだ。横目で索敵の光点を数える。どうやら死んではいけないようだ。

想像通り、近づいてきたのは軍だった。指揮官を先頭に、集団は俺たちの近くまで

まっすぐに来た。どうやらやり過ぎず、ということとはできないらしい。

「休め！」

その号令で、集団が崩れ落ちる。だが、指揮官はこちらに向けて言い放った。

「私はアインクラッド解放軍、コーバツツ中佐だ。君たちは、マツピングを済ませているのかね？」

「俺はボス部屋前まで済ませている」

「結構。ならば、そのデータを提供してもらいたい」

その遠慮のない物言いに、俺は眉を動かした。

「もう少し言い方ってもんがねえか、あんた」

「そうだけ、マツピングの苦労が分かっているのかよ」

俺の言葉に、クラインも同調する。その反応に、指揮官は毅然と反論した。

「我々はゲームクリアのために動いている。君たちがプレイヤーである以上、我々に協力する義務がある！」

「お前——」

「いいよ、クライン」

「キリト！」

「もともと街に戻れば公開するつもりだったんだ。少し早まるだけだ」

そういうと、メニューをスクロールする。そのままマップデータを確認すると、指揮官は社交辞令のように——実際そんなのだろうが——「協力感謝する」といった。その反応に何か思うところがあったのだろう、キリトが声をかける。

「ボスにちよつかいだすのはやめといたほうがいいぜ」

「それは私が判断することだ」

「他人の忠告も聞いたほうがいいと思うがな。それに、人数が足りない上に、メンバーの疲労もたまっていると見える」

「私の部下はそんな軟弱者ではない!! 貴様ら、さつきと立て!!」

俺の指摘に、指揮官はかっとなって怒鳴った。俺はその様子に、一つため息交じりに言葉を漏らした。

「またそれか」

「ん? なんか言ったか?」

「いや、あんたが他人の忠告を聞かない、ってことを再認識したってだけだ。さつきとい、いな」

俺の言葉に、指揮官は怪訝な顔をした。どうやら、本気で心当たりがないらしい。

「装備を変えなきゃわからんか」

そういうと、俺はメニューをスクロールした。先ほど使っていた、顔の隠れるくすん

だ赤色のフードを身に着ける。そのまま、顔を隠している部分をスライドさせ、露出させる。

「これで、ようやくわかったか？」

「同一人物という確証がどこにある!？」

「なら、これでどうだ」

そういうと、俺は一步で間合いを詰めてオニビカリを首筋に当てた。それに、部下の何人かは反応できたようだ。

「さっきよりは反応が良くなってるっぽいな。だが、まだ遅い。俺が間合い詰めた時点で反応しないと間に合わないぞ。それに、反応したはいいいけど体が動かなかったやつもいる。へばりだしてる証拠だな。何より、この刃紋は覚えてるだろ？」

峰を肩に乗せ、ゆっくりと目の前を通過させつつしもう。それに、軍のメンバーも得物をしまった。

「赤装束に二刀流・・・まさか、鮮血の蓮・・・！」

「あら、まだその通り名残ってたんだ」

俺の言葉に、軍の何人かがおののいた。いつもは微妙な反応になることが多いのだが、今回ばかりはこの物騒な通り名に感謝だ。

「馬鹿な、やつはラフコフに所属していたはず・・・！」

「いつの話してんだよ」

呆れて声を出す。俺がラフコフに所属してたのなんざ相当前だぞ。ラフコフが討滅された、なんてすでに情報が出回ってるはずなのに。

「ま、だからこそだ。今のおたくらはぶつちやけ隙だらけ。その気になれば5分で全員殺せるね」

「ならばやってみろ。この数相手にそれができるかどうか」

その指揮官の声に、何人かが抜剣する。それを見て、俺は目を細めた。

「ほう、よく吠えた」

言いつつ、俺は右手を刀にかける。周囲は思わぬ一触即発に動揺するが、

「止めるな！」

俺が一言言い放つ。

「でもよ……！」

「なに、ちよつと灸をすえるだけだ。それに、こいつらの口ぶりから察するに、こいつはボスの首級をお望みのようだからな。ここで俺一人に負けるようでは、おとなしく引き下がったほうがいいってもんだ」

何より、こいつらの底はもうすでに見切っている。俺からしたら、これは本当に灸をすえるだけだ。

「全員、突撃！」

その言葉に、部下がそろってこちらに向かつてくる。それに、俺は抜刀せずに近寄った。まず手始めに、上段から得物を振り下ろそうとした一人を、その手首を取って勢いそのままにぶん投げる。囲むように背後から来た相手は顎を殴ってから当身で黙らせる。そのまま回転させて時間差で近寄ってきた相手数人に向かつて投げると、そのままそのあたりの集団は崩れた。

「さて、と。これで半数くらいはやったかな。で、まだやる？」

あつという間、それも得物を使わずに、HPをドットも減らさずに、だ。手加減できる相手っていうあたり、練度の低さがうかがえる。

「なにをしている貴様ら！ さっさと立たんか！」

「OK、後悔するなよ。言っとくが、俺は一時オレンジなんざ気にしないから」

ラフコフの時といい、今といい、オレンジの時期は長かった。俺からしたら今更拘泥する理由がない。あえて刀ではなく、取り回しのきくオニビカリを左手で抜き放つ。それだけで、数人が委縮した。

「前衛、攻撃開始！」

その声で、大体4人ぐらいの盾持ちが突貫する。装備から言っておそらくタンク。だが、俺からすれば、

「ぬるこ」

まっすぐ走るように見せかけ、直前で跳躍して、正面のやつに膝蹴りをかます。相手は驚きつつ防ぐが、俺からしたらこのくらい想定内。勢いそのままタンクを飛び越して、その後ろに突貫する。

「なにをしとる！攻撃隊、攻撃開始！」

その号令で構えるが、その時にはすでに遅い。俺はもう懐に飛び込んでいた。

向かって右のやつはオニビカリで得物を叩き落とし、正面のやつは振り下ろしてきたところに得物を側面から思いつきり蹴とばし、振り返りざまオニビカリを納刀して突き出された槍をもってぶん回して投げる。これにさらに数人巻き込まれたことを確認せず、俺は最後衛に近いところに踏み込んだ。

「全員——」

「遅い」

指揮官が指示を飛ばそうとするが、その時にはすでに遅い。俺はその兜の目の前にオニビカリの切っ先を突き付けた。

「もう一度聞くぞ。まだ、やるか？」

静かに問われた問いかけに、相手は完全に固まった。ここまで、俺は攻撃らしい攻撃を一切していない。にもかかわらず、約半数ずつも戦闘不能にし、一度は指揮官の首級

を取るところまで行っている。実力差は火を見るよりも明らかだ。

「ならば、ここは退こう。だが、貴様とボスの強さの質が違う、ということの間違いがあるまい?」

「あんた、まだそんなこと——」

「そうか。そこまで言うんなら、止めはせん」

「ロータス君!」

キリトの言葉にかぶせるように言った俺の言葉を、アスナが驚愕の声で追従する。

「そこまで言うのなら、止める理由はない。ただ、——死んでも後悔するなよ」

俺の言葉に、指揮官は背を向けて去って行った。その集団が向かうのは、奥の方向。どうやら、忠告を聞き入れる気はなかったようだ。

「全く。あそこまで頭が固いとは」

「それよりなんで止めさせなかったのよ!」

「ああも意固地になってる相手を説得するほど暇じゃない。死ぬのなら勝手に死ぬと、言いたいところだな。さすがにあそこまで言った手前、放っておくってのものな。そういう相手には、古今東西これのほうが効くだろう?」

軽く拳を作りながらの言葉に、アスナは呆れてため息をつきながらこめかみを押さえた。

「何たる脳筋思考……」

「でも、そっちのほうに速そうだなー、っていうのは、賛成かな」

「レインちゃんも!？」

「だって、話を聞かない相手に対して対話なんて無理なんだし。だったら一回無理矢理でもおとなしくしたほうが早そうだし」

「あいつら、よもや本当にフロアボスに挑むつもりじゃないだろうな……?」

「俺が後をつけよう。何、あの練度を考えれば、素敵スキルをコンプリートしてるやつはおらんだろう。隠密っていう点では、俺が一番だろうし。それに、あれだけ言った手前、俺なら様子を見ても不自然ではないし」

「私も行く。隠密スキルなら、私もコンプリートしたし」

「俺としてはレインが来てくれることは万々歳なんだが……」

ちら、とキリトたちをうかがう。キリトはサムズアップで、アスナは目線で返した。

「攻略の鬼神、幸運を祈る」

「俺は核ミサイルの再突入でも阻止せにやならんのかよ」

クラインに至ってはこのノリだ。ま、問題はないだろう。

「よし、なら行くか。こっちも素敵で探りながらにはなるが、ま、あれだけの大集団だ。どうにでもなる」

「そうだね」

それから、俺たちの追跡が始まった。

46. 唯一性 (ユニーク)

俺たちはマッピングが済んでいないこともあり、あつちやこつちやと半分さまよいながらだったから、追い付くには時間がかかった。そして、そのタイミングが悪かった。

俺たちが追い付いたとき、フロアボスの扉はすでに開いていた。ならば、中にいる集団は察せられる。実際、ちらと見えた装備は想像通りの物だった。

「レイン、前を支えろ！」

「了解！」

とにかく、今はキリトたちに伝えるのが最優先。迷宮区内ではメールの送受信は不可。ならば。

アイテム欄を素早くめくる。見つけてタップしたその手に出てきたのは、文字通りの角笛。それを思いっきり吹き込んだ。とたん、大きな音が周囲に響いた。アイテム名はそのまま、角笛。パーティではぐれた時など、これを使えば目印になると同時、ヘイトが吹いた人間に向く、といったものだ。最も、俺はパーティなんざ組まないから、無用の長物としてストレージの肥やしになっていた。こういう時に役に立って何よりだ。とにかく、これでキリトも異常事態に気が付いたはず。何せ、ボス部屋の方向から角笛

の音が聞こえる、という時点で、何かあった、ということに他ならない。

前は何とかレインが支えることで、盛り返すレベルにはなっている。だが、いかんせん一人では手が足りない。キリトが来るまで持たせなければならぬ。ならば、こちらもお出し惜しみは無しだ。

「イクイップメントチェンジ、セットツ」

音声認識にそれだけ叩き込む。瞬間、隠密重視に振ってあった装備がいつもの赤装束になり、背中には長弓が背負われた。手始めに、俺はうなじに向けて湾曲に射撃する。普通は攻撃されないような場所に攻撃を受けたことでいら立ったのか、相手がこちらを向く。その間に、俺は第二射をつがえ、振り向いた眉間に放った。新たな乱入者に、相手がはつきりとこちらを見据えて吠えた。

「やかましい」

一言それだけつぶやくと、俺は本格的に走り回った。ここから先は時間稼ぎだ。無理をする必要はない。振り下ろされた大剣を横つ飛びに躲す。そのまま間合いを詰めて、相手の拳は身をひねって躲す。そのまま適当に狙いをつけて矢を放ち、ほぼ真下に大剣を突き立てるような攻撃は股下をスライディングの要領で潜り抜けた。その先にいたのは軍のメンバー。

「なにをしている。早く転移結晶で離脱を！」

「それが、結晶が使えないんだ！」

誰かから帰ってきた、絶望的な答えに、俺は舌打ちをしたいのをこらえた。ここまでは、ボス部屋で結晶が使えなかったことなどない。本格的に、このゲームの難易度を上げるための措置だろう。

「ならばせめて、生き残れるだけの努力をしろ。壁際まで下がれば、生存率は上がろう」「なにを言っておるか貴様！」

俺の言葉に、即座に怒鳴り返したのは例の指揮官だ。この期に及んでまだ考えを改めないらしい。

「我々解放軍に撤退の二文字はない！戦わねばならんだ！わきまえろ！」

その言葉に、何人かが立ち上がる。くそ、どうする。その瞬間、

「ロータス君！」

レインの悲鳴のような声で意識が引き戻された。矢をつがえて振り向きざま全力で射る。狙いもくそもあつたもんじやないが、気迫が矢にこもったのか、一瞬だがボスが怯んだ。その一瞬について、レインが絶妙に合わせる。心の中でグッジョブを送りつつ、俺は怒鳴った。

「わきまえておらんのは貴様だたわけ!! 貴様は指揮官だろう!? 部下の命を預かる者が、そんな訳の分からん、合理性のかけらもないような理論でどうする!!」

俺の怒声に、どんな顔をしているか分からない。俺はボスに目線を戻して言い放つ。「俺とレインで前衛をやる。その間に考えろ。このままここで犬死するか、逃げて生き延びて再戦の機会をうかがうか。てめえの頭で考えろ」

それだけ言うと、俺は彼女に叫んだ。

「レイン！キリトたちが来るまで持たせるぞ！生存第一！」

「了解！」

短いやり取りで、俺たちは左右に分かれる。熟成された連携に、コミュニケーションはそんなにいらぬ。真に必要なのは、互いの呼吸。その点で行けば、俺とレインほど呼吸の合ったペアなどそうはおるまい。今回の場合初見のボスなので、その点が少し不安だが、二足歩行に得物持ちという時点で大体攻撃パターンは読める。その辺はどうにでもなるだろう。ましてや、今回俺は遠距離攻撃手段も持っている。おそらく、周囲が思っているより自体は深刻ではない。ましてや、今回の目的は時間稼ぎであって討伐ではないのだから。

素早く矢をつがえて放つ。俺に注意がいったところで、レインが足元から斬り上げる。相手の振り下ろしは横に避けた。リーチ的に、後ろの軍までには届かないだろう。その腕伝いに俺は走る。

「イクイップメントチェンジ、セフトワン」

走りながらボイスコマンドを叩き込み、使い慣れた二刀装備に変更して、顔面に特攻する。ここから先はラッシュだ。まずは手始めに、右手で刀を抜き放ち、そのまま返す。左手で拳を叩き込み、さらに追撃を仕掛けようとしたところで、剣を持つていないほうの手がこちらにきた。回避して、うなじに一閃しつつ背後に着地する。ほとんど間髪入れずにレインが攻勢に入り、ボスが煩わしそうにストンプをかける。が、この辺はさすがレイン、ギリギリを見極めて回避する。その背後から、今度は俺がとびかかる。斬り上げて、ボスの背中を使って三角跳び。左手でレッグホルスターから投げナイフを数本抜き、一気に投擲。左のレッグホルスターには、麻痺ナイフを入れてある。今日は最前線に出ると分かっていたので、レベルは最上級の代物だ。ただでさえも、投げナイフは状態異常が高めに設定されていることが多いから、いくらボスといえどただでは済まない。実際、こつちを見たボスは明らかにヘイトがたまっている。そこにさらに、俺は麻痺ナイフを連続で投擲する。それに、ボスの動きが止まった。

「今のうちだ、逃げる!」「好機!全員、突撃!」

俺の声と指揮官の声が重なった。一瞬動きが止まりかけた集団が指揮官の声で突撃する。隠さず舌打ちしつつ、俺も突撃した。まず、空中にアッパーをかまして足で複数回蹴り飛ばす連続体術系ソードスキル「哭空裂蹴撃」をかます。そのまま、空中で発動すれば振り下ろしと斬り上げだけになる刀系ソードスキル「月下柘榴」^{げっかざくろ}につなげる。

地上で発動すると、飛び上がり、飛び上りを挟むので使い勝手がまいちなのだが、空中だと飛び上がり、省略して二連撃だけになり、使いやすいソードスキルとなる。そのまま、小太刀を抜き放ちつつ、幻狼斬を出し、バックキックを繰り返す。

「あと頼んだ！」

「任せて！」

入れ替わりでレインとスイッチ。後ろに居るのは気付いていた。間髪入れずに轟音が響き、深紅のエフェクトが突き刺さる。リーチとそのエフェクトから、おそらくヴォーパル・ストライクだ。そのまま剛直拳からの虎牙破斬。いやはや鮮やかなものだ。きつと本人に言ったら「それ、君が言える？」と返されるのだろうか。

ボスの麻痺が終わる。後ろで見ていると、それが分かった。

「レイン！麻痺が終わる！」

「了解！」

もつとも、本人もそれは分かっていたようで、ちゃんとソードスキルの硬直を合わせて離脱していた。

後ろを振り返る。素早く数え、撤退した数は——ゼロ。

「馬鹿が……ッ！」

毒づいても仕方がない。とにかく、今俺ができるのは時間稼ぎのみ。俺だって碌な戦力

が相棒ただ一人でフロアボス討伐などという無茶苦茶を企む気などない。少なくとも、こいつらを撤退させるまではもたせる。

と、思っていた。そう、思っていた。

時間が経てば実力不足を実感して撤退するものだと考えていた。それまで時間稼ぎをすれば十分だとも。だが、あの石頭は撤退する気など毛頭なく、その代りに無茶な攻め方ばかり指示をした。その都度俺とレインがフォローに回っているが、精神的にもHP的にも回復させていない攻略はもはや体をなしていなかった。それに、この援護ですら俺たちのような練度の高い連携ができるゆえの賜物であり、並みのペアなら速攻で全滅ルートだ。

人間誰しもミスをする。使い古された言葉だ。だが、この場では致命的なミスをした。俺が背後に回って挟み撃ちをしているときに、ボスのプレスモーションを見逃したのだ。レインはちようどソードスキルの硬直に入っており動けない。彼女なら、たいいていの攻撃は問題ないだろう。ダメージディレイラータイプにもかかわらずそれだけで済むほかに、彼女のレベルは高い。だが、問題は。

「まずい……！」

後ろには軍の集団。しかも、その寸前に指揮官は全員突撃の指示を出していた。俺も

飛び出すが、ブレスには間に合わない。彼らでは、あのブレスは耐えきれなくても、その直後の追撃は到底耐えきれない。かといって、もう止められない。案の定、ブレスでレインたちが吹き飛んでいく。そして、ボスは追撃に、その斬馬刀を振り下ろした。その先には、——軍の司令官と、レイン。

ギリギリのところでも間に合う。軍の司令官を突き飛ばし、何とかパリイにかかる。が、重い。見た目通りの重さに、腕が悲鳴を上げる。正面から受け止めず受け流し、小太刀をしまっていた左手も使って、両手を使うことでようやく強引にパリイした。

——鬼怨斬首刀を代償として。

鏢に近いところからぼつきりと折れた、自身の相棒を見る。素人目に見ても、根元から折られた刀が、もう元に戻らないことは分かった。元をたどれば、15層でドロップし、25層の激闘を戦い抜き、今のスタイルを確立するきつかけになった刀だ。思い入れもある。が、仕方ない。

「ありがとな、斬破刀」

かつての名前をつぶやき、右手のメインウエポンを捨てる。地面に落ちるか落ちないかといったところで、刀がポリゴンになった。オニビカリに左手をかけたところで、首筋に閃光が見えた。カウンターで迎撃されて吹っ飛ばされたが、その時一瞬見えた紅白装束から見るに、おそらくアスナだろう。ならあいつも——と思ったところで、想定

通りその影が前衛に躍り出る。

「おっせえぞまっくろくろすけ！前頼んだ！」

「了解！」

俺の声にこたえ、黒い影が前線で動く。それを確認して、俺は下がってポーシオンを飲む。そのままの流れで鞘をストレージにしまう。先ほどの攻撃でそれなり以上のダメージを負ったのだろう、ぐったりしていた軍の集団を、どこか和風な鎧に身を包んだ集団が介抱していく。言うまでもなく風林火山だ。だが、彼らはどうあがいてもパーティの小ギルド。2パーティ分もの大集団を介抱するにはあまりに人手が足りない。それに、アスナと、消耗した俺とレインが下がっている以上、前衛はキリトのみ。いくら攻略組トップの実力を持つキリトといえど、さすがに一人では無理がある。

「くそつたれ……！」

走って集団を離脱しつつ、メニューを速攻で操作して、再び装備を弓に戻す。出し惜しみは無しだ。弓を使って、まずは眉間に一発。回転して位置をずらしつつ、さらに矢をつがえ、片目に一発。完全にヘイトはこっちに向いた。一本矢をつがえ、ほんの少しだけ強く引く。放った直後にもう一本、さらに今度は三本。弓の中でもなかなかの威力を持つソードスキル「トリニティレイヴン」がさく裂するも、ボスは止まらない。ソードスキルの硬直は、俺を蹴つ飛ばすには十分だった。その間にキリトが何とかパリイす

るも、かなり重そうだ。俺も戦列に復帰したいが、ポーションの回復まで待ったほうがいいほどにダメージを負った。レインも、さっきの直撃がかなり効いている。

絶体絶命。どうする。俺の頭を考えが巡る。

「すまん、アスナ、クライナー！10秒だけ持ちこたえてくれ！」

「お、おう！」

「了解！」

キリトの声で、避難誘導をしていたクライナーと、回復に徹していたアスナが切り込む。その声に、俺は一本の矢をつがえる。

（無策であんな無茶ぶりするやつじゃない。何か策があるはず……）

ならば、俺の役目は前線を崩壊しないように支えることのみ。普段より強めに引いた矢に光がとれる。そのままクライナーが吹っ飛ばされた一瞬の隙に、俺はそいつをこめかみに放った。貫通する一本の矢を放つ、射撃ソードスキル“ピアスライン”で俺にヘイトが向いた瞬間に、アスナが足元から攻撃する。足元のアスナをボスがつぶそうとした瞬間に、キリトから声がかかる。

「よし、もういい！」

その声を聞いて、俺が後ろからもう一発ピアスラインを撃つ。今度は得物を持っていた手首を貫き、その一瞬の空白をついてアスナが得物を弾く。その一瞬でアスナとキ

リトがスイツチする。そのまま返ってきた得物を躲したキリトは、背中に現れたもう一本の剣を全力で振り下ろした。もう一度振り下ろされた剣を、二本の剣を交差させることで受け止め、はじき返す。その直後に、その両手の剣が同時に光を放った。それは、紛うことなきソードスキルの光。

「な、」

「なんじゃありやあ?!」

「なに、あれ」

外野の驚きも何のその。普通、そんな真似をしようものなら、システムがエラー判定を起こしてソードスキルが発動しない。両手にそれぞれ武器を持った状態でソードスキルが発動するのは、盾を除けば、俺の変則二刀のような、数少ない例外だけだ。

どうやらキリトは大技を発動させたようだ。その連撃はまるで流れる星屑の如く。なら、こつちも出し惜しみは無しだ。最近発見したあれは、キリトを巻き込む可能性がある。あるので却下。それに、鬼怨斬首刀とオニビカリを除けば、最前線で使える刀などないので、二刀流も却下。となれば、使える手札は限られる。

もう一発トリニテイレイヴンを放つと、今度はあえて虚空に轉身脚を挟んで、矢をつがえて一発撃ちながら体を回転させつつ、瞬時に強くため込んだ矢を放つ。ダツジシヨット」という、これまたソードスキルだ。そして、これだけ短期間で連発したのな

ら。

矢をつがえて、放つ。と思うと、さらに放つ。三発目からは、手と手に持った矢に光がともるようになった。瞬時に狙いつつ、俺が止めるまで連続で矢を射出し続ける射撃系上位ソードスキル「ミリオンシユート」が連続でさく裂する。その連撃に、ボスはたまらず爆散した。

ソードスキルの発動を終了し、上位ソードスキル相応の長い硬直が解けると、俺は思わず片膝をついた。荒くなった呼吸を隠すことなく、肩で息をする。駆け寄ってくる足音に、俺は片手を上げて無事を示した。

「軍の連中は・・・?!」

「全員無事。なんとか、って形容詞がつくけどね」

「何とかだろうが、水際だろうが、生き残れたんなら御の字だ」

とりあえずの懸案は去った。何はともあれ、

「フロアボス攻略完了、だな」

「こんなの攻略って言える?」

レインのツツコミはもつともだ。正直、俺もこれが攻略といえるか、といえれば、疑問符が残る。と、重々しい足音が近づいてきた。

「助力に感謝する」

「それは風林火山、って言って分かんねえな、あのバンダナ武者のギルドのやつらに言つてやれ。俺は敵を排除しただけだ」

「そう、だな。我々にはその力がなかった。君の言う通りであった」

「なら、今度からちよつとは他人の忠告に耳を貸すこつた。毎回俺らみたいなのが守り切れるとは限らん」

「そう、だな。では」

そういつて、指揮官は去つて行つた。

「ところで、刀、どうするの?」

「どうすつかなあ。前線で使えそうな刀は、俺のストレージにやねえし。どっか、手ごろなクエストでも行くか、インゴットから打つてもらおうか」

「どちらにせよ、探索が必要だね」

「だな」

そういうと、俺たちは笑いあつた。

「それはそれとして。それ、なに?」

「・・・言わなきや——分かつた分かつた言うつての」

弓を指さして、レインが問いかける。答えを渋つた俺だったが、レインの笑顔の圧力に押され、俺は喋ることにした。

「エクストラスキル、射撃。おそらくは、ユニークスキルだ」

その言葉に、レインは驚いたように目を見開いた。

「出現条件は不明。つか、分かっていたら公表してる。全く、どこが『ソード』アートだよ。ぶつちやけ奥の手っつか、半分反則みたいな技だから、使わなかった。何せ、至近距離じゃなくて遠距離攻撃を可能とする代物だからな」

「そ、つか。でも、至近距離まで潜り込まれたら、その時点で終わり、ってことだよな？」

「そういうことだな」

「なら、もう少し、パーティ継続、ってことだね」

「ああ。よろしく頼むぜ、相棒」

その答えとともに、俺たちの手がいい音を立てて鳴った。

47. 周囲

その次の日。俺は迫りくるプレイヤーの群れから逃げていた。というのも、例の射撃スキルが記事で話題になったのだ。同じく二刀流スキルもかなりの話題を持つていたから、おそらくキリトのほうにも追手——という表現が果たして適切かどうかは分からないが——が行っているはずだ。あつちはきつとエギルの店あたりに逃げるだろうが、俺は果たしてどこに逃げようか。と、考えながら森の中を疾走していると、見覚えのある動物の影。どうやら今はツイているらしい。素早く装備を隠密ボーナスがふんだんにつく装備に変え、その上から隠密スキルを使う。攻撃せず、あえて静かに待ちながら、相手の後をつける。と、いつも通りというか、ぎりぎり潜り抜けられるくらいの大きさの穴があつた。そこを潜り抜けると、想定通りというか、セルムと会つたあの空間に出た。

「よし、よしなら……」

「よしなら、なん——ああ、君か」

一瞬間こえた敵意満載の声に身構えるが、その声の主が警戒を解いたことで、こつちも警戒を解く。

「驚かせてくれるなよ、セルム。思わず警戒しちまった」

「すまない。ちよつと外が殺気立っていてね。僕も警戒しているんだ」

「あ、多分それ俺のせいだ。すまん」

「・・・どういうことだい？ことと次第によつては——」

「ちゃんと説明する。だからとりあえず話を聞いてくれ」

とりあえずセルムをなだめることに成功した俺は、彼に事情を説明した。事情を説明し終わると、セルムは半ば呆れたように言った。

「なんだ、そんなこと。それなら、君は悪くないじゃないか」

「騒ぎを持ち込んだことに変わりはない。すまん」

「いいって。それに、君自身だつて被害者みたいなものじゃないか。むしろ、ほとぼりが冷めるまでゆっくりしているといいよ」

「なら、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

そういうと、俺は近くに腰掛けた。すると、この前に出会つた、あの狐のようなリスが膝伝いに肩まで上がってきた。前も思ったが、器用なものだ。

「正直、あのままなら見せしめに何人が攻撃してたかもしれないな」

「そんなこと言つたら、またあの子たちが悲しむよ？」

「わーかつてらあ、そんなこと。だから、それは本当に最終手段。俺だつて、伊達に何人

も斬ってきたわけじゃない。どこを斬れば、どのくらいHP減少に補正があるか。なら、HPの減りからから逆算して、どのあたりを斬ればギリギリで済むか。それくらい分かる」

その言葉に、セルムは深くため息をついた。と、そこで気づく。

「そういうえば、君は確か、両腰に刀を身に着けていなかったかい？」

「おう、よく覚えてんな。その通りだ。片方は前の戦いで、ボス——階層の守護獣に叩き折られてね。もう手元がない」

「修理は？」

そういつたセルムに、俺は今残っているオニビカリを抜いた。そのまま、俺の顔の前を持ってきて、根元のあたりを指さす。

「縮尺に当てはめれば、大体この辺からぼつきりと叩き折られてね。修理とかそういう次元のもんじゃなくなってたんだよ」

「・・・そうか」

「まあでも、折られたほうは、本来両手で持つて振るうような得物だからな。俺みたいに、片手で振るうほうが珍しい。それに、もともとこういう得物にも心得はあるから、どうにかなる」

言いつつ、オニビカリを鞘に納める。そこでさらに言葉を続けた。

「ま、そんなだからさ。新しく得物を持ってきたい、っていうのが本音ではあるんだが。．．．さっさとどっか行つてくれないかねえ、追手」

「君を完全に見失つているんだろね。追つてきた人々は、この辺りをうろついているようだよ」

「そつか。そもそも、おとなしくあきらめるようなら、ここまで追つてこないしなあ」

決して長い時間じゃないが、こうしてゆつくりと腰を落ち着けて喋るくらいには長居している。それでも、捜索の手は緩めていないらしい。俺からしたら、そんなときはすでに転移結晶で離脱したと仮定してさっさとあきらめるほうが建設的だと思うのだが、そうはいかない連中ばかりらしい。全くもって厄介なものだ。

「君が良ければ、僕のできる範囲で、君の望むところに送り届けることもできるけど。どうする？」

「そいつあありがたい。なら、下層に白い花の花畑がある。そこに転移することは可能か？」

「白い花の花畑．．．ああ、真ん中より少し下くらいのところかな？」

「そうそう、そこ。頼めるか？」

「お安い御用だよ。朗報を祈ってるよ」

「おう、ありがとな」

そういうと、セルムは魔法を使つて俺を転移した。転移の光が収まると、俺の目には花畑が広がっていた。想像はしていたが、さすがの転移精度である。とっさに周りを見渡すと、ひとりの少女がいた。思わず腰のオニビカリに手をもつていきそうになったが、相手が気付いておらず、敵意もないことに気付くと、俺は警戒を解いた。

俺が近づいていくと、相手の少女も気づいた。ローティーンと思われる、少女というより幼女というような頃合いの子だ。

「あれ、あなたは・・・」

「ん、どこかで会ったかな。ま、俺は悪名もあるみたいだから、そっちかもしれんが」
「えっと、この前ここでお会いして・・・」

頭の中で記憶を引っ張り出す。とりあえず手当たり次第に記憶の引き出しを開けていくと、一つ、それらしき記憶が見つかった

「ああ、ずいぶん前ここで会ったっけ」

「あ、はい、多分それです」

それで関連して思い出した。前、スカウトもどきの時にオレンジギルド一つ壊滅させたとき、キリトといた子だ。

俺の答えに、少女の声が沈む。ま、目の前で塵殺を繰り広げたやつが目の前にいるわけだ。自然体でいる、というほうが無理だろう。そんな俺に、少女のそばを飛ぶ水色の

竜は、変なことをしたら嘔みつく、とばかりの目線を飛ばしてきていた。というか、完全に威嚇していた。

「それは、君の相棒か？」

「え、ああ、はい」

「あー、さっきのつながりで思い出した。だから、プウネマの花で君を狙ったわけだな、奴さん」

「はい。正直、あなたがいなければどうなっていたか・・・」

「ま、これでも、PVPはそこそこ強い自負があるからな。つつても、キリトは攻略組トップクラスだ。あいつでも全く問題はなかっただろうな」

プウネマの花はビーストテイマーが思い出の丘に行かないと咲かない花だ。売り飛ばす側としては垂涎ものだろう。俺は小太刀を左手で持って、そのままストレージに格納する。

「ポーズも兼ねるけど、これで警戒を解いちやくんねえか。俺も小動物は好きだな」
「あ、はい。こらピナ、もういいでしょ」

主でもある少女の言葉に、ようやく幼い竜は警戒を解いた。

「いい子だな」

「はい。大事なパートナーです」

「そうだな。・・・パートナーは、大事だよな」

「ロータスさん、で、あつてましたよね？」

「おう、そうだ。てことは、知ってるのか？」

「ええ、知ってますよ、攻略の鬼神の噂」

「・・・その言い方はやめてくれ」

俺はピクシー^{妖精}なんて柄じゃないし、ましてやサイファー^{英雄}なんてもつと合わない。

「ま、俺はそろそろ退散するかね。ここを突き止められたらたまつたもんじゃない」

「お気に入りなんです、ここ」

「まあ、ね。この花が好きでね。って、これは前話したか」

「そうでしたね。花言葉は、苦難の中の力、でしたよね」

「こそ。よく覚えてるな」

「親譲りの本好きなんです」

「そか。大切にしなよ、そういう趣味は。」

んじやな、嬢ちゃん。またどつかで、な」

頭をひとつ叩いて、俺は歩き出した。オニビカりに不満があるわけではない。というか、むしろこんな魔剣クラスの得物など、そうそうありはしない。だが、これでは俺の本来の戦い方はできない。新しい得物がほしいところだ。

得物がほしい、といつても、特に情報などあるはずもなく。とりあえずはアルゴに頼ることにした。

「強い武器か、良質なインゴット？」

「ああ、無いか？」

「いくつか心当たりはあるガ・・・ぶつちやけオニビカリでジューブンじゃネ？」

「威力はともかくとして、手数が、な」

「ぜいたくな悩みだこと・・・」

ため息交じりに言うと、アルゴは少し考えだした。

「パツと思いつくのはあれダ、何層だったかのクリスタル。確か67層だったはず。ただあれ、戻るのが面倒らしいんだよナア」

「どういうことだ、それ」

「めつちや深い縦穴のドラゴンの巣を漁るとあるらしい。その深さから、ロープで降りていくにも面倒。ダンジョン扱いで、メッセなども無理。取ってきた奴に言わせると、ドラゴンが戻ってくるのを待って、背中に剣をアンカー代わりにぶつ刺して戻ってきたんだト」

「ドラゴン本体は？」

「ドロップ無しだ。あれこれ考えられる手は尽くしたんだがナ。したとしても超低確率と考えるのが自然で、狙うのは非現実的、と言わざるを得ないナ」

「・・・あれま」

正直、手間がかかるのは勘弁だ。ドラゴンを倒してドロップしない、というのであれば、

「ならほかに何かないのナ、って顔してるナ」

「あるのか？」

「一応、ナ。ただ、これは半分噂、情報料はまけてやるヨ」

「教えてくれ」

俺がなかば食い気味に聞くと、アルゴは落ち着いた口調そのままに話した。

「オレっちが聞いたところによると、火山の中に、剣でできたボスがいるんだト。やたら強くて、くたくたになって逃げてきたってそいつは言ってたナ」

「その気になれば撤退できるタイプのボスなわけか」

「そうみたいだナ。そいつの前に行くくと、強制的にタイムマンデュエル。パーティ組んでるとランダムで一人だけ選ばれるらしい。しかもこのボス、鬼強。特にフラグ立てた覚えも、クエスト起動させた覚えもないんだト」

「つまり、今俺が行ってもそこにいる可能性は十分あるわけだな？」

「そういうことになるナ。そいつとは別に、雑魚も含めて全体的に敵は強いし、突然現れるタイプのボスもいて、そこまでたどり着くのも一苦労らしくてナ。まだこのボスに關しては情報が薄くて、こつちも把握できてないんだ」

「わお、天下の鼠様が珍しい」

「オレつちだつて知らないことの一つや二つあるつて。マ、これだから情報屋はやめられないんだけどナ」

そういつて彼女はニヤハハと朗らかに笑う。ま、とにかくだ。

「劍でできたボスつてことは、ドロップも劍だろうな」

「マ、順当に考えれば、そうだろうナ」

「なら、話は早い。俺なら大丈夫だろうしな。タイマンなのは確定なのか？」

「探索の過程で出会つたらしいぜ。そのパーティメンバーはもの見事に全員数回ずつやられたそうダ。全損デュエルつて言つても、降参リザインはできるらしい」

「わっほい強そう燃えるねえ」

「ま、ハスボーならよほどの強敵じゃない限り、少なくとも死なないだろうしナ」

「とりあえず、情報料。いくらだ？」

「今回に關しては特別サービス、ツケだ。その代り、その情報をしっかりバックしてくれ」

「あー、なるほど、そういうこと。了解」
それだけ言うと、俺はその場を離れた。

48. 変わる関係、変わらない関係

さて、情報を頼りに、俺は例のボスを狩りに来たわけなのだが。

「……あちい……」

もはやこのセリフ、何回言ったかもわからない。そう、このボス、火山地帯にいたのである。落ちたが最後、溶岩に煮られて死ぬ、なんていう、超レアな死に方ができること請負だ。いや全くシヤレにならないが。しかも、ところどころ道が狭くなっているうえに、そういうところでも敵はお構いなしでやってくる。難易度だけで言えば下手な迷宮区以上だ。

「全く、敵が強いのはいいけどよ、それ以外で神経削つていくつて、それどう、よー」
振り返り様、弓を構えて、後ろにいた蝙蝠の頭をぶち抜く。ヘッドショットを決めたものの、一撃とはいかなかった。落ちないようにバックステップで距離を取り、あえて敵を誘い込む。突進に合わせて回り込むようにステップし、蹴とばす。突進の勢いもあつて、その蹴とばしで相手は溶岩に触れて、HPが減った。とどめに矢を連射し、戦闘終了。目的地の祭壇は、もう少しのはずだ。

次々に来る雑魚をなぎ倒す。とりあえず、右から噛みついてきた狼は、右ステップで

躲しつつ弓を右手に持ち換えて、左手でぶん殴る。一瞬のデイレイの瞬間に、素早く矢をつがえて、足を狙って撃ち抜く。こけた瞬間に、一気に詰め寄る。

「イクイツプメントチェンジ、セットワン」

鬼怨斬首刀がなくなつたことで片手が開いたことで、オニビカリだけになつた近接武器に変える。肘鉄でかすかにデイレイを奪うと、柄頭で突いて一瞬動きが固定されたところに、手首を返して斬り上げる。左足で一瞬溜めを作つて転身脚を繰り出す。一回転して体制を立て直し、剣技連携でZ字を描くように切り裂く短剣ソードスキル「説破」で撃破。ソードスキル二つ分の硬直の後、振り返らずとも感じた気配で横に飛ぶ。と、つい先ほどまでいたところに、太い双腕がたたきつけられた。あれを食らつてはひとたまりもない。振り返ると、そこにいたのは、見上げるほど大きい燃え上がる熊。カーソルを合わせると、名前は「The Blaze Claw」、HPは二本出た。定冠詞がついているところと、HPバーが複数あること。そして何より、先ほどのパワー。間違ひなくボスだ。

「全く、逃がしてくれそうにもないとは困つたな」

この後ボス戦が予定されているつていうのに、これはきつい。とにかく、そのまま戦闘に入ることにした。

まず相手の繰り出した攻撃は、その巨体相応の重量を最大限に生かすボディプレス。

これは横に避けることで躲す。と、素早く装備を弓に変え、とりあえず一矢放つ。想像はしていたが、ほとんどHPバーは減らなかつた。やはりというか、巨体相応のHPがあるらしい。削り切るには少々以上に骨が折れそうだ。というか、それ以前に、武器が持つかどうか。さすがに補給なしでボス連戦はやつたことが無い。となれば、体術で削つていくくらいか。幸いなことに、この敵は最前線ほど強くない。ならば、予備の武器を使い捨てるくらいの気概で行けば倒せるはず。そう思った俺は、とりあえず武器を、ステータスが高い代わりにあまりに大きい、というか長いので使つていなかった刀、“白波”に変更する。野太刀に分類されるこいつは、その大きさから俺も両手で持たざるを得ないので、今までのスタイル通りとはいかないだろう。が、どうにかする。白波を構え、俺は再びボスに向かっていった。

何とかゲージの一本目は削り切つた。が、まだあと一本ある。かなりの強敵だ。これは、正直、きつい。何より、ボスは後半が本番であることが圧倒的に多い。改めて、白波を正眼に構え、相手と向き合う。相手は怒つたように咆える。踏み込みとともに放たれたストレート横にステップして躲し、その腕を斬りつけようとして、左から飛んできたフックを跳躍しながら刀で受けて下がる。と、その下がった先には、先ほどストレートを繰り出した腕があつた。先ほどのあれはおそらくジャブ。本命はおそらく、こ

のフック。つまり、

(誘い出された・・・っ！)

後悔してももう遅い。こうなったら、一撃を甘んじて受け、反撃の一手を図る。こういうパワータイプに対しては最悪に近い一手だが、仕方ない。覚悟した瞬間だった。

「やああああっっ！」

甲高い気合とともに、その腕が弾かれる。できた一瞬の隙をついて、一気に反対側にかけて抜けつつ、白波を振り抜く。俺の勘違いでなければ、あいつのはず。あいつならきつと——

「はあああああっ！」

——ソードスキルで、追撃する。

甲高い、ソードスキル特有の音。斬られた回数は4回。おそらく、バーチカルスクエア。振り返り様突きを放つ。抜きながら回転しつつ、浮舟から緋扇を出す。デイレイが入っている間に、金属のジェットエンジンを思わせる音が轟く。デイレイが抜けきる前にさらに爪竜連牙斬で追撃した後、転身脚を挟んでから風牙絶咬につなげる。その向こうで、加勢してきた相手はバックキックで距離を取っていた。

そこにいたのは、やはりというか、想定通りレインだった。なぜ彼女がここにいいのか、というのはまた後で聞けばいい。先ほどの攻勢で、HPは残りゲージ8割といった

ところか。とにかく、一気に片を付ける。

言葉を交わさずとも、二人は揃って逆方向に動いた。散開した俺たちに、ボスはその腕を振り回した。俺たちはいったん距離を取り、俺は装備を素早く変更して弓で牽制する。俺のほうにヘイトが向いた瞬間に、レインが跳躍してとりつき、うなじを削り取る。ボスが煩わしように背中腕を回し、投げられる前に離脱する。その間に俺が斬りかかる。俺の袈裟に対して、相手は肉を切らせて骨を切る選択をしたらしく、俺の攻撃を受けながらその爪のひっかきを繰り返してきた。俺もあえて同じ選択をした。爪のひっかきは十分痛い、このくらいなら余裕で耐えられる。胴を一字に切り裂くと、追撃で突きを繰り返して、蹴とばして距離を取る。バックキックじゃなかった。硬直は無い。だから、次に飛んできたストレートは紙一重で回避に成功する。そのまま腕を切り裂き、返す刀でさらに斬り払って少し後ろに下がる。その間に、ボスを挟んだ向こうからソードスキルの音。少し間が開いて、それより少し長いソードスキルの音。ヒット数からして、二回目は連続。ボスの陰で見えないが、バーチカルアークあたりだろうか。なら、もうこつちとしても出し惜しみする理由はない。ソードスキルで一気に片を付ける。旋車でスタンをとって、剛直拳で長めのデイレイを入れる。爪竜連牙蹴で追撃したところで、今度はレインが反対側からソニックリプで飛んでくる。あえて硬直を受け入れたのち、硬直の抜けた俺が相手のストレートを受ける。その間に、レインが懐に

入って剛直拳をぶっ刺す。そこに、俺が拳を地面にたたきつけ、天狼滅牙を出した。今なら、ここにはレインしかいない。情報漏えいのリスクは少ない。なら、あれで決めるか——！

「レイン離れろ！」

一つ叫び、目の前で刀を垂直に構える。最近見つけた、刀系裏最上位ソードスキル。繰り出している本人すら目を回しかねない、超速の超連撃。漸毅狼影陣さんこうういじんが突き刺さったことで、相手のHPはゼロになった。白波を腰に納刀しようとして、そこに鞘がないことに気付いた。仕方なく、白波を握ったまま手を下ろす。

「お疲れ」

「おう。どうしてここが？」

「君が武器の情報を買った、っていう情報を買ったんだよ。全く、水臭いよ。そういうことなら言ってくれば協力したのに」

「そういうことか。これは俺のことだから、巻き込むのもな、って思ってたな」

「それ、が、水臭いって。私だって、もっと君の力になりたいんだから」

「そ、つか。そうだな。相棒だしな」

「うん！」

満面の笑みでレインが肯定する。つられて俺も笑った。

「んじゃ、改めて、よろしくな」

「うんっ！」

拳を突き出すと、レインも拳を当てる。ま、これにていつも通りだろう。

ボスのところに行くのと、そこには一振りの剣が突き刺さっていた。その周りは祭壇のようになっていた。だが、俺にとつては祭壇とは程遠く、

「なるほど、決闘場、つてわけか」

道中で、レインに事情は説明した。この舞台には俺しかない。おそらく、これがフラグだろう。そのまま手をかざしたところで、剣が光った。光が収まると、目の前には剣でできたボスがいた。いわゆる人型タイプの形だが、四肢はすべて剣、胴体にも剣のような意匠が見える。ボスの名前は、"The Sword Dancer"。事前情報通り、レインは場から弾かれ、俺だけのタイマンだ。

「上等……！」

武器を白波からオニビカリに変える。片手フリーの状態で半身になり構える。空中のカウントが終わる寸前、全力で飛び出した。極端な話、0秒でなければ、一万分の一秒でも一兆分の一秒でも攻撃判定にはなる。自分の移動速度、カウント、距離。それから逆算して、ぎりぎり超えないくらいでの踏み込みを行ったのだ。卑怯この上ないと

俺でも思うし、普通はこんな手は使わない。が、俺からすれば、この手を知っている奴はその数十秒後にはポリゴンにしているつもりなので、ほとんど問題ない。

俺の読み通り、空中のカウントが“DUEL!!”に切り替わった直後に、俺がまず一太刀入れることに成功した。が、想定通りというか、手ごたえが非常に硬い。あえて振り抜かず、当たった反動でくるりと体を回転させ、もう一太刀入れようとしたところで、相手が右腕を後ろに振ってきた。回転のエネルギーの乗ったかち上げでこれをいなし、胴体にストレートを入れ——ようとして、そのまま通り過ぎて反対側に回った。というのも、

(ち、胴体も刃つてこういう弊害があるのかよ・・・！)

直前で気づいたから何とかだったが、あのまま殴っていたら、殴ったこっちの拳は果たしてどうなっていたことや。最悪、腕の欠損が発生していたかもしれない。オニビカリは確かに強力だが、これだけに頼るわけにはいかない。今オニビカリを喪失したら、痛手などという言葉では済まない。一瞬で距離を取り、武器を白波に戻す。拳が使えないというデメリットはあるが、あえて拳を封じたほうが、こちらの自傷防止にもなっているだろう。こういう相手には体術のほう効きそうだが、その辺はうまく加減するしかあるまい。正眼に構え、相手の動きを見る。すると、相手が垂直跳びから、かかと落としの要領で剣を振り下ろしてきた。横に回避し、薙ぎ払う。硬質な感覚をよそ

に、そのまま蹴とばして距離を取り、メニューを操作。白波をしまつて、片手に現れたのは、いわゆるガシヤポンのカプセルサイズの黒い球体に、紐のついた棒が貫通しているもの。正直あまり使いたくない虎の子だが、このまま文字通り殴つていてもキリがない。どれほどの効果が期待できるか。でも、このまま斬つたり殴つたりするよりまだましだろう。

予想通りというか、距離を取つた俺に対し、相手は距離を詰めてきた。バックジャンプしつつ、球体のほうをできるだけ回転させないように放る。球体に十分相手が近づいたところで、俺は紐を思いっきり引っ張つた。その瞬間、見た目からは少し驚くくらいの爆発が発生した。

俺特製、手投げ爆弾。手榴弾のようなものだ。67層ボス戦で使つた音爆弾は、衝撃を与えると音を発生させる素材を用いたもので、これとは関係ない。というか、あれにつけたら威力がどのくらいになるか。文字通りの手のひらサイズだったのにもかかわらず、相手のHPは7割ほど減少した。手榴弾と大きく違うのは、純粹に紐を引っ張るだけで大きく裂することだ。正確には、紐を引っ張り、それに連動した棒と、内部の火薬との摩擦で着火、高い圧力の火薬に引火してドカン、というからくりだ。・・・試作したときの威力が思いのほか大きく驚いたのは今でも覚えている。最も、紐が安全レバー（信管）の代わりになっていることを考えれば、これもある種の手榴弾か。

先ほどまでの攻撃で、大体残りは1割。どうやら見た目通りの紙装甲らしい。あえて武装は戻さず、俺は徒手空拳のまま突進した。たいていの人型には、人に似ているから生まれる行動の読みやすさだけでなく、もう一つ大きな弱点がある。それを有り余る攻撃の多彩さが厄介なのだが、そこは俺の読みで何とかする。できるからこそ、攻略組を離れていてなお、俺はトッププレイヤーとして君臨できる。まず、俺から見て右からの袈裟はあえてかがむことで回避。直後の片足の斬り上げはあえて内側に回避し、側面部分を強打。想定通りというか、剣先という非常に小さな面積でその体を支えていた相手はたまらずタンブルした。普通だったらマウントを取ったうえでタコ殴り。だが、今回はそうはいかない。相手が剣の体である以上、できれば自傷は避けたい。だから、今回に関しては特別ケースだ。

人型エネミーの大きな弱点。それは、自分たちの体と構造が似通っていること。つまり、どんな人間でも、もっと言ってしまうえば動物である以上絶対ある弱点。早い話が、関節の位置である。動物でもある以上弱点ではあるのだが、同じような身体構造をしている人型エネミーには特にその部分は弱点となる。何せ自分の体なのだ、分からないほうが逆におかしい。今回みたいなのは特にイレギュラーだが、甲冑で固めたような相手でも、その関節の部分には柔軟性と伸縮性に富んだ素材を使う。つまり、強度があまりない。で、俺の予想が正しければ、この敵の関節に当たる部分は――

倒れた敵の肩の部分を踏み砕く。と、少しズレる感触がした。物理的に言えば、電磁力か何かなのだろうか、剣先と柄に当たる部分でつながっていた肩関節が外れる。人間ならば靱帯などに大きな負担がかかるものの、何とか応急処置として元の位置に戻すことはできるし、リハビリでちゃんと完治させることもできる。だが、この敵には靱帯も何もない。ならば、この敵の関節に当たる部分は、要する力が非常に大きいというところはあるものの、文字通り腕を外すこともできるはず。実際、俺の推測にたがわず、かなりの力を要したものの、腕を文字通り外すことに成功した。指に当たる部分のナイフを数本もぎ取り、両手に構える。そのころには相手も立ち上がって体制を整えていた。上等、相手が固かろうが知ったことか。こうなったら短期決戦、そのためには、

(手数に物言わせて潰す！)

両手のナイフで、隻腕となった相手の攻撃をいなしつつ、とにかく斬って斬って斬りまくる。——そばにいたレイン曰く、「なんかどこからかオラオラオラオラオラって聞こえてきそうだった」とのこと。ま、とにかく、そうして俺はレイドボスを討伐することに成功した。ポリゴンの中に出た“*You're Winner!!*”という大きな表示とともに、俺にウインドウが表示される。予想通りというか、ドロップしたのは大量の剣。防具、アイテム類すらなく、本当に剣しかない。一つ一つは精査していくほか——と考えていると、俺の周りにガランガランと複数数の重たいものが落ちる音がし

た。周りを見ると、ドロップした武器の一部が転がっていた。もう一つ出てきた通知ウィンドウには、「ストレージ格納限界を超えました。周囲にドロップします」との表示が。それを見てか、レインがこっちに来た。

「お疲れ」

「おう、なかなか楽しいというか、毛並みが違って面白かった」

「その周りは？」

「格納しきれなかった剣だ。格納限界を超えたらしい」

言いつつ、一つ一つを精査していく。どれも、十分前線で使える名剣レベルばかりだ。

「手伝ってもらえるか？」

「もっちろん！」

そういうと、片っ端からドロップした剣を拾っていく。一瞬でドロップした剣は、手分けして俺たちのストレージに入ることになった。ちなみに、ストレージ格納容量は自身のSTRに影響する。つまり、これを格納しても何も問題なさそうなレインのSTRはかなり高いことになる。やはりというか、相当にこの子のSTR、その大本のレベルは高いらしい。

「さて、帰るか」

「そうだね」

そういつて、俺たちは転移結晶で戻った。

さて、そうしてリズベット武具店に来たわけなのだが。

「で、この量をインゴットに変えてほしい、ってこと?」

「ま、全部とは言わん」

「あつたりまえじゃない!この量全部インゴットにするのにどれだけ時間かかると思っ
てんの!」

「さあ?」

「さあ?じゃないわよ!」

さすがにこの要求は無茶だったらしい。ま、ざつと見積もつて名剣クラス数十本。手
間も相当のはずだ。

「じゃ、鍛冶屋チヨイスで俺に合いそうなので」

「え?」

「何となくあんだろ、どんな武器からどんなインゴットができるか、逆にどんなインゴッ
トからどんな武器ができるか。そんなあやふやな感覚でいい。選んでくれねえか?」

「自分で選べばいいじゃない」

「俺にその手の目はないんでな」

「なら、その手の目がありそうで、あんたのことよく知ってる適任が、あんたの隣にいるじゃない」

そういわれて、隣の少女に目を向ける。と、彼女は少し拗ねたような表情になっていた。

「レイン」

「なに？」

若干だが声も拗ねている。あれ、なんか俺やらかしたかな。

「頼めるか、剣の選定」

「分かった」

あれ、本当に俺なんかやらかした？ こういつては何だが、怒るところは怒るが、拗ねるといふ反応は珍しい。正直、対処に困る。

「あんたバカねー」

「・・・？ 突然なんだよ」

隣に立ったリスが俺にだけ聞こえるくらいの声量で突然切り出した。俺も同じくらいの声量で答える。

「思い、酌んであげなさいよ」

「やっぱりなんかやらかしてた？」

「あ、そのくらいは分かってたんだ」

「何となくな。なんであんな拗ねたみたいな態度になつてゐるのかわからんから謎なんだが」

「そこまで分かつてんなら上出来ね。拗ねてることに關しては放つておけばいいわ、本人が折り合いつけるだろうし」

「そういうもんか？」

「そういうもん。同じ女の感性、信用しなさいって。で、問題は」

「・・・問題は？」

「あんたが気付いてないってことよ。待つだけっていうのも、それはそれで辛いんだからね」

「・・・よくわからんが分かつた」

どこか釈然としないが、そもそも俺が物の原因が分からないのが悪い、というのが分かつただけで、今は前進とする。と、レインのほうも決まつたらしい。

「お待たせ！これなんかどうかかな？」

そこまで話したところで、レインが劍を持ってきた。俺の白波に匹敵する長さを誇る、明らかに両手劍と思われる大型武器。劍先に返しのようなものがついている、どこか錨を思わせる武器だ。ウィンドウを開くと、そこにあつた説明文を読む。

『アンカーソード』

Range: Two Hand

伝説の海賊が使ったとされる両手剣。海賊は義賊であったが、とある事件に巻き込まれ、悪党として語られるようになった。だがその信念は、剣として残った」

「なんか、似てるなーって」

「誰に？」

「あなたに」

「俺にか？どこが？」

「あー、何となくわかるわ」

「いやいやどこが!？」

「何となくだつてば。でも、いいのね？」

「こいつが選んだ剣だ、間違いはないだろう。頼む」

俺のツツコミをいなし、確認したリズムに俺は言いきった。それに少しだけ笑うと、彼女は鍛冶屋の顔つきになった。

「見ていくなら構わないけど、長いわよ」

「かまわん」

「なら私も」

俺たちの返答はおそらく聞いていない。というより、耳に入っていない。

炉に剣がくべられる。見る見るうちに剣が赤熱し、それをハンマーで成形していく。少しして、剣はインゴットになった。近くにある、冷却用の水につけて、リズは一言、「・・・奇麗・・・」とこぼした。俺も、おそらくレインも、そのインゴットに見とれてしまった。そのくらい、そのインゴットはどこか星空のように澄んでいた。

「やるわよ」

おそらくは自分に向けて、一声かかる。今度は先ほどの逆だ。インゴットを炉にくべて、赤熱したインゴットにハンマーを振り下ろす。カーン、カーン、と音がする。それを俺たちは、息をすることすら忘れる勢いで見つめていた。と、インゴットが輝いて、みるみる刀の形をかたどった。

形状はいたつて一般的な打刀。刃紋はなく、刀身は澄んだ水色——否、氷色をしていた。

「はい、手に取ってみて」

言われて手に取る。不思議としつくりきた。ウィンドウを表示させ、銘を見る。

『幻日』

Range : Two Hand (Usualy)

その刀身は在りし日を映すと言われる刀』

「試し振りしてもいいか？」

「ええ、もちろん」

その言葉を受け取ると、俺は店の外に出た。集中して構える。相手が上段から振り下ろしてくることを想定し、抜き胴の要領で胴を薙ぐようにして振り抜く。一発で十分だった。

「さすが、いい仕事だ」

「お代はいいわよ。あの分の剣、全部インゴットにするだけで素材代がかなり浮くから」

「ねえ、なら私の剣も打っておいてもらえない？また今度取りに来るから」

「お安い御用よ。そっちは彼氏チョイスじゃなくてもいいの？」

「彼氏ちゃうわ」

「いいよ、リズさんに任せる」

俺の言葉はスルーして、リズは笑った。

「OK、いい剣打ってあげる。期待しておいて」

その言葉を受けて、俺は改めてリズに礼を言った。

「ありがとな、リズ。レインも」

「いいって」

そのまま店を去ろうとする背中に、

「末永くお幸せにねー」

「やあかまし」

そんなリズの冷やかしを受けつつ、俺たちはリズベット武具店を後にした。

49. 表と裏

それから数日後、俺はレインとともに75層主街区コリニアにある、ローマのコロッセオのようなどころに来ていた。というのも、ヒースクリフとキリトがデュエルすることになったらしい。今や攻略組トップといってもいい二人がデュエルするとなれば、自然と耳目は集まる。それは分かる。が、

「はーい、串焼き一本200コル! 安いよー!」

「バタービール一杯100コル! 味は保証するよー!」

「勝敗予想はこつちだよー! 一口10コルか、一発儲けようぜい!」

「・・・何でこんなお祭り騒ぎになつてんだ?」

「なんかね、KOB側の経費回収と、こういうお祭り騒ぎが最近なかったプレイヤーの要望と、いい加減ネタが尽きかけてきたマスコミ陣営の利害が一致した結果なんじゃないか、つて、エリーゼさんが」

「あー、なるほどな」

俺の疑問に、既に答えを出していたエリーゼの理屈に納得した。ましてや主役は有名な人なのだ、どうあつても話題にはなる。何より、傭兵としてあれこれいろんなプレイ

ヤーを見てきたりしているエリーゼの分析は的確である場合が多い。今回もきつとそ
うだろう。

「さて、どうする?」

「観客席行かない?」

「そうだな」

レインの言葉で移動しようとした矢先、俺たちに声がかかった。

「あー、お二方もいらっしやっておりましたか」

声のほうを向くと、たいそうな腹をお持ちな男がいた。確か、

「ダイゼンさん、でしたっけ」

「そうです。覚えてもらって置いてうれしいですわ」

「で、何か用事があったんじゃないですか?」

「ああ、ワシとしたことが。」

いやはや、前座でもう一つ、大きなデュエルをやるか、という話が、急に持ち上がり
ましてな。となると、ビジュアル的にもうちの副団長さんに協力を願ったんですがな、
旦那さんと一緒にいたんで、ま、拒否された、ということにしようかと思ひましてな」

「長い。三行」

「前座つちやあなんです、デュエルしてもらえやしまへんか。何せ、攻略組を支えてき

て、ここ一番で復活した鬼神コンビ。そのデュエルとなれば、客目は集まりましよう。・・・前座、というのが申し訳ありませんが、後程報酬はお渡ししますし、今日の席は特等席をご用意します」

俺の端的な要求に帰ってきたその言葉に、俺はレインと顔を見合わせた。お互いの顔に、どうする?と書いてあった。

「私としては、場所はともかく、久しぶりに手合わせしたいとは思ってたから、願ったりかなったりですけど・・・」

「OK、なら決まりだ。」

ダイゼンさん、その代りひとつ条件。報酬は直接もらいに行く。その時に、クラディールっていう団員について、本人には内密にして情報をもらいたい。頼めるか?」

「ええ、そのくらいお安い御用ですわ。こっちはです」

そういつて、腕で指し示す。そちらに俺たちは歩いて行った。ダイゼンさんの言葉が真実なら、おそらくそこまで時間的余裕があるわけではないだろう。

「こうしてじゃなくても、デュエルするのって久しぶりだな」

「そうだね。戻ってきてからデュエルしてないもんね」

「前はちよくちよくやってたんだがな」

「その時から全然勝てなかったけどね」

「あの時とは状況が違うだろ。もう俺のほうがレベル低いし」

「まあ、ね。でもその代り、P O HとかザザとかとP V Pの練習してたわけでしょ？」

「それは、そうだな」

「なら、そういう意味じゃ負けるかもね。悔しいけど、あいつらはP V Pに関しては強い

だろうから」

「そんなこと言ったら、こつちこそ。俺のほうがレベル低いからな」

「レベルがすべてじゃないでしょ？」

「ま、そうだけど」

「手加減したら怒るからね」

「誰がするか。てかできるか」

そう言いつつ、手を出す。意図を察して、レインも手を出して、何も言っていないのに示し合わせたように二人の手が中間で鳴る。

「お二人かた、そろそろお願います」

K O Bの伝令役の声で、俺たちは決闘場に入場した。そこから見上げた観客席は、想像以上に人が入り、熱気があつた。

「こうしてみると圧巻だな」

「本当にちよつとしたお祭り騒ぎだね」

俺たちも、その光景と雰囲気思わず圧倒される。だが、やることは同じだ。

「さて、いつも通り、お互いの剣先が当たらないくらい距離で、初撃決着モード。時間制限は、今回は無し。それでいいな？」

「うん、いいよ」

「よし」

そういうと、俺は幻日を抜いた。レインも、自身の剣を抜く。切先を落とした、細身の剣。一目で業物だと分かる。あの後リズに打ってもらった、と言っていた剣だ。名は確か、

「フェアースード、だっけか。こうしてみるのは初めてだな」

「すごくいい剣だよ。素直で扱いやすくて」

「そうか。さて、このくらいか」

そういうと、俺は幻日を左手にいったん持ち替え、メニューを操作する。少しして、空中に60のカウントダウンが始まった。それを見て、俺は幻日を再び右手に戻して、オニビカリを抜き放つ。

「最初から二刀で行くんだね」

「お前さん相手に、手加減も隠し玉もいらんだろう」

何より、隠すような手札がない。俺は右手を正眼に、左手は手元に、胸元に剣先が来るような構え。対するレインは、剣道の中で似た、少し俺から見て左側に剣を傾けた構え。左手は体側。仮にもお互い相棒だ、手札はある程度以上に読めている。この駆け引きは実質無意味として、お互いあえて一番考えられる攻撃パターンが多い手札を切った。

カウントが10を切る。

「行くぞ」「行くよ」

同時に俺たちがつぶやく。カウントダウンが終わった瞬間に、俺たちは同時に踏み込んだ。俺はあえて胸元に寄せたオニビカリで押すよう斬りかかる。レインは左手で柄頭を軽く押しつつ、右にステップして軸をずらしつつ俺の攻撃をいなす。直後にその陰から右手で振るった振り上げは横のステップで躲す。左手での俺の追撃はバックステップしつつ距離を取る。すかさず追撃に入る俺に、レインは逆に踏み出しつつ突きを見舞う。ほんの少しの体捌きで躲し、あえて急ブレーキから、刀を握った手でバク転の要領で繰り出したサマーソルトキックで得物を弾きにかかると。が、これはレインが素早く得物を引き戻したことで躲される。着地でしゃがんだ俺には雑ぎ払いがお見舞いされるが、これに關しては逆に着地時に交差させた腕を利用して、居合の要領で二段の飛び上がりでの斬り上げで攻勢防御。これは素早いレインの太刀捌きでいなされる。降り

際に二刀同時の振り下ろしはバックステップで躲される。そこまで読んでいた俺は、着地と同時に二刀で交互に4回突きを見舞うが、これは下がりの回避しつつ両手でいなされる。ただし、最後の一太刀はいなしつつ前進し、斬りかかる。最後のいなしの構えを見た時点で俺はすぐさまに相手の意図を読んで、右手の刀を盾にレインの拳を防御しつつ後退する。続いてきた相手の袈裟を、左手でたたき落とす、続く右手の胸元への突きは左手でいなしつつ後退され、お互い距離を取る。仕切り直しだ。

「お互い、なまつてはいないようだな」

「そつちこそ。隙あらば攻める姿勢、変わつてないね」

構えたまま笑い合う。だがその目は一厘たりとも笑っていない。

ここまで、レインは突きを多用している。突き技というのは、ピンポイントで攻撃できるので当たり所さえ正確にコントロールできれば、一撃で比較的高い威力を、しかも簡便に得ることができる。だが、その反面、当てづらく躲しやすい。あえてそれを細身の剣で正確にやっつてのける技量には舌を巻くばかりだが、それだけの技量があつてなお、ここまで突きを多用する理由が読めない。何より、突きはモーシオンが独特で読まれやすいわりに、引き戻してから次の動きにつなぎにくい。かといって突きつばなしから薙ぎ払いにつなげても牽制程度にしかならない場合も多い。これに関しては腕を伸ばした状態では始動位置の違いやら力の入り方の違いやらが影響するからだ。あと、左

手をほとんど防御に使っていることも気になる。俺の記憶が正しければ、彼女は俺と同じで、片手がフリーになったら、拳による体術をフル活用した攻撃をやってくることが多い。ましてや俺は今二刀。彼女の体捌きを見れば、鎬の部分をやざやざ触れるというリスクを冒すより、普通に躲したほうが幾分楽だ。となれば、次は薙ぎ払いを多く使った打ち合いか。と、俺は読む。

再びの踏み込みと同時に、レインは突きを放つ。左手でいなしつつ、あえてそのまま左手で切り返しつつ左手を狙う。下がりつつこれは回避し、切り返した左手はかがんで回避。右手を封じる狙いを読み、拳の警戒もかねて少し後退する。その隙を逃さず、すかさずレインが追撃に入る。それを読んでいた俺は、刀を納刀してわき腹にあるホルスターからスローインググタガーを抜いて投げる。が、これは先に足の前に構えられたレインの剣で防がれる。突進のエネルギーも載せた振り下ろしは、あえて飛び込みつつ放った掌底で攻める。当たった感覚は確かにあったのだが、

(浅い……っ)

当たると寸前、自分で後ろに飛ぶことで回避していた。それは、俺が掌底に込めた力の割に大きく吹き飛んだことが証明している。今の攻めは我ながら結構意表をつけたと思っただが、とつきの反応は攻略組に長くいたせいだ。その手のステータス的な意味での速度は相手のほうが見慣れているはずだ。限界速度域での戦闘は向こうのほうが

いろんな意味で上手^{うわて}。できるだけPVPの範囲内で戦うことがこちらの勝利条件の一つだと思っていたのだが、少しそれは訂正する必要がありそうだ。

小太刀を右手に持ち替える。右手を前に出して少し斜めに、左手は胸の前に構える。それは、かつて俺が刀のみを使っていた時の構え方。今でこそ小太刀との二刀流と使いこなす俺だが、オニビカリの鞆づくりの時もそうであったように、この構えもまだまだ現役として使える。二刀でブレイクポイントが作れないのなら、片手をフリーにさせてみればいい。それだけの発想だ。あえてそのままにじり寄るようにして踏み込むと、フェンシングのように少しだけ軸をずらすように突く。滑り込むような、間合いを図り辛い突き方を意識したつもりだが、レインはなんとということはないといった風に体をひねりつつ躲しながら左の拳をねじ込んでくる。素早く回転して腕を取り、そのまま腰を落として無理矢理投げる。投げると言っても振り回すといったほうが適切な投げ方だ。体勢が崩れたところに、さらに投剣を右手で素早く投げる。すでにオニビカりは逆手で納刀していた。これは予想通りというかいなされる。が、そこまでは俺の想定通り。俺の予想通り、レインはセオリー通りいったん距離を取り、一気に距離を詰めつつ勝負を決めに来た。ならば。

「——ライトウェポンチェンジ、白波」

ぼそりとつぶやく。高速武器換装で右手の刀を幻日から白波に変える。あまり使わ

ないが、こうやって一部の武器だけを変えることも可能だ。その場合、変更のボイスコマンドは装備している側を指定する。つまり、今回、幻日は右手装備扱いだったので、ライトウエポンになる、という理屈だ。

そのまま柄に添えた手を抜き放つ。元から剣道の脇構えは、その刃の長さが見切り辛
いことが大きな利点とされていた。ましてや、先ほどまで対峙していたのは刀よりさら
にリーチの短い小太刀で、今変更したのは野太刀^{オニビカリ}。レインはその間合いの変化に対応で
きず、俺の刃は過たずその首をとらえた。躲して完全に断つてはいないものの、想定通
りクリティカルヒット扱いになり、俺の勝利となった。斬られたことと無理な回避を
行ったことで崩れ落ちたレインは、思わず拳で地面をたたいて悔しがりつつ、俺に抗議
した。

「やっぱり反則じゃないそのスキル!？」

「取得条件が厳しいってだけで誰でも習得可能らしいぞ」

「いや、そうじゃなくて。ほとんどノーモーションで武器入れ替えれるとか、突然間合い
が変わるってことじゃない!？」

「つつても、これをそもそも使いこなせるだけの技量があれば、の話でもあるんだがな」
「それを使いこなせるだけの技量があれば厄介この上ないんだけど?」

「それは、まあ、俺だし?」

「まったく、それが問題なんだけど」

俺の半分開き直ったようなコメントに、レインは半ば以上に呆れたようなため息をついた。

「さて、最後のファンサービスだ。観客に軽くてでも振ってさつさとおさらばと行こうぜ」

「そうだね」

そう言つて、俺はレインに手を差し伸べて笑いかける。素直に俺の手を取つて立ち上がったレインと俺は並んで観客に手を振つた。

ダイゼンさんは約束をきっちり守つてくれた。特等席の言葉に偽りはなく、きつちり双方の動きが見える位置にいた。加えて、座る席も快適そのもの。お互い、不満はなかった。

試合展開は、思った通りというか、キリトの猛攻を冷静に受け流すヒースクリフという展開で進んだ。見た目にはキリトが優勢だが、こうも完璧に受け流されると一概にそうとは言い切れない。二刀流は確かにそのラッシュ力こそ魅力だが、それ相応に消耗もすれば区切りの隙も大きいはず。それは、変則といえど同じ二刀を扱う俺だからわか

る。消耗しやすい戦術に消耗戦を強いらせるというのがおそらくヒースクリフの狙い。現に、ヒースクリフから若干余裕がなくなりつつある。それを見切ってか、キリトがソードスキルを繰り出した。その光は、あの時フロアボスに繰り出したのと同じのそれ。最後の一撃の前、ヒースクリフの防御が抜かれた。

だが。その直後。ありえない速度で盾が戻った。それで最後の^{一撃}をぱりいされたキリトは、その直後の反撃できつかりとクリティカルをもらい、決着。

「なあ、レイン」

「やっぱり、気のせいじゃないよね？」

「あんな気のせいあつてたまるか」

正直かなり怪しいが、今はそれしか疑う要素がない。確定にするにはあまりに情報が少なすぎた。

「今のところは頭の片隅に置いておくのがせいぜいだな」

「・・・そつか。なら、私もそうする」

そんな会話を最後に、俺たちはその場を去った。

50. 影踏み

それから数日後。俺は血盟騎士団の本部に来ていた。例の報酬を受け取るためだ。応接室に通されてから少しして、でっぷりした巨漢のダイゼンが入ってきた。

「お待たせしましたな、ロータスさん。まず、こつちが金銭的な報酬ですわ」

そういわれて、目の前には麻袋が現れる。中に入っていたのは、ちよつと俺の想像を超えるレベルの臨時収入だった。

「急だったこと、また、かの鬼神の決闘を見られたこと、勝手に見世物にしたこと。それらを勘案して、前線での狩りの収入から算出した金額です。不満ならお出しできる範囲で追加します」

「いや、十分だ。で、情報のほうは？」

「こちらに書面でまとめました」

そういつて、ダイゼンさんは羊皮紙と思われる冊子を取り出す。それをこつちに渡しながら、さらに言葉を続けた。

「ですが、簡易で口頭説明させてもらいます。

彼は、そこそこ前からのKOBメンバーですわ。加入時期からして、ラフコフとは関

係がないだろう、というのはずでに調査が出ておりました」

だろうな。その辺はラフコフ主要幹部四人が口を酸っぱくして跡がつかないように言っていたからな。どうやらかなり真面目にそれを遂行していたらしい。

「ラフコフ討滅戦にて、犠牲は出しましたが、ラフコフメンバーの一部をキル、および捕縛に成功しました。これに関しては、釈迦に説法、という奴ですな」

「ああ。何せ当事者だからな」

「重要なのはその後です。あなたの処遇に関する打ち合わせと並行し、これ以上攻略組がPKされたりすることによるボスレイドの損失は防ぎたかった。そこで、KOBは幹部陣にそれぞれパーティプレイを勧告しました。あくまで勧告なので強制ではないのですが、それに伴い、一部の幹部には護衛が付くことになったんです」

「それでか。クラディールの名前を聞いたのは、俺の知り合いの店にアスナがそんな名前のプレイヤーを連れてきていた、って言ってたからなんだ」

当然ながら、もつと早くからクラディールのことは知っている。だが、改めて知ったのは知り合いことエギルの話を聞いてからだ。知っていても、名前を最近聞いた、という点で、嘘はついていない。

「ああ、それはこっちにも報告が上がってます。黒の剣士殿と夕食を楽しんだ、と」

「あー、そういえばあいつ、ラグーラビット手に入ったって言ってた、って言ってたっけ

な」

「素晴らしいですな。かのSS食材、私も口にしたいもんですわ。……つと、話がそれましたな。」

ある程度お察しの通り、アスナさんにも護衛が付くことになりました。特に彼女はあの美貌ですからな、逆ハニートラップのような真似は、まあ、本人の性格的に引つかからんとは思いますが、念のため、というものもありますんで。で、そこに立候補したのがクラデイルだった、つちゅーわけですわ。もともとアスナさんの、一種の、シンパというか信者というかおっかけというか、ま、そんなとこだったんで、危害を加える恐れもなからうと幹部陣もこれを承認、今に至っていたんですわ」

「至っていた？」

「そう、至っていた、です」

過去形になっていることに気付いて指摘すると、ダイゼンさんもそれを大きく肯定した。

「ですが、その翌日、黒の剣士とコンビで攻略に繰り出すことになったとき、彼が……」
そこで一瞬ダイゼンさんが言いよどむ。大体何を言いたいかは分かっただけはいるが、さすがにおおつびろげに自分のギルド員の悪口を言うのは憚られるらしい。案外いい人なんだな、とぼんやりと思った。

「隠さず言いましょう。ストーリーカー化してたことが露見しまして。黒の剣士さんなら、アスナさんともお似合いだし、実力も申し分ない。クラディールがその体たらくなら、護衛の交代はやぶさかではない、という判断になりました。しばらく謹慎になつとつたんです」

「なつとつた、つて、これまた過去形ですか」

俺の再びの指摘に、ダイゼンさんは頷いた。

「このままソロプレイヤーとしてアスナさんの傍にいた分には問題なかったのでしょうか、前の一件でキリトさんがKOBに入られましたやろ？そんで、一応形式上でも入団の、プレイヤーとしての適性も含めたテストを今日行うことになつとつまして。で、それを担当する幹部が、〃同じギルドメンバーである以上、ずっと仲たがいはしたままというのとはよくない〃とつて、謹慎を解除して連れ出しとります」

その言葉に、俺は椅子を蹴倒した。突然の俺の行動にダイゼンさんが面食らう。

「それは、どこで？」

「え、74層の迷宮区で行うと聞いております」

それを聞いて、すぐさま俺は転移結晶を取り出した。無礼は承知だが、今はそんなこと言つては行かない。

「すみません、ダイゼンさん。用事が出来ました。——転移、カムデット」

前、ちらと聞いたことがある。こういう緊急時の応対に備え、KOB本部はあえて、本部によくある結晶無効化を行っていないらしい。だからこそ、俺は即座にこういう対応をしていた。即座に俺はアスナにボイスチャットをつないだ。すぐにチャットはつながった。喋りながらメニューを操作して、魔物避けの香水を取り出す。

『ロータス君、どうしたの?』

「アスナ、時間がないかもしれないから単刀直入にいくぞ。今どこにいる?」

『KOBの本部だけど、どうして?』

「今日のキリトとクラディールに関しては?」

『知ってるわ。参照してる感じは特に何も——ちよつと待って、なんでロータス君が

それを?』

「事情は後だ、時間が惜しい。キリトは今迷宮か?」

『その前のフィールドにいるみたい。ここは……峡谷に入って少ししたところじゃないかな』

峡谷エリアは、森エリアの前に位置する。となれば、今追撃に入れば追い付く目は十分にある。

「了解した。俺が先行する、アスナも後から来い」

『ちよつと待って、本当にどうしたの?』

「さつきも言ったろ、時間が惜しいんだ。切るぞ」

『え、ちよつ——』

チャットを切断しながら、魔物避けの香水をつけ、走る。迷宮区でやるというのなら、大体の方向はわかる。問題は峡谷エリアのどこにあいつらがいるか。フレンドの表示だけではそこまで追跡するのは不可能。ならば、自力で読むしかない。だがそこはそれ、俺の実力でカバーする。

峡谷である以上、侵入点は限られる。その性質を利用し、あらかじめ先に目星をつける。そのあととはしらみつぶしだ。あらかじめ索敵スキルのModである追跡機能を起こ動しっぱなしで走り続ける。隠密スキルを使われると効果範囲が狭まるが、パーティを組んでいるときにわざわざ隠密スキルは使用しないはずだ。

ある程度走ったところで視界に足跡が反応した。追跡機能に反応があった証拠だ。一気に方向転換して走る。ひたすら走る。キリトたちに追いつく寸前に、メニューで装備を操作。装備を山吹色系の色にする。周りが砂色に近い色だから、このような色だと隠密にボーナスが乗る。何とか追い付いたとき、キリトたちは休憩に入っていた。クラデールから水が全員に配られ、メンバーが飲む寸前に、クラデールの顔がはつきり見えた。走りながら一気に矢をつがえ、急停止の慣性を利用して、強く弓を引く。素早

くキリトが飲もうとした水瓶を撃ち落とす。と、クラデイルが驚いたような顔をした。が、このパーティーのリーダーは一足遅かった。麻痺にかかつて崩れ落ちた直後に、キリトが叫ぶ。

「結晶を使い！」

その言葉に、パーティーリーダーが動かない腕をポーチに伸ばす。一瞬でメニューを操作しつつ、弓に矢をつがえ放つ。その矢は、ポーチをおそらく蹴とばそうとしたクラデイルの足元に突き刺さった。

「回復を阻害する行為をむぎむぎ俺が見逃すと思うか？」

何か別途目的がない限り、回復を阻害するのは基本だ。敵の戦力を苦勞して削つたのに、その苦勞を水泡に帰すような真似をむぎむぎ見過ごすなんて言う愚は犯さない。俺にクラデイルの意識移っている間に、パーティーリーダーが麻痺を回復した。体の自由が戻ったことを確認してから、パーティーリーダーが問いかけた。

「クラデイル、どういうことだ。この水はお前が調達したはず……！」

「簡単だ。その水に麻痺毒を入れたんだろ。その手のノウハウなんざ、麻痺のスペシャリストたるジョニーにかかればなんとでもなるからな。で、それをそのまま教わった通りに実行した。」

——そうだろ、ラフコフの残党さんよ」

俺の推理に付け加えられた一言に、場が凍り付く。それは、言われた本人であるクラデールもそうだった。

「それを覚えていいるなら、なんで、あなたは……！」

信じられないというようなクラデールの問いかけを、俺は一笑に付した。

「ハッ、この期に及んで、俺の目的が読めてねえのか？ それとも、分かったうえで目を背けているのか。どちらにせよ、愚か者の一言に尽きるな」

「どういうことだよ。クラデールが、ラフコフの残党つて……！」

「そのまんまの意味だ。クラデールは、グリーン側の情報源として、ラフコフの仲間だった。俺が討ち漏らしてた。それだけだ」

俺のあまりにあっさりしたコメントに、違う意味で周囲が凍る。

「でも、なんでこんなことを……」

「こいつが、アスナの信奉者だからだ。それこそ、ストーリーカー化するレベルの、な。それは、お前もよく知っているだろ。何せ、本人から聞いただろうからな」

「……そばにいる俺が邪魔だった、つてことか……」

「ま、端的に言っちゃえばそういうことになる」

あわよくば傷心のアスナに取り入ろうとした、つてところもあるかもしれないが、とにかく第一目標はキリトの排除だっただろうことはまず間違いない。ここまでじゃ

べったところで、俺の索敵に反応があつた。

「つと、ようやく来たようだな」

そういつて、道を開ける。そこには、非常に険しい顔をしたアスナがいた。

「あ、アスナ様・・・」

「事情は聴きました」

「え・・・？」

「俺はちゃんと説いたはずだ。PVPでは、どれだけ多くの情報をつかめるかがキーになる。俺は会話をしながら、時々メニユーを触つてた。その時に、アスナにボイスチャットを開通しておいたんだよ」

その言葉に、クラデイルの顔が若干青ざめる。完全に俺の術中にはまっていたというように、ようやく気付いたのだ。

「ちなみに、トリックを明かすくらいで俺はボイスチャットを有効化していた。ぶつちやけ、こんなに早く到達するとは思つてなかつたが」

これは本音だ。俺にとって、今の種明かしは時間稼ぎで、それ以上でも以下でもない。俺が喋っていた時間など、時間にすればたぶん数分。下手したらカップラーメンすら作れない時間だ。よもやこんなに早い到着だとは思つてもみなかつた。が、

「ま、俺からしたらこれはうれしい誤算なんだけどね。」

で、どうする、こいつ」

視線はクラディールに固定したまま問いかける。念のためというか、手は太ももにある投げナイフホルダーに添えられている。射撃のほうが攻撃面では上回るが、こういうとつきの使い勝手はやはり投剣のほうがいい。

「こればかりは会議にかけたほうがいいと思うわ。でも、とりあえずは監獄に送るのがいい、かな。」

ロータス君は・・・、つて、聞くまでもないわね」

「おう、そういうことだ。だから、なんか意見があれば、つて思ったんだ。が、困ったな、回廊結晶のストックがねえんだ」

「て、ことは・・・」

「監獄エリアに行くには、こいつをここで縛るほかない。それか、・・・いや、やつぱ却下」

「やつぱ却下、の内容が知りたいのだけれど？」

「・・・アスナにハラスメントコードを発動させる」

言いづらいが、そういうだと、アスナは軽く身を震わせた。

「だよな。なら——」

言い切る前に、俺は少しだけ手を滑らせ、腰のホルダーから投げナイフを一本取りだ

すと、小さいテイクバックで放る。それはクラデールが躲すも、その直後に俺が間合いを詰め、いつもは使わない背中への矢筒から一本抜きとつて一閃、躲されることを読んでいたので、そのままつがえて放つ。今度は避けきれずに刺さった。そのままマウントを取ると、アスナにアイコンタクトした。その意味を正しく理解したアスナは、手早くクラデールを縛った。

「殺さないのね」

「前の俺だったら殺していた。俺が殺しをしたら悲しむやつがいるんでな」

俺の答えに、アスナはどこか意外そうな顔をした。だが、俺からしたら当然だ。あそこまでしてくれた相手に義理立てしない理由はない。

この後、クラデールはKOBを永久追放、死刑がないこの世界における極刑である無限役を言い渡された、というのは、あとからアルゴ経由で聞いた。

51. はじまりの街にて

それから少しして、俺は第一層の教会孤児院に来ていた。一応、今は一段落しているし、先日のあの少年との約束も果たさなくてはならない。ま、今なら時間もあるし、問題ないだろうという判断だ。

プレイヤーに聞きながらその場所に行きながら、どこか奇妙な感覚をぬぐえないでいた。プライベートとかの観点だろう、建物の内側からの音は、ノックぐらいしか通きないというのは分かる。だがそれにしても、静かすぎる。数値化、文章化できるものではない。だが、俺が積み上げてきた感覚がおかしいと訴えている。どこぞのグラールの白いキャストじゃないが、その何となくが正解であることが多いから、俺もそれを信用することになっている。

教会についてからは、別の意味で奇妙な感じがした。具体的には、どこか見慣れたような気配がするのだ。ま、そんなことで尻込みする俺じゃないので、普通にノックすると、ほんの少し覗いた顔は見知った顔だった。

「お、エリーゼか」

「ロータス君、どうしたの？」

「いや、ここのガキンチョにちよつと前、今度来るって言つといて来てなかつたな、つてふと思ひ出したからな。入つていいか？」

「ああ、うん」

それだけ言うと、俺は中に入った。そこには、子供が多い中で、一人20代と思われる女性がいた。

「あの人は？」

「ああ、ここの管理人さん、つてとここかな」

俺の素朴な疑問に、隣でエリーゼの解説を入れる。ふうん、てことは、この人がこの子供たちを束ねているわけだ。なかなか見上げた志の持ち主だ。

「エリーゼさん、その方は・・・？」

「ああ、えつと、ロータスつて言います。前、フィールドでこの子だと思ふ子に、今度また来る、つて言つて——」

「あー、あの時の兄ちゃんだ！」

俺が言い終わる前に、あの時の少年がこちらを見つけて走ってきた。

「よう、元気にしてたか少年」

「おう、元気だったぜ！」

うん、元気で何より。

「ああ、あなたが、シヨウを助けてくださったという・・・」

「ありや、本人から聞いてました？」

「ええ。ものすごく強いお兄さんに助けられた、と。私はサーシャと言います。子供を助けていただき、ありがとうございます」

「いえいえ、成り行きで助けただけですよ」

そんな会話をしていると、俺の索敵に反応があった。街の雰囲気は怪しかったので、隠密で発動を悟られないようにしつつ、索敵スキルを発動させておいてそのままだったのを今思い出した。

「誰か来るぞ」

「一人？」

「ああ」

「だったら多分あの子だわ。私出ますね」

「すみません、お願いします」

そういつてエリーゼが席を外す。その間に、こちらに目線が来る。

「あの、失礼ですが、ロータス、というプレイヤーネームを聞くと、どうしても別の名前が出てしまうのですが・・・」

「かまいませんよ。同一人物ですし。色眼鏡で見られるのには慣れていきますから」

「と、いうことは・・・」

「ええ、そういうことです」

俺の言葉に、サーシャさんが驚いたような顔をする。ま、俺のほうからカミングアウトしたら驚き桃の木山椒の木だよなあ。

「ま、今はこうして攻略組に戻ったわけです。幸運なことに、ですがね」
「そうなんですな」

俺の言葉にサーシャさんが相槌を打った時に、エリーゼがレインを連れて戻ってきた。

「あれ、レインどうしたん？」

「言ってなかったつけ。私、ちよくちよくここに來てるの。ロータス君こそ、どうしてここに？」

「ちよつと前にここの少年に会ってな。今度來る、って言っておきながら、ずっと來れてなかったから、こうして今日來てる、ってわけだ」

そんなことを言っていると、まだ切っていないなかった索敵スキルに反応。

「また誰か來るぞ。今度は二人」

「二人？」

俺の言葉に、エリーゼがどこか警戒したような声を出す。その言葉に、やはりこれは

想定外のことなのだろうと気づいた。

「念のため俺が出る。万が一荒事だったら俺のほうがいいだろう」

「そう、ですな。お願いします」

俺の異名を知っているということは、俺の悪名を知っているということと同義。またそして、俺の対人戦で実力も、たとえそれが噂の範囲内だとしても十分にわかっているはずだ。

入口のほうに向かいつつ、俺は気取られないように集中力を練る。ノック音がしたのを確認してから、俺は少しだけ扉を開ける。そこにいたのは、

「キリト、それにアスナもか。どうした？」

「ああ、少し用事があつてな。入っていいか？」

「少し待ってくれ。ここの管理者に聞いてくる」

本当に意外な二人だったのである。

二人が来たのは、二人が連れていた子供が原因だった。新婚生活を満喫していた二人だったが、近くの森で女兒のプレイヤーと思われる少女を保護したそうだ。

「で、この子供に見覚えがないか、つてことか？」

「うん。どうでしょうか？」

二人に言われ、その子供——ユイちゃんの顔をサーシャさんのぞき込む、が、すぐに首を横に振った。

「ごめんなさい、少なくとも私は見覚えがないです」

「私も見覚えはないや」

「ごめんなさい、私も……」

「そう、ですか……」

そういつた瞬間に、ボタンとドアが開いた。

「サーシャさん、大変だ！」

「こちら！お客様の前で——」

「それどころじゃないんだ！ギン兄たちが軍の徴税に引つかかって……！」

その言葉に、サーシャさん、エリーゼ、レインが勢いよく立ち上がる。

「場所は!？」

「35番路地！ブロックされて何とか俺だけ逃げ切れたんだ！」

「35番路地は袋小路……！レインちゃん！」

「はい。ごめんなさいアスナさん、先に——」

「私たちも行くわ」

「俺も行こう。荒事なんだろ」

アスナの即断に俺も応じる。話の流れからそのくらいは察せられた。

「なら俺たちも——」

「それはダメ。この人たち、私があつさり負けるくらいだから。レインちゃん、お願い」
「分かりました」

「それでは、申し訳ですが走ります！」

サーシャさんの言葉に、俺たちは一斉に走り出した。

35番路地の前には、深緑の装備をした軍団が居座っていた。その光景に、俺から我慢できない舌打ちが漏れる。普通の町中では、アンチクリミナルコードという、平たく言ってしまうえば犯罪防止コードが発動するため、そう簡単に人を押しのけたりすることができない。突き飛ばそうとすると、突き飛ばそうとした側にフィードバックが来るからくりだ。もちろんこれは素手の場合で、得物を用いれば、相手側にそれ相応のフィードバックはある。が、それだけでHPは減らない。だが、一般的な良識があれば、そもそも街中で大ぶりの鈍器や、短くても刃渡り30cmはあるうかという刃物を取り出すなんて考えない。その良識と、このアンチクリミナルコードを逆手に取り、大勢で路地などをふさぐことで退路を断つ、通称ブロックと呼ばれる半マナー違反行為を、おそらくは常習的に行うそのことに、強い不快感を覚えた。

「おっと、ここで保母さんの登場か」

軍の誰かが嘲りに満ちた声を出す。それを無視して、サーシャさんは声を張った。

「ギン、ケイン、ミナ！そこにいるの!？」

「先生！こいつら、僕らが取ってきたもの出せって！」

「それなら渡してしまいなさい！」

「それだけじゃ足りねえんだよなあ」

サーシャさんの言葉に、別の軍のメンバーが数人がかりで高圧的に迫ってきた。それでもブロックをほどけないほどに人数を使ってきているということの証左に、俺は顔をしかめそうになるのをこらえた。

「あんたら、ずいぶんと税を滞納してるからなあ。装備とかも含めて文字通り全部よこしてくれてようやく、つてところなんだよなあ」

このSAOにおいて、防具を変えるのには、外套だけを変えるような場合を除いて一回裸になる必要がある。明らかに下心があることが見え見えの言動だった。

「下種なうえに変態な奴らが編隊組んでやってきてたわけか。救えねえな」

「あ、あ？誰だ、お前」

「俺が誰かなんざどうでもいいだろ」

言いつつ、後ろに組んだ手で合図を出す。キリトたちには通じないかもしれないが、

レインになら通じるはずだ。その証拠に、本当に少しだけ俺の手に触れると、少しだけ下がって助走をつけた。で、そのまま跳躍。楽々といつてもいいほどに、軍の集団を飛び越えた。続いてキリトとアスナも飛び越える。

「おいおい、なあに勝手なことしてんだあ、ああ・・・？」

中にいるレインたちに向かつてだろうか、高圧的に迫る軍幹部と思われるプレイヤ―。

「この街で軍に逆らうってのがどういうことか分かってんのかあ・・・!? ああ!？」

その言葉はこちらにも来る。サーシャさんを手で下げながら、位置関係を確認する。後ろには軍の集団はいない。あくまで俺の前だけだ。回り込む隙はいくらでもあったろうに、なぜ回り込まなかったのか、という疑問はあるが、ま、それならそれでやりようがある。

「知ったこつちやねえよ。最大のギルドだか何だか知らねえが、最下層で引きこもってるだけ集団の何が怖いって？」

俺の挑発に、迫ってきた軍のメンバーが一瞬怯む。が、すぐにまた高圧的に言った。

「何なら実力行使してもいいんだぜ!？」

「やれるもんならやってみる、引きこもりが」

俺のさらなる挑発に、相手は俺たちを囲みにかかる。右手で鯉口を切りつつ、水平に

構えた腕はそのままにする。と。

「貴様らは、まだこんなことをしておるのか」

「これはこれは、コーバツツ中佐殿。前線から逃げた臆病者がどうされたのです?」

「こんなことをしておる暇があれば、ほかにもやることはあろう。と、私は言っていたはずなのだがな」

後ろから来たのはコーバツツだった。意外な援軍に、俺は少し意外な顔をする。

「特に、この方は私たちの恩人だ。侮辱するといっているのであれば、私たちも相手になろう」

「そうですか。なら、——そんな口、二度と聞けないようにしてやる」

その言葉とともに、相手の軍側が抜刀する。

「コーバツツさん。サーシャさん．．．その女性を頼んだ」

「承知した。全員防衛態勢」

その声に、サーシャさんがコーバツツ派の軍に保護されたことを確認すると、俺は鯉口を切つてあつた小太刀を左手で素早く数閃。相手側の軍の数人が得物を取り落とす。あつけにとられている間に、俺は蹴りを叩き込み、左手にいた一人を吹き飛ばす。驚いている暇を与えず、一人に近づいて一人に肘鉄を放ち、小太刀で後ろに回つてきていたやつの首に向かつて強打。

「まだやるってんなら付き合うけど?」

小太刀を突き付けつつ宣言する。ちなみに、俺がダウンさせるまでに費やした時間はたぶん10秒程度。たった10秒で数人をダウンさせたのだ。ましてや、コーバツツ派の援軍もある。問題ないだろう。その後ろでは、おそらくレインたちを相手にしていた軍のプレイヤーが文字通りちぎっては投げられている。おそらく、あちらもなんか不意なことを言って逆鱗に触れたのだろう。もともと、少なくともレインは、若干怒りモードだったのだ。攻略組の中でもトップクラスである彼女たちにかかれば、軍ごときどうなるかなど推して知るべしだ。

「後ろのお仲間も、どうやらあっさりとやられたっぼいしね」

その言葉に、慌てて軍の幹部が振り向く。そこには、無様に腰の抜けさせられた軍のメンバーが。その光景に、無様に軍のメンバーは撤退していった。その光景を目で追いつつ、俺は小太刀をしまつて振り返る。

「ごめんなさい、サーシャさん。怖い思いさせましたね」

「いえ……。レインさんも、すごくお強いんですね」

「ま、俺の相棒ですから」

俺の返答に、サーシャさんは少し笑った。その路地から、少女の悲鳴が聞こえた。何も言わずに二人そろって走り出す。路地に入ると、そこには変わらさずアスナにおぶられたまま、気を失っているユイちゃんがいた。キリトがおろおろしていることから、どう

やらあれこれ突然のことだったらしい。サーシャさんも突然のことに何が起こっているのかわからず、一瞬ではあるが確実に固まる。あとの女子二人も軽い混乱状態になっているようだ。

「とにかく、今は孤児院に」

俺の言葉に、フリーズしていた面々が動き出した。

結局、その日でユイちゃんの意識は戻ることはなく、その日は全員教会に泊まり込むことになった。サーシャさんは「そういう場所を選んだということもあるのですが、場所はかなり余っているんです」と言っていた。ま、それもそうか。

で、翌朝の朝食は、まあ、にぎやかであった。おかずの取り合いやらなんやらのやんやんやである。

「ごめんなさい、騒がしくて」

「いえいえ」

「私の最初は注意してただけどねー。一向に聞く気配がないから、もう放置」

「これはこれで、子供らしくていいんじゃないかね？」

「私もそういつているんだけど」

「ある程度の節度というの必要でしょ」

「それはそうだが。教え込むのはもう少し後でもいいだろ」
そんなことを言いつつ、俺たちは奥のほうの部屋へ移動した。

奥の部屋へ移動したとき、俺はさっそく切り出した。

「で、サーシャさん。あの徴税とかかこつけたカツアゲはいつたい何なんだ？」

「あ、それは私から」

俺の質問に答えたのはレインだった。

「知っての通り、軍は25層で壊滅して、ここ、第一層のはじまりの街で力をためてる。

ここまでは、問題ないよね？」

「ああ、まだ戻ってきてなかったのか」

「うん。で、そのあとは下層の狩場を管理したりしてたんだよね？」

「そこまではよかったのよ」

そこまで言ったときに、キリトがつぶやいた。

「誰か来るぞ。二人」

5.2. 事態解決

「誰か来るぞ。二人」

その言葉に、俺は即座に臨戦態勢になった。むろん、他人に気取られないようにだ。何せ昨日の今日だ、報復というのは十分にありうる。

「私が出ます」

「お願いします」

レインが対応を申し出て、それをサーシャさんも了解した。念のため、その後ろに俺が、気配を消してついていく。レインが扉を開けた時、少しではあるが確かに、レインの警戒が和らいだ。

「コーバッツさん？」

「お久しぶり、いや、昨日ぶり、ですか、レインさん。お話があつてうかがいました」

「それは、昨日の徴税関連ですか？」

「無関係ではありません」

その言葉に、俺はできるだけ扉の死角になるような位置からのぞき込んだ。

「とりあえず入れてもいいんじゃないか。その代り、妙な真似を見せたら・・・」

そこまで言つて、俺は鯉口を切る。それだけで、十分意味は通じる。が、コーバツツは動じなかった。

「大丈夫だよ。この人は信用におけるから」

「そうか。お前がそういうんなら、大丈夫だな」

レインがそういうということは、大丈夫なのだろう。俺も刀を改めてしつかり納刀して、二人を中に招き入れた。

その後、俺たちは奥の応接間に会していた。どうしてもこの人数が集まると少し手狭に感じるが、そこはまあ仕方ない。

「それで、彼女は？」

「彼女はユリエールさん。ALFのリーダーであるシンカーさんの副官さんよ」

「ALF・・・ああ、そういうことか」

納得した俺と、一瞬の間の後に理解したアスナとは対照的に、キリトだけが理解してなかった。

「A i n c r a d L i b e r a t i o n F o r c e ——早い話が軍だ。その様子だと、この呼称は内部でも嫌うやつがいるみたいだな」

「君のような勘のいいガキは嫌いだよ」

「いったいどこの緞命ていめいの錬金術師だお前は」

エリーゼのまぜつかえしにはしつかり反応しつつ、先を促す。

「で、ギルドマスターの副官様がこんなところに来る、つてのは、一体どういう事態なんだ？」

「その前に確認しておきたい。エリーゼさんとレインさん以外の方々は今の軍の状況をご存じだろうか」

口火を切ったコーバツツの言葉に、俺はかぶりを振った。白黒夫婦も、どうやら同じような状況のようだ。

「私から説明しましょうか？」

「いえ、私から説明します」

レインの申し出に、ユリエールさんはやんわりと断った。その口から語られた内容は、なかなか刺激的だった。

「今、軍の内情は、キバオウの独裁による暴走状態です。いつからか、あなたがたが目にした徴税行為は日常的に行われるようになってしまった。そこで、軍の内部からも出た、攻略をないがしろにしすぎているという不満を解消するために、一部上層部は軍のトッププレイヤーを最前線に送り込んだのです。フロアボスを討伐してこい、などという、無茶な命令とともに」

「それが、あんただったわけだな、コーバッツさん」

「・・・ああ。意固地だったのも、命令を守らなくてという義務感が先立ちすぎていたから、というのは否定しない。もっと大切なものがあると気づくまでに時間がかかりすぎた。迷惑をかけてしまったな」

「いいつて。で、その一件から何とか生存したコーバッツさんは、シンカーさん、だっけ？とにかく、ギルマスを中心人物とした、穏健派に与するようになったわけだよな？」

エリーゼの確認に、コーバッツは頷いた。となれば、

「その努力があつてなお、あのカツアゲ行為は止まらないほどに、肥大しているわけか」
「その通りです、キリトさん。・・・なるほど、あなた方なら、確かに徴税部隊など一ひねりでしよう。」

とにかく、コーバッツさんの遠征が失敗したことで、キバオウはさらにムキになりました。シンカーと丸腰で話し合おうと言って、自分だけ転移結晶で離脱したのです」

「シンカーさんは・・・？」

「彼はいい人過ぎました。キバオウの言葉を信じて、転移結晶も持たず・・・。今彼は、ハイレベルのモンスターがいる地帯にいると思われます」

「・・・ポータルPK・・・。ここまでの大ギルドの頭がやることじゃねえな」

思わず舌打ちする。俺の苦々しい表情を見てか、コーバッツの眉間に皺が刻まれた。

「ああ……。私も、初めて知ったときには耳を疑った。同時に、こんな人物には従えないと思った。目的のために手段を択ばないと言っても、限度というものがあるだろうに……！」

コーバツツの言葉には完全に同意だ。先ほども言ったが、大ギルドの頭がやる行動ではない。

「なら、やることは二つ。一つはシンカー救出。もう一つは、キバオウの脅迫」
「きよっ……!?!」

俺の口から出た物騒な言葉に、サーシャさんが怯えたような声を出す。でも、

「目には目を、歯には歯を。外法には、外法を。——先に道を外したのは向こうだ。無理やりにもゲロらせる。軍の中でも、できるだけ公なところで、な。これは俺が適任だな」

あまりの俺の過激度合いに、サーシャさんとユリエールさんがドン引く。他の面子は、俺はやる気になればそういう手段に出ることもある、ということをも、実体験をもって知っているため、少々の怯えはあっても驚きは薄い。真っ先にその手段に協力を申し出たのはコーバツツだった。

「では、私も協力しましょう。一応、軍の定例会議は、キバオウ派とシンカー派の両方が出席しますからな。その場をもって、襲撃すればよろしい」

「そうか。じゃ、その辺の手筈は頼んだ」

俺の言葉に、コーバッツが頷く。コーバッツも俺の脅しをその身をもって体験したクチだ。その後に、レインが胸を張って宣言する。

「じゃあ、シンカーさんは任せて！」

「おう、頼むぜ相棒」

そういつて二人で手を叩く。その後、レインが状況確認に入った。

「シンカーさんは、その状態で、どれくらい・・・？」

「もう、三日ほどになります。私が来たのは、徴税部隊をあつさり打ち倒した人々が、今教会に滞在しているということ。それから、コーバッツさんから、その人々は信頼に置けるという言葉聞いてだったので」

「なら、できるだけ早い救出が必要ですね」

「コーバッツ、次の会議は？」

「確か・・・明日の夕方からだったはずだ」

「よし、なら最速そこで人質救出からの脅迫続行が最善かな」

「ま、私としても、たまたまダンジョン見つけて救出する分には問題ないし」

「いえ、この件に関しては、あとできちんと対価をお支払いします。特に、あなたは、いわゆる『騙して悪いが』をしたら、しかるべき報復を行うことでも有名ですからね、エ

リーゼさん」

「・・・なら、こっちとしても断る理由はない。・・・ところで、戦力は多いに越したことはないんだけど」

かなりとんとん拍子に進む話の中で、エリーゼが横目に白黒夫婦を見た。それに対する二人の反応は、正直信用にならない、というものだった。ま、こんな少しのやり取りで信じる、なんて無理な話か。

「大丈夫だよ、パパ、ママ、この人、うそついてないよ」

その判断の背を押したのは、意外にもユイちゃんだった。

「・・・本当？ユイちゃん」

「うん。なんとなくだけど、わかるー」

笑顔とともに放たれた言葉に、アスナが折れた。

「では、私たちも協力させてもらいます」

「ユイはここでお留守番な」

「やだー！」

キリトの言葉に、ユイちゃんは即座に拒否という反応を見せた。

「そうはいつてもね、危ないから、ここで待ってて、ね？」

「やだ！パパとママと一緒に行くー！」

「おお・・・これが反抗期か・・・」

「感心しないでキリト君も説得してよ！」

こんな小芝居のようなやり取りはあったが、結局、エリーゼとレインという戦力を鑑みて、連れていくことになった。

さて、場所は変わって、はじまりの街の中の、国鉄宮に来ていた。ここの上層部分が、丸ごと軍の本部と化しているらしい。その中を、コーバツツと、軍の正式装備をした俺が歩いていた。

「こんなにあっさり通るものなんだな」

「門番にも通達はしてあったからな」

「それって一種の懐柔じゃないのか？」

「そんなことはしていない。私はただ、出先で帰る途中の隊員と合流した、と言っただけだ。そもそも、人数が増えすぎて、ギルド員同士でも、装備くらいしか見極める術がない。かくいう私もだが、な」

なんだそりや、と言いたいところだが、どこぞの金ぴかも、増えすぎて己の把握できる範疇超えてる、みたいなこと言ってたし、それと似たようなものか。

「さて、改めて確認するぞ。俺は、コーバツツの後ろで護衛として振る舞う。で、レイン

から連絡が来たら行動開始。てことで、いいな？」

「ああ。例のダンジョンはこの真下、転移結晶が使えることも確認済みだ。転移門からの距離も遠くない。レインさんにエリーゼさん、加えて、黒の剣士と閃光までいる。戦力としては過剰なくらいだろう。この場合はむしろ、私が会議に参加しないことのほうが怪しまれる」

「仮にも佐官だもんな。そういえば、キバオウは階級的にはどうなるんだ？」

「一応、中將ということになっている」

「ま、その辺は現実に即してるか。幕僚長、だっけ？自衛隊の頭も大体そのくらいだろう？」

「らしいな。私はよくわからん。ミリオタのやつに言わせるとこのくらいが妥当だそうだ。初期階級はそこから逆算で与えられた」

そんな会話をしていると、コーバッツが部屋の前で止まった。

「……か？」

「ああ」

俺の言葉にそれだけ返答すると、コーバッツは三回ノックの後に部屋に入った。続いて俺も入る。

「コーバッツ中佐、到着しました」

「ご苦労、中佐。後ろが、例の護衛だな？」

「は。何分、人見知りがある故、いささか無口ではありますが、腕は立ちます」

「・・・まあいいか。護衛は中佐の後ろで待機したまえ」

その言葉には頷きで返し、コーバツの後ろで休めの姿勢で待機する。すでにウィンドウは不可視モードでメールの受信欄を開いている。他人からすれば、俺がメニューを開いているように見えないことはすでに教会内で実証済みだ。やがて、何人かの佐官があるまると、玉座のような椅子に座ったキバオウが口を開いた。

「さて、全員集まったところで会議を始める。といっても、いつも通り、定例報告ばっかやけどな。まずは、管理班。特筆することはあるか？」

「いえ、特にありません。最近は何となくおとなしいもんです」

「よし。なら次、高レベル隊。こつちに関しては何か進捗はあったか？」

「はつきり申し上げて、ありません。あえて申し上げるとすれば、これだけ開いた経験値の差はそうそう簡単に埋まるものではなく、定例会議で特筆すべき報告があげられるようになるまでは時間がかかる、と、繰り返させていたただけです」

「・・・ま、しゃーないか。あのピーター野郎にはシャクやけど、こればかりはどうにもならん」

「それでよいのですか、キバオウ中将！」

「そうです！街の面々からも、軍は下層に引きこもってばかりの臆病者呼ばわりされて
いるのですぞ!？」

「それはそれ、や。戦力を拡充するには人手がいる。でも烏合の衆じゃ意味ないから、訓
練さしとる。練度が上がるには時間がかかる。それは説明したやろ」

「しかしー」

「最前線は甘ない。レベルだけじゃどうにもならん。なんとか安全マージン少し下くら
いやったコーバツツがあっさりあしらわれたんや。それ相応の準備をする必要がある
やろ。さつきも言ったように、シヤクやけどどうにもならんからしやーない」

反論はあっさりと押しつぶした。なるほど、思ったより腐つてはいないみたいだな。

「場合によつては、街の人には、そのために協力をしてもらう必要がある。そこに、変更
はありませんね」

「あくまで穏便に、好意的に、な。強引な手段はあかんで」

・・・なるほど、な。ある程度ほかしたキバオウの指示を、部下が暴走した、つてと
こか。

「ここまで来たら、さすがにワイも、青龍連合に追いつこう、なんてことはもう言わん。
それでも、中層から支援していくレベルにはする。そのための軍や。幸い、人手はある
からな」

そう言いつつ、手の前で組んだ後ろの口元がほんの微かにゆがんだことを、俺は見逃さなかった。それで、何となく察した。コーバツツがあらゆるさまに派閥の動きと反した行動をしていたも、特にこれといったお咎めがなかったこと。あまりにも強引過ぎる手段による、シンカーの排除。それらから、キバオウの意図が何となく読めた。

と、ここでレインからメールが来た。内容は、シンカーさん救出完了。今から軍本部に向かうね」とあった。それを見て、コーバツツにそつと近寄って耳打ちした。

「連絡が来た。状況を開始する」

「了解した」

それだけやり取りをすると、俺はぼそりとつぶやく。

「イクイップメントチェンジ、セットワン」

瞬間、俺の全身が転移にも似た光に包まれる。突然のことに全員が驚いている隙に、俺は一気に上座に走り、キバオウの首筋に後ろから左手に握った刀の刃を突き付けた。突然のことに、全員一步も動けなかった。

「全く、佐官クラスともあろう面々が情けない。コーバツツ隊のほうはまだ反応速かったぞ」

その言葉に、ようやく一部が腰を上げる。

「で、この程度のあおりで反応するあたりが雑魚の証。」

「圏内ではHPはびたーたりとも減らない。ノックバックは発生するけど」

そういつて、俺は右の逆手で小太刀を抜いて、逆手から準手に持ち替え、全体を見渡しつつ突き付ける。

「つまり、ここで俺が得物で打倒したところで、せいぜいがあんたらが気絶するだけ。最も、俺からしたらこの状態でも、ここにいる半分くらいは伸せる自信があるけど」

「……鮮血の蓮……!」

「な……!そんなはずは……!」

「おや、引きこもり集団でもそのくらいは知ってたか」

否定の声は、俺の間延びした声で打ち消される。それにピクリと動いたのはキバオウだった。

「なんでや、貴様はその手のことはよー知つとるはずやろがい」

「おう、知ってるよ。もっと言えば、圏内でも経口摂取なら麻痺をはじめとした状態異常にならかかるとても、麻痺した状態で他人に腕を動かされてもメニューは操作できるってこともね」

その言葉に、キバオウが凍り付いた。現実なら確実に冷や汗が流れているだろう。だが、軍の面々は理解していなかった。

「言ってる意味が分からない? なら教えてやる。———口の中に麻痺毒突っ込んで、無

理矢理メニュー操作して、全損デュエルでPKすることも、もつと直接的に毒殺することも可能って言ってる。これでOK？」

そこまで言つて、ようやく理解した。ま、もつともその気はないんだけど。

「何がしたいんや。こんな事したら、お前さん、攻略組にフルボッコにされるで……！」
「その前に、自分がやったことを考えたらどうだ。例えば、シンカーさんを、未遂とはいえ、ポータルPKしようとしたこととか」

俺の言葉に、軍の面々がざわつく。キバオウ派としては、なぜそれを知っているのか、ということ。穏健派は、どういうことだ、ということ。

「うすうす疑問には思ってたんだよ。そこまでの強硬手段に出る理由とか、コーバッツが、おそらくあんた側の集団である徴税部隊に対して、なんで真つ向から歯向かえるのか、とか。軍の主導権を握りたいのは分かるが、わざわざここまで強硬手段に出る理由はない。それに、コーバッツは、最前線に行けつていうあんたの指示にあつさり従つたところを見ると、もともとはあんた側の人間だったはずだ。だつたら、派閥を裏切る行為を何度も繰り返すつてことに対し、なんかしらでペナルティがなきやおかしいはずだ。なのにそれがない。」

でも、今の会議の流れを見て、ようやく合点がいった。

——自分たちが胴元になって、ねずみ講か博打でもやる気だつたんだろ。いくら人

数が多いつつつても、ここは最下層。搾り取るにも大本の資金が乏しい奴らからじゃ量なんざたかが知れてる。上層のいくつかを使えば、それだけ搾り取るのは容易になる。徴税がなくなるから、はじまりの街の住人からも、軍の内部からの不満も少なくなる。オツズをちやんと管理できれば、自分たちには利益が出続ける。いいことづくめだ」

さらに続いた俺の言葉に、また周囲がざわつく。

「いったい何を……。第一、ポータルPKってなんのことや」

「あら、とぼけるんだ」

それだけ言うと、俺は周囲を見渡して言い放つ。

「この様子から察するに、メンバーにもそれは通達してなかったみたいだな。」

三日くらい前、シンカーさんと丸腰のサシで話したい、って騙して、この近くの高難易度ダンジョンの奥深くに置き去りにしたそうじゃないの」

「そんな馬鹿な！」

「貴様、侮辱も甚だしいぞ！」

俺の言葉に、叫びだす面々。黙っている一部は、冷静になっっているのか、シンカー派の面々か、はたまた中立か。

「でも、確かにそのくらいから、シンカーさん見ないよな……」

「それがどうした！ 遠方へ遠征に行っているかもしれないだろう！」

「遠方って言っても、この世界なら、その気になればアイテムやらなんやらで、数分で数キロメートル単位を行き来できるんだぞ？」

俺を置いてけぼりにして、めいめいに議論に入る軍の幹部の面々。そこに、俺の素敵スキルに反応があった。近づいてくる速度から即座に到達時間を分析し、俺は切り込んだ。

「なああんたら、少しいいか？なんでわざわざ俺がこんな真似してると思う？ましてや、わざわざこんな長つたらしくおしやべりする理由。思いつくか？」

俺の言葉に、全員が考え込む。ま、まっとうなやり方じゃないし、一発じゃ思いつかないか。

「だったら、聞き方を変えてやる。」

——わざわざこんな目立つやり方やるつてのに、単独でやると思うか？それ以前に、こういう手段で来た時点で、なんで俺一人で動いてるつて考える？」

その言い方で、ようやく全員が感づいた。そりやそうだ、だって俺がこの部屋に入ったときの名目は、コーバツツの護衛だったのだから。その時点で、俺の単独犯という可能性はゼロといつていい。護衛がすり替わっていたとしても、普通に考えて気づく。どこかで誰かと示し合わせる必要があるのだ。

「なにが言いたいんや」

「なに、初歩的なことだよ、諸君。——視野を広げる、つてこと」

俺がそう言い切った直後、扉が開け放たれた。そこにいたのは、ユリエールさんと護衛としてついてきたであろうレイン、そして見覚えのない優男。おそらく——

「シンカー大将……!」

やはり、彼がシンカーさんだったようだ。しかし、大将とはずいぶんとたいそうな役職だ。

「遅くなつて済まない」

「いえいえ。ちょうど尋問も佳境に入つてましたから」

俺からしたら、このおしやべりは狼煙であると同時に、時間稼ぎだった。長つたらしくしやべる必要がないことを即座に察知した俺は、ここにつなげるためにああして楽しおしやべりに興じていた、というわけだ。

「さて、と。役者は揃ったことだから、改めてシンカーさんに問いかけましょう。この三日間ほど、何されてました?」

「この下にあるダンジョンの安全区画に避難していました」

「何故そんなところに?」

「キバオウさんに置いてけぼりを食らつてしまつて……」

「でも、当のキバオウさんはここにいますよね?なぜあなただけ?」

「キバオウさんから、丸腰で話が見たいと言われ……。転移結晶も、まあ大丈夫だろうということで、持っていかなかったんです。ダンジョンを突破しようにも、武器もない状態では突破できず……」

「つまりは、高難易度ダンジョンに、丸腰かつ転移結晶もない状態で放置されたわけだ。で、その話を持ちかけたほうは転移結晶でさつさと逃げた、と」

俺の言葉に、シンカーさんは頷いた。

「そこでは気づかなかったのですが、しばらくして、ようやく騙されたと気が付きました」

「ありがとうございます。ま、警戒を怠ったのは油断といえるかもしれませんが、仕方ないかもしれません。俺がレインにそんなことされたとしても、すぐには騙されたと気が付かないでしょうから。何より、ここまでの強硬手段に出ると思えばいい。しかも、よりによって大ギルドの副リーダーが。」

——で、なんか反論あるか？」

俺の言葉に、キバオウは顔中に脂汗を書いているのではないかと思うほどに青ざめたまま、ピクリとも動かなかった。

「さて、俺の仕事はここまで、ですかね」

そういって、俺は鯉口を二回鳴らした。静まり返った部屋に、チン、チン、と、その

音が響いた。

「あとはあなた方の分野です。では」

皮肉を込めて懇懃に一礼する。そのままレインを連れて退室した。

「・・・ねえ」

「ん？」

本部を出る途中に、レインが静かに声をかけた。

「私は、絶対裏切らないから。何があっても、君をだますような真似はしないから」

「おう、分かっている。信じてる」

それだけで十分だ。何せ、こいつは、人殺しに身を窶した俺を助けに来たような女だ。そんな奴を信頼しない理由などない。

53. 凶報

それから少しして、俺はレインとエリーゼを呼び出していた。というより、レインに頼んで、三人でレインの家に集まっていた。というのも、あの後、一応教会のほうにもあいさつに行き、キリトたちにもこっちの事の顛末は話した。その時に、二人が保護していたユイちゃんがいなくなっていたのだ。アスナは「おうちに帰った」と言っていたが、明らかにそういう感じではなかった。絶対あれは何かを隠している。こっちも、あの後軍の内情がどうなったのかは知りたし。

三人集まったところで、レインが三人分の飲み物を出した。今回は今まで出していた品ではなさそうだ。ま、それはどうでもいいことだ。

「で、どうなったんだ、あの後」

「つて、いうのは？」

「あの、ユイちゃん、だっけ。キリトとアスナが連れてた女の子のことだ。あいつらは何を隠してる？」

俺の言葉に、エリーゼははっきりと言いよんだ。言いづらいことなのか。

「んー、先に言っておくけど、びっくりしないでね。それから、今から話すのは、私が勝

手に分析した推論を多く含む、ってことを念頭に置いておいてね」

なんだそりゃ、と思っただが、その次の言葉でその意味がよく分かった。

「ユイちゃんはね、MHCPだったの」

「MHCPって、ストレアと一緒に、ってことか?」

「そ。あれから少しして、依頼の帰りにセルムさんに会いたって思いながら、森のマップを歩いてたの。そしたら、テイミングできないモンスターノンアクティブなのに非好戦的な奴が出てきて、ついていったらセルムさんに会えた。そこで、改めてストレアさんについて聞いたんだ。その時に、改めて、元は同じMHCPだったストレアさんの状態について、いくつか確認したの。それも踏まえて、あれこれ推察してみた。

まず、彼女らMHCPは、本来は文字通り、私たち、プレイヤーの精神的健康状態——メンタルヘルスを観察して、極限状態に陥ったプレイヤーの前に現れて、カウンセリングを行うプログラムだったの。おそらく彼女たちには、いわゆる病んだ状態の人の、更生成功例データや、逆の悪化した事例の膨大な量のデータがプログラムされていて、個人個人に合わせて適切なカウンセリングを行うプログラムだったんだと思う。現代のAIっていうのは、一言で言ってしまうと、とんでもない量の条件分岐の塊だからね」

「条件分岐?」

「ある一つの命題に対し、イエスカノーかによって行動を変えさせるプログラムの事。例えば、あるロボットに直進しろって命令を出して、壁があるかないか、って条件分岐を出して、無いならそのまま直進、あるなら、高さを見極めて、乗り越えるか避けるかを選択させる。これも一つの条件分岐を使ったプログラムの例だね。つまり、今回の場合、精神的な問題の根底を、おそらく簡単な問答から、その膨大な条件分岐の末に導き出して、解決の手段を探るプログラムだった、と考えられるわけ。

でも、ここで一つの問題が発生するの。意図は不明だけど、彼女たちは、この世界の基本プログラムからの命令で、プレイヤーとの接触を禁止されてしまった。精神的に限界のプレイヤーがどこにいるかを知っていて、しかも力になれるのに、力になることを禁止された彼女らは、大量のバグを蓄積させていった。その中で、彼女たちは、あるイレギュラーともいえるプレイヤーたちに焦点を合わせた。悲愴でも絶望でもない、温かい感情。それを持った二人。そして、どんな状況であっても、自身の根幹となる感情パラメータをほとんど変動させない一人のプレイヤー。彼女たちは、その三人を重点的に監視し続けた。前者の二人は、キリトとアスナ。そして、後者は――」

「俺か」

俺の言葉に、エリーゼは頷いた。自分でもわかっている。あんな状態なら、狂ってもおかしくない。実際、遊び半分でラフコフに入って、最初は何ともなくとも狂っていつ

たやつらを、俺はこの目で見てきた。そのあたりのやつの一部は、せめてもの慈悲、そして俺の目的のため、首を落とした。そんな中でずっと、俺は目的のためと、悪行をいくつも見逃したし、俺自身もこの手を血で染めた。自分でも、そんなことをずっと続けて正気でいられてよかったと思っている。一歩間違えば、確実に俺は血に渴いた獣になっていた。

「で、ストレアさんは、CBTで使われたけど正式サービスでは使われてなかったアバターを使って、強引に外に出た。でも、そうなら、今度は対象のプレイヤーがどこにいるか分からず、放浪することになった。プレイヤーアバターを使ったから、システム的には一応プレイヤー扱いになっちゃった、その弊害だと思う。そんなところを、セルムさんに見つかった、つてわけ。おそらくセルムさんは、かなりイレギュラーなプログラムだったんだろうね。で、今は彼の保護下にある。そのおかげで、消滅を免れた。最も、バグはそのままだから、あのままだと、私たちがあつたような、お人形状態のままだろうけどね。」

ユイちゃんの場合は、とにかくキリトとアスナに会いたい一心で、今キリトたちが暮らしている家の近くのコンソールから外に出た。けど、あまりにバグが多すぎて、幼児退行と記憶喪失を起こした。そんなときに、キリトたちに保護されて、あの協会に来た、つてわけ。

ユイちゃんがこれを思い出したのは、あの地下ダンジョン内に、システムコンソールがあったからなの。で、そこに触れて、すべての記憶がフラッシュバックした。私らがそんなこと起こしたら、確実に頭痛で気絶コースだけど、彼女はもともとプログラムだから、そんなこともなかったわけ。で、プログラムとしての力を使って、私たちの窮地を救った。それによって、例の基本プログラムがユイちゃんに気付いた。ユイちゃんに對するファイルチェック、バグ認定されて消去されるまでの数少ない時間を使って、彼女は自分の事を話してくれたの。消去される寸前、キリトが、そこに絶対GM権限が介入するはずだから、割り込んで、ユイちゃんというプログラムをパージできるんじゃないか、つてことに気が付いた。で、その気付きに私が気付いて、何とかユイちゃんのパージに成功した。ユイちゃんは、キリトのナーヴギアのローカルメモリに保存されてる。

これが、あの日、地下で起きたこと、それからM H C P に関しての考察」

そこまで言い切ると、エリーゼはほんの少し冷めた飲み物に口をつけた。いやはや、分かることにはわかるが、にわかには信じがたい話だ。でも、しっかりと一本筋は通っている。

「そうか。で、軍はあの後どうなった」

「それに関しては、私が説明するね」

俺の質問に對し、今度はレインが答える体勢になった。目線で促すと、一つ頷いてレ

インは続けた。

「あの後、君が取った手段も相当に強硬だったけど、そもそもがキバオウさんが強硬策っていうか、そういう手法に出なければそんな事態は発生しなかった、って結論になったの。まさにあの時君が言った、〃目には目を、齒には齒を。外法には、外法を。先に道を外したのはそちらだ〃って言う言葉が、そのまんま周囲の賛同を得たらしいね」

なんと。正直ただの思い付きで言った言葉が、説得のキーワードになってしまおうとは。言うは銀、沈黙は金だな。

「ま、でも、今の状態、キバオウがいなけりや軍がまとまらないっていうのもまた事実。シンカーさんは文官タイプだから、將軍にはなりえないしね。だから、副リーダーから部隊長の頭に降格させられたの。この立場は、システムのなものではないから、また同じようなことをしたら、今度こそシンカーさんが黙ってないし、何より副リーダーの権限は別の人になったから、そんなことをしたらキバオウもただじゃいられない。だから、って言ったらなんだけど、キバオウもおとなしくしているみたい」

「ま、妥当か。腐っても鯛つつーか、あいつの現場指揮能力は俺も目の当たりにしてきたからなあ……。あれは一朝一夕に身につくもんじゃない」

現場では、戦場では、ほんの少しのことが死につながる。そんなことは珍しくない。陣形の選択。プレイヤーの状態。攻撃の予備モーションから推測される敵の行動。取

り巻きのポップ位置、その強さ。武器の特性。間合いの長さ。それぞれが判断しなきゃならないこともあるが、指揮官の役割としてパツと思いつくだけでもこれだけある。キバオウ自身、最前線から離れて久しいだろうが、超が付くほどの大部隊の指揮能力という点で、キバオウには昔取った杵柄がある。いくら取ったのが昔でも、付け焼刃よりはよほどマシのはずだ。と、そんなことを考えていると、扉の向こうからでもはつきりわかるほど急いだノックの音が聞こえた。家主であるレインが席を立ち、出迎えに向かう。戻ってきたレインと一緒にいたのは、少し以上に意外な人物だった。

「あれ、ゲイザー？」

「久しぶりだね、ロータス君。それに、お二人も」

その人物は愛想よくふるまおうとしていたが、どうも隠し切れない焦りが見られた。

「・・・何があった」

「どうした、とは聞かないんだね」

「あんたは仮にも情報屋だ、隠すことはうまいはずだろう。そのあんたが、ほんの少しでも焦りを見せてる。ということは、それなりの事が起こった、と考えるのが妥当だ。・・・違うか？」

「そう、だね。それなり、どころではない。

——フロアボス攻略の先遣隊が全滅した」

——その言葉に、その場の空気は凍り付いた。

「偵察に行つて、全滅、か」

「ああ。第一報を聞いて、私なりに情報を集めてみた。フロアボスと交戦した先遣隊だったと思われる——つまり、死亡したメンバーの武器、ステータス傾向、そこから推測される戦い方……どれも、攻略組の名に恥じない、高次なものだ。それに、タンクを中心とした、非常にバランスのいいパーティであつたことも推測される。そのチームが、おそらくは5分程度で蹴散らされた」

「人数は？」

「10人だ。最も、偵察は20人で行われ、そのうちの半分を使つたから、まだそれが分かつたらしいのだが」

「……一人30秒計算……」

笑えない冗談だ。おそらく、交戦してからの時間だから、正味の戦闘時間で考えれば、一人当たり死ぬのにかつた時間は20秒、いや、もっと短いかもしれない。と、ここで、俺は一つのことを気付いた。

「あれ、そもそも、残りの10人は何してたんだ？」

「不測の事態に備え、扉の前で待機していたようだ。最も、先行した10人が入つた時点で、フロアボス部屋の扉は完全に封鎖された。鍵開けスキル、直接打撃など、思いつく

手段の限りが尽くされたらしいのだが、全く扉は開かなかつたらしい。転移結晶による離脱が行われなかつたはずはないから、おそらくは結晶無効化空間であることが推測される。

事態を重く見たヒースクリフは、既に長期休暇に入っているアスナ、キリトへの協力打診を決定した。君たちにも声がかかるはずだ。おそらくは、エリーゼさん。あなたにも」

「・・・ま、仕方ないわね。今回は存分に死合えるみたいだし、良しとしましょうか」

エリーゼのその言葉に、ゲイザーはため息交じりの苦笑が漏らした。俺も、ため息をついてから言葉を吐き出す。

「俺からしたら、ここまで危険なボス戦は参加してほしくないんだけどな」

「自分も参加するのに？」

「俺からしたら、これが為すべきことだからな」

それ以上でも、以下でもない。それだけだ。

レインの家をエリーゼと二人で去ってから少しして、俺にメッセージが飛んできた。送信者はレイン。何だろうと思いい開いてみると、「また後で家に来て」とあった。三人で

はなく、何かサシで話したいことでもあるのだろうか。ま、とにかく、呼ばれたのならいくしかあるまい。

その少し後、拠点で少し体制を整えてから、俺は改めてレインの家へ向かった。中に招き入れた当の本人は、少し緊張しているように見えた。

「どうしたんだ、改まって」

「うん、ちよつと、ね・・・」

やはり、少し緊張しているように見える。というより、これは、

「焦らなくていいぞ。まだ時間はある」

「いや、今言わないと、もしかしたら言えなくなるかもしれないから」

その言葉に、俺はある程度、どうしてこのタイミングだったのか察した。なおもどこか踏ん切りのつかない彼女に、俺は声をかけた。

「あー、なんつーか、こういう時、どうすればいいか分からないんだけどよ・・・」

「・・・大丈夫だからよ。俺は死なない。お前も死なせない」

「でも・・・」

「だから、な。大丈夫だ。根拠はないが、その気概がないと、そもそもできるものもできん。」

んでもって、生きて帰って、リアルで会おうぜ」

そういうと、俺が腰を下ろしている横に、彼女も座った。心なしか、少し距離が近いように感じるのは、気のせいだろうか。

「ねえ。少し、甘えていい……?」

「……ああ」

その言葉で安心したのか、彼女はこちらに体を預けてきた。その肩を、俺はできるだけ優しく抱いて、とん、とん、とたたいた。

「ねえ。さっきの、本気?」

「リアルで会う、ってやつか?本気も本気、大まじめだ。」

だからよ。その言葉は、再会したときに聞かせてくれ」

我ながら、小恥ずかしいセリフだな、と思った。できるだけ赤面させないようにしているが、果たして効果はいかほどか。と、レインが肩に頭をのせてきた。

「……約束」

「ああ、約束だ」

きつと二人とも、今の顔を見られたら問答無用で抜剣案件だな。そんなことを考えてしばらく、彼女からは寝息が聞こえてきた。まだ若干幼さの残る顔に、アイテムストレージから大きめの毛布を取り出して、自分ごと掛けた。

その後、俺も寝てしまって、翌朝二人して赤面したのは、また別のお話。

54. 骸骨の死神

その次の日の午後。75層フロアボス攻略レイドが、第75層主街区コリニアの転移門前に集まっていた。だが、俺たちは、本当に少しだが、どこか照れというか、気恥ずかしさが隠せないでいた。というのも、その前の晩のあれの余韻が、まだ少し残っている。と、そこに、エリーゼが合流してきた。

「おっはよー」

「おはよ」

「おう。今日はよろしく頼む」

「うん、よろしくねー」

うん、何とかいつも通り挨拶できたかな。

「ところでお二人さん。なんでそんな付き合いたて初々しいカップルみたいな距離感になってるの？」

「なっ……！ そんなことない！」よ!？」

「おーおー、いつもに増して息ぴったり」

「だからそんなことないって！ な!？」

まさか二連続で完璧にシンクロするとは思っておらず、その反応にまたエリーゼがツボに入る。

「まー、いつもに増して息びったりだことで……。その息びったり度合い、ボス戦で存分に發揮してね」

言い残して、そのまま別の人にあいさつに向かった。その言葉に、隣にいるレインはさらにどこか恥じ入るような態度になっていた。ほんの少しだけ勇気を出して、その手を取る。と、驚いたように——いや、実際驚いてこちらを向いたレインと目が合った。「堂々としてればいい。俺たちの関係が変わったからなんだってんだ。やることは一緒だ。二人とも、一緒に帰る。それだけだ」

俺の言葉に、レインは目を瞬かせた。嬉しそうな微笑みと手を握り返すことが、その返答となった。

やがて、ヒースクリフが来た。周りを見渡し、ゆったりと宣告する。

「欠員はないようだね。よく集まってくれた。状況はもう知つていると思う。厳しい戦いになると思うが、諸君の力をもってすればきつと切り抜けられる。解放の日のために！」

それに対する返答は関の声。改めて、この極限の状況で戦士の士気を上げる、その事実、この男のカリスマというものを感じた。

ヒースクリフは、キリトに何かさきやくと、今度はこちらにきた。ふと一つ笑うと、奴は俺に向かつて言った。

「君にも期待している。射撃スキル、その力で援護してくれたまえ」

「あんまり頼るなよ。俺も人だ」

「ああ。だが、守るもののある人の強さ。それを信じている」

そういつて、今度はこちらに背を向けて歩いていく。と、ここで俺はようやく、レインとの手をつないだままだったことを思い出した。思わず制御しようとしていたが、少しだけ赤面する。この場面で、どのように言おうか。そう考えた時、隣から声がかかった。

「大丈夫。私がいる」

少し驚く。できるだけ顔に出さないようにしつつ、ゆっくりと隣の相棒の顔を見た。俺と目が合うと、相棒はしてやったりとでも言いたげに、にやつと笑った。

「ああ」

空いている手を握って、突き出す。相手も軽く握った手で応えた。開いたコリドールで、俺たちは移動する。その扉が開いた瞬間に、抜くように手をほどき、弓を構える。レインも、右手で剣を抜き放った。

扉が開く。その瞬間に、盾から剣を抜き放ち、ヒースクリフが命じる。

「戦闘、開始！」

その声に、全員が声を上げてボス部屋になだれ込む。が、そこには何もなかった。そう、ボスの姿さえ。ポップが遅れているのか、と、俺も考えた。が、微かに耳がとらえた音に、俺は目を向け——即座に叫んだ。

「上だ！退避！」

エリックなんてプレイヤーは、いてたまるか、という話だが、実際に上にいた。即座に矢をつがえて放つ。それを当然のように、鎌になった双腕の片方で弾く。俺の号令に、俺をかき分けるように全員が部屋の後方へ退避する。が、二人逃げ遅れていた。その瞬間、即座にメニニューを操作、適当な剣を実体化させ、つがえて放つ。ソードスキル無しといっても、矢ではなく剣を放つことによる威力上乘せを警戒してか、また片腕でボスは弾いた。が、もう片方は逃げ遅れたプレイヤーの一人に襲い掛かり、大きく吹っ飛ばした。それをキリトが受け止め——ようとした寸前、その体はポリゴンとなった。それが意味するのは。

「一撃、だと・・・!?!」

「なんて、デタラメ・・・!」

直後に、またボスが両腕の鎌で攻撃を仕掛けてくる。名前は、*The Skull Reaper*。骸骨の狩り手、いや、ここは骸骨の死神、が正しいか。真っ先にキリ

トが動き、パライシにかかるが、そらしきれてない。と、アスナがそこに加わることで、何とかパライシした。もう片方の鎌はヒースクリフが受け止める。それを確認した直後に、俺は側面に回って攻撃を加える。幸いなことに、こいつはスケルトン系——つま^{ディレイ}り、動きの節である関節がよく見える。そこを狙えば、上手くいけば効率よく行動遅延をとれるはず。

「手伝うよ」

「前任せた」

その一言で十分。レインが俺の前に躍り出ると、ムカデのような足でつついて来ようとするのをうまく回避しつつ、足の関節のいくつかを斬っていく。俺はその直後に、そのうちのいくつかを狙って射っていく。そうしているうちに、俺は一つの事実^に気付き、慌てて狙いを変えた。それが集団を襲う寸前、透き通った細身の片手剣、^{フアン}トムピアスがそれをパライシし、そらした。その持ち主であるエリーゼに、俺は心の中で感謝しつつ、大声で注意喚起をすることにした。

「尾に刃がある！側面から攻撃するときはそのちらにも注意しろー」

俺の言葉に、ようやくほとんどがその脅威に気付く。その火力、隙の無さ。なるほどこれならいかに攻略組の偵察隊といっても簡単に蹴散らされる。ましてや、今回は結晶使用不可の戦い。厳しい戦いになることは、開始から一分と経たずして、容易に判断が

できた。

まさに、激闘と呼ぶにふさわしい戦いだった。俺とレインとエリーゼが幾度となく隙を作り、攻め、フォローし、というのを繰り返していた。幾度となく、こめかみのあたりから変な汗が出てくるのを感じる。何とか抑えているのはただ一つ、外せば終わるといふ、脅迫にも似た義務感によるものだ。

だが、俺たちも人間だ。どうあっても限界はある。何とか捌き続けていたが、俺の援護射撃が一瞬だけ鈍ったその隙に、尾の刃がアタッカー集団を襲った。エリーゼのパリイも、俺の援護も、レインの援護も間に合わない。

「回避!!」

何とか後ろから声を張る。が、到底間に合わないやつが何人かいることは、俺もすっかり認識していた。一瞬、そちらを向きたくなる。が、——小を殺して大を生かす。今まで取ってきたその道が、それを許さなかった。的確に、次の攻撃を防ぐための射撃に集中する。そのための攻撃を放った直後、聞きなれたポリゴンの破裂音がした。

(くそっ……!)

内心で毒づきながら、次の攻撃のために俺は矢をつがえた。

俺とレインとエリーゼが完全にサポートに回り、他が、視界外から奇妙な軌道で飛んでくる攻撃に警戒しつつ削る。そんなことを、果たしてどれだけ繰り返しただろうか。ポリゴンの破砕数は、カウントしていない。俺は端から、この戦いは犠牲なくしては通れないと考えていた。だが、それでも。破砕音が聞こえるたびに、思わず顔をしかめていた。

何度目かのフォローの際、俺は少し近めの距離にいた。少しずつ、相手の攻撃によってPOTローテが回らなくなってきた、前衛が手薄になっていた。それによるフォローを一息でできる間合いにいたのだ。だが近づくとということとは、ワンミスが命取り。そして、そのワンミスが発生した。尾の刃のターゲットは、——俺の目の前。

「イクイップメントチェンジ、セットワン！」

叫びながら飛び出す。手に持っていた弓は消え去り、代わりに俺の両腰に慣れ親しんだ重み加わる。目の前のやつの前に立ち、そいつを右手で押しつけながらオニビカリを抜刀、*“弧月閃”*でパリイする。オニビカリを構えて、振り返らずに言う。

「あんた、下がってな。俺が前を支える」

「・・・すまん」

「いいって。こいつが規格外すぎるだけだ」

そんな会話の後に、俺は飛び出した。目標は、レインの斬っている足の、さらに頭に近い部分。尾に近い部分にはエリーゼがいたので、上手くいけばやれるはずだ。走りながら俺は、左手のオニビカリはそのままに、右手を柄にかける。そのまま、走った勢いのまま、抜刀しつつ斬り抜ける、“抜粋竜斬”を繰り出す。硬直が抜けた直後に、振り返り様に刀で、空に勢いよく飛び上がってその場で回転するソードスキル“断空牙”を繰り出し、小太刀で短剣空中連撃ソードスキル“ダンシングザツパー”。とてもシビアなタイミングを合わせて、高速で移動しながらの10連撃などという、規格外の連撃を達成する。続いて飛燕連脚、さらに少し溜めてから、飛び込むような動きの強力な突進を放つ短剣系ソードスキル“アストラルダイブ”、降りた直後の硬直は刀の旋車でキャンセルする。すると、ボスがダウンした。

「全軍、突撃ー！」

ヒースクリフの号令が届く前に、俺は再びソードスキルを発動させていた。相手の股下から逃れるように幻狼斬を繰り出し、その場で飛び上がりながら斬り上げる刀系ソードスキル“月見山茶花”。さらにオニビカリで月下柘榴につなげ、さらに刀で“竜刃翔”を発動。飛び上がりながら、俺はオニビカリを納刀、空中から衝破魔神拳を出す。刀を担ぎ、拳をたたきつけた状態は、さらなる大技につながる。刀系上位ソードスキル、天狼滅牙。その大技を繰り出し、今度こそ俺はとてつもなく長い硬直に陥った。

そして、その硬直が抜ける直前、ボスが復帰の兆候を見せる。

——やるか、アレ。

「レイーン！」

「了解！」

阿吽の呼吸で通じ合うと、俺は硬直の抜けた体を即座に動かす。瞬間、幻日に、太陽と見紛わんばかりの、白い光が宿った。しっかりとコントロールできる人のほうが少ない、というより、使い手そのものが少ない刀系裏最上位ソードスキル、漸毅狼影陣。その超連撃が突き刺さった。最後の振り下ろしが決まった直後に、ボスが一瞬膨れ上がり——膨大なポリゴンをまき散らした。

ボスを撃破した。俺がラストアタックを取った。そんなことより、今回は疲れた、という感情のほうが先だった。それは全員同じだったのだろう。そこから、武装が床に落ちる音が聞こえてきた。かくいう俺も、恥も外聞も気にせず、大の字になった。

55. 決闘

疲れた。そんな言葉以外になにを発しようか。そう思うくらいに、俺たちはくたくただった。

「何人、やられた」

誰かが発した、その言葉。それに、誰かがメニューを開く。おそらく、索敵スキルを使ってプレイヤー数の照合を行うのだろう。誰がやっているのかを確認する気力すら俺にはなかった。

「8人、やられた」

「俺たちのサポートがあつてなお、8人か……」

「マジかよ……。あのサポート込みで……」

全員が絶句する。それだけ、俺たちのサポートがうまかった。そこは十二分に誇れる。だがそれ以上に、それがあつてなお8人も犠牲を出した。それが、全員にとって大きなショックだった。

「こんなので、本当にゲームクリアできるのか、俺たちは……」

「するしかねーよ。手足もがれてでも戦う以外、俺たちに選択肢はない。それが俺たち

のなすべきことつてやつだ」

それは俺の本心だ。たとえ、攻略組が俺一人になったつて、俺はきつと戦い続ける。何より俺は、そうしなくては——そうしなくても、だろうが——地獄の底で延々と怨嗟の声を聞き続けることになるだろう。

「よう相棒、まだ生きてるか？」

「うん、なんとかね」

寝ころんだままの問いかけに、静かだが確かに、隣から声が返ってくる。その声は、確かに俺の相棒たる女子の声。

「まったたく、たった一人でも戦える、とか思ってるんでしょ」

まさにさつき考えていたことを見抜かれ、俺は思わず声のほうを向く。と、そこには若干むくれ気味の顔をしたレインがいた。

「やつぱり。君は死なないよ。私の相棒なんだから」

「なんだそりや。『あなたは死なないわ。私が守るもの』つてか？」

「似てる」

俺の物まねに、レインはふと笑った。上半身を起こして周囲を見ると、想像通りというか、みんなが崩れ落ちていた。と、その中にたった一人、得物を杖にすることもなく立って周囲を見渡すやつがいた。

「すげえな」

立っているたった一人、ヒースクリフのHPゲージは、レッド寸前ではあるがイエローの中にとどまっている。あれほど苛烈な攻撃にさらされ続けながら、いまだに「HPバーがレッドに突入しない」という伝説は健在だった。だが、俺はどこか引つかりを覚えた。

疲れ切った頭に鞭を打ち、もう一度集中する。姿勢——自然体。不自然な緊張は無し。目線——全体を見渡している。観察。表情——無、ではない。ただ観察。手を差し伸べるでもなく、ただ状態を見ている。どこかで見たことがある。これに似た表情を。どこだ。思い出せ。頭の中を片端から検索をかける。と、近い記憶で見つかった。そして、その瞬間にピースがハマった。

——まさか。だが、そうすれば、つじつまは合う。と、かちやりと、かすかな音を耳がとらえた。そちらを見ると、キリトが自分の得物を手にしていた。それを見た瞬間、ある程度悟った。

(腹くぐるか)

いつも着ているこの上着の内側には、いくつか投げナイフが収納できるように改造してある。静かにそのうちの一つを握る。

「ロータス、君？」

俺の動きに気付いたレインが、少し声をかける。直後、キリトがヒースクリフに向かってチャージをかけた。ヒースクリフは驚きつつも防御姿勢。その瞬間を俺は見逃さず、懐から手を抜きながらナイフを眉間に放った。そのナイフが突き刺さるのと、キリトの剣が心臓に突き立てられるのがほぼ同時になる——はずだった。その二つは、紫色の障壁に阻まれ、ヒースクリフに突き刺さることはなかった。障壁には “Immortal Object” の文字。

「やっぱりかよクソツタレ」

俺は仮説が当たったことに対して舌打ちした。これほどまでに嬉しくない予想的中等など初めてだ。おそらく、後にも先にも。

「あなたたち何を……!?!不死属性……!?!これは、一体どういう……」

「暴かれた伝説、つてどこかねえ」

「いやいや、なに暢気に構えてるの!?!」

「とりあえずは暢気で大丈夫そうだからな」

俺の気楽なコメントに思わずツツコミが入った様子のエリーゼに対し、俺は冷静に返す。

「だってよ、俺の予想が正しければ、やろうと思えばこいつはここで俺たちを皆殺しにできる。な、キリト」

「ああ。というか、お前はどこで気が付いたんだ？」

「あいつの顔だな。お前は？」

「俺は、いつも疑問に思ってたんだ。すべての始まりで、あいつはこの世界を作り上げ、観察することが目的だと言った。なら、あいつはいつたいてどこで俺たちを見ているのか、って。そして、他人がやっているゲームを、ただ横から眺めるだけ、ということほどつまらないものはない。なら、プレイヤーとしている、と考えるべきだ。そして、自分には何かしらの予防線を張っている。それに賭けた。で、その予想が的中した。――

――そうだろう、茅場晶彦」

キリトの宣言に、全体がざわついた。それは俺の予想通りで、ヒースクリフはそれを否定しなかった。

「参考までにどうしてそう思ったのか、聞かせてもらってもいいかな？」

「最初におかしいと思ったのは、デュエルの時だ。最後の一瞬だけ、あんたあまりにも速すぎたよ」

その言葉に、ヒースクリフは苦笑した。

「いやはや、あれは私にとっても痛恨事だった。思わずシステムのオーバーアシストを使ってしまったからな。」

ロータス君、君は？」

「俺もデュエルの一件は気がかりだった。でも、決め手となったのはあんたの目だ。あんたのさっきの目は、安全圏から高みの見物を決め込んだ目だ。ラフコフ討滅戦の時に、P O Hのクソ野郎がそうしていたようにな。そんな目をこんな場面でできるやつはいつたいなんだ？ っつて考えれば、答えは一つだ」

「なるほどな。君のその目、警戒を怠っていたよ。」

「いかにも私は茅場晶彦だ。そして、君たちを待ち受けるこのゲームの最終ボスでもある」

「最強の味方が、最強の敵か」

「趣味がいいとは言えないぜ」

「なかなか洒落たシナリオだと思っただがね」

「そんなことを言いながら若干笑うこいつに、確かに悪意は感じない。むしろ、驚き、呆れ、そんな感情ばかりが読み取れる。」

「二刀流を持つキリト君は、魔王たる私に対する勇者として。そして、射撃スキルと、多量のソードスキルを扱いきるロータス君はいわばジョーカーとして。二人とも、最終的に私の壁になるとみていた。その予感、幸か不幸か当たっていたことになるね。」

「私の正体に関しては、もう少し後まで引つ張る予定だったが・・・こうなってしまうては致し方あるまい」

「ここで全員、殺すか？」

言いつつ、俺は片手で鯉口を切りながら、隣にいるレインを見る。確かに攻略組は壊滅することになるが、あまりに遅すぎるボス撃破報告に訝しんだ一般プレイヤーが真実を知る日は、おそらくそこまで遠くない。となれば、ここで真実を知る全員の口を封じてしまえばいい。情報漏えい防止なら、それが一番だ。

「目的のためならいかなる犠牲もいとわない。だが、その信条には少し変化があったみたいだね」

「言ってる」

「とにかく、私としてもそれはしない。ここまで一緒にいれば情も湧くし、なによりあまりに理不尽だろう」

その言葉に、嘘はなさそうだ。対人で培われた直感が、高確率で嘘をついていないと言っている。ならどうする気だ。考えつつ、俺はヒースクリフから視線を外さず、鯉口も戻さずに考える。と、その背後のKOB団員が動きを見せた。

「貴様、俺たちの忠誠を、よくも——！」

馬鹿め。心の中で毒づく。気持ちは分かるが、そう^{不意打}いうのは気づかれないように細心の注意を払うものだ。叫びながら斬りかかるなんざもつてのほか。実際、ヒースクリフは落ち着いた様子でメニューを操作する。と、その斬りかかった団員を皮切りに、次々

に黄緑色のエフエクトに包まれる。

「麻痺、か」

「ああ。大丈夫、しばらくすれば解けるし、ここにはモンスターは出ない。私は一足先に、この城の頂点である紅玉宮で君たちを待つことにしよう。だが、その前に。」

——見事正体を看破した君たち二人には、報酬を与えねば」

その言葉に、俺は顔をしかめた。

「報酬……?」

「私と一騎打ちをするチャンスを与えよう。当然だが、不死状態は解除する。そして、二人のうちいずれかが私を倒した場合、その時点でゲームクリアとみなし、全プレイヤーを開放する。……どうかな?」

その言葉に、俺は一瞬悩んでしまった。これは、おそらく、この場で最大の脅威たるキリトと俺を排除したいというところだ。だが、それにふさわしいほどの報酬だ。

隣を見る。そこにいるのは、俺の相棒。そして、——どこか不安そうに見つめる、少女だった。それを見た瞬間、俺は理性の判断を振り切った。

「上等。受けてたつ。が、その前に頼みがある」

「何かな?」

「MHCP02。あれをもらい受けたい」

俺の言葉に、ヒースクリフは少し意外そうな顔をした。

「彼女の状態を知ってなお、かね？」

「あくまであれば、対話が仕事なのに対話を禁じられた、その矛盾によるエラー蓄積が原因のバグだろう。なら、対話しながら長い目で付き合うなりなんなりで、症状はかいぜんできるはずだ」

「・・・了解した。彼女は、君のナーヴギア、そのローカルメモリに保存されるようにしておこう」

その一言を聞いてから、俺は鯉口から刃を抜き放った。幻日の刃に自身の顔を映し、一度目を閉じる。――すまん、リズ。結局お前の刀に血を吸わせることになるかもしれない。

静かに、無形で構える。はたから見ればただの棒立ちなのに、そこには隙らしい隙は無かった。それを見てから、ヒースクリフはキリトに目を向けた。その間に、俺はレインを見つめる。

「いいだろう。決着をつけてやる」

「キリト君・・・！」

「ごめんな、アスナ。ここで退くわけにはいかないんだ」

「死ぬつもりじゃ、ないんだよね・・・？」

「ああ。勝つてこの世界を終わらせる」

その言葉には強い意志が込められていた。そのことははっきりと分かった。ゆつくりと腕に抱えていたアスナを下ろすと、キリトは静かに二本の剣を抜いた。レインは、しばらく俺を見ていたが、やがてゆつくりとほほ笑んだ。それに笑い返し、俺は再びヒースクリフに対峙した。

「キリト！」「キリトー！」

クラインとエギルが大声を出す。だが、その程度でキリトは止まらない。

「エギル。今まで、中層クラスの前士のサポート、サンキュな。知ってたぜ、お前が儲けのほとんど、そっちにつき込んでたってこと」

その言葉に、エギルは驚いたように目を見開いた。大方知っているとはいなかったのだろう。ゆつくりとキリトはエギルに笑いかけ、キリトはクラインに目を向けた。

「クライン、……あの時、お前を置いていつて悪かった」

その言葉に込められた意味を、俺ははつきりと理解した。

「て、めえ……キリト！今謝ってんじやねえよ！向こうで飯の一つでも奢って、それでようやくキャラにしてやる！」

「ああ。向こうで、な」

なんだかんだで攻略組でも年長組の一人であり、粒ぞろいの実力主義な小ギルドの長であるクラインもそれを察したのだろう。俺が思っていたことをそのまま言ってくれた。そして、二刀を引き抜き、俺の横に立つ。そして、ぼそりと問いかける。

「お前は、レインに言う言葉はないのか」

「舐めるなよ。俺とあいつの間に言葉など要るものか」

俺の言葉に、キリトはふと笑った。そして、ゆっくりとキリトが深呼吸する。目を開いて、キリトはヒースクリフに突進していった。

ソードスキルは使わない。いや、使えない。剣技連携スキルコネクトを使えるのは、S A O全ブレイヤーの中でも、俺とレインを含めたごくごく一握りの人間のみ。開発者である茅場晶彦ヒースクリフはその予備モーションからソードスキルの動きが読める。勝機があるとすれば、キリトが純粹な剣の腕だけで圧倒するか、俺の剣技連携でぶち抜くか、連携を取るか。三つ目の選択肢が一番現実的ではあるのだが、問題は俺とキリトのペアで、連携の練習をほとんど積んでいないということだ。こればかりはどうしようもない。となれば、俺のとれる手段は一つ。

素早くメニューを開く。そのまま、武器を弓へ変更。キリトは頭に血が上っているのか、回り込むという手段をほとんど使わず、正面からの連撃のみでの突破を狙っているなら。

矢をつがえる。照準をしっかり見つめ、息を止める。やがて、ヒースクリフが一撃だけだが確かに反撃した。それはキリトをかすめ、いったん距離を取ってから、キリトはソードスキルを発動させた。瞬間、ヒースクリフがにやりと口元をゆがめた。キリトも自分の失策に気付くが、もう遅い。だが、——直後にその頭部めがけて飛んできた矢を交わして、笑みが消える。俺がその矢を放ったのだ。そして、当の俺は直後に第二射の体制に入っている。だが、そのあたりさすがはこの男。キリトのソードスキルに反応しつつ、俺の矢も正確に対応してのけた。やがて、キリトの連撃が終わる。それを悟った俺は、即座に突進した。

「イクイツプメントチェンジ、セットワン」

腰に慣れた重みが伝わる。この場合は、取り回しのいい小太刀。そう判断し、俺は左手でオニビカリを抜く。水平の居合に、即座に返す形でもう一発水平に。それを正確に盾でヒースクリフはいなす。このくらいは想定内。右手にオニビカリを持ち替え、盾に左の肘鉄、と見せかけて左の上段回し蹴りで弾き飛ばしにかかる。が、これを想定したヒースクリフは盾で蹴りを受け止める。それを読んだ俺は、蹴りの反動で距離を取りながら、即座に左手で抜いた投げナイフを引き抜き様に放つ。掲げた盾で若干視界が悪かったのかただの用心か、投げナイフを丁寧に防いだヒースクリフだったが、それは俺にとって僥倖。一気に体勢を低くして今度はアキレス腱を狙ってオニビカリを振るう。

が、これはその体に似合わぬ飛び込み前転の要領で回避する。お互いに体勢が崩れたところで、仕切り直し。そのころには、キリトの体制も整っていた。ヒースクリフを挟んで、キリトと俺が一直線上に並んだ形になった。

今度は俺が突進する。まずは左手で盾をぶん殴る。盾を使ってひらりといなされる。次は右の肘によるフックで盾の縁を叩く。が、これは相手が下がったことによつて躲される。左手に持ち替えた小太刀を前に出したまま、俺はさらに突進する。次は小太刀での斬り上げ。これを盾も防ぐ。それは、俺の想定通り。右の拳が光つて、強くその盾を叩く。俺の十八番の一つ、剛直拳。だが、この程度では揺るがない。体術系二連撃ソードスキル双竜脚そうりゅうきゃく、小太刀ソードスキル「魔皇刃」まこうじんのたたきつけにつなげる。が、これも揺るがない。そして、オニビカリから光が消えた。

「……この場においてミス、か。確かにそれは理論上、どこまでも連撃を続けられる。そして、その連撃は私の読みの先に至る、かもしれないが。……この土壇場において、失態を冒すとは。

——さらばだ、ロータス君。君には、期待していたのだが」

どこか落胆を込めた声。俺は何も言わない。ヒースクリフの剣が、青い光をまとう。そこから繰り出されるのは、おそらくはスラント。だが、その軌道から言つて、それは俺の首を飛ばすには十二分だった。

——それが、すべてなら。

——どうやら、俺は賭けに勝つたらしい。

「潮は満ちた」

「何?・・・!?!」

ソードスキルが俺の体を切り裂くのと同時に、隠れていた俺の光る拳から重たい一撃がその盾に突き刺さる。体術系最上位ソードスキル、*“絶拳”*。とてつもないチャージから強力無比のダメージとノックバックを発生させる、まさに大技。それは問答無用でヒースクリフの盾を弾き飛ばし、大きく体勢を崩した。

「キリトおおおお!!」

「ああああああ!!」

俺の声に、金属質の轟音とキリトの絶叫が重なる。ヴォーパル・ストライクが突き刺さり、ヒースクリフのHPを削り切った。

「見事」

その声は、はつきりと俺の耳に届いた。その直後、ヒースクリフはポリゴンになった。

——ゲームはクリアされました——

無機質なシステムの声がやけに大きく響き、俺たちの意識はいったん闇に落ちた。

56. 消える境界線

俺が再びその意識を覚醒させた時、俺は不思議な場所にいた。まるで、夕暮れの空にいるようだ。比喻でもなんでもなく、俺は空に立っていた。いや、どういう状況だよ。と、ツツコミを入れるより先に、俺は後ろを振り返った。そこに、彼女がいると確信しているように。そして、彼女も、俺が振り返ることを信じていたように、胸に飛び込んできた。

「よかった……」

「たりめーだ。俺はもう死ねねえからな」

「それは、私がいるから？」

「ああ。後ろにお前がいるってことが、俺にとって重要になったからな」

「そっか……」

俺の言葉に、彼女は腕を回して少し力を籠めることで返答とした。

「その……名前、教えてくれねえか」

「え？」

「リアルで、会いに行くからよ。教えてくれ」

んー、今までこんなに恥ずかしい思いの質問ってあったかなあ。たぶんないなあ。なんて、軽い現実逃避をしながら、ほんの少しだけ視線を下に向ける。と、彼女はゆつくりと答えた。

「枳殻虹架。花の枳殻に、虹が架かる、で、虹架」

「虹架、か。きれいな名前だな。お前によく似合う」

「君も。名前、教えて？」

「天川蓮。天の川の蓮だ」

「蓮、か。何となく、君らしいね」

「そうか？」

「そうだよ。泥の中でも色あせない蓮の花。どんな状況でも自分の信念を曲げない、君らしい」

「そう、かな。考えたことなかった」

それだけ言うと、俺は我慢できずに少し強めに抱きしめた。レイン——虹架に、俺は耳打ちした。

「何があつても会いに行く。待っていてくれ」

「うん。信じてる」

答えるように強くなった虹架の腕の力を、俺は心地よく思った。そして、改めて、視

線を違う方向に向ける。

「こうして見るのは初めてだな」

「そう、だね」

レインも、同じ方向を見る。そこには、円錐状をした鋼鉄の城が浮かんでいた。——
—浮遊城アインクラッド。俺たちがこの2年半過ごした、このゲームの舞台であり、もう一つの現実。

「なかなか絶景だろう?」

その声に、俺たちは思わず離れる。が、その手はほとんど無意識につながれていた。声のほうを見ると、そこにいたのは白衣の男性。

「茅場晶彦……」

思わずつぶやく。彼はヒースクリフとしてではなく、茅場晶彦としてここにいた。

「ああ。MHCP02のバグはもうすでに除去してある。——原因は、君の推察通りだったよ。彼女は、ロータス君のローカルメモリに保存されるように設定した。今は、データ転送の真つ最中だろう」

「そうか。感謝する」

「このくらい、どうということはない」

その会話が一区切りつくと、虹架がぼつりと聞いた。

「あの・・・何人、生き残ったんですか？」

「今現時点で、ログアウトシークエンスが進んでいる対象人数は、6486人、だな」
「そう、ですか・・・」

その返事を聞いて、茅場は何か言いかけた。が、その言葉は発せられることなく、彼は別の言葉を紡いだ。

「——ゲームクリアおめでとう。レイン君、ロータス君。私はもう一人の勇者の元へ向かうとする。あとわずかな時間だが、ゆっくりするといい」

そういうと、彼はまた歩き出した。

「何を言いかけたんだろうね、茅場さん」

「さあな。ただ、——俺としては、あのままレッド殺しをしていた場合の救済人数、つていうのも、少し興味はあるがな」

「もしそうだったら、私たちはこうしてはいなかったね」

「ああ。最後の攻略が75層なのか100層なのかはわからんが、ギリギリまで俺は攻略に参加しなかっただろうな」

「それで、もつと暗殺技術とか鋭くなっていたり」

「ありうる。虹架とどこかで会っても、きつと俺は突き放してるだろうな。俺みたいに闇堕ちして欲しくなくて」

「だと、私はもつと意地を張って追いかけていくだろうね」

「何となく想像つくな、それ」

轟音が響く。鋼鉄の城が音を立てて崩れ落ちていく。この2年間で駆け抜けた、その場所が落ちていく。空の底、という表現が果たして正しいのかは分からないが、どこまでも落ちていく。

「なあ、虹架」

「何、蓮さん」

「リアルで会えたら、その・・・できれば、でいいが・・・俺と付き合ってくれねえか？」
ここまで顔を見られたくないと思っただのは初めてだ。表情や目線がPVPで役に立つと知ってから、俺はポーカーフェイスが得意になっていた。だが、今ははつきりと頬が紅潮しているのが分かった。この調子だと、文字通り耳まで赤くなっているに違いない。だが、隣の少女はかすかに笑いを漏らすと、正面から見上げる角度で俺の顔を見た。「あーあ、私から言うことになると思っただのになあ」

「は？」

素っ頓狂な声が出る。一瞬本気で、相手が何を言っているのか分からなかった。が、一泊遅れてようやく理解する。

「えっと、それってつまり・・・」

「私も。きつかけとかよくわからないけど。それでも、あなたのことが好きです」

そんなことを言った。言いやがったよこの娘っ子。まだ赤みが消えない顔を下げると、そこには同じく照れた虹架がいた。そこに感じた何とも言えない感情のままに、俺は先ほどより数段強く彼女を抱きしめた。

「・・・ちよつと苦しいかな」

「やかましい。・・・お前が可愛すぎるのが悪い」

「なにそれ」

笑ったような、呆れたような声とともに、彼女も俺を抱きしめる。

「会いに行く理由が増えたな」

「会いに来なかつたら私から会いに行くから」

「そうか。すれ違いにならないようにしないとな」

「思い込み激しそうだしね、蓮さん」

「やかまし。つて言いたいけど、否定できないのが悔しいな」

そんなことを言い合う。そんな中で、轟音が止んだことに気が付いた。

「そろそろ、だな」

「そうだね」

もはや言葉など意味はない。またしつかりと抱き合つて、——俺たちの意識はゆっ

くりと落ちていった。

再び目を覚ます。そこで、俺はゆったりと横になっていた。

「……知らない天井だ」

思わず、そんな言葉が漏れる。ふざける余裕くらいはあるのかと、思わず笑いが漏れた。自分の力の無さが、ここはあの世界ではない、と教えていた。みぞおち付近に力を込めて、体を起こす。

（頭が重い。——ナーヴギアがあるからか）

何とか腕を持ち上げてナーヴギアを取ろうとするもうまくいかず、仕方なく俺は頭を下げてナーヴギアを頭から落とした。大昔のゲーム機だったかゲームソフトだったかは、強い衝撃を与えるとセーブデータが吹っ飛んだそうだが、今時そんなヤワなつくりはしていないだろう。

落とした衝撃でかなり足は痛い。が、その痛みが、現実世界へ戻ってきたという実感（虹架に会いたいな……）

どうしても、そんな思いが湧いてくる。だが、とりあえずはこの体をどうにかしてやらだろ。そう思った俺は、とりあえず近くにあったナースコールと思われるボタンを

押
し
た。
。

A L O、 i f 編

57. 虹を求めて

SAOから帰還して数か月。俺は今日の宿を探していた。というのも、これには少し込み入った事情がある。

ま、端的に言うと、“家を追い出された”。SAOにどんな事情があつたと言っても、父親にとって俺はたかがゲームで2年間も棒に振つた馬鹿者に過ぎなかつたのだ。：これを理解するまでに、一週間くらいかかったが。リハビリ明けの俺に待っていたのは、自分で代金を払う羽目になつた携帯と、おそらく一定期間は暮らせるだろう金、それからある程度の服だけだったのだ。家も家族も、俺には許されなかつた。で、俺はその日暮らしの半分、いや、ほぼ完全にホームレス生活になつているわけだ。一応、ナーヴギアは俺の手元にある。両親が管理を拒否したからだ。気持ちとしては分かる。ナーヴギアを被ることで、また死にかける羽目になつたら。そう考えたのだろう。だが、俺としては、使うところもないから、ただのバラストと化していた。

虹架に会いに行こうにも、これでは合わせる顔がない。ため息交じりに俺はネカフエに入った。

ネカフェに入ってから、携帯に着信があった。手に取ってみると番号が表示されていた。登録していなくとも覚えていた番号なら分かる。この番号は見たことがある。だが誰だったか思い出せない。とりあえず電話に出てみることにした。

「もしもし」

『あ、天川くんかい？』

その声は、どこかで聞き覚えのある声だった。頭の中で軽く検索をかけると、胡散臭そうな眼鏡の役人が頭に浮かんだ。

「菊岡さん、だったっけ」

『そう、仮想課の菊岡です。で、早速だけど用件ね。君が探していた枳殻嬢なんだけど、若干厄介なことになっていてね』

「厄介なこと？」

『彼女も、SAO未帰還者のようなんだ』

「・・・なんだそりゃ」

『あれ、ニユース見てないの？』

「あいにくそれどころじゃなくてね。で、そのSAO未帰還者ってなんぞや」

『君たちがSAOをクリアし、SAOプレイヤーは死亡者を除いて、ほとんどが現実世界

への復帰に成功した。が、一部がまだ仮想世界から戻ってきていないんだ。彼ら彼女らを便宜上、SAO未帰還者と呼んでいる。加えて、SAOサーバーはまだ正体不明の稼働を続けている』

「きな臭いな。ま、とりあえず調べてくれてありがとう」

『それだけじゃない。彼女自身は浜松の中央病院に入院している。君のいる名古屋からはそこまで遠くないから、お見舞いに行つてあげたら？』

「行ける状況ならな。それじゃ」

『ちよつと待った待った。もう一つ要件つていうか確認つていうか』

用件が終わつたと判断して電話を切ろうとしたとき、菊岡は慌てて待ったをかけた。それにもう一度携帯を戻す。

「・・・なんだよ」

『君の連絡先を知りたい、つてSAO帰還者がいるんだ。念のため、本人に確認を、つて思つて』

「相手の名前は？」

『橘——いや、プレイヤーネームで言おう。エリーゼさんだ。何度か接触ログがあつたし、知ってる、よね？』

「まあな。」

あ、それと、相手に連絡とりたければ携帯にかけてこいって言っておいて。今俺住所不定だから」

『ああ、わか——・・・ちよつと待つてそれは一体どういふことだい!』

一瞬普通に返事を仕掛けた菊岡だったが、たつぷり数秒の沈黙の後、慌てたように大声を出した。おーおー取り乱してる面白い。

「そのまんま。家追い出された」

『いやいやいやいやいや、ついでに伝えといて、つてレベルであつさり言うことではないだろう!』

「そうか?」

しばらくして、電話口からため息が聞こえてきた。どうやら、議論は無駄だとあきらめたらしい。

『・・・はあ。ちようどそつち方面に行く用事もある。こつちで住むところは用意する。とりあえずはそこで暮らしてくれ』

「いいのかよ?」

『このくらいは協力するさ。というか——・・・』

「・・・というか?」

『いや、何でもない』

それは絶対何かあると直感したが、何となく地雷のような気もしたので、聞くのはやめた。

『まあとにかく、住居はどうにかする。もしかしたらちよつとばかし暮らしづらい環境になるかもしれないが、その辺は理解してくれ』

「ま、ぜいたくは言わんよ。せつかく用意してくれるってんなら、お言葉に甘えるまでだ」

『そうしてくれると助かる。じゃあ、先方には情報提供のOK出しておくね』

「ほいほい、了解」

そういつて俺は電話を切る。と、少しの間を置いて俺の携帯に着信。番号は俺の身に覚えのないものだった。いやいやまさか、こんな速攻でかかってくるわけないだろうと思いつながら電話に出た。

「もしもし」

『あーよかった出てくれた』

「・・・いくらなんでもレス早すぎやしませんかねえエリーゼさん」

あきれながら俺は答える。それに相手——エリーゼこと橘永璃たつばなえりはすねたように答えた。

『何よ、こういうのの反応は早いほどいいでしょ?』

「早すぎるつつつてんの。俺が菊からの電話切ったの数分前だぞ?」

『そう?ある程度話の流れは読めたし』

「そもそもなんで話の流れを知っているんですかねえ・・・」

『いやー、そのネカフエさ、監視カメラとかのセキュリティ関連が案外ザルなんだよね。パソコン自体は、それぞれの対策とサーバー対策でどうにかしてるけど、店体のセキュリティ関連だけサーバー分けてるのが仇になってるみたい』

「いやだからそもそもセキュリティかいくぐってカメラ映像ハッキングするなよ」

俺のツツコミはもつともだと思いたい。というか、おそらく一定以上の強度があるであろうセキュリティを「ザル」とまで言い切るとは、この子はいったいどんなレベルのハッカーになっているんだろうか。

『さすがにこれだけ足取りがつかめないところいう手段にも出るよ。ご丁寧に、あなたのお父さんは、携帯の名義だけお父さんで、引き落とし口座はあなたのバイト先にしてあるみたいだし。ほかに辿る手段もないし』

「あつそ、妙なところで律儀なやつもいたもんだねえ」

『他人事だね』

「他人のことだからな。自分を捨てたやつをもう親とは思わん」

これは本音だ。古くから勘当というのはそういうものだ。俺もあの家に戻るつもり

はないし、父親も母親もあくまで親だった赤の他人に過ぎない。

「で、本題は？」

『レインちゃんがどうなってるか、知りたい？』

レイン。その単語に、俺は軽く鳥肌が立つのを自覚した。そして、この発言が出るということは。

「SAO未帰還者で、浜松の中央病院に入院中。そこまでは知ってる。——その先を知ってるのか？」

『もちろん。そうじゃなきゃこうまでしてコンタクト取ろうと思わない。』

端的に言うと、レインちゃんはまだVR空間にいる。と、思われる』

「なんだと？」

思わず眉をひそめた。その反応を見て、永璃はさらに言葉をつぶけた。

『レインちゃんの入院してる病院の接続ログを追ったの。セキュリティいくつかぶち破って痕跡も消してたから、さすがに相当時間がかかったけど。恒常的につながっている接続先は、レクトプログレスってところ。さっきの反応から察するに、おそらくSAOがあの後どうなったかも知らないよね？』

「ああ。そこから関連するんだな？」

『もちろん関係大有り。まず、SAOの運営のアーガスは、あの後多額の賠償金を抱えて

倒産。で、それが私たちが戦っている間の出来事。それで、S A Oのサーバー維持を請け負ったのが、当時IT系企業としてそれなりの実績を築いてきたレクト。その傘下に、レクトプログラズがある』

「・・・待てよ、さつき、レインは旧S A Oサーバーではなく、レクトプログラズに接続してる、って言ったよな？」

『その通り。さすがロー・・・じゃなかった、蓮さん。』

で、このレクトプログラズは、文字通りS A Oの生存者の管理を一手に引き負った。医療施設の手配なんかは大体国の行政府と協力してやったから特に問題なし。彼らがやっていたのは、私たちの行動ログの管理と、万が一でもサーバーのダウンが起きないようにする、いわゆる保守管理。ソフト的なメンテナンスに関しては、根幹プログラム——カーディナルが自動でなすようにプログラムされてたから、ハード的なメンテがメインだったみたい。

で、——今そのパソコンは、これか。ちよつと確認だけど、今マウスポインタ動いてる?』

「は?何言って——」

突然何を言いだしたんだ、と思いきや、画面内でマウスポインタが勝手に移動していた。

「・・・円を描くように動いてる」

『よし大成功。じゃ、ちよつと画面見てて』

そう言うのと、彼女はさらに通話の向こうでパソコンを操作したようだった。どうやら遠隔操作しているらしい。・・・つくづくこの子はいつたいたいどこまでの技量を持っているのだろうか。と、考えていると、画面に画像が表示されていく。

『まずゲームのパッケージのやつ。これはレクトプログレスが運営するVRMMO、アルヴヘイムオンライン』

「アルヴヘイム・・・妖精の国とか、そんな感じの意味か」

『その通り。ゲームの詳細をかいつまんで言うと、魔法ありソードスキルなし、完全スキル制PK推奨のSAOみたいなもの』

「人を選びそうだな」

『そうでもないのよ、これが。プレイヤーが妖精になって、自由に空を飛べる。これが結構気持ちいい。ま、延々と飛び続けられるわけじゃないけど。そんなんで、順調にプレイヤー人口は伸びていつてる。で、このゲームの最終目標、グランドクエストは、世界樹の攻略。これが鬼難易度で、サービス開始から1年経過した今でもクリア者ゼロ。世界樹を攻略すると、妖精王に謁見が叶って、飛行制限が解除できる種族に転生させてもらえる。つまり、今まで飛行に制限があったところが、その制限が解除されてより自由に飛

び回れる、つてわけ』

「そりゃ、こつちが飛行に制限があつて、相手にその制限がなかったら、戦闘はすごくやり辛くなるな」

『それ以前に、もつと気持ちよく飛んでいたい、つていうのが根幹なんだけど……。ま、とにかく、その世界樹の上を一目見ようと、とあるプレイヤーたちが策を練つた。で、それで世界樹の上にある、とあるオブジェクトが発見された』

そう言つて、彼女は新たな画像を表示させた。引き伸ばされているのか、かなり画質が粗い。

『私もこれじゃ満足じゃないから、画像ソフトを改造したりしてさらにこいつをきれいにしてみた。そしたら、ま、案の定、こうなつた』

そして、その処理後の画像が表示される。そこから得られた結果は、俺の想定通りだった。純白のドレスのような衣装に身を包んではいるが、長い栗色の髪、そして、遠目ながらも整っているのと分かる顔立ち。それは、俺の記憶にしっかりと残つていた。

「アスナ、だよな?」

『ええ。先に言つとくけど、ここからちよつとばかり脱線するからね。

現実の彼女——アスナについて、少し調べてみた』

「少し? 洗いざらいの間違いだろ?」

『結果的に洗いざらいになったただけだつてば』

否定しろよ。と、思わず内心で突っ込んだ俺は悪くない。と思いたい。まあ、もともとこの子はこういう子か。と、思っていると、さらに画像が表示された。

「これは、病院、か？」

『そ。菊岡さんもびつくりしてたね。しかもそこに寝ているのは、レクトの社長令嬢——結城明日奈だつていうんだから、さらにびつくり』

「結城、明日奈だど？」

『うん。それが、彼女——“閃光”のアスナのリアルネーム。本名をそのまま名前にしてたんだね。せつかくだからつてことで、レクトの社長さんである父親がこの病院に入れたらしい。で、彼女も例によつて例のごとく、SAO未帰還者と来ている。これはちよつときな臭いぞと思つて、さらにALLOとレクトを調べてみた』

そういつて、また更にいくつか画像が表示される。一つは、二人の男が写つた写真。もう一つは表形式にしたセルデータだ。

『まず写真のほうから。年配のほうが結城彰三氏、アスナの父親。もう一人は須郷伸之、レクトのフルダイブ部門の主任。撮られたのが、さつき画像で出した、この病院。こんな写真が何枚もとれるほどには懇意なんだろうね』

「父親ならともかく、いち社員ごと気がわざわざ社長令嬢の見舞いに行くか？」

『私もそう思った。それに、結城明日奈は16歳。民法上、結婚も可能な年齢。そして、フルタイム部門っていうのは、今も不明の稼働を続けるSAOサーバーの保守点検を行ってる。で、さらに調べてみたら、決定的な奴が出てきた。それが、その表データ』

そういわれて、表データを食い入るように見つめる。表題は、"レクトプログレスサーバー（ALLO）接続時間"となっている。

『端的に言うと、IPアドレスごとのALLO接続時間の統計データ。同一IPで二人が同時に一時間ログインしても一時間で表記される。それはまず頭に置いておいて。で、これを接続時間でソートすると、こうなる。で、そこからさらに逆探知をかけて、SAO未帰還者の接続IPと照合した結果、こうなった』

そういうと、表の行に色がつく。端的に言えば、上位のほとんどのIPに色がついた。つまり、

「接続時間の上位のほとんどが、SAO未帰還者のIPだった、ってことか」

『その通り。もちろん、この中にはレインちゃん接続IPもあった。』

どんな形であれ、ALLOにログインするのが一番手っ取り早いと思うよ。こつちでもあれこれ調べてみるけどね。その辺は菊岡さんに頼んだから』

こうも二十歳超えたか超えないかの若者に、仮にも将来有望な官僚がパシられていいの、と内心思ったが、とりあえず今は考えないことにした。

「初心者アバターで、できるだけ迅速な事態収束か。なかなか厳しいねえ」

『あ、その辺は大丈夫。今、手元にナーヴギアがあるでしょ』

「・・・何でそれ知ってるんだよ。かなりマジで」

『菊岡さんから聞いた』

「ここまで来て、ようやく、菊岡が先ほど一瞬言いよんだ理由が察せられた。大方、彼の弱みを握っているのだろう。何かしらのスキヤンダルネタ、と考えるのが妥当か。ご愁傷さまだ。同情はしないが。」

『とにかく、ナーヴギアを使ってALOにログインしてみて。規格とかほとんど一緒だから、問題なくログインできるはずだよ』

「なんでナーヴギア？新品の新型ハードもあるんだろ？」

『まあ、そっちでもいいけど・・・ま、それはログインしてからののお楽しみ、ってことで』
何となく、嫌な予感がした。が、まあ、この子は本当に危ない案件なら警告してくれるはずなので、とりあえずは無視しても問題ないと判断した。

「分かった。とにかく、環境が整い次第ダイブしてみる」

『ん、そうしてみて。私はALOで、ケットシーのエリーゼって名前で傭兵プレイしてるから』

「また傭兵か。好きだな」

『いやー、最初は稼ぐためだったけど、すっかり気に入っちゃって。やっぱり性に合うみたい』

「そうか。じゃあな」

『ん、またね』

そんなことを言つて、電話は切れた。いつの間にか、表示されたウィンドウは残らず消されていた。

相変わらず、こちらまで明るくなるような、陽の雰囲気のある子だな、とぼんやり思つた。せっかくネカフエにいるのだから、少し調べるか。そう思つて、俺は目の前のパソコンのインターネットを開いた。

58. 再び、仮想世界へ

住まいのほうは案外あっさりと用意された。名古屋のはずれだ。もう少し突っ込んで言うとな、ナゴヤドームのあるあたりから少し東に行ったあたりだ。近くには、陸上自衛隊の駐屯地があるらしい。最も、俺はミリオタでもなければそこまで野球が好きなのでもないの、そんなに興味はない。荷物に関しては、誇張でもなんでもなくポストンバック一つ分だったので特に問題はなかった。大きめのポストンバックから、半ば押し付けられるようにして渡されたナーヴギアを接続する。パソコン、テレビに冷蔵庫と、一回りそういったものは揃っていた。これは後で礼を言っておくか、と考えつつ、部屋に「なぜか」ぽつんと置いてあった、「Alfheim Online」というソフトを手を取った。中を開けてみると、確かにナーヴギアの規格にも一致している。

——このゲームの中に、あいつが。

思わずにはいられない。気を抜くと、俺の隣で笑いかけてくれたあいつの顔が目に見える。戻ってきてからずっとそうだった。

何があっても会いに行く。俺はそう約束した。ならば、会いに行かなくては。その決意が、再び俺にナーヴギアをかぶらせた。——どうせもう失うものなんてほとんどな

いんだ。あいつに会えるのなら、助けられるのなら。——それは、この命を懸けるに値する。

「リンクスタート」

そうして、俺は久しぶりのフルダイブに突入した。

初期のセットアップに移る。名前は、今まで通り“*Lotus*”。種族に関しては、既に下調べをしてあった。俺の性格的に、後方支援がメインになるレプラコーン、プーカは合いそうにない。音楽はまだ好きだし、一応まだ楽器持てばある程度は吹けると思うから、やるとすればサブアカでプーカかな、とは思うが。ケットシーも申し訳ないが却下。理由としては、そこまで敏捷性もいらなければ、テイマー志望でもないし、何よりエリーゼと被る。宝探しなんざ誰かに任せとけ、ってことで、スプリガンもナシ。サラマンダーは、なにやら素行の悪いプレイヤーがいることが多い、ということ、こちらも却下。となると、残ったのはシルフ、ノーム、ウンディーネ、インプ。この中で考えると、せっかく魔法があるのなら、魔法を使ったプレイをしたい。ということは、魔法に長けた種族、ということで、シルフかウンディーネなのだが、どちらかというとうんディーネのほうがバフなどの支援や付加魔法に長けている、らしいので、ウンディーネにするとあらかじめ決めてあった。

迷いなく名前を入力して、ウンディーネを選択する。種族選びで速攻で決めたからか、微かにどこからかジョインジョイントキイみたいな音が聞こえたが無視することにする。と、

『では、ホーム t t t t t 転 s s s s s m m m s s。 g g g g d r r r r r r』

・・・おいおい、開始一分でバグに遭遇かよどーなってんだこのゲーム。と、独り言ちっていると、突然足元が崩れた。転送されたのは、どこぞの街中などではなく、どう見ても森の上。そう、上、つまり上空。で、そのまま何もしなければどうなるかと言えは—— 加速度9.8メートル毎秒毎秒で落ちていくことになる

さすがにこれは俺もあわてた。このままでは開始10分足らずで、非常に豪快な地面墜落にキスをやらかす羽目になる。その頭の中で、何とか予習した『飛行補助コンントローラ』の出し方を思い出し、ホバリングに突入する。

「・・・あつぶねえ・・・」

いやはや焦った焦った。さすがにこれはびっくりだ。さて、初期ステータスはどんな感じだ、つと。と、プロパティを開いてみて、さらに驚いた。

「なんだこんな高ステータス・・・」

少なくとも、こんなのは初期ステータスではない。短剣、曲刀、投剣、索敵、隠密、体術、武器防御はカンスト。刀、射撃、小太刀は900オーバー、高速武器換装は800

オーバー、アイテム作成は650程度。そして何より、初期値とはいえ、サポーターに適した種族に関わらず魔法系のスキル熟練度が全く設定されていない。・・・ちよつと待て、これって、

「SAOクリア当時の、俺のステータス？」

いやいやいや、そりゃないだろう。と思つたが、間違いなくそのままだ。てことは、アイテムはどうなってるんだ？と思ひ、ストレージを開くと、こっちはこっちで驚きの光景が。

「Oh・・・」

ものの見事な文字化けの山。これって大丈夫なのか？と思ひながらスクロールすると、メールが届いた。ログインしてからまだ30分経つてないからなんかの間違いだろうと思つて開くと、空メールで一つの添付ファイル。そのファイル名を見て、間違いではなかったことを察した。添付されたファイル名は“MHCP02_street”。すぐさまファイルを展開すると、俺の目の前に紫の滴型のクリスタルのようなものが現れた。それをタップすると、目の前にはあの時に会った少女がいた。ゆつくりと彼女は目を開けると、その目を見開いた。

「久しぶり、で、いいのかな」

「はい、それでいいですよ。ロータスさん」

「堅苦しい。ため口聞いてくれ、ちよつとむず痒い」

「わかり——分かった。これでいい？」

「おう、それで頼む」

そこまで言ったところで、周囲にプレイヤーがいないことを確認して、俺はさらに口を開いた。

「早速で悪いが、いくつか聞きたいことがある」

「この状況について、だよね？」

「ああ。俺のステータスはS A Oのままだし、アイテムは文字化けだらけだし、加えて本来、何かしらの操作が必要なはずなのに、君は普通に展開できると来た。正直、なんでこんなことになってるのか、理解ができない」

「それに関しては、一言で済むよ。この世界とあの世界を形作る根幹が同じだから」

「根幹？ ベースプログラムが同じ、ってことか？」

「そう。たぶん、こつちのほうが幾分かバージョンが古いけど。それでも十分すぎる性能だね」

「バージョンダウンして十二分な性能か……。つくづく化け物だな、茅場晶彦ってやつは。で、一種の混線のようなもので、俺のアカウントデータが引つ張つてこれちゃった、と」

「うん。本来、射撃スキルはユニークスキルなんだけど、この世界には弓もあるからね。たぶん、そつちの上位互換になったんじゃないかな?」

「・・・いわゆる強くてニューゲームか、半分チートもいいところじゃねえか」

「ただ、アイテムは全部破棄したほうがいいと思う。幸いなことに、今の装備自体は初期装備で廃棄されない設定だから、遠慮なく捨てられるよ」

「遠慮なく、つて・・・。あー、でも、そのままにしておくとかバグ認定で大変なことにもなりかねんか」

「そういうこと。ましてや、SAOクリア時の武器まであるから。開始してすぐにそんな武器持つてたら、チート認定されるかも」

「そうだったら、よくて一時凍結、最悪BANだな。・・・仕方ないかあ・・・」

言いながら、アイテム全廃棄を選択、実行する。きれいさっぱりアイテムストレージから物が消えたことを確認すると、俺はメニューを消して質問を続行した。

「そういえば、ストレアはここではどういう扱いなの? M H C P なんて、この世界にやないだろ?」

「それはもちろん。私たちはあくまで機械であつて、機械にも限界つてものがあるから。それは本職の生身の人に任せるよ。」

この世界の抽選特典で、ナビピクシーっていうのがあるんだけど、それに該当してい

るみたい」

そういうと、彼女が光に包まれた。一瞬目くらましを食らったものの、すぐに気を取りなおす。と、そこには手乗りサイズになったストレアがいた。

「これが、ナビピクシーとしての姿。でも、上手くちよろまかしているから、私単独で戦闘することもできるよ」

「へえ。戦闘スタイルは？」

「それは——実践したほうがよさそう。近寄ってくるプレイヤーがいる」

「何人だ？」

「3人」

「種族は？」

「ケットシーと、これは、シルフだね」

「混合種族。パーティ？珍しいな、このゲームで」

「ま、その辺は直接戦ってみれば分かると思うよ」

そういうと、再びストレアが光に包まれる。と、彼女は紫色の装束に身を包み、両手剣を手持っていた。俺も、装備を取ろうとして、面食らった。

「ワンドかよ。せめてメイスにしてくれればよかったのに」

そういうと、俺は早々に武器をしまつて臨戦態勢。

「素手なんだ・・・」

「武器があれじゃ仕方ないだろう。大丈夫、俺は体術もカンストさせてある。並みの相手に後れは取らん」

迎え撃つ体制を整えたときに、遠方から風の魔法が飛んできた。風の刃を飛ばす魔法なのだろうが、俺からしたら遠方から見える時点で回避余裕だ。実際、俺は簡単に回避できた。が、ストレアのほうは、その両手剣を盾にすることもなく、その身で耐えた。――

いや、これは。

「だらっつしやあああああいいい!!」

両手剣上位ソードスキルが一つ、しんどりゆうえんざん「震怒竜怨斬」。噂には聞いていた。やたら溜めが長い代わりに、受けたダメージの10倍を上乗せして放つ、まさに一撃必殺を体現したソードスキル。だが、そこは魔法のあるALO。その斬撃はどういう理屈か、斬撃を打ち出し、先ほどの魔法を放った術師に向かって、先ほどのダメージを上乗せした超強力な一撃をぶつ放した。

「ワオ」

思わず声 leaked。なんとという攻撃。もともと、震怒竜怨斬は威力がかなり高い。それに加えてカウンター倍率がかかっているから、一撃必殺どころか一撃蒸発になつてやしないかと心配するほどの威力だ。なにも来ないことを不審に思っていると、上から風

を切る音が聞こえた。——この音の大きさ、近寄ってくる速さからすると、敵の攻撃とタイミングは。

タイミングを読んでサイドステップで相手の攻撃をかわす。一瞬見えた得物の大きさを察するに、相手の武器は両手剣。——いや、待て。

「奇襲としては三流だな！」

後ろから滑空するように斬りかかってきた相手は、くると回転しながら反転、一瞬見えた槍は上体を反らせて躲して、巴投げの要領で投げ捨てる。このコースなら、先ほど突貫してきた両手剣もちに重なるはず。そこを狙う。ブレイクダンスさながらの身ごなしで、さらに交錯したポイントに向かってぶん殴りにかかるが、これはさすがに避けられる。

「そりゃそうだよな！」

相手が回避して、仕切り直し。素手なら、俺のポーズは決まっている。腰のあたりを一回叩いて、左足を一分だけ前に出し、手は体側に近い自然体で構える。

「素手!？」

「初期装備があまりに肌に合わないものだったもんでな」

相手の驚きは律儀に返す。こっちの相手は、初手で降ってきた大剣持ちのシルフ、それから、さつき突撃してきた槍使い、こちらはケットシーか。おそらく、こいつらは魔

法を使うとしても、そこまで魔法に比重を置いた戦い方はしてこないはず。こちらが素手で戦う以上、飛び道具があるのなら、遠距離から封殺するのがセオリー。それは俺がよく知っている。相手の得物が近接武器であり、武器変更の様子が見られない以上、遠距離は魔法のみ。となれば、最初のあれをやった本人はストレアが相手をしている、ということになる。と、考えていると、ほど近いところで、轟音とかなり大きい砂埃が上がった。そこで、相手のシルフが問いかける。

「ベリア、大丈夫!?!」

「大丈夫、一応……。こっちも結構きついかも……。」

「ベリア、私たちの後ろで援護。シエピと私で前。仕留めるよ」

「了解!」

どうやら、向こうは前衛二人と後衛一人のようだ。——在りし日を思い出し、少し懐かしく思った。

「ストレア、後衛の魔法に注意しながら、まず前衛を潰すぞ。俺は、槍持ちが来るところをクロスカウンターで迎撃する。自由にやれ」

「ラジャー!」

短い作戦会議とともに、俺はさらに集中する。背後で魔法の詠唱が始まる。おそらく、魔法の到達とほぼ同時か、少し前後するタイミングで突貫が来る。俺の読み通りの

タイミングで前衛が突貫してきた。素早さとしては、若干ケツトシーのほうが上か。だが、俺からしたら、

「アスナよりは遅いな」

あの、最初から目にもとまらぬ速さのレイピア捌きよりは格段に遅い。それに、これだけ距離があれば対応を考える時間もある。スピードは確かに速いが、対応はたやすい。直前で少し軸をずらし、左手でみぞおちをぶん殴る。相手が高速で突っ込んでくるのだから、その分のエネルギーも上乘せされる。結果、ただの素手とは思えないほどHPが削られた。逆手で、俺の背中側にあつた相手の槍を右の逆手でつかむと、そのまま相手の得物を分捕り、蹴とばす。どうやらさつきの一撃でスタン判定になつたらしい相手はまだ動かない。そこに、俺は槍を肩に担いでそのままぶん投げた。見事に頭部直撃ヘッドショットを食らつた相手は、そのままりメイソライトになつた。空中では、ストレアとシルフが、いい勝負をしていた。力と力のぶつかり合いとは、かくも見ごたえのあるものか、と、俺は一種の感動すら覚えた。再び補助コントローラを出すと、そのまま俺は空に舞い上がった。罅迫り合いで吹き飛ばされたシルフの後ろに回り、俺はそのまま首を絞めながら頭を強引に傾けた。しばらくそのままにしておく、ゴキーンという音とともに力が抜け、HPがあつという間になくなつた。

「・・・エグッ」

思わずストレアが漏らす。それに俺は疑問を覚えていると、ストレアの目の色が変わった。俺も警戒して後ろを向くと、そこには先ほど倒したはずの槍使いと、最後衛に控えていた魔法使い。おそらく、後衛の魔法使いが蘇生魔法を使ったのだろう。

「しまった、抜かった」

「珍しいね、油断するなんて」

「あ、や、意外と手ごたえ無くてさ」

「これはひどい」

俺の会話を驚いたように、呆れたように下の二人は見ている。と、

「あ、そうだ。」

なあお姉さんがた、俺がやつといてなんだけど、あのシルフの子、復活させることつてできるっ。」

「「・・・はっ。」」

俺の突拍子もない発言に、敵味方合計三人の驚きの声が重なった。

「いやいや、なんで？」

「早い話がさ、俺にチュートリアルつけてほしいのと、案内してほしいんだよ。」

知り合いがケットシーで傭兵プレイしててな、チュートリアル終えたら会いに行こうと思ったらバグに巻き込まれて、気が付いたらこの森の中。ドーしよってなっただ時、

あんたらが襲撃してきたから迎撃したんだよ」

「ケットシーで傭兵・・・名前は？」

「エリーゼ。スペルは、e、l、i、s、e、だ。あんたらケットシーだろ？なら、つてことで。どうせならお仲間も一緒のほうがいいだろ？」

俺の言葉に、魔法使いのほうが動く。先ほど倒したシルフのリメインライトに近づくと、何か詠唱を始めた。詠唱が終わってから少しして、シルフの子が復活した。

「いやー、おにーさん、面白いね！」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

「うんうん、そんな反応も面白い！てなわけで、その頼み引き受けたー！」

「ちよ、フカ、そんな速攻で!？」

「そいつはありがたいが・・・説明は、いらぬいな？」

「うん、リメインライトの状態だったけど、話は聞かせてもらったー！」

腰に手を当てる胸を張る女性のシルフ。ま、美人なのはある意味当たり前だな。この手のゲームだと顔面偏差値どーなってるんだっていう場合がほとんどだから。SAOみたいな例外は除く。アスナ？いやあれは特例。レインが可愛いのは当たり前。

「それに、バグでこんなところに来た、つて言葉に嘘はなさそうだからね。ウンディーネがここまで来るには、アルンとルグルー抜けてくるのが近道だし、そこなら比較的初心

者向けの武具屋はあるから、MobというMobを全部トレインとかいうクソ野郎じゃなければある程度のユルドもたまってるはずだし。お兄さんとそこのお姉さんほどの手練れなら、そこらのMobなんざ初期装備どころか防具なしの徒手空拳だろうと雑魚同然だろうから、トレインする理由もないし。バグである、とすれば納得がいくけど、そうでないとする若干不自然なところがちらほらあるからね」

「お宅らをPKしようとしているかもしれないぜ?」

「だつたらもうとつくの昔に殺されてる。今のは油断してたから蘇生されたけど、普通に正面切つて戦えば負けるんだもん」

「違うない。じゃ、よろしく頼む」

「オツケー!あ、私はフカ次郎、長いからフカでいいよ」

「俺はロータス。こっちはストレア」

「よろしくね、フカちゃん」

「うん、よろしく!というか、お姉さんが教えるっていう選択肢はなかったの?」

素朴なその質問に、一瞬ストレアが固まる。が、俺としてはこの質問は想定内だ。

「こいつの説明は分かり辛いんだよ。背中から羽が生えるから、ばたばたすれば飛べる、つて言われたつて、いったいどういうこつちやつて話だ」

俺の回答に、フカは爆笑した。

「それは確かにその通りだけど、確かにそれじゃ全くわからんわ！」

「フカ、笑いすぎ。あ、私はシエピって言います。後ろのはベリア」

「おう、よろしくお二人さん。ところで、なんで三人は異種族パーティーを組んでいるんだ？」

「もともと、ケットシーとシルフは仲がいいんです。で、たまたまサラマンダーに襲われているときに助けてもらって。その時をきっかけに一緒にクエストしたりする中になつて、ギルドを組みました。めつたにはないですが、ギルドで種族を一致させなくてはならない、なんて物はありませんから」

「なーるほどねえ。ギルド名は？」

「ドッグアンドキャッツ、です。もともと、フカの名前は愛犬の名前らしくて。で、ケットシーは猫妖精族ですから」

「そのままだが、悪くないな」

「いやー、笑った笑った」

と、ここでフカが復帰した。と、ここで、静かだったベリアが口を開いた。

「ロータスさん、ちよつといい？」

「ん、どうした？それと、さん付けはいらんよ？」

「分かった。用件だけど、たぶん、探し人が見つかった」

「え、エリーゼがか？」

「うん。私、フレだから。メッセでしたら返信が返ってきた。事情を説明したら、多分そうだろう、って」

「なんかほかに、俺に伝言ってあるか？」

「あなたに、っていうか、私たち全体に。場所的に2時間もあればつけるだろうから、フリーシアで落ち合おう、ついたら教えて、だつて」

「なんだその裏切る宰相みたいな名前の場所は？」

「君と紡ぐ空の物語！って違う！」

俺のボケに、フカが律儀に乗ってきた。そのまま真面目に答える。

「ケットシー領の首都だよ。確かに、レクチャーも込みで2時間あれば余裕だね」

「よし、じゃあ頼む」

「よし来た！」

先ほどから察していたが、フカはどうやら相当にノリのいい部類らしい。幸先のいいスタートに、俺はラッキーを感じていた。

59. 片羽

さて、無事にレクチャーを受けて、フリーシアについた。と、ベリアが白髪のケツトシーに声をかけた。

「エリーゼさん、お久しぶりです」

「久しぶり、ベリア。後ろは……いや、いいわ。何となく察した」

その雰囲気で、俺は彼女——エリーゼに話しかけた。

「ああ。久しぶりだな」

「そうね。リハビリ明け以来だから、ざっと半年ちよつとくらい？」

「そんなに……なるな」

「うん。元氣そうで何より」

そこで言葉をいったん区切り、彼女はさらに後ろにいるストレアに目を向けた。

「あなたも」

「……はい。会ったことは覚えてないですけど」

「元氣な姿を見ただけで、私としては十分に満足よ？」

「……お知り合い？」

「ま、いろいろと、な。そのあたりはま、おいおい話す。

ところでよ、他種族の武器屋でも装備つてのは整えられるのか？」

「そのあたりは問題なし。今の私のクライアントに話を通しておいた」

「依頼中かよ。そりゃ悪いことしたな」

「いーのいーの。武器に関してはまあいいけど、防具はさすがにフィーマールの装備はつけられないし」

「よしんばできたとしても願い下げだ。俺に女装癖はねえよ」

「あ、そういえば。アイテムストレージは大丈夫？」

「ああ、あれか。問題ない、対処済みだ」

「そっか、ならよかった。

んー、性格の問題からすると、これなんかどうよ」

そういうわれて手渡されたのは、白い柄の、あまり特徴のない打刀。

「銘は？」

「ニバンボシ。すぐく使いやすそうな刀なんだけど、私は使わないから。コレクションとして腐らせておくより使ってくれたほうが刀としても本望でしょ」

「確かにな」

そういうわれて、俺はその刀を腰に装備した。なるほど、これなら。

「申し訳ないけど、ことと次第によっちゃぶつつけ本番になるかもしれない」

「全く問題ないね。ま、最初は戸惑うかもしれないけど、二分もすれば慣れる」

「さすがの順応力……」

エリーゼが呆れていると、遠方からケットシーの一団がやってきた。

「あれ、領主、どうしてここに？」

「どうして、じゃないヨ！時間になっても来ないから、フレンドの位置追跡使って追ってきたんだヨ！」

「時間……あ」

「その様子だと、気づいてなかった？」

「……申し訳ありません」

「報酬1割減で手を打つてことでいい？」

「寛大な処罰に感謝します」

「そういう固苦しいのはいいって。」

「そちらの方々は？」

「どうやら、先頭を歩いていた金髪のケットシーがケットシーの領主らしい。で、エリーゼとはそこそこ親しいようだ。その領主に目を向けられ、フカがまず自己紹介した。」

「あ、私、ドッグアンドキャッツってギルドのリーダーやってます、フカ次郎です。後ろのケツトシー二人はメンバーのベリアとシエピ」

「あー、ドッグアンドキャッツって君たちかー！今度依頼したときはよろしくねー！」
「はい、こちらこそ」

一通りフカの紹介が終わったところで、今度は俺が切り出した。

「で、俺とこっちは、エリーゼが前やってたゲームの知り合いです」

「へー！てことは、腕前のほうは・・・気にするだけ野暮だね。その刀を使える時点で」
「あ、これ、彼女から譲り受けたんですけど、結構な業物だったり・・・？」

「結構な、っていうか、ALLOでもこれだけデザインと性能が両立されたものはなかなかないって一振りだヨー！」

「・・・エリーゼ、そんな代物とは聞いてねえぞ」

「そりやだつて言つてないもん」

「おい」

俺の抗議に、一切の悪びれもなしにエリーゼは答える。

「でも、そのくらいじゃないと不足でしょ」

「・・・まあ、否定はせん」

何はともあれ、一線級の武器を手に入れていた。

「でも、初期防具じゃ防御力が不安じゃない？」

「当たらなければどうということはない」

「・・・それができるのは君くらいだから」

領主の質問に対する俺の回答に、ストレアが呆れた。といつても、俺からしたら、この世界の近接攻撃など雑魚もいいところだ。じゃなければ、フカを背後から首をへし折ってHP全損なんて真似はできない。そもそもあそこまで接近することが不可能だからだ。

「で、エリーゼちゃん、その子、どうするの？」

「本人が構わないなら、護衛に加えようか、と考えていました。腕前は保証します」

「なら、護衛への装備拡充つてことで、問題ないネ！君、名前は？」

「ロータスです。こっちはストレア」

「ウン、ロータス君ね！早速だけどき、防具は軽金属と布系、どっちが好み？」

「個人的には、布系のほうが」

「オツケー！じゃ、これかな！」

そういつて、彼女は一つのコートをこちらによこした。それは、雨上がりの青空を彷彿とさせる澄んだ水色をしていた。

「名前は、コートオブアフターザレイン。物理防御はそんなないけど、魔法耐性が結構

高めで、特に水属性の耐性が高いネ」

「そうか。なら、ありがたく」

受け取って、早速装備する。俺好みのそんなに重くないものだ。しかし、コートオブアフターザレイン、か。あいつを追ってこの世界に来た俺にとつて、これほどまでにぴったりの名前もなかなかない。と、ここで俺は一つの疑問を覚え、聞いてみることにした。

「そういえば、魔法に対抗できるような飛び道具って他にないんですか？銃、はこの世界観だとないだろうから、弓とかボウガンの類とか、無ければ投げナイフとかでもいいですけど」

「弓はあることにはあるけど、正直魔法のほうが手っ取り早いヨ？」

「いや、個人的には魔法より弓とかのほうが性が性に合うので。弓とかなら、近接戦でも取り回しやすい小さめのやつがあればなおいいんですが」

「それなら、面白い武器があるヨ」

そういつて、領主さんはある武器を取り出す。それは、曲刀の刀身が二つ平行に付いたような、少し不思議な形状の武器だった。

「銘は『アローブレイズ』。ALOには非常に珍しい変形武器。見てて」

そういうと、領主さんは逆手に持ったその武器を短い弧を描くように軽く振った。

と、折りたたまれた刀身が展開されて、両刃剣のようになった。

「で、さらにこれに手元のスイツチを押すと、」

というと、緩やかに弧を描いた二つの刀身の端に光るひものようなものが伸びた。

「こうなつて、魔力の弦が張られるから、矢をつがえて放つ、つてわけネ。MPをちよこつと消費するけど、そんなに気にするほどの物じやないよ。今は装備してないからないけど、装備すると矢筒が出てきて、普通の矢は無尽蔵になるから」

「なるほど。面白い武器ですね」

「どうせあつても使える人がいないから肥やしになつてたの。せつかくだから使つてあげて」

「ええ。こちらには逆手持ちの心得もありますし」

「ありがたくもらつて、装備オプションから腰の後ろに、左の逆手で抜けるように装備する。矢筒は右肩の後ろにセットした。」

「さて、いい加減出発しないといけないのでは？」

「あ、すっかり忘れてた！ありがとネ！君、随意飛行は？」

「先ほど、フカたちに教わりました」

「なら話は速い。飛ぶヨ！」

そういうと、彼女はフリーシアの中にある高い塔へと向かった。

「ああ、高度を稼ぐのか」

「よくわかったね？これ、初見で見破る人少ないんだけど」

「要はハングライダーやパラグライダーと同じ原理だろう。動力があるかどうかの違いだけで」

「ま、そういうこと。なら話は速いわね」

そういうと、俺たちもついていくことにした。

道中で話を聞くと、今エリーゼは領主の護衛をしているらしい。なんでも、他の種族の頭と同盟を結ぶために、中立域にある蝶の谷というところまで行く道中らしい。フカたちとは、塔の麓で分かれた。彼女たちは、シルフの領主側の護衛につくらしい。彼女ら三人はたまたま早くにログイン、離れた場所で遊んでいたところを、俺たちに遭遇した、とのこと。残りのメンバーはシルフの領主の護衛にすでに当たっているらしく、彼女らも、フレンド検索機能を利用して合流する予定だ、と言っていた。

「しかし、なんでわざわざ同盟なんだ？協力協定くらいでもいいだろう」

「君はグランドクエストの難易度を知らないからそんなことが言えるんだよ。サービス開始当初から挑戦できるのに、いまだかつてあの木のとっぺんにたどり着いた種族はない。単独種族での攻略は無理、って判断がなされたのよ。それに、最近、妙なプレイヤー

もいるみたいだし、そっちの対策でもあるかな」

「妙なプレイヤー？」

「精銳の前にふと表れて、黒い雷のようなエフェクトの魔法とともに剣術と体術でなぎ倒していくプレイヤー。身長自体はそこまで見たいなんだけど、AGIとPスキルが高いのなんのつて。ALO最強クラスで、ようやくタメに持ち込めるだろう、つて実力らしい」

「へえ・・・ま、それなら、いつそのこと同盟関係になっておいたほうが都合がいいわけか」

「そういうこと。シルフとケットシーは領土も隣通しだしね」

その言葉に、俺はとりあえずの納得をした。その謎のプレイヤーは今の脅威でないのならとりあえず捨て置いていいだろう。

蝶の谷までの戦いは非常にスムーズだった。傭兵として雇われた護衛は、俺、ストレア、エリーゼくらいの物だったが、正直言ってSAO帰還者である俺とエリーゼ、そしてそれとタメを張れるストレアにとって、中近距離戦での敵は無いと言っているほどの物だった。はつきり言って、この程度なら60層を超えたくらいの難易度のほうがよほど難しかった。俺としては、変形武器のアローブレイズの練習もできたので万々歳もい

いところだ。自由度の高すぎる三次元的戦闘にはすぐに順応できそうにないが、ある程度のレベルなら全く問題はなかった。

蝶の谷へ着くころには、シルフの一団がついていた。両者交渉の席について、そのまま同盟成立と相成る、と思われるときに、俺の視界の端にきらりと光るものが見えた。とっさに使い慣れた武器種であるニバンボシの鯉口を切る。それを合図に、全体が警戒に入る。俺の目線の先には、かなりの集団がいた。

「赤い、つてことは、サラマンダーか。人数は・・・」

「ざっと50、つてところかな」

俺の後の言葉を引き継いで、ストレアが言う。50つてことは、フルレイドか。

「どこかにSがいる可能性が高いね」

「付け加えろ。ここまで正確な情報つてことは、おそらく領主側近がSだ」

「あ、やつぱり?」

「そうじゃなきやここまでの軍勢は出さん。スカを考えてないとか思えないからな」

さらにと会話する俺とエリーゼの言葉に、他がぎよつとする。が、フカたちは冷静だった。

「ドッグアンドキャッツ、抜刀。少なくとも30は道連れにするよ!」

「了解!!!」

フカの掛け声で、シルフの護衛から10人ほどが抜刀する。俺も、ニバンボシの柄に手をかけた。と、ここで、サラマンダーの前に堂々と立ちふさがる、黒く小さな影があった。同時に、シルフの領主に、シルフの少女が駆け寄る。

「双方剣を引け!!指揮官に話がある!」

おーう、大胆な奴め。敵さんがこれに素直に乗ってくればいいけど。と、考えていると、大柄な剣を装備したサラマンダーが一步前に出た。

「俺が指揮官だ。話とは?」

「俺はキリト。スプリガン・ウンディーネ同盟の大使だ」

・・・Oh・・・お前さんかまつくろくろすけ^キ。で、おそらく連れと思われるさつき^トの少女の表情が明らかに固まった。と、いうことは。

(ブラフかよ。ばれたらどうするつもりだこのバカ)

「大使が護衛の一つもつけないのか」

「たいていの護衛は足手まといだからな。こっちからお断りした」

俺の思惑をよそに、二人は話を進める。その言葉に、俺はうつむき、ため息をついてキリトの横に立った。——こういう馬鹿は嫌いじゃない。

「ま、そういうこと。俺がウンディーネ側の大使。で、俺のほうは、まあ一応念のためつてことで、一応頼れる伝手の護衛を頼んだ、つてだけ」

「ほう……。なら、それ相応の実力はあるのだろうか？」

「そりやもちろん。なら、やるか？」

そういつて、俺は柄を握る強さをほんの少し強くする。

「なら、30秒俺の攻撃を耐えきつたら、大使と認めてやる」

「そういつて、首を取るまで、とかいうつもりだろうか？」

「お望みとあらばそうするが？」

「端からそのほうが楽でいい」

「そうか」

そういつと、相手が抜剣した。見た目は、柄に相当の竜があしらわれた大柄な剣。おそらく両手剣。このゲームはPK推奨。なら、わざわざデュエルを申請する必要もないだろう。

「いつでもどうぞ」

俺の余裕綽々な態度に業を煮やしたのか、相手が突進してきた。構えは中段に近い位置。となると、

（おそらく突きはない。小手もないだろうな。セオリーで行けば大上段から真つ二つ狙い、次点で袈裟、ないしは薙ぎ。大穴でかち上げ。なら――）

右手はニバンボシに、左手は逆手でアローブレイズに。ある程度のところ、相手は

その両手剣を大きく振りかぶった。瞬間、俺は左手を鞘に持ち替え、間合いを計る。そのまま、ニバンボシの居合で、抜き胴の要領で胴を斬り払う。即座に納刀、反転から一気に接近して、アローブレイズを抜き放つ。本来なら、対応されてもそのままパリイ気味に、左下から斬り上げるように一閃できる、はずだった。が、どういうわけかこちらの刀身は相手の刀身に当たらず、通り抜けるような軌道を描いた。とっさに手首を反時計回りにねじったことで手首の端を切り裂いたが、こちらは完全にクリーンヒットが入った。

(なん・・・だと・・・!?)

さすがにこれは成す術もない。ある程度体勢を立て直しつつ吹っ飛ばされる中で考える。

(おそらく、何かしらのスキルによるもの。クーリングタイム、ないしは使用回数制限があると考えるのが妥当だが・・・分からない以上、完全無制限の仮定の下で行動を逆算するのが適切。とすれば、パリイはほぼ不可能。やれるとすれば、持ち手の部分。ここ一発のみだな。

クリーンヒットといえど、ここまでがつり吹っ飛ばせるってことは、間違いなくSTR型のパワーアタッカー。魔法のステータスは分からないが、とりあえず、AGIはそこまで高くないと仮定して問題ない)

STR型のアタッカーに対する対策。それはすでにある。そして、武装は十分整っている。

(さて、反撃開始。——ここからは俺のターンだ)

アローブレイズを弓状態にして、吹っ飛んだ方向から推測した方向に矢を放つ。そのまま背面飛行に移行し、一発放つ。少し間を置いて、もう一発。そのまま小さな径で右旋回をして、一気に上昇する。その間に、曲刀状態で突進する。それに対し、相手はその両手剣を盾にして防御しにかかる。瞬間的に、かつ得物の持ち手である、こつちから見て左側で対応できるあたり、やはり白兵戦に優れた人物なのだろう。モンスターを狩るより、対人戦に特化したような感覚か。俺に似ていると言えば似ているが、俺の場合はMob戦のほうに戦い方が寄っているように思える。

相手の両手剣のガードを、右手のフックで躲す。そのままもう一発ミドルキックをかまして距離を取る。もう一度アローブレイズを弓状態にして、数発放つ。

「猪口オー！」

矢を斬り払って相手が突進してくる。それに対し、俺はさらに数発放つが、これは斬って捨てられる。ま、距離を開けた戦いというのは、いかに接近させないか、もしくは撃ち合いを制するかにかかっている。自身が近距離を、相手が中遠距離を得意とするなら、相手と同じ土俵に立つか、クロスレンジの白兵戦で圧倒する。つまるところ、セ

オリー通り。早い話が、

(読んでるっての)

ラストと決めて、もう一発。これは躲して突撃してくる。軸を変えつつもほとんど速度を変えないあたりはさすがといったところだが、それがかえって俺の思惑にばっちりハマった。

相手からしたら、俺は矢を放った体勢で、即座に白兵戦には移れないと踏んでいるのだろう。大上段に剣を掲げ、完全に「獲った」という顔をしている。実際、普通ならこれは完全に詰みだろう。だが。それは、これがただの弓なら、の話。

カシヤンと手を振って、弓を逆手持ちの曲刀に変化させる。相手の上段が動き出した瞬間を狙って、ほんの少しだけ前進。その首に刃を突き立てた。頭を揺さぶる殴り方をしてから、横に薙ぎ払って刃を抜く。とどめに腹をけ飛ばして、一発弓を放つ。完全にそのHPを削り切った。

「ま、ざつとこんなもんか」

ユージーン將軍は確かにかなりの手練れだったが、同格以上の、しかもAGI—STRないしはAGI極への対策が甘かった。そこが、俺の一番の勝因だろう。その証拠に、俺の決定打となった一撃の前に相手が出そうとして来た攻撃は両方とも大上段からの攻撃だ。確かに、高STRで放たれる上段はかなりの有効打であることは認めよう。

だが、どんな攻撃にも弱点というものはある。俺からしたら、上段は連撃の中で使うこととはあるが、ああして一気に初段で使うことはほとんどない。むしろフェイクとして使うことのほうが大きい。

なぜかと言われれば、上から振り下ろすだけの上段はシンプルかつ強力だが、振りかぶる以上、カウンターはどうとでも取れる。要するに、予備動作が大きすぎるのだ。フェイクとして使うことが多いのは、まさにこのカウンターをカウンターで返すことを狙つての事。実際、俺は何度か成功させている。成功率が極端に低かったのは、あの赤眼の馬鹿くらいだ。あいつは決定的に才能の使い方を間違えている。

敵味方なく周りから上がる歓声を背に、俺はそんなことを考えていた。

空中に浮かんでいるリメインライトを拾って、俺は二人の領主の元へ向かって行った。両軍から上がっていた歓声には片手をあげて答えつつ、声をかける。

「誰か蘇生魔法を。このままじゃ交渉もままならん」

蘇生されたサラマンダーの将軍、ユージーンは、俺を見据えていった。

「強いな。間違いなくALLO最強のプレイヤーだ」

「そいつあどうだろうな。キリト——スプリガンの大使とは何度か戦ったが、あいつと俺は五分つてとこだから」

エリーゼと俺なら、ほぼ間違いなく俺が勝つ。だが、キリトは何度か模擬戦で刃を交えたが、キリトの武器破壊なしでの模擬戦だと、ほぼ五分、若干俺のほうが勝っている。ちなみに、武器破壊有りだと7:3でキリトのほうに軍配が上がる。

「俺はちよいとばかり特殊な事情でPVPは強くてね。だから、俺は別格として考えたほうがいい。」

で、大使の件、信用してくれる気にはなった？」

その言葉に、ユージョン將軍は押し黙った。ああいった手前、そうやすやすと翻意するわけにはいかない。それに、いくら多勢に無勢とはいっても、ALO最強格が二人はいる状況。よしんば首をとれたとして、採算が合うかどうか。これほどの大部隊、壊滅させられたら復活させるのにも時間がかかるはずだ。その間に首を取られたらたまつたものではない。と、ここで、後ろからサラマンダーの一人が声をかけた。

「ジンさん、ちよつといいかい？」

「なんだ、カゲムネ」

「思い出したんだよ。俺のパーティを壊滅してくれたのが、その二人と、後ろにいるシルフの嬢ちゃんのパーティだ。それに、エスの情報で追ってるのも、このスプリガン

だった。確か、メイジ部隊が追撃して、返り討ちにあつたはずだ。そのウンディーネも法螺吹いてるわけじゃないだろうよ」

つらつらと出てくる言葉に、俺は内心で驚いていた。このカゲムネとかいう男に貸しがあるわけではない。が、これはラッキーだ。

「・・・そういうことにおこう。二人とも、今度は立場抜き Тайマンだ」

「望むところ」

「歓迎しよう、盛大になー！」

そういつて、俺たちそれぞれに握手を交わし、サラマンダーは去つて行つた。その背中を見送りつつ、俺は安心した。

大集団を完全に見送つてから、俺は隣のキリトの頭を全力で殴つた。

「殴るぞ」

「・・・殴る前に言え・・・」

「普通あんなドでかいブラフかますか。ブラフかますにしても、規模を考えろつての。全く、二年前から後先考えずに話をデカくするのは変わつてねえな」

「でもいい手ではあつただろー！」

「俺らならあの手の有象無象くらい蹴散らせただろうが。あの將軍も、二人でかかれば倒せただろうし」

目の前で始まった俺たちのやり取りに、二人の領主の目が点になる。

「・・・ブラフだったのか」

「俺だつてなーに言いだしてんだこいつつて本気で思いました」

と、そんなやりとりをしつつ、俺はふと先ほどの言葉を思い出す。

「そういえば、エスがどうか言つてたな」

「エス？」

「一般的には、スパイや内通者を示すスラングだな」

「あつ、そうだ！サクヤ、シグルドが裏切つてたんだよ！」

「シグルド、つてのは？」

「シルフの幹部だ。そうか、あいつが・・・。大方、モーターイマーに乗せられたか・・・」

「つつても、寝返つたとして、なんかメリットあるのか？」

「次のアップデートで、転生システムが実装されるといふ噂がある。あいつは、サラマンダーの後塵を拝する今の状況に不満を持っていた。おそらく、私の首の代わりに転生させてそれ相応のポストを約束したのだろう。用心深いモーターイマーが、その約束を守つたかどうかは分らんがな」

「ましてや、どう出し抜くかが肝になつてくるんなら、牙を抜いたうえで領主の首を取れる。一挙両得だ。ま、俺からしたら、そもそもそれを利用されるつてセンを考えなかつ

たのか、って思うけど」

「・・・と、言うのは？」

「そういう外部戦力、っていうのは、内通するのにはうってつけ、ってこと。で、そのシグルドって人は、今どこに？」

「留守を任せている。」

ルー。確か、闇魔法上げてたよな」

「ウン。でも、これだけ日が高いと、月光鏡も長くはもたないヨ？」

「問題ない。長話をするつもりもないからな」

その答えを聞いて、ケットシーの領主さんはスペルを詠唱する。そこに現れたのは、巨大な鏡と、どこかの部屋。どうやら、テレビ電話のようなものらしい。

「久しいな、シグルド」

「なっ・・・サクヤ!? どうして!？」

「少し、な。そういえば、ユージーン将軍が君によろしくと言っていたよ」

その言葉に、一瞬しかめっ面をしたシグルドだったが、即座に開き直ってふてふてしい表情になった。

「それで？俺をどうするつもりだ？」

「なに、そろそろ代替わりの時期だと思っていたところなのだ。シルフが嫌というので

あれば、お望みどおりにするまでだ」

そういつて、彼女はなにやらウィンドウを操作した。直後、シグルドにもなにやら表示が出て、その直後に彼の顔色がみるみる変わる。

「なっ……！追放だど!？」

「そうだ。レネゲイドとして、中立域をさまよえ。お前ほどの男だ、いずれどこか拾ってくれるやもしれん。ではな」

「貴さ——!」

何とかこちらに向かって跳びかかろうとしたが、その直後、彼はどこかへ転移されていった。それを見てか、アリシヤは魔法を解除した。その後、シルフの領主はキリトの連れになにやら話し込んでいる。その間に、アリシヤはこちらに話しかけてきた。

「いやー、ただものじゃないとは思ってたけど、ここまでとはネ」

「ちよいとやんごとなき事情で、特にPVPは得意になったんですよ」

「フーン……?」

やや目を細める領主さんに、俺は何食わぬ顔で続ける。

「とりあえずはこのまま護衛を続けさせていただきますよ。依頼の完遂は傭兵の基本ですから」

「ならば、その後、私専属の護衛にならない?待遇は保証するヨ?」

「ありがたい話ですが、丁重にお断りさせていただきます。俺は縛られずに自由にプレイしたい人なので」

「・・・彼女に負けず劣らず変わり種だね君」

「え？」

「エリーゼちゃんにもそうやって断られたんだ。知り合いみたいだし、似た者同士だなーって」

「なんというか、それはたぶん、たまたまじゃなかろうか。いや、一つ心当たりがくはないのだが、・・・いや、まさかな。」

「護衛を完遂した後は、こっちとしてもやりたいことはありますがね」

「そっか。もし、だまして悪いが、をしたら？」

「誰であろうと、その首をもらい受けましょう。今回に関しては、俺はただ乗っかっただけです。この剣が報酬、つてことで」

「・・・本当に似た者同士だね」

「そういつて領主さんは笑った。きつとそれに感じた俺の感覚は、間違いではないと思いたい。」

60. 世界樹攻略

蝶の谷での同盟が締結され、無事にフリーシアまで戻ってきた俺は、そのままの足で央都アルンの方向へ足を進めた。目的はもちろん、グランドクエストの攻略だ。

「でも、サービス開始されてから一回も突破されてないクエストなんて、どうやって攻略するつもり？」

「古今東西、この手の挑戦回数無制限の高難度クエストの攻略法なんて一つだろ。——
——トライアンドエラーで、膨大なデータを積む。それだけだ」

「・・・脳筋」

「うるせえ」

「そんなやり取りをしつつ、俺はグランドクエストに挑戦した。もちろん、いわゆる“死に戻り”をしているような時間はないから、少しずつのトライアンドエラーだ。その結果として分かったのは、

「あれ本当にクリアさせる気あんのか・・・？」

「予想だけど、あのまま行くと、天井付近では過剰なほどの数的戦力を投入してゴリ押すくらいしか手がない」

「俺たちには到底無理な真似だな」

そんな話をしつつ、横目で時間を見る。意外と長い時間ログインしていたことと、もう間もなくメンテナンスに入ることに気づき、俺は一旦ログアウトすることにした。

「んじや、俺はこの辺で落ちる」

「分かった。私はあなたのローカルメモリにいるから」

「ほいよ」

了承の返事を得ると、俺はログアウトの処理を行った。

現実世界で携帯を見ると、メールが届いていた。相手のメールアドレスに覚えはないが、件名に「至急 from elise」と書いてあった時点で差出人は察した。・・・全く、どこからこんな情報・・・菊岡か。どんな爆弾握られてんだあの胡散臭眼鏡。

本文にはただ一言、「重要な情報をキャッチ。可及的速やかに連絡されたし」とあった。おそらく誤字を防ぐための物だろう、堅苦しい文章。どうやらかなり重要らしい。俺はすぐさま、彼女の連絡先にかけて。比較的遅い時間だったにもかかわらず、彼女はすぐに電話に出た。

『もしもし』

「あ、ロータスだ」

『リアルでそれ?』

「念のためだ。で、あの情報ってのは?」

『すごく大事なこと。』

——あのクエスト、クリアできない仕掛けになってる』

「どんだけ高難易度設定だよそれ・・・」

『そういう意味じゃない。そもそも、ただのプレイヤーではトリガーが起動できない設定になってる』

「・・・は?」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。トリガーが起動できない? ゆっくり思考し、ようやく分かった。その瞬間に、思わず携帯を握る手に力が入った。

「仮にあの守護騎士の群れを突破したところで、絶対にあの門は開かない、ってことか!?!」

『そういうこと。クソゲーってレベルじゃないわねこれ』

そして、自分の頭が冷えたことで、ようやく気付いた。——彼女も、かなり怒っている。怒りが熱ではなく、冷たい方向に向かっているだけだ。

「あの門の先は、よほど見られたくないものがあるようだな」

『ええ。私もそれを探してる。でも、想像以上に強固なプロテクトだね。ちよつと本腰を入れないと難しそうだから、また後で突貫するつもり』

「お前が手を焼くプロテクトか。一体何があるってんだ」

『さあね。・・・っ!』

「・・・どうした?」

唐突に、電話口で息を呑む音がした。

『・・・いや、今はまだ、確証がないから・・・』

「そうか。喋れるような時になったら、また教えてくれ」

『うん。内容によっては、確約できないかもだけど』

「なら、この場で確約しろ。たとえ真実がどれほどまでに残酷だろうと、俺には包み隠さず教えろ」

『・・・分かった』

少しの逡巡の後、彼女は確かに肯定の返事を返した。

「今ALOは、メンテ中か」

『そうだね。あ、こっちは手伝わなくていいからね。ゆっくり寝てて。どちらにせよ、この後協力してもらおうことになるだろうし』

「了解。おやすみ」

『うん、おやすみー』

それだけ言い残して、俺は電話を切った。と、同時に欠伸が出た。いくら身体的には休息していても、頭はかなり働いていたのだ。眠気が飛んでいたのは、アドレナリンか何かのせいだろう。・・・久しぶりに、かなりしつかりとしたPVPもしたことだし。

(・・・寝るか)

携帯を充電スタンドにおいて、俺は眠りについた。

メンテナンスが明けてからも、俺はログインできずにいた。クリア不可能。すべての前提をひっくり返すその言葉に、俺はどうしようかと思わなく打ちひしがれた。と、手元の携帯電話が着信を告げた。相手も確認せず、とりあえず電話にでる。

「もしもし」

『よかった出てくれた。最終ログイン地点どこ?』

「央都アルンだが」

『ちようどいいや。すぐにインして。プレゼントがあるから、それをもつて突破さえできれば行けるはず。ストレアちゃんにそれを渡せばモーマンタイ』

「突破さえできれば、って、あれを単騎で突破するのはさすがに無理があるぞ」

『その辺は大丈夫。両領主の援軍が到着することになったから、一時間あれば十分だから、しばらく粘って』

「無茶言うねえ」

あの大軍を相手に、一時間。かなりきつそうだ。

『大丈夫。信じてます』

その言葉に、俺は思わず息を呑む。——なんだかなあ、それはずるいだろう。

呑んだ息を吐きだす。

「やれるだけやってみる。持たなくても文句言うなよ」

『十二分』

それだけ言うと、電話は切れた。あつちもあつちで、かなり厳しいものなのだろう。なら、俺は俺のやることをやるまでだ。

ALOにインすると、メールに添付される形で、ひとつのアイテムが付属していた。アイテム名は“カードキー”。現実世界のそれそのままだ。

「こんな世界に、カードキー……?」

「ちよつと見せて」

俺のインと同時に隣、というか肩にナビピクシー状態で乗ったストレアに、そのカー

ドを触れさせる。と、彼女の顔色が変わった。

「これ、GM権限の一部だよ!?どっからこんなもの・・・」

「エリーゼだ。・・・そうか、突破できたら、ってそういうことか・・・」

全部つながった。いちプレイヤーではあの扉は開かないということも、だ。ということとは、

「あの先に、レインがいる。悪いがストレア、付き合ってもらおうぞ」

「任せて」

そういうと、彼女は俺の肩から降りて、いつも通りの大剣装備になった。

「ストレア。これはお前が持つてろ。あんな天蓋にカードキー差込口なんてあるわけないから、お前が持つてたほうがいい」

「分かった」

「絶対行くぞ、世界樹の上に」

「うん!」

そうして、俺は十何回目かの世界樹攻略へと出かけた。

その入り口で、俺たちはあることに気が付いた。

「どうやら、先客がいるようだな」

「なら、続こうか」

同感だ。俺はアローブレイズを抜き、彼女は背中の大剣を抜いた。そのまま並走してクエストを始める。上を見上げると、そこにいたのは見覚えのある黒い影。

「あいつなら、前衛としては十二分」

「ヒーラーはいないけど？」

「当たらなければどうということはない」

「了解。行くよ！」

「OK、前頼んだ！」

アローブレイズを弓形態にしている間に、ストレアがキリトを援護する形で突撃する。キリトは突然の援護に驚きつつも、ちゃんと対処をしているようだ。俺も弓でちまちまと射ながら、接近してくる相手には蹴りをお見舞いしている。それに、キリトの連れの少女が驚いていた。

「どうした？」

「普通は、こういうのは前衛だけを狙ってくるものなの。こんな風に、後ろまで狙ってくるなんて初めてだから……！」

「なるほど。後衛にもちゃんとヘイトが入るようなアルゴリズムか。まったく、本格的に殺しに来てるな。」

嬢ちゃんたち、白兵戦は行けるかい？」

「私は大丈夫だけど、レコンはダメ」

「レコン、つてのは、そのメイジ君だな？了解した。よし、なら前衛三枚で行こう。万が一なら、どっちかに守ってもらいながらヒールで」

「無茶言うね」

「それだけの腕前をあいつらはもってる。背中は任せな」

その言葉が契機になったのだろう、彼女が上昇する。

「さて、メイジ君。頼むぜ？」

「は、はい！」

話の流れに一瞬ついていけなかったメイジ君だったが、即座にスペルの詠唱を始める。頭の切り替えはできるタイプなのだろう。後衛職としては少し心もとないが、無いよりましだろう。

いくら優秀な前衛がいて、若干力不足ながらも後衛もいると言っても、数の暴力には耐えられない。少しづつだがギリ貧になっていた。横のメイジ君にも、焦りが見られる。その中で、俺はちらりと視界の端に目をやる。そこに表示されている時間からして、彼女の言っていた援軍がそろそろ到着するはず。

と、ここで俺に打ち漏らしがあった。背中からストレアを狙う。仮に彼女が避けたと

して、キリトかあの少女も狙える位置にいた。

「ストレア！後ろに敵！」
チエックシックス

彼女も対応しづらい位置からの奇襲。俺の声は気休め程度にしかならない。——
万事休す。そう思った直後、火の玉が後ろから飛んできて、その敵を落とした。

「すまない、遅くなった！」

「これでも超特急で来たから、勘弁して？」

「シルフのメイジ隊に、ケットシーのドラグーン隊!？」

シルフの少女が驚いている。両領主、正確にはシルフとケットシーの合同軍の到着だ。遅い、と、言いたいが、この際ぜいたくは言えない。それに、精鋭をこれだけ引き連れてきたんだ、援軍としては十二分。精鋭がこれだけいれば、彼女の言っていた、
過剰なまでの数的戦力によるごり押しが利く。

「メイジ君は後ろのお仲間合流しな。ストレア！押し切るぞ！」

「了解！」

俺にとつて弓は「たまたま手に入った有効手段だから使っていた」だけであり、本来の領分はクロスレンジだ。援護は十二分であるのなら、前衛で一気に蹴散らす。

全力で上昇しながら、アローブレイズを曲刀形態にして左手の順手に。そして、ニバンボシを抜刀する。二刀の状態で、連続で襲い来る敵をひたすら切つて落とす。無限湧

きなのではと言いたくなるほどに多い敵に辟易しつつ、俺は動きながらの詠唱に入った。シルフの少女は、俺のやりたいことが分かっすぎてよつとしていているが、この際無視だ。「ストレア!」

俺の叫びの意味を、彼女はすぐに理解した。そして、自身の剣をためらいなく背中に背負い、俺の前に立った。直後、俺から強力な水魔法が放たれる。高圧水流で押し流すようなものだ。そして、彼女はそれに逆らうことなく流されていく。だが、天井には届かない。ここまでは、十二分に計算通り。

「そこを、退きなさい!!」

怒号とともに道をふさぐ守護騎士に放たれたのは、しんどりゆうえんざん「震怒竜怨斬」。俺の魔法の威力分も上乘せされた一撃は、天井までの道を確かに開いた。その間を、魔法を撃った直後に上昇した俺と、押される形で初動を与えられ、上昇を始めたストレアが続く。天井には想像通り、何も無い。続いてキリトが上がってきたことを確認して、俺は声をかける。「コードを!」

「了解!」

即座に、ストレアがコードを天蓋に転写する。

「転移が始まる……!手を!」

「来いキリト!」

ストレアの声と同時に、俺はキリトにも手を伸ばさず。三人の手がつながり、俺たちは
転移されていった。

6 1. 蓮の上に架かる虹

転移された先は、どこかの回廊だった。だがそれは明らかに城のようなものではなく、むしろ無機質なものだ。俺の直後に二人——いや、ユイと思われる黒髪の少女も含めて三人も気が付く。

「……、は……?」

「順当に考えれば、世界樹の上、だな。明らかに世界樹城ユグドラシルつて雰囲気じゃねえが」

やはり、あのゲームのうたい文句は大嘘だったということだ。何が世界樹攻略だ笑わせる。

「とにかく、侵入がばれているって前提で動くべきだろう。君がユイちゃんだね?」

「え、あ、はい」

「ということは、プレイヤーの座標照会くらいはできる?」

「可能です、えっと——」

「時間がない。アスナの元まで、このまっくろくろすけを案内してやってくれ。俺はまた別件がある」

「で、こっちのサポートは私だね」

「ああ。頼む」

「もちろん」

「パパ、ママはこつちです!」

「分かった。・・・無茶すんなよ」

「てめーが言うな」

その言葉を最後に、俺たちは散開する。しばらく走ると、ストレアが奇妙なことを言い出した。

「ここ、すごく気味が悪い」

「つていうと?」

「たくさんのプレイヤーがいる。でも、全く動いてない。なのに活動はしてる。まるで、肉体データを奪われて意識だけ活動してる、みたいな」

「夢を見る状態ってことか?」

「夢にしては活動が激しすぎるの。意識だけ起きてる」

「・・・先を急ぐ。とにかく今はレインの元へ」

「うん」

嫌な予感はあるが、後回しだ。まずはここに来た目的を果たす。

どこまで行っても研究所然とした、無機質な回廊を駆けていく。と、ストレアはある

扉の前で止まった。その扉には、「主任室」とあった。

「……この奥。だけど……」

「……どうした？」

ストレアの様子が目に見えておかしい。具体的には、歯切れが悪すぎる。

「先に言っておくね。いざとなったら、最悪も覚悟して」

「……了解」

最悪。彼女の言うそれが、何を示すのかは分からない。中で何が起きているのか。まずはそれを確かめる。

「コード、転写」

ストレアが扉を開ける。そこには、見覚えのある長いプラチナブロンドの少女。

「……レイン、か？」

だが、彼女はぐったりとしていた。心なしか、軽く汗ばんでいるようにすら思える。

「……誰？」

声が聞こえる。どこかうつろではあるが、間違いなく、聞きたくてたまらなかつた声だ。

「俺だ。ロータスだ。迎えに来た」

「……誰なの？」

・・・おかしい。一体何が起きている。と思うと、隣にいたストレアがうめいた。
「ストレア!？」

「来ないで！」

絹を裂くようなストレアの声。初めて聞く強い語調に足が止まる。

「一時的にローカルメモリに退避する。気を付けて、何か——」

早口にそれだけ言い残し、彼女は消えた。考える間もなく、俺も転移を受けた。

転移した先は、真つ暗な部屋。だが、互いの顔くらいははつきりと見えた。だからこそ、先ほどと違ってはつきりと分かった。

「・・・レイン」

もう一度、彼女に呼びかける。反応はない。そして、その目はいったい何を映しているのだろうかと思うほどに、何もなかった。そして、純白のドレスに身を包んだアスナと、相変わらぬキリトも同じ場所にいた。

「うん？ さつきまで妙なプログラムが動いてたけど、そんな様子はないね。でもま、僕のおもちやに手を出したんだ、それ相応の罰を受けてもらわないと」

「おもちや？ 私はあなたのおもちやなどではないわ。彼女もね」

「君に關しては徐々に墮とそうと思っていたんだよ。そこに居る彼女は、いわばその踏

み台、といったところか」

「……何？」

「おや、気づいていないのか？なら教えてあげよう——」

—— 黙れ。

「彼女はね、僕の実験の成功例のおもちやき。そら、お前の主人は誰だ？」

—— 頼む、黙っていてくれ。

「私はオベイロン様の忠実な僕しもべです」

だが、俺のそんな希望はかなわなかつた。

「は、はは、ハハハハハハ!!聞いたかいロータス君、君がどんな風にここまでたどり着いたのかは知らないけれど、救おうとしたお姫様が自分のことを忘れていて、しかも敵の王様の手下になつていた!いやあ、本当に最高の奴隷だよ彼女は!

殺してこいと言えば殺してくるし、なにより抱き心地がよかつた!

ここで目障りなガキも排除できる!最高のストーリーじゃないか、なんていい日なんだ……!」

「須郷……貴様……!」

うめくキリトに、目の前の男は歩いていく。

「……ではそんな名前ではない。妖精王オベイロン様、と、そう呼べえ!」

何かを叫びながら、キリトの顔をけ飛ばす。その首に向かつて、俺は歯を食いしばって、震える手を何とか押さえつけて、アローブレイズの矢を放とうとした。だが、矢を放つ寸前にその左手首を正確に投げナイフが貫いた。

「よくやった。お前はそこのウンディーネの相手をしている。ただし、殺すなよ」

「御心のままに」

うつろな声で答えた彼女は、ゆっくりと片手剣を抜いた。斬りかかってくる彼女の剣を、ニバンボシを抜刀して受け止める。その状態で、ハイライトの消えた目と、うつろな声で、彼女は話し出した。

「これ——、誰か——る——に、お願い——」

はつきりと聞こえた、その言葉。SAOにいた時には、絶対彼女が発することが無いはずの、その言葉。誰よりもそれを忌避していた彼女が、こんなことを、しかも俺に向かつて言うはずなどないとは、俺が一番知っている。

歯を食いしばり、刀の峰に左手を添えて、押し返した。その反動も利用して、間合いを取る。逆手で刺さった投げナイフを捨て、やや半身になり、ニバンボシは担ぐように、左手は体側に構える。

「——今、楽にしてやる」

お前は俺を繋ぎとめて、引つ張り出してくれた。今度は俺が、お前を助ける。俺の言葉が聞こえたのかは分からないが、彼女は正面から突撃してきた。

俺たちの戦いは苛烈な拮抗を続けた。俺のジャブの剣は通らず、相手の攻撃のことごとくを、俺は素手も使つて受け流した。連撃を受け流し、いったん仕切りなおす。この間合いの次の一手が、俺には何となく読めていた。

彼女の剣は俺には届かない。他ならない俺には。何故なら、彼女が培った剣術は、俺とペアを組んでいた時のそれがベースにあるからだ。いわば、俺とあいつの剣はコインの表と裏。似ているところもあるかもしれないが、同じ方向性になることは決してない。初めて彼女の剣と正面から向かい合ったとき、俺は初めてそれに気づいた。俺が回避と攻撃の手数に重きを置く超攻撃的スタイルなのに対し、彼女は、相手の攻撃は極力回避するというアプローチこそ同じでも、手堅く反撃の糸口を探るタイプだ。相手が彼女で、なおかつ手続き記憶に基づき剣術は忘れていなくとも、エピソード記憶——俺の剣筋を忘れている彼女だからこそとれる手段。

離れた間合いにいることを嫌ってだろう、彼女が接近してくる。牽制で投げナイフを投げてくるが、すべて弾き落とす。——剣を下げた構えと彼女の剣術スタイルから見て、高確率で胸元への突き。俺の予想にたがわず、普通ならクリティカルになるであら

う場所へ、彼女は突きを繰り出した。

——ドスン、と、音がする。それは、突進してくる彼女を、俺が抱き留めた音。あの突進は、俺の想像通り、胸の中心よりほんの少し左側——心臓を狙ってきていた。そのため、ほんの少しだけ横にステップして、彼女の腕ごと抱えることに成功したのだ。

「——帰ってこい、レイン。俺はただお前のために、ここに来た。お前は何も悪くない。俺はただ、お前が生きていたならそれでいい。だから、」

——殺して、なんて言うな。ましてや俺が、お前を殺せるわけがないだろう……！俺の言葉に、腕の中の少女が初めて、人らしい反応を見せた。それほどまでに、彼女は人形のようにだったのだ。

「あな、たは——」

「ロータス、

——いや、天川蓮、だ。現実世界じゃないが、——約束通り、会いに来たよ、虹架」

名前を呼びながら、腕の力を強める。

——頼む、伝わってくれ。

——そうでなければ、俺は今度こそ、つなぎとめるものもなく転落していつてしま

——俺はそれが、一番怖い——

ただ念じる。何秒だったのか、何分だったのか、それは分からない。だが、確実に、彼女はその武器を手放し、ゆっくり抱擁を返した。

「本当に、ロータス君……?」

その声に、俺は息を呑んだ。

「——ああ」

さらに少し、腕に力を籠める。歯を食いしばって、それでも少しだけ、嗚咽が漏れた。

「ごめんね」

「馬鹿。違うだろう」

なんとかこみ上げるものを落ち着けて、腕の力を緩めて、彼女の顔を真正面から見つめる。その目には、はつきりと光が戻っていた。

「——ただいま」

「——おかえり」

その時の俺は、上手く笑えていたと信じた。

ゆっくりと、抱擁を解く。そこには、須郷はすでにいなかった。

「そつちも終わったみたいだな」

「ああ。お互い、な」

そういつていると、俺の元にナビピクシー状態のストレアが戻ってきた。

「やっぱ戻ってこれた」

「もう大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫。エリーゼさんのお墨付き。無事、助け出せたみたいだね」

「ああ。全部終わった。あとは未帰還者をログアウトさせるだけだが、その辺は、あの子だし抜け目ないか」

「うん、想像通り。じゃ、お二人のプロテクトを解除するね」

そういつて、彼女はまずレインに触れる。

「あなたは、まさか、あの時の・・・？」

「そう。こちらでは初めまして、だね」

「元気になったんだね」

「うん。バグも取り除かれたし、もう大丈夫。——よし、プロテクト解除完了。じゃ、

えっと、アスナさん、でいいのかな」

「ええ。お願いします」

アスナの合図で、彼女のほうの作業にも取り掛かる。と、キリトがこちらに聞いてきた。

「なあ、彼女、誰？」

「うん？んー、いかなければ、ユイちゃんの妹？」

「ユイの・・・ああ、そういうことか」

「そういうこと。俺だって、よもやこんな形で役に立つなんて思っちゃいなかったがな」

この説明だけで分かるキリトは、やはりかなり頭の回転が速いほうなのだろう。――

――その能力がゲーム廃人にしか行っていない、というのは、否定できないかもしれないが。

アスナのプロテクトも解けると、俺たちはログアウトした。

「じゃ、また、向こうでな」

「ああ」

――こうして、俺の短いような長いようなレイン救出は、幕を閉じた。

epilogue. 変化した現実

ALLO事件が完結してから少しした、拘留所にて。そこには、とある一対の影がいた。

「——こんばんは、須郷信之さん」

「誰だ？」

突然のあいさつに、獄中の人物——須郷信之は目を上げた。

「何者でもありませんよ。あなたの研究を知っているものです」

「なんだと・・・!？」

青年と思われる影の言葉に、須郷は目の色を変えた。

「ということは、僕の支援をしてくれる、と言うことか・・・!？」

青年は答えない。そのまま、彼はただ、無言で近づいていく。

「お、おい、何とか言ったら——」

「うるせえよ、クソボケ」

突然、声が低くなる。と、須郷の声が途切れた。声を出そうとしても出ず、ただ溢れるのは生暖かい液体だけ。その事実、須郷は助けを求めるような目を向けた。

「もし仮に、お前の研究が評価されて、法がお前を許したとしても、——俺がお前を許

さねえ」

そういうと、彼はゆっくりと、手に持った刃を目へと持ってきた。怯える須郷をよそに、そのままナイフを一突きする。それを最後に、須郷はこと切れた。そのまま、彼を殺した人間は、着てきた服を鞆にしまつて、何か小型の物を耳につけながら獄を出た。

「終わったぞ」

『分かった。できるだけ早くね』

「ああ」

そういうと、彼はほとんど音を立てずに廊下を歩く。ポケットからハンカチを取り出し、返り血をぬぐう。帰り道の中、彼は自身の手を軽く見つめた。

(人殺し、か)

その翌日、拘置所にて殺人が起きた、という記事が、朝刊をにぎわせた。犯人は防犯カメラなどに映っておらず、謎の犯行として様々な憶測を呼んだが、結局手掛かりなしで迷宮入りすることになる。その記事を見ながら、彼女は俺に問いかける。

「よかつたんですか、先輩」

「何が？」

「彼女が、誰がこれをやったかを知ったら、きっと悲しみますよ」

「・・・だろうな。でも、こうでもしないと、俺が俺を許せない」

彼女から、あいつが彼女に何をしたのかを聞いた。マインドコントロールだけならまだよかった。だが、彼の言葉通り、あいつは考える限りの凌辱を彼女にしていた。性的にも、精神的にも、仮想世界の肉体的にも。彼女のあれは、マインドコントロールと凌辱の末の物だったのだ。と、いうのは、目の前にいる天才ハッカーがすべて暴き出した。グランドクエスト前に言い淀んだのは、その時にこの可能性に思い当たったからだそう。今回の行動は、それを見てから、俺が3Dプリンターで作ったナイフを使って、彼女のサポートを受けたうえでやった行為だった。

彼女にとって不幸中の幸いだったのは、マインドコントロール下にあったということ。つまり、彼女はどこか夢を見ているような状態で、強い実感がなかったということだ。だがそれでも、そういう行為を受けた記憶は残っているようで、最初のほうはどうか怯えたように俺にべったりだった。今は大分緩和されてはいるが。——
——
そんな姿もかわいいと思ってしまう俺も俺だが。

「ま、そうですよね。私も、ここまではやばいな、と思いましたから」
「そうか」

そう言いつつ、俺は彼女への報酬で付き合っ入った店のコーヒーを手を取った。

「でも、君にやらせるよりは、俺のほうがいいだろう。慣れてるからな」

「……そう、ですか」

彼女が目を伏せる。その目の中に映る感情に、俺は顔に出さないレベルのざわつきを覚えた。

それからしばらくして、俺たちは東京のマンションの一室で荷解きをしていた。というのも、廃校になった校舎を再利用する形で、S A O 帰還者向けの学校が開設されることになったのだ。そして、あのままでは住所不定無職になりかねなかつた俺に対し、菊岡が気を回して講師職という形での雇用を約束してくれた。ついでに言うと、これは特例実習扱いにもするらしく、あとは教員採用試験さえ受ければ教員免許が取得できるとのこと。と、いうのは本人から聞いた。その手の教育周りは文科省の管轄で総務省では手が出せないはずだが、その辺はうまくねじ込んだらしい。こればかりは感謝の一言だ。

で、学校なので、もちろんレイン——虹架も、その生徒になる予定だ。前から、アイドルなどに憧れていたから、そっち系の学校でもいいのでは、とは言ったが、何も知らないバカ丸出しはさすがに恥ずかしいと思つたらしい。S A O のネットゲという性格上、遠方からの生徒向けの寮に入ることもできたのだが、彼女の希望で俺とルームシェア、もとい同棲をすることになったのだ。ま、俺としても、こんな可愛い彼女と同じ部

屋で暮らせることに文句はない。

「さて、とりあえず飯にするか」

「そうだね。手伝うよ」

「お、そりやありがたい」

「だって、こと家事に關しては、私のほうが上だし」

「なにおう。俺だって一通りはできるつての」

「私は一通りくらいとうの昔にマスターしましたけど。しかも現実で」

そんな言い合いをして、どちらともなく笑つて。結局、二人ともがほとんど同じくらしいの負担でご飯を作つて、笑い合いながらそれを食べる。それが、俺はとても心地よかつた。

虹架はそこまで大荷物というわけでもなく、俺に至つてはボストンバッグ一個分という超軽量だつたので、荷解きはその日のうちに終わつた。むしろ軽く掃除をする暇すらあつたほどだ。お互い寝床にそこまでこだわりはなく、普通に布団だつた。布団も含めた家具家電あたりは菊岡が手配してくれたらしい。そのおかげで荷物が超軽量で済んだのだが、布団はダブルサイズがーセットのみ。つまり何が起るかと言えば、

「実際にやってみると、結構ドキドキしない？これ」

「そうだな。でも、虹架の顔が見れるのなら、それでいいかな」

「・・・いきなりそういうこと言わないでよ」

俺の不意打ちの言葉に、虹架は薄暗い部屋でも分かるくらい頬を染めて、顔の半分を掛布団で隠した。かわいい。じゃなくて。

まあつまり、横で寝ることになるのだ。おのれ菊岡、謀つたな！GJ！じゃなくて。

その、なんだ。俺だつてまだ20代の男なわけだ。で、相手は17歳の、それなりに育っている少女なわけ。——つまりは、そういうことである。

「ねえ、その、蓮、さん」

「・・・なんだ？」

「あの、さ、その、蓮さんも男の人だから、・・・そういうこと、したいの？」

・・・思わず生唾のみ込んだ俺は悪くねえ。だって、目の前で可愛い彼女が照れながらこういうこというわけだぞ？何も思わないような奴がいたらそれはおかしい。

「・・・まあ、正直なところ、したい」

「なら、その、・・・いい、よ？」

——その後のことは推して知るべしである。

ただ、ご丁寧にちゃんとそういうものまで揃えていたあのどぐされ眼鏡は絶対一回以上ぶん殴る。

A L O 事件が終結して、新学期が始まって少しした5月。エギルことアンドリユー・ギルバート・ミルズ、および리즈ベツトこと篠崎里香の主催で、S A O クリアの打ち上げオフ会が行われることになった。場所は、エギルがリアルで経営している喫茶店兼バーのダイシーカフェ。奥さんと二人で開いた店で、亭主がS A O にとらわれている間、奥さんはこの店を守り抜き、隠れ家的人気を博していたというのだから、いい夫婦だなあとつくづく思う。その中で、俺はレインから少し離れて、カウンターのほうにいた。

「おまかせでハイボール一丁」

「いいのかよ、仕事は？」

「今日の分はもう仕舞いだ」

「そうか。ほい」

「サンキュ」

グラスを受け取って、一口飲む。ウイスキーの香りと炭酸のバランスのいい、いい仕

上がりだ。

「そういえば、お前さん、レインとはどうなんだ？」

「どう、とは？」

「付き合ってたんだろ、お前ら」

エギルの言葉に、ロックを飲んでいたクラインがむせた。

「てめ、ロータス、お前うらやましいぞ！」

「つつてもよ、最近は相手できてなくてな。寂しい思いさせてないか不安なんだよな」

と、言いつつさらに飲む。喪男相手にこんな話題とか酒無しでやってられるか。

「それに関しては大丈夫だ」

「何をもってして」

「いいか、女つてのは、惚れた男がいると魅力が三割増しになるんだよ。今のレインはま

さにそうだ。幸せでたまらない、って顔してる」

「だどいいがな。次、スコッチのロックで」

「はいよ」

さらに追加を頼み、レインのほうを見る。我が彼女ながら、確かにかわいくなっている気がする。気がする、じゃなければいいな、と思ってしまった。

ほろ酔い加減で、俺たちは帰路についた。エギルの話を聞くと、未成年側にもほんの少しだがアルコールの入った飲み物を提供していたらしい。「ほぼほぼジュースだから、バレないだろうし問題ない」とのこと。それでいいのか。と思った俺はおかしくな
いはず。

並んで歩いていると、虹架は唐突に、つないだ手を恋人繋ぎにしてきた。驚いていると、レインはさらに腕を絡ませてきた。

「珍しいな、今日は」

「だってさ、ああやってみんなとわいわいするのも楽しいけど。．．私は、あなた
のそばにいたいもん。甘えたいもん」

「いつももつと甘えても．．．っていうのは、今の俺が言えることじゃないな、ごめん」
「いや、分かっているつもりなの。でも、．．もつとつて思っちゃうの。キリ——じゃ
ないや、和人と明日奈見てると余計に、さ」

まあ、あの白黒夫婦は本当にお似合いだろう。いろいろかみ合っている。何より、互
いが互いを強く思っている。あの二人を見ていて、プラスして若干のアルコールも相
まって、今のこの状態なのだろう。

「虹架」

「何？」

その先、何を言おうとしたとしても言わせない。不意打ちのキスだろうが知ったことか。俺だつて、こんな可愛い状態を見せられて、何も思わないはずもない。それに、——入っている酒の量はこっちのほうが数十倍上だ。こっちも理性の限界つてものが低くなっている。ゆつくりと唇を離すと、少し切なそうな声が聞こえた。

「伝わった？」

「十分に」

それだけで十分だった。

「帰るか」

「そだね」

そうして二人はゆつくりと一緒に進みだした。

if編 あとがきの何か。

はい、というわけで。

正史より10話ほど膨らんだifルート、漸く完結でございます。ここまで読んでくださった方には本当に感謝の念のみです。ありがとうございます。

このifルートは、もしもロータスが攻略組に戻っていたら、というところに全ての分岐が生じます。その場合、後輩&未来の恋人とトリオになり、もつと丸くなるということですね。で、作者も謎の糖分大量発生になる、と。こんな可愛い彼女が欲しい人生だった(吐血)

ALOf編は完全にロータス君のターンでした。ストレアも沢山出せだし、個人的には特大満足です。

エリーゼちゃんもハッカーとしての本領発揮でしたね。彼女も大好きな先輩のため、全力投球でした。若干やり過ぎなところは否めませんが、創作ものということで(ry
ちなみにですが、これがなぜ正史ではなくifだつのかと言いますと、

・ここで物語が終わる

・邪道主人公ものなのに王道回帰とはこれいかに。

・いろいろな回収しきってないところがある

・書きたいシーンが書けてない

といった感じの理由です。物語が終わるのはまあ、嬉しいような寂しいようなって感じなのですが、後は、ねえ・・・という感じです。元々邪道なのに王道に回帰ってタイトル詐欺だし、特に何よりこのままだと——（以下は重大なネタバレにつき消去されました）

エースコンバットネタは結構随所に放り込んでましたね。SAO後半は特に。あとはTOVネタも。

主人公のモチーフの一人が某黒衣の断罪者なので、入ってきました。ALOの最後のあのシーンは、完全にあそこですからね。気になる方は投稿時には絶賛発売中のティルズオブヴェスペリアにてどうぞ！（ダイヤモンド

古い作品じゃないかって？この作品はリマスター版がPS4にて発売中です。好み
が別れる作品だとは思いますが、ここについてきて下さる方々なら大丈夫でしょう。

2019／12／13 追記

SAO帰還者学校って必須じゃなかったんですね・・まあ、ここではレインちゃんが地元ではなくそつちを選んだ、ってここで何卒ご了承願いたく思います。

さて、この次は大変長らくお待たせしたGGO編でございます。次回更新から通常営業、2020/1/10から月一です。

正直、GGOでどうやってキャラを動かそうか悩み、全く思い付かなかったからif編に逃げたら、おまけが本編になっていた始末なので、どこまで書けるか・・・。時間がかかるかと思いますが、今のところアリシマでプロットは組んであるので、ゆるりとお待ちくださいませと思います。

さてさて、字数稼ぎも兼ねて、嘘になるかもしれない次回予告風のを投下して、一旦お別れと致します。ではまた次回。

「で、そいつの名前はなんていうんだ？」

「———デスガン死銃」

東の間の平穩、そこにもたらされた依頼。

「———このくらい、検討済みなんだろう？」

「だからこそ、こうして君に聞いているんだ」

「結論はいたってシンプル。———こいつは、ただの殺人だろう」

——彼の目から紐解かれる、本来ならあり得ざる解決。

「久しぶりだな、赤目の」

「貴様——！」

——再びの邂逅、その手にはキョウキ。

「——貴様は、ここで、殺す」

次章

ソードアートオンライン——泥中の蓮——死銃編

coming soon...

GGO編

51. 新しい日常—prologue—

正直に言おう。教職ってこんなに大変なのか。なーにが「電子化された教育のモデルケースだから多少は楽だと思うよ」、だ。毎日資料作りに追われるわ、質問もあるからちやんとコメントには目を通さないといけないわ、半分趣味レベルになるつつつても課外活動もあるから、それで時間を奪われるわで結構大変だ。だがそれを、機械の扱いをたまに俺に聞きながらでも平然とこなしてしまおう再任用の先生方には本当に頭が下がる。

教職についてから少しして。結構俺は大変だ。資料がなかなかうまくまいこと作れずに帰ったら日付が変わってた、なんてこともそこそこ以上にある。

「よっし、終わった」

だから、今日のように思いのほか筆が乗ったりして資料作りがさつさと終わる日は貴重だ。こういう日に限って誤字脱字祭りになってたり、自分でもよくわからんことを書いていたりするから注意なのだ。

「あれ、天川君、資料作り終わったの？」

「あ、はい。一応ですけど。今は、セルフチェックです」

「ふーん。こつちにも転送してくれる？手伝うわ」

「すいません、ありがとうございます」

それだけ言うと、俺はその先生に今できた資料を転送する。この先生も、御多分に漏れず再任用のおじいちゃんである。だが、亀の甲より年の劫とはよく言つたもので、俺がなかなかできないことをあつさりやつてしまつたり、気づかないところを気付いて指摘してくれたたり、表現などのアドバイスをしてくれたりと、本当に助かる先生である。それでもしつかりと自分の仕事はしてしまふのだから、本当に頭が下がるというか、上からないというか。

(誤字はなさそうだな)

「誤字はないし、悪くはないけど、色の説明は言葉だと分かり辛いんじゃないかな？その代り、映像資料とか、画像資料を持つてくれば良いと思うよ」

「となると、実際に一回実験したほうがいいですかね・・・」

「可能であるならそうだねー。実験が入れば、授業もやりやすいし。まあ、大変だから難しいとは思ふけど。どっかから映像資料もつてきたほうが楽だと思ふよ」

「・・・がんばります」

「ま、悩め悩め若人よ」

はっはっはー、なんて笑いながらその先生はマグカップ片手にどこかへと行ってし

まった。たぶんコーヒーでも注ぎに行ったのだろう。

(ま、やるか)

そう思った俺は、学校のネット回線につなげた。

あれから、結構速攻で動画は見つかり、家で何とか授業のプランニングを終えると、俺は近くに置いてあったアミューズファイアを手を取った。これはここでの労働、それからナーヴギアの回収の対価として、国から支給されたものだ。俺はそれを頭につけると、「リンクスタートー」

いつも通り、その言葉を口にした。

降り立った場所は、SBCグロッケン。今俺は、ガンゲイルオンラインというゲームにログインしている。これは、簡単に言ってしまうと、銃のMMOだ。普通、MMOというファンタジーなものがほとんどだ。だが、このガンゲイルオンラインは、その名前にある通り、銃を使う。舞台は、宇宙まで巻き込んだ世界大戦の末に滅びた地球をイメージしているらしい。そのため、登場するのは実在する銃ばかり。最も、そうでない銃——光学銃と呼ばれるレーザーを撃つタイプのものなんかはその顕著な例だ——もたくさんあるが。

SAOの後、ALO事件と呼ばれるその一連の騒動は、かなり世間を揺るがせた。

まず、VRに関して。これは、須郷に対してだけでなく、これを利用してすべてのVRゲーマーにとって大スкупと呼んで差し支えないものだった。俺が見た通り、半ば精神崩壊まで言っている人間もいたのだから、ある種自明の理ともいえるが。とにかく、これでVRの火は完全に消えた。——かと思われた。

だが、ここで一つの変化が生じる。世界中の様々なサーバーに、あるフリープログラムがアップロードされたのである。その名前は、ザ・シード。種子の名を持つこれは、VR世界のひな型ともいえるものだった。そこから一気にまたVRは盛り返し、今となってはあまたのVRゲームが世界に産み落とされた。そして、ザ・シードの基礎規格が同一であることを利用し、コンバートのネットワークが成り立っている。その陰にはまた例によってあのまっくろくろすけがいるらしいのだが、ま、真相は本人に聞くしかない。聞く気はないが。

その火種となった須郷はいまだに裁判中である。いったんは釈放も考えられていたらしいが、懇意の医者と結託して精神鑑定を申請しようとしていたことが明るみになり取り消されたとか。ざまあ。

レクトはいったん倒れかけたものの、何とか持ち直した。が、それは相当数のリスト

ラやらなんやらを行った末だ。それを行ったレクトのCEO、結城彰三氏は敏腕と言わざるを得ない。それを間近で見ていたアスナに言わせると、本当に辛そうだったらしい。毎日毎日家で頭を抱えていた、という話は、虹架と永璃ちゃん経由で聞いた。まあ、あんなだけの不祥事が起これば当然か。

ちなみに、キリトこと桐ヶ谷和人を含めた一団は今、新しく生まれ変わったALOの中で大暴れしている。この辺は元SAOトッププレイヤーの面目躍如といったところだ。そうそう、俺を助ける時に一枚噛んだ、ドッグアンドキャッツの面々は、レインを通じて親しい付き合いになっている。俺のほうも、半分傭兵のようなプレイングをしているし。共同戦線を張ったこともあれば、逆に敵対したこともあれば。どちらにせよ、相手は俺レベルとはいかなくとも、そこそこのレベルのメンツがそれなりの数でいるため、ほとんど相打ち状態になる。お互い、こいつ（ら）とは戦いたくないと思っっている」というのは、結構親しくなったリーダーのフカことフカ次郎とのゲーム内での会話からだ。最も、会話の言い回しから、フカは道産子であることが判明したため、リアルでそうそう簡単に会うことはできない。

俺がこうしているのは、何か新しいゲームを始めたいと思っ、休日に足を運んだゲームショップでこれを見つけたからだ。ちょうどFPS系も始めてみたいと思っ、いたところだったからちようどよかった。

コンバートのシステムは、コンバート先のステータスは元のゲームのステータスに依存する。それに関しては、俺と永璃ちゃんがうまくいかなかった結果、俺のアカウントを二つ作ることに成功。俺はS A Oのステータスが大きく反映されたアカウントで、今G G Oにログインしている。これにはちゃんと理由があつて、コンバートするとアイテムの類は一回リセットされてしまうからだ。所有権がリセットされるといふことと同義のため、一度どこかに預ける必要がある。ギルドなどの共有外部ストレージや信頼できるフレンドがいる場合は問題ないが、自身が購入したホームなどに預けた場合どうなるかは実験してみないと分からないため、その危険回避という意味合いもある。はいそこボツチ乙とか言わない自覚あるから。

が、まあ金額は初期金額の時点でお察しというわけで。だがこれは全く問題がなかった。

G G Oにログインしてから、俺は習慣のようにあるところに通っていた。というのは、

「よっし、荒稼ぎするかね」

早い話が、カジノである。対人戦で飽きるほど心理戦や読むことに慣れてしまった俺にとつて、これはもう楽勝だった。つか、あの場所顔に出るやつ多すぎ。ま、最初は安

パイで手堅く稼いだんだが、ある程度手持ちが増えると思いい切った手を打つようにもなった。で、俺をカモと思つてやらかす馬鹿が続出。俺が読み勝ちを続け、やつらが懲りたところには、もう手元には十分すぎるほどの軍資金が集まっていた。ま、でもカジノは結構稼ぎがいいから、今でも入り浸つてんだけど。

カジノに入つた瞬間、俺に視線が集中する。ま、ここで俺はちよつとした有名人だからな。席に着けば、何人かが続いて席に座る。誰もいないところを狙つたのにもかかわらず、だ。

「今日こそ勝つてやるぜ、ギャンブルメイジ」

「勝てるものなら勝つてみるっばい」

それだけ言葉を交わすと、俺は規定通りに配られたカードを手にとって思考に入つた。

「さーて、今日も稼いだ稼いだ」

カジノから出てきた俺はホクホク顔だった。ま、いつも通りほぼ負けなしだったからである。これをいくらかリアルに送り、弾を補充。ゲーム内でのマイホームに転移して、準備を整えると、俺はフィールドへ繰り出した。

今回は、適当にモンスターを狩ることにした。そのため、装備もそれなりだ。俺は大口径の銃でも容易に扱いきれるが、今現時点ではそこまで大口径の武器はあまりない。噂だと、超絶レアドロップで対物ライフル、つまりは50口径、もしくはそれ以上の大口徑弾を使用する、超強力なライフルが手に入る、らしい。だがあくまで噂は噂。ドロップなんぞせんだろうと、俺も思っていた。そう、思っていた。

(まっさかほんとにドロップするたあねえ・・・)

しかも、FPSに関しては素人に近い俺に、だ。

最初はモンスター狩りで腕を磨こうと思っていた矢先、トラップに引つかかってダンジョンの奥深くに迷い込んだ俺は、明らかにボスとみられるデカブツに遭遇したわけだ。そこからは無我夢中。当時のメインアームはおろか、こういうゲームだからか耐久値が異常なほど高めに設定されていたナイフト、そこまでに倒したMobからのドロップ銃、それから自分で弱点と思いき部分をぶん殴るといいう、そういうゲームじゃねえからこれを地で行くプレイでなんとか倒した。そうしてドロップした銃が、今背中に担いでいるこいつだ。名を、「アキュラシーインターナショナル AS50」という。セミオートの対物狙撃銃だ。弾はNPCショップで調達できたから問題なし。試し撃ちはもう済んでいる。

サブアームとしてはレッグホルスターで収められるSMGサイズの銃ということで

MP7A1になった。似たような性能のP90はホルスターがないため、スリングで使うか、ホルスターを作ることになるからだ。スナイパーを主武装とする俺だとスリングが邪魔になる。ホルスターを作る手間も考え、MP7A1を採用することで落ち着いた。

「お、いいところだ」

と、遠方に敵影を見た。周囲に何もなかったことを確認すると、すかさず背中から得物を抜いて伏せ撃ちの姿勢を取る。

（距離は、1000ってところか。・・・やってやる）

はつきり言おう。いくらスナイパーといっても、一般的なスナイパーライフルの射程は精々800くらいが限度。1000は遠すぎる。だが、こいつは違う。

息をつめ、引き金を静かに引く。凶暴な咆哮とともに、500BMG弾が空を裂いて飛び、哀れ何もわからぬままその頭部に直撃したモンスターを一撃で爆発四散させた。

「うっし、ヘッドショット!」

リザルトを見つつかすかにガッツポーズ。そのまま、俺はもう一度背中に得物を背負った。ちなみに、スナイパーに關してはいちいちストレージにしまうのも面倒なので、背中に固定できるように特製の代物を用意している。狙撃銃はボルトアクションであることも珍しくないのだが、さつきも言ったようにこの銃はセミオートだ。連射がし

やすい点が最大の利点だ。その分整備もしつかりしなくてはいけない。このでかさの銃で排莖不全が起きたことに気付かず撃つたらなんて、考えるだけで恐ろしい。……つたく、わざわざジャムなんざ再現しなくていいっての。ま、その分連射できるからいいんだけどね。……と、そこで、俺の耳はかすかな音をとらえた。この音から察するに、後方、距離にして200くらいか。

(しつこいなあ……)

内心ため息をつきつつ、俺は自然な動作で右足の太ももあたりと左の腰を探る。そこに、現在のサブアームであるMP7A1とトーラス・レイジングブルが入っていることを確認して、俺は再び歩き出した。グロッケンへ引き返す道の途中にある市街地まで引つ張ったのち、曲がり角を曲がる。角を曲がってすぐのところ呼吸を押さえていると、俺の想像通りプレイヤーが来た。すかさず、すでに抜いてあったMP7A1を足に軽く連射。MP7A1はPDWだからこそ、最初期から俺を支えている一丁だ。奇襲をかけるつもりが奇襲をかけられ、その上機動力を奪われて泡を食っているところを、左腰からレイジングブルを引き抜いて、足で頭を固定したうえで眉間に一発。どうやらソ口のように、完全にこれで終わりのようだ。

「懲りないねえ……」

俺がさんざんカジノで荒稼ぎした金を狙ってきた奴は本当に後を絶たない。さすが

に至近距離からスナイパーをぶっばなす趣味はないから、弾をよけつつサブアームでさつくりと殺すことが多い。これはクロスレンジで瞬時の判断を求められるSAOで培ったものが大きいと言って差し支えない。特に俺はPvPを多く経験しているし。そもそも、分かる人ならわかると思うが、対物ライフルを普通に立って振り回してぶっ放そうもんなら肩が外れかねない。銃の重さが重さなので、銃自体が吹っ飛ぶというシユールな光景はないだろうが、確実に肩や腕はしばらく使い物にならない。というか、そもそも重さ10kg、長さ1mは当たり前のように超えるデカブツを立った状態で撃とうと考える人間もなかなかいないだろうが。ま、俺ならやれそうだけど。SAOで鍛えたSTRと技術なめんな。いくらスコープ覗かないとどこ行くかわからない代物でも両手持ちしてゼロ距離射撃なら問題ない。はいそこ、そういう銃じゃねえからって言わない。やらないし。

えっと、ドロツプはつと、・・・これまたレアなものを。なんだってトンプソン・アンコールなんざ持つてんだこいつ。まあ欲しい銃だったからいいんだけど。

トンプソン・アンコールは、トンプソン・コンテンダーの後期型だったか、再販売だったかのモデルだ。中折れ式の単発銃で、装填して射撃したら、空の薬莖を手で一回抜いてもう一度装填する必要がある銃だ。だがこいつ、拳銃くらいのサイズでありながら、カスタム次第でライフル弾も普通に撃つことができる。もちろん銃身を変更する必要

はあるもの、世の中には60口径を撃てるようにした馬鹿もいる。まあ、さすがにそこまですうとは俺も思わないが。そこまでは。

というのだ。わかる人にはわかると思うが、今、俺が主力で使っている銃は全部銃弾が違う。せめてどれか一つ、というか二つでも弾頭を共通化したかったのだが、BMG弾を扱う拳銃などあるはずもなく、MP7は使用弾薬が特殊なせいで使用する拳銃がなかった。P90にはFive—sevenがあるのに、なんでMP7で似たようなのがないんだよと思つて調べてみると、どうやら弾が特殊なせいで拳銃サイズだとうまくいかなかった。で、結果的に台数もほとんどない超マイナー銃になってしまった、ということらしい。もちろんそんな銃がGGOに採用されるはずもなく、結果的に違う弾薬の銃を何種類も持ち歩くという、あまり効率的ではないことになってしまった。∴∴45ACPつていう拳銃弾を使うことでマガジンまで一緒になつて、しかもホルスターもある、なんてモン知つたのはこれよりさらに先の話だったりする。

時間を見てみると、つて、もう2時間以上もたつてんのか。こつちに潜つてると時間がたつのが速くて困る。と、俺はさっさとホームへとやや急ぎ足で帰つた。

これが、俺の新たな日常の一コマだった。

5.2. 銃の世界

さて、慣れない仕事に若干苦戦しながら暮らしているときに、俺はB O Bに参加するために酒場にいた。

B O Bとは、個人参加型のバトルロワイアルだ。なかなか豪華な大会で、第一回は確かな持ち込みなしでキルしては奪って無双するなんていう無茶苦茶なUSプレイヤーが優勝だったはずだ。それ以外は結構いい勝負で盛り上がったらしい。日程を見てみると、そこはフリーの日だったから、とりあえずエントリーしてみるか、と、参加してみることにしたのだ。予選に関しては、MP7A1とAS50、なにより牽制用に数本持っていたダーツが大活躍だった。何故ナイフじゃないのかは、単純に安定性と距離の問題だ。どちらにせよ、その手の武器は異常なまでの高威力設定なので問題は無い。

周りでおっぴろげにメインアームと思しきものを手入れしていたりコツキングしていたりするやつもいるが、俺からしたら、

(馬鹿かこいつら。わざわざ自分の手札見せてどうするんだ)

銃は重たい。わざわざメインアーム二挺持ちなんてことをする奴はいない。俺だって、街を歩くときにAS50を背中に持つなんて言う馬鹿はしない。そんなことをして

いたら、「私はスナイパーです」と言っているのと同義だからだ。対人戦というのは、どれだけ手札を隠したまま切れるかにすべてがかかる。実際、俺はレイジングブルとアレをまだ抜いていない。わざわざ最初からフルオープンなんていう技は、よっぽどそれに自信のあるやつか、大馬鹿者かどちらかだ。

一分前になり、控室へ転送される。そこで俺は、服の下にあつたアレ以外を素早く装備する。レッグホルスターにMP7A1が入り、腰のホルスターにレイジングブルが、背中にはAS50が装備された。レイジングブルはリボルバーだし、もう一つも射出可能な状態になっている。新たに装備された二つもすぐに撃てるようにして、俺は開始を待った。

スタート地点に転送されて——すぐに俺は舌打ちをしながら走り出した。俺が転送されたのは、ところどころに岩がある程度の荒野だ。碌な遮蔽物は見えない。走りながら予備のスコップだけを取り出してざっと周りを見渡す。ぱっと見たところプレイヤーはいない。後ろにもだ。パツと見えた近くの身を隠せそうな岩に隠れ、死角じやないところに敵がないのを改めて確認してから、俺はサテライトスキャン端末を取り出した。現在地だけは表示される設定なので、さっと現在地を確認し、——心配したことを馬鹿らしく思った。

GGOの世界観設定は、宇宙戦争の末に荒廃した地球だ。太陽などの環境設定は基本

的に現代のそれがベースになっている。今回は夜明けくらいが世界観設定のため、太陽は東側にある。その太陽は今、俺の右手にあるから、俺は北を向いて座っていることになる。そして、俺がいるのは北東の端に近い部分で、マップ全域の幅を鑑みると、端まで1kmない場所。Bobにおいて、プレイヤーの初期位置は1km以上離れているため、少なくとも北と東に敵はいないとみていい。今の季節から太陽の位置を逆算し、南西方向に体を向ける。そのまま反転して、AS50のバイポッドを立て、狙撃体勢になった。こいつのキルレンジを考えると、運が良ければ・・・いた。

距離は目算2000。少し苦しいか。でも、相手からこっちは見えていないはずだ。なにせ2000も距離が離れているのだ。スキルか道具を使ってようやくよく見える程度の距離だ。なら遠慮なく、しっかりとシステムアシストを使っていける。バレットサークルをしっかりと合わせ、指をゆっくりと引き金にかけ、息を吐ききって止める。轟音とともに放たれた一撃は、正確に頭部へ吸い込まれ、その頭蓋を破裂させた。文句なしのキルである。素早くAS50をしまつて、予備のスコープを取り出して索敵する。とりあえず、こいつのキルレンジに敵はいなさそうだ。一旦はここで15分まで待つて、サテライトスキャンを見て行動することにした。

遠方から聞こえる銃声と、回り込んでくるやつ警戒をしながら、俺はただ時間が過ぎるのを待った。こいつの銃声は大きいなんてもんじゃないから、寄ってくるやつの一

人や二人はいそうなものだが、最初はやはりというかスキャンで位置やマップを確認してからということらしい。定石通り過ぎてつまらないと言われればそうだが、まあ当然だろう。行き当たりばったりは基本的にうまくいかない。手元の時計を見て残り14分であることを確認し、俺はスキャン端末を手に取った。サテライトスキャンはマップ右下、南東方向から始まり、直線的な軌道で北西へ、対角線を描くように抜けていく。俺が今いる北東の端にはもう敵はいないようだ。最寄りの敵は大体南西方向、距離的には、目算で3000mくらいか。このくらいなら、ゆつくりと見つからないように細心の注意を払って移動すれば、十二分にキルレンジに入る。そう思い、俺は周りの色に同化する上着を羽織ってゆつくりと移動しだした。

さて、ゆつくりとある程度周囲を警戒しつつ移動してみたはいいものの。

(さすがにもう少しエンカウントがないとつまらん)

あれから結局、俺はマップの北の端をゆつくりと走って移動しているわけなのだが、一切敵に出くわさない。10km四方のフィールド、そうそうポンポン出くわす広さじゃないことは分かっているが、つまらん。と、時間を確認して、ちょうどサテライトスキャンの時間であることを確認し、俺は端末を見た。最寄りの敵はあまり座標を移動していない。俺が移動したことにより、俺から見て南南西方向になっている。距離はそんなに縮まってはおらず、目算で2500以上。ここまで遠いと、さすがのAS50

でもキルレンジ外だ。

その周囲に灰色と白の点がいくつかあるところを見ると、その敵が周囲の敵を一掃しているのだろう。AS50は一旦ストレージにしまい込み、スキヤンの表示が消えたことを確認してから、MP7を構えた状態で南西方向への移動を開始した。

移動を始めてからしばらくして、スコープにぎりぎり影が見えた。方向としては東に近い方角。小高い丘のようになった岩の上にプレイヤーがいた。ぽつぽつと転がる岩の陰にいくつか、プレイヤーの影。その岩のプレイヤーは、銃を完全に固定させた大型銃を構えていた。すこし戦闘を見守って出された結論から言うと、

（芋かい。待ちかまえてマシンガンばらまくって、ただのアホか）

“芋”というのは、一点にとどまり続けるプレイスタイルの事。全く動かず、待ち伏せするスナイパーは、スナイパーを示すスラングである“砂”と組み合わせられ、“芋砂”なんて呼ばれたりする。

確かにマシンガンは強力な銃弾を恐ろしい発射レートでばらまく反面、異常なまでに重い。そういう点では、見晴らしのいい場所でひたすらばらまく待ち伏せ戦法は確かに合理的な戦略の一つだ。が、おそらく“攻め手”であるアサルターも分かっているだろうが、

（発射レートが高いということは弾薬の消耗も激しいということ。そして、銃も弾も重

マシンガンは、持ち込める弾数には限りがある。追い込まれているのはあのマシンガンナーの方だ)

これはいわば我慢比べだ。アサルターが少し頭を出したところを仕留め切れればマシンガンナーの勝ち。弾切れを起こすまで粘り切れればアサルターの勝ち。射撃制度の悪さを弾幕で補うマシンガンがいかに早く決められるかが勝負になるだろうが、俺からしたらそんなのは関係ない。何せ、あのマシンガンナーが陣取っているのは、見通しがいい場所なのだから。

ゆつくりと悟られないように背後に回る。この間に、AS50を取り出して背負う。お互い闘っている最中なのだからスキヤンは見ない、つまりこっちの位置はばれないはず。その間に、俺はスキヤンを見た。すると、ここの周囲に残っているプレイヤーは二人だけ。つまり、この二人をぶつ倒せばとりあえずは安全なわけだ。念のためにMP7 A1はしまわず、左手に上着の裏に仕込んであった麻痺毒付き投げナイフを取った。背後を取ってから、俺は静かに忍び寄り、撃ち合いに集中しているマシンガンナーの首にナイフを投げた。その直後、AS50を伏射体勢で構え、顔だけ出したアサルターが隠れている岩ごとアサルターを吹っ飛ばした。デッドアイコンが出たのを確認して、改めてマシンガンナーのお相手。ナイフを抜いてひっくり返し、そのまま今度は普通のナイフで目を一突き。俺の想像通り即死判定が出たのを見て、俺は一つ息をつくだけで走り

出した。これだけの状態なら、即座に敵が寄ってくるだろう。それまでにどれだけ移動できるかが肝だ。

そのあとは特に何事もなく走った。確か、ここから南に走れば都市部跡に入ったはず。スナイパーにとつてはなかなかきつい案件だが、俺からしたら大した問題ではない。AS50は既にストレージに入っていて、今のメインウエポンはMP7だ。この死角が多い状態でスナイパーを担ぐ馬鹿はいない。とりあえず、目下俺の目標は移動手段だ。AGI—STR型の俺にとって、移動速度は精々並み程度。これでは背後を取られる恐れがある。この廃都市に高い建物がない以上、俺の戦闘スタイルとこの相性は決していいものではない。が、それは一般的に言えば、という話で。加えてここは、都市跡と表現はしているが、周りはまだまだ未開の荒野な印象がある。つまり、ちよつとした狙撃スペースくらいならいくらでもあるのだ。それを利用し、隠れながら少しづつ位置の微調整をかけること、はや20分。ようやく獲物がやってきた。最低限の顔出しで見えたのは、ちよび髭とカウボーイハットにアサルトライフルを担いだ姿。こちらに向かつてきていたのはギャレットとダインというプレイヤーだったはずだから、どちらかとみるのが妥当か。——まあ、どっちでもいい。今俺は建物の影に隠れており、相手はアサルト。距離は目測で700から800といったところか。アサルトでは遠い

が、あいつならむしろ近いくらいだ。素早くAS50を窓枠に引っ掛け、即座に狙いをつけてぶっ放す。仮に距離800とすれば、音速の3倍、つまり秒速1000メートルで飛ぶ物体のかかる時間は0.8秒程度だ。反射的に躲そうとしたようだが、弾丸のまき散らす衝撃波までは躲せなかったらしい。俺の狙い通り足をぶった切られ這いつくばったアサルターを、さらに追撃でもう一発。今度こそアバターが完全に粉碎され、もう一度ポリゴンで固まってからデッドアイコンが出た。なるほどアバターが粉碎されるとこうなるのか。と思いつつ、弾詰まりを防ぐために手で次の弾を込める。弾丸に關しては、このゲームはマガジンに所定の操作をすればマガジンに直接入る。また、ストレージに入れる時にストレージ内のマガジンに入れるような操作をすれば、自動的にマガジンに入る仕組みになっている。俺も替えのマガジンはストレージに放り込んであるので、弾丸は直接ストレージ内のマガジンに補充される。そもそもそのストレージはSTRが多いほど増えるが、俺ほど装備が多いとそんなに弾丸を持てるわけではない。ま、そこは弾丸の強力で補うスタイルだ。さて、さっきのスキヤンの結果を信じるのならもう一人はいるはずなのだが、さてどうか。AS50のバイポッド付近を左手で、右手は引き金のあたりを持ち、なおかつ右手が腰のあたりに来るように構える。とりあえず、ここからは早く移動する必要がある。

それからまた少しして、俺はうまく高所を取ることに成功した。入り口にはいくつか

ブービートラップを仕掛けておいたが、ぶっっちゃけ気休めだ。こういう場所にトラップが仕掛けていない場合、大体敵はいない場合のほうが多い。ここはいくら建物が少ないと言っても、少しはあるのだ。トラップをデコイとして隠れるのも一つの手だ。だが、相手はいない。そろそろ60分のスキャンであることを確認して、スキャン端末を見る。と、比較的近くに二つの敵影があり、それ以外は灰色。つまり、残りは俺も含め三人だけだ。残りの二人の名前はそれぞれ闇風、それからX e X e D。闇風はともかく、アルファベットのほうはなんて読むんだこれ。赤眼が確か、X a X aでザザって呼んだはずだから、これは・・・ゼゼードとか？

問題は、先ほどの距離を考えると、闇風の移動範囲が明らかにAGI型のそれであることだ。仮称ゼゼードさんのAGIは俺と同じか、少し落ちるか、つてとこか。問題は闇風。移動距離から考え、全力を出していない可能性も考慮すると、アスナのステバラのまま、レベルだけレインくらい上げたような状態か。闇風のほうは見えなくても武器は大体見当がつく。大方ナイファーかサブマシンガンの類だろう。超近距離戦闘になる前に片を付ける必要がある。ゼゼードは・・・見たことないな、あんなの。大きさから言つてアサルトライフルっぽいが、上の四角くデカいのは、グレラン、か？こっちは中距離型か。近距離は最悪、俺はアレがあるから大丈夫か。

おそらくAGI極である闇風を狙い撃つのは至難の業。ならば、ゼゼードから狙う。

が、闇風に途中で邪魔されるのも癪だ。相手も動いているので、その動きを読み、俺は偏差射撃で撃つ。若干狙いは甘い、この武器なら直撃じゃなくともダメージが入る仕様だ。目の前に落ちた弾丸に、闇風はとっさに近くの物陰に隠れた。次はゼゼード。こちらにも偏差射撃で狙う。だが、相手は俺に気付いた様子もないのに回避してのけた。即座にもう一度狙いをつけ、今度はしっかりと狙い撃つ。が、これは躲される。バレットラインは射程距離を忠実に守って表示されるから、他の武器でライン牽制するのは不可能。なら、

(一か八か・・・！)

もう一発。今度もしっかりと基本に忠実に。息を吐き切つて止める。先ほどの弾道は目に焼き付いている。指は撃つ寸前まで引き金に触れず、狙い撃つ。が、これは外れる。というか、むしろ当たったら俺が驚いていた。そして、撃たれた側はおそらくもつと驚いている。予想通り、これならばバレットラインはギリギリまで出ないらしい。その分正確に狙い撃つ技量が必須だが、その技量は先ほどの二発から風などを推測することとで補った。

相手は驚いている様子だが、やはりそこまでHPが減っている様子はない。考えられるのは、何かしらの防具をつけている場合。現実で衝撃波に防具が役に立つのか、というのは疑問が残るが、これはあくまでゲームなので、その効果は十二分だ。もちろん、こ

れは掠る程度であることも影響している。そこそこVITにも振っているのか。アサルトライフルを持てることから、STR、VIT、AGIあたりにバランスよく振ったタイプか。もう一発、今度は隠れているあたりにもう一発叩き込む。が、デッドアイコンがともった感じはない。軽く舌打ちをしながら、マガジンを交換する。と、トラップが発動した。残りは三人で、ゼードは建物の影に隠れている。ということは、かかったのは闇風か。古いマガジンをそのままに、俺はAS50をストレージにしまった。そのまま、アンカー付きのロープを取り出し、固定を確認してから、俺はロープを伝って下に降りた。音からして、発動したトラップはそれなりに下の方のはず。リズミカルに壁をけ飛ばしながら下に降りる。闇風のAGIからして、一瞬で上がってくるはず。建物の中から聞こえるトラップの爆発音から、上手くすれ違いになっていることを確認して、俺は下がって行った。

降りきったところで、俺はロープをストレージにしまう。はてさて闇風は今どこまで行ったのか。AGI極ではHPなんてたかが知れている。飛び降りるなんて真似をしたら自殺間違いなしだ。幸いなことに、闇風はおそらくかなりの数のトラップを起動させている。なにより、自分で自分のトラップに引っかかる間抜けはいない。ゆつくりとMP7A1でクリアリングをしていく。AGI極相手にこのレンジの戦闘は避けたかったが仕方ない。何より、オープンフィールドでのスピードを生かした戦闘で真価を

發揮するAGI極である闇風も、屋内という閉所空間での戦闘は避けたかったはずだ。地の利は五分五分。

やがて、俺が隠れていた部屋のあたりにたどり着いた。闇風もこの辺りを中心に調べているのだろう。微かな音が聞こえてくる。呼吸すらギリギリまで抑えて、お互い探し合う。と、ある部屋に入る影を見つけた。どうやら、ツキはこちらにあつたらしい。相手を追って部屋に向かい、入ろうとした瞬間に——闇風とかち合った。相手の顔には露骨な驚き、そしてこちらにはいら立ち。舌打ちをしながら、MP7をばらまく。ある程度の遮蔽物をうまく使いながら、壁を蹴つての三次元行動を行いながら、ひたすらアクロバティックな戦闘で撃ち合う。あつという間にマガジンを一つずつ使い切り、俺は内心で顔をしかめる。

相手の得物は、おそらくキャリコM900系統の銃。これは特殊なマガジンを使用しており、最大装填数は確か50発。対して、こちらのMP7A1の装弾数は40発。相手は9mmパラベラム弾を使用するはずなので、こつちのほうが一発ごとの威力は高い。が、こんな場所ならばらまける相手のほうが有利だ。あまり切りたくない札ではあつたが、仕方ないか……！

MP7を持ち替えながら、上着の内ポケットから円筒の缶を取り出す。軽くバックステップをしながら、缶についたピンを歯で引き抜き、足元に転がしながら片目をつむむ。

瞬間、閃光と爆音があたりを包む。フラッシュバンではなくスモークと思ったのか、闇風は幻惑される視界の中、ランダムな回避行動を行う。対して俺は、閉じていた片目を開きながら、上着の中にあるショルダーホルスターからある拳銃を取り出す。一発勝負でぶっ放すが、かすめるだけで終わる。闇風のHPは間違いなく減ったはずなのだが、食らいつくすには至らなかった。軽く舌打ちをしながら、お互いは回復した視界で互いの得物を撃ち切る。結果として、俺のHPはなくなり、闇風のHPは残った。

これは後から聞いた話だが、この時、闇風のHPも数ドットしか残っていなかったらしい。闇風も、「あ、これ俺負けたわって思った」とのこと。勝敗を決したのは、俺が危惧していた通り、お互いの装弾数の差だったのだろう。

ま、とにかく。そこで俺は奮戦むなしく負けたわけだ。まあ、それはいいとして、ひとこと言わせてほしい。

——なあ優勝者のゼードさん改めゼクシードさんよお。レアもの、地の利、加えて俺との戦闘で消耗した闇風をただボコって終わりなのを威張るって、それってどうなのよ……？

さて、それから数日後。俺はMMOストーリームの中の「今週の勝ち組さん」という番組に出ていた。理由は、第二回BOB上位三名。

「そういえば、ロータスさんは普段の資金源がカジノということでも有名ですが」

「なんていうか、もともとそういう心理戦とかちよくちよくやってたから、そういう表情を読んだりするのが人より優れてるっぼい」

「へえ、そうなんですか!」

「一部プレイヤーでは有名ですよ。下手に仕掛けたら、文字通り身ぐるみはがされる、と」

「こつちとしても稼ぐためにカジノ行ってるわけで、相手が絶えないってことはいいことっぼい」

「そうですねー。どんなゲームも相手あつての物ですからねー」

「そうそう、お姉さんは分かつてるっぼい!」

リアルでは絶対使わない口調で元気に言い切る。俺からしたらこんな口調は甚だ不本意なのだが、まあ仕方がない。こういうのも一種の楽しみとして割り切ることにする。

「ロータスさんは、今回参戦者の中でも多様な武器を扱ってましたね」

「そうっぼい?」

「そうですよー。AS50、MP7、投げナイフ、ダーツ、それから、最後の銃は、トンブソン・コンテNDERに見えた、という情報が有力ですね」

「私も、最後の戦いではそれで攻めきれなかったのですよ。バリスティックナイフでも飛んで来やしないかと・・・」

「バリスティックナイフは好きじゃないっぽい。あれ、狙いづらいっぽい」

「へえー、それは意外——」

「それに、自分で狙ったほうが早いし」

「・・・Oh・・・」

完全に司会者の女の子が黙り込む。あっちゃーやっちゃった。でもまあ、事実だしなあ。・・・あ、

「そういえば、装備と言えば。ラックに任せた激レア武器と地の利を生かして、手負いの相手を穴ぼこにした人もいたっぽい」

「いやいや、それは——」

「そもそも、記憶が正しければ、あなたは前、AGI極最強説唱えてたっぽい。当の本人はAGI—STRとか、それもはや詐欺っぽい」

「それは心外ですよ。私だって、XM29がドロップしなかったら、AGI極にしてたでしょう。ぎりぎり、あの武器のSTR条件を満たすまでSTRを上げたんです」

「——ふーん。そういうことにおくっぽい」

俺としては、ここは追及したかったところだ。AGI極最強説、というのはあながち

間違っではないことは事実だ。実際、第二位の閨風はAGI極だし。ま、それには絶対条件としてクリアしなきゃいけないものがあるんだが、それはそれ。

「では、それぞれ、なぜここまでの上がれたのか、その要因を聞いてみることにいたしましよう。まずロータスさんから」

「私は、何よりコンバートしたステータスのところにAS50がドロップしたのが幸運だったっぽい」

「ついでに言うと、その容姿も幸運でしたね」

「・・・まあ、そう、っぽい」

「・・・うん、まあ、ランダム生成でこのアバターはまあ、幸運だったな。——個人的に好きかどうかは別として。」

「その代り、あのダンジョンは辛かったっぽい・・・」

「どんな感じでドロップしたんですか？」

「当時はMP7がメインアームだったから、とにかくMP7を弾切れになるまでばらまいたっぽい。それでも削れなかったから、ナイフやら道中でドロップした銃やらで削ったんだけど、それでも届かなかったっぽい」

「え、じゃあどうしたんですか？」

「殴ったっぽい」

「……は？」

「……殴った、って、素手で、ですか？」

「それしか手段なかったから仕方ないっばい」

「……えつと、なんていうか……」

俺の回答に三人が固まる。ま、こうなりますよねー。ですよねー。でもさー、本当のことだから仕方ないんだ。完全に言葉を失った司会に、俺はさらに振った。

「闇風さんは、この好成績はどこに幸運があつたっばい？」

「そうですねえ……なにより、あの閉所空間であなたに殺されなかったことでしょうか」
「あの空間じゃ、A G I極の素早さを十全に生かすことはできませんからね。あの戦いは見ごたえがありました」

「ありがとうございます。といっても、あれは、あのタイミングで見つかつてよかったと思いますかね」

「と、言いますと？」

「あなたがおっしゃったように、僕のようなA G I極にとって、閉所空間のような完全に逃げ場のないフィールドは泣き所なんです。ロータスさんの装備、特にあのコンテナーの弾丸は、相当強力なものを装填していたんでしょね。若干掠っただけでもかなり持っていけましたから。僕への最初の狙撃は牽制だったからあの程度でしたけど、

あの後の後ろの取り方は完璧でした。背後からズドン、とやられていたら、こちらとしては防ぎようがない。最も、最後の掃射は、本当に死んだと思いましたがね」

「結果的に、闇風さんは首の皮一枚繋がって、それまで使っていなかった応急処置キットを二つとも使い切って回復。ロータスさんはここで脱落となったわけですね？」

「そもそも、コンテNDER最大の長所は強力な弾丸を込められることっばい。なら、それを生かさない手はないっばい」

「確かにそうですねー。」

「そういえば、お三方はどうしてこのステータスバランスに？」

「さっきもちらつと言ったけど、私はそもそもコンバート組だから選択肢なんてなかったっばい」

「私は、彼のAGI極が強い、という言葉信じ、やってみようか、と思ったので、ですね」

「僕もAGIを中心に上げていたんですが、今のメインアームがドロップしてSTRを上げましたね」

「で、自分がでっちあげたAGI極最強説を覆すことにした、ってことでいいっばい？」

「そんな、悪意あつてこんなことをしたわけではありませんよ。ただ、今後はロータスさんのASSOのように、高いSTR値を要求する強力な武器の実装も大いに考えられま

すから、STRとVITをメインに上げていくバランス型が猛威を振るうことになるでしょうね！」

「そもそも、レア武器レア防具が落ちなきや意味ないっぽい」

「なら、最後はリアルラックが重要になるかもしれないですね」

と、ここまで会話したときに、俺は違和感を覚えた。ゼクシードが突然、胸を握りしめて苦しみだしたのだ。それはまるで、心臓を一突きされたように。そのまま、彼はデイスコネクト、いわゆる切断された。

「あれま、落ちちやいましたね。ですが、番組はまだまだ続きます。チャンネルはそのまままで！」

司会者の女の子は何食わぬ顔でそのまま司会を続ける。俺と闇風もそのままトークを続けた。が、俺の胸の内は、何とも言えない感情が渦巻いていた。

53. 依頼

さて、いろいろと忙しい日々を送っていると、仕事の合間を縫う形で菊岡が会いに来た。俺としても、こいつにはそれなり以上に恩義があるのでむげにはできない。

「いやあ、忙しいとこ悪いね」

「悪いと思ってるのなら帰ってくれ」

むげにはできない。が、信用はしていない。なんというか、こいつは、——うん、胡散臭い。俺のあまりに礼を欠いた態度に対してどう思ってるのかわからない程度には胡散臭い。

「それに関しては申し訳ない。さて、早速本題なんだが。——事前に送った資料には、目を通してくれたかい？」

「ああ。変な落ち方したなー、つてのは覚えてたからな」

菊岡が言った「資料」というのは、近々会いに行くから目を通してくれ、というメールに添付されたものだ。そこには、茂村保というプレイヤーが、俺がMMOストリームに出演していた時間とほぼ同時刻に死亡していた、というようなことが書かれていた。それと、もう一つ。似たような事例があった、と言うことも。こちらは、薄塩たらこ、つ

てプレイヤーだったはずだ。

「つまりはこういいたいんだらう？」

—— 実際問題、アミユスフィアで殺人は可能なのか、と」

「さすが、察しがよくて助かるよ」

「よく言うよ」

あれを見れば、どんな馬鹿でも一目で分かる。SAOという先例がある中で、VR殺人なんてものが世の中に広がっては面倒くさい。

「スキヤンダルや、こういう無駄に世論を騒がせる面倒くさい事件ってのは、日和見主義の権化たる日本の政治家が一番嫌う。違うか、エリート官僚様？」

「違わないね。いやあ手厳しい」

俺の言葉に、菊岡はくつくつと笑った。俺がこいつを嫌うのはこういう、妙に煙に巻こうとするところだ。何かにつけて「記憶にない」で逃げる日本の政治家らしいといえはそうなのだが、そういうのをうまく隠そうとするのが気に入らない。

「で？ その犯人はなんて言うんだ？」

「—— デスガン 死銃。死の銃。そう名乗っているよ」

「死銃、ねえ」

ストレートなネーミングだな。ま、分かりやすくして結構だ。

「じゃ、その死銃さんが使った可能性のあるトリックをひとつずつ潰していこうか。

まず、アミユスフィアのスペック上、脳みそ^{S A O}と^{同じ手}レンチンは使えない。致命的に出力が足りないし、仮にやろうと思っただら今度はアミユスフィアに何らかの異常が出るはずだ。回路が焼き切れるとか、そんな感じのやつ」

「そんな跡は残ってないね」

「その時点でこの手はありえない。じゃあ、死銃はどうやってゼクシードとたらこを殺したのか。真っ先に思い浮かぶのは暗示の類。でも、こいつはありえないと言って良い。ゼクシードに不審な点はなかったからな。これは闇風もそうだった」

「闇風、というの、えつと・・・」

「ゼクシードが殺されたときに出てた番組に、俺と一緒に出てたプレイヤー。第二回 B O B の準優勝者」

「ああ、なるほど」

俺の説明で、菊岡は理解したらしい。全く、こういうところの理解は早くて助かる。

「俺が暗示の類を無いと思っっているのは、それだけじゃない」

「と、いうと?」

「暗示の類——具体的に言っちゃえば、催眠、洗脳、マインドコントロール、つていうようなものつてのは、仕込みに時間がかかるものなんだ。現実世界においても、で、

「ここで肝になってくるのは、現実世界で時間がかかるってこと。まずこれが大前提。ここまでOK?」

「ああ、なんとなくわかる」

「なんとなくで結構。で、現実世界と仮想世界の一番の違いは情報密度の違いだ。もうちよつと言うと、現実世界のほうが、格段に情報密度が高い。匂い、音、触覚、味覚、視覚。どれをとつてもだ」

「情報密度・・・?」

「一言で言っちゃまうと『リアリティ』。仮想世界っていうのは、あくまで仮想的に作り上げたものに過ぎない。だから、どれをとつても、こういうちやなんだが、パチモンだ。

——話を戻すぞ。

で、暗示とかで必要になってくるのが、この情報密度だ。要は、相手に対してより正確にフィードバックを伝えることで、暗示を確たるものにするわけだ。ここがあやふやだと、かかるものもかからない。で、相手を死に至らしめるほどの暗示つてのは、過去に証明が為されている」

「そんなものあるのかい?」

「古き大戦の研究の中に、な。確か、水が垂れる、ピチヨンって音を聞かせ続けて、これはあなたの血が落ちる音です、って思いこませた場合だ。被験者は、失血死から程遠い

出血量で、死に至った。で、ここで大前提として話した話に立ち戻る。要するに、この手の仕込みで殺せるとしても、仕込みにやたら時間がかかるし、そもそもリアリティに劣る仮想世界だと不可能に近い、っていうこと。ここで大きな矛盾が発生するわけだな。とまあ、パツと思いつくのはこれくらいだが、そもそもだ。

——このくらい、検討してきてるんだろ？」

「だからこそ、こうして君に聞いているんだ。こういう異常者の類を間近で見てきただろう君に、ね」

「なるほどね。今回の俺の役目はプロファイラーか」

全く、人使いの荒いことで。でもまあ、人殺しの心理が分かるのはそういうのを見てきた人間、というロジックは理解ができる。

「ま、俺の結論は、この資料を見て考えた時から変わらないがな」

「え？」

「結論はいたってシンプル。——こいつは、ただの殺人だろう」

「なんだって・・・!？」

「信じられないのなら何度だって言ってやる。これはただの殺人事件だ。」

たらこの時はどうか知らないけど、ゼクシードの時はMMOストリームに出てたわけだ。示し合わせは十二分にできたはずだしな」

「ちよつと待つて、複数犯だともいふのかい?」

「どうかそもそも、仮想世界で殺せない、つて分かつた時点で、なんで犯人が一人だと決めつける? 共犯がいると見てしかるべきだ。死銃Aが仮想世界でアバターを操作、合図とともに、死銃Bが現実世界の茂村を殺る。そんなとこだろ。トリックとしては三流だな」

そういつて、一応は来客なのでもてなすために置いてあつたコーヒーをすする。そんな俺を、菊岡は不思議な目で見ていた。

「……にわかには信じられない。殺人に手を貸すなんて」

「一般的にはそうだろうよ。でも、この手の奴らはおよそ一般的じゃない。そういう相手には、一回常識つて杵を取っ払つて考えたほうがいいぜ」

自身を落ち着けるためか、菊岡は少しだけゆっくりとコーヒーを飲んだ。カップを置きながら一つ息をつき、菊岡はゆっくりと俺に問いかけた。

「君が考える、次の犯行は?」

「ゼクシードの時といい、こいつは目立つ行為を意図的にしている。ということとは、何らかで人目を引きたがるパターンだ。であれば、次のターゲットはおそらくこれだろう」

そういつて、俺はメール画面を見せる。そこには英文のメールがあつた。翻訳されていないが、こいつには朝飯前だろう。

「えっと、第三回バレットオブバレッツ開催のお知らせ・・・?」

「そ。前回ゼクシードが優勝したアレだ。俺も参加する予定だったが、今の話を聞いて気が変わった。今回は見送って、お前に協力してやる」

「いいのかい?」

「もともと腕試し的に出場してるだけだしな。それに、この手のケースなら、多分、犯人の割り出しは容易だ」

「本当かい!?!」

「ああ。B O B っつてのは、景品送付のために、リアルの情報を入力するからな。犯人がB O B に出るっていうのなら、その中から絞り込んでケリだ。それに、何も自称死銃としかわからんわけじゃないんだろう?」

「あ、ああ。見た目だけ、だけど」

「十二分」

見た目というのは重要だ。同じ人間でも、全く違う服装をしているだけで別人に見える。これは俺の体験談だ。

「目立つことが目的ならば、変装してくる可能性は低い。それにB O B は中継されるから、容姿からプレイヤーネームと一致させることはたやすい」

「分かった。こちららも協力者を使って調べてみよう」

「ああ、頼んだ」

今回の話はそれだけで終了した。だが、俺はこのような手口に、どこか妙な既視感を覚えてならなかった。

それから数日後。いつも通り仕事を進めていると、相談を受けた。

「天川先生、少し相談したいことがあるんですけど」

「ん、桐ヶ谷か。どうした？」

「いや、ここだとちよつと・・・」

「分かった。ちよつと待つてな」

キリトこと桐ヶ谷和人は俺のクラスじゃない。が、もともと面識があるので、たまにこうして俺に相談を受けに来ていた。それ自体は珍しいことではないのだが、俺としても今のタイミングは少し嫌な予感がした。

調べてみると、今は面談室が空いていた。さっさと使用申請を済ませ、俺は仕事のタブレットと筆記用具をもって立った。

「面談室の使用を申請した。場所変えるぞ」

「了解です」

俺の言葉に、桐ヶ谷は後ろからついてきた。

面談室に入ってから、俺はさっそく聞き出した。

「さて、何が聞きたい？」

「GGOについてだ。とりあえず、ロータス君に聞けばいいよ、って、菊岡が言ってたから」

「・・・あんのドぐされ役人め・・・」

思わずつぶやいた俺の恨み節に、桐ヶ谷は苦笑を漏らす。

「違っちゃいないがな。仮にも俺はBOB前回大会三位入賞者だ。軽いレクチャーくらいはしてやれる」

「助かる」

「いいって。その代り、今度ALOで一回分依頼代上乗せってことで」

「・・・強^{したた}かだなお前」

「強かだがめつくなきや傭兵なんてやってらんねーのよ。」

時間がないからキリトアバターをコンバートする必要があるな」

「あー、やつぱりか・・・」

「アバターコンバートに伴うアイテムロスト防止対策は省略するぞ。そんなの分かり切ってるだろうからな。」

ステバラはSAOの時と変わってなかったよな?」

「ああ。STR—AGI型だ」

「となると、適性は砂なんだが、コンバートしたてだと資金が調達できないな・・・」

「高いのか、その、砂? って」

「砂つてのはスナイパーを示すスラングだ。スナイパーライフルつてやつは大型銃に分類されるから高価なんだよ。ついでに言えば、砂を担ぐのならサブアームもほしいから、かなりの額が必要になる。・・・あ」

「どうしたんだ?」

「裏技があるの忘れてた。そっか、あれならキリトでも十分にクリアが見込めるな・・・」

「なんだよ、教えてくれ」

「GGOの最初はグロツケンって街なんだがな、そこが一番大きなマーケットにミニゲームがあるんだ。名前はアルファベットでアンタツチャブル」

アンタツチャブル
「お触り禁止?」

「そぞ。端的に言つちまえば、弾避けゲーム。お前でも、少なくともいいところまでは行けるだろうよ」

「それで稼げるのか?」

「ああ、まあな」

「攻略法は？」

「誰かが挑むのを待って、ちゃんと見てやればすぐにわかる。俺が攻略してから、挑戦者が増えてるらしいから、ま、大丈夫だろうよ」

「なんだそりゃ」

「口で説明するより、実際に見たほうが早いからだよ。」

「デカイマーケットだから、道行く人に適当に聞けばすぐにわかる。今回俺は基本的に裏方に徹するから、行き会えないと思ってくれ。」

「で、他に聞きたいことは？」

「とりあえずはそれだけかな」

「了解。じゃ、健闘を祈るぜ」

それだけ言って、俺たちは拳を合わせた。

54. 下ごしらえ

さて、それから数日後。俺は永璃ちゃんと会っていた。彼女には、菊岡経由である頼みをしていた。

「それっぽい名前はいくつかあったが、ま、そこまでだな」

「え、どういうこと？」

「第一候補として上がったのは、ラフコフ残党。こんな馬鹿げた計画をする奴として、俺が真っ先に思い浮かべるのは奴らだからな。だが、さすがにラフコフの悪名の高さを警戒したのか、これに該当するのは無し。これは、仮にもラフコフの元幹部として断言する。

第二候補は二つ。まず一つはB o B初出場者。例の死銃は黒星持ちの骸骨面ボロマントなんだろう？ そんなやつ、俺の記憶にある限り誰もいない。となれば、今回に合わせアバターをコンバートなり作成するなりして、今回に臨むはず。なら、初出場と考えるといいはずだ。だけど、こっちは今までは全く違う格好をしていた可能性も高いから、可能性の範囲内。もう一つは、“死”や“殺し”に関する名前。これに関してはぶっちゃけないかと思ってた。が、結びつけようと思えばいくつもある。けど、そもそもこん

な血腥いゲームなんだから、特に何も思わずそういう名前にしている可能性は高い。だからこつちもそういう線もあるだろうな、程度。

それに、そもそもB o B 予選受付は終了してないんだから、まだ登録してない可能性もあるしな」

「確定はできないわけね」

「結論だけ言えばな」

蓋を開けてみないことには、奴さんが誰なのかは分からない。が、見た目が変わらな
い可能性が高いのならば、

「蓋開けてみれば簡単だろうな。プレイヤーネーム特定できれば簡単だ。俺もストーリー
ミング見ながら特定するつもりだ」

「出場しないにしても、君も潜るかもしれないわけだよな?」

「まあな」

「なら、サポートはお任せあれ! つてことで。私なら、菊岡さんのデータベースにもアク
セスできるし」

「・・・くれぐれも無茶はしてくれるなよ」

「データベースに関しては菊岡さんの許可とつてるので大丈夫です」

「そうじゃなくて。くれぐれも慢心しないように、つてこと。戦いにおいて、後方支援か

ら叩くのは基本だろう?」

「全く。私のことばつかでいいの?」

「俺は自分の身は守れるからな」

「・・・そういう意味じゃないですけど・・・」

ため息交じりの永璃ちゃんの言葉に、俺は首をかしげることしかできなかつた。

キリトのコンバート日は菊岡から事前に聞いていたので、俺はそれに合わせてログインした。おそらく先にインしてマーケットにいるだろうキリトを追いかけ、マーケットに向かった。

——Side キリト

シノンに連れられてきたマーケットで、俺は彼女に案内される形で、例のミニゲームについた。と、そんな俺たちに、一人の小柄な影が近づいてきた。

「やつほーシノン。珍しいね女二人連れって」

「あ、ロー・・・じゃなかった、エヴオーラさん」

「そそ。ありがとね、そつちで呼んでくれて」

話しかけたプレイヤーは女の子だった。すつぽりとフードをかぶっていたから、直視するまでは気づかなかつた。柔らかな色合いの、ちよつと癖毛な長い金髪は、先に行く

にしたがってピンクのような色合いになっていた。目はぱっちり赤い。控えめに言って可愛いアバターだった。——胸はないが。

「私は、この人が、グロツケンで一番大きなマーケットにある、アンタツチャブルってミニゲームを知らないか、って聞いてきたもんだから、案内してたの」

「へえ。てことは君、やる気なの？」

「え、まあ、知り合いに、お前なら少なくともいいところまでは行ける」って言われて「へえ……」

どうやら興味を持たれてしまったらしい。おそらく、この人も同じ女性プレイヤーとしてのシンパシーを感じているんだろう。好き好んでこんなアバターになったわけではないが、こういう時は役に立つ。

「あ、名乗り忘れてた。私はこういうものですよ」と

そういつて、彼女はメニューをさっさと操作した。こちらに表示されたアバターカードに表示された名前は、"I o t u s"。……ん？

「普段はばれるのが嫌だから、エヴォーラって名乗ってるだけ。よろしくつばい？」
可愛くウインクされて、俺はあつけにとられるしかなかった。

——Side キリト Out

いやー、面白い。完全に注文通りの反応じゃん。で、今の反応でほぼほぼ確定。この黒髪の子、キリトだな。

「え、ていうか、男!?!この見た目で!?!」

「俺もこの見てくれはびっくりしたんだよなー。というか、そこの彼女も最初びっくりしてたから安心して?」

「ほんつと詐欺よねこの見た目。本人のふるまいも相まって、下手な女より女らしいわよ、こいつ」

「それより、新たな挑戦者が現れたみたいだぜ?」

俺の言葉に、二人の顔が前を向く。突進していった挑戦者は、突然びたりと奇妙な体制で静止する。それは、NPCガンマンから出てくる赤い線をよけるように。そして、その線をたどって弾丸が飛んで行った。

「あれ、今のって」

「気づいた?あれが防御向けシステムアシスト、弾道予測線。通称、バレットライン」

「長いから、ライン、って呼ばれてるな。引き金に指をかけた瞬間に、そのラインが弾道を示して伸びる。つまり、狙った方向にラインは伸びるわけだ。けどま、あのガンマンはインチキジミた速さの射撃能力があつてだな、ラインが見えた時には、ご覧の通りってわけだ」

俺が喋っている間に、今のチャレンジャーはあっさりと負けていた。

「・・・なるほど。見たほうが早いって、そういうこと」

そういつて、キリト（仮）はミニゲームに進む。その様子を、シノンは不安げに見つめていた。

「え、大丈夫なの、彼女」

「たぶん大丈夫だ」

「・・・どうして言い切れるわけ?」

「質問に質問を返すように申し訳ないけど、なんであいつ、このミニゲームがあるって知ってたと思う?」

俺の言葉に、キリトの動きを見ながらたつぷり数秒考え、思い当たった。

「・・・ああ、知り合いつて、そういう・・・」

「そういうことだ」

そんな会話をよそに、キリトはサクサクと進み、かなりあっさりとクリアしてのけた。戻ってきたキリトに、俺はさっくりという。

「な、簡単だろ」

「確かに、コツが分かればイケる」

「・・・あんたら、どうやったらこんなゲームクリアできるの・・・?」

「あのなシノン。俺らスナイパーには馴染みないかもだけどさ。このゲーム、基本的にはラインが見えた時には手遅れ、つてことはそんなに珍しくないわけ。そんな状態で回避するにはどうすればいいと思う？」

「は!?!見えた時には遅いものをどうやって回避しろつて言うの!?!」

「頭が固いよシノン君。見えた時には遅いなら、見える前に回避するまで。つまり、これはどこに撃ってくるかを予測するゲームつてわけだ」

「はあ!?!」

シノンの驚きに、俺たちは首を傾げた。

「そんなに驚くことですか？」

「驚くわよ。そもそも、そんなのどうやってやるのよ!?!」

「それはすぐ考えれば分かる話。実践でも役立つ技術だから、そう簡単には教えないけどね」

俺の言葉にシノンはあからさまにむっとしたが、何も言わずにおとなしくしていた。

さて、武器選びなのだが。

「あれだけプールされてれば、よっぽどの武器は買えるから、選び放題だな」

「おすすめは?」

「重めのアサルトがあればいいけどな。もしくはLMG」

「あるわけないでしょ。ここは基本的に、初心者から中級車向けの武器を扱ってるところなんだから。精々言つて、低STR向けの安価で軽量なものでしょうよ」

「それもそっか」

「あのお二人さん。なんでアサルトライフル、つて、拳銃弾より口径が小さいのに威力が高いんですか?」

「説明してもいいけど、炸薬量やら弾丸形状やらつていう、長つたらしい上にえらくマニアックになるわよ?」

「え、遠慮しておきます」

「賢明な判断だ。で、武器の希望つてあるか?」

俺の質問には答えられないようで、キリトは適当に周囲の棚を見る。と、ある一つに視線を注いだ。

「この世界にも剣つてあるんですね・・・」

その言葉で俺は大体察した。と、同時に呆れた。

「ジェダイにでもなるつもりかお前は」

「ジェダイ?」

「・・・分かんない」

呆れる俺たちをよそに、キリトはあっさりと光剣を購入。

「残金どれくらいだ？」

「え、つと、2万くらい……」

「つーことはハンドガンくらいか……アサルトやSMGだとマガジン考慮すると足りないからなあ……」

てことは、必然的にメインは光剣になるわけで。……あんなのメインウエポンにする馬鹿はこいつくらいだろうなあ……。

「何がいいと思う？」

「こいつなら大抵の銃は扱えるから、極端な話アザートイーグル50AEとかでも問題なさそうだな。だけど、あれって意外とリコイルがきついから、光剣と併用するってなると不向きかな。お手頃なレイジングブルとかはそもそもおいてないし……。何か希望があればこつちもそれを考慮するけど」

「あ、お任せします」

とのことだったので、適当に選ぶことにした。さて、光剣と併用するという前提なので、いちいちコッキングの必要なりボルバーは却下。セミオートハンドガンでそこその威力とリコイルっていうと、

「ファイブセブンなんかよくね？」

「P90の弾丸使う奴よね？」

「そそ。お手頃で威力もそこそこだし」

「いいかもね」

俺たちの一存で装備を整え、射撃練習も終えられたのはいいものの。

「やっべ、時間」

俺の言葉でシノンの顔も凍り付く。時間は既にB o B受付終了間際になっていた。

「走っても間に合わないわね．．．！」

「シノン！ ヴィークル！」

「その手があった．．．！でも私は運転なんて．．．！」

「俺ができるから問題なし！」

俺たち三人とも走りながら会話を済ませる。GGOには、急ぎのためのそういうものも完備されているのだ。俺が先行して車のエンジンをかける。二人が乗り込んだのを見て、俺は車を走らせた。

ま、結論から言うときりぎりぎりに合ったことには間に合ったのだが。キリト（仮）を女と思っていたシノンが控室で着替えだし、その関連でキリトの頬にはきれいなモミジ

が刻まれるに至った。ちなみに俺は、かつてのアスナと同じように、装備の上からフリーデットケープをかぶっているだけなので着替えはいらない。というか、俺の場合ここにいるというだけで人が集まってくるので、これは本当に欠かせない。

「さて、俺はちよいとやることがあるから落ちる。二人とも頑張れよ」

「はいはい」

「そつちもな」

二人の言葉を背に受けながら、俺はログアウト処理を行った。

さて、それから少しして、俺の携帯に着信があった。

「もしもし」

『B o B 予選出場者名簿が出来上がったので、送るね。一応私の方でぎつと見てみましたけど、ラフコフ幹部はいなかったよ』

「やっぱりか。それ以外の可能性は？」

『死にまつわる名前でパツと目についたのは、ステルベン、って名前。おそらく、今回が B o B 初出場』

「ほう。ドイツ語か何かか？」

『ご明察、ドイツ語。意味はそのまま、死』

「ドストレートだなこれまた」

『とりあえず、引き続き調査を続けます』

「おう、頼んだ」

それだけで電話は切れる。俺としては、ドイツ語というのがとこか引つかかかってならなかった。

5.5・状況開始

GGOにログインして、俺はB0Bの予選を眺めていた。はつきり言って、まずキリトのようなスタイルはあちこちで話題を呼んだ。まあそうだろう。飛び道具がこれでもかというほど充実しているゲームにおいて、わざわざあんな武器を選ぶもの好きなど他にいてたまるかという話である。他に気になったのは、初出場組。この手のゲームのご多分に漏れず、いわゆるネカマプレイはできない仕様になっている。もし仮に、今回の事件に備えてサブアカを作っていたとして、明らかに男性の声のアバターを使用していた死銃は女性アバターを使うことはできない。というか、GGO界限の中では、死銃なんて眉唾モンだろうという意見がほとんどだ。ま、当然だな。ゲームの中で撃つたら現実の人間も死ぬなど、眉唾物にもほどがある。俺だって、現実に死人が出ていると思われる情報がなければ、そんなのウソの情報だろうと思っていたに違いない。その中で、気になる格好をしていたプレイヤーがいた。プレイヤーネームは、"Sterben"。一瞬、ステイブンのスペルミスかと思ったが、すぐに気付いた。

(ああ、こいつか、ステルベン)
ボロマントにドクロ仮面。使用武器はスナイパー。俺はそこまで銃に詳しいわけ

はないから、どの銃を使っているのかまでは分からなかった。精々が、雰囲気は俺の銃AS50と似てるなー、という程度だ。だが、それより、俺は気になることがあった。(マントにどくろ仮面……。まさか、な)

と、そんなことを考えていると、見知った顔が酒場に戻ってきた。確かこいつ、さつきステルベンと戦ってたな。と思い、近寄って行った。

「よつす、デビッド。お疲れ」

「ああ、お前か……。見てたのか？」

「まあね。ちよいと聞きたいことがあつてさ。一杯くらいはおごるよ？」

「ここでもいいのなら」

「OK、交渉成立」

俺が話しかけたのはデビッド。GGOの古参プレイヤーで、俺の正体を知っている数少ないプレイヤーの一人だ。

「しかし、いつみても中身男とか詐欺だよなお前」

「誉め言葉として受け取っとく。というか、これ結構苦労したんだよ？」

「・・・マジで詐欺だわ」

笑いながらの返しに、デビッドは心底呆れて返す。

「それより、お前こそ出てないのかよ、Bob」

「ま、一身上の都合、ってやつよ。じゃ、お互い次の大会へ向けて、ってことで」
俺の一声に、二人ともそろってカップを上げる。一口飲んでから、再び画面に目を移す。

「当然つちや当然だけど、これってフィールドによつてはなすすべなく終わるよね」
「実際俺がそうだったからな」

「あれま、それは失敬」

「で、聞きたいことってなんだ？」

「おたくが負けたステルベン、ってプレイヤー。どんな銃を使つてたのかなーって」
「お前、見てたんじゃねえのかよ」

「いやー、ほら、俺つてそこまで銃に詳しくないからさ」

俺の言葉に、デビッドはため息をついて、少し考え込んだ。

「移動時間から鑑みて、かなり射程距離の長い銃だな」

「デビッドの銃って、確かアサルト、だったよね？」

「まあな。グレランつけたアサルトだ。そのレンジ外からやられた。つまりは砂だな」

「砂かあ・・・」

「でも、一つ妙なところがあるんだよな」

「妙なところ？」

「聞こえなかったんだよ、銃声が」

「は？砂なのにな？」

「ああ。砂なのに、だ」

そう言いつつ、二人して中継画面を見る。おのずと行きつく先は一つだった。

「あれ、俺の銃と似てる？」

「こいつは・・・！なるほど、それでか」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、お前の銃の系列銃だよ」

「俺の銃？AS50の？」

「ああ。型式名は確か、L115A3、だったかな。弾丸はラプアマグナム」

「ラプアマグナム、つてことは、確か33口径くらいだっけ」

「ああ。サプレッサー付きの狙撃銃だ。最大射程距離は、確か世界記録で2400m超だったはずだ」

「わーお、俺並みじゃん」

「お前はスペックの暴力だけだな」

「ま、ツイてただけだよ」

「・・・マジでお前男とか詐欺だわ」

「唐突な理不尽！」

適当に話していると、突然呟かれたコメントに思わず反応する。でもま、こいつがこう思うのはある意味仕方ない。

「こんな見た目だからね。それっぽくみられるように努力したんよ」

「ナンパされたりしないのか？」

「そもそもフリーデットケープかぶってたら、見た目が分からないからね。ナンパも合わない」

「なるほどな」

「ま、一部の変態には見破られたけどね」

「は？お前を男と見破ったっていうのか？」

「正確には、なんかおかしいなー、って思ってただけみたいだったけど。カマかけられて俺がばらした形。デビッドも知ってるでしょ？あの毒鳥ピトフイーだよ」

「ああ、あいつか・・・」

ピトフイーは、古参のGGOPレイヤーの一人だ。女性なのだが、こいつ、相当にイカれている。筆舌に尽くしがたいレベルでイカれている。古参レイヤーはそのイカれっぷりからほとんどが知ってるくらいにイカれている。特に、詳しく聞いてはいないものの、デビッドは彼女となにやら因縁があるらしく、すごく反応が微妙なることもしば

しばだ。

「さて、俺はちよいとリアル側の用事で落ちるわ。傭兵稼業は廃業してないから、何かあったらまた頼ってよ」

「ああ。願わくばお前とは、敵として会いたくはないからな」

そんなことを別れのあいさつに、俺はメニューからログアウトの処理を行った。

ログアウト処理を終え、俺はすぐにスマホを手にとった。そのまま、菊岡の番号にダイヤルする。

『もしもし』

「俺だ。すぐに参照してよこしてほしいデータがある」

『死銃の手掛かりかい？』

「確定じゃないがな」

そのまま、俺は、あの世界で俺が知っているそいつの情報をしやべった。過去、この妙に回転の速く覚えのいい頭を恨めしく思ったこともあったが、こういう時は感謝だ。

『分かった。すぐに調べて転送するよ』

「頼むぜ」

それだけ言い残して、俺は電話を切る。菊岡にこの話を持って言った時点で、おそらく永璃ちゃんにもこの情報は行くはず。持ち帰った仕事を機械的に進めるが、どうにも

進まない。俺の最悪のルート通りになった場合、俺はリアルで殺人を犯す必要がある。
(・・・今更か)

ふ、と息を吐き出す。今日は無性に、強い酒でも欲しい気分だった。

翌日。俺の予想通り、そいつは速いタイミングで酒場に現れた。俺が想定していた通りの格好だったから、すぐにわかった。

「久しぶりだな、赤眼の」

「・・・誰だ、お前は」

「おいおいおい、連れねえな。って、まあ、この見てくれじゃ、威厳も何もないがな」
いつものこつちの声より、意図して低くしている。いつもの口調のほうは、意図して高くしゃべっているから、余計に低く聞こえるはずだ。

「・・・貴様・・・!」

こいつはなんだかんだで観察眼が鋭い。殺したいが先立って比較的パーなジョニーではなく、クレバーなこいつなら、おそらく気付く。そう踏んだからこそその接触だ。

「やっぱりお前か」

「・・・さすが、だな。クレバー度合いも、変わらずか、はず蓮」

「てめえに言われたくねえな」

そして、見事に俺のカマかけにこいつはかかった。俺に対するこいつらの恨みなら、少しのカマかけでも乗ってくる可能性が高い。その俺の目論見に、見事に引つかかった形だ。

「だがまあ、本当にお前だとはな」

「たまたまだがな。残念だったな、殺害対象にできなくて」

「こちらの、手段まで、おみとおしか」

「細かい手段までは分らん。が、大体読める。あんたは確か医者の子孫だろう。それなら、必要な道具は簡単に揃えられるはず。鍵しかり、現実の凶器しかり、な。あとは簡単だ。住所に関してどう調べたのかは知らんが、そこさえどうにかなれば終わりだ」

「それでも、お前に、何ができる」

「ああ確かに、俺一人じゃ何ともならん。だがな、お前がそうであるように、俺が一人だとなぜ決めつける」

「・・・フン。あの小娘ごとき、簡単に殺せる」

「——やれるもんならやってみろ。その時は俺がお前を殺す」

自分でも特に意識はしていなかったが、はつきりと分かるほどに俺の声は低くなった。俺はそのままログアウト処理をし、すぐに連絡を取った。

『どうだったんだい？』

「ビンゴだ」

『了解だ。さすがだね』

「支援を頼むぜ」

それだけ言い残し、すぐに電話を切る。上着と車の鍵、携帯とペアリングした小型ヘッドセットを手に取り、即座に外に出る。今となつては珍しいものになったPHVのエンジンをかけた。通勤用に安い中古車と言うことで、俺が給料を前借りする形で買ったものだ。運転席に座つてヘッドセットをつけ、一言つぶやく。

「ストレア」

『はいはい、状況はエリーから聞いたよ？』

「相変わらず手の速い子だ」

『それ、本人が言つたらむつとしそう』

「そういう意味で言つたわけじゃねえよ」

少し前から、バレないようにではあるが、ストレアが俺と永璃ちゃんのサポートに入っていた。最も、電子系において、彼女にサポートが必要かどうかというのは、少々以上に疑問符が付くが。

『Mストは全部の視点で見てるよー。さっきの会話から察して、ザザさんをちゃんと見

ればいい?』

「厳密にはステルベンだ。ドイツ語でステルベン」

『へえ、お医者さんだったりするの?』

「・・・なんでそうなる」

『ステルベン、っていうのは、医療現場においては、患者の死亡を示すんだよ。だからそうかな、って』

それで、俺の引っかかりが解決した。そうか、だからなんか引っかかりだったのか。

「・・・そういうことか。ザザは医者の子だよ」

『そ、つか。・・・!動いた!』

「どうした!?!」

『例のザザさんが動いた。撃たれた相手は動けないみたい!撃たれた相手の住所までナビするよ!』

直後、俺は車を動かした。

ストレアのナビに従って、法定速度を少しオーバーするくらいで飛ばす。監視カメラの情報や交通情報から、最速ルートで車を飛ばす。なんとかたどり着いた場所は、既に鍵が開いていた。部屋に入ると、そこには誰もいない。部屋の主は、既に回線切断され

ていることは、運転中に知らされていた。

素早く脈をとる。俺の想像通り、脈は既に止まっていた。軽く合掌し、遺体を改める。相手が動かないと動けない以上、殺人を未然に防ぐことはほぼ不可能に近い。だから、俺の目的はこちらにあった。

『バイタルデータ参照、完了。回線切断寸前に、心停止に近い反応あり。おそらく本人、かなり苦しみながら死んでいっただろうね』

「人工的な心停止の誘発か」

遺体は死後硬直が始まっていない。それを加味しても、かなり遺体は柔軟性があった。

「筋肉の硬直はなし。出血は見たところなし。内出血もなさそう。硬直もないところを見ると、使われたのは筋弛緩剤か何かかな」

『でも、直後に亡くなったのなら、薬剤注入時の注射痕があるんじゃない？』

「その辺は、ザザが一枚噛んでる時点でどうにでも説明はつく。例えば、注射痕のない特殊な注射器を使ったとか、注射痕を消したとかかな」

『精密検査してみないと分からないね。次のターゲットは誰だと思う？』

「分からんな、こればかりは。この付近に住んでいるB O B出場者、なんていう、都合のいい物件があれば話は別だが」

『さすがにこの付近にはいなさそうだね。今住所を照会したけど、最寄りでも、少なくとも見積もつても10kmは離れてるよ?』

「10km、か。平均時速60kmで飛ばしたとして、現地到着まで10分。一般道や路地、その他諸々を勘案して、移動時間は15分から20分くらいか。自転車だとしたら移動だけで30分くらいは覚悟しないとイケないな。Bobは大体1時間ちよつとくらいで終わる上に、最初の10分は動かないのがセオリーだから、実質行動できる時間は50分くらいか。ゲームの中の準備を整えてから、つてことも考えると、あまりにも時間が足りなさすぎる」

『ということとは、やっぱりもう一人いる、つてこと?』

「十中八九な。今、ステルベンを操作しているのはおそらくザザの野郎だろう。となれば、協力関係として真っ先に名前が挙がるのは、ジョニーか」

『現実でのコンタクト・・・確認。それっぽい人影がちらほらと散見されたよ』

「仕事の速いことで」

『エリーがまとめてたの。もしかしたら役に立つかも、つて』

「さすが」

あの子は、この状況で俺が何を求めるのかを分かっていたらしい。とにかく、欲していた情報は手に入れた。

車に戻って、俺はゆっくりながらも一つの家に向かった。ストレアの情報から、今回のターゲットの場所は割れていた。おそらく永璃ちゃんが暴いたものだろうが、・・・うん、彼女のこの手の技術にツツコミは無用だな。というか、下手に藪をつついたらキングゴブラあたりが出てきそうで怖い。

『ハハハだよ』

「おう、サンキュ」

その言葉とともに、俺は道端で車を止める。かなり大きな家であることは、事前情報として仕入れていた。

『でも、どうするの？これじゃ侵入は難しいよ？』

「そうだな。こっそりお邪魔するのは難しそうだ」

『え？無策でここに来た、ってわけじゃないよね？』

「なわけねーだろ。こっそりお邪魔するのが難しいなら、堂々とお邪魔するまでだ」

俺の言葉に、啞然とした雰囲気のアストレアをよそに、俺は大きな玄関へ歩く。チャイルムを鳴らすと、すぐに反応があった。

『はい』

「すみません、総務省仮想課の者です。少々ご子息についてお話を伺いしたいのです

が」

『分かりました。少々お待ちください』

その返答とともに、玄関の鍵が開いた。それを歓迎の合図と見て、俺は営業用の笑みの下に暗い笑みを浮かべた。

「これなら、万が一があっても、菊が口裏を合わせるだろうさ」

『なるほど、確かにね』

ぼそりとつぶやかれたコメントに、ストレアはため息交じりで同意を示した。

56. 赤眼

案内された応接室で、俺は周りを見渡した。決して派手ではなく、しかし飾りすぎない。地味ではなく、それでいてよく見ると良い物を使っているのが分かる。いわゆる成金ではなく、ちゃんと見るものを見て買っているのがよくわかる。下手な骨董品が置かれていないあたりその証左だろう。だがおそらく、戻ってきた奴にとってみれば、「くそつまらない部屋だっただろうな」

『へ?』

「なんでもないよ」

あいつはSAOで、完全と言ってもいいほどに倫理観やモラルというものを破壊された。あいつは、あのPOHとかいうふざけた男には、それができるだけの能力があった。そんなことを考えていると、一人の女性がカップをお盆にのせて持ってきた。

「ごめんなさいね、ちよつといろいろあったものですから」

「いえ、約束も無しに、ぶしつけな真似をしたのはこちらですから」

そんなことを言っただけでほほ笑む。出された紅茶を一口飲む。その光景を見てか、相手が問いかける。

「すみません、昌一はいま、VRゲームの大会だとかで」

「あれまあ、そうでしたか。ちなみに、どのようなゲームの？」

「弟の恭二がやつてる、えっと、ガンゲイル・オンライン、だったかな」

——大^ビ当^ンたりだ。完全^ゴに札は揃った。

「あの、昌一が何か・・・？」

「順序だてて説明する必要があります。まず、親御さんは、息子さんがSAOの中でどのようにしていたか、ご存知でしょうか？」

「え？えっと、プレイヤー相手に戦っていた、とは・・・」

「それだけでしょうか？」

「はい」

長く息をつく。確かにあいつなら、自分が人殺しだと伝えたらどうなるかなど想像することができらるだろう。ならば、本当を交えた嘘をつくはず。だが、これはさすがに、本当の事を包み隠さず話さなければ先には進めない。

「・・・まず先に、大前提として。今からお話することは、すべて事実です。驚かないでください、とは言いません。が、頭ごなしに否定して思考停止するようなことはなさらないよう、お願いします」

俺の少し大げさともとれる言葉に、少し顔を青ざめさせながら、相手は頷いた。

「ゲームにおけるプレイヤー同士の戦闘、通称PvPは、大きく分けて二つあります。ある程度の安全が伴った状態で行われる、いわば模擬戦のようなもの。普通に模擬戦と呼ばれる場合もありますが、一定の条件が伴えば、デュエルと呼称されます。そして、――安全性の全く伴わない、相手を殺す可能性の高い、あるいは完全に殺しきるための戦闘。SAOもあくまでゲームでしたから、この、相手を殺すための戦闘が一定数発生していました」

「・・・まさかー！」

「ご存知でしょうが、〃あちら〃で死ねば、〃こちら〃でも死ぬことは、プレイヤーにも通達済みでした。SAOでのプレイヤーキルが、現実世界における殺人だと同義だと、プレイヤーの全員が理解していました。それでもなお、その人の道を外れる行為を推奨した、狂っているとしか思えないプレイヤーがいたのですよ。〃これはゲームであるのならば、PKするのも楽しみの一つだ。それに、ここでの人死には、そのすべてが茅場晶彦という狂った技術者のせいなのだから、自分たちのせいではない〃、とね。その男は、自分に賛同するプレイヤーキラーたちを集めて、一つのギルドを結成します。名前はラフィン・コフィン。SAO史上最悪の、殺人ギルドでした」

「まさかとは思いますが、うちの子が・・・！」

「ええ。ラフィン・コフィンの中でも、幹部格のプレイヤーでした。昌一君はしばしば、

カウンセリングを受けていたはずです。これは、SAOで積極PKを行ったプレイヤーに対するものです。彼は、合理的に、殺せる相手を選んでしつかり殺すこと。そして、得物がエストックという、使用者の少ない癖が強い武器であるということまで有名でした」

「・・・そんな・・・」

頭を振って、何とか混乱した頭を整理しようとする。少し間において俺は続けた。

「話を続けさせていただきます。」

彼のほかに、ラフィンコフィンの幹部は三人いました。先ほど申し上げた、諸悪の根源である男。残りの二人のうち、一人は内部からラフィン・コフィンの壊滅を狙っていたことが判明しています。残るもう一人のプレイヤーと、昌一君はよく組んでプレイヤーキルをしていたそうです。そのプレイヤーとは、現実世界でも、面識があったようなんです」

「息子が、人殺しで、その仲間と今でもつるんでいる、と・・・?」

「ええ。そして、ここからが重要です。私がここに来た理由でもあります。」

まず、こちらを」

そういつて、俺はいくつか書類を見せる。それはどれも、死銃事件にかかわるもの。

「これは、仮想世界のアバターと示し合わせて行われたであろう、殺人事件と思われるものの資料です。この事件に、息子さんたちが大きくかかわっている可能性が高いとみて

います」

さりとておわせるように言い方を変えても、やはりそこは母親。信じられないようにかぶりを振った。

「そんな……！息子が、現実でも、殺人を……！いったいどうして!?!」

「それはお二人に聞いてみるほかありません。もつとも、主犯共犯含め二人で済めば、と思つてはいますが」

「済めば？まさか、こんなことに三人以上かかわっているだけでも!?!」

「そこまでは分かりません。が、可能性は高いと思います。そして、その中に、ご子息たちが含まれている可能性が高いとも」

「たち……?まさか、恭二まで!?!」

「こんなことの片棒を担がせられる人物などそうはいない。ですが、それこそ、あの男がそうしたように、もし万が一、昌一君が恭二君を煽動させることに成功したなら。可能性は十分にあり得ます」

俺の発言に、彼女はかぶりを振るのをやめ、俺の目を見て、黙り込んだ。

「徒に、口から出まかせを言っているわけではないのね……」

「ええ。死因はいずれも心不全。しかしこれは、遺体の腐敗が進んだ状態での死因推定結果です。それに、仮想空間で空腹を紛らわし続け、現実世界で栄養失調による体調不

良、ひいては死亡、という事例がいくつか確認されていることは、ご承知の上だと思います。

救急設備のある病院なら、緊急時に使用される、医療用マスターキーが存在するはず。また、放置すれば検出が困難になる劇薬も、同等に入手可能です。どちらも、身内のいる病院からなら、入手は容易でしょう」

ここで、俺は黙り込む。あとは、この人の良心にかけるしかない。

正直、これは分の悪い賭けだ。

まず、いくら事実のみ話すから信じる、と言われても、自分の子がそんなことをしている、と言われて、はいそうなんですか、と頷くような奴はなかなかいないということだ。どうあっても、自身の子を信じる親がおよそ一般的だ。ぼつと出の第三者にそんなことを言われても、信じない可能性のほうが高かった。

次に、病院から物品がなくなるということを、部外者である俺に伝える可能性が低いということだ。もし俺の推理が正しいのであれば、昌一は病院から何らかの筋弛緩剤と、医療用緊急マスターキーを入手して、今回の凶行に及んでいる。俺からしたら、身内という精神的な穴をついた合理的作戦だと思うだけだ。だが、これが、病院組織の一員であり、自分の身内が行った可能性があるとすれば。信じられない以前に、病院としての汚点を表に出したくない、という心理が働くはず。それを、俺のような若造に話す

可能性は低いと思っている。

「どれだけよく見積もったとして、可能性は五分五分。はつきり言つて分が悪すぎる。でも、俺はこの手にかけるしかなかった。」

しばらくの沈黙の後、彼女は長く息をついた。

「直接病院に関わつていゝるわけではなくとも、情報は入つてきます。ですがそれだけです。そのわずかな情報でも、漏らすことは許されていません。私の立場はそういうものです。」

「なので、ここは私の独り言です。信じるも聞き流すも、あなたの自由です」
「分かりました」

「———どうやら、俺は賭けに勝つたらしい。この部屋の盗聴器は、ストレアが調べてあげて全部無効化してある。」

「最近、病院で、緊急用のマスターキーと、筋弛緩剤であるサクシニルコリン、そして無針注射器が3つ、消失しているのが確認されたそうです。あくまで致死量すれすれで投薬すれば、という仮定に基づけば、ですが、7、8人ほどは死に至らしめる計算です。もともと、サクシニルコリンは即効性の高い、筋弛緩性の作用をもたらず劇薬。少量でも十分に人を死に至らしめます。それに、この資料によれば、亡くなつたお二人はどちらもかなりのヘビーゲーマーだったようですね。痕の残り辛い無針注射器で致死量のサ

クシニルコリンを注射し、その遺体が腐敗の進んだ状態で発見されれば、〃現実での体調管理を怠ったことによる栄養失調からくる心不全〃という死因推定が出ることは、全く不自然ではありません」

吐き出される言葉を、俺はゆっくりと飲み込んだ。この母親は、俺の前でこの発言をする、その意味が分かっている。でもそれでも、この言葉を吐き出す選択をした。純粹に頭の下がる思いだった。

「……息子さんの部屋を拝見してもよろしいですか？」

「ええ。でも、いま息子は……」

「承知の上です。でも、もし彼が犯人の一員なら、その証明となるものが確実にその部屋にあるはず。年頃の男の子である以上、母親が部屋に入ることは忌避感を覚えるでしょうが、自分なら多少は大丈夫でしょう」

「赤の他人というのも、それはそれで……」

「問題ありませんよ。私は彼と、S A Oで面識がありますから」

「……と言うことは、あなたも、その、殺人を……？」

「……小を殺して大を生かそうとして失敗した、ただの道化ですがね」

俺の自虐的な言葉に、彼女は息を呑み、目を伏せた。この一言で察せられるとは、なかなか聡いお人らしい。

「ならば、SAO被害者家族として、また母親として一言ずつ、言わせてください。

——恨まれることが怖くはないのですか」

「怖くない、と言ったら嘘になります。が、これは自分で選んだ道です。後ろ指さされようと、石を投げられようと、選んだ時点で覚悟など済ませてあります」

「そうですか。」

——そこまで覚悟ができていたのに、どうして、息子を止めてはくれなかったのですか」

「止められなかった、というのが本音ですね。」

——生け捕りなどというのは、偶然が重ならなければ起こりえなかったでしょう。彼らは、自分が死ぬか相手が死ぬか、それしか考えていない節がありましたから。真正面から殺すのも難しい以上、私には何もできなかつた。言い訳はしません」

「・・・狂ってる」

「ええ、狂っていました。私も気が狂いそうだった。でも、何を言っても、もう言い訳に過ぎません。死者は戻ってこない。目的が手段を正当化することもない。それが真実であり、それ以上でも以下でもない」

俺の言葉に、じつと真正面から彼女は俺の瞳を見つめた。俺もまた、目をそらすことはしなかつた。

「少々準備をしましてまいります。そのあと、息子の部屋へ案内します。……どうか、お願いいたします」

「……分かりました」

その言葉に込められた意味を、俺は明確に読み取った。

昌一——ザザの部屋に入る前に、夫人は思い出したように声をかけた。

「もし、あなた」

「どうぞされました」

振り返った俺の手に、手袋をはめた手で小さな機械が渡された。

「無針注射器です。中身は、——お分かりですね」

「……あなたは、」

思わず絶句してしまった。俺がためらっている間に、彼女はゆっくりとかぶりを振った。

「あなたなら託せる。それに、あの子は、大会は大体1時間くらいで終わると言っていました。そろそろ、戻ってきてても不思議ではありません。」

——本来なら、私たちがすべきことなのかもしれないが——

「いえ。」

——これは、俺がやり残したことでもあるのです。どうか、お気に病まぬよう」

それだけ言うと、俺はポケットに、無針注射器を忍ばせて、扉を開けた。

部屋はいたって殺風景だった。あいつらしい、必要なものだけを置いた部屋。パツと見たところ、キーになりそうなものはない。だが、それはこちらが生身だけの話だ。

部屋に置いてあるパソコンの電源を入れ、ケーブルを使ってスマホを接続する。

「頼むぜ、ストレア」

『全く人使いの荒い・・・』

ぼやきながらも、電源の入ったパソコンの中に彼女が侵入する。解析結果はすぐにもたらされた。

『やっぱりこれ、SAOのザザのアカウントをそのままコンバートしたものだよ。ステータスバランスもそのまま。名前だけがステルベンに変わってるね』

「やはりか」

『芋づるで情報が出てきた。参照・・・完了。第三回BOB出場者のリストの一部と完全合致。都心だけに絞ってあるみたい』

「ということは、犯人は複数犯で、なおかつ何らかの移動手段があると判断してよさそうだな」

『そうだね。都心全域とまではいかないけど、徒歩で移動できる範囲を・・・！後ろっ!!!』

ストレアの言葉に、俺は弾かれたように振り向く。後ろには、ダイブしているはずの人間が、アミユスフィアを外しにかかっていた。

静かに、ポケットの中の無針注射器を握る。姿勢は低く、いつでも飛び出せる状態になった。ザザは、こちらを向くと、あからさまに敵意をむき出しにした。

「よう、赤眼の。邪魔してるぜ」

「貴、様……!!」

俺を見てそれだけ言うと、あいつは枕元から、俺がポケットに忍ばせているものと同じ物を取り出した。——なるほど、ここまで想定していたか。

「現実世界の死銃、か」

「知って、いたのか」

「確信があったわけじゃなかったがな」

俺の言葉に、ザザは舌打ちした。ま、ここまできれいにカマに引つかかったら、舌打ちのひとつもしたくなるだろう。

「おとなしくしてくれないか。俺としても、無用な争いは避けたい」

「どの、口で……!そもそも、貴様の、目的など、分かっている……!」

俺のとりあえずの勧告も、ザザを逆上させるだけだった。ま、こいつには、なんで俺がわざわざこんなところまで来たのか、なんて分かり切っているだろう。

「あ、そう。でも、あえて宣言させてもらう。

——貴様は、ここで、殺す」

その言葉に、あいつは飛び掛かってきた。ポケットから出してある左手でそれを打ち払い、注射器を離れた右手で掌底を打ち込む。手ごたえはあったが、おそらく決め手にはなっていない。意地もあるかもしれないが、相手が無針注射器を手放していないのがその証拠だ。決め手になっていたのであれば、それはきつと衝撃などで手から離れている。だが、俺からしたら問題ない。

よろりと後ずさったザザに、さらにもう一步踏み込む。左手で相手の無針注射器を持った手首を抑え込み、みぞおちに拳を叩き込む。今度こそ決め手になったらしく、相手は完全に悶絶した。その瞬間を狙って、左手をひねり上げて注射器を奪い取り、相手の首筋に打ち込んだ。打ち終わると、そのまま相手は崩れ落ちた。念のため、俺は自分のハンカチで、使っていない預かったほうの無針注射器を念入りに拭く。崩れ落ちた——いや、こと切れたザザは、完全に動かない。

「先に地獄に行つてろ。安心しろ、直じきに他の奴も送り届けてやる」

それだけ言うと、俺はスマホの後片付けをして、部屋を後にした。

部屋の前には、ザザの母親がいた。

「あの子は・・・？」

「襲われたので、返り討ちにしました」

俺の言葉の意味を、母親は正確に理解したようだ。

「そう、ですか・・・」

「これはお返しします」

俺は、彼女に渡された無針注射器を返した。

「預かった方は一応拭いてはおきました。念には念を入れたほうがよろしいかと。凶器は枕元に。」

それはそれとして。——なぜ、私に？」

「私だって、一人の親です。あの子を——昌一と恭二をここまで育ててきたんですもの。SAOから帰ってきた昌一がほとんど完全に狂ってしまったことくらい、分かっていました。それに影響される形で、恭二まで・・・。SAOで昌一だけが狂ってしまったのであれば、完全に浸ってしまった昌一に何かあれば、恭二はまだ戻れるかもしれない。そう思っただけなんです。」

——でも、私には、息子を殺すことはできなかつた・・・！」

「それが当然ですよ。一体この世の誰が、血のつながった自身の子をやすやすと殺せましょう。彼だけでなく、私のように狂ってしまったわねば、そんな恐ろしい真似は出来ませ

「まい」

「・・・ありがとうございます」

ただ静かに泣きながら頭を下げる新川夫人に、俺はどんな反応をすればいいかわからず途方に暮れた。

e p i l o g u e . 友人

そんなことがあつてから少しして、俺は仕事を休んで刑務所に向かつていた。目的は、とある少年に会うため。まだあの事件が終結してから日が浅いが、早く会わなければ、俺の用件が満たされない可能性がある。落ち着くのを待つ間もなかった。

新川邸によるものは、正当防衛による事故死と言うことで片が付いている。もともと、死銃を名乗っていた三人が、凶器としてサクシニルコリンと無針注射器を病院からくすねていたこと。消失していた無針注射器が、三人に一個ずつ渡っていたこと。そして、部屋の状況と、凶器である無針注射器に、新川昌一の指紋がべつたりとついていたことが決め手となった。

アクリル板を挟んで向かい合つた恭二は、俺が思ったよりはるかに落ち着いていた。いや、それはきつと、俺の正体を知らないからだろう、と俺は思った。

「さて、初めまして、だね。新川恭二君」

「あなたは……？」

「俺は天川蓮。今はSAO帰還者の学校で教師をやつてる、しがないVRゲーマーだ。」

——ロータス、といえば、君も聞いたことがあるだろう？」

俺が自身のプレイヤーネームを出した瞬間に、恭二の目の色が変わった。

「お前が……！お前が、兄さんを……！」

「確かに、俺がお兄さんの命を奪ったことは事実だ。非難は甘んじて受けよう。一発殴らせる、と言われても、俺は抵抗をしない。殺しにかかられたら、流石に抵抗させてもらうがね。

……つと、そんな話をしにきたんじゃない。俺は君に聞きたいことがあつてきたんだ。聞きたいこと、つていうより、お願い、のほうに近いかな」

「お前のお願いとやらを聞く義理はない……！」

「いやまあ、そういうわれちや確かにそうなんだけど。ま、とりあえず聞いてくれ。

君のGGOアバター——シユピーゲル、だつたつけ——、少し借りることはできないかな」

「借りてどうする気だ」

「遊ぶ以外に何かある？」

俺の言葉に、完全に勢いが緩む。

「このままなら、シユピーゲルは長期ログインなしによるアカウント消滅が発生する。君がこのままここを出たとして、もう一回シノン——君には朝田さんと言ったほうがいいか——とプレイするときに、一からキャラビルトをする必要があるわけだ。それ

はなかなか手間だろう。それに、君にとつても、愛着のあるアバターを捨てるのは惜しいはずだしね。悪い話じゃないと思うんだけど」

さらに畳みかける。俺の言葉に、彼はゆっくりと口を開いた。

「・・・ログインIDは——」

彼の言う言葉をしっかりとメモしていく。確認をして、俺は改めてもう少し質問することにした。

「OK、ありがとう。育成方針はどうする？このままAGI極で育てるか、それともちよつと強引でもステータスバランスをいじるか」

「あんたは、どうすべきだと思うんだ？」

「んー・・・。こればかりは好みだからなあ。AGI型はプレイヤースキルさえ極めてしまえば、これに勝る武器はなかなかない。でも、必然的にメインウエポンはSMGやPDWに代表される軽量武器だけになるから、アサルトライフルとかを使いたい、ついでうのであれば、せめてAGI—STR型に振る必要がある。要は、当たらなかければどうと言うことはないをやるか、ある程度喰らっても安定して火力を出せるようにするか。どつちが強いとかはない。実際、闇風はAGI極だけど、俺はSTR—AGIで、シノンはAGI—STRだし。思い切ってVITに振るっていうのも一つの手かな。さつきも言つたけど、好みだよ」

「なら、AGI極のままで頼む」

「あい分かった。少しだけほかのステータスにも振るけど、そこは勘弁してね。使用武器の希望とかは？」

「特にはない。あんたがいいと思ったものを使ってくれ」

「了解。ありがとうね」

それだけ言い残し、席を立つ。と、そこで俺は付け足した。

「あ、それと。シノンから伝言。『落ち着いたら今度は直接会いに行くね』、だって。

—— 皮肉とかじゃなくてさ。いい友人を持ったね、君は」

緩やかにほほ笑んで俺は改めて出口へ向かう。同じく部屋を出る恭二は、一体どういう顔をしていたのだろうか。

いい顔をしていてほしいと、俺は切に願った。—— ターゲット候補になりえた相手にこんなことを思ったのは、きっとこれが最初で最後だろう。いや、そうであつてほしいものだ。

さて、シュピーゲルとしてログインしていると、驚いたような声をかけられた。

「シュピーゲル!?!」

「お。よ、シノのん」

「え、っと、どなたですか・・・？」

「大体想像つかないっぼい？」

若干あざとさを狙った振る舞いに、ようやく声をかけた相手——シノンが気付いた。

「まさか、ロータスさん!？」

「大当たり。これの持ち主に交渉してね、一時的に借り受けたのよ。俺としても、AGI型の世界つてものを見てみたかったし、ちようどよかつたつてわけ」

「確かあなたは、SAO帰還者でしたよね？なら、プレイヤースキルは高いはずだし、もともとサブアームはSMGだから使いこなせるとは思いますが・・・」

「SAO帰還者つて、誰からそれを・・・つて、一人しかいねえな。今度依頼量を吊り上げてやる」

俺の言葉に、シノンは乾いた笑いを浮かべる。

「ついてはさ、ちよいと協力してくれない？具体的にはキャラの成長つてことで」

「私は大丈夫ですけど・・・時間が合うでしょうか・・・？」

「勉強の心配があるつていうのなら、こつちにある程度資料持つてきてもらえれば、俺の教えられる範囲で教えるけど。俺のリアルがそういう風だから」

「そうなんですか？」

「ちよいと特殊な事例だね。融通利かせてくれたのよ」

俺はまだまだ、教師としてはひよっこ同然だ。働いていると、周りが再任用の大ベテランばかりだから特にそれを感じる。どんな形であれ、指導する機会が増えるというのは、俺にとつてもプラスなことだった。

「さすがにさ、このアバターで地下迷宮入るのは辛いよ。でも、俺もともとソロだからさ、手伝い頼める奴はいなくてね」

「ほかの古参プレイヤーの方々は……」

「あー、クランとかスコードロン入ってる連中ばつかだからね。例外はピトフィーくらいなんだけど、あいつはさすがに勘弁かな、って」

「確かに、あの人は、さすがに……」

シノンもソロだが、古参プレイヤーの部類ゆえか、かの毒鳥のイカれっぷりは耳にしていた。追加で言えば、開口一番「ヘカート売って！」なんて言うのはあいつだけだったらしい。というのは、後から聞いた話。

「つーわけでさ、お願いできない？もちろん、時間があるときで構わない」

「……分かりました」

「OK、サンキュ。フレンドは……送ってあるんだったな」

「はい、大丈夫です」

「そっか、んじゃ、早速今って大丈夫だったり？」

「あ、はい」

「よかった。じゃあ、早速フィールド、の前に装備整えないとな。俺のアカウントのホームにいくぞ。ドロップ品で使えそうな装備がしこたま置いてあるから」

そういつて、俺たちは歩き出——す前に、一言声をかける。

「それとな、シノン。これは知ってからずっと言いたかったことなんだがな。」

俺は、ただ俺のエゴを通すために何人も殺した。誰かを守るために銃を取ったお前を、俺は心から尊敬する」

その言葉にシノンがどんな顔をしたのか、俺はきつと聞くことはないだろう。だが、それでいいとも思う。

GGO編 あとがきの的な何か

はい、というわけで。

GGO編、完結でございます。

まずはお詫びを。

GGO編が書けないからとif編に逃げ、結果的に長くなりすぎ、非常にお待たせした。また、その割にはGGO編の内容が薄かったこと。ここにお詫びいたします。ひとえに私の力不足です。

ロータス君の見た目がアレだったのは結構適当です。なんかいいキャラないかなーって適当に探したら、一番イメージ近かったのがあの子だったんです。ついでに言うと、キリトのアバターが、プレイ時間がどうのこうのって話だったので、じゃあちよーうどいいや、つてなったのもあります。

偽名に関しては、確かこれを書いているころにリアルのレースでロータスのエヴォーラが参戦、つて聞いて、これだ！つてなったのが決め手でした。エスプリはポケモンで同名のキャラクターがいますし、エリーゼは名前使ってるし、どうしようつてなっていたのもありましたので、これは本当に渡りに船でした。

この話、実はオチを何パターンか考えていて、そのうちの結構危ない路線をとることになりました。ザザはここで殺すつもりだったのですが、どうやって殺そうか苦戦した挙句の果てがあれです。ちなみにこれ、どこその仕事人よろしく首筋から長い針を心臓にプスリとかあれこれ考えてこれになってたりします。自分で書いて、「あれ、よく考えなくてもこれ母親頭おかしすぎね？」って思っていました。でも本当にこれくらいしか思いつかなかったんです。許してください。

正当防衛って言うんですけど殺す気マンマンってツッコミは受け付ける。？

たぶんあれだな、これ書いてた時にFateのHFが映画化するって話聞いてリアルタやり直してたからだな！鉄心エンド付近のミシシッピシステムデッドエンドを覚えていたに違いない！（白目）

シユピーゲルに関しては、ただ単に「ある程度育ててあるキャラを、どんな形であれロストするっていうのはなー」っていう作者の気まぐれです。あと、たまには全く違う感じのキャラ使ってみたくなるじゃん？そういうことです。普段はご飯ばかりでもたまにはパンも食べたくなる、的な。

ついでにいえば、新川君は思いのベクトルがアレすぎるけど、ちゃんと立ち直って向き合ってあげればいい子になると思うの。環境に恵まれなかったのと、あの年頃特有の憧れのなものが最悪に噛み合っちゃっただけ。

さて、次はキャリバーを挟んですぐにマザロザに入ります。アニメ二期同様、キャリバーを挟んでマザロザに入ります。ですが、自分のプロットだとマザロザではなく思いつきり脱線する方向にある、とあるのですが、大丈夫だろうか・・・。

ま、たぶんどーにかなるでしょう。一応温めておいてたネタもあるしたぶんヘーキヘーキ。

ではまた次回。

キヤリバー編

57. 聖剣はいずこへ

「エクスキヤリバー?」

死銃事件から少しして、俺はキリトから電話で相談を受けていた。

「エクスキヤリバーって、あれか? 伝説級武器の」
レジェンダリーウェポン

『そう、それ。前から場所は分かってたんだ』

「じゃあなんで・・・いや、取りに行けなかったのか。パーティ制限とかで」

『パーティ制限じゃない。というか、お前、俺をボツチか何かだと思ってるのか?』

「え、違うの?」

『違うわ!』

明らかに俺とこいつは年の差があるが、お互いS A Oあっちからの付き合いと言うこともあり、こういう砕けた口調になっている。

『つつても、普通は見つからないから不思議ではあるんだけど』

『どんなところにあるんだ?』

『えっと、ヨツンヘイムの上にある、逆ピラミッド型のところにぶっ刺さってた』

「ヨツン Heim・・・ああ、あそこか。て、ことは、今回は黒天の出番だな」

『黒天・・・ああ、あのドラゴンの名前だっけ』

「こそ」

ヨツン Heim は一面氷に覆われた世界で、飛行能力は完全に制限されているエリアだ。それで高所に入り口のあるダンジョンだと、確かに黒天の出番になるだろう。

「ちよいと疑問に思うのは、見つけた誰かはいつたいどうやってそんなものを見つけたのか、だな。

ま、それはそれとし、だ。あいつはタンデムできるから、メンバーは、いつもの面子に加えて、俺とあと一人か？」

『あ、エギルに関しては店があるからパス。その代わりシノンに協力の手筈を整えた。で、あと一人はレイン』

「OK、理解した」

て、ことは、おそらく俺の後ろにレインで、残りの面子は――

「あれ、ちよつとまで、残りの面子の移動手段はどうするんだ？」

『言つてなかつたっけ？ 邪神級の奴と友好関係にあつてさ。そいつの背中に乗る』

「はあ!？」

さすがに驚きのあまり声が大きくなった。なんじゃそりや。邪神級モンスターはテ

イムできないはずだろ。そもそも、こいつはタイマーじゃないし。

「いったい何があつたんだよ」

『えー、と．．．人、じゃないから、モンスター助け?』

その言葉を聞いたときに、俺は思い出した。——そういえば。

「あの時の、あれか?」

『そうそう．．．って覚えてたのかよ!?!』

「あの時は、それより前の記憶にブロックがかかってた、ってだけだ。それに、あの時は既に俺は思い出してたぞ」

『そうなのか．．．。まあとにかく、そういうことで』

「OK、時間は?」

『できれば今晚。後はお前だけだ。実を言うと、最初はレインに伝えてもらおうか迷ってたんだけどな』

「よかつたな直接伝えて。そうじゃなきゃ5回上乘せ料金だったぜ」

『．．．だと思つたんだよなあ．．．』

電話口でため息をつくキリトに、俺はふふつと笑った。

「ま、とりあえず、だ。こっちでもキャリバーのクエストについてはちよいと調べてみる。伝手もあるしな」

『分かった、頼む。集合場所はリズの店な。じゃ、また後で』
「おう。またな」

そういつて、俺は電話を切る。直後に俺は電話を繋——こうとして、アミユスフィアに手を伸ばした。あのネットゲ廃人のことだから、こっちのほうが連絡を取れる確率は高いと踏んだ結果だ。

さて、インしたときに、俺は即座にフレンドリストを呼び出した。さーて、あいつは……やっぱリインしている。メールでホイチャを繋いでいいか聞くと、近くにいるから飛んでくるということだったので、待ち合わせることにした。

ユグドラシルシティの酒屋——他ならぬエギルの店だ——で一杯ひっかけていると、待ち人はやってきた。

「ごつめん、お待たせ」

「そんなに待ってないから大丈夫だ。ほい、駆け付け一杯」

そういつて、彼女——フカ次郎に一杯差し出す。彼女自身の年齢は果たして成人しているかどうかは分からないが、場酔いできる彼女にとってみればこれは十二分だったらしい。直接受け取って、一気に飲み干す。そのままグラスを置くと、彼女は切り出した。

「で、聞きたいことって何さ」

「エクスキャリバーについてだ。なんかクエストがあるそうじゃん？どんなのかなーって」

「あー、あれねー……うちは参加しないよ。いろいろ事後処理が面倒そうだから」
「なんじゃそら」

「そつちにも依頼が行きそうなもんだけど……来てないんだね、その様子じゃ」

「ああ」

事後処理が面倒くさいタイプのクエスト？となると、大体想像がつく。まあ、伝説級武器の獲得となれば競争になることは間違いないが、事後処理が面倒となると――

「採取かスローター、か？」

「ご明察、今回はスロータークエ」

スロータークエストとは、指定ターゲットを一定以上狩りまくるクエストの事。漢字だと「虐殺」と書く。俺はあまりこの漢字を好きではないので、大体スローターと言うことにしている。で、特定モンスターを一定数狩ることが条件のクエストなら――

「ポップの取り合いになってるわけか。確かに面倒だな、後が」

「そ。特にうちみたいな完全中立の傭兵ギルドは、ね」

「ついでに言えば、実力が認められてるがゆえに、か。有名人は辛いな」

「いやー照れるなー」

照れたようなフカに、俺はふっと笑って、エギルの奥さんにもう一杯、飲み物を注文した。

スロータークエのようなものは、結果と数的有利の因果関係が強いクエストの一つだ。一騎当千の奴を数人集めるより、ある程度以上の実力者を十数人揃えておけば、ポップの取り合いにもカバーできる範囲も大きく広がる。フカ率いるドッグアンドキヤッツは中立の小規模傭兵ギルドで、実力は旧ALO時代からよく知られていた。今でも、縛られたくないからという理由でどここの派閥にも所属していないが、引く手は数多だろう。今回のスロータークエも、おそらく複数の組織から依頼が来て、そのすべてを断っている、とみた。

「そのクエストの詳細って分かるか？」

「ん、ちよつと待って」

そういうと、彼女はメニューを操作して、一枚の羊皮紙を取り出した。それをテープルに広げると、そこにはクエストの詳細が書いてあった。

「それ上げる。どうせ私たちには必要ないし」

「おう、サンキュ。場所はヨツンヘイムで、対象は動物型邪神か。そういえばあそこには人型の邪神と動物型邪神が入り混じってたっけな」

「そうそう。ついでに言うくと、敵対してるのも変わらない。で、今回に限ってかみだけど、人型と動物型が戦ってるところに、人型を支援して動物型を倒しても、攻撃されることはない」

「なるほど。全滅するならいざ知らず、って話か。クエストのNPCは、スイアチでいいのか。発音しづらいな」

「私も調べてみたんだけど、こいつは北歐神話の巨人の一人、だって。たぶん、氷の巨人だと思う」

「なるほどね」

氷の巨人が力を借りるために、こちらにクエストという形で依頼を出してきた、と言うことか。なるほど、その筋書きは理解できる。が、

「・・・解せないな」

「え?」

「動物型邪神と人型邪神が真つ向からタイマンやつたら、大体人型邪神が勝ってた印象なんだよ。ごく一部の例外はあるけど、それは大体なんかしらのイレギュラーがあつてのものだし。となれば、わざわざこつちに依頼せずともいいんじゃないか、って」

「言われてみれば、確かに。なんていうか、まるで狩りだよな」

「狩り、か。それなら納得がいく。PKするのは、基本的に9割がた成功するときには仕掛

けてなんぼだからな」

「残りの1割は、何かしらのイレギュラーってやつ？」

「ご明察」

イレギュラーと一口に言うが、これは相当いろんな要素がまじりあっている。例えば、足元が突然崩れるとか、予期せぬ乱入者とか。枝を踏むとかいう凡ミスは除くし、そのくらいなら俺は殺しきる。と、ここで思い出した。

「なあ、北欧神話って確か、オーデインが出てくるやつだったよな？」

「え？あ、多分。．．いやそうだね。ギリシャ神話がゼウスだから」

「て、ことは、フェンリルとかヨルムンガンドとかも出てくるはずだよな」

「なの？」

「．．．人選ミスったわ」

「突然の罵倒!？」

「自分の頭の出来を考えてからその反応は言え」

「うぐ」

俺の反論に、フカがうめく。こいつはサボって遊んで単位が危なくなっているクチで、知識的な意味で頭がいいほうではない。どちらかと言わずとも体に叩き込むタイプだ。まあとにかく、

「確か、北歐神話の最終幕って、ムスペルヘイムからスルトが出てきて世界を焼いて終わったはずなんだよな。で、焼かれた世界には、ニブルヘイムっていう氷に覆われた世界もあつたはずだ」

「氷の世界ごと炎の世界が全部焼き尽くした、ってこと？」

「ああ。俺も北歐神話について詳しいわけじゃないんだが、確かその前にフェンリルって氷の狼がオーディンを殺してるはず。なら、氷の世界の力が強くなりすぎたために、一回世界を焼き滅ぼしてリセットした、とも考えられるんじゃないか？」

「えっと……それがどうつながるの？」

「つまりだ。このままいくと、人型邪神のみが残って、氷の世界が強くなる。で、これとさっきのことを当てはめると、その後世界が焼き尽くされる可能性がある。そうなれば、マップデータが大きく書き換えられることになるから、今まで俺たちが積み上げてきたものが、最悪全部パーになる」

「ごめん、それはさすがに深読みしすぎじゃない？それに、そんな大規模なマップデータ書き換えなんて——」

「ありうるんだよ、これが。この世界はSAOと同じ基本データで構成されてる、って知り合いのハッカーが言ってたからな。SAOの最後はあの城の解体、つまりマップデータのオールデリートであつたらしいんだから、この程度わけないだろうさ。」

ま、フカの言う通り、深読みしすぎであつてくれ、とは俺も思うがな」

俺の最後の言葉に、フカは思わず黙り込んだ。その反応を見て、俺は一つの羊皮紙を取り出す。そこには、ヨツンヘイムへの近道が書かれていた。

「……これつて!?!」

「俺の知り合いが見つけた、ヨツンヘイムへの近道だ。こればかりはマンパワーがいる。最悪、こつちの俺には黒天がある。伝言にはあの手段を使うから、万が一の時は頼む」
フカはしばらく黙つて熟考する。彼女もギルドの長だから、いろいろ思うところはあ
るのだろう。

「分かった。何かあれば教えて」

「おう、頼んだ。俺はこれから、知り合いに協力することになつてるから、ここらへんで失礼する」

「そつちに私たちが加わることは?」

「すまん、これ以上の追加は人数オーバーだ」

「ありやそりや残念」

それを最後に、俺は席を立った。

向かう道すがら、俺はぼそりと問いかけた。

「どう思う?」

「きな臭いけど、ありうる話ではあると思うよ」

「・・・だよなあ・・・」

胸ポケットからの返答にため息交じりにつぶやきつつ進む。やれやれ、長い一日になりそうだ。

そのまま、俺はリズの店へ向かった。武器はあらかじめ預けてあったので、その回収も兼ねて、だ。

店にはすでに全員集合になっていた。アイテムの補充に行っていたはずのアスナたちまでしつかりと集まっている。ありがたく回復アイテムと武器を受け取る。

「おう、サンキュな」

「どうだったんだ？」

「クエストはスローター系。人型邪神を援護して動物型邪神を狩るタイプ。で、クエストのNPCはスィアチ。北欧神話でいう、氷の巨人だつてよ」

「なるほどなあ・・・。自分たちの力を強くしたいから協力しろ、見返りに宝剣をくれてやる、つてところか」

「たぶんそんなところ」

例の世界を焼き尽くす、という俺の仮説は、今は黙っておくことにした。フカは部外

者だが、協力の可能性も高かったから、煽る目的も含めていっただけだ。今回の場合に
関しては、無用な混乱を生むだけだから喋るのは愚策と判断した。

「さて、俺は打ち合わせ通り先に行くぜ」

「おう、向こうでな」

俺も一緒に移動したかったのだが、いかんせん黒天ワイルドはあまりに大きすぎて、あの通路
からでは通れない。と言うことで、必然的に俺だけ別ルートを通る必要があるわけで。
つまりは、例の近道を通ることができないということでもある。黒天の翼はヨツンヘイ
ムでも凍り付くことはないのです、このイグシテイから一気に急降下することで速度を
ブーストしながら急行することができる。ちなみに、レインも同じく後ろからついてく
ることになっている。

そういうわけで、一足先にヨツンヘイムに来たわけだが。

「ひつでえなこりゃ」

ポップの取り合いな上に、やれ俺が先だ、いいやこつちが先だ、なんて状態になって
いる。ところどころで小規模なPvPも始まっているようだ。俺の方は、特にどこに加
わるわけではないことと、そもそもシノンのような奴じゃなければ攻撃が届かない高度
にいたこともあって、特に問題はなかった。

「こりゃ参加を見送った判断は正しいっほいぜ、フカ」

ここにはいない友人へ、そんな言葉をかける。確かにこれは、彼女たちが与したことで勢力争いに巻き込まれかねない。彼女としても、それは本意とは程遠いはずだ。

トンキー——例の動物型邪神のことだ——を待っている間、集合した他の面々に、俺は声をかけた。

「フライパスしてきたが、ひでえもんだぜ。こりやフカたちが関わりたくないのも領ける」

「そんなに殺伐としてるのか？」

「ところどころ、小規模PVPがあるくらいにはな。フカにも言われたが、俺に依頼が来なかったことが不思議なくらいだ」

そんなことを言っていると、トンキーと呼ばれた邪神が来た。

「んじやま、おたくらはそっちだな。俺の後ろは、レインだな」

「ほかに適役がいるとでも？」

「違うない」

そういうと、俺は黒天の手綱を握りなおした。その後ろにレインが乗り、腕を俺の体に回す。トンキーの背に他の連中が乗ったことを確認して、俺は手綱を握りなおした。

「さーて、しっかりつかまってるよー」

俺の言葉に反応してか、腕の力が強まる。それを確認して、俺は飛び立たせた。

さて、その後は普通に飛んでいくものだと思っていた。が、突然トンキーが急降下を始めた。

「悪いレイン！黒天！」

それだけ言うと、俺はトンキーに並びかける。その図体からか、機動性はこちらの方が上だ。すぐに追いついて、低空でフライパスする。

「うわ・・・」

「見たくないならあんまり見るなよ」

後ろから聞こえた声に、俺は静かにそれだけ答える。俺はさつき見たから大体どんな状態か分かっているが、積極的に見たいものではないこともまた事実だ。と、トンキーに乗っている面々から疑問の声が上がる。

「あれ、なんで動物邪神を倒した後、攻撃されないんだ？」

「マスターテイマーが装備でフルブーストしても邪神型モンスターのティムはできないはずですよ!？」

「言ってなかったっけか。今回に限っては、人型邪神を援護して動物邪神を倒しても攻撃されないんだってよ。今回のクエストの仕様なんだろ」

「変な仕様だな」

そんな会話をしていると、俺たちの前に大きな女神然としたNPCが現れた。その女

神（仮）は、俺たちに向かって言った。

「私は、湖の女王ウルズ。我らが眷属と絆を結びし妖精たちよ。そなたらに、私と二人の妹から一つの請願があります。どうかこの国を霜の巨人族から救ってほしい」

その言葉を言った直後に、俺の胸ポケットからささやきが聞こえた。

「この人、言語エンジンモジュールに接続されてる」

「一種のAI化されてるってことか？」

「そういうこと。．．．いよいよきなくさくなってきたね」

声の主は他ならぬストレアだ。戦力は増えるに越したことはないのです、こうしてナビピクシー状態で連れてきていた。さつき、ここに来る前に話していたのは、ほかならぬ彼女に対してだ。

そうして、ウルズはヨツンヘイムの成り立ちについて話し出した。

曰く、ここはもともと、緑と生命に満ちた場所だった。が、すべての鉄と樹を断つエクスキャリバーをウルズの泉に投げ入れたことで、世界樹からの恩寵が失われ、氷に閉ざされた。そして、この氷の世界の主は、彼女の眷属を皆殺しにして、自身の支配を絶対のものにしようとしている、とも。

「そのままヨツンヘイムの力が強くなれば、スルトが出てきてラグナロクかねえ」

「ちよ、シャレになつてないわよそんなの！第一そんなのできるわけが——」

「いえ、あり得ると思います。この世界はSAOと同じ、オリジナルのカーディナルを使っている、SAOにおける最後の命令は、あの鋼鉄の城の解体でしたから」

「極端な話、極端なクエストを使ってラグナロク起こすことも十分に可能、つてことはいわけだな、ユイちゃん」

俺の言葉をとつさに否定したりズを、ユイちゃんが補強する。ウルズはそのまま、一つのメダリオンをリーファに渡した。

「そのメダリオンから光が失われたとき、この世界から私の加護は完全に消滅するでしょう」

真つ黒になるまでにケリをつけろ、つてことか。

「一つ聞かせろ。下の人型邪神の勢いを緩めることができれば、黒ずむ速度は落ちるのか?」

「できるのであれば」

「なら話は簡単だな。レイン、少し手綱を頼む」

それだけ言って、俺はレインに黒天の手綱を握らせた。即座にメニューを開いて、羊皮紙を取り出して文章を打ち込み、フカとの共通アイテムタブに放り込んだ。

彼女とは、敵対もしないが共闘することも多い。というか、お互いに大きな損害が出ると分かっているぶつかるバカはいない。それならば、落とすどころがあればいい。そ

のために考えたのがこの手段だ。普段は何も入れない共通タブを使って、文章を記録した羊皮紙やアイテムを放り込むことで交渉とする、というものだ。お互い、何かアイテムが入ったら通知ですぐにわかる上に、普段何も入れないでおけばそれがどういう意図の物かも分かるというわけだ。

件のダンジョン、スリウムヘイムについてたとき、俺は声をかけた。

「ストレア」

「はいはい。下で時間稼ぎね？」

「おう、頼むぜ。フカたちにも協力依頼を出した」

「OK、任せて」

それだけ言うと、俺はキリトたちを追ってスリウムヘイムの中に入った。

58. 哀れ牛二匹

さて、やることは分かっているんだけども、これはさすがに。

「全く、軽く無茶言うよねあの人」

「本当にね」

私の声にこたえるのは、彼から借りた黒天の後ろに乗る形で回収したフカさん。彼の言葉通り、彼女のギルド、ドッグアンドキャッツのメンバーは、この事態の援護に回っていた。

「ごめんなさいね、あの人の無茶ぶりのせいで」

「いいってことよー。私だつてさすがに、ギルド本部をぶつ壊されるわけにはいかないしね」

スリウムヘイムは、位置的には央都アルンの直下に当たる。そして、ドッグアンドキャッツは数少ない旧ALOから存在する混成種族ギルドである以上、レネゲイドの集まる央都アルンに拠点を持つ。何かあれば、最悪は免れない。

「でも、どうするの?」

「もちろん、こうするよ」

言いながら、ストレアは武器を変えた。それは、驚くことに、

「ボウガン・・・!?存在したの!?!」

「たまたまドロップしたんだー」

これは本当の話。仕事柄、ただでさえもロータスのログイン時間は少なく、さらに彼はGGOにもログインしているため、ALOでエリーゼとログイン時間が重なることは稀と言って良い。そのため、エリーゼのインするときは大体ストレアが協力していた。そして、彼女らが挑んだクエストの中で、遠距離攻撃ばかりしてくるボスを撃破するものがあつた。彼女たちからしたら、遠距離攻撃を得意とする相手など、近くで飽きるほど見てきた。遠距離と近距離、その二つをまた平等に制するような馬鹿げた人間を近くで見ていると、対処など問題にならなかつた。で、その結果として手に入れたのがこれだった。普通の弓と比べると、手軽さと精度はこちらが上、射程距離と威力、そして連射速度は普通の弓が上、といった具合だ。というのは、ロータスに使い心地を聞いたときのお話。

「まずはあれ、行くよ」

「了解」

そういうと、彼女は背中から大剣を抜く。ねじれた二つの角をそのまま使ったような武器は、はつきり言って私のそれより重そうだが、彼女曰く、「パワーは力」、だそうなの。

脳筋と言つてはいけない。

まずはフカが飛び降り、大剣を振り下ろす。切り切る前に邪神を蹴つ飛ばし、そのまま受け身を取つて間合いを開く。フカさんにタゲが行つたところに、私がクロスボウを撃つ。一瞬人型邪神の動きが止まったところで、共闘をしていたパーティーの方にフカさんが素早く動いた。

「ほらほらほらほら、鬼さんこちら、手のなる方へー!」

さらにフカさんが挑発したことで、邪神はフカさんの方に攻撃をした。ということとは、必然的に共闘していたパーティーも巻き込まれるわけで。といっても、そのあたりはトッププレイヤーパーティー、問題なく回避する。ところに、さらに私がクロスボウで追撃する。足の遅い一人に向かって撃つたそれは、狙い通りヘッドショットとなり、一撃死を誘発した。その一矢で、下のパーティーも私の存在に気付く。魔法を放つが、私たちの高度には届かない。その間に、フカさんは追い付いた援護部隊の力を借りて、プレイヤーたちと戦闘に入った。その隙を狙つて、私はちよつと特殊なボルトを装填したクロスボウをさらに遠くに構えた。私は元MHC Pとして、ある程度マップやプレイヤーデータにアクセスすることができると。その応用だ。

——直撃しなくていい。かく乱できればそれで十分。

しつかり狙いをつけて、放つ。山なりに放たれたボルトは、着弾と同時に爆発した。

ロータスの持つ特殊な矢の一つである、爆裂矢から着想を得た、名前そのまま「爆裂ボルト」。混乱をしている隙に、黒天を飛ばす。狙ったポイントで飛び降りると、飛んでいる間に変えた、いつもの大剣を抜刀しながら振り抜いた。着地しながら受け身を取り、即座に立ち上がる。私にタゲが来たことを確認してから、ステップで回避する。距離を取ってから、私は指笛を吹いた。その音に合わせて飛び込んできた黒天の背中に飛び乗る。黒天は私の思った通り、爆裂ボルトの爆発でまだ混乱が抜けきっていないプレイヤーの上を低空でフライパスした。その私を追う形で、邪神のタゲがこつちに向いた。

「上にー」

私の掛け声で、黒天が上昇する。攻撃可能圏外に出たことで、タゲは下のパーティに移った。はたから見たら完全にトレインだが、こちらの目的を考えると仕方ないと割り切るしかない。

(時間稼ぎにも限度つてものがあからね・・・！)

私は上空でクロスボウをまた構えながら、そんなことを思つてスリウムヘイムを見上げた。



ゲーマーとしては、こういう未踏破ダンジョンは隅から隅まで見てみたいというのが本音だが、時間がない。今回は初見RTAモードで行くほかない。で、こういう場だと特に、魔法攻撃と物理攻撃、もしくは物理防御と魔法防御がバランスよく配分されているプレイヤーは重宝される。理由は至極簡単、どんな敵が出てきても一定以上で戦果が挙げられるから。俺の場合、物理攻撃力と、属性付加魔法を併用した近距離魔法攻撃と、弓を利用した中長距離物理攻撃、弓に属性負荷魔法を組み合わせた中長距離魔法攻撃と、自分で言うのもあれだがまんべんなくどんな状況でも対応ができるステータスバランスになっっている。だが問題は、今回のパーティ、致命的に魔法攻撃力に欠けているという点だ。アスナはあくまでヒーラーなので、魔法攻撃力はお世辞にも高いとは言えない。アップデートで追加されたソードスキルには魔法攻撃力も付与されているが、あくまでメインは物理で、本職に比べれば雀の涙もいところ。一般的に考えれば、このパーティの突破力を考えれば全く問題はないレベル。だが、それは普通に強い相手なら、のお話。つまり――

「くそが、やけくそみたいな物理耐性しやがって」

「どうにかならないかロータス！」

「無理だ。つーかやれてたらやってるっつーの」

キリトの問いかけに、苛立ち交じりに俺が返す。今相手にしているミノタウロスタイプの邪神は二体一組。うち一体は魔法耐性が高く、もう一体は物理耐性が高いのだ。幸いなことに、両方共耐性が高いということはなく、物理は魔法で、魔法は物理で殴ればいい。攻撃魔法を一応の実用レベルまで仕上げているのは俺だけなのだが、いかんせん俺だけでは突破力が致命的に足りない。レインも一応それ系統は習得しているが、そもそも彼女の魔法用途は若干特殊なので、直接火力としてはカウントしづらい。

なら物理耐性の低いほうをタコ殴りにしようと思っても、ある程度HPが減った段階で後方にさがり回復、その間に物理耐性が高いほうが前に出てきてタンクの役割を果たす。時間があればゆっくり料理することも考えるのだが、今回は時間がない。

「お兄ちゃん！メダリオン、だいぶ黒くなってる！死に戻りしてる時間はなさそう！」
リーファから声がかかる。と、いうことは、時間的余裕は少ないということか。こうなったら仕方ないか。

「レイン！あれやるぞー！」

「え!?この状態じゃ——」

「かまわん！こいつらはあれくらい躲す！」

俺の言葉に、他は疑問符を浮かべる。というか、レインの反応のほうが正しい。

レインが詠唱を開始する。その詠唱の意味が分かるリズベットだけがぎよつとした。

まあ当然と言えば当然で、この魔法はもともと攻撃に使うものではないからな。

背後から大量の剣が降ってくる。その直後に俺が走り出した。それは例のミノタウロスに突き刺さる。もちろん、刺さらないものも多いが、そこは問題ない。地面に突き刺さった武器から刀を二本、つかんで引き抜く。まずは幻狼斬で足を切り裂き、哭空裂蹴撃につなげる。さらに断空牙につなげ、冥斬封につなげる。そこまでつないだところで、次々に剣がこちらに飛んできた。

「ロータス君！」

「了解！」

手持ちの刀を投げつける。それによって、完全にヘイトが俺に向くと同時、回復が阻害されてほんの少しだが確実に、目に見えてHPが減る。そのまま、俺は突き刺さった剣を持ち替え続け、突撃ソードスキルを連続発動する。最後の俺のチャージと、アスナのとどめが空中と地上ですれ違う。その間に、ボスだったポリゴンが散った。がら空きの俺の背中に攻撃しようとしていたもう一体のミノタウロスは、相棒が撃破された瞬間に、その動きを止めた。

「よし牛野郎、そこに正座」

寒さからか、若干歯を鳴らしながら放たれたクラインの言葉に、俺たちは各々の得物を構えた。

——ちなみに、それからは5分もかからなかったことを追記しておく。さすがは筋パーティーである。

さて、撃破した後はすぐに移動、の予定だったのだが。

「おいおい、レインにロータス、さっきのは何だよ?」

「言わなきゃ・・・ダメだよなあ・・・」

「たりめーだ!」

俺の言葉に、俺たちは揃って顔をしかめた。

「私のは、オリジナルの・・・なんて言ったらいいんだろ、これ」

「さあ?一応は魔法でいいんじゃない?」

「じゃあ、オリジナル魔法、つてするね。名前はサウザンドレイン」

「あれつて、聞き間違いじゃないければ、レプラコーン専用魔法よね?」

「うん」

「レプラコーン専用?つてことは、鍛冶に関するものか?」

「正確にはその応用。リズならわかると思うけど、大成功つてわけじゃないけどそれなりの成功品つて結構たくさんあるのね。それを空間のはざまにあらかじめ潜ませておいて、射出する魔法」

「で、俺の方は、サウザンドレインとの連携を前提としたOSS《群》、〃ワイルドコン
ビネーション〃」

俺の言葉に、その場にいた全員が絶句する。

「それってつまり、スキルコネクト剣技連携使えることが前提、つてことですよな？」

「もちろん。というか、そもそもこれはレインとの連携を前提として作ったOSSだから、他の誰かが使えるとは思ってない。実用性なんざ完全に度外視した、超イロモノOSSだ」

ついでに言うのと、試し打ちをしてみたところ、条件付きで30連撃を超えたところまで行つたことを確認している。これはSAO時代の二刀流最上位ソードスキル〃ジ・イクリプス〃を超えるものだ。漸毅狼影陣ざんごうろうえいじんみたいな変態技を除けば、ヒット数は現行ALOの中でもぶつちぎりクラスのトップだ。もつとも、運が悪いと10ヒットすらしない。今回もぶつちやけ半分ギャンブルだったが、的がデカかったので問題ないと判断、強行した。

「つーかそもそも、味方巻き込むこと前提でお前使させたな？」

「だつてこのくらいだつたら躲せるじゃん？」

「躲せなかつたときは？」

さつきも言ったが、最大で30連撃以上繰り出せるということは、それだけの量の剣

が飛んでくるということ。それを躲せなかったら……まあ、うん。お察し下さい。
「目をそらすな！」

「まあ、時間もないし、先急ぐぞ」

「話題をそらすな！……時間が無いのは事実だけど！」

追及を逃れながら、俺たちは先を急いだ。

59. 聖劍

さて、RTAモードだから、こっちは急ぎ足だ。と、そんなときに、あからさまに檻が置いてあった。

「誰か・・・誰か、助けてはくありませんか」

儂い声でしゃべりかけるのは、中にいる女性。真っ先に助けに行こうとしたクラインを、残りの全員が目顔で止めた。

「罨だ」

「罨ね」

「罨です」

即座にキリトとシノンとシリカが声をかけた。ま、俺もそう思う。だが――

「なあ、あんた、どうしてこんなところにいるんだ？」

「私は、スリュムに奪われた秘宝を取り返しに来たのですが、捕まってしまつて・・・」

そこまで話を聞いたところで、ユイちゃんがこちらに向かって話しました。

「この人、言語モジュールに接続されているだけでなく、HPがイネーブルになつてます」

「AI化された、共闘もしくはぶっ倒せるNPC、ってわけか？」

「はい。ただ、この場合だと——」

「罨よ」

「罨ね」

「罨だと思おう」

「罨だと思えます」

それを聞いて、さらにリズとアスナとリーファが続ける。普通に考えれば罨以外の何物でもないんだが——

「あからさま過ぎない?」

「そうなんだよなあ……」

レインの言葉には頷きを返す。基本的に罨はバレないように張ってナンボだ。と、少し考えたところで思い出す。

「なあ、ユイちゃん。ここって確か、スリュムの城だったよな?」

「え? ああ、はい」

「あんた、名前は?」

「私はフレイヤと言います」

——まさか。

「なあ、あんた、連れがいなかったか？ 確か、えつと、ロキだっけ？」

「それが、お恥ずかしいことに、はぐれてしまつて・・・」

その言葉に、俺はにやりと笑つた。——ビンゴ。

「俺たちの目的は、スリウムをぶちのめして、エクスキヤリバーを引き抜くこと。あんたの目的は、スリウムに奪われた秘宝を取り戻すこと。スリウムぶちのめした後、攻撃してこないと約束してくれるなら、一緒に行こう」

「それは願つてもないことです」

「決まりだ」

それだけ言うと、俺はニバンボシを一閃した。格子がきれいに切り取られ、人ひとりが出られるくらいの空間ができる。そこから、彼女は外に出てきた。

「え、いいのかよ!？」

「安心しろ。今のやり取りで確信した。俺の予想があつていれば、こいつは心強い援軍だ。ぶちのめした後、攻撃しない約束も取り付けたし、さすがに協力した相手をプチつとやるほど不義理でもないだろ、仮にも神様が」

「え、神様なの!？」

「元ネタ通りなら、確か豊穡の女神のはずだ。まあ、——いやなんでもない」

「なんだよ、気になるじゃねえかよ」

「なあに、今回に関しては、土壇場で知ったほうがたぶんいろいろ爆発してやる気出ると思いうから」

クラインの言葉はさらっと流す。その直後に、リーファが思い出したような顔をして、すぐにジト目になった。

「人が悪いですよロータスさん」

「安心しろ、自覚はある」

その言葉にため息をついたリーファの肩を、レインが後ろからポンと叩いた。



何とか低空で回避をしながら、私は何とか時間を稼いでいた。それでも限界はあり、何とか回避を繰り返しても、下の動物邪神狩りパーティの攻撃をかすめることが多くなってきた。黒天のHPは私にはわからないが、そこまで高いわけでもないだろう。

「ごめんね、もうひと踏ん張りお願い」

高空に退避して黒い背中をゆっくりと撫でながら語り掛ける。と、グルルと低い声で黒天は鳴いた。もう一度両手剣に変えて、私は黒天から飛び降りた。空中で両手剣を持ちなおし、ちょうどいいタイミングでカブトワリを繰り返す。ソードスキルの着地扱い

で大きく着地ダメージが軽減されることは、過去に検証を済ませてある。私の攻撃は人型邪神の背中をぎっくりと切り裂いた。簡単なソードスキルだったため、ソードスキルの後の硬直時間は短い。すぐに振り返って、相手の魔法に合わせて、私は二回担ぐようなモーションを起こして、ソードスキルの溜めを作る。お構いなしに何人か魔法を放つが、すぐに一人が気付いた。

「撃ち方やめ！やめろ！」

——だが、気が付いたところでもう遅い。

「だらつっしやあああああいいい!!」

掛け声とともに、私がソードスキルをぶつ放す。両手剣上位ソードスキルが一つ、
しんどりゆうえんざん震怒竜怨斬”。非常に長い溜めの後、受けたダメージの10倍を上乗せして放つ一撃。セオリー通りタンクが前面にいたが、もともと強力なソードスキルが、先ほどの魔法ダメージを上乗せして放たれた結果、タンクは何とか残ってもその後ろが少なからずリメインライトになった。

「くそアマ・・・！」

タンクの一人が毒づく。確かに、いくら受けて10倍返しするソードスキルと言っても、これだけの被害だとさすがにそれも納得できるお話。ただどこつちも絶体絶命だ。なにせこのソードスキル、溜めも長い、上位ソードスキルゆえに硬直も長い。その間

に袋叩きにされる。——とは思っていなかった。その後ろから、槍系ソードスキル、クリムゾングラインド、や、片手剣系ソードスキル、ヴオーパル・ストライク、両手剣系ソードスキル、アバランシユ、その後ろから両手剣系ソードスキル、クラツシユ、チェイサー、両手槌系ソードスキル、ハードチェイサー、などが色とりどりの光を散らしながら残った数人を食らいつくした。

「さすがフカさんたち。ありがとう」

「とうか、あんた、ここまで計算に入れたうえでやったでしょ」

「あ、バレてた？」

「バレないと思った？」

フカさんの言葉に、私はただ笑うしかなかった。実際、おそらく彼女たちはやってくれるだろうという計算の上でやったことなので何とも言えない。

「さて、ここは終わった。次行くよー」

「了解!!」

フカさんの号令で、彼女たちは素早く離脱する。私も、残った人型邪神の攻撃をよけて、もう一度指笛を鳴らした。



さて、急いでダンジョンを進むと、いかにもな場所に出た。

「これってもしかしくなくてもそうだよな」

俺の言葉に、ユイちゃんが頷く。直後、アスナとリーファが詠唱して、バフをかける。それからさらに、フレイヤがバフをかける。と、左上のHPが増えた。

「こんなのあるのか」

「私も始めてみました」

一同驚きも冷めやらぬうちに、ボス部屋の扉を開けた。

ボス部屋に入ったとき、真っ先に目に入ったのは、黄金に輝く宝の山だった。

「うわぁ・・・」

「ストレージに入れて持ち帰りたいところだけど・・・!」

そういうと、俺は詠唱を始める。同時に、左手のアローブレイズのギミックを発動、弓状態にした。詠唱が終わると同時に矢をつがえて放つ。それは財宝の近くに着弾し、電気をまき散らした。

「羽虫めが・・・我が財宝に手を出すか!」

「興味ないからな。こっちの目的の一つに、その山の中に埋もれてるだろう物があるんだよ。ま、今ので大体の目星がついたがな」

「ほう……ならばそういうえばいいものを。頭を垂れるというのであれば、宝物など一つや二つと言わず持てるだけくれてやる」

「どうだか。あんたはそうそう気前よく手放すような奴じゃない。そうだろう？ スリュムさんよ」

「わしを誰か知っていて、羽虫の分際で菌向かおうとするとは愚かな。

——ん？そこにいるのは、もしやフレイヤ殿では？ いよいよわしに嫁ぐ気持ちは固まったのか？」

「と、嫁ぐ?!」

「無礼者！我が一族の秘宝を奪ってにおいて、まだそのような世迷言を！」

「だよ、な！」

無理矢理、俺は金色の槌を引っ張り出した。——雷に反応したのは、間違いなくこいつのはず。

「うるうらあああ!!」

見た目の数倍はあろうかという重さのそれを、ハンマー投げよろしくぶん投げる。それは放物線を描いて、フレイヤの近くに飛び、彼女がそれをキャッチした。

「っしやあ!!」

「しやあ！じゃないよ危ないよ!?!」

「それはすまん。でも、これで、——本来の持ち主の手に帰ったわけだ」

俺の言葉を全員が理解する前に、フレイヤの体が数倍に膨れ上がった。その顔は元の顔立ちはかけらもなく——

「おっさんじゃん!!」

キリトとクラインが驚きのあまり絶叫する。知ってた。それもそのはず、これの元ネタ、結構有名なお話なのだ。

「って！蓮野郎は知ってたんだろ!？」

「おう。有名な話だからな、ツールが女装してミヨルニル取り返しに行くってやつ。さっきの問答でもあったロキは、その時の連れ」

信じられないかもしれないが、原典からしてこんなストーリーが存在するから仕方ない。まあ、それはそれとして、だ。

「今ならツールにヘイトが向いてる。やるぞ」

さつきみたいな化け物耐性を持っているのならいざ知らず、こいつはおそらく全体的に高いステータスをもつ、というだけのはず。なら、出し惜しみは無用。

「ロータス君！使って！」

その声とともに、ボスの近くに剣が降ってきた。誰の物かなど、確かめるまでもない。相変わらず気の利く娘だ。

「サンキュー！」

この状態なら、遠慮なくやれる。スリュムの足元を狙って、俺が剣をとつかえひつかえしてソードスキルを連発する。たまにストンプが飛んでくるが、俺自身剣を投げて再利用しているうえに、レインも剣を回収しながらなので、弾数は実質無限だ。そんなことを繰り返していると、スリュムは膨大なポリゴンとなった。

ふう、と、長くため息をつき、俺は刀をしまう。AGIの高いキャラシユピーゲルでひたすら走り回ってSMG撃ちまくるのも大変だが、これはそれとは違う大変さがある。特に剣技連携は結構集中力を使うので、これだけ連発すれば余計に、だ。

「協力に感謝するぞ、妖精たちよ。おかげで余はこの雷槌を取り戻すことができ、宝を奪われた恥辱をそそぐことができた。そして、私をフレイヤとしてではなく、ツールと分かって戦っていたおぬしには、褒美を取らす」

「そりやありがたいこと。して、その中身は？」
「まあ急くな。」

——この雷槌ミヨルニル、正しき戦に使うがよい。では、さらばだ」
そういつて、ツールは姿を消した。と、ここで気が付く。

「なあ、エクスカリバーはどこにあるんだ？」

「皆さん！玉座の後ろに、階段がジエネレートされています！」

「と、いうことは、そこに!？」

返答を聞く前に、キリトを先頭に走り出した。

階段を駆け下りると、そこには黄金の剣が鎮座していた。深々と黄金の剣は突き刺さっており、なかなか抜けそうにない。

「キリト、頼むぜ」

俺の言葉に、キリトが進み出る。STRで勝るのはレインかもしれないが、ここでレインに任せるのも変な話だ。だがまあ、想定はしていたが、なかなか抜けない。全員の応援の甲斐あつてか、なんとか剣は引っこ抜けた、ものの。直後に、ドガン!と、不穏な轟音が響き、城が振動しだした。

「なあ、これ、もしかしなくとも——」

崩れる？

と、言い切る前に、地面が崩れた。

「スリウム Heim 全体が崩壊します! 脱出を!」

「脱出って言っても……!」

戻るための階段には、断層のような大きなズレが発生していた。普通で考えれば戻れない。

「ちっ、しゃーないか!」

舌打ち一つ、俺は指笛を吹いた。かなりの間の後に、遠雷のような咆哮が聞こえた。

「リーファ! トンキーを!」

俺の声に、リーファがトンキーを呼ぶ。と、ここで思い出す。

「メダリオンは!?!」

「全然大丈夫! 一割くらいは残ってる!」

「そいつは重畳!」

そんなことを言っていると、まず黒天が到着した。真っ先に俺が飛び乗り、直後に阿吽の呼吸でレインが飛び乗る。その後、駆け付けたトンキーに、残りの全員が乗る。……のだが、

「キリト! 早く!」

そんなことを言ってもらえないのは、キリトの様子を見ればわかる。今の状態では、明らかにエクスキャリバーが重すぎるのだ。

「まったく……!」

それだけ毒づくくと、キリトはエクスキャリバーを放り投げた。その直後にトンキーに飛び乗り、離脱する。

「黒天!」

それをみた俺の一言に、黒天は正確に応えた。即座に最高速でダイブすると、一気に剣に追いつく。だが、ここで問題が一つ。キリトのSTRでギリギリなら、それより低い俺のSTRでは確実に保持できない。

「私が剣を！」

「頼んだ！」

後ろから聞こえた声に、俺はノータイムで応えた。俺なら無理でも、レインなら問題ないはずだ。最も、それはステータス上のお話。

「分かっているとは思いますが、チャンスは一回だけだからな！」

「了解！」

正確に、回転する剣に追いつく。追い越した直後に「獲った！」の声。そのまま、何とか上昇する。

「すまん、重いだろうが頑張ってくれ……！」

手綱を握りながら語り掛ける。人で言えば気合を入れるように、黒天は少し長めに叫ぶ。その声と同様に少しずつ上昇し、その高度はトンキーに追いついた。

「はい、これ。重たいから注意して」

それを、身乗り出してキリトが受け取った。……やけに静かだが、大丈夫か？

「ふ……」

「ふっ？」

「二人ともマジかっけー!!」

と、思っていたら、全員が唱和する形で応える。

「なんですか今の!?!」

「一気にダイブして追い付いただけだ」

言いながら、俺は黒天の首筋を撫でる。そもそも、こいつが答えてくれなければ、この無茶な作戦は成り立たなかつた。と、ヨツンヘイムに早くも変化が現れた。

今まで氷に閉ざされた銀世界だったヨツンヘイムに緑が戻った。光が戻り、緑が萌えていく。これが、世界樹の恩寵の満ちた世界、ということなのだろう。とどこどこで、トンキーに似た邪神がくおおーんと鳴いていた。

トンキーの前に、またウルズが現れた。

「見事に成し遂げてくれましたね。エクスキャリバーが取り除かれたことにより、木の恩寵は地に満ち、ヨツンヘイムはかつての姿を取り戻しました。これもすべて、そなたたちのおかげです。」

私の妹たちからも、そなたらに礼があるそうです」

そういうと、今度はプレイヤーと同じくらいの大きさのNPCが両脇に一人ずつ現れた。

「私はヴェルザンディ。ありがとう、妖精の剣士たち」

「私の名はスクルド。礼を言おう、妖精の戦士たちよ」

その言葉とともに、二人からそれぞれクエストの報酬が振り込まれた。・・・こりや相当だな。

「私からは、その剣を授けましょう」

その言葉で、キリトの腕から力が抜けた。ようやく装備品扱いになって、その重量が抜けたのだろう。

「決して、ウルズの泉には投げないように」

「そうしようとしたらぶん殴って止めるから」安心を」

俺の若干おちやらかした口調に、女神たちはほほ笑んで、別れの挨拶を告げた。その背中、クラインが声をかける。

「スクルドさん、連絡先をー！ー!!」

・・・うん、そうだった。こいつはこういうやつだった。その言葉に、スクルドはもう一度振り返り、優雅に手を振った。

「クライン。あたし今、あんたの事心の底から尊敬してる」

リズの感想に、俺は呆れたように笑った。

マザーズロザリオ編

60. 絶剣

キャリバーの話が終わってからしばらくして、俺はあるうわさを聞きつけて、何とか昼間にダイブしていた。そのまま、キリトたちが暮らす、ログハウスを訪れていた。

「ようキリト。課題進んでるか？」

「ああ、大丈夫だ。・・・つーか、こつちまで来てわざわざそんなこと言うなよな」

「ハハ、悪い悪い」

笑って言う。ここには全員、お互いのリアルをある程度知っている仲の連中しか来ないため、問題なかった。

「で、なんだよ、話って？」

「なんでも、超絶強い辻斬りプレイヤーがいるらしいじゃねえか。どうなのよそこんところ」

「ああ、あれか・・・」

そーいうと、キリトは遠い目をした。

「強いのか？」

「そりやもう。戦うルールはこっちに一任なんだが、そのかわりにとんでもなく強い」
「ほう。リーファとかは戦ったのか？」

「戦ったってさ。というか、キリトもリーファちゃんから聞いて、だったでしょ？」
「して、結果は？」

「全く歯が立たなかつたです。空中戦得意だったのに、デフォ技だけで押し切られちゃいました・・・」

「そりや相当手練れだな・・・」

俺の質問には、リズと本人が答えた。リーファはリアルで中学剣道全国クラスの強者だ。加えて、古参ALLOプレイヤーということもあり、空中戦で彼女の白兵戦闘能力で勝る相手はそうそういない。それがデフォ技のみで負けた、となれば、遠距離で封殺された可能性もあるが、

「絶『剣』、つていうくらいだから、白兵戦が強いのか？」

「AGI高めのスピード剣士タイプで、白兵戦一本。あんたみたいに魔法も交えるタイプでもないわ」

ちよつと待て。白兵戦一本だ、というのなら、

「空中白兵戦のみで完全にリーファが押し切られたってのか!？」

「お恥ずかしながら・・・」

「……いやいや、それは相手が悪いわ」

俺ですら、空中限定でリーファと当たったら、油断したら簡単にやられる。それが、あつさりと負けた、というのは、にわかには信じがたいほどだ。

「つかそもそも、それだけ強いと挑戦者いないんじゃないの？」

「いや、それが、報酬が片手剣系汎用の11連撃OSSなんですよ」

「……ワオ」

思わず絶句した。これまでのOSSの最大は、確かユージーンの8連撃だったはず。それでも破格なのに、11連撃というのはトンデモもいいところだ。俺たちのワイルドコンビネーションとか、漸毅狼影陣さんこうろうえいじんとかは縛りがキツ過ぎて到底実用レベルじゃない口マン砲だが、汎用性の高いOSSとなれば、その価値は破格だ。

俺が普通に真つ向からデュエルをやったときの実力は、大体上の中ぐらいいにあたる。ぶっちゃけ、キリトが負けるレベルとなれば相当なもののだが、って、

「キリトは戦つてないのか？お前なら、この手の話は真つ先に飛びつきそうなものだが」「戦つたさ。で、負けた」

「負けたあ?!?!?」

思わず声が大きくなる。キリトは、サラマンダーのユージーン将軍と並んで、ALO最強の一角に名を連ねる。そんな奴ですら負かす相手がいるとは。

「俄然興味が出てきたな．．．。俺も当たってみるか」

「確かに、お前ならワンチャンだな」

ことPVPや等身大クラスの人型ボスと限定すれば、俺はキリトにすら勝ち越す。であれば、俺なら勝てるかもしれない。かなり興味が出たので、連れて行ってもらうことにした。

さて、その辻デュエルが行われてる場所に来てみた、はいいものの。

「おい、あれ、マジか？」

「マジだ」

「人は見た目によらんなあ．．．」

そこにいたのは、可憐なインプの女の子だった。ぶつちやけ、ゴリゴリヘビーゲーマーのおっさん、つまり男だと思っていたので、これは意外過ぎた。

「さて、誰もいないのなら、次は俺でいいか？」

次の対戦相手を探す相手の子に向かい、俺は進み出ながら周りに問いかける。どうやらないようなので、そのまま対戦という流れになった。

「お、次はお兄さん？」

「ああ。対戦スタイルはこっちに一任と聞いていたが、間違いないか？」

「うん、そつちに合わせるよ。ボクはこれ一本、だけどね」

そういつて、腰に刷いた剣を叩く。その様子に、俺は目を細めた。リーファの言つていた通り、白兵戦一本らしい。

「なら、空中戦も地上戦も、魔法の有無もなんでもあり。その場にに応じて、適切な判断を取る。どうだ？」

「へえ！大体片方、つていう人のほうが多いのに、そんなの初めてだよ！面白そう！最初は？」

「地上で」

「分かった」

目を輝かせて返答すると、彼女は翼をたたんだ。俺の方も、全く警戒をしていない。少しすると、デュエル申請がこつちに来た。プレイヤーネームは“Yuki”。ユウキ、でいいのかな。即座に受諾ボタンを押すと、カウントダウンが始まる。即座に剣を抜き放つたユウキに対し、俺はギリギリまで抜かなかつた。10を切つたところで、ようやく俺は左手でアローブレイズを抜き放つ。そのまま、ぶらりと両手を下げただけの状態。構えとも呼べない、隙だらけの状態。それに、ユウキはただ怪訝な表情をしていた。

カウントダウンが尽き、デュエルが始まった。直後に、ユウキが突撃してきた。ま、思

いつきり隙だらけだからな。構えを取る前に、というのは分かる。だからこそ、その動きは見えやすい。

ほんの少しの動作で、抜き胴の要領で横なぎを繰り出す。が、これは即座に反応された。・・・反応速度が速いな。即座に、右の拳で追い打ちをかける。それに、ユウキは間合いを取った。いったん間合いの外に逃げよう、という思考は理解できる。が、それは俺の思う壺だ。

間合いを取る動きをした瞬間に、俺はアローブレイズを弓形態に変更した。即座に速射する。仕切り直しと思っていたユウキが驚愕に目を見開きながら迎撃にかかる。と、その矢は彼女が迎撃する寸前に小さな爆発を起こした。その陰に紛れ、今度は俺が突撃する。完全に回避に入るユウキだが、ほんの少しだけ、俺のニバンボシの刃が届いた。彼女が間合いを見誤ったわけではなく、武器が変わったことによつて広がった間合いが届いたというだけだ。さらにバックステップで躲し、直後に突撃してくる彼女に、俺はスローイングタガーを投げた。それを弾いてなお突っ込んできた彼女に、俺は軽く受け止めながら後ろに下がって受け止めた。今度こそ仕切り直した。

「すごいね、お兄さん」

「そつちこそ。このくらいまでやれば、首を取れる場合も多いんだがな」

俺の言葉は偽らざる本音だ。相手が白兵戦で無双の強さを誇るなら、わざわざ相手の

フィールドである白兵戦で戦う理由はない。俺のもつとも得意とするフィールドも白兵戦だが、俺の場合は中距離もかなり得意だからな。加えて、相手が白兵戦一本というのなら、手の内の広さで俺の方が上を行くはず。ならば、間合いをかく乱してやればあるいは、と思つたのだが・・・認識が甘かったか。

(ちよいとギアを上げるかね)

これだけの強敵となれば、出し惜しみは無用。俺は左足を少し引き、ニバンボシを中段付近に、拳を脇に持つてきた。構えの変化に、絶剣もギアが上がったことを察したのだろう。お互い、構えなおした。

まずは、改めて小手調べ。一気に間合いを詰めて、そのまま上段から振り下ろし。これはいなされ、カウンターをさらに俺が左肘で合わせる。これはバックステップ。即座に間合いを詰めに来るユウキに、俺は左手でスローイングタガーを投げた。これはきれいにいなされ、そのまま突進してくる。今度こそ、俺は右から降り抜く形の、抜き胴の要領での薙ぎで斬り払おうとした。その寸前で、相手はひらりとこちらの斬撃を躲す。反撃を振りかぶつてきたときはさすがに焦つたが、裏拳を使って何とかいなした。・・・初手で分かつていたつもりだが、

(なんつー反応速度・・・。こりゃキリトに匹敵、あるいはそれ以上か?)

明らかに、今の胴の躲しは、想定していた一つの返しをされて、見てから回避した反

応だ。俺だつてPVP最強クラスとして、このくらいの返しはできるだけ読ませないような斬撃を心がける。なのに、それを見てから躲し、あまつさえ反撃までしてのけた。

見かけによらない、とは言ったが、ここまでとは。

「非礼を詫びよう、絶剣。どうやら、俺の想像以上に、俺はあんたを見くびってたらしい」「それは仕方ないよ。大体びつくりされるからね、ボク」

「だけど、報酬がどうだとか、そんなの関係なく、俺はただ、負けたくない。だからここから先は——」

息をついて、構えなおす。刀は担ぐように、左手は体側に。その状態で、宣言する。

「——本気で、獲りに行かせてもらう」

俺の言葉に、絶剣は顔色を変えた。はつきりと、俺の中のスイッチが切り替わったことが伝わったのだろう。——それで十分。

強く地面をけ飛ばす。ほんの少し早い俺の踏み込みに、相手が若干驚く。それもそうだが、俺は今まで、全力の踏み込みをしてなかったのだから。虚を突かれた一瞬で、俺は一気に詰め寄り、左手の拳をまっすぐに突き出す。これはバックステップで躲される。それを見越した俺の袈裟はいなされるが、続く逆袈裟は防がれ、逆に手首を返した薙ぎが来る。胴体を狙ったそれは、逆に間合いを詰めたことにより止められる。脳天を狙った唐竹割り、薙ぎの腕を伸ばし、俺の後ろに肘を当てた反動で、回転するように逃れ

られた。左回りで反転し、俺は即座に脇構えから足元を斬り払おうとした。同じく下段で受けられ、即座に俺は前中するように飛び、そのまま後ろから上空へのがれた。追撃してきた絶剣を、俺は力で強引にたたき落とすとした。思った通り、インプという軽種族であり、なおかつAGIが高めなスピードタイプだから、バランスの取れたSTR—AGI型の俺がこうやって位置エネルギーも利用してやれば、叩き落とせる可能性は十分にあった。そのまま急降下し、追撃に入る。これは転がって避けられるが、即座に投げナイフで追撃する。何とかかすめながら躲かれる。が、俺からしたらそれは想定通り。そのまま、俺は左手を振り回した。と、先ほど投げた投げナイフが、曲線を描いて再び絶剣へと迫った。これにはさすがの絶剣も泡を食って逃れる。その光景に、周囲がどよめいた。

俺がやったのは、リトリープアローをもとにしたオリジナル魔法を、投げる時に付与しただけだ。その魔法は、魔力で作った糸を、投げナイフの柄から俺に向かって伸ばす、というもの。これにより、俺は投げナイフを即席のペンデュラムに変えることに成功した。なかなか扱いが難しいが、槍以上弓以下という貴重な間合いの武器だ。これには、さすがの絶剣も回避に徹さざるを得ない。そこに、俺は片手でアローブレイズに武器を変え、ペンデュラムをくるりと二周させてたたきつけた。好機とばかりに飛び込んでくる絶剣だが、俺からしたら想像通りだ。そのままバックステップで間合いを取り、地面

に向かつて爆裂矢を打ち込む。それは、絶剣の速い踏み込みに重なり、彼女の足を確実に止めた。

(……で決める！)

覚悟を決め、アローブレイズを曲刀形態に変える。バックステップの反動と踏み込みの初速を羽根でブーストし、俺はリーパーを繰り出した。俺のその攻撃を好機とみて、バックステップで受けてから反撃しようとした絶剣だが、そうはいかない。十八番となった剣技連携を使い、転身脚につなげる。驚きながら受け、下がる絶剣をしり目に、俺はさらに左手のドライブツイスターへとつなげる。いなして攻撃をしようとする絶剣だったが、それは俺の抜刀とともに放たれた旋車に阻まれる。さらに左手の弧月閃につなげたが、これはいなされる。と、同時に、絶剣の剣が光った。俺の覚えのない構え。そこから来るのは、俺の知らない片手用直剣か、片手剣系汎用ソードスキル、そして——

—片手剣系汎用ソードスキルである、絶剣の——連撃。

まばゆい純白の光を見て、俺は即座に察した。間違いない、これこそ絶剣の——連撃。俺が剣技連携を止めたら、俺は長い長い硬直を強いられる。なら、剣技連携をフルに使ってしのぎ切るしか手はない。

爪牙連牙斬、真空破斬、そのまま刀を納刀した裏拳で獅子戦吼ししせんこうを放つ。それでもなお彼女は止まらなかった。もう一発しのぐ気になればしのげるが、俺はそれをしなかつ

た。

(こりや勝てねえわ)

端的に言えばお手上げだ。俺の剣技連携にここまでついてこられた上に、初見の技に対応できるだけの能力。これだけされては勝てない。どちらにせよ、11連撃のうちの数発をもらっている時点で、俺のHPはかなり怪しい。が。

「・・・どういふつもりだ？」

彼女が放った最後の一撃は、俺の胸の前で止まっていた。先も言ったが、とどめを刺そうと思えば刺せる。なのに、彼女は止めた。思わず混乱して、最後の体勢で固まる俺に、彼女はにこにここと笑って、そのまま俺の手を取った。

「おにーさん、強いね！うん、気に入った！」

「いや、だから、えっと、全く話が見えないんだが」

「ちよつとついてきてもらえる？」

そういうと、彼女は俺の手を取ってそのまま上昇した。俺もあわてて上昇する。ギャラリーもあつけにとられている間に、俺たちは上昇していった。

61. スリーピングナイツ

彼女に連れられてきたのは、新生アインクラッドの中にあるギルドハウスだった。そこには6人が、種族のかぶりなくいた。

「紹介するね！ボクのギルド、スリーピングナイツの仲間たち！」

そういつて、一人ひとり自己紹介を聞く。だが、誰がどういう役割なのかという考察は、その次の言葉でどこかに吹っ飛んでいった。

「あのね、ボクたち、この層のボスモンスターを倒したいんだ。ここにいるメンバーだけで」

「……はあああ?!?!」

たぶん、たつぷり5秒くらい黙っていたと思う。で、その後に大声出した俺は悪くないとも思う。それもそのはず、

「フロアボス、って、フルレイドの大体50人弱くらいで挑むもんだぞ?!その7分の1とか、さすがに無理じゃねえのか？」

「うん、無理だった。現に、25層と26層は6人で挑戦したんだけど、あれこれ工夫してるうちに大きなギルドに先を越されちゃった」

その言葉に、俺はとあるうわさを思い出した。・・・まさか、な。いや、今はそれが重要じゃない。そんなことを考えているときに、どこかでログイン音が聞こえた気がしたが、それも一旦は無視だ。

「そもそも、なんでこんな無謀に近いようなことを・・・どこかに協力するとか、そういうのはダメなのか？」

「ユウキ？あなた、やっぱりろくに説明せずにつれてきたのね？」

「ゲツ、姉ちゃん!？」

「ゲツ、じゃないです！あ、私、ユウキの姉のランといいます」

「こりやご丁寧に。俺はロータスだ」

「ロータスさん・・・！なるほど、ユウキが気に入るのも納得です」

ウンディーネの彼女、もといランは俺の名前を聞いて納得したようにうなった。どうやら、先ほど聞こえたログイン音は彼女の物だったらしい。で、この反応を見るに、

「ランさんは俺の事知ってたわけ？」

「ええ。あなたのことは有名ですからね、マジックアーチャーさん？」

「その名前はやめてくれませんか？大げさすぎて好きじゃない」

「ふふ、わかりました」

柔らかに笑うランさん。もともと、ふわりと柔和な雰囲気の彼女に、その笑い方は非

常に似合っていた。

彼女がいるのでは、俺が入ると中途半端なレイドにならないか、と思っていると、それはユウキが補足した。

「姉ちゃんはおちよつとリアルの事情で戦えないんだ。だから、ボクたちだけになる」

「いやだから、なんでこんな超絶少数精鋭・・・あ、剣士の碑か？」

俺の言葉に、一同は相当に驚いた顔をした。それを代弁するように、最初からいたウンディーネのシウネーが声を上げる。

「よくわかりましたね・・・!?」

「何となく察しただけだ。この人数じゃなきやいけない理由、っていうのを一つ一つ考えると、一番もつともらしい理由がそれなんだよ。ボスドロップ独占するのなら、わざわざ複数階層に挑む理由がない。ランさんがいることで人数が合わないからおかしいな、とは思ったが、彼女が戦えないのなら話は簡単だ。あれは、ワンパーティーだけで撃破することができれば、全員の名前が刻まれるからな。違うか？」

「ご明察です。すごいですね」
「なに、半分くらいは勘だ」

そういうと、もう一度パーティを見渡した。パーティの種族内訳は、サラマンダー、シルフ、スプリガン、ノーム、ウンディーネ、そしてインプ。うん。条件によるかな。

「確認するぞ。おたくらが苦戦してる間に、大ギルドがフロアボスをぶっ倒したんだよな?」

「うん。さすがに2回続けてこうなるってなると、助っ人が欲しいよね、ってなつて」
「そうか。なら、すまんが、俺は直接協力できそうにない」

俺の言葉に、彼女たちが肩を落とす。

「理由は、俺の知り合いにもっと適任そうなやつがいるからだ」

「え・・・?」

俺の言葉に、ランが驚いたような嬉しいような声を漏らした。

「このパーティ、種族から考えて、おそらく、ノームのテッチはタンク、ウンディーネのシウネーがヒーラー兼バツファー、タルケンは支援兼アタッカー、後は純アタッカーってところが妥当だと思うんだけど、違う?」

「タルケンは支援というより、純アタッカーに近いですが、大体そうですね」

「だろいな。なら、この人数になってくると、圧倒的に支援職が足りない。ランさんなら分かると思うが、俺は広い間合いに対応できるオールラウンド型のアタッカーっていうのをコンセプトとして戦ってる。今でさえ、シウネーだけでは若干ヒーラーとバツファーが心もとないのに、アタッカーがさらに増えたら、多分、支援が足りなくなつてテッチが死に戻って、後は押し切られるっていう展開が見える。むろん、押し切っちゃ

えればそれでいいんだけど、全員が全員ユウキレベルっていうわけじゃないんだろ？」
「なるほど、押し切るには火力不足で、定石なら支援不足、ということですか・・・」
「そ。なら、俺みたいな、魔法を併用するオールレンジアタッカーより、支援を行えるタイプの方がナンボか楽のはずなんだ。その心当たりの奴は、家族の方に帰省しててインできないんだが、年明けなら帰ってくるだろうし。」

黒ずくめのスプリガンとも戦わなかったか？片手剣の超強い奴」

「ああ、いたけど、あの人はダメだよ？」

「理由は聞かんど。あと、あいつはユウキと同じ白兵戦脳筋タイプだから、同じ理由で却下な。」

ま、とにかくだ。あいつより少し弱いくらいで、少なくとも平均以上の白兵戦能力を持つヒーラータイプなんだよ」

「へえ、そんなに強いのなら、戦ってみたいな！」

「・・・もしま、バーサクヒーラーさんですか？」

「合ってるけど・・・それ本人に言うなよ、地味に傷ついてるから」

バーサクヒーラー、というのは、アスナにつけられたあだ名だ。もともとALO月例大会でもトップクラスに名を連ねていたころからその片鱗はあった。が、21層のフロアボス討伐の際、SAOでも暮らしていたあのログハウス風のマイホームのために、「あ

あもうまだるっこい！」と言わんばかりに、支援を投げ出して前衛でキリトとともに大暴れた彼女の様に、畏敬の念を込めてつけられた。・・・本人はかなり気にしているらしい。でもまあ、旦那に似て戦闘狂なところもあるから残念だが当然。彼女らしい評価ともいえる。というか、

「ランさん、意外とプレイヤー知ってるのね」

「二応、私がリサーチしましたから。それと、呼び捨てでいいですよ？」

「そっか、ならありがたく。」

ま、とにかくだ。奴さん、そのあだ名に傷ついてるけど、若干戦闘狂な部分があるから、多分誘えば乗ってくるはずだ。その辺はこっちで手を回しておく」

「すみません、何から何まで・・・」

「いや。・・・俺としても、いろいろ思うところはあるからな」

個人的に、気になるところがあるのだ。傭兵というのは、こういう時に動きやすいからいい。

それから、これからの大まかな相談し、俺は分かれてログアウトした。

ログアウトすると、俺はアスナにメッセージを飛ばした。即座に返信が来たあたり、彼女も年頃の女の子なんだなー、と再認識する。そのまま、手を止めずにダイヤルした。

『もしもし?』

「あ、俺だけど。今大丈夫か?」

『うん。ちょうど眠れなかつたところなの』

「そつか。ならいつかな。で、こうして電話したのは、ちよいと要件っていうか、耳に入れておきたいことがあつてな」

『何かALOであつたの?こつちだとインでできる場所がなくて・・・』

場所がない、ということは、おそらくアミュスフィアは持つて行っているのだろう。と、すれば、

「あれまあ、今時無線すらないとは珍しい。ま、あつたっていうか、出たっていうか」

『とんでもない強さのボスが出てきたとか?』

「んー、惜しい。

なあアスナ、キリトが辻デュエルで負けた、つて言ったら、信じられるか?」

『・・・ええ!?!?』

電話口でアスナが驚きの声を上げる。ま、だろ。彼女は、キリトの強さを横ではつきりとみている。それを踏まえて考えれば、キリトが辻デュエルで負ける、というのは、少なからず衝撃のはずだ。

「まあ、本人曰く、例の似非二刀流は使わなかつたらしいがな」

『それでもキリト君を負かすって、すごいわね』

「おう。俺も実際に戦ったが、まあ、ありや負けだな、うん」

『・・・？妙に煮え切らない表現ね』

「ま、その辺はまたおいおい。スピードタイプの剣士だから、アスナならワンチャンあるかなー、って」

俺の回答に若干の疑問を覚えたアスナだったが、全く問題ない。このくらいならごまかしきる。それより、

「ところで、アスナももういつぱしのゲーマーだから、A L Oにインできないのはきついんじゃないか？愚痴くらい、俺でよければ聞くぞ？」

『いや、今のところは大丈夫。ある程度は予想してたことだから』

「そっか、まあ大丈夫ならいいんだが。吐き出せるときに吐き出しとけよ」

『そっちも、私とこんなに話していいの？』

「いいの、って？仕事なら、あらかたもう終わらせたし問題ないぜ？」

『そうじゃなくて。レインちゃんとか、エリーゼさんとか』

「・・・なんで今その二人の名前が出てくるんだ・・・？あいつらなら心配ないだろ」

俺の言葉に、電話口の向こうから盛大なため息が聞こえた。・・・ため息？

「ま、課題とかはおたくなら心配ないか」

『帰省する前にほとんど終わらせたわ。そのくらいは織り込み済みだったんじゃない?』

「織り込み済みというか、想定済みだな。おたく、もともとそういうタイプだろう?」

『さすがね。立場が違えば、参謀に抜擢したいくらい』

「やめてくれ。采配振るうのなんざ性に合わん」

『自分で言っておいてなんだけど、全く想像ができないわ』

「だろ。俺もそうだ。じゃあ、また年明けな」

『ええ、また』

それだけ言うと、俺は電話を切った。直後、アミユスフィアとパソコンを接続して、設定を少しいじる。GGOのシユピーゲルアカウントに設定しなおすと、俺はGGOに口グインした。

グロツケンにログインして、直後にメッセージを送ろうとしてやめた。すでに相手は一足先にインしていたのだ。

「悪い、待ったか?」

「いえ、そんなに。さ、行きましょ」

「おう」

そういいながら歩くと、小耳にはさんだ気になる話題を切り出した。

「そういえば、エッグいプレイヤーキラーが出たって?」

「そうね。正体は不明。気が付いたら目の前にいて、スナップショットでハチの巣」

「わーそりやエグいな。場所は?」

「夕暮れの砂漠で固定されてるところ。あそこなら、上手く色を調整してさえしまえば、ほとんど見えないでしょうね」

「完全擬態したカメレオンよろしく全くわからんだろうな。スナップショット、つてことは、AGI極か。武器は?」

「発射音とレートからして、Vz61じゃないか、つて」

「スコープオンか。まさに砂漠のサソリだな」

Vz61、別命スコープオンはチエコかどこかのSMGで、非常に小型かつ軽量なのが特徴の銃だ。俺がシュピーゲルとして活動する際、使用武器候補の一つとして上がった銃でもある。ま、それはそれ。

「つっても、俺だとちよいときついかな。万が一があると怖いからやめておくか。俺の武器もこれだから、純粋な腕勝負になるし」

「クリスヴェクター、だったっけ」

「そそ」

シユピーゲルの武器は、あれこれ迷った末にクリスヴェクターというアメリカ製のPDWに決まった。若干リコイルが独特だが、MP7と同じPDWであるがゆえに、取り回しの良さで威力のバランスがいい銃だ。それに加え、サブアームがグロック21で固定されるものの、同じマガジンが使用できる拳銃があることが最終的な決め手になった。

「で、見た目で風景とほとんど同化してるAGI極相手なら、シノンのスナイピングもかなりきついかな」

「そうね。あそこ、遮蔽物少なすぎるし」

「いくら1000mオーバーの射程でも、あつという間に詰められてハチの巣だろうか。AGI極のスピードってかなりトンデモなものがあるし」

「なら、無理にいかないのが吉？」

「ご明察。そこにしか出ないんだろう？」

「ええ。他のフィールドに出てきたって話は、少なくとも私は聞いてない」

「なら話は簡単。そのフィールドに特化したPKなら、わざわざそこに行く必要はない。こちとらステータス上げがメインの目的なわけだから、PKじゃなきゃダメ、つてことではないわけだし」

「ということ、今まで通り、地下ダンジョンに行くのね？」

「おう」

そんなことを話していると、GGOにある俺の——厳密にはロータスアカウントの——拠点にたどり着いた。ここにはガレージも併設されていて、その中には移動用の車もある。俺の運転技術もあって、ダンジョンまでの移動はこれ一つで非常に楽かつ快適なものとなっていた。

「しかし、AGI型つてのは使いこなさないとつらいな」

「そうなの？」

「砂も大概だけど、AGI極もつらい。ベクトルは違うけど、難易度の絶対値的にはどっこいどっこいってとこじゃねえか？」

「スナイパーも難しい職種だけどね」

「だろ？俺も使うからわかるけどさ」

「で、難しい、つていうのは、どういうこと？」

「VITに振らない分、HPは相当に低い。で、STR型とは違って、どうしても超クロスレンジで戦うしかない。武器がマシンピストルとかSMGとかになるからな」

「コンテナーはダメなわけ？」

「ダメダメ。あんなの、低STRの貧弱握力じゃ、銃が吹っ飛んで行って自分がケガする。そういう目的で使うのなら別だけど」

「誰得つて話ね」

「そういうことだ。俺はSAOで飽きるほどこつちのアバター動かしたから、最初はともかくすぐ慣れた。そうじゃないやつはかなり難しいと思うぜ？」

つまり、力がない分軽い武器しか使えず、軽い武器ということは必然的に射程距離が短くなるということと同義、ということである。例えばだが、ロータスのサブウェポンであるレイジングブルは拳銃としては相当大きいのが、有効射程は精々言つて5、60m前後と言ふところだろう。限界射程距離を試すような武器じゃないので不正確だが、そんなに的外れな値でもないはずだ。このクラスの武器しか扱えないAGI型は、つまりそのレンジで戦わざるを得ない。対してアサルトライフルとなれば、200mくらいでもある程度の威力と精度があつて当然だ。つまり、この時点で間合いを制されているわけだ。その中で勝つには、相手の弾をよけたうえで、クロスレンジで相手をぶち抜くしかない。だが、ここに大きな問題がある。

「そもそも、それ以前に早すぎて制御ができないんだよな」

「どういふこと？」

「自転車くらいなら乗つたことあるよな？」

「それくらいならあるわよ」

「OK。ならたぶん、それより少し早いぐらいの原チャリくらいなら運転できると思う

んだよ。そんなに力ないし」

「まあ、そうでしょうね」

「だけどき、いきなり大型二輪とか乗りこなせ、つて言われても無理ゲーでしょ？ そういうことだ」

「自分の力が大きすぎる、つてこと？」

「その通り」

早すぎて制御ができない、とはそういうことだ。速度が上がる、ということとは、その分精密な体の制御を求められる、ということと同義。加えて、瞬間情報量も増える。自分で使ってみて痛感したが、使いこなせる人間が少ないのも納得のいくお話だ。と、そんなことを話していると、目的地のダンジョンについての。

「ま、だからこそ、そのPKの中の人は、相当運動ができるタイプだろうな」

「いわゆる、動けるオタクとか？」

「かもな。さて、やるぞ」

そういうと、俺たちは車を降りた。車の方は、自動運転モードにして、自分の家に戻り返した。

「さて、頼むぜ、相棒」

「ええ、後ろは任せて」

そういつて、俺たちはグータッチを交わした。

6.2. 状況開始前夜

年が明けて、アスナがALOに帰ってきた。その時に、早速俺は切り出した。

「そういえば、アスナ。例の絶剣だけどき」

「え、もしかして私のこと話したの？」

「と、いうより、相手が知ってた。で、戦ってみたいってさ」

さすがにこの言葉には面食らったようで、一瞬アスナがぼかんとする。

「たぶん説明してなかったから、この際まとめて前後関係とか説明すると、だ。

まず、俺は絶剣と辻デュエルをして、まあ、俺が最終的にリザインする形になったんだが、そのまま俺は絶剣のギルドホームに、・・・拉致られた？」

「なんで疑問形・・・？」

「いや、あれは拉致られたって表現でいいのかな、って自分でもおもうから」

はた目から見たら拉致られたって表現が一番適切だろうが、半分とはいかなくとも4割くらいは俺が自発的についていったところもあるわけで、この辺の事情は微妙なライオンだ。

「で、まあ、端的に言うと、絶剣のギルドにちよいと手を貸してほしい、って話だったん

だが、俺は断った。で、アスナを推薦した」

「え？なんで私!？」

「俺らレベルで白兵戦強いっていうのもあつたけど、最大の理由はアスナがヒーラーとバツファーもできるって点。絶剣のパーティ、キリトたちに負けず劣らずの脳筋パなんだよ」

「え、そうなの？」

「種族内訳が、インプ、シルフ、ウンディーネ、サラマンダー、スプリガン、ノーム、つていえば、大体想像がつくだろう？」

ランが戦えていた、もしくは戦えるのであれば、彼女をアスナ、もしくはシウネーのポジションに回すことで、もう少しパーティとしてのつり合いが保てるはずだ。だが、彼女を除いたスリーピングナイツのメンバープラスひとり、と考えると、あのパーティはアタッカーよりヒーラーもしくはバツファーが欲しい。

シルフは回復魔法を使うタイプのビルトも考えられるが——ちなみにリーファがこのタイプだ——、基本的にはAGIと攻撃魔法を組み合わせたスピードタイプのアタッカーが一般的だ。サラマンダーは回復魔法の覚えづらい種族だし、ノームに至っては完全にタンクだ。スプリガンとインプは暗視など軽いバフの魔法が精々の種族だし、なによりユウキはガッツリ脳筋タイプと来た。この辺は二人とも分かっているから、俺

の説明にはあいまいな表情で頷いていた。

「なんていうか、その・・・」

「確かに、私たちに負けず劣らずなパーティーだね・・・」

「全員と軽く手合わせしたところ、んー、シリカより強いぐらいのレベルがゴロゴロいる感じかなー。目標達成は、できないことはないだろうけど難しい、ってところ」

「というか、あんた、よくここまで手を貸そうと思ったわね？自分が無理って時点で断ることもできただろうに」

「いや。ちよいと気になることがあつてな」

最悪、俺は目的のためにあの子たちを利用することになる。だがそれでも、一回ここで誰かがやらなければならない。もつとも、——そんな行為が行われているのなら、
だが。

「ま、とにかく、だ。いっぺん戦ってみてくれや」

「戦ってみてくれや、って・・・」

「それとも何か、戦ってみたくないの？キリトが負けた相手」

俺の言葉に、うつ、と短く詰まる時点で、本音は見えている。というかさ、そんな氣質だからバーサクヒーラーって呼ばれ続けているんじゃないのおたく。

「それは、戦ってみたいけど・・・」

「よし、決まりだな」

答えを聞くと、俺はユウキにメッセを飛ばした。彼女がインしているのは会話する前に確認している。すぐに返信が帰ってきた。

「いつでもいいってよ」

「今でも?」

「今でも。どうする?」

俺の言葉に、アスナは迷ったうえで、「行く」と答えた。

ユウキは、表向きはあの辻デュエルを続けていることになっている。むろん、勝てたやつにはOSS譲渡、というのもだ。俺は、表向きには、実際に見せてもらったら俺のスタイルに合わなさそうだったから断った、ということになっている。実際、こっそり見せてもらったが、彼女のOSSである「マザーズ・ロザリオ」は、俺には使えないと思っただから、譲り渡す相手を探して、まだ続けている、ということに「表向きは」なっている。

俺がOSSの受け取りを拒否した、ということ、仲間内からもあれこれ言われた。ぶつちやけ、俺だって11連撃のOSSと聞いて、名残惜しくなかったといえは嘘になる。が、それ以上に、俺はあの剣を受け取ることはできなかったのだ。

で、その辻デュエルにアスナを連れてきた、わけだが、

「え、絶剣、って、女の子だったの!？」

「おう。あれ、言っただけだったっけか」

「聞いてないわよ!？」

言われてみれば、言っていないかもしれない。でも、そんなのは関係ない。

「ま、行つてきな」

そんなことを言いながら、次の相手を探すユウキに向かって、俺はアスナの背を押した。つんのめるように人の輪を抜けたアスナに、ユウキの視線が向いた。その後ろで、俺のアイコンタクトにユウキが返したのを確認すると、俺はスリーピングナイトのホームに飛んだ。

さて、それから少ししてから、スリーピングナイトのホームには、アスナを連れてユウキが来ていた。

「その様子だと、お眼鏡にかなったみたいだな」

「うん!」

満面の笑みで頷くユウキ。

「紹介するね!ボクの仲間のスリーピングナイトのメンバー!」

「ウイズ俺、ってな。ていうか、この感じからして・・・」

そこまで言ったところで、あ、手遅れと思った。ギルドホームの入り口には、ちょうど買い出しを終えたもう一人のメンバーが戻ってきていたからだ。

「ユウキウキウキウキ？」

低い声に、ユウキがあからさまにビクツ！と震えた。そのまま、ゆっくりと振り返る。そこには、ニコニコ笑顔で怒っているランがいた。

「……ね、姉ちゃん……」

「ま、た、あ、な、た、何も説明せずにつれてきましたね……？」

「ご、ごめんなさい！」

「謝るのは私じゃないでしょう！」

「はい！ごめんなさいアスナさん！」

「いや、そこはいいわよ。あと、アスナでいいわ」

「すみません、うちの妹が」

「いえいえ」

「二人とも、そろそろ事情説明」

「あ、そうでした」

俺が小声で声をかけたことで、ランとユウキが説明に入った。

全部事情を説明し終わると、アスナは少しだけ考えた。

「ねえ、ロータス君」

「ん?」

「前、目標達成は難しいけどできないことはない、って言ってたわよね?」

「言ったな」

「目標っていうのは、フロアボスの撃破?」

「ああ、もちろん」

「それは今も変わってない?」

「むしろ全員の腕はある程度上がってるはずだから、相対的に難易度は下がってるんじゃないかな」

俺はラフコフの時からノウハウで、対集団戦には慣れてる。だから、俺対スリーピングナイツっていうことも何回かやっている。最初期でも、もちろん全員でかかられるとさすがの俺も瞬殺待たなしたが、4人くらいなら逆に俺が反撃できるほどだった。でもそれは、普段リス、シリカ、それに援護役となるリーファないしはアスナ、多いときはさらに一人追加されたうえで、互角で戦える俺に対しての評価だ。現行AL O有力ギルドの一つに数えられるフカたちドッグアンドキャッツとやむを得ず正面からぶつかった場合、たいていの場合、ドッグアンドキャッツが3から5割死亡したくらいで俺が押し切られるレベルで戦える俺基準での評価。まあつまり、およそ一般的な評

価値じゃない。ちなみに、ここまでくるとお互いのデスペナのほうが痛いレベルだから、大体は話し合って落とすところを決めている。

「じゃあ、引き受けるわ」

「ほんと!?!」

「この人、この手のことで嘘はつかないから。それに、そういう戦いも嫌いじゃないし」
(安定のバーサーカー・・・)

「なにかいいました?」

「いやなにも」

ぼそつと心の声が漏れていたらしい。でも、仮にもおしとやか系の女の子がそういう戦いも嫌いじゃないとか言うべきじゃないと思う。旦那も旦那だから今更か。

「さて、そろそろリアル時間がだいぶ怪しいな。一旦今日のところはお開きにしねえか?」

「あら、もうそんな時間でしたか」

「おや、意外とゲームに熱中しすぎて時間忘れるクチ?」

「・・・まあ、そんなところですよ」

「リアルへの過干渉はマナー違反だからあんまり強くは言わないけどよ、ほどほどにしなさいよ」

こんなことを言うようになったのは、仮にも教師になろうとしているからだろうか。悪い変化ではない、と思う。それはそれとして、……いや、これは言うべきことではないか。

「アスナは明日まで冬休みだから、明日の昼でいつか」

「随分急ね？ あなたのことだから、一回様子見とか言うかと思っただけど」

「思い立ったが吉日、つていうだろ？」

「なにそれ？」

「いいことを思付いたら早く行動すべき、つて感じの意味だ。ちゃんと勉強しなさいな若人よ」

正確には、俺には俺の思惑があつての行動なのだが、そこまで説明する必要はないだろう。

「さて、じゃあまた明日」

「ええ、また」

俺の言葉に、シウネーは柔らかく返した。別れた直後に、俺はアスナにくぎを刺した。

「アスナ、リズたちに連絡とっておけよ。どうせユウキが拉致つてきたんだろ？」

「その感じからすると、ロータス君も？」

「やっぱり拉致つて来てたのかあの娘っ子は」

半分くらいは想像通りだから驚きはあまりないが、あまり褒められた行いではないことも事実だ。と、ここでアスナが突然落ちた。直後にDISCONNECT通信切断の文字。珍しいが、これは仕方ないか。ネトゲだし。まあでも、ユウキたちと話し合うことはもうないし、俺も落ちるか。

俺はそれから、野暮用を済ませてから現実に戻ってきた。戻ってきてみたはいいが、実は大してやる事が無い。仕事関連の物は年末に済ませてあるし、部活を受け持っているわけでもないから学校に行く用事も無い。電子化された教育のモデルケースということもあり、わざわざ学校に行かなきゃいけない仕事というのは意外と少ないのだ。煙草でも吸ってくるか、と立ち上がって気づく。

「いけね、煙草切らしてら」

大体一箱くらいは余分にストックしているのだが、今回に限って怠っていたらしい。買ってくるか。

煙草を買って、いつもと違うルートで帰る。と、道端の公園に見慣れた栗色の髪が見えた。もしやと思つて近づいてみれば、俺の思い過ごしではなかった。

「結城? どうしたんだ?」

年が明けてそんなに間もない寒空の、それも夜だというのに、彼女は時間に似合わぬ

薄着だった。結構しつかり防寒している俺ですら寒く感じるくらいなのに。

「あ、ロータスさん」

「リアルじゃキャラネームは禁止、な」

そういつて、横に座る。さすがにスルーという選択肢はなかった。

「煙草、いいか？」

「ここで、ですか？体に悪いですよ」

「分かってる。でもな、それでやめれるのなら、とうの昔に煙草なんてこの世からなくなってるよ」

言いつつ、俺は電子煙草の電源を入れる。一つ煙を吐くと、俺は聞いた。

「どうした？」

俺の言葉にも、彼女は暗い顔のまま何も語らない。こういう時は深く突っ込むべきではないのだろう。

「ロ・・・天川さん。あなたは、ラフコフにいた時、どうして自身の正気を保ってたんですか？」

そういわれ、俺は考え込んだ。どうして、と言われても、はつきり言つてそれで俺がしてきたことが正当化されるわけではない。むしろ、それゆえに断罪されてしかるべきだろう。

「最初はただ、自分の選択のため。途中からは、選んだ過去のため。あの時言った、ラフコフが数十人殺すのなら、俺はその実行犯である十数人を殺して、最大多数の最大幸福のために動く、っていうのは本当だ。で、途中から、そうして手にかけてきた人間がいるって過去のために、一本筋を通すため。それだけだ」

「強いん、ですわね」

「強くねえ。俺にはそれしかなかった。それだけだ。それしかなかったから、それにすぎるしかなかった。そういう点だと、あいつのほうがよくほど大人になっちゃった。本当に、ガキだと思ってたんだが、いつの間にか俺よりいろいろもの考えられるようになってる気がするようで、情けないやらなんやらって」

そういつて自嘲するように笑う。なんだかんだで、虹架とは友好的な関係をキープしている。と、いうより、キープさせられている、というべきか。でも、決してありがた迷惑だとか、面倒くさいとかそういうことはない。自分としても、彼女とはずっといい関係でいたいと思ってるからだ。むしろ、彼女がいらない、と考えると、違和感がひどい。

「レインちゃんは、あなたにもうこれ以上人を殺してほしくない、って。そればかり言うてました」

「彼女らしい」

全く持つて彼女らしい言葉だ。きっとあの子は、ただ、俺が人を殺し続けることが嫌で、一人きりでも切り込んで助けられるために力をつけたのだろう。そこにどれほどの思いがあつただろうか。

——だからこそ、俺がするべきことに、彼女を巻き込むわけにはいかない。

「それにな、俺からしたら、おたくのほうがよくぼど強いと思うぜ」

「・・・私には、もう、よくわかりません」

「そうか？でもな、忘れちゃいかんことがある。おたくには、頼れるパートナーがいるだろう。背中どころか、全部預けていいとすら思える相手が、よ」

俺のこの言葉は、どうやらアスナにとつては逆効果だったらしい。少しうつむいて、ぼつぼつと話し出した。

「キリト君が、私は強い、つて言ってくれたんです。ここで弱さみせちゃうと、その言葉を裏切るように思えちゃつて・・・」

「んなわけあるか。つて、ことじゃないんだよなあ」

これはかなりデリケートな問題だ。他人があれこれ言つて解決する問題じゃない。

「ほとぼりが冷めるまで待つて解決するような問題じゃないのなら、なんかしらで向き合わなきゃならん。すまんが、俺はそういう手段があるとしか言えん。実体験してないし、何よりその問題を抱えてるのは俺じゃないからな。」

とりあえずは送ってやるから帰るぞ。着替えも何も無いし、こんな中でそんな薄着じゃ風邪を引く」

そういうと、アスナは素直に立ち上がった。

結城明日奈の家は、想定はしていたものの大きな家だった。まあ、仮にもレクトの社長邸宅だ、これが普通の一軒家だったら逆に拍子抜けする。まあとにかく、これは親御さん案件だろう。仮にも同じ学校の教師だし。

何があったのか、というのは、帰り道の途中で本人から聞いた。まあ、親御さんが厳しいっていうのも、ご家族がVRに対していい印象を持っていないということも珍しくない。だが、それ以上に、俺からしたら、自分の親と重なるところがあって、思うところも多いのだ。

おそらく、俺の元親が、俺がSAOに囚われたことを汚点と感じていたように、彼女の母親もそうなのだ。最大の違いは、彼女の母親は、これ以上娘に苦勞をさせたくないと思っているのだろう。それならまだ、立て直す余地はある。

とりあえず、呼び鈴を押して、親御さんに事情を説明する。と、間もなくして、母親が出てきた。

「娘が……迷惑をおかけしたようで、すみません」

「いえ。むしろ、私でよかったです。ご息女とは、あちらからの付き合いですので」

俺の言葉に、相手は驚かず、どこか合点がいったような顔をした。

「SAOから戻ってきて、すぐに教職ですか。見たところ20代前半くらいかと思いましたが」

「ええ。お恥ずかしながら、二年もゲームに明け暮れた馬鹿者に帰ってくる家などない、と、追い出されてしまいました。仮想課の人の手助けを得て、こうして先達の教えを請いながら、なんとかやっている身です。もともと、青二才故、上手くないことも多いですが」

「自信を未熟である、と知ってなお、続ける理由はどこに？」

「自分にはこれしかありませんので。下がる場所がないのであれば、進むしかありません。まい。最も、どのように進むかくらいは、自分で決めたかった、というのが本音ですが」

最後は本音半分諫言半分だ。確かに、キリト、じゃない、和人より、家柄も学歴もいいという人はいるだろう。だが、明日奈がそうしたい、という意思があるのにもかかわらず、親が一方的に子の幸せを決めつける、というのは、あまりよくないことだと俺は思う。

「ほかの道を探すこともできたのでは？ 役人に紹介してもらったのなら、他の選択肢を斡旋してもらおうこともできたでしょうに」

その言葉に、俺は少しためらった。実を言うと、菊岡に事情を話した段階で、教職以外の選択肢も提示されていたのだ。その中から、俺は教職を選んだ。ついでに言えば、虹架と関われるように便宜を図れないか、と、頼みもした。ここまですまくいくとは思っていないかったが。

「かなり長い話になる上に、お恥ずかしい話になります。あなたがもし、SAOのことを詳しく調べていらつしやるといふのなら、すぐにもろもろをお分かりになることでしょう」

俺の言葉に、隣にいた明日奈が明らかにぎよつとした反応をする。それもそうだろう。俺の身の上話をするといふことは、必然的に俺の汚名までも話すことになる。娘のそんな反応を見て、相手は言葉を発した。

「であれば、また日を改めて、お話を伺いましょうか」

・・・なるほど。どうやら、想像以上に娘の身を案じているようだ。身の上を話してもいいと思つた俺の判断は正しかったようだ。

「では、また学校にご連絡ください。日程を折衝の上で、お話しましょう」

俺としても、一人の教師として、そしてアスナの友人の一人として、親がどう思っているのか、というのは気になるところだから願つたり叶つたりだ。若干順調すぎるような気がしなくもないが、今は考えなくてもいいだろう。

63. 臆病者へ天誅を

さて、アスナにとつては冬休みの最終日、こちらにとつては授業日が近づいてきていた。だがそんなことは関係ない。授業のための用意は当面分濟ませている。少なくとも、この学期分くらいはどうかかなるはずだ。昔ながらの紙とノートとペンでやる勉強ではないから、わざわざ印刷する必要はない。それに、課題に関しては、コツコツ真面目にやるリズム——じゃないや篠崎も問題なさそうだし、虹架に至つてはちよくちよくここ教えてと電話がかかかってきていたりALOで教えていたりするから、問題ないことは俺が分かっている。明日奈に関してはまあ言わずもなだらう。

俺の方は、まあ、軽い打ち合わせくらいしかやるのが無かつたので、半日上がりだ。そのまま速攻で帰つてスリーピングナイトのギルドホームへ向かう。時間には何とか滑り込みでセーフだった。

「すまん、遅れた」

「え、時間には間に合つてるよ？」

「集合時間より少し前に現着、これ基本な」

「ええ!?ボク、結構ギリギリなんだけど、誰にも何も言われなかつたよ!」

「ユウキはいつもギリギリだから何も言われなかっただけです」

俺の言葉にはランが追撃した。相変わらずの辛辣度合いだが、これは姉だからこそなせる業だろう。

「ほかの面子は？」

「アスナさんも含めて、全員集合してます。私はいつも通りお留守番です」

「そっか、じゃあ行くか」

「いつてらっしやいです。いい報告を待ってます」

そういうと、俺たちは揃って羽根を展開して飛び立った。

迷宮区の道のりはまあ順調なものだった。メインの攻略班であるスリーピングナイツの消耗を抑えるため、道中の雑魚掃除は俺がほとんど受け持った。そこはまあ、元S A O 攻略組の面目躍如というか、はつきり言ってヌルゲーだった。後ろのアスナは「これ私本当に必要だったのかしら」というような顔をしていたが、道中の露払い俺の役目でアスナの役目はボス周りの時のヒーラー兼バッファアーマーなのでということ納得してほしい。

さて、問題のボス部屋前までは順調に進んだ。

「ちよっと一旦ストップ」

俺の一言で全体が止まる。怪訝な顔をするユウキをよそに、俺はアローブレイズを弓

形態に変える。俺の予想が正しければここらにいるはずだ。矢をつがえて、問答無用で詠唱開始。と、慌てて前から声がかかった。

「ちよ、待った待った待った待った！」

そこから現れたのは、ボス部屋前で透明化していた二人組。さすがにいきなり殺されるのは勘弁といったところなのだろう。種族はインプとプーカ。なるほど、インプが透明化の魔法を、プーカがそれをアシストしてたつてとこか。

「じゃあなんだつてわざわざ姿隠すハイディングまでしてボス部屋前にいたんだ？普通にそこに棒立ちしてればいいだろうに」

「俺たちは味方を待つてたんだ。無用なトラブルを避けたいから透明化してたつてだけ」

「・・・ふうん。ならそういうことにしておく」

相手のHPの傍にあるギルドアイコンを一瞥して、俺はさらに続けた。

「そつちのお味方とやらはまだ来てないんだろ？なら、先に俺らが挑戦していいか？」

「ああ、いいぜ」

その言葉を聞き、アスナとシウネーが全体にバフをかけ、MPポーションを飲む。それを確認してから、ボス部屋の扉を開けた俺を先頭に、俺たちは戦闘に入った。

ボスとの戦いは苛烈を極めた。だが、はつきり言って初見とは思えないほどいい戦いだった。と、思う。全員がそろって死に戻りしたのちに、俺はすぐインスタントメツセージを飛ばした。

「みんな、すぐに再挑戦したほうがいいかも」

戦いの余韻も冷めぬうちに、アスナが全体に声をかけた。

「気づいたな？」

「ということは、ロータス君も？」

「うすすとは感じていた。とにかく、全員飛ぶぞ。事情は道すがら話す」

結局利用することになったか、と若干の罪悪感を覚えながら、俺も一緒に飛び立った。

飛び立ってすぐ、俺は口を開いた。

「まず、ボス部屋前にいたのは攻略ギルドのスカウトだ。本来なら一番槍としてある程度ボスの攻撃パターンとか弱点とかをあぶりだす役目を担うんだが、おそらくそれだけじゃない。トレーサーか何か使って、ボスに挑む他のパーティを通して、ピーピングをしてたんだろう」

「間違いないと思うわ。テツチの傍に蜥蜴がチヨロチヨロしてたから」

「やっぱり覗き見野郎だったか。問答無用でハチの巣にしてやるんだった」

「て、ことは、ボクたちが挑んだ直後にボスが倒されちゃったのって、偶然じゃないって
ハナハナ。」

「偶然じゃないどころか、必然って言ってもいいな。おそらく、その時もユウキたちは結構ギリギリまで削ってたんだろ？なら、それをピーピングで共有すれば、必然的に最新に限りなく近い、しかも正確な情報が手に入るわけだ。自分たちで苦労してボスのHP削って、デスペナ食らうことなくな」

俺のその言葉に、ユウキは隠さずむつとした。俺もさすがに頭に來ている。

「一応まだ年始だし、真昼間からインしてるような人は少ないはず。すぐ大規模な攻略レイド編成はできないはずよ。だから、攻略するなら今しかない」

もつと怒ってらっしやる方がそばにいたわ。ま、彼女からしたら、先遣隊がどんな思いでボスの情報を得てきていたのかを分かっているから、こんな真似をする相手は怒りどころか憎悪の対象だろう。

「やけに攻略ペースが速かったうえに、同じギルドのパーティばかりが剣士の碑に刻まれてたからな。なんかおかしいとは思ってた。ここまでゲスな真似してるとは思ってたけどな」

俺の予想は、死に戻りした奴の後を追って、作戦会議してるところを盗み聞きしてるんじゃないかと思っていたが、まさかボス部屋前で堂々とトレーサーつけてピーピング

とは。

「でも、それくらい大きなギルドなら、ある程度はインしてる可能性もあるわけだよな？」

「おう。だからそのためにもちよいと援軍を頼んである」

さつきインスタントメッセージを送ったのは、ドッグアンドキャッツのリーダーであるフカだ。今、メインアカウントでログインしているのに、黒天がないのもここにながる。

昨晚、アスナがログアウトした直後、俺はその足でアルンにあるドッグアンドキャッツのギルドホームを訪れた。向こうも、こっちに頼みたいことがあると相談を持ち掛けてきていたのだ。

ギルドホームには、リーダーのフカ、そして情報屋としてエリーゼがいた。

「待たせたな」

「段ボールはないの？」

「残念ながらな」

開口一番で和ませながら、俺は近くの椅子に座った。

「で、頼み事って？」

「ロータスって、最近スリーピングナイトってギルドの子たちと仲いいよね？」

「ん、まあな。やつこさんら、自分たちだけでフロアボス討伐したいらしくてな。支援するつもりだ」

「へえ、なら都合がいいや」

その言葉に、俺はある程度察した。

「剣士の碑か？」

「その様子だと、察してた？」

「ああ。その感じだと、本当みたいだな」

「ええ。——大規模ギルドのボスカウトは、おそらく実力ある複数パーティーの戦い方をピーピングし、傾向と対策を即座に練り上げて、早期攻略を行っている、と、考えられる」

やはり。想像通りではあったが、いい気分はない。

「おかしいと思ってたんだよ。ここんどこ連続で、大規模ギルドのギルドマークしか剣士の碑に刻まれてない。キリト、アスナ、俺、クライン、エギルあたりの、元SAOでパーティーリーダー務めたことのあるような奴らなら、絶対どこかで名前が上がるはずなんだ。なにより、攻略に声がかかるはず。なのに、それすらもない。大規模ギルドつつてもマンパワーに限界はある。ギルメンだけで十分なほどの情報を、しかも、これ

だけのハイペースで得る方法は人海戦術くらいだ。でも、そんな方法を取ってたら、いずれ破綻する。こんなに連続で続くはずがない。と、すれば、他のところのリソースを使つてるとしか思えない」

先遣隊という時点で、パーティ構成はタンクとヒーラーがメインになることが多い。一回の挑戦で少しでも多くの情報を持つて帰る必要があるからだ。それに加え、アタッカーを編成するとすると、物理か魔法に偏重させない限りは火力不足で時間がかかりすぎる。かといって、ユウキやキリトたちのような脳筋アタッカーパーティでは情報を持つて帰れるかすら怪しい。先遣隊の時点でほぼフルレイドなんて投入したら今度はデスペナで大赤字になるのは目に見えるから、できるだけ少ないパーティ数で挑もうと思うと、火力不足での長期戦になるか短期決戦でのデスペナか、どちらにせよ赤字覚悟でなくてはならない。そんなものすぐに破綻する。が、破綻せずにここまで来ている。何か裏があると思つてはいた。

「私たちとしてもさ、フロアボスのボスドロップつて結構うまみのある話なのね。それ是一切おこぼれもらえずに独占されていい気分はしないわけ。だからさ、もし万が一、そういうことをしているつてはつきりしたら連絡頂戴。ぶつ潰すのに手貸すから」
「おう、その時は頼んだ」

フカも腹に据えかねているところがあるらしく、かなり言動が荒っぽくなっている。

まあ、俺としてもかなり腹が立つ。フカたちが味方に付いてくれるのは大歓迎だ。そこに、俺たちが加われば、不可能を可能にすることは十分に可能だろう。

今頃、フカとエリーゼが黒天の背に乗って先行している頃合いだろう。その後から、彼女のギルドメンバーで来ることでできる人は来ると言っている。ドッグアンドキヤッツのメンバーは精鋭ぞろいだから頼もしい限りだ。

ボス部屋前に、今回サポートとして連れてきていたストレアが、ナビピクシー状態で警告を発した。

「ボス部屋前にプレイヤー多数ー」

「人数は？」

「19人、多分何か打ち合わせをしている」

19人も咄嗟に集まれるのかよ、廃人の鑑だな。その人数となると、多分フカたちは多分来てないな。なら、ダメもとで交渉するか。

集団に追いついたときに、まず俺が交渉に入った。

「なああんだ、これってどういう状況だ？」

「仲間を待っててな。悪いがここは今通行止めだ」

「つまり、先に挑戦させるつもりは無いからおとなしく待て、と?」

「ああ。たぶん1時間もかからないから待っててくれ。文句があるのなら、イグシテイに俺たちの拠点があるから——」

「それこそ1時間くらいたつちやうわよ!？」

アスナが思わずといった様子で遮る。その通りだ、片道でもそこそこの時間がかかるっていうのに、交渉なんてしていたら確実に1時間くらいかかる。俺一人ならこの面子を半壊くらいはさせられる。もちろんその代償としてデスペナをもらうことになるが、俺一人なら問題ない。だが、ここにいるのはストレア除いても総勢8人。巻き込むわけにはいかない。

「どうしてもっていうのなら押し通るくらいしか手がないけど」

「そっか、なら仕方ないね」

相手のその一言がトリガーだった。俺が反応する前に、隣のユウキが前に出た。

「戦おっか」

「おいおい、嬢ちゃん正気か?」

「そうよユウキ、流石にこの人数は——」

「アスナ」

たしなめようとするアスナを、ユウキが静かな口調で遮った。

「ぶつからなきゃ伝わらないことだってある。例えば、どれだけ自分が真剣なのか、とかね」

振り返ってそういうユウキは笑顔だった。・・・まったく、仕方のない小娘だ。

俺も進んで隣に立つ。まだ得物は抜かない。抜く必要がない。この間合いは、既に俺の間合いだ。ユウキが先陣を切って突っ込む。それに対応する、おそらくタンカーのノームである相手の防御は、確かに攻略ができるレベルのギルド員にふさわしく高い。が、最大の誤算は――

「はあっ!」

「つうっ・・・!?!」

相手の得物が弾かれた際に、俺は狙いすましてヘッドショットを決めた。矢は眉間に突き刺さり、一発でポリゴンになった。ユウキに気を取られている間に、俺がアローブレイズを持ち替え、矢を放ったのだ。

確かに、これが普通の前衛と中衛なら時間稼ぎくらいは容易だっただろう。だが、ここにいる連中は揃いも揃って普通じゃない。相手の最大の誤算はこちらの力量を見誤ったことだ。

「盾無し片手剣のインプ、それにこの剣筋・・・まさか、絶剣じゃないか・・・?」
「目がいいな、あんた。間違いなく絶剣その人だぜ。」

ところでユウキ、一つ確認していいか？」

「なに？」

「ああ。時間を稼ぐのはいいが・・・別に、殺しつくしても構わんのだろうか？」

俺の言葉に、ユウキは一瞬驚いたようなようだった。だが、すぐに笑い声が聞こえた。「もつちろん！遠慮はいらないからね！」

「そうか。なら、——期待に応えるところか」

たぶんネタは通じてない。だがまあ、俺としても全力で暴れたい気分だ、存分にやらせてもらおう。

『後ろからプレイヤー多数！おそらく前にいる集団のお仲間！』

接敵するまでに、あらかじめポケットの中に隠れていたストレアから声が聞こえる。前、ユイちゃんも警告モードで声をーとか言っていたから、おそらく同じことをしたのだろう。まあとにかく、

「そこにフカたちは？」

『少し離れて黒天の反応があるから、ぎりぎり追いつけるくらいだと思うよ』

「十二分・・・！みんな、おかわりと援軍だ！」

その言葉に、一瞬アスナが顔をしかめた。

「ごめんね、ボクの短気に付き合わせちゃって」

「全く以って問題ない。一回こういうクソどもは痛い目見るべきだからな」

「私こそ、役に立てなくてごめん！ここでダメでも、次は一緒に倒そう！」

そう言いつつ、アスナはいつものレイピアに装備を変えた。口には出さないが、そういう隠れた超好戦的部分があるからバーサクヒーラーって呼ばれるんやであんた。

「往生際が悪い——」

その一言を言ったやつは、即座に眉間に片手剣をプレゼントした。

「こつちが往生際が悪いのなら、おたくらは性根が悪いな。こいつら以外にいくつのパーティーが挑戦したのかなんぞ知ったこつちやないけど、デスペナもらわずにこつそり盗み見して情報入手して、自分たちはMPポジションくらいしか痛い目見ずにうまい汁だけ吸ってたわけだからな」

俺の言葉に、何人かが顔をしかめた。——かかった。

「おっと凶星か？すまんね、思ったことは隠せない性分なんだ。覗き見スキルがどれだけ高いのかとか、それでハラスメントもらわなかったのかとかは知らないけど、自分で挑戦するような度胸すらないチキンの覗き魔なんでしょ君ら。なら俺たちが負ける道理はないよ？自分たちが弱いとは思わないしね。少なくとも、ワンパーティーくらいでボス挑戦する度胸は、こつちにはあるんだし」

「……貴様あああああつっつっつ！！！」

叫びながらアタッカーと思しき奴がかかってくる。そいつをあつきりと弓で機先を制して、一瞬動きが鈍ったところをたたきつけて、足で頭を踏み砕く。SAOから培ってきたステータスだから、防御されない頭を踏み砕くなんざ朝飯前つてとこだ。

「ほら弱い」

その言葉に、今度は魔法が飛んできた。が、横からソードスキルで、その魔法は叩き切られた。こんな反則チートができるのは一人しかない。

「相変わらずの精度だな、キリト」

「そつちこそ、煽り上手くて若干引いたぞ」

「煽り性能マックスの奴の傍に半年もいたんだ。多少はうまくもなる」

それに、この手の馬鹿は少々付け上がってくれた方がやりやすい。実際、怒りに任せ飛び掛かってくれたから対処がやりやすかった。そして、そういうやつらばかりだから本当にやりやすい。

突然、俺は独特な抑揚をつけて指笛を吹いた。その直後、援護してきた部隊の後ろから炎のブレスが襲い、最後衛を焼き殺した。

「おっせえぞフカ！」

「無茶言わないでよ、腕によりをかけて大急ぎだったんだから！」

俺だつて本気の言葉じゃない。直後に、俺の周囲に剣が落ちてきた。さすが、恐ろし

いくらいドンピシャ。これで戦力は十分。

「アスナ、ユウキ！先に行け！ここは俺たちがぶつ潰す！」

「でも！」

「でも、じゃえねえだろうがよ！てめえにやあ時間がねえんだろうが！さっさとボスをぶん殴り倒してこい！」

俺の喝に気合が入ったのか、ユウキがこちらに背を向けて走り込んだ。そして、何も言わずとも隣に立った少女の肩を叩き、近くの剣を引き抜く。

「さあ、蹂躪の時間だドグされチキンども。ここにあるは剣戟の極致。恐れずしてかかってこい！」

俺の挑発に、多数の敵が向かってくる。が、俺からしたらこんな前衛が歯向かってきたところで大して問題でもなんでもない。それに、

「やあつ！」

——今は、頼もしい相棒もいる。

隣でレインが防ぐ。その横から上から後ろから、攻め手を交代しつつ上手く立ち回りながら二人で戦闘不能に追い込んでいく。俺たちに加え、一騎当千のキリトや、十分に名の売れた傭兵ギルドのドッグアンドキャッツなど、精鋭がかなり揃い踏みした状況で、戦況はこちらに傾いてきていた。

「くそ、撤退——」

「させるかよ」

これはまずいと逃げの一手を決め込もうとした相手を見て、俺は即座にアローブレイズを弓形態で抜刀した。抜きながら早口で詠唱しつつ、引き絞る。最速クラスの速さで放たれた、俺のマジックアーツ——俺は勝手にマジアと呼んでいる——の中でも最上級技、*ヴアンフレーシユ*が下がろうとした敵を片端から射抜いた。のけ反りだけで済んだ幸運な奴もいたが、大概の奴はノックバックを食らったり、転倒したりさらに不運な奴はヘッドショットで一撃リメインライトになった。そこを逃すこいつらではない。

「全員、食らいつくせええ!!!」

フカの号令で、ドッグアンドキャッツの面々が攻略ギルドメンバーに襲い掛かる。続いて、他の面々も完全攻勢に回った。

「ボスドロの恨みい!」「勝手に独占しやがった分け前よこせえ!」

「全弾いくわよ!」「泣いたところで許してあげない!」

「——おー怖こわ」

ネットゲプレイヤーの嫉妬は怖い、とはクラインだったかキリトだったかが言っていたが、これは怖い。でも残念ながら当然。よって——

「一撃じゃ生ぬるい！」

前衛に一気に詰め寄り、魔法で何人か拘束する。後ろを巻き込むかもしれないが、まあまとめて吹っ飛ばしてくれるだろうから問題なしか。事前に魔法で攻撃範囲と炎属性をエンチャントし、このソードスキルの長いチャージを終えた一撃をぶつ放す。名付けて――

「絶破ぜつぱ……滅焼撃めつしょうげきイ!!!」

ちなみに、エンチャントした元の技は絶拳である。ただでさえも威力の高いそれに範囲が加われればどうなるか、という、一種の威力テストだったのだが、――想像以上の結果に俺が驚くことになった。

「ちよつとー？そつちがやりすぎたせいで暴れたりないんですかー？」

「悪い、正直まことここのまでの威力とは思ってなかった」

結果、ある程度もともとHPが削られていた状態だったとはいえ、残った敵のHPを軒並み致死域寸前近くまで削るレベルの威力を発揮した。俺の反対側でも何人か戦っていたが、余波の範囲で、削ったHPでよろけているところに追い打ちをかけて殲滅完了。

「それに、あれこれたまっていたのは俺もだ。殺したかっただけで死んでほしくなかったんだが」

「圧倒的矛盾！」

そうは言われても、流石にこんな真似されたら腹も立つというものだ。

後に聞いた話だが、ことの顛末を聞きつけたSAO帰還者のスレでは、偵察隊が文字通り死ぬ思いで情報を取ってくるからこそ攻略ができるというのに、その苦勞をせず、しかも一般的には忌避されるピーピングを使ったうえでの暴挙ということ、まあ特大炎上だったらしい。同情はしないが。

「それで、大丈夫なの？ つつこんでった子たち」

「大丈夫だろ、あいつらなら」

そんな会話をしていると、ボス部屋の門が音を立てて外れた。それを見て、フカがこっちに向けて言った。

「行つて来たら？」

「・・・じゃ、お言葉に甘えて」

そういうと、俺は自分の得物を納刀して、ボス部屋に向かった。

64. 戦いの後で。

ボス部屋は静まり返っていた。中には、疲れと達成感の入り混じった、スリーピング
ナイツの面々。そして、ボスが倒されたことを示す、明るいたいまつがともっていた。

「やったんだな」

「うん、やったー!」

若干疲れを見せながらも、満面の笑みでピースをこちらに向けるユウキに、俺は思わず笑みをこぼした。

「例のクソどもは皆殺しにしておいた。ま、デスペナとかもあるだろうし、少しは鳴りを
潜めるだろ。それに、今回の一件は情報屋あたりにも伝えてあるしな」

「今までやってきたことも?」

「そりやもちろん。本来ボス攻略つてのは、斥候係が苦勞してデスペナもらつて、掲示板
とかで情報交換して、レイドをいつ組むか段取りして、ドロップとかも決めたうえでや
るようなことだぞ。それを、他の斥候を覗き見て痛い目見ずにうまい汁だけ吸って利益
独占してたんだ。まあ、控えめに言つて袋叩きだろうな」

「でしようね。それでも生ぬるいけど」

「まあ、アスナからすればそうだよな。S A Oの斥候なんざA L Oとは比にならないくらい危険だったわけだし」

その言葉に、スリーピングナイトの面々が思い出したような表情になり、納得する。アスナやキリト、俺のような有名どころは、S A O帰還者としてすでに名が売っていた。「さて、外の連中に協力取り付けてくる。おたくらはくたくただろうから、次の転移門の町まで護衛を頼めば何とかなるだろ」

「でも、向こうも消耗してるんじゃない？」

「バーカ、A L O最古参の有名傭兵ギルドに、S A O攻略組トッププレイヤーが集結してんだ。あんなチキンどもに遅れなんざとるかよ」

実際、あの光景はまさしく蹂躪と呼ぶにふさわしいものだった。途中からクラインも合流してたから、まあ当然だ。

「つーわけで、もちつとのんびりしてろ」

「うん、そうする」

疲れがぶり返したのか、それだけ言い残すとユウキは再び大の字になった。それを確認して、俺はもう一度ボス部屋の外に向かった。

その後は、フカたちの協力もあり、無事に転移門のアクティベートを終えた。件のギ

ルドの評判は、俺がアルゴや復活したMMOトウデイの管理人であるシンカーに情報を流し、裏付けをキリトやアスナがとったことにより暴落。俺の予想通り「控えめに言つて袋叩き」になった。俺らがやった横紙破りの順番抜かしは、「外法には外法を」ということでおとがめなしという結論になった。

さて、それから少しして、アスナたちのホームで祝勝会が開かれた。これはアスナの提案だ。その場には、直接戦闘に協力したアスナや、間接的に協力することになった俺も呼ばれ、ささやかながら豪華な会になった。料理のほうは、補正無しのマニュアルで料理してしまう俺に料理スキルカンストのアスナがいるため、手間ではあったが問題なく終わる——と思つたら、空気を読んでキリトがごちそうだけ用意してホームだけを提供してくれたようだ。細かいところに気が利く一面に、俺は意外に思いながら、心の中でお礼を言った。

と、祝勝会途中で、思い出したようにシウネーが思い出したように声を発した。

「そういうえば、私たち、お二方への報酬をご用意してなかつたです・・・」

「俺はいい。別にそういうのが欲しくてやってたわけじゃない」

「私も、そういうのはいいかな。でも代わりに、お願いがあるの。」

私、もつとユウキと話したい。いっぱいいろんなこと聞きたい。だから、私をスリー

ピングナイツに入れてくれないかな？」

その言葉に、俺とアスナ以外の面々がはつとしたような表情になり、沈んだ表情になった。もちろん、できるだけ心配をかけないようにだろう、あまりそういう表情を表には出さないようにしていたが、俺にはバレバレだった。

「ごめんね、アスナ……。スリーピングナイツは、……たぶん、春までには解散しちゃうと思うんだ。それまでは、ボクも含めてインできるとは思えないし……」

「……ごめん」

絞り出すように、ユウキが小さく謝る。

「あの、アスナさん、」

「シウネー。いい」

その反応を見てだろう、シウネーがさらに言葉を継げようとする。が、それは俺が押しとどめた。——それで、スリーピングナイツ、か。

「さて、そろそろ頃合いだろうから見に行くか」

「見に行く、つて、何をですか？」

「剣士の碑、だよ。俺たちはそのためにここまでやってきたんだろ？」

その言葉に、若干湿っぽかった雰囲気は吹き飛んだ。

そのまま、みんな少し駆け足気味に、黒鉄宮の剣士の碑に向かった。そのまま、碑石の前で集合写真を撮った。みんな笑顔だった。その後、ユウキはもう一度碑石に向き合い、一言つぶやいた。そこから少し離れたところで、俺とランが碑石を見上げた。

「本当にやりやがるとはなあ」

「ええ。妹ながら誇らしいです。これで思い残すことはありません」

「なんだよ、今にも死ぬみたいに」

俺の言葉に対するランの返答は、少しの間があった。

—— 我ながら、こういう駆け引きで情報を抜き取ろうとする自分の性格に反吐が出る。

「・・・そう、ですね。まだ、先がありますからね」

「そーいうこった」

だが、おかげで、疑惑が確信に変わった。と、そんなに遠くないところでログアウトの音が聞こえた。そちらに目を向けると、若干オロオロしているアスナがいた。そして、その横にいたはずのユウキはいなくなっていた。

それから数日間、ユウキはログインしていなかった。ランはもともとかなり安定しないログイン状態だったのだが、ユウキの方はこれまでずっとログインしていたのに、そ

れがばたりと途絶えた。そこで、俺は、ランがインしていることを確認した瞬間に、フレンドのインスタントメッセージをランに送信した。シウネーでもいいような気はしたが、ランのほうが確実だろう。

『突然すまん。今、会えるか?』

件名も入力しない、これだけの内容。だが、十分だろう。

『大丈夫です。場所はいかがしますか?』

『そっちのギルドホームに誰もいないのであれば、お邪魔したい。そうでないなら、こっちで適当な宿屋を探す』

『今は誰もいません。問題ない設定にしておきますので、どうぞ』

『了解した』

チャットかと思ってしまうほどの即レスの応酬で、俺たちが会うことが決まった。そのまま、俺はスリーピングナイトのギルドホームへ向かった。

ギルドホームには、ランが言っていた通り、ランしかいなかった。俺としては好都合だ。

とある部屋に俺を案内すると、ランは扉に何か特殊設定をかけたようだった。すぐに俺の前に戻ってきて、椅子に腰かけた。

「いま、扉はパスワード設定に変えました。よほどのことが無い限り、誰も入ってこれな

いし、会話も聞こえませんか」

「ありがとう。じゃ、早速聞くぞ。」

ユウキが最近インしてないのは、前の剣士の碑でのとこでの一件が原因だな？」

「はい。どんな顔したらいいか、って」

「何があつたんだ、あの時」

「ユウキ、無意識で、アスナさんのことを「姉ちゃん」って呼んでたそうなんです。それが、本能的にすごくショックだったみたいで・・・」

「あー・・・確かに、ランとアスナはどこか雰囲気似てるからな。わからなくはない」
一瞬何か言おうとしたようだったが、すぐに顔を伏せた。その原因は、俺には大体読める。

「——あと、アスナには・・・いや、俺たちには当たり前のようであって、ランたちにはない何かがある。それは、おそらく、俺たちにとってみれば、当たり前すぎて疑問すら持たないレベル。で、それが原因で、スリーピングナイツは俺たちと一定の距離を取り続けることにしている。違うか？」

俺の言葉に、ランは弾かれたようにこちらをみた。その顔を見ただけで、俺は、自身の推論が九分九厘的中していると確信した。——外れていて欲しかったが。

ポーカーフェイスを保ったまま、俺はさらに続けた。

「悪いな、俺は人間観察が得意でね。今までのことを照らし合わせて、あの打ち上げでの感じからざっくり推察できたんだ。

責めるつもりは無い。そっちとしても、傷つけたくないから言わなかったんだろ？特にユウキあたりは嘘とか誤魔化しとかは無縁の人種だからな。俺とは正反対の奴ばかりだから、距離を取ったほうがいいって結論は、俺も合理的だと思う。

——だから、ここからは確認だ。たぶん、今のやり取りで、ランも俺がある程度気付いていることに気付いたと思う」

「・・・はい」

「うん。じゃ、改めて、だ。——春先まで続かない、というのは、そういうこと、なんだな？」

回答は、無言の首肯。

ランは怯えているようにも見えた。当然だろう。隠して、隠し通して、墓まで持つて行くつもりだったのに、気づかれていたのだ。一体どんな風に思われたのだろう、と不安で仕方ないはずだ。ゆっくりと立ち上がると、俺は椅子ごと、ランを優しく抱きしめた。

「よく、頑張ったな。隠し通す意思、貫き通す覚悟。これまでのすべての努力を、俺は肯定する」

「そういうことは、言わないでください。折れそうになっちゃいます」

「十分に頑張ったことを、頑張ったって言うことが悪いものか。折れていいとは言えないけど、誰かを頼り、寄りかかってくるくらいはしていいんだよ」

ゆつくりとあやすようにやさしくランの頭を叩く。それに安心したのか、ランはさめざめと泣いた。

少しして、ランは目元をぬぐいながらこちらを見上げた。

「……すみません、お見苦しいところを」

「いいって。むしろ、気を張りすぎて疲れてたろ」

「いえ、そんなことは……」

「無理すんなって。自分でも感心しない特技だと思うけど、集中してなくてもそれくらいは分かるんだよ、俺」

ひとしきり泣いて落ち着いたのだろう、ランは目元をぬぐいながらそんなことを言った。

「ありがとうございます。なら、少し、隣に座ってもらえますか？」

そういわれ、俺はランの横に移動した。すると、ランは俺の肩に頭をのせてきた。

「私たち、両親はもういないんです。だからかもしれませんが、私はお姉ちゃんなんだか

ら、ユウキを見守らなきゃ、って。ほら、ユウキは目をつけていないと、何をするか分からないうすから」

「良くも悪くも、な。あいつはつむじ風みたいなやつだからな」

「ふふ、言い得て妙ですね。だから、あんなふうに言われたのは初めてで。正直に言うと、私、さつき、なんで泣いたのかわからないんです。でも、ロータスさんの胸なら、いくらでも泣ける気がします」

「そっか」

——いつか、俺の傍以外でも泣けるようになればいいな。

そんなことを口走りかけ、何とか口を閉じた。——俺の推論が正しい可能性が非常に高いと分かった今、「いつか」、などと地雷を踏みぬく必要はない。

「気を使わなくても結構ですよ?」

「悪いな、そりゃ無理な相談だ。目の前に精神的に不安定かもしれないやつがいて、そいつが気を遣うな、っていつても普通に接するとかできないだろ?」

「それもそうですね」

そういつて、ランは小さく笑った。

「正直、こんなに自分が弱いとは思ってませんでした」

「意外と人間、自分は大丈夫って思っても大丈夫じゃないんだよ。自覚がないだけ。」

だから誰かに寄っかかって、頼って、時には甘えて。そのくらいでちょうどいいんだ」

「でもどうしましょう、私、誰に頼ればいいのか、あんまり心当たりがないんです」

「んなもん誰でもいいだろ。シウネーとか、ノリとか」

「あなたでも？」

「ああ。ま、俺は、リアルで疲れ果てたりとかするとインできなかつたりするがな」

「なら、遠慮なく甘えさせてもらいますね？」

「こそ。ガキンチョなんてそのくらいのほうがちょうどいいってもんだ」

言いつつ、優しく頭を撫でる。その感触が気持ちよかったのか、かかる体重が少し増えた。

65. 彼女らの真実

それから少しして、ゲームもしながら仕事もしながら、という傍ら、俺は目的の物を見つけた。ユウキは、先日的一件からずつとログインしていない。それは、ランからも聞いている。ラン曰く、「あの子のことだから、どんな顔して合えばいいのかわからないのでしよう」、とのこと。全く、いらん遠慮をするガキだ、と俺は思ってしまう。が、まあ仕方ないと言えば仕方ない。

だが、その空白期間のおかげで、俺は手掛かりをつかむことに成功した。それを知った俺は、昼休みに、おそらくお目当ての人物がいるであろう屋上へ向かった。

俺の予想通り、その人物は屋上にいた。

「よう、頑張ってるか？」

「あ、はい。結構難しいですけど」

『こんにちは、ロータスさん』

「おう、こんちや。結構苦労してるっぽいな」

「反応とかのバランスをとるのが、結構難しくくて……機械的な減衰だと限界があるのかな、とか思ったり……」

「あー・・・ユイちゃんならまだしも、汎用的に使おうと思うと、確かにきついよな」

MHCPであるユイちゃんは、仮にも、稀代の大天才である茅場晶彦の傑作、そのひとつである。ぶっちゃけ、今でも俺はユイちゃんがAIであるということを忘れることがある。

「で、天川先生は、どうしてここに？」

「ああ、忘れてた。確証はないが、もしかしたら頼みごとをするかもしれない」

遠慮する仲でもないから、横にどっさり座る。その状態で、持ってきたタブレットの電源をつけた。

「メデイキュボイド、って知ってるか？」

「メデイ・・・なんですって？」

「端的に言うと、フルダイブ技術を医療に応用した代物だ。こういう技術自体は、結構昔からあったらしい」

そういうと、俺はその装置の概要を見せる。

「アミューシアはセーフティや利便性のために、出力及び感覚遮断レベルをあえて減衰させている。でも、ナーヴギアがそうであったように、本来フルダイブマシンつてのは、信号インタラプトレベルを100%近くまで引つ張り上げることができる。こうすると、全身麻酔とほぼ同等レベルに、肉体の感覚を遮断することができるわけだ」

「加えて、本人はその間、VRゲームにダイブしたり、恣意的に作り出した仮想空間に退避してもらえば、麻酔によるリスクも防げそうですね。電磁波の問題はありそうですね。クリアできる範囲でしょうし」

「その通り。そうして生まれた、超高出力特殊医療用途フルダイブマシン。それが、メデイキュボイド。だが、麻酔というところに目を付けた桐ヶ谷なら、おそらく、他の用途にも心当たりがあるんじゃないか？」

「さすがにそこまでは・・・医療に詳しいわけじゃないですし」

「さっきも言ったけど、完全に感覚を遮断するということは、感覚がマヒして何も感じないって状態と同じ、ってわけだ。体内部の痛みも、な」

「それって、つまり、強力な麻酔薬や鎮静剤を使わなくて済む、ということですか？」

「そういうこと。モルヒネとかは、どうしても意識混濁が起こるからな。加えて、被験者は仮想世界で暮らすことができる。適当なネットゲをしてもいいし、本を読むことだってできるだろう。こいつを使えば、QOLを大きく引き上げることができる。だが、モルヒネに代表される強力な鎮静剤や鎮痛剤を使うということはつまり、当該患者が末期症状に陥っているということと同義、ということになる」

「ホスピスの代わりに、VRを使う、ということですか」

「イメージとしてはそれで合ってる。金も場所もかかるから、問題も山積みだろうけど

な」

さすがは桐ヶ谷、頭の回転が速い。話が速くて助かる。と、ノートパソコンから鈴を鳴らすようなかわいい声が聞こえた。

『パパ、メデイキュボイドの被験者に関してなんですが、本名が分かりました。ですが、これは……』

「ユイちゃん、そこから先は俺が言う。

メデイキュボイドは、横浜港北総合病院つとここで試験運用されている。万全を期すため、被験者は殆ど無菌室から出ることが無いそうだ。そして、被験者の名前は、紺野^{こんの}木綿季^{ゆうき}、および紺野藍子^{あいら}の二名、だそうだ」

「……ユウキ……!?!」

「状況証拠に過ぎないが、俺はこれが彼女らであるんじゃないか、と、睨んでいる。記録を参照するに、試験運用期間は、少なくともSAO終了前からだ。それなら、あの強さにも頷ける。となれば、ユウキの全力を受けたであろうキリトに話を聞かないわけにはいかないだろう?」

「……なるほどな」

俺の言葉に、桐ヶ谷は少し黙り込んだ。無理もない、こんなところで思いがけずして真実を知ったのだ。あれこれ考えることがあってしかるべきだ。

「俺は、ユウキと戦ったときに思ったんだ。ユウキの反応速度は、おそらく俺以上だと。ならば、ユウキがS A O帰還者である可能性はありえない。条件からいって、ユウキがS A Oにログインしていたら、確実に二刀流は彼女のものになっていたはずだから。でも、アミュスファイアでこれほどまでのアバター操作精度と反応速度をたたき出すには、それ相応のフルダイブ経験が必要になるはずなんだ」

「S A O帰還者みたいな、長いことあつちで暮らしていたやつならまだ分かる。でも、S A O帰還者でない以上、ユウキレベルでアバターを操作できるような人物は、本人の素養抜きにしても、土壌がなければ育たない。アミュスファイア程度の出力では、それを実現するのは不可能だろうな」

続けた俺の言葉に、桐ヶ谷は頷いた。仮にアミュスファイアで実現できたとして、おそらくそれはS A O帰還者と比べても数倍以上の時間が必要になるに違いない。しかし、『メデイキユボイドのスペックデータを参照しました。ナーヴギアすら上回る出力です。これほどの出力なら、本人の素養にも左右されるところはありますが、パパたちくらいダイブすれば、パパと同等かそれ以上のアバター操作精度を獲得することは不思議ではないと思います』

「ユイちゃんがそういうのなら、ほぼ確だな」

基本的に嘘はつかない子だ。加えて、この手の支援にはユイちゃんが最適と言える。

次点でストレアとエリーゼ。ただし後者二人が組んだらまあ、どんなブロックもザル同然だろうが。

「結城は、いや、アスナとユウキはお互いに浅からぬ思いを抱いてるはずだ。これだけ長期間ログインしていないとなれば、おそらく結城はお前さんを頼るはずだ。その時はこの情報を渡してほしい。それと、もしかしたらそのプローブ、ユウキたちのために使ってもらうことになるかもしれん」

「分かった、約束する」

「その代り、ひとつ条件な。もし、そこに行きたいって話になったら、俺に声をかけてくれ。まだ結城は未成年だ、保護者として俺がついてたほうが、話が通じることもあるだろう」

「そう、だな。分かった」

「頼んだ。」

そろそろ休み時間も終わりだ、根を詰めすぎるなよ」

「あ、はい」

背を向けて、自分も授業の準備に向かう。顔を見られなくてよかったと、かなり本気で思っていた。

——結局俺は、こうして誰かを利用し続けるんだろうな。

返すものもなく、ただどっちつかずにうわべだけの付き合いを続けていく人生に、俺は我ながら反吐が出る思いだった。

それから数日後、俺は結城を連れて、例の病院に来ていた。受付までまっすぐ向かうと、俺は受け付けの人に声をかけた。

「すみません、小児科の倉橋医師をお願いできますか？」

「お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「天川蓮と結城明日奈です。もしかしたら、ロータスとアスナ、と言ったほうが分かるかもしれませんか？」

俺の言葉に、直接受付をした若い女性ではなく、少し奥にいた年配の方が反応した。

「ロータスさんとアスナさん、とおっしゃいましたか？」

「ええ。私がロータス、彼女がアスナです」

「なるほど、ということは、あなた方が……！」

「その反応を見るに、彼女たちは僕たちのことも伝えていたわけですか」

「ええ。倉橋先生を通じて、ですけど。あなた方の話ばかりだった、と」

「そうですか。よかったな」

「……はい」

少し返答まで間があつたのは、彼女なりにあれこれ思うところがあつたのだろう。まあ無理もない。嫌われていたら、忘れられていたら。そんなことばかり思うものだ。それに、今、結城は若干精神的に不安定な状態にある。余計な負担になるリスクが一つ減つたことは、純粹に安心材料だつた。

少しして、倉橋医師がこちらに來た。

「初めまして、えつと、天川さん、と呼んだ方がいいんでしょうか？」

「ええ。リアルではそちらで」

「では天川さん、と。それに結城さんも、お待ちしております」

「急なアポだつたのに応じていただき、感謝いたします」

「いえいえ、私こそ、まさかあなた方がここまでたどり着けるとは思つていなかった、というのが本音なのですよ。」

場所を変えながら、道すがら話しましょうか。こちらです」

そういつて、倉橋医師は俺たちを案内した。

「木綿季くんや藍子君——君たちにはユウキとラン、といったほうが分かりやすいでしょうが——彼女たちから、あなた方がここに来るかもしれない、とは聞いていたんです。でも、病院のことも、メデイキュボイドのことも伝えていないという。ロータスさんはうすうすと何か感づいたようだ、というのもしつていましたが、流石に情報が少

なすぎるよ、と答えました。ですから、先日、天川さんから連絡を受けた時は、それは驚きましたね」

「ユウキは、私たちのことを話してたんですか？」

「ええ。」

藍子君は、仲間の事と、・・・あえて、ここはロータスさん、と呼びましようか。あなたの事を、それはそれは楽しそうに話してくれました。でも、あなたに秘密を知られてしまった、突然距離を取られやしないかと怖い日があった、と。今は、あなたに会いたい、と、ことあるごとに言っていました。

木綿季君はアスナさんのことばかりで。ただ、あなたの話をした後には決まって泣いてしまつて。会いたいけど会えない、姉ちゃんにもどんな顔すればいいか分からない、と。弱音を吐くことなどめつたにない子なんですがね」

「ユウキも、彼女のVRでの仲間も、同じことを言っていました。なぜ、会えないんですか？」

「・・・まずはこちらにおかけください。長い話になります。コーヒーを取ってきましょう」

そういうと、倉橋医師は一瞬席を外した。その間に、俺は隣の結城に声をかけた。

「結城。いや、アスナ。いいんだな？」

「ええ。知らないままなんて、このままユウキと会えないなんて、そんなのは嫌だから」
「分かった」

彼女の覚悟がここまで固まっているのならば、俺が言うことはない。と、三人分のコーヒーを持って戻ってきた倉橋医師が、自分も座ってから口を開いた。

「お二人は、メデイキュボイドのことはどれくらいご存じで？」

「自分は、スペック、用途の一通りを。結城は？」

「私は、医療用フルダイブマシン、つてことくらいしか・・・」

「では、まずメデイキュボイドがどのようなものか、というところからご説明いたしません。天川さんには若干退屈な話になるかもしれませんが」

「いえいえ。自分は書面で一通り情報に目を通しただけですから」

その言葉を皮切りに、倉橋医師は話し出した。

「メデイキュボイドは、特殊医療用途のフルダイブマシンです。通常、アミューシアをはじめとするVRゲームに使用するマシンは、ここに——」

そういつて、倉橋医師は自分のうなじ——脊椎の上を静かにたたいた。

「微弱な電磁パルスを当てることで、感覚を麻痺させる。これはつまり、全身麻酔と同じ効果がある、ということなんです」

「アミューシアでは、この電磁パルスの出力を落とすことにより、利便性を高めると同

時に、安全装置セイフティとした。だけど、理論上では、感覚インタラプトレベルはもつと100%ギリギリまで上げることができる。100%まで上げるには、それ相応の細かい設定やらなんやらが必要。それを万人に対して可能とするナーヴギアを作った茅場は、まさに天才の一言でしような」

「ええ。そして、そこに目を付けたのが、メデイキュボイドです。

VRゲームは、視覚や聴覚などに障害を持つ人にとっては福音にもなりえる。リアルでは障害を抱えていても、VRゲーム内では問題ない、ということも珍しくない。なにせ、直接脳と情報の交換を行うわけですから、肉体に異常があっても関係ないのです」

「ゲームを医療につて研究は、結構古くからあるんですよ？」

「ええ。少なくとも、2010年代には試験的に運用されていた、という実績があります。

ですが、これをしようとする、ナーヴギアの出力でもまだ足りない。そこで、メデイキュボイドはベッドと一体化させて、脳から脊髄をカバードできるようにしました。これが実用化できれば、医療は劇的に変わる……！ いずれ、カメラと連動させたARも可能でしょう」

「ですが、これは、あくまで対症療法に過ぎない。……そうですね？」

「……ええ、そういうことです」

倉橋医師は、俺の言葉を正確に読み取り、深く頷いた。俺と違い、いまいち意味が分かっていない結城に向かって、倉橋医師はさらに言葉を続けた。

「痛みは取り除けるが、あくまで病気を治せるものではない、ということですよ。ゆえに、これが期待されている用途は、ターミナルケアです。

——日本語では、『終末期医療』、といいます」

「いわゆる、ホスピスとかの類ですね？」

「・・・その通りです」

そのやり取りに、結城は明確に息を呑んだ。

「終末期や中期治療の、ベッドに横にならざるを得ない期間のQOLを大幅に引き上げる狙いがあります。

結城さん、あなたには、あなたが望むのなら、すべてを話してほしい、と言われていきます。あなたにとってつらいこともあるでしょう。知らなければよかった、と思うことも。その覚悟があるのであれば、彼女たちの下へご案内します」

「——お願いします。どんな事実でも、知らないままさよならのほうがつらいです。それに、知るために私はここへ来たんですから」

ようやく、会える。リアルなユウキとランに。覚悟していても、不安は消えなかった。だが、結城——いや、アスナの言葉で、俺も腹を括ることができた。

——まったく、あいつといいこいつといい、知らないうちに大人になってるもんなんだな——

案内されながら、俺はそんなことを考えていた。

66. 覚悟

案内された先は無菌室だった。そこに併設されている小部屋に、俺たちは案内された。そこには、ベッドと一体化し、頭をすっぽり覆うように設置された大きな機械が二つあった。そこ入っている体は小柄で、どう見積もってもローティーンレベルの子供だった。だが、機械のサイズを勘案すれば、大人でも問題なく運用できるサイズであろうことは想像がついた。その子供には点滴などと思われるホースなどが密につながれていた。

「向かって左側が紺野藍子くん、右側が紺野木綿季くんです。二人は双子で、帝王切開で生まれてきました。その時に、母体に感染、気が付いたときには家族計4人全員が感染していました」

「帝王切開、ってことは、もしかして、彼女らは……!」
「おそらく、ご推察の通りだと思いますよ。」

——彼女らが感染したのは、ヒト免疫不全ウイルス。略称はHIV。通称、エイズです」

「でも、血液製剤なんて検査がかかるはずなんでしょう……? どうして……」

「・・・ウインドウピリオド」

「よくご存じですね」

苦々しく吐き出された俺の言葉を、倉橋医師は肯定した。

ウインドウピリオドは、分かりやすくいつてしまえば潜伏期間のようなものだ。目に見える結果としては出てこないが、感染力はある状態。その期間にある血液を検査しても、潜り抜けてしまうことがある。

「母親を介して父親に感染、その後二人の双子に感染しました。通常通り、薬剤による症状緩和を試みましたが、彼女らが感染したのは突然変異的に薬剤への耐性を得たウイルスでした。複数の薬剤を組み合わせた投薬治療も試みられましたが、思わしい結果は出ませんでした。HIVの偏見、薬の副作用、好転しない状況。まさに彼女らにとつては地獄のような日々だったでしょう。事実、お母様は事実を知って、一家で死を選ぶ道も考えられました。ですが、結果として、闘病される道を選ばれました。そのまま、特にこれと言つて何もできずに、今から2年ほど前に、彼女らのご両親は他界されました。

——が、彼女らには福音が訪れた」

「福音？ 薬剤耐性型に効く薬が開発された、とか？」

「確率的には、おそらくもつと非現実的なものでしょうね。」

彼女らがHIVを発症してから、2年ほどたったころ。今から3年ほど前、メデイ

キュボイドのプロトタイプが二機製造されました。ちようど、お二方が目にしているこれが、それです」

「3年前・・・ちようど、デスゲームの熱が収まらない頃、ですか」

「ええ。それゆえに、電子レンジの要領で脳を焼き、人を殺すことのできるナヴギア、その数倍の出力が、人体にどのような影響を及ぼすのか。誰にも想像はつきませんでした。一歩間違えば死に至るかもしれない、そんなリスクを承知のうえで被験者になろうという患者さんもなかなか表れませんでした。それを知った私は、紺野一家に打診をしました。もし、被験者になることができれば、無菌室に入り、日和見感染のリスクを大幅に減らすことができる、と。正直、今でも私は、その選択が果たして本当に正しいものであったのか、迷う時があります。

ご両親、当人たちもとても悩まれていたようでした。ですが、バーチャルワールドという未知の世界への興味、憧れが背を押したのでしようね。彼女らは被験者となることを承諾し、この部屋に入りました。以降、彼女らはずっとメディキュボイドの中で暮らしています」

「ずっと、というのは・・・?」

「文字通りの意味です。彼女らがリアルに帰ってくることはほとんどない。今は苦痛緩和のために、メディキュボイドの体感覚キャンセル機能を使用しています。24時間、

ずっとダイブしっぱなし、というわけです。それを、3年間ずっと。

さらに幸運なことに、ええ、本当に大変幸運なことに、彼女らには光明が差ししました。彼女らに、奇跡的なドナーが、S A O被害者の中に見つかったのです。それは、H I Vへの抗体遺伝子を持つドナーでした」

「それって、白人のごくごく一部しか持たないっていう、アレですか？」

「まさに。そのドナーさんは、ロシア人と日本人のハーフで、片親の遺伝子が強く表れた結果ではないか、と推察されています。S A O被害者の、命にかかわらないドナー提供は、親族の同意で可能になっていました。即座に、被験者から彼女らに骨髓移植が行われ、成功しました」

そこから、今まで冷静だった倉橋医師は、強く顔をゆがめた。

「木綿季くんは、順調に快方に向かっています。ですが、藍子くんの方には、拒絶反応が出た。このままでは、仮に彼女の体からH I Vが駆逐されたところで、彼女は遠からぬうちに、その拒絶反応で死に至ります」

「そんな……！」「ッ……！」

「彼女らの母親は敬虔なクリスチャンだそうですが、あの時ほど私は神とやらを恨んだことはありません。一体、神というのは、彼女らにどれほど苦しい試練を課すのか、と……！」

ゆがめた顔そのままに、倉橋医師は頭を片手で強く握りしめた。

沈黙の後、俺は静かに倉橋医師に聞いた。

「ひとつ、聞かせてください。藍子さんは——ランは、今どのような状況なんですか」

「一言で言えば末期です。もとより、体内の細菌やウイルスを排除することはできませんから。藍子くんの寿命は、HIVによる免疫不全によるものか、拒絶反応によるものなのか、そのどちらが先に来るかだけです。今は、HIVの動きを抑える方向で治療をしています。ですがこれは、活発に拒絶反応を起こしている抗体の動きを抑えることをあまりしない、ということと同義であり、遠回し的には彼女の寿命を縮めかねない行為であるともいえます。どの治療が正しいのか、というのは、おそらく誰にもわかりません。」

——木綿季くんが、あなたの前から姿を消そうとした理由は、もうお分かりのことだと思います」

——覚悟はしていた。していたつもりだった。が、実際に聞くと、流石に堪えるものがあつた。そんな状況で、あいつは、それでもユウキの姉であらんと踏ん張っていたのだ。その覚悟たるや、想像することすら難しい。

思わず天を仰ぐ。これほど神とやらを恨んだことはないという、倉橋医師の言葉も

もつともだ。わずかに見えた光明すらも奪われる、その絶望たるや。想像を絶するものがある。しかも、それは二人に一人にしか与えられない。どうあつても、早すぎる別れを余儀なくさせられるということだ。

『そんな顔をしないでください』

その時、声が聞こえた。声こそ、あちらとは少し違う。だが、この丁寧語口調には心当たりがあった。

「ラン、いや、藍子さん、か・・・？」

『・・・どうぞ、ランと呼んでください。藍子さん、なんて呼ばれると、少しこそばゆいです』

「こつちが見えてる・・・ってことなのか？」

『はい。最も、厳密には取り付けられたレンズ越しに、ですけど。』

話には聞いていましたが、本当にリアルと同じ顔立ちなのですね。私のことを察してください。さつていたあなたなら、ここに来ること自体、かなりの覚悟が必要だったことでしょう。それでも来てくださつて、本当にうれしいです。直に顔を見れないことが残念なくらいに」

直に顔を見れない。それはつまり、そういうことか。そこまで彼女の病状は末期である、ということか。

『倉橋先生、お二人に隣の部屋を使わせてはもらいませんか?』

「分かりました。」

お二人とも、あちら側にある隣の部屋に、私が面談で使っているアミュスファイアがあります」

「私は自分の物を使います。こうなるかもしれないことは予見していましたから」

「分かりました。少々お待ちを」

そういうと、彼は白衣のポケットからメモ帳を取り出し、何か短く書いて、メモを破つてこちらによこした。

「アクセスポイント名とパスワードです」

「ありがとうございます」

それを受け取った時に、ランから声がかかった。

『お二人とも、ユウキがデュエルをしていた、あの木のたもとで、また』

「ああ、向こうでな」

それだけ言い残すと、俺はすぐに隣の部屋に向かった。

設定を速攻で終わらせて、ユウキとデュエルした木のたもとへ向かった。ランは俺より先についていた。そこにはユウキもいた。

「よう。久しぶり、だな」

「ええ。ほら、ユウキ」

ランに促されて、ユウキがゆっくりこつちを向く。そちらはアスナに任せることにした。

「私は信じてました。あなたなら、私たちの下にたどり着いてくれる、と」

「買いかぶりだよ。蜘蛛の糸にしがみついたのが俺だけだった、っただけだ」

「そうかもしれない。ですが、現にこうして、あなたは私たちの前にいる。それに、アスナさんをユウキの下へ導いてくれました」

「仮にも、そういう立場だからな、俺は」

大して年が違うわけじゃない。精神的には、むしろアスナの方が大人かもしれないと思うこともある。だが、今の俺は、そのほんの少しの歳の差も利用した立場の違いで、彼女らを導く義務がある。

「私は純粹にうれしいです。アスナさんがスリーピングナイトに加わりたい、と申し出てくれたことは、本当にうれしいことでした。」

私たちは、セーリングガーデンという、バーチャルホスピスで出会いました。若いメンバーが多かったこともあり、たまには戦闘系のゲームを、というところで、様々なゲームにコンバートを繰り返していました。もともとは9人いたんですが、ふたり、既に亡く

なられています。その矢先、私も長くない、と分かりました。だから、みんなと話し合
い、私がそうなったときに、スリーピングナイツは終わりにしよう、と。そう決めたん
です」

「だから、姉ちゃんがまだ生きている間に。どこかに、ボクたちがいた、って証明を残し
ておきたかった。最後に、この世界で、とびきりの思い出を作りたかったんだ。だから、
あのモニユメントに、どうしても名前を残したかった。でも、なかなかうまくいかない
うちに、姉ちゃんが思うように動けなくなっちゃって。それで、手伝ってくれる人を探
してたんだ」

「それで、あんな辻デユエルを・・・」

「うん。だから、ロータスさんの言葉は本当に目からうろこだった。パーティのバラ
ンヌって考えたことなかったし。考えてみれば、ボクと同じくらい強い姉ちゃんが積極的
に前線に出てきたことなかったな。って、その時初めて思ったんだ。その時になって姉
ちゃんの大切さを改めて思い知ったつもりだったんだけど・・・やっぱだめだなボク。も
うどうの昔に覚悟なんてできてるつもりだったのに」

「なーにが覚悟か14、5の小娘が。悟った気になってんじやねえぞ」

「でも・・・アスナにも、ロータスさんにも、迷惑かけちゃったし」

「迷惑くらいかけろ。それがガキつてもんだ。それくらいでちようどいいんだって。そ

れと。

——忘れろっていうのなら、俺はまとめて二人とも思いつきりひっぱたく」

「ロータスさんはこういつてるけど、さ。私たち二人とも、ユウキたちのことを忘れるなんてできないよ。今でもまだ、スリーピンググナイツに入れてほしいって思ってる」

アスナの言葉を聞いて、ユウキの目に涙が浮かんだ。

「ああ・・・ボク、この世界に来てよかった。アスナと出会えて、本当にうれしい。・・・今の言葉でもじゅうぶん。じゅうぶんだよ・・・」

さめざめと泣きながら言うユウキに、俺は頃合いかと思ひ提案した。

「なあ、ユウキ、ラン。外の世界を見てみたかないか？」

「え?でも、ボクたちは——」

「メデイキュボイドから出られない。ああその通り。だがな、それ以外にも手はあるんだ」

「それって、どういう・・・?」

「メデイキュボイドには、遠隔でカメラの映像を使ったAR機能が期待されている、と倉橋医師が仰ってた。それを応用する」

「もしかして、ユイちゃんの・・・?」

「そ。試験運用データが増えることはあいつにとってもプラスになるはずだ」

キリトが、AIであり愛娘のユイちゃんと現実世界でも暮らせるように、と調整を行っている双方向通信プローブ。あれの接続などをいじってやれば、上手くいくはずだ。

「じゃあ、お願いしたいかな」

「それって、二機用意することってできますか？」

「どうだろ、聞いてみないとわからん」

「できたら、二機お願いしてもいいですか？別々の景色を見たいんです」

「わかった、頼んでみる」

それだけ言って、とりあえずその場は分かれた。

67. 眞実を知る。

ランのリアルに会った翌日、俺は結城家の邸宅を訪れていた。表向きは、親御さんとの話し合い。もともと、別の学校へ編入させたいという話は聞いていたから、そのあたりの折衝だ。だが、結城がそれを望んでいないことは、本人から直接聞かなくとも分かっていることではあった。事実、最近特に彼女はかなり気落ちしているようにも見えた。それゆえ、年が近いということ、結城とSAOの時から面識があるということから、俺が交渉役選ばれたのだ。

ゆっくり一つ息をつき、呼び鈴を鳴らす。対応に出た家政婦さんに話を通すと、そのまま応接間に通された。少し待っていると、すぐに結城夫人が姿を見せた。

「お時間をいただきありがとうございます」

「いえ、こちらとしてもあなたとは話したいところでしたから。あなたのことを調べたうえで、ですが」

「と、いうことは、私がSAOで行ってきた愚行も、あなたは理解されている、と？」

「あくまで書面上で、です。あなた自身の口からお聞かせください。そうでなければ、理解したとは言えないでしょう」

ある程度覚悟はしていた。俺のやってきたことは到底許されることではない。目的が手段を正当化するようなことはあってはならない。色眼鏡で見られることも、十分にあり得ることなのだ、と。だが、この人は違う。あくまで自分が知っていることは紙の上で書かれていることに過ぎない。直接話を聞いて初めて理解することができると知っている。知ったうえで、俺をここに呼んで話を聞きたいと言ってきたのだ。ここまですでされては、腹を括るほかない。

——まあ、もとより。隠すつもりなど毛頭ないのではあるが。

「分かりました。お教えします」

俺は洗いざらい話した。SAOで俺がやってきたこと、見てきたこと、感じたこと。すべてだ。話し終わるころには、淹れたてで熱かった紅茶はすっかり冷めていた。

「——これが、自分のしてきたことのすべてです」

「ありがとうございます。少しだけ、時間をください」

「ええ、どうぞ。簡単に飲み込めることではないでしょうから」

ある程度端折ったと言っても、2年半の俺のログだ。情報量としては相当なものだ。それも、俺ほど数奇なプレイログを持つプレイヤーなどいるわけがない。紅茶を飲み干し、少しカップを見つめてから、結城夫人は口を開いた。

「すみませんでしたね。さて、では質問をしていきます」

まず、一つ。その抑止力的行為は、他にもっと合理的な手段はあったのではありませんか？例えば、もっと大人数を投入する、とか」

「人数による人海戦術は期待できる状況にありませんでした。たださえも攻略の最前線は常に人手不足で、結果的な最終ボスになった75層時点では40人強程度しか残っていないかつたと言います。そこからさらに、75層では、偵察隊を含めて20人の犠牲者を生みました。仮に、最終的に100層まで上り詰めることができたとして、そこに立っているのは十数人程度しかない、ということも考えられます。あるいは十人を割り込んでいたかもしれない。そのトッププレイヤーか、それに準ずるレベルでしか太刀打ちできず、彼ら彼女らの力をおいそれと借りるわけにもいかなかった状況では、人海戦術など取れる方法ではありませんでした。それ以外の合理的な方法は、少なくとも私は思いつきませんでした」

「では、次に。それは、あなたがやらなければいけないことでしたか？ひいては、誰かを頼むという手はなかったのですか？」

「私がやらなければいけなかったのか、という点については疑問符が残り続けると思います。ですが、誰かを頼むという手はありませんでした。たとえ相手が何人も殺した大罪人といえど、誰が人殺しの片棒を担ぎたいと思うでしょうか。でも、誰かがやらねば、絶対にどこかでラフコフが障害となる日が来る。現に、中層プレイヤーは、ラフコフが

討滅されてから活動が活発になった、と、知り合いが言っていました。そういう点では、誰かがやらなければいけないかっただろうが、自分でなくてもよかったかもしれない、という回答が適切かと思えます」

「なるほど。で、その状態でも見捨てることのなかった子に少しでも恩を返したい、と？」

「恩返しなんて大層なものじゃないです。少しでも借りを返したい、つてだけです。年下の女の子に借りを作ったままでは、自分が釈然としないので」

「・・・なるほど。」

では、今度は娘についてです。SAOの中で、娘はどんな存在だったのですか？」

「ひとことと言ってしまえば旗頭ですね。ですが、一時期はとにかく攻略となっていた時期ことも多かったように思います。それを、キリトがうまく仲裁していたように思えます」

「とにかく攻略とは？」

「最低限の犠牲で、最速で攻略を進める以外に価値などない、という感覚です。ここでの犠牲は、プレイヤーのことを指して、世界に設定されたNPCは範疇にありません。プレイヤーではないキャラクターをボスに殺させて、その間にプレイヤーがボスを攻撃して攻略をする、という立案をしたこともありました。高速攻略を至上命題とする彼女

にとつて、キリトの、だらける時はとことんだらけるといふような態度は、その時には看過できなかつたようですね。また、最初に彼女とまともなコンタクトを取つたのは自分とキリトだったのでありますが、その時彼女は店売りの武器を複数本買って、ただひたすら最前線で戦い続けるという状態でした。もつとも、自分たちと会つた直後に限界になつたようで、寝袋にくるまれ担がれて最前線から離脱するまで完全に気絶してしまつたが。それが、キリト——ここではあえて、桐ヶ谷と呼びましょうか——彼と関わることで、大きな変化があつたように思えます」

「それは、あなたの目にはいい変化のようでしたか？」

「ええ。少なくとも、一人の人間としては確実にいい変化だと思いますよ」

「そう、ですか……」

それから少し、結城夫人は考え込んだ。

「実は、編入に関して、本人の同意を得られていません。同意を得られ次第、そちらに連絡します。窓口はあなたでいいんですね？」

「はい。ご息女からでも、あなたからでも構いません。結論がどちらでもご連絡ください。期限は今学期くらいをめどに」

「分かりました」

それだけ言葉を交わし、俺は結城家を後にした。

その気になれば、無理矢理にでも転入させることはできるだろう。それをしないのは、自分の諫言が届いたからなのか、どうなのか。どちらにせよ、結城の望む未来になってくれれば、と、俺は祈っていた。

さて、あれこれ交渉などが終わり、昼休みに俺は桐ヶ谷たちメカトロニクスコースの部室(?)に俺と結城は来ていた。用件は、例の視聴覚双方向通信プロープの最終調整。細かい調整はあれこれやはり議論的になっているようで、そのたびに俺が諫め、というのを繰り返し、何とか調整を完結させた。機材としては、予備機としていくつかあったストックのうちの一台中一台を突貫で設定をコピーすることで対処した。最終調整が終わったところで、桐ヶ谷から「念のため激しい動きは慎んでくれ」と釘を刺さされ、とりあえずその場は解散となった。ちなみに、プロープの「中の人」は、俺側がラン、結城側がユウキである。なんとも紛らわしいが、本人の希望なので仕方ない。

結城たちに連れ添う形で国語総合の先生にあいさつに言った。特にこの国語総合の先生は非常に柔和で、あれこれ現代的なことにも理解のある先生だったから、俺は全く緊張していなかった。挨拶が終わって、自分のデスクから次の授業の用意を持ってくると、俺はそれとなくランに言った。

「なあラン、本当に俺のほうでよかったのか？」

『またその話ですか？むしろこんな体験のほうがめつたにないんですから、こつちのほうがいいですよ』

「ま、そういうんならいいが。レインとかのほうがよかつたんじゃないか？」

『その、蓮、さん、が一緒だからいいんです』

「そっか」

なら、これ以上は何も聞かまい。確かに、ランの言う通り、先生の立場から見る教室というのものなかなか珍しいものだろう。

その日の授業は全く問題なく終わった。ランも基本的に静かだったし、分からないところは空き時間を使って直接俺に聞いてきた。というか、今日俺が教えていたのは大体中学・高校の物理、化学分野だったのだが、よくついてこられたものだ。ぶつちやけ並みの生徒ならわからないとお手上げ状態になるはずだが、その辺はさすがというかなんというか。

特にその日は残業をするということもなかったので、少し引け目に感じながらお先に失礼することにした。

車に乗り込んでから、ランがこちらに声をかけてきた。

『あの、蓮、さん。行ってほしいところがあるんですけど、いいですか？』

「お安い御用だ。どのへんだ？」

『道案内するので大丈夫です。まず、星川駅までお願いします』

「星川駅な。ストレア」

『はいはい、ナビにポイント完了したよ』

「サンキュ」

その言葉を聞き、俺はゆっくりと車を出した。

『蓮さん、は、その、なぜ教師に？』

「ま、まず一つはとにかく職と衣食住の確保かな。SAO事件のあと、家を追い出されちまってどうにもならない状況だったからな」

『追い出された、って』

「親だった人が頭の古い人でね。俺はどうあがいても、2年もゲームごときに浪費したバカ」でしかなかったんだよ。SAOがクリアまで脱出不可、死んだら終わりのデスゲームだったってさんざん報道されてたはずなのにな」

『そんな・・・』

「人つてな、意外と自分を守るためにはどこまででも排他的になれるもんなんだよ。それが血縁であつてもな。・・・すまん、こんな話して」

『いえ・・・。ところで、まず一つ、ということとは、他の選択肢もあつたんですか？』

「もう一つは、虹架……レインの存在かな」

『レインさんの、ですか?』

「俺のSAOでの略歴を話さなきゃ、まずそれは始まらない。ぶつちやけ信じられない話だとは思うが……聞くか?」

『聞かせてください』

俺の話に、ランは即答した。それに俺は驚きつつ答えた。

「まず、SAO開幕直後、俺はいわゆる攻略の最前線にいた。それが、確か30層ぐらゐまで。それまで、レインは俺の相棒みたいなもんだったんだ。そこから、俺は笑う棺桶ラフィン・コフィンの一員となつて、ラフコフの構成メンバーともどもPKを行つていた」

『え……』

「正直な話、途中から俺も数えるのを忘れてたけど、俺のPK数はトップクラスのはずだ。つまるところ、SAOで最も人を殺したプレイヤーの一人、ということだな。ラフコフ討滅戦の後、俺は流れのプレイヤーとなつて、あちこちでオレンジ——もつと言つちまえばラフコフの残党殺しまでやってたしな」

『それに、レインさんはどう絡んでくるんですか?』

「ぶつちやけ、俺の思想に共感するヤツなんざいないって、俺自身が諦めてたんだ。それもそうだよな、俺がやってたのは、大を生かすために小を殺し続けるってことなんだか

ら。でも、あいつは、それは間違ってるって、止めようとしてくれたんだ。神出鬼没もいいとこな俺を追いかけてきて、な。で、75層のボスがヤバ気って聞いて、俺はこっそりボス部屋に入って、ボス攻略に参加した。そんな俺でも、レインは背中を預けて戦ってくれた。その後、普通に帰れるはずがすったもんだあって、そんな中でもレインは俺を見つけてくれた。あいつがいなけりゃ、間違いなく俺はこうしてここにいることはない」

『ALO事件、ですか？』

「こそ。博識だな

ALO事件に際して、俺は洗脳を受けていた。洗脳が解けるトリガーになったのは、ほかならぬレイン関連だった。ほんと、あいつには借りが多すぎるからな。ここらで少しくらい返却しておかないと、なんていうか、性に合わん」

『律儀なんですね』

「変なところで、な」

そうして車を走らせると、目的地に近づいてきていた。

ランに言われるままたどり着いたのは、少しさびれた一軒家だった。

「なあ、ここって、もしかして——」

『ええ、そのもしかしてで合っていると思いますよ。私たちの家です。住んでいたのは一年足らずでした』

「中に入らなくていいのか？ よつぽどなもんじゃなければ大体の鍵はどうにかなるが」
『ここで十分です。というかどんな技術ですかそれ』

俺の返答に、ランは穏やかに笑った。

『短かったからなのか、ここで暮らした日々は本当に、鮮烈に覚えていきます。きつと最後の瞬間まで忘れることが無いだろう、というくらいに。庭で木綿季と遊んだり、バーベキューしたり』

「うらやましいな。本当に楽しそうだ」

『ええ。だから最後に見ておきたかったんです。取り壊されてしまうからですから』
「ここをか？」

『親戚はここを売るか、コンビニにしたいそうなんです。フルダイブして交渉しに来た人もいました。ハンコ押すだけでいいから、と。現実での私は腕どころか指一本自由に動かせませんが？ つて言ったときの顔は見てもらいたいくらいに傑作でしたね』
「そりゃさぞ愉快だったろうな」

今度は俺が笑う番だった。

『木綿季にいい人でも見つければいいんですが・・・』

「スリーピングナイトの中にはいないのか？」

『本人曰く、〃仲間の時間が長すぎて、そういう目で見る気になれない〃 そうです。もう少しお淑やかになればモテそうなものなんですが』

「そりや無理だろ。全く想像つかないし。それに、おしとやかな木綿季とか木綿季じゃねえわ」

『確かに、ああやってみんなの前で笑い続けていないとあの子って感じがしませんね』

そういつて、少しためらいがちにランが言葉を続けた。

『ここまで来たら、あんまり手をかけすぎてはいけない、と、分かっているんです。でも、どうしても目が行ってしまふんですよ』

「それが姉つてもんだろ。俺にはもう肉親つてやつがないけどさ。手をかけすぎちゃいけない、かまいすぎちゃいけないって分かってても、どうしても行動してしまう。それでいいんだよ」

『でも、それではもしも私に何かあったら、あの子は・・・』

「それこそ杞憂つてやつだ。あいつは一人じゃないんだ。忘れることはないだろうが、時間が解決してくれるだろうこともたくさんある」

『そう、ですな。』

——私も、最近気が付いたんです。ためらつてる時間がもつたらないんだ、つて。

最初から、さらけ出してぶつかって行けばいいんだって。蓮さんが、ロータスさんが私を見つけてくれたから。私も遠慮なくぶつかって行けたんです。だから、こうして行動ができるくらい、仲を深めれたんだと思います』

「そういつてもらえると嬉しいな」

そういつて、俺はゆつくりとプローブを手で覆った。直接触れることはできなくても、これで伝わる思いもあるはずだ。

68. 決戦前

それから少しして、俺はまたスリーピンググナイツのホームに転がり込んでいた。というのも、俺が特定のギルドホームを持たないこと、職業柄どうしてもレインも含めた面々とはログインのタイミングが合わないことが最大の理由だ。それに、最近では木綿季の容体も安定してきたので、中学からの編入に備えて彼女の家庭教師的立場にもなっている。スリーピンググナイツのリアル事情もあり、スリーピンググナイツのホームに行けば大体誰かいるのだ。なので、スリーピンググナイツ以外の知り合いがいないと確認したら、大体俺は彼女らのギルドホームに行くことにしている。そこで軽くデュエルをしたり、勉強教えたり、ただ駄弁ったりしている。今日はランとデュエルをしていた。

「デュエルトーナメント？ああ、もうそんな時期だったか」

「忘れてたんですか？」

「それだけ大変なことだよ。俺のリアル、知ってたんだろ？」

「ああ・・・」

教職というのが大変だ、というのは聞いてはいた。が、聞きしに勝る大変さで、よほどのことが無ければイベントごとなど頭から抜け落ちてしまうのだ。

「今年も出るんですよね？」

「時期があつてれば出る。けどぶっちゃけ難しいかもな」

「ええ・・・私、ロータスさんと戦えるかも、つて楽しみにしてたのに」

「・・・ん？ランも出るのか？」

「ええ。最近身体の調子がいいですから」

そういう彼女は確かに最近かなり調子がよさそうだ。何も知らない人からすれば、よもや彼女が末期の患者なんて思う人のほうが少ないだろう。最近では俺とデュエルしても悪くない戦いをするほどだ。ALLO最強格のキリトと互角以上の戦績を誇る俺と悪くない、という時点で、その実力たるや推して知るべしである。

「て、ことは、スリーピングナイツからはユウキとランの姉妹かー。かなりきついな。キリトとアスナも十分に強敵だつていうのに」

「その二人相手なら、ロータスさんのほうが戦績勝つてますよね？」

「少し前の話なら、つて前提条件が抜けてるぞ」

「今なら負けるかもしれない、つてことですか？」

「あり得る話ではある。ダイブの時間も違うだろうし、俺はALLO以外のゲームにも手を出してるし」

「そーいいながら、私とは戦えますよね？」

「そうそう簡単に負けるほど鈍っちゃいないさ」

そんな会話をしながら、俺たちは刃を交えていく。最終的に、俺がランの突きをこすり上げるようにいなし、戻せなくなったところで二刀によるラッシュでケリがついた。

「参りました」

「相変わらず強いな。これで本気じゃないってんだから末恐ろしい」

「あなたが言いますか？」

笑いながら健闘をたたえ合っている構図、なのだが、ランの目は全く笑っていない。たぶんそれはこちらもだろうが。俺の言葉は心の底からの本音だ。大体両方共こうして雑談も交えたかなりカジュアルなデュエルをしているから、本気とは程遠い。だが、俺からしたら、その程度で並大抵の相手に後れを取るようなヤワな鍛え方はしていない。なにせ、こちらら文字通り殺し合いを潜り抜けてきた身だ。

「というか、そもそもなんで二人とも喋りながら模擬戦できるのさ？」

「俺の方は、まあ、スタイル的にできなきやお話にならないからな」

「私に関しては、主にユウキのフォローで周りを見ながらヒールとバフをかけられるようにしながらなので。一対一ならこのくらいは」

「そもそもできるほうがおかしいと思わないの？」

「慣れたら案外楽」ですよ？」

俺とランの揃った回答に、揃っているスリーピングナイツの面々は一様にため息をついた。

「そういえば、ランねーさんってスタイル変わった?」

「え? まあ、心機一転というか」

「そうなのか?」

「今までは盾持ちの片手剣。で、防ぎながら援助して、時には攻撃して、って感じだったんだよ」

「へえ」

ジュンの言葉に、俺は少し意外に思った。今のランの剣は軍刀、俗にいうサーベルと呼ばれるものだった。一応片手剣という扱いになっているが、レイピアのように使うこともできる。実際、ランのファイティングスタイルは斬撃のみならず刺突も少なからず使用するものだった。両手に武器を持ち、攻撃のほとんどが斬撃か体術で構成される俺からしたら、かなり新鮮な戦い方だった。慣れないうちは苦戦させられる。

「でも、俺が想像するに、今のランのスタイルは補助魔法でバフとヒールをかけて、回避とパリイをメインとして一気呵成に攻め切る超攻撃的スタイルだろ。そのスタイル特性上、必要があれば後衛に回ることもできるが、その真価は前線で暴れているときに発揮されるはずだ。ま、どうあっても血は争えんユウキの姉ってこつたな」

「えー、それじゃボクが突撃思考の脳筋みたいじゃん！」

「俺が指摘するまでヒーラー不足の超脳筋パでフロアボス攻略できるって考えてたのはどこの誰でしたっけ？」

ユウキの抗議は、俺の回答がすべて物語っている。ま、大体中の人の年齢がアバター通りだとして、後衛で援護するより前線でギツタバツタしたいという気持ちは分からない。くはない。

「ま、ユウキはそのくらいがちょうどいいんだよ。で、やるか？」

「やるー！」

刀の柄を叩きながらの言葉に即座に乗ってくるあたり、こいつの性格が見える。キリトほどではないが、ユウキも大概戦闘狂だ。そんな彼女が抜剣して正対したのを確認して、俺は戦闘態勢に入った。

そんないつも通りの日常を送りながら、俺はGGOにログインした。いつも通り適当に散策するだけの予定だったが、

「あ、エキシージちゃんじゃん、やほー！」

「うげ」

厄介な奴に捕まることになった。振り返った先には、頬にレンガ色のタトウーを入れ

た、長身の女性プレイヤー。

「何の用だ、この毒鳥め」

「毎回ひどいわねー」

「自分の評判見てから言おうかそういうセリフは」

「失礼しちゃうわー、私は健全にゲームを楽しんでるだけなのに」

「味方もろとも巻き込む規模の自爆特攻するようなプレイのどこが健全じゃどこが」

俺と同じ、GGOの最古参が一角とされているピトフイーだ。ピトフイー、というのが、南国の毒鳥なので、俺は遠慮なく毒鳥と罵ることにしている。古参なら誰しもが一回はその名を聞いたことのある、イカレたプレイヤーである。

「で、何の用だくそアマ」

「んー、ちよーつと協力してもらいたくてねー。場所移していい?」

「長い話なのか?」

「少なくとも立ち話レベルじゃないわね」

一瞬迷う。確かにこいつのプレイングは常軌を逸したものがあるが、俺なら何とかなるか。そもそも、第二回B0B3位という実績のせいで勘違いされがちだが、俺のこのゲームに対するスタンスは「手加減無し、全力で楽しむ」というものだ。ぶっちゃけデスペナは痛い、俺はゲームで生計を立てているタイプの人種じゃない。さすがにAS

50をロストしたらがつくり感も強いだろうが、それ以外の武器なら大して痛手ではない。なにより、グロッケンから出ないのであれば、HPは絶対に減らない。

「話だけなら聞く。ただし妙な真似をしたら試し斬りの実験台になつてもらうからそのつもりで」

「大丈夫、今回は仮にも依頼だから」

「なら仲介料はふんだくらせてもらおう」

「ええ、そうして？」

この女にしてはあまりに珍しい殊勝な態度に、俺はそのまま後ろをついていった。

「スクワッド・ジャム？ああ、なんか運営のお知らせにそんなのがあつたっけな」

「ある程度予想はしてたけど、やっぱりチェックしてなかったのね」

「あのな、自慢じゃないが俺は基本的にソロだぞ？スクワッド小隊、なんて銘打たれてる時点で地雷認定、ナシだナシ」

「そっか、それもそっか、ボッチだもんね」

「流れの傭兵って言ってくれ」

「流れの傭兵なんて長いじゃない。じゃあソロボッチで」

「パワーアップさせてんじゃねえよ」

この辺まで来て、明らかに面白がられていることに気付き、話を先に進めることにした。

「で、そのスクワッド・ジャムがどうしたって？」

「私が最近一緒にプレイしてる子がいるんだけど、肝心の私が本番出れそうになくて付き合ってくれないかなって」

「ほかに当てはねーのかよ。俺も結構忙しい身なんだが」

「だいじょーぶ、腕の立つのをもう一人用意してるから。三人なら楽勝でしょ」

「つつてもスクワッドってことはワンパだろ？最悪倍の人数相手にすることになる」

「私が見込んだ子と、私からみて腕が立つって判断した相手とあなたが組んだら、並みの相手なんて鎧袖一触よ」

「そりや光栄なことぞ。」

結論だけ言うと、即答はできん。詳しい話を聞いてから決める」

「結構！」

結局受けることになるのだろうが、金になるからいつか。そんな気持ちで俺は案内されるままついていった。

案内された先にいたのは、巨漢の男と小柄な女の子だった。

「紹介するわね。ちっちゃい子がレンちゃん、デカいのがエム。二人とも、こちらロータスさん。何とか協力こぎつけた。じゃああとは本人たちでごゆっくり☆」

・・・やっぱりそういう話になったか。ま、とりあえずそっちの方向で話を合わせたほうがいい。

「ロータスだ。よろしく」

「ロータス、というと、ギャンブルメイジか」

「よくぞ存じで」

そんな風に口先では言うものの、ある種当然かとも思う。

「お知り合い、なんですか？」

「その言葉が出る、ってことは、君、もしかして最近始めたクチ？」

「あ、はい」

その言葉に、俺は内心愕然とした。

「ガチ勢の巣窟の大会にまさかのニュービーとは・・・。あいつ、ついに判断力までイカれたか？」

「ピトに気に入られている時点で実力はあるんだろう。それに、彼女が一時期噂になっていた砂漠のPKerらしい」

「・・・マ？」

砂漠のPKerと言ったら、間違いなく夕暮れの砂漠にいらると言われるスコープオン使いだろ。と、なれば。

「AGI極か。武器はSMGかマシンピストルかPDW。戦法は一気に肉薄してからのスナップショット。問題は武器だが・・・」

「それはピトが教えてくれた。P90だそうだ」

「てことは、サブアームはFive—seven？」

「いや、P90一丁持ちです」

「なるほど。ま、わざわざ持ち替えるだけのメリットもないか」

俺の言葉に、レンちゃんはごまかすように笑った。なるほど、拳銃射撃が苦手なタイプか。

「じゃ、俺のスタイル、と言いたいところなだけ。俺の正体知ってるってことは、多分ご存知よね？」

「基本スナイパーのオールラウンドタイプ。全距離対応型、といったところか。ステータスはAGIとSTRのバランスだったな」

「そりゃあ把握するよねー。俺も名がある程度売れてる身だし」

「エムさんすごい・・・」

「や、これはちよいと事情があるのよ。っと、俺はちよいと用事があるんでな、この辺で失礼するよ。もともとピトフリーに連行されただけだし」

「時間を取らせてすまなかった」

「いいってことよ。ちよいとリアルが忙しいから時間合わないかもだけど、インしてるときに合いそうだったらまた連絡するねー」

そういつて、俺はその部屋を後にした。適当に散策する予定だったが気が変わった。このアバターのリハビリがてら、地下のダンジョン探索に行くことにする。ただでさえも最近ハッピーゲル垢で半分パワーレベルアップをしていたところなのだ。こっちの感覚との乖離は無くしておきたい。仮にも傭兵として仕事を受け持った以上、自分の仕事には責任を持たなければ。とりあえず、俺は準備のためホームに向かった。

69. 師弟対決

GGOとALOを行ったり来たりする日々を過ごしながら、俺はデュエルトーナメントの日を迎えた。幸い、仕事も少しづつ慣れてきて精神的にも肉体的にも負担が少なくなっていたのが幸いだった。かなりベストに近い状態で本番に臨むことができる。ぶっちゃけ、生半可なコンディションだと勝てなさそうなやつが結構身近にゴロゴロいるからなあ。

「あ、ロータスさん」

「よ。元氣そうだな」

「ええ、最近は特に調子がいいんです。だからこうしてこつちにダイブする機会も増えてて」

「なるほどな。無理はするなよ」

「はい、ありがとうございます。そちらは、トーナメントはどんな感じですか?」

「あのな、よっぽどなくじ運じゃない限り、こんな序盤で俺が負けるわけないだろう。こっういつちやなんだが、そこらの雑兵に負けるほど落ちぶれちやいなと思ってるぞ」

「ふふ、そうですね」

穏やかに笑うランだが、彼女も油断できない参加者であることに変わりはない。少し気を抜けば確実に首を取られる。経歴が経歴だから過去の対戦成績が当てにならない分余計たちが悪い。

「今回は結構参加者も観戦者も多いんだな」

「多分、ユウキの影響でしょうね」

「あーなるほど。例のOSSか」

ユウキのOSSは、初お目見えの時と、俺、そしてアスナにしか使っていない。一目見よう、と詰めかけるのは、不思議ではなかった。でもまあ、

「ぶっちゃけ見る機会ないだろ」

「そうでしょうね」

はつきり言って、あのOSSを使うレベルの相手という時点で限られる。そうじゃないのなら、ユウキはデフォルト技のみで押し切ることが十二分に可能だからだ。ユウキがOSSを使うということは、それ相応の実力の相手ということになる。ユウキと白兵戦でやり合える、という時点で、旧ALOでは最強とはいかなくともかなりの強豪プレイヤーに分類される、リーファやフカたち以上の実力は最低ラインということになる。その時点で、キリトやアスナ、俺、あと可能性があるのはランとユーゾーン將軍くらいしか候補がない。で、大会運営もバカじゃないだろうから、ユウキと強豪クラスが当

たるのは必然的に準々決勝以上レベルの、もうどうにも相手がいないうちに限るはず。そもそも、そういう試合でもユウキがOSSを使うとは限らない。ユウキなら、俺やキリトの剣技連携スキルコネクが使えても不思議じゃないだろうし、そうなればわざわざ大技をかまさなくとも小技の連携で十分凶悪だ。むしろ、大技の後の隙が怖い。ほとんどしのぎきつた俺やアスナは見切られる可能性があるし、キリトもユウキの反応速度に合わせて超速ギアハイブドローブに入ったら凌げる可能性は十分にある。使う理由のほうが少ないのだ。

「ま、関係ないがな。相手が誰であろうと斬り捨てるまでだ」

「あなたらしいですね」

「どーだか。俺、巷だと権謀術数高めって評価っぼいし」

「あなたは立ち回りに特化した権謀術数ですから、こういったことはむしろ正々堂々やるタイプなんですけどね」

「全くもってお説の通り。必要に応じて闇討ち不意打ちもやるけど、真っ向からやるってんなら一定のルールは必要だろう。てか、そういう点において、俺はランが怖いんだがな」

「あら、随分と買ってくださいってるのですね」

「たりめーだ、最大クラスの驚異を勘定に入れないほど俺はバカじゃない」

正面からぶつかると考えると、キリトとユウキが最大の脅威だが、二人とも魔法を使

わない、いわゆる脳筋タイプなので、中距離をうまく使えば勝機は十分。だが、ランはなまじ俺のスタイルに似ているぶん、立ち回りのみならず戦闘能力でも勝機を手繰り寄せなくてはならない。真正面からやりあいたくないのは、どちらかといえばランの方なのだ。本人には言わないが。というか言わなくてもバレるが。そんなことを話していると、次の組み合わせが発表された。

「お、出たな」

「出ましたね」

対戦回数から見ると、そろそろどこが勝つかというのが読めてくる頃合いだ。対戦相手は毎回ランダムで抽選結果が発表される、とされているが、果たして。

「って次がランかよ」

「ええ、その反応は少し寂しいんですが。戦いたかったのでは？」

「あんまし直接的には戦いたくないんですけど。いつものアレはかなりカジュアルなやつだし」

「私としても、底が見えない相手と戦うのはなかなか怖いんですけど」

「よく言うよ」

底を見せていないのはお互い同じ。なら、ある程度カードが割れている可能性の高いこちらのほうが事前準備という点では不利だ。情報握ってないと死にかねない状況で、

これは結構痛い。

「ま、とにかく、今度こそ全力だ。覚悟しとけ」

「そちらこそ、首洗って待っててくださいね？」

そういうと、俺たちはそれぞれの控室へ向かった。

啖呵を切ったはいいものの、正直なところ、俺はランに絶対に勝てる自信などなかった。今までの俺がとってきた戦術は、要するに相手の土俵で戦わず、いかに自分のフィールドで戦うかを重視したのだからだ。だからこそ、どんな相手にもだいたい勝てるが、悪く言ってしまうえば器用貧乏で、どの分野をとつてもその道のエキスパートには勝つことなど到底無理なのだ。近接のみでキリトやユウキを制することはできないだろうし、遠距離狙撃でシノンに比肩するなど烏滸がましい。近接脳筋のキリトには中遠距離で、近距離苦手なシノンなら中近距離で戦う戦術が、俺に高い勝率をもたらしているのだ。

「さあ、トーナメントもいよいよ佳境！次は注目のカードです！まずはああ！

言わずと知れたマジックアーチャー、全ての間合いを制する対人戦闘のエキスパート

！鮮血、ローローローターース！」

コールを受けて、片腕を上げて応えつつ入場する。笑みを浮かべてはいるが、内心相当ヒヤヒヤだ。

「対しますはあ！単独パーティでのフロアボス撃破を成し遂げたスリーピングナイツ所属！その腕前はこれまでの戦いで証明済み！驚異の新星がベテランに牙を突き立てるか!?ラーラーンラーン！」

その声に、向かいからランが入場する。見た感じ、装備はいつも通り、サーベル系の片手剣。おそらく後ろには鎧の広い、いわゆるマンゴーシユに似た形状の短剣があるはずだ。

下馬評は俺も見た。多くのプレイヤーが、俺が勝つと踏んでいるようだ。だが、忘れてはならない。

俺に対する最大のジョーカーは、ちょうど自分のように、すべての間合いを制するコンセプトの相手であるということ。

——そう、ちょうど、今日の前にいるこの少女のように。

大会専用メニューであるデュエル準備完了の操作をしながら、この戦いについて考える。

(タフな戦いになるな、間違いない)

簡単な戦いではない。間合いを取り過ぎれば魔法が、近距離なら妹同様、超速の反射

速度から繰り出される攻撃が待ち受ける。となれば、俺の勝ち筋は限られる。

(魔法も近距離も泣きどころな間合い・・・剣の外、魔法の内でなんとか押し切るか、相手の得物が片方であることを利用して、二刀のラッシュでなんとかケリをつけるか)

普通で考えれば、定石は前者。敵の間合いに踏み込まず、アウトレンジから仕留める。だが、俺の中で技量を比べた時、弓と剣なら剣に軍配が上がる。SAOでの経験の差がありすぎるからだ。それも踏まえると、おそらくどちらを選んでも確率は五分と五分ならば。

左手で鯉口を切り、ニバンボシを抜刀する。左手を前に斜に構え、刀は片手で担ぐように構える。左手自体は体側に、ぶらんと下げた自然体。

「意外でした。こちらの知らない手札からくるものだとばかり」

「意表をつくのが戦術つてもんだ。教えたはずだが？」

「そうでしたね」

俺の言葉に応えるように、ランも自身の得物を抜く。サーベルを持った右手は中段に、腰の後ろから抜いた短剣は胸元で逆手に。うん、

(攻めづらい構えだな)

カウンターも、先制もありうる構え。うかつに飛び込むのは危険だろう。かといって、初手で詠唱が必要な魔法を使うのはリスク。と、すれば、ほんの少しだけ様子を

見てから攻め込むのがベターか。

カウントダウンが終わり、二人の真ん中に“DUEL!!”の文字がでる。俺が様子見する腹積りなのがバレたのか、ランがまず突撃してきた。走りながらの構えは、ヴオーパルストライクに近い、剣先を前に、担ぐような構え。想定されるのは突きだが、こいつは他ならぬ俺の教え子のひとり。そんなストリートな手を打ってくるだろうか。そこまで想定し、攻撃の寸前で軽くバックステップ、カウンターにかか——ろうとした。俺の想定を嘲笑うかのように、彼女は勢いそのまま突きを繰り出したのだ。狙いは、バックステップで一度正面を向いた俺の体の胸中央。

(まずっ——)

なんとかニバンボシでの打ち落としが間に合った。そのまま苦し紛れ気味に巻き上げにかかるが、これをランはジャンプすることで力を逃した。普通は粘ろうとして、巻き上げの力に負けて隙を晒すことが多いのだが、この辺りはさすがといったところだ。だが、今度こそ全力で間合いを取る。これで、仕切り直し。だが。

(まずいな、これは)

意外に思われるかもしれないが、俺に対して正攻法というのは一定の効力がある。俺が実際に手合わせした相手にとって、それは特に顕著になる。つまり、俺ならこう出るだろうことを知っているからこそ、裏をかかずに正攻法で行った方が、深読みしすぎた

俺の裏をかくことになる、というわけだ。

実際に、その読みは当たっている。実は、俺の天敵はもう一人いるのだが、それが他ならぬレインなのだ。なぜなら、お互いが「この動きならこう来るだろうが、ストレートには来ないだろうから、その裏をかいてやろう」と思つて、かえつて正攻法の攻撃をもらいかけたり、実際にもらつたりするのである。まさに、今のよう。どうやら、ランは早々にそれを悟っていたらしい。となれば。

(追い込まれた、か)

これで、下手に搦手を使うことを封じられたに等しい。うまくハマればいいが、外したら待つているのはラツシュだ。それも、こちらを上回る反応速度での、だ。食らった瞬間、こっちは負ける可能性が高い。

——仕方ない。できればレインかキリトあたりと戦うまで伏せておきたかつたんだが。

「こっちにも、師匠の意地つてやつがあるもんでね！」

開いて睨み合いになっていた間合いを一気に詰める。マジアどころかエンチャントすら使わない、本当にただの突撃。驚きつつも、ランは俺の袈裟を短剣で受け、右からの薙ぎを繰り出そうとする。カウンターを読んでいた俺は、左足でローキックを繰り出す。それを想定していたランが、受け止めた短剣をそのまま打ち払うようにして剣筋を

逸らしつつ、サイドステップ。回避した先に俺が投げナイフを放つ。あわやヘッドショットになるそれをランが短剣で防ぐ。その瞬間こそ、俺が狙ったもの。

俺は投げナイフを投擲するとき、ニバンボシを納刀していた。そして、ランが防いだ瞬間に、俺は素早くアローブレイズを弓に変え、矢を天に向けて放った。直前で俺が詠唱しながらバックステップしたのを見て、俺お得意の曲射だと、ランが見切つて突っ込んでくる。が、突っ込んでくるその進路上に降り注いだ矢の雨に、すぐさま回避行動を余儀なくされた。回避した先に、さらに俺の爆裂矢が刺さる。飛んできた瞬間に判断したランがバックステップを取るが、今回はそれが悪手だった。

爆裂矢は威力も十分だが、矢に細工をしてある分、見切りやすい。ランくらい反応速度高いやつなら、見てから回避がある程度できる。そこを、逆手にとる。

俺が放った爆裂矢は、ランがいた近くの地面に突き刺さりかけて、爆発した。そのまま、その一帯は、一瞬だが煙幕を焚いたように視界が無くなった。当然、ランも、こちちの様子を見ることはかなわない。煙幕を嫌つてか、突っ込んでくるランだが、そこに俺はいない。即座に周囲を見渡すが、どこにも俺の姿は無い。当の俺は、爆裂矢の爆発を煙幕がわりに飛び上がったからだ。ランの直上、ピンポイントで矢が飛んでくる。風切り音で回避に成功したランは直後に上を見上げるが、そこにもいない。その背後より迫る刃は、紙一重で短剣にはね上げられた。だが、それは俺にとって想定内。は

ね上げられた勢いそのままサマーソルト。カウンターの出だしを潰す。空中で身動きがとれなくなった俺に突きが飛んでくるが、それを俺は羽で飛んで回避。そのまま距離を取りつつ、矢で牽制。だが、ランも即座に詠唱しつつ羽を展開、跳躍で勢いをつけて飛んで突っ込んできた。変わらず牽制はいられているが、そんなの構わないと言わんばかりに、詠唱しながら打ち落としつつ肉薄する。詠唱文は聞き取れないが、おそらくエンチャント系。となれば、基本スペックはランそのまま。ゼロ距離での魔法ブツパもなし。

(ある程度距離を調整しながら、剣の間合いの外をキープして立て直す。それでも間合いは詰められるだろうから、間合いを見計らって居合一閃)

それで、とりあえず一発はクリーンヒットするはずだ。あとは時間切れを狙いつつ、ダメージを稼ぐ。もとより、時間制限ありで殺し切れるとは思っちゃいない。お互いダメージディーラータイプなのだから、一発のクリーンヒットは相当に有効なはずだ。

ランが短剣での攻撃モーションに入る。間合いにはまだ遠い。俺の野太刀ですらまだ届かない間合いだ。直後、俺は即座に回避運動に入った。その直後、俺がいた位置を水で出来た刃が通り過ぎた。あと一步、回避が間に合わなかったら、確実に一撃貫つていた。それも、おそろくかなり重たい一撃だ。

(策士め、狙ってやがったな・・・！)

彼女がああ、の攻撃を仕掛けた間合いはまさに泣き所。弓にしては近く、白兵戦よりは遠い。その場合、俺なら居合で決めにかかる。その一瞬、攻撃に空隙が出来る。そこを、ランは狙ってきた。短剣に水を纏わせ、ウォーターカッターの要領で振るうことで、間合いを伸ばす。俺が弓では決めにこないと見て、この間合いでの一撃で決めにきた。そして、

——避けたとしても、その先を読んでおけ。常に相手の先手を打っていると、打てなくても思わせろ。

俺が教えたことだ。他ならぬ教え子であるこいつが、それをやらない道理はない。

飛んできた投げナイフをあえて躲し、その次にくる水の刃の狙いを逸らす。躲しながら、間合いを取る。離れ過ぎた間合いを詰めに来るランを、俺は投げナイフで牽制する。エンチャントが切れたらしく、ただの短剣になっていたそれを、俺は打ち落としつつ突っ込んでくる。ランに直接遠距離攻撃を叩き込める手段は、おそらく存在しない。だからこそ中距離でなんとか、と思っただが。

(見積もりが甘かったな)

こういう時、SAO組の方が戦いやすい。俺も含め、SAO組はもれなく近接戦闘を好む。間合いのコントロールさえ見極めれば勝機は十分。うまくいけば、キリトでさえ封殺できる自信があった。……今は無理に近い難しいだが。魔法を斬り落とすような

馬鹿野郎に遠距離攻撃が通じるとは思えん。

それはそれとして。問題は、こちらの矢もナイフもほとんど全てを打ち落とし、近接戦でも実力を示して、こちらの間合いの痛いところを突ける相手が、今、目の前にいるということ。

(こちらの手札はおそらくほとんど見切られてる。ならば、あとは真つ向勝負！)

エンチャントが切れた直後の今、クーリングタイムで同じ手は使えない。ならば、似た手合いがない限り、間合いは詰められる。アローブレイズを曲刀形態に変えて、俺は突撃する。

(このまま近接で押し切る！)

ゴリ押しはあまりしたくないが仕方ない。向こうも牽制でナイフを投げるが、回避と打ち落としを組み合わせさせて間合いを詰め切る。逆手持ちになったアローブレイズでまず一撃、これは短剣で防がれる。右のジャブ。サーベルで防がれる。反動で少しだけ間合いを開けて瞬時に順手持ちに変える。ワンスターの要領で突き、これは短剣でいなされ、カウンターは申し訳程度につけていた籠手でいなして左足でハイキック。その足をピンポイントで短剣で突き刺してきたが、俺はお構いなしに振り切つて痛み分け。むしろ向こうはこちらの足に突き刺した短剣を奪われて片手落ち。だが、近接戦である以上、こちら弓は使えない。第一、例のエンチャントが短剣でしか使えないという保証

がない以上、間合いを開けたらあれが飛んでくると考えていい。片手落ちはお互い様。先ほどの回し蹴りの当たりどころがよかつたらしく、一瞬吹き飛ばされたまま硬直したランに、俺は風牙絶咬を繰り出す。貫通せず、そのまま次のソードスキルに剣技連携しようとしたとき、頭が強く揺さぶられ、蹴飛ばされた。なんとか開けた目に映ったのは、空になった掌底を振り上げたランの姿。

(つまりあれか、掌底を下顎にぶち当てられて頭を揺さぶられてスタン入ったのか。つてちよつと待て、この間合いはマズい！)

こちらは動けないが、ランは詠唱しながら間合いを取っている。ということは次に飛んでくるのはおそらくあの特技。スタンが抜けた瞬間に回避行動をとるが、その先に飛んできたのはウォーターカッターにも似た水の刃ではなく、投げナイフ。一瞬突っ込もうかと思ったが、直感で回避を選択。結果、その選択は正しかった。直後、その投げナイフが竜を模した水を纏い襲いかかってきたからだ。

(ナイフを起点にした水魔法か！よく考えるもんだ)

おそらく、俺との対戦ということもあり、ランもマジアを編み出していたのだろう。加えて、初手であのウォーターカッターを見せたこと、ナイフを撃ち落としつつ接近戦を挑んだことから、これが通じるとみたのだろう。まんまと嵌るところだった。

——だが。

「一手、足りなかったな」

直後、俺が瞬時に詠唱しつつ弓を展開、ヴァンフレイシュを放つ。怪訝な顔をしつつ回避するランだが、その行動こそ、俺が狙ったこと。正直なところ、こういう決着というのは望まないところだが、仕方ない。アローブレイズを納刀、居合いの構えを取り、詠唱を開始。発動した魔法は水系統。だが、見たところ大きな変化はない。魔法を警戒したエンチャント。カウンター狙いが見え見えだが、ランは突っ込んできた。

俺なら軽いエンチャントをした一閃で魔法を斬れる。大技ならあるいは。だが、先のアレといい、MP残量、クーリングタイム、いずれをとっても、中距離のジョーカーは、おそらくもう切れない。

——故に、ランがとる選択は近接のみ。読み通り。

一步遅れたカウンターを掻い潜り、ランがひと突き。だが、ランの顔は浮かばない。直後、ランが突き刺した俺が、人魚姫が如く、水の塊となって崩れる。直後、背後からの俺の一閃が、ランの首を刈りとった。これでランのHPは全損、こちらの勝利となった。

何が起こった。

ランが浮かべた表情を端的にまとめるとそうなる。まあそうだろう。斬った時に手応えはなく、気がついたら後ろから首を一閃。軽いパニックにすら陥りかねない。冷静で済んでいるのは、ひとえに相手が俺である、ということだろう。

「新技、うつつし雨」。お前さんが斬ったのは、水鏡に映った影。本体は、お前さんの背後でハイディングしてた、ってわけだ」

「なるほど。いかに札を隠しておくかが対人戦の肝。文字通り、身を以て実感しました」
「まだまだ弟子に負けるわけにやいかんのよ、こちとら」

そんなことを言っているが、内心ヒヤヒヤだった。特に、剣技連携の間隙について、あえて一発目を受けてカウンターをもらった場面。ほんの少しだけタイミングが違えば、首を取られていたのは俺だったかもしれない。ダメージディーラータイプのビルトを組んでいるランがよもやあんな捨て身の手段に出ると思っていなかったのが最大の失態だった。

「私もまだまだ、ということですね。お見事です」

「割と真面目に負けたかと思っただけだな」

札を隠していたのも、相手の間合いを潰す戦略も、相手を出し抜こうという読みも、全部お互い様。なんとか、こちらが一枚上手だった、というだけだ。それに、俺としては、うつつし雨での一撃は、決まればいいなー、程度に過ぎない。斬る前か後かは置いておく

として、この匣が見破られることも、反撃に対処されるのも計算のうち。最大の目的は、見破られるまでの時間稼ぎ。こちらは、ランの短剣による防御によるダメージのみ。対して、相手は風牙絶咬含めて、クリーンヒットが複数。少しでも時間が稼げれば、後は時間切れを待つて、HP残量での判定勝負に持ち込めれば十二分に目的は達成したことになる。

「負けてしまったものは仕方ありません。頑張ってくださいね、ロータスさん」
「ああ、ありがとう」

お互いに握手を交わした。が、その眼にはお互い、「次があれば絶対に勝つ！」と書いてあった。

70. 黒の剣士

次の戦いのカードは、俺たちが戦った直後に発表された。そのカードは、キリト vs レイン。勝ち上がったほうが、4分の1の確率で、その直前で勝ったユウキか俺と当たる。内心ではレインに勝つて欲しい、とは思う。だが、レインはサウザンドレインという最大の切り札をキリトに見せた状態。加えて、生半可な遠距離攻撃なら、あいつは迎撃してのける。近接でキリトと互角に斬り結べるプレイヤーなど、ALO広しといえど10人いるかいないかだろう。レインの勝算は低いと言わざるを得ない。

——だが、俺は知っている。

(あいつがその程度で膝を屈するようなヤワなタマカ)

この程度、喰らい破ってやる。やると決めたらやり切る。あれは、そういう意志の強い女だ。

組み合わせご発表された瞬間、思わず顔をしかめた。ロータス、アスナ、ユウキと並んで、真正面からサシではやりあいたくない相手。ロータス仕込みの対人戦テクニクに、飛び道具も近接もいける。こちらとしては、近接でゴリ押すだけ。間合いに飛び込

で、なおかつ相棒が剣技連携の産みの親。

(使えると踏んで問題ないだろうな)

迂闊に攻め込むのは危険。されど攻める以外に勝機なし。彼女が誇る鉄壁の間合いをどう制するか。

さらにいえば、彼女はいつものスタイルだけでなく、背中に何やら大柄の得物を背負っている。それに、腰の得物も、普段見慣れたシンプルな片手剣ではなさそうだ。迂闊に近付くのは危険かもしれない。

(ええい、それがどうした！案ずるより生むが易しだ！)

ここまでできたらなるようにしかならない。やることは一つ。どれだけ弾幕を展開されようが、

「たたつ斬るのみ！」

「上等！」

その応酬が終わると同時に、2人の間にDUEL!!の表示。

なにやら詠唱しているようだが、構わず飛び込む。もとより脳筋ビルドであることもあり、魔法はほとんど分らない。と、突如レインが詠唱を中断し、見慣れない得物を抜いた。青い、少し反り味の刀身を持つバスタードソード。大きさとしては、ちょうどリーファが愛用する剣より少し大きい程度。だが、レインの今持っているそれは一般的

なそれに比べ若干機械的機構が見える。具体的には、刀身の付け根あたりに、なにやらリボルバーのシリンダーのようなものが付いているのである。だが関係ない。分らない手の内があらうと、道閉ざす敵は斬り崩す。と、意気込んだ矢先、唐突にレインが飛び出してきた。あまりの加速度に、一瞬反応が遅れる。なんとか後ろに倒れ込みながらサマーソルトでカウンターを仕掛けるが、これはうまく威力を殺され、有効打にはならなかった。むしろ、派手にふっ飛ばされたところをうまく立て直してきた。こちらが体勢を立て直し切るまでに、相手は空中からの急降下で追撃する。それは防御し、今度はこちらがわざと吹っ飛ばされて体勢を整える。

(空中発動可能な突進系ソードスキル……よく見えなかったがソニックリープあたりか)ともかく、これで振り出し。詠唱を開始したレインに対し、とりあえず横に動く。このタイミングで詠唱となれば、十中八九アレが来る。ほんの少しでも狙いを逸らす。その想像に違わず、レインの背後に無数の剣が出現、ほぼノータイムで面射撃が始まる。その想像を超える範囲は、狙いを逸らすという考えすら馬鹿らしく感じられるものだった。一か八か突撃の選択を取った瞬間に気付く。

(砲火に穴がある……!?)

ライン一本分。確かにそこだけ空隙がある。迷わず突っ込んだ。が、そこには両手に剣を持ったレインが待ち構えていた。つまるところ、

(誘い出された・・・！)

てつきり、ロータスと組むときのために、彼のために残した道だと思つた。おそらくそれ自体は真実だろう。だが、あえてそれを残すことで、誘い出すための罠に使うとは。やはり悔れない。

ソードスキルを伴わない、バスタードソードでの唐竹。少しだけ軸をずらし、返し胴。読まれていたようで、片手剣のほうで防御される。片手剣での切り抜けるような胴への一閃は、前進してくるレインごと跳び越える跳躍で回避。背中を向けているレインに斬りかかるが、当たる寸前で今度はレインが飛んで躲した。

(羽の展開はなかった)

ならば、相対位置で後ろにいる。そう思い振り返るも、そこには誰もいない。即座に羽を広げたにしても、重力加速度で視界には収まるはず。

(どういう——)

「どこ見てるの」

声と共に、胴体に剣を突き立てられる。その直後、胴体が吹っ飛ばされた。HPは残り3割以下。なんとか助かった。軽いパニックのまま、間合いを詰める。離せば、またあの面射撃が飛んでくる。インファイトで押し切る以外、こちらに勝機は無い。

レインが詠唱を開始。しかし、この距離なら間に合わない。問答無用、斬り捨てるま

で。と、レインがバスタードソードを両手で持つてこちらにまつすぐ伸ばした。おそろく、自分が知らないマジア。

躲すべきか。だがしかし、だ。こんな見え見えのワナを、こいつが仕掛けるか？その一瞬が命取りとなった。カチリ、という小さな音と共に、2人とも吹っ飛ばされた。直後、レインのサウザンドレインが炸裂。レインはなにやら作業をしていて動きはない。が、今度は誘い出しの穴はない。なら、

(叩き落とす！)

剣に力を込める。魔法のように判定が極小なわけでも、対物ライフルの弾ほど速いわけでもない。当たるものだけ、当たらないよう逸らせばいい。最小限の動きでパリイし、弾幕が薄くなった頃合いで再び突撃。先ほどの作業の状態は、根元のシリンドアーを交換していたようだ。それも終わり、再び真つ向勝負。レインの構えは、向かって左、つまり彼女の右側に剣を構えた、所謂脇構え。となれば、打ちどころは限られる。しかし、もう一度、耳が先ほどと同じカチリという音を拾った。直後、彼女が静止状態からとは思えない加速を見せる。薙ぎを咄嗟に防御して、今度は踏ん張る。受け止めたままポデーブロー、直後に繰り出したバーチカル・アークがクリーンヒットした。逆袈裟に斬り上げて開いた体を利用して、左足で転身脚。左足を下ろして、バーチカルスクエアと、終わったタイミングで再びカチリという音とともに吹っ飛ばされる。剣技連携スキルクネクトの合

間をうまく狙われた。使いこなしているからこそ分かる、コンマ数秒の隙を見逃さなかったのだ。そして、至近距離で見せられて、ようやく原理を理解した。

(おそらく、シリンダーになんらかの弾丸のようなものが装填されていて、手元にあるトリガーで作動する機構。作動すると、刀身に強力な風魔法かなにかが発生して吹っ飛ばす、って仕組みか……！)

さしずめ、魔力放出、といったところか。考えてみれば、数多のファンタジー系作品でよくある、魔力や風魔法の応用での高速移動は、このALOではほとんど見られない。なぜなら、

(よく御しきれぬな?! 一歩間違えば得物ごと自分も吹っ飛ばぞ!?)

レインも、SAOからのコンバート組。ならば、SAOでおそらく最高レベルを誇った彼女の鍛え上げられたSTRがそれを可能としている。だが、それ以上に、発生する巨大すぎる力をよほどうまく御しきらなければならない。ノームのような大柄の種族でも御し切るのが難しいものを、軽量級に分類されるレプラコーンで御す。技量は推して知るべしだ。

吹っ飛ばされている間に、レインが突撃してくる。その手元を、剣で強かに叩いた。本当に微かな、ピシリという音。それを聞いて、レインが舌打ちとともにバスタードソードを投げ捨てつつ距離を取る。それこそ、こちらが狙ったこと。素早く構えを取

り、ソードスキルを発動。光を見てか、レインがしまった！という顔をするが、もう遅い。

「獲った！」

単発重突撃ソードスキル、ヴォーパルストライク。なんとか逸らされたが、それが一杯。左手で剛直拳を出し、ハウリングオクターブ。剛直拳の長い硬直に、大技が突き刺さり、HPを刈りとった。

(なるほど。考えたな)

控え室で2人の戦いを見ていた俺は、キリトの戦術に感心した。

確かに、レプラコーンでもある彼女は前線武器庫と言ってもいいほどの武器を持っていろいろだろう。彼女が今回使ったバスタードソード、ステイルハーツ以外にも多様な武器がある。が、武器が壊されて、次の武器にスイッチするまでには間がある。そのわずかな間隙を狙ったのだ。もつとも、ステイルハーツに限らず、強度的に弱点になりやすい機構部に、的確に強打をプレゼントできるからこそできることであり、誰にでもできることではない。それに、そもそも問題、レインはあのド派手なオリジナル魔法、サウザンドレインに目が行きがちだが、近接戦闘で俺が背中を預けられるレベルの腕前を持つ。サウザンドレインを封印しても十分強敵であることに変わりはない。だが、ス

テイルルハーツの機構を見切り、対応し、脆弱性を見抜くその慧眼。恐るべしとしか言
いようがない。

さて、これで、俺の次の相手はキリトかユウキということになった。どちらにせよ、や
ることは同じ。強いて言えば、ユウキがスピードタイプ、キリトがパワータイプで、少
しだけ立ち回りが変わるだけだ。

——さあ、気になる組み合わせは。

(二体いつぶりかな。模擬戦以外で、こいつとやりあうのは)

——lotus vs kirito。

キリト。久しぶりの、キリトとの実戦。いかに間合いの外で戦えるかが肝要になる
が、お互い札は晒した状態。となれば、苦しいのは、同じ間合いでの技より、より広範
な札を持つことが切り札になる俺だ。

(ま、負けるつもりはねーけどな)

こちらとしても、なんとかするまでだ。

「さあ長かったトーナメントもクライマックス！当然ながら今回も豪華なカード！まず
はあああああ！

遠距離？なにそれ美味しいの？全部ぶった斬ればいいんでしょ？を地で行く皆さん

ご存知ブラッキー先生！此度もその剣で斬り捨てることはできるのか！キーーーー
リーーーートーーーー!!」

対面からコールを受けて立つは、SAO、そしてこのALOでも最強格。相手にとつて、不足なし。

「対するはあ！」

対人戦なら最強格！近距離、中距離、遠距離なんでもござれなオールラウンダー！相手の仇、ここで討てるか！ローーーーーターーーーース!!!」

やることは変わらない。相手の不得意な間合いで、うまくカードを切って戦う。短期決戦ができればいいが、そんな甘い相手ではない。

「敵討ち、なんて柄じゃないと思うんだがな」

「実際そうだよ。仇を討つとか、そんなのは関係ない。相手が誰だろうと、どんな状況だろうと、目の前の敵は倒す。それだけだ」

「ま、あんたはそういう奴だよな」

言いつつ、キリトが抜刀。対する俺は抜かない。手札は伏せる。ある程度バレているとはいえど、どの札が飛んでくるか分からない状況を作ること、少しでも先手を楽にする努力はする。

真ん中に閃く“DUEL!!”の文字。その瞬間に、キリトは突っ込んできた。読み通

り。おそらく、初手からソードスキルを使うことはない。タイミングを合わせて、踏み込みながら居合で薙ぎ一閃。この攻撃は読まれていたようで、キリトは直前で迎撃行動をした。キリトの拳一閃はあえて吹っ飛ばされることでダメージを最小限に抑える。今のは運が良かっただけだ。

(やはり、近接格闘戦だとかかわんな)

「イクイツプメントチェンジ、セットスリー」

間合いを取った状態で、俺が宣言する。それは、俺の十八番の一つである高速武器換装の式句。だが、最後に宣言された番号は、今までのどの番号とも違うもの。そもそも、アローブレイズという武器を持つてから、高速武器換装はほとんど無用の長物になっていたはずだ。弓であり剣であるアローブレイズを持つたことで、弓による中距離戦と剣による近接格闘戦を装備よって切り替える必要がなくなっただけからだ。パーティ戦においては、どちらかに特化させる目的で使うことはあつたが、この場面で使う理由はない。すなわち、

「いったいいつから、俺がまだ切っていない札がないと錯覚していた？」

新たな武器は、アローブレイズの弓形態のような、和弓の短弓に似たシンプルな形態ではない。洋弓に似た見た目のものだ。つまり、

「近距離を得意とする相手へのメタか」

「相手の得意分野^上で戦う道理はないだろ？」

「確かにな！」

キリトがやってくることに変わりはない。突撃してくるキリトに対し、何発か射るが、すべて叩き落される。予想通り。接近してきたところで、右の逆手で背中にセットした短剣を抜剣、迎撃する。その間に左手の弓を変形させる。変形した後の弓は、刃渡り30cm程度ので反りのない剣——短剣になった。

意外と見落とされがちだが、キリトには遠距離以外にも苦手な間合いがある。それが、あいつのメインウエポンたる片手剣の間合いより短い超接近戦。基本的には剣士に体術を使う。加えて、剣を振るには狭すぎる間合い。間合いに入れなければいいだけの話ではあるのだが、うまく懐に飛び込めばキリトは身動きが取れなくなる。うまく間合いを取ろうとするキリトだが、そうは問屋が卸さない。見切つて詰め続ける。超至近距離でのインファイトという、およそ事前の予想とはかけ離れた戦い。短く間合いを取つては埒があかないと悟ったキリトは大きく間合いを取る。それを見て、詠唱しながら弓に戻す。発動するのはピアスラインに似た、炎をエンチャントした貫通する矢。だがこれを、キリトは狙いすましたスラントで斬り捨てた。それこそ、俺が狙ったもの。キリトの足元に爆裂矢を打ち込み、ほんの少しだけだがブレイクポイントとす

る。一気に間合いを詰めてラツシュを叩き込む。だが、大人しくやられるキリトではない。うまく間合いを調節して、合間合間にカウンターを挟む。両方とも少しずつダメージは入って入るものの、これでは千日手だ。

(やむをえん、か)

「イクイツプメントチェンジ、セットフオー」

次の札を切る。これではラチが開かない。切り替わったのは、かつてSAOでサブとして使っていた白波に似た野太刀。しかし、その刀身は赤黒い。銘は、天上天下無双刀。純粋な威力だけなら、ニバンボシを抑えて手持ちでぶつちぎりの最強格。リズ曰く、ブレイヤーメイドとしては頂点に立つレベルの代物とのこと。本来なら長過ぎて扱いに困るものだが、そこはそれ。そのリーチの長さを生かすことができるのなら、話は別というものだ。一気に詰め過ぎず、時折体術の間合いまで密着するという戦法で攻め立てる。野太刀の長さと同様の短さの合わせ技という、キリトにとって泣き所の間合いを見計らったチョイスだが、キリトは捌ききるところかカウンターすらいれてくる。普通は刀のみで制圧できるか、野太刀と体術の間合いの違いに戸惑って削り切れるが、
(……)までしてもなお決め手にならんとは……！)

黒の剣士、恐るべし。

いかに俺でも、鉄を溶断できるほどの炎を纏わせることは不可能。生半可な魔法は

斬って捨てられ、大魔法は詠唱完了まで時間がかかりすぎる。なにより、
(残存MPからして、大魔法を放てるとしてもあと一発のみ。果たしてどうする)

一応魔法剣士のビルトを組んでいる俺のMPは、純粋なメイジのそれに比べて低い。MPだけなら、おそらくリーファの相棒であったレコンにすら劣る。ならば仕方ない。

どこか舞うように剣と拳を振るいつつ、口は歌うように詠唱を開始。剣舞の真似事を俺なりにアレンジした、戦闘と並行した詠唱。完了する寸前、俺は大きく下がった。追撃に来るキリトの前に現れたのは巨大な大波。これでは斬り捨てることもままならない。予想通り、キリトが飛び上がる。当の俺は波に隠れ、接近する。三步踏み込み強力な攻撃を見舞う『昇龍斬』をくりだす、が。

「珍しいな、ド正攻法の一撃必殺とは」

完全に読まれた。絶妙なスウエイとプレモーションで繰り出されたのは、落下系ソー
ドスキル『ライトニングフォール』。惚れ惚れするほどきれいなクリーンヒットをしたそれは、俺のHPをピツタリ削りきった。

後から考えれば、あのまま泥仕合のような戦いを続けたほうがまだ勝ち目はあったかもしれない。おそらく、焦りすぎていたのだろう。ランとの戦いで『うつし雨』を使っていたのも仇になったか。まあとにかく、俺らしくない敗戦であった。

7 1. 弟子の戦い

「普通はあれだけ札を切れれば倒せるんだがな」

「俺が普通じゃないって言ってるのか？」

「魔法をソードスキルでぶった斬れるよーななつを普通とは言わんわい」

至極当然である。俺はエンチャントで少々判定をブーストしているうえに動きの自由度もあるからまだわかる。が、この目の前の男はそういったブーストがない上に動きが固定されてるソードスキルで魔法をぶった斬る。控えめに言っただけで常人ではない。

「俺からしたら、そつちも大概尋常とは言い難いかな」

「安心しろ、その辺も鑑みたビルトだから。それに、これ、SAOとか別のゲームからコンバートしたからこのステータスだけどき、そうじゃなかったらステータスだけでも揃えるのは一苦労だし」

「ま、とにかく。次、頑張れよ」

「ああ！」

互いの健闘を称え合うハイタッチとパフォーマンスを交わして、俺たちは退場した。

さて、敗者となった俺たちは観客に回るようになったのだが。

「あれ、ロータスくん？」

「レイン、それにランもか」

「ここなら、他人に聞かれたりするリスクは低いですし。」

「さあさあさあお立ちあい！短いような長いような、激闘ばかりのデュエルトーナメントもいよいよ決勝戦!!まずはあああ!!」

その腕はALLO随一！辻デュエルでは連戦連勝！美しい花には刺がある、その言葉に
違いなし!!

ALLO最多連撃OSS保持者!!絶剣!!ユーーーーウーーーーキーーーー!!!

もう一つのブロックは順当にユウキが制したらしい。まあ、ユウキを倒すためには、あの反応速度を掻い潜って攻撃を当て、なおかつ彼女の苛烈極める攻撃を凌ぎ切る技量が必要だ。そんなことができるのは、手の内を知り尽くした双子の姉であるラン、間合いを自在に切り替えて戦う俺やレイン。あとは、

「対しますはああああ!!」

皆さんご存知黒尽くめ、弾丸より遅い魔法ならSSでぶった切る脳筋の極み！魔法な
ど情弱情弱!!

デュエルトーナメントデイフェンディングチャンプ、キーーーーリーーーートーーーー!!!

——近接戦において少なく見積もって互角の戦いができるこのまっくろくろすけくらいなのだ。

「ロータスくんはどうみる？この戦い」

「お互い脳筋ビルトの純粋なインファイターだが、キリトはSTR—AGI、ユウキはAGI—STR。ユウキがキリトをどう斬り崩すか、またキリトがどう対処するか、つてのは一般論。キリトは投げナイフも使えるから、中距離の間合いを牽制して自分のフィールドに持ち込んでゴリ押せば有利。ユウキは持ち前の反応速度でキリトのガードを躲して攻撃を叩き込めれば勝ち。どちらにせよ、ある意味では俺たちと同じだ」

「より多くの札を温存しつつ決め切るか、つてこと？」

「そ。そう見ると、戦い方がある程度割れてるキリトの方が若干が悪いかな」

キリトの戦い方は、SAO帰還者のみならず、ALOToppプレイヤーでも知っているものが多い。名が売れるということはそれだけ知られるということでもあり、メタを張られやすいということと同義である。数少ない例外は、俺のようにメタを張るだけ馬鹿らしくなるだけの手札を持つ相手か、ユウキのように一気に名を売るなどで、二つ名などだけが先行して有名になりすぎた相手のみ。

キリトに関しては、二刀流、片手剣での剣術、さらには大まかなステータスバランス

まで。対策などいかようにもなる。

装備を見る限り、キリトはおそらく二刀を使わない。クイツクチェンジのMODにして、一回メニューを開いて操作する必要があり、そんな悠長な暇をユウキが与えるはずもない。となれば、現時点で一本しか剣を持ってない時点で一刀のみ。二刀流を使えば、ユウキとしてもなかなか難しいところがありそうなものだが、なにか矜持のようなものでもあるのだろう。

ユウキはいつも通り、に見えるが。

「珍しいですね、ユウキが硬くなるとは」

「あ、やっぱり?」

「ええ。分かりづらいですが、あの子は間違いなく平常心ではありませんね」

姉のランがいうのなら間違いない。具体的には、ほんの少し力みすぎているように見える。

「緊張というより、気負いすぎって感じだな」

「肩の力が入りすぎてる、ってこと?」

「その通り」

前回とは違う、絶対に勝たなくてはならない、という気迫が透けて見える。たしかに、ユウキのようなタイプはそれでもいいかもしれない。だが、相手はキリトであるという

ことよ意味が重い。

「キリトは、SAO最終幕で冷静さを欠き負けている。それに、こっちで、俺の対人戦の相手は、キリトであることも結構多い。心は熱く、頭は冷たく。SAOでの一件はもちろん、俺と模擬戦をすることが増えてからはそれを痛感してるはずだ。感情的になれば、動きに感情が乗る。いい方向に働くこともあるが、大体はうまいかない。特に、俺みたいな、相手の感情やらも利用するタイプや、ユウキのように、”なんとなく”で対処しきれちゃうやつ相手にそれをやつちまった日にや目も当てられん」

「と、なると、比較的冷静に戦えそうなキリト有利？」

「んにや、一概にそうとも言えん。キリトをして、キリト以上と言わしめた反応速度があるからな。少々気負っててもそれは変わらん。少なくとも見応えある戦いにはなるはずだ」

ビルトこそ違えど、盾なし片手剣の脳筋タイプ。両方ともと模擬戦をやった俺からすれば、どういいう戦いになるかはみえている。だがそれは言わないべきだろう。

(俺の教えを思い出せよ、二人とも。戦いは――)

(実際に刃を交える前から始まっている、だったっけか)

それは、対人戦闘の極意として、ロータスが教えたこと。俺自身が、ロータスと対人

戦を積み重ね、より昇華させたもの。だが、それはおそらく向こうも同じ。向こうも、ロータスの教え子に変わりはないのだから。

装備から考えられるスタイル。構え。表情や目線、利き手利き足、速攻で思いつくだけでもこれだけある。分かっているつもりだったが、あいつはそれをより高次の次元に昇華させている。騙すのではなく、利用する。まして、一回戦った相手。それを踏まえると、表情が固いように見える。それはおそらく、気負いからくるもの。

ユウキがテストターをしているメデイキュボイドは、ターミナルケアに重点を置いたもの。となれば、おそらく気負いの原因は、ラン、もしくは自身か。

家族とは最大の追い風にして重荷である、とはよく言ったものだ。俺兄にとってスグ妹がここまでの存在かと問われれば、間違いなく違うだろう。剣道をやめた俺の背を追って剣道全国クラスの腕前になったスグにとって俺がそういう存在になることはあるかもしれないが、その逆はない。

—— 故に、ただそのあり方は美しく。ある種の羨望すら覚えるものがあつた。
しかし。いや、だからこそ。

「簡単に負けてやるわけにはいかない」

「そうこなくちゃ。今日は、今日だけは、絶対に負けられない！」

カウントダウンは始まっている。その中で、ユウキは音高く抜剣した。やや半身、剣

は中段。いわゆる万能型な構え。

(まあそれが一番読みづらいわな)

迷ったら定石通り。これも彼の教え。

『よほど奇策が得意というわけでない限り、万能型が一番読みづらく対処しやすいもんだ。だから迷った時は王道や定石通りにすればなんとかなる、つてのは少なくない』

それに対し、俺が取る構えは。

「片手上段・・・!?!」

どこからか声が聞こえる。それもそうだ、これは隙だらけに見える構えだ。だが、俺は明確な狙いをもつてこの構えをとった。

実は先の構えの教えには続きがある。

『奇策つてのは、定石にならなかつた理由つてのがあるんだよ。その顕著な例の一つが、脆さだ。ハマれば強いが、外すと極端に弱いギャンブル性。なればこそ、その癖が強すぎるゆえの長所をうまく使えれば、あるいは定石を変えられる、かもしれん。見誤るなよ』

今こそ、それを活かす時だ。ただ剣を持つ手を上にあげただけの、普通に考えれば隙だらけな構え。

カウントダウンが終わる寸前、ユウキは腰を落とした。

（突き、もしくは斬り上げ系統。定石通り）

俺が思うに、この構えに対する最善解のひとつ。小さめのバックステップを入れ、ギリギリまで引き寄せてからヴォーパル・ストライクで切り抜ける。狙いすまし、直前でソードスキルのプレモーションを起動、タイミングギリギリで発動する。仮に見切れたとしても、普通なら回避できない間合い。長めの硬直が入ると言っても、受ければヴォーパル・ストライクもヴォーパル・ストライクのリーチの長さゆえに反撃も難しい。なにより、初手でソードスキルを切ると言うのもどちらかといえば奇策の部類。

（加えて、今のユウキは緊張している。思考が固まって、感覚頼りの戦闘になっている可能性が高い。決まるはず……！）

躲すのが難しいギリギリでプレモーションを起動、ソードスキルを発動する。金属質のジェットエンジンを思わせる轟音とともに、キリトの体がカタパルトから射出された戦闘機が如く打ち出される。なんとか反応を間に合わせるあたりは、絶剣の異名をとるだけある。それに、

（手応えが軽すぎる……！直前で急停止して勢いを殺したのか！）

突進系ソードスキルの、意外と知られていない、というかそもそもできない対処の一つ。突っ込んで来る軌道に合わせバックステップし、わざと吹っ飛ばされる対処法。もつともこれは、ある程度の威力があるソードスキルを的確にパリイすることができ

技量があつてなせる技。タイミンクよく、同軸上にバックステップを合わせ、きつちり威力を軽減した上で、吹っ飛ばされたあとに体制を崩さずきつちり着地なり受け身なりとる必要があるからだ。だが、そこは絶剣とまで称された剣士。やすやすとやつてのけた。

目立ちはしない。傍目から見たら、ユウキがヴォーパル・ストライクでふっ飛ばされたように見えるだろう。だが少し冷静になれば分かる。そもそもヴォーパル・ストライクは突いて斬り抜ける技だ。キリトのSTRを以つて、吹っ飛ばされるような状態になるのなら、ユウキのようなダメージディーラータイプのビルトを組んでいけば一撃死すらあり得る。それを2割と少しの減少に留めている時点でお察しである。上位ソードスキルゆえの長い硬直に、カウンターとして繰り出したユウキのラツシユが突き刺さる。キリトのHPは、目算で8割弱、と言つたところか。途中で硬直が抜けパリイしたが、決して少くないHPを持つていかれた。間合いも開き、これで仕切り直し。

(やはり、いつも通りじゃない)

いまのやりとりで確信した。ヴォーパル・ストライクの硬直は決して短いものではない。後出しでソニックリブやレイジスパイクといった、硬直が短めの突進系ソードスキルを切つてもいい場面だ。だがそれでも、ユウキが選んだのは硬直がない、手数重視の連撃だった。確かに、あいつはここぞという時や誘い出しの時を除いて、積極的に

ソードスキルを使うのを嫌う傾向にある。が、今回はその“ここぞという時”だったはずなのだ。加えて、ユウキの反応速度を鑑みれば、ソニックリープやレイジスパイクなどの短い硬直のソードスキルなら、硬直後の対応も間に合うはず。にもかかわらず、ダメージを狙わず、確実な連撃をとった。無論、三味線を弾いている可能性もある。が、どこか、より確実な戦い方に固執しているように見えた。ならば敢えて。

(賭けに出るのも一興か)

右手の剣を肩に担ぐように、左手は体の横に、軽く握り拳を握って、足は肩幅に。いつもと違う構え方。だが、それに対し、ユウキはあからさまに顔色を変えた。もともとポーカーフェイスが苦手な人柄ではあるが、これはあからさますぎる。それもそうだが、これはまるつきり――

(あいつの構えと同じだからな！)

片手をフリーにして、体術と剣術を織り交ぜるのは、あいつの近接格闘戦における一つの基本形。俺も同じようなことはできる。いつも通りなら、俺は相性が悪い。が、今ならあるいは、と思いついた策だ。

『お前の最大の強みにして最大の弱みはそのステバラだ。STR―AGIであるお前は、手数タイプではなく大砲タイプってことになる。当たればデカいが、当てなければ意味がないってことだ。故に、パターン化されていない相手の極みであるPVPにおいて

て、大砲タイプは適性がない、と俺は思う。対人戦はカスダメを積んでやればそれで勝ちなんだ。でもすばしっこい相手や読みづらい相手は当てることすらままならんからな。

が、逆を言えば、一発逆転が狙えるってこと。読み誤った瞬間に、お前は負けると思え」

読み誤ったとは思わない。

ユウキのような、感情が剣に乗るタイプは、乗せてしまえば手に負えないが、こちらの術中に嵌めてしまえばこちらのものだ。生まれた相手の気持ちの揺らぎを、こちらが利用する。

そのまま突撃する。繰り出すのは無造作な袈裟斬り。ユウキが選択したのは防御ではなくパリィ。だがそこは読んでいる。突撃した勢いのまま、左手でボディーブローを繰り出す。ユウキはその一撃を受けてなお、こちらにカウンターの袈裟を当ててきたが、ボディーブローの一撃は無視できるものではなかったようで、短くない硬直が入る。その一瞬の間に、連撃を積む。その瞬間だった。

「硬くなつてんじやねえぞユウキ!!!いつも通りやれ!!!」

観客席から少し過激ともとれる激が飛んできた。瞬間、ユウキが復活して残りの連撃をさばき切った。これでダメージレースはほぼ互角。残り時間は多くない。

「ハハハ、師匠に激飛ばされるまで気が付かないなんて。ほんと、なにしてんだらうね、ボク」

「なんだよ、今更気が付いたのか」

「師匠にいわれなかったら気が付かなかっただらうね。だからさ、——ここからは、本気で取りに行かせてもらおうよ」

その一言とともに、霧囲気ががらりと変わる。いつかのSAOでの、あいつとよく似た霧囲気。

先に動いたのはユウキ。その剣筋が示す狙いは、胸の中心への突き。サイドステップで躲す。カウンターの斬り上げは読まれていたようで、同じく斬り上げで合わされた。胴体がガラ空きになった瞬間、左手のストレートが飛んできた。逃げられないと判断し防御したが、僅かだが致命的な硬直が入る。一瞬見えた光からして、

(剛直拳か！)

他ならぬあいつの十八番おはこ。剣技連携スキルコネクトで剣に灯るは純白の光。なんとか抜けるまでの数発は甘んじて受ける。残りはパライにかかると。力みが入ったからか、少しだけ連撃の速度が遅い。後半の5発はなんとか間に合った。最後の胸の中心へ放たれる突きは、上空に吹っ飛ばされることではなし。空中で宙返りして、ソードスキルの硬直で動けないユウキに一撃を与える。それで勝ちだ。

——
だが。

—— 攻撃が当たると寸前、無常にも試合終了のブザーがなった。

—— 結果は。

「負けた、か」

「きわどかったけどね」

本当に僅かな差ではあるが、ユウキの与えたダメージが、キリトのそれを上回っていた。

72. 真剣勝負の後で

中央にウイナー表示が出た瞬間、ギャラリーはスタンディングオベーションで激闘を繰り広げた2人を称えた。無論、俺たちもその中に含まれていた。

「ユウキおめでとー!!」

隣でレインが讚える。それに反応してか、少し照れているユウキの右手を、キリトがとって挙げた。その動きに、歓声がさらに高まった。

「いやはや、2人とも見事」

「そう、ですな・・・!」

少しだけ震えたランの声。見ずとも分かった。

「しつかり見てやろうぜ。お前の自慢の妹だろ?」

「・・・はいっ!」

きつとランは、いや、藍子はこの光景を目に焼き付けているに違いない。木綿季が、真正銘自分の力で勝ち取った名誉なのだ。これは、その報酬の一端に過ぎない。

「ロータスさん」

「ん?」

「ありがとう、ごさいます。本当に」

「急にどうしたってんだよ？」

「きつとあなたの言葉が無ければ、ユウキは負けていた。あなたのおかげで勝てたようなものです」

「そいつあ買いかぶりつてもんだ。最後は明らかにユウキの策だしな」

「・・・え？」

「あいつ、最後のマザーズ・ロザリオ、わざと速度を落としたりがった。キリトの反応速度をもつてすれば、ブーストで速度を上げたとしてもなお、パリティし切られることも想定に置いてたんだらう。だから、わざと速度を落として、ソードスキルの後半を全部パリティさせた。仮に最速で撃つて凌ぎ切られたら、カウンターで終わりだったからな。時間的にカウンターが間に合わないよう、速度を落として、ダメージレースに持ち込んだ、つてわけだ。いやはや、あんな使い方があるとはな」

システム外スキル、ブースト。その対となる、わざと速度を落とす技。こんな使い方は俺の想定にも入っていない。当然、教えてもいない。これは真正銘ユウキの策であり、確実に勝つためにユウキが切った最後の札。

「急速に進化するあいつに、いずれ俺は勝てなくなるんだらうな」

はつきりと知覚する。今はまだ勝てても、いずれ俺はあいつに勝てなくなる。

「でも、それは今じゃない」

まだまだ、俺には作れる札がある。より深く使いこなせる札がある。そうそう簡単に負けてはやらない。負けてなるものか。

「珍しくやる気だね」

「そりゃまあ、あんなもん見せられたらな。ましてや、手札の量を武器にしてるって公言してる俺の前で、俺の考えつかない札を見せられたら、燃えるなつてのは無理な相談よ」
「と、いうことは、伸びしろはあるということですね」

「当然。ユウキにも、キリトにも、俺にも、な。」

——陳腐な言い回しにはなるがな。成長の余地がない、まさしく完璧、なんつーもんが存在したとしてだ。そこにはありとあらゆる想像の余地はないんだよ。常に、なにかしらの穴つてもんが存在する。だからこそ、高みを目指そうと躍起になれる。

安心しな、ラン。あいつはもう、1人で歩いていけるだけの力がある」

「そう、ですね。そのようです」

俺の言葉に、ランは心底安心した声でぽつりと漏らした。

もろもろ一段落した後、俺たちはゲーム内でのエギルのバーで打ち上げをしていた。早くもユウキとキリトはお互いが「次は（も）負けない」と張り合っているところを見

て、どこか歳の離れた兄妹のようだな、などと感想を抱いた。そんな時に、横にはエリーゼがすと近寄ってきた。

「最近モテモテですねー、おにーさん？」

「イヤミか？」

「まさか。というかむしろ、先輩は今までボツチ過ぎたんですから、ちよつとくらい女難の相があるくらいでちょうどいいってもんです」

「女難の相があつて嬉しいってやつもそうそういないと思うが？」

「誰も彼も寄り付かないよりはマシでしょう。人間は社会的動物ですから。悪名は無名に勝る、つてやつなんですかね？」

「別に俺は一人でも一向に構わんがな」

「そういうこと言つてるといわず泣かれますよ？」

「すまんがその辺の機微には疎くてな」

「ならせめてその辺考えてるようになしてください。手遅れになつてからじゃ遅いですからね」

「ああ」

それだけ言い残すと、エリーゼはレインの元へ向かった。女同士、積もる話でもあるのだろう。

(手遅れになつてから、か)

エリーゼ、いや、永璃ちゃん言葉は少しチクリと来た。流石の俺も、そこまで朴念仁ではない、と思つている。少なくとも一人、伝聞なんぞ気にせずついて来てくれる相手がいる。その事実到现在まで甘えていたのだろう。何より俺は一人でも別に構わない。ついて来るならそれもそれでよしとする。そんなスタンスだったのだ。

——いい加減、向き合わなきゃならんな。

心の中で少しだけひとりごちた。

それから少しして、俺はユウキに呼び出されていた。もちろん、ALOに、だ。だが、その呼び出された場所に俺は引っかけかりを覚えた。その場所が、アインクラッド下層にあるカフェだ。普通ならスリーピングナイツのホームのはずだ。そうではない、ということは、メンバーに聞かれたくないということだろう、と、あたりは付けていた。

「あ、来た来た。こつちこつちー！」

待ち合わせ場所にいくと、ユウキは大きく手を振ってきた。その横には、比較的長身瘦躯な男性のシルフがいた。

「こちらでは初めまして、ですな、ロータスさん」

「もしや、倉橋先生ですか？」

「ええ。こちらではブリッグスと名乗っています」

丁寧なブリッグスの対応は現実世界での倉橋医師のそれそのままだ。

「立ち話もなんです。中に入りましょう」

「そうですね」

「はい」

ブリッグスに続く形で、俺たちは店の中に入った。その背中を見ながら、俺は内心でため息をついた。

（まったく、無意識にやっちゃうってのは本当に考えものだな）

倉橋先生のことを、俺は全くと言っていいほど知らない。それでも、面識がある程度の相手であったとしても、本当に少しの違いですら、俺の観察眼には映ってしまう。まあ、それは呼び出された場所の時点である程度察してはいたわけだが。その分析を覆い隠し、俺は店に入った。

それぞれの注文の品が届いたところで、ブリッグスが静かに切り出した。

「さて。単刀直入に言いましよう。」

——ランさん、いや、藍子くんの推定される余命について、です」

その言葉を聞いた時、俺の隣のユウキは少しだけ息を呑んだ。

「ロータスさんは、それほど驚かれないのですね」

「ある程度予感はしてましたから。感心しない癖だとは思いますが」
「そういえば藍子くんも言っていましたよ。下手な隠し事は出来ない」と。

—— 藍子くんの余命は、長くて2ヶ月程度だと思われます」

2ヶ月。その言葉を口の中で転がす。少し前に月が変わったことを踏まえると、

「本当に春先、ということですか」

「はい。残念ながら。．．．すみません」

「いや、先生は悪くないよ。これも主の思し召し、つて、きつと母さんなら言ってる」

「でも、私は藍子くんを救えなかったことを後悔して生きていくと思います。きつと最期まで」

「部外者が言うべきではないかもしれませんが、あえて言います。それが現代医学の限界であり、その中で最善を尽くした。そこは誇るべきだと思いますよ。あなた自身が私に言ったように、あなたの選択が正しいのかそうでないのかは、きつと誰にも分からないと思います」

俺の言葉に、倉橋先生は少しほっとした顔を浮かべた。どこか安心したようで、それでいて迷いの残る、微妙な表情だった。と、隣のユウキが静かに口を開いた。

「先生。ボクは、先生がどれだけ悩んだのか、少しだけ知ってるつもりです。先生はボク達に、あまりに大きなものをくれました。感謝こそすれど、恨みなんてしません」

「・・・でも、私は、」

「ボクを助けてくれて、姉ちゃんと一緒に素晴らしい世界を見せてくれた。ただベッドに縛り付けられる生活じゃない、かけがえのないものを」

ユウキの静かな、されど温かみのこもった言葉に、倉橋先生は一言、「ごめん」とだけ呟いて俯いた。静かに嗚咽するその姿を、俺は静かに見つめることしか出来なかった。

頭の中には、永璃ちゃんの言葉が響いていた。

(近いうちに、どこかでキツチリ、ケリつけないとな・・・手遅れになる前に)

果たしてどうしたものか。俺から本当に言い出していいものか。返答するとして、どういう答えを出すべきか。先延ばしにしている時間はもうない。

2人と別れた後、俺はフィールドでちよつとした実験をやっていた。この世界での魔法の詠唱は祝詞のようなもので、単語のそれぞれに意味があり、組み合わせる力を發揮する仕組みだ。つまり、うまく単語を文法通りに組み合わせることができれば、新しい魔法を生み出すことも不可能ではない。現に、俺やランが多用するマジアの多くは、新生ALOで編み出された技法、とは古参勢に聞いた。誰か先にやっついそうなものなのだが、そもそも近接戦闘をしながら魔法を使うということ自体相当な難易度で、断念した人がほとんどだったそうだ。それなら、エンチャントを組み合わせる程度で十分、と

いう理由だった。それもそうだ、普通なら物理なら物理、魔法なら魔法で特化させればいい。今の新生ALLOでは、物理型でもソードスキルを使って魔法を付与した攻撃ができるようになってる。純魔法特化はその分火力に優れる傾向にあるし、そもそも昔から、魔法職はパーティを組んで真価を発揮する傾向が強く、ALLOもその一つだ。そんな器用なことをあくせくして使うより、おとなしくソードスキルを使うか、パーティ組んで純魔法職で火力を上げたほうが効率がいいのだろう。それに、使い手からすれば、詠唱の一部や展開から使ってくるマギアの傾向は、ある程度予想することが可能だと思う。だからこそ、こうして一人で行動することが多い。

「精が出ますね。新技の実験ですか？」

だからこそ、こんな風にいきなり声をかけられると、反射で投げナイフを投げてしまふ。矢を放った方が威力は高いのだが、即効性も含めた手っ取り早さという点ではナイフのほうが使い勝手がいい。それに、俺の場合、どっちの手でもある程度狙った位置に投げられるし、何なら短いエンチャントでホーミングの真似事も、ある程度は可能だ。投げられた相手はあっさりと叩き落してのけたが、牽制の意味合いが強い速度重視の投擲に対し、即座に反応できる時点で大体予想は付いた。

「すまん、反射で投げちゃった」

「いえ、こっちらこそ驚かせてすみません」

そこにいたのはランだった。どうやら、普通にフィールドで見かけて声をかけただけらしい。おそらく彼女も同じようことをしていたのだろう。種族もスタイルも似通っているのなら、特訓場所が似通っていても不思議ではない。

「よろしければお付き合いですか？」

「別に俺は構わんし、なんならありがたいくらいだが・・・いいのか？」

「それはどちらかという私のセリフなんですが・・・手の内を見せることになりませんが」
「切り札つてのは、見せておくつてのも大事なんだぜ？」

「なるほど、勉強になります」

そんなことを言いつつ、俺の中では打算が多くを占めていた。先のデュエルトーナメントで、俺の技レパートリーもまだまだ広げられることは、目の前の少女が証明した。その発明者本人と直接共闘できるのであれば、発想のルーツ、その一端を知ることができるとも思えない。俺の心の内を知ってか否か、こちらが飛ばしたパーティ申請を、ランは即決で呑んだ。

「じゃ、少しの間よろしく」

「ええ、こちらこそ」

そんな言葉を交わし、俺たちは前に歩を進めた。

もとより、俺が実験場所として選ぶところは、その時に研究しているマジアの特性に

大きく依存する。今回実験していたのは中距離の間合いを埋めるマガアだったため、中距離戦を仕掛けてくる敵が多い場所だ。俺が開発した中距離での間合いのマガアの多くは、基本的に森など、射線を切りやすい場所での使い勝手を重視している。それゆえに、複雑な軌道だったり大技であったりというものはレパトリーとしては少ない。対して、ランがデュエルトーナメントで使ってきたマガアの多くは、俺が開発を渋っていた大技系など、閉所空間では使い勝手が極端に落ちるものばかりだった。使い勝手重視の俺に対し、一撃で戦況を変えるランといったところか。俺は燃費重視で、とにかく多くの手札を切ることを重視するのに対し、ランは少ない手札を生かし切って、一撃で戦況を変える。究極の一と無限の手札、現状は俺のほうが強いが、いつひっくり返ってもおかしくない。研究材料としてのみならず、相手にとつても、相棒としても不足はない。この組み合わせだと、前で支えることは俺のほうが上をいく。回復術をあまり習得していない俺に対し、回復も含めた支援能力に長けたランを後ろに置いた方が安定するからだ。俺が遠距離からまず仕掛け、ランが起点を作り、俺が最後ダメ押しして終わる。その繰り返しだ。

「右の弓使いいロー！」

「とどめさします！」

「頼んだ！」

まあこんな具合で、ある程度情報がそろえばこのくらいの連携は即席でも組める。加えて、エリーゼやアルゴといった情報を多く持つプレイヤーが知り合いにいたりというのも大きい。情報がなければ死ぬ、それはおそらく大体の事象において共通する事項だ。そして、情報に対応する手札という点において、この組み合わせ以上に最大効率をたたき出せるデュオはそうそうおるまい。

「倒しましたー！」

「こつちも終わった。おつかれー」

「お疲れ様です」

ポリゴンを背中に、お互いの働きをねぎらう。一人より二人のほうが効率は上がる。もちろん、特に言葉を交わさなくとも阿吽の呼吸でお互いのフォローに入ることができるレイン相手のようにはいかないのだが、それはレインが特別なだけだ。戦闘スタイルが似ている時点で、ある程度お互いの動きも読める。しかもフォローも文句のないものだった。自分が削った後に、確実に一枚落としていくってくれるのは大きい。サシの勝負なら俺はそうそう負けないし、集団戦でもある程度なら十分粘れる。ソロだと勝てないかもしれないと踏んだら玉砕覚悟で突っ込んでいくのだが、デュオなら粘っていれば相方が倒してくれる。どの敵を優先して攻撃すればいいかだけの連携だけでどうにかなるのは大きい。

「そういえばロータスさん、少しお話があるのですが」
「ん？」

「今度、あのプローブを使って、アスナさんたちと旅行に行こうという話が出ています。いつしよに行けませんか？」

「んー．．．行きたいのはやまやまだが、俺も仕事があるしなあ．．．」

「そう、ですか．．．」

明らかにしよんぼりするランに、俺は少しの罪悪感を覚えた。

「まあ、でも、アスナたちってことはほとんど未成年なわけだよな．．．さすがに未成年の女子だけで旅行するのもリスクだし、かといって下手な人選だと純粋に旅行を楽しむめないしなあ．．．」

その言葉に、ランの顔が少し明るくなる。

「まあ、こつちでもいろいろ策を考えてみるよ。見習いみたいなものとはいえ教職についてる以上、保護者を伴わない生徒だけの旅行つてのは注意せざるを得んからな」

これは本音だ。だが、はてさてどうしたものか。とにかく、あれこれ手を考えてみるほかあるまい。ある程度の算段を頭の中で立てつつ、俺たちはもう少し進むことにした。

7.3. 楽しい時間は

ランにああは言ったものの、そうそう当てなんてあるわけもなく、はてさてどうしたものか、と考えていきついた結果。

「こうして、私を頼った、と」

「いやはお説の通り。面目ない」

俺の返答に、永璃ちゃんはなんとも言えないため息をついた。彼女なら、同性なうえに、結城たちと面識もある。加えて、ギリギリといえど成人しているとくれば、この上ない適役だった。

「まあいいけどね。明日奈ちゃんからも同じような頼み事引き受けてたし」

「そうか。ま、よく考えてみれば、結城がそこまで考えてないはずもない、か」

「そういうこと。もうちよつと生徒を信用してあげなさいよ、天川先生？」

「肝に銘じとく」

どうも人生ソロプレイヤーからすると、その辺の発想が甘いらしい。しかもそれを、年下である永璃ちゃんに指摘されるまで気がつかないとは。

「人間観察は得意なのに、人を信じるのは苦手っていうのも、どこかちぐはぐな気はする

けど・・・ま、それが先輩か」

「ひでえ言い草だな、と言いたいところだが何も言えねえな」

ゆつくりとコーヒーカップを傾ける。と、ここで一つ疑問が浮かぶ。が、それはすぐ解決した。

「あ、旅費とかは明日奈ちゃんのお母さんが負担してくれるって」

「ほう、それはなんつーか、意外だな」

「そう?」

「ティーンエイジャーの娘と友達が旅行に行く、ってのに賛成するかな、と思ってたもんでな。実際会った感じ、話は分かるけど堅物な印象だったし」

「むしろ父親の方が反対してたけど味方についてくれたくらいらしいわよ。年頃の娘らしいことが今まであまりなかったから、って」

「あー、それは分かるかもしれん。今でこそああだが、初期のアスナとか、ザ・堅物だったからな」

「あー、ちらつと聞いた。和人くんとも衝突してたんだっけ?」

「そーそー。なんだかんだでコンビ組むようになって、徐々に軟化してた感じ。今にしていると思うと、あの時既にバーサーカー気質あったな」

「本人に言おうか? それ」

「反論されたら、初対面だったときに予備武器と最低限の回復と寝具だけでダンジョン潜りっぱなしなんて時点でかなりイカれ判定だつて言つといて」

「・・・なんか、全く想像つかないんだけど」

「あの時のアスナと今のアスナを同一人物視しない方がいいんじゃないかと思うくらい別人だつたぜ？」

これは偽らざる本音だ。どこであの堅物がほだされたのかわからないが、とんでもないお嬢さんだ、というのが俺の第一印象だ。

「・・・ますます想像つかないわ」

「やけっぱちつていうか捨て鉢つていうか、それとバーサーカーを足して2で割らない感じだな」

「よく助けたね？死にたいなら勝手にしろ、くらい言いそうなものだけど」

「目の前で死なれても寝覚めが悪いからな」

これもまた事実。こういってはなんだが、助けた理由は、気紛れとその場に居合わせたりととの意見の一致以外の何物でもない。後悔はしていないし、ああなつてくれたのはいい傾向だと思う。

俺のその言葉に、永璃ちゃんは少しだけ笑った

「・・・んだよ」

「いや？ やつぱりなんだかんだ言っているいい人だなーって」

「そんなこというのはお前だけだよ」

「その台詞を言うべき相手は他にいるんじゃない？」

「——そうだな」

いい加減、向き合わりにやダメだよな。

心の中で静かにひとりごちた。

さて、旅行の間、当然と言えば当然だが、寝る間やお風呂の間はスリーピングナイツのメンバーは仮想世界にいることになる。その間は、できるだけ同行できなかつた面々が話し相手になることにしていた。

「京都なんて久しく行っていなかっただんですが、やはりいいですね」

「そうなの？ なんか地味だなーって思っちゃったんだけど」

「ああいうのは趣がある、っていうんだよ。年取ってくるなああいうのの良さがわかる」

「ジジくさい」

「ほつとけ。というか、シウネーは京都に行ったことあつたんだな」

「こちらに来て少しした時、友人に連れていってもらったんです。日本の歴史を学ぶためにうってつけだと」

「そりやそうだな。東京、古い言い方だと江戸は、現代でいうウォール街のようなもので、古さや歴史でいえば京都や奈良のほうが深い」

「その友人も似たようなことを言っていました。さしずめ、アメリカにおけるフィラデルフィアのようなものだ」と

「なかなか言い得て妙だな」

「フィラデル・・・？」

「フィラデルフィア。アメリカ独立宣言の地だ。今でも、アメリカの歴史にまつわるものがたくさんある都市だな。歴史の勉強が足りんぞ若人よ」

「どうやらフィラデルフィアが分からなかったらしいユウキに対し補足を入れつつ、先を目顔で促した。」

「解説されると、昔の人は本当にすごいとつくづく思いますね。五重塔の建築理論には驚かされました」

「あー、あれな。地震の多い日本人ならではのだよなあ、ああいう発想」

「あれを、コンピュータなど一切ない時代にやるというのは、本当にすごいです」「なー。いったいどういう発想だったんだろうなあ」

「それに、そういった建物の周りに近代的な建物は少なく、近代化された建物の区画と歴史的な区画がはっきり分かれているのも印象的でした」

「あー、あれは条例だったかで規制されてるんだよ。景観を壊さないように、つてな。だからコンビニとか自販機も、景観を壊さないようなデザインになってるはずだ」

「ですね。なので、統一感がある。奇妙なちぐはぐさがない」

「和を以て貴しとなす、つてやつだな。現代まで生き続ける精神だ」

「信心が浅い人も、どこか背筋が伸びるというか、そういう雰囲気がありますよね。神々しいというか、厳かというか」

「だな。日本人としてうれしいよ」

「京都ならここ行っておいた方がいい、つて場所つてほかにある？」

「んー……多すぎて一概には言えないな。清水寺とかメジャーどころは抑えてると思うし……。多分アスナならその辺しつかりしてるんじゃないかな」

「なんか、アスナつて本当にお姉ちゃん気質だよな」

「アスナ自身は妹らしいがな」

「え、そうなの!？」

「あ……プライベートな情報だから言わないでほしいんだが。兄貴がいるらしい」

「会つてみたいなあ」

「すでに社会人かもしれないし、そうでなくても忙しい可能性は高いがな」

あぶねえうっかり口滑らした。俺にとっては、生徒の情報だからまあ把握していて当

然なわけだが、一般的にはリアルなプライベートにかかわるもの。本来漏らしてはいけない情報だ。まあ、アスナがそういう家庭ってことを知れば、そこからレクトの社長一家、なんて調べればわかることではあるが。

と、内心冷や汗ダラダラ状態の俺をよそに、ユウキが明るい声を上げた。

「そうそう、アスナがね、こっちで京都の料理、できる範囲で再現してくれるって！」

「マジか。アスナならやれそうだな」

「本気でやりそうあたりがアスナさんらしいですね」

「やるとなったらとことんガチるタイプだからな」

「楽しみにしていきましょうか」

「そうだな」

料理スキルカンストな上に、SAO時代に味覚エンジンの解析という荒業を成し遂げた彼女のことだ。ここでも素材さえ集まればやれるだろう。

「必要な素材リストアップしてくれたら協力するかね」

「ロータスさんも手伝ってくれるんですか？」

「そりやもちろん。俺も興味あるしな、本家本場の味ってやつ」

ランの言葉に返答はしたものの、ある程度見当はつく。京都の料理といえば純和食、代表的なものといえば湯葉などだろう。となれば、香草類など、あまり香りの強いもの

はないはず。同様に、肉類はあっても鶏肉くらいで、牛や豚もおそらくない。問題は、「どこから料理作るかなんだよな」

「素材のお話ですか？」

「そそ。原材料から再現するのか、ある程度食感や味覚が似てるもので代用するか。ま、アスナなら前者な気がするがな」

「それは、なぜ？」

「さつきも言ったが、ガチるとなったらとことんガチるんだよあいつは。なにせ、SAO時代に味覚エンジンの解析をした女だぞ？調理エンジンの解析くらい、副産物でデータ化されていてもおかしくない」

おかしくない、とは言ったものの、やっていて当然かもしれない。

俺は感覚と経験で、なんとなくこんな感じ、というものはある。が、それは俺が、SAOでオレンジの期間が極めて長く、碌な調理場どころか、シヨップすらも使うことのない、野戦が基本であったが故のことでもある。極論、腹が満たされればそれでいいのだが、味がいいのならそれに越したことはない。フルマニユアルでならスキルなしでもある程度はなんとかなる、と見つけてから、自分で簡単な料理をするようになっていた。その過程で、フルマニユアルの調理エンジンの解析というのはやってしまった。俺が必要に迫られてフルマニユアルでの解析を行なったように、アスナも同じように、味覚工

エンジンの解析過程において、必要だったからという理由で調理エンジンの解析もやっている可能性は大いにありうることだ。

「やれるものなのですか？」

「やる気になれば、な。恐ろしく面倒であるのに変わりはないと思うが」

「しかし、不可能ではない、と」

「そーいうこつた」

もともと地頭がいいアスナのことだ、やる気になれば、能力的には十分可能だろう。意欲も、あの性格を考えれば十二分。

——問題は

(間に合うかどうか、だな)

口に出すことはしない。が、アスナもそれは承知の上だろう。それは、無論俺のことも、だ。

そんなことを思いつつ、目線をさりげなくランに移す。この中で、おそらくランはリアルな容態がもつとも悪い部類に入るはずだ。

「さて、今日はこのくらいでお開きにしようか。そろそろアスナたちも風呂から出てくるだろうし、ゆっくり寝ておかないと旅路に差し障る」

「そう、ですね」

「えー？まだまだ話し足りないよー！」

「わがままを言うんじゃないやありません。明日眠くなっても知らないですよ。」

「それは・・・困る」

「なら寝ろ。んでもってたつぷり、しつかり見てこい。話なら、帰ってきてからでも、いくらでも聞いてやるから」

俺とランが宥めすかしたことで、ユウキも静かになった。それにつられるように、他の面々も静かになる。

「では、私たちはこれで」

「おう、おつかれさん」

本音を言えば、ゆっくり寝ろよ、とでも言いたい。が、その言葉を口にする勇氣は、俺にはなかった。

それから数日後、俺はアスナに呼び出された。傭兵として仕事を依頼したい、と言われた時点でなんとなく察しはついていたので、合流してすぐに要件を切り出した。

「ユウキたちとの約束か？」

「うん。もしかして知ってた？」

「本人から聞いた。で、どこから作るんだ？小麦から？」

「小麦が原材料になればやってもよかったかも」

「つてことは、原材料から作るのか？」

「いや、ある程度似ているもので代用するつもり。本当は完全に再現したいんだけど、時間がないから」

「あー・・・」

タイムリミットまで長くない以上、手間をかけすぎるのもよくない。それはアスナ自身も百も承知だったようだ。というか、

「時間があれば、つて話か」

「それはもちろん。で、うってつけの協力相手がいるとなれば、人手を使うのは当然でしょう？」

「道理だな。で、アイテムの共有はどうする？俺の共有タブはフカと繋いでるから、できれば解除したくないんだが」

「それについては、私専用のボックスがあるから大丈夫。そっちに入れてもらえばいいわ」

「なら俺側からは入れるだけ状態の設定にしてるつてことだな？」

「厳密には、私以外取り出せない状態になってる、と言った方が適切ね」

「OK、了解した」

まあ確かにそうであっても不思議ではない。アスナとキリトはSAOの時から、結婚システムを使ってストレージの共有化を行っていた。が、それはつまり、衣類なども一緒くたになるということと同義なわけで。親しき中にも礼儀ありというか、さすがに下着とかまで見られたいとは思わないだろう。となれば、それぞれ専用のストレージがあっても不思議ではない。そうなれば、必然的に個人専用外部ストレージになるわけ。だが、片方が入れることも不可能な状態では、それはそれで不便だろう。保存はできるが取り出しはできない状態にしておけば、その辺も解決する。

「で、どいつをぶっ殺せばいいんだ？」

「あ、それについてはこのリストを見て頂戴。ある程度はこっちで受け持つから、とりあえずはそのリストにある分で十分」

そういわれて手渡された羊皮紙には、きっちりリストアップされた原材料リスト。アスナらしいというか、かつちりと分量も書いてある。しかもこれは、

「基本的に深夜帯に出没する奴をやればいいってことか」

「そういうこと。お昼はこっちでなんとかする」

「さすが、その辺はしつかりしてんねえ」

要は彼女らと俺とでインできる時間が違うことからの配慮だろう。ちゃんと持ち回りのメリットを生かし切る采配ができるあたりは流石元血盟騎士団副団長といったと

ことか。

「ん、今ポップするやつもいるな。じゃ、早速行つてくる」

「行つてらっしゃい」

そういつて、ある程度マップの状況を確認したところでアスナから声がかかる。

「そういえば、ランさんとはどうするつもりなの？」

「・・・痛いところついてくんね、お嬢さん」

「つまり、まだ決めかねてると」

「まあ、な。どう向かい合ったらいいかわからんのよ。好意を向けられた経験があまりに少ないもんでね」

本気でどうすればいいのか分からないのが本音だ。レインとの関係が今なお曖昧なままのように。

——彼女が、いや、彼女たちが抱いているであろう想いに、どう向かい合えばいいのか。

「なにかしらでトリガーがあれば吹っ切れるかもしれないが、このまま有耶無耶になるかもしれない」

「・・・本当にどうすればいいのか分かっていないのね」

「分かつてりゃあ苦勞はせん」

案外、待つのが正解かもしれない。だが、「期限」を考えると、そののんびりと構えるわけにもいかない。かといって、こちらからアクションを起こしたところで、という感覚もある。とりあえずは様子見が安定か。

「まあ、そんなのは置いといて、行ってくる。サクッと一定数集めてくるわ」
「お願いします」

それだけ言い残すと、俺は拠点を後にした。

74. えてして、すぐ終わってしまうもので。

それから数日で、順調に素材も集まり、レシピもしつかりまとまった。そのタイミングで、スリーピングナイトと俺を集めて食事会が開かれる運びになった。正直、ここまですぐレシピが仕上がるとは思えなかったが、少々の出費は覚悟で、俺も含めて複数の傭兵ギルドに素材集めを依頼して、自身はレシピ研究に徹していたようだ。流石はS A O時代に味覚エンジンの解析をやったのけた才媛、同一のエンジンが使われているAL Oでもその才覚は健在だったらしい。素材が集まるのが先か、レシピが完成するのが先か、といった度合いで完成したらしい。もはやさすがと言うほかない。

そのレシピが完成されたという連絡を受け、俺たちはアスナたちのホームにやってきた。

「はい、おまたせ」

「おお・・・！」

「すごい、見た目まできれい・・・！」

「そりゃ、そこまでこだわりましたからね！」

ふんすと胸を張るアスナに、ただ俺は感心するしかなかった。箸を手に取り、いった

ん合掌してから口に運ぶ。口に広がる優しい風味は、まさに京料理のそれだった。

「うまいな・・・！」

「優しい味ですね・・・。どこかほっとするような」

「濃い味付けなわけじゃないのに、ちゃんと口に残る・・・不思議だねえ」

「口にあつたようであれしいわ」

嬉しそうにするアスナをしり目に、俺たちは個々人に用意された分に次々に箸を伸ばす。会話がほとんど発生せず、ただ淡々と食べ進める風景は、いつものスリーピングナイツとは違う光景だったが、この味ならそれも納得だ。歓声が上がるとか、そういうものではない。ただ静かに、ゆっくりと素材の味を楽しみたくなってしまう。そういう種類の料理だった。

そんな調子だったのもあり、すぐに出された料理は無くなってしまう。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさま。どうかしら？」

「普段、少し味付けが濃いものを食べていただけに、非常に新鮮でした。素朴に、素材の味をそのまま生かした料理というのもいいですね」

「肉もいいけど、こういうのもなかなかいいよなあ」

ほかのメンバーにもかなり好評だったようだ。実際その通りで、味のみならず、見た

目、食感、どれをとっても、かなりの精度で再現されていたように思える。

「アスナさん、こんな特技があったんですね」

「まあ、ね。SAOだと、最初のほうのNPCシヨップの味付けが微妙だったから、自分で作るようになったらのめりこんじゃって」

「で、拳句の果てに調味料一式まで再現できたんだっけ？」

「メジャーどころはなんとかね」

「なんとか、って、それだけでも十分偉業ですよ!？」

「いやいや、これくらいなら研究すれば行けるわよ。ロータスくんやランさんだって、マギアの研究をしたりするだけでしょ？方向性が違うだけ」

「方向性が違うだけって話でもねーとおもうんだけど・・・」

「ノリのツツコミは至極まっとうなもので、隣にいるタルケン、テッチ、ジユンも無言で頷いた。」

「そもそも、ランねーさんだって、マギアの研究するとき相当苦労してた覚えがあるぜ？ロータスさんに放ったあの水魔法だって、どれも数日かかってなんとか形にしたものばかりだし」

「ああ、道理で。狙いも威力も絶妙だと思った」

「僕も何度か受けましたが、最初の命中率はあまりよくなかったですね」

「だらうな。むしろアレを一発で成功させれたらたまったもんじゃないわ。俺でもうまくいかかわからないっていうのに」

まあでもそれでも何とか返すことができたのはひとえに経験値だ。対人経験があったからこそ、*“なんか危ない”* という直感がすぐに働かせることができた。

「そんなのはともかく、非常においしい料理でした。今度は現実世界でも食べてみたいですね」

「それまあ、自分たちで何とかしてくれ、としか言えんな」

「そうね。それに、本場の本物を自分の目で見てほしいし。私は、まあ、ある程度見慣れたって言うか、そういうところもあるけど」

「お父さんの実家が京都なんだっけか」

「そうね」

決して嫌味ではなく、そういう機会に訪れることも何回かあったのだろう。結城本家は結構由緒正しい家のようなので、アスナ本人はあまりいい思い出はないかもしれないが。

「まあ、それは私たちでなんとかします。今日はありがとうございました」

「全然大丈夫！またこういうこととしてほしい、みたいなことがあったらどんどん言っ
ね！」

「それについては同感だ。特に俺なんかは、仮にも傭兵つて肩書名乗ってるわけだからな。頼ってもらつてナンボつてもんだ」

「ありがとーじゃあ、そういうことがあればまたよろしく！」

そういつて、スリーピングナイツの面々は席を立った。満足してもらえて何より、と
いったところだ。

それから少しして、俺はスリーピングナイツに雇われた。スリーピングナイツでやりたいクエストをやりたいと思つたが、ランの体調が思わしくなく、代役として俺が雇われた、という形のような。こちらとしても却下する理由はなく、引き受けることになつた。

俺が待ち合せの場所に到着すると、ランを除いたスリーピングナイツの面々が勢ぞろいしていた。その表情を見て、俺はある程度察した。が、あえて顔と口には出さなかつた。

「悪い、待たせたみたいだな」

「いや、そんなに待つてないから気にしなくていいよ。じゃ、行こうか」

そういつて、ユウキはくるりと背を向けて先陣を切る。本来、俺は前衛をこなしつつ、攻撃的な後衛にも入り、全体的に火力の底上げを図るスタイル。ユウキという絶対的と

もいえる前衛がいるスリーピングナイトにおいて、俺の役目はおそらく火力支援程度だろう。それに、先にユウキにも言った通り、本来スリーピングナイトに協力するのなら、俺のような純粋なアタッカー型より、バフやヒールを使いつつ支援するタイプのほうが効果的だ。それでもこの振る舞い。

「ユウキ。死に急ぐなよ」

「わかつてるって」

背中からかけられた俺の声に、ユウキは振り向かずには答える。その反応を見て、俺は自身の推察がおそらく間違っていないであろうと確信を抱いた。

（おそらくランがらみだな。．．．まったく、この小娘は）

いつ来るかわからない最期に向けて、自分のできる最大の姉孝行をしたいとでも考えたのだろう。なら素直にそういうればいいのに。意外と聡いユウキのことだ、おそらく俺なら気づいていても黙っていてくれると思っただけに違いない。そちらの方が気楽だ、とも。

「まあ、察しているとは思いますが、よろしくお願いします」

「つーことは、やっぱり？」

「ええ。私たちも、クエストに協力してほしい、としか」

「まったく、いらん気をまわしよってからに、あの小娘め」

「まあまあ。たった一人の肉親ですから」

「それもそうか」

小声で、同じく最後衛のシウネーと話す。やはり、シウネーは気づいていたらしい。しかし、下手に口外する理由もない。ここはおとなしくクエストに協力することにした。

今回のクエストは、森の中にいる神、フレイヤから依頼を受け、森の中に巣食ってしまった毒を浴び、狂暴化し、植物を食らうようになってしまった植物モンスターのみを倒す、というものだった。ある程度狩ったところでフレイヤに報告に向かい、次の標的がある場所に向かい、倒し・・・と、いうことを繰り返してほしい、とのことだった。

俺のポジションは、やはりというかシウネーの護衛も兼ねた、殿での後方警戒と、後衛からの火力支援だった。いくらユウキが一騎当千の強者とはいえ、あまりユウキだけに負担をかけるわけにもいかない。ゆえに、ジユンやタルケンも前衛に出るが、やはりユウキには一歩劣る。そこを、俺が後ろから射貫く、といった格好だ。登場した敵MObは主に、植物をかたどったものが多く、その多くが花をモチーフにしたと思われるものばかりだった。サラマンダーであるジユンが新たに会得していた、火属性のエンチャントで切り込んだところに、ほかのメンバーが切り込んでいくことで、道中はすんなりと進んだ。

何度目かのフレイヤへの報告で、フレイヤは静かに告げた。

「森に平穏が再び訪れたようです。感謝します、妖精の戦士たちよ」

「いえいえ、こちらとしてもいきがかりだったもので」

「お礼として、ささやかではありますがありますが、こちらをお受け取りください」

フレイヤはそういつて、指を軽く振った。その瞬間、全員にメニューが表示された。俺のメニューには、クエスト報酬として「グラシアスの花束」というものが贈られた、というアナウンスが表示された。

「みなさまにお贈りしたのはグラシアスの花束。ここから遠い地方では、その花束を感じ謝の気持ちとして贈り物にするそうです。今回、この働きに対して、私から皆様への感謝の気持ちとしていただければ幸いです」

「ありがとう、フレイヤさん」

「いえ。それに——」

そこで言葉を区切り、フレイヤは俺のほうを見た。

「あなたには、同胞もお世話になったようですよ」

「あれに関しちゃ、いわゆる利害の一致ってやつだ。礼を言われる筋合いはないよ。当の本人から、ありがたい贈り物ももらってるしな」

「それでも、です。ツールが認めた戦士など、そうはいません。頼りにさせていただきますま

す」

「そこまでいわれちゃ、期待に応えないわけにやいかないな」

少し諦めを含んだ声音で肩をすくめる。

「では、また会うときまで、一旦はさよなら、と言わせていただきます」

「うん、またね」

そういつて、ユウキはフレイヤに背を向けた。その花束は、本来手に持つておくべきものなのだろう。でも、そのアイテムの名前の名前こそ、ユウキにとっては大きな意味を持つことを、俺は分かっていた。

「ランがまた戻ってきたら、渡してやろうな」

「そうだね」

ユウキに優しく声をかけた。それにこたえるユウキの声は、落ち着いていた。

さらに数日後。俺は家で仕事の準備をしていた。軽めに資料を調べ、頭の中で、大まかな授業の流れや、授業で使うレジュメの方向性を決めていた。その時、俺の携帯がメールを告げた。その文面を見た瞬間に、俺は椅子を倒して立ち上がった。直後、俺は叫ぶように指示を飛ばした。

「ストレア！結城・・・アスナにコール！」

『OK!』

打って響く応答と、続くコール音。通話はほどなくつながった。

『もしもし?』

「あ、結城か?天川だ。メール届いたか?」

『ええ。こちら準備しているとこで——』

「ちようどいい。家で待ってろ。俺も速攻で身支度して迎えに行く。車のほうが早いはずだ」

『わかりました。お願いします』

「頼まれた。じゃあ切るぞ」

『ええ、また後で』

通話が切れた瞬間に、俺は即座に行動を開始した。簡単な身支度を素早く整える。少々乱暴に自分のアミユスフィアをケーブルごと引っこ抜くと、すぐに車へ向かった。車に乗り込み、エンジンをかける。

『結城邸にポイントしたよ!案内するね!』

「おう、頼んだ!」

慌てず急いで、俺は車を飛ばした。

——携帯の画面には、倉橋医師から届いた、藍子の容態が急変した一報の文面が表

示されていた。

結城を連れ、病院に到着する。結城は先にエントランスで降ろし、俺はできる限り早く駐車を済ませる。そのあとは走って、メデイキュボイドのあるクリーンルームへと向かう。病院の中でいい年をした大人が走っているとすれば、咎めるような目を向けられもしたが、今は構ってられない。

クリーンルームの扉は開かれていた。それはつまり、その必要がなくなった、ということと同義である。それだけ、木綿季の容態が回復している、ということと同時に、藍子が今際の際にいるということであると、すぐに察した。

「倉橋先生……っ！」

「天川さん……よかった、間に合ってくれましたか」
「なんとか」

結城も隣にいた。藍子のメデイキュボイドはすでに機能を停止していることは、素人目で見ても明らかだった。

「藍子さんは……？」

「もうこれ以上持ちません。いっとうなつても不思議ではない状態です。……手を握ってあげてください。感覚はまだ生きているはずですよ」

感覚はまだ生きている。その言葉の意味を、俺は正確に理解した。ゆつたりと、あまりに細すぎる手を俺は取った。必死に握り返そうとするその筋肉の動きが、俺の手から伝わってきた。少し目を閉じ、俺はゆつくりと口を開いた。

「倉橋先生。メデイキュボイドを稼働させることは可能ですか？」

「・・・可能です。隣の部屋は今、無人のほうです」

「ありがとうございます」

俺の意図を正確に理解した倉橋先生に、俺はただ感謝の念を告げた。

「藍子、いや、ラン。あの木の下で待ちあわせよう」

それだけ言い残すと、俺は手を離れた。結城も、それに続いてくれた。

持ち込んだ私物のアミクスファイアの設定を手早く済ませる。ログインすると、即座に俺は待ち合わせ場所に飛んだ。これでも、ALO随一の飛行速度を持つプレイヤーの一人だ。その全力飛行を以てして、なんとか間に合った。

「お待たせ。待たせたか？」

「いえ、全く。ちょうど、見せたいものもあったので」

振り返って、ゆるりと微笑むランは、見た感じいつも通りだった。こうしてみると、本当に、あまりにもいつも通りだった。

ランはおもむろに、スローイングタガーを両手に構える。本数は四本。その状態で、静かに詠唱を始める。俺にはわかる。これは、デュエルトーナメントで見せた技だ。何も無いところに四本同時に投擲し、詠唱完了と同時に、腰に刷いたサーベルを抜き放つ。瞬間、その四本それぞれから二つずつ、竜の頭を象った水魔法が放たれ、サーベルからはひととき大きな竜を象った水魔法が放たれた。間違いなく、今まで見たマジアの中で一番の大技。それはただ、美しかった。

それを放った直後、ランは崩れ落ちるようにその場に倒れた。即座に俺が支える。

「どこも痛くないのに、体に力が入らないです・・・」
「そう、か。綺麗だな、今の技」

俺の言葉に、ランは優しく微笑んだ。そして、アイテムストレージから羊皮紙を取り出し、俺に託した。

「私の開発したマジアです。あなたに託します」
「・・・託された」

俺の言葉に、ランは安心したように笑った。直後、俺たちの周りに、アスナとスリーピングナイツの面々が駆け寄ってきた。

「あなたたち・・・」

「メリダとクロービスの時とは違って、今回はこうして看取れるんだ。来ない理由がな

いでしょ?」

「そういうこと。今まで、ランにはさんざん、苦勞もしたし、かけられたし・・・っ!」
「ダメ、ですよ、ノリさん。最後は、みんなで、笑って、つて、決めたじゃ、ないですか・・・っ!」

今まで縁の下でパーティを支えた縁の下の姐御であるノリの涙に、タルケンもテツチももらい泣きしてしまう。みんながさめざめと泣いていた。

「ランさん。私も、あなたに見せたいものがあるんです」

「え・・・?」

そういうと、アスナは天に向かって魔法を放つ。シンプルな水鉄砲だ。だが、それだけで十分だった。

その合図で、空に虹がかかる。いや、虹ではない。そこにいたのは無数のプレイヤーだった。プレイヤーの種族ごとに色が違うため、虹のようになっていた。

「あなたたちの生きた軌跡。その一端を、最後に見せたかったんです」

「私の、生きた・・・」

それだけ言うと、ランは再び俺に顔を向けた。視線を感じ、俺も目線を落とす。

「ああ、私も、この世界に、少しでも軌跡を刻むことができたのですね・・・。みんなと出会えて、この世界にきて、剣士の碑に爪痕を残したただけではないのですね」

「ああ。陳腐な言い回しだが、お前は、お前を覚えているものが忘れられることができないようなことをしてのけたんだ」

「ああ、うれしい。本当にうれしいです」

それだけ言い残すと、ランは静かに俺とユウキの手を取った。

「ユウキ。あなたはもう一人ですが、一人ではありません。大丈夫、あなたなら大丈夫です」

「ねえ、ちゃん・・・っ！」

「だからそんな顔はしないの。お姉ちゃんの後を追いかけてはだめですよ」

「うん・・・っ！分かった・・・っ！」

涙交じりに応える妹に、姉は少し安心した表情を浮かべた。そして、今度は俺に顔を向ける。

「ロータスさん。短い間でしたが、あなたと一緒にいられて、本当に楽しかったです。あなたとの時間は、かけがえのない思い出になりました」

「そう、か。そういつてもらえると、俺もうれしい」

俺の答えにランはさみしそうに笑った。そして、握った手を頬に向けた。

「さようなら、私の、最初に最後の、大好きなひと——」

——そこから先の言葉は続かなかった。するりと抜ける手と腕の力に、俺は、その

時が来たことを悟った。ユウキの、二度と握り返すことのない手を握りしめたままの泣き声が、ただ静かなその場所に響いていた。

e p i l o g u e . 藍の花散る桜の下で

それから数日後、俺はランの葬儀に来ていた。喪主は本来木綿季が務めるのだが、彼女は未成年な上に、到底外出できるような体調ではない。親族との関係が良くなかったことは周知の事実なので、彼女のメデイキュボイドと接続したプローブを使用して、書面上では倉橋医師になっていた。

葬儀には多くのALOPレイヤーが詰めかけ、弔電も大量に届いた。想像をはるかに超える量に、倉橋医師や葬儀関係者も驚いていた。あとから倉橋医師に聞いた話だが、100名を超えるレイヤーが最後の別れを惜しんだという。弔電も含めた人数は数えたくないほどだったとの話だ。それだけ、ラン、ひいてはスリーピングナイツがレイヤーに支持されていた、ということだろう。

葬儀が一段落して、桜を見ながら、俺はひとり静かに物思いにふけていた。

結局、ランの思いには応えられなかった。それをランがよしとしていたかどうかは、もうわからない。せめて、彼女を笑顔で送り出すことができたのなら、と思う。

「天川さん」

「倉橋先生」

そんな中、倉橋先生がこちらに声をかけてきた。いったん思考を中断して、彼に向き合う。

「この度はお悔やみ申し上げます」

「いえ、恐れ入ります。木綿季くんから、藍子くんの最期を聞きました。やはり、あなたがたに託した私の選択は正しかった」

「結果論にすぎませんよ。先生の英断に感謝します」

本当に、この人にはいくら頭を下げてでも足りない。彼女らに引き合わせてくれたのも、この人があってこそのもだった。ランの最期に関しては、アスナたちのほうで手をまわしてくれたようだが、それについても、この人の英断なくして実現しえなかったことだ。

『ボクからも言わせて。蓮さん、いつもボクたちに力貸してくれて、姉ちゃんのために尽くしてくれてありがとうございます』

「かしこまらなくていい。俺も、スリーピングナイトと出会えてよかったと思ってる。これからもよくしていきたいと思ってる」

『こちらこそ、だよ。こんなところでよくよくよしてたら、姉ちゃんに怒られるからね』

「ま、あいつはそういうやつだよな」

少し口角を上げながら答える。

「天川さんは、慣れてるんですか？」

「慣れるなんてそんな。そんなことはあつてはいけません。どんな形であれ、自分とかかわった人が亡くなったということについては思うところはあります。ですが、そういう時にはある言葉を思い浮かべるようにしています」

「と、いうと？」

「悲しみは海にあらず、すっかり飲み干せる。ロシアのことわざだそうです」

「・・・なるほど。深いですね。ですが、どれほど深くとも、飲み干せるならば、止まり続ける理由はないですね」

「ええ」

それだけ言うと、俺はまた桜の木を見上げた。

『きれいだね』

「ああ、そうだな」

『ねえ、みんなが元気になったらさ、ここじゃなくてもいいから、桜を見に行かない？』

「ああ。いいな、それは」

どうやら、この若人は、俺たちよりも先を見ているらしい。

「なら、私は今よりも頑張らなくてはいけないですね。メデイキュボイドの研究も、医療も。少しでも、救われぬものに救いの手を差し伸べられるように」

「ええ。あれほどの機材、改良もなかなか難しいでしょうが」

「かの茅場氏の先輩にあたる研究員の作品です。なんとしてでも活かして、ひいてはVRの発展にしなければ」

その言葉に、俺は言葉をなくしてしまった。

「——今、なんと……?」

「え、VRの——」

「その前です」

「……茅場氏の先輩にあたる研究員の作品、ですか?確か名前は、神代凜子さん、だったかと」

その言葉に、俺は絶句した。つくづく、あの男はいつたいどれほどまで先を見ていたというのか。いや、あの世界を作り上げることこそが、あの男の目的だったのであれば、ある意味では目先のことしか見えていなかったのかもしれない。目的がどうあれ、あの男が残した遺産は、想像以上に膨大なものであったということは間違いない。

(なら、せめて、その灯台守くらいにはならないとな)

火を絶やしてはいけない。前を向いて、あいつらを見守り、続くものを導こう。ガラではない気はするが、もう俺は選んだのだ。

マザーズロザリオ編 あとがきのな何か

はい、というわけで。

これにて、キャリバー編およびマザーズロザリオ編、完結でございます。

まず、ここまで読んでくださった読者の皆様に感謝を。

かなり紆余曲折もありました。正直、筆が止まる時間が一番長かった章だと思えます。その関連から、おそらく一番書き方がコロコロ変わり、読みづらいたところも多い話ばかりだったと思います。

また、原作におけるこの章は、個人的に「もつとも現実とゲームの境目に焦点を当てた章」だと感じたので、その感性のまま書きました。必然、かなり生々しい話も多かったと思います。

そんな中で、ここまでついてきてくださった読者の皆様、本当にありがとうございます。

さて、まずは74話のあとがきから。アスナが京料理（再現）をふるまう回ですね。

序盤のお料理は地味に書くのを苦労しました。意外とおいしくお料理を食べる、という描写が難しいといことに気が付きました。まあ、個人的には来るかもしれない経験になったからこれはこれでよかつたのかなあ、つて思っています。端折りすぎとかそういうツツコミは受け付けます。

中盤はユウキなりの恩返しですね。花束の元ネタはポケモンに登場する「グラシデアの花束」です。正直、グラシデアの花束の元ネタを参考にしてうまいことやれないか、と思いましたが、元ネタ見つからなかつたため致し方なくそのまま流用。名前の「グラシアス」は、スペイン語で「ありがとう」を意味します。ポケモンでも、この花束は感謝の意を伝えるために渡す、ということだったので、そういうことです。この花束がどうなったのかはご想像にお任せしたいと思います。

そしてこの話のラストです。正直、この着地は本当に悩みました。一瞬でもランチやんを幸せにすべきなのだろうか、でもそうするとレインはどうするよ、ほかの人間関係はどうなるよ、と。悩みに悩んだ結果、当初からの想定そのままに、こうして最後の最後まで彼女は恋する乙女でした。

正直、この話を書いていて、これまでで一番悩みました。流れも、着地も、これでいいのか、と何回も思いました。ですが、「これ以上のもを書けるか」と言われると、わからないとしか答えようがないので、こういう形で。

次に最終話のあとがきです。

ランの葬儀に関しては、原作におけるユウキの葬儀にできるだけ寄せたものになりました。前の話の着地が急展開のような形になったので、できるだけ軟着陸にしたかったですよね。なので、原作に寄せたほうがきれいに着地できるかな、ということでしょうか。次に書く内容とかにもつなげられるし、ということでしょうか。幕引きで。

どこかで言いましたが、ロータス——もとい、蓮はなにも教職しか道がなかったわけではありません。が、その中でも、虹架への、彼なりの義理立てというのもあり、教職を選びました。最初は虹架への義理立てという意味合いが強かったですが、こうしてSAO帰還者の年下たちを見ているにつれ、仮にも年長者として彼ら彼女らを導くのも、そういう立場に立った人間の役目だろうと考えるようになっていきました。そういう点は、キリトに対してのメデイキュボイドのくだりとか、アスナの絡みとかで表現したつもりです。が、たぶんうまいこといってないですね。うーむ、難しい。

最後に、この章全体のあとがきです。

どこかで書いた気もしますが、できるだけこの作品は原作に沿わせたいと考えていま

す。ランのくだりだけは、ユウキにするとどうしても話の整合性がうまく取れないという理由からこうなりました。が、それ以外はできるだけ原作通りに進めたいと考えています。そういう点では、まあある程度うまくいったんじゃないかと思つています。もつと改善点はあるでしょうが、まあその辺はおいおいというか。精進します。

気が付けば、GGO編開始からちょうど2年で区切りとなりました。想像以上にドンピシャということに気が付き驚いております。

この後、アリシゼーション編に突入していきます。劇場版は書こうか迷いましたが、もともと原作の構想にはなかつたので蛇足感が大きすぎると、そこまで書いたら体力持たないな、という理由からカットです。

・・・が、これを書いているときにまだ書き溜めが全くありません。具体的に言うとな話くらいしかありません。こりやひでえ。

書き溜めは作ります。一応これ書いてるのがまだ夏場、投稿されるまではあと4か月、書き溜め二話分放出したら猶予はまだ半年ある。少々ゲームサボつてでもとにかく書きまくりませす（笑）

次回更新は来年、2022年1月10日午前0時の予定です。そこからまた、月一隔で投稿していきます。

アリシゼーションもお付き合いいただければ、それにてようやくこの作品は完結で

す。ユナリンは感想の返信でも書きましたが、書きませんが、当初の構想になかったのと、時間も体力もないので、なにとぞお許しただけだと思います。

それではまた次回の更新にて。

アリシゼーション編

76. 天才少女との出会い

仕事を続けていると、菊岡から連絡があった。なんでも、新しいVR筐体のプロトタイプが完成したから、テスターになって欲しい、とのことだった。断る理由はない。ない、のだが。

(なんでわざわざ菊岡がこんなことを・・・?)

SAO開発元のアーガスも、当然ながらレクトも、ハード周りの企業も完全に民間だったはずだ。役人である菊岡、もつといつてしまえば、政府が動く理由は、大きな騒動が起きなければ無いはず。と、なれば、VRであることのメリットを見てのことなのだろう。考えられるとすれば、

(兵器の無人化か)

古くから、世界各地の空軍で運用されている無人偵察機など、兵器の無人化は既に少しずつ進んでいる。しかし、それはあくまでその程度だ。一人当たりの負担が大きい艦船や、その場で柔軟かつ機敏な判断をする必要のある歩兵には到底向かない。

——が、しかし。あの技術なら、あるいは。

(・・・流石にそれはないか。うん、そこまで外道じゃないだろう)

思いついた考えうる限りの最悪はすぐに頭から消し去った。それを行える人間は、もはや人間ではない。文字通り悪魔の理論だ。

とにかく、俺としては断る理由もない。承諾の返信を送り、日程調整に入ることにした。

約束された日時に指定された場所まで行くと、案内役がいた。そこには菊岡と、明らかにローティーンの女の子がいた。

「久しぶりだな、菊」

「そうだね、まだ1年と言うべきか、それとも、もう1年と言うべきかは分からないけど」「そうだな。ところで、そちらはどちらさまで?」

「ああ、紹介しよう。こちらは七色・アルシャービン氏。いわゆる飛び級をして博士号を取った才媛だね、今回のマシンに携わって下さった」

「プリヴィエート、天川さん。お噂はかねがね」

「あまり聞かれたくない話もあるがな」

少し屈んで握手をする。手をほどき背筋を伸ばすと、その奥には大柄の機械が鎮座していた。大きなさすには、メデイキュボイドと同等といったところか。

「七色博士は、VRを使用した研究をしていらつしやるといふことで、協力を仰いだんだ。より高性能なマシンの開発に成功すれば、互いの利になるとね。そうして生まれたのが、このソウルトランススレーターさ」

「『魂の翻訳機』 たあ、随分とご大層な名前で」

「この機械の機構を知れば、そう大それた名前じゃやない、ということも分かるよ」

いつもの胡散臭さのなかに、自信を多分に含んだ口調。こう言ってはなんだが、良くも悪くも閑僚らしく煙に巻くような口調の菊岡らしくないものであった。気になったので、二人に目顔で先を促すと、七色博士が口を開いた。

「魂はどこにあると思う？あ、脳のどこかって回答はなしで」

「分からないが……推察するとすれば、脳の中枢や前頭部にある、感情や性格を司る部分あたりか？」

「んー、惜しいといえび惜しい。まあざっくり言ってしまうと、脳内の細い管の中にある、光の集合体。それが、私たちが魂と呼称しているもの。私たちはこれを、フラクチュエーティングライト、通称フラクトライトと命名した。そしてこのソウルトランススレーターは、それを解析するものなの」

「なるほど。魂の情報を読み取り、データ化し、可視化する。故に、魂の翻訳機、か」

「そういうこと」

「理屈はだいたい分かった。が、それがどうしてVRに？」

「——魂を、そのまま電子世界にダイブすることができたら？」

「つまり、今まではハードからサーバーやらなんやらで処理されたデータを脳に入力していたところを、逆に・・・フラクトライト、だったか。それを仮想空間内に直接放り込むようなもの、ということだよな。」

仮想空間での演算を担当するものが処理落ちとかを引き起こさないと仮定すると・・・。信号がより直接的に書き込まれるから、よりリアルなものに変わる、とかか？」

「もちろん、それもある。けど、最大のメリットは、〴〵体感の処理速度を上げることができると言う点よ」

「なるほど、書き込みと読み出しを高速化することで、強引に体感速度を加速させることができる、というわけか。体、というか脳は持つのか？」

「そちらについては問題ないわ。脳細胞の内部にアクセスする特性上、生理的プロセスをスキップすることができるから。理論上の上限はないの。けど、あくまで理論上の話だから、加速には上限を設けているけどね」

「なるほど。となると、電力と演算能力が目下の課題か」

「そうね、その通り。今までのVRデバイスだと、そのあたりは演算能力とかの兼ね合い

以上に、信号の密度という意味でも難しいところがあったけれども、ソウルトランスレーターなら話は別。クオリティを全く落とさずに、体感時間のみの加速する、なんて荒業ができる」

「まあ小難しい理屈はなんとなく理解した。で、まだ開発途上で、テスターが必要だった。俺のようなSAO帰還者のような人間はうってつけのテスターってわけだ」

「その通り。しかも、この手の理屈がわかる人なら特上ってわけ」

「OK、まあもともとテスターって話だったし。乗るぜ、その話」

「ありがとう。じゃあ、そこで横になってもらえる？ 起動と準備はこちらでやるわ」
「服を脱ぐ必要は？」

「バイタルのモニタリングは着衣状態でも可能なものを使用するから、必要ないわ」
「了解した」

必要な準備を終え、俺はテストに臨んだ。

テストが終わり、マシンから起き上がると、菊岡から声をかけられた。

「そういえば、天川くん。枳殻嬢とはどうなんだい？」

「どう、とは？」

「まあ、平たく言ってしまうえば、進展、かな」

「なにもねーよ。第一、見習いみたいなモンつつつても、教師と生徒が恋愛、つてのはま
ずいだろ。外間的に」

「そうかな？ ちらほら聞くけどね、教え子と恩師の夫婦、とか」

「そりやまあ、そうかもしれんけど」

「要するに踏ん切りがついてないだけだろう。君のことだ、とうの昔に気づいてはいる
んだらう？」

「だからこそ、つて感じなんだよ。俺なんかでいいのか、つてな」

「そもそもそんなことを考える相手にそんな感情は抱かないと思うけどね。陳腐な表現
だが、守るもののある人は強い、とは真理だよ」

「ほう？ まるで実際に見てきたみたいに言うじゃないか」

「そりやまあ、君より長く生きていればそういう経験の一つや二つあるつてもものさ」

「ふうん」

それとなく探りを入れてみたが、さらりと流すあたりは相手が上手か。これ以上の追
及は無意味だろう。と、そんな会話をしていると、七色博士がそばに寄ってきた。

「あの、枳殻嬢、つて」

「ああ、彼がSAO時代、パートナーとして行動を共にしていた女性だよ。さしずめ、バ
ディといったところかな」

「もしかして、枳殻虹架さん、ですか？」

「——なぜそこまで知っている」

半ば反射的に声がワントーン低くなる。それに、びくりと七色博士が肩を震わせた。

「天川君」

「・・・すまない、おびえさせるつもりはなかったんだ。ダメだな、あいつのことになるとどうもナーバスになってしまう」

即座に菊岡がとりなしてくれて助かった。おそらく、雰囲気としても相当鋭くなったのだろう。

「いえ・・・。少し、こちらの事情もあったから」

「いや、俺もぶしつけな真似をした」

「無理もないわ。ほとんど初対面の相手の交友関係を洗っているような素振りがあつたら、警戒するのも当然だし」

「ま、それはそれとして。なんで虹架のことを？」

俺のその問いに関して、七色は少し考えこんで口を開いた。

「菊岡さん、人払いをお願いしていいかしら。それか、会議室の使用許可を」

「了解した。」

今、第三会議室の使用申請を出したよ。しばらくは大丈夫。七色博士、飲み物はココ

アでいいかな？」

「ええ、お願いするわ」

長い話になりそうだと察して、菊岡が素早く手配する。案内されるまま、俺は会議室へ向かった。

会議室の椅子に腰を下ろして少しして、菊岡が三人分の飲み物をとってきた。俺にはコーヒー、七色博士と菊岡は見たところココアのようなようだ。

「さて、こうしてゆっくり話を聞くのは初めてだね」

「そうね。プライベートの話になるから、あまり他人に話すこと自体が少ないし」

「やはりそういう話か」

「ええ。長い話になるわ。」

まず、私はロシアで生まれたの。物心つく頃には、お父さんしかいなかったわ。でも、知識を付けるにつれ、母親の存在がないことに違和感を覚えたの。それで、お父さんに聞いてみたの。その時に、いろんな話を聞いたわ。そこで、両親が離婚していて、生き別れた姉が日本にいるということを知ったの。名前も聞いたけど、会いに行くほどの時間的な余裕はなかったわ。そうこうしている間に、菊岡さんからソウルトランスレーターの話をいただいでね。これ幸いと来日したのはいいものの、肝心の姉が今どうして

いるのかまではリサーチできなかった」

「で、その姉っていうのが、虹架なわけか」

「その通り。」

——天川さん、姉に会うことはできますか？」

「わからん」

一通り話した後での頼みを、俺はいったん蹴った。むろん、理由はちゃんとある。

「俺だつて会わせたいのはやまやまだ。だがな、会いたいかどうか、というのは当人の意思による。それに、あんたは姉のことを知っているが、虹架が知っているかどうかは未知数と言わざるを得ん。本人からも聞いたことがないからな。あくまで仲介人として協力することはできるが、確約はできん。だが、そもそも俺を通す必要はないだろう」

「え？」

「うってつけの口実があるだろう。なあ、菊？」

「そうだね。枳殻嬢・・・レイン君もSAO帰還者、それも攻略組、いわゆるトップランカーだった精鋭だ。VR適性は非常に高いだろう。テスターとしてはうってつけだ」

「そつか、ソウルトランスレーターのテスター協力依頼を出せば・・・！」

「加えて、俺は虹架の担任だ。ある程度、学業関連の融通は効く。その手の相談なら、学
校関係者として乗らせてもらおうぜ」

「分かった。枳殻嬢への連絡は僕から入れよう。仮にも仮想課の人間だ、そちらの方が通りがいいだろう」

「OK、頼むぜ。学校周りは俺を窓口にしてもらえばいい。担任が窓口、つてのは自然な話だしな」

それだけ言うと、その場はお開きになった。

77. 結び目

それから数日後、勉強を教えてほしいという虹架の頼みで、俺はダイシーカフェに来ていた。カフェの一角を借りて肩を並べ、教科書を広げながらあれこれ話していると、入り口のベルが鳴った。足音がとことこと近づいてきて、自分たちの横に座る。

「プリヴィエート、おふたりさん」

「こんちゃ。よくここがわかったな」

「なんとなく、つてやつかな。ほら、マスターとも知り合いだ、つていうし。あ、マスター、オレンジジュースとパンケーキをひとつずつ頂ける？」

七色の注文に、今日は昼間のマスターを務めていたエギルが動き出す。それをしり目に、俺は二人の様子を見た。

「七色、こんなところで油売つていいの？」

「いいのいいの。今はちようど機械のメンテナンス中で、私も動けないし。論文資料まとめたら疲れちゃったからお散歩してくる、つて言ったら許可もらえたわ。特に最近、極めて興味深いデータも手に入ったことだし、休める時に休んでおかないと」

「つーことは外には厳ついにーさんがいるわけか」

「いわゆる私服警備、というやつだけどね」

「そいつぁ頼もしい」

仮にも国家公務員が携わり、外部から研究員を招いたプロジェクトだ。その辺を怠る^菊あいつではないだろう。ちょうど届いたオレンジジュースに口をつけたところで、虹架が聞いた。

「そういえば、七色ってどんな研究をしてるの？」

「うーん、ひとことでまとめると難しいんだけど……。複数の人間の脳の処理能力を、VRでクラウド化することで、意思決定能力を持つ超高性能な演算を可能とできないか、って感じかな」

「人の脳みそを一つにまとめ、それにより既存のコンピューターの性能を大きく上回るものを生み出そう、ってわけか」

「そうね、おおむねそのイメージで問題ないわ。でも、肝心要のクラウド化するプロセスがうまくいっていないの」

「まあ、複数人の脳みそを接続するわけだからな。無理に負担をかければそれこそ演算能力や意思決定能力の喪失なんていう本末転倒な事態になりかねん」

「そういうこと。ソウルトランスレーターはそういう点で行くと一つの希望ね」

「脳みその根幹情報にアクセスできるわけだから当然か」

そう言っていると、ちょうどエギルが七色の注文したオレンジジュースを持ってきた。そこで、俺は話題を変えることにした。ちょうど小難しい話をして、虹架がついていけないという顔をしていたところだった。

「そういえば、二人は無事に再会できたんだな」

「え、蓮さんって私たちの事——」

「ああいや、俺もソウルトランスレーターのテスター依頼を受けてな。その時に、菊のアホウが虹架の名前出しやがって、それで七色から聞いたのよ」

「ああ、だからあんなにすんなりと話が運んだんだ」

「正直、もう少し別の形で会いたいと思ってたんだけど。そこはごめん」

「いいって。今の七色なら、そうそうおいそれと会いたいから会いに行きます、ってわけにもいかないし」

「ま、飛び級して研究職についた才媛とあっちゃあ、そうそう自由にはなれんわな」

そんなことを言っていると、また入り口のベルが鳴った。ちらと見るとシノンこと朝田詩乃だった。様子を見るにどうやら待ち合わせらしい、のだが、

「お待たせしました。あいつならまだ来てないから、適当に空いてるところに座って待っててくれ」

「ええ、すみませんね、エ・・・アンディさん」

そう言って、近くのボックス席に朝田が腰かけた。その時、ふと窓の外が気になった。「どうしたの?」

「・・・んにや、何も」

視線の先には何も無い。が、なんとなく嫌な予感がしていた。

「このマスターさんも、SAOで?」

「ああ。SAOの攻略初期から前衛をまとめてくれた。ソロの中でも、前衛のまとめ役だ。俺たちも世話になった」

「最初期は危なっかしい奴がいると思った程度だったんだがな。あの件は正直腹が立つたぜ」

「それについてはすまんと思っただけ。が、相談できることでもないだろう」

「だからこそだよ。議論の余地はあったんじゃない?」

「それはその通りだな」

「あの後大変だったんだぞ。仮にも前衛の、それも主戦級のアタッカーが一人無くなつて、レインが無茶して——」

「ちよ、それは——」

「いいって。深く聞くつもりもない。俺のせいであることは間違いないしな」

エギルの言葉はあえてぶつた切る。かなり複雑な話になると予想することはたやす

いいし、ここで話すことでもないだろう。

「こんにちは、お二人さん」

「おう。そつちは待ち合わせか？」

「ええ。この後キリトとアスナとね」

「てことはGGOがらみか？」

「ご明察。あ、あなたにも声かけようかと思っただけど、ちよつと事情が事情でね」

「サトライザー、か？」

「やっぱりチェックしてたのね」

「そりやま、あんな戦い方されちゃあな。おハチ奪われちゃうつてもんだ」

俺の言葉に三人がポカンとしたところで、解説を入れることにした。

「GGO・・・シノンがもともとやつてるVRゲームで行われる、ソロのバトロワ大会があるんだがな。直近の優勝者がヤバいのよ」

「近接一辺倒、とか？」

「なら、まだマシだったかな。もともと持つてる装備を持ち込んで戦う、つて形式のバトロワなんだが、そいつはまず徒手空拳からスタートして、相手をきれいに格闘でキルした後、相手の装備を奪ってキルして、その相手の装備を奪って、の繰り返し。一昔前のPCバトロワ全盛期のゲームじゃあるまいし、つて界限だと話題になった」

「それだけならまだわかる話じゃない？」

「まあそりやそうなんだが。俺がALOでいろんな武器を使うのとは訳が違う。どの銃を使うかで、撃った時の反動とか威力とか射程とか、違うことが多すぎるんだ。アサルトライフルでも、サブマシンガンでも、ハンドガンでも、ショットガンでも。リココン・・・反動制御も、照準も全部綺麗だったうえに、最後は徒手空拳でノックアウト。しかも、バトロワの定石である漁夫・・・つぶし合ったところを奇襲して倒す、ってわけじゃなくて、全部サシでやりあってこれだ。ヤバさの格が違う」

「規格外、ってやつ？」

「ありやもはや特異点というべきだろう。となると、俺は確かに規格外の一人だが、特異点というほどではない。からめ手は使うし、不意打ちもするが、あくまで定石、王道を行くケースも少なくない。この手の相手にとつては読みやすい部類のはずだ。そいつを負かそうと思うのなら、同じように特異点をぶつけてみるのが一番手っ取り早いだろう。で、俺たちの中で一番の特異点であるGGO経験者と言え、ってことだ」

「なるほど、キリトくんか。確かにあれは読めないわ」

「そういうこと。サトラライザーとはいえど、銃弾飛び交う世界で剣振り回して戦う相手なんて読みようがないだろうよ。あまりにデータが少なすぎるからな」

「というかそんな物好き、というか命知らずがそうそういてたまるか、って話でしょう。」

SFじゃあるまいし」

「まあそりやそうなんだがな。・・・やっちゃまうんだよなあこれが。なんなら強いのよ」
「・・・それなんてハリウッド映画？」

「大丈夫だ。初見の時には誰しもがそう思っただろうから」

七色の感想は至極まっとうなものだろう。俺だって最初は正気を疑ったほどだ。だが、それと同時に、こいつならあるいは化けるかもしれないと思った。もともと高いSTR値と重い剣を好み、相手の防御の上から叩き込むことも視野に入れたアタッカーであるからだ。そのステータスバランス上、スキルやステータスは火力に振る。すなわち、生存能力は本人の能力にゆだねられる。であれば、下手に慣れない銃器を使うよりは慣れ親しんだ剣のほうがかえっていいかもしれない。と。その結果がどうなったのかはまあ、見ての通りということだ。七色の反応は至極真つ当なものだろう。

「で、当の本人はまだ来てない、と」

「それについては私が早く来過ぎただけだから。まだ待ち合わせ時間前だし」

「そっか、ならばちぼちくるかねえ」

そんな会話をしていると、入り口の呼び鈴が鳴った。

「やつほーしののん。ギルさん、その席使うね」

「おう、キリトはまだだぞ」

「あ、それは知ってるから大丈夫」

「事前に連絡でも取ってたのか？」

「そうじゃなくてね。見てもらった方が速いか」

俺のコメントに、アスナはこちらへ来つつスマホ画面を見せた。見せられた画面にはなにやらマップと、数字が二つ。その数値を見て、俺は軽く察した。

「・・・結城、さすがにこれは・・・」

「やっぱりそういう数値だよ、これ・・・」

「どうやら七色もすぐ察していたらしい。」

「え、つと、これは・・・？」

「GPS、心拍に体温だろう？」

「その通り。ほら、キリトくんって気が付いたら危ないことに首突っ込んでるから、ちよつと不安だね。体にセンサーを埋め込んで、見守ることにしたの」

「ま、あんな一件があったからな。赤眼は死んだが、まだジョニーが残ってる。命を落とす可能性は否定できない。気持ちはわからんではないな」

「うん、まさにその通りなんだよね。キリトくん、危なっかしいところあるから。この画面見ると、ああ、キリトくんと同じ時間を生きてるんだなあって思えるし」

心配なのはわからなくはないな、というのはフォローのつもりだったのだが、どうや

ら必要なかつたらしい。最後の一言に、さすがに全員が引いた。

「アスナ、さすがにそれは危ない人だよ？」

「うん、怖い」

「一ミリくらいは気持ちわからんではないが、人前で言うのはやめとけ」

シノンの心配も、七色のシンプルな感想もごもつともである。最後にエギルの忠言も、結果的にはとどめを刺す格好になった。と、そんな話をしているとキリトが来たので、結城とシノンは打ち合わせに入った。その瞬間に、やはり外が気になる。

「外に誰かいるの？」

「いや、・・・なんでもない」

ほんの少しだけ間が空いたのは俺のミスだ。思わずためらったしまった。一瞬だが、そういう心配みたいなものを敏感に察してしまった。

「七色、護衛に頼んで、虹架を送って行ってくれないか？」

「え、勉強は？」

「キリのいいところまでは教えた。後は虹架一人でもなんとかなるはずだ」

「うん、そんな気はした。本気でわからないって反応してたら教えてくれるはずだし」

「実際、さっぱりわからんって感じはないだろ？」

「そうだね、あとは自習でどうにかなりそう」

「と、いうわけだ。たまには姉妹水入らず、ゆつくりしてみてもいいんじゃないか？」
「こういうのって継続的にやったほうがいいんじゃないの？」

「それは違うよ、お姉ちゃん。むしろ忘れないようにするためには、少し間をおいて復習を重視したほうがいいの。一回やって、少し間を空けて復習して、つていうのを繰り返した方が忘れづらいうように脳はできてるから」

「忘却曲線、つてやつだな。あと、長くやつてると集中力も続かない。過ぎたるは猶及ばざるが如し、つてやつだ」

ふたりがかりの説得に虹架は素直に応じた。

「なら、お言葉に甘えようかな。七色、護衛さんのほうはどう？」

「今連絡とったわ。それとなくついてくる感じで護衛してくれるつて。私の時もそうだったけど、最初は違和感ないくらいには自然よ？リラックスできると思う」

「それなら安心だな。七色、頼んだ」

「頼まれたわ」

それだけ言うと、虹架は勉強用具をまとめだした。軽く机の上を拭くのも忘れない。
「じゃあね、アンディさん。また来るわ」

「おう、またな」

もともと、お代は二人まとめて俺が持つことになっていた。七色は自分の分を机の上

において、二人は店を出て行った。

「蓮、気持ちはわからんではない。が、ちよつと意識し過ぎじゃないか？」

「自分でも思う。んだが、少なくとも今、俺にとつて一番大事なのはあいつだ。それに、あいつらのことは俺が一番知ってる。あいつらが本気で俺をしとめにかかるのなら、間違ひなく最初に標的になるのは虹架だ。生かさず殺さず、俺をおびき出すことを優先するはず。過保護、つていうのは自覚してるが、どうにもな」

「一応言っておくが、お前の直感は当たってる。こちとら討滅戦に参加してた身だ。情報と人相は頭に入ってる。それと酷似する人物が、近くのカメラに写ってるのを確認してるからな」

「さすが。心強いよ、アンディ」

俺の言う「あいつ」が、それぞれ誰を指しているのかをアンディ——エギルは正しく理解したようだ。

「礼なら俺のカミさんに言ってくれ。帰る場所はちゃんと守るつて覚悟で、この辺の防犯はしっかりしてくれたからな」

「しつかり者同士、お似合いだな」

「お前らもな」

「まだそういう仲じゃねえつて」

エギルの言葉には若干の呆れを含んで返す。俺の中で相棒以上に大切な存在であることは確かだ。現状、俺の隣が一番似合うのは間違いない。虹架だし、生徒と教師以上の気持ちを抱えていることを否定するつもりはない。が、まだその時期ではない。

「さっさと踏ん切りつけろよ」

「お前まで菊みたいなこというなよ」

「ん、クリスハイトも言ってたのか？」

「踏ん切りがついてないだけだろう、ってはつきりと言われたよ」

「その通りじゃねえか」

「うるせえ、自覚はあらあ」

「じゃあ、仮に今告白されたら受けるのか？」

真っ向から聞かれて、俺は一瞬言葉に詰まった。が、答えは一つしか見つからなかった。

「受けるだろうな」

「それはどうして？」

「俺の隣に立つ女として、虹架ほど適任はいないだろう」

「それだけか？」

「それ以上の理由が必要か？」

「違うない」

俺の答えに、エギルは軽く笑った。

「それはそれとして、キリトたちの話し合いはそろそろ終わるみたいだぞ」

「OK、サンキュ。勘定頼むわ」

「ほいよ」

その言葉に、エギルは手早く準備してくれた。俺が外を気にしていたあたりからすでにある程度察してくれていたんだらう。この辺りは、縁の下の力持ちという言葉がよく似合う、頼れる大人の姿だった。

その後、桐ヶ谷たちの中に入るのは気が引けたので、少し離れた間合いから観察するようにした。残っている中で、仕掛けてくるだろう相手は1人だけ。そいつがどういう行動を取るかなど、読むのは容易かった。

「あるよオ、毒武器あるよオ！」

「ここだ、というタイミングで近づく瞬間に聞こえた声。間違いない。あいつの声を聞き違えることなどありえない。

(ジョニーめ、早めに仕掛けたか)

考えてみればあり得る可能性。ほんの一呼吸、詰めるのが遅れた。それが命取りだつ

た。俺が駆け寄り、ジョニーを押さえた時には、既に桐ヶ谷は攻撃を受けた後だった。「結城！救急車！」

俺の声に、結城は我に返ってスマホを操作する。その時、くつくつと、けたけたと笑う声の下から聞こえた。

「おせえ、おせえなあ、ロータスさんよオ」

「ああ、否定はせん。が、この状況で随分余裕だな」

「当然さあ。人一人殺した程度じゃ縛り首になんてなりやしない。なら、いずれムシヨからは出れるってことだ。出た時にはまたシヨウ・タイム。最高だろ？」

「お前にとつちやそうかもな。だが、お前たちが殺したのは一人じゃあるまい？」

「なら殺してみろよ、腰抜けめ」

「挑発は無駄だぜ。俺にはもう、殺す理由より、殺さない理由の方が大きいからな」

「ほざけ。あっちのキルスコアじゃ、お前の方が上だろうがよ」

「てめえと同じにするな、クソ野郎」

快楽のために殺すか、信念に従って殺すか。それは、同じにはされたくない。

「救急車、すぐ来るそうです。事情を話したら、パトカーもこつちに来ていると」

「そいつありがたい。戯言を長々と聞かずに済む」

「戯言？片腹痛いなあ、人殺し」

「なんともいえず、快樂殺人犯」

相も変らぬ余裕のある笑みを浮かべるジョニーの挑発には乗らない。もともと、こいつは相手を煽つて麻痺を浴びせ、その苦悶の表情を見て悦に入るタイプだ。挑発に乗ることだけは――

「ああ、そういえば、今のお前は殺せないんだっけ？なら、ムシヨから出てきたときには、いの一番にその理由を消してやるよ」

――避けなければならぬ。その意識が、腕の力を少しだけ強めるだけにとどめた。

「ほら、誰のことなのかなんて俺は一言も言っていないぜ？それなのにそんなんで大丈夫なのか？」

「戯れるな。あいつは俺が一から十まで守ってやらなきゃいけないほど弱くなどない」

「はたしてどうかねえ。どんな人間であれ、完全に気を張り詰めるなんて土台無理だ。そんなこと、お前が一番わかるはずだろ？そういうの、得意だったもんなあ。それとも、あの女たちの体の一部でも捧げれば満足か？」

――わかつている。これは挑発だ。

――だが。

「っ……!？」

「戯れるな、と言ったはずだ。素手でも人は殺せる。それも、俺の十八番の一つだと忘れたか」

抑えるのに使う力を、腕の力から体重へ。そして、首根っこをつかんでいた片手を喉側へ。その片手で、ジョニーの喉をつぶす。相手の体が酸素を求めて暴れだすが、それは俺の体重が許さなかった。

「俺のことならいくらでも罵ればいい。どれだけでも嘲ればいい。人殺しの道を選んだ時点で、地獄に落ちる覚悟など終えている。だがあいつは違うだろう。地獄の中だろうと手を伸ばしたあいつをこちらに落ちることは許さない。お前があいつに手を出したのなら、——俺が真つ先にお前を殺す」

低い声でそれだけ告げる。その直後、手の位置は元に戻した。これ以上乗るわけにはいかない。その理性が、なんとかそこで押しとどめた。

「やっぱり人殺しじゃねえか」

「人殺しであることは変わりねえよ。でも、あの時とも、ましてやお前とも違う。まっとうな人間でも持ちうる、ただ大切な人を奪った相手に対する復讐だ。それ以上でも以下でもない」

「でも復讐したところで得られるものなんてない。それはお前もわかってんだろ？ SA Oで復讐を成し遂げたお前ならよ」

「得られるものは確かにないな。復讐したところで死者がよみがえるわけでもない。時間が戻ってくるわけじゃない。が、——俺の気持ちにケリはつく。それだけで十分だ」

「結局自己満足じゃねえか。俺らと同じだ、何が違う？」

「快楽による殺人、復讐による殺人。己の欲求不満を満たす殺人という結果は確かに一緒だろうよ。だがそこに至るまでの経緯がまるで違う」

「経緯がどうあれ同じだろうさ。なら俺も同じだ。なんでこんな楽しいことをしねえんだ？」

「ここまでのやりとりで、いや、過去の経験から鑑みても理解し合えないことは分かっていた。だからこそ、普通にやり取りしても平行線であるということは明白だった。だからこそ、ここで明確に違うことを示す必要があった。」

「お前にやわからんだろうさ。夜な夜な夢で、ありとあらゆる方法で殺す夢を見ていた相手を実際に殺し、そいつら夢にまで出てきて怨嗟の声を浴びせる。そんな体験をしたことのないだろうお前らには。俺はそれを、己の目的のためと割り切り、なんとか耐えることができた。そうじゃないやつは狂っていった。元から狂ってたお前らは、ある意味幸せ者なんだろうよ。だが、俺らのように地獄を見たことのあるやつは、好き好んでもう一度あの地獄を見たいとは思わない。己の目的のために狂ってもいい、そういう

自滅願望にも似た覚悟を抱かない限りはな」

「ああ、理解できねえな。断末魔ほどの世の中にある音で美しいものもないだろうに」
その言葉に、一瞬本気で殺してやろうかとすら思った。きつとこいつは、ムシヨから出てきても同じことを繰り返すだろう。ならいつそこで——。そう思った時、頭をよぎったのは虹架の顔だった。

（厄介なもんだな、不殺の道つてやつは）

「何度でも言つてやる。——戯れるなよ、狂人め。何を言おうと、この場でお前を殺すことは絶対にしない。お前にはムシヨか縛り首がお似合いだ」

「ハッ、そうかよ。なら一つ、いいことを教えてやるよ。あの人はまだ生きています。どんな形であれ、また俺たちの楽しみを伝えるような仕事をしている。これで終わりだと思ふなよ?」

「終わりだなんて思つちやいねえ。お前の言うあの人が現実のどこのだれかを特定し、ムシヨに叩き込む。それで初めて終わりだ」

「やれるのならやつてみる、鮮血」

「ああ、やつてやるさ。一人になったお前と違って、俺はもう一人じゃないからな」

はつきりと言ひ切る。こういうやり口はあまり良くないかもしれないが、協力してくれる相手もいる。何も俺一人でやる必要はない。手段を選ばないのであれば、やりよう

はある。まあ相手が軍属などセキュリティが異常に頑丈な先にいるのであれば流石にお手上げだが、そのレベルでなければ何とでもなると信じている。

そこまで啖呵を切ったところで、遠くから二種類のサイレンが聞こえた。

78. 霧を払え

キリトが襲われた後、俺たちはかなり悩まされることになった。というのも、キリトの行方が分からなくなったのだ。救急車で運ばれた後、まず救急病院に搬送されて医療処置を受けた。が、致死量をはるかに超える筋弛緩剤の投与というのは大きなダメージを受けた。それは、専門であるがゆえにそのダメージの深刻さが医師には通じたのだろう。そこに菊岡が来た。

「和人くんを、僕の知る限り最高クラスの医療施設に搬送したいと考えています」

菊岡のその言葉に、桐ヶ谷の親は承諾した。俺としても断る理由はない。それに、岡の言う最高クラスの医療施設というのが俺の想像通りなら、間違いなくそれはこの国でも最高クラスのそれであることは疑いようもない。この時はそう思った。

——が、そのあとから、桐ヶ谷和人——キリトは、まるでこの世界から姿を消したかのようにいなくなった。

そんなことがあってから数時間後、現実世界での俺の携帯が鳴った。発信元は永璃ちゃん。すぐに電話をとった。

「もしもし?」

『蓮さん、和人君の行方、つかんだかも』

「本当か?」

あまりに仕事が進む。これは想像以上の速度だ。ただ舌を巻くしかない。が、今重要なのはそれではない。

「で、どこだ?」

『順を追って説明するから、少し落ち着いて。』

まず、蓮さん、私に協力をお願いするときに、明日奈のスマホに入れてあるアプリで和人君の現在地とか心拍とかわかるって言ったよね? つまりそれって、携帯の電波を使って、GPSとかにアクセスしてるはずだって踏んだの。その履歴を遡行した結果、最後に電波が観測されたのは都内のヘリポートだったの。で、それ以降一切、信号の発信が途絶えてる。おそらく、機内モードにしたか、電源を切ったんだらうね』

「ヘリポート……つまりヘリの電波干渉の防止が目的か」

『多分ね。私もそこまで詳しく知らないから断言できないけど、可能性として考えられるのはそれくらいだと思う。で、今度はそのヘリを衛星映像をちよつとばかり借りて追っかけてみたら、日本の領海内にある洋上の施設に向かったことが分かった。それを調べてみると、なんか大きなフロートだったことがわかったの。運営元はラースってと

「しろ」

「つまるところ、そこに乗りこめば事態は解決するのか？」

『確証はできない。そつちでも探るのは勝手だけど・・・ただ、安全は担保できないよ。レースの中のどこなのか、つてどこまで調べようとしたら、そこには自衛隊や国家機密クラスのプロテクトがあつたからね。急ぎだつて言つてたし、そこで引き返してきた』
さらりと危険を顧みない真似をしていることは黙つておくとして、これは有益な情報だ。居場所がある程度特定できただけでも大きい。が、どうにもきな臭い。

「なんだつてそんなアホみたいに固いプロテクトを？」

『こういうのは相場が決まつてるのよ。よほど危険か、軍事機密、政治機密絡み。――

安全は担保できない、つていうのはそういうこと』

「ここままでしているハッカーが言うのだ、確かな情報だろう。と、記憶の隅で引つかつた。

「永璃ちゃん、申し訳ないけど、もう少しだけ時間貰つていいか？」

『それも至急？』

「大至急ではあるが、難易度としてはエラく低い。俺の職場のパソコンに入って、メール履歴を調べてほしい。で、そのレースつてワードで検索かけてみてくれ」

『ちよつと待つて、3分あれば十分。・・・まさか心当たりがあるとか言わないよね？』

「そのまさかだと言ったら？」

電話口で大きなため息。だが、俺も正直そんな気分だ。

『いったいどんなところでそんな物騒なものに関わり持ったんですか・・・』

「これに関してはこんなところでしょうか？と思つてなかつたんだよ。いや本当に」

『まあそんなところですよー、好き好んで関わりたいとも思わないでしょうし。――』

終わった。ああ、そういうこと』

「結果は？」

『おそらく想像通り。テスター協力つて感じの名目でメールが来てるわ』

「やっぱりか。ならあとはこつちでやる。ことが落ち着いたらちゃんとは礼はする。本当

に急ですまなかつた」

『ま、これが私の仕事だし。お礼、期待してますからね？』

それだけ言い残して電話は切れた。が、これでようやく、点と点が繋がった。ならば、

あるいはつなげられるか。

(今日はもう夜も遅い。明日の朝イチでコンタクトとつてみるか)

その路線ならコンタクトが取れるかもしれない。やってみる価値はある。

その翌朝、俺は早速行動した。まずコンタクトをとるのは虹架だ。そこから間接的に

対象にコンタクトする。この計画自体は虹架に話し、同意を得た。正直身内を利用して
いるようであまりいい気はしないが、あまり手段を選んでいられないような時間の余裕が
ない。今回に関してはスピード重視でないとどうなるかわからない。そんなわけで、
真つ先にコンタクトを取った相手は七色だった。

「朝早くからすまないな、七色博士」

『いえ、こちらは時差の関係からこの時間に起きてるのもあまり珍しくないから。で、こ
んな時間に連絡してきた、ということとは、急用だったりするの?』

「お察しの通り急用だ。今回は七色博士としての立場を使って、ねじ込んでほしいこと
がある」

『となると、ソウルトランスレーター絡み?』

「近いっちゃ近い。まずは状況を説明する」

そう切り出し、事情を説明した。具体的には、キリトが襲撃を受けたあたりから全部
だ。そして、手掛かりをたどっていくとレースにたどり着いた、というところまで話し
た。

『それ、もしかしなくても違法じゃない?』

「手段を選んでは場合じゃねえのよ。自分の学校の生徒が行方不明、なんて事態だ。事
態終息のためにはグレーゾーンだろうが使わないと、手遅れになってからじゃ遅い」

『それもそうね。そのハツカーさんは信頼できる人なのね?』

「当然。じゃなけりやこんな事態に頼ろうとは思わん。ついでに腕も確かだ」

『それで、私を頼ったのね。現状、レースにねじこみが効く人物、ということだ』

「その通り。頼めるか?」

『私としても、あれほどの人材を失うのは惜しいから、協力自体は構わないわ。けど、あなたは?』

「学校のことか?」

『ええ。私の方はソウルトランスレーターの開発に携わった身としてねじ込めるし、研究が仕事だし。でも、あなたは違うでしょう?』

「まあそりやそうなんだが。桐ヶ谷が行方不明で、その尻尾捕まえたから追っかけたけれど、数日開けることになると思うって話したら、ちよつとくらいならなんとかしてやるから解決して2人とも帰ってこい、だど。ほら、リモートでファイルの共有とかもできるしな。海外だーって言うのなら流石に手を引いたかもしれんが、日本の領海内なんだろ?なら、行って様子を見てくるだけなら3日か4日くらいあれば充分だろ。そのくらいならなんとかなる。こういう時はデジタル管理じゃない義理人情の時代の人が多いのに助けられた」

『なるほどね。なら、問題はこういう形で一緒に行くか、だけだ』

「なにも助手も連れずに1人で来日してる訳じゃあるまい？うまく化けれや感付かれな
いだらうよ」

『口裏合わせるのにも限度があると思うけど』

「まあそうだろうな。永璃ちゃんの言う通り、国家機密クラスの事業ともなればガード
は堅いだろう。それなら、参照元のデータを変えればいい」

『データベースを操作して、助手をあたかも別の人のようにする、ってこと？無茶よ』
「できないと思うか？」

俺の言葉に、七色は諦めたようにため息をついた。それもそうだろう、それくらい
ことができる戦力がいるというのは既に証明されている。

『分かったわ、私の負けね。となればことは急ぐわね。それだけのハッカーだもの、写真
差し替えるくらいは訳ないでしょう？すぐに菊岡さんにコンタクトとるわ』

「すまんな、急に。よろしく頼む」

『いいわよ。言ったでしょう？あれほどの人材、失うのは惜しいのよ。国籍とか関係な
く、研究者としてね。VRを用いた研究はまだ発展途上。優秀なテスターはこれからも
引く手あまただわ。ここで恩を売っておけばパイプもできるつものだし』

「・・・強かだな」

『そうでなくちゃやってられないわ。じゃあ、また連絡するわね』

それだけ言い残し、彼女は通話を切った。あとは向こうの動き方次第といったところか。さすがに今日早速自体が進展する、というのは考えづらい。その間に、やれることはやっておこう。

「ストレア」

「はい、差しかえね？」

「ああ、頼む。必要な情報は手元にあるな？」

「もちろん。ちやちやつとやってくるわ。今ので逆探知も終わってるしね」

「さすが。必要に応じて永璃ちゃんや七色氏とも連絡を取ってくれ。その辺は任せる。七色氏も、俺の名前を出せば話は通るはずだ」

「ここまでお膳立てされてるのだから、やってみせるわ。じゃあまたね」

それだけ言い残し、ストレアの気配は消えた。とりあえず状況は一步前進したところで、俺は車のキーをとりながら、職場に電話をかけた。

7.9. 照らし出されたもの

それから数日後、俺は太平洋の洋上にいた。輸送ヘリでメガフロートに向かっていた。一応、七色の助手という体裁だが、もちろん大嘘だ。ある程度簡単な変装くらいはしているが、流石に国家組織が絡む可能性があるのにそれでは心許ない、というのもまた事実だ。が、そこは永璃ちゃん「なんとかするから大船に乗った気分がいい」と言い切った。彼女が言い切るのなら一定以上の根拠があるのだろう。ここは信頼することにした。そして、ヘリの中にはもう一組。神代凜子博士と、その助手——という名目の結城だった。

(ま、こいつもこういうクチだわな)

こういつてはなんだが、この女もやると決めたら末恐ろしいほどの行動力を持ち合わせる。そんじよそこの男なぞ比べ物にならない決断力、行動力、そしてなにより度胸の持ち主だ。加えて電子戦ならユイちゃんもいる。

(本気で敵に回さなくてよかつたよ、本当に)

味方なら心強い。敵に回ると厄介この上ない。まさにそんな相手だ。実際、ラフコフ時代でもアスナの脅威度は最高クラスだった。討滅戦の時、メンバーには「出会ったら

殺すか殺されるかの2択だと思え」とまで説明したが、あながち大袈裟ではないだろう。

さらに、仮にもローティーンの七色を放っておくのが不安という理由で、七色經由を經由する形でねじ込む形で虹架もついてきた。これについてはある程度の理由は説明がつかなくはないのだが、本当に意外としか言いようがない。頭の回転は割と早い方だが、七色や俺に比べれば見劣りはしてしまう。比較対象がおかしいというのもあるが、本当に世話係なのだろう。だが、それなら日本に来た時の助手でも不自然はないわけ。これについては收容人数に助けられた形である。

ヘリがメガフロートに着陸してから、俺たちは自衛官に案内されていた。いくらシビリアンコントロールがあるとはいえ、省庁の壁を飛び越えてまで自衛官が出張るなんてことはそうそうないはず。ということは、あまり当たっていて欲しくないと思つていたのは事実だが、やはり無人——呼称の是非はともかくとして——を見据えているという俺の推測はあながち間違つたものではないのだろう。

道中でもチェックは入っていたのだろうが、すべてかいくぐることに成功したように、首尾よく本丸まで忍び込むことができた。そこで待つていたのは、アロハシャツ姿の菊岡、眼鏡の青年、そして度が入っているかわからない程度の眼鏡をかけた永璃ちゃんだった。

(なんとかするつてのはこういうことか)

なるほど確かに、彼女ほどの腕があればホワイトハッカーとして雇われる可能性は十二分にあり得る。何らかの形でねじ込む、と考えたのは彼女も同じだったということか。確かにここに彼女がいるとなれば改ざんなんてお手の物だろう。当然、〃なんとかなる〃わけだ。

「七色博士、それから枳殻嬢もお疲れ様。ヘリでの旅は疲れただろう。そちらの助手くんも」

だからこそ、こういう間抜けな応対に笑ってしまった。虚を突かれた反応に、俺は笑いを隠さず答える。

「おいおい、いくら自分のホームだからっていつても気を抜き過ぎじゃないか、菊？」
言いつつ、申し訳程度の変装をはぎ取る。その瞬間、菊岡は顎が外れんばかりに驚いた。

「え、あ、いったいいつから?というかどこから?」

「真正面から堂々と入らせてもらったさ。こちとら仮にもキリト——桐ヶ谷和人を生徒として預かっている立場なんでね。行方知れずともなれば全力を挙げるほかあるまい?」

「でも、写真では——」

「実際にお前が確認したのか？その写真を。してねえだろうなあ。してたら一目見た瞬間におかしいと気づくはずだからなあ」

「アカデミーの写真をすり替えた、ということか。そうか、監視カメラのスクリーンについても、橘さんがここにいる以上ごまかしなどなんとでもできる。盲点だった」

「で、ついでに言うと、そういう実例が一例だけだと思うのも、また油断というものよ。なあ、結城？」

その言葉で菊岡はようやくもう一人の「偽物」に気づいたらしい。再び目が開かれた。俺の言葉に、隣にいた結城がカツラとサングラスを外して言い放った。

「キリトくんはどこ？」

いかな菊岡といえど、あまりの驚きに完全に思考停止したらしい。その様子を見て、後ろにいた眼鏡の青年はクツクツと笑った。

「だから言ったでしょ、菊さん。あの子は最大にして防御不可のセキュリティ・ホールだって」

なるほどなかなかいい得て妙な表現に、俺も思わず笑ってしまった。そこまで行つて、ようやく思考能力を取り戻した菊岡は隠し通せないと踏んだらしく、あきらめのため息をついた。

「まあもろもろ事情を順に説明するけど、機密事項につき箝口令を敷かせてもらうよ」

そこからは、STL——ソウルトランスレーターのことだ——の原理や装置概要について深く知らない結城のために説明がされた。だが、それは結城と神代博士以外の全員が知っていること。ゆえに、当然ながら疑問が生じる。

「じゃあなんで菊はここに桐ヶ谷を・・・搬送って表現が正しいのかは置いて、治療を試みたんだ？」

「キリトくんは長時間の低酸素状態で脳にダメージを負った状態だった。それを復活させるには、脳の機能を戻す必要がある。そのためには、STLを使用して脳を活性化させる必要があった。というより、それくらいしか手がなかつたんだ。最高の医療設備という言葉は、決してでまかせで言ったわけじゃない。キリトくんの状態を好転させるにはこれしかないんだ、正真正銘ね」

「まあ確かに、いかな現代医療が進歩しているなんて言っても、脳細胞に直接アクセスするなんてのは土台無理な話だろう。でもそれが、STLなら可能だった。それだけの話か」

「もし、それでも不可能なら？」

「それだけだ。キリトくんは回復しない。それ以上でも以下でもない。それでも、手をこまねいているよりはマシなはずだ。違うかい？」

「理屈は理解した。で、それはどういうプロセスを踏んでいるんだ？」

「いかにS T Lを用いるといつても、正常化には長い時間がかかる。そこは時間加速機能を用いてカバーするんだ。現に、キリトくんをここに搬送してから、キリトくんはS T Lを用いたフルダイブで、もう年単位の時間を経過している。現実世界で彼が目を覚ますころには、きちんと元気な状態になっているはずだよ。当初の手筈では、回復した時点でちゃんと事情を話して、元気になったキリトくんを送り届けるつもりだったんだ」

「フルダイブするにはダイブ先の仮想世界が必要なはずだ。それはどうやって手に入れたんだ？」

「便利なツールがあるだろう。仮想世界のひな型ともいえる、現代V R隆盛の基盤となったプログラムが」

「ザ・シード。晶彦くんの残したものね」

「その通りです、神代博士。それを用いて、僕たちは仮想空間を作り出した。比嘉くん」

「はい。モニター出します」

そういわれてモニターに映し出されたのは、一つの大きな都市だった。街の作り自体は中世ヨーロッパを彷彿とさせる、どこかはじまりの街を想起させるような雰囲気だった。

「大きな街ね」

「これだけのNPCをよく用意したわね」

「NPCではあるけど、おそらくアスナくんや天川くんが想像するNPCではないよ。聡い君たちのことだ、うすうすとは気づいているんじゃないかな？」

「やはりか。この世界が作られたのはキリトのためじゃない。何か別の目的で作り出した世界に、キリトを治療とデータ採取を目的としてダイブさせた。違うか？」

「さすがだね。ちなみにその目的については？」

「あえて誤解を恐れずに一言で直接的な表現をすれば、軍事利用じゃないか、とは」

「軍事利用……？ 私はボトムアップ型の高適応性人工知能の開発だと思っていたのだけ
れど」

結城がつぶやいた言葉で、俺の中ですべてが繋がった。

（なるほど、こういうことだったのか）

俺の驚嘆はよそに、菊岡と比嘉は全く違う感想を抱いたらしい。

「キリトくんにもそこまで伝えてはいなかったはずだが」

「キリトくんが覚えていたのよ。あなた達に協力した時に聞いた、アーティフィシャル・レイビル・インテリジェンス、って単語を」

「なるほど。情報漏洩のリスクは勘案していたが、断片的な情報でそこまでたどり着くとは。おそるべし、だね」

「そもそも、ボトムアップ型にこだわる理由はあるの？既存AIの発展形でもできたんじゃないのかしら。現代のAIの能力はかなり高いと思うのだけれど？」

「それだと限界があるんだよ、七色博士。そちらの説明もしよう」

その言葉を受けて、後ろにいた比嘉がこちらに向き直った。どうやら、彼はそのためと呼ばれた側面のほうが強いらしい。

「念のため、一から順を追って説明しよう。まずAIというものの区分について説明する必要がある。トップダウン型とボトムアップ型の二つ。現代のAIと呼称されているものはトップダウン型のみだ。これは、AIとしてのプログラミング限界によるものなんだ」

「まず人工知能という型を作ってから完成を目指すトップダウン型の人工知能は、あくまで人間的な知能に似せたプログラムに過ぎないわけだからね。もちろん学習能力とかによつて本物の知能に似せて行こう、ってアプローチなんだけど、あくまで人間の真似をしようとしている機械に過ぎないの」

「説明してくれてありがたいよ、ストレアくん」

菊岡の説明を補足する形でストレアがしてくれた質問には納得がいった。そして、そ

のアプローチならボトムアップ型というのにも見当がつく。

「ということはボトムアップ型は、機械で人間の脳構造を模倣できないか、ということか」

「ああ。でもそれには人間の脳の構造を、より細かく正確に知る必要があった。それは現代の技術において不可能だと思われていた。茅場氏が己の脳をスキヤンし、焼き切るという行為に及ぶまではね。そこでフルダイブマシンを発展させれば、脳の構造をより深く理解できる可能性が高い、ということに気が付いたんだ。そうして生まれたのが、STLだった。で、脳のスキヤン、そしてその複製と、保存するための入れ物、ライトキューブの開発まではうまくいった。フラクトライトを複製することさえできたんだ。しかし、ここで問題が生じた。

——比嘉くん、例のアレ、見せてあげてくれ」

菊岡の要望に、比嘉は露骨に嫌な反応をした。

「ええ・・・あれやるとめっちゃへこむんすけど」

「とはいっても、言語化して伝えられることでもないだろう？見せたほうが速い」

その言葉に、比嘉はしぶしぶコンソールを操作した。そうして映し出されたのは、なにやら光球が映し出された。その光球に向かって、

『サンプリングは終わったんすか？』

スピーカーから聞こえた声は、問いかけた比嘉と同じ声だった。その瞬間に俺はある程度の事態を察したが、事情説明はあとでちゃんとされるはずだ、と考え、少し様子を見守ることにした。

「STLにトラブルは起きてないっす。そこはいわば、STLの中、といったところっすかね」

『ならここから出してくれ。できるんだろ?』

「それは無理な相談ってもんっす」

『なんでだ?というかそもそもアンタ誰なんだ?聞いたことない声っすけど』

「・・・俺は比嘉っす。比嘉タケル」

『比嘉?どういうことだ!?俺が比嘉だ!ああもう、そこに菊岡さんは!?』

「比嘉くん、僕だ。菊岡だ」

『菊岡さん!アンタ騙されてないっすか!?だつて俺は——』

「ああ、比嘉くんそのものだ。厳密にはコピーだが」

『コ、ピー・・・?俺が!?そんなはずはない、そんなはずはない!だつて俺には記憶も人格もある!』

「それもそうだろう。いわば完全な複製体なのだから、記憶も人格もコピー前段階で完全に複製されているはずだ」

ね。より複雑なボトムアップ型なら、こうなるのも確かに不思議ではないよ」

「なるほど、それはそれで興味深いな。まあそれはそれとして、一定以上に成熟した知性を完全に複製することは不可能、という結論に至ったわけだ」

「なら、能力や記憶の一部を制限してみたら？」

「やってみたんすけど、さっきの比じゃないレベルで悲惨なモンができましたよ」

「と、すれば、制限部分が足りない——いや、そもそもそこまでしたとして、成長限界を迎えたものでは学習能力に限界があるはず。となると成功させるには——いえ、そもそもそんなところまでSTLは可能だというの・・・？」

「理論上は可能よ、神代さん。だけど、試算するまでもなく、圧倒的にリソースが足りないから実行されていないわ。時間も、金も、労力も、なにもかもね」

「でも、仮にも巨額の公的予算を投じたプロジェクトだ。何の成果も得られませんでした、というわけにはいかない。何が何でも成功させる必要があつたんだ。そのためには、成熟前の無垢なフラクトライトが必要だったわけだ」

菊岡の言葉に、一瞬俺は、どういうことか、と思った。が、すぐに結論にたどり着いた。直後、後ろで椅子が弾かれる音がした。音の方向からして結城だろう。頭の回転が速い彼女のことだ、おそらく俺と同じ結論に至ったのだろう。

「やはり、そうか。——生まれたての、自我や人格が形成されていない、赤ん坊のフラ

クトライトを複製した。違うか？」

「その通り。人道的批判は甘んじて受け入れるよ。でも、さっきも言った通り、何も得るものがない、じゃだめなんだ。そして、これが一番の近道であり、新生児の両親には承諾を得、見返りもしている。そこは理解してほしい。」

話を進めると、無垢なフラクトライト——ソウル・アーキタイプの精製に成功した。となるとあとは成長させるための舞台が必要だった。できる限り自然な世界がね」

「まあ、本来仮想世界をつくるだけなら3Dデータは必要なかったんすけどねえ。でもそもそも、建築物を作るっただけでも膨大な資料と研究が必要だって分かったんす。で、ボクもVRMMO遊んでたんで、あの世界がうってつけだって思いついたんすよね。なんで、ザ・シードを使ってあの仮想世界——アンダーワールドを作った、ってわけっス」

「だが、ザ・シードで作れるのはあくまで既存の仮想世界の延長にすぎんはず。これほどのもの、専用の世界が必要なんじゃないか？」

「その通り。なんで、下位サーバーでザ・シードパッケージの仮想世界が、上位サーバーで専用の仮想世界が動いていて、リアルタイムで同期してる、ってわけっス」

「ということは、下位サーバーにはアミューズファイアでもインできる、ということ？」

「理論上は。ただ、最適化されてないので、問題が生じる可能性はあるっスね」

「話を戻そう。で、そうして生まれたのがあの世界なわけだな？」

「ええ」

「ソウル・アーキタイプ、だっけ？それはあくまで赤ん坊に等しいわけだろ？いかなザ・シードのAIが優秀って言っても限界はある。一から子を育てる、なんてのは流石に無理があるだろう。子育てはどうしたんだ？」

「それは、ラーズのスタッフに協力してもらったよ。彼らには少し無理を言うことになっちゃったが」

「案外楽しんでみたいっすけどね」

「時間のかかる作業である以上、時間加速機能を使ったんだろ？相対的な時間はどれくらいだったんだ？」

「あっちの時間で18年、こっちの時間でざっと一週間ってとこっすね」

「18年っていうと・・・ざっくり1000倍くらいってこと？人体への影響は？」

「STLがアクセスするのは、生体としての脳ではなく、意識の光子そのものにアクセスを行う。つまり、脳の組織自体をどうこうする、ということはないの。だから、理論上は脳の機能に支障をきたす、ということはないわ」

「あくまで理論上の話ではあるから、実際のテスターに対しては上限を設けているがね」
「裏を返せば、上限がないということ・・・？記憶容量の限界に達してしまったりしない

の？」

「その心配はもつともだが、このくらいなら問題ない・・・はずだよ」

「おいこら、不安にさせる一言を付け加えんな。どういうことだ」

「フラクトライトの記憶容量としては150年分くらいのもがあるの見積もっている。人間の寿命は、どんなに長くても120歳程度。ということは、マージンを取ったとしても、10年20年程度なら問題ないと判断している」

「これから一世紀弱の間に、何か革新的な寿命を延ばす手法が編み出されない限りは、ね」

「その時はその時だ。それに、この機能は相当量のリソースを用いて初めて正常稼働できるものなんだ。そうそうおいそれと作動できるものじゃない。今は実験段階だからその辺かなり融通が利くけどね。仮にこれを汎用化できたとしても相当な年月と時間を要する。」

話を戻そう。その後スタッフは流行病で仮想世界内では死去して、ログアウトした。スタッフのほうには記憶プロテクトをかけてあるから、記憶の混濁は起きないはずだ。現に、今日に至るまで、そのような報告は受けていない。そのあとは人体への影響を鑑みる必要が無くなったから、倍率を5000倍まで引き上げたんだ。その後、こちらの時間で3週間ほど、あちらの時間で300年ほど経過したときには、人口8万の一大社

会が形成されるに至った」

「それが、さつき見せたあの世界、というわけか。もはや文明シミュレーションの次元だな。だが、そこまでの社会となると然るべき法が必要なはず。それはどうしたんだ？」

「それについても問題はないよ。比嘉君、ルーラー・アーキタイプの一つを励起させてくれ」

「それは構いませんけど……いいんスか？」

「口で説明しても納得しづらいだろう。さつきの今なら余計にだ」

「……わかりました。サンプルデータ励起を開始します」

そういうと、比嘉はまたもやコンソールを操作しました。そして映し出されたのは、先ほどの比嘉のフラクトライト複製体と同じようなものだった。そして、スピーカーから声が聞こえだした。

「あーあー、マイクテスト。聞こえるっスか？」

『ああ、良好だ。こつちの声も問題ないか？』

——それは、まぎれもなく俺の——天川蓮の声だった。

80. 調停者と異分子

「あーあー、マイクテスト。聞こえるっスか？」

『ああ、良好だ。こっちの声も問題ないか？』

「問題ないっスよ」

『てことはこれはサンプリングが終わった、ってことだな？』

「ご明察、っス」

『つまり、俺がいるのはあくまでデータ世界であり、俺自身は俺自身の複製体である、と』
その反応に、虹架、結城、神代博士の三人は驚愕をあらわにした。七色が驚かないのは、おそらく一度見た後なのだろう。

「その通りっス」

『あなたの声に聞き覚えはないが、おおかたラーズのスタッフってどこか。いや、オペレーターというべきか。菊岡か七色博士は？』

「たまたまどっちもいますけど、どっちに代わります？」

『なら菊岡で』

俺の複製体の指名に、菊岡がマイクに向き直り、口を開いた。

「天川くん、僕だ、菊岡だ」

『菊、悪いことは言わんから、これやめたほうがいいぜ？覚醒したときに、目は開けてるはずなのに真っ暗だし、布の感じとか一切ないから何も感じないし、においの情報もなくて直接脳内に話しかけられる感じだ。はつきりいつて気味が悪いことこの上ない』
「それはすまないね。今後の検討材料に加えておくよ」

『ああ、頼むぜ。このままじゃ、きつとこの後に覚醒するやつもパニックるだろうよ。最悪、自我の崩壊、だっけ？この場合は複製体の崩壊か。そういうの引き起こしかねん』
「実をいうと、ほかの複製体の成功率は著しく低いんだ」

『言わんこつちゃねえ。まあ、難しいだろうけどな。で？これはあくまで問題ないかのテスト、って認識で合ってるんだよな？』

「ああ、その通りだ。こちらとしても、せっかく採取したデータが死んでた、なんてことは避けたいからね」

『OK、わかった。ならこつちから伝えることを簡潔にまとめる。俺は俺の複製体であり、オリジナルが別にいることを認識している。で、さつきも言った通り、この空間は五感が死んでる。聴覚は微妙なところだが、これはあくまで脳内に直接語りかけている状態だろうから、五感がどうなってるのかは把握できない。記憶とかは多分大丈夫、少なくとも簡単なクイズくらいは楽勝だと思う。アバターについては・・・うん、真っ暗

すぎてアバターの有無や動かせるか否かもわからん。これでいいか?」

「ああ、問題ない。では沈静化するよ」

『了解した。お疲れ様』

「ああ。お疲れ」

それだけ言うと、通信は切れた。それを確認して、比嘉が告げる。

「フラクトライト損傷率、10%未満です」

「うん、今回もほぼ予定調和でなによりだ」

「・・・どういうことだ? 知性を持ったフラクトライトの複製は不可能じゃなかったのか?」

思わず聞かざるを得なかった。だが、菊岡はその疑問も当然、といった様子で答えた。

「ああ。なにせ、複製が成功したのは君の一例だけだったからね。君が覚えていないのも当然だよ。こんなことをしていると知ったら、君は納得してくれるだろう。現に、その時の君は納得してくれたよ。そして、その時の君には結局、今の説明を一通りすることになった。この辺りまでは十分僕の想定に入っていたから、フラクトライトの記憶封印措置を行っている。なにせ機密ラインを超えた話をしっかりする必要があったからね。この辺も、情報漏洩のリスクを鑑みて了承を貰っている」

「まあ、俺としてはその前のテスター依頼の段階から疑ってたけどな。ただの新世代V

Rマシン開発で、表向きは民間なのに、わざわざ役人、しかも官僚が出張ってくるなんて只事じゃあない。となれば、VRマシンを利用した、新たな利用用途の開発が含まれる可能性が高い、つてところまでは読めていたからな。

話を戻そう。とどのつまり、俺のフラクトライト複製体を、いわば代理人としてダイブさせることで、社会秩序を保たさせているわけだ。ルーラー、つて呼称を見ると、さしずめ「裁定者」つてところか」

「その通り。この実験の目的を達成するために、秩序が必要であることを理解するであろうことは予測がついた。予想通り、君の複製体の複製体を作ることと、裁定者、調停者としてダイブしてもらおう、ということも了承済みだ」

「話をまとめよう。まず、新生児のフラクトライトをいくつか複製して、そのデータをもとにソウル・アーキタイプを生成。ソウル・アーキタイプによって誕生した新生児を、ラーズのスタッフをダイブさせることで育成。ある程度育成させたところで、ラーズのスタッフはログアウト。育児と同時に並行か、育児が終わった段階で、唯一複製に成功していた俺の複製体を調停者として送り込み、社会秩序の維持を行う。その社会秩序の元、急激な時間加速によって、人口フラクトライトたちの社会を形成した。こんなところか」

「ああ、そういうことだ。だが、ここで問題が発生していることに気が付いたんだ。それ

も、かなり深刻な、ね」

「そんな問題が発生しているには見えないけど」

「厳密には、問題が一切発生していないことが問題なんだよ。この世界では、殺人というもののは起きない。大きな争いも発生しないんだ。そこで調べてみると、公理教会という、あの世界——アンダーワールドにおける政府が敷いた法律である禁忌目録に、確かに殺人を禁止する項目もあつたよ。その法を調べたところ、アンダーワールドの世界の住民は法を遵守するということが分かつたんだ。遵守しすぎている、と言つた方が適切なほどにね」

「まさにユートピアじゃない。結構なことじゃないの？」

「いいや、この上なく深刻な大問題だろう。忘れたか？この実験の目的は軍事利用だ。となれば、規律を遵守するというのは重要だろうが、それ以上に人を殺せないんじや役立たずもいいところだ。違うか？」

「でも、話を聞く限り、これは明らかに新しい人工知能の精製を目的としたものよね？軍事利用には結びつかないと思うのだけれど」

「それについてはなんとなく想像がつくぜ。大方、最悪IFFが作動しない、あるいはそもそも無い乱戦でも運用できる人工知能の開発、だろう？」

「・・・君のその推理能力にはつくづく舌を巻かされるね。教職より探偵のほうが向いて

いるんじゃないかい？」

やはりというか、俺の推察は合っていたらしい。唐突に登場した軍事用語に、俺と菊岡以外がキョトンとして反応を示した。まあ、これはいわゆるミリオタじゃないと分かってなくても無理はないか。

「アイデンティファイケーション・フレンド・オア・フォー。頭字語でIFF。敵味方識別装置、と和訳されるね。航空機や艦船に搭載されて、相手が敵か味方か識別するためのシステムだよ。このシステムによつて、空自や海自なんかは敵と味方の区別をつけているんだ。世界中の空軍、海軍も同様にね。ただし、これはあくまで海と空でのお話だ。陸となれば、話は変わってくる。それに、あくまで機械である以上、壊れる可能性を否定しきることはできない。そもそも、既存のAIだと処理能力的にも限界があつて、空戦なんてとんでもない、というのが現状なんだ。処理能力が仮に無限であつたとして、IFFが故障などで作動しなかった場合でも、既存AIでは対応ができない。その理由も君なら想像がつくだろう？」

「対象が同じ人間である以上、味方を殺さず敵だけ殺せ、なんて命令を実行できない。違うか？」

「そういうことだ。専門家に聞いても、そんなのは無理だという結論に至つた。ただ人を殺せ、という第一原則を与えたらどうなるかなんて、想像がつくからね。そこでこの

策に思いついたんだ。だが肝心要でこのザマでね」

「そんな話を、いつたいいつから・・・？」

「——最初から、だよ」

静かな返答に、いつもの柔らかさはそのままあった。が、その奥には、何が何でも成功させる、という覚悟があった。

「ナーヴギアが開発された5年前。その前から、VRを軍事利用するという研究は進んでいた。米軍が開発したその時代の骨董品が、今でも六本木の本部にあるよ。だけど、僕はあの世界にダイブしてすぐに、既存の戦争という概念すら一変させようと確信した。だからこそ、自ら志願して総務省に向かい、SAO事件を間近で見守った。ここまですでに5年かかった。長かったよ、本当に」

「つまり、あなたは、陸軍での戦争を人工知能に置き換えようかと？」

「僕だけじゃないがね。こういつた研究は世界中で行われている。アスナくんには嫌な思い出だろけれど、須郷信之が自身の非合法な取引を手土産に売り込みを行おうとしていたのは覚えているかな？あの取引相手も一流企業と言って差し支えないのだが、そう言ったところでもそんな非合法取引に乗るくらい、表舞台には出ない花形部門なんだよ。現状、無人偵察機はナーヴギアを叩き台にして開発されたデバイスを使用している。が、これは無線操縦である特性上、ジャミングなどの電子戦にめっぽう弱いという

致命的な弱点を持つ。そこで目を付けられたのが人工知能だったんだ」

「ちよつと待つて、先ほど、法を遵守しすぎる、と言ったわよね？それは具体的にどのくらい？」

「二度孤立した山村を選んで、ある種の過負荷実験を行つてみた。内容は、その村の家畜と作物の7割を死滅させた。総体としての村が、冬を超えて生き延びるためには、村人の一部を切り捨てるしかない。いかなる形であれ、禁忌目録に反して、ね。結果は、最後まで禁忌目録には反しなかった。春を迎える前に村の全員が餓死したよ。この実験を以て、僕らは彼らが、何があつても禁忌目録に反することはできない、と判断した」

「そこまでして人工知能にこだわる理由はあるの？多少の制限はあつても遠隔操縦で、いや、そもそも無人兵器つて物自体、ひどく歪なものに思えるけど」

「まあ、その気持ちも分からなくはないよ。僕も最初はそうだったからね。でも、冷戦が世界を変えてしまった。何万ガロンの血も油も流してでも勝てばいいところから、流血のない世界に、というところへ、ね」

「ゆえに、私の国は、イラク戦争でブッシュ政権が揺らぎ、穏健派のオバマが勝つた。その後のトランプだつて、積極的に軍事的な対外政策を推進したわけではないね。けれど、私たちの国は軍事予算への分配を止めることはできない。だからこそ、アメリカは今、無人兵器の開発に躍起になっているの。当然、こういつた人工知能にもね。だから

こそ、グレーゾーンについてでも協力を呑んで、私がいる」

「・・・納得できないけど理解はしたわ」

菊岡の後を引き継ぐ形で、七色が説明した。それに、不承不承といった体で神代博士が答える。なるほど、外部から研究者、というのとは分かるが、わざわざ海外から招へいたしたのは、アメリカ側のそのような思惑があつてのことらしい。

「でも、それってアメリカの話なんですよ？まさか、アメリカ側とコンタクトを取りやすくするために・・・!?!」

「とんでもない！その真逆、身を隠すためにこんな太平洋のど真ん中でやっているんだよ。本土の基地も研究施設も向こうさんに素通しだからね」

「じゃあ、古風な言い方をすると『お国のために』こんなことをしているわけだ。理由を聞いても?」

虹架の考察を、彼にしては珍しい大きな声で遮った菊岡はそう答える。だが、そんなと今度は行動動機が見えてこない。日本の自衛隊派遣に、いわゆる軍事行動が絡むケースというのは決して多くないからだ。少なくとも、専守防衛を掲げているうちは大勢に影響はないだろう。となれば、なぜこんなことを進めるのか。

「そう、だね。一言で言うとなんか難しいんだが・・・。自前の防衛技術基盤を生み出すため、かな」

「なるほど。確かに道理だ」

俺は即座に見抜いた。が、これは知識がないとピンとこないだろう。実際、女性陣は一樣に理解できないといった表情をした。

「俺から説明したほうがいいか？」

「そうだね、こちらとしても、君の知識レベルをある程度把握する必要がある」
「分かった。」

説明すると、だ。日本において、自前の防衛技術ってそこまで多いわけじゃあない。そもそもメーカーとしても売り込み先が自衛隊だけなんだから、売り上げとしては決して大きいとは言えないだろう。特に航空機なんぼロボロっていつても差し支えない。一応日本もしつかりかかわって開発されたF-2支援戦闘機も、アメリカとの共同開発なんて名目だが、ぶつちやけ一番肝心なところは教えてもらえなかった。それでいて、向こうはこっちの先端技術をかっさらってった、なんてのは割と有名な話だしな。まあ、こいつは技術屋というよりお上の言うことが二転三転し続けた結果、とも言われてるがな。まあとにかく、そんなこんなで、絶対数の確保や先端技術のためには輸入せざるを得ない、わけなんだが、最近導入されたF-35も安い買い物じゃあないし、高額ゆえ数も確保できない。そもそも、なんらかの要因で輸入路が途絶えればそれで終わりだ。碌な重整備拠点がないのか共食い整備が行き過ぎて機体いくつかまるまる潰してる韓

国よりかはまだマシンなんだが、足元見ても仕方ない。となれば、現状日本の国防としては、何か一つでもいいから自前で、国防の技術を生み出したいわけだ。そうして目を付けたのが、未開の地である人工知能を用いたものだった。

とまあ、ざっくり説明するところなとこなんだが。あつてるか？」

「十分だよ、ありがとう」

「君にそんな国防意識があつたなんてね、比嘉君」

「いやあ、ボクの動機なんてそんな大層なモンじゃないっす。ボクの韓国人の友人が、兵役中に派兵先で自爆テロに巻き込まれて死んじやつたんすよね。で、この研究で、戦争がなくなることではなくても、人が死ぬことだけはせめて、なんて。個人的でガキっぽい理由っす」

「一応言っておくと、私は違うわよ。その役人に雇われた、雇われホワイトハッカー、って言ったところかしら。リアルでもある意味傭兵稼業、ってわけ」

「なんていうか、永璃さんらしいなあ。あれ、でもその技術を自衛隊独自のものにしてしようとしている、ということと開発の動機が合わない気がするんだけど・・・」

「いや、菊岡もその辺わかつてるはずだ。あくまで独自技術、ってしたいだけで、独占が長続きするなんてハナから思っちゃいない。あくまで先手を打ちたいだけだ。違うか？」

虹架の考察に対して俺が言い放った直接的な表現に、菊岡は苦笑いしつつ後ろ頭を掻いた。そこで、俺たちの話を黙って聞いていた結城が、澄んだ氷を思わせる声で言い放った。

「でも、あなたたちはその御大層な理念をキリトくんに話してはいないでしょうね。そこまで聞いたうえでキリト君が協力するとは思えないもの」

「それは、なぜ？」

「あなたたちのその理念には、決定的かつ致命的に一つの観点が抜け落ちている。そのことにキリト君が気づかないはずはないし、気づいたうえで協力するとは思えない」

「ふむ、それは？」

「人工知能たちの権利よ」

結城の端的な回答に、菊岡は不可解な顔をした。

「理解できないな。確かに話していないのは事実だが、それはあくまで機会がなかったから、というだけだ。彼こそ、筋金入りのリアリストだろう？ そうであつたからこそ、SAOをクリアできたはず」

「分かつてないわね、むしろそれは真逆よ。彼にとつては、自分のいる場所こそ現実なの。仮の世界とか、仮の命だとか、そんなことは考えられないからこそ、SAOをクリアできたのよ。もしキリト君が、アンダーワールドの真の姿に気が付いたら、きつ

と激怒しているでしょうね」

「ますます理解できないな。人工智能に血肉の通った肉体はない。ならばなぜそれは仮初の命でないとと言える？」

「ストツプだ、二人とも。議論されるべき問題であることは確かだろうが、ここで論ずる必要がある問題でもないはずだ」

俺の仲裁に、二人がそろって沈黙する。いや、結城のほうが俺をにらみつけるように見ていることから、明らかに納得はしていない。まあ確かに感情ではなかなか納得できるとは話ではないだろう。

「だがな菊岡、結城の言うことも尤もだぜ。確かに肉体はないだろうが、知性という点を見れば明らかに人間と同等、あるいはそれ以上のものが生み出されているわけだ。確かに現実で血肉の通った人間が死ぬことはなくなるだろう。が、お前たちが生み出した人工智能の命に対して、『まがいもののお前たちはおとなしく従え』、なんて言ったら、今度は人工智能たちの反逆もあり得るぜ？」

「考えておこう」

俺の言葉に、菊岡は、彼にしてはいやに珍しく生真面目に答えた。と、そこで虹架が続けた。

「でも、そうなつてくるとなお見えてこないこともあるわよ。話を聞くと、実験段階では

ラーズのスタッフも少なからずフルダイブで協力しているのに、それでもなお、桐ヶ谷くん達が必要だった理由は？」

「ああ、そもそもその説明だったね。遠回りしすぎて忘れてしまっていた。

先も言った通り、アンダーワールドの住民は規律を重んじすぎるあまり、禁忌目録には違反しない。それがどれほどのものなのかは、先に説明した過負荷実験の結果から見ても明らかだ。でも、我々としては、奇妙な言い方ではあるが、法を犯してもらわなければ困るわけだ。そこで、人間のスタッフの記憶を制限してダイブさせ、全く違う刺激を与えることでどうなるか、ということをやってみた。のだが、大多数のスタッフは、アンダーワールドにて極めて内的傾向を示した。新しい風をもたらしてほしいという目的でやっているのに、これでは本末転倒だ」

「重力感覚による違和感のせいではないか、と気付くまでに時間はかからなかったわ。メンバーにはフルダイブ経験者も少なくなかったから、最初は誰しも戸惑う感覚にも馴染みがあった。そこで、仮想世界に順応しきっている人材を確保する必要がある、と気づいたんだよ」

「そこで白羽の矢が立ったのが桐ヶ谷だった、というわけか。確かに自然な流れだな。俺を送り込むわけにもいかないし、必然、仮想世界の俺を、俺本人と区別して認識できりだけの能力も必要だろうからな」

「そういうことだ。それによって得られた成果はとてつもないものだった。我々含めたリーススタッフの全員の成果を合計で合算しても到底及びつかないほどにね」

「つまり、向こうの法律に触れたユニットが現れた、と?」

「結論だけ言つてしまえばその通りつスね。彼いつも行動しているユニットの違反指数が一気に高くなつたんす。かみ砕いていえば、彼のわんぱくつぷりがほかの子に伝染していった、つて感じつスね」

「いやにリアリティをもつて想像できるな、それ。なあ結城?」

「ええ、本当にそのとおりね」

「そして、実験終了間際に、とうとうキリトくんにも最も近い少女が禁忌目録を違反したんすよ。しかも、内容は移動禁止アドレスへの侵入つていう結構重大な違反つス。ログを精査してみたら、どうやら視界内の移動禁止アドレス内で一つのユニットが死亡してるんつスよね。人殺しのためのものを作っているのに、求めていた適応性を発現したきつかけは禁忌目録より人命救助つてあたりは皮肉極まりないつスけど」

「てことは実験は成功で終了じゃないのか?」

「いえ、そういうわけじゃなかつたんす。時間加速で内部だと凄まじい速度で動いている関係で動いている関係で、観測からサーバー停止処理まで大きなラグが存在するんす。なので、観測してからサーバーを停止したときには、内部時間で二日が経過してい

ました。その二日の間に、あちらの政府に当たる公理教会は、その少女のフラクトライトに何かしらの修正を施してしまったんす」

「修正……？そんな権限与えてなかつたはずよ？」

「ええ、その通り。なんですけど、なんにせよ彼らはシステムの抜け道を見つけたらしくてですね。本来は寿命の操作くらいしかできないなかつたはずなんですけど……まあ後で生データを見せますよ。アリスの当時と今の禁忌違反係数を、ね」

「アリス……それが、その少女の名前？」

「ああ。僕たちはその偶然に驚愕したよ。なにせ、このプロジェクトの礎となった概念の正式名称と同じだったからね」

「なるほど。アーティフィシャル・レイビル・インテリジェンス、の続きがそうなつてるわけだな？」

「その通り。正確には、アーティフィシャル・レイビル・インテリジェント・サイバネーテッド・イグジスタンス。日本語で、人口高適応型知的自立存在。頭字語でアリス。僕たちの目的は、人口のフラクトライトをアリスに変化させることにある。僕たちはこれを“アリス化”と呼んでいる。」

——ようこそ、プロジェクト・アリシゼーションへ——

いつもの煙に巻く口調と、謎めいた笑みのまま、菊岡は歓迎の言葉を告げた。

81. 剣術学院

今日と変わらぬ明日。明日と変わらぬ明後日。それを守るため、俺はいまこうしている。それが数百年と続き、何代目かの俺にその役目を引き継ぐ。それが延々と続き、最後の過負荷実験を潜り抜けさせる。それが俺の役目である以上、それを全うするだけだ。いかにこの世界がゆがんでいようと、この世界が終わるその瞬間まで、俺のできる範囲で秩序を維持する。それが俺の存在意義だ。それが、おそらくいつまでも続くと思っていた。

「キリト初等練士、ただいま帰着いたしました！」

「・・・刻限から38分ほど遅れているようですが」

「指導役・セルルト上級修剣士より、指導時間の延長を指示されましたので」

それも、この少年——キリトとユーゾオが入ってくるまでは、の話だが。それに対し、寮監であるアズリカがため息交じりに答える。

「それならば仕方ない、のですがね。その言葉を門限破りの免罪符だと思っただけではないか、という疑いを、私はついぞ晴らすことができませんでしたよ」

「まあまあ、その辺にしておきなさんな。セルルトとしても、自分に合って、なおかつ骨

のある稽古相手なんてそうそういたもんじゃないから、少しでも多く立ち会っておきた
いんだらうよ」

「・・・そういうことにしておきます。あと17分で食事の時間ですから、遅れないよう
に。いいですね」

「はい！」

そういつて、キリトは俺たちに軽く一礼して小走りで行って行く。その背中を目で追
いかけながら、俺はアズリカに話しかけた。

「セルルトの剣筋を見てきた俺だからわかる。あいつの剣を相手するのであれば、生半
可な相手では意味がない。より上を目指す稽古相手とすれば、あいつと同じ流派か、俺
か、あとはキリトかユージオくらいしかいないだらうよ」

「あなたがそういうのならばそうなのでしようが、ついで理由を聞いたことがあります
んね？」

「凡夫には言っても分らんだらうが、アズリカになら通じるか。一言で言ってしまうば、
『実戦向きか否か』、だ。大技を当てるというのは確かに見栄えがいいが、当たらなけ
ればどうということはないわけだ。ならば、小技で攻めていった方が実際の戦いだと生
きる。大技を繰り出すのはどちらかというとな剣舞のほう映える。セルルトの剣術は
より実戦向きの、鋭い太刀筋で攻めるもの。ならば、己の剣を高めるのには、リーバン

テインのような正統派の剣術ではなく、キリトやユージオのような、良くも悪くも邪道で実戦向きな剣術のほうがいいだろうよ」

「分かるようで分かりませんね。私ですらそうなのですから、あなたの言う通り、凡夫では言ったところで通じないでしょうね」

「だろ?」

軽く笑う。セルルトは、現在のキリトの指導役で、かつて俺の弟子にもなっていた女剣士だ。この世界の正統派剣術は、アバンラシュ——この世界で言う天山烈波てんざんれつぱを代表とする、大技の一撃で仕留める剣術だ。対して、セルルトの剣術は、どちらかというとな俺に近い、鋭い技の一撃を重ねて相手を仕留める剣術だ。だからこそ、俺は当時初等練士であつた彼女を側付きにして指導した。弟子にした、とはそういうことだ。

「それはそれとして。明日だったよな、あいつの剣が出来上がるの」

「ああ、そういえばそうでしたね。生半可な剣じゃなければいいのですが」

「あいつの剣だ、よほどのなまくらじゃない限りはそこの剣士と対等に渡り合うだろうよ。それだけの力がある」

「あなたは随分とキリトを買っているのですね?」

「それもそうさね。セルルトのためを思って指名しなかったが、もしセルルトが側付きに任命していなければ間違いなく俺がしている。ま、あれの目がそこまで節穴だとは

思っていないがね」

「それについては同感です。私は今でも、あの剣術大会のことを覚えていますよ」

そういつて遠い目をするアズリカの脳裏には、いまだにあの剣術大会——キリトたちの入学を決めた試合が焼き付いているのだろう。かくいう俺もそのうちの一人だ。型の最短時間を設定していなかったことを逆手に取った素早い型の披露に、相手の奥義を真つ向から叩き伏せた試合。どれもなかなかお目にかかれなかったものだ。あれほど記憶に残っている剣術大会は、100年以上前に俺が「血みどろ」とすら記録した一件以来かもしれない。

「そういえば、どんな剣かとは聞いてないな」

「なんでも、木の枝を削って作った剣、だとか」

「木の枝……まさかあの木か？」

「ええ、あの木です」

「……どうやって取ってきたんだそんなの」

「切り倒した木からとったとか。ほら、ユージオ初等練士の持ってきた剣で」

「あ……確かにあれなら切り落とせるな」

キリトの相棒であるユージオが持っていた剣、銘は青薔薇の剣、だったか。どこから持ってきたのかは知らないが、あれは神器に相当する超強力な剣だ。あれを使えば、切

れないものなどあんまりないだろう。

「と、なると素材自体がたんまりと神聖力を蓄えていて、なおかつそれを、削り出しと言
う形で出来るだけ損失なしで作るわけか。はてさてどんな怪物が出来上がることやら」
「間違いなく言えるのは、この学園でその剣を振えるのは、私たちを除けばおそらく2人
しかいない、ということですね」

「間違いはない」

そうしてくつくつと笑う。全く、明日が楽しみだ。

その翌日、俺とアズリカが寮関係の仕事をしていると、キリトが寮監室に入ってきた。

「失礼します」

「なんとなく想像はできますが、一応用件を聞きましよう、キリト初等練士」

「私物の剣の持ち込み許可をいただきにまいりました」

それに答え、俺が手元にある用紙と筆記具を渡した。

「ほい、こいつに必要事項を書きな。後で提出でもいいけど、簡単だからここで書いてい
きな」

そういわれ、キリトは近くの机を使って書き出す。途中でステイシアの窓を開いてプ
ライオリティを確認し、すべて書き上げると俺に返した。その書類を見て、俺は内心で

驚いた。

「よし、これで許可は問題ない。一応言っておくが、剣の使用を認めるのは個人的な稽古のみだ。実戦や模擬戦で使用することを特例として許可する場合もあるが、それには立ち合い相手と見届け人、そして俺かアズリカの許可が必要だ。普段の稽古とかは許可を求めても許しを与えないつもりだからそのつもりで。いいな？」

「はい」

「それはそれとして、俺からの助言だ。その剣、できるだけ帯剣するなどして触れておくこと。毎日触ってやれ。手入れでも素振りでもいいから、とにかく毎日、できるだけ長く、丁寧に。もしお前がそれを怠らなかつたら、お前とユージオ修練士が卒業するとき、その意味を教えよう」

「分かりました」

「俺からはそれだけだ。下がっていいぞ」

それだけ言うのと、キリトは騎士礼をして部屋を後にした。そのあと、アズリカが俺に向かって疑問の目を向けた。

「それだけの剣だつてことだよ。はい」

そういつて俺はアズリカに、キリトの剣の許可証を渡した。一通り目にした瞬間に、アズリカの表情が驚愕に変わる。

「プライオリティ46なんて数値は整合騎士たちの神器に匹敵する。それすなわち、同じ域まで達する可能性があるということだ」

「成長した彼らが脅威になる可能性は？」

「否定はせん。が、それは決して悪いものでもない。戦力には変わりないし、凝り固まった秩序を一度壊すことを彼らを選択するというのであれば、方向によつてはそれもやぶさかではないというものだ」

「あなたらしくない発言ですね」

「我ながらそう思うよ。だがね、流星に最高司祭殿の天下が長すぎる。いい加減謀反の一つや二つ、起きてもおかしくないというものだ」

「もう・・・数百年にもなるのでしたね。確かにありうる話ではあります。が、あなたはそれでよいのですか？」

「俺の立場を鑑みるのであればよくないだろう。なにせ、謀反を起こそう、なんて戦力を育てていることになるわけだしな。だがもしも彼らがそれを望むというのであれば、一考の余地はある、というだけさね」

俺の言葉に、アズリカは驚き続きだつたようだ。それもそうだろう。

「まあ、こんなことを、他ならぬ俺が言つていいのか、というのは、確かに否定はせんがね」

「それはそうですね。ですが、真意は理解しました」
「とりあえずはそれでいいよ」

アズリカが理解のいい相手で助かった。これで説明が延々とループしたらと少し不安ではあったのだ。

と、そんなことを話してしてから少し後。

「で、いきなり何してんだお前は」

「いやー、ほら、剣が届いたばかりだと振りたくなくなるじゃないですか」

「気持ちはわからんではないがな」

なんと自分の剣を持つてから数刻と経たないうちにいきなり騒動の種を作ったらしい。その相手が主席のリーバンテインで、譲歩の条件がキリトの新しい剣を使った上での決闘、とのことだった。そして、その許可を貰いに、二人で寮監室に来たとのことだった。

「で、リーバンテイン。どうするつもりだ？」

「いつも通り、ではいけないのですか？」

「推奨はできんぞ。立ち合いの取り決めは当人間の合意によってのみ定められるから、外野が口を出すことでもないが」

「え、つと……?」

「私は個人的な試合では寸止めはしないことにしている。太刀筋が鈍るからな。が、これは特級修練士殿が仰るように、人間での合意によってのみ定められる、と禁忌目録にもある。どうするかはキリト修練士、君にゆだねよう」

「方法はお任せします。俺は懲罰を受ける立場ですから」

「そういうことなら俺が立ち会う。俺なら応急処置の神聖術も使えるしな。ただし、行き過ぎたら止めるから、そのつもりで」

「わかりました」

そういうと、俺たち三人は決闘の舞台である大修練場へと向かった。

大修練場に行くと、セルルトとユージオがいた。何かキリトと話していた。大方、セルルトが何かしらの助言を与えていたのだろう。リーバンテインの剣をもつとも研究していた剣士の一人であるセルルトの言葉、果たしてキリトにはどう届いたか。それを考えていると、キリトがリーバンテインに向きかえった。

「二人とも、準備はいいな」

双方の同意を確認する。それをみて、俺は手を挙げた。

「それでは、はじめー!」

俺の号令で、リーバンテインが剣を掲げる。一発目からノルキア流の秘奥義、てんざんれつぱ天山烈波で決めに来た。それに対するキリトはどうするか。

（あいつの剣はそうそう簡単には止められない。あいつの得意とするヴォーパル・ストライクならあるいは。あの剣ならおそらく発動可能だが、気づいては・・・いないだろうな）

この世界の秘奥義、つまるところソードスキルは、ある程度剣の優先度の高さで決まる。つまり、訓練用の剣程度の優先度では、こういつてはあれだがシケた秘奥義しか発動できない。となると、キリトの最大打点で打ち合うしかない。キリトほどの剣士ならば、普通ならば互角か、ともすれば上回るだろう。だが、それはあくまで普通ならのお話。

両者構えが定まり、リーバンテインをキリトが迎え撃つ格好。キリトが選択したのはおそらくバーチカル・スクエアだが、あいつの天山烈波相手だといささか火力不足感が否めない。が、相手の一撃を、キリトは二撃を以てある程度相殺した、三撃目で完全に罅迫り合いになった。一瞬の拮抗、だがそれはすぐリーバンテイン側に向く。リーバンテインの持つ心意、剣術指南の跡取りとしての覚悟が、その力を増幅した結果だ。キリトの剣に秘奥義の発動中止警告である光の明滅が発生した。その刹那、キリトの剣が間違ひなく伸びた。比喩でも何でも無い、剣がひとりでに大きくなったのだ。一回り大き

くなつた剣を、キリトが両手持ちし、何とか押し返さんとする。が、その二人の心意に耐え兼ね、二つの剣の接点で何かがはじけ、二人とも後ろに下がる。最後の四撃目は、間合いが離れた分だけリーバンティンをかすめるにとどめた。

「そこまで！」

俺の号令でリーバンティンがまず体勢を通常のものに直し、一言告げる。

「これ以上は本格的に殺し合いになる。さつきも言ったがそこまでいったら庇えんぞ」「それがあなたの裁定ならば。」

これにてキリト練士の懲罰は終了する。ゆめ、今後は誰かに泥を跳ね飛ばすことはないことだ」

そういつて、リーバンティンは先ほどの鬨気が嘘のように引つ込んだ。目配せしてセルルトにキリトの手助けを頼もうかと思つたが、すでにキリトのもとに駆け寄つてるところを見るに不要な心配のようだ。それを見てから、俺はリーバンティンの背に声をかける。

「リーバンティン、話がある。場所を変えよう」

「いえ、ここで結構です。要件も大体見当がつきます」

「そうか。ならここで済ませよう。」

で、キリト修練士と立ち会いたいと思つたのはなぜだ？」

「それこそ、あなたなら見当がついているのでは？私と真つ向から立ち合い、私の天山烈波を真正面から打ち砕いたあなたなら」

「見当がつかないから聞いている。それと、あれはいつもやっていることだ。主席の鼻つ柱をへし折ってしまえば、力関係が定まるからな。特級修練士が誰をも認める強さを持つている、という事実こそが秩序を守る一助となる。それゆえに、俺は主席であるお前、リーバンティンを打ち倒す必要があった」

「私がアズリカ姉さんに頭が上がらないように、それを全生徒に対して行っているわけですか」

「そういうことだ。こういうのはできるだけ単純な方が効果を発揮しやすいからな」
「なるほど、そちらは理解しました。」

それで、キリト修練士と立ち会いたかった理由、ですよ。それは簡単です。あなたが認めたセルルトが見初めた剣筋というのをずっと見てみたかった、それだけですよ」
「本当にそれだけか？」

「本当にそれだけです。それに、歩く戦術総覧とすら謳われるセルルト流の直系が見初めた相手が、まともによればあの程度の末席にとどまるとは思えない。ということとは、なにかしらの理由でまともには打ち合っていない。単純に目立ちたくないから手を抜いているのか、自身の剣や出自によるものか、どちらかを判断するのは難しいですからね」

「それなら、上級修練士として、普通に立ち合いをすればよかつたではないか」

「それではいけないのです。それだけでは、結局彼は爪を隠すでしょう。それなら、もつと強力に、確実に、彼が全力を出さざるを得ない舞台に引きずり出す必要があつた。聞けば、キリト修練士は今日愛剣が届くとのこと。ならば、その剣を一度素振りしてみた、というのは剣士の性でしょう。ならばその素振りをしている際、泥が飛び散るくらいのは十二分にありうるでしょう。素振りをできるような場所は限られますしね。それならば、その近くを通りがかり、なんらかしかの懲罰として愛剣を用いた立ち合いを命ずればいい。そのような場を設ければ、彼も本気を出さざるを得ないはず。もし万が一手を抜いていると判断すれば、もう一度立ち合いを命じるつもりでした」

「なるほどな、そういうことだったか。それにしても、お前はセルルトを随分と買っているのだな」

「当然です。ずっと私に次ぐ次席ですし、彼女の知識は侮れない。情報がないと死ぬのが立ち合いであり戦場というもの。私を倒せるとしたら彼女をおいて他にいないでしょう」

「なるほど。卒業検定、楽しみにしているぞ」

「はい、ありがとうございます」

それだけ言つて、その場は解散となつた。俺は変える道すがら、セルルトを側付きと

して日を思い返していた。

8.2. 弟子の成長

この世界で、俺に調停者という役目を与えられたというのは前任者の日記で分かった。どうも俺の前にも俺のような存在がいたらしく、前任が律義に日記をつけていたよなのだ。日記というより、日誌に近いようなものであったが。そこで、前任者の記録から、この世界の真理の一端に触れていた。というのも、どうやらこの世界には法を犯すという概念すらないか、そういつた概念を持つと何らかの抑止力が働くらしい。そのせいで、この世界では殺人はおろか、盗みといった小さな犯罪すら起きない。それゆえに、俺は剣術学院の特等修練士として、若い剣士たちを導くことで治安を維持する道を選んだ。日誌にはそう記してあった。俺の剣はどちらかといえば対人戦に向いたもの。対人剣術指南という道はある種俺には向いていると判断したのでだろう。

だが、そのあとの日誌にはままならぬ日々が綴られていた。というのも、この世界の剣技は一撃を重視したもので、当てれば致命傷になりえるが、それはあくまで相手の動きや心理を読み、必殺の一撃を見舞う必要があるの上級者向けの剣技だ。俺は「斬撃を置く」などと表現するが、それは相手の動きを読んで、その動く先に置くように斬撃を放つというもので、一朝一夕に行えるものではない。少なくとも剣術学院で教えるよ

うな剣術ではないことは確かだろう。だが、この世界の剣術がそれに基づくものである以上、それに則るしかないとも結論付けていた。

だからこそ、セルルトの剣には驚きを隠せなかつた。確かに基盤となつてゐるのは、この世界の基準の剣術である一撃を重んじるもの。だが、それを実戦的に昇華させるため、様々な方法をとつてゐる。読み、重さより鋭さを求めた一撃、鞭などの搦手。どれをとつても、この世界では異質とも言えるほどの戦闘技術。それが原因で家の地位を落とすことになつた、とは後に本人から聞いた。それでこそ泰平の世というものである。だが、だからこそ、その灯火を消してはならぬと決心した。俺はその思いに従い、彼女を側付きにした。目的はただ一つ、彼女の剣を守るため。ノルキア流のやり方では、彼女の剣があらぬ方へ歪んでしまうのではないか。俺が最も恐れたのはそこだつた。最初はセルルトも訝しんでいた。実際に、面と向かつて尋ねられたこともあつた。

「特等修練士、質問があります」

「ん、どうした？」

「なぜ、私を側付きにしたのです。成績ならリーバンテインの方が上でしょう。リーバンテインならともかく、なぜ私なのですか」

「うーん、上手く説明するのは難しいが、そうさな。

一言で言えば、俺から一本を取れる可能性の高い剣が、お前の剣だと感じた。そんな

ところか」

「ますますわかりませんよ。それならば余計リーバンテインではないのですか？」

「はつきりと断言しよう。並の相手ならともかく、俺やアズリカ相手なら、その回答は明らかに否だ。お前の剣にはそれだけの可能性がある。リーバンテインごとき、成長したお前の敵ではなくなるだろうよ。それにもかかわらず、こんなところで腐る可能性があるのであれば、それを可能な限り排するのが俺たちの役目だ。現状、この学院でお前の剣を伸ばすことができるのは、俺とアズリカを置いて他にいないだろうよ。そして、俺とアズリカなら、俺の方がより適任だった、それだけの話だ」

「それだけの価値が私の剣に？」

「当然だ。無価値なものに目をかけるほど暇ではない。自信を持って、セルルト。お前の剣は、技術は、そういう価値のあるものだ」

「・・・はいー」

思えばあの日からだ、セルルトの目の色が変わったのは。何としてでもリーバンテインを打ち倒す。そのためだけに、彼女は剣技の鋭さを磨いた。リーバンテインの剣を見切ることに注力した。幾たびも失敗して、研究して、自身の牙を磨いた。強きものをつか打ち倒さんと、己の牙の鋭さを知らしめんと。それは、定期的に稽古をつけていた俺が、おそらく最も知っている。事実、次席という位置にいるとは思えないほど、セ

ルルトの剣は鋭くなっていった。

そうして、俺の最後の稽古の日。セルルトは自身の集大成の剣を見せた。その剣の冴えは凄まじく、長年の研鑽を積んだ俺ですら驚いたものだ。実戦でこの剣技が冴え渡るのであれば、敵の首のひとつふたつ持つてきても何も不思議ではない。秘奥義を禁止した試合であれば、間違いなく一番強いのはセルルトだと確信を持つて言い切れる。それだけの強さが彼女にはあった。無論、いくらセルルトが強くなったと言っても、俺から一本取れるほどではない。最後まで一本を取ったのは俺の方だった。

「やはり強いですね」

「当たり前だ。流石にまだ負けられんよ」

最後の稽古でも、最後の最後までセルルトは俺から一本取らんと挑んできた。口調だけならば余裕があるように思える人もいるだろうが、まったくもってそんなことはない。最後のほうは本気を出して叩き潰しにかかろうかと思っただけだ。さすがに大人げ無いと思って踏みとどまったが、それほどの実力であるということに他ならない。そもそも、今の俺にそう思わしめる相手自体がそうそういないのだ。

「だが、お前は十分強くなった。リーバンティンにすら、俺にここまでさせないだろう
さ」

「ですが、私はまだリーバンティンには勝っていません」

「それはただ単純に相性の問題だろうさ。だが、入学当初の、僅かだが確実に及ばないといった感触はない。十分勝ち目はある。あとは、お前がお前を信じて、その剣を磨けば十分勝てる」

「あなたがそういうのであれば」

「俺を信じるんじゃない、お前がお前自身を信じて技を磨くんだ。お前のその技が、お前自身を高みへ上り詰めさせるだろう。だから、お前は自身とその技を磨き続ける。俺から言うことはこれ以上ない。それだけで十分だ」

「剣技の磨き方が分からなくなったときは、また聞きに行ってもいいですか？」

「無論だ。だが、俺はそんな日は来ないと思っている。励めよ、セルルト。そして忘れるな。お前は、俺が見込んだ剣士だ。それだけの才を、こんなところで腐らせるのはあまりにも惜しい。圧をかけるようになってしまいが、お前ならやれると信じている」

「はい。ありがとうございます」

すっかりと騎士礼をしてから去るセルルトの背を、俺はただ見送った。その凜とした背は、いまだに、鮮明に覚えている。その背に感じた俺の期待は、想像を超える形で乗り越えつつある。

最高の幸運は側付きにキリトを迎えることであろう。リーバンテインの剣は、淀みのない、あっぱれ見事、と言える一撃を誇るが、それゆえに側付きを不要とした。これに

ついて俺は、おそらく他人の剣を混ぜるのを嫌い、己で己自信を高める道を選んだのだと踏んでいる。実際、あいつの剣はそういう剣だ。下手に他の知見を取り入れるとかえって鈍る、というのは簡単に予想できた。対して、セルルトは側付きにキリトを指名し、他人の剣を取り込み高める道を選んだ。さらに、三席のバルトもユージオを指名したのは、俺の中でうれい誤算以外の何物でもなかった。セルルトだけでなく、その屈強な肉体に信を置くバルトが、キリト同様、先入観にとらわれない戦術知識を持つユージオを側付きに指名した、ということは、力だけでなく技も重要であると認識した、と考えている。実際、以前のバルトの剣は、こういつてはなんだが力押しといった印象が強かった。が、ユージオを側付きとして剣を交えるようになってから、バルトの剣には、剛健の中に技巧が混じるようになった。この二人のおかげで、首席争いはおろか、三席争いまでもが他を寄せ付けないほどの激しい争いになっている。もしキリトやユージオの剣筋がもっと末代まで引き継がれていくのであれば、それはこの学院生の練度を飛躍的に高めることになるだろう。少なくとも俺はそう確信している。

「物思いに耽るのは構いませんが、もう4分手が止まっていますよ」

「ああ、すまない。片付ける」

「全く、リーバンテインのやり方ですが、あなたが認めたというのも驚きですよ」

「まあな。本来は止めるべきだろうし。でも、それ以上に見てみたかったんだ」

「それは、どちらの剣を？」

「剣というか、対決そのものを、だな。普通じゃありえない取り合わせなのは間違い無いだろう？ 今後一度としてあるかわからない取り合わせだ。どうなるか見てみたかったんだ。安心しろ、最悪にはなりやしない。俺がいた以上、な」

「そこは安心していきます。あなたの腕は確かですから」

「嬉しいこと言ってくれるじゃあないの」

「客観的な事実です。あなたを上回る使い手などそうそういない。私ですらあなたには届かないでしょう」

「その年で心意を習得しておいてよく言うよ」

「息をするように心意を使いこなすあなたに言われても嫌味にしか聞こえませんか」

「本気でほめてるんだよ。お前さんとは生きてる時間が違うんだから。もしそのままの速度で成長を続けて、俺と同じ年まで来たら、間違いなく最強の称号はお前のものになるだろうよ」

「彼女のことを考慮しても、ですか？」

「無論」

「ならば精進します」

「おう、励め励め」

雑談しつつも手は止めない。いつも通りの夜だった。

変わらぬ日々を過ごしているうちに、卒業検定の日となった。卒業検定の試合は、いわゆる勝ち抜きで予選が行われ、成績優秀者による勝ち抜き戦が行われる形態で行われる。決勝は想像した通りの対戦となった。すなわち、セルルトとリーバンテインだ。俺は立ち合いの審判として、監査としてアズリカが受け持つ形で、最後の大一番となった。立ち合いの開始位置に両者が付く。それを確認してから、俺は片手をあげて宣言をした。

「それでは、はじめー！」

まず動いたのはリーバンテインだった。ゆっくりと、自身の剣を上段に構える。間違いない、天山烈波だ。幾度となく彼の敵を叩き斬った、彼への必殺。それに対し、セルルトは脇構え。こちらも俺が幾度となく見てきた、セルルト流の秘奥義、リシカ「輪渦」。秘奥義同士の撃ち合い、それに、どちらも最高精度の一級品。こういう結末になることは想像できてはいた。が、これほど即座に撃ち合いになるとは想定していなかった。

まず動いたのはリーバンテイン。その剛剣を以て、セルルトを叩き斬らんと迫る。その剛剣に対しまったく怯まず、セルルトは絶妙とすら言えるタイミングで輪渦を繰り出した。的確にとらえた攻撃は、それによって完全に相殺され、鏢迫り合いとなった。そ

の瞬間、セルルトから弾かれるようにリーバンティンが間合いを取った。いや、実際、セルルトが弾いたのだ。彼女の剣術であるセルルト流は、柔よく剛を制す、という言葉通りのものだが、数少ない剛の技。確か、止水、といったか。しかし、超至近距離で、全身の筋肉を使って相手を弾く止水は、使った直後に一瞬だけ隙が生まれる。リーバンティンもそこは承知しているはずだ。しかし、リーバンティンが反撃することはなかった。

カアン、と、静かな闘技場に、乾いた金属の落ちる音がした。直後、セルルトが剣をリーバンティンの喉元に突き付けた。

「そこまで！勝者、ソルテイリーナ・セルルト！」

迷いなく宣言する。その言葉に、会場に詰め掛けた学生たちから歓声が上がると、その声を背に、セルルトは剣をおさめ、たまたま傍に落ちた剣を拾ってリーバンティンに返した。剣を受け取り鞘に収めると、リーバンティンは笑みを浮かべて握手を求めた。それに対し、セルルトも微笑みと握手で応えた。その様に、俺の宣言で沸き上がった歓声がさらに高まった。

「二人とも、見事な立ち合いであった。して、リーバンティン。いきなり勝負に出たな？」

「真つ向から秘奥義なしで打ち合って勝てる相手ではありません。彼女の剣はそう簡単

に崩せるものではない。であれば、初手で叩き伏せる他ない、と判断したのですが……いやはや見事に止められました」

「剣は一番切れるところがある。裏を返せば、そこを外して強打すれば、力の差があれど押し返せると踏んだんだ。押しきれずに相殺止まりになってしまったのは思わぬ誤算であつたがな」

「で、一瞬動きが止まった瞬間に、止水に切り替えた。一瞬のけぞつた瞬間を見逃さず、瞬時に鞭を抜きざま一閃、リーバンテインの剣を弾き飛ばした。そうだな？」

俺の言葉に、セルルトが頷く。なるほど驚くべき早業だ。

「止められるか、剣を弾くことができるだろうと見込んでいましたが、万が一できなかつた場合の策がうまくいってよかつたです」

「とはいえ、剣の幅なんてせいぜい言つて十数センチといったところだろう。的確に鞭を当てたのは卿けいの技量あつてのものだ。主席の座にふさわしいものであると思う」

「そう言つてもらえてうれしいよ、リーバンテイン」

「だが、その剣筋、覚えたぞ。次は私が勝つ」

「何を言うか。次も私が勝つ」

そんな若い二人のやりとりに、はたから見えてほほえましさとうれしさが混ざつた感情を抱いた。これほどまでの人材を送り出せることが、どこか誇らしく思えた瞬間で

あ
つ
た。
。

83. 調停者として

それからしばらく時は経ち、キリトたちもまた側付きを抱える立場となっていた。側付きとして選ばれたのは、確かアラベルとシュトリーネンだったか。あの2人なら、まだ腐っていない。2人とも師に似て、ちゃんとした子を選んだらしい、というのはいくぶん分かった。まだまだ剣技としては未熟だが、そこは前年の三席とキリト、ユージオが特殊すぎる故であろう。この5人と他を比べるのは流石に可哀想だ。だが、キリトの剣はセルルトの流れを汲んではいるものの、どちらかといえば一撃を重んじるもので、ユージオもまた然りだ。全く相容れないというわけではないだろう。その流れは継承されるであろうことはまず間違いない。こちらは朗報だった。

無論、朗報ばかりとはいかない。主席であるアンティノスとジーゼックは典型的な小物だ。真正面からキリトかユージオと手加減なしで打ち合えば、アンティノスが負けることは明白だ。キリトの剣は殺人剣に近いもので、本気を出すということはすなわち相手を斬り殺す危険が伴うということ。キリトは悪目立ちしたくないということ以上に、その恐ろしさを知っているからこそ実力を見せていないだけだ。だが、当の本人はこれに気が付いていない。そして、貴族という立場を以って平民であるキリトをことあるご

とに見下し、侮蔑すらする。俺の目の前でやったときは何度か諫めたのだが、全く聞いていないらしい。どうやらあいつにとって、俺はただの寮監であり、貴族である自分より下であるとなみなされているようだ。いつも通り徹底的とも言えるほどに叩いた故、剣技では敵わぬと見られていることは分かるが、それ以上でもそれ以下でもない、というのが2人の認識だろう。となれば、俺やアズリカの言葉には耳を貸すまい。さらに、ジーゼックが指名した側付きは、下等貴族の令嬢であるシエスキ。何もなければいいが、とは思うが、何もないと考えるのは些か樂觀が過ぎるだろうとも思っている。かといって、シエスキが何を言ったところで白を切るだろうし、そうなればそれ以上の介入も難しい。祈る他ないというのがただ菌痒かった。

主席と次席の二人も懸念事項ではあったが、剣術の指南役としてはユージオの稽古も懸念事項ではあった。彼の剣術の才は目を見張るものがある。ともすれば、キリトをも凌駕する才の持ち主であろう。だがそれゆえに、自身の感覚に頼りすぎた剣術になりかねない。ゆえに、彼に必要なのは同格あるいは格上との場数による経験だ。その点はキリトも同様なのだが、キリトはセルトという極上の師に恵まれた。彼女との鍛錬を振り返り、空想の中で彼女と手合わせをする。それだけでも十二分だといえる。その技術は、間違いなく側付きであるアラベルに継承されるだろう。ゆえに、ユージオとは何度か手合わせを申し込んでいた。相手が断る理由もない、と踏んだうえで、というのは、我

ながら少々悪辣が過ぎるとは思うが、間違いなく彼にとつても得るものはある。現に、手合わせをするたびに、まるで若竹が水を吸い背を伸ばすがごとく、彼の剣術は洗練されていった。

対する主席と次席は、良くも悪くもこの世界の道場剣術通りというか、予想の範疇を全くでない範囲での成長をしていた。技を磨くわけもなく、相手の防御を、己が下民に負けるわけがないという自尊心を上乗せしてたたき切るといふものは、確かに格下相手には有効であろう。が、格上相手にはどうあがいても通用しない。もし仮に、リーバンテインが同学年にいたら、間違いなくたたき伏せられる路傍の石となつていよう。俺からすれば、あの二人が主席と次席になれたのは、キリトとユージオが爪を隠しているというこのみならず、あの二人以上の身分が同学年にいない、というだけだろうと踏んでいる。

そんな折、俺の耳に気になる話が飛び込んできた。なんでも、ジーゼックが側付きであるシエスキに嫌がらせをしているらしい。シエスキにはアズリカが、ジーゼックと、その同室のアンティノスには俺が聞き込みをした。シエスキのほうからはそれを肯定する発言がいくつか聞き出せたが、それを基にしたジーゼックとアンティノスへの追及ははつきり言つて何の成果も得られなかった。しいて言うとな、俺の長年の経験から、嘘八百もいいところな白を切つていただけ、というのはわかるのだが、それだけだ。あく

まで俺の経験に基づくものであり、きちんとした証拠がないのが痛手だった。そして、それを残す手段もないと来た。近々何か起こる。そんな不穏な直感だけが、その時はあった。

そんな折、寮監室に訪問者が来た。一応門限はあるが、緊急事態にはそれを破って俺やアズリカに連絡するのは許可されている。

「すみません、特等修練士」

「シエスキか。どうした？」

「申し訳ないですが、緊急なので道すがら事情を説明したいのですが、よろしいですか？」

「・・・了解」

嫌な予感がとうとう的中したか。俺の本音はそれだった。すぐに寮監室に鍵をかけ、即座に向かう。道すがら、俺はシエスキから事情を聞くことにした。

「で、事情とは？」

「私は側付きであるジーゼック上級修練士の側付きですが、最近、夜遅くまで付き合うことが増えてきているのはご存じですか？」

「アズリカから聞いている。少々度が過ぎるから、ジーゼックには俺から注意をしたが、相手が聞く耳を持たなかったな。それが関連しているのか？」

「はい。それを同室のティーゼとロニエに打ち明けたら、二人とも憤慨して抗議に行くといつてきかなくて・・・待ってても戻ってこなくて・・・それをユージオ修練士に打ち明けたら、彼も飛び出して行ってしまつて」

「つまり、案内しているのはジーゼックとアンティノスの部屋。そうだな？」

「はい」

「なら、このまままっすぐ自分の部屋へ戻るんだ。明日の朝、顛末を説明する。これは特級修練士としての命令だ。いいな？」

「わかりました。すみません、ご迷惑をおかけして」

「そのための俺たちだ、気にするな。ほら、わかつたら駆け足！」

俺の号令で、シエスキは駆け足で去っていく。行先は見えた。なら、ここからは全速力だ。風素を利用し、先ほどとはくらべものにもならない速度で走る。正直、特級修練士としての命令権は使いたくなかったが、仕方あるまい。俺には超法規的行為を取る人間として、最悪を想定する必要がある。

そうして走ると、当のジーゼックに行き会った。その腕は、半ばから切り落とされていた。

「その腕はどうしたんだ、ジーゼック」

「と、特級修練士殿！これは、あの下民が！私の腕を切り落として、アンティノス殿の命

をもー。」

「お前のいう下民、というのにはキリトとユージオだな？あいつらも理性なき獣ではないのだから、何か事情があるんだらう。話せ」

「しかし、これは貴族裁定権の——」

「聞こえなかったか？話せ」

「ここ数十年は使っていない、ドスの効いた命令。当然、ジーゼックになど聞いたこととはないだろう。」

「な、生意気にも私の側付きへの扱いがなっていない、貴族の誇りなどと抜かした下等貴族に懲罰を下したのに憤慨して禁忌目録に違反して私の腕を切り落としたのです！それに、あの黒ずくめの下民はライオス殿を斬り殺したのです！」

「その懲罰の内容とは？」

「奴らは立場をわきまえず、我らの誇りをけがしたのです——」

「能書きなどどうでもいい。内容は何だ、と聞いている」

「奴らの純潔を奪ってやったのです！穢された誇りは、相手の純潔を——」

「わかった。もういい」

「しかし、彼女らは——」

「これより、この世界の調停者が一人として、貴公に裁きを下す。立場をわきまえろ、た

かが爵位持ちごときが」

まるで地の底から絞り出したような俺のセリフに、ジーゼックの顔が青ざめる。どうやらようやく、己がどこかで致命的な間違いをした、ということに気が付いたらしい。

「我、ロータスの名を以つて、ウンベール・ジーゼックに裁きを下す」

その宣告とともに、俺は右手を上げる。その手には反身の、短剣というには少し大きい程度の剣が握られていた。

「貴様の悪行、素行、度し難し。よつて、貴様の天命のすべてを以つて裁きとする」

「——え?」

頓狂な声を上げるジーゼックに、俺は迷いなく短剣を振り下ろした。ひと振り目は、致命傷ではあるものの即死はしない程度にとどめる。

「なぜです、なぜなのです特等修練士!こんなことをしては禁忌目録に——!」

「違反などない。宣言したはずだ、この身はこの世界の調停者が一人であると。よもやそれを理解する能力も、人の上に立つ者の矜持とともに腐り果てたか」

「そこそ理解できません!私が誇りを失っているなど——!」

「それは誇りとは言わん。勘違いも甚だしい、ただの自尊心だ。して、最期の言葉はそれでいいか?」

首筋に刃を当てる。

「ならば最後に教えてください、特等修練士殿。

——私は、どうあるべきだったのでしょうか」

「それを語るには、あまりに時間が過ぎすぎる。だが、一言でいうのならば、そうさな。

——彼女らの言葉を、誇りを穢す言葉としてでなく、侮蔑することなく、己の在り方を見直す。それができる生き方をしていれば、少なくとも、これよりはよほどまっとうな最期を迎えられたらろうよ」

それだけ言うと、俺は刃を滑らせた。ごんと、と、首の落ちる音がする。その体に向かつて、俺は手をかざした。一瞬青白い炎がともし、後にはそこに誰かがいたという痕跡すらもなかったことになった。それを確認すると、俺はジーゼックたちの部屋へ歩を進めた。

ジーゼックの部屋は、さながらこの世界のものとは思えないような地獄が広がっていた。そもそも、入ってすぐの部屋には何やら香が焚かれていた。効能はわからないが、どうせろくでもないものなのだろう。寝室には、茫然自失となったシュトリーネンとアラベル。本人の意識があるのかすら定かではない。寝台の敷布には、斬ったものとは別であろう血痕があり、床にはアンティノスが転がっていた。どうやら、先ほどのジーゼックの話はほとんどすべて真実だったらしい。——真実だと思いたくなかったものまで真実であるあたりが残酷、といったところか。

俺を呼び止めようとしたユージオを手で止める。二人の令嬢に歩み寄りつつ、俺は二人に背を向けたまま宣言した。

「ここから先、俺の為すことに対して箝口令を敷く。これは特級修練士としての命令である」

返答を待たず、俺は二人の前に両手を広げた。さすがにここまで高位の術を使うのは久しぶりだ。心意はあくまで補助として使うほかあるまい。

「システムコール。スタートユニットマニピレーション。ターゲットセット。ユニットネーム、ロニエ・アラベル、アンド、ティーゼ・シュトリネン。コネクト。コンプリート。スリープン。コンプリート。ユニットインフォメーション・オーバーライド。シンス・シックス・アウア・アゴー。コンプリート。ウエイクアップタイムセット、アフターシックスアワー。コンプリート。マニピュレーションエンド、デイスコネクト。コンプリート」

すっかりと神聖術を使い切り、一つ息を吐く。ここまで複雑で繊細な術を使ったのは久しぶりだ。対象が二人だけでよかった、と思うべきなのだろう。あの血みどろの剣術大会のような、異常なほど大規模なものだところまでうまくはいかなかったに違いない。

振り返ると、ユージオの右目は完全につぶれていた。それが何を意味するのかわさぐ

に分かった。ジーゼックの言っていたことを信じるのであれば、ジーゼックを斬ったのはユージオだ。その際に、右目の封印を破ったのだろう。

「いち人間としては、よくやった、と言いたいところだが、斬殺した事実は残る。ひとまず、二人には牢に入ってもらおう。そこで整合教会の裁定を待て。ひとまず、この部屋のある程度の後片付けと、二人を部屋まで送り届けるのを手伝ってほしい。ないとは思いますが、変な真似をしたらその場で斬り伏せるからそのつもりで。それと、ユージオ修練士。君の右目はしばらくそのままいさせてほしい。アズリカに説明するとき、現状維持のほう都合がいいからな」

二人の首肯を見て、俺は指示を出す。その姿を見つつ、俺は思案せざるを得なかった。(ここ)で、若人たちをできるだけ正しく導いてきたつもりだった。それがこの体たらくか。選んだものとはいえ、この道は間違っていたのかもしれないな)

間違いなく増えた仕事に思案しながら、俺はそんなことを思った。

84・真実

しばらくして、公理教会から裁定が通達された。内容は、公理教会——セントラル・カセドラルの地下にて投獄、そのうち更生措置を施す、というものだった。これも前任者の日記に書いてあったが、更生なんてものは名ばかりで、記憶を消して整合騎士という傀儡に仕立て上げるといなのが真実らしい。あまりにおぞましい手段ではあるが、確かにこれなら手駒は増えるだろう。まして、整合騎士の中で面が割れているものなどごく少数だ。しかも、罪人を中央に送還する際、同伴した整合騎士の記憶を操作することで証拠抹消も行う徹底ぶりだ。俺はこうして記録をつけているから、絶対に他言しないという前提で記憶操作はされないそうさ。どうやら前任も俺に似て、仕事は仕事と割り切ることができる性質たちだったらしい。迎えにはアリスを寄越すとも通達されていた。知ってか知らずしてか、なかなかどうして悪辣な真似をする。

アリスの出生はユージオと同じ村。年代から見ても、おそらくアリスが連行される姿をユージオは目撃しているはず。村の規模からして、幼馴染である可能性も高い。つまり、どのような形であれ、罪人となった幼少期の知り合いを、記憶をなくして整合騎士となつて迎えに行くということなのだ。これを残酷と言わずしてなんと形容しよう。

しかし、一定の理解もある。俺は、キリトとユージオが表出させていない能力はかなり高いと踏んでいる。であれば、万が一連行時に反抗された際、整合騎士の中でも最良格でなければ鎮圧は不可能と断じられても不思議ではない。そう考えると、人選はおのずと限られる。フアナティオ、ベルクーリ、アリスあたりでないと務まらない。さすがにこの中の二人以上を使うというのは防衛網に大きな穴をあけるということと同義になるため、一人だけ寄越す。なるほど合理的な判断だ。一番無難なのはフアナティオのはずなのに、そこを選ばないあたりが最高司祭猊下らしいといえづらい。

「——以上が、公理教会が下した審判だ。時が来れば、また俺たちのどちらかが来る。それまでおとなしくしている。間違つても連行前に脱獄しようなどと思うなよ。それが俺かアズリカに見つかった瞬間、お前たちの天命は根こそぎ吹き飛ぶと思え」

審判を完全に記憶した俺の通達に、二人は特に不平を訴えなかった。それもそうだろう。いかなる理由であれ、人殺しは人殺しであり、それ以上でも以下でもない。下された審判には従う。それが、どのような世界であつても共通する掟だ。

「なら、これが最後の機会になるかもしれないから聞かせてくれ。あんた、一体何者だ？」

「何者だ、と言われてもな。この学院の寮監としか——」

「そういうことを聞いているわけじゃない、ってことくらいわかるだろ」

うまく受け流そうとしたが、そうは問屋が卸さないらしい。できるだけ表情を変えずに、俺は問いを投げかけたキリトに言葉を返す。

「参考までに、どうしてそのような考えに至ったか、聞かせてもらってもいいか？」

「あんたがあの時使った神聖術だ。俺は、人より多少神聖術に詳しい自負があるからな。あの詠唱で使われた単語の意味から、そんじよそこらの術師に使えるものじゃあないってことくらいは簡単にわかる。それに、ユージオですら全く歯が立たない剣術の使い手ってことも聞いている。そんな反則じみた強さを持つものなんて限られる。違うか、整合騎士様」

その答えに、俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。なるほどヒースクリフ——茅場晶彦もこんな気分だったのかもしれない。実際に体験すると、苦笑い以外に浮かべる表情がない。

「確かにその通りだ。あの時使った術は、市井の術師に使えるようなものじゃあない。なるほど、神聖術の勉強にはあまり熱心ではないという評判から、少々の箝口令程度で十分だと考えていたが……どうやら、見積もりが甘かったらしいな」

「と、いうことは、やはり——！」

「ご明察だ、若き剣士たちよ。それも踏まえ、改めて名乗ろう。」

——我が名は、ロータス。ロータス・シンセシス・ゼロ。本来存在せぬ、欠番の整合騎士だ」

冷酷に宣告する。その宣言に、二人は驚きの反応を見せた。

「まあ、無理もなからう。俺が生きてきた百年あまりの中で、見破つたのは君たちが最初だ。そして、おそらく最後でもあらう」

「ちよ、ちよつと待つてください、百年あまり、ですって——？」

「ああ。我々整合騎士は、天命の自動減少凍結処理、そして一定以上の老化防止の術を施される。つまるところ、一定以上成長しない、というわけだ。むしろ俺も例外ではない。ゆえに、ある程度壮年期になってから整合騎士になった例を除き、一定以下の年齢で整合騎士になったものは皆、二十代の前半程度で、肉体的な老化は止まる。そういうものなのだよ」

「つまり、あんたも見た目通りの年齢ではない、というわけか」

「正確な年齢など、とうの昔に数えるのをやめた。が、君らの数倍は生きていることは確かだろうな。なにせ百は超えているわけだから、それ以上の意味はないわけだしな」

「そんな——」

「そういう術も世の中にはある、ということだよ。もし高みを目指したい、というのであれば、君たちには選ぶ権利があると思うがね。」

そして、整合騎士の中でも、一部、手柄を上げたものには、神器というものが与えられることがある。一言でいえば、強力な武器だ。そして、君たちはそれぞれ、それに値する逸品を所持している。今は手元にないがな」

「まさか、青薔薇の剣？」

「いや、違うぞ。君たちといったことから察するに、あの黒いのもそうだ。違うか？」

「恐るべき洞察力だな。その通りだ。だが、神器は必ずしも剣であるとは限らないし、奥の手も存在する。よく覚えておけ。そして警戒しろ。もつとも、警戒したところで無駄なものもあるがな」

最後の言葉に、キリトは怪訝な顔をした。セルルトの戦術をある程度とはいえど引き継いだキリトでも警戒する必要があるのか。そのような反応だった。

「なににせよ、備えあれば憂いなし、だ。そういう存在を知っている、というだけでも十分だろう」

「ということとは、あなたも？」

「お前さんらには隠しているだけで、現在も俺は神器を装備している。つまり、無いとは思いますが、今お前さんらが何かしようと思つたら斬り伏せることは容易ということだ。

で、だ。お前さんらがこの世界の真実を知り、一度壊すことを望むのであれば、俺はこの世界の調停者として立ちはだからなくてはならないわけだ。その時には、ちゃんと

戦う理由を見つけてこい。それが、俺の最後の言葉だ。いいな」

それだけ言い残すと、俺は踵を返した。本来、調停者が発するべき言葉ではないだろう。が、彼らならもしかすると。そんな淡い期待を抱かずにはいれなかった。

(いい加減壊されるべきなんだよ、この理想郷は)

そんな破滅願望にも似た発想に、俺は一人苦笑いを浮かべた。

いよいよ二人が投獄される、その日。時間に合わせて俺が広場に行くと、遠方に二頭の竜と、片方の背にたなびく金色の髪が見えた。間違いない、騎士アリスだ。間違いない、俺が見てきた中でも最強格と言っても過言ではないほどの実力を持つ整合騎士。そのまま降りてきたアリスに、俺は騎士礼をした。

「お疲れ様、騎士アリス。まもなく、アズリカが合流地点に二人を連れてくる。俺がここで待っているから、向かってもらってもいいか」

「わかりました、向かいます。それより、待てないものもいるようですが」

そんな会話をしていると、肩に軽い衝撃が来た。腕を伸ばして、その犯人——俺の騎竜である黒い竜、黒天の頭を撫でた。

「久しぶりだな、相棒」

俺の言葉に、黒天がグルルと鳴いた。甘えたがるのも無理はない。俺の立場上、黒天

とともに空を飛ぶ機会自体が少ないのだ。たまにこうして一緒になったら、そりや甘えたくもなろう。もう少し一緒に飛ぶ機会を作ってやるべきなのだろう。周りの神聖力によつては、俺なら心意力で空を飛ぶくらいはできそうなものだが、かなり繊細な制御が要求されるうえに、竜のほうが速度は出せるだろう。ただ飛ぶだけ、という時間も作ろうか。考えてみてもいいかもしれない。そんなことを考えていると、アリスが二人を連れてきた。二人は、当然といえば当然だが、背中に両手を縛られる形で拘束されていた。

さて、いよいよ二人を竜の背に乗せて運ぶ、という段になつて、側付き二人が呼び止めてきた。その手には、引きずるようにそれぞれの剣があつた。

「見送りご苦労。と、言いたいところだが、剣は預かるぞ。いささか君らの手には余る代物だ」

「すみません、お願いします。実をいうと、ここまで運ぶのも一苦労で」

「だろうな。アリス、こちらの剣を頼む。さすがに俺が二振りも持つては重たい」
「わかりました。預かります」

そういつて、俺は青薔薇の剣をアリスに渡した。そして、俺の手にはキリトの黒い剣があつた。

「さて、せっかくここまで来たんだ。見送りの言葉くらいかけてやってやれ。そのくら

「待つ時間はいくらでもある」

「よろしいので?」

「時間に余裕を持たせてあるからな。どちらにせよ、少々待つくらいなら最高司祭猊下も大目に見てくれるだろうよ」

俺の言葉に、アリスもおとなしく引き下がった。やがて、言葉を交わすと、2人の少女はそれぞれ距離をとった。

「別れは済ませたな。では、キリトは俺の背に、ユージオは騎士アリスの背に乗ってくれ。ひとつとびするぞ」

それだけ告げ、俺たちはそれぞれの竜の背に乗った。準備ができたところで、アリスに目配せする。どうやら向こうも準備が整ったらしく、手綱を握ったところだった。

「飛ぶぞ。しっかりと捕まってるよ」

それだけ言うと、俺は黒天の手綱を引いた。次の瞬間、黒天が空へ舞い上がる。続いて、アリスの相棒である雨縁が上がってきた。距離を見つつ、俺は方向をカセドラルに向けた。その背に、キリトが問いかけた。

「なあ、あんたは、その——全て覚えているのか?」

「それは無理だな。これだけの時間を生きていれば、忘れたものも多い。が、絶対に忘れられないものもある」

「それは——」

「言うな。俺の推察が正しければ、お前ならそれが何を意味するか分かるだろう。その残酷さも」

俺の言葉に、キリトは押し黙った。しまった、少し言葉が厳しすぎたか。だが、これだけは言える。

「だが、時間は不可逆なものであり、あの時に戻ることもできない。だからこそ忘れられないものもある」

もう戻れないと知って、長い年月が経つてからようやく、自分の気持ちに気が付くとは。失ってから気が付くとはよく言ったものだ。だからこそ、俺にとっては軽く百年前の、しかもたった数年の記憶ですら、絶対に忘れられない記憶となった。たとえば俺が、この体で精神的な寿命の限界に到達し、記憶を削る必要が出てきたとしても、きっとその、たった数年の記録だけは消さないよう細心の注意を払うだろう。

（——忘れられるものかよ）

——今なら言える。それほどまでに、あいつと、彼女と共にあった、そのたった数年の記憶は、俺にとって何物にも代えられぬものなのだ、と。

85. 狼煙

二人が投獄され、黒天を飛竜の待機所に送り届けると、薄着に両手剣を佩いた壮年の男が出迎えた。

「まさか貴公が出迎えるとはな、ベルクーリ」

「当たり前だ。お前さんとこうして話すのも久しぶりだからな、出迎えくらいはさせろ」

「まあ、ね。そっちはその様子から察するに帰りか？」

「おう。境のあたりを巡行して戻ってきたところだ。特に何事もなかったがな」

「ふうん。少し前まではかなり派手にやっていた印象があるが」

「俺の言えることじゃあねえが、お前さんの“少し前”は一般的じゃあねえからな」

「言っても高々10年かそこらだろう？少し前の範疇だと思いが」

「範疇じゃあねえな、少なくとも一般的には」

そういわれて、俺は思わず肩を軽くすくめた。まあでも、このベルクーリよりは長く生きているのだ、俺からしたら10年かそこらなんて少し前だ。

「お前さんはしばらくこっちにいるのか？」

「しばらくかどうかは分らんがな。あの二人の様子次第だ」

「連れてきたのは見てたが、そんなにやんちゃそうなボウズには見えなかったが」

「見た目詐欺なだけだ。特に黒いのはかなりの型破りだ。だから、あいつらがシンセサイズされるか、脱獄騒動が落ち着くまではこっちにいるつもりだ」

「その気になれば、お前なら文字通りひとつとびだからな」

「ま、そういうこと。脱獄騒動でやりあつたら油断するなよ。実力的にはアリスが一番近いか」

「おいおいおい、整合騎士でも最強格と同等の強さってことか」

「型破りすぎて対策しづらいつていうのはあるが、それを抜いても十分強い。デュソルバートくらいなら十分倒されるだろうな。単騎ならフアナテイオやアリスと拮抗するくらいじゃないか?」

「お前さんの目は信用に足る、つていうのは理解しているが……にわかには信じられないな」

「まあな、気持ちは分らんではないよ。俺だつて、あいつらの実力を見ずにそういわれたら、本当にそこまで強いのか、つて思うだろうしな」

「だが、お前さんがそこまで言うつてことは少なくとも弱くはないんだろ?」

「ああ。お前をもつてしても十分に楽しめる相手だろうよ」

「そうか。なら楽しみにしておく。」

それはそれとして、帰ってきて多少は疲れもあるだろう。ゆっくり風呂でも入ってきただらうだ？」

「そうだな。特に、ここみたいな大きすぎるくらいの風呂なんてそうそうないしな。お言葉に甘えさせてもらう」

会話を終え、浴場に向かう。いくらあいつらが行動を起こすといっても、一度風呂に入るくらいの時間はあらずだ。

少し風呂に入って体を休める前に、ふと下を眺める。早ければそろそろ脱獄の準備を始めているはずだ。良くも悪くも規定を逸脱するという発想がなかなかないこの世界の住人から外れたあいつなら、そろそろ穴に気が付くはずだ。ましてや、あいつらは神器を扱えるような人間だ。いかな頑丈な鎖であっても、頑張れば引きちぎれるはず。それに、仮にもキリトはセルルトの教えを受けている。となると、鞭の扱いにもある程度精通していると考えたほうがいいだろう。となれば、引きちぎった鎖はそのまま武器となる。それだけ手札があれば十分だろう。

空を見上げる。今日は見事な月夜だ。これだけ明かりがあれば、下の薔薇園あたりにはしつかり影が落ちる。遮蔽を生かした戦いの経験を忘れていなければ、これはかなり有効に働くはずだ。

と、そんなことを考えていると下から戦鬪音が聞こえた。ある程度落ち着いたところで、俺は神聖術を併用しつつ飛び降りた。

ちようど飛び降りると、薔薇園に陣取っていたエルドリエが倒されたところだった。ちようどそのくらいの頃合いだろうと思っていたから、これは想定の内範囲。

「悪いな、今ここで手駒を減らされるわけにはいかないでな」

二人にそれだけ宣言すると、俺は神器である、一対の剣を手に呼び出す。剣といつても、曲剣のような形状の、かなり小ぶりな剣だ。何も無いところから唐突に表れた二振りの剣を見て、即座にキリトとユージオが逃げる方向へ向かう。逃げた先を予測しつつ、俺は神聖術を併用し追い詰めた。あくまで手傷を負わせすぎない程度だ。だが、かすり傷くらいは必要だろう。そうでないと、こちらが本気であると思わせることができない。そう思い、剣で切りかかろうとするも、それはキリトが振った鎖で応戦された。はてさてどうしたものかと考えていると、俺の目の前で光素がさく裂した。思わず一瞬目をつむる。音から察するに、ユージオが光素をさく裂させ、その隙に体勢を立て直すなり逃げるなりする、といった算段だろう。大体どちらへいったかの認識はできているが、さすがに薔薇園を破壊するほどの威力を放つわけにはいかない。これは一杯食わされた。走って追っていくも、キリトとユージオは忽然と消えた。

起こった事象から、誰が、どういう目的でそれをしたのかは察しがついた。だからこ

そ、俺は追うのも、搜索するのもやめた。

(あとは任せますよ。もう一人の最高司祭)

そして、内心で願った。彼女であれば、彼らの道をそのまま歩ませるはずだ。俺にできるのはそれしかない。手に持った神器を戻して、倒れているエルドリエを回収すると、俺は神聖術でカセドルルの外壁付近を上って戻っていった。

飛竜の待機場が一番楽な場所なので、そこまで神聖術を併用しつつ飛ぶ。そこまで急がず、とりあえず寝床に運ぶ。すでに意識自体は落ちているが、念のためやる。幸か不幸か、俺はこの手の、他人に干渉する神聖術は少し前に扱ったばかりだ。幸い、あの時ほど大規模な術である必要はない。

心意力で状態を調べる。どうやら例のバイエティ・モジュールとやらの固定が甘くなっていただけらしい。もともとモジュールが引っ掛かっていた穴の形状が、ほんの少しだけ狭まった影響で外れかけているのが原因のようだ。体のほうはしばらく養生していればどうにでもなる範囲だろう。モジュールの位置は俺でも調整が利く。あくまで外れかけているだけだ。どうにでもなる。だが、俺の方法は少しあくどい方法だ。

ほんの少しだけ、モジュールの形状のほうを削る。穴の形状にちようど引っかかる形にモジュールを変え、再びはめなおす。しつかりとはまったことを確認し、一つ息をつ

く。と、その後ろで扉を軽くたたたく音が聞こえた。

「どうぞ」

「失礼します。騎士ロータス、こちらにエルドリエが運ばれてきたと聞きましたが」

「ああ。どうやら例の剣士二人にやられたらしい。これは鍛えなおしだな」

「といつても、彼も仮にも整合騎士。そうそう簡単にやられるとは思えませんが」

「悔るなよ、騎士アリス。あいつらは無手でも強いぞ。樂觀視できる相手ではない以上、あいつらが剣を取り返しているという前提で動くべきだ。そうなったらお前でも一筋縄ではいかないだろうさ」

「それほどの相手なのですか？」

「にわかには信じられんっていうのは分らんではないがな。最大限の警戒をもってあれ。最悪、記憶開放術が必要になるやもしれん」

「彼らの出自を考えれば、あなたの目が一番信用に足るでしょう。そして、そのあなたがそれほどまで言うということは、実際強敵なのでしょうね。わかりました。助言、痛み入ります」

相変わらず四角四面というか律儀な子だ。そういうところがいいところではあるのだが、彼女の生い立ちを考えると若干の痛々しさすらある。表情を隠すのはもう慣れたが、この型に押し込んだような四角四面な気質には若干心が痛む。もともとは感受性の

豊かな少女だっただけに、かくも成長環境とは恐ろしいものかと、薄ら寒さすら感じる。「ま、一応俺にできるだけはもうしてある。何より、こいつのことは俺より貴公のほうが分かっていよう。後を任せていいか？」

「ええ。もとより、そのつもりで来ましたから」

「そいつは失敬。じゃ、あとは任せた」

それだけ言うと、アリスに後を任せて俺はその場を去る。そこから、俺は空中庭園に行き、考えをまとめにかかった。あそこはちょうどいい感じで日向と日影があつて、考えをまとめるにはうってつけなのだ。

まず、キリトとユージオがカセドラルを上がってくるのは確定事項だろう。もう一人の最高司祭——今は確か、カーディナル、だったか——の協力を得る以上、ほとんど確実に武装完全支配術は習得してくるはずだ。ともすれば、記憶開放術すらも。武装完全支配術の撃ち合いまで行く戦いなど、整合騎士のほとんどが経験していないはず。まず間違いなく上層まで来る。だが、一つだけ解せないことがある。

(彼らは何のために戦っているのか、それだけが解せない)

ただ不自由が窮屈だとかそういう理由であるのであれば、問答などほとんどなしに両断すべきであろう。むろん、反逆に足る理由ではある。だが、ただ一個人のそんな感情で調和を崩されるわけにはいかない。少なくとも、俺はそういう立場にない。だから

こそ、その反逆の理由を問う必要がある。その理由によって、俺の戦う理由も変わるだろう。

そんなことを考えていると、アリスが空中庭園に來た。そして、己の劍を日当たりのいい場所に突き立てた。一般的には何がしたいのか、となる場合ではあるが、俺には大體の見当はつく。そして、俺の予想通り、彼女は己の劍を本来の姿——一本の金木犀の木にした。

「ここで迎え撃つ算段か、騎士アリス」

「ええ。エルドリエのほうはしばらく安静にする必要があるでしょう。ならば、弟子の仇を討つのが師の勤めだと思いましたが」

「相変わらず律儀なことだ」

「あなたは どうしてここに？」

「少し考え事をな。ここだと落ち着いて考えられるんだ。とにかく、俺のほうはもう終わったから立ち去る。武運を、騎士アリス」

「はい。ありがとうございます」

どこまで行っても律儀な返答に、俺は思わず若干の苦笑いを浮かべた。そのまま、大浴場を通って上層で待機するところでベルクーリと行き会った。

「よう。どうだったんだ、エルドリエの様子は」

「ちよつと手ひどくやられた程度だったよ。アリスと鍛えなおしだなー、なんて話をしていたところだ」

「鍛えなおしの時には俺も手を貸すぜ。で、嬢ちゃんは？」

「空中庭園で奴らを迎え撃つ算段だと。実際、金木犀の剣を木の状態にしてたつぷり日に当てていたよ。万全の状態、といって差し支えないだろうな」

「アリスの嬢ちゃんがそこまでやるのか。お前さんの分析を考えれば、全力で叩き潰すというのが最適解ではあるだろうな」

若干驚きの混じった、だが納得の反応。まあそれもそうだろう。だが、俺にとって重要なのはむしろそのあとだ。

「他人事でいいのか、ベルクーリ。仮にアリスが突破されたら、そのあと迎え撃つのはおそらくお前だぞ」

「まあ、その時はその時だ。ゆっくり待たせ」

「そうか。ま、お前ならそうそう後れを取るとは思えんがな。お前の武装完全支配術は、分っているから対策ができる、なんていうものでもないし」

「お前さんにそう言われるとありがたいな」

「それだけ技量を信頼しているということだよ」

「なら、その期待を裏切らないようにしないとな」

そんなことを話しつつ、俺は昇降盤のほうへ向かう。定期的に最高司祭の状態を確認するのが、俺の日課になってきていた。最も、彼女は俺に次いでこの世界で最も長く生きている人間だ。そんな彼女からすれば、たった一日など刹那に等しい。記憶容量の関係もあり、一年の間で起きている時間などごく少数だ。だからこそ、この行為はどちらかというところ確認行為に近い。整合騎士も銘々に己の使命を全うし続けるだけで、実質的な指揮権はベルクーリにある。

この世界に長く君臨する支配者、整合教会の最高司祭は、それはそれは美しい女性だ。だが、あくまで美しいのは見た目だけ。中身には、恐ろしいまでの支配欲が渦巻いている。いったいどういう理屈でこれほどまでの支配欲の化身が生まれたのかは知らないが、たどり着いた座が最高司祭、すなわちこの世界の支配者であるというのはある意味必然であるといえよう。人の欲とはかくも恐ろしいものなのか。

最上階に上り詰めたとき、やはりというか最高司祭クイネラ——いや、いまはアドミニストレータ、だったか——は眠りについていた。眠り続けるさまはさながら眠り姫といったところか。しかし、この姫が起きて本気の戦闘をしたときは、俺が本気を出してようやく勝てるくらいかもしれない。間違いない最強格である。それが、支配者の権化のような、それこそ創作物の世界でしかありえないような性格である以上、力で倒すほかない。しかし、俺ではほとんど差し違えるくらいになってしまう。そういう点で

は、今回のキリトとユージオは渡りに船だった。少し様子を見て、いつも通り変化がないことを確認すると、俺はそのまま昇降盤に戻った。

とりあえずやることがないので、空中庭園に戻る。その前に、風呂の様子を見ると、今からベルクーリが風呂に入るところだった。

「本当に好きだな、風呂」

「当たり前よ。外界を見回った疲れをいやすにはうってつけだからな。いい気分転換にもなる」

「ま、否定はせんがな」

「それに、ここに例の剣士たちが来る可能性が高いんだらう？ならば、こちらもそれ相応の状態で臨まねば、相手にとって無礼だらうよ」

「わからなくはないが、その必要があると本気で思っているのか？相手は反逆者だぞ？」

「それはお前さんの情報が答えだ。相手が強者であるというのであれば、準備を怠る理由はないだらう？」

「ま、それはそうだな」

そんな会話をしていると、轟音がとどろいた。俺たち二人ともが気を取られる。

「今の音、下からか」

「位置的に空中庭園あたりだな。行ってくれ」

「俺でいいのか？」

「逆に俺が行ったとしてやれることは限られる。お前さんのほうが講じれる手段が多いのなら、最善手を打つべきだろうよ」

「わかった」

「ああ、そうだ。例の剣士、できればここに案内してくれ。ここは広い、決戦にはもってこいだ」

「承知した」

その会話を最後に、俺はカセドラルを駆け降りる。空中庭園にたどり着くと、そこには途方に暮れているユージオだけがいた。

86. 戦う理由

ユージオがいるのはともかく、キリトとアリスはどこへ行つた。周りを見ても姿が見えない。ここは比較的に見通しがいい。それに、この下に開けた場所はない。キリトの黒い剣の能力の詳細はついで読めないが、金木犀の剣は開けた場所で真価を発揮する剣。引き返したという可能性は低いだろう。

「剣士ユージオ。ここに、騎士アリスがいたはずだが」

「あ……」

「警戒するな。事情を聞きたいだけだ。今ここで、やりあう気はない。最も、そつちがそのつもりだというのなら、こちらもやぶさかではないが」

「それは……できれば遠慮したいかと」

「だろうな。俺の実力はお前もよく知っているだろうしな。で、二人は？」

「それが、二人の力がぶつかった瞬間に、カセドラルの壁が崩れて、二人は外に」

「なるほど、壁自体は自動修繕機能で元に戻ったが、それが災いして戻れなくなった、と」

「あの……二人は、生きていますか？」

「さすがにわからん。俺も全知全能じゃない。ただ、カセドラルの壁には隙間がある。

それに、これだけの高さだ。神聖力もたんまりあるだろう。日が高いうちに、その神聖力を鋼素に変え、隙間に鋼の丸棒でも突き刺して、それを利用して登れば、あるいは。幸い、この上には四方が開けた階がある。アリスの神聖術と二人の体術を考えれば、そうさな、明日の日没までにはたどり着いていても不思議はあるまい。で、この先はその四方が開けた場所まで、整合騎士はいない。この意味が分かるな？」

「案内、ということですか・・・？」

「お前さんがたの剣を見たい、と言っているもの好きがいてだな。実力は俺が保証する。安心しろ、共闘するつもりはない」

「でしようね。あなたなら、単騎でも僕くらいは倒せるでしょうから」

「そういうことだ。わかったのならついてきな」

それだけ言うと、俺はユージオに背を向けた。後ろからついてくる足音を聞きつつ、俺たちは階段を上る。ベルクーリがいるはずの大浴場まで来ると、俺はすぐに扉を開けた。

「ベルクーリ、客だ」

「おう、少し待っててくれ」

湯気と背中越しにベルクーリが返答する。

「悪いな、こういうやつなんだ」

「腕は保証する、と仰っていましたが・・・具体的には、どのくらい？」

「整合騎士最強格。それ以上の説明が必要か？」

「・・・いえ、それだけで大丈夫です」

硬くなったのが気配で分かる。その気配を受けて、俺は言葉をつなげる。

「大丈夫だ。お前ほどの腕なら、間違いなく善戦までは持つていける。勝機はある。そこから先は・・・半分運、半分戦略、少しの賭け、といったところか」

「・・・わかりました。ありがとうございます」

少々脅し過ぎたか。だが、ユージオの実力なら問題ないだろう。それは、実際に剣を交えた俺だから分かる。今のユージオは即座に整合騎士になつたとしても、全く見劣りしないだけの實力がある。そんな会話をして少しすると、ベルクーリが近くまできた。

「待たせたな。そいつが？」

「ああ。おそらく、お前が思っている通りの客だ」

「そうか。なら、準備して待つていた甲斐がある、つてもんだ。わかつてると思うがロータス——」

「わかっているよ。俺は見届け人としているだけだ。手は出さん。ただ、天命全損しそうだっていうのなら介入するがな。これは創造神に誓つていい。二人とも、ここで失うにはあまりに惜しい實力者だ」

「ああ。それでいい。それで、若き剣士よ。名前を聞かせてもえないかい？」

「ユージオです」

「よし、なら抜け、剣士ユージオ。整合騎士長、ベルクーリ・シンセシス・ワンが尋常にお相手仕る」

そういつつ、ベルクーリ自身も剣を抜く。それに応え、ユージオも剣を抜き構える。それを見て、俺は壁際に移動した。

「その構え……。お前さん、もしや連続剣の使い手かい？」

「わかるんですか？」

「ああ。雰囲気で分かる。俺たちの剣は、一撃こそ重く、当たれば致命傷足りうる。だが、当たらない剣に意味はない。それを体現しているやつを、俺たちはよく知ってる」
「そういういつつ、俺のほうに視線を向ける。確かに、俺の剣は重さよりも鋭さを、敵の防御を打ち砕く力ではなく防御の穴をかいくぐる技を磨いたものだ。だが、それはもとより、俺の剣術がそうであったから、そちらの方がより熟成させやすかった、というだけだ。」

「だがな、心しな、ユージオ。そういう相手をよく知っているからこそ、俺の剣は互いの弱点と長所を知っている。一筋縄じゃあいかなんぜ？」

明らかに雰囲気が変わる。それを察して、ユージオも剣を構え直した。俺も久しぶり

に見る、ベルクローリの本気。おそらく、武装完全支配術すら使う気は無いのだろう。純粹に、劍士ベルクローリとして、劍士ユージオを見たい。そんな思いが伝わってきた。ならば、俺はその戦いを見届けよう。

戦いは熾烈を極めた。ベルクローリは最終的に、彼の武装開放術まで使って対抗することになった。劍技だけなら間違いなく拮抗するか、ともすればユージオが上回っていたかもしれない。最終的に、ユージオが記憶開放術を使用した。決め手に欠けると踏んだのだろう。確かに、拮抗まで行くのは確かだが、あのままでは決め手に欠くであろうということは想像しやすい。だが、天命を吸い取って咲き誇る氷の青い薔薇を見て、俺は神器を抜いた。

「そこまでだー！」

そのまま投げた神器は、二人の近くに突き刺さった。

「さすがにそこまで行ったら死人が出る。よもや道連れにする気はないだろうな、ユージオ」

「いえ・・・そこまでは。天命の上限はこちらに分があると踏みました」

「だとしてもやりすぎだ。手加減無用のやり取りである以上、そこまでするのは不思議じゃあないがな」

「助かった、と言いたいたいところだが――」

「悪いがこれは宣言通りだぞ。お前を失うっていうのは痛手すぎるからな」

反論はさえぎって宣言する。その反応に、ベルクーリは何とも言えない表情になったが、俺に理があると思つたのだろう。それ以上の反論はなかった。

「それは構いませんが、反逆者を放置してそんな会話を悠長にしているのはいただけませんねエ」

そんなさなかに聞こえてきた、妙に粘着した声。俺とベルクーリはあからさまに不機嫌になった。ユージオは厳戒態勢になったが、それを俺が抑えた。

「お前は体を休めてろ」

「え・・・?」

「それは明らかな反逆行為と取られても不思議はありませんよオ?分っているんですかア?」

「それすらも分からず行動していると思うか?それに、ベルクーリでも拮抗が限界だったんだ。俺単騎でも一人なら抑えきれぬ確信はあるが、複数人になるともそうなるとはわからん」

「ならばなぜ、あなたは私に剣を向けているのですか?」

「理由は二つ。一つは、ここでユージオほどの戦力を失うということの損失があまりに

大きいということだ。もう一つは、単純にお前が気に入らないからだ。剣士の戦いの邪魔をするほど無粋な真似はないというのに」

「何を言っているか分かりませんねエ。外敵を倒すためならば最善の手段を尽くすのは当然でしょう?」

「それについては同感だがな。時と場合つてもものがあるだろう」

俺の後ろにいるベルクーリも同意する。

「お前も下がってろ。戦える状態じゃあないだろ」

「すまねえ」

「お前だけで十分だと? 随分とナメた真似をしてくれませぬエ、零号?」

「ナメたわけじゃあねえ、事実だ。お前ごときに負けるほど、落ちぶれてなどいない」

ただの事実を淡々と述べる。チュデルキンの顔が歪む。

「気に入らない。気に入りませぬエ、その態度! 私を誰かわかっていてその台詞なのだから余計性質たちが悪い」

「だが、俺を排することはできないぜ。俺の力はよく知っているはずだ」

「ええええ、よくわかっていますよオ」

「で、そう来ると思つて布石を用意していない、と思つてるくらいは簡単に読めるぜ」

宣言と共に、俺が軽く腕を上げる。その瞬間、鋼鉄の糸がチュデルキンを縛り上げた。

「いかな雑兵であろうと油断だけはいただけないな。だから、こんな風になる」

何か言おうとしても、それは鋼鉄の糸に阻まれ、モガモガというよくわからない音となる。それを確認すると、俺は首根っこをつかんで外に放り投げた。

「おいおい、大丈夫なのかよ」

「下には風素で即席の緩衝材を作った。死ぬことはあるまい」

ベルクーリの心配に、俺はそのまま答えた。そして、振り返りざま、腕を横にひゅんと振った。それだけで、青薔薇によつて凍り付いていた湯船が、元の温かい湯船になった。

「ベルクーリ、ユージオといったん体を休めてくれ。湯船につかっているだけでも、ある程度の天命回復は見込める。なにより、疲労も癒されよう」

「あいわかった。お前さんとしても、これほどの腕前のヤツと戦うのに、どちらかが手負い、つてのは不本意だろうしな」

「その通りだ」

俺の意図を正確に読み取られたことに若干の苦笑を交えつつ返す。すぐにその表情を切り替え、俺は宣言する。

「剣士ユージオ。キリトとアリスが昇ってくるとしたら、間違はなくここから来る。四方が壁に囲まれていない場所で、あそこから一番近いのはここだからな。だから、ここ

で二人の到着を待て。俺の予想だが、おそらく1日、いや半日。早くて明日の朝、遅くとも昼には来るだろうよ。そして、これは二人にも伝える。

——俺はこの先で、最後の関門として立ちはだかる。それまでに、戦う理由を見つけておけ」

それだけ言うと、俺はくるりと踵を返す。

「あの、ロータスさん——」

「さん付けはやめろ。少なくとも、この時から、再び和解するまでは。次に会ったときは、間違いない剣を交えるだろうからな」

毅然と背中で反論する。それ以上の言葉は必要ないと拒絶する。そのまま、俺は昇降盤へと向かった。

最後の関門で、俺はただ待つ。間違はなく、あいつらはここを通る。なぜなら、俺の後ろにある昇降盤を使えばその先が玉座で、玉座へ向かうにはここしかないからだ。道案内ができる騎士アリスと共に来るというのであれば、ここが唯一の通り道。その時、彼らはどうのような答えを持つてくるのか。それを、俺はひそかに楽しみにしつつ、おそらく今も眠っている、最高司祭の玉座のほうを見上げる。

(本来、俺の役目とはかけ離れているどころか、正反対といってもいいはずなんだがな)

剣士として、戦士として、どれだけ成長しているか。それを、この手で確かめることができるのだ。これを楽しみといわずしてどう表現しよう。そして、願わくは彼らがこの世界を壊すに足ることを祈る。

そんな時に聞こえた、三人分の足音。目を開いたときに見たのは、俺の想像通りの三人だった。

「来たか」

「ああ。あんたの望む最後を届けに来た」

毅然としたキリトの態度。それに、俺は意志——いや、覚悟の固さを見た。

「そうか。では、剣を交える前に、それぞれに聞きたい。こちらから、回答の相手は指名する。」

——戦う理由は、見つかったか」

俺の問いに、やはりといった反応を見せる三人。

「剣士ユージオ、君から聞こう」

「僕には、何が正しいのか、そういうことはまだ分かりません。でも、」

そこでいったん言葉を切り、横にいる騎士アリスをちらと見る。その直後、俺の目を見て、はつきりと告げた。

「あの時、守りたいものを守れなかったのは、僕が弱かったからだ。だから、大切なもの

を奪わせたくない。絶対に。もう二度として。

——この世界がその強さすらも奪うというのなら、そんな世界は壊れればいい。そして、誰にも、大切なものを奪わせない世界にしたい」

まだ天命が回復しきっていない青薔薇。しかして、俺を斬るには十分な天命まで回復したのであろうその剣を抜く。その様は、なるほど革命家と呼ぶにふさわしいものだろう。

「騎士アリス。君は？」

「かつての私が、どうしてこのような選択をしたのか。それは分かりません。ですが、きつと浅はかな行動の果てにそれがあつたことは確実でしょう。それにより、私はたくさん失った。それによって得たものがどれだけ大ききとも、私は、過去の私の浅はかな選択を後悔するのでしょうか。ですが。」

——答えは、得ました。この世界が歪んでいるというのであれば、正すのが騎士たる私の勤めです」

音高く、金木犀の剣を抜く。その、自身の矜持、誇りに殉ずる姿は、ただただ美しくかつた。

「最後に、剣士キリト。君の答えを」

「単純な話だ。」

この世界は歪んでいる。その元凶がこの先にいて、お前がそうさせまいと立ちふさがるのであれば。

——お前は、邪魔だ」

端的に答え、黒い剣を抜く。だが、端的であるが故、彼の目から見た状況は読み取れた

その三人の答えに、俺は、こんな時にもかかわらず、自身の口角が上がるのを自覚した。どうやら、俺の想像以上に、彼らは目覚ましいほどの成長を遂げていたらしい。

「よかろう。であれば、改めて名乗ろう。

我が名はロータス・シンセシス・ゼロ。欠番の整合騎士にして、この世界の調停者なり。

——その思い、その力。この世界を壊すに足るか。見定めさせてもらう」

87. 強さの証明

宣言と共に、両手に神器が顕現する。短剣というには大ぶりな、しかして直剣ほど大きくくない、反身の二振り。その反応に、三人が構える。

まず攻撃してきたのはユージオだった。光と動きからしてソニックリープか。そんなもの、百年以上前に幾度となく見てきた。突進までのわずかな間に、俺は二つの劍の柄を連結させるように打ち合わせる。瞬間、二つの劍は両劍の形をした弓となった。その刃を以って、ユージオの突進をいなす。そして、そのまま虚空から作り出した矢をつがえ、次いで突進してくるキリトに向けて撃った。だが、この程度は想像通りといわんばかりに、その矢をたたき落としてから、ユージオと同じくソニックリープを繰り出してきた。あえて一步踏み出しつつ、弓の真ん中で受け止める。構えを戻しつつ、矢を手中の中に作り構える。ある程度の狙いで放った矢は、横から繰り出された金色の花弁によつて薙ぎ払われた。もう一発撃つ隙は与えてくれまいと読み、その場で跳躍する。俺の読み通り、キリトとユージオは挟撃の態勢に入っていた。より早く、秘奥義の硬直から抜けたユージオが、俺のいる空に向かってソニックリープを放つ。まったく、このよくな使い方は俺も、おそらくキリトも教えていないはずなのだが、咄嗟に思いついて実

行し、成功させるその能力には舌を巻く。両剣としての特製を利用し、回転するようにいなす。着地を狙って攻撃してきたキリトには、両剣による連撃にて応戦する。が、その横から来た騎士アリスの剛剣には完全な防御は不可能と判断し、後ろに跳んで何とか衝撃をいなす。素早く弓を二度射て、いったん仕切り直しとなった。

「実際に目の当たりにすると、どう形容すればいいか分からないくらい異様だな」

「ああ、こいつか？」

「アリスから、断片的な情報は聞いていた。が、よもやこれほどとはな」

「なるほど。この天廻の力は、すでに情報として知っていたわけか。道理で対応が速いわけだ」

「だが、俺が聞いていたのはあくまで心意の力の通りが異常なほどよく、様々な形態に変化するというだけだ」

「それだけでほとんどすべてなんだがな」

「あくまで、様々な形態をとる、というだけだろう。使い手の技量が伴わなければ器用貧乏で終わる。武器が強いんじゃない、あんたが強いんだ」

「そういつてもらえると嬉しいね」

それだけ言うと、俺は剣を投げる。半ば反射的に弾くその寸前、キリトが全力で後ろに跳ぶ。ほんの少しの間を開けて、間で剣が爆発した。爆風で、その後ろで援護の態勢

を取っていたアリスすら怯む。その間に、俺は2人をするりと抜け、後衛にいるアリスに肉薄した。防戦ながらも天廻を弾き飛ばさんとする剛剣には舌を巻くが、俺には届かない。全ていなし、防ぎ躲し、反撃を織り交ぜすらする。しかしそれは相手も同じだった。一瞬仕切り直しの隙をついて、キリトの斬り上げが炸裂した。一瞬の隙をついた強打に逆らわず、得物を手放す。あまりにあっさりとした成功に、キリトとユージオが同時に斬りかかる。が、それは防いだ。なぜなら、弾かれ、砕かれた神器が再び俺の手に現れたからだ。

「なっ・・・!?!」

「呆けてる場合か」

2人を弾き、再び前進する。後方からの追撃は、弾かれて戻ってきた神器を再び炸裂させて牽制しつつ、天廻の片方を巨大化させて一撃を見舞いにかかる。防御に入ったアリスの上を飛び越し、後方からの一撃でアリスを弾きとばす。これにて、またしても仕切り直しとなった。

「どういうことだ・・・確かに手から剣は消えたはずなのに」

「おや、騎士アリスはそこまで教えていなかったのかね?」

「教えるもなにも、そもそも知りませんよ」

なるほど、それならば仕方ないか。教えたつもりではあったが、どうやら思い違い

だったらしい。

「天廻は俺と同化した武器だ。天命の一部も、俺自身と共有している。心意の通りがい
いのもそれに由来する。己の手足を操るのとほとんど同等だからな。当然、心意の通り
はこの世界において最もいい部類だ。俺限定の話ではあるがな」

「さっきの剣を爆発させるものも、あなたにとつてはそう大した痛手にはならないわけ
ですか。天命が攻撃以外で減らないうえに、天命の上限もかなり高い我々にとつて、そ
の程度の痛手を負うより、相手を攻撃できるといふ利点が勝る」

「その通りだ。察しのいい奴は嫌いじゃないぜ。そして、いくつ出すのも、ある程度どん
な形にするのも思いのままだ。ま、普段は一刀で使うことが多いが、今回は事情が事情
だ。二刀で戦う必要がある相手は久方ぶりだ。その時点で誇つていい」

「こちらから有効打の一つももらつていないくせに、よくいいますよ」
「それはお互い様だろう？」

——で、準備はできたのか」

アリスとの問答を終えた俺の言葉に、キリトは突きの構えで応えた。ヴォーパル・ス
トライク……ではない。あれとは構えが違う。なにより、それなら今の間に合図があつ
たはず。それらしい言葉もなかったところから見ると——

(武装完全支配術、あるいは記憶解放術か——！)

となれば、こちらもそれ相応の対応が必要となる。天廻を一刀状態にして、少し大ぶりな、反身で片刃の、少し小さい両手剣——打刀の形状へと変化させる。構えは正眼。「来い——！」

「エンハンス、アーマメント！」

その瞬間、キリトの剣が巨大化し、一気に押し寄せてきた。なるほどこれはなかなか厳しい。一刀でなんとか受けるも、受けるだけで精いっぱいだ。剣の状態では、並の膂力では受けるだけですらままならない。全力で踏ん張り、なんとかその黒い奔流を受け切った。が、その直後。アリスの神聖術とユージオの突撃を見た。俺は即座に左手に天廻を再度展開し、担ぐような突きの構え。即座にキリトが反応したが、俺のヴォーパル・ストライクの発動が若干速かった。神聖術を無視し、ユージオの突撃を切り抜け、俺の剣はキリトに届いた。だが、射程不足。それは、俺も分かっている。キリトは、その後からユージオ、そして前から防御を終えたキリトが同時に斬撃を見舞う。

——が。その二つの斬撃は、両方とも寸止めで終わった。

「二つ、聞こうか。なぜ、止めた？」

「あなたの言葉を借りれば、ここで失うにはあまりに惜しい実力者だからですよ。力を求めるその道標としても、一人の戦力としても、ここで失うというのはあまりに惜しい」「大体同じ、だな。それに、真の敵はあんたじゃない」

その言葉に、後ろにいるアリスがあきれたような反応をしたのが気配で分かった。それもそうだろう。今まさに剣を向けている相手ですら、いずれ味方にしたい。そう言っているのも同義なのだから。

「戦場で、それは甘さとなるぞ」

「ダークテリトリートとの戦闘なら、な」

俺の釘差しに、キリトは端的に返した。その言葉に、俺は笑みを漏らさずにはいられなかった。

「よかろう。先に進むといい。ただし、俺も同行する」

「いいのか?」

「どのような形であれ、無駄な消耗を強いたのは事実だ。生半可な状態で勝てるほどやさしい相手じゃないぞ。なにせこの世界の支配者だからな」

「強いのか?」

「俺なら勝てるだろうが、果たして手加減ができる相手かどうかとところだな」

「さっきのあんたよりは強いのか?」

「おそらくは、な。もつとも、最高司祭殿下が本気で戦ったところなんて久しく見ていないから、確信はないがな」

俺の言葉に、ユージオがかすかに息を呑む。それもそうだろう。今までのユージオと

の立ち合いはあくまで訓練用の木剣を使った立ち合いにすぎなかった。今回のように、神器まで使つての打ち合いではない。その俺より強いというのだ。思わず臆しても無理はない。

「戦う前の俺の宣言を忘れたか？俺は確かに、こその思いと力がこの世界を壊すに足るかを見ると言つたはずだ。その俺が通すということは、少なくとも一太刀くらいは通るだろうよ」

「信じよう、2人とも。これだけの実力者がいうんだ、間違いはないと踏んでいいだろう」

「キリト・・・わかつた。君がいうのなら」

「背後からやられる可能性は？」

「ない、とは言えないな。俺たちの脅威とみなしている以上、捨てきれはしない」

「それもないんじゃないかな。キリトたちと合流する前、整合騎士団の団長とやりあったんだけど、その時に攻撃するどころか休んでいけつて言つたくらいだし」

「そうか。でも懸念ももつともだ。というわけで、変な動きしたら斬るぞ」

「まあ、当然よな。ただ、いらぬ心配だとは言つておく。

さて、案内しよう。こつちだ」

やりとりの後、俺を先頭として最上階への昇降盤へ向かう。風素を心意で操作して、

できるだけ静かに上がる。

——そして、上がった先には、完全に目を開けた最高司祭がいた。

88. 道理と道化

「ようこそ、不遜なる反逆者たち。ですが、どうやら一番ありえない可能性が現実になったようですね？」

俺たちの姿を認めて最高司祭が口を開く。その声は以前と変わらぬ、いやらしさのない色気のある澄んだ声であった。

「ご機嫌うるわしゆう、最高司祭殿下。あなたを殺しにまいりました」

「なぜ？世界の安寧を保つのがあなたの使命。その使命は、この上ない形で実現しているというのに？」

「確かにそれはそうかもしれませんが。しかし私は、この世界の在り方は長く続きすぎました。いい加減、否定されるべきであると考えからず」

「余計解せないわね。泰平の世のいつたいどこが不満なの？混沌も混乱もなく、秩序が支配する世界に？」

「まがい物の歪んだ秩序だ。肉を食らう獣が草を食めば満足ですか。花が枯れなければそれは幸せですか。清さも濁りも、欲も願ひも、すべて併せ、飲み込んでこそ人。だが濁りに飲まれるのもまた人であるから、法が必要である。ただ、清らかさのみを強要し、

それしかない世界など、私——いや、俺にとつては、気味が悪くすらある」

「そのためならば、刃を交えることも辞さない、と?」

「無論です」

そんな問答をしていると、後ろで再び昇降機が上がってくる音が聞こえた。前への警戒は怠らず、半身になり後ろを確認する。そこには、今しがた上がってきたであろうチュデルキンがいた。

「貴様、零号、これはいったいどういうつもりですかア!？」

「見ての通りだ、元老長。謀反、というやつだよ」

「謀反ンンン!? 許されない、許されませんよオ!!」

「てめえの許しなどいらねえんだよ。すっこんでろ、腰巾着の道化風情が」

俺の言葉に、今度こそ怒り心頭に発したらしい。顔面を朱に染めたチュデルキンを、クイネラが上座から制した。

「チュデルキン、お前、少し黙つていなさい。ロータス、あなたもよ。私はね、アリスちゃん、あなたに聞きたいことがあるの」

「聞きたいこと、と言いますと?」

「聞きたいこと、というのは、あまり正しくはないかな。あなた、私に何か言いたいことがあるのでしょうか? 怒らないから、今言つてごらんなさいな」

その言葉に、アリスは一瞬怯んだようだった。だが、片目に巻かれた眼帯代わりの布に触れると、力強く一步踏み出し、宣言するように言った。

「最高司祭様。栄えある我らが整合騎士団は、本日をもつて壊滅いたしました。今、私の横に立つ、わずか二名の反逆者たちの手によって。あなたがこの塔と共に積み上げた、果てしなき執着と欺瞞ゆえに！」

我らの究極の使命は、公理教会の守護ではありません。剣なき市井の民の穏やかなる営みと眠りを守ることです！しかるに最高司祭様、あなたの行いは、人界に暮らす民の安寧を損なうものに他なりません！」

アリスの凜とした声が響く。その堂々たる態度は、隣に立つ形になった俺も、内心感心したほどだった。

「だ、だまらっしゃいこの壊れかけの騎士人形風情がアアアア！お前たちは、所詮アタシの命令に従う木偶人形にすぎないんですよオオオオオオ！」

大体、馬鹿がいったい何をもつてして整合騎士団が壊滅なんて言ってるんですかアアアア!?使えなくなつたのなんて高々10人程度、つまり残り20もまだ駒が残ってるんですよオオオオオオ！お前ひとりガタガタ言つたところで、協会の支配なんてピクリとも揺るぎやあしねエんですよオこの金ぴか小娘!!」

「馬鹿はお前です、かかし男。その頭には脳味噌ではなくぼろぬの縹褸布か麦わらでも詰まつて

いるのですか？

残る20名のうち半数の10名は調整中で動かせない。残る半数も、飛竜に乗って果ての山脈で戦っている。無理に呼び寄せれば、闇の軍勢が人界に押し寄せる。それに、その10人の整合騎士たちも永遠に戦えるわけではない。外に出ている10人の誰かを交代させようにも、撃破された整合騎士たちが回復するまでは交代させることはできない。そうなれば、力関係などたやすく覆る。そう考えれば、教会の支配はすでに崩れかけていると考えていいでしょう。

それともチュデルキン、あなたが前線に出て、剛勇を誇る暗黒騎士と一戦交えますか？」

「む、ぐぐ……。それで一本取ったつもりですか小娘エエエ！このアタシに無礼千万ぶっこきやがった罰として、リセットが終わったら3年は山脈送りだアアアア！いや、その前にアタシのオモチャにしてやりますからねエエエエ！」

キイキイ喚くチュデルキンの前でも、毅然と冷静なアリス。その対極ともとれる会話を、静かなクイネラの声がさえぎった。

「ふーん……。論理回路のエラーではなさそうね。それにバイエティ・モジュールも正常に機能している……。コード871を自発的意思で解除した？となれば突発的な意思ではない……。これ以上は詳しい解析が必要ね」

どこまでも冷静なクイネラの声。それはどこか、実験動物を見る学者のような口調だった。いや、彼女にとつてはまさしくそうなのだろう。支配者である彼女にとつて、この世界の生きとし生けるものは例外なく道具に過ぎないのだから。

「それはそれとしてチュデルキン、私は寛大だから、役立たずの汚名を返上する機会をあげるわ。あの反逆者たちを、お前の術で凍結してみなさい。天命は、そうね、残り2割まで減らしていいわ」

その言葉と共に、クイネラが人差し指を軽く振る。それと共に、中央にあつた天蓋付きの寝台が沈んでいく。寝台のあつた場所に、静かにクイネラが降り立った。遮蔽のない場所で術師と戦うのはよくないと判断したのか、キリトがわずかに体勢を変えた。それを静かにアリスがとどめた。

「不用意な突進は危険です。相手は何か手札があるはず。その隙を作るためにチュデルキンをけしかけた、と考えるのが妥当です」

「忘れたか。火炎などの例外を除いて、神聖術を相手に有効に発動するためにはどうすればいいか」

「直接接触の原則、か」

軽くうなづく。基本的に、神聖術は直接対象に接触することでその真価を発揮する。ということとは、むやみな突撃は基本的に悪手だ。臨戦態勢を整え、いつでも動ける状態

になったこちらに対し、チュデルキンは逆さになった。ユージオとキリトは純粹にいぶかしんだが、俺とアリスは即座に理解した。これは、両手だけでなく両足の指まで使い切って神聖術を放つ大勢だと即座に理解したからだ。

「シス！テム！コーール！ジエネレート・クライオゼニック・エレメントオオオオ！」

それだけ唱え、足を打ち合わせる。その瞬間に、両手両足、すべてに凍素が生成された。腐っても元老長、神聖術の腕は一級品だ。聞き取りそこなうほどの早口で変形を詠唱すると、それらは巨大な氷柱となって空中にとどまった。

「アリス！」

「アリスチャアアアアアジ！」

俺の号令が、チュデルキンの最後の詠唱に間に合った。それに合わせ、アリスが迎え撃つ。チュデルキンが放った10本の氷の槍は、そのすべてが金木犀の花たちによってすべて砕かれた。それに業を煮やしたチュデルキンは、同じく凍素を10個生成。今度は巨大な立方体に固めて、こちらを押しつぶさんとした。しかし、これも、アリスが放った全力の記憶開放術に阻まれた。

「さすがだな」

アリスの金木犀の剣はこの世界でも最も高い物理優先度を持つ。しかし、それを担い

手が強固に信じ切ったからこそ、あれほどの術と撃ち合い、勝つことができた。渋い表情をするチュデルキンだったが、即座に切り替えてきた。

「シス！テム！コーール！ジェネレート・サアアアマル・エレメントオオオオ！」

生み出されるのは、またしても両手両足、合計20個の、今度は熱素。それらが、きわめて複雑な詠唱で高速移動し、炎の巨人を生み出した。

「やつが、これほどの術を扱いきるとは」

「同感だな。どうやら、俺たちは脅威度を低く見積もりすぎていたらしい」

アリスと、それだけやり取りする。そして、前衛に立つアリスを押しつける形で俺が前に出た。

「こいつは俺が相手する。少し休んでろ」

「先ほどは後れを取りましたが、二度があると思っただけですか？奇跡は二度起きないんですよ？」

「ああ、そう」

余裕のあるチュデルキンに対して、俺は冷淡に返す。物理的な干渉能力が氷に比べて低いであろう熱ならば、俺ならば倒せる。

天廻を二対、素早く顕現して投げる。そして、俺はもう一对の天廻を手に突撃をする。走りながら柄を合わせ、形状は両剣。しかし、投擲も明らかに狙いを定めていない、き

わめて適当なもの。巨人に対して、俺は高く跳躍して突撃する。傍から見れば極めて無策、実に無謀な突撃。それに、チュデルキンがほくそ笑む。

「奇跡は二度起きない、といったな」

炎の巨人の手が俺に伸びる。しかし、その手は俺を焼くことはなく、ただ素通りした。

「じゃあ二度目はなんだ」

炎の巨人から現れる、無傷の俺。しかも、その矢はチュデルキンに向いている。それを見て、慌ててチュデルキンが詠唱を始めた。

「システムコールジェネレートウインドエレメントウォールシェイプー」

風の壁が、チュデルキンと俺を分かたず。飛んだ勢いそのまま、俺はそのままチュデルキンへ向かって降下しつつ、弓を大剣に変化させ振りかぶる。そのまま行けば、風の壁により、俺は弾かれるはずであった。しかし、そんなものがまるでないかのように、俺は勢いそのまま飛び降り、チュデルキンの体を切り裂いた。先に投擲していた分も合わせ、合計3振りの斬撃は、一度の攻撃でチュデルキンを沈めた。

「相手が悪かったな、チュデルキン」

物言わぬ骸になった相手に、一言だけそういった。

「いったい、どういう・・・？術を斬って捨てたわけではない、のですよね？」

「ンなわけあるか。もつと単純だ。——俺に、攻撃の神聖術は一切効果を發揮しない。それだけのお話だ」

「そ・・・そんなでたらめな！」

「でたらめもなにもない。事実だ。実際、炎の巨人の手は俺に届いたにもかかわらず、俺は無傷だ。それが事実だ」

淡々と告げる。事実、俺はこの世界の裁定者、調停者としてのある種の特権が与えられた。一応、レースのスタツフがログインするときの特権アカウントもそれがあるらしい、とは聞いている。そして、俺に対しての特権がこれだった。俺が拒絶した神聖術は、たとえそれがどんなものであれ無効化される。すなわち、体術がからきしで術しか使わないチュデルキンにとって、俺は天敵にも等しい存在だったのだ。こころ発の大一番のために、札を伏せておいたのは正解だったといえる。

そんな中、クイネラがキリトに向けて話しかけた。

「ねえ、その黒い子。詳細プロパティが参照できないというのは非正規婚姻由来の未登録ユニットだからかな、と思っていたのだけれど・・・違うわね？」

——あなた、向こう側から来たのでしょうか？」

「——そうだ。」

と言つても、俺に与えられた権限レベルはこの世界の人たちと同等で、あなたのそれ

には遠く及ばないんだけどな、アドミニストレータ・・・いや、クイネラさん？」

「ふうん。図書館のちびっこがいろいろ吹き込んだようね。」

「それで？管理者権限の一つも持たずに、何をここにこへ？」

「権限はないが、分かっていることはあるからな」

「あいにく、昔話に興味はないわよ」

「未来の話だ。クイネラさん、あなたは遠くない未来、あなたの世界を滅ぼす」

「私が？」

「ああ。なぜなら、あなたは整合騎士団を作り上げてしまったからだ」

「キリト。その説明は不十分だ。正確には、整合騎士団と禁忌目録、だな。それにより、戦えるのは整合騎士団の、最大でも30人程度だ。それだけでは、到底ダークテリトリの進軍は食い止められない」

「ふ、ふふ・・・！面白いことを言うわね」

どこか軽やかとすら思える声に、俺の横にいるアリスが高らかに上奏する。

「最高司祭様。私は先刻、あなたの執着と欺瞞が騎士団を崩壊させたといいました。執着とは、あなたが人民から武器と力を奪い取ったこと。欺瞞とは、我ら整合騎士たちをも深く謀っていたことです。その欺瞞が民を守るためであったのなら、今は咎めまします。ただ、どうして、我らの公理教会と最高司祭様への忠誠すら信じてくださらなかつ

たのですか。なぜ、我らの魂にあなたへの服従を強制するなどという汚れた術式を施されたのですか！」

「あらあら、随分と難しいことを考えるようになったのね、アリスちゃん。まだあなたが造られてから、5年かそこらしか経っていないというのに。

私が、あなたたちを信じていなかった、ですって？少しだけ心外だわ。とつても信頼していたわよ。あなたたちが大切に磨いてきた剣を信じるように、私もまた、あなたたちを信じていたわ。あなたたちに贈ったバイエティ・モジュールだって、その愛の証よ。下民たちと同じように、くだらない悩みや苦しみに煩わされずに済むように。

ああ、哀れなアリスちゃん。悲しいのかしら？それとも怒っているのかしら？私のお人形のままなら、そんな感情も抱かずに済んだだろうに」

涙すら見せて感情を吐露するアリスとは対極的に、クイネラは努めて冷静だった。その様子を見守って、俺は口をはさんだ。

「問答は無駄だ、騎士アリス。今、確信した。これはもはや人であって人にあらず。もはや人の形をしたある種の機構、と言った方が呼称としては的確であろう。思い返してみれば、ベルクーリあたりの息の長い整合騎士が、唐突にそんな悩みも記憶も忘れ去った、ということが何度かあった。その時も同じように、記憶を消し去って……当人に言わせれば『造り直した』のだろうよ。それらから総合するに、この世界の民草はすべて、

最高司祭様からするとすべて人にあらず人形であり、今のアリスの状態は、人形をやめた人形ではなく壊れた人形、といったところか。

アドミニストレータ・・管理者とはよく言ったものだな。個々人の意思は排したほうが管理はしやすい。それに、感情の発露による謀反のたくらみすら、再シンセサイズによつて摘み取られる。感情という牙を抜かれた力のあるものと、感情はあれど力のないものしかないのではあれば、なるほど、ここまで泰平の世が続きすぎたことも納得がいく」

「心外ね。悩みや苦しみなんて感情、ない方がいいと思うけど」

「苦しむからこそ得られる力がある。もがき苦しみ、それでもなお輝きを失わぬからこそわかる美しさがある。あなたには分かりますまい」

「ええ、分からないわ」

「あなた自身がそうであるように、かな？クイネラさん」

「坊や、昔話に興味はない、といったはずだけど？」

「事実だ。隠したからって消えるわけでもない。過程はどうであれ、あなただって、この世界に生まれた一人の人間だ」

「向こう側から来た坊やに、人間と言われると複雑なものがあるわね」

「どんな形であれ、意思があり、感情があり、言葉を操る。あり方はさておき、生物とし

て、人間という定義としては、それだけで十分だと思いがね。

さて、話が脱線しすぎたな。結局、滅びの未来が来るであろうことは分かっているはずだ。よもや、何も対抗策がない、とは言うまいな？」

「そんなわけあると思つて？」

——ここは、私の世界よ。私が愛し、私が生かし、私が支配する世界。むぎむぎ蹂躪されるのを座して待つわけがないでしょう」

「俺たちが言つたように、整合騎士団では到底、抵抗すら難しい。すなわち、ほぼ間違いなく来るダークテリトリーの総攻撃に際し、戦力差を埋めうるだけの切り札がある、ということか？ 守護獣たちでさえ、己の支配の邪魔であるからと殺させたというのに、あなた一人で何ができるといふのか」

「ひとり……ひとりね。そう、結局のところ、問題は数なのよ。あなたの言う通り、現状の整合騎士たちでは圧倒的に数が足りない。でもそれは、あくまで制御が効かなくなるからなのよ。でも、少なすぎるとダークテリトリーの総攻撃——最終負荷実験、だったかしら。これに耐えられない。その均衡の中で増やしてきたわけなのだけだ。

——————本当のことを言うかね。整合騎士団はつなぎに過ぎないのよ。私の求める武力とは、極端な話、感情もなにもなく、ただ目の前の敵を屠るだけの存在。つまり、人

間である必要はない」

「なに、を」

絶句するキリト、そして完全に理解ができないという二人を差し置き、クイネラはその手に紫色の三角柱——バイエティ・モジュールを掲げた。俺は嫌な予感と共に両手の剣を握る手に力を込めた。

「チュデルキンにも感謝しないとね。この長つたらしい術式を最後まで組み上げる時間稼ぎにはなったのだから。さあ目覚めなさい、私の忠実なる僕しもべ！意思なき殺戮者よ！

——リリース・リコレクション！」

クイネラが歌い上げるように告げると、彼女の後ろに異形が顕現した。異形のほかに形容する言葉を、俺は持たなかった。体が剣でできた、剣の化け物がそこにいた。